IBM WebSphere eXtreme Scale
バージョン 8.6

プログラミング・ガイド
2012 年 11 月

8.6 本書は、WebSphere eXtreme Scale バージョン 8 リリース 6、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM WebSphere eXtreme Scale
Version 8.6
Programming Guide
November 2012

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2012.12

目次

図

表

プログラミング・ガイド 情報

WebSphere® eXtreme Scale の資料セットには、WebSphere eXtreme Scale 製品の使用、プログラミング、および管理に必要な情報を提供する 3 つのボリュームがあります。

WebSphere eXtreme Scale ライブラリー

WebSphere eXtreme Scale ライブラリーには、以下の資料が含まれます。

- *製品概要* には、ユース・ケース・シナリオ、およびチュートリアルなど、WebSphere eXtreme Scale 概念の高水準の観点が含まれます。
- 「*インストール・ガイド*」では、WebSphere eXtreme Scale の一般的なトポロジーをインストールする方法について説明しています。
- *管理ガイド* には、アプリケーション・デプロイメント計画の作成方法、容量計画の作成方法、製品のインストールと構成方法、サーバーの始動と停止方法、環境のモニター方法、環境の保護方法など、システム管理者に必要な情報が含まれます。
- *プログラミング・ガイド* には、掲載されている API 情報を使用して WebSphere eXtreme Scale 用のアプリケーションを開発する方法に関する、アプリケーション開発者のための情報が含まれます。

これらの資料をダウンロードするには、WebSphere eXtreme Scale ライブラリー・ページにアクセスしてください。

このライブラリーと同じ情報は、から入手することもできます。

オフラインでのブックの使用

WebSphere eXtreme Scale ライブラリー内のすべてのブックには、インフォメーション・センターへのリンクが含まれており、ルート URL は です。これらのリンクを使用して、関連情報に直接アクセスできます。ただし、オフラインで作業していてこれらのリンクのいずれかを見つけた場合は、ライブラリー内の他のブックでそのリンクのタイトルを検索できます。 API 資料、用語集、およびメッセージ解説書は、PDF ブックでは用意されていません。

本書の対象者

本書は、主にアプリケーション開発者の方々を対象としています。

本書の更新の取得

本書の更新は、WebSphere eXtreme Scale ライブラリー・ページから最新のバージョンをダウンロードすることで取得できます。

ご意見の送付方法

文書チームにご連絡ください。必要な情報が見つかりましたか? それは正確で完全な情報でしたか? 本書に関するご意見は、電子メールで wasdoc@us.ibm.com までお寄せください。

第 1 章 チュートリアル

チュートリアルを使用することで、エンティティー・マネージャー、照会、およびセキュリティーを含めた製品使用のシナリオを理解しやすくなります。

チュートリアル: ローカルのメモリー内データ・グリッドの照会

Java

ある Web サイトのオーダー情報を保管できるローカルのメモリー内 ObjectGrid を開発し、ObjectQuery API を使用してデータ・グリッドを照会できます。

始める前に

クラスパスに必ず `objectgrid.jar` ファイルを入れてください。

このタスクについて

このチュートリアルの各ステップは、前のステップを基にしています。各ステップに従って、メモリー内のローカル・データ・グリッドを使用する Java™ Platform, Standard Edition バージョン 5 以上のシンプルなアプリケーションをビルドします。

ObjectQuery チュートリアル - ステップ 1

Java

以下のステップにより、ObjectMap API を使用して、オンライン・ショップのオーダー情報を保管するローカルのメモリー内 ObjectGrid を引き続き開発できます。マップのスキーマを定義し、そのマップに対して照会を実行します。

手順

1. マップ・スキーマを持つ ObjectGrid を作成します。

   マップに対応した 1 つのマップ・スキーマを持つ ObjectGrid を作成して、オブジェクトをキャッシュに挿入し、後でシンプルな照会を使用してこのオブジェクトを検索します。

   OrderBean.java

   ```
   public class OrderBean implements Serializable {
       String orderNumber;
       java.util.Date date;
       String customerName;
       String itemName;
       int quantity;
       double price;
   }
   ```

2. 1 次キーを定義します。

このコードは、OrderBean オブジェクトを示しています。キャッシュ内のすべてのオブジェクトは、(デフォルトで) シリアライズ可能でなければならないため、このオブジェクトは、java.io.Serializable インターフェースを実装します。

orderNumber 属性は、オブジェクトの主キーです。次のプログラム例は、スタンドアロン・モードで実行できます。このチュートリアルは、objectgrid.jar ファイルがクラスパスに追加されている Eclipse Java プロジェクトで実行してください。

Application.java

```
package querytutorial.basic.step1;

import java.util.Iterator;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.config.QueryConfig;
import com.ibm.websphere.objectgrid.config.QueryMapping;
import com.ibm.websphere.objectgrid.query.ObjectQuery;

public class Application
{

    static public void main(String [] args) throws Exception
    {
        ObjectGrid og = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid();
        og.defineMap("Order");

        // Define the schema
        QueryConfig queryCfg = new QueryConfig();
        queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping("Order", OrderBean.class.getName(),
     "orderNumber", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
        og.setQueryConfig(queryCfg);

        Session s = og.getSession();
        ObjectMap orderMap = s.getMap("Order");

        s.begin();
        OrderBean o = new OrderBean();
        o.customerName = "John Smith";
        o.date = new java.util.Date(System.currentTimeMillis());
        o.itemName = "Widget";
        o.orderNumber = "1";
        o.price = 99.99;
        o.quantity = 1;
        orderMap.put(o.orderNumber, o);
        s.commit();

        s.begin();
        ObjectQuery query = s.createObjectQuery("SELECT o FROM Order o WHERE o.itemName='Widget'");
        Iterator result = query.getResultIterator();
        o = (OrderBean) result.next();
        System.out.println("Found order for customer: " + o.customerName);
        s.commit();
 // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
 s.close();
}
}
```

この eXtreme Scale アプリケーションでは、最初に、自動的に生成される名前で、ローカル ObjectGrid が初期化されます。次に、このアプリケーションは、BackingMap および QueryConfig を作成します。この QueryConfig は、マップに関連付けられる Java 型、マップの 1 次キーとなるフィールド名、および、オブジェクト内のデータにアクセスする方法を定義します。次に、Session を取得して ObjectMap インスタンスを取得し、トランザクション内のマップに OrderBean オブジェクトを挿入します。

キャッシュ内にデータがコミットされた後、ObjectQuery でクラス内の任意のパーシスタント・フィールドを使用して、OrderBean を検索できます。パーシスタント・フィールドとは、一時的な修飾子を持たないフィールドのことです。BackingMap には索引を定義していないため、 ObjectQuery は、Java リフレクションを使用してマップ内の各オブジェクトをスキャンする必要があります。

次のタスク

『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 2』 では、索引を使用して照会を最適化する方法について説明します。

ObjectQuery チュートリアル - ステップ 2

Java

以下のステップにより、1 つのマップと索引を持つ ObjectGrid、およびマップに対応するスキーマを引き続き作成できます。次に、オブジェクトをキャッシュに挿入し、後でシンプルな照会を使用してオブジェクトを検索することができます。

始める前に

チュートリアルのこのステップを続行する前に、 1 ページの『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 1』 を完了していなければなりません。

手順

スキーマと索引

Application.java

```
// Create an index
    HashIndex idx= new HashIndex();
    idx.setName("theItemName");
    idx.setAttributeName("itemName");
    idx.setRangeIndex(true);
    idx.setFieldAccessAttribute(true);
    orderBMap.addMapIndexPlugin(idx);
}
```

索引は、以下のように設定された com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex インスタンスにする必要があります。

- Name は任意ですが、特定の BackingMap に対しては一意にする必要があります。
- AttributeName は、フィールドの名前か、またはクラスをイントロスペクトするために索引付けエンジンが使用する Bean のプロパティーの名前です。この場合は、索引を作成するフィールドの名前です。
- RangeIndex は常に true にする必要があります。
- FieldAccessAttribute は、照会スキーマの作成時に QueryMapping オブジェクトで設定された値と一致させる必要があります。この場合は、フィールドを使用して Java オブジェクトに直接アクセスします。

itemName フィールドにフィルターに掛ける照会が実行されると、照会エンジンは、定義された索引を自動的に使用します。索引を使用することで、照会の実行速度が向上し、マップ・スキャンが不要になります。 次のステップでは、索引を使用して照会を最適化する方法について説明します。
次のステップ

ObjectQuery チュートリアル - ステップ 3

Java

以下のステップにより、2 つのマップを持つ ObjectGrid、およびリレーションシップを備えたマップのスキーマを作成し、オブジェクトをキャッシュに挿入し、後でシンプルな照会を使用してオブジェクトを検索することができます。

始める前に

このステップを続行する前に、 3 ページの『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 2』 を完了していなければなりません。

このタスクについて

この例では、2 つのマップがあり、それぞれのマップに 1 つの Java 型がマップされています。Order マップは OrderBean オブジェクトを持ち、Customer マップは CustomerBean オブジェクトを持っています。

手順

複数のマップを 1 つの関係で定義します。

OrderBean.java

```
public class OrderBean implements Serializable {
    String orderNumber;
    java.util.Date date;
    String customerId;
    String itemName;
    int quantity;
    double price;
}
```

OrderBean には customerName はありません。代わりに customerId があり、これは CustomerBean オブジェクトと Customer マップの主キーです。

CustomerBean.java

```
public class CustomerBean implements Serializable{
    private static final long serialVersionUID = 1L;
    String id;
    String firstName;
    String surname;
    String address;
    String phoneNumber;
}
```

この 2 つの型あるいは 2 つのマップの間の関係は次のとおりです。

Application.java

```
public class Application
{

    static public void main(String [] args)
        throws Exception
    {
        ObjectGrid og = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid();
        og.defineMap("Order");
        og.defineMap("Customer");

        // Define the schema
```

```
        QueryConfig queryCfg = new QueryConfig();
        queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping(
            "Order", OrderBean.class.getName(), "orderNumber", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
        queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping(
            "Customer", CustomerBean.class.getName(), "id", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
        queryCfg.addQueryRelationship(new QueryRelationship(
             OrderBean.class.getName(), CustomerBean.class.getName(), "customerId", null));
        og.setQueryConfig(queryCfg);

        Session s = og.getSession();
        ObjectMap orderMap = s.getMap("Order");
        ObjectMap custMap = s.getMap("Customer");

        s.begin();
        CustomerBean cust = new CustomerBean();
        cust.address = "Main Street";
        cust.firstName = "John";
        cust.surname = "Smith";
        cust.id = "C001";
        cust.phoneNumber = "5555551212";
        custMap.insert(cust.id, cust);

        OrderBean o = new OrderBean();
        o.customerId = cust.id;
        o.date = new java.util.Date();
        o.itemName = "Widget";
        o.orderNumber = "1";
        o.price = 99.99;
        o.quantity = 1;
        orderMap.insert(o.orderNumber, o);
        s.commit();

        s.begin();
        ObjectQuery query = s.createObjectQuery(
            "SELECT c FROM Order o JOIN o.customerId as c WHERE o.itemName='Widget'");
        Iterator result = query.getResultIterator();
        cust = (CustomerBean) result.next();
        System.out.println("Found order for customer: " + cust.firstName + " " + cust.surname);
 s.commit();
   // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
 s.close();
    }
}
```

ObjectGrid デプロイメント記述子の対応する XML は、以下のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
  <objectGrids>
    <objectGrid name="CompanyGrid">
      <backingMap name="Order"/>
      <backingMap name="Customer"/>

      <querySchema>
         <mapSchemas>
           <mapSchema
             mapName="Order"
             valueClass="com.mycompany.OrderBean"
             primaryKeyField="orderNumber"
             accessType="FIELD"/>
           <mapSchema
             mapName="Customer"
             valueClass="com.mycompany.CustomerBean"
             primaryKeyField="id"
             accessType="FIELD"/>
         </mapSchemas>
         <relationships>
           <relationship
             source="com.mycompany.OrderBean"
             target="com.mycompany.CustomerBean"
             relationField="customerId"/>
         </relationships>
      </querySchema>
    </objectGrid>
  </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

次のタスク

『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 4』。フィールドおよびプロパティー・アクセス・オブジェクトならびに追加の関係を組み込んで現在のステップを拡張します。

ObjectQuery チュートリアル - ステップ 4

Java

以下のステップは、4 つのマップとそれらのマップのスキーマを持つ ObjectGrid を作成する方法を示しています。これらのマップのうちには、1 対 1 (単一方向) リレーションシップを維持しているものと、1 対多 (双方向) リレーションシップを維持しているものとがあります。マップの作成後には、サンプルの `Application.java` プログラムを実行して、オブジェクトをキャッシュに挿入し、それらのオブジェクトを検索する照会を実行することができます。

始める前に

現在のステップを続行する前に、 4 ページの『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 3』 を完了していなければなりません。

このタスクについて

4 つの Java クラスを作成する必要があります。以下は ObjectGrid のマップです。

- OrderBean.java
- OrderLineBean.java
- CustomerBean.java
- ItemBean.java

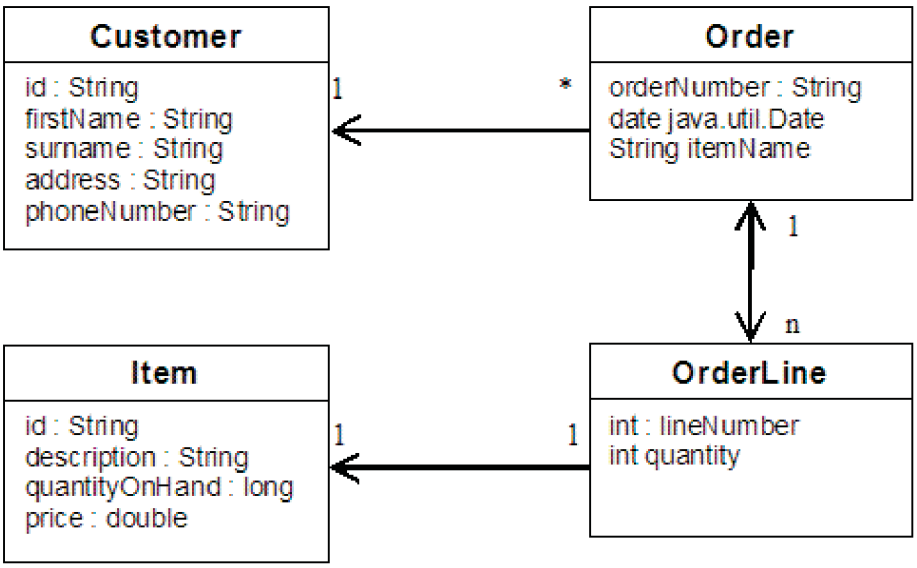


図 1. オーダー・スキーマ： オーダー・スキーマは、Customer との 1 対 1 リレーションシップおよび OrderLine との 1 対多リレーションシップを持ちます。 OrderLine マップは Item と 1 対 1 リレーションシップを持ち、オーダーされた数量を含みます。

これらの関係を持つこれらの Java クラスを作成したならば、サンプルの `Application.java` プログラムを実行することができます。このプログラムにより、オブジェクトをキャッシュに挿入し、後で複数の照会を使用してこれらのオブジェクトを検索することができます。

手順

1. 以下の Java クラスを作成します。

OrderBean.java

```
public class OrderBean implements Serializable {
   String orderNumber;
   java.util.Date date;
   String customerId;
   String itemName;
   List<Integer> orderLines;
}
```

OrderLineBean.java

```
public class OrderLineBean implements Serializable {
  int lineNumber;
  int quantity;
  String orderNumber;
  String itemId;
}
```

CustomerBean.java

```
public class CustomerBean implements Serializable{
  String id;
  String firstName;
  String surname;
  String address;
  String phoneNumber;
}
```

ItemBean.java

```
public class ItemBean implements Serializable {
  String id;
  String description;
  long quantityOnHand;
  double price;
}
```

2. これらのクラスを作成したならば、サンプルの Application.java を実行することができます。

Application.java

```
public class Application static public void main(String [] args)throws Exception
      // Configure programatically
   objectGrid og = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid();
      og.defineMap("Order");
      og.defineMap("Customer");
      og.defineMap("OrderLine");
      og.defineMap("Item");

      // Define the schema
      QueryConfig queryCfg = new QueryConfig();
      queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping("Order", OrderBean.class.getName(), "orderNumber", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
      queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping("Customer", CustomerBean.class.getName(), "id", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
      queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping("OrderLine", OrderLineBean.class.getName(), "lineNumber", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
      queryCfg.addQueryMapping(new QueryMapping("Item", ItemBean.class.getName(), "id", QueryMapping.FIELD_ACCESS));
      queryCfg.addQueryRelationship(new QueryRelationship(OrderBean.class.getName(), CustomerBean.class.getName(), "customerId", null));
      queryCfg.addQueryRelationship(new QueryRelationship(OrderBean.class.getName(), OrderLineBean.class.getName(),
  "orderLines", "lineNumber"));
      queryCfg.addQueryRelationship(new QueryRelationship(OrderLineBean.class.getName(), ItemBean.class.getName(), "itemId", null));
      og.setQueryConfig(queryCfg);

      // Get session and maps;
      Session s = og.getSession();
      ObjectMap orderMap = s.getMap("Order");
      ObjectMap custMap = s.getMap("Customer");
      ObjectMap itemMap = s.getMap("Item");
      ObjectMap orderLineMap = s.getMap("OrderLine");

      // Add data
      s.begin();
      CustomerBean aCustomer = new CustomerBean();
      aCustomer.address = "Main Street";
      aCustomer.firstName = "John";
      aCustomer.surname = "Smith";
      aCustomer.id = "C001";
      aCustomer.phoneNumber = "5555551212";
      custMap.insert(aCustomer.id, aCustomer);

      // Insert an order with a reference to the customer, but without any OrderLines yet.
      // Because we are using CopyMode.COPY_ON_READ_AND_COMMIT, the
      // insert won't be copied into the backing map until commit time, so
      // the reference is still good.

  OrderBean anOrder = new OrderBean();
  anOrder.customerId = aCustomer.id;
  anOrder.date = new java.util.Date();
  anOrder.itemName = "Widget";
  anOrder.orderNumber = "1";
  anOrder.orderLines = new ArrayList();
  orderMap.insert(anOrder.orderNumber, anOrder);

      ItemBean anItem = new ItemBean();
      anItem.id = "AC0001";
      anItem.description = "Description of widget";
      anItem.quantityOnHand = 100;
      anItem.price = 1000.0;
      itemMap.insert(anItem.id, anItem);

  // Create the OrderLines and add the reference to the Order
      OrderLineBean anOrderLine = new OrderLineBean();
      anOrderLine.lineNumber = 99;
      anOrderLine.itemId = anItem.id;
      anOrderLine.orderNumber = anOrder.orderNumber;
      anOrderLine.quantity = 500;
      orderLineMap.insert(anOrderLine.lineNumber, anOrderLine);
      anOrder.orderLines.add(Integer.valueOf(anOrderLine.lineNumber));

  anOrderLine = new OrderLineBean();
      anOrderLine.lineNumber = 100;
      anOrderLine.itemId = anItem.id;
      anOrderLine.orderNumber = anOrder.orderNumber;
      anOrderLine.quantity = 501;
```

```
        orderLineMap.insert(anOrderLine.lineNumber, anOrderLine);
        anOrder.orderLines.add(Integer.valueOf(anOrderLine.lineNumber));
        s.commit();

    s.begin();
        // Find all customers who have ordered a specific item.
        ObjectQuery query = s.createObjectQuery("SELECT c FROM Order o JOIN o.customerId as c WHERE o.itemName='Widget'");
        Iterator result = query.getResultIterator();
        aCustomer = (CustomerBean) result.next();
        System.out.println("Found order for customer: " + aCustomer.firstName + " " + aCustomer.surname);
        s.commit();

    s.begin();
        // Find all OrderLines for customer C001.
        // The query joins are expressed on the foreign keys.
        query = s.createObjectQuery("SELECT ol FROM Order o JOIN o.customerId as c JOIN o.orderLines as ol WHERE c.id='C001'");
        result = query.getResultIterator();
        System.out.println("Found OrderLines:");
        while(result.hasNext()) {
            anOrderLine = (OrderLineBean) result.next();
            System.out.println(anOrderLine.lineNumber + ", qty=" + anOrderLine.quantity);
        }
 // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
 s.close();
   }
}
```

3. 下の XML 構成 (ObjectGrid デプロイメント記述子にある) を使用することは、上のプログラマチック・アプローチと同等です。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><objectGridConfig
 xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config
../objectGrid.xsd"xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
<objectGrids>
  <objectGrid name="CompanyGrid">
  <backingMap name="Order"/>
  <backingMap name="Customer"/>
  <backingMap name="OrderLine"/>
  <backingMap name="Item"/>

<querySchema>
 <mapSchemas>
  <mapSchema
  mapName="Order"
  valueClass="com.mycompany.OrderBean"
  primaryKeyField="orderNumber"
  accessType="FIELD"/>
  <mapSchema
  mapName="Customer"
  valueClass="com.mycompany.CustomerBean"
  primaryKeyField="id"
  accessType="FIELD"/>
  <mapSchema
  mapName="OrderLine"
  valueClass="com.mycompany.OrderLineBean"
  primaryKeyField="
  lineNumber"
  accessType="FIELD"/>
  <mapSchema
  mapName="Item"
  valueClass="com.mycompany.ItemBean"
  primaryKeyField="id"
  accessType="FIELD"/>
  </mapSchemas>

<relationships>
 <relationship
  source="com.mycompany.OrderBean"
  target="com.mycompany.CustomerBean"
  relationField="customerId"/>
 <relationship
  source="com.mycompany.OrderBean"
  target="com.mycompany.OrderLineBean"
  relationField="orderLines"
  invRelationField="lineNumber"/>
 <relationship
  source="com.mycompany.OrderLineBean"
  target="com.mycompany.ItemBean"
  relationField="itemId"/>
    </relationships>
   </querySchema>
  </objectGrid>
 </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管

Java

エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

始める前に

チュートリアルを始める前に、以下の要件を満たしていることを確認してください。

- Java SE 5 が必要です。
- クラスパスに `objectgrid.jar` ファイルがなければなりません。

関連概念:

409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』
ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

API 資料

262 ページの『入門チュートリアル・レッスン 2.1: Java クライアント・アプリケーションの作成』
データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる Java クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

エンティティー・マネージャーのチュートリアル: エンティティー・クラスの作成

Java

エンティティー・クラスの作成、エンティティー・タイプの登録、およびエンティティー・インスタンスのキャッシュへの保管によって、1 つのエンティティーを持つローカル ObjectGrid を作成します。

手順

1. Order オブジェクトを作成します。 このオブジェクトを ObjectGrid エンティティーとして識別するには、@Entity アノテーションを追加します。このアノテーションを追加すると、オブジェクト内のシリアライズ可能な属性はすべて、属性のアノテーションを使用して属性をオーバーライドする場合を除いて、自動的に eXtreme Scale 内で保持されます。 **orderNumber** 属性には、この属性が 1 次キーであることを示す `@Id` というアノテーションが付けられています。 Order オブジェクトの例を次に示します。

   Order.java

   ```
   @Entity
   public class Order
   {
       @Id String orderNumber;
       Date date;
       String customerName;
       String itemName;
       int quantity;
       double price;
   }
   ```

2. eXtreme Scale Hello World アプリケーションを実行してエンティティー操作をデモンストレーションします。 次のプログラム例をスタンドアロン・モードで実行することで、エンティティー操作をデモンストレーションすることができます。このプログラムは、クラスパスに `objectgrid.jar` ファイルが追加されている Eclipse Java プロジェクトで使用します。 eXtreme Scale を使用する簡単な Hello world アプリケーションの例を次に示します。

   Application.java

   ```
   package emtutorial.basic.step1;

   import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
   import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
   import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
   import com.ibm.websphere.objectgrid.em.EntityManager;

   public class Application
   {

       static public void main(String [] args)
           throws Exception
       {
           ObjectGrid og =
       ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid();
           og.registerEntities(new Class[] {Order.class});

           Session s = og.getSession();
           EntityManager em = s.getEntityManager();

           em.getTransaction().begin();

           Order o = new Order();
           o.customerName = "John Smith";
           o.date = new java.util.Date(System.currentTimeMillis());
           o.itemName = "Widget";
           o.orderNumber = "1";
           o.price = 99.99;
           o.quantity = 1;

           em.persist(o);
           em.getTransaction().commit();

           em.getTransaction().begin();
           o = (Order)em.find(Order.class, "1");
           System.out.println("Found order for customer: " + o.customerName);
           em.getTransaction().commit();
       }
   }
   ```

   このアプリケーション例は以下の操作を実行します。

   a. 自動的に生成された名前を持つローカル eXtreme Scale を初期化します。

b. API は必ずしも必要ではありませんが registerEntities API を使用して、エンティティー・クラスをアプリケーションに登録します。

c. セッションとそのセッションのエンティティー・マネージャーへの参照を取得します。

d. 各 eXtreme Scale Session を単一の EntityManager および EntityTransaction に関連付けます。これで EntityManager が使用されます。

e. registerEntities メソッドが Order という BackingMap オブジェクトを作成し、Order オブジェクトのメタデータをその BackingMap オブジェクトに関連付けます。このメタデータには、属性タイプと名前とともに、キー属性と非キー属性が含まれています。

f. トランザクションが開始し、Order インスタンスが作成されます。トランザクションにはいくつかの値が格納されています。その後、トランザクションは、EntityManager.persist メソッドの使用によって永続化されます。このメソッドでは、関連付けられているマップに組み込まれるまでエンティティーが待機していると認識されます。

g. 次に、トランザクションがコミットされ、エンティティーが ObjectMap インスタンスに組み込まれます。

h. 別のトランザクションが作成され、キー 1 を使用して Order オブジェクトが取得されます。EntityManager.find メソッドでは型キャストが必要です。Java SE バージョン 5 以降の Java 仮想マシンで `objectgrid.jar` ファイルが確実に実行されるようにするために、Java SE 5 の機能は使用されません。

エンティティー・マネージャーのチュートリアル: エンティティー・リレーションシップの形成

Java

リレーションシップを持つ 2 つのエンティティー・クラスを作成し、それらのエンティティーを ObjectGrid に登録し、エンティティー・インスタンスをキャッシュに格納することで、エンティティー間の簡単なリレーションシップを作成します。

手順

1. Customer エンティティーを作成します。このエンティティーは、カスタマーの情報を Order オブジェクトとは別に格納するために使用されます。 Customer エンティティーの例を次に示します。

```
Customer.java
@Entity
public class Customer
{
    @Id String id;
    String firstName;
    String surname;
    String address;
    String phoneNumber;
}
```

このクラスには、名前、住所、電話番号といった、カスタマーに関する情報が含まれます。

2. Order オブジェクトを作成します。このオブジェクトは 12 ページの『エンティティー・マネージャーのチュートリアル: エンティティー・クラスの作成』トピックの Order オブジェクトと類似しています。 Order オブジェクトの例を次に示します。

Order.java

```
@Entity
public class Order
{
    @Id String orderNumber;
    Date date;
    @ManyToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Customer customer;
    String itemName;
    int quantity;
    double price;
}
```

この例では、Customer オブジェクトへの参照が customerName 属性に取って代わります。この参照には多対 1 リレーションシップを示すアノテーションが付いています。多対 1 リレーションシップは各オーダーに 1 人のカスタマーがあることを示しますが、複数のオーダーが同じカスタマーを参照することもあります。カスケード・アノテーション修飾子は、エンティティー・マネージャーで Order オブジェクトを永続化させる場合に、Customer オブジェクトも永続化させる必要があることを示しています。カスケード永続化オプション (デフォルトのオプション) を設定しない場合は、Order オブジェクトとともに Customer オブジェクトを手動で永続化する必要があります。

3. エンティティーを使用して、ObjectGrid インスタンスのマップを定義します。各マップは特定のエンティティーに対して定義されています。1 つのエンティティーの名前は Order で、もう 1 つのエンティティーの名前は Customer です。 次のアプリケーション例は、カスタマー・オーダーの格納および取得方法を示しています。

Application.java

```
public class Application
{
    static public void main(String [] args)
        throws Exception
    {
        ObjectGrid og =
     ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid();
        og.registerEntities(new Class[] {Order.class});

        Session s = og.getSession();
        EntityManager em = s.getEntityManager();

        em.getTransaction().begin();

        Customer cust = new Customer();
        cust.address = "Main Street";
        cust.firstName = "John";
        cust.surname = "Smith";
        cust.id = "C001";
        cust.phoneNumber = "5555551212";

        Order o = new Order();
        o.customer = cust;
        o.date = new java.util.Date();
        o.itemName = "Widget";
        o.orderNumber = "1";
        o.price = 99.99;
        o.quantity = 1;

        em.persist(o);
        em.getTransaction().commit();
```

```
        em.getTransaction().begin();
        o = (Order)em.find(Order.class, "1");
        System.out.println("Found order for customer: "
     + o.customer.firstName + " " + o.customer.surname);
        em.getTransaction().commit();
 // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
 s.close();
    }
}
```

このアプリケーションは、直前のステップにあるアプリケーション例と類似しています。前の例では、単一のクラス Order のみが登録されました。 WebSphere eXtreme Scale では、Customer エンティティーへの参照を検出して自動的に組み込むため、John Smith の Customer インスタンスが作成されると、新しい Order オブジェクトから参照されます。この結果として、新しいカスタマーは自動的に永続化されます。これは、2 つのオーダーの関係には、各オブジェクトの永続化を必要とするカスケード修飾子が組み込まれているためです。Order オブジェクトが見つかると、エンティティー・マネージャーでは、関連の Customer オブジェクトを自動的に検出し、このオブジェクトへの参照を挿入します。

エンティティー・マネージャーのチュートリアル: Order エンティティー・スキーマ

Java

単一方向と双方向の両方のリレーションシップ、順序リスト、および外部キー・リレーションシップを使用して、4 つのエンティティー・クラスを作成します。エンティティーの永続化と検索には、EntityManager API を使用します。このチュートリアルの前の部分にある Order および Customer エンティティーを前提として、このチュートリアル・ステップでは、Item および OrderLine という 2 つのエンティティーをさらに追加します。

このタスクについて

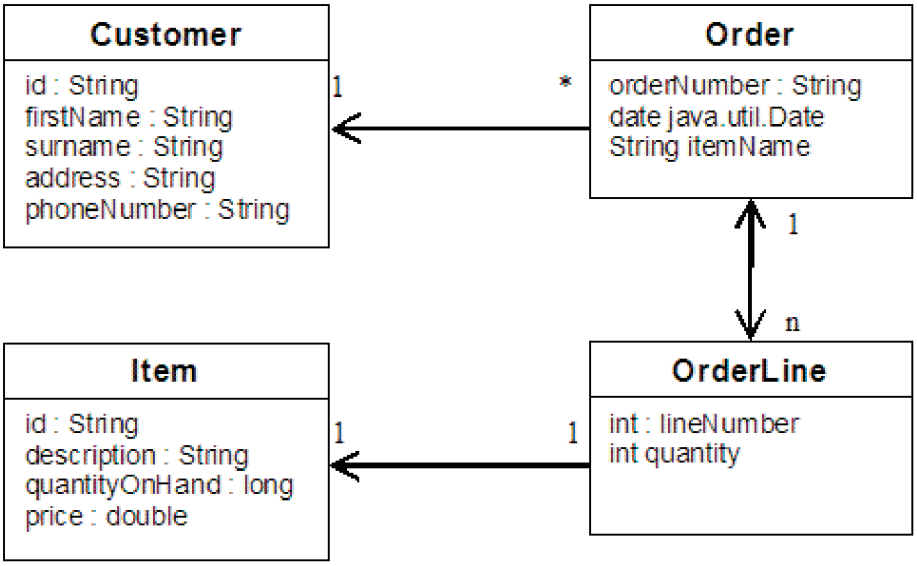


図 2. Order エンティティー・スキーマ： Order エンティティーは、1 人のカスタマーへの参照と 0 個以上の OrderLine を持っています。各 OrderLine エンティティーは、単一の Item を参照し、オーダーされた数量を含みます。

手順

1. Customer エンティティーを作成します。このエンティティーは、これまでの例と類似しています。

   Customer.java
   ```
   @Entity
   public class Customer
   {
       @Id String id;
       String firstName;
       String surname;
       String address;
       String phoneNumber;
   }
   ```

2. Item エンティティーを作成します。このエンティティーには、ストアのインベントリーにある製品の情報 (製品説明、数量、価格など) が保持されています。

   Item.java
   ```
   @Entity
   public class Item
   {
       @Id String id;
       String description;
       long quantityOnHand;
       double price;
   }
   ```

3. OrderLine エンティティーを作成します。各 Order は、オーダー内の各品目の数量を示す 0 個以上の OrderLine を持っています。 OrderLine のキーは、OrderLine を所有する Order とオーダー行に数値を割り当てる整数から構成される複合キーです。エンティティーのすべてのリレーションシップにカスケード永続化修飾子を追加します。

OrderLine.java

```
@Entity
public class OrderLine
{
    @Id @ManyToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Order order;
    @Id int lineNumber;
    @OneToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Item item;
    int quantity;
    double price;
}
```

4. 最終の Order オブジェクトを作成します。このオブジェクトは、オーダーに対応した Customer と OrderLine オブジェクトの集合を参照します。

Order.java

```
@Entity
public class Order
{
    @Id String orderNumber;
    java.util.Date date;
    @ManyToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Customer customer;
    @OneToMany(cascade=CascadeType.ALL, mappedBy="order")
   @OrderBy("lineNumber") List<OrderLine> lines;
}
```

cascade ALL は、行に対する修飾子として使用されます。この修飾子は、PERSIST 操作と REMOVE 操作をカスケードするように EntityManager に指示します。例えば、Order エンティティーを永続化または削除すると、すべての OrderLine エンティティーも永続化または削除されます。

Order オブジェクトの行リストから OrderLine エンティティーを削除すると、参照は破損されます。ただし、OrderLine エンティティーはキャッシュからは削除されません。キャッシュからエンティティーを削除するには、EntityManager remove API を使用する必要があります。REMOVE 操作は、OrderLine から Customer エンティティーまたは Item エンティティーで使用されることはありません。したがって、OrderLine を削除するときに Order または Item を削除しても、Customer エンティティーは残ります。

mappedBy 修飾子は、ターゲット・エンティティーとの逆のリレーションシップを示しています。この修飾子は、ソース・エンティティーを参照するターゲット・エンティティーの属性、および 1 対 1 リレーションシップまたは多対多リレーションシップの所有側を指定します。通常、この修飾子は省略できます。ただし、WebSphere eXtreme Scale で自動的に検出できなかった場合、この修飾子を指定する必要があることを示すエラーが表示されます。 OrderLine エンティティーが、多対 1 リレーションシップにある型 Order 属性を 2 つ含む場合、通常はエラーが発生します。

@OrderBy アノテーションは、各 OrderLine エンティティーが行リストに表示される順序を指定します。このアノテーションを指定しない場合は、行は任意の順序で表示されます。ArrayList を指定すると、行が Order エンティティーに追加されて、順序が維持されますが、EntityManager では必ずしもこの順序が認識されるわけではありません。find メソッドを実行して、キャッシュから Order オブジェクトを取得する場合、ArrayList オブジェクトはリスト・オブジェクトにはなりません。

5. アプリケーションを作成します。以下の例は、最終の Order オブジェクトを示し、オーダーに対応した Customer と OrderLine オブジェクトの集まりを参照します。
   a. オーダー対象であり、管理エンティティーとなる Item を検索します。
   b. OrderLine を作成し、各 Item に付加します。
   c. Order を作成し、各 OrderLine とそのカスタマーに関連付けます。
   d. オーダーを永続化します。この場合、各 OrderLine も自動的に永続化されます。
   e. トランザクションをコミットします。各エンティティーが切り離され、エンティティーの状態がキャッシュと同期化されます。
   f. オーダー情報を出力します。OrderLine エンティティーは、OrderLine ID 別に自動的に分類されます。

Application.java

```
static public void main(String [] args)
        throws Exception
    {
        ...

        // Add some items to our inventory.
        em.getTransaction().begin();
        createItems(em);
        em.getTransaction().commit();

        // Create a new customer with the items in his cart.
        em.getTransaction().begin();
        Customer cust = createCustomer();
        em.persist(cust);

        // Create a new order and add an order line for each item.
        // Each line item is automatically persisted since the
    // Cascade=ALL option is set.
        Order order = createOrderFromItems(em, cust, "ORDER_1",
     new String[]{"1", "2"}, new int[]{1,3});
        em.persist(order);
        em.getTransaction().commit();

        // Print the order summary
        em.getTransaction().begin();
        order = (Order)em.find(Order.class, "ORDER_1");
        System.out.println(printOrderSummary(order));
        em.getTransaction().commit();
    }

    public static Customer createCustomer() {
        Customer cust = new Customer();
        cust.address = "Main Street";
        cust.firstName = "John";
        cust.surname = "Smith";
        cust.id = "C001";
        cust.phoneNumber = "5555551212";
        return cust;
    }

    public static void createItems(EntityManager em) {
        Item item1 = new Item();
        item1.id = "1";
        item1.price = 9.99;
        item1.description = "Widget 1";
        item1.quantityOnHand = 4000;
```

```
        em.persist(item1);

        Item item2 = new Item();
        item2.id = "2";
        item2.price = 15.99;
        item2.description = "Widget 2";
        item2.quantityOnHand = 225;
        em.persist(item2);

    }

    public static Order createOrderFromItems(EntityManager em,
   Customer cust, String orderId, String[] itemIds, int[] qty) {

        Item[] items = getItems(em, itemIds);

        Order order = new Order();
        order.customer = cust;
        order.date = new java.util.Date();
        order.orderNumber = orderId;
        order.lines = new ArrayList<OrderLine>(items.length);
    for(int i=0;i<items.length;i++){
      OrderLine line = new OrderLine();
            line.lineNumber = i+1;
            line.item = items[i];
            line.price = line.item.price;
            line.quantity = qty[i];
            line.order = order;
            order.lines.add(line);
        }
        return order;
    }

    public static Item[] getItems(EntityManager em, String[] itemIds) {
        Item[] items = new Item[itemIds.length];
        for(int i=0;i<items.length;i++){
    items[i] = (Item) em.find(Item.class, itemIds[i]);
        }
        return items;
    }
```

次のステップでは、エンティティーを削除します。EntityManager インターフェースは、削除対象にするオブジェクトにマークを付ける remove メソッドを備えています。アプリケーションでは、remove メソッドを呼び出す前に、すべてのリレーションシップのコレクションからエンティティーを削除する必要があります。最終ステップとして、参照を編集し、remove メソッド em.remove(object) を実行します。

エンティティー・マネージャーのチュートリアル: エントリーの更新

Java

エンティティーを変更する場合は、インスタンスを検出し、インスタンスと参照先エンティティーを更新し、トランザクションをコミットできます。

始める前に

手順

エントリーを更新します。 以下の例は、Order インスタンスの検索方法、このインスタンスと参照先エンティティーの変更方法、およびトランザクションのコミット方法を示しています。

```
public static void updateCustomerOrder(EntityManager em) {
    em.getTransaction().begin();
    Order order = (Order) em.find(Order.class, "ORDER_1");
    processDiscount(order, 10);
    Customer cust = order.customer;
    cust.phoneNumber = "5075551234";
    em.getTransaction().commit();
}

public static void processDiscount(Order order, double discountPct) {
    for(OrderLine line : order.lines) {
        line.price = line.price * ((100-discountPct)/100);
    }
}
```

トランザクションをフラッシュすると、すべての管理エンティティーがキャッシュと同期化されます。トランザクションがコミットされると、フラッシュが自動的に実行されます。この場合は、Order が管理エンティティーとなります。
Order、Customer、および OrderLine から参照されるエンティティーも管理エンティティーとなります。トランザクションがフラッシュされるとき、各エンティティーは検査され、変更されているかどうかが判定されます。変更されているエンティティーは、キャッシュ内で更新されます。コミットまたはロールバックされてトランザクションが完了した後、エンティティーは切り離され、エンティティーで行われた変更はキャッシュに反映されません。

エンティティー・マネージャーのチュートリアル: 索引によるエントリーの更新と除去

Java

索引を使用して、エンティティーを検索、更新、および除去することができます。

手順

更新を使用してエンティティーを更新および除去します。 索引を使用して、エンティティーを検索、更新、および除去することができます。以下の例では、Order エンティティー・クラスを更新して、@Index アノテーションを使用します。@Index アノテーションは、属性の範囲索引で作成するよう WebSphere eXtreme Scale に通知します。索引の名前は属性の名前と同じで、常に MapRangeIndex 索引型です。

Order.java

```
@Entity
public class Order
{
    @Id String orderNumber;
    @Index java.util.Date date;
    @OneToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Customer customer;
    @OneToMany(cascade=CascadeType.ALL, mappedBy="order")
    @OrderBy("lineNumber") List<OrderLine> lines;  }
```

以下の例では、直前にサブミットされたすべてのオーダーを取り消す方法を示しています。索引を使用してオーダーを検索し、オーダーの品目を在庫に戻し、オーダーおよびそれに関連する明細行をシステムから削除します。

```
public static void cancelOrdersUsingIndex(Session s)
  throws ObjectGridException {
    // Cancel all orders that were submitted 1 minute ago
    java.util.Date cancelTime = new
   java.util.Date(System.currentTimeMillis() - 60000);
    EntityManager em = s.getEntityManager();
    em.getTransaction().begin();
    MapRangeIndex dateIndex = (MapRangeIndex)
   s.getMap("Order").getIndex("date");
    Iterator<Tuple> orderKeys = dateIndex.findGreaterEqual(cancelTime);
  while(orderKeys.hasNext()) {
   Tuple orderKey = orderKeys.next();
   // Find the Order so we can remove it.
   Order curOrder = (Order) em.find(Order.class, orderKey);
   // Verify that the order was not updated by someone else.
   if(curOrder != null && curOrder.date.getTime() >= cancelTime.getTime()) {
    for(OrderLine line : curOrder.lines) {
     // Add the item back to the inventory.
     line.item.quantityOnHand += line.quantity;
     line.quantity = 0;
    }
   em.remove(curOrder);
   }
  }
 em.getTransaction().commit();
}
```

エンティティー・マネージャーのチュートリアル: 照会を使用したエントリーの更新と除去

Java

照会を使用してエンティティーを更新および除去することができます。

手順

照会を使用してエンティティーを更新および除去します。

Order.java

```
@Entity
public class Order
{
    @Id String orderNumber;
    @Index java.util.Date date;
    @OneToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Customer customer;
    @OneToMany(cascade=CascadeType.ALL, mappedBy="order")
   @OrderBy("lineNumber") List<OrderLine> lines;
}
```

Order エンティティー・クラスは前の例のものと同じです。照会ストリングが日付を使用してエンティティーを検索するため、このクラスは引き続き @Index アノテーションを提供します。照会エンジンは、索引が使用可能であるときは、索引を使用します。

```
public static void cancelOrdersUsingQuery(Session s) {
        // Cancel all orders that were submitted 1 minute ago
        java.util.Date cancelTime =
     new java.util.Date(System.currentTimeMillis() - 60000);
        EntityManager em = s.getEntityManager();
        em.getTransaction().begin();

        // Create a query that will find the order based on date.  Since
        // we have an index defined on the order date, the query
    // will automatically use it.
```

```
        Query query = em.createQuery("SELECT order FROM Order order
     WHERE order.date >= ?1");
        query.setParameter(1, cancelTime);
        Iterator<Order> orderIterator = query.getResultIterator();
    while(orderIterator.hasNext()) {
     Order order = orderIterator.next();
     // Verify that the order wasn't updated by someone else.
     // Since the query used an index, there was no lock on the row.
     if(order != null && order.date.getTime() >= cancelTime.getTime()) {
       for(OrderLine line : order.lines) {
        // Add the item back to the inventory.
        line.item.quantityOnHand += line.quantity;
        line.quantity = 0;
       }
       em.remove(order);
     }
   }
  em.getTransaction().commit();
}
```

前の例と同様、cancelOrdersUsingQuery メソッドの目的は、この 1 分間にサブミットされたすべてのオーダーを取り消すことです。オーダーを取り消すには、照会を使用してオーダーを検索し、オーダー内の品目を在庫に戻し、オーダーおよび関連の明細行をシステムから削除します。

チュートリアル: Java SE セキュリティーの構成

以下のチュートリアルにより、Java Platform, Standard Edition 環境で分散 eXtreme Scale 環境を作成できます。

始める前に

分散 eXtreme Scale 構成の基本をよく理解している必要があります。

このタスクについて

スタンドアロン環境に eXtreme Scale をインストールした場合は、このチュートリアルを使用します。このチュートリアルの各ステップは直前のステップを踏まえて進行します。このステップを一つ一つ実行して、分散 eXtreme Scale を保護し、その保護された eXtreme Scale にアクセスするシンプルな Java SE アプリケーションを作成してください。

チュートリアルの開始

Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 1

チュートリアルの残りの部分を実施には、単純な Java プログラムと 2 つの XML ファイルを作成してパッケージ化する必要があります。これらのファイルのセットは、`accounting` という名前の 1 つの ObjectGrid インスタンスと `customer` マップを含む、単純な ObjectGrid 構成を定義します。 `SimpleDP.xml` ファイルは、1 つの区画と最小必要数がゼロ個のレプリカで構成される 1 つのマップ・セットのデプロイメント・ポリシーを特徴とします。

手順

1. コマンド行ウィンドウで、*wxs_home* ディレクトリーに移動します。
2. `applib` というディレクトリーを作成します。

3. 開発環境のクラスパスに ogclient.jar ファイルが含まれていることを確認します。詳しくは、*プログラミング・ガイド* を参照してください。
4. 次の SimpleApp.java クラスを作成してコンパイルします。

SimpleApp.java

```
// This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
// without royalty payment by customer
// (a) for its own instruction and study,
// (b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
// either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
// application, in customer's own products.
// Licensed Materials - Property of IBM
// 5724-J34 (C) COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2007-2009
package com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ClientClusterContext;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;

public class SimpleApp {

    public static void main(String[] args) throws Exception {

        SimpleApp app = new SimpleApp();
        app.run(args);
    }

    /**
     * read and write the map
     * @throws Exception
     */
    protected void run(String[] args) throws Exception {
        ObjectGrid og = getObjectGrid(args);

        Session session = og.getSession();

        ObjectMap customerMap = session.getMap("customer");

        String customer = (String) customerMap.get("0001");

        if (customer == null) {
            customerMap.insert("0001", "fName lName");
        } else {
            customerMap.update("0001", "fName lName");
        }
        customer = (String) customerMap.get("0001");
 // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
 session.close();
        System.out.println("The customer name for ID 0001 is " + customer);
    }

    /**
     * Get the ObjectGrid
     * @return an ObjectGrid instance
     * @throws Exception
     */
    protected ObjectGrid getObjectGrid(String[] args) throws Exception {
        ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();

        // Create an ObjectGrid
        ClientClusterContext ccContext = ogManager.connect("localhost:2809", null, null);
        ObjectGrid og = ogManager.getObjectGrid(ccContext, "accounting");

        return og;

    }

}
```

5. このファイルを使用してパッケージをコンパイルし、JAR に sec_sample.jar という名前を付けます。
6. *wxs_home* ディレクトリーに移動し、xml というディレクトリーを作成します。
7. *wxs_home*/xml ディレクトリーで、以下の構成ファイルを作成します。

SimpleApp.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="accounting">
            <backingMap name="customer" readOnly="false" copyKey="true"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

下記の XML ファイルはデプロイメント環境を構成します。

SimpleDP.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">

 <objectgridDeployment objectgridName="accounting">
  <mapSet name="mapSet1" numberOfPartitions="1" minSyncReplicas="0" maxSyncReplicas="2"
   maxAsyncReplicas="1">
   <map ref="customer"/>
  </mapSet>
 </objectgridDeployment>
</deploymentPolicy>
```

タスクの結果

これらのファイルは、accounting という名前の 1 つの ObjectGrid インスタンスと customer マップを含む、単純な ObjectGrid 構成を作成します。

Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 2

SimpleApp.java サンプルが実行することを確認する前に、カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを開始する必要があります。これらのサービスを正常に開始した後、クライアントを起動し、サンプルを実行することができます。また、利用可能な統合セキュリティーを強化するため、このチュートリアルのステップごとにセキュリティー機能を順次追加していきます。

始める前に

チュートリアルのこのステップを正常に完了するには、以下のファイルにアクセスできなければなりません。

- コンパイルされた sec_sample.jar パッケージにアクセスできるようにします。このパッケージには SimpleApp.java プログラムが含まれています。
- 必要な構成ファイル SimpleApp.xml および SimpleDP.xml にアクセスできるようにします。

これらのファイルは、このチュートリアルの 23 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 1』 で作成したはずです。

また、以下のことを行う方法も知っているはずです。

- カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動および停止します。詳しくは、スタンドアロン・サーバーの始動と停止を参照してください。

非推奨: 8.6+ **startOgServer** および **stopOgServer** コマンドは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用して

いるサーバーの始動および停止を行います。 ORB は非推奨ですが、前のリリースで ORB を使用していた場合は、これらのスクリプトを引き続き使用することができます。 IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムが ORB に取って代わります。 XIO トランスポートを使用しているサーバーの始動および停止には、**startXsServer** および **stopXsServer** スクリプトを使用します。

- データ・グリッドに挿入されたマップ・サイズを確認するために **xscmd** ユーティリティーを実行します。

手順

1. コマンド行ウィンドウで、*wxs_home*/bin ディレクトリーに移動し、カタログ・サービスを開始します。
   - UNIX Linux `./startOgServer.sh catalogServer`
   - Windows `startOgServer.bat catalogServer`
   - UNIX Linux 8.6+ `./startXsServer.sh catalogServer`
   - Windows 8.6+ `startXsServer.bat catalogServer`
2. c0 という名前のコンテナー・サービスを開始します。
   - UNIX Linux
     ```
     ./startOgServer.sh c0 -objectGridFile
     ../xml/SimpleApp.xml -deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml
     -catalogServiceEndPoints localhost:2809
     ```
   - Windows
     ```
     startOgServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SimpleApp.xml -
     deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml  -catalogServiceEndPoints
     localhost:2809
     ```
   - UNIX Linux 8.6+
     ```
     ./startXsServer.sh c0 -objectGridFile
     ../xml/SimpleApp.xml -deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml
     -catalogServiceEndPoints localhost:2809
     ```
   - Windows 8.6+
     ```
     startXsServer.bat c0 -objectGridFile
     ..¥xml¥SimpleApp.xml - deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml
     -catalogServiceEndPoints localhost:2809
     ```
3. カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーが始動されたならば、次のようにして sec_sample.jar サンプルを実行します。
   ```
   java -classpath
   ../lib/objectgrid.jar:../applib/sec_sample.jar
   com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SimpleApp

   java -classpath ..¥lib¥objectgrid.jar;..¥applib¥sec_sample.jar
   com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SimpleApp
   ```
   サンプルの出力: The customer name for ID 0001 is fName lName このクラスの getObjectGrid メソッドは ObjectGrid を取得し、run メソッドは customer マップからレコードを読み取り、accounting グリッドの値を更新します。
4. 次のように **xscmd** コマンド・ユーティリティーを実行して、「accounting」グリッドに挿入された「customer」マップのサイズを確認します。
   - UNIX Linux
     ```
     ./xscmd.sh -c showMapSizes -g accounting -ms
     mapSet1
     ```

- Windows `xscmd.bat -c showMapSizes -g accounting -ms mapSet1`

5. 次のいずれかのスクリプトを使用して、c0 という名前のコンテナー・サーバーを停止します。
   - UNIX Linux `./stopOgServer.sh c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809`
   - Windows `stopOgServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809`
   - 8.6+

     UNIX Linux `./stopXsServer.sh c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809`
   - 8.6+

     Windows `stopXsServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809`

   サーバーが正常に停止した場合は、次のメッセージが表示されます。

   ```
   CWOBJ2512I: ObjectGrid server c0 stopped.
   ```
6. 次のいずれかのスクリプトを使用してカタログ・サーバーを停止します。
   - UNIX Linux `./stopOgServer.sh catalogServer -catalogServiceEndPoints localhost:2809`
   - Windows `stopOgServer.bat catalogServer -catalogServiceEndPoints localhost:2809`
   - 8.6+

     UNIX Linux `./stopXsServer.sh catalogServer -catalogServiceEndPoints localhost:2809`
   - 8.6+

     Windows `stopXsServer.bat catalogServer -catalogServiceEndPoints localhost:2809`

   サーバーが正常に停止した場合は、次のメッセージが表示されます。

   ```
   CWOBJ2512I: ObjectGrid server catalogServer stopped.
   ```

Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 3

チュートリアルの残りの部分は、eXtreme Scale サーバーに接続する前にクライアント認証を有効にする方法を示しています。このチュートリアルの次のステップに備えるために、SecureSimpleApp.java プログラムを JAR にパッケージ化し、構成ファイルのセットを作成します。これらの構成ファイルは、security.xml ファイルと 2 つの JAAS 構成ファイルを含みます。 security.xml ファイルは、認証を環境に書き込めるようにします。JAAS 構成ファイルは、サーバーへの接続時に認証メカニズムを提供します。

手順

1. コマンド行ウィンドウで、 23 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 1』 で作成した *wxs_home*/applib ディレクトリーに移動します。
2. 次の SecureSimpleApp.java クラスを作成してコンパイルします。

SecureSimpleApp.java

```
package com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ClientClusterContext;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfiguration;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfigurationFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredentialGenerator;

public class SecureSimpleApp extends SimpleApp {

    public static void main(String[] args) throws Exception {

        SecureSimpleApp app = new SecureSimpleApp();
        app.run(args);
    }

    /**
     * Get the ObjectGrid
     * @return an ObjectGrid instance
     * @throws Exception
     */
    protected ObjectGrid getObjectGrid(String[] args) throws Exception {
        ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
        ogManager.setTraceFileName("logs/client.log");
        ogManager.setTraceSpecification("ObjectGrid*=all=enabled:ORBRas=all=enabled");

        // Creates a ClientSecurityConfiguration object using the specified file
        ClientSecurityConfiguration clientSC = ClientSecurityConfigurationFactory
                .getClientSecurityConfiguration(args[0]);

        // Creates a CredentialGenerator using the passed-in user and password.
        CredentialGenerator credGen = new UserPasswordCredentialGenerator(args[1], args[2]);
        clientSC.setCredentialGenerator(credGen);

        // Create an ObjectGrid by connecting to the catalog server
        ClientClusterContext ccContext = ogManager.connect("localhost:2809", clientSC, null);
        ObjectGrid og = ogManager.getObjectGrid(ccContext, "accounting");

        return og;

    }

}
```

3. 開発環境のクラスパスに ogclient.jar ファイルが含まれていることを確認します。詳しくは、*プログラミング・ガイド* を参照してください。
4. これらのファイルを使用してパッケージをコンパイルし、JAR に sec_sample.jar という名前を付けます。
5. *wxs_home* ディレクトリーに切り替えます。
6. security というディレクトリーを作成します。
7. security.xml という構成ファイルを作成します。このファイルにはサーバー・セキュリティー・プロパティーが指定されます。これらのプロパティーは、カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーの両方に共通します。

security.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">

 <security securityEnabled="true" loginSessionExpirationTime="300" >
```

```
        <authenticator className ="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.
      KeyStoreLoginAuthenticator">
        </authenticator>
      </security>

    </securityConfig>
```

Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 4

前のステップに基づいて、以下のトピックでは、分散 eXtreme Scale 環境でクライアント認証を実装する方法を示します。

始める前に

27 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 3』 を完了していなければなりません。SecureSimpleApp.java サンプルの作成および sec_sample.jar ファイルへのコンパイル、ならびに security.xml という構成ファイルの作成が完了していなければなりません。

このタスクについて

クライアント認証が有効になっていると、クライアントは eXtreme Scale サーバーに接続する前に認証されます。このセクションでは、サンプルの SecureSimpleApp.java を使用して、eXtreme Scale サーバー環境でクライアント認証を行う方法を示します。

クライアント資格情報

SecureSimpleApp.java サンプルでは、次の 2 つのプラグイン実装を使用してクライアント資格情報を取得します。

com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredential

com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredentialGenerator

これらのプラグインについて詳しくは、 882 ページの『クライアント認証プログラミング』を参照してください。

サーバー・オーセンティケーター

この例では、テストとサンプルが目的である eXtreme Scale 組み込み実装 KeyStoreLoginAuthenticator を使用します (鍵ストアは単純なユーザー・レジストリーであり、実動には使用しないようにしてください)。詳しくは、 882 ページの『クライアント認証プログラミング』のオーセンティケーター・プラグインについてのトピックを参照してください。

手順

1. コマンド行ウィンドウで、*wxs_home* ディレクトリーに移動します。
2. 27 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 3』 で作成した *wxs_home*/security ディレクトリーに切り替えます。
3. サーバーに対する認証の方法を実施する JAAS 構成ファイル (og_jaas.config) を作成します。 security.xml ファイルで参照されている KeyStoreLoginAuthenticator は、JAAS ログイン・モジュール「KeyStoreLogin」を使用することによって鍵ストアを使用します。鍵ストアは、KeyStoreLoginModule クラスに対するオプションとして構成できます。

```
og_jaas.config
KeyStoreLogin{
com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginModule required
     keyStoreFile="../security/sampleKS.jks" debug = true;
};
```

4. *java_home*/bin ディレクトリーに切り替え、keytool を実行します。
5. *wxs_home* /security ディレクトリーに切り替え、それぞれ独自のパスワードを持つ 2 人のユーザー「manager」および「cashier」を作成します。
   a. keytool を使用して、パスワード「manager1」を持つユーザー「manager」を鍵ストア sampleKS.jks に作成します。
      - UNIX Linux

        ```
        keytool -genkey -v -keystore sampleKS.jks -storepass sampleKS1 \
        -alias manager -keypass manager1 \
        -dname CN=manager,O=acme,OU=OGSample -validity 10000
        ```

      - Windows

        ```
        keytool -genkey -v -keystore sampleKS.jks -storepass sampleKS1 ^
        -alias manager -keypass manager1 ^
        -dname CN=manager,O=acme,OU=OGSample -validity 10000
        ```

   b. keytool を使用して、パスワード「cashier1」を持つユーザー「cashier」を鍵ストア sampleKS.jks に作成します。
      - UNIX Linux

        ```
        keytool -genkey -v -keystore sampleKS.jks -storepass sampleKS1 \
        -alias cashier -keypass cashier1 \
        -dname CN=cashier,O=acme,OU=OGSample -validity 10000
        ```

      - Windows

        ```
        keytool -genkey -v -keystore sampleKS.jks -storepass sampleKS1 ^
        -alias cashier -keypass cashier1 ^
        -dname CN=cashier,O=acme,OU=OGSample -validity 10000
        ```

6. wxs_home/properties ディレクトリーにある sampleClient.properties ファイルのコピーを wxs_home/security/client.properties に作成します。
   - UNIX Linux

     ```
     cp ../properties/sampleClient.properties client.properties
     ```

   - Windows

     ```
     copy ..¥properties¥sampleClient.properties client.properties
     ```

7. *wxs_home*/security ディレクトリーで、これを client.properties として保存します。

   client.properties ファイルに対して以下の変更を行います。
   a. **securityEnabled: securityEnabled** を true (デフォルト値) に設定します。認証を含むクライアント・セキュリティーが有効になります。
   b. **credentialAuthentication: credentialAuthentication** を Supported (デフォルト値) に設定すると、クライアントで資格情報認証がサポートされます。
   c. **transportType: transportType** を TCP/IP に設定すると、SSL は使用されません。
8. sampleServer.properties ファイルを *wxs_home*/security ディレクトリーにコピーし、server.properties として保存します。

- UNIX Linux

```
cp ../properties/sampleServer.properties server.properties
```

- Windows

```
copy ..¥properties¥sampleServer.properties server.properties
```

server.properties ファイルで以下の変更を行います。

a. **securityEnabled: securityEnabled** 属性を true に設定します。

b. **transportType: transportType** 属性を TCP/IP に設定します。すなわち、SSL は使用されません。

c. **secureTokenManagerType: secureTokenManagerType** 属性を none に設定します。これで、セキュア・トークン・マネージャーが構成されなくなります。

9. *wxs_home*/bin ディレクトリーに移動し、ご使用のプラットフォームに応じて、次のいずれかのコマンドを実行してカタログ・サーバーを始動します。 セキュリティー・プロパティーを渡すために、**-clusterFile** および **-serverProps** のコマンド行オプションを実行する必要があります。

- UNIX Linux

```
./startOgServer.sh catalogServer -clusterSecurityFile ../security/security.xml
-serverProps ../security/server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- Windows

```
startOgServer.bat catalogServer -clusterSecurityFile ..¥security¥security.xml
-serverProps ..¥security¥server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

- UNIX Linux 8.6+

```
./startXsServer.sh catalogServer -clusterSecurityFile ../security/security.xml
-serverProps ../security/server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- Windows 8.6+

```
startXsServer.bat catalogServer -clusterSecurityFile ..¥security¥security.xml
-serverProps ..¥security¥server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

10. 次のいずれかのスクリプトを使用して、c0 という名前のコンテナー・サーバーを始動します。**-serverProps** を発行するとサーバー・プロパティー・ファイルが渡されます。

a.

- UNIX Linux

```
./startOgServer.sh c0 -objectgridFile ../xml/SimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ../security/server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- Windows

```
startOgServer.bat c0 -objectgridFile ..¥xml¥SimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ..¥security¥server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

- UNIX Linux 8.6+

```
./startXsServer.sh c0 -objectgridFile ../xml/SimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ../security/server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- Windows 8.6+

```
startXsServer.bat c0 -objectgridFile ..¥xml¥SimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ..¥security¥server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

11. カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーが始動されたならば、次のようにして sec_sample.jar サンプルを実行します。

- UNIX Linux

```
java -classpath ../lib/objectgrid.jar:../applib/sec_sample.jar
  com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
  ../security/client.properties manager manager1
```

- Windows

```
java -classpath ..¥lib¥objectgrid.jar;..¥applib¥sec_sample.jar
  com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
  ..¥security¥client.properties manager manager1
```

Linux 前の例にあるように、セミコロン (;) ではなくコロン (:) をクラスパスの分離文字として使用します。

クラスを発行すると、以下の出力が得られます。

```
The customer name for ID 0001 is fName lName.
```

12. 次のように **xscmd** コマンド・ユーティリティーを実行して、「accounting」グリッドに挿入された「customer」マップのサイズを確認します。

- UNIX Linux `./xscmd.sh -c showMapSizes -g accounting -m customer -username manager -password manager1`
- Windows `xscmd.bat -c showMapSizes -g accounting -m customer -username manager -password manager1`

13. オプション: コンテナー・サーバーまたはカタログ・サーバーを停止するために、 **stopOgServer** または **stopXsServer** コマンドを使用できます。ただし、セキュリティー構成ファイルを指定する必要があります。サンプル・クライアント・プロパティー・ファイルは、以下の 2 つのプロパティーを定義して、ユーザー ID とパスワードの資格情報 (manager/manager1) を生成します。

```
credentialGeneratorClass=com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredentialGenerator
credentialGeneratorProps=manager manager1
```

次のコマンドを使用してコンテナー c0 を停止します。

- UNIX Linux `./stopOgServer.sh c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ../security/client.properties`
- Windows `stopOgServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ..¥security¥client.properties`

- UNIX Linux 8.6+ `./stopXsServer.sh c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ../security/client.properties`
- Windows 8.6+ `stopXsServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ..¥security¥client.properties`

-clientSecurityFile オプションを指定しないと、次のメッセージを伴う例外が表示されます。

```
>> SERVER (id=39132c79, host=9.10.86.47) TRACE START:

>> org.omg.CORBA.NO_PERMISSION: Server requires credential
authentication but there is no security context from the client. This
usually happens when the client does not pass a credential the server.

vmcid: 0x0

minor code: 0

completed: No
```

また、以下のコマンドを使用してカタログ・サーバーをシャットダウンすることもできます。ただし、チュートリアルの次のステップに続行する場合は、このカタログ・サーバーを実行させたままにしておいてかまいません。

- UNIX Linux `./stopOgServer.sh catalogServer -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ../security/client.properties`
- Windows `stopOgServer.bat catalogServer -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ..¥security¥client.properties`
- UNIX Linux 8.6+ `./stopXsServer.sh -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ../security/client.properties`
- Windows 8.6+ `stopXsServer.bat -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -clientSecurityFile ..¥security¥client.properties`

カタログ・サーバーをシャットダウンすると、次の出力が表示されます。

```
CWOBJ2512I: ObjectGrid server catalogServer stopped
```

これで、認証を有効にすることにより、正常にシステムが部分的にセキュアになりました。サーバーを構成してユーザー・レジストリーをプラグインし、クライアントを構成してクライアント資格情報を提供するようにし、クライアント・プロパティー・ファイルおよびクラスター XML ファイルを変更して認証を有効にしています。

無効なパスワードを入力すると、ユーザー名およびパスワードが誤っていることを示す例外が表示されます。

クライアント認証について詳しくは、 841 ページの『アプリケーション・クライアントの認証』を参照してください。

次のチュートリアル・ステップ

Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5

前のステップのようにクライアントを認証した後、 eXtreme Scale 許可メカニズムによりセキュリティー特権を付与することができます。

始める前に

このタスクを続行する前に 29 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 4』 を完了している必要があります。

このタスクについて

このチュートリアルの前のステップでは、eXtreme Scale グリッドで認証を使用可能にする方法について説明しました。この結果として、非認証クライアントは、サーバーに接続することができず、システムに要求の実行依頼をすることができません。ただし、認証されている各クライアントは、ObjectGrid マップに格納されているデータの読み取り、書き込み、削除など、サーバーに対して同じアクセス権または特権を持っています。クライアントは、どのような照会でも実行できます。このセクションでは、eXtreme Scale 許可を使用してさまざまな認証済みユーザーにさまざまな特権を付与する方法について説明します。

他の多くのシステムと同様、eXtreme Scale でもアクセス権ベースの許可メカニズムを採用しています。 WebSphere eXtreme Scale には、各種の許可クラスによって表されるさまざまな許可カテゴリーがあります。このトピックでは、MapPermission について説明します。許可のすべてのカテゴリーは、 900 ページの『クライアント許可プログラミング』を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale では、com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission クラスは eXtreme Scale リソース、特に ObjectMap インターフェースまたは JavaMap インターフェースのメソッドに対する許可を表しています。 WebSphere eXtreme Scale は、ObjectMap および JavaMap のメソッドにアクセスするための以下の許可ストリングを定義します。

- read: マップからデータを読み取る許可を与えます。
- write: マップのデータを更新する許可を与えます。
- insert: マップにデータを挿入する許可を与えます。
- remove: マップからデータを削除する許可を与えます。
- invalidate: マップからのデータを無効にする許可を与えます。
- all: read、write、insert、remove、および invalidate に対するすべての許可を与えます。

クライアントが ObjectMap または JavaMap のメソッドを呼び出すと許可が行われます。 eXtreme Scale ランタイム環境が、さまざまなメソッドの異なるマップ許可を検査します。必要な許可がクライアントに与えられていない場合は、AccessControlException が発生します。

このチュートリアルでは、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用して、さまざまなユーザーに対する許可マップ・アクセスを付与する方法について説明します。

手順

1. **eXtreme Scale 許可を使用可能にします。** ObjectGrid で許可を使用可能にするには、 XML ファイルで、その特定の ObjectGrid の securityEnabled 属性を true に設定する必要があります。 ObjectGrid でセキュリティーを使用可能にするということは、許可を使用可能にするということです。以下のコマンドを使用して、セキュリティーが使用可能な新しい ObjectGrid XML ファイルを作成します。

   a. xml ディレクトリーに移動します。

      ```
      cd objectgridRoot/xml
      ```

   b. SimpleApp.xml ファイルを SecureSimpleApp.xml ファイルにコピーします。

      - UNIX Linux

        ```
        cp SimpleApp.xml SecureSimpleApp.xml
        ```

      - Windows

        ```
        copy SimpleApp.xml SecureSimpleApp.xml
        ```

   c. SecureSimpleApp.xml ファイルを開いて、以下の XML に示すように、ObjectGrid レベルで securityEnabled="true" を追加します。

      ```
      <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
      <objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
          xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
         xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
          <objectGrids>
              <objectGrid name="accounting" securityEnabled="true">
                  <backingMap name="customer" readOnly="false" copyKey="true"/>
              </objectGrid>
          </objectGrids>
      </objectGridConfig>
      ```

2. **許可ポリシーを定義します。** 前のクライアント認証トピックでは、ユーザー (cashier と manager) を鍵ストア内に作成しました。この例では、ユーザー「cashier」はすべてのマップに対する読み取り許可のみを持ち、ユーザー「manager」はすべての許可を持ちます。 この例では、JAAS 許可が使用されます。JAAS 許可ポリシー・ファイルを作成して、プリンシパルに許可を付与する必要があります。以下の og_auth.policy ファイルを objectgridRoot/security ディレクトリーに作成します。

   og_auth.policy

   ```
   grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
       principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=cashier,O=acme,OU=OGSample" {
       permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "accounting.*", "read";
   };

   grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
       principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
       permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "accounting.*", "all";
   };
   ```

   注:

   - codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgridRoot/security/PrivilegedAction" は、ObjectGrid 用の特別予約 URL です。プリンシパルに付与されているすべての ObjectGrid 許可では、この特別なコードベースを使用します。

- 1 番目の grant ステートメントでは、「read」マップ許可がプリンシパル "CN=cashier,O=acme,OU=OGSample" に付与されるので、cashier には、ObjectGrid アカウンティングのすべてのマップに対するマップ読み取り許可のみが付与されます。
- 2 番目の grant ステートメントでは「all」マップ許可がプリンシパル "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" に付与されるので、manager には、ObjectGrid アカウンティングのマップに対するすべての許可が付与されます。

これで、許可ポリシーを使用してサーバーを起動することができます。次のように標準の -D プロパティーを使用して JAAS 許可ポリシー・ファイルを設定することができます。-Djava.security.policy=../security/og_auth.policy

3. **アプリケーションを実行します。**

上記のファイルを作成すると、アプリケーションを実行することができます。

以下のコマンドを使用して、カタログ・サーバーを始動します。カタログ・サービスの開始について詳しくは、ORB トランスポートを使用しているスタンドアロン・カタログ・サービスの開始を参照してください。

a. bin ディレクトリーに移動します。cd objectgridRoot/bin

b. カタログ・サーバーを始動します。

- UNIX Linux

```
./startOgServer.sh catalogServer
-clusterSecurityFile ../security/security.xml
-serverProps ../security/server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- Windows

```
startOgServer.bat catalogServer
-clusterSecurityFile ..¥security¥security.xml
-serverProps ..¥security¥server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

- 8.6+ UNIX Linux

```
./startXsServer.sh catalogServer
-clusterSecurityFile ../security/security.xml
-serverProps ../security/server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- 8.6+ Windows

```
startXsServer.bat catalogServer
-clusterSecurityFile ..¥security¥security.xml
-serverProps ..¥security¥server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

security.xml ファイルおよび server.properties ファイルは、このチュートリアルの前のステップで作成されています。

c. 次に、以下のスクリプトを使用して、セキュア・コンテナー・サーバーを始動できます。 bin ディレクトリーから以下のスクリプトを実行します。

- UNIX Linux

```
./startOgServer.sh c0 -objectGridFile ../xml/SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
```

```
-serverProps ../security/server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
-Djava.security.policy="../security/og_auth.policy"
```

- Windows

```
startOgServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ..¥security¥server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
-Djava.security.policy="..¥security¥og_auth.policy"
```

- 8.6+ UNIX Linux

```
./startXsServer.sh c0 -objectGridFile ../xml/SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ../security/server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
-Djava.security.policy="../security/og_auth.policy"
```

- 8.6+ Windows

```
startXsServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml
-catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ..¥security¥server.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
-Djava.security.policy="..¥security¥og_auth.policy"
```

前のコンテナー・サーバー始動コマンドとの以下の違いに注意してください。

- SimpleApp.xml ファイルの代わりに、SecureSimpleApp.xml ファイルを使用します。
- 別の -Djava.security.policy 引数を追加して、JAAS 許可ポリシー・ファイルをコンテナー・サーバー・プロセスに設定します。

このチュートリアルの直前のステップで使用したのと同じコマンドを使用します。

a. bin ディレクトリーに移動します。

- UNIX Linux

```
java -classpath ../lib/objectgrid.jar:../applib/sec_sample.jar com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
../security/client.properties manager manager1
```

- Windows

```
java -classpath ..¥lib¥objectgrid.jar;..¥applib¥sec_sample.jar com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
 ..¥security¥client.properties manager manager1
```

b. ユーザー「manager」にはアカウンティング ObjectGrid のマップに対するすべての許可が付与されているため、アプリケーションは正しく実行されます。

次に、ユーザー「manager」を使用する代わりに、ユーザー「cashier」を使用して、クライアント・アプリケーションを開始します。

c. bin ディレクトリーに移動します。

- UNIX Linux

```
java -classpath ../lib/objectgrid.jar:../applib/sec_sample.jar com.ibm.ws.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
../security/client.properties cashier cashier1
```

- Windows

```
java -classpath ..¥lib¥objectgrid.jar;..¥applib¥sec_sample.jar com.ibm.ws.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
..¥security¥client.properties cashier cashier1
```

以下の例外が発生します。

```
Exception in thread "P=387313:O=0:CT" com.ibm.websphere.objectgrid.TransactionException:
rolling back transaction, see caused by exception
 at com.ibm.ws.objectgrid.SessionImpl.rollbackPMapChanges(SessionImpl.java:1422)
  at com.ibm.ws.objectgrid.SessionImpl.commit(SessionImpl.java:1149)
  at com.ibm.ws.objectgrid.SessionImpl.mapPostInvoke(SessionImpl.java:2260)
  at com.ibm.ws.objectgrid.ObjectMapImpl.update(ObjectMapImpl.java:1062)
  at com.ibm.ws.objectgrid.security.sample.guide.SimpleApp.run(SimpleApp.java:42)
 at com.ibm.ws.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp.main(SecureSimpleApp.java:27)
Caused by: com.ibm.websphere.objectgrid.ClientServerTransactionCallbackException:
   Client Services - received exception from remote server:
     com.ibm.websphere.objectgrid.TransactionException: transaction rolled back,
   see caused by Throwable
        at com.ibm.ws.objectgrid.client.RemoteTransactionCallbackImpl.processReadWriteResponse(
            RemoteTransactionCallbackImpl.java:1399)
        at com.ibm.ws.objectgrid.client.RemoteTransactionCallbackImpl.processReadWriteRequestAndResponse(
            RemoteTransactionCallbackImpl.java:2333)
        at com.ibm.ws.objectgrid.client.RemoteTransactionCallbackImpl.commit(RemoteTransactionCallbackImpl.java:557)
        at com.ibm.ws.objectgrid.SessionImpl.commit(SessionImpl.java:1079)
        ... 4 more
Caused by: com.ibm.websphere.objectgrid.TransactionException: transaction rolled back, see caused by Throwable
        at com.ibm.ws.objectgrid.ServerCoreEventProcessor.processLogSequence(ServerCoreEventProcessor.java:1133)
        at com.ibm.ws.objectgrid.ServerCoreEventProcessor.processReadWriteTransactionRequest
     (ServerCoreEventProcessor.java:910)
        at com.ibm.ws.objectgrid.ServerCoreEventProcessor.processClientServerRequest(ServerCoreEventProcessor.java:1285)

        at com.ibm.ws.objectgrid.ShardImpl.processMessage(ShardImpl.java:515)
        at com.ibm.ws.objectgrid.partition.IDLShardPOA._invoke(IDLShardPOA.java:154)
        at com.ibm.CORBA.poa.POAServerDelegate.dispatchToServant(POAServerDelegate.java:396)
        at com.ibm.CORBA.poa.POAServerDelegate.internalDispatch(POAServerDelegate.java:331)
        at com.ibm.CORBA.poa.POAServerDelegate.dispatch(POAServerDelegate.java:253)
        at com.ibm.rmi.iiop.ORB.process(ORB.java:503)
        at com.ibm.CORBA.iiop.ORB.process(ORB.java:1553)
        at com.ibm.rmi.iiop.Connection.respondTo(Connection.java:2680)
        at com.ibm.rmi.iiop.Connection.doWork(Connection.java:2554)
        at com.ibm.rmi.iiop.WorkUnitImpl.doWork(WorkUnitImpl.java:62)
        at com.ibm.rmi.iiop.WorkerThread.run(ThreadPoolImpl.java:202)
        at java.lang.Thread.run(Thread.java:803)
Caused by: java.security.AccessControlException: Access denied (
   com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission accounting.customer write)
        at java.security.AccessControlContext.checkPermission(AccessControlContext.java:155)
        at com.ibm.ws.objectgrid.security.MapPermissionCheckAction.run(MapPermissionCheckAction.java:141)
        at java.security.AccessController.doPrivileged(AccessController.java:275)
        at javax.security.auth.Subject.doAsPrivileged(Subject.java:727)
        at com.ibm.ws.objectgrid.security.MapAuthorizer$1.run(MapAuthorizer.java:76)
        java.security.AccessController.doPrivileged(AccessController.java:242)
        at com.ibm.ws.objectgrid.security.MapAuthorizer.check(MapAuthorizer.java:66)
        at com.ibm.ws.objectgrid.security.SecuredObjectMapImpl.checkMapAuthorization(SecuredObjectMapImpl.java:429)
        at com.ibm.ws.objectgrid.security.SecuredObjectMapImpl.update(SecuredObjectMapImpl.java:490)
        at com.ibm.ws.objectgrid.SessionImpl.processLogSequence(SessionImpl.java:1913)
        at com.ibm.ws.objectgrid.SessionImpl.processLogSequence(SessionImpl.java:1805)
        at com.ibm.ws.objectgrid.ServerCoreEventProcessor.processLogSequence(ServerCoreEventProcessor.java:1011)
        ... 14 more
```

この例外は、ユーザー「cashier」に書き込み許可が付与されていないため、map customer を更新できないことが原因です。

これで、システムは許可をサポートするようになりました。許可ポリシーを定義して、ユーザーごとに各種の許可を付与することができます。許可について詳しくは、844 ページの『アプリケーション・クライアントの許可』を参照してください。

次のタスク

チュートリアルの次のステップを完了します。『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 6』を参照してください。

Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 6

以下のステップでは、ご使用環境のエンドポイント間の通信にセキュリティー層を使用可能にする方法について説明します。

始める前に

このタスクを続行する前に 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』 を完了している必要があります。

このタスクについて

eXtreme Scale トポロジーは、ObjectGrid エンドポイント (クライアント、コンテナー・サーバー、およびカタログ・サーバー) 間のセキュア通信のために Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) をサポートします。このチュートリアル・ステップでは、それ以前のステップに基づいてトランスポート・セキュリティーを使用可能にします。

手順

1. **TLS/SSL 鍵および鍵ストアの作成**

   トランスポート・セキュリティーを使用可能にするためには、鍵ストアとトラストストアを作成する必要があります。この練習課題では、鍵ストアとトラストストアのペアのみを作成します。これらのストアは ObjectGrid クライアント、コンテナー・サーバー、およびカタログ・サーバーのために使用されるもので、JDK 鍵ツールを使用して作成されます。

   - *鍵ストアに秘密鍵を作成します*

     ```
     keytool -genkey -alias ogsample -keystore key.jks -storetype JKS
     -keyalg rsa -dname "CN=ogsample, OU=OGSample, O=acme, L=Your City,
     S=Your State, C=Your Country" -storepass ogpass -keypass ogpass
     -validity 3650
     ```

     このコマンドを使用すると、「ogsample」という鍵を含む鍵ストア key.jks が作成されます。この鍵ストア key.jks は SSL 鍵ストアとして使用されます。

   - *パブリック証明書をエクスポートします*

     ```
     keytool -export -alias ogsample -keystore key.jks -file temp.key
     -storepass ogpass
     ```

     このコマンドを使用すると、「ogsample」という鍵の公開証明書が抽出されて、ファイル temp.key に格納されます。

   - *クライアントのパブリック証明書をトラストストアにインポートします*

     ```
     keytool -import -noprompt -alias ogsamplepublic -keystore trust.jks
     -file temp.key -storepass ogpass
     ```

このコマンドを使用すると、パブリック証明書が鍵ストア trust.jks に追加されます。この trust.jks は SSL トラストストアとして使用されます。

2. **ObjectGrid プロパティー・ファイルを構成します**

   このステップでは、トランスポート・セキュリティーを使用可能にするように ObjectGrid プロパティー・ファイルを構成する必要があります。

   まず、key.jks ファイルと trust.jks ファイルを objectgridRoot/security ディレクトリーにコピーします。

   client.properties および server.properties ファイルで以下のプロパティーを設定します。

   ```
   transportType=SSL-Required

   alias=ogsample
   contextProvider=IBMJSSE2
   protocol=SSL
   keyStoreType=JKS
   keyStore=../security/key.jks
   keyStorePassword=ogpass
   trustStoreType=JKS
   trustStore=../security/trust.jks
   trustStorePassword=ogpass
   ```

   transportType: transportType の値は「SSL-Required」に設定されます。つまり、トランスポートに SSL が必要となります。したがって、すべての ObjectGrid エンドポイント (クライアント、カタログ・サーバー、およびコンテナー・サーバー) で SSL 構成が設定され、すべてのトランスポート通信が暗号化されます。

   その他のプロパティーは SSL 構成を設定するために使用されます。詳しくは、855 ページの『トランスポート層セキュリティーおよび Secure Sockets Layer』を参照してください。必ずこのトピックの説明に従って、orb.properties ファイルを更新してください。

   必ずこのページに従って、orb.properties ファイルを更新してください。

   server.properties ファイルでは、別のプロパティー clientAuthentication を追加し、それを false に設定する必要があります。サーバー・サイドでは、クライアントを信頼する必要はありません。

   ```
   clientAuthentication=false
   ```

3. **アプリケーションの実行**

   使用するコマンドは 27 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 3』トピックのコマンドと同じです。

   以下のコマンドを使用してカタログ・サーバーを始動します。

   a. bin ディレクトリーに移動します。cd objectgridRoot/bin

   b. カタログ・サーバーを始動します。

   - Linux UNIX

     ```
     ./startOgServer.sh catalogServer -clusterSecurityFile ../security/security.xml
     -serverProps ../security/server.properties -JMXServicePort 11001
     -jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
     ```

- Windows

```
startOgServer.bat catalogServer -clusterSecurityFile ..¥security¥security.xml
-serverProps ..¥security¥server.properties -JMXServicePort 11001 -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

- Linux UNIX 8.6+

```
./startXsServer.sh catalogServer -clusterSecurityFile ../security/security.xml
-serverProps ../security/server.properties -JMXServicePort 11001
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
```

- Windows 8.6+

```
startXsServer.bat catalogServer -clusterSecurityFile ..¥security¥security.xml
-serverProps ..¥security¥server.properties -JMXServicePort 11001 -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
```

security.xml ファイルおよび server.properties ファイルは、 25 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 2』で作成されています。

-JMXServicePort オプションを使用して、サーバーの JMX ポートを明示的に指定してください。このオプションは、**xscmd** ユーティリティーを使用するために必要です。

セキュア ObjectGrid コンテナー・サーバーを実行します。

c. 再度、bin ディレクトリーに移動します。cd objectgridRoot/bin

d.

- Linux UNIX

```
./startOgServer.sh c0 -objectGridFile ../xml/SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints
localhost:2809 -serverProps ../security/server.properties
-JMXServicePort 11002 -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
-Djava.security.policy="../security/og_auth.policy"
```

- Windows

```
startOgServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ..¥security¥server.properties -JMXServicePort 11002
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
-Djava.security.policy="..¥security¥og_auth.policy"
```

- Linux UNIX 8.6+

```
./startXsServer.sh c0 -objectGridFile ../xml/SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints
localhost:2809 -serverProps ../security/server.properties
-JMXServicePort 11002 -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
-Djava.security.policy="../security/og_auth.policy"
```

- Windows 8.6+

```
startXsServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml¥SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ..¥security¥server.properties -JMXServicePort 11002
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
-Djava.security.policy="..¥security¥og_auth.policy"
```

前のコンテナー・サーバー始動コマンドとの以下の違いに注意してください。

- SimpleApp.xml ファイルではなく、SecureSimpleApp.xml ファイルを使用します。
- 別の -Djava.security.policy を追加して、JAAS 許可ポリシー・ファイルをコンテナー・サーバー・プロセスに設定します。

クライアント認証のために次のコマンドを実行します。

a. `cd objectgridRoot/bin`

- UNIX Linux

```
javaHome/java -classpath ../lib/objectgrid.jar:../applib/sec_sample.jar
com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
../security/client.properties manager manager1
```

- Windows

```
javaHome¥java -classpath ..¥lib¥objectgrid.jar;..¥applib¥sec_sample.jar
com.ibm.websphere.objectgrid.security.sample.guide.SecureSimpleApp
..¥security¥client.properties manager manager1
```

b. ユーザー「manager」にはアカウンティング ObjectGrid のすべてのマップに対する許可が付与されているため、アプリケーションは正常に実行されます。

xscmd ユーティリティーを使用して「accounting」グリッドのマップ・サイズを表示できます。

- ディレクトリー `objectgridRoot/bin` に移動します。
- **xscmd** コマンドを使用して、マップ・サイズを表示します。

_ UNIX Linux

```
./xscmd.sh -c showMapsizes -g accounting -m customer -prot SSL
-ts ../security/trust.jks -tsp ogpass -tst jks
-user manager -pwd manager1 -ks ../security/key.jks -ksp ogpass -kst JKS
-cxpv IBMJSSE2 -tt SSL-Required
```

_ Windows

```
xscmd.bat -c showMapsizes -g accounting -m customer -prot SSL
-ts ..¥security¥trust.jks -tsp ogpass -tst jks
-user manager -pwd manager1 -ks ..¥security¥key.jks -ksp ogpass -kst JKS
-cxpv IBMJSSE2 -tt SSL-Required
```

ここで、-p 11001 を使用してカタログ・サービスの JMX ポートを指定することに注意してください。

以下の出力が表示されます。

```
This administrative utility is provided as a sample only and is not to
be considered a fully supported component of the WebSphere eXtreme Scale product.
Connecting to Catalog service at localhost:1099
********** Displaying Results for Grid - accounting, MapSet - customer **********
*** Listing Maps for c0 ***
Map Name: customer Partition #: 0 Map Size: 1 Shard Type: Primary
Server Total: 1
Total Domain Count: 1
```

間違った鍵ストアを使用したアプリケーションの実行

鍵ストア内の秘密鍵の公開証明書がトラストストアに含まれていない場合は、鍵を信頼できない例外が発生します。

この例外を表示するには、別の鍵ストア `key2.jks` を作成します。

```
keytool -genkey -alias ogsample -keystore key2.jks -storetype JKS
-keyalg rsa -dname "CN=ogsample, OU=Your Organizational Unit, O=Your
Organization, L=Your City, S=Your State, C=Your Country" -storepass
ogpass -keypass ogpass -validity 3650
```

次に、server.properties ファイルを変更して、以下のように keyStore がこの新規鍵ストア key2.jks を指すようにします。

```
keyStore=../security/key2.jks
```

次のコマンドを実行してカタログ・サーバーを始動します。

a. bin ディレクトリーに移動します。cd objectgridRoot/bin

b. カタログ・サーバーを始動します。

- Linux UNIX

```
./startOgServer.sh c0 -objectGridFile ../xml/SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ../security/server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
-Djava.security.policy="../security/og_auth.policy"
```

- Windows

```
startOgServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml/SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints localhost:2809
 -serverProps ..¥security¥server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
-Djava.security.policy="..¥security¥og_auth.policy"
```

- 8.6+

  Linux UNIX

```
./startXsServer.sh c0 -objectGridFile ../xml/SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ../xml/SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints localhost:2809
-serverProps ../security/server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="../security/og_jaas.config"
-Djava.security.policy="../security/og_auth.policy"
```

- 8.6+

  Windows

```
startXsServer.bat c0 -objectGridFile ..¥xml¥SecureSimpleApp.xml
-deploymentPolicyFile ..¥xml/SimpleDP.xml -catalogServiceEndPoints localhost:2809
 -serverProps ..¥security¥server.properties -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="..¥security¥og_jaas.config"
-Djava.security.policy="..¥security¥og_auth.policy"
```

次の例外が表示されます。

```
Caused by: com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRPCException:
    com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException:
        SSL connection fails and plain socket cannot be used.
```

最後に、key.jks ファイルを使用するように server.properties ファイルを元に戻します。

チュートリアル: Liberty プロファイルでの eXtreme Scale クライアントおよびサーバーの実行

WebSphere Application Server で提供される Liberty プロファイルで、クライアントとして WebSphere eXtreme Scale を実行できます。

学習目標

このチュートリアルでは、以下の学習目標を達成することが期待されます。

- Liberty プロファイルのインストール

- Liberty の Web アプリケーション・サーバーの作成
- Web アプリケーションへの Web フィーチャーの追加
- Liberty プロファイルでクライアント API を使用するためのクライアントの構成
- Liberty プロファイル内でのデータ・グリッドの実行

所要時間

このチュートリアルの所要時間は約 60 分です。このチュートリアルに関連して他の概念も調べる場合は、さらに時間がかかります。

前提条件

このチュートリアルを完了するには、以下の製品をインストールする必要があります。

- IBM® Installation Manager
- WebSphere eXtreme Scale

Liberty プロファイル

Liberty プロファイルは、高度に構成可能で、迅速に開始し、かつ動的なアプリケーション・サーバー・ランタイム環境です。

Liberty プロファイルのインストールは、WebSphere eXtreme Scale を WebSphere Application Server バージョン 8.5 と一緒にインストールするときに行います。Liberty プロファイルは Java ランタイム環境 (JRE) を含んでいないため、Oracle または IBM のいずれかが提供する JRE をインストールする必要があります。

サポートされる Java 環境およびロケーションについて詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの最小サポート Java レベルを参照してください。

このサーバーは、次に示すアプリケーション・デプロイメントの 2 つのモデルをサポートします。

- アプリケーションを、`dropins` ディレクトリーにドロップすることによってデプロイする。
- アプリケーションを、サーバー構成に追加することによってデプロイする。

Liberty プロファイルは、完全な WebSphere Application Server プログラミング・モデルの以下の部分のサブセットをサポートします。

- Web アプリケーション
- OSGi アプリケーション
- Java Persistence API (JPA)

トランザクションやセキュリティーなどの関連サービスは、これらのアプリケーション・タイプと JPA が必要とする限りにおいてのみサポートされます。

フィーチャーは機能の単位であり、フィーチャーによって、特定のサーバーにロードされるランタイム環境の部分を制御します。 Liberty プロファイルには以下の主要フィーチャーが含まれています。

- Bean Validation

- Blueprint
- Java API for RESTful Web Services
- Java Database Connectivity (JDBC)
- Java Naming and Directory Interface
- Java Persistence API (JPA)
- JavaServer Faces (JSF)
- JavaServer Pages (JSP)
- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)
- ローカル・コネクター (Java Management Extensions (JMX) クライアント用)
- モニター
- OSGi JPA (OSGi アプリケーション用の JPA サポート)
- リモート・コネクター (JMX クライアント用)
- Secure Sockets Layer (SSL)
- セキュリティー
- サーブレット
- セッション・パーシスタンス
- トランザクション
- Web アプリケーション・バンドル (WAB)
- z/OS® セキュリティー
- z/OS トランザクション管理
- z/OS ワークロード管理

ランタイム環境を使用した作業は、直接行うこともできれば、WebSphere Application Server Developer Tools for Eclipse を使用して行うこともできます。

分散プラットフォームでは、Liberty プロファイルは開発環境と運用環境の両方を提供します。 Mac では、開発環境を提供します。

z/OS システムでは、Liberty プロファイルは運用環境を提供します。この環境に関するネイティブでの作業は、MVS™ コンソールを使用して行うことができます。アプリケーション開発の場合は、別の分散システム、Mac OS、または z/OS 上の Linux シェルで Eclipse ベースの開発者ツールを使用することを検討してください。

サード・パーティー JRE を使用した Liberty プロファイルの実行

Oracle が提供する JRE を使用する際、Liberty プロファイルによって WebSphere eXtreme Scale を実行するためには特別な考慮が必要です。

クラス・ローダー・デッドロック

次の JVM_ARGS 設定を使用して回避されたクラス・ローダー・デッドロックが発生する場合があります。 BundleLoader ロジックでデッドロックが発生した場合は、以下の引数を追加してください。

```
export JVM_ARGS="$JVM_ARGS -XX:+UnlockDiagnosticVMOptions -XX:+UnsyncloadClass"
```

IBM ORB

WebSphere eXtreme Scale では、IBM ORB を使用する必要があります。この ORB は WebSphere Application Server インストールに含まれていますが、Liberty プロファイルにはありません。 IBM ORB Java アーカイブ (JAR) ファイルが含まれているディレクトリーを追加するように、Java システム・プロパティー `java.endorsed.dirs` を使用して承認済みディレクトリーを設定する必要があります。 IBM ORB JAR ファイルは、eXtreme Scale インストール済み環境の `wlp¥wxs¥lib¥endorsed` ディレクトリー内に含まれています。

関連資料:

Liberty プロファイル・サーバー・プロパティー
サーバー・プロパティー・ファイルにあるオプションを使用して、Liberty プロファイルで稼働する WebSphere eXtreme Scale サーバーを構成します。

関連情報:

50 ページの『レッスン 5.1: Liberty プロファイルを使用するための eXtreme Scale サーバーの構成』
データ・グリッドを Liberty プロファイルで実行するには、サーバー・フィーチャーを追加して、Liberty プロファイル構成ファイルを使用する WebSphere eXtreme Scale サーバーを構成する必要があります。

モジュール 1: Liberty プロファイルのインストール

Liberty プロファイルを取得するために、WebSphere Application Server バージョン 8.5 をインストールする必要があります。

Liberty プロファイルをインストールするには、IBM Installation Manager を使用して、WebSphere eXtreme Scale とともに WebSphere Application Server バージョン 8.5 をインストールする必要があります。あるいは、提供されている JAR ファイルを実行して Liberty プロファイルをインストールすることもできます。Liberty プロファイル アプリケーション・サービス環境および組み込まれる JAR ファイルを WASdev コミュニティーのダウンロード・ページからダウンロードしてインストールできます。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- Liberty プロファイルをインストールします。

前提条件

WebSphere eXtreme Scale をインストールします。

モジュール 2: Liberty プロファイルの Web アプリケーション・サーバーの作成

サーバー・ディレクトリーおよび `server.xml` ファイルを作成して、Liberty プロファイル用のサーバー定義を作成する必要があります。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- Liberty プロファイルで実行するサーバーを定義します。

前提条件

このモジュールを実行するには、Liberty プロファイルをインストールする必要があります。

レッスン 2.1: Liberty プロファイルで実行するためのサーバーの定義

Liberty プロファイルで実行するために、サーバー・ディレクトリーおよびサーバー定義ファイルを作成します。

Web アプリケーション・サーバーのサーバー定義を作成するには、`bin` ディレクトリーから以下のコマンドを入力します。

```
wlp_home/bin/server create your_server_name
```

サーバー定義ファイルが作成されていることを確認するために、*wlp_home*`/usr/servers/`*your_server_name* ディレクトリーで XML ファイルを検索します。

`server.xml` ファイルはサーバー定義内にあります。エディターでこのファイルを開きます。コメントされたフィーチャー・マネージャー・スタンザが `server.xml` 内に存在します。次のモジュールでは、サーバー定義のこのスタンザに Web フィーチャーを追加します。

モジュール 3: Liberty プロファイルへの Liberty Web フィーチャーの追加

Web フィーチャーをサーバー定義に追加して、Web ベース・アプリケーションを識別し、セッション複製などの昨日を追加します。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- Liberty プロファイルで実行する Web アプリケーションを定義します。

前提条件

このモジュールを実行するには、まず以下のモジュールを実行する必要があります。

- Liberty プロファイルのインストール
- Liberty プロファイルの Web アプリケーション・サーバーの作成

.

レッスン 3.1: Liberty プロファイルで実行するための Web アプリケーションの定義

Web フィーチャーをサーバー定義に定義して、アプリケーション機能 (セッション複製など) を使用可能にします。

 Web フィーチャーは推奨されません。フォールト・トレランスのために HTTP セッション・データを複製するときは、webApp フィーチャーを使用してください。

server.xml ファイルの xsWebApp エレメントで設定できるメタ・タイプ・プロパティーが webApp フィーチャーには含まれています。詳しくは、 229 ページの『Liberty プロファイルでの eXtreme Scale webApp フィーチャーの使用可能化』を参照してください

以下の Web フィーチャーを Liberty プロファイル server.xml ファイルに追加します。 Web フィーチャーには、クライアント・フィーチャーが含まれていますが、サーバー・フィーチャーは含まれていません。恐らく、Web アプリケーションはデータ・グリッドから分離する必要があります。例えば、Web アプリケーション用に 1 つの Liberty プロファイル サーバーを使用し、データ・グリッドをホストするために別の Liberty プロファイル サーバーを使用します。

```
<featureManager>
<feature>eXtremeScale_web-1.0</feature>
</featureManager>
```

Web アプリケーションは、WebSphere eXtreme Scale グリッドにセッション・データを永続化できるようになりました。

server.xml ファイルの以下の例を参照してください。これには、データ・グリッドにリモート側で接続する場合に使用する Web フィーチャーが含まれています。

```
<server description="Airport Entry eXtremeScale Getting Started Client Web Server">
<!--
 This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
 without royalty payment by customer
 (a) for its own instruction and study,
 (b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
 either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
 application, in customer's own products.
 Licensed Materials - Property of IBM
 5724-X67, 5655-V66 (C) COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2012
-->
    <!-- Enable features -->
    <featureManager>
        <feature>servlet-3.0</feature>
        <feature>jsp-2.2</feature>
        <feature>eXtremeScale.web-1.1</feature>
    </featureManager>

    <httpEndpoint id="defaultHttpEndpoint"
        host="*"
        httpPort="${default.http.port}"
        httpsPort="${default.https.port}" />

     <xsWebAppV85 objectGridType="REMOTE" objectGridName="session" catalogHostPort="remoteHost:2809" securityEnabled="false" />

</server>
```

モジュール 4: Liberty プロファイルでクライアント API を使用するためのクライアントの構成

Liberty プロファイルで実行するように WebSphere eXtreme Scale クライアントを構成できます。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- eXtreme Scale クライアントで実行するための Liberty プロファイルの構成.

前提条件

このモジュールを実行するには、まず以下のモジュールを実行する必要があります。

- Liberty プロファイルのインストール
- Liberty プロファイルの Web アプリケーション・サーバーの作成
- Web アプリケーションへの Liberty Web フィーチャーの追加

レッスン 4.1: eXtreme Scale クライアントで実行するための Liberty プロファイルの構成

WebSphere eXtreme Scale クライアント・フィーチャーを使用して、eXtreme Scale クライアントで Liberty プロファイルを実行します。

この構成では、クライアント機能のみが提供されます。このアプリケーションでは、サーバー機能は別のプロセスで実行されます。クライアント・フィーチャーを追加すると、アプリケーションは eXtreme Scale API にアクセスでき、またリモート・グリッドに接続できます。

このクライアント構成により、eXtreme Scale データ・グリッドを使用して Web アプリケーションの単体テストを行なうために必要な機能が組み込まれた単一のプロセスが提供されます。クライアント・フィーチャーを追加した場合、構成をグリッド・ディレクトリーにデプロイすると、カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーが始動されます。また、クライアント・フィーチャーの追加後は、アプリケーションは eXtreme Scale API に書き込むことができます。

1. クライアント・フィーチャーを Liberty サーバーに追加します。 以下のコードを Liberty サーバーに追加します。 8.6+

```
<server description="eXtreme Scale Container Server">

<featureManager>
<feature>eXtremeScale.client-1.1</feature>
</featureManager>


</server>
```

2. (オプション) あるいは、eXtreme Scale サーバー・フィーチャーを使用して、クライアント構成を参照できます。 以下のサーバー構成を追加すると、クライアント機能が自動的に組み込まれます。 8.6+

```
<server description="eXtreme Scale Container Server">

<featureManager>
```

```
<feature>eXtremeScale.server-1.1</feature>
</featureManager>


</server>
```

3. (オプション) クライアントのセキュリティーを構成するには、client.xml ファイルを使用して、すべてのセキュリティー設定が含まれたサーバー・プロパティー・ファイルのパスを指定します。 詳しくは、『カタログ・サービス・ドメインのクライアント・セキュリティーの構成』を参照してください。

クライアント・フィーチャーを Liberty サーバーに追加することで、Liberty プロファイルが構成されました。

モジュール 5: Liberty プロファイル内でのデータ・グリッドの実行

クライアントとサーバーの構成を Liberty プロファイルに追加すると、Liberty プロファイルで WebSphere eXtreme Scale を実行できます。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業を行う方法が分かります。

- Liberty プロファイルを使用するように eXtreme Scale サーバーを構成します。
- セッション複製に eXtreme Scale を使用するように Liberty プロファイル Web アプリケーション・サーバーを構成します。

前提条件

このモジュールを実行するには、このチュートリアルの以下のモジュールを完了する必要があります。

- Liberty プロファイルのインストール
- Liberty の Web アプリケーション・サーバーの作成
- Web アプリケーションへの Liberty プロファイル Web フィーチャーの追加
- Liberty プロファイルでクライアント API を使用するためのクライアントの構成

レッスン 5.1: Liberty プロファイルを使用するための eXtreme Scale サーバーの構成

データ・グリッドを Liberty プロファイルで実行するには、サーバー・フィーチャーを追加して、Liberty プロファイル構成ファイルを使用する WebSphere eXtreme Scale サーバーを構成する必要があります。

1. server.xml ファイル内の以下の属性を使用して、カタログ・サーバーをデフォルト設定で構成します。このファイルは、eXtreme Scale にカタログ・サーバーの作成と始動を指示するものです。

```
<server description="eXtreme Scale Catalog Server with default settings">

    <!-- Enable features -->
    <featureManager>
        <feature>eXtremeScale.server-1.1</feature>
    </featureManager>

    <xsServer isCatalog="true" listenerPort="${com.ibm.ws.xs.server.listenerPort}" />
```

```
    <logging traceSpecification="*=info" maxFileSize="200" maxFiles="10" />

</server>
```

listenerPort エレメントが server.xml の中で参照されていることに注意してください。ただし、この値は、bootstrap.properties ファイルの中で構成します。同一の構成で実行される複数のプロセスが server.xml ファイルを共有しながら、それでもなお固有の設定を保持できるように、ポート番号などのエレメントを server.xml ファイルから切り離すことが役立つことがあります。

2. bootstrap.properties ファイル内の listenerPort 属性を構成します。

   前の例では、Liberty プロファイル構成にトレースが指定されていて、listenerPort 属性は変数を指定しています。この変数は、サーバー構成ディレクトリー *wlp_install_root*/usr/server/serverName の bootstrap.properties ファイルの中で構成されます。次の bootstrap.properties ファイルの例を参照してください。

```
# Licensed Materials - Property of IBM
#
# "Restricted Materials of IBM"
#
# Copyright IBM Corp. 2011 All Rights Reserved.
#
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or
# disclosure restricted by GSA ADP Schedule Contract with
# IBM Corp.
#
# ------------------------------------------------------------------
#
# port for the OSGi console
# osgi.console=5678

com.ibm.ws.xs.server.listenerPort=2809
```

   この例では、osgi.console ポートがコメント化されています。つまり、Liberty プロファイルは、指定されたポートで、Telnet クライアントが OSGi コンソールに接続するのを listen します。この振る舞いは、OSGi 関連のエラーの診断に役に立ちます。

3. スタンドアロン・サーバー構成に使用するのと同じ構成を使用して、server.xml ファイルを構成します。 server.xml ファイルの中で、com.ibm.ws.xs.server.config エレメント内の serverProps 属性で、プロパティー・ファイルへのファイル・パスを指定します。server.xml ファイルの次の例を参照してください。

```
<server>
...
<com.ibm.ws.xs.server.config ... serverProps="/path/to/myServerProps.properties" ... />
</server>
```

   制約事項: Liberty 構成モデルでは、プロパティーの指定方法に制約があります。したがって、次のプロパティーが必要な場合は、サーバー・プロパティー・ファイルの中で指定する必要があります。

   foreignDomain.**endpoints**
   マルチマスター・レプリカ生成トポロジー内のリンク先のカタログ・サービス・ドメインの名前を指定します。

xioChannel.**xioContainerTCPNonSecure.Port**
サーバー上の eXtremeIO の非セキュア・リスナー・ポート番号を指定します。値を設定しなければ、一時ポートが使用されます。transportType プロパティーが TCP/IP. xioChannel.xioContainerTCPSecure.Port に設定されている場合のみこのプロパティーが使用されます。

以前はスタンドアロン環境で構成できたプロパティーのいくつかは、eXtreme Scale 構成メカニズムではなく、Liberty プロファイル構成を使用して構成しなければなりません。

- ロギングおよびトレースの設定は、eXtreme Scale サーバー・プロパティー・ファイルの中や com.ibm.ws.xs.server.config エレメントで指定するのではなく、server.xml ファイルの中のロギング・エレメントを使用して指定する必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『Liberty プロファイル: トレースおよびロギング』を参照してください。
- ロギングやトレースのような作業ディレクトリーは、サーバー全体に及ぶ設定です。したがって、これらはサーバー全体に及ぶ方法で指定する必要があります。

以前の設定が正しく指定されていない場合、eXtreme Scale は、設定が無視されることを示す警告メッセージをログに記録します。

4. (オプション) サーバーでセキュリティーを構成するには、server.xml ファイルを使用して、すべてのセキュリティー設定が含まれたサーバー・プロパティー・ファイルのパスを指定します。 WebSphere eXtreme Scale が WebSphere Application Server 環境にデプロイされている場合、WebSphere Application Server からの認証フローおよびトランスポート層セキュリティー構成を簡略化できます。詳しくは、『WebSphere Application Server とのセキュリティー統合』を参照してください。

eXtreme Scale サーバーは、Liberty プロファイルで実行する準備ができました。

関連概念:

44 ページの『Liberty プロファイル』
Liberty プロファイルは、高度に構成可能で、迅速に開始し、かつ動的なアプリケーション・サーバー・ランタイム環境です。

関連資料:

Liberty プロファイル・サーバー・プロパティー
サーバー・プロパティー・ファイルにあるオプションを使用して、Liberty プロファイルで稼働する WebSphere eXtreme Scale サーバーを構成します。

レッスン 5.2: セッション複製に eXtreme Scale を使用するための Liberty プロファイル Web アプリケーション・サーバーの構成

Web サーバーがセッション複製の HTTP 要求を受け取った場合に、Liberty プロファイルにその要求を転送するように、Web アプリケーション・サーバーを構成できます。

Liberty プロファイルには、セッション複製は含まれていません。ただし、Liberty プロファイルとともに WebSphere eXtreme Scale を使用した場合は、セッションを

複製できます。これにより、サーバーで障害が発生した場合に、アプリケーション・ユーザーのセッション・データは失われません。

サーバー定義に webapp フィーチャー を追加してセッション・マネージャーを構成した後、 Liberty プロファイル内で実行される eXtreme Scale アプリケーションでセッション複製を使用できます。

1. Liberty プロファイルで HTTP セッション機能を使用可能にします。
2. Liberty server.xml ファイルで固有のクローン ID を構成します。
3. アプリケーション・サーバー・プラグインにデプロイするためにプラグイン構成ファイルを生成してマージします。

Liberty プロファイルで実行される eXtreme Scale アプリケーションで、セッション複製が使用可能になりました。

チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合

このチュートリアルでは、WebSphere Application Server 環境で WebSphere eXtreme Scale サーバー・デプロイメントを保護する方法について説明します。

学習目標

このチュートリアルの学習目標は次のとおりです。

- WebSphere Application Server 認証プラグインを使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成
- WebSphere Application Server CSIv2 構成を使用するための WebSphere eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーの構成
- WebSphere Application Server での Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可の使用
- グループ・ベースの JAAS 許可のカスタム・ログイン・モジュールの使用
- WebSphere Application Server 環境での WebSphere eXtreme Scale **xscmd** ユーティリティーの使用

所要時間

このチュートリアルは、開始してから終了するまで約 4 時間かかります。

概要: WebSphere Application Server 認証プラグインを使用した、WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合

このチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを WebSphere Application Server と統合します。まず、現行スレッドからの認証ユーザー資格情報を使用して ObjectGrid に接続する単純な Web アプリケーションの認証を構成します。次に、Transport Layer Security でクライアントとサーバー間を転送されるデータの暗号化を詳細に調べます。ユーザーにさまざまなレベルの許可を与えるために、Java 認証・承認サービス (JAAS) を構成できます。構成が終了すると、**xscmd** ユーティリティーを使用して、データ・グリッドとマップをモニターできます。

このチュートリアルでは、すべての WebSphere eXtreme Scale クライアント、コンテナー・サーバー、およびカタログ・サーバーは、WebSphere Application Server 環境にデプロイされていると想定しています。

学習目標

このチュートリアルの学習目標は次のとおりです。

- WebSphere Application Server 認証プラグインを使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成
- WebSphere Application Server CSIv2 構成を使用するための WebSphere eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーの構成
- WebSphere Application Server での Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可の使用
- グループ・ベースの JAAS 許可のカスタム・ログイン・モジュールの使用
- WebSphere Application Server 環境での WebSphere eXtreme Scale **xscmd** ユーティリティーの使用

所要時間

このチュートリアルは、開始してから終了するまで約 4 時間かかります。

スキル・レベル

中級。

対象者

WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server の間のセキュリティーの統合に関心のある開発者および管理者。

システム要件およびトポロジー

- WebSphere Application Server バージョン 7.0.0.11 以降
- 次のフィックスを適用して、Java ランタイムを更新してください。IZ79819: IBMJDK FAILS TO READ PRINCIPAL STATEMENT WITH WHITESPACE FROM SECURITY FILE

このチュートリアルでは、4 つのアプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server) と 1 つのデプロイメント・マネージャーを使用してサンプル・デモを行います。

前提条件

このチュートリアルを開始するにあたって、次の項目についての基本的な知識があると便利です。

- WebSphere eXtreme Scale プログラミング・モデル
- 基本的な WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの概念
- 基本的な WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの概念

WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server のセキュリティー統合のバックグラウンド情報については、865 ページの『WebSphere Application Server とのセキュリティー統合』を参照してください。

関連概念:

335 ページの『セキュリティーの概要』
WebSphere eXtreme Scale はデータ・アクセスを保護し、外部セキュリティー・プロバイダーと統合することができます。

関連情報:

WebSphere Application Server: アプリケーションとその環境の保護

モジュール 1: WebSphere Application Server の準備

WebSphere eXtreme Scale との統合を行うチュートリアルを開始する前に、WebSphere Application Server に基本セキュリティー構成を作成する必要があります。

学習目標

このモジュールのレッスンでは、以下の方法について学習します。

- ユーザー・アカウント・レジストリーとして内部ファイル・ベースの統合リポジトリーを使用するための、WebSphere Application Server セキュリティーの構成。
- ユーザー・グループおよびユーザーの作成。
- アプリケーションおよび WebSphere eXtreme Scale サーバー用のクラスターの作成。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

レッスン 1.1: トポロジーの理解とチュートリアル・ファイルの入手

チュートリアル用の環境を準備するには、WebSphere Application Server セキュリティーを構成する必要があります。ユーザー・アカウント・レジストリーとして内部ファイル・ベースの統合リポジトリーを使用して、管理およびアプリケーション・セキュリティーを構成します。

このレッスンでは、チュートリアルで使用するサンプル・トポロジーとアプリケーションを紹介します。チュートリアルの実行を開始するには、アプリケーションをダウンロードし、環境内の正しい場所に構成ファイルを配置する必要があります。サンプル・アプリケーションは WebSphere eXtreme Scale wiki からダウンロードできます。

WebSphere Application Server サンプル・トポロジー: このチュートリアルでは、セキュリティーを使用可能に設定したサンプル・アプリケーションを使用してデモンストレーションする 4 つの WebSphere Application Server アプリケーション・サーバーを作成します。これらのアプリケーション・サーバーは、それぞれ 2 つのサーバーが入った、2 つのクラスターにグループ化されます。

- **appCluster クラスター**: EmployeeManagement サンプル・エンタープライズ・アプリケーションをホストします。このクラスターには、s1 と s2 の 2 つのアプリケーション・サーバーがあります。

- **xsCluster クラスター**: eXtreme Scale コンテナー・サーバーをホストします。このクラスターには、xs1 と xs2 の 2 つのアプリケーション・サーバーがあります。

このデプロイメント・トポロジーでは、s1 および s2 のアプリケーション・サーバーは、データ・グリッドに保管されたデータにアクセスするクライアント・サーバーです。xs1 サーバーと xs2 サーバーは、データ・グリッドをホストするコンテナー・サーバーです。

デフォルトでは、カタログ・サーバーがデプロイメント・マネージャー・プロセスでデプロイされます。このチュートリアルは、デフォルトの振る舞いを使用します。デプロイメント・マネージャー内でカタログ・サーバーをホストすることは、実稼働環境ではお勧めしません。実稼働環境では、カタログ・サーバーの始動場所を定義するカタログ・サービス・ドメインを作成する必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server でのカタログ・サービス・ドメインの作成を参照してください。

代替の構成: すべてのアプリケーション・サーバーを、単一のクラスター内で (例えば appCluster クラスター内で) ホストすることができます。この構成では、クラスター内のすべてのサーバーがクライアントとコンテナー・サーバーの両方を兼ねます。このチュートリアルでは、2 つのクラスターを使用して、クライアントをホストしているアプリケーション・サーバーとコンテナー・サーバーをホストしているアプリケーション・サーバーを区別しています。

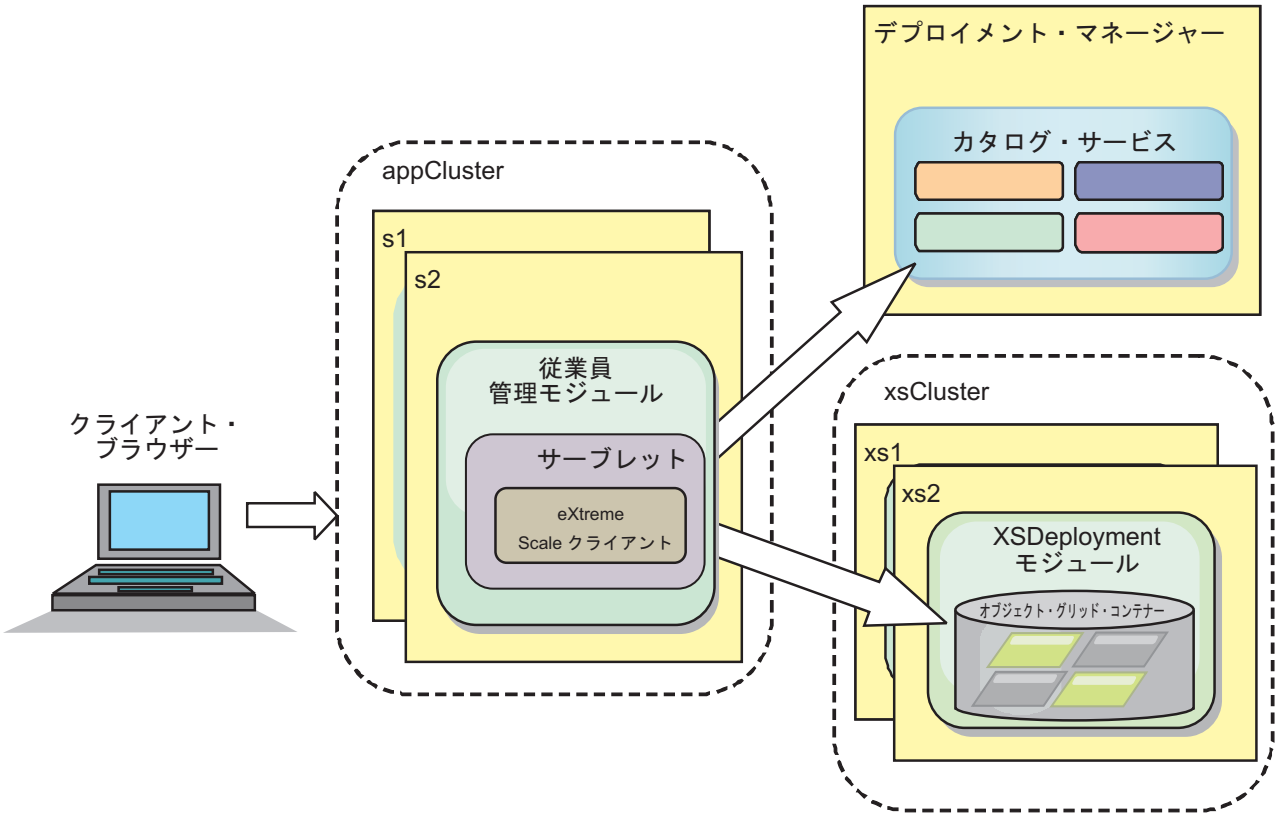


図 3. チュートリアルのトポロジー

アプリケーション: このチュートリアルでは、2 つのアプリケーションと、1 つの共有ライブラリー・ファイルを使用します。

- **EmployeeManagement.ear**: EmployeeManagement.ear アプリケーションは、単純化された Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) エンタープライズ・アプリケーションです。これには、従業員プロファイルを管理するための Web モジュールが含まれます。Web モジュールには、コンテナー・サーバーに保管された従業員プロファイルを表示、挿入、更新、および削除する management.jsp ファイルが含まれます。
- **XSDeployment.ear**: このアプリケーションにはエンタープライズ・アプリケーション・モジュールが含まれ、アプリケーション成果物は含まれません。キャッシュ・オブジェクトは EmployeeData.jar ファイルにパッケージ化されます。EmployeeData.jar ファイルは、XSDeployment.ear ファイルがクラスにアクセスできるように、XSDeployment.ear ファイルの共有ライブラリーとしてデプロイされます。このアプリケーションの目的は、eXtreme Scale 構成ファイルをパッケージすることにあります。このエンタープライズ・アプリケーションが開始されると、eXtreme Scale ランタイムによって eXtreme Scale 構成ファイルが自動的に検出され、その結果コンテナー・サーバーが作成されます。これらの構成ファイルには、objectGrid.xml と objectGridDeployment.xml ファイルが含まれます。
- **EmployeeData.jar**: この JAR ファイルは com.ibm.websphere.sample.xs.data.EmployeeData クラスという 1 つのクラスを含んでいます。このクラスは、グリッドに保管される従業員データを表します。この Java アーカイブ (JAR) ファイルは、共有ライブラリーとして EmployeeManagement.ear および XSDeployment.ear ファイルと一緒にデプロイされます。

チュートリアル・ファイルの入手:

1. WASSecurity.zip ファイルと security.zip ファイルをダウンロードします。サンプル・アプリケーションは WebSphere eXtreme Scale wiki からダウンロードできます。
2. WASSecurity.zip ファイルを、バイナリーおよびソース成果物を表示するためのディレクトリー、例えば /wxs_samples/ ディレクトリーに解凍します。 今後、チュートリアルの中ではこのディレクトリーを *samples_home* と呼びます。WASSecurity.zip ファイルの内容の説明、およびソースを Eclipse ワークスペースにロードする方法については、パッケージの中の README.txt ファイルを参照してください。
3. security.zip ファイルを *samples_home* ディレクトリーに解凍します。security.zip ファイルには、このチュートリアルで使用する次のセキュリティー構成が含まれます。
   - catServer2.props
   - server2.props
   - client2.props
   - securityWAS2.xml
   - xsAuth2.props

構成ファイルについて:

objectGrid.xml ファイルと objectGridDeployment.xml ファイルは、アプリケーション・データを保管するデータ・グリッドとマップを作成します。

これらの構成ファイルには、objectGrid.xml と objectGridDeployment.xml という名前を付ける必要があります。アプリケーション・サーバーが始動すると、eXtreme Scale は、EJB および Web モジュールの META-INF ディレクトリーで、これらのファイルを検出します。これらのファイルが検出された場合、Java 仮想マシン (JVM) は構成ファイルの中に定義されたデータ・グリッドのコンテナー・サーバーとして機能するとみなされます。

objectGrid.xml ファイル

objectGrid.xml ファイルは、Grid という名前の ObjectGrid を 1 つ定義します。Grid データ・グリッドには、アプリケーションの従業員プロファイルを保管する 1 つの Map1 というマップがあります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

 <objectGrids>
        <objectGrid name="Grid" txTimeout="15">
            <backingMap name="Map1" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>

</objectGridConfig>
```

objectGridDeployment.xml ファイル

objectGridDeployment.xml ファイルは、Grid データ・グリッドのデプロイ方法を指定します。グリッドがデプロイされると、グリッドは 5 つの区画と 1 つの同期レプリカを持ちます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">

    <objectgridDeployment objectgridName="Grid">
        <mapSet name="mapSet" numberOfPartitions="5" minSyncReplicas="0" maxSyncReplicas="1" >
            <map ref="Map1"/>
        </mapSet>
    </objectgridDeployment>

</deploymentPolicy>
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、チュートリアル用のトポロジーについて学習し、構成ファイルとサンプル・アプリケーションを環境に追加しました。

コンテナー・サーバーの自動始動について詳しくは、コンテナー・サーバーの自動始動のための WebSphere Application Server アプリケーションの構成を参照してください。

レッスン 1.2: WebSphere Application Server 環境の構成

チュートリアル用の環境を準備するには、WebSphere Application Server セキュリティーを構成する必要があります。内部ファイル・ベースの統合リポジトリーをユー

ザー・アカウント・レジストリーとして使用して、管理セキュリティーおよびアプリケーション・セキュリティーを使用可能にします。その後、クライアント・アプリケーションとコンテナー・サーバーをホスティングするサーバー・クラスターを作成できます。

次のステップは、WebSphere Application Server バージョン 7.0 を使用した記述になっています。しかし、考え方は、それより前の WebSphere Application Server バージョンにも適用できます。

WebSphere Application Server セキュリティーの構成:

1. WebSphere Application Server セキュリティーを構成します。
   a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」をクリックします。
   b. 「**統合リポジトリー**」を「**使用可能なレルム定義 (Available realm definition)**」として選択します。「**現在の値で設定**」をクリックします。
   c. 「**構成..**」をクリックして、「統合リポジトリー」パネルに進みます。
   d. 「**1 次管理ユーザー名**」を入力します。例えば、admin です。「**適用**」をクリックします。
   e. プロンプトが表示されたら、管理ユーザー・パスワードを指定して、「**OK**」をクリックします。変更を保存します。
   f. 「**グローバル・セキュリティー**」ページで、「**統合リポジトリー**」設定が、現行ユーザー・アカウント・レジストリーに設定されていることを確認します。
   g. 「**管理セキュリティーを使用可能にする**」、「**アプリケーション・セキュリティーを使用可能にする**」、および「**Java 2 セキュリティーを使用して、アプリケーション・アクセスをローカル・リソースに制限する**」の項目を選択します。「**適用**」をクリックして、変更を保存します。
   h. デプロイメント・マネージャーを再始動し、実行中のアプリケーションがあれば再開します。

   ユーザー・アカウント・レジストリーとして内部ファイル・ベースの統合リポジトリーを使用して、WebSphere Application Server 管理セキュリティーが使用可能になりました。
2. adminGroup と operatorGroup の 2 つのユーザー・グループを作成します。
   a. 「**ユーザーおよびグループ**」 > 「**グループの管理**」 > 「**作成...**」をクリックします。
   b. グループ名に「adminGroup」を入力します。説明に「管理グループ」を入力します。「**作成**」をクリックします。
   c. 「**同じものを作成**」をクリックします。グループ名に「operatorGroup」を入力します。説明に「**オペレーター・グループ**」を入力します。「**作成**」をクリックします。
   d. 「**閉じる**」をクリックします。
3. ユーザー admin1 と operator1 を作成します。
   a. 「**ユーザーおよびグループ**」 > 「**ユーザーの管理**」 > 「**作成...**」をクリックします。

b. admin1 というユーザーを作成します。名を Joe、姓を Doe、パスワードを admin1 にします。「**作成**」をクリックします。

c. 2 番目のユーザーを作成します。「**同じものを作成**」をクリックして、operator1 というユーザーを作成します。名を Jane、姓を Doe、パスワードを operator1 にします。「**作成**」をクリックします。「**閉じる**」をクリックします。

4. ユーザーをユーザー・グループに追加します。admin1 ユーザーを adminGroup に、operator1 ユーザーを operatorGroup に追加します。

a. 「**ユーザーおよびグループ**」 > 「**ユーザーの管理**」をクリックします。

b. グループに追加するユーザーを検索します。「**検索..**」をクリックし、すべてのユーザーを表示するために検索対象値にアスタリスク (*) を設定します。

c. 検索結果から、admin1 ユーザーをクリックし、「**グループ**」 タブをクリックします。「**追加**」をクリックして、グループを追加します。

d. 使用可能なグループを見つけるために、グループを検索します。「adminGroup」をクリックし、「**追加**」をクリックします。

e. 上記のステップを繰り返して、operator1 ユーザーを operatorGroup ユーザー・グループに追加します。

5. 変更を保存し、管理コンソールからログアウトします。そして、デプロイメント・マネージャーおよびノード・エージェントを再始動して、セキュリティー設定を使用可能にします。

セキュリティーを使用可能にし、WebSphere Application Server 構成に対して管理アクセス権限とオペレーター・アクセス権限を持つ、ユーザーとユーザー・グループを作成しました。

サーバー・クラスターの作成:

WebSphere Application Server 構成の中に、次の 2 つのサーバー・クラスターを作成します。appCluster クラスターはチュートリアルのサンプル・アプリケーションをホストし、xsCluster クラスターはデータ・グリッドをホストします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、クラスターのパネルを開きます。 「**サーバー**」 > 「**クラスター**」 > 「**WebSphere Application Server クラスター**」 > 「**新規**」をクリックします。
2. クラスター名に「appCluster」を入力し、「**ローカルを優先**」オプションを選択したままにして、「**次へ**」をクリックします。
3. クラスターの中にサーバーを作成します。 デフォルト・オプションのままにして、s1 という名前のサーバーを作成します。追加の s2 という名前のクラスター・メンバーを追加します。
4. ウィザードの残りのステップを完了して、クラスターを作成します。変更を保存します。
5. 上記のステップを繰り返して、xsCluster クラスターを作成します。このクラスターには、xs1 および xs2 という名前の 2 つのサーバーが含まれています。

レッスンのチェックポイント:

WebSphere Application Server セルのグローバル・セキュリティーを使用可能にし、ユーザーおよびユーザー・グループを作成しました。また、アプリケーションおよびデータ・グリッドをホストするクラスターを作成しました。

モジュール 2: WebSphere Application Server 認証プラグインを使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成

WebSphere Application Server 構成を作成した後、WebSphere Application Server に WebSphere eXtreme Scale 認証を統合できます。

WebSphere eXtreme Scale クライアントは、認証を必要とするコンテナー・サーバーに接続するときに、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator インターフェースによって表される資格情報生成プログラムを提供する必要があります。資格情報生成プログラムは、クライアントの資格情報を作成するファクトリーです。クライアント資格情報には、ユーザー名とパスワードのペア、Kerberos チケット、クライアント証明書、またはクライアントとサーバーが同意する任意の形式でのクライアント識別データがあります。詳しくは、資格情報 API 資料を参照してください。このサンプルでは、WebSphere eXtreme Scale クライアントは、appCluster クラスターにデプロイされる EmployeeManagment Web アプリケーションです。クライアント資格情報は、Web ユーザー ID を表す WebSphere セキュリティー・トークンです。

学習目標

このモジュールのレッスンでは、以下の方法について学習します。

- クライアント・サーバー・セキュリティーの構成。
- カタログ・サーバー・セキュリティーの構成。
- コンテナー・サーバー・セキュリティーの構成。
- サンプル・アプリケーションをインストールして実行する。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

関連情報:

『レッスン 2.1: クライアント・サーバー・セキュリティーの構成』
クライアント・プロパティー・ファイルで、使用する CredentialGenerator 実装クラスを指示します。

資格情報 API 文書

63 ページの『レッスン 2.2: カタログ・サーバー・セキュリティーの構成』
カタログ・サーバーには、2 つの異なるレベルのセキュリティー情報が含まれます。カタログ・サービスとコンテナー・サーバーも含めた、すべての WebSphere eXtreme Scale サーバーに共通するセキュリティー・プロパティーと、カタログ・サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーです。

レッスン 2.1: クライアント・サーバー・セキュリティーの構成

クライアント・プロパティー・ファイルで、使用する CredentialGenerator 実装クラスを指示します。

-Dobjectgrid.client.props JVM プロパティーを使用して、クライアント・プロパティー・ファイルを構成します。このプロパティーに指定されるファイル名は、例えば *samples_home*/security/client2.props などの絶対ファイル・パスです。クライアント・プロパティー・ファイルについて詳しくは、クライアント・プロパティー・ファイルを参照してください。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

61 ページの『モジュール 2: WebSphere Application Server 認証プラグインを使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成』
WebSphere Application Server 構成を作成した後、WebSphere Application Server に WebSphere eXtreme Scale 認証を統合できます。

資格情報 API 文書

クライアント・プロパティー・ファイルの内容:

この例では、クライアント資格情報として WebSphere Application Server セキュリティー・トークンを使用します。client2.props ファイルは、*samples_home*/security ディレクトリーにあります。 client2.props ファイルには次の設定が含まれます。

securityEnabled
: true に設定すると、クライアントが使用可能なセキュリティー情報をサーバーに送信しなければならないことを示します。

credentialAuthentication
: Supported に設定すると、クライアントは、資格情報認証をサポートすることを示します。

credentialGeneratorClass
: クライアントがスレッドからセキュリティー・トークンを取得するよう、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredentialGenerator クラスを指定します。セキュリティー・トークンの取得方法について詳しくは、865 ページの『WebSphere Application Server とのセキュリティー統合』を参照してください。

Java 仮想マシン (JVM) プロパティーを使用したクライアント・プロパティー・ファイルの設定:

管理コンソールで、appCluster クラスター内の s1 サーバーと s2 サーバーのそれぞれに対し次のステップを実行します。別のトポロジーを使用している場合は、EmployeeManagement アプリケーションがデプロイされるすべてのアプリケーション・サーバーに対し次のステップを実行してください。

1. 「**サーバー**」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「*server_name*」 > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」を選択します。
2. 次の汎用 JVM プロパティーを作成して、クライアント・プロパティー・ファイルの場所を設定します。

   ```
   -Dobjectgrid.client.props=samples_home/security/client2.props
   ```
3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

レッスンのチェックポイント:

クライアント・プロパティー・ファイルを編集し、クライアント・プロパティー・ファイルを使用するよう appCluster クラスター内のサーバーを構成しました。このプロパティー・ファイルで、使用する CredentialGenerator 実装クラスを指示します。

レッスン 2.2: カタログ・サーバー・セキュリティーの構成

カタログ・サーバーには、2 つの異なるレベルのセキュリティー情報が含まれます。カタログ・サービスとコンテナー・サーバーも含めた、すべての WebSphere eXtreme Scale サーバーに共通するセキュリティー・プロパティーと、カタログ・サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーです。

カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーに共通するセキュリティー・プロパティーは、セキュリティー XML 記述子ファイル内に構成します。共通プロパティーの例の 1 つは、ユーザー・レジストリーと認証メカニズムを表すオーセンティケー

ター構成です。セキュリティー・プロパティーの詳細については、セキュリティー記述子 XML ファイルを参照してください。

セキュリティー XML 記述子ファイルを構成するには、Java 仮想マシン (JVM) 引数の中に -Dobjectgrid.cluster.security.xml.url プロパティーを作成します。このプロパティーに指定するファイル名は、`file:///samples_home/security/securityWAS2.xml` のような URL 形式です。

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

関連情報:

61 ページの『モジュール 2: WebSphere Application Server 認証プラグインを使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成』
WebSphere Application Server 構成を作成した後、WebSphere Application Server に WebSphere eXtreme Scale 認証を統合できます。

securityWAS2.xml ファイル:

このチュートリアルでは、securityWAS2.xml ファイルは *samples_home*/security ディレクトリーにあります。コメントを削除した securityWAS2.xml ファイルの内容は次のとおりです。

```
<securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">

 <security securityEnabled="true">
  <authenticator
 className="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenAuthenticator">
  </authenticator>
 </security>
</securityConfig>
```

次のプロパティーが securityWAS2.xml ファイルの中で定義されます。

securityEnabled

securityEnabled プロパティーは true に設定され、WebSphere eXtreme Scale グローバル・セキュリティーが使用可能なことをカタログ・サーバーに指示します。

authenticator

オーセンティケーターは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenAuthenticator クラスとして構成されます。この組み込みの Authenticator プラグインの実装があれば、WebSphere eXtreme Scale サーバーは、セキュリティー・トークンを Subject オブジェクトに変換できます。セキュリティー・トークンの変換方法について詳しくは、865 ページの『WebSphere Application Server とのセキュリティー統合』を参照してください。

catServer2.props ファイル:

サーバー・プロパティー・ファイルは、サーバー固有のプロパティーを保管し、これにはサーバー固有のセキュリティー・プロパティーも含まれます。詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。JVM 引数の中で -Dobjectgrid.server.props プロパティーを使用して、サーバー・プロパティー・ファイルを構成できます。このプロパティーのファイル名の値を、例えば *samples_home*/security/catServer2.props などの絶対ファイル・パスで指定します。このチュートリアルでは、catServer2.props ファイルは *samples_home*/security ディレクトリーの中にあります。コメントを削除した catServer2.props ファイルの内容は次のとおりです。

securityEnabled

securityEnabled プロパティーは true に設定され、このカタログ・サーバーがセキュア・サーバーであることを示します。

credentialAuthentication

credentialAuthentication プロパティーは Required に設定され、サーバーに接続するすべてのクライアントが資格情報の提供を要求されます。

secureTokenManagerType

secureTokenManagerType は none に設定され、既存のサーバーに結合するとき認証の機密事項が暗号化されないことを示します。

authenticationSecret

authenticationSecret プロパティーは、ObjectGridDefaultSecret に設定されます。 eXtreme Scale サーバー・クラスターに結合するとき、この秘密ストリングが使用されます。サーバーがデータ・グリッドに結合する場合、秘密ストリングの表示を求められます。結合サーバーの秘密ストリングがカタログ・サーバーのいずれかの秘密ストリングと一致する場合は、結合サーバーは受け入れられます。ストリングが一致しない場合、結合要求は拒否されます。

transportType

transportType プロパティーは、当初 TCP/IP に設定します。後ほどチュートリアルの中で、トランスポート・セキュリティーを使用可能にします。

JVM プロパティーによるサーバー・プロパティー・ファイルの設定:

デプロイメント・マネージャー・サーバーにサーバー・プロパティー・ファイルを設定します。このチュートリアルのトポロジーとは異なるトポロジーを使用している場合は、コンテナー・サーバーをホストするために使用しているすべてのアプリケーション・サーバー上にサーバー・プロパティー・ファイルを設定します。

1. サーバーの Java 仮想マシン構成を開きます。 管理コンソールで、「**システム管理**」 > 「**デプロイメント・マネージャー**」 > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」をクリックします。
2. 次の汎用 JVM 引数を追加します。

   ```
   -Dobjectgrid.cluster.security.xml.url=file:///samples_home/security/securityWAS2.xml
   -Dobjectgrid.server.props=samples_home/security/catServer2.props
   ```

3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

レッスンのチェックポイント:

securityWAS2.xml ファイルと catServer2.props ファイルをデプロイメント・マネージャーに関連付けることにより、カタログ・サーバー・セキュリティーを構成しました。デプロイメント・マネージャーは、WebSphere Application Server 構成の中のカタログ・サーバー・プロセスをホストします。

レッスン 2.3: コンテナー・サーバー・セキュリティーの構成

コンテナー・サーバーは、カタログ・サービスに接続するときに、オブジェクト・グリッド・セキュリティー XML ファイルに構成されているすべてのセキュリティー構成 (オーセンティケーター構成、ログイン・セッションのタイムアウト値、その他の構成情報など) を取得します。コンテナー・サーバーは、サーバー・プロパティー・ファイル内にそのサーバー固有のセキュリティー・プロパティーも保持します。

-Dobjectgrid.server.props Java 仮想マシン (JVM) プロパティーを使用して、サーバー・プロパティー・ファイルを構成します。このプロパティーのファイル名は、例えば *samples_home*/security/server2.props などの絶対ファイル・パスです。

このチュートリアルでは、コンテナー・サーバーは xsCluster クラスター内の xs1 および xs2 サーバーでホスティングされます。

server2.props ファイル:

server2.props ファイルは、WASSecurity ディレクトリーの下の *samples_home*/security ディレクトリーにあります。server2.props ファイルで定義されているプロパティーは次のとおりです。

securityEnabled
: securityEnabled プロパティーは true に設定され、このコンテナー・サーバーがセキュア・サーバーであることを示します。

credentialAuthentication
: credentialAuthentication プロパティーは Required に設定され、サーバーに接続するすべてのクライアントが資格情報の提供を要求されます。

secureTokenManagerType
: secureTokenManagerType は none に設定され、既存のサーバーに結合するとき認証の機密事項が暗号化されないことを示します。

authenticationSecret
: authenticationSecret プロパティーは、ObjectGridDefaultSecret に設定されます。 eXtreme Scale サーバー・クラスターに結合するとき、この秘密ストリングが使用されます。サーバーがデータ・グリッドに結合する場合、秘密ストリングの表示を求められます。結合サーバーの秘密ストリングがカタログ・サーバーのいずれかの秘密ストリングと一致する場合は、結合サーバーは受け入れられます。ストリングが一致しない場合、結合要求は拒否されます。

JVM プロパティーによるサーバー・プロパティー・ファイルの設定:

xs1 サーバーと xs2 サーバーにサーバー・プロパティー・ファイルを設定します。使用するトポロジーがこのチュートリアルと異なる場合は、コンテナー・サーバー

のホスティングに使用するすべてのアプリケーション・サーバーにサーバー・プロパティー・ファイルを設定してください。

1. サーバーの Java 仮想マシン・ページを開きます。 「**サーバー**」 > 「**アプリケーション・サーバー**」 > *server_name* > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」
2. 汎用 JVM 引数を追加します。

   ```
   -Dobjectgrid.server.props=samples_home/security/server2.props
   ```

3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

レッスンのチェックポイント:

これで、WebSphere eXtreme Scale サーバー認証は保護されます。このセキュリティーを構成することで、WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続しようとするすべてのアプリケーションが資格情報の提供を要求されます。このチュートリアルでは、WSTokenAuthenticator がオーセンティケーターです。この結果として、クライアントは、WebSphere Application Server セキュリティー・トークンの提供が必要です。

レッスン 2.4: サンプルのインストールと実行

認証の構成が終了したら、サンプル・アプリケーションをインストールして実行できます。

EmployeeData.jar ファイルの共有ライブラリーの作成:

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**共有ライブラリー**」ページを開きます。 「**環境**」 > 「**共有ライブラリー**」をクリックします。
2. 「**セル**」スコープを選択します。
3. 共有ライブラリーを作成します。 「**新規**」をクリックします。「**名前**」に「EmployeeManagementLIB」を入力します。クラスパスに、EmployeeData.jar へのパスを入力します。例えば、*samples_home*/WASSecurity/EmployeeData.jar です。
4. 「**適用**」をクリックします。

サンプルのインストール:

1. EmployeeManagement.ear ファイルをインストールします。
   a. 「**アプリケーション**」 > 「**新規アプリケーション**」 > 「**新規エンタープライズ・アプリケーション**」をクリックして、インストールを開始します。アプリケーションをインストールする詳細なパスを選択します。
   b. 「**モジュールをサーバーにマップ**」ステップで、appCluster クラスターを指定して、EmployeeManagementWeb モジュールをインストールします。
   c. 「**共有ライブラリーのマップ**」ステップで、「EmployeeManagementWeb」モジュールを選択します。
   d. 「**Reference shared libraries**」をクリックします。「EmployeeManagementLIB」ライブラリーを選択します。
   e. webUser ロールを、「**アプリケーションのレルム内のすべての認証済み**」にマップします。
   f. 「**OK**」をクリックします。

クライアントは、このクラスター内の s1 サーバーと s2 サーバーで実行されます。

2. サンプルの XSDeployment.ear ファイルをインストールします。
   a. 「**アプリケーション**」 > 「**新規アプリケーション**」 > 「**新規エンタープライズ・アプリケーション**」をクリックして、インストールを開始します。アプリケーションをインストールする詳細なパスを選択します。
   b. 「**モジュールをサーバーにマップ**」ステップで、xsCluster クラスターを指定して、XSDeploymentWeb Web モジュールをインストールします。
   c. 「**共有ライブラリーのマップ**」ステップで、「XSDeploymentWeb」モジュールを選択します。
   d. 「**Reference shared libraries**」をクリックします。
   「EmployeeManagementLIB」ライブラリーを選択します。
   e. 「**OK**」をクリックします。

   このクラスター内の xs1 サーバーと xs2 サーバーがコンテナー・サーバーをホスティングします。
3. デプロイメント・マネージャーを再始動します。 デプロイメント・マネージャーが始動すると、カタログ・サーバーも始動します。デプロイメント・マネージャーの SystemOut.log ファイルを表示すると、eXtreme Scale サーバー・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す次のメッセージを見ることができます。

   ```
   CWOBJ0913I: 次のサーバー・プロパティー・ファイルがロードされました。
   /wxs_samples/security/catServer2.props
   ```
4. xsCluster クラスターを再始動します。xsCluster が始動すると、XSDeployment アプリケーションが開始し、xs1 と xs2 サーバーのそれぞれでコンテナー・サーバーが開始します。 xs1 サーバーと xs2 サーバーの SystemOut.log ファイルを調べると、サーバー・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す次のメッセージが表示されます。

   ```
   CWOBJ0913I: 次のサーバー・プロパティー・ファイルがロードされました。
   /wxs_samples/security/server2.props
   ```
5. appClusters クラスターを再始動します。 クラスター appCluster が始動すると、EmployeeManagement アプリケーションも開始します。 s1 サーバーと s2 サーバーの SystemOut.log ファイルを調べると、クライアント・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す次のメッセージが表示されます。

   ```
   CWOBJ0924I: クライアント・プロパティー・ファイル {0} がロードされました。
   ```

   authenticationRetryCount、transportType、および clientCertificateAuthentication プロパティーに関する警告メッセージは無視してかまいません。プロパティー・ファイルの中に値が指定されていないため、デフォルト値が使用されます。
   WebSphere eXtreme Scale バージョン 7.0 を使用している場合は、クライアント・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す CWOBJ9000I メッセージ (英語のみ) が表示されます。 予期されるメッセージが表示されない場合は、JVM 引数に -Dobjectgrid.server.props または -Dobjectgrid.client.props プロパティーを適切に構成したか確認してください。プロパティーを確実に構成済みの場合、ダッシュ (-) が UTF 文字であるか確認してください。

サンプル・アプリケーションの実行:

1. management.jsp ファイルを実行します。 Web ブラウザーで、http://<*your_servername*>:<*port*>/EmployeeManagementWeb/management.jsp にアクセスします。 例えば、次のような URL を使用できます。http://localhost:9080/EmployeeManagementWeb/management.jsp。
2. アプリケーションに認証を提供します。 webUser ロールにマップしたユーザーの資格情報を入力します。デフォルトでは、このユーザー・ロールは、すべての認証済みユーザーにマップされます。ユーザー ID に admin1、パスワードに admin1 を入力します。 従業員を表示、追加、更新、および削除するページが表示されます。
3. 従業員を表示します。 「**Display an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレスに「emp1@acme.com」を入力し、「**Submit**」をクリックします。従業員が見つからないというメッセージが表示されます。
4. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレスに「emp1@acme.com」、名に「Joe」、姓に「Doe」と入力します。「**Submit**」をクリックします。 emp1@acme.com アドレスを持つ従業員が追加されたというメッセージが表示されます。
5. 新しい従業員を表示します。 「**Display an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレスに「emp1@acme.com」を入力し、姓と名のフィールドは空のままにして「**Submit**」をクリックします。従業員が見つかったというメッセージが表示され、名フィールドと姓フィールドに正しい名前が表示されます。
6. 従業員を削除します。 「**Delete an employee**」をクリックします。「emp1@acme.com」を入力し、「**Submit**」をクリックします。従業員が削除されたというメッセージが表示されます。

レッスンのチェックポイント:

サンプル・アプリケーションをインストールして実行しました。このチュートリアルは WebSphere Application Server 統合を使用するため、クライアントが eXtreme Scale サーバーに対する認証に失敗する場合のシナリオは見ることができません。WebSphere Application Server に対するユーザー認証が成功すると、eXtreme Scale の認証も成功します。

モジュール 3: トランスポート・セキュリティーの構成

構成の中のクライアントとサーバー間のデータ転送をセキュアにするために、トランスポート・セキュリティーを構成します。

前のチュートリアル・モジュールにおいて、WebSphere eXtreme Scale 認証を使用可能に設定しました。認証を使用可能に設定すると、WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続を試みるすべてのアプリケーションは、資格情報の提供を要求されます。したがって、非認証クライアントは WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続できません。クライアントは、WebSphere Application Server セルの中で実行される認証アプリケーションでなければなりません。

このモジュールまでの構成では、appCluster クラスター内のクライアントと xsCluster クラスター内のサーバー間のデータ転送は、暗号化されません。ご使用の WebSphere Application Server クラスターがファイアウォールで囲まれたサーバーにインストールされている場合は、この構成を受け入れることができます。しかし、シナリオによっては、たとえトポロジーがファイアウォールで保護されるとして

も、何らかの理由で、暗号化されていないトラフィックは、受け入れられない場合もあります。例えば、政府の方針で、暗号化トラフィックが強制される場合もあります。WebSphere eXtreme Scale は、ObjectGrid エンドポイント (クライアント・サーバー、コンテナー・サーバー、およびカタログ・サーバーが含まれる) 間のセキュア通信のために Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) をサポートします。

このサンプル・デプロイメントでは、 eXtreme Scale クライアント・サーバーとコンテナー・サーバーは、すべて WebSphere Application Server 環境で実行されます。eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーは Application Server Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIV2) トランスポート設定によって管理されるため、クライアント・プロパティーとサーバー・プロパティーは、SSL 設定の構成には必要ありません。WebSphere eXtreme Scale サーバーは、このサーバーが実行されるアプリケーション・サーバーと同じオブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) インスタンスを使用します。この CSIv2 トランスポート設定を使用して、WebSphere Application Server 構成内のクライアント・サーバーとコンテナー・サーバーに対してすべての SSL 設定を指定してください。カタログ・サーバーには、Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) もリモート・メソッド呼び出し (RMI) も使用しない専有トランスポート・パスがあります。この専用のトランスポート・パスのために、カタログ・サーバーは、WebSphere Application Server CSIV2 トランスポート設定では管理できません。したがって、カタログ・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルの中に、SSL プロパティーを構成する必要があります。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- CSIv2 のインバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートの構成。
- SSL プロパティーのカタログ・サーバー・プロパティー・ファイルへの追加。
- ORB プロパティー・ファイルの確認。
- サンプルを実行します。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

前提条件

このチュートリアル・ステップは、これまでのモジュールの上に組み立てられています。トランスポート・セキュリティーを構成する前に、このチュートリアルのこれまでのモジュールを完了してください。

レッスン 3.1: CSIv2 のインバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートの構成

サーバー・トランスポートの Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) を構成するには、クライアント、カタログ・サーバー、およびコンテナー・サーバーをホストするすべての WebSphere Application Server サーバーに対し

て、Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIv2) インバウンド・トランスポートと CSIv2 アウトバウンド・トランスポートを SSL-Required に設定します。

チュートリアルで使用するサンプルのトポロジーでは、s1、s2、xs1、および xs2 アプリケーション・サーバーに対して、これらのプロパティーを設定する必要があります。次のステップでは、構成内のすべてのサーバーのインバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートを構成します。

管理コンソールで、インバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートを設定します。管理セキュリティーが使用可能であることを確認します。

- **WebSphere Application Server バージョン 7.0 の場合**: 「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」 > 「**RMI/IIOP セキュリティー**」 > 「**CSIv2 インバウンド通信**」をクリックします。CSIv2 Transport Layer の下のトランスポート・タイプを「**SSL 必須**」に変更します。このステップを繰り返して、CSIv2 アウトバウンド通信を構成します。

中央で管理されるエンドポイント・セキュリティー設定を使用したり、SSL リポジトリーを構成したりできます。詳しくは、Common Secure Interoperability バージョン 2 トランスポート・インバウンド設定を参照してください。

レッスン 3.2: SSL プロパティーのカタログ・サーバー・プロパティー・ファイルへの追加

カタログ・サーバーには、WebSphere Application Server Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIV2) トランスポート設定が管理できない専用のトランスポート・パスがあります。したがって、カタログ・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルで Secure Sockets Layer (SSL) プロパティーを構成する必要があります。

カタログ・サーバーには専用のトランスポート・パスがあるため、カタログ・サーバー・セキュリティーを構成するには、追加のステップが必要です。このトランスポート・パスは、Application Server CSIV2 トランスポート設定では管理できません。

1. catServer2.props ファイル内の SSL プロパティーを編集します。 カタログ・サーバー・セキュリティーを構成するには、カタログ・サーバー・プロパティー・ファイルの中の次の SSL プロパティーのコメントを外します。このチュートリアルでは、カタログ・サーバー・プロパティーは catServer2.props ファイルにあります。keyStore プロパティーと trustStore プロパティーを更新して、使用している環境の適切な場所を参照するようにします。

   ```
   #alias=default
   #contextProvider=IBMJSSE2
   #protocol=SSL
   #keyStoreType=PKCS12
   #keyStore=/<WAS_HOME>/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/<DMGR_NAME>/config/
   cells/<CELL_NAME>/nodes/<NODE_NAME>/key.p12
   #keyStorePassword=WebAS
   #trustStoreType=PKCS12
   #trustStore=/<WAS_HOME>/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/<DMGR_NAME>/config/
   cells/<CELL_NAME>/nodes/<NODE_NAME>/trust.p12
   #trustStorePassword=WebAS
   #clientAuthentication=false
   ```

   catServer2.props ファイルは、デフォルトの WebSphere Application Server ノード・レベルの鍵ストアとトラストストアを使用しています。より複雑なデプロ

イメント環境をデプロイする場合は、それにふさわしい鍵ストアとトラストストアを選択する必要があります。場合によっては、鍵ストアとトラストストアを作成し、他のサーバーの鍵ストアから鍵をインポートする必要があります。WebSphere Application Server 鍵ストアおよびトラストストアのデフォルト・パスワードは WebAS ストリングですので、忘れないでください。詳しくは、デフォルト自己署名証明書の構成を参照してください。

2. catServer2.props ファイルの中の transportType プロパティーの値を更新します。 チュートリアルのこれまでのステップで、この値は TCP/IP に設定されています。この値を SSL-Required に変更します。
3. カタログ・サーバー・セキュリティー設定に対する変更をアクティブにするために、デプロイメント・マネージャーを再始動します。

レッスンのチェックポイント:

カタログ・サーバーの SSL プロパティーを構成しました。

レッスン 3.3: サンプルの実行

すべてのサーバーを再始動し、再度、サンプル・アプリケーションを実行します。問題なくステップを実行できるはずです。

サンプル・アプリケーションの実行およびインストールについて詳しくは、 67 ページの『レッスン 2.4: サンプルのインストールと実行』を参照してください。

レッスンのチェックポイント:

トランスポート・セキュリティーを使用可能に設定したサンプル・アプリケーションを実行しました。

モジュール 4: WebSphere Application Server での Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可の使用

クライアントの認証を構成したので、さまざまな許可を異なるユーザーに与えるために、さらに認証を構成することができます。例えば、オペレーター・ユーザーはデータ表示のみが可能である一方で、アドミニストレーター・ユーザーはすべての操作が実行可能であるなどです。

このチュートリアルの前のモジュールと同様に、クライアントを認証した後、eXtreme Scale 許可メカニズムによりセキュリティー特権を付与することができます。このチュートリアルの前のモジュールでは、WebSphere Application Server との統合を使用して、データ・グリッドの認証を使用可能にする方法について説明しました。結果として、非認証クライアントは、eXtreme Scale サーバーに接続したり、システムに要求を実行依頼したりすることができません。ただし、認証されている各クライアントは、ObjectGrid マップに格納されているデータの読み取り、書き込み、削除など、サーバーに対して同じアクセス権または特権を持っています。クライアントは、どのような照会でも実行できます。

チュートリアルのこの部分では、eXtreme Scale 許可を使用して認証ユーザーにさまざまな特権を付与する方法について説明します。 WebSphere eXtreme Scale はアクセス権ベースの許可メカニズムを使用します。さまざまな許可クラスによって表されるさまざまな許可カテゴリーを割り当てることができます。このモジュールで

は、MapPermission クラスを取り上げます。使用できるすべての許可のリストについては、 900 ページの『クライアント許可プログラミング』を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale では、`com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission` クラスは eXtreme Scale リソース、特に ObjectMap インターフェースまたは JavaMap インターフェースのメソッドに対する許可を表しています。 WebSphere eXtreme Scale は、ObjectMap および JavaMap のメソッドにアクセスするための以下の許可ストリングを定義します。

- **read**: マップからデータを読み取る許可を与えます。
- **write**: マップのデータを更新する許可を与えます。
- **insert**: マップにデータを挿入する許可を与えます。
- **remove**: マップからデータを削除する許可を与えます。
- **invalidate**: マップからのデータを無効にする許可を与えます。
- **all**: read、write、insert、remove、および invalidate に対するすべての許可を与えます。

許可は、eXtreme Scale クライアントがデータ・アクセス API (ObjectMap API、JavaMap API、EntityManager API など) を使用したときに発生します。メソッドが呼び出されるときに、ランタイムは、対応するマップ許可を検査します。必要な許可がクライアントに与えられていない場合は、AccessControlException 例外になります。このチュートリアルでは、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用して、さまざまなユーザーに対する許可マップ・アクセスを付与する方法について説明します。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- WebSphere eXtreme Scale の許可を使用可能にする。
- ユーザー・ベースの許可を使用可能にする。
- グループ・ベースの許可の構成。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

前提条件

認証を構成する前に、このチュートリアルのこれまでのモジュールを完了する必要があります。

関連概念:

900 ページの『クライアント許可プログラミング』
WebSphere eXtreme Scale は、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可をすぐに使用できるようサポートし、ObjectGridAuthorization インターフェースを使用するカスタム許可もサポートします。

レッスン 4.1: WebSphere eXtreme Scale 許可を使用可能にする

WebSphere eXtreme Scale で許可を使用可能にするには、特定の ObjectGrid のセキュリティーを使用可能にする必要があります。

ObjectGrid で許可を使用可能にするには、 XML ファイルで、その特定の ObjectGrid の **securityEnabled** 属性を true に設定する必要があります。このチュートリアルでは、既に objectGrid.xml ファイルの中でセキュリティーが設定されている、*samples_home*/WASSecurity ディレクトリー内の XSDeployment_sec.ear ファイルを使用するか、既存の objectGrid.xml ファイルを編集してセキュリティーを使用可能に設定するかのどちらかを行うことができます。このレッスンでは、ファイルを編集してセキュリティーを使用可能にする方法を例示します。

1. XSDeployment.ear ファイル内のファイルを抽出してから、XSDeploymentWeb.war ファイルを unzip します。
2. objectGrid.xml ファイルを開いて、ObjectGrid レベルで **securityEnabled** 属性を true に設定します。次のサンプルでこの属性の例を参照してください。

   ```
   <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

   <objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

       <objectGrids>
           <objectGrid name="Grid" securityEnabled="true">
               <backingMap name="Map1" />
           </objectGrid>
       </objectGrids>

   </objectGridConfig>
   ```

   複数の ObjectGrid が定義されている場合は、各データ・グリッドでこの属性を設定する必要があります。
3. XSDeploymentWeb.war ファイルと XSDeployment.ear ファイルをパッケージ化し直して、変更を組み込みます。オリジナル・パッケージを上書きしないように、当該ファイルに XSDeployment_sec.ear という名前を付けます。
4. 既存の XSDeployment アプリケーションをアンインストールし、XSDeployment_sec.ear ファイルをインストールします。 アプリケーションのデプロイについて詳しくは、67 ページの『レッスン 2.4: サンプルのインストールと実行』を参照してください。

レッスンのチェックポイント:

ObjectGrid のセキュリティーを使用可能にすることで、データ・グリッドの許可も使用可能にしました。

レッスン 4.2: ユーザー・ベースの許可を使用可能にする

このチュートリアルの認証モジュールで、operator1 および admin1 という 2 人のユーザーを作成しました。Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用して、これらのユーザーにさまざまな許可を割り当てることができます。

ユーザー・プリンシパルを使用した、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可ポリシーの定義:

前に作成したユーザーに、許可を割り当てることができます。operator1 ユーザーに、すべてのマップに対する読み取り許可のみを割り当てます。admin1 ユーザーに、すべての許可を割り当てます。JAAS 許可ポリシー・ファイルを使用して、プリンシパルに許可を付与します。

JAAS 許可ファイルを編集します。 xsAuth2.policy ファイルは、*samples_home*/security ディレクトリーにあります。

```
grant codebase http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction
Principal com.ibm.ws.security.common.auth.WSPrincipalImpl "defaultWIMFileBasedRealm/operator1" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "Grid.Map1", "read";
};

grant codebase http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction
Principal com.ibm.ws.security.common.auth.WSPrincipalImpl "defaultWIMFileBasedRealm/admin1" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "Grid.Map1", "all";
};
```

このファイルにある http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction コードベースは、ObjectGrid 用に特別に予約された URL です。プリンシパルに付与されているすべての ObjectGrid 許可では、この特別なコードベースを使用します。このファイルの中で、次の許可が割り当てられます。

- 最初の grant ステートメントは、read マップ許可を operator1 プリンシパルに付与します。 operator1 ユーザーは、ObjectGrid インスタンスの中の Map1 マップに対するマップ読み取り許可のみを持ちます。
- 2 番目の grant ステートメントは、all マップ許可を admin1 プリンシパルに付与します。 admin1 は、ObjectGrid インスタンスの中の Map1 マップに対するすべての許可を持ちます。
- プリンシパル名は defaultWIMFileBasedRealm/operator1 で、Operator1 ではありません。統合リポジトリーがユーザー・アカウント・レジストリーとして使用されるときに、WebSphere Application Server は自動的にレルム名をプリンシパル名に追加します。必要であれば、この値を調整します。

JVM プロパティーを使用した JAAS 許可ポリシー・ファイルの設定:

次のステップを使用して、xsCluster クラスター内の xs1 サーバーと xs2 サーバーの JVM プロパティーを設定します。このチュートリアルで使用するサンプル・トポロジーとは異なるトポロジーを使用する場合は、すべてのコンテナー・サーバーにファイルを設定してください。

1. 管理コンソールで、**「サーバー」** > **「アプリケーション・サーバー」** > ***server_name*** > **「Java およびプロセス管理」** > **「プロセス定義」** > **「Java 仮想マシン」**をクリックします。
2. 次の汎用 JVM 引数を追加します。

   ```
   -Djava.security.policy=samples_home/security/xsAuth2.policy
   ```

3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

サンプル・アプリケーションを実行して許可をテストする:

サンプル・アプリケーションを使用して、許可設定をテストすることができます。アドミニストレーター・ユーザーは、従業員の表示および追加も含めて、引き続き、Map1 マップ内のすべての許可を持ちます。オペレーター・ユーザーは、読み取り許可しか割り当てられていないため、従業員の表示のみが可能です。

1. コンテナー・サーバーを実行しているすべてのアプリケーション・サーバーを再始動します。
2. EmployeeManagementWeb アプリケーションを開きます。 Web ブラウザーで、http://<host>:<port>/EmployeeManagermentWeb/management.jsp を開きます。
3. アドミニストレーター・ユーザーとしてアプリケーションにログインします。ユーザー名に admin1、パスワードに admin1 を使用します。
4. 従業員を表示してみます。 「**Display an Employee**」をクリックし、E メール・アドレス「authemp1@acme.com」を検索します。ユーザーが見つからないというメッセージが表示されます。
5. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレス「authemp1@acme.com」、名「Joe」、および姓「Doe」を追加し、「**Submit**」をクリックします。従業員が追加されたというメッセージが表示されます。
6. オペレーター・ユーザーとしてログインします。 2 つ目の Web ブラウザー・ウィンドウを開いて、http://<host>:<port>/EmployeeManagermentWeb/management.jsp を開きます。ユーザー名に operator1、パスワードに operator1 を使用します。
7. 従業員を表示してみます。 「**Display an Employee**」をクリックし、E メール・アドレス「authemp1@acme.com」を検索します。従業員が表示されます。
8. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレス「authemp2@acme.com」、名「Joe」、および姓「Doe」を追加し、「**Submit**」をクリックします。次のメッセージが表示されます。

   ```
   An exception occurs when Add the employee. See below for detailed exception messages.
   ```

   次の例外が例外チェーンに入っています。

   ```
   java.security.AccessControlException: Access denied
   (com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission Grid.Map1 insert)
   ```

   このメッセージは、operator1 ユーザーが Map1 マップへのデータ挿入を許可されていないために表示されます。

バージョン 7.0.0.11 より前のバージョンの WebSphere Application Server で実行している場合、コンテナー・サーバーで java.lang.StackOverflowError エラーが表示されることがあります。このエラーの原因は IBM Developer Kit の問題です。この問題は、WebSphere Application Server バージョン 7.0.0.11 以上に同梱されている IBM Developer Kit では修正済みです。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、特定のユーザーに許可を割り当てて、許可を構成しました。

レッスン 4.3: グループ・ベースの許可の構成

前回のレッスンでは、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可ポリシーを使用して、個々のユーザー・ベースの許可をユーザー・プリンシパルに割り当てました。しかし、数百または数千のユーザーがある場合、個々のユーザーではなくグループに基づいてアクセス権限を付与する、グループ・ベースの許可を使用します。

残念ながら、WebSphere Application Server から認証される Subject オブジェクトは、ユーザー・プリンシパルしか含みません。このオブジェクトは、グループ・プリンシパルを含みません。カスタム・ログイン・モジュールを追加することによって、Subject オブジェクトにグループ・プリンシパルを取り込むことができます。

このチュートリアルでは、カスタム・ログイン・モジュールの名前は com.ibm.websphere.samples.objectgrid.security.lm.WASAddGroupLoginModule です。このモジュールは `groupLM.jar` ファイルの中にあります。この JAR ファイルを、`WAS-INSTALL/lib/ext` ディレクトリー内に置きます。

WASAddGroupLoginModule は、WebSphere Application Server サブジェクトから公開グループ資格情報を取得し、com.ibm.websphere.samples.objectgrid.security.WSGroupPrincipal というグループ・プリンシパルを作成してそのグループを表します。その結果、このグループ・プリンシパルをグループ許可のために使用できます。グループは、`xsAuthGroup2.policy` ファイルの中で定義されます。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
principal com.ibm.websphere.sample.xs.security.WSGroupPrincipal
  "defaultWIMFileBasedRealm/cn=operatorGroup,o=defaultWIMFileBasedRealm" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "Grid.Map1", "read";
};

grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
principal com.ibm.websphere.sample.xs.security.WSGroupPrincipal
 "defaultWIMFileBasedRealm/cn=adminGroup,o=defaultWIMFileBasedRealm" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "Grid.Map1", "all";
};
```

プリンシパル名は `WSGroupPrincipal` で、これはグループを表します。

カスタム・ログイン・モジュールの追加:

次のシステム・ログイン・モジュール・エントリーのそれぞれにカスタム・ログイン・モジュールを追加する必要があります。Lightweight Third Party Authentication (LTPA) を使用する場合は、そのエントリーを RMI_INBOUND ログイン・モジュールに追加してください。 LTPA は、WebSphere Application Server バージョン 7.0 のデフォルトの認証メカニズムです。WebSphere Application Server Network Deployment 構成の場合は、LTPA 認証メカニズム構成エントリーを構成すれば十分です。

次のステップを使用して、提供された com.ibm.websphere.samples.objectgrid.security.lm.WASAddGroupLoginModule ログイン・モジュールを構成します。

1. 管理コンソールで、**「セキュリティー」** > **「グローバル・セキュリティー」** > **「Java 認証・承認サービス」** > **「システム・ログイン」** > ***login_module_name*** > **「JAAS ログイン・モジュール」** > **「新規」**をクリックします。

2. クラス名として com.ibm.websphere.sample.xs.security.lm.WASAddGroupLoginModule を入力します。
3. オプション: プロパティー debug を追加し、値を true に設定します。
4. 「**適用**」をクリックして、新規モジュールをログイン・モジュール・リストに追加します。

JVM プロパティーを使用した JAAS 許可ポリシー・ファイルの設定:

管理コンソールで、xsCluster 内の xs1 サーバーと xs2 サーバーに対して次のステップを実行します。別のデプロイメント・トポロジーを使用している場合は、コンテナー・サーバーをホストするアプリケーション・サーバーに対して次のステップを実行します。

1. 管理コンソールで、「**サーバー**」 > 「**アプリケーション・サーバー**」 > *server_name* > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」をクリックします。
2. 次の汎用 JVM 引数を入力するか、-Djava.security.policy エントリーを次のテキストで置き換えます。

   -Djava.security.policy=*samples_home*/security/xsAuthGroup2.policy
3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

サンプル・アプリケーションによるグループ許可のテスト:

サンプル・アプリケーションを使用して、ログイン・モジュールで構成されたグループ許可をテストできます。

1. コンテナー・サーバーを再始動します。 このチュートリアルでは、コンテナー・サーバーは、xs1 サーバーおよび xs2 サーバーです。
2. サンプル・アプリケーションにログインします。 Web ブラウザーで、http://<host>:<port>/EmployeeManagementWeb/management.jsp を開き、ユーザー名を admin1、パスワードを admin1 でログインします。
3. 従業員を表示します。 「**Display an Employee**」をクリックして、E メール・アドレス authemp2@acme.com を検索します。ユーザーが見つからないというメッセージが表示されます。
4. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレス「authemp2@acme.com」、名「Joe」、および姓「Doe」を追加し、「**Submit**」をクリックします。従業員が追加されたというメッセージが表示されます。
5. オペレーター・ユーザーとしてログインします。 2 つ目の Web ブラウザー・ウィンドウを開いて、URL http://<host>:<port>/EmployeeManagermentWeb/management.jsp を開きます。ユーザー名に operator1、パスワードに operator1 を使用します。
6. 従業員を表示してみます。 「**Display an Employee**」をクリックして、E メール・アドレス authemp2@acme.com を検索します。従業員が表示されます。
7. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレス「authemp3@acme.com」、名「Joe」、および姓「Doe」を追加し、「**Submit**」をクリックします。次のメッセージが表示されます。

   An exception occurs when Add the employee. See below for detailed exception messages.

次の例外が例外チェーンに入っています。

```
java.security.AccessControlException: Access denied
(com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission Grid.Map1 insert)
```

オペレーター・ユーザーには、データを Map1 マップに挿入する許可がないため、このメッセージが表示されます。

レッスンのチェックポイント:

アプリケーションのユーザーに対する許可の割り当てを簡単にするために、グループを構成しました。

モジュール 5: データ・グリッドとマップのモニターのための xscmd ツールの使用

xscmd ツールを使用して、Grid データのプライマリー・データ・グリッドとマップ・サイズを表示できます。**xscmd** ツールは MBean を使用して、プライマリー断片、レプリカ断片、コンテナー・サーバー、マップ・サイズなどのすべてのデータ・グリッド成果物を照会します。

このチュートリアルでは、コンテナーおよびカタログ・サーバーは、WebSphere Application Server アプリケーション・サーバーの中で実行中です。 WebSphere eXtreme Scale ランタイムは、Managed Bean (MBean) を、WebSphere Application Server ランタイムによって作成される MBean サーバーに登録します。**xscmd** ツールが使用するセキュリティーは、WebSphere Application Server MBean セキュリティーによって提供されます。したがって、WebSphere eXtreme Scale 固有のセキュリティー構成は必要ありません。

1. コマンド行ツールを使用して、*DMGR_PROFILE*/bin ディレクトリーを開きます。
2. **xscmd** ツールを実行します。

   -c showPlacement -sf P コマンドを使用して、プライマリー断片の配置をリストします。 Linux UNIX

   ```
   xscmd.sh -g Grid -ms mapSet -c showPlacement -sf P
   ```

   Windows

   ```
   xscmd.bat -g Grid -ms mapSet -c showPlacement -sf P
   ```

   出力を表示する前に、WebSphere Application Server の ID およびパスワードを使用してログインするように促すプロンプトが出されます。

関連タスク:

xscmd ユーティリティーによるモニター
xscmd ユーティリティーは、完全にサポートされたモニターおよび管理のツールとして、**xsadmin** サンプル・ユーティリティーに取って代わります。**xscmd** ユーティリティーを使用すれば、WebSphere eXtreme Scale トポロジーに関するテキスト情報を表示できます。

xscmd ユーティリティーによる管理
xscmd ユーティリティーを使用して、マルチマスター・レプリカ生成リンクの確立、クォーラムの上書き、ティアダウン・コマンドを使用したサーバー・グループの停止などの管理タスクを環境内で実行することができます。

レッスンのチェックポイント

WebSphere Application Server の中で、**xscmd** ツールを使用しました。

チュートリアル: 混合環境で WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを外部オーセンティケーターと統合する

このチュートリアルでは、WebSphere Application Server 環境に部分的にデプロイされる WebSphere eXtreme Scale サーバーを保護する方法を例示します。

このチュートリアルのデプロイメントでは、コンテナー・サーバーは WebSphere Application Server 内にデプロイされます。カタログ・サーバーはスタンドアロン・サーバーとしてデプロイされ、Java Standard Edition (Java SE) 環境内で開始されます。

カタログ・サーバーは WebSphere Application Server 内にデプロイされないため、WebSphere Application Server 認証プラグインを使用することはできません。WebSphere Application Server 認証プラグインを構成するプロセスの詳細については、53 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』を参照してください。このチュートリアルでは、カタログ・サーバー認証用に別のオーセンティケーターが必要です。鍵ストア・オーセンティケーターを構成して、クライアントを認証します。

学習目標

このチュートリアルの学習目標は次のとおりです。

- WebSphere eXtreme Scale を構成して、KeyStoreLoginAuthenticator プラグインを使用する。
- WebSphere eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーを構成して、WebSphere Application Server CSIv2 構成と WebSphere eXtreme Scale プロパティー・ファイルを使用する。
- WebSphere Application Server の Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用する。
- **xscmd** ユーティリティーを使用して、チュートリアルで作成したデータ・グリッドやマップをモニターする。

所要時間

このチュートリアルは、開始してから終了するまで約 4 時間かかります。

概要: 混合環境のセキュリティー

このチュートリアルでは、混合環境内の WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを統合します。コンテナー・サーバーは WebSphere Application Server 内で稼働し、カタログ・サービスはスタンドアロン・モードで稼働します。カタログ・サーバーはスタンドアロン・モードであるため、外部オーセンティケーターを構成しなければなりません。

重要: コンテナー・サーバーとカタログ・サーバーの両方を WebSphere Application Server 内で実行する場合は、WebSphere Application Server 認証プラグインを使用しても、外部オーセンティケーターを使用してもかまいません。WebSphere Application Server 認証プラグインの使用について詳しくは、53 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』を参照してください。

学習目標

このチュートリアルの学習目標は次のとおりです。

- WebSphere eXtreme Scale を構成して、KeyStoreLoginAuthenticator プラグインを使用する。
- WebSphere eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーを構成して、WebSphere Application Server CSIv2 構成と WebSphere eXtreme Scale プロパティー・ファイルを使用する。
- WebSphere Application Server の Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用する。
- **xscmd** ユーティリティーを使用して、チュートリアルで作成したデータ・グリッドやマップをモニターする。

所要時間

このチュートリアルは、開始してから終了するまで約 4 時間かかります。

スキル・レベル

中級

対象者

WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server 間のセキュリティー統合および外部オーセンティケーターの構成に関心がある開発者および管理者

システム要件

- WebSphere Application Server 次のフィックスが適用されたバージョン 7.0.0.11 以上: インテリム・フィックス PM20613 およびインテリム・フィックス PM15818。
- カタログ・サーバーは、WebSphere Application Server と統合されるインストール環境でなく、スタンドアロン・インストール環境で実行しなければなりません。

- 次のフィックスを適用して、Java ランタイムを更新してください。IZ79819: IBMJDK FAILS TO READ PRINCIPAL STATEMENT WITH WHITESPACE FROM SECURITY FILE
- カタログ・サービスを実行するスタンドアロン・ノードは IBM Software Development Kit バージョン 1.6 J9 を使用する必要があります。この Software Development Kit は WebSphere Application Server インストールに組み込まれています。 WebSphere Application Server 上の WebSphere eXtreme Scale インストール済み環境内では **startOgServer** コマンドを実行できないため、カタログ・サーバー・ノードはスタンドアロン・インストールにしなければなりません。

このチュートリアルでは、4 つのアプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server) と 1 つのデプロイメント・マネージャーを使用してサンプル・デモを行います。

前提条件

このチュートリアルを開始するにあたって、次の項目についての基本的な知識があると便利です。

- WebSphere eXtreme Scale プログラミング・モデル
- 基本的な WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの概念
- 基本的な WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの概念

WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server のセキュリティー統合のバックグラウンド情報については、 865 ページの『WebSphere Application Server とのセキュリティー統合』を参照してください。

モジュール 1: WebSphere Application Server とスタンドアロンとの混合環境の準備

チュートリアルを開始する前に、WebSphere Application Server 内で稼働するコンテナー・サーバーを組み込む基本的なトポロジーを作成する必要があります。このチュートリアルでは、カタログ・サーバーはスタンドアロン・モードで稼働します。

学習目標

このモジュールのレッスンでは、以下の方法について学習します。

- チュートリアルに必要な混合トポロジーとファイルについて理解する。
- コンテナー・サーバーを実行する WebSphere Application Server を構成する。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

レッスン 1.1: トポロジーの理解とチュートリアル・ファイルの入手

チュートリアル用の環境を準備するには、トポロジーのカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを構成する必要があります。

このレッスンでは、チュートリアルで使用するサンプル・トポロジーとアプリケーションを紹介します。チュートリアルの実行を開始するには、アプリケーションを

ダウンロードし、環境内の正しい場所に構成ファイルを配置する必要があります。サンプル・アプリケーションは WebSphere eXtreme Scale wiki からダウンロードできます。

トポロジー: このチュートリアルでは、WebSphere Application Server セル内に次のクラスターを作成します。

- **appCluster クラスター**: EmployeeManagement サンプル・エンタープライズ・アプリケーションをホストします。このクラスターには、s1 と s2 の 2 つのアプリケーション・サーバーがあります。
- **xsCluster クラスター**: eXtreme Scale コンテナー・サーバーをホストします。このクラスターには、xs1 と xs2 の 2 つのアプリケーション・サーバーがあります。

このデプロイメント・トポロジーでは、s1 および s2 のアプリケーション・サーバーは、データ・グリッドに保管されたデータにアクセスするクライアント・サーバーです。xs1 サーバーと xs2 サーバーは、データ・グリッドをホストするコンテナー・サーバーです。

代替の構成: すべてのアプリケーション・サーバーを、単一のクラスター内で (例えば appCluster クラスター内で) ホストすることができます。この構成では、クラスター内のすべてのサーバーがクライアントとコンテナー・サーバーの両方を兼ねます。このチュートリアルでは、2 つのクラスターを使用して、クライアントをホストしているアプリケーション・サーバーとコンテナー・サーバーをホストしているアプリケーション・サーバーを区別しています。

このチュートリアルでは、WebSphere Application Server セルに含まれないリモート・サーバーで構成されるカタログ・サービス・ドメインを構成します。この構成はデフォルト構成ではなく、カタログ・サーバーはデプロイメント・マネージャー上で稼働し、その他のプロセスは WebSphere Application Server セル内で稼働することになります。リモート・サーバーで構成されるカタログ・サービス・ドメインの作成について詳しくは、WebSphere Application Server でのカタログ・サービス・ドメインの作成を参照してください。

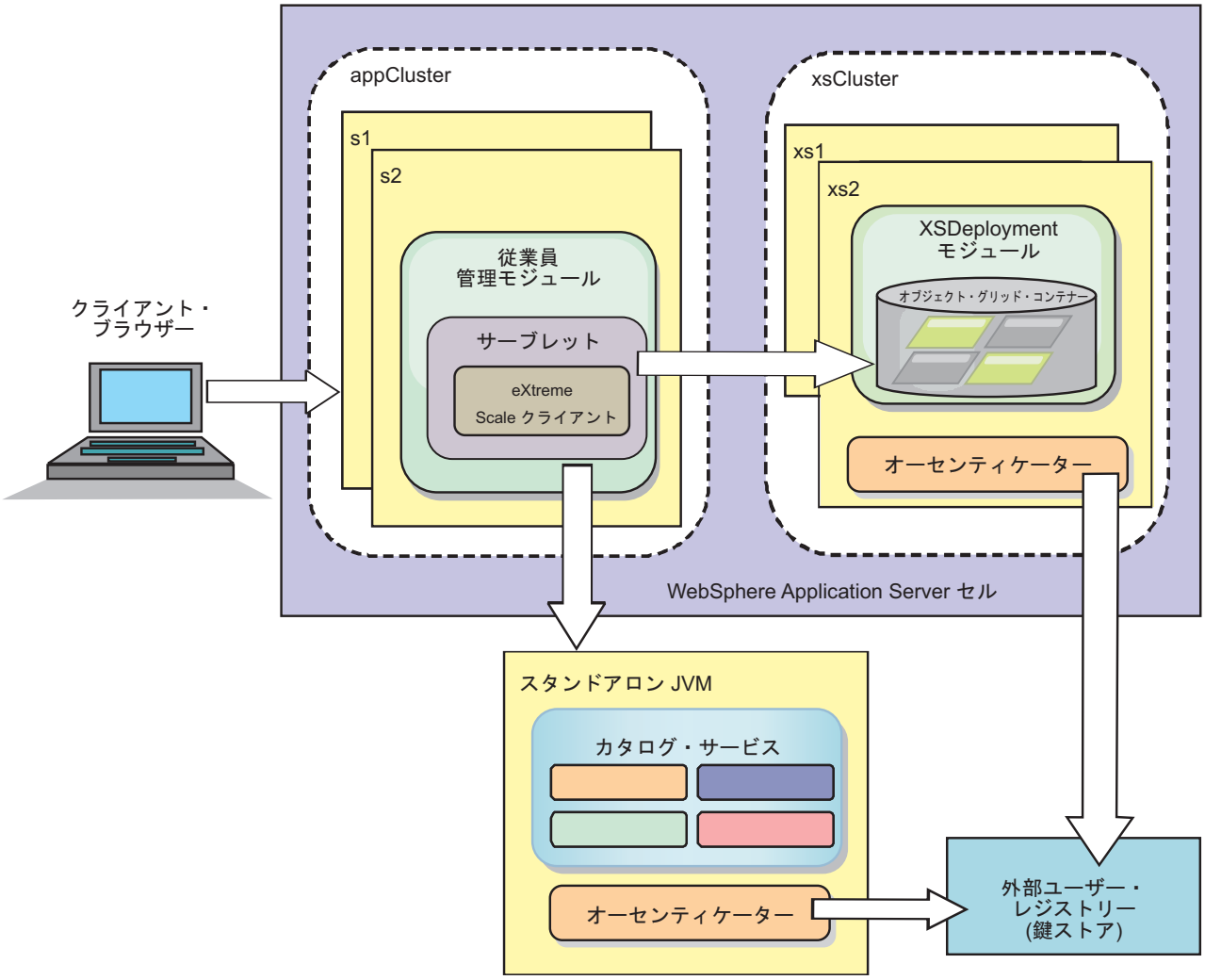


図 4. チュートリアルのトポロジー

アプリケーション: このチュートリアルでは、2 つのアプリケーションと 1 つの共有ライブラリー・ファイルを使用します。

- **EmployeeManagement.ear**: EmployeeManagement.ear アプリケーションは、単純化された Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) エンタープライズ・アプリケーションです。これには、従業員プロファイルを管理するための Web モジュールが含まれます。Web モジュールには、コンテナー・サーバーに保管された従業員プロファイルを表示、挿入、更新、および削除する management.jsp ファイルが含まれます。
- **XSDeployment.ear**: このアプリケーションにはエンタープライズ・アプリケーション・モジュールが含まれ、アプリケーション成果物は含まれません。キャッシュ・オブジェクトは EmployeeData.jar ファイルにパッケージ化されます。EmployeeData.jar ファイルは、XSDeployment.ear ファイルがクラスにアクセスできるように、XSDeployment.ear ファイルの共有ライブラリーとしてデプロイされます。このアプリケーションの目的は、eXtreme Scale 構成ファイルとプロパティー・ファイルをパッケージ化することです。このエンタープライズ・アプリケーションが開始されると、eXtreme Scale ランタイムによって eXtreme Scale 構成

ファイルが自動的に検出され、その結果コンテナー・サーバーが作成されます。これらの構成ファイルには、objectGrid.xml と objectGridDeployment.xml ファイルが含まれます。

- **EmployeeData.jar**: この JAR ファイルは com.ibm.websphere.sample.xs.data.EmployeeData クラスという 1 つのクラスを含んでいます。このクラスは、グリッドに保管される従業員データを表します。この Java アーカイブ (JAR) ファイルは、共有ライブラリーとして EmployeeManagement.ear および XSDeployment.ear ファイルと一緒にデプロイされます。

チュートリアル・ファイルの入手:

1. WASSecurity.zip および security_extauth.zip ファイルを WebSphere eXtreme Scale wiki からダウンロードします。
2. バイナリー成果物やソース成果物を表示するために WASSecurity.zip ファイルを、例えば、wxs_samples/ ディレクトリーなどのディレクトリーに解凍します。今後、チュートリアルの中ではこのディレクトリーを *samples_home* と呼びます。内容の説明やソースを Eclipse ワークスペースにロードする方法については、パッケージ内の README.txt ファイルを参照してください。 次の ObjectGrid 構成ファイルは META-INF ディレクトリーにあります。
   - objectGrid.xml
   - objectGridDeployment.xml
3. この環境を保護するために使用するプロパティー・ファイルを保管するディレクトリーを作成します。 例えば、/opt/wxs/security ディレクトリーを作成します。
4. security_extauth.zip ファイルを *samples_home* に解凍します。security_extauth.zip ファイルには、このチュートリアルで使用される次のセキュリティー構成ファイルが含まれています。構成ファイルは次のとおりです。
   - catServer3.props
   - server3.props
   - client3.props
   - security3.xml
   - xsAuth3.props
   - xsjaas3.config
   - sampleKS3.jks

構成ファイルについて:

objectGrid.xml ファイルと objectGridDeployment.xml ファイルは、アプリケーション・データを保管するデータ・グリッドとマップを作成します。

これらの構成ファイルには、objectGrid.xml と objectGridDeployment.xml という名前を付ける必要があります。アプリケーション・サーバーが始動すると、eXtreme Scale は、EJB および Web モジュールの META-INF ディレクトリーで、これらのファイルを検出します。これらのファイルが検出された場合、Java 仮想マシン (JVM) は構成ファイルの中に定義されたデータ・グリッドのコンテナー・サーバーとして機能するとみなされます。

objectGrid.xml ファイル

objectGrid.xml ファイルは、Grid という名前の ObjectGrid を 1 つ定義します。Grid データ・グリッドには、アプリケーションの従業員プロファイルを保管する 1 つの Map1 というマップがあります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

 <objectGrids>
        <objectGrid name="Grid" txTimeout="15">
            <backingMap name="Map1" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>

</objectGridConfig>
```

objectGridDeployment.xml ファイル

objectGridDeployment.xml ファイルは、Grid データ・グリッドのデプロイ方法を指定します。グリッドがデプロイされると、グリッドは 5 つの区画と 1 つの同期レプリカを持ちます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">

    <objectgridDeployment objectgridName="Grid">
        <mapSet name="mapSet" numberOfPartitions="5" minSyncReplicas="0" maxSyncReplicas="1" >
            <map ref="Map1"/>
        </mapSet>
    </objectgridDeployment>

</deploymentPolicy>
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、チュートリアル用のトポロジーについて学習し、構成ファイルとサンプル・アプリケーションを環境に追加しました。

レッスン 1.2: WebSphere Application Server 環境の構成

チュートリアル用の環境を準備するには、WebSphere Application Server セキュリティーを構成する必要があります。内部ファイル・ベースの統合リポジトリーをユーザー・アカウント・レジストリーとして使用して、管理セキュリティーおよびアプリケーション・セキュリティーを使用可能にします。その後、クライアント・アプリケーションとコンテナー・サーバーをホスティングするサーバー・クラスターを作成できます。カタログ・サーバーも作成して開始する必要があります。

次のステップは、WebSphere Application Server バージョン 7.0 を使用した記述になっています。しかし、考え方は、それより前の WebSphere Application Server バージョンにも適用できます。

WebSphere Application Server セキュリティーの構成:

デプロイメント・マネージャー用のプロファイルと WebSphere eXtreme Scale の各ノード用のプロファイルを作成し、拡張します。詳しくは、 WebSphere Application Server での WebSphere eXtreme Scale または WebSphere eXtreme Scale クライアントのインストールを参照してください。

WebSphere Application Server セキュリティーを構成します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」をクリックします。
2. 「**統合リポジトリー**」を「**使用可能なレルム定義 (Available realm definition)**」として選択します。「**現在の値で設定**」をクリックします。
3. 「**構成..**」をクリックして、「統合リポジトリー」パネルに進みます。
4. 「**1 次管理ユーザー名**」を入力します。例えば、admin です。「**適用**」をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、管理ユーザー・パスワードを指定して、「**OK**」をクリックします。変更を保存します。
6. 「**グローバル・セキュリティー**」ページで、「**統合リポジトリー**」設定が、現行ユーザー・アカウント・レジストリーに設定されていることを確認します。
7. 「**管理セキュリティーを使用可能にする**」、「**アプリケーション・セキュリティーを使用可能にする**」、および「**Java 2 セキュリティーを使用して、アプリケーション・アクセスをローカル・リソースに制限する**」の項目を選択します。「**適用**」をクリックして、変更を保存します。
8. デプロイメント・マネージャーを再始動し、実行中のアプリケーションがあれば再開します。

ユーザー・アカウント・レジストリーとして内部ファイル・ベースの統合リポジトリーを使用して、WebSphere Application Server 管理セキュリティーが使用可能になりました。

サーバー・クラスターの作成:

WebSphere Application Server 構成の中に、次の 2 つのサーバー・クラスターを作成します。appCluster クラスターはチュートリアルのサンプル・アプリケーションをホストし、xsCluster クラスターはデータ・グリッドをホストします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、クラスターのパネルを開きます。 「**サーバー**」 > 「**クラスター**」 > 「**WebSphere Application Server クラスター**」 > 「**新規**」をクリックします。
2. クラスター名に「appCluster」を入力し、「**ローカルを優先**」オプションを選択したままにして、「**次へ**」をクリックします。
3. クラスターの中にサーバーを作成します。 デフォルト・オプションのままにして、s1 という名前のサーバーを作成します。追加の s2 という名前のクラスター・メンバーを追加します。
4. ウィザードの残りのステップを完了して、クラスターを作成します。変更を保存します。
5. 上記のステップを繰り返して、xsCluster クラスターを作成します。このクラスターには、xs1 および xs2 という名前の 2 つのサーバーが含まれています。

カタログ・サービス・ドメインの作成:

サーバー・クラスターとセキュリティーの構成が終了したら、カタログ・サーバーを開始する場所を定義する必要があります。

WebSphere eXtreme Scale のカタログ・サービス・ドメインの定義

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**システム管理**」 > 「**WebSphere eXtreme Scale**」 > 「**カタログ・サービス・ドメイン**」をクリックします。
2. カタログ・サービス・ドメインを作成します。 「**新規**」をクリックします。 `catalogService1` という名前でカタログ・サービス・ドメインを作成し、このカタログ・サービス・ドメインをデフォルトとして使用可能にします。
3. リモート・サーバーをカタログ・サービス・ドメインに追加します。 「**リモート・サーバー**」を選択します。カタログ・サーバーを実行するホスト名を指定します。このサンプルの場合、リスナー・ポート値 `16809` を使用します。
4. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

レッスンのチェックポイント:

WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にし、WebSphere eXtreme Scale のサーバー・トポロジーを作成しました。

モジュール 2: 混合環境での WebSphere eXtreme Scale 認証の構成

認証を構成することで、要求側の ID を確実に判断できます。WebSphere eXtreme Scale は、クライアントとサーバー間の認証も、サーバー相互間の認証もともにサポートします。

認証フロー

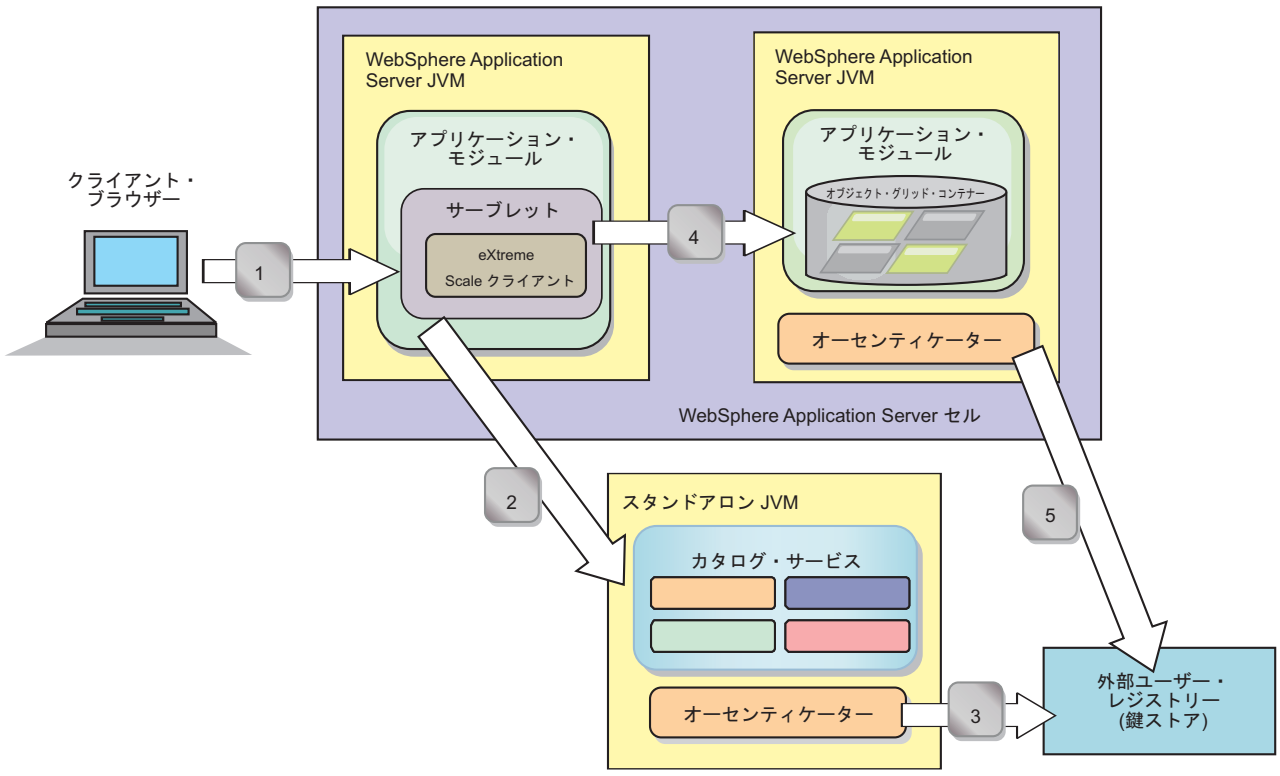


図 5. 認証フロー

直前のダイアグラムには 2 つのアプリケーション・サーバーがあります。最初のアプリケーション・サーバーは、WebSphere eXtreme Scale クライアントでもある Web アプリケーションをホスティングします。2 番目のアプリケーション・サーバーは、コンテナー・サーバーをホスティングします。カタログ・サーバーは、WebSphere Application Server でなくスタンドアロンの Java 仮想マシン (JVM) 内で実行されます。

ダイアグラム内の番号付き矢印は認証の流れを示します。

1. エンタープライズ・アプリケーション・ユーザーが Web ブラウザーにアクセスし、ユーザー名とパスワードを指定して最初のアプリケーション・サーバーにログインします。最初のアプリケーション・サーバーは、ユーザー・レジストリーでの認証のために、クライアントのユーザー名とパスワードをセキュリティー・インフラストラクチャーに送信します。このユーザー・レジストリーは鍵ストアです。結果として、セキュリティー情報が WebSphere Application Server スレッドに保管されます。
2. JavaServer Pages (JSP) ファイルが WebSphere eXtreme Scale クライアントとして機能して、クライアント・プロパティー・ファイルからセキュリティー情報を取得します。WebSphere eXtreme Scale クライアントとして機能する JSP アプリケーションは、要求と一緒に WebSphere eXtreme Scale クライアントのセキュリティー資格情報をカタログ・サーバーに送信します。要求とセキュリティー資格情報を一緒に送信すると、*runAs* モデルと見なされます。 runAs モデルでは、Web ブラウザー・クライアントが WebSphere eXtreme Scale クライアントとして稼働して、コンテナー・サーバーに保管されているデータにアクセスします。クライアントは、Java 仮想マシン (JVM) レベルのクライアント資格情報を使用して WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続します。runAs モデルの使用は、データ・ソース・レベルのユーザー ID とパスワードでデータベースに接続するのと似ています。
3. カタログ・サーバーが WebSphere eXtreme Scale クライアント資格情報を受け取ります。これには、WebSphere Application Server セキュリティー・トークンが含まれています。次に、カタログ・サーバーはクライアント資格情報の認証のためにオーセンティケーター・プラグインを呼び出します。オーセンティケーターは外部ユーザー・レジストリーに接続し、認証のためにクライアント資格情報をユーザー・レジストリーに送信します。
4. クライアントがユーザー ID とパスワードをアプリケーション・サーバー内でホスティングされるコンテナー・サーバーに送信します。
5. アプリケーション・サーバー内でホスティングされるコンテナー・サービスが、ユーザー ID とパスワードがペアになった WebSphere eXtreme Scale クライアント資格情報を受け取ります。次に、コンテナー・サーバーはクライアント資格情報の認証のためにオーセンティケーター・プラグインを呼び出します。オーセンティケーターは鍵ストアのユーザー・レジストリーに接続し、認証のためにクライアント資格情報をユーザー・レジストリーに送信します。

学習目標

このモジュールのレッスンでは、以下の方法について学習します。

- WebSphere eXtreme Scale クライアント・セキュリティーを構成する。
- WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバー・セキュリティーを構成する。

- WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバー・セキュリティーを構成する。
- サンプル・アプリケーションをインストールして実行する。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

レッスン 2.1: WebSphere eXtreme Scale クライアント・セキュリティーの構成

クライアント・プロパティーはプロパティー・ファイルを使用して構成します。クライアント・プロパティー・ファイルで、使用する CredentialGenerator 実装クラスを指示します。

クライアント・プロパティー・ファイルの内容:

このチュートリアルでは、クライアント資格情報に WebSphere Application Server セキュリティー・トークンを使用します。*samples_home*/security_extauth ディレクトリーには client3.props ファイルがあります。

client3.props ファイルは、次の設定を含んでいます。

securityEnabled
WebSphere eXtreme Scale クライアント・セキュリティーを使用可能にします。値を true に設定して、クライアントが有効なセキュリティー情報をサーバーに送信する必要があることを示します。

credentialAuthentication
クライアントの資格情報認証のサポートを指定します。値を Supported に設定して、クライアントが資格情報認証をサポートすることを示します。

credentialGeneratorClass
com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator インターフェースを実装するクラスの名前を指定します。値を com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredentialGenerator クラスに設定して、クライアントが UserPasswordCredentialGenerator クラスからセキュリティー情報を取得できるようにします。

credentialGeneratorProps
ユーザー名とパスワード (manager manager1) を指定します。ユーザー名は manager で、パスワードは manager1 です。**FilePasswordEncoder.bat|sh** コマンドを使用して、排他 OR (xor) アルゴリズムを使用してこのプロパティーをエンコードすることもできます。

Java 仮想マシン (JVM) プロパティーを使用したクライアント・プロパティー・ファイルの設定:

管理コンソールで、appCluster クラスター内の s1 サーバーと s2 サーバーのそれぞれに対し次のステップを実行します。別のトポロジーを使用している場合は、EmployeeManagement アプリケーションがデプロイされるすべてのアプリケーション・サーバーに対し次のステップを実行してください。

1. 「**サーバー**」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「*server_name*」 > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」を選択します。
2. 次の汎用 JVM プロパティーを作成して、クライアント・プロパティー・ファイルの場所を設定します。

   ```
   -Dobjectgrid.client.props=samples_home/security_extauth/client3.props
   ```
3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

レッスンのチェックポイント:

クライアント・プロパティー・ファイルを編集し、クライアント・プロパティー・ファイルを使用するよう appCluster クラスター内のサーバーを構成しました。このプロパティー・ファイルで、使用する CredentialGenerator 実装クラスを指示します。

レッスン 2.2: カタログ・サーバー・セキュリティーの構成

カタログ・サーバーには、2 つの異なるレベルのセキュリティー情報があります。第 1 レベルの情報には、カタログ・サービスとコンテナー・サーバーを含むすべての WebSphere eXtreme Scale サーバーに共通するセキュリティー・プロパティーが含まれます。第 2 レベルの情報には、カタログ・サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーが含まれます。

カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーに共通するセキュリティー・プロパティーは、セキュリティー XML 記述子ファイル内に構成します。共通プロパティーの例の 1 つは、ユーザー・レジストリーと認証メカニズムを表すオーセンティケーター構成です。セキュリティー・プロパティーの詳細については、セキュリティー記述子 XML ファイルを参照してください。

Java SE 環境でセキュリティー XML 記述子ファイルを構成するには、**startOgServer** または **startXsServer** コマンドの実行時に **-clusterSecurityFile** オプションを使用します。値はファイル・フォーマット (*samples_home*/security_extauth/security3.xml など) で指定します。

security3.xml ファイル:

このチュートリアルで、security3.xml ファイルは、*samples_home*/security_extauth ディレクトリーにあります。コメントを削除した security3.xml ファイルの内容を次に示します。

```
<securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">

 <security securityEnabled="true">
  <authenticator
 className="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginAuthenticator">
  </authenticator>
 </security>
</securityConfig>
```

security3.xml ファイル内に定義されているプロパティーは次のとおりです。

securityEnabled

securityEnabled プロパティーは `true` に設定され、WebSphere eXtreme Scale グローバル・セキュリティーが使用可能なことをカタログ・サーバーに指示します。

authenticator

オーセンティケーターは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginAuthenticator クラスとして構成されます。この Authenticator プラグインの組み込み実装により、ユーザー ID とパスワードが渡され、それらが鍵ストア・ファイル内に構成されているか検査されます。KeyStoreLoginAuthenticator クラスは `KeyStoreLogin` ログイン・モジュール別名を使用するため、Java 認証・承認サービス (JAAS) ログイン構成が必要です。

`catServer3.props` ファイル:

サーバー・プロパティー・ファイルは、サーバー固有のプロパティーを保管し、これにはサーバー固有のセキュリティー・プロパティーも含まれます。詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。**`startOgServer`** または **`startXsServer`** コマンドの実行時に **`-serverProps`** オプションを使用して、カタログ・サーバー・プロパティーを指定できます。このチュートリアルの場合、`catServer3.props` ファイルは C ディレクトリーにあります。コメントを削除した `catServer3.props` ファイルの内容を次に示します。

```
securityEnabled=true
credentialAuthentication=Required
transportType=TCP/IP
secureTokenManagerType=none
authenticationSecret=ObjectGridDefaultSecret
```

securityEnabled

securityEnabled プロパティーは `true` に設定され、このカタログ・サーバーがセキュア・サーバーであることを示します。

credentialAuthentication

credentialAuthentication プロパティーは `Required` に設定され、サーバーに接続するすべてのクライアントが資格情報の提供を要求されます。クライアント・プロパティー・ファイル内では credentialAuthentication の値が `Supported` に設定されるため、サーバーはクライアントによって送信された資格情報を受け取ります。

secureTokenManagerType

secureTokenManagerType は `none` に設定され、既存のサーバーに結合するとき認証の機密事項が暗号化されないことを示します。

authenticationSecret

authenticationSecret プロパティーは `ObjectGridDefaultSecret` に設定されます。 eXtreme Scale サーバー・クラスターに結合するとき、この秘密ストリングが使用されます。サーバーがデータ・グリッドに結合する場合、秘密ストリングの表示を求められます。結合サーバーの秘密ストリングがカタログ・サーバーのいずれかの秘密ストリングと一致する場合は、結合サーバーは受け入れられます。ストリングが一致しない場合、結合要求は拒否されます。

transportType

transportType プロパティーは、当初 TCP/IP に設定します。後ほどチュートリアルの中で、トランスポート・セキュリティーを使用可能にします。

xsjaas3.config ファイル:

KeyStoreLoginAuthenticator 実装はログイン・モジュールを使用するため、JAAS 認証ログイン構成ファイルを使用してログイン・モデルを構成する必要があります。xsjaas3.config ファイルの内容を次に示します。

```
KeyStoreLogin{
com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginModule required
     keyStoreFile="samples_home/security_extauth/sampleKS3.jks" debug = true;
};
```

samples_home に /wxs_samples/ 以外の場所を使用した場合は、keyStoreFile の場所を更新する必要があります。このログイン構成は、ログイン・モジュールとして com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginModule モジュールを使用することを指示します。鍵ストア・ファイルは sampleKS3.jks ファイルに設定されます。

sampleKS3.jks サンプル鍵ストア・ファイルは、2 組のユーザー ID とパスワード (manager/manager1 と cashier/cashier1) を保管します。

次の **keytool** コマンドを使用して、この鍵ストアを作成できます。

- ```
  keytool -genkey -v -keystore ./sampleKS3.jks -storepass sampleKS1
  -alias manager -keypass manager1 -dname CN=manager,O=acme,OU=OGSample
  -validity 10000
  ```
- ```
  keytool -genkey -v -keystore ./sampleKS3.jks -storepass sampleKS1
  -alias operator -keypass operator1 -dname CN=operator,O=acme,OU=OGSample
  -validity 10000
  ```

セキュリティーが使用可能なカタログ・サーバーを開始する:

カタログ・サーバーを開始するには、セキュリティー・プロパティーを渡す **-clusterFile** および **-serverProps** パラメーターを指定して **startOgServer** または **startXsServer** コマンドを実行します。

カタログ・サーバーを開始するときはスタンドアロン・インストールの WebSphere eXtreme Scale を使用してください。スタンドアロン・インストール・イメージを使用するときは、IBM SDK を使用しなければなりません。IBM SDK を指すように *JAVA_HOME* 変数を設定すると、WebSphere Application Server 内に組み込まれている SDK を使用できます。例: set JAVA_HOME=*was_root*/IBM/WebSphere/AppServer/java/

1. bin ディレクトリーに移動します。

   ```
   cd wxs_home/bin
   ```

2. **startOgServer** または **startXsServer** コマンドを実行します。

   Linux UNIX

   ```
   ./startOgServer.sh cs1 -listenerPort 16809 -JMXServicePort 16099 -catalogServiceEndPoints
   cs1:[HOST_NAME]:16601:16602 -clusterSecurityFile samples_home/security_extauth/security3.xml
   -serverProps samples_home/security_extauth/catServer3.props -jvmArgs
   -Djava.security.auth.login.config="samples_home/security_extauth/xsjaas3.config"
   ```

Windows

```
startOgServer.bat cs1 -listenerPort 16809 -JMXServicePort 16099 -catalogServiceEndPoints
cs1:[HOST_NAME]:16601:16602 -clusterSecurityFile samples_home/security_extauth/security3.xml
-serverProps samples_home/security_extauth/catServer3.props -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="samples_home/security_extauth/xsjaas3.config"
```

Linux UNIX 8.6+

```
./startXsServer.sh cs1 -listenerPort 16809 -JMXServicePort 16099 -catalogServiceEndPoints
cs1:[HOST_NAME]:16601:16602 -clusterSecurityFile samples_home/security_extauth/security3.xml
-serverProps samples_home/security_extauth/catServer3.props -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="samples_home/security_extauth/xsjaas3.config"
```

Windows 8.6+

```
startXsServer.bat cs1 -listenerPort 16809 -JMXServicePort 16099 -catalogServiceEndPoints
cs1:[HOST_NAME]:16601:16602 -clusterSecurityFile samples_home/security_extauth/security3.xml
-serverProps samples_home/security_extauth/catServer3.props -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="samples_home/security_extauth/xsjaas3.config"
```

startOgServer または **startXsServer** コマンドを実行すると、リスナー・ポート 16809、クライアント・ポート 16601、ピア・ポート 16602、および JMX ポート 16099 を使用するセキュア・サーバーが開始します。ポートが競合する場合は、未使用のポート番号にポート番号を変更してください。

セキュリティーが使用可能なカタログ・サーバーを停止する:

stopOgServer または **stopXsServer** コマンドを使用して、カタログ・サーバーを停止できます。

1. bin ディレクトリーに移動します。

   ```
   cd wxs_home/bin
   ```

2. **stopOgServer** または **stopXsServer** コマンドを実行します。 Linux UNIX

   ```
   stopOgServer.sh cs1 -catalogServiceEndPoints localhost:16809 -clientSecurityFile
   samples_home/security_extauth/client3.props
   ```

   Windows

   ```
   stopOgServer.bat cs1 -catalogServiceEndPoints localhost:16809 -clientSecurityFile
   samples_home/security_extauth/client3.props
   ```

   Linux UNIX 8.6+

   ```
   stopXsServer.sh cs1 -catalogServiceEndPoints localhost:16809 -clientSecurityFile
   samples_home/security_extauth/client3.props
   ```

   Windows 8.6+

   ```
   stopXsServer.bat cs1 -catalogServiceEndPoints localhost:16809 -clientSecurityFile
   samples_home/security_extauth/client3.props
   ```

レッスンのチェックポイント:

security3.xml、catServer3.props、xsjaas3.config ファイルをカタログ・サービスに関連付けることで、カタログ・サーバー・セキュリティーを構成しました。

レッスン 2.3: コンテナー・サーバー・セキュリティーの構成

コンテナー・サーバーがカタログ・サービスに接続すると、コンテナー・サーバーは、ObjectGrid セキュリティー XML ファイル内に構成されているセキュリティー構成をすべて取得します。ObjectGrid セキュリティー XML ファイルは、オーセンティケーター構成、ログイン・セッション・タイムアウト値、およびその他の構成情報を定義します。コンテナー・サーバーは、サーバー・プロパティー・ファイル内にそのサーバー固有のセキュリティー・プロパティーも保持します。

-Dobjectgrid.server.props Java 仮想マシン (JVM) プロパティーを使用して、サーバー・プロパティー・ファイルを構成します。このプロパティーに指定するファイル名は、*samples_home*/security_extauth/server3.props などの絶対ファイル・パスです。

このチュートリアルでは、コンテナー・サーバーは xsCluster クラスター内の xs1 および xs2 サーバーでホスティングされます。

server3.props ファイル:

server3.props ファイルは、*samples_home*/security_extauth/ ディレクトリーにあります。 server3.props ファイルの内容を次に示します。

```
securityEnabled=true
credentialAuthentication=Required
secureTokenManagerType=none
authenticationSecret=ObjectGridDefaultSecret
```

securityEnabled

securityEnabled プロパティーは true に設定され、このコンテナー・サーバーがセキュア・サーバーであることを示します。

credentialAuthentication

credentialAuthentication プロパティーは Required に設定され、サーバーに接続するすべてのクライアントが資格情報の提供を要求されます。クライアント・プロパティー・ファイル内では credentialAuthentication プロパティーが Supported に設定されるため、サーバーはクライアントによって送信された資格情報を受け取ります。

secureTokenManagerType

secureTokenManagerType は none に設定され、既存のサーバーに結合するとき認証の機密事項が暗号化されないことを示します。

authenticationSecret

authenticationSecret プロパティーは ObjectGridDefaultSecret に設定されます。 eXtreme Scale サーバー・クラスターに結合するとき、この秘密ストリングが使用されます。サーバーがデータ・グリッドに結合する場合、秘密ストリングの表示を求められます。結合サーバーの秘密ストリングがカタログ・サーバーのいずれかの秘密ストリングと一致する場合は、結合サーバーは受け入れられます。ストリングが一致しない場合、結合要求は拒否されます。

JVM プロパティーによるサーバー・プロパティー・ファイルの設定:

xs1 サーバーと xs2 サーバーにサーバー・プロパティー・ファイルを設定します。使用するトポロジーがこのチュートリアルと異なる場合は、コンテナー・サーバー

のホスティングに使用するすべてのアプリケーション・サーバーにサーバー・プロパティー・ファイルを設定してください。

1. サーバーの Java 仮想マシン・ページを開きます。 「**サーバー**」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「*server_name*」 > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」を選択します。
2. 汎用 JVM 引数を追加します。

   ```
   -Dobjectgrid.server.props=samples_home/security_extauth/server3.props
   ```

3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

カスタム・ログイン・モジュールの追加:

コンテナー・サーバーは、カタログ・サーバーと同じ KeyStoreAuthenticator 実装を使用します。KeyStoreAuthenticator 実装は、**KeyStoreLogin** ログイン・モジュール別名を使用します。このため、カスタム・ログイン・モジュールをアプリケーション・ログイン・モデルのエントリーに追加する必要があります。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」 > 「**Java 認証・承認サービス**」をクリックします。
2. 「**アプリケーション・ログイン**」をクリックします。
3. 「**新規**」をクリックし、別名 KeyStoreLogin を追加します。「**適用**」をクリックします。
4. 「**JAAS ログイン・モジュール**」の下で「**新規**」をクリックします。
5. モジュール・クラス名に com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginModule を入力し、認証ストラテジーとして **SUFFICIENT** を選択します。「**適用**」をクリックします。
6. keyStoreFile カスタム・プロパティーを追加し、値 *samples_home*/security_extauth/sampleKS.jks を指定します。
7. オプション: debug カスタム・プロパティーを追加し、値 true を指定します。
8. 構成を保存します。

レッスンのチェックポイント:

これで、WebSphere eXtreme Scale サーバー認証は保護されます。このセキュリティーを構成することで、WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続しようとするすべてのアプリケーションが資格情報の提供を要求されます。このチュートリアルでは、KeyStoreLoginAuthenticator がオーセンティケーターです。結果として、クライアントはユーザー名とパスワードの提供を要求されます。

レッスン 2.4: サンプルのインストールと実行

認証の構成が終了したら、サンプル・アプリケーションをインストールして実行できます。

EmployeeData.jar ファイルの共有ライブラリーの作成:

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**共有ライブラリー**」ページを開きます。 「**環境**」 > 「**共有ライブラリー**」をクリックします。
2. 「**セル**」スコープを選択します。

3. 共有ライブラリーを作成します。 「**新規**」をクリックします。「**名前**」に「EmployeeManagementLIB」を入力します。クラスパスに、EmployeeData.jar へのパスを入力します。例えば、*samples_home*/WASSecurity/EmployeeData.jar です。
4. 「**適用**」をクリックします。

サンプルのインストール:

1. *samples_home*/security_extauth ディレクトリーの下にある EmployeeManagement_extauth.ear ファイルをインストールします。

   重要: EmployeeManagement_extauth.ear ファイルは、*samples_home*/WASSecurity/EmployeeManagement.ear ファイルとは異なります。ObjectGrid セッションを取得する方法が 更新され、EmployeeManagement_extauth.ear アプリケーションでクライアント・プロパティー・ファイルのキャッシュに入れられた資格情報を使用するようになりました。この変更に応じて更新されたコードを確認するには、*samples_home*/WASSecurity/EmployeeManagementWeb プロジェクトの com.ibm.websphere.sample.xs.DataAccessor クラスのコメントを参照してください。

   a. 「**アプリケーション**」 > 「**新規アプリケーション**」 > 「**新規エンタープライズ・アプリケーション**」をクリックして、インストールを開始します。アプリケーションをインストールする詳細なパスを選択します。
   b. 「**モジュールをサーバーにマップ**」ステップで、appCluster クラスターを指定して、EmployeeManagementWeb モジュールをインストールします。
   c. 「**共有ライブラリーをマップ**」ステップで、「EmployeeManagementWeb」モジュールを選択します。
   d. 「**Reference shared libraries**」をクリックします。「EmployeeManagementLIB」ライブラリーを選択します。
   e. webUser ロールを、「**アプリケーションのレルム内のすべての認証済み**」にマップします。
   f. 「**OK**」をクリックします。

   クライアントは、このクラスター内の s1 サーバーと s2 サーバーで実行されます。
2. *samples_home*/WASSecurity ディレクトリーにあるサンプル XSDeployment.ear ファイルをインストールします。
   a. 「**アプリケーション**」 > 「**新規アプリケーション**」 > 「**新規エンタープライズ・アプリケーション**」をクリックして、インストールを開始します。アプリケーションをインストールする詳細なパスを選択します。
   b. 「**モジュールをサーバーにマップ**」ステップで、xsCluster クラスターを指定して、XSDeploymentWeb Web モジュールをインストールします。
   c. 「**共有ライブラリーをマップ**」ステップで、「XSDeploymentWeb」モジュールを選択します。
   d. 「**Reference shared libraries**」をクリックします。「EmployeeManagementLIB」ライブラリーを選択します。
   e. 「**OK**」をクリックします。

このクラスター内の xs1 サーバーと xs2 サーバーがコンテナー・サーバーをホスティングします。

3. カタログ・サーバーが開始していることを確認します。 このチュートリアル用のカタログ・サーバーを開始する方法について詳しくは、93 ページの『セキュリティーが使用可能なカタログ・サーバーを開始する』を参照してください。
4. xsCluster クラスターを再始動します。xsCluster が始動すると、XSDeployment アプリケーションが開始し、xs1 と xs2 サーバーのそれぞれでコンテナー・サーバーが開始します。 xs1 サーバーと xs2 サーバーの SystemOut.log ファイルを調べると、サーバー・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す次のメッセージが表示されます。

   ```
   CWOBJ0913I: 次のサーバー・プロパティー・ファイルがロードされました。
   samples_home/security_extauth/server3.props.
   ```

5. appClusters クラスターを再始動します。 クラスター appCluster が始動すると、EmployeeManagement アプリケーションも開始します。 s1 サーバーと s2 サーバーの SystemOut.log ファイルを調べると、クライアント・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す次のメッセージが表示されます。

   ```
   CWOBJ0924I: クライアント・プロパティー・ファイル {0} がロードされました。
   ```

   WebSphere eXtreme Scale バージョン 7.0 を使用している場合は、クライアント・プロパティー・ファイルがロードされたことを示す CWOBJ9000I メッセージ (英語のみ) が表示されます。 予期されるメッセージが表示されない場合は、JVM 引数に -Dobjectgrid.server.props または -Dobjectgrid.client.props プロパティーを適切に構成したか確認してください。プロパティーを確実に構成済みの場合、ダッシュ (-) が UTF 文字であるか確認してください。

サンプル・アプリケーションの実行:

1. management.jsp ファイルを実行します。 Web ブラウザーで、http://<*your_servername*>:<*port*>/EmployeeManagementWeb/management.jsp にアクセスします。 例えば、次のような URL を使用できます。http://localhost:9080/EmployeeManagementWeb/management.jsp。
2. アプリケーションに認証を提供します。 webUser ロールにマップしたユーザーの資格情報を入力します。デフォルトでは、このユーザー・ロールはすべての認証済みユーザーにマップされます。有効なユーザー名とパスワード (管理ユーザー名とパスワードなど) を入力します。 従業員を表示、追加、更新、および削除するページが表示されます。
3. 従業員を表示します。 「**Display an Employee**」をクリックします。E メール・アドレスに「emp1@acme.com」を入力し、「**Submit**」をクリックします。従業員が見つからないというメッセージが表示されます。
4. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレスとして emp1@acme.com を入力し、名として Joe を入力し、姓として Doe を入力します。「**Submit**」をクリックします。 emp1@acme.com アドレスを持つ従業員が追加されたというメッセージが表示されます。
5. 新しい従業員を表示します。 「**Display an Employee**」をクリックします。E メール・アドレスとして emp1@acme.com を入力し、姓と名のフィールドは空のままにして「**Submit**」をクリックします。従業員が見つかったというメッセージが表示され、名フィールドと姓フィールドに正しい名前が表示されます。

6. 従業員を削除します。 「**Delete an employee**」をクリックします。「emp1@acme.com」を入力し、「**Submit**」をクリックします。従業員が削除されたというメッセージが表示されます。

カタログ・サーバーのトランスポート・タイプは TCP/IP に設定されているため、サーバー s1 および s2 のアウトバウンド・トランスポート設定が SSL-Required に設定されていないことを確認してください。そうでないと、例外が発生します。カタログ・サーバーのシステム出力ファイルである logs/cs1/SystemOut.log ファイルを調べると、鍵ストア認証を示す次のデバッグ出力があります。

```
SystemOut     0 [KeyStoreLoginModule] initialize: Successfully loaded key store
SystemOut     0 [KeyStoreLoginModule] login: entry
SystemOut     0 [KeyStoreLoginModule] login: user entered user name: manager
SystemOut     0   Print out the certificates:
...
```

レッスンのチェックポイント:

サンプル・アプリケーションをインストールして実行しました。

モジュール 3: トランスポート・セキュリティーの構成

構成の中のクライアントとサーバー間のデータ転送をセキュアにするために、トランスポート・セキュリティーを構成します。

前のチュートリアル・モジュールにおいて、WebSphere eXtreme Scale 認証を使用可能に設定しました。認証を使用可能に設定すると、WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続を試みるすべてのアプリケーションは、資格情報の提供を要求されます。したがって、非認証クライアントは WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続できません。クライアントは、WebSphere Application Server セルの中で実行される認証アプリケーションでなければなりません。

このモジュールまでの構成では、appCluster クラスター内のクライアントと xsCluster クラスター内のサーバー間のデータ転送は、暗号化されません。ご使用の WebSphere Application Server クラスターがファイアウォールで囲まれたサーバーにインストールされている場合は、この構成を受け入れることができます。しかし、シナリオによっては、たとえトポロジーがファイアウォールで保護されるとしても、何らかの理由で、暗号化されていないトラフィックは、受け入れられない場合もあります。例えば、政府の方針で、暗号化トラフィックが強制される場合もあります。WebSphere eXtreme Scale は、ObjectGrid エンドポイント (クライアント・サーバー、コンテナー・サーバー、およびカタログ・サーバーが含まれる) 間のセキュア通信のために Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) をサポートします。

このサンプル・デプロイメントでは、 eXtreme Scale クライアント・サーバーとコンテナー・サーバーは、すべて WebSphere Application Server 環境で実行されます。eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーは Application Server Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIV2) トランスポート設定によって管理されるため、クライアント・プロパティーとサーバー・プロパティーは、SSL 設定の構成には必要ありません。WebSphere eXtreme Scale サーバーは、このサーバーが実行されるアプリケーション・サーバーと同じオブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) インスタンスを使用します。この CSIv2 トランスポート設定を使用し

て、WebSphere Application Server 構成内のクライアント・サーバーとコンテナー・サーバーに対してすべての SSL 設定を指定してください。カタログ・サーバーの場合は、そのサーバー・プロパティー・ファイルの中で SSL プロパティーを構成する必要があります。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- CSIv2 のインバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートの構成。
- SSL プロパティーのカタログ・サーバー・プロパティー・ファイルへの追加。
- ORB プロパティー・ファイルの確認。
- サンプルを実行します。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

前提条件

このチュートリアル・ステップは、これまでのモジュールの上に組み立てられています。トランスポート・セキュリティーを構成する前に、このチュートリアルのこれまでのモジュールを完了してください。

レッスン 3.1: CSIv2 のインバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートの構成

サーバー・トランスポートの Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) を構成するには、クライアント、カタログ・サーバー、およびコンテナー・サーバーをホストするすべての WebSphere Application Server サーバーに対して、Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIv2) インバウンド・トランスポートと CSIv2 アウトバウンド・トランスポートを `SSL-Required` に設定します。

チュートリアルで使用するサンプルのトポロジーでは、s1、s2、xs1、および xs2 アプリケーション・サーバーに対して、これらのプロパティーを設定する必要があります。次のステップでは、構成内のすべてのサーバーのインバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートを構成します。

管理コンソールで、インバウンド・トランスポートとアウトバウンド・トランスポートを設定します。管理セキュリティーが使用可能であることを確認します。

- **WebSphere Application Server バージョン 7.0 の場合**: 「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」 > 「**RMI/IIOP セキュリティー**」 > 「**CSIv2 インバウンド通信**」をクリックします。CSIv2 Transport Layer の下のトランスポート・タイプを「**SSL 必須**」に変更します。このステップを繰り返して、CSIv2 アウトバウンド通信を構成します。

中央で管理されるエンドポイント・セキュリティー設定を使用したり、SSL リポジトリーを構成したりできます。詳しくは、Common Secure Interoperability バージョン 2 トランスポート・インバウンド設定を参照してください。

レッスン 3.2: SSL プロパティーのカタログ・サーバー・プロパティー・ファイルへの追加

カタログ・サーバーは WebSphere Application Server の外側で実行されるため、サーバー・プロパティー・ファイルを使用して SSL プロパティーを構成する必要があります。

サーバー・プロパティー・ファイルで SSL プロパティーを構成するのには他にも理由があります。つまり、カタログ・サーバーには、WebSphere Application Server Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIV2) トランスポート設定によって管理できない専用のトランスポート・パスがあるということです。したがって、カタログ・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルで Secure Sockets Layer (SSL) プロパティーを構成する必要があります。

catServer3.props ファイル内の SSL プロパティー:

```
alias=default
contextProvider=IBMJSSE2
protocol=SSL
keyStoreType=PKCS12
keyStore=/was_root/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/
<deployment_manager_name>/config/cells/<cell_name>/nodes/
<node_name>/key.p12
keyStorePassword=WebAS
trustStoreType=PKCS12
trustStore=/was_root/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/
<deployment_manager_name>/config/cells/<cell_name>/nodes/
<node_name>/trust.p12
trustStorePassword=WebAS
clientAuthentication=false
```

catServer3.props ファイルは、デフォルトの WebSphere Application Server ノード・レベルの鍵ストアとトラストストアを使用しています。より複雑なデプロイメント環境をデプロイする場合は、それにふさわしい鍵ストアとトラストストアを選択する必要があります。場合によっては、鍵ストアとトラストストアを作成し、他のサーバーの鍵ストアから鍵をインポートする必要があります。 WebSphere Application Server 鍵ストアおよびトラストストアのデフォルト・パスワードは WebAS ストリングですので、忘れないでください。詳しくは、デフォルト自己署名証明書の構成を参照してください。

これらのエントリーは、既にコメントとして *samples_home*/security_extauth/catServer3.props ファイルに含まれています。これらのエントリーのコメントを外し、ご使用のインストール済み環境に合わせて *was_root*、<*deployment_manager_name*>、<*cell_name*>、および <*node_name*> の各変数を更新することができます。

SSL プロパティーの構成が終わったならば、transportType プロパティー値を TCP/IP から SSL-Required に変更してください。

client3.props ファイル内の SSL プロパティー:

client3.props ファイルの中でも SSL プロパティーを構成する必要があります。このファイルは、WebSphere Application Server の外側で実行中のカタログ・サーバーを停止するときに使用されます。

これらのプロパティーは、WebSphere Application Server で実行中のクライアント・サーバーには影響しません。というのも、これらのクライアント・サーバーは

WebSphere Application Server Common Security Interoperability Protocol Version 2 (CSIV2) トランスポート設定を使用するからです。ただし、カタログ・サーバーを停止する場合は、**stopOgServer** コマンドでクライアント・プロパティー・ファイルを指定する必要があります。<SAMPLES_HOME>/security_extauth/client3.props ファイル中の以下のプロパティーを、上記の catServer3.props ファイルで指定した値と一致するように設定してください。

```
#contextProvider=IBMJSSE2
#protocol=SSL
#keyStoreType=PKCS12
#keyStore=/was_root/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/
<deployment_manager_name>/config/cells/<cell_name>/nodes/
<node_name>/key.p12
#keyStorePassword=WebAS
#trustStoreType=PKCS12
#trustStore=/was_root/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/
<deployment_manager_name>/config/cells/<cell_name>/nodes/
<node_name>/trust.p12
#trustStorePassword=WebAS
```

catServer3.props ファイルと同じように、*samples_home*/security_extauth/client3.props ファイルの中に既に提供されているコメントを利用して、*was_root*、<*deployment_manager_name*>、<*cell_name*>、および <*node_name*> の各変数を、ご使用の環境に合うように更新することができます。

レッスンのチェックポイント:

カタログ・サーバーの SSL プロパティーを構成しました。

レッスン 3.3: サンプルの実行

すべてのサーバーを再始動し、再度、サンプル・アプリケーションを実行します。問題なくステップを実行できるはずです。

サンプル・アプリケーションの実行およびインストールについて詳しくは、96 ページの『レッスン 2.4: サンプルのインストールと実行』を参照してください。

モジュール 4: WebSphere Application Server の Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可の使用

クライアントの認証の構成が完了したので、さらに細かい許可を構成して、ユーザーごとに異なるアクセス権を付与できます。例えば、「operator」ユーザーはデータの表示のみが可能で、一方「manager」ユーザーはすべての操作を実行できます。

このチュートリアルの前のモジュールと同様に、クライアントを認証した後、eXtreme Scale 許可メカニズムによりセキュリティー特権を付与することができます。このチュートリアルの前のモジュールでは、WebSphere Application Server との統合を使用して、データ・グリッドの認証を使用可能にする方法について説明しました。結果として、非認証クライアントは、eXtreme Scale サーバーに接続したり、システムに要求を実行依頼したりすることができません。ただし、認証されている各クライアントは、ObjectGrid マップに格納されているデータの読み取り、書き込み、削除など、サーバーに対して同じアクセス権または特権を持っています。クライアントは、どのような照会でも実行できます。

チュートリアルのこの部分では、eXtreme Scale 許可を使用して認証ユーザーにさまざまな特権を付与する方法について説明します。 WebSphere eXtreme Scale はアクセス権ベースの許可メカニズムを使用します。さまざまな許可クラスによって表さ

れるさまざまな許可カテゴリーを割り当てることができます。このモジュールでは、MapPermission クラスを取り上げます。使用できるすべての許可のリストについては、 900 ページの『クライアント許可プログラミング』を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale では、`com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission` クラスは eXtreme Scale リソース、特に ObjectMap インターフェースまたは JavaMap インターフェースのメソッドに対する許可を表しています。 WebSphere eXtreme Scale は、ObjectMap および JavaMap のメソッドにアクセスするための以下の許可ストリングを定義します。

- **read**: マップからデータを読み取る許可を与えます。
- **write**: マップのデータを更新する許可を与えます。
- **insert**: マップにデータを挿入する許可を与えます。
- **remove**: マップからデータを削除する許可を与えます。
- **invalidate**: マップからのデータを無効にする許可を与えます。
- **all**: read、write、insert、remove、および invalidate に対するすべての許可を与えます。

許可は、eXtreme Scale クライアントがデータ・アクセス API (ObjectMap API、JavaMap API、EntityManager API など) を使用したときに発生します。メソッドが呼び出されるときに、ランタイムは、対応するマップ許可を検査します。必要な許可がクライアントに与えられていない場合は、AccessControlException 例外になります。このチュートリアルでは、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用して、さまざまなユーザーに対する許可マップ・アクセスを付与する方法について説明します。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業の実行方法を理解できます。

- WebSphere eXtreme Scale の許可を使用可能にする。
- ユーザー・ベースの許可を使用可能にする。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

レッスン 4.1: WebSphere eXtreme Scale 許可を使用可能にする

WebSphere eXtreme Scale の許可を使用可能にするには、特定の ObjectGrid のセキュリティーを使用可能にする必要があります。

ObjectGrid で許可を使用可能にするには、 XML ファイルで、その特定の ObjectGrid の **securityEnabled** 属性を true に設定する必要があります。このチュートリアルの場合、*samples_home*/WASSecurity ディレクトリーにある `XSDeployment_sec.ear` ファイルを使用するか (このファイルは、`objectGrid.xml` ファイル内で既にセキュリティーが設定されています)、既存の `objectGrid.xml` ファイルを編集して、セキュリティーを使用可能にできます。このレッスンでは、ファイルを編集してセキュリティーを使用可能にする方法を例示します。

1. オプション: XSDeployment.ear ファイル内のファイルを抽出してから、XSDeploymentWeb.war ファイルを unzip します。
2. オプション: objectGrid.xml ファイルを開いて、ObjectGrid レベルで **securityEnabled** 属性を true に設定します。次のサンプルでこの属性の例を参照してください。

```
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

    <objectGrids>
        <objectGrid name="Grid" txTimeout="15" securityEnabled="true">
               <backingMap name="Map1" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>

</objectGridConfig>
```

   複数の ObjectGrids を定義している場合は、この属性を各グリッドに設定する必要があります。
3. オプション: XSDeploymentWeb.war ファイルと XSDeployment.ear ファイルをパッケージ化し直して、変更を組み込みます。
4. 必須: XSDeployment.ear ファイルをアンインストールしてから、更新済み XSDeployment.ear をインストールします。 前のステップで変更したファイルを使用しても、*samples_home*/WASSecurity ディレクトリーに用意されている XSDeployment_sec.ear ファイルをインストールしてもかまいません。アプリケーションのインストールの詳細については、96 ページの『レッスン 2.4: サンプルのインストールと実行』を参照してください。
5. すべてのアプリケーション・サーバーを再始動して、WebSphere eXtreme Scale 許可を使用可能にします。

レッスンのチェックポイント:

ObjectGrid のセキュリティーを使用可能にすることで、データ・グリッドの許可も使用可能にしました。

レッスン 4.2: ユーザー・ベースの許可を使用可能にする

このチュートリアルの認証モジュールの中で、operator と manager の 2 つのユーザーを作成しました。Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可を使用して、これらのユーザーに異なる許可を割り当てることができます。

ユーザー・プリンシパルを使用した Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可ポリシーの定義:

前に作成したユーザーに許可を割り当てることができます。operator ユーザーには、すべてのマップに対する読み取り許可のみを割り当てます。manager ユーザーには、すべての許可を割り当てます。JAAS 許可ポリシー・ファイルを使用して、プリンシパルに許可を付与します。

JAAS 許可ファイルを編集します。 xsAuth3.policy ファイルは、*samples_home*/security_extauth ディレクトリーにあります。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal
    "CN=operator,O=acme,OU=OGSample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "Grid.Map1", "read";
};

grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal
    "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "Grid.Map1", "all";
};
```

このファイルにある http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction コードベースは、ObjectGrid 用に特別に予約された URL です。プリンシパルに付与されているすべての ObjectGrid 許可では、この特別なコードベースを使用します。このファイルでは次の許可が割り当てられます。

- 最初の grant ステートメントは、read マップ許可を "CN=operator,O=acme,OU=OGSample" プリンシパルに付与します。"CN=operator,O=acme,OU=OGSample" ユーザーは、Grid ObjectGrid インスタンス内の Map1 マップに対するマップ読み取り許可のみを保持します。
- 2 番目の grant ステートメントは、all マップ許可を "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" プリンシパルに付与します。"CN=manager,O=acme,OU=OGSample" ユーザーは、Grid ObjectGrid インスタンス内の Map1 マップに対するすべての許可を保持します。

JVM プロパティーを使用した JAAS 許可ポリシー・ファイルの設定:

次のステップを使用して、xsCluster クラスター内の xs1 サーバーと xs2 サーバーの JVM プロパティーを設定します。このチュートリアルで使用するサンプル・トポロジーとは異なるトポロジーを使用する場合は、すべてのコンテナー・サーバーにファイルを設定してください。

1. 管理コンソールで、「**サーバー**」 > 「**アプリケーション・サーバー**」 > 「*server_name*」 > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」をクリックします。
2. 次の汎用 JVM 引数を追加します。

   ```
   -Djava.security.policy=samples_home/security_extauth/xsAuth3.policy
   ```

3. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

サンプル・アプリケーションを実行して許可をテストする:

サンプル・アプリケーションを使用して、許可設定をテストできます。マネージャー・ユーザーは、従業員の表示や追加を含め、Map1 マップでのすべての許可をそのまま保持しています。オペレーター・ユーザーは、読み取り許可しか割り当てられていないため、従業員の表示のみが可能です。

1. コンテナー・サーバーを実行しているすべてのアプリケーション・サーバーを再始動します。 このチュートリアルの場合は、xs1 サーバーと xs2 サーバーを再始動します。
2. EmployeeManagementWeb アプリケーションを開きます。 Web ブラウザーで、http://<host>:<port>/EmployeeManagermentWeb/management.jsp を開きます。
3. 有効なユーザー名とパスワードを使用してアプリケーションにログインします。

4. 従業員を表示してみます。 「**Display an Employee**」をクリックし、E メール・アドレス「authemp1@acme.com」を検索します。ユーザーが見つからないというメッセージが表示されます。
5. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレス authemp1@acme.com、名 Joe、および姓 Doe を追加し、「**Submit**」をクリックします。従業員が追加されたというメッセージが表示されます。
6. *samples_home*/security_extauth/client3.props ファイルを編集します。credentialGeneratorProps プロパティーの値を manager manager1 から operator operator1 に変更します。ファイルを編集すると、サーブレットが WebSphere eXtreme Scale サーバーへの認証にユーザー名「operator」とパスワード「operator1」を使用するようになります。
7. appCluster クラスターを再始動して、*samples_home*/security_extauth/client3.props ファイル内の変更を反映します。
8. 従業員を表示してみます。 「**Display an Employee**」をクリックし、E メール・アドレス「authemp1@acme.com」を検索します。従業員が表示されます。
9. 従業員を追加します。 「**Add an Employee**」をクリックします。 E メール・アドレス authemp2@acme.com、名 Joe、および姓 Doe を追加し、「**Submit**」をクリックします。次のメッセージが表示されます。

   ```
   An exception occurs when Add the employee. See below for detailed exception messages.
   ```

   詳細な例外テキストが続きます。

   ```
   java.security.AccessControlException: Access denied
   (com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission Grid.Map1 insert)
   ```

   operator ユーザーには、データを Map1 マップに挿入する許可がないため、このメッセージが表示されます。

バージョン 7.0.0.11 より前のバージョンの WebSphere Application Server で実行している場合、コンテナー・サーバーで java.lang.StackOverflowError エラーが表示されることがあります。このエラーの原因は IBM Developer Kit の問題です。この問題は、WebSphere Application Server バージョン 7.0.0.11 以上に同梱されている IBM Developer Kit では修正済みです。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、特定のユーザーに許可を割り当てて、許可を構成しました。

モジュール 5: xscmd ユーティリティーを使用してデータ・グリッドとマップをモニターする

xscmd ユーティリティーを使用して、プライマリー・データ・グリッドと Grid データ・グリッドのマップ・サイズを表示できます。**xscmd** ツールは MBean を使用して、プライマリー断片、レプリカ断片、コンテナー・サーバー、マップ・サイズおよびそれ以外のデータなど、すべてのデータ・グリッド成果物を照会します。

このチュートリアルでは、カタログ・サーバーはスタンドアロン Java SE サーバーとして稼働します。コンテナー・サーバーは WebSphere Application Server アプリケーション・サーバー内で稼働します。

カタログ・サーバーの場合、スタンドアロン Java 仮想マシン (JVM) 内に MBean サーバーが作成されます。カタログ・サーバーで **xscmd** ツールを使用するときは、WebSphere eXtreme Scale セキュリティーが使用されます。

コンテナー・サーバーの場合、WebSphere eXtreme Scale ランタイムが、WebSphere Application Server ランタイムによって作成される Managed Bean (MBean) サーバーに MBean を登録します。**xscmd** ツールが使用するセキュリティーは WebSphere Application Server MBean セキュリティーによって提供されます。

1. コマンド行ツールを使用して、*DMGR_PROFILE*/bin ディレクトリーを開きます。
2. **xscmd** ツールを実行します。 次の例のように **-c showPlacement -st P** パラメーターを使用します。

   Linux UNIX

   ```
   xscmd.sh -c showPlacement -cep localhost:16099 -g Grid -ms mapSet -sf P
   -user manager -pwd manager1
   ```

   Windows

   ```
   xscmd.bat -c showPlacement -cep localhost:16099 -g Grid -m mapSet -sf P
   -user manager -pwd manager1
   ```

   重要:

   以下のコマンドを使用してデータ・グリッドにアクセスした場合は、listAllJMXAddresses などの管理アクションを実行する権限があることもあります。

   ```
   ./xscmd.sh -user <user> -password <password> <other_parameters>
   ```

   この操作がこのユーザーで機能した場合は、同じユーザーで任意の **xscmd** 操作を実行することもできます。詳しくは、973 ページの『セキュリティーのトラブルシューティング』を参照してください。
   ユーザー名とパスワードが認証のためにカタログ・サーバーに渡されます。
3. コマンドの結果を表示します。

   ```
   *** Showing all primaries for grid - Grid & mapset - mapSet
   Partition Container Host Server
   0 myCell02¥myNode04¥xs2_C-1 myhost.mycompany.com myCell02¥myNode04¥xs2
   1 myCell02¥myNode04¥xs2_C-1 myhost.mycompany.com myCell02¥myNode04¥xs2
   2 myCell02¥myNode04¥xs2_C-1 myhost.mycompany.com myCell02¥myNode04¥xs2
   3 myCell02¥myNode04¥xs2_C-1 myhost.mycompany.com myCell02¥myNode04¥xs2
   4 myCell02¥myNode04¥xs2_C-1 myhost.mycompany.com myCell02¥myNode04¥xs2
   ```
4. **xscmd** ツールを実行します。 次の例のように **-c showMapSizes** パラメーターを使用します。

   Linux UNIX

   ```
   xscmd.sh -c showMapSizes -cep localhost:16099 -g Grid -ms mapSet  -user manager -pwd manager1
   ```

   Windows

   ```
   xscmd.bat -c showMapSizes -cep localhost:16099 -g Grid -ms mapSet -user manager -pwd manager1
   ```

   ユーザー名とパスワードが認証のためにカタログ・サーバーに渡されます。コマンドを実行すると、WebSphere Application Server での認証のために WebSphere Application Server ユーザー ID とパスワードを要求するプロンプトが出されま

す。 **-c showMapSizes** オプションは各コンテナー・サーバーからマップ・サイズを取得し、コンテナー・サーバーでは WebSphere Application Server セキュリティーが要求されるため、このログイン情報を提供する必要があります。

5. オプション: PROFILE/properties/sas.client.props ファイルを変更して、ユーザー ID とパスワードを要求されないコマンドを実行できます。com.ibm.CORBA.loginSource プロパティーを prompt から properties に変更してから、ユーザー ID とパスワードを指定します。PROFILE/properties/sas.client.props ファイル内のプロパティーの例を次に示します。

```
com.ibm.CORBA.loginSource=properties
# RMI/IIOP user identity
com.ibm.CORBA.loginUserid=Admin
com.ibm.CORBA.loginPassword=xxxxxx
```

6. オプション: WebSphere eXtreme Scale スタンドアロン・インストール済み環境で **xscmd** コマンドを使用する場合は、次のオプションを追加する必要があります。

   - WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを使用している場合:

     ```
     -user
     -pwd
     ```

   - カスタム資格情報生成を指定した WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを使用している場合:

     ```
     -user
     -pwd
     -cgc
     -cgp
     ```

   - SSL が使用可能な場合:

     ```
     -tt
     -cxpv
     -prot
     -ks
     -ksp
     -kst
     -ts
     -tsp
     -tst
     ```

   WebSphere eXtreme Scale セキュリティーと SSL の両方が使用可能な場合は、両方のパラメーター・セットが必要です。

関連タスク:

xscmd ユーティリティーによるモニター
xscmd ユーティリティーは、完全にサポートされたモニターおよび管理のツールとして、**xsadmin** サンプル・ユーティリティーに取って代わります。**xscmd** ユーティリティーを使用すれば、WebSphere eXtreme Scale トポロジーに関するテキスト情報を表示できます。

xscmd ユーティリティーによる管理
xscmd ユーティリティーを使用して、マルチマスター・レプリカ生成リンクの確立、クォーラムの上書き、ティアダウン・コマンドを使用したサーバー・グループの停止などの管理タスクを環境内で実行することができます。

レッスンのチェックポイント

xscmd ツールを使用して、構成内のデータ・グリッドとマップをモニターしました。

チュートリアル: OSGi フレームワークでの eXtreme Scale バンドルの実行

OSGi サンプルは、Google Protocol Buffers シリアライザー・サンプル上でビルドします。この一連のレッスンを完了すると、OSGi フレームワークでのシリアライザー・サンプル・プラグインの実行も完了します。

学習目標

このサンプルは OSGi バンドルのデモです。シリアライザー・プラグインは付随的なプラグインであり、必須ではありません。OSGi サンプルは、WebSphere eXtreme Scale Samples Gallery から入手できます。サンプルをダウンロードし、それを *wxs_home*/samples ディレクトリーに抽出する必要があります。 OSGi サンプルのルート・ディレクトリーは wxs_home/samples/OSGiProto です。

このチュートリアルのサンプル・コマンドは、ユーザーが UNIX オペレーティング・システムで実行していることを前提としています。Windows オペレーティング・システムで実行する場合は、サンプル・コマンドを調整してください。

このチュートリアルのレッスンを完了すると、OSGi サンプルの概念を理解し、次の目的を達成する方法がわかります。

- eXtreme Scale サーバーを開始する OSGi コンテナーに WebSphere eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールする。
- サンプル・クライアントを実行する eXtreme Scale 開発環境をセットアップする。
- xscmd コマンドを使用して、サンプル・バンドルのサービス・ランキングを照会したり、それを新しいサービス・ランキングにアップグレードしたり、新しいサービス・ランキングを検査する。

所要時間

このモジュールの所要時間は約 60 分です。

前提条件

シリアライザー・サンプルのダウンロードと抽出に加えて、このチュートリアルには次の前提条件もあります。

- eXtreme Scale 製品のインストールと抽出
- Eclipse Equinox 環境のセットアップ

概要: OSGi フレームワークで eXtreme Scale サーバーとコンテナーを開始および構成してプラグインを実行する

このチュートリアルでは、OSGi フレームワーク内で eXtreme Scale サーバーを開始し、eXtreme Scale コンテナーを開始し、サンプル・プラグインと eXtreme Scale ランタイム環境を接続します。

学習目標

このチュートリアルのレッスンを完了すると、OSGi サンプルの概念を理解し、次の目的を達成する方法がわかります。

- eXtreme Scale サーバーを開始する OSGi コンテナーに WebSphere eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールする。
- サンプル・クライアントを実行する eXtreme Scale 開発環境をセットアップする。
- xscmd コマンドを使用して、サンプル・バンドルのサービス・ランキングを照会したり、それを新しいサービス・ランキングにアップグレードしたり、新しいサービス・ランキングを検査する。

所要時間

このチュートリアルの所要時間は約 60 分です。このチュートリアルに関連した他の概念も調べる場合、完了までの所要時間はこれより長くなります。

スキル・レベル

中級

対象者

OSGi フレームワークで eXtreme Scale バンドルをビルド、インストール、および実行する必要がある開発者と管理者

システム要件

- Luminis OSGi Configuration Admin command line client バージョン 0.2.5
- Apache Felix File Install バージョン 3.0.2
- Blueprint コンテナー・プロバイダーとして Eclipse Gemini を使用する場合、以下が必要です。
  - Eclipse Gemini Blueprint バージョン 1.0.0
  - Spring Framework バージョン 3.0.5
  - SpringSource AOP Alliance API バージョン 1.0.0
  - SpringSource Apache Commons Logging バージョン 1.1.1
- Blueprint コンテナー・プロバイダーとして Apache Aries を使用する場合、以下の要件を満たしている必要があります。
  - Apache Aries (最新のスナップショット)
  - ASM ライブラリー
  - PAX logging

前提条件

このチュートリアルを実行するには、サンプルをダウンロードし、それを `wxs_home/samples` ディレクトリーに抽出する必要があります。 OSGi サンプルのルート・ディレクトリーは `wxs_home/samples/OSGiProto` です。

予想される結果

このチュートリアルを完了すると、サンプル・バンドルのインストールが完了し、eXtreme Scale クライアントを実行してデータをグリッドに挿入できる状態になります。また、OSGi コンテナーが提供する動的な機能を使用して、それらのサンプル・バンドルの照会や更新も可能になります。

関連概念:

180 ページの『OSGi フレームワークの概要』
OSGi は、Java に対して動的モジュール・システムを定義します。OSGi サービス・プラットフォームは、階層化アーキテクチャーを持ち、さまざまな標準 Java プロファイルで実行されるように設計されています。OSGi コンテナー内の WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびクライアントを始動できます。

関連タスク:

182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』
OSGi フレームワークに WebSphere eXtreme Scale をデプロイするには、Eclipse Equinox 環境をセットアップする必要があります。

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

モジュール 1: eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールおよび構成する準備

このモジュールを実行して、OSGi サンプル・バンドルを探索し、eXtreme Scale サーバーの構成に使用する構成ファイルを調べます。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すれば、概念を理解し、以下の目標を達成する方法が分かります。

- OSGi サンプルに組み込まれているバンドルを探して、調べる。
- eXtreme Scale グリッドおよびサーバーの構成に使用する構成ファイルを調査する。

レッスン 1.1: OSGi サンプル・バンドルの理解

このレッスンを実行して、OSGi サンプル内に用意されているバンドルを探して、調べます。

OSGi サンプル・バンドル:

Eclipse Equinox 環境のセットアップについてのトピックで記載している config.ini ファイル内に構成されているバンドル以外にも、OSGi サンプルでは次のバンドルが追加で使用されます。

objectgrid.jar
WebSphere eXtreme Scale サーバー・ランタイム・バンドル。このバンドルは *wxs_home*/lib ディレクトリーにあります。

com.google.protobuf_2.4.0a.jar
Google Protocol Buffers バージョン 2.4.0a バンドル。このバンドルは *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。

ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar
サンプル ObjectGridEventListener および MapSerializerPlugin プラグイン実装を備えたバージョン 1.0.0 のユーザー・プラグイン・バンドル。このバンドルは *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。サービスはサービス・ランキング 1 で構成されます。

このバージョンは、標準 Blueprint XML を使用して、eXtreme Scale プラグイン・サービスを構成します。サービス・クラスは WebSphere eXtreme Scale インターフェースである com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactory のユーザー実装クラスです。ユーザー実装クラスは、要求ごとに Bean を作成し、プロトタイプ・スコープの Bean と似た動きをします。

ProtoBufSamplePlugins-2.0.0.jar
サンプル ObjectGridEventListener および MapSerializerPlugin プラグイン実装を備えたバージョン 2.0.0 のユーザー・プラグイン・バンドル。このバンドルは *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。サービスはサービス・ランキング 2 で構成されます。

このバージョンは、標準 Blueprint XML を使用して、eXtreme Scale プラグイン・サービスを構成します。サービス・クラスは、WebSphere eXtreme Scale 組み込みクラスである com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactoryImpl を使用し、この組み込みクラスは BlueprintContainer サービスを使用します。標準 Blueprint XML 構成を使用して、プロトタイプ・スコープまたは singleton スコープの Bean を構成できます。Bean は断片スコープとしては構成されません。

ProtoBufSamplePlugins-Gemini-3.0.0.jar
サンプル ObjectGridEventListener および MapSerializerPlugin プラグイン実装を備えたバージョン 3.0.0 のユーザー・プラグイン・バンドル。このバンドルは *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。サービスはサービス・ランキング 3 で構成されます。

このバージョンは、Eclipse Gemini 固有の Blueprint XML を使用して、eXtreme Scale プラグイン・サービスを構成します。サービス・クラスは、WebSphere eXtreme Scale 組み込みクラスである com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactoryImpl を使用し、この組み込みクラスは BlueprintContainer サービスを使用します。断片スコープ Bean の構成には Gemini 固有のアプローチが使用されます。このバージョンは、スコープ値に {http://www.ibm.com/schema/objectgrid}shard

を指定し、カスタム・スコープが Gemini に認識されるようダミー属性を構成することで、myShardListener Bean を断片スコープの Bean として構成します。こうする理由は、Eclipse の問題 (https://bugs.eclipse.org/bugs/show_bug.cgi?id=348776) にあります。

ProtoBufSamplePlugins-Aries-4.0.0.jar
サンプル ObjectGridEventListener および MapSerializerPlugin プラグイン実装を備えたバージョン 4.0.0 のユーザー・プラグイン・バンドル。このバンドルは *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。サービスはサービス・ランキング 4 で構成されます。

このバージョンは、標準 Blueprint XML を使用して、eXtreme Scale プラグイン・サービスを構成します。サービス・クラスは、WebSphere eXtreme Scale 組み込みクラスである com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactoryImpl を使用し、この組み込みクラスは BlueprintContainer サービスを使用します。標準 Blueprint XML 構成を使用して、カスタム・スコープの Bean を構成できます。このバージョンは、スコープ値に {http://www.ibm.com/schema/objectgrid}shard を指定することで、myShardListenerbean を断片スコープの Bean として構成します。

ProtoBufSamplePlugins-Activator-5.0.0.jar
サンプル ObjectGridEventListener および MapSerializerPlugin プラグイン実装を備えたバージョン 5.0.0 のユーザー・プラグイン・バンドル。このバンドルは *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。サービスはサービス・ランキング 5 で構成されます。

このバージョンは、Blueprint コンテナーを一切使用しません。このバージョンでは、サービスは OSGi サービス登録を使用して登録されます。サービス・クラスは WebSphere eXtreme Scale インターフェースである com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactory のユーザー実装クラスです。ユーザー実装クラスは、要求ごとに Bean を作成します。それはプロトタイプ・スコープの Bean と似た動きをします。

レッスンのチェックポイント:

OSGi サンプルで提供されるバンドルを調べることで、OSGi コンテナー内で実行する独自の実装を開発する方法がさらによくわかります。

以下について学習しました。

- OSGi サンプルに組み込まれているバンドル
- それらのバンドルの場所
- 各バンドルに構成されているサービス・ランキング

レッスン 1.2: OSGi 構成ファイルの理解

OSGi サンプルには、WebSphere eXtreme Scale グリッドおよびサーバーを開始したり構成したりする際に使用する構成ファイルが含まれています。

OSGi 構成ファイル:

このレッスンでは、OSGI サンプルに含まれている以下の構成ファイルを検討することとします。

- collocated.server.properties
- protoBufObjectGrid.xml
- protoBufDeployment.xml
- blueprint.xml

collocated.server.properties

サーバーを開始するにはサーバー構成が必要です。eXtreme Scale サーバー・バンドルを開始しても、サーバーは開始されません。バンドルは、サーバー・プロパティー・ファイルが指定された構成 PID com.ibm.websphere.xs.server が作成されるのを待ちます。このサーバー・プロパティー・ファイルが、サーバー名、ポート番号、その他のサーバー・プロパティーを指定します。

ほとんどの場合は、サーバー・プロパティー・ファイルを設定するための構成を作成します。まれには、すべてのプロパティーがデフォルト値に設定されたままでサーバーを開始すれば済むことがあります。そのような場合は、値が default に設定された com.ibm.websphere.xs.server という構成を作成できます。

サーバー・プロパティー・ファイルの詳細については、サーバー・プロパティー・ファイルのトピックを参照してください。

OSGi サンプル・サーバー・プロパティー・ファイルは単一のカタログを開始します。このサンプル・プロパティー・ファイルは、OSGi フレームワーク・プロセス内で単一のカタログ・サービスとコンテナー・サーバーを開始します。eXtreme Scale クライアントはポート 2809 に接続し、JMX クライアントはポート 1099 に接続します。サンプルのサーバー・プロパティー・ファイルの内容は以下のとおりです。

```
serverName=collocatedServer
isCatalog=true
catalogClusterEndPoints=collocatedServer:localhost:6601:6602
traceSpec=ObjectGridOSGi=all=enabled
traceFile=logs/trace.log
listenerPort=2809
JMXServicePort=1099
```

protoBufObjectGrid.xml

サンプル protoBufObjectGrid.xml ObjectGrid 記述子 XML ファイルは次の内容を含んでいます (コメントは削除してあります)。

```
<objectGridConfig
    xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

    <objectGrids>
        <objectGrid name="Grid" txTimeout="15">

            <bean id="ObjectGridEventListener"
                osgiService="myShardListener"/>

            <backingMap name="Map" readOnly="false"
                lockStrategy="PESSIMISTIC" lockTimeout="5"
                copyMode="COPY_TO_BYTES"
                pluginCollectionRef="serializer"/>

        </objectGrid>
    </objectGrids>

    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="serializer">
```

```
          <bean id="MapSerializerPlugin"
              osgiService="myProtoBufSerializer"/>"/>
       </backingMapPluginCollection>
   </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

この ObjectGrid 記述子 XML ファイルには次の 2 つのプラグインが構成されています。

ObjectGridEventListener

断片レベル・プラグイン。ObjectGrid インスタンスごとに、ObjectGridEventListener のインスタンスが存在します。それは OSGi サービス myShardListener を使用するように構成されています。これは、グリッドの作成時、ObjectGridEventListener プラグインが、使用可能な最も高いサービス・ランキングが設定された OSGi サービス myShardListener を使用することを意味します。

MapSerializerPlugin

マップ・レベル・プラグイン。Map という名前のパッキング・マップに対し、MapSerializerPlugin プラグインが構成されています。それは OSGi サービス myProtoBufSerializer を使用するように構成されています。これは、マップの作成時、MapSerializerPlugin プラグインが、使用可能な最も高いランクのサービス・ランキングが設定されたサービス myProtoBufSerializer を使用することを意味します。

protoBufDeployment.xml

デプロイメント記述子 XML ファイルは、5 つの区画を使用する Grid という名前のグリッドのデプロイメント・ポリシーを記述したものです。XML ファイルの次のサンプル・コードを参照してください。

```
<deploymentPolicy
   xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">

  <objectgridDeployment objectgridName="Grid">
    <mapSet name="MapSet" numberOfPartitions="5">
      <map ref="Map"/>
    </mapSet>
  </objectgridDeployment>
</deploymentPolicy>
```

blueprint.xml

collocated.server.properties ファイルと構成 PID com.ibm.websphere.xs.server を組み合わせて使用する代わりに、次の例で示すように、ObjectGrid XML ファイルとデプロイメント XML ファイルを Blueprint XML ファイルと一緒に OSGi バンドルに組み込むことができます。

```
<blueprint
   xmlns="http://www.osgi.org/xmlns/blueprint/v1.0.0"
       xmlns:objectgrid="http://www.ibm.com/schema/objectgrid"
       default-activation="lazy">

    <objectgrid:server id="server" isCatalog="true"
                name="server"
                tracespec="ObjectGridOSGi=all=enabled"
                tracefile="C:/Temp/logs/trace.log"
                workingDirectory="C:/Temp/working"
                jmxport="1099">
        <objectgrid:catalog host="localhost" port="2809"/>
    </objectgrid:server>
```

```
    <objectgrid:container id="container"
  objectgridxml="/META-INF/objectgrid.xml"
       deploymentxml="/META-INF/deployment.xml"
  server="server"/>
</blueprint>
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、OSGi サンプル内で使用している構成ファイルについて学習しました。これで、eXtreme Scale グリッドおよびサーバーを開始して構成するとき、OSGi フレームワーク内で、それらのプロセスにどのファイルが使用され、それらのファイルがプラグインとどのように相互作用するかがわかります。

モジュール 2: OSGi フレームワークでの eXtreme Scale バンドルのインストールおよび開始

このモジュールのレッスンを使用して、eXtreme Scale サーバー・バンドルを OSGi コンテナーにインストールし、WebSphere eXtreme Scale サーバーを始動します。

OSGi フレームワークでサーバーを始動しても、OSGi バンドルが実行可能状態になるわけではありません。インストールした OSGi バンドルが認識されて正しく実行できるように、サーバー・プロパティーおよびコンテナーを構成する必要があります。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、概念を理解し、以下の作業を行う方法が分かります。

- Equinox OSGi コンソールを使用した eXtreme Scale バンドルのインストール。
- eXtreme Scale サーバーを構成します。
- eXtreme Scale コンテナーを構成します。
- eXtreme Scale サンプル・バンドルをインストールして開始します。

前提条件

このモジュールを完了するには、開始の前に次のタスクを行う必要があります。

- eXtreme Scale 製品のインストールと抽出
- Eclipse Equinox 環境のセットアップ

このモジュールのレッスンを完了するには、次のファイルに対するアクセスについても準備する必要があります。

- `objectgrid.jar` バンドル。この eXtreme Scale バンドルをインストールします。
- `collocated.server.properties` ファイル。サーバー・プロパティーをこの構成ファイルに追加します。

次のバンドルをインストールして開始する予定です。

- `protobuf-java-2.4.0a-bundle.jar` バンドル
- `ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar` バンドル

レッスン 2.1: コンソールの開始と eXtreme Scale サーバー・バンドルのインストール

このレッスンでは、Equinox OSGi コンソールを使用して、WebSphere eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールします。

1. 次のコマンドを使用して、Equinox OSGi コンソールを開始します。

   ```
   cd equinox_root
   java -jar plugins¥org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806.jar -console
   ```

2. OSGi コンソールが開始した後、コンソールの中で ss コマンドを発行すると、次のバンドルが開始します。

   重要: タスク「eXtreme Scale バンドルのインストール」を完了している場合は、バンドルが既にアクティブになっています。バンドルが開始された場合は、このステップを完了する前にバンドルを停止してください。

   Eclipse Gemini output:

   ```
   osgi> ss
   Framework is launched.
   id State Bundle
   0 ACTIVE org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806
   1 ACTIVE org.eclipse.osgi.services_3.2.100.v20100503
   2 ACTIVE org.eclipse.osgi.util_3.2.100.v20100503
   3 ACTIVE org.eclipse.equinox.cm_1.0.200.v20100520
   4 ACTIVE com.springsource.org.apache.commons.logging_1.1.1
   5 ACTIVE com.springsource.org.aopalliance_1.0.0
   6 ACTIVE org.springframework.aop_3.0.5.RELEASE
   7 ACTIVE org.springframework.asm_3.0.5.RELEASE
   8 ACTIVE org.springframework.beans_3.0.5.RELEASE
   9 ACTIVE org.springframework.context_3.0.5.RELEASE
   10 ACTIVE org.springframework.core_3.0.5.RELEASE
   11 ACTIVE org.springframework.expression_3.0.5.RELEASE
   12 ACTIVE org.apache.felix.fileinstall_3.0.2
   13 ACTIVE net.luminis.cmc_0.2.5
   14 ACTIVE org.eclipse.gemini.blueprint.core_1.0.0.RELEASE
   15 ACTIVE org.eclipse.gemini.blueprint.extender_1.0.0.RELEASE
   16 ACTIVE org.eclipse.gemini.blueprint.io_1.0.0.RELEASE
   ```

   Apache Aries output:

   ```
   osgi> ss
   Framework is launched.
   id State Bundle
   0 ACTIVE org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806
   1 ACTIVE org.eclipse.osgi.services_3.2.100.v20100503
   2 ACTIVE org.eclipse.osgi.util_3.2.100.v20100503
   3 ACTIVE org.eclipse.equinox.cm_1.0.200.v20100520
   4 ACTIVE org.ops4j.pax.logging.pax-logging-api_1.6.3
   5 ACTIVE org.ops4j.pax.logging.pax-logging-service_1.6.3
   6 ACTIVE org.objectweb.asm.all_3.3.0
   7 ACTIVE org.apache.aries.blueprint_0.3.2.SNAPSHOT
   8 ACTIVE org.apache.aries.util_0.4.0.SNAPSHOT
   9 ACTIVE org.apache.aries.proxy_0.4.0.SNAPSHOT
   10 ACTIVE org.apache.felix.fileinstall_3.0.2
   11 ACTIVE net.luminis.cmc_0.2.5
   ```

3. objectgrid.jar バンドルをインストールします。 Java 仮想マシン (JVM) でサーバーを始動するには、eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールする必要があります。この eXtreme Scale サーバー・バンドルは、サーバーの始動およびコンテナーの作成を行うことができます。次のコマンドを使用して、objectgrid.jar ファイルをインストールします。

   ```
   osgi> install file:///wxs_home/lib/objectgrid.jar
   ```

   次の例を参照してください。

```
osgi> install file:///opt/wxs/ObjectGrid/lib/objectgrid.jar
```

Equinox は、そのバンドル ID を表示します。例えば次のとおりです。

```
Bundle id is 19
```

要確認: 表示されるバンドル ID はこれとは異なる可能性があります。ファイル・パスは、バンドル・パスに対する絶対 URL でなければなりません。相対パスはサポートされません。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、Equinox OSGi コンソールを使用して objectgrid.jar バンドルをインストールしました。このチュートリアルの後半で、このバンドルを使用して、サーバーを始動し、コンテナーを作成します。

レッスン 2.2: eXtreme Scale サーバーのカスタマイズと構成

このレッスンでは、サーバー・プロパティーをカスタマイズし、WebSphere eXtreme Scale サーバーに追加します。

1. wxs_sample_osgi_root/projects/server/properties/collocated.server.properties ファイルを編集します。
   a. traceFile プロパティーを equinox_root/logs/trace.log に変更します。
2. ファイルを保存します。
3. OSGI コンソールで次のコード行を入力して、ファイルからサーバー構成を作成します。 以下の例は、印刷の都合上、複数行で表示されています。

```
osgi> cm create com.ibm.websphere.xs.server
osgi> cm put com.ibm.websphere.xs.server objectgrid.server.props wxs_sample_osgi_root/projects/server/properties/collocated.server.properties
```

4. 構成を表示するため、次のコマンドを実行します。

```
osgi> cm get com.ibm.websphere.xs.server
Configuration for service (pid) "com.ibm.websphere.xs.server"
(bundle location = null)
key                     value
----                    ----
objectgrid.server.props  wxs_sample_osgi_root/projects/server/properties/collocated.server.properties
service.pid              com.ibm.websphere.xs.server
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、wxs_sample_osgi_root/projects/server/properties/collocated.server.properties ファイルを編集して、作業ディレクトリーやトレース・ログ・ファイルの場所などのサーバー設定を指定しました。

レッスン 2.3: eXtreme Scale コンテナーの構成

このレッスンを実行して、コンテナーを構成します。この構成には、WebSphere eXtreme Scale ObjectGrid 記述子 XML ファイルと ObjectGrid デプロイメント XML ファイルが含まれます。これらのファイルには、グリッドの構成とそのトポロジーが含まれます。

コンテナーを作成するには、最初に、管理サービス・ファクトリーのプロセス識別番号 (PID) である com.ibm.websphere.xs.container を使用して構成サービスを作成します。サービス構成は管理サービス・ファクトリーであるため、ファクトリー PID

から複数のサービス PID を作成できます。次に、コンテナー・サービスを開始するため、各サービス PID に objectgridFile および deploymentPolicyFile PID を設定します。

次のステップを実行して、サーバー・プロパティーをカスタマイズし、OSGi フレームワークに追加します。

1. OSGI コンソールで、次のコマンドを入力して、ファイルからコンテナーを作成します。

```
osgi> cm createf com.ibm.websphere.xs.container
PID: com.ibm.websphere.xs.container-1291179621421-0
```

2. 次のコマンドを入力して、新しく作成した PID を ObjectGrid XML ファイルにバインドします。

要確認: 実際の PID 番号は、このサンプルに記載されるものとは異なります。

```
osgi> cm put com.ibm.websphere.xs.container-1291179621421-0 objectgridFile wxs_sample_osgi_root/projects/server/META-INF/protoBufObjectgrid.xml

osgi> cm put com.ibm.websphere.xs.container-1291179621421-0 deploymentPolicyFile wxs_sample_osgi_root/projects/server/META-INF/protoBufDeployment.xml
```

3. 次のコマンドを使用して、構成を表示します。

```
osgi> cm get com.ibm.websphere.xs.container-1291760127968-0
Configuration for service (pid) "com.ibm.websphere.xs.container-1291760127968-0"
(bundle location = null)

key                   value
------                ------
deploymentPolicyFile  /opt/wxs/ObjectGrid/samples/OSGiProto/server/META-INF/protoBufDeployment.xml
objectgridFile        /opt/wxs/ObjectGrid/samples/OSGiProto/server/META-INF/protoBufObjectgrid.xml
service.factoryPid    com.ibm.websphere.xs.container
service.pid           com.ibm.websphere.xs.container-1291760127968-0
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、eXtreme Scale コンテナーを作成するために使用する構成サービスを作成しました。 ObjectGrid XML ファイルには、グリッドの構成とそのトポロジーが含まれるため、作成したコンテナーをそれらの ObjectGrid XML ファイルにバインドする必要がありました。この構成により、eXtreme Scale コンテナーが、後ほどこのチュートリアルで実行する OSGi バンドルを認識できます。

レッスン 2.4: Google Protocol Buffers バンドルとサンプル・プラグイン・バンドルのインストール

このチュートリアルでは、Equinox OSGi コンソールを使用して、`protobuf-java-2.4.0a-bundle.jar` バンドルと `ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar` プラグイン・バンドルをインストールします。

Google Protocol Buffers プラグインのインストール:

次のステップを実行して、Google Protocol Buffers プラグインをインストールします。

OSGI コンソールで、次のコマンドを入力して、プラグインをインストールします。

```
osgi> install file:///wxs_sample_osgi_root/lib/com.google.protobuf_2.4.0a.jar
```

以下の出力が表示されます。

```
Bundle ID is 21
```

サンプル・プラグイン・バンドルの概要:

OSGi サンプルには、カスタム ObjectGridEventListener や MapSerializerPlugin プラグインなどの eXtreme Scale プラグインを含む 5 つのサンプル・バンドルが含まれています。MapSerializerPlugin プラグインは Google Protocol Buffers サンプルと、MapSerializerPlugin サンプルが提供するメッセージを使用します。

次のバンドル、ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar と ProtoBufSamplePlugins-2.0.0.jar は、*wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーにあります。

blueprint.xml ファイルの内容は次のとおりです (コメントは削除してあります)。

```
<blueprint xmlns="http://www.osgi.org/xmlns/blueprint/v1.0.0">
 <bean id="myShardListener" class="com.ibm.websphere.samples.xs.proto.osgi.MyShardListenerFactory"/>
 <service ref="myShardListener" interface="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactory" ranking="1">
 </service>

 <bean id="myProtoBufSerializer" class="com.ibm.websphere.samples.xs.proto.osgi.ProtoMapSerializerFactory">
  <property name="keyType" value="com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.app.proto.DataObjects1$OrderKey" />
  <property name="valueType" value="com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.app.proto.DataObjects1$Order" />
 </bean>

 <service ref="myProtoBufSerializer" interface="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactory"
  ranking="1">
 </service>
</blueprint>
```

Blueprint XML ファイルは 2 つのサービス、myShardListener と myProtoBufSerializer をエクスポートします。これら 2 つのサービスは、protoBufObjectgrid.xml ファイル内で参照されます。

サンプル・プラグイン・バンドルのインストール:

次のステップを実行して、ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar バンドルをインストールします。

Equinox OSGi コンソールで次のコマンドを実行して、ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar プラグイン・バンドルをインストールします。

```
osgi> install file:///wxs_sample_osgi_root/lib/ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar
```

以下の出力が表示されます。

```
Bundle ID is 22
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、protobuf-java-2.4.0a-bundle.jar バンドルと ProtoBufSamplePlugins-1.0.0.jar プラグイン・バンドルをインストールしました。

レッスン 2.5: OSGi バンドルの開始

WebSphere eXtreme Scale サーバーは、OSGi サーバー・バンドルとしてパッケージされます。このレッスンを完了して、eXtreme Scale サーバー・バンドル、およびインストールした他の OSGi バンドルをインストールします。

1. **ss** コマンドを実行して、各バンドルの ID を表示します。

   ```
   osgi> ss

   Framework is launched.
   ```

```
id State Bundle
0 ACTIVE org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806
1 ACTIVE org.eclipse.osgi.services_3.2.100.v20100503
2 ACTIVE org.eclipse.osgi.util_3.2.100.v20100503
3 ACTIVE org.eclipse.equinox.cm_1.0.200.v20100520
4 ACTIVE com.springsource.org.apache.commons.logging_1.1.1
5 ACTIVE com.springsource.org.aopalliance_1.0.0
6 ACTIVE org.springframework.aop_3.0.5.RELEASE
7 ACTIVE org.springframework.asm_3.0.5.RELEASE
8 ACTIVE org.springframework.beans_3.0.5.RELEASE
9 ACTIVE org.springframework.context_3.0.5.RELEASE
10 ACTIVE org.springframework.core_3.0.5.RELEASE
11 ACTIVE org.springframework.expression_3.0.5.RELEASE
12 ACTIVE org.apache.felix.fileinstall_3.0.2
13 ACTIVE net.luminis.cmc_0.2.5
15 ACTIVE org.eclipse.gemini.blueprint.core_1.0.0.RELEASE
16 ACTIVE org.eclipse.gemini.blueprint.extender_1.0.0.RELEASE
17 ACTIVE org.eclipse.gemini.blueprint.io_1.0.0.RELEASE
19 RESOLVED com.ibm.websphere.xs.server_7.1.1
21 RESOLVED Google_ProtoBuf_2.4.0
22 RESOLVED ProtoBufPlugins_1.0.0
```

2. インストールした各バンドルを開始します。特定の順序でバンドルを開始する必要があります。前の例でバンドル ID の順序を確認してください。
   a. サンプル・プラグイン・バンドル `ProtoBufPlugins_1.0.0` を開始します。Equinox OSGi コンソールで次のコマンドを実行して、バンドルを開始します。この例では、サンプル・プラグインのバンドル ID は 22 です。

      ```
      osgi> start 22
      ```

   b. Google Protocol Buffers バンドル `Google_ProtoBuf_2.4.0` を開始します。Equinox OSGi コンソールで次のコマンドを実行して、バンドルを開始します。この例では、Google Protocol Buffers プラグインのバンドル ID は 21 です。

      ```
      osgi> start 21
      ```

   c. サーバー・バンドル `com.ibm.websphere.xs.server_7.1.1` を開始します。OSGi コンソールで次のコマンドを実行して、サーバーを始動します。この例では、eXtreme Scale サーバー・バンドルのバンドル ID は 19 です。

      ```
      osgi> start 19
      ```

サーバーを始動した後、MyShardListener イベント・リスナーが開始され、レコードの挿入または更新が可能になります。OSGi コンソールに次の出力が表示されると、プラグイン・バンドルが正常に開始されたことが確認できます。

```
SystemOut O MyShardListener@1253853884(version=1.0.0) order
com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.proto.DataObjects1$Order$Builder
@1aba1aba(22) inserted
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、OSGi フレームワーク用に構成した eXtreme Scale コンテナーの中で、2 つのプラグイン・バンドルとサーバー・バンドルを開始しました。

モジュール 3: eXtreme Scale サンプル・クライアントの実行

WebSphere eXtreme Scale サーバーが現在 OSGi 環境で実行中です。このモジュールのステップを完了して、データをグリッドに挿入する WebSphere eXtreme Scale クライアントを実行します。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下の作業を行う方法が分かります。

- グリッドに接続し、グリッドに対していくつかのデータを挿入または取得を行うクライアント・アプリケーションを実行します。
- 非 OSGi クライアント・アプリケーションを使用して、オーダーを開始します。

前提条件

モジュール 2: OSGi フレームワークでの eXtreme Scale バンドルのインストールおよび開始を完了していること。

レッスン 3.1: クライアントを実行しサンプルをビルドする Eclipse のセットアップ

このレッスンを実行して、クライアントの実行とサンプル・プラグインのビルドに使用する Eclipse プロジェクトをインポートします。

サンプルには、グリッドに接続し、そのデータを挿入したり取得したりする Java SE クライアント・プログラムが含まれています。また、OSGi バンドルのビルドと再デプロイに使用できるプロジェクトも含まれています。

提供されるプロジェクトは、Eclipse 3.x 以上でテスト済みであり、標準の Java 開発プロジェクト・パースペクティブのみを必要とします。次のステップを実行して、WebSphere eXtreme Scale 開発環境をセットアップします。

1. Eclipse を新規ワークスペースまたは既存のワークスペースに開きます。
2. 「ファイル」メニューの「**インポート**」を選択します。
3. 「General」フォルダーを展開します。「**既存プロジェクトをワークスペースへ**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
4. 「**ルート・ディレクトリーの選択**」フィールドで、*wxs_sample_osgi_root* ディレクトリーと入力するか、参照して指定します。「**終了**」をクリックします。ワークスペースに新規プロジェクトがいくつか表示されます。2 つのユーザー・ライブラリーを定義することによってビルド・エラーは修正されます。次のステップを実行して、ユーザー・ライブラリーを定義します。
5. 「ウィンドウ」メニューから「**設定**」を選択します。
6. 「**Java**」 > 「**ビルド・パス**」ブランチを展開し、「**ユーザー・ライブラリー**」を選択します。
7. eXtreme Scale ユーザー・ライブラリーを定義します。
   a. 「**新規**」をクリックします。
   b. 「**ユーザー・ライブラリー名**」フィールドに「eXtremeScale」と入力し、「**OK**」をクリックします。
   c. 新規ユーザー・ライブラリーを選択し、「**JAR の追加**」をクリックします。
      1) *wxs_install_root*/lib ディレクトリーを参照し、objectgrid.jar ファイルを選択します。「**OK**」をクリックします。
      2) ObjectGrid API の API 資料を組み込むには、前のステップで追加した objectgrid.jar ファイルの API 資料のロケーションを選択します。「**編集**」をクリックします。

3) API 資料のロケーション・パス・ボックスで、ディレクトリー *wxs_install_root*/docs/javadoc.zip に含まれている Javadoc.zip ファイルを選択します。

8. Google Protocol Buffers ユーザー・ライブラリーを定義します。
   a. 「**新規**」をクリックします。
   b. 「**ユーザー・ライブラリー名**」フィールドに com.google.protobuf と入力し、「**OK**」をクリックします。
   c. 新規ユーザー・ライブラリーを選択し、「**JAR の追加**」をクリックします。
      1) *wxs_sample_osgi_root*/lib ディレクトリーから、com.google.protobuf_2.4.0.a.jar ファイルを参照して選択します。「**OK**」をクリックします。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、サンプル Eclipse プロジェクトをインポートし、ビルド・エラーを修正するユーザー・ライブラリーを定義しました。

レッスン 3.2: クライアントの始動とグリッドへのデータの挿入

このレッスンを完了して、非 OSGi クライアントを始動して、クライアント・アプリケーションを実行します。

Java クライアント・アプリケーションは、com.ibm.websphere.samples.xs.proto.client.Client です。この Java クライアント・アプリケーションは Eclipse プロジェクト wxs.sample.osgi.protobuf.client に含まれています。メイン・クラス・ファイルは com.ibm.websphere.samples.xs.proto.client.Client です。

このクライアントはクライアント・オーバーライド ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用して OSGi 構成をオーバーライドします。その結果、このクライアントは非 OSGi 環境で実行可能となります。コメントおよびヘッダーが削除された、次のファイルの内容を参照してください。

```
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

    <objectGrids>
        <objectGrid name="Grid" txTimeout="15">
            <bean id="ObjectGridEventListener" className="" osgiService=""/>
            <backingMap name="Map" readOnly="false"
                lockStrategy="PESSIMISTIC" lockTimeout="5"
                copyMode="COPY_TO_BYTES" pluginCollectionRef="serializer"/>

        </objectGrid>
    </objectGrids>

    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="serializer">

   <bean id="MapSerializer"
   className="com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.proto.ProtoMapSerializer"
       osgiService="">
    <property name="keyType" type="java.lang.String"
        value="com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.proto.DataObjects2$OrderKey" />
          <property name="valueType" type="java.lang.String"
              value="com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.proto.DataObjects2$Order" />
   </bean>
  </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

「**次を実行**」 > 「**Java アプリケーション**」をクリックして、クライアント・アプリケーションを実行します。

アプリケーションを実行すると、次のメッセージが表示されます。メッセージは、オーダーが挿入されたことを示します。

```
order
com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.proto.DataObjects1$Order$Builder@5d165d16(5000000) inserted
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、オーダーを生成する、
`com.ibm.websphere.samples.xs.proto.client.Client` アプリケーションを開始しました。

モジュール 4: サンプル・バンドルの照会とアップグレード

このモジュールのレッスンでは、**xscmd** コマンドを使用して、サンプル・バンドルのサービス・ランキングを照会したり、それを新しいサービス・ランキングにアップグレードしたり、新しいサービス・ランキングを検査したりします。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下のタスクの実行方法がわかります。

- サービスの現在のサービス・ランキングを照会する。
- すべてのサービスの現在のランキングを照会する。
- サービスのすべての使用可能なランキングを照会する。
- すべての使用可能なサービス・ランキングを照会する。
- xscmd ツールを使用して、特定のサービス・ランキングが使用可能かどうか確認する。
- サンプル OSGi サービスのサービス・ランキングを更新する。

前提条件

モジュール 3: eXtreme Scale サンプル・クライアントの実行を完了してください。

レッスン 4.1: サービス・ランキングの照会

このレッスンを実行して、現在のサービス・ランキングやアップグレードに使用可能なサービス・ランキングを照会します。

- サービスの現在のサービス・ランキングを照会します。 次のコマンドを入力して、サービス myShardListener に現在使用されているサービス・ランキングを照会します。このサービスは、`Grid` という ObjectGrid と `MapSet` というマップ・セットで使用されます。
  1. 次のディレクトリーに切り替えます。

     ```
     cd wxs_home/bin
     ```

  2. 次のコマンドを入力して、サービス myShardListener の現在のサービス・ランキングを照会します。

     ```
     ./xscmd.sh -c osgiCurrent -g Grid -ms MapSet -sn myShardListener
     ```

     以下の出力が表示されます。

```
OSGi Service Name: myShardListener
ObjectGrid Name MapSet Name Server Name        Current Ranking
--------------- ----------- -----------        ---------------
Grid            MapSet      collocatedServer   1

CWXSI0040I: The command osgiCurrent has completed successfully.
```

- すべてのサービスの現在のランキングを照会します。 次のコマンドを入力して、Grid という ObjectGrid と MapSet というマップ・セットで使用されるすべてのサービスの現在のサービス・ランキングを照会します。
  1. 次のディレクトリーに切り替えます。

     ```
     cd wxs_home/bin
     ```

  2. 次のコマンドを入力して、すべてのサービスの現在のサービス・ランキングを照会します。

     ```
     ./xscmd.sh -c osgiCurrent -g Grid -ms MapSet
     ```

     以下の出力が表示されます。

     ```
     OSGi Service Name    Current Ranking ObjectGrid Name MapSet Name Server Name
     -----------------    --------------- --------------- ----------- -----------
     myProtoBufSerializer 1               Grid            MapSet      collocatedServer
     myShardListener      1               Grid            MapSet      collocatedServer

     CWXSI0040I: The command osgiCurrent has completed successfully.
     ```

- サービスのすべての使用可能なランキングを照会します。 次のコマンドを入力して、myShardListener というサービスのすべての使用可能なサービス・ランキングを照会します。
  1. 次のディレクトリーに切り替えます。

     ```
     cd wxs_home/bin
     ```

  2. 次のコマンドを入力して、サービスのすべての使用可能なランキングを照会します。

     ```
     ./xscmd.sh -c osgiAll -sn myShardListener
     ```

     以下の出力が表示されます。

     ```
     Server: collocatedServer
        OSGi Service Name Available Rankings
        ----------------- ------------------
        myShardListener   1

        Summary - All servers have the same service rankings.

     CWXSI0040I: The command osgiAll has completed successfully.
     ```

     出力はサーバー別にグループ化されます。この例の場合は、サーバー collocatedServer しか存在しません。

- すべての使用可能なサービス・ランキングを照会します。 次のコマンドを入力して、すべてのサービスのすべての使用可能なサービス・ランキングを照会します。
  1. 次のディレクトリーに切り替えます。

     ```
     cd wxs_home/bin
     ```

  2. 次のコマンドを入力して、すべての使用可能なサービス・ランキングを照会します。

     ```
     ./xscmd.sh -c osgiAll
     ```

以下の出力が表示されます。

```
Server: collocatedServer
   OSGi Service Name    Available Rankings
   -----------------    ------------------
   myProtoBufSerializer 1
   myShardListener      1

   Summary - All servers have the same service rankings.
```

- バージョン 2 のプラグイン・バンドルをインストールして開始します。 サーバー OSGi コンソールで、新規バージョンの Order クラスと MapSerializerPlugin プラグインを含んでいる新規バンドルをインストールします。
  ProtoBufSamplePlugins-2.0.0.jar バンドルのインストール方法の詳細については、レッスン 2.4: Google Protocol Buffers バンドルとサンプル・プラグイン・バンドルのインストールを参照してください。
  1. インストール後、新規バンドルを開始します。 新規バンドルのサービスは使用可能ですが、eXtreme Scale サーバーはまだそれを使用していません。特定バージョンのサービスを使用するには、サービス更新要求を実行しなければなりません。
- ここで、すべての使用可能なサービス・ランキングを再度照会すると、サービス・ランキング 2 が出力に追加されます。
  1. 次のディレクトリーに切り替えます。

     ```
     cd wxs_home/bin
     ```
  2. 次のコマンドを入力して、すべての使用可能なサービス・ランキングを照会します。

     ```
     ./xscmd.sh -c osgiAll
     ```

     以下の出力が表示されます。

     ```
     Server: collocatedServer
        OSGi Service Name    Available Rankings
        -----------------    ------------------
        myProtoBufSerializer 1, 2
        myShardListener      1, 2

     Summary - All servers have the same service rankings.
     ```

レッスンのチェックポイント:

このチュートリアルでは、現在指定されているサービス・ランキングとすべての使用可能なサービス・ランキングを照会しました。また、インストールして開始した新規バンドルのサービス・ランキングも表示しました。

レッスン 4.2: 特定のサービス・ランキングが使用可能かどうかの判別

このレッスンを完了して、指定したサービス名の特定のサービス・ランキングが使用可能かどうか判別します。

1. 次のコマンドを入力して、サービス・ランキング 2 の myShardListener という名前のサービスと、サービス・ランキング 2 の myProtoBufSerializer という名前のサービスが使用可能かどうか判別します。サービス・ランキング・リストは、-sr オプションを使用して渡されます。
   a. 次のディレクトリーに切り替えます。

```
cd wxs_home/bin
```

b. 次のコマンドを入力して、サービスが使用可能かどうか判別します。

```
./xscmd.sh -c osgiCheck -sr "myShardListener;2,myProtoBufSerializer;2"
```

以下の出力が表示されます。

```
CWXSI0040I: The command osgiCheck has completed successfully.
```

2. 次のコマンドを入力して、サービス・ランキング 2 の myShardListener という名前のサービスと、サービス・ランキング 3 の myProtoBufSerializer という名前のサービスが使用可能かどうか判別します。

a. 次のディレクトリーに切り替えます。

```
cd wxs_home/bin
```

b. 次のコマンドを入力して、サービスが使用可能かどうか判別します。

```
./xscmd.sh -c osgiCheck -sr "myShardListener;2,myProtoBufSerializer;3"
```

以下の出力が表示されます。

```
Server           OSGi Service         Unavailable Rankings
------           ------------         --------------------
collocatedServer myProtoBufSerializer          3
```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、myShardListener および myProtoBufSerializer というサービスを特定のサービス・ランキングと一緒に指定して、これらのランキングが使用可能かどうか判別しました。

レッスン 4.3: サービス・ランキングの更新

このレッスンを完了して、照会した現行サービス・ランキングを更新します。

1. サービス myShardListener および myProtoBufSerializer のサービス・ランキングをサービス・ランキング 2 に更新します。サービス・ランキング・リストは -sr オプションを使用して渡されます。

a. 次のディレクトリーに切り替えます。

```
cd wxs_home/bin
```

b. 次のコマンドを入力して、サービス・ランキングを更新します。

```
./xscmd.sh -c osgiUpdate -g Grid -ms MapSet -sr "myShardListener;2,myProtoBufSerializer;2"
```

以下の出力が表示されます。

```
Update succeeded for the following service rankings:
Service              Ranking
-------              -------
myProtoBufSerializer 2
myShardListener      2

CWXSI0040I: The command osgiUpdate has completed successfully.
```

OSGi コンソールに、次の出力が表示されます。

```
SystemOut O MyShardListener@326505334(version=2.0.0) order
com.ibm.websphere.samples.xs.serializer.proto.DataObjects2$Order$Builder@
22342234(34) updated
```

MyShardListener サービスがバージョン 2.0.0 で、それがサービス・ランキング 2 になっていることに注意してください。

2. **xscmd** コマンドを実行して、Grid という名前の ObjectGrid および MapSet という名前のマップ・セットが使用するすべてのサービスの現在のサービス・ランキングを照会します。
   a. 次のディレクトリーに切り替えます。

      ```
      cd wxs_home/bin
      ```

   b. 次のコマンドを入力して、Grid および MapSet によって使用されるすべてのサービスのサービス・ランキングを照会します。

      ```
      ./xscmd.sh -c osgiCurrent -g Grid -ms MapSet
      ```

      以下の出力が表示されます。

      ```
      OSGi Service Name    Current Ranking ObjectGrid Name MapSet Name Server Name
      -----------------    --------------- --------------- ----------- -----------
      myProtoBufSerializer 2               Grid            MapSet      collocatedServer
      myShardListener      2               Grid            MapSet      collocatedServer

      CWXSI0040I: The command osgiCurrent has completed successfully.
      ```

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、myShardListener サービスと myProtoBufSerializer サービスのサービス・ランキングを更新しました。

.

第 2 章 シナリオ

全体像を描くために、シナリオには実在の情報が含まれています。シナリオは、新しい概念を理解したり、一般的な WebSphere eXtreme Scale タスクを実行するのに役立ちます。

シナリオ: エンタープライズ・データ・グリッドの構成

Java アプリケーションと .NET アプリケーションの両方が同じデータ・グリッドに接続するようにしたいときは、エンタープライズ・データ・グリッドを構成してください。

始める前に

- 製品をインストールします。サーバー・ランタイムとクライアントの両方をインストールする必要があります。クライアントの場合は、Java クライアントと .NET クライアントの両方を使用することができます。詳しくは、インストールを参照してください。
- 前のリリースからアップグレードする場合は、すべてのコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーが同じリリース・レベルでなければなりません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のアップグレードおよびマイグレーションを参照してください。

このタスクについて

エンタープライズ・データ・グリッドの概要

エンタープライズ・データ・グリッドは eXtremeIO トランスポート・メカニズムと新しいシリアライゼーション形式を使用します。この新しいトランスポートおよびシリアライゼーション形式により、Java クライアントと .NET クライアントの両方を同じデータ・グリッドに接続することができます。

エンタープライズ・データ・グリッドにより、異なるプログラミング言語で書かれた、さまざまなタイプのアプリケーションを作成して、データ・グリッド内の同じオブジェクトにアクセスすることができます。これまでのリリースでは、データ・グリッド・アプリケーションは Java プログラミング言語でしか書くことができませんでした。エンタープライズ・データ・グリッド機能を使用すれば、Java アプリケーションと同じデータ・グリッドでオブジェクトの作成、検索、更新、および削除を行える .NET アプリケーションを書くことができます。

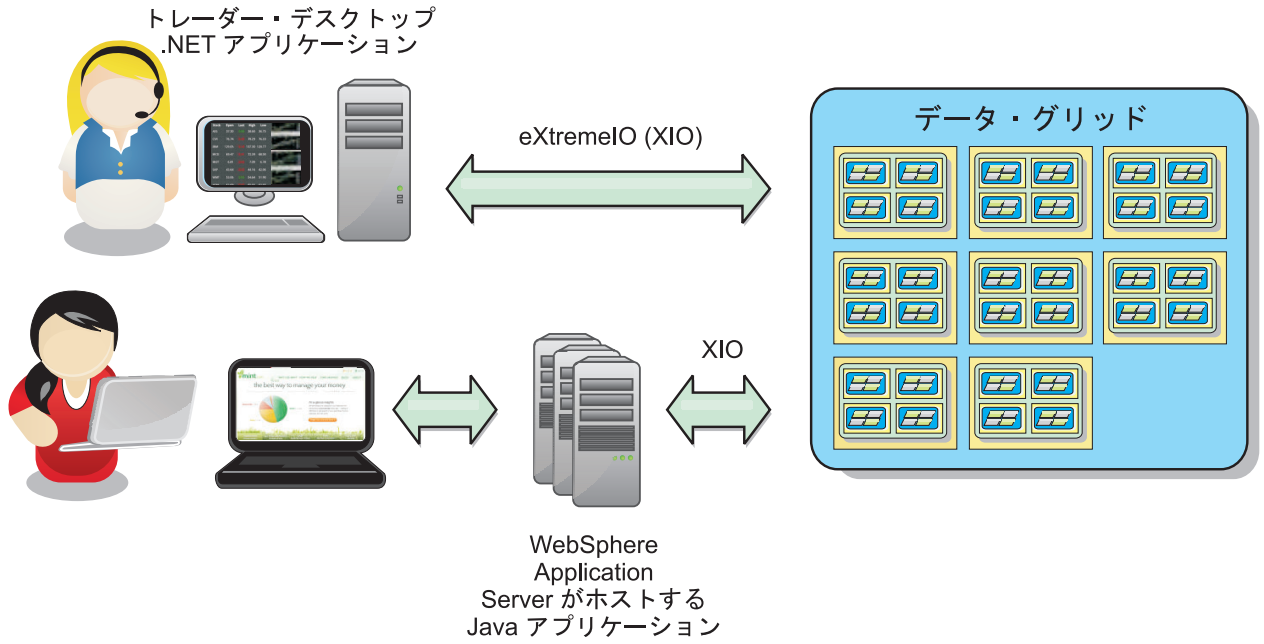


図 6. エンタープライズ・データ・グリッドの概要

異なるアプリケーションにまたがるオブジェクト更新

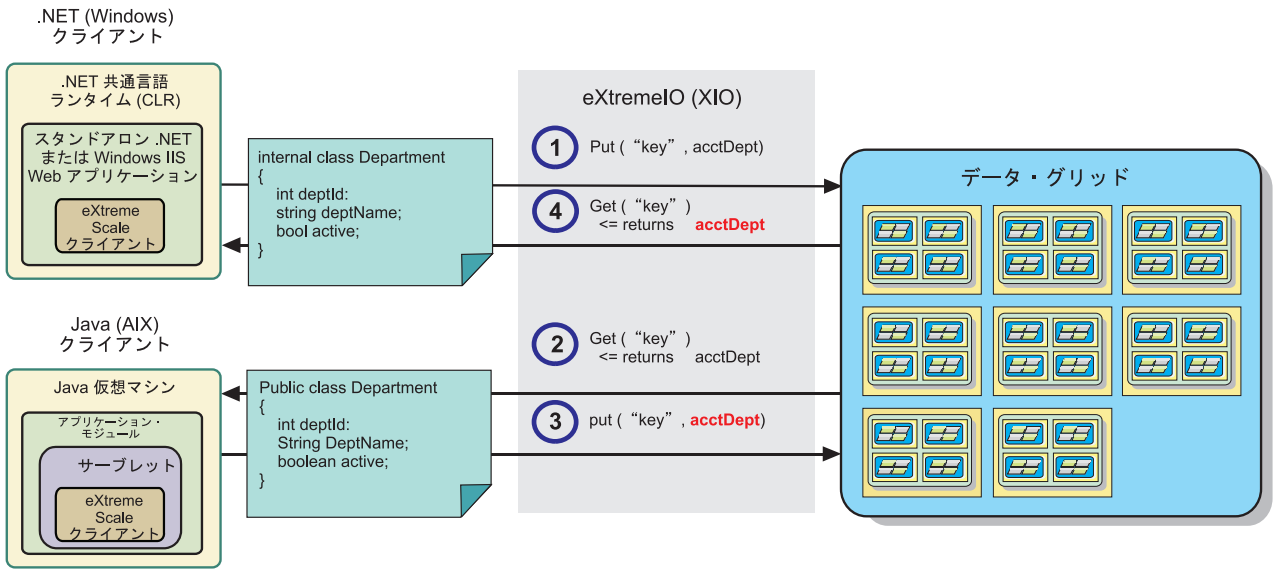


図 7. エンタープライズ・データ・グリッド・オブジェクト更新フロー

1. .NET クライアントが .NET 形式のデータをデータ・グリッドに保存します。
2. データは汎用形式で保管されるので、Java クライアントからこのデータが要求されたとき、このデータを Java 形式に変換することができます。
3. Java クライアントがデータを更新して再保存します。
4. .NET クライアントが更新されたデータにアクセスします。そのとき、データは .NET 形式に変換されます。

トランスポート・メカニズム

eXtremeIO (XIO) はクロスプラットフォーム・トランスポート・プロトコルです。 XIO は Java の制約を受けるオブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) に取って代わるものです。 ORB の場合は、WebSphere eXtreme Scale は Java ネイティブ・クライアント・アプリケーションと密接に結びついています。 XIO は、特にデータ・キャッシングを対象とし、異なるプログラミング言語で書かれたクライアント・アプリケーションがデータ・グリッドに接続できるようにする、カスタマイズされたトランスポート・メカニズムです。

シリアライゼーション形式

eXtreme データ形式 (XDF) はクロスプラットフォームのシリアライゼーション形式です。 XDF は、ObjectGrid 記述子 XML ファイルで copyMode 属性値が COPY_TO_BYTES であるマップでの Java シリアライゼーションに取って代わります。 XDF を使用すれば、パフォーマンスが向上し、データがよりコンパクトになります。さらに、XDF の導入により、異なるプログラミング言語で書かれたクライアント・アプリケーションが同じデータ・グリッドに接続できるようになります。

関連タスク:

8.6+ 135 ページの『エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの開発』
IBM eXtremeIO を構成した後、エンタープライズ・データ・グリッドにアクセスするアプリケーションを作成することができます。

『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』
IBM eXtremeIO (XIO) は、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) を置き換えるトランスポート・メカニズムです。

IBM eXtremeIO (XIO) トランスポートを使用するコンテナー・サーバーの始動
コンテナー・サーバーは、デプロイメント・トポロジーまたは `server.properties` ファイルを使用して、コマンド行から始動できます。

8.6+ 134 ページの『eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成』
エンタープライズ・データ・グリッドを使用している場合は、Java と .NET の両方が同じデータ・グリッド・オブジェクトにアクセスできるようにするために、XDF を使用可能にする必要があります。XDF を使用して、キーおよび値を、言語に依存しない形式でシリアライズし、データ・グリッドに保管します。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

IBM eXtremeIO (XIO) の構成

IBM eXtremeIO (XIO) は、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) を置き換えるトランスポート・メカニズムです。

始める前に

- 8.6 XIO を構成するには、すべてのカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーがバージョン 8.6 リリース・レベルでなくてはいけません。詳しくは、eXtreme Scale サーバーの更新を参照してください。

8.6+ カタログ・サーバーで XIO を使用可能にすることで、カタログ・サービス・ドメイン内のすべてのコンテナー・サーバーに対して XIO を構成できます。コンテナー・サーバーはカタログ・サーバーのトランスポート・タイプをディスカバーし、そのトランスポート・タイプを使用します。

手順

8.6+ XIO を使用可能にする方法は、以下のように、使用しているサーバーのタイプによって異なります。

- スタンドアロン・カタログ・サーバーで XIO を使用可能にします。

  XIO は、**startXsServer** コマンドでカタログ・サーバーを始動すると、デフォルトで使用可能になります。詳しくは、IBM eXtremeIO (XIO) トランスポートを使用するコンテナー・サーバーの始動を参照してください。
- WebSphere Application Server で実行されているサーバーで XIO を使用可能にします。

  WebSphere Application Server 管理コンソールで、カタログ・サービス・ドメインに対して XIO を使用可能にすることができます。「**システム管理**」 > 「**WebSphere eXtreme Scale**」 > 「**カタログ・サービス・ドメイン**」 > 「***catalog_service_domain***」をクリックします。「**IBM eXtremeIO (XIO) 通信を有効にする**」を選択します。変更を適用します。詳しくは、WebSphere Application Server でのカタログ・サービスの構成を参照してください。
- Liberty プロファイルで実行されているサーバーで XIO を使用可能にします。

  Liberty プロファイル・サーバーで XIO を使用可能にするには、`server.xml` ファイルで `transport` 属性を `XIO` に設定します。例えば、以下のコード例の強調表示されたプロパティーを参照してください。

```
<featureManager>
  ...
  <feature>eXtremeScale.server-1.1</feature>
</featureManager>

<xsServer isCatalog="true" transport="XIO" listenerPort="2809" ... />
```

  重要: サーバーはカタログ・サーバーでなければならないため、XIO の構成時には、`isCatalog` を `true` に設定する必要があります。`listenerPort` 設定は必須ではありません。ただし、これを使用可能にした場合、XIO はこのポートを認識できます。XIO を使用可能にしない場合は、代わりに ORB がそのポートで使用されます。

  次に、**start** コマンドを実行して Liberty プロファイル・サーバーを始動します。詳しくは、Liberty プロファイルでのサーバーの始動および停止を参照してください。

8.6+ 以下のように、コマンド行引数およびサーバー・プロパティーを使用して、XIO の動作を構成できます。

- オプション: 構成内の各コンテナー・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルを更新して、XIO プロパティーを使用可能にします。 設定するプロパティーを決定した後に、サーバー・プロパティー・ファイルで、または ServerProperties インターフェースでプログラマチックに値を設定できます。設定可能なプロパティーについて詳しくは、142 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) のチューニング』を参照してください。

8.6+ タスクの結果

構成したサーバーは、XIO トランスポートを使用します。構成が正しいことを確認するには、カタログ・サービス・ドメインのトランスポート・タイプの表示を参照してください。

次のタスク

また、IBM eXtremeMemory を使用して、ガーベッジ・コレクションの一時停止を回避するのに役立てることもできます。これにより、パフォーマンスがより安定し、応答時間が予測可能になります。詳しくは、IBM eXtremeMemory の構成を参照してください。

関連概念:

8.6+ 129 ページの『エンタープライズ・データ・グリッドの概要』
エンタープライズ・データ・グリッドは eXtremeIO トランスポート・メカニズムと新しいシリアライゼーション形式を使用します。この新しいトランスポートおよびシリアライゼーション形式により、Java クライアントと .NET クライアントの両方を同じデータ・グリッドに接続することができます。

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

8.6+ 142 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) のチューニング』
XIO サーバー・プロパティーを使用して、データ・グリッド内での XIO トランスポートの動作をチューニングすることができます。

eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成

エンタープライズ・データ・グリッドを使用している場合は、Java と .NET の両方が同じデータ・グリッド・オブジェクトにアクセスできるようにするために、XDF を使用可能にする必要があります。XDF を使用して、キーおよび値を、言語に依存しない形式でシリアライズし、データ・グリッドに保管します。

始める前に

環境で IBM eXtremeIO (XIO) を使用可能にします。詳しくは、 132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。

このタスクについて

eXtreme Data Format (XDF) を使用可能にして、言語に関係なく、シリアライズド・オブジェクトを保管します。XDF は現在、XIO を実行していて、マップ・コピー・モードが `COPY_TO_BYTES` に設定されているときに使用されるデフォルトのシリアライゼーション・テクノロジーです。この機能を使用可能にすると、Java および C# オブジェクトは、同じデータ・グリッド内でデータを共有します。スタンドアロン環境の WebSphere eXtreme Scale のインストール済み環境、および WebSphere Application Server 環境内の WebSphere eXtreme Scale のインストール済み環境に対して XDF モードを設定できます。

XDF を使用すると、以下の利点があります。

- Java、および C#/.NET アプリケーション間での共有のためのデータのシリアライゼーション。
- ユーザー・クラスの存在を必要としないサーバー上のデータの索引付け (フィールド・アクセスが使用される場合)。
- より新しいバージョンのファイルを必要とするアプリケーションを追加したときにクラス定義を拡張できるようにする、クラスの自動バージョン管理。 Mergable インターフェースを活用すれば、より古いバージョンのデータを使用することができます。
- アプリケーションから一貫して区画化するための、Java および C# のアノテーションによるデータの区画化。

手順

ObjectGrid 記述子 XML ファイルで、ObjectGrid 記述子 XML ファイルの backingMap エレメントの **CopyMode** 属性を XDF に設定します。

```
<backingMap name="Employee" lockStrategy="PESSIMISTIC" copyMode="COPY_TO_BYTES">
```

次のタスク

データを共有できるアプリケーションを開発します。詳しくは、『エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの開発』を参照してください。

関連概念:

8.6+ 129 ページの『エンタープライズ・データ・グリッドの概要』
エンタープライズ・データ・グリッドは eXtremeIO トランスポート・メカニズムと新しいシリアライゼーション形式を使用します。この新しいトランスポートおよびシリアライゼーション形式により、Java クライアントと .NET クライアントの両方を同じデータ・グリッドに接続することができます。

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの開発

IBM eXtremeIO を構成した後、エンタープライズ・データ・グリッドにアクセスするアプリケーションを作成することができます。

始める前に

- 開発環境をセットアップし、API 資料を検討します。詳しくは、 280 ページの『アプリケーション開発入門』を参照してください。
- データ・グリッドにアクセスする既存の Java または .NET アプリケーションがなければなりません。アプリケーション作成入門について詳しくは、 262 ページの『入門チュートリアル・モジュール 2: クライアント・アプリケーションの作成』を参照してください。

関連概念:

8.6+ 129 ページの『エンタープライズ・データ・グリッドの概要』
エンタープライズ・データ・グリッドは eXtremeIO トランスポート・メカニズムと新しいシリアライゼーション形式を使用します。この新しいトランスポートおよびシリアライゼーション形式により、Java クライアントと .NET クライアントの両方を同じデータ・グリッドに接続することができます。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

クラス進化

eXtreme data format (XDF) はクラスター進化を考慮しています。クラス進化により、当該クラスの旧バージョンを使用している、より古いアプリケーションに影響を及ぼさないようにして、データ・グリッド内で使用されるクラス定義を進化させることができます。これらのより古いクラスは新しいアプリケーションと同じマップ内のデータにアクセスします。

概要

クラス進化とは、2 つのタイプが一緒に機能するだけの互換性を持っているかどうかを決定するクラスとフィールドを特定することをさらに拡張するものです。 2 つのクラスが一緒に機能できるのは、一方のクラスが他方のクラスよりフィールド数が少ないときです。以下のユーザー・シナリオは XDF の実装に組み込まれるように設計されたものです。

同じオブジェクト・クラスの複数のバージョン

このシナリオでは、使用される販売アプリケーション内のマップに顧客を追跡させます。このマップには 2 つの異なるインターフェースがあります。1 つは Web 購入用のインターフェースです。 2 つ目は電話購入用のインターフェースです。この販売アプリケーションのバージョン 2 では、Web 買い物客に対して、それぞれの購買習慣に基づいて割引を行うことにします。この割引は「顧客」オブジェクトと一緒に保管されます。電話販売員はまだアプリケーションのバージョン 1 を使用しており、このアプリケーションは Web バージョンに新しい割引フィールドがあることを知りません。アプリケーションのバージョン 2 にある「顧客」オブジェクトが、バージョン 1 アプリケーションで作成された「顧客」オブジェクトと連動するようにします (逆の場合も同じです)。

別のオブジェクト・クラスの複数のバージョン

このシナリオでは、Java で作成され、「顧客」オブジェクトのマップを保持する販売アプリケーションがあります。また、C# で作成されるもう 1 つのアプリケーションがあり、このアプリケーションは倉庫内の在庫を管理し、商品を顧客に出荷するために使用されます。これらのクラスは、クラス、フィールド、およびタイプの名前に基づいて現在互換性があります。Java 販売アプリケーションでは、販売員を顧客口座と関連付けるオプションを「顧客」レコードに追加することにします。ただし、このフィールドは倉庫アプリケーションでは不要であるため、このフィールドを保管するように倉庫アプリケーションを更新することはしません。

同じクラスの複数の非互換バージョン

このシナリオでは、販売アプリケーションと在庫アプリケーションの両方に「顧客」オブジェクトが含まれます。在庫アプリケーションはストリングである ID フィールドを使用し、販売アプリケーションは整数である ID フィールドを使用します。これらのタイプには互換性がありません。そのため、これらのオブジェクトはおそらく同じマップに保管されません。これらのオブジェクトは XDF シリアライゼーションによって処理され、かつ 2 つの異なるタイプとみなされるようにする必要があります。このシナリオは実際にはクラス進化ではありませんが、アプリケーション設計全体の一部として考慮しなければならない問題点です。

進化の判別

クラス名が一致し、かつフィールド名に矛盾するタイプがなければ、XDF はクラスを進化させようと試みます。クラスやフィールドの名前が若干異なる程度の C# アプリケーションと Java アプリケーションの間でクラスを一致させようと試みるときは、ClassAlias および FieldAlias 注釈の使用が役立ちます。これらのアノテーションは Java アプリケーション、C# アプリケーション、またはその両方に入れることができます。ただし、Java アプリケーションでのクラスの検索は、C# アプリケーションで ClassAlias を定義するほど効率的でないことがあります。 ClassAlias および FieldAlias 注釈について詳しくは、 139 ページの『ClassAlias および FieldAlias 注釈』を参照してください。

シリアライズされたデータ内の欠落フィールドの影響

クラスのコンストラクターはデシリアライゼーション時に呼び出されないので、欠落フィールドは、言語に基づいてそれに割り当てられるデフォルトを持ちます。新しいフィールドを追加するアプリケーションは、クラスの旧バージョンが取得されたとき、欠落フィールドを検出して反応できなければなりません。

古いアプリケーションが新しいフィールドを保持するようになるための唯一の方法はデータの更新である

アプリケーションがフェッチ操作を実行し、クライアントから取り出されたシリアライズされた値に一部のフィールドが欠落しているクラスの旧バージョンでマップを更新する場合があります。その場合、サーバーはサーバー上の値をマージし、元のバージョンのフィールドが新しいレコードにマージされるかどうかを決定します。アプリケーションがフェッチ操作を実行した後、エントリーを削除したり挿入したりした場合は、元の値から取り出されたフィールドが失われます。

マージ機能

配列やコレクション内のオブジェクトは XDF によってマージされません。配列やコレクションに対する更新がその配列のエレメントやタイプを変更するように意図されているかどうかは必ずしも明らかであるとは限りません。マージが位置付けに基づいて行われる場合は、配列内のエントリーが移動されると、XDF は関連付けるように意図されていないフィールドをマージすることがあります。結果として、XDF は配列やコレクションの内容をマージしようと試みません。ただし、クラス定義の新しいバージョンで配列を追加した場合、その配列はそのクラスの旧バージョンにマージし直されます。

Java と .NET クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java と .NET クラス間でのデータ・グリッド・データの共有を使用可能にします。

始める前に

- IBM eXtremeIO が構成されている必要があります。詳しくは、132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。
- ObjectGrid 記述子 XML ファイルの copyMode 属性が COPY_TO_BYTES に設定されている必要があります。詳しくは、134 ページの『eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成』を参照してください。

このタスクについて

既存の Java クラスがあり、対応する C# クラスを作成する場合は、ClassAlias 注釈と FieldAlias 注釈の使用を検討することができます。このシナリオでは、Java クラス名を含む注釈を C# クラスに追加できます。ClassAlias および FieldAlias 注釈について詳しくは、139 ページの『ClassAlias および FieldAlias 注釈』を参照してください。

手順

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java クラスと C# クラス間でオブジェクトを相関付けます。 Java

Java

```
@ClassAlias("Employee")
class com.company.department.Employee {

     @FieldAlias("id")
     int myId;

      String name;
}
```

図 8. ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用した Java の例

.NET

.NET

```
[ ClassAlias( "Employee") ]
class Com.MyCompany.Employee {

     [ FieldAlias("id") ]
      int identifier;

      string name;
}
```

図 9. ClassAlias および FieldAlias 属性を使用した .NET の例

関連概念:

8.6+ 『ClassAlias および FieldAlias 注釈』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、クラス間でのデータ・グリッドのデータの共有を可能にします。 2 つの Java クラス間または Java クラスと .NET クラス間でデータを共有することができます。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

8.6+ 268 ページの『レッスン 2.3: エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの作成』
Java クライアントと .NET クライアントの両方が同じデータ・グリッドを更新できるエンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを作成するには、ご使用のクラスが互換性を持つようにする必要があります。入門用サンプル・アプリケーションでは、.NET サンプル・アプリケーションが Java デフォルトと一致する別名を持っています。

ClassAlias および FieldAlias 注釈:

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、クラス間でのデータ・グリッドのデータの共有を可能にします。 2 つの Java クラス間または Java クラスと .NET クラス間でデータを共有することができます。

2 つのクラスを同じ名前およびフィールドで定義した場合は、データ・グリッドのデータは自動的にクラス間で共有されます。例えば、Customer1 クラスが Java アプリケーションにあり、同じフィールドを持つ Customer1 クラスが .NET アプリケーションにある場合は、データはこれらのクラス間で共有されます。これは、クラス名がクラス修飾子も含み、クラス修飾子がまた Java でパッケージ名であり、C# で名前空間であることを仮定しています。名前空間とパッケージ名は一致するため、パッケージ名と名前空間は自動的に共有されます。次の例を参照してください。名前は両方とも大/小文字を区別しません。

```
Java:
package com.mycompany.app
public class SampleClass {
int field1;
String field2;
}

C#
namespace Com.MyCompany.App
public class SampleClass {
int field1;
string field2;
}
```

ただし、異なる名前を持つクラス間でデータを相関することもできます。データ・グリッドに保管するデータを異なるクラス名間で相関するには、ClassAlias または FieldAlias 注釈を使用します。

2 つの Java アプリケーション間: 異なる名前を持つ 2 つの異なるクラスを別々の Java アプリケーション環境で定義することができます。同じ ClassAlias アノテーシ

ョンを持つクラスにマークを付けることによって、この 2 つのクラス間ですべてのフィールドおよびフィールド・タイプが突き合わされます。これらのクラスは、異なるクラス名を持っている場合でも、同じクラス・タイプ ID で相関されます。そのため、異なる Java アプリケーション・ランタイムでは、同じクラス・タイプ ID とメタデータがこれらのクラス間で再使用されます。

Java アプリケーションと .NET アプリケーション間: C# アプリケーション内で類似のアノテーションを使用して、C# クラスを Java クラスと相関させることができます。クラス C# に対して定義されている ClassAlias 属性およびフィールドが、同じ ClassAlias アノテーションを持つ Java クラスに突き合わされます。

関連タスク:

8.6+ 138 ページの『Java と .NET クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java と .NET クラス間でのデータ・グリッド・データの共有を使用可能にします。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

8.6+ 268 ページの『レッスン 2.3: エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの作成』
Java クライアントと .NET クライアントの両方が同じデータ・グリッドを更新できるエンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを作成するには、ご使用のクラスが互換性を持つようにする必要があります。入門用サンプル・アプリケーションでは、.NET サンプル・アプリケーションが Java デフォルトと一致する別名を持っています。

PartitionKey 注釈を使用したキーから区画へのマップ

PartitionKey 別名を使用して、データが保存される区画を判別するためにハッシュ・コード計算を実行するフィールドまたは属性を識別します。 PartitionKey 注釈は、キー属性でのみ有効です。

始める前に

eXtreme Data Format を使用している必要があります。詳しくは、 134 ページの『eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成』を参照してください。

このタスクについて

PartitionKey 別名を設定して、複数のクラスでデータが同じ区画に保存されるようにすることができます。例えば、PartitionKey 値を departmentID キーに設定した場合は、従業員レコードは、同じ区画に配置されることになります。

PartionableKey インターフェースは既存の Java インターフェースであり、C# の PartitionableKey 注釈よりも優先されます。

手順

- Java Java アプリケーションのフィールドに PartitionKey 注釈を定義します。 Java

```
class Employee {
    int empId;

    @PartitionKey(order = 0)
    int deptId;

}
```

  複数のキーで PartitionKey 注釈を設定できます。また、クラスで PartitionKey 別名を設定できます。Java アプリケーションで PartitionKey 注釈を設定する方法のさらなる例については、『Java API documentation: Annotation Type PartitionKeys』を参照してください。

- .NET .NET アプリケーションのフィールドで PartitionKey 属性を定義します。

```
class Employee {
    int empId;

    [PartitionKey]
    int deptId;
}
```

  .NET クラスでも PartitionKey 属性を設定できます。詳しくは、『.NET API documentation: PartitionKeyAttribute Class』を参照してください。

Java および C# の等価データ型

エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを開発するときは、Java アプリケーションと C# アプリケーションの間でデータ型に互換性がなければなりません。

表 1. Java および C# 間での等価データ型

Java 型	C# 型
boolean	bool
java.lang.Boolean	bool
byte	sbyte または byte
java.lang.Byte	sbyte
short	short, ushort
java.lang.Short	short, ushort
int	int, uint, ushort
java.lang.Integer	int, uint
long	long, ulong, uint
java.lang.Long	long, ulong, uint
short または int	ushort
java.lang.Short または java.lang.Integer	ushort
int または long	uint
java.lang.Integer または java.lang.Long	uint

表 1. *Java* および *C#* 間での等価データ型 *(続き)*

Java 型	**C# 型**
long または BigInteger	ulong
java.lang.Long または java.lang.BigInteger	ulong
char, java.lang.Character	char
float または java.lang.Float	float
double または java.lang.Double	double
java.math.BigDecimal	decimal
java.math.BigInteger	decimal, long または ulong
java.lang.String	ストリング (string)
java.util.Date, java.util.Calendar	System.DateTime
java.util.Date(rounding), java.util.Calendar (rounding)	System.DateTime
java.util.GregorianCalendar	
java.util.ArrayList	System.Collections.ArrayList, System.Collections.Generic.List, System.Collections.SortedList
java.util.HashMap	System.Collections.Generic.Dictionary, System.Collections.Hashtable
java.util.LinkedList	System.Collections.Generic.LinkedList
java.util.ArrayList, java.util.Vector	System.Collections.Generic.List
java.util.Stack	System.Collections.Generic.Stack
java.util.Vector	System.Collections.ArrayList, System.Collections.Generic.List

スタンドアロン・サーバーの始動 (XIO)

スタンドアロン構成を実行しているとき、環境はカタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびクライアント・プロセスで構成されています。また、組み込みのサーバー API を使用すれば、WebSphere eXtreme Scale サーバーを既存の Java アプリケーション内に組み込むことができます。これらのプロセスは手動で構成して開始する必要があります。

始める前に

WebSphere Application Server がインストールされていない環境で WebSphere eXtreme Scale サーバーを始動できます。WebSphere Application Server を使用している場合は、WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server の構成を参照してください。

IBM eXtremeIO (XIO) のチューニング

XIO サーバー・プロパティーを使用して、データ・グリッド内での XIO トランスポートの動作をチューニングすることができます。

XIO をチューニングするためのサーバー・プロパティー

サーバー・プロパティー・ファイルで以下のプロパティーを設定することができます。

maxXIONetworkThreads
eXtremeIO トランスポート・ネットワーク・スレッド・プールに割り振るスレッドの最大数を設定します。

デフォルト:50

minXIONetworkThreads
eXtremeIO トランスポート・ネットワーク・スレッド・プールに割り振るスレッドの最小数を設定します。

デフォルト:50

maxXIOWorkerThreads
eXtremeIO トランスポート要求処理スレッド・プールに割り振るスレッドの最大数を設定します。

デフォルト:128

minXIOWorkerThreads
eXtremeIO トランスポート要求処理スレッド・プールに割り振るスレッドの最小数を設定します。

デフォルト:128

8.6+ transport

カタログ・サービス・ドメイン内のすべてのサーバーに対して使用するトランスポートのタイプを指定します。設定できる値は XIO または ORB です。

startOgServer または **startXsServer** コマンドを使用すれば、このプロパティーを設定する必要はありません。これらのスクリプトはこのプロパティーをオーバーライドします。ただし、これ以外の方法でサーバーを始動した場合は、このプロパティーの値が使用されます。

このプロパティーは、カタログ・サービスにのみ適用されます。

始動スクリプトの **-transport** パラメーターと **transport** サーバー・プロパティーの両方がカタログ・サーバーで定義されている場合は、**-transport** パラメーターの値が使用されます。

8.6+ xioTimeout
IBM eXtremeIO (XIO) トランスポートを使用しているサーバー要求のタイムアウトを秒数で設定します。設定できる値は 1 秒以上の任意の値です。

デフォルト: 30 秒

関連タスク:

132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』
IBM eXtremeIO (XIO) は、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) を置き換えるトランスポート・メカニズムです。

シナリオ: eXtreme Scale でのデータ・グリッドの保護

WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドは、保護する必要がある機密情報を保管します。

始める前に

- 製品をインストールします。サーバー・ランタイムとクライアントの両方をインストールする必要があります。クライアントの場合は、Java クライアントと .NET クライアントの両方を使用することができます。詳しくは、インストールを参照してください。
- 前のリリースからアップグレードする場合は、すべてのコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーが同じリリース・レベルでなければなりません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のアップグレードおよびマイグレーションを参照してください。

このタスクについて

セキュア・デプロイメントでは、セキュリティーを最適化するために、複数の層の保護を使用します。保護の最初のエレメントは、ネットワークをセグメント化するファイアウォールの使用です。Web アプリケーションの標準階層モデルは、Web クライアント、HTTP サーバーのプレゼンテーション層、アプリケーション・サーバーから成るアプリケーション層、データ層、およびストレージ層で構成されます。

eXtreme Scale データ・グリッド・サーバーは、データ層の一部としてデプロイされます。標準プラクティスとしては、1 つのファイアウォールで保護された非武装地帯 (DMZ) にプレゼンテーション層のサーバーを配置し、追加ファイアウォールで保護されたネットワーク・セグメントにアプリケーション、データ、およびストレージの各層を配置します。eXtreme Scale サーバーを DMZ にデプロイしないでください。データ層のすべてのエレメントと同様に、標準的な業界のプラクティスに従って eXtreme Scale サーバーを保護する必要があります。

ただし、セキュリティー上の脅威に対する保護を最適化するために、複数の追加手段により、eXtreme Scale 操作およびデータ・グリッドに保管されたデータを保護する徹底的な防御メカニズムを使用します。これらの追加手段は、外部からの脅威に対する保護に役立つだけではなく、eXtreme Scale サーバーが存在するネットワーク・セグメントにアクセスできる可能性がある従業員や請負業者による無許可データ・アクセスも防止します。

環境にインストールされているのがスタンドアロン・サーバーなのか、Liberty プロファイルなのか、OSGi フレームワークなのか、WebSphere Application Server なのかに関係なく、以下の徹底的な手順を使用して、WebSphere eXtreme Scale でのセキュリティーを構成します。

サーバー間の eXtreme Scale 接続の認証

サーバー間の接続は、許可されないサーバーがグリッド・データにアクセスできないようにするために、認証する必要があります。

次のタスク

150 ページの『クライアントからサーバーへの要求の認証』

スタンドアロン環境での eXtreme Scale サーバー接続の認証

eXtreme Scale サーバー間の接続は、許可されないサーバーがデータ・グリッドにアクセスできないようにするために、認証する必要があります。

このタスクについて

server.properties ファイル内の以下の設定により、サーバーが相互に認証する方法が決定されます。

- **securityEnabled=true**
- **secureTokenManagerType=autoSecret**
- **authenticationSecret=OurGridServersExampleSecret**

ドメイン内のすべての eXtreme Scale サーバー、およびすべてのリンクされているドメイン内のすべてのサーバーで、server.properties ファイル内のこれらの 3 つのプロパティーに同じ値を使用している必要があります。そうなっていない場合は、通信が失敗します。サーバー・プロパティー・ファイルでこれらのプロパティーを指定する方法について詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

手順

1. サーバー間の認証を使用可能にします。 securityEnabled プロパティーを true に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   securityEnabled=true
   ```

   このプロパティーのデフォルト値は false です。
2. セキュア・サーバー構成を確立します。

   secureTokenManagerType は、サーバー・プロパティー・ファイルで定義するプロパティーです。

   セキュア構成に使用できる secureTokenManagerType の 1 つに autoSecret があります。これは、authenticationSecret プロパティーから派生された鍵を使用して、トークンの暗号化および署名を実行します。セキュア・トークンは、サーバー間認証に加え、クライアント・シングル・サインオン・トークンにも使用されます。secureTokenManagerType に none という値を設定すると、この設定では暗号化されたトークンが作成されないため、安全ではありません。

   また、 secureTokenManagerType=default の設定を指定することも可能です。ただし、このオプションを使用する場合、鍵ストアおよび関連成果物をセットアップする必要があります。

3. authenticationSecret (注: 1 語) に、他者が推測しにくい長いストリング値を指定します。 FilePasswordEncoder ユーティリティーを使用してこの値をエンコードできます。詳しくは、 173 ページの『許可されたユーザーのセキュリティー成果物の保管』を参照してください。ObjectGridDefaultSecret プロパティーを使用しないでください。この値は、sampleServer.properties ファイルで使用されています。

タスクの結果

スタンドアロン eXtreme Scale サーバーを始動する際に、コマンド行でプロパティー・ファイルの名前を指定します。サーバー・プロパティー・ファイルを指定することで、追加した認証プロパティーがサーバーの始動時にロードされます。詳しくは、 175 ページの『スタンドアロン環境でのセキュア・サーバーの始動』を参照してください。

次のタスク

150 ページの『スタンドアロン環境でのクライアント要求の認証』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

Liberty プロファイル内での eXtreme Scale サーバー接続の認証

Liberty プロファイルでの eXtreme Scale サーバー間の接続は、許可されないサーバーがデータ・グリッドにアクセスできないようにするために、認証する必要があります。

このタスクについて

server.properties ファイル内の以下の設定により、サーバーが相互に認証する方法が決定されます。

- **securityEnabled=true**
- **secureTokenManagerType=autoSecret**
- **authenticationSecret=OurGridServersExampleSecret**

ドメイン内のすべての eXtreme Scale サーバー、およびすべてのリンクされているドメイン内のすべてのサーバーで、server.properties ファイル内のこれらのプロパティーに同じ値を使用している必要があります。そうなっていない場合は、通信が失敗します。

手順

1. サーバー間の認証を使用可能にします。 securityEnable プロパティーを true に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   securityEnabled=true
   ```

このプロパティーのデフォルト値は false です。

2. セキュア・サーバー構成を確立します。 セキュア構成に使用できる secureTokenManagerType の 1 つに autoSecret があります。これは、authenticationSecret から派生された鍵を使用して、トークンの暗号化および署名を実行します。セキュア・トークンは、サーバー間認証に加え、クライアント・シングル・サインオン・トークンにも使用されます。secureTokenManagerType に none という値を設定すると、この設定では暗号化されたトークンが作成されないため、安全ではありません。

   また、 secureTokenManagerType=default の設定を指定することも可能です。ただし、このオプションを使用する場合、鍵ストアおよび関連成果物をセットアップする必要があります。
3. 他者が暗号解読するのが困難な長い暗号化認証秘密鍵を指定します。 ObjectGridDefaultSecret を使用しないでください。この値は、sampleServer.properties ファイルで使用されています。
4. スタンドアロン・サーバー構成に使用するのと同じ構成を使用して、server.xml ファイルを構成します。 server.xml ファイルで、xsSever エレメントの serverProps 属性にプロパティー・ファイルのファイル・パスを指定します。 server.xml ファイルの次の例を参照してください。

```
<server>
...
<xsSever ... serverProps="/path/to/myServerProps.properties" ... />
</server>
```

次のタスク

152 ページの『Liberty プロファイル内でのクライアント要求の認証』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

OSGi フレームワーク内での eXtreme Scale サーバー接続の認証

OSGi フレームワークでの eXtreme Scale サーバー間の接続は、許可されないサーバーがデータ・グリッドにアクセスできないようにするために、認証する必要があります。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、 182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

このタスクについて

server.properties ファイル内の以下の設定により、サーバーが相互に認証する方法が決定されます。

- **securityEnabled=true**
- **secureTokenManagerType=autoSecret**
- **authenticationSecret=OurGridServersExampleSecret**

ドメイン内のすべての eXtreme Scale サーバー、およびすべてのリンクされているドメイン内のすべてのサーバーで、server.properties ファイル内のこれらのプロパティーに同じ値を使用している必要があります。そうなっていない場合は、通信が失敗します。

手順

1. サーバー間の認証を使用可能にします。 サーバー・プロパティー・ファイルの **securityEnabled** プロパティーを true に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   securityEnabled=true
   ```

   このプロパティーのデフォルト値は false です。
2. セキュア・サーバー構成を確立します。 セキュア構成に使用できる secureTokenManagerType の 1 つに autoSecret があります。これは、authenticationSecret から派生された鍵を使用して、トークンの暗号化および署名を実行します。セキュア・トークンは、サーバー間認証に加え、クライアント・シングル・サインオン・トークンにも使用されます。secureTokenManagerType に none という値を設定すると、この設定では暗号化されたトークンが作成されないため、安全ではありません。

   また、 secureTokenManagerType=default の設定を指定することも可能です。ただし、このオプションを使用する場合、鍵ストアおよび関連成果物をセットアップする必要があります。
3. authenticationSecret エレメントに長いストリング値を指定します。 この値は、他者が推測しにくいものにする必要があります。FilePasswordEncoder ユーティリティーを使用してこの値をエンコードできます。 ObjectGridDefaultSecret エレメントを使用しないでください。この値は、sampleServer.properties ファイルで使用されています。
4. サーバー・プロパティー・ファイルを参照します。 OSGi コンソールで以下のコマンドを実行して、サーバー・プロパティー・ファイルの管理対象サービス永続 ID (PID) を作成します。

   ```
   osgi> cm create com.ibm.websphere.xs.server
   osgi> cm put com.ibm.websphere.xs.server objectgrid.server.props /mypath/server.properties
   ```

次のタスク

154 ページの『OSGi フレームワーク内でのクライアント要求の認証』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

WebSphere Application Server 内での eXtreme Scale サーバー接続の認証

WebSphere Application Server で実行されている eXtreme Scale サーバーは、eXtreme Scale スタンドアロン・サーバーと同じように相互に認証します。

始める前に

このタスクについて

server.properties ファイル内の 3 つの設定により、サーバーが相互に認証する方法が決定されます。ドメイン内のすべての eXtreme Scale サーバー、およびすべてのリンクされているドメイン内のすべてのサーバーで、server.properties ファイル内のこれらの 3 つのプロパティーに同じ値を使用している必要があります。そうなっていない場合は、通信が失敗します。セキュリティー・プロパティーの詳細については、セキュリティー記述子 XML ファイルを参照してください。

手順

1. サーバー・プロパティー・ファイルを作成し、サーバー間認証を使用可能にします。 このサンプル・サーバー・プロパティー・ファイルを使用して、**securityEnabled** プロパティー (true に設定) が含まれたサーバー・プロパティー・ファイルを作成します。例えば、以下のようにします。

   ```
   securityEnabled=true
   ```

   このプロパティーのデフォルト値は false です。
2. セキュア・サーバー構成を確立します。 セキュア構成に使用できる secureTokenManagerType の 1 つに autoSecret があります。これは、authenticationSecret から派生された鍵を使用して、トークンの暗号化および署名を実行します。セキュア・トークンは、サーバー間認証に加え、クライアント・シングル・サインオン・トークンにも使用されます。secureTokenManagerType に none という値を設定すると、この設定では暗号化されたトークンが作成されないため、安全ではありません。

   また、 secureTokenManagerType=default の設定を指定することも可能です。ただし、このオプションを使用する場合、鍵ストアおよび関連成果物をセットアップする必要があります。
3. 他者が暗号解読するのが困難な長い暗号化認証秘密鍵を指定します。ObjectGridDefaultSecret を使用しないでください。この値は、sampleServer.properties ファイルで使用されています。

4. サーバーを保護するようにサーバー・プロパティー・ファイルを構成します。WebSphere Application Server 管理コンソールで「**WebSphere Application Server**」 > 「*server_name*」 > 「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」を使用して、このプロパティー・ファイルを構成します。次の汎用 JVM 引数を追加します。

   ```
   -Dobjectgrid.server.props=<server property file name>
   ```

次のタスク

155 ページの『WebSphere Application Server でのクライアント要求の認証』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

クライアントからサーバーへの要求の認証

クライアント・アプリケーションは、ネットワークを介してセキュアな要求を行う必要があります。

次のタスク

157 ページの『データ・グリッドへのアクセスの許可』

スタンドアロン環境でのクライアント要求の認証

クライアントが認証されていない限り、グリッド・データおよびグリッドを制御する JMX 管理操作へのアクセスは、保護されないままです。これは、SSL が使用可能になっている場合でも当てはまります。

このタスクについて

eXtreme Scale サーバーが eXtreme Scale クライアントに要求する認証動作は、`server.properties` ファイルの **`credentialAuthentication=required`** 設定によって決定されます。

以下の手順で説明するように、credentialAuthentication が `Required` または `Supported` に設定されている場合は、追加構成が必要になります。これらの手順については、27 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 3』で構成ファイルに対する変更の例を使用して、さらに詳細に説明しています。

手順

- 各カタログ・サーバーでセキュリティー記述子 XML ファイルを参照します。

  スタンドアロン環境でカタログ・サーバーを始動する際に、**`startXsServer`** コマンドまたは **`startOgServer`** コマンドの `-clusterSecurityFile`パラメーターを使用して、このファイルを指すことができます。

セキュリティーを有効にするには、このファイルのセキュリティー・エレメントで securityEnabled="true" が設定されている必要があります。また、セキュリティー記述子 XML ファイルに、使用するオーセンティケーターの記述子が含まれている必要があります。WebSphere eXtreme Scale には、LDAPAuthenticator、KeyStoreLoginAuthenticator、および WSTokenAuthenticator が含まれています。WSTokenAuthenticator オーセンティケーターをスタンドアロン環境で使用することはできません。このオーセンティケーターを使用できるのは、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーがともに WebSphere Application Server で実行されている場合のみです。あるいは、API 資料で説明されているインターフェースに従って、カスタム・オーセンティケーターおよびログイン・モジュールを開発できます。

- -Djava.security.auth.login.config="path_name" JVM 引数を使用して、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーのそれぞれで JAAS 構成ファイルを参照する必要があります。 これらのファイルの作成およびこれらのファイルを使用するための eXtreme Scale サーバーの構成については、 23 ページの『チュートリアル: Java SE セキュリティーの構成』のチュートリアルを参照してください。JAAS 構成ファイルは LoginModule を指定します。KeyStoreLoginAuthenticator とともに KeyStoreLoginModule を使用できます。SimpleLDAPLoginModule は LDAPAuthenticator とともに使用します。eXtreme Scale コンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーの 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』、または 852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。
- 認証に必要な資格情報を渡すようにクライアントを構成します。 これは通常、クライアント・プロパティー・ファイルで値を指定することで実行します。eXtreme Scale クライアントでの LDAP 認証の使用可能化について詳しくは、 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』を参照してください。また、eXtreme Scale クライアントでの鍵ストア認証の使用可能化について詳しくは、 852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。

次のタスク

157 ページの『スタンドアロン環境でのデータ・グリッドへのアクセスの許可』

関連資料:

セキュリティー記述子 XML ファイル
セキュリティー記述子 XML ファイルを使用して、セキュリティーを使用可能にした eXtreme Scale デプロイメント・トポロジーを構成できます。このファイルの中のエレメントを使用して、セキュリティーのさまざまな側面を構成できます。

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイル
デプロイメント・ポリシーを構成するには、デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルを使用します。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

API 資料

Liberty プロファイル内でのクライアント要求の認証

クライアントが認証されていない限り、グリッド・データおよびグリッドを制御する JMX 管理操作へのアクセスは、保護されないままです。これは、Liberty プロファイルで SSL が使用可能になっている場合でも当てはまります。

このタスクについて

eXtreme Scale クライアントで必要とされる認証動作は、`server.properties` ファイルの **`credentialAuthentication=required`** 設定、`og_jaas.config` JAAS 構成ファイルの **`KeyStoreLogin`** 設定、および `security.xml` ファイルの **`KeyStoreLoginAuthenticator`** 設定によって決定されます。

146 ページの『Liberty プロファイル内での eXtreme Scale サーバー接続の認証』で説明されているように、サーバー・プロパティー・ファイルは、`server.xml` ファイルで参照することでロードされます。セキュリティーのために、スタンドアロン・デプロイメントの場合と同様に、このファイルでは `credentialAuthentication=Required` が設定されている必要があります。

各構成ファイルは、各カタログ・サーバーでロードされます。コンテナー・サーバーは JAAS 構成ファイルおよびセキュリティー・デプロイメント記述子ファイルのみを使用します。

以下のいずれかの方法を使用して、クライアントを認証します。

手順

- 各カタログ・サーバーでセキュリティー記述子 XML ファイルを参照します。

  カタログ・サーバーが Liberty プロファイルの場合は、server.xml ファイルの clusterSecurityURL= 属性を使用してこのファイルを指すことができます。以下の例を参照してください (ここで、objectGridSecurity.xml はセキュリティー記述子 XML ファイルです)。

  ```
  <server description="new server">
  <!-- Enable features -->
  <featureManager>
  <feature>eXtremeScale.server-1.1</feature>
  </featureManager>

  <xsServer
  isCatalog="true"
  serverProps="server.xs.props"
  clusterSecurityURL="file://C:/wlp/usr/servers/objectGridSecurity.xml"
  />
  </server>
  ```

  セキュリティーを有効にするには、このファイルのセキュリティー・エレメントで securityEnabled="true" が設定されている必要があります。また、セキュリティー記述子 XML ファイルに、使用するオーセンティケーターの記述子が含まれている必要があります。WebSphere eXtreme Scale には、LDAPAuthenticator、KeyStoreLoginAuthenticator、および WSTokenAuthenticator が含まれています。

- jvm.options ファイルで -Djava.security.auth.login.config="path_name" JVM 引数を使用して、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーのそれぞれで JAAS 構成ファイルを参照する必要があります。

  wlp_installdir/usr/servers/<server_name> ディレクトリー内で jvm.options ファイルを編集または作成します。

  注: サーバー構成レベルで jvm.options ファイルを作成する必要がある場合は、wlp_install_root/etc/jvm.options ファイルのバージョンをコピーする必要があります。jvm.options ファイルには、eXtreme Scale が Liberty プロファイルで実行するために必要なオプションがいくつか用意されています。

  サーバー・レベルで jvm.options ファイルを作成し、JAAS 構成ファイルを参照する JVM 引数を入力した場合、jvm.options ファイルは以下のようになります。

  ```
  C:¥wlp¥usr¥servers¥simpCatalog>cat jvm.options
  -Dorg.osgi.framework.bootdelegation=com.ibm.wsspi.runtime
  -Djava.endorsed.dirs=C:¥wlp¥wxs¥lib¥endorsed
  -Djava.security.auth.login.config=C:¥wlp¥usr¥servers¥ogjaas.config
  ```

  これらのファイルの作成およびこれらのファイルを使用するための eXtreme Scale サーバーの構成については、23 ページの『チュートリアル: Java SE セキュリティーの構成』のチュートリアルを参照してください。JAAS 構成ファイルは LoginModule を指定します。KeyStoreLoginAuthenticator とともに KeyStoreLoginModule を使用できます。SimpleLDAPLoginModule は LDAPAuthenticator とともに使用します。eXtreme Scale コンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーの850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナ

ー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』、または 852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。

- 認証に必要な資格情報を渡すようにクライアントを構成します。 これは通常、クライアント・プロパティー・ファイルで値を指定することで実行します。eXtreme Scale クライアントでの LDAP 認証の使用可能化について詳しくは、 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』を参照してください。また、eXtreme Scale クライアントでの鍵ストア認証の使用可能化について詳しくは、 852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。

次のタスク

158 ページの『Liberty プロファイルのデータ・グリッドへのアクセスの許可』

OSGi フレームワーク内でのクライアント要求の認証

クライアントが認証されていない限り、グリッド・データおよびグリッドを制御する JMX 管理操作へのアクセスは、保護されないままです。これは、OSGi フレームワークで SSL が使用可能になっている場合でも当てはまります。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、 182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

このタスクについて

eXtreme Scale クライアントで必要とされる認証動作は、`server.properties` ファイルの **`credentialAuthentication=required`** 設定、`og_jaas.config` JAAS 構成ファイルの **`KeyStoreLogin`** 設定、および `security.xml` ファイルの **`KeyStoreLoginAuthenticator`** 設定によって決定されます。

以下のいずれかの方法を使用して、クライアントを認証します。

手順

- -DclusterSecurityFile="path_name" JVM 引数を使用して、各カタログ・サーバーでセキュリティー記述子 XML ファイルを参照します。

  カタログ・サーバーの始動時に、OSGi コマンド行でこの JVM 引数を使用します。

  セキュリティーを有効にするには、このファイルのセキュリティー・エレメントで `securityEnabled="true"` が設定されている必要があります。また、セキュリティー記述子 XML ファイルに、使用するオーセンティケーターの記述子が含まれている必要があります。WebSphere eXtreme Scale には、`LDAPAuthenticator`、`KeyStoreLoginAuthenticator`、および `WSTokenAuthenticator` が含まれています。`WSTokenAuthenticator` オーセンティケーターをスタンドアロン環境で使用す

ることはできません。このオーセンティケーターを使用できるのは、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーがともに WebSphere Application Server で実行されている場合のみです。あるいは、API 資料で説明されているインターフェースに従って、カスタム・オーセンティケーターおよびログイン・モジュールを開発できます。

- `-Djava.security.auth.login.config="path_name"` JVM 引数を使用して、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーのそれぞれで JAAS 構成ファイルを参照する必要があります。 これらのファイルの作成およびこれらのファイルを使用するための eXtreme Scale サーバーの構成については、23 ページの『チュートリアル: Java SE セキュリティーの構成』のチュートリアルを参照してください。 JAAS 構成ファイルは LoginModule を指定します。KeyStoreLoginAuthenticator とともに KeyStoreLoginModule を使用できます。SimpleLDAPLoginModule は LDAPAuthenticator とともに使用します。eXtreme Scale コンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーの850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』、または 852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。
- 認証に必要な資格情報を渡すようにクライアントを構成します。 これは通常、クライアント・プロパティー・ファイルで値を指定することで実行します。eXtreme Scale クライアントでの LDAP 認証の使用可能化について詳しくは、850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』を参照してください。また、eXtreme Scale クライアントでの鍵ストア認証の使用可能化について詳しくは、852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。

次のタスク

159 ページの『OSGi フレームワークでのデータ・グリッドへのアクセスの許可』

WebSphere Application Server でのクライアント要求の認証

WebSphere Application Server が eXtreme Scale データ・グリッドから受け取る要求は、認証する必要があります。

始める前に

eXtreme Scale クライアントに対する認証要件は、サーバー・プロパティー・ファイルの設定によって決定されます。サンプル・サーバー・プロパティー・ファイルが *was_root*`/optionalLibraries/ObjectGrid/properties/sampleServer.properties` に提供されています。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Application Server で実行されている eXtreme Scale サーバー用に認証を構成する必要があります。

手順

1. サーバー・プロパティー・ファイルを作成します。 このサンプル・サーバー・プロパティー・ファイルを使用して、以下の行が含まれたサーバー・プロパティー・ファイルを作成します。

   ```
   securityEnabled=true
   credentialAuthentication=Required
   ```

   credentialAuthentication=Required プロパティーが存在しない場合は、グリッドはセキュアではなく、認証されていないユーザーがグリッド操作を実行できます。

   制約事項: 動的キャッシュ・プロバイダーに credentialAuthentication=Required プロパティーを指定することはできません。

2. セキュリティー記述子 XML ファイルを作成します。 credentialAuthentication プロパティーが Required または Supported に設定されている場合は、セキュリティー記述子 XML ファイルを指定する必要があります。次の例を参照してください。

   ```
   <securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">

    <security securityEnabled="true">
     <authenticator
    className="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenAuthenticator">
     </authenticator>
    </security>
   </securityConfig>
   ```

   セキュリティー記述子 XML ファイルは、使用するオーセンティケーターを指定します。すべての eXtreme Scale クライアントおよびサーバーが WebSphere Application Server で実行されている場合は、WSTokenAuthenticator オーセンティケーターを使用できます。他の 2 つのオーセンティケーター (KeyStoreLoginAuthenticator と LDAPLoginAuthenticator) が eXtreme Scale で提供されています。eXtreme Scale 用の LDAP 認証の構成について詳しくは、 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』を参照してください。WebSphere Application Server で実行されている eXtreme Scale で鍵ストアおよびログイン・オーセンティケーターを使用するには、JAAS 構成が必要です。eXtreme Scale 用の鍵ストア認証の構成について詳しくは、 852 ページの『eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化』を参照してください。

3. WSTokenAuthenticator オーセンティケーターを使用する場合を除いて、JAAS 構成を作成します。

4. 以下の JVM 引数を使用して、サーバー・プロパティー・ファイルで各カタログ・サーバーを指定します。 WebSphere Application Server 管理コンソールで「**サーバー**」 > 「**すべてのサーバー**」 > 「**server_name**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」-「**汎用 JVM 引数**」を使用して、これらのプロパティーを構成します。以下の引数が必要です。

   ```
   -Dobjectgrid.server.props=<server property file name>
   -Dobjectgrid.cluster.security.xml.url=file://<security descriptor XML file>
   ```

5. 以下の JVM 引数を使用して、各コンテナー・サーバーにサーバー・プロパティー・ファイルを指定します。

   ```
   -Dobjectgrid.server.props=<server property file name>
   ```

次のタスク

WebSphere eXtreme Scale クライアントは、適切な資格情報を渡すように構成する必要があります。この構成を完了するには、クライアント・プロパティー・ファイルを使用します。以下の WSTokenAuthenticator オーセンティケーターの例を参照してください。

```
securityEnabled=true
credentialAuthentication=supported
credentialGeneratorClass=com.ibm.websphere.security.plugins.builtins.WSTokenCredentialGenerator
```

クライアントは、このファイルを使用するように構成する必要があります。クライアントが WebSphere Application Server で実行されている場合、以下の JVM 引数を使用してクライアントを構成します。

```
-Dobjectgrid.client.props=<client properties file>
```

グリッド・デプロイメントを保護するには、eXtreme Scale サーバーをホストしている WebSphere Application Server サーバー用にアプリケーション・セキュリティーと Java 2 セキュリティーを設定します。WebSphere Application Server 管理コンソールのセキュリティー構成パネルを使用して、これらの設定を使用可能にします。

これで、次のステップ、161 ページの『WebSphere Application Server でのデータ・グリッドへのアクセスの許可』に進むことができます。

データ・グリッドへのアクセスの許可

認証された ID が、明確に許可されている操作しか実行することができないように、アクセス制御を適用します。

次のタスク

162 ページの『特殊管理操作に対するアクセスの許可』

スタンドアロン環境でのデータ・グリッドへのアクセスの許可

ポリシー・ファイルを使用して、データ・グリッドにアクセスするための特定の許可を持つユーザーを制御します。

このタスクについて

クライアントが承認されていても、データ・グリッド・アクセスを保護するためには十分でありません。 KeyStoreLoginAuthenticator を使用する場合は、通常、少数の ID を定義するのみであるため、そのすべての ID がデータ・グリッドに対する全アクセス権限を備える場合があります。この場合、許可は不要な場合があります。ただし、LDAP 認証を使用する場合は、グリッド・データまたは操作に対するアクセス権限を付与してはならない、LDAP サーバーの多数の ID が存在する場合もあります。

手順

1. データ・グリッドのアクセス制御を有効にします。 デプロイされているデータ・グリッドの `ObjectGrid.xml` ファイルで `securityEnabled="true"` を指定します。

定義するグリッドごとにこの設定を指定します。この設定を構成した後は、ポリシー・ファイル内で権限を付与された ID 以外は、データ・グリッド項目に対する読取りや書込みを実行できなくなります。

2. ポリシー・ファイルを作成します。 以下のポリシー・ファイルの例を参照してください。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=cashier,O=acme,OU=OGSample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "accounting.*", "read";
};

grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "accounting.*", "all";
};
```

ポリシー・ファイルでは、ユーザーの許可に応じて、各種許可を付与できます。このファイルの作成方法について詳しくは、 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』を参照してください。

3. 各コンテナー・サーバーがこのポリシー・ファイルをロードするよう構成します。 以下の JVM 引数を使用してコンテナーを開始することで、この構成を完了できます。

```
-Djava.security.policy=<policy file>
```

ヒント: このポリシー・ファイルは、データ・グリッド・サーバーへの管理アクセス権限を制御する場合にも使用されます。このポリシー・ファイルを使用して管理アクセス権限を制御する場合は、ポリシー・ファイルに MBeanPermission エントリーを含める必要があり、またこのファイルをカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーでロードする必要があります。

次のタスク

162 ページの『スタンドアロン環境における管理操作に対するアクセスの許可』

Liberty プロファイルのデータ・グリッドへのアクセスの許可

ポリシー・ファイルを使用して、Liberty プロファイルでデータ・グリッドにアクセスするための特定の許可を持つユーザーを制御します。

このタスクについて

クライアントが承認されていても、データ・グリッド・アクセスを保護するためには十分でありません。 KeyStoreLoginAuthenticator プロパティーを使用する場合は、通常、少数の ID を定義するのみであるため、そのすべての ID がグリッドに対する全アクセス権限を備える可能性があります。この場合、許可は不要な場合があります。あるいは、LDAP 認証を使用する場合は、グリッド・データまたは操作に対するアクセス権限を付与してはならない、LDAP サーバーの多数の ID が存在する場合もあります。

手順

1. データ・グリッドのアクセス制御を有効にします。 デプロイされているデータ・グリッドの `ObjectGrid.xml` ファイルで `securityEnabled="true"` を指定します。

定義するグリッドごとにこの設定を指定します。この設定を構成した後は、ポリシー・ファイル内で権限を付与された ID 以外は、データ・グリッド項目に対する読取りや書込みを実行できなくなります。

2. ポリシー・ファイルを作成します。 以下のポリシー・ファイルの例を参照してください。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=cashier,O=acme,OU=OGSample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "accounting.*", "read";
};

grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "accounting.*", "all";
};
```

ポリシー・ファイルでは、ユーザーの許可に応じて、各種許可を付与できます。このファイルの作成方法について詳しくは、 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』を参照してください。

3. 各コンテナー・サーバーがこのポリシー・ファイルをロードするよう構成します。 `wlp_installdir/usr/servers/<server_name>` ディレクトリー内の `jvm.options` ファイルに以下の JVM 引数を追加することで、この構成を完了できます。

```
-Djava.security.policy=<policy file>
```

ヒント: このポリシー・ファイルは、データ・グリッド・サーバーへの管理アクセス権限を制御する場合にも使用されます。このポリシー・ファイルを使用して管理アクセス権限を制御する場合は、ポリシー・ファイルに MBeanPermission エントリーを含める必要があり、またこのファイルをカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーでロードする必要があります。

サーバー構成レベルで `jvm.options` ファイルを作成する必要がある場合は、`wlp_install_root/etc/jvm.options` ファイルのバージョンをコピーする必要があります。

次のタスク

163 ページの『Liberty プロファイルにおける管理操作に対するアクセスの許可』

OSGi フレームワークでのデータ・グリッドへのアクセスの許可

ポリシー・ファイルを使用して、OSGi フレームワークでデータ・グリッドにアクセスするための特定の許可を持つユーザーを制御します。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、 182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

このタスクについて

クライアントが承認されていても、データ・グリッド・アクセスを保護するためには十分でありません。 KeyStoreLoginAuthenticator プロパティーを使用する場合は、

通常、少数の ID を定義するのみであるため、そのすべての ID がグリッドに対する全アクセス権限を備える可能性があります。この場合、許可は不要な場合があります。あるいは、LDAP 認証を使用する場合は、グリッド・データまたは操作に対するアクセス権限を付与してはならない、LDAP サーバーの多数の ID が存在する場合もあります。

手順

1. データ・グリッドのアクセス制御を有効にします。 デプロイされているデータ・グリッドの ObjectGrid.xml ファイルで securityEnabled="true" を指定します。

   定義するグリッドごとにこの設定を指定します。この設定を構成した後は、ポリシー・ファイル内で権限を付与された ID 以外は、データ・グリッド項目に対する読取りや書込みを実行できなくなります。

2. ポリシー・ファイルを作成します。 以下のコード行をセキュリティー・ポリシー・ファイルに追加して、デプロイされているデータ・グリッドの osgi.jar への AllPermission を付与します。

   ```
   grant codeBase "file:/opt/OSGI2/plugins/org.eclipse.osgi_3.7.1.R37x_v20110808-1106.jar" {
     permission java.security.AllPermission;
   };
   ```

   定義するグリッドごとにこのコードを指定します。この設定を構成した後は、ポリシー・ファイル内で特に権限を付与された ID 以外は、データ・グリッド項目に対する読取りや書込みを実行できなくなります。ポリシー・ファイルでは、ユーザーの許可に応じて、各種許可を付与できます。このファイルの作成方法について詳しくは、 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』を参照してください。

   ポリシー・ファイルは、以下の例のようなものです。

   要確認: 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』 に示されているように、通常、ポリシー・ファイルには MapPermission エントリーも含まれています。

```
grant codeBase "file:${objectgrid.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

grant principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
permission javax.management.MBeanPermission "*", "getAttribute,setAttribute,invoke,queryNames";
};
```

3. 各コンテナー・サーバーがこのポリシー・ファイルをロードするよう構成します。以下の JVM 引数を使用してコンテナーを開始することで、この構成を完了できます。

   ```
   -Djava.security.policy=<policy file>
   ```

   ヒント: このポリシー・ファイルは、データ・グリッド・サーバーへの管理アクセス権限を制御する場合にも使用されます。このポリシー・ファイルを使用して管理アクセス権限を制御する場合は、ポリシー・ファイルに MBeanPermission エントリーを含める必要があり、またこのファイルをカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーでロードする必要があります。

次のタスク

164 ページの『OSGi フレームワークにおける管理操作に対するアクセスの許可』

関連資料:

セキュリティー記述子 XML ファイル
セキュリティー記述子 XML ファイルを使用して、セキュリティーを使用可能にした eXtreme Scale デプロイメント・トポロジーを構成できます。このファイルの中のエレメントを使用して、セキュリティーのさまざまな側面を構成できます。

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイル
デプロイメント・ポリシーを構成するには、デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルを使用します。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

API 資料

WebSphere Application Server でのデータ・グリッドへのアクセスの許可

スタンドアロン・デプロイメントでのデータ・グリッドへのアクセスの制御と同じように、WebSphere Application Server デプロイメントでデータ・グリッドにアクセスするための特定の許可を持つユーザーを制御します。

このタスクについて

クライアントが承認されていても、データ・グリッド・アクセスを保護するためには十分でありません。 KeyStoreLoginAuthenticator を使用する場合は、通常、少数の ID を定義するのみであるため、そのすべての ID がデータ・グリッドに対する全アクセス権限を備える場合があります。この場合、許可は不要な場合があります。ただし、LDAP 認証を使用する場合は、グリッド・データまたは操作に対するアクセス権限を付与してはならない、LDAP サーバーの多数の ID が存在する場合もあります。

重要: eXtreme Scale サーバーの WebSphere Application Server デプロイメントに MBeanPermissions を指定する必要はありません。これは、JMX アクセス権限が WebSphere Application Server 自体によって制御されるためです。

手順

1. データ・グリッドのアクセス制御を有効にします。 デプロイされているデータ・グリッドの ObjectGrid.xml ファイルで securityEnabled="true" を指定します。

   定義するグリッドごとにこの設定を指定します。この設定を構成した後は、ポリシー・ファイル内で権限を付与された ID 以外は、データ・グリッド項目に対する読取りや書込みを実行できなくなります。
2. ポリシー・ファイルを作成します。 ポリシー・ファイルでは、ユーザーの許可に応じて、各種許可を付与できます。このファイルの作成方法について詳しくは、 75 ページの『レッスン 4.2: ユーザー・ベースの許可を使用可能にする』を参照してください。
3. 各コンテナー・サーバーがこのポリシー・ファイルをロードするよう構成します。 コンテナーが実行されているアプリケーション・サーバーの汎用 JVM 引数でポリシー・ファイルを指定できます。JVM プロパティーでのサーバー・プロパティー・ファイルの設定について詳しくは、 63 ページの『レッスン 2.2: カタログ・サーバー・セキュリティーの構成』を参照してください。

   ```
   -Djava.security.policy=<policy file>
   ```

次のタスク

165 ページの『WebSphere Application Server での管理操作に対するアクセスの許可』

特殊管理操作に対するアクセスの許可

ユーザーがデータ・グリッドで管理操作を実行するために、特別な許可が必要になるようにします。

次のタスク

165 ページの『SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale クライアントとサーバー間をフローするデータの保護』

スタンドアロン環境における管理操作に対するアクセスの許可

ほとんどのデータ・グリッド・デプロイヤーでは、グリッド・データにアクセスできるユーザーのサブセットのみに管理アクセスを制限します。

手順

Java セキュリティー・マネージャーを使用してカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを実行する必要があります。これにはポリシー・ファイルが必要となります。
ポリシー・ファイルは -Djava.security.policy=<*policy_file*> JVM 引数を渡すことによって指定されます。
JVM 引数 -Djava.security.manager を指定することで、eXtreme Scale サーバーの始動時に、Java セキュリティー・マネージャーが開始されます。この引数をコンテナー・サーバーとカタログ・サーバーの両方に指定してください。
ポリシー・ファイルは、以下の例のようなものです。

要確認: 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』に示されているように、通常、ポリシー・ファイルには MapPermission エントリーも含まれています。

```
grant codeBase "file:${objectgrid.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

grant principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
permission javax.management.MBeanPermission "*", "getAttribute,setAttribute,invoke,queryNames";
};
```

この例では、**xscmd** コマンドによる管理操作はマネージャー・プリンシパルにのみ許可されます。必要に応じて他の行を追加して、さらなるプリンシパルに MBean 許可を付与することができます。

次のコマンドを入力します。 UNIX Linux

```
startOgServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

UNIX Linux 8.6+

```
startXsServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

Windows

```
startOgServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJECTGRID_HOME%
```

Windows 8.6+

```
startXsServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
 -Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJECTGRID_HOME%
```

次のタスク

166 ページの『SSL 暗号化を使用したスタンドアロン環境の eXtreme Scale サーバー間をフローするデータの保護』

Liberty プロファイルにおける管理操作に対するアクセスの許可

管理セキュリティーによって、 Liberty プロファイル 内のデータ・グリッドへのアクセス権をユーザーに付与することができます。

このタスクについて

ほとんどのデータ・グリッド・デプロイヤーでは、グリッド・データにアクセスできるユーザーのサブセットのみに管理アクセスを制限します。

手順

- Java セキュリティー・マネージャーを実行し、eXtreme Scale サーバーが Liberty プロファイルで実行されている場合に管理アクセス権限を制限するために MBeanPermissions を付与するポリシー・ファイルを指定します。 この方法は、スタンドアロン・デプロイメントでの場合と同じです。eXtreme Scale カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーを実行している Liberty プロファイル・サーバーごとに、以下の行を jvm.options ファイルに入力します。

```
-Djava.security.manager
-Djava.security.policy="policy file"
```

- ポリシー・ファイルを構成し、Liberty プロファイルおよび eXtreme Scale コードにすべての許可を付与します。 この構成により、Liberty プロファイルおよび eXtreme Scale がセキュリティー・マネージャーと連携できるようになります。サーバー・レベルの jvm.options ファイルに以下の行を追加します。

```
grant codeBase "file:${objectgrid.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
```

次のタスク

168 ページの『SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale と Liberty プロファイル間をフローするデータの保護』

OSGi フレームワークにおける管理操作に対するアクセスの許可

管理セキュリティーにより、OSGi フレームワークでのデータ・グリッドへのユーザーによるアクセスを許可できます。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、 182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

このタスクについて

ほとんどのデータ・グリッド・デプロイヤーでは、グリッド・データにアクセスできるユーザーのサブセットのみに管理アクセスを制限します。

手順

- Java セキュリティー・マネージャーを使用してカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを実行する必要があります。これにはポリシー・ファイルが必要となります。

  ポリシー・ファイルは -Djava.security.policy=<*policy_file*> JVM 引数を渡すことによって指定されます。

  JVM 引数 -Djava.security.manager を指定することで、eXtreme Scale サーバーの始動時に、Java セキュリティー・マネージャーが開始されます。この引数をコンテナー・サーバーとカタログ・サーバーの両方に指定してください。

  ポリシー・ファイルは、以下の例のようなものです。

  要確認: 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』に示されているように、通常、ポリシー・ファイルには MapPermission エントリーも含まれています。

```
grant codeBase "file:${objectgrid.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
```

```
grant principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
permission javax.management.MBeanPermission "*", "getAttribute,setAttribute,invoke,queryNames";
};
```

この例では、**xscmd** コマンドによる管理操作はマネージャー・プリンシパルにのみ許可されます。必要に応じて他の行を追加して、さらなるプリンシパルに MBean 許可を付与することができます。

- コマンド行で上記の JVM 引数を指定して、カタログ・コンテナーおよびサーバー・コンテナーを開始します。例えば、以下のようにします。

```
/opt/XS86/java/jre/bin/java -DclusterSecurityFile=/og/security/secFiles_SA/
objectGridSecurity.xml -Djava.security.auth.login.config=/og/security/secFiles_SA/
ogjaas.config -Djava.security.manager -Djava.security.policy=/og/security/secFiles_SA/
og_auth.policy -Dobjectgrid.home=/opt/XS860/ObjectGrid -jar
org.eclipse.osgi_3.7.1.R37x_v20110808-1106.jar -console
```

次のタスク

170 ページの『SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale と OSGi フレームワーク間をフローするデータの保護』

WebSphere Application Server での管理操作に対するアクセスの許可

管理セキュリティーにより、WebSphere Application Server 管理者のみが、eXtreme Scale 管理操作を実行できます。

このタスクについて

管理アクセスに対する許可は、WebSphere Application Server デプロイメントでは、スタンドアロン環境とは異なる方法で機能しますWebSphere Application Server 管理者である WebSphere Application Server ユーザーのみが、eXtreme Scale 管理操作を実行できます。ポリシー・ファイルで MbeanPermissions を指定する必要はありません。

手順

WebSphere Application Server で、管理セキュリティーを有効にします。 管理コンソールで、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」をクリックします。「**管理セキュリティーを使用可能にする**」をクリックし、「**Java 2 セキュリティー**」を選択し、アプリケーション・アクセスをローカル・リソースに制限します。

次のタスク

171 ページの『SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale と WebSphere Application Server 間をフローするデータの保護』

SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale クライアントとサーバー間をフローするデータの保護

SSL 暗号化を使用して、WebSphere eXtreme Scale クライアントとサーバー間の通信を保護します。

次のタスク

173 ページの『許可されたユーザーのセキュリティー成果物の保管』

SSL 暗号化を使用したスタンドアロン環境の eXtreme Scale サーバー間をフローするデータの保護

SSL プロパティーおよび JMX ポートを構成して、ネットワークを介してサーバー間をフローする機密情報を保護します。

このタスクについて

データ・グリッドをデプロイすると、データ・グリッドに含まれる機密情報がネットワークを介してフローします。また、データ・グリッド・クライアントがデータ・グリッドに認証するために使用する資格情報もネットワークを介してフローします。フローするデータおよび資格情報を保護するには、SSL を使用したトランスポート・レベルの暗号化により、デプロイメントを保護します。

SSL のセキュリティーは、鍵ストアおよびトラストストアの保護に依存するため、許可されたユーザーのみが鍵ストアおよびトラストストアにアクセスできるようにします。 SSL 暗号化を有効にした後、サーバー・プロパティー・ファイル内に JMXConnectorPort と JMXServicePort の値を指定して、JMX トラフィック用の SSL 保護を持つようにする必要があります。

JMX クライアントとサーバーとの間のトランスポートは、Transport Layer Security (TLS) または SSL を使用して保護できます。カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーの transportType が SSL_Required または SSL_Supported に設定されている場合、SSL を使用して JMX サーバーに接続する必要があります。

手順

1. サーバー・プロパティー・ファイル内に SSL を指定します。 transportType プロパティーを SSL-Required に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   transportType=SSL-Required
   ```

2. サーバー・プロパティー・ファイル内に SSL プロパティーを指定します。

   ```
   alias=serverprivate
   contextProvider=IBMJSSE2
   protocol=SSL
   keyStoreType=JKS
   keyStore=etc/test/security/key.jks
   keyStorePassword=serverpw
   trustStoreType=JKS
   trustStore=etc/test/security/trust.jks
   trustStorePassword=public
   clientAuthentication=false
   ```

   トラストストア、トラストストア・タイプ、およびトラストストア・パスワードを構成します。クライアント用に鍵ストア、鍵ストア・タイプ、および鍵ストア・パスワードを指定する必要はありません。サーバー SSL プロパティーに clientAuthentication=true が含まれていない限り、クライアントでは別名、鍵ストア、鍵ストア・パスワード、および鍵ストア・タイプは不要です。この値が使用されることは稀です。

クライアント・トラストストアは、サーバー証明書を信頼している必要があります。サーバー証明書が自己署名されている場合は、チュートリアルのように、その証明書をクライアント・トラストストアにインポートする必要があります。サーバー証明書がローカル認証局によって発行されている場合は、その認証局の署名者証明書をクライアント・トラストストアにインポートする必要があります。鍵ストア・ファイルおよびトラストストア・ファイルの作成について詳しくは、39 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 6』を参照してください。

3. SSL が必要な場合は、クライアント・プロパティー・ファイルで SSL を指定します。 transportType プロパティーを SSL-Required または SSL-Supported に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   transportType=SSL-Required
   ```

4. クライアント・プロパティー・ファイル内に SSL プロパティーを指定します。例えば、以下のプロパティーを指定できます。

   ```
   alias=clientprivate
   contextProvider=IBMJSSE2
   protocol=SSL
   keyStoreType=JKS
   keyStore=etc/test/security/client.private
   keyStorePassword={xor}PDM2OjErLyg\=
   trustStoreType=JKS
   trustStore=etc/test/security/server.public
   trustStorePassword={xor}Lyo9MzY8
   ```

5. JMX サービス・ポートを設定します。 **startOgServer**または **startXsServer** スクリプトで **-JMXServicePort** オプションを使用します。

   カタログ・サーバー上の JMX サービス・ポートのデフォルト値は 1099 です。構成の中の各 JVM に対して、異なるポート番号を使用しなければなりません。JMX/RMI を使用する場合は、たとえデフォルトのポート値を使用する場合であっても、**-JMXServicePort** オプションとポート番号を明示的に指定してください。

6. JMX コネクター・ポートを設定します。

   startOgServer または **startXsServer** スクリプトで **-JMXConnectorPort** オプションを使用します。

   カタログ・サーバーからコンテナー・サーバー情報を表示するときは、JMX サービス・ポートを設定する必要があります。例えば、このポートは、**xscmd -c showMapSizes** コマンドを使用する場合に必要となります。JMX コネクター・ポートを設定して、一時ポートが作成されないようにします。

次のタスク

173 ページの『スタンドアロン環境でのセキュリティー成果物の保管』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale と Liberty プロファイル間をフローするデータの保護

SSL プロパティーおよび JMX ポートを構成して、WebSphere eXtreme Scale と Liberty プロファイル間をフローする機密情報を保護します。

このタスクについて

データ・グリッドをデプロイすると、データ・グリッドに含まれる機密情報がネットワークを介してフローします。また、データ・グリッド・クライアントがデータ・グリッドに認証するために使用する資格情報もネットワークを介してフローします。フローするデータおよび資格情報を保護するには、SSL を使用したトランスポート・レベルの暗号化により、デプロイメントを保護します。

SSL のセキュリティーは、鍵ストアおよびトラストストアの保護に依存するため、許可されたユーザーのみが鍵ストアおよびトラストストアにアクセスできるようにします。 SSL 暗号化を有効にした後、サーバー・プロパティー・ファイル内に JMXConnectorPort と JMXServicePort の値を指定して、JMX トラフィック用の SSL 保護を持つようにする必要があります。

JMX クライアントとサーバーとの間のトランスポートは、Transport Layer Security (TLS) または SSL を使用して保護できます。カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーの transportType が SSL_Required または SSL_Supported に設定されている場合、SSL を使用して JMX サーバーに接続する必要があります。

手順

1. サーバー・プロパティー・ファイル内に SSL を指定します。 transportType プロパティーを SSL-Required に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   transportType=SSL-Required
   ```

2. サーバー・プロパティー・ファイル内に SSL プロパティーを指定します。

   ```
   alias=serverprivate
   contextProvider=IBMJSSE2
   protocol=SSL
   keyStoreType=JKS
   keyStore=etc/test/security/key.jks
   keyStorePassword=serverpw
   trustStoreType=JKS
   trustStore=etc/test/security/trust.jks
   trustStorePassword=public
   clientAuthentication=false
   ```

トラストストア、トラストストア・タイプ、およびトラストストア・パスワードを構成します。クライアント用に鍵ストア、鍵ストア・タイプ、および鍵ストア・パスワードを指定する必要はありません。サーバー SSL プロパティーに clientAuthentication=true が含まれていない限り、クライアントでは別名、鍵ストア、鍵ストア・パスワード、および鍵ストア・タイプは不要です。この値が使用されることは稀です。

クライアント・トラストストアは、サーバー証明書を信頼している必要があります。サーバー証明書が自己署名されている場合は、チュートリアルのように、その証明書をクライアント・トラストストアにインポートする必要があります。サーバー証明書がローカル認証局によって発行されている場合は、その認証局の署名者証明書をクライアント・トラストストアにインポートする必要があります。鍵ストア・ファイルおよびトラストストア・ファイルの作成について詳しくは、39 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 6』を参照してください。

3. SSL が必要な場合は、クライアント・プロパティー・ファイルで SSL を指定します。 transportType プロパティーを SSL-Required または SSL-Supported に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   transportType=SSL-Required
   ```

4. クライアント・プロパティー・ファイル内に SSL プロパティーを指定します。例えば、以下のプロパティーを指定できます。

   ```
   alias=clientprivate
   contextProvider=IBMJSSE2
   protocol=SSL
   keyStoreType=JKS
   keyStore=etc/test/security/client.private
   keyStorePassword={xor}PDM2OjErLyg\=
   trustStoreType=JKS
   trustStore=etc/test/security/server.public
   trustStorePassword={xor}Lyo9MzY8
   ```

5. サーバー・プロパティー・ファイルで JMX サービス・ポートを設定します。

   カタログ・サーバー上の JMX サービス・ポートのデフォルト値は 1099 です。構成の中の各 JVM に対して、異なるポート番号を使用しなければなりません。JMX/RMI を使用する場合は、たとえデフォルトのポート値を使用する場合であっても、**JMXServicePort** オプションとポート番号を明示的に指定してください。

6. サーバー・プロパティー・ファイルで JMX コネクター・ポートを設定します。

   カタログ・サーバーからコンテナー・サーバー情報を表示するときは、JMX サービス・ポートを設定する必要があります。例えば、このポートは、**xscmd -c showMapSizes** コマンドを使用する場合に必要となります。JMX コネクター・ポートを設定して、一時ポートが作成されないようにします。

次のタスク

173 ページの『Liberty プロファイルでのセキュリティー成果物の保管』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale と OSGi フレームワーク間をフローするデータの保護

SSL プロパティーおよび JMX ポートを構成して、WebSphere eXtreme Scale と OSGi フレームワーク間をフローする機密情報を保護します。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

このタスクについて

データ・グリッドをデプロイすると、データ・グリッドに含まれる機密情報がネットワークを介してフローします。また、データ・グリッド・クライアントがデータ・グリッドに認証するために使用する資格情報もネットワークを介してフローします。フローするデータおよび資格情報を保護するには、SSL を使用したトランスポート・レベルの暗号化により、デプロイメントを保護します。

SSL のセキュリティーは、鍵ストアおよびトラストストアの保護に依存するため、許可されたユーザーのみが鍵ストアおよびトラストストアにアクセスできるようにします。 SSL 暗号化を有効にした後、サーバー・プロパティー・ファイル内に JMXConnectorPort と JMXServicePort の値を指定して、JMX トラフィック用の SSL 保護を持つようにする必要があります。

JMX クライアントとサーバーとの間のトランスポートは、Transport Layer Security (TLS) または SSL を使用して保護できます。カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーの transportType が SSL_Required または SSL_Supported に設定されている場合、SSL を使用して JMX サーバーに接続する必要があります。

手順

1. サーバー・プロパティー・ファイル内に SSL を指定します。 transportType プロパティーを SSL-Required に設定します。例えば、以下のようにします。

   ```
   transportType=SSL-Required
   ```

2. SSL を使用するには、-D システム・プロパティーを指定して、トラストストア、トラストストア・タイプ、およびトラストストア・パスワードを MBean クライアントで構成する必要があります。例えば、以下のようにします。

   ```
   -Djavax.net.ssl.trustStore=TRUST_STORE_LOCATION
   -Djavax.net.ssl.trustStorePassword=TRUST_STORE_PASSWORD
   -Djavax.net.ssl.trustStoreType=TRUST_STORE_TYPE
   ```

   java_home/jre/lib/security/java.security ファイルで SSL ソケット・ファクトリーとして com.ibm.websphere.ssl.protocol.SSLSocketFactory を使用する場合は、次のプロパティーを使用します。

   ```
   -Dcom.ibm.ssl.trustStore=TRUST_STORE_LOCATION
   -Dcom.ibm.ssl.trustStorePassword=TRUST_STORE_PASSWORD
   -Dcom.ibm.ssl.trustStoreType=TRUST_STORE_TYPE
   ```

3. サーバー・プロパティー・ファイルで JMX サービス・ポートを設定します。

   カタログ・サーバー上の JMX サービス・ポートのデフォルト値は 1099 です。構成の中の各 JVM に対して、異なるポート番号を使用しなければなりません。JMX/RMI を使用する場合は、たとえデフォルトのポート値を使用する場合であっても、**JMXServicePort** オプションとポート番号を明示的に指定してください。

4. サーバー・プロパティー・ファイルで JMX コネクター・ポートを設定します。

   カタログ・サーバーからコンテナー・サーバー情報を表示するときは、JMX サービス・ポートを設定する必要があります。例えば、このポートは、**xscmd c showMapSizes** コマンドを使用する場合に必要となります。JMX コネクター・ポートを設定して、一時ポートが作成されないようにします。

5. 以下の JVM 引数を使用して、OSGi フレームワーク・コマンド行で SSL ポートを指定します。

   ```
   -Dcom.ibm.CSI.SSL.Port=7602
   ```

次のタスク

174 ページの『OSGi フレームワークでのセキュリティー成果物の保管』

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

SSL 暗号化を使用した eXtreme Scale と WebSphere Application Server 間をフローするデータの保護

WebSphere eXtreme Scale は、WebSphere Application Server で Secure Sockets Layer (SSL) 構成を使用します。

このタスクについて

ネットワークを介して渡されるすべてのデータ・グリッド・トラフィックで SSL 保護が確実に適用されるようにするために、グローバル・セキュリティーを構成し、WebSphere Application Server 管理コンソールで CSIv2 インバウンド・セキュリティーおよびアウトバウンド・セキュリティーを構成し、SSL 証明書および鍵管理を構成します。

手順

1. WebSphere Application Server グローバル・セキュリティーを構成します。 グローバル・セキュリティーの構成に関して詳しくは、グローバル・セキュリティーの設定を参照してください。
2. CSIv2 インバウンド・セキュリティーを構成します。 WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」 > 「**RMI/IIOP セキュリティー**」 > 「**CSIv2 インバウンド通信**」をクリックします。「**SSL-Required**」をクリックします。
3. CSIv2 アウトバウンド・セキュリティーを構成します。 WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」 > 「**RMI/IIOP セキュリティー**」 > 「**CSIv2 インバウンド通信**」をクリックします。CSIv2 アウトバウンド通信は、「**SSL-Supported**」または「**SSL-Required**」でなければなりません。
4. WebSphere Application Server で SSL 証明書および鍵管理を構成します。 1 つの WebSphere Application Server インスタンスで 1 つの WebSphere eXtreme Scale クライアントのみを実行している場合は、eXtreme Scale データ・グリッド・サーバーはスタンドアロンです。スタンドアロンのカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動するために使用されるサーバー・プロパティー・ファイルに指定された鍵ストア・ファイルとトラストストア・ファイルに、鍵ストアとトラストストアの証明書情報が含まれるようにする必要があります。

   クライアント、カタログ・サーバー、およびコンテナー・サーバーがすべて WebSphere Application Server プロセスで実行されている場合は、クライアントとサーバー間の通信で WebSphere Application Server セキュリティー構成が使用されます。

   ただし、複数のカタログ・サーバーが構成されていて、1 つの WebSphere Application Server プロセスで実行されている場合、カタログ間の通信では、WebSphere Application Server Common Secure Interoperability Protocol Version 2 (CSIV2) トランスポート設定では管理できない専用のトランスポート・パスが使用されます。そのため、カタログ・サーバーごとにサーバー・プロパティー・ファイルで SSL プロパティーを構成する必要があります。詳しくは、71 ページの『レッスン 3.2: SSL プロパティーのカタログ・サーバー・プロパティー・ファイルへの追加』を参照してください。

次のタスク

175 ページの『WebSphere Application Server でのセキュリティー成果物の保管』

許可されたユーザーのセキュリティー成果物の保管

鍵ストア、パスワード、共有秘密鍵、およびプロパティー・ファイルは、許可されたユーザーのみがアクセスできるディレクトリーに保管する必要があります。

次のタスク

175 ページの『セキュア・サーバーの始動と停止』

スタンドアロン環境でのセキュリティー成果物の保管

無許可ユーザーからアクセスされないように、セキュア・パスワードを保護します。

このタスクについて

eXtreme Scale 構成ファイルのパスワードをエンコードするための FilePasswordEncoder ユーティリティーが WebSphere eXtreme Scale クライアントに付属しています。FilePasswordEncoder ユーティリティーはパスワードをエンコードします。ただし、ファイルへのアクセスに使用されるパスワードを復元することが可能です。そのため、クライアント・プロパティー、サーバー・プロパティー、および鍵ストアとトラストストアが保持されるファイル・システムを保護して、許可されたユーザーのみがアクセスできるようにする必要があります。

手順

FilePasswordEncoder.bat|sh コマンドを実行し、パスワードの保護手段を提供するために、排他的論理和 (xor) アルゴリズムでこのプロパティーをエンコードします。

FilePasswordEncoder ユーティリティーを `client.properties` ファイルおよび `server.properties` ファイルに対して実行します。例えば、以下のようにします。

```
./FilePasswordEncoder.sh <server properties file>
./FilePasswordEncoder.sh <client properties file>
```

上級ユーザーは、エンコードされたパスワードを復元できます。eXtreme Scale コードが実行のためにパスワードを復元できる必要があるため、このパスワードは暗号化されていません。そのため、パスワードが保管されているファイルには、許可されているユーザーのみがアクセスできるようにしてください。

次のタスク

175 ページの『スタンドアロン環境でのセキュア・サーバーの始動』

Liberty プロファイルでのセキュリティー成果物の保管

Liberty プロファイルで無許可の eXtreme Scale ユーザーからアクセスされないように、セキュア・パスワードを保護します。

このタスクについて

eXtreme Scale 構成ファイルのパスワードをエンコードするための FilePasswordEncoder ユーティリティーが WebSphere eXtreme Scale クライアントに付属しています。

手順

1. Liberty プロファイルの **securityUtility.bat|sh** コマンドを実行し、パスワードの保護手段を提供するために、排他的論理和 (xor) アルゴリズムでこのプロパティーをエンコードします。 上級ユーザーはエンコードされたパスワードを復元できるので、注意してください。 eXtreme Scale コードが実行のためにパスワードを復元できる必要があるため、このパスワードは暗号化されていません。そのため、パスワードが保管されているファイルには、許可されているユーザーのみがアクセスできるようにしてください。
2. 鍵ストア・ファイルおよびトラストストア・ファイルへのアクセスを制限します。これを行うには、これらのファイルが保管されているファイル・システムへのアクセスを保護します。

次のタスク

177 ページの『Liberty プロファイルでのセキュア・サーバーの始動および停止』

OSGi フレームワークでのセキュリティー成果物の保管

OSGi フレームワークで無許可ユーザーからアクセスされないように、セキュア・パスワードを保護します。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、 182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

このタスクについて

eXtreme Scale 構成ファイルのパスワードをエンコードするための FilePasswordEncoder ユーティリティーが WebSphere eXtreme Scale クライアントに付属しています。

手順

1. **FilePasswordEncoder.bat|sh** コマンドを実行し、パスワードの保護手段を提供するために、排他的論理和 (xor) アルゴリズムでこのプロパティーをエンコードします。 上級ユーザーはエンコードされたパスワードを復元できるので、注意してください。 eXtreme Scale コードが実行のためにパスワードを復元できる必要があるため、このパスワードは暗号化されていません。そのため、パスワードが保管されているファイルには、許可されているユーザーのみがアクセスできるようにしてください。
2. 鍵ストア・ファイルおよびトラストストア・ファイルへのアクセスを制限します。これを行うには、これらのファイルが保管されているファイル・システムへのアクセスを保護します。

次のタスク

177 ページの『OSGi フレームワークでのセキュア・サーバーの始動および停止』

WebSphere Application Server でのセキュリティー成果物の保管

WebSphere Application Server デプロイメントで無許可ユーザーからアクセスされないように、セキュア・パスワードを保護します。

このタスクについて

サーバー・プロパティー・ファイルおよびクライアント・プロパティー・ファイルのパスワードおよび authenticationSecret はエンコードする必要があります。

手順

PropFilePasswordEncoder を呼び出して、パスワードおよび認証秘密鍵をエンコードします。 *was_root*/bin/PropFilePasswordEncoder.sh コマンドを実行します (Windows では、*was_root*¥bin¥PropFilePasswordEncoder.bat コマンドを実行します)。例えば、以下のようにします。

```
./PropFilePasswordEncoder <properties_file> <property_to_encode>
```

エンコードする必要があるプロパティーには、**keyStorePassword**、**trustStorePassword**、**credentialGeneratorProps**、および **authenticationSecret** があります。これらのプロパティーがエンコードされていても、元の値を復元することが可能です。プロパティー・ファイル、鍵ストア、およびトラストストアが保持されているファイル・システムを保護して、許可されているユーザーのみがそれらにアクセスできるようにする必要があります。
詳しくは、WebSphere Application Server 資料を参照してください。

次のタスク

178 ページの『WebSphere Application Server でのセキュア・サーバーの始動』

関連情報:

WebSphere Application Server の構成

セキュア・サーバーの始動と停止

サーバーを始動および停止するときに、セキュリティー固有の構成を指定することで、セキュリティーが使用可能になります。

スタンドアロン環境でのセキュア・サーバーの始動

セキュアなスタンドアロン・サーバーを始動するには、**startOgServer** または **startXsServer** コマンドにパラメーターを指定することで、適切な構成ファイルを渡します。

8.6+ このタスクについて

非推奨: 8.6+ **startOgServer** および **stopOgServer** コマンドは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用しているサーバーの始動および停止を行います。 ORB は非推奨ですが、前のリリースで ORB を使用していた場合は、これらのスクリプトを引き続き使用することができます。IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムが ORB に取って代わります。

XIO トランスポートを使用しているサーバーの始動および停止には、**startXsServer** および **stopXsServer** スクリプトを使用します。

手順

- セキュア・コンテナー・サーバーを始動します。

  セキュア・コンテナー・サーバーの始動には、次のセキュリティー構成ファイルが必要です。

  – **サーバー・プロパティー・ファイル:** サーバー・プロパティー・ファイルは、サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーを構成します。詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

  startOgServer または **startXsServer** スクリプトの中に次の引数を指定して、この構成ファイルの場所を指定します。

  -serverProps
  サーバー固有のセキュリティー・プロパティーが含まれているサーバー・プロパティー・ファイルへのパスを指定します。このプロパティーに対して指定されるファイル名の形式は、プレーン・ファイル・パス形式です。例えば、`../security/server.properties` などです。

  startOgServer コマンドまたは **startXsServer** コマンドを実行する際に、以下の行を入力します。 UNIX Linux

```
startOgServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

UNIX Linux 8.6+

```
startXsServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

Windows

```
startOgServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJECTGRID_HOME%
```

Windows 8.6+

```
startXsServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
 -Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJECTGRID_HOME%
```

- セキュア・カタログ・サーバーを始動します。

  セキュア・カタログ・サービスを開始するには、次の構成ファイルが必要です。

  – **セキュリティー記述子 XML ファイル:** セキュリティー記述子 XML ファイルは、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを含む、すべてのサーバーに共通するセキュリティー・プロパティーを記述します。プロパティーの例の 1 つは、ユーザー・レジストリーおよび認証メカニズムを表すオーセンティケーター構成です。

  – **サーバー・プロパティー・ファイル:** サーバー・プロパティー・ファイルは、サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーを構成します。

startOgServer または **startXsServer** スクリプトの中に次の引数を指定して、構成ファイルの場所を指定します。

-clusterSecurityFile および -clusterSecurityUrl
これらの引数は、セキュリティー記述子 XML ファイルの場所を指定します。**-clusterSecurityFile** パラメーターを使用してローカル・ファイルを指定するか、**-clusterSecurityUrl** パラメーターを使用して objectGridSecurity.xml ファイルの URL を指定します。

-serverProps
サーバー固有のセキュリティー・プロパティーが含まれているサーバー・プロパティー・ファイルへのパスを指定します。このプロパティーに対して指定されるファイル名の形式は、プレーン・ファイル・パス形式です。例えば、c:/tmp/og/catalogserver.props などです。

Liberty プロファイルでのセキュア・サーバーの始動および停止

start コマンドを使用して Liberty プロファイル 内でセキュア・サーバーを始動します。

このタスクについて

このタスクを使用して、Liberty プロファイル **server** コマンドを使用して、eXtreme Scale サーバーを始動します。 wlp/bin ディレクトリーには、サーバー・プロセスの制御に役立つ **server** という名前のスクリプトが入っています。このコマンドでは、以下の構文がサポートされます。

```
server <task> [server] [options]
```

手順

- eXtreme Scale サーバーを始動します。 **start** コマンドを実行すると、サーバーがバックグラウンド・プロセスとして起動されます。以下の例のように、サーバーを始動します。

  ```
  bin/server start server_name
  bin/server.bat start server_name
  ```

- eXtreme Scale サーバーを停止します。例えば、以下のようにします。 **stop** コマンドを実行すると、実行中のサーバーが停止されます。以下の例のように、サーバーを停止します。

  ```
  bin/server stop server_name
  bin/server.bat stop server_name
  ```

OSGi フレームワークでのセキュア・サーバーの始動および停止

Eclipse Equinox OSGi フレームワークでセキュア・スタンドアロン・サーバーを始動するには、コマンド行からパラメーターを指定して、適切な構成ファイルを渡します。

始める前に

データ・グリッドをセキュアする前に、OSGi フレームワークをインストールする必要があります。詳しくは、182 ページの『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』を参照してください。

手順

1. OSGi コンソールを開始します。
2. コマンド行から許可構成、セキュリティー・ポリシー・ファイル、および SSL ポートを渡します。 次の例を参照してください。

   ```
   java -Djava.security.auth.login.config=/og/security/secFiles_SA/ogjaas.config
   -Djava.security.manager -Djava.security.policy=/og/security/secFiles_SA/og_auth.policy
   -Dobjectgrid.home=/opt/XS860/ObjectGrid -Dcom.ibm.CSI.SSL.Port=7602
   -jar org.eclipse.osgi_3.7.1.R37x_v20110808-1106.jar -console
   ```

3. カタログ・サーバーを始動します。 コマンド行から以下のコード行を指定します。

   ```
   - cm create com.ibm.websphere.xs.server
   - cm put com.ibm.websphere.xs.server clusterSecurityFile /og/security/secFiles_SA/objectGridSecurity.xml
   - cm put com.ibm.websphere.xs.server objectgrid.server.props /opt/OSGI2/load/secServer.properties
   ```

   カタログ・サーバーは、ObjectGrid セキュリティー XML ファイルおよびセキュリティー・サーバー・プロパティー・ファイルに設定されているプロパティーに基づいて始動されます。
4. コンテナー・サーバーを始動します。 コマンド行から以下のコード行を指定します。

   ```
   cm createf com.ibm.websphere.xs.container
   cm put com.ibm.websphere.xs.container-1347819831596-0 objectgridFile /opt/OSGI2/load/objectgridSec.xml
   cm put com.ibm.websphere.xs.container-1347819831596-0 deploymentPolicyFile /opt/OSGI2/load/deployment.xml
   ```

   コンテナー・サーバーは、ObjectGrid 記述子 XML ファイルおよびデプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルに設定されているプロパティーに基づいて始動されます。
5. OSGi フレームワークでセキュア・サーバーを停止します。 eXtreme Scale サーバー・バンドルが始動され、eXtreme Scale サーバーが初期化された後に、eXtreme Scale サーバーを再始動することはできません。 eXtreme Scale サーバーを再始動するには、Eclipse Equinox プロセスを再開する必要があります。

   Spring 名前空間に対する eXtreme Scale サポートを使用して、Blueprint XML ファイルで eXtreme Scale コンテナー・サーバーを構成できます。サーバーおよびコンテナーの XML エレメントが Blueprint XML ファイルに追加されると、eXtreme Scale 名前空間ハンドラーが、バンドルの始動時に Blueprint XML ファイルで定義されるパラメーターを使用して、コンテナー・サーバーを自動的に始動します。バンドルが停止されると、ハンドルはコンテナーを停止します。

次のタスク

Blueprint XML を使用した eXtreme Scale コンテナー・サーバーの構成および OSGi フレームワークでのコンテナー・サーバーの始動について詳しくは、201 ページの『Eclipse Equinox OSGi フレームワークを使用した eXtreme Scale サーバーの始動』を参照してください。

WebSphere Application Server でのセキュア・サーバーの始動

WebSphere Application Server でセキュア・サーバーを始動するには、汎用 Java 仮想マシン (JVM) 引数でセキュリティー構成ファイルを指定する必要があります。

手順

- 管理コンソールを使用して、WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーを WebSphere アプリケーション・サーバーに関連付けます。 管理コンソールで、**「システム管理」 > 「WebSphere eXtreme Scale」 > 「カタログ・サービス・ドメイン」**をクリックします。
- データ・グリッドに必要な XML 記述子が含まれたエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルをデプロイすることで、WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバーを特定の WebSphere Application Server に関連付けます。 この手順について詳しくは、 53 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』を参照してください。
- カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーをセキュアにするための構成ファイルを指す Java 仮想マシン (JVM) 引数を指定します。 この手順について詳しくは、 WebSphere Application Server でのクライアント要求の認証 および 161 ページの『WebSphere Application Server でのデータ・グリッドへのアクセスの許可』 を参照してください。また、データ・グリッドごとに、`objectgrid xml` ファイルに `securityEnabled="true"` を指定します。 JVM 引数を指定し、データ・グリッドでセキュリティーを有効にすると、eXtreme Scale カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーとして機能するサーバーまたはクラスターを始動できます。
- WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動します。または、WebSphere Application Server コマンド行を使用します。

次のタスク

『セキュア・サーバーの停止』

セキュア・サーバーの停止

セキュアなカタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーを停止するには、1 つのセキュリティー構成ファイルが必要です。

手順

- スタンドアロン・デプロイメントのセキュアなカタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーを停止します。 スタンドアロン環境では、**xscmd** コマンドの teardown 関数を使用するか、**stopXsServer** コマンドまたは **stopOgServer** コマンドを使用して、WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを停止します。

  162 ページの『スタンドアロン環境における管理操作に対するアクセスの許可』のセクションで説明されているように、これらの操作に対するアクセスを、許可された管理者のみに制限します。認証または SSL を使用している場合は、**stopXsServer** コマンドおよび **stopOgServer** コマンドでは、クライアント・プロパティー・ファイルをパラメーターとして渡す必要があります。クライアント・プロパティー・ファイルの内容については、 150 ページの『スタンドアロン環境でのクライアント要求の認証』および 166 ページの『SSL 暗号化を使用したスタンドアロン環境の eXtreme Scale サーバー間をフローするデータの保護』で説明されています。

- WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、WebSphere Application Server で実行されている eXtreme Scale サーバーを停止します。 165 ページの『WebSphere Application Server での管理操作に対するアクセスの許可』で説明されているように、サーバーを始動および停止するためのアクセス権限を、許可された管理者に制限するように、WebSphere Application Server 管理セキュリティーが構成されている必要があります。

シナリオ: OSGi 環境を使用した eXtreme Scale プラグインの開発および実行

OSGi 環境で一般的な作業を実行するために、以下のシナリオを使用してください。例えば、OSGi フレームワークは、OSGi コンテナー内のサーバーおよびクライアントを始動する場合に最適であり、これにより、WebSphere eXtreme Scale プラグインをランタイム環境に動的に追加および更新できます。

始める前に

OSGi サポートおよびそれが提供可能な利点について詳しくは、『OSGi フレームワークの概要』のトピックを参照してください。

このタスクについて

以下のシナリオは、プラグインを動的にインストール、開始、停止、変更、およびアンインストールすることを可能にする動的プラグインの作成および実行について述べています。動的機能がなくとも、OSGi フレームワークを使用できるようにする別の適切なシナリオを実行することも可能です。アプリケーションをバンドルとしてもパッケージできます。これは、サービスによって定義され、サービスを介して通信されます。これらのサービス・ベースのバンドルには、より効率的な開発およびデプロイメント機能など、いくつかの利点があります。

シナリオの目標

このシナリオを完了すると、以下の目標を達成する方法が分かります。

- OSGi 環境で使用するための eXtreme Scale 動的プラグインを作成します。
- eXtreme Scale コンテナーを、動的機能なしで OSGi 環境で実行します。

OSGi フレームワークの概要

OSGi は、Java に対して動的モジュール・システムを定義します。OSGi サービス・プラットフォームは、階層化アーキテクチャーを持ち、さまざまな標準 Java プロファイルで実行されるように設計されています。OSGi コンテナー内の WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびクライアントを始動できます。

OSGi コンテナー内でアプリケーションを実行する利点

WebSphere eXtreme Scale OSGi サポートにより、Eclipse Equinox OSGi フレームワークに製品をデプロイできます。これまで、eXtreme Scale で使用するプラグインを更新する場合は、Java 仮想マシン (JVM) を再始動して、プラグインの新規バージョンを適用する必要がありました。現在は、OSGi フレームワークが提供する動的更新機能を使用して、JVM を再始動せずにプラグイン・クラスを更新できます。これ

らのプラグインは、ユーザー・バンドルによってサービスとしてエクスポートされます。WebSphere eXtreme Scale は、OSGi レジストリーでルックアップして、サービス (複数可) にアクセスします。

eXtreme Scale コンテナーは、OSGi Configuration Admin サービスまたは OSGi Blueprint を使用して容易かつ動的に始動するように構成できます。新規データ・グリッドをその配置ストラテジーを使用してデプロイする場合は、OSGi 構成を作成するか、eXtreme Scale 記述子 XML ファイルを使用してバンドルをデプロイすることによって、これを行うことができます。OSGi サポートを使用すると、eXtreme Scale 構成データを含むアプリケーション・バンドルを、システム全体を再始動することなく、インストール、開始、停止、更新、およびアンインストールできます。この機能を使用して、データ・グリッドを中断することなくアプリケーションをアップグレードできます。

プラグイン Bean およびプラグイン・サービスをカスタム断片有効範囲で構成することができます。これにより、データ・グリッド内で実行中の他のサービスに対して高度な統合オプションを使用することができます。各プラグインは OSGi Blueprint ランキングを使用して、プラグインの各インスタンスが正しいバージョンでアクティブ化されていることを確認できます。OSGi Managed Bean (MBean) と **xscmd** ユーティリティーが提供され、これにより、eXtreme Scale プラグイン OSGi サービスとそのランキングを照会することができます。

この機能によって、管理者は、構成および管理に関する潜在的なエラーを迅速に認識することができ、eXtreme Scale によって使用中のプラグイン・サービス・ランキングをアップグレードすることができます。

OSGi バンドル

OSGi フレームワーク内のプラグインと対話し、それをデプロイするには、*バンドル*を使用する必要があります。 OSGi サービス・プラットフォームにおけるバンドルとは、Java アーカイブ (JAR) ファイルです。このファイルには Java コード、リソース、およびマニフェスト (バンドルとその依存関係についての記述) が含まれます。バンドルはアプリケーションのデプロイメントの単位です。 eXtreme Scale 製品は、以下のバンドル・タイプをサポートします。

サーバー・バンドル

サーバー・バンドルは `objectgrid.jar` ファイルであり、eXtreme Scale スタンドアロン・サーバーのインストールでインストールされます。これは、eXtreme Scale サーバーの稼働に必要で、eXtreme Scale クライアントまたはローカルのメモリー内のキャッシュの実行にも使用できます。`objectgrid.jar` ファイルのバンドル ID は com.ibm.websphere.xs.server_`<version>` で、バージョンのフォーマットは `<Version>.<Release>.<Modification>` です。例えば、eXtreme Scale バージョン 7.1.1 のサーバー・バンドルは、com.ibm.websphere.xs.server_7.1.1 です。

クライアント・バンドル

クライアント・バンドルは `ogclient.jar` ファイルであり、eXtreme Scale スタンドアロンおよびクライアントのインストールでインストールされます。これは、eXtreme Scale クライアントまたはローカルのメモリー内のキャッシュの実行に使用されます。`ogclient.jar` ファイルのバンドル ID

は、com.ibm.websphere.xs.client_version です。ここで、version は、<Version>.<Release>.<Modification> の形式です。例えば、eXtreme Scale バージョン 7.1.1 のクライアント・バンドルは、com.ibm.websphere.xs.client_7.1.1 です。

制限

オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) または eXtremeIO (XIO) を再始動できないため、eXtreme Scale バンドルを再始動できません。 eXtreme Scale サーバーを再始動するには、OSGi フレームワークを再開する必要があります。

関連タスク:

『クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール』
OSGi フレームワークに WebSphere eXtreme Scale をデプロイするには、Eclipse Equinox 環境をセットアップする必要があります。

601 ページの『プラグイン・ライフサイクルの管理』
各プラグインの特殊なメソッドを使用して、プラグインのライフサイクルを管理できます。それらのメソッドは、指定された機能ポイントで呼び出すことができます。initialize メソッドと destroy メソッドの両方でプラグインのライフサイクルが定義されます。これらのメソッドは、その「*所有者*」オブジェクトによって制御されます。所有者オブジェクトは、実際に指定のプラグインを使用するオブジェクトです。所有者はグリッド・クライアント、サーバー、またはパッキング・マップである場合があります。

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

関連情報:

109 ページの『概要: OSGi フレームワークで eXtreme Scale サーバーとコンテナーを開始および構成してプラグインを実行する』
このチュートリアルでは、OSGi フレームワーク内で eXtreme Scale サーバーを開始し、eXtreme Scale コンテナーを開始し、サンプル・プラグインと eXtreme Scale ランタイム環境を接続します。

API 資料

クライアントおよびサーバーの Eclipse Gemini を持つ Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール

Java

OSGi フレームワークに WebSphere eXtreme Scale をデプロイするには、Eclipse Equinox 環境をセットアップする必要があります。

このタスクについて

このタスクを実行するには、Blueprint フレームワークをダウンロードしてインストールする必要があります。そうすれば、後で、JavaBeans を構成し、それをサービスとして公開することができます。サービスの使用が重要である理由は、プラグインを OSGi サービスとして公開すれば、そのサービスを eXtreme Scale ランタイム環境が使用できるからです。製品は、Eclipse Equinox コア OSGi フレームワークの中で、Eclipse Gemini と Apache Aries の 2 つの blueprint コンテナーをサポートします。次の手順を使用して、Eclipse Gemini コンテナーをセットアップします。

手順

1. Eclipse Web サイト から、Eclipse Equinox SDK Version 3.6.1 以降をダウンロードします。 Equinox フレームワーク用のディレクトリーを作成します。例えば、`/opt/equinox` です。以下の説明では、このディレクトリーを `equinox_root` と呼びます。圧縮ファイルを `equinox_root` ディレクトリーに解凍します。
2. Eclipse Web サイトから、gemini-blueprint 1.0.0 圧縮ファイルをダウンロードします。 ファイルの内容を一時ディレクトリーに解凍し、解凍された次のファイルを `equinox_root/plugins` ディレクトリーにコピーします。

   ```
   dist/gemini-blueprint-core-1.0.0.jar
   dist/gemini-blueprint-extender-1.0.0.jar
   dist/gemini-blueprint-io-1.0.0.jar
   ```

   重要: 圧縮された Blueprint ファイルをダウンロードするロケーションに応じて、解凍されたファイルは、次のステップにある Spring フレームワーク JAR ファイルとよく似た拡張 `RELEASE.jar` を持つことがあります。ファイル名が `config.ini` ファイル内のファイル参照と一致することを確認する必要があります。
3. 次の SpringSource Web ページから、Spring Framework Version 3.0.5 をダウンロードします。http://www.springsource.com/download/community それを一時ディレクトリーに解凍し、解凍された次のファイルを `equinox_root/plugins` ディレクトリーにコピーします。

   ```
   org.springframework.aop-3.0.5.RELEASE.jar
   org.springframework.asm-3.0.5.RELEASE.jar
   org.springframework.beans-3.0.5.RELEASE.jar
   org.springframework.context-3.0.5.RELEASE.jar
   org.springframework.core-3.0.5.RELEASE.jar
   org.springframework.expression-3.0.5.RELEASE.jar
   ```
4. SpringSource Web ページから、AOP Alliance Java アーカイブ (JAR) ファイルをダウンロードします。 com.springsource.org.aopalliance-1.0.0.jar を `equinox_root/plugins` ディレクトリーにコピーします。
5. SpringSource Web ページから、Apache commons logging 1.1.1 JAR ファイルをダウンロードします。 `com.springsource.org.apache.commons.logging-1.1.1.jar` ファイルを `equinox_root/plugins` ディレクトリーにコピーします。
6. Luminis OSGi Configuration Admin コマンド行クライアントをダウンロードします。この JAR ファイル・バンドルを使用して、OSGi 管理構成を管理します。 `net.luminis.cmc-0.2.5.jar` を `equinox_root/plugins` ディレクトリーにコピーします。

7. 次の Web ページから、Apache Felix file installation Version 3.0.2 バンドルをダウンロードします。http://felix.apache.org/site/index.html
   `org.apache.felix.fileinstall-3.0.2.jar` ファイルを `equinox_root/plugins` ディレクトリーにコピーします。
8. `equinox_root/plugins` ディレクトリーの中に、構成ディレクトリーを作成します。例えば次のとおりです。

   ```
   mkdir equinox_root/plugins/configuration
   ```

9. 次の `config.ini` ファイルを、`equinox_root/plugins/configuration` ディレクトリーの中に作成します。このとき、*equinox_root* を、使用する `equinox_root` ディレクトリーの絶対パスに置き換え、各行の円記号 (¥) の後のすべての後続スペースを削除します。ファイルの最後に、ブランク行を含める必要があります。例えば次のとおりです。

   ```
   osgi.noShutdown=true
   osgi.java.profile.bootdelegation=none
   org.osgi.framework.bootdelegation=none
   eclipse.ignoreApp=true
   osgi.bundles=¥
   org.eclipse.osgi.services_3.2.100.v20100503.jar@1:start, ¥
   org.eclipse.osgi.util_3.2.100.v20100503.jar@1:start, ¥
   org.eclipse.equinox.cm_1.0.200.v20100520.jar@1:start, ¥
   com.springsource.org.apache.commons.logging-1.1.1.jar@1:start, ¥
   com.springsource.org.aopalliance-1.0.0.jar@1:start, ¥
   org.springframework.aop-3.0.5.RELEASE.jar@1:start, ¥
   org.springframework.asm-3.0.5.RELEASE.jar@1:start, ¥
   org.springframework.beans-3.0.5.RELEASE.jar@1:start, ¥
   org.springframework.context-3.0.5.RELEASE.jar@1:start, ¥
   org.springframework.core-3.0.5.RELEASE.jar@1:start, ¥
   org.springframework.expression-3.0.5.RELEASE.jar@1:start, ¥
   org.apache.felix.fileinstall-3.0.2.jar@1:start, ¥
   net.luminis.cmc-0.2.5.jar@1:start, ¥
   gemini-blueprint-core-1.0.0.jar@1:start, ¥
   gemini-blueprint-extender-1.0.0.jar@1:start, ¥
   gemini-blueprint-io-1.0.0.jar@1:start
   ```

   既に環境をセットアップしている場合は、次のディレクトリーを削除することで、Equinox プラグイン・リポジトリーをクリーンアップできます。
   `equinox_root¥plugins¥configuration¥org.eclipse.osgi`
10. 次のコマンドを実行して、Equinox コンソールを開始します。

    別のバージョンの Equinox を実行している場合、JAR ファイル名は次の例の中のものと異なります。

    ```
    java -jar plugins¥org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806.jar -console
    ```

関連概念:

180 ページの『OSGi フレームワークの概要』
OSGi は、Java に対して動的モジュール・システムを定義します。OSGi サービス・プラットフォームは、階層化アーキテクチャーを持ち、さまざまな標準 Java プロファイルで実行されるように設計されています。OSGi コンテナー内の WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびクライアントを始動できます。

関連資料:

サーバー・プロパティー・ファイル
サーバー・プロパティー・ファイルには、サーバーのさまざまな設定 (例えば、トレース設定、ロギング、およびセキュリティー構成など) を定義する複数のプロパティーが含まれます。サーバー・プロパティー・ファイルは、スタンドアロン・サーバーと WebSphere Application Server でホスティングされるサーバーの両方において、カタログ・サービス・サーバーおよびコンテナー・サーバーの両方によって使用されます。

関連情報:

109 ページの『概要: OSGi フレームワークで eXtreme Scale サーバーとコンテナーを開始および構成してプラグインを実行する』
このチュートリアルでは、OSGi フレームワーク内で eXtreme Scale サーバーを開始し、eXtreme Scale コンテナーを開始し、サンプル・プラグインと eXtreme Scale ランタイム環境を接続します。

eXtreme Scale バンドルのインストール

Java

WebSphere eXtreme Scale には、Eclipse Equinox OSGi フレームワークにインストールできるバンドルが組み込まれています。OSGi 内で eXtreme Scale サーバーを開始したり、eXtreme Scale クライアントを使用したりするには、これらのバンドルが必要です。 eXtreme Scale バンドルは、Equinox コンソールまたは config.ini 構成ファイルを使用してインストールすることができます。

始める前に

このタスクは、以下の製品をインストールしたことを前提としています。

- Eclipse Equinox OSGi フレームワーク
- eXtreme Scale スタンドアロン・クライアントまたはサーバー

このタスクについて

eXtreme Scale には、2 つのバンドルが組み込まれています。各 OSGi フレームワークでは、次のバンドルのいずれか 1 つのみが必要になります。

objectgrid.jar
サーバー・バンドルは `objectgrid.jar` ファイルであり、eXtreme Scale スタンドアロン・サーバーのインストールによってインストールされます。eXtreme Scale サーバーを実行するために必要なバンドルですが、eXtreme Scale クライアントまたはローカルのメモリー内キャッシュの実行にも使用できます。`objectgrid.jar` ファイルのバンドル ID は com.ibm.websphere.xs.server_`<version>` で、バージョンのフォーマットは

<Version>.<Release>.<Modification> です。例えば、このリリースのサーバー・バンドルは、com.ibm.websphere.xs.server_8.5.0. です。

ogclient.jar

ogclient.jar バンドルは、eXtreme Scale スタンドアロンおよびクライアントのインストール済み環境にインストールされ、eXtreme Scale クライアントまたはローカルのメモリー内キャッシュを実行するために使用されます。ogclient.jar ファイルのバンドル ID は com.ibm.websphere.xs.client_<version> で、バージョンのフォーマットは <Version>_<Release>_<Modification です。例えば、このリリースのクライアント・バンドルは、com.ibm.websphere.xs.server_8.5.0 です。

eXtreme Scale プラグインの作成法の詳細については、システム API とプラグインのトピックを参照してください。

Equinox コンソールを使用した Eclipse Equinox OSGi フレームワークへの eXtreme Scale クライアントまたはサーバー・バンドルのインストール:
手順

1. コンソールを有効にするよう指定して Eclipse Equinox フレームワークを開始します。例えば、次のようにします。

   java_home/bin/java -jar <equinox_root>/plugins/
   org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806.jar -console

2. Equinox コンソールで、eXtreme Scale クライアントまたはサーバー・バンドルをインストールします。

   ```
   osgi> install file:///<path to bundle>
   ```

3. Equinox が、新しくインストールされたバンドルのバンドル ID を表示します。

   ```
   Bundle id is 25
   ```

4. Equinox コンソールで、次のようにバンドルを開始します。ここで、<id> は、バンドルのインストール時に割り当てられたバンドル ID です。

   ```
   osgi>  start <id>
   ```

5. Equinox コンソールで、サービス状況を取得して、バンドルが開始したことを確認します。例えば、次のようにします。

   ```
   osgi> ss
   ```

   バンドルが正常に開始されると、バンドルは ACTIVE 状態を表示します。例えば、次のとおりです。

   ```
   25      ACTIVE      com.ibm.websphere.xs.server_8.5.0
   ```

config.ini ファイルを使用して、eXtreme Scale クライアントまたはサーバー・バンドルを Eclipse Equinox OSGi フレームワークにインストールするには、以下のようにします。:
手順

1. eXtreme Scale クライアントまたはサーバー (objectgrid.jar または ogclient.jar) バンドルを <wxs_install_root>/ObjectGrid/lib から、次の例のような Eclipse Equinox プラグイン・ディレクトリーにコピーします。 <equinox_root>/plugins
2. Eclipse Equinox config.ini 構成ファイルを編集し、バンドルを osgi.bundles プロパティーに追加します。例えば、次のとおりです。

```
osgi.bundles=¥
org.eclipse.osgi.services_3.2.100.v20100503.jar@1:start, ¥
org.eclipse.osgi.util_3.2.100.v20100503.jar@1:start, ¥
org.eclipse.equinox.cm_1.0.200.v20100520.jar@1:start, ¥
objectgrid.jar@1:start
```

重要: 最後のバンドル名の後にブランク行があることを確認してください。各バンドルはコンマで区切ります。

3. コンソールを有効にするよう指定して Eclipse Equinox フレームワークを開始します。例えば、次のようにします。

```
java_home/bin/java -jar <equinox_root>/plugins/
org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806.jar -console
```

4. Equinox コンソールで、サービス状況を取得して、バンドルが開始したことを確認します。

```
osgi> ss
```

バンドルが正常に開始されると、バンドルは ACTIVE 状態を表示します。例えば、次のとおりです。

```
25      ACTIVE      com.ibm.websphere.xs.server_8.5.0
```

タスクの結果

Eclipse Equinox OSGi フレームワークに eXtreme Scale サーバーまたはクライアント・バンドルがインストールされ、開始されました。

OSGi 環境での非動的プラグインを持つ eXtreme Scale コンテナーの実行

OSGi 環境の動的機能を使用する必要がない場合でも、OSGi フレームワークが提供する密結合、宣言的パッケージ化、およびサービス依存関係を活用することができます。

始める前に

1. WebSphere eXtreme Scale の API およびプラグインを使用してアプリケーションを開発します。
2. 1 つ以上のバンドル・マニフェストで宣言される適切なインポート依存関係またはエクスポート依存関係を持つ 1 つ以上の OSGi バンドルにアプリケーションをパッケージ化します。プラグイン、エージェント、データ・オブジェクトその他のために必要なすべてのクラスまたはパッケージがエクスポートされるようにしてください。

このタスクについて

動的プラグインがあれば、グリッドを停止することなくプラグインをアップグレードすることができます。この機能を使用するためには、元のプラグインと新しいプラグインが互換でなければなりません。プラグインを更新する必要がない場合や、プラグインをアップグレードするためにグリッドを停止しても問題がない場合は、複雑な動的プラグインを必要としないことがあります。しかし、それでも、eXtreme Scale アプリケーションを OSGi 環境で実行するだけの十分な理由があります。その理由は、密結合、宣言的パッケージ、サービス依存関係その他にあります。

動的プラグインを使用することなく (より具体的には、OSGi サービスを使用してプラグインを宣言することなく) OSGi 環境でグリッドやクライアントをホストすることには 1 つ問題があります。それは、eXtreme Scale バンドルがどのようにしてプラグイン・クラスをロードするかということです。 eXtreme Scale バンドルはプラグイン・クラスのロードを OSGi サービスに依存します。そのため、このバンドルは他のバンドル内のクラスでオブジェクト・メソッドを呼び出すことができ、その際、それらのクラスのパッケージを直接インポートする必要がありません。

プラグインが OSGi サービスを介して使用可能にならないときは、eXtreme Scale バンドルがプラグイン・クラスを直接ロードできなければなりません。ユーザー・クラスとパッケージをインポートするように eXtreme Scale バンドルのマニフェストを変更するのではなく、必要なパッケージ・インポートを追加するバンドル・フラグメントを作成してください。このフラグメントは、他の非プラグイン・ユーザー・クラス (データ・オブジェクトやエージェント・クラスなど) のために必要なクラスをインポートすることもできます。

手順

1. eXtreme Scale バンドル (対象とするデプロイメント環境に応じてクライアントまたはサーバー) をそのホストとして使用する OSGi フラグメントを作成します。 このフラグメントは、1 つ以上のプラグインがロードしなければならないすべてのパッケージの依存関係 (Import-Package) を宣言します。例えば、`com.mycompany.myapp.serializers` パッケージに存在するクラスを持ち、かつ `com.mycompany.myapp.common` パッケージ内のクラスに依存するシリアライザー・プラグインをインストールする場合は、フラグメント META-INF/MANIFEST.MF ファイルが次の例のようになります。

   ```
   Bundle-ManifestVersion: 2
   Bundle-Name: Plug-in fragment for XS serializers
   Bundle-SymbolicName: com.mycompany.myapp.myfragment; singleton:=true
   Bundle-Version: 1.0.0
   Fragment-Host: com.ibm.websphere.xs.server; bundle-version=7.1.1
   Manifest-Version: 1.0
   Import-Package: com.mycompany.myapp.serializers,
    com.mycompany.myapp.common
   ...
   ```

   このマニフェストはフラグメント JAR ファイル (この例では `com.mycompany.myapp.myfragment_1.0.0.jar`) にパッケージ化する必要があります。
2. 新たに作成したフラグメント (eXtreme Scale バンドル) とアプリケーション・バンドルの両方を OSGi 環境にデプロイします。ここで、これらのバンドルを開始してください。

タスクの結果

これで、OSGi サービスを使用してプラグインやエージェントなどのユーザー・クラスをロードしなくても OSGi 環境でアプリケーションのテストと実行を行えるようになりました。

関連概念:

357 ページの『Java プラグインの概要』
WebSphere eXtreme Scale プラグインは、プラグ可能なコンポーネント (ObjectGrid および BackingMap も含む) に、ある特定のタイプの機能を提供するコンポーネントです。 WebSphere eXtreme Scale には、いくつかのプラグ・ポイントが用意されていて、アプリケーションおよびキャッシュのプロバイダーは、それらを使用して、さまざまなデータ・ストアや代替クライアント API と統合することができ、キャッシュの全体的なパフォーマンスを向上させることができます。この製品には事前にビルド済みのデフォルトのプラグインがいくつか付属していますが、ユーザーはアプリケーションを使用してカスタム・プラグインをビルドすることもできます。

OSGi 環境での eXtreme Scale サーバーおよびアプリケーションの管理

このトピックを使用して、WebSphere eXtreme Scale サーバー・バンドル、アプリケーション・バンドルのロードを可能にするオプションのフラグメント、および非動的ユーザー・クラス (プラグイン、エージェント、データ・オブジェクトなど) をインストールします。

始める前に

1. サポートされる OSGi フレームワークをインストールして開始してください。現在、Equinox がサポートされる唯一の OSGi 実装です。アプリケーションが Blueprint を使用する場合は、必ず、サポートされる Blueprint 実装をインストールして開始してください。 Apache Aries と Eclipse Gemini は両方ともサポートされます。
2. OSGi コンソールを開きます。

手順

1. eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールします。バンドル Java アーカイブ (JAR) ファイルのファイル URL が分かっていなければなりません。例:

   ```
   osgi> install file:///home/user1/myOsgiEnv/plugins/objectgrid.jar
   Bundle id is 41

   osgi>
   ```

   eXtreme Scale バンドルは現在インストールされていますが、まだ解決されていません。
2. eXtreme Scale サーバーが、OSGi サービスを介して公開される動的プラグインを使用するのではなく、直接にユーザー・クラスをロードしなければならない場合は、それらのクラスを提供するか、あるいはインポートするユーザー開発フラグメントもインストールする必要があります。 動的プラグインを使用していて、エージェントを使用していない場合は、このステップをスキップすることができます。カスタム・フラグメントをインストールする方法の例を次に示します。

   ```
   osgi> install file:///home/user1/myOsgiEnv/plugins/myFragment.jar
   Bundle id is 42

   osgi> ss
   ```

```
Framework is launched.

id State       Bundle
...
41 INSTALLED   com.ibm.websphere.xs.server_7.1.1
42 INSTALLED   com.mycompany.myfragment_1.0.0

osgi>
```

現在、eXtreme Scale サーバー・バンドルと、このバンドルに付属するカスタム・フラグメントが両方ともインストールされています。

3. eXtreme Scale サーバー・バンドルを開始します。例えば、次のようにします。

```
osgi> start 41

osgi> ss

Framework is launched.

id State       Bundle
...
41 ACTIVE      com.ibm.websphere.xs.server_7.1.1
               Fragments=42
42 RESOLVED    com.mycompany.myfragment_1.0.0
               Master=41

osgi>
```

4. ここで、前に述べた同じコマンドを使用して、すべてのユーザー・アプリケーション・バンドルをインストールして開始します。このサーバーでグリッドを開始するには、Blueprint を使用してサーバーおよびコンテナー定義を宣言するか、アプリケーションがバンドル・アクティベーターまたは他のメカニズムからプログラマチックにサーバーとコンテナーを開始するようにする必要があります。

タスクの結果

eXtreme Scale サーバー・バンドルおよびアプリケーションがデプロイされ、開始されて、作業を行えるようになります。

OSGi 環境で使用する eXtreme Scale 動的プラグインのビルドと実行

すべての eXtreme Scale プラグインを OSGi 環境用に構成できます。動的プラグインの主なメリットは、グリッドをシャットダウンしなくともアップグレードが可能なことです。これにより、グリッド・コンテナー・プロセスを再始動せずにアプリケーションの移行が可能になります。

このタスクについて

WebSphere eXtreme Scale OSGi サポートにより、Eclipse Equinox などの OSGi フレームワークに製品をデプロイできます。これまで、eXtreme Scale で使用するプラグインを更新する場合は、Java 仮想マシン (JVM) を再始動して、プラグインの新規バージョンを適用する必要がありました。eXtreme Scale が提供する動的プラグイン・サポートと OSGi フレームワークが提供するバンドル更新機能により、現在では JVM を再始動せずにプラグイン・クラスを更新できるようになりました。これらのプラグインは、*バンドル* によりサービスとしてエクスポートされます。
WebSphere eXtreme Scale は、OSGi レジストリーをルックアップすることでサービ

スにアクセスします。OSGi サービス・プラットフォームにおけるバンドルとは、Java アーカイブ (JAR) ファイルです。このファイルには Java コード、リソース、およびマニフェスト (バンドルとその依存関係についての記述) が含まれます。バンドルはアプリケーションのデプロイメントの単位です。

手順

1. eXtreme Scale 動的プラグインをビルドします。
2. OSGi Blueprint を使用して eXtreme Scale プラグインを構成します。
3. OSGi 対応プラグインをインストールして開始します。

eXtreme Scale 動的プラグインのビルド

Java

WebSphere eXtreme Scale には、ObjectGrid および BackingMap プラグインが含まれます。 これらのプラグインは Java で実装され、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用して構成されます。動的にアップグレードできる動的プラグインを作成する場合、動的プラグインは更新時に何らかのアクションを完了する必要がある可能性があるため、ObjectGrid および BackingMap ライフサイクル・イベントを認識する必要があります。ライフサイクルのコールバック・メソッド、イベント・リスナー、あるいはその両方でプラグイン・バンドルを拡張すると、プラグインが適切なタイミングでそれらのアクションを完了できるようになります。

始める前に

このトピックは、適切なプラグインのビルドが完了していることを前提とします。eXtreme Scale プラグインの作成法の詳細については、システム API とプラグインのトピックを参照してください。

このタスクについて

すべての eXtreme Scale プラグインは、BackingMap または ObjectGrid インスタンスに適用されます。多くのプラグインは他のプラグインと対話もします。例えば、Loader および TransactionCallback プラグインは連携して、データベース・トランザクションやさまざまなデータベース JDBC 呼び出しと適切に対話します。プラグインの中には、パフォーマンスを改善するために、他のプラグインの構成データをキャッシュに入れる必要があるものもあります。

BackingMapLifecycleListener および ObjectGridLifecycleListener プラグインは、個別の BackingMap および ObjectGrid インスタンスのライフサイクル操作が可能です。このプロセスにより、プラグインは親の BackingMap または ObjectGrid とそれぞれのプラグインに変更があると、通知を受けることができます。 BackingMap プラグインは BackingMapLifecyleListener インターフェースを実装し、ObjectGrid プラグインは ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装します。親の BackingMap または ObjectGrid のライフサイクルに変化があると、これらのプラグインが自動的に呼び出されます。ライフサイクル・プラグインの詳細については、601 ページの『プラグイン・ライフサイクルの管理』のトピックを参照してください。

ライフサイクル・メソッドまたはイベント・リスナーを使用したバンドルの拡張は、次の共通タスクの中で必要になる可能性があります。

- リソース (スレッド、メッセージング・サブスクライバーなど) の開始と停止
- ピア・プラグインが更新された際の通知指定、プラグインへの直接アクセスの許可、変更の検出

別のプラグインに直接アクセスするときは、必ず OSGi コンテナー経由でそのプラグインにアクセスして、システムのすべてのパーツが正しいプラグインを参照できるようにしてください。例えば、アプリケーション内のあるコンポーネントがプラグインのインスタンスを直接参照するかキャッシュに入れると、そのプラグインが動的に更新された後も、コンポーネントはそのバージョンのプラグインへの参照を維持します。この振る舞いは、メモリー・リークのほかにアプリケーション関連の問題の原因にもなります。したがって、コードを作成するときは、OSGi の getService() セマンティクスを使用して参照を獲得する動的プラグインを使用してください。アプリケーションが 1 つ以上のプラグインをキャッシュに入れる必要がある場合は、ObjectGridLifecycleListener および BackingMapLifecycleListener インターフェースを使用してライフサイクル・イベントを listen します。また、アプリケーションは、スレッド・セーフな方法で、必要なときにキャッシュをリフレッシュできなければなりません。

OSGi で使用するすべての eXtreme Scale プラグインは、BackingMapPlugin または ObjectGridPlugin インターフェースもそれぞれ実装する必要があります。MapSerializerPlugin インターフェースなどの新しいプラグインでは、この実装が実施されます。これらのインターフェースは、状態をプラグインに注入したり、プラグインのライフサイクルを制御したりするための一貫性のあるインターフェースを eXtreme Scale ランタイム環境と OSGi に提供します。

このタスクを使用して、ピア・プラグインが更新されたときに通知するよう指定します。リスナー・インスタンスを生成するリスナー・ファクトリーを作成してもかまいません。

手順

- ObjectGrid プラグイン・クラスを更新して、ObjectGridPlugin インターフェースを実装します。 このインターフェースは、eXtreme Scale がプラグインを初期化したり、ObjectGrid インスタンスを設定したり、プラグインを破棄したりできるようにするメソッドを組み込みます。次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridPlugin;
...

public class MyTranCallback implements TransactionCallback, ObjectGridPlugin {

    private ObjectGrid og = null;

    private enum State {
        NEW, INITIALIZED, DESTROYED
    }

    private State state = State.NEW;

    public void setObjectGrid(ObjectGrid grid) {
        this.og = grid;
    }

    public ObjectGrid getObjectGrid() {
        return this.og;
    }
    void initialize() {
        // Handle any plug-in initialization here.  This is called by
        // eXtreme Scale, and not the OSGi bean manager.
        state = State.INITIALIZED;
    }
    boolean isInitialized() {
        return state == State.INITIALIZED;
```

```
    }

    public void destroy() {
        // Destroy the plug-in and release any resources.  This
        // can be callsed by the OSGi Bean Manager or by eXtreme Scale.
        state = State.DESTROYED;
    }

    public boolean isDestroyed() {
        return state == State.DESTROYED;
    }
}
```

- ObjectGrid プラグイン・クラスを更新して、ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装します。次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridLifecycleListener;
      import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridLifecycleListener.LifecycleEvent;
      ...

      public class MyTranCallback implements TransactionCallback, ObjectGridPlugin, ObjectGridLifecycleListener{
          public void objectGridStateChanged(LifecycleEvent event) {
              switch(event.getState()) {
              case NEW:
              case DESTROYED:
              case DESTROYING:
              case INITIALIZING:
                  break;
              case INITIALIZED:
                  // Lookup a Loader or MapSerializerPlugin using
                  // OSGi or directly from the ObjectGrid instance.
                  lookupOtherPlugins()
                  break;
              case STARTING:
              case PRELOAD:
                  break;
              case ONLINE:
                  if (event.isWritable()) {
                      startupProcessingForPrimary();
                  } else {
                      startupProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case QUIESCE:
                  if (event.isWritable()) {
                      quiesceProcessingForPrimary();
                  } else {
                      quiesceProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case OFFLINE:
                  shutdownShardComponents();
                  break;
              }
          }
          ...
      }
```

- BackingMap プラグインを更新します。 BackingMap プラグイン・クラスを更新して、BackingMap インターフェースを実装します。このインターフェースは、eXtreme Scale がプラグインを初期化したり、BackingMap インスタンスを設定したり、プラグインを破棄したりできるようにするメソッドを組み込みます。次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.BackingMapPlugin;
...

public class MyLoader implements Loader, BackingMapPlugin {

    private BackingMap bmap = null;

    private enum State {
        NEW, INITIALIZED, DESTROYED
    }

    private State state = State.NEW;

    public void setBackingMap(BackingMap map) {
        this.bmap = map;
    }

    public BackingMap getBackingMap() {
        return this.bmap;
    }
    void initialize() {
        // Handle any plug-in initialization here.  This is called by
        // eXtreme Scale, and not the OSGi bean manager.
```

```
        state = State.INITIALIZED;
    }
    boolean isInitialized() {
        return state == State.INITIALIZED;
    }

    public void destroy() {
        // Destroy the plug-in and release any resources.  This
        // can be callsed by the OSGi Bean Manager or by eXtreme Scale.
        state = State.DESTROYED;
    }

    public boolean isDestroyed() {
        return state == State.DESTROYED;
    }
}
```

- BackingMap プラグイン・クラスを更新して、BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装します。 次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;

      import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.BackingMapLifecycleListener;
      import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.BackingMapLifecycleListener.LifecycleEvent;
      ...

      public class MyLoader implements Loader, ObjectGridPlugin, ObjectGridLifecycleListener{
          ...
          public void backingMapStateChanged(LifecycleEvent event) {
              switch(event.getState()) {
              case NEW:
              case DESTROYED:
              case DESTROYING:
              case INITIALIZING:
                  break;
              case INITIALIZED:
                  // Lookup a MapSerializerPlugin using
                  // OSGi or directly from the ObjectGrid instance.
                  lookupOtherPlugins()
                  break;
              case STARTING:
              case PRELOAD:
                  break;
              case ONLINE:
                  if (event.isWritable()) {
                      startupProcessingForPrimary();
                  } else {
                      startupProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case QUIESCE:
                  if (event.isWritable()) {
                      quiesceProcessingForPrimary();
                  } else {
                      quiesceProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case OFFLINE:
                  shutdownShardComponents();
                  break;
              }
          }
          ...
      }
```

タスクの結果

ObjectGridPlugin または BackingMapPlugin インターフェースを実装することで、eXtreme Scale はプラグインのライフサイクルを正しいタイミングで制御できます。

ObjectGridLifecycleListener または BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装すると、プラグインは、関連付けられた ObjectGrid または BackingMap ライフサイクル・イベントのリスナーとして自動的に登録されます。すべての ObjectGrid および BackingMap プラグインの初期化が完了し、検索および使用が可能になったことをシグナル通知するときは INITIALIZING イベントが使用されます。
ObjectGrid がオンラインになり、イベントの処理を開始する準備ができたことをシグナル通知するときは ONLINE イベントが使用されます。

OSGi Blueprint での eXtreme Scale プラグインの構成

Java

eXtreme Scale ObjectGrid および BackingMap プラグインはすべて、Eclipse Gemini または Apache Aries で使用可能な OSGi Blueprint サービスを使用して OSGi Bean およびサービスとして定義できます。

始める前に

プラグインを OSGi サービスとして構成するには、プラグインを OSGi バンドルにパッケージ化し、必要なプラグインの基本原則を理解する必要があります。バンドルは、WebSphere eXtreme Scale サーバー・パッケージまたはクライアント・パッケージに加えてプラグインが必要とするその他の従属パッケージをインポートするか、eXtreme Scale サーバー・バンドルまたはクライアント・バンドルへのバンドル依存関係を作成しなければなりません。このトピックでは、Blueprint XML を構成して、プラグイン Bean を作成し、それらを eXtreme Scale で使用できるように OSGi サービスとして公開する方法を説明します。

このタスクについて

Bean とサービスは Blueprint XML ファイル内に定義します。そうすると、Blueprint コンテナーによって Bean が検出および作成され、Bean 同士がワイヤリングされ、サービスとして公開されます。このプロセスにより、eXtreme Scale サーバー・バンドルとクライアント・バンドルを含め、その他の OSGi バンドルで Bean が使用可能になります。

eXtreme Scale で使用するカスタム・プラグイン・サービスを作成する場合、プラグインをホスティングするバンドルは、Blueprint を使用するように構成しなければなりません。さらに、Blueprint XML ファイルを作成し、そのファイルをバンドル内に保管しなければなりません。Blueprint Container 仕様の全般的な知識を得るには、Blueprint Container 仕様による OSGi アプリケーションの構築を参照してください。

手順

1. Blueprint XML ファイルを作成します。 ファイルには任意の名前を付けることができます。ただし、次のように blueprint 名前空間を含める必要があります。

   ```
   <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
   <blueprint xmlns="http://www.osgi.org/xmlns/blueprint/v1.0.0">
   ...
   </blueprint>
   ```

2. eXtreme Scale プラグインごとに Bean 定義を Blueprint XML ファイル内に作成します。

   Bean は <bean> エレメントを使用して定義し、他の Bean 参照にワイヤリングでき、初期化パラメーターを組み込むことができます。

   重要: Bean の定義時は、正しいスコープを使用する必要があります。Blueprint は singleton スコープとプロトタイプ・スコープをサポートします。eXtreme Scale はカスタム断片スコープもサポートします。

すべての Bean は、関連付けられる各 ObjectGrid 断片または BackingMap インスタンスで固有でなければならないため、ほとんどの eXtreme Scale プラグインはプロトタイプ・スコープまたは断片スコープの Bean として定義します。正しいインスタンスの取得を可能にするために Bean を他のコンテキストで使用する場合、断片スコープの Bean が便利です。

プロトタイプ・スコープの Bean を定義するには、Bean の scope="prototype" 属性を使用します。

```
<bean id="myPluginBean" class="com.mycompany.MyBean" scope="prototype">
...
</bean>
```

断片スコープの Bean を定義するには、objectgrid 名前空間を XML スキーマに追加し、Bean の scope="objectgrid:shard" 属性を使用してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<blueprint xmlns="http://www.osgi.org/xmlns/blueprint/v1.0.0"
           xmlns:objectgrid="http://www.ibm.com/schema/objectgrid"

    xsi:schemaLocation="http://www.ibm.com/schema/objectgrid
                http://www.ibm.com/schema/objectgrid/objectgrid.xsd">

    <bean id="myPluginBean" class="com.mycompany.MyBean"
   scope="objectgrid:shard">
    ...
    </bean>

...
```

3. 各プラグイン Bean の PluginServiceFactory Bean 定義を作成します。 正しい Bean スコープを適用できるように、すべての eXtreme Scale Bean に PluginServiceFactory Bean を定義する必要があります。eXtreme Scale には、ユーザーが使用できる BlueprintServiceFactory が組み込まれています。それには設定が必要な 2 つのプロパティーがあります。blueprintContainer プロパティーには blueprintContainer 参照を設定し、beanId プロパティーには Bean ID 名を設定する必要があります。eXtreme Scale が適切な Bean のインスタンスを生成するためにサービスを検索すると、サーバーは Blueprint コンテナーを使用して Bean コンポーネント・インスタンスを検索します。

```
bean id="myPluginBeanFactory"
    class="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.BluePrintServiceFactory">
    <property name="blueprintContainer" ref="blueprintContainer" />
    <property name="beanId" value="myPluginBean" />
</bean>
```

4. 各 PluginServiceFactory Bean のサービス・マネージャーを作成します。 各サービス・マネージャーは、<service> エレメントを使用して PluginServiceFactory Bean を公開します。サービス・エレメントは、OSGi に公開する名前、PluginServiceFactory Bean への参照、公開するインターフェース、およびサービスのランキングを識別します。eXtreme Scale はサービス・マネージャー・ランキングを使用して、eXtreme Scale グリッドがアクティブなときにサービス・アップグレードを実行します。 ランキングが指定されない場合、OSGi フレームワークはランキング 0 を想定します。詳細については、サービス・ランキングの更新を参照してください。

Blueprint には、サービス・マネージャーを構成するためのオプションがいくつかあります。PluginServiceFactory Bean の単純なサービス・マネージャーを定義するには、PluginServiceFactory Bean ごとに <service> エレメントを作成します。

```
<service ref="myPluginBeanFactory"
    interface="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.osgi.PluginServiceFactory"
    ranking="1">
</service>
```

5. Blueprint XML ファイルをプラグイン・バンドル内に保管します。 Blueprint XML ファイルは OSGI-INF/blueprint ディレクトリー内に保管し、Blueprint コンテナーが検出されるようにしなければなりません。

   Blueprint XML ファイルを他のディレクトリーに保管するには、次の Bundle-Blueprint マニフェスト・ヘッダーを指定する必要があります。

   ```
   Bundle-Blueprint: OSGI-INF/blueprint.xml
   ```

タスクの結果

これで、OSGi Blueprint コンテナー内に公開される eXtreme Scale プラグインが構成されました。さらに、OSGi Blueprint サービスを使用してプラグインを参照するように ObjectGrid 記述子 XML ファイルも構成されました。

OSGi 対応プラグインのインストールと開始

このタスクでは、動的プラグイン・バンドルを OSGi フレームワークにインストールします。その後、そのプラグインを開始します。

始める前に

このトピックは、以下のタスクが完了していることを前提としています。

- eXtreme Scale サーバーまたはクライアント・バンドルを Eclipse Equinox OSGi フレームワークにインストール済みである。 185 ページの『eXtreme Scale バンドルのインストール』を参照してください。
- 1 つ以上の動的 BackingMap または ObjectGrid プラグインを実装済みである。 191 ページの『eXtreme Scale 動的プラグインのビルド』を参照してください。
- 動的プラグインを OSGi バンドル内に OSGi サービスとしてパッケージ化済みである。

このタスクについて

このタスクでは、Eclipse Equinox コンソールを使用してバンドルをインストールする方法を説明します。バンドルはいくつかの異なる方式 (config.ini 構成ファイルを変更するなど) を使用してインストールできます。Eclipse Equinox を組み込む製品には、バンドルを管理するための代わりの方式があります。Eclipse Equinox で config.ini ファイルにバンドルを追加する方法について詳しくは、「Eclipse runtime options」を参照してください。

OSGi では、重複サービスを持つバンドルの開始が許可されます。WebSphere eXtreme Scale は最新のサービス・ランキングを使用します。1 つの eXtreme Scale データ・グリッド内で複数の OSGi フレームワークを開始する場合は、各サーバーで正しいサービス・ランキングが開始されるようにしなければなりません。そうしないと、いろいろなバージョンが混在したグリッドが開始されます。

データ・グリッドで使用中のバージョンを確認するには、xscmd ユーティリティーを使用して、現在のランキングと使用可能なランキングを確認します。使用可能なサービス・ランキングの詳細については、**xscmd** による eXtreme Scale プラグインの OSGi サービスの更新を参照してください。

手順

OSGi コンソールを使用してプラグイン・バンドルを Eclipse Equinox OSGi フレームワークにインストールします。

1. コンソールを有効にするよう指定して Eclipse Equinox フレームワークを開始します。例えば、次のようにします。

   ```
   <java_home>/bin/java -jar <equinox_root>/plugins/org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806.jar -console
   ```

2. Equinox コンソールで、プラグイン・バンドルをインストールします。

   ```
   osgi> install file:///<path to bundle>
   ```

   Equinox が、新しくインストールされたバンドルのバンドル ID を表示します。

   ```
   Bundle id is 17
   ```

3. Equinox コンソールで、次の行を入力してバンドルを開始します。ここで、<id> は、バンドルのインストール時に割り当てられたバンドル ID です。

   ```
   osgi>  start <id>
   ```

4. Equinox コンソールで、サービス状況を取得して、バンドルが開始したことを確認します。

   ```
   osgi> ss
   ```

   バンドルが正常に開始した場合、バンドルは ACTIVE 状態を表示します。例えば、次のとおりです。

   ```
   17      ACTIVE      com.mycompany.plugin.bundle_VRM
   ```

config.ini ファイルを使用して、プラグイン・バンドルを Eclipse Equinox OSGi フレームワークにインストールします。

5. プラグイン・バンドルを次の例のような Eclipse Equinox プラグイン・ディレクトリーにコピーします。

   ```
   <equinox_root>/plugins
   ```

6. Eclipse Equinox config.ini 構成ファイルを編集し、バンドルを osgi.bundles プロパティーに追加します。例えば、次のとおりです。

   ```
   osgi.bundles=¥
   org.eclipse.osgi.services_3.2.100.v20100503.jar@1:start, ¥
   org.eclipse.osgi.util_3.2.100.v20100503.jar@1:start, ¥
   org.eclipse.equinox.cm_1.0.200.v20100520.jar@1:start, ¥
   com.mycompany.plugin.bundle_VRM.jar@1:start
   ```

   重要: 最後のバンドル名の後にブランク行が存在することを確認してください。各バンドルはコンマで区切ります。

7. コンソールを有効にするよう指定して Eclipse Equinox フレームワークを開始します。例えば、次のようにします。

   ```
   <java_home>/bin/java -jar <equinox_root>/plugins/org.eclipse.osgi_3.6.1.R36x_v20100806.jar -console
   ```

8. Equinox コンソールで、サービス状況を取得して、バンドルが開始したことを確認します。例えば、次のようにします。

```
osgi> ss
```

バンドルが正常に開始した場合、バンドルは ACTIVE 状態を表示します。例えば、次のとおりです。

```
17      ACTIVE      com.mycompany.plugin.bundle_VRM
```

タスクの結果

これでプラグイン・バンドルがインストールされ、開始されました。今度は、eXtreme Scale コンテナーまたはクライアントを開始できます。eXtreme Scale プラグインの作成法の詳細については、システム API とプラグインのトピックを参照してください。

OSGi 環境での動的プラグインを持つ eXtreme Scale コンテナーの実行

Eclipse Gemini または Apache Aries を使用する Eclipse Equinox OSGi フレームワーク内でアプリケーションがホスティングされる場合は、このタスクに従って OSGi に WebSphere eXtreme Scale アプリケーションをインストールし、構成できます。

始める前に

このタスクを開始する前に、必ず次のタスクを完了してください。

- Eclipse Gemini を使用する Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール
- OSGi 環境で使用する eXtreme Scale 動的プラグインのビルドと実行

このタスクについて

動的プラグインを使用すると、グリッドがアクティブなままでもプラグインを動的にアップグレードできます。これにより、グリッド・コンテナー・プロセスを再始動せずにアプリケーションの更新が可能になります。eXtreme Scale プラグインの作成法の詳細については、システム API とプラグインを参照してください。

手順

1. ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用して OSGi 対応プラグインを構成します。
2. Eclipse Equinox OSGi フレームワークを使用して eXtreme Scale コンテナー・サーバーを開始します。
3. xscmd ユーティリティーを使用して eXtreme Scale プラグインの OSGi サービスを管理します。
4. OSGi Blueprint を使用してサーバーを構成します。

ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用した OSGi 対応プラグインの構成

Java

このタスクでは、既存の OSGi サービスを記述子 XML ファイルに追加して、WebSphere eXtreme Scale コンテナーが OSGi 対応プラグインを正しく認識し、ロードできるようにします。

始める前に

プラグインを構成するときは、必ず以下を実行してください。

- パッケージを作成し、OSGi デプロイメントのために動的プラグインを使用可能にする。
- プラグインを表す OSGi サービスの名前を用意しておく。

このタスクについて

プラグインをラップする OSGi サービスの作成は完了しています。次は、これらのサービスを objectgrid.xml ファイル内に定義して、eXtreme Scale コンテナーがプラグインを正常にロードおよび構成できるようにする必要があります。

手順

1. グリッド固有のプラグイン (TransactionCallback など) は、objectGrid エレメントの下に指定しなければなりません。 objectgrid.xml ファイルの次の例を参照してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

    <objectGrids>
        <objectGrid name="MyGrid" txTimeout="60">
            <bean id="myTranCallback" osgiService="myTranCallbackFactory"/>
            ...
        </objectGrid>
        ...
    </objectGrids>
    ...
/objectGridConfig>
```

   重要: osgiService 属性値は、myTranCallback PluginServiceFactory でサービスが定義された blueprint XML ファイルに指定されている ref 属性値と一致しなければなりません。

2. マップ固有のプラグイン (例えば、ローダー、シリアライザーなど) は、backingMapPluginCollections エレメント内に指定し、backingMap エレメントから参照されなければなりません。 objectgrid.xml ファイルの次の例を参照してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="MyGrid" txTimeout="60">
            <backingMap name="MyMap1" lockStrategy="PESSIMISTIC"
                copyMode="COPY_TO_BYTES" nullValuesSupported="false"
                pluginCollectionRef="myPluginCollectionRef1"/>
            <backingMap name="MyMap2" lockStrategy="PESSIMISTIC"
                copyMode="COPY_TO_BYTES" nullValuesSupported="false"
                pluginCollectionRef="myPluginCollectionRef2"/>
            ...
        </objectGrid>
        ...
    </objectGrids>
    ...
    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="myPluginCollectionRef1">
            <bean id="MapSerializerPlugin" osgiService="mySerializerFactory"/>
        </backingMapPluginCollection>
        <backingMapPluginCollection id="myPluginCollectionRef2">
            <bean id="MapSerializerPlugin" osgiService="myOtherSerializerFactory"/>
```

```
            <bean id="Loader" osgiService="myLoader"/>
          </backingMapPluginCollection>
          ...
        </backingMapPluginCollections>
        ...
    </objectGridConfig>
```

タスクの結果

この例の objectgrid.xml ファイルは、MyMap1 と MyMap2 の 2 つのマップを持つ MyGrid というグリッドを作成するよう eXtreme Scale に指示します。 MyMap1 マップは、OSGi サービス mySerializerFactory によってラップされるシリアライザーを使用します。MyMap2 マップは、OSGi サービス myOtherSerializerFactory のシリアライザーと、OSGi サービス myLoader のローダーを使用します。

Eclipse Equinox OSGi フレームワークを使用した eXtreme Scale サーバーの始動

WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバーは、いくつかの方法を使用して、Eclipse Equinox OSGi フレームワークの中で始動することができます。

始める前に

eXtreme Scale コンテナーを開始する前に、次のタスクを完了していなければなりません。

1. WebSphere eXtreme Scale サーバー・バンドルが Eclipse Equinox にインストールされていなければなりません。
2. アプリケーションは OSGi バンドルとしてパッケージされていなければなりません。
3. WebSphere eXtreme Scale プラグインがある場合は、OSGi バンドルとしてパッケージされていなければなりません。これらのプラグインは、アプリケーションと同じバンドルにバンドルすることも、別々のバンドルとしてバンドルすることもできます。
4. コンテナー・サーバーが IBM eXtremeMemory を使用している場合は、まずネイティブ・ライブラリーを構成する必要があります。詳しくは、IBM eXtremeMemory の構成を参照してください。

このタスクについて

このタスクでは、Eclipse Equinox OSGi フレームワークの中で eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動する方法を説明します。Eclipse Equinox 実装を使用してコンテナー・サーバーを始動するには、次のいずれかの方法を使用することができます。

- OSGi Blueprint サービス

  OSGi バンドルの中に、すべての構成およびメタデータを含めることができます。次の図を参考にして、この方法の Eclipse Equinox プロセスを理解してください。

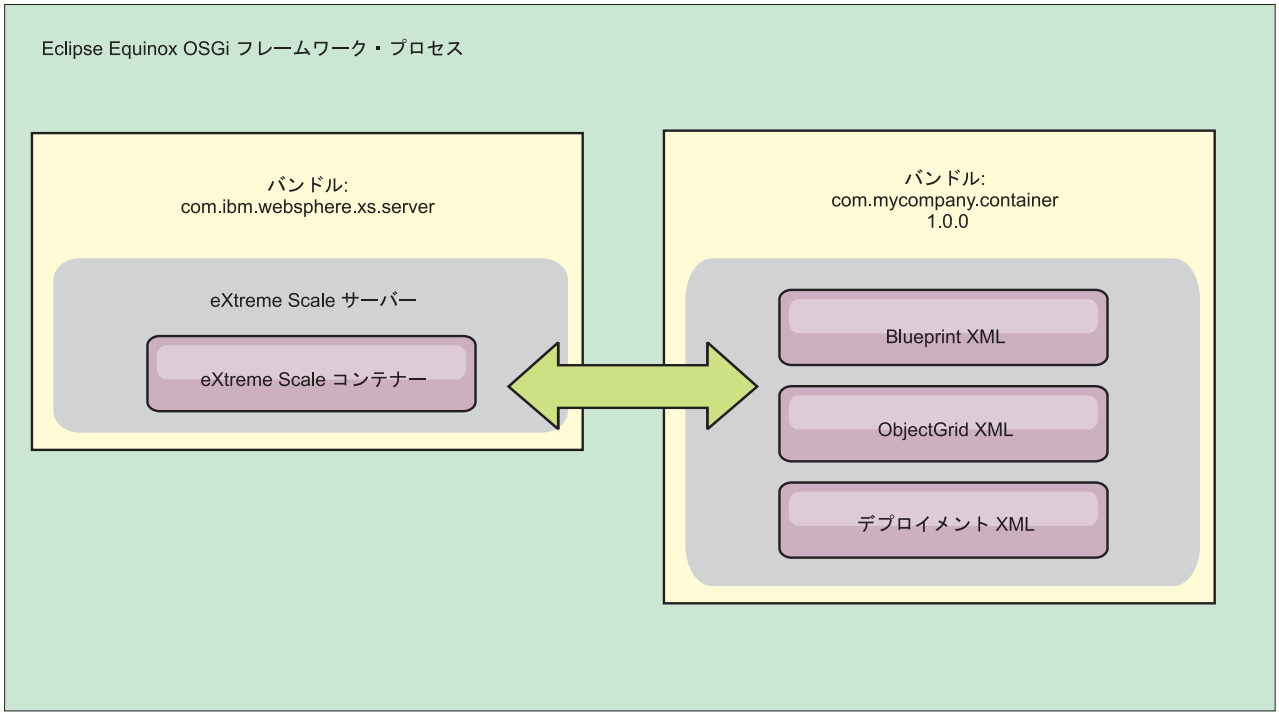


図 10. OSGi バンドルにすべての構成およびメタデータを含めるための Eclipse Equinox プロセス

- OSGi Configuration Admin サービス

  OSGi バンドルの外部で構成およびメタデータを指定できます。次の図を参考にして、この方法の Eclipse Equinox プロセスを理解してください。

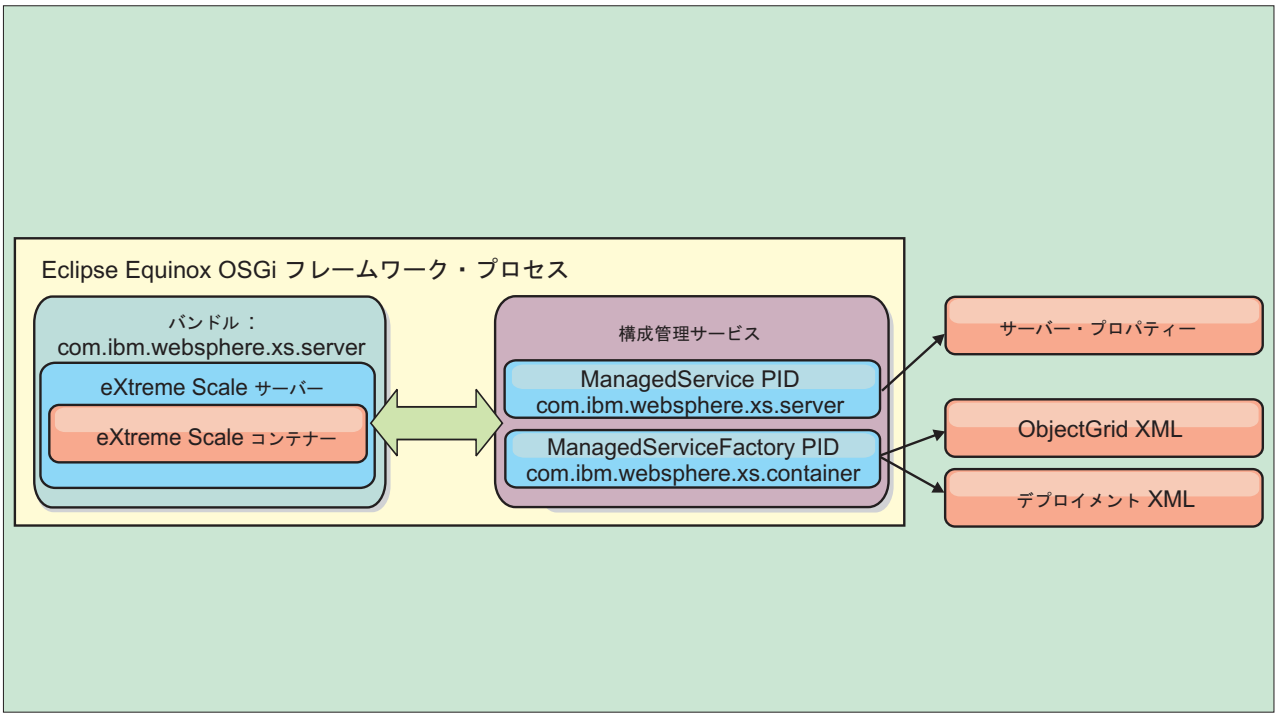


図 11. OSGi バンドルの外部で構成およびメタデータを指定するための Eclipse Equinox プロセス

- プログラムによる構成

  カスタマイズされた構成ソリューションをサポートします。

いずれの場合にも、eXtreme Scale サーバーの singleton が構成され、1 つ以上のコンテナーが構成されます。

eXtreme Scale サーバー・バンドル `objectgrid.jar` には、OSGi フレームワークの中で eXtreme Scale グリッド・コンテナーを開始して実行するのに必要なすべてのライブラリーが含まれます。サーバー・ランタイム環境は、OSGi サービス・マネージャーを使用して、ユーザー提供のプラグインおよびデータ・オブジェクトと対話します。

重要: eXtreme Scale サーバー・バンドルが始動され、eXtreme Scale サーバーが初期化された後に、eXtreme Scale サーバーを再始動することはできません。 eXtreme Scale サーバーを再始動するには、Eclipse Equinox プロセスを再開する必要があります。

Spring 名前空間に対する eXtreme Scale サポートを使用して、Blueprint XML ファイルで eXtreme Scale コンテナー・サーバーを構成できます。サーバーおよびコンテナーの XML エレメントが Blueprint XML ファイルに追加されると、eXtreme Scale 名前空間ハンドラーが、バンドルの始動時に Blueprint XML ファイルで定義されるパラメーターを使用して、コンテナー・サーバーを自動的に始動します。バンドルが停止されると、ハンドルはコンテナーを停止します。

Blueprint XML で eXtreme Scale コンテナー・サーバーを構成するには、次のステップを実行します。

手順

- OSGi Blueprint を使用して、eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動します。
  1. コンテナー・バンドルを作成します。
  2. コンテナー・バンドルを Eclipse Equinox OSGi フレームワークにインストールします。 197 ページの『OSGi 対応プラグインのインストールと開始』を参照してください。
  3. コンテナー・バンドルを開始します。
- OSGi Configuration Admin を使用して、eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動します。
  1. Config Admin を使用して、サーバーおよびコンテナーを構成します。
  2. eXtreme Scale サーバー・バンドルが開始されるか、Config Admin によって永続 ID が作成されると、サーバーおよびコンテナーは自動的に始動します。
- ServerFactory API を使用して、eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動します。サーバー API 資料を参照してください。
  1. OSGi バンドル・アクティベーター・クラスを作成し、eXtreme Scale ServerFactory API を使用してサーバーを始動します。

xscmd ユーティリティーによる OSGi 対応サービスの管理

xscmd ユーティリティーを使用して、各コンテナーが使用しているサービスとサービス・ランキングを表示したり、バンドルの新しいバージョンを使用するようランタイム環境を更新したりするなど、管理者用タスクを実行できます。

このタスクについて

Eclipse Equinox OSGi フレームワークでは、同一バンドルの複数バージョンをインストールでき、それらのバンドルを実行時に更新できます。WebSphere eXtreme Scale は、多数の OSGi フレームワーク・インスタンス内でコンテナー・サーバーを実行する分散環境です。

手動で OSGi フレームワークにバンドルをコピーしたり、インストールしたり、それらのバンドルを開始したりする作業は管理者の担当です。eXtreme Scale には、ObjectGrid 記述子 XML ファイル内で eXtreme Scale プラグインとして識別されたサービスを追跡する OSGi ServiceTrackerCustomizer が組み込まれています。 **xscmd** ユーティリティーを使用すると、プラグインのどのバージョンが使用されているか、どのようなバージョンが使用可能かを確認でき、バンドル・アップグレードも実行できます。

eXtreme Scale はサービス・ランキング番号を使用して、各サービスのバージョンを識別します。参照先が同じサービスが 2 つ以上ロードされると、eXtreme Scale は、ランキングが最も高いサービスを自動的に使用します。

手順

- **osgiCurrent** コマンドを実行して、各 eXtreme Scale サーバーが正しいサービス・ランキングのプラグインを使用していることを確認します。

  eXtreme Scale はランキングが最も高いサービス参照を自動的に選択するため、複数ランキングのプラグイン・サービスが設定されたデータ・グリッドが開始される可能性があります。

コマンドがランキングの不一致を検出するか、サービスを検出できない場合は、ゼロ以外のエラー・レベルが設定されます。コマンドが正常に完了した場合、エラー・レベルは 0 に設定されます。

次の例は、4 つのサーバーの同一グリッドに 2 つのプラグインがインストールされている場合の **osgiCurrent** コマンドの出力を示します。 loaderPlugin プラグインはランキング 1 を使用し、txCallbackPlugin プラグインはランキング 2 を使用しています。

```
OSGi Service Name Current Ranking ObjectGrid Name MapSet Name Server Name
----------------- --------------- --------------- ----------- -----------
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server1
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server2
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server3
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server4
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server1
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server2
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server3
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server4
```

次の例は、新しいランキングの loaderPlugin が設定された server2 を開始した場合の **osgiCurrent** コマンドの出力を示します。

```
OSGi Service Name Current Ranking ObjectGrid Name MapSet Name Server Name
----------------- --------------- --------------- ----------- -----------
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server1
loaderPlugin      2               MyGrid          MapSetA     server2
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server3
loaderPlugin      1               MyGrid          MapSetA     server4
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server1
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server2
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server3
txCallbackPlugin  2               MyGrid          MapSetA     server4
```

- **osgiAll** コマンドを実行して、各 eXtreme Scale コンテナー・サーバーで正しいプラグイン・サービスが開始されたことを確認します。

  ObjectGrid 構成が参照しているサービスを含んでいるバンドルが開始すると、eXtreme Scale ランタイム環境はプラグインを自動的に追跡します。ただし、すぐには使用しません。**osgiAll** コマンドは、各サーバーで使用可能なプラグインを表示します。

  パラメーターを指定せずに実行すると、すべてのグリッドおよびサーバーのすべてのサービスが表示されます。追加のフィルター (**-serviceName** <service_name> フィルターなど) を指定して、単一サービスやデータ・グリッドのサブセットなどに出力を制限できます。

  次の例は、2 つのサーバーで 2 つのプラグインが開始された場合の **osgiAll** コマンドの出力を示します。loaderPlugin はランキング 1 と 2 の両方が開始済みで、txCallbackPlugin はランキング 1 が開始済みです。出力の最後にあるサマリー・メッセージから、両方のサーバーが同じサービス・ランキングを認識していることを確認できます。

```
Server: server1
   OSGi Service Name   Available Rankings
   -----------------   ------------------
   loaderPlugin        1, 2
   txCallbackPlugin    1

Server: server2
```

```
   OSGi Service Name   Available Rankings
   -----------------   ------------------
   loaderPlugin        1, 2
   txCallbackPlugin    1

Summary - All servers have the same service rankings.
```

次の例は、server1 でランキング 1 の loaderPlugin を含んでいるバンドルが停止した場合の **osgiAll** コマンドの出力を示します。出力の下部にあるサマリー・メッセージから、現在 server1 にはランキング 1 の loaderPlugin がないことを確認できます。

```
Server: server1
   OSGi Service Name   Available Rankings
   -----------------   ------------------
   loaderPlugin        2
   txCallbackPlugin    1

Server: server2
   OSGi Service Name   Available Rankings
   -----------------   ------------------
   loaderPlugin        1, 2
   txCallbackPlugin    1

Summary - The following servers are missing service rankings:
   Server  OSGi Service Name Missing Rankings
   ------  ----------------- ----------------
   server1 loaderPlugin      1
```

次の例は、**-sn** 引数を使用してサービス名が指定されたときに、そのサービスが存在しない場合の出力を示します。

```
Server: server2
   OSGi Service Name Available Rankings
   ----------------- ------------------
   invalidPlugin     No service found

Server: server1
   OSGi Service Name Available Rankings
   ----------------- ------------------
   invalidPlugin     No service found

Summary - All servers have the same service rankings.
```

- **osgiCheck** コマンドを実行して、プラグイン・サービスとランキングのセットをチェックし、それらが使用可能かどうか確認します。

  osgiCheck コマンドは、-serviceRankings <service name>;<ranking>[,<serviceName>;<ranking>] の形式で、サービス・ランキングのセットを 1 つ以上受け入れます。

  ランキングがすべて使用可能な場合、メソッドはエラー・レベル 0 を返します。使用不可のランキングが 1 つ以上ある場合は、ゼロ以外のエラー・レベルが設定されます。指定されたサービス・ランキングを含んでいないすべてのサーバーの表が表示されます。追加フィルターを使用して、eXtreme Scale ドメイン内の使用可能なサーバーのサブセットにサービス・チェックを制限できます。

  例えば、指定されたランキングまたはサービスがない場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Server  OSGi Service Unavailable Rankings
------  ------------ --------------------
server1 loaderPlugin 3
server2 loaderPlugin 3
```

- **osgiUpdate** コマンドを実行して、単一 ObjectGrid および MapSet 内のすべてのサーバーを対象に 1 つ以上のプラグインのランキングを 1 回の操作で更新します。

  コマンドは、-serviceRankings <service name>;<ranking>[,<serviceName>;<ranking>] -g <grid name> -ms <mapset name> の形式で、サービス・ランキングのセットを 1 つ以上受け入れます。

  このコマンドでは、以下の操作を実行できます。
  - 指定されたサービスが各サーバーで更新のために使用可能なことを確認する。
  - StateManager インターフェースを使用してグリッドの状態をオフラインに変更する。詳しくは、ObjectGrid の可用性の管理を参照してください。このプロセスはグリッドを静止し、実行中のトランザクションがすべて完了するまで待機し、新規トランザクションを開始できないようにします。またこのプロセスは、トランザクション・アクティビティーを停止するように ObjectGridLifecycleListener プラグインと BackingMapLifecycleListener プラグインにシグナル通知します。イベント・リスナー・プラグインの詳細については、623 ページの『イベント・リスナーの指定のためのプラグイン』を参照してください。
  - 新しいサービス・バージョンを使用するように OSGi フレームワーク内で実行中の各 eXtreme Scale コンテナーを更新する。
  - グリッドの状態をオンラインに変更し、トランザクションを継続できるようにする。

  更新処理はべき等のプロセスであるため、クライアントがいずれかのタスクを完了できない場合は、操作がロールバックされることになります。クライアントがロールバックを実行できない場合またはクライアントが更新処理中に中断された場合は、同じコマンドを再実行でき、クライアントは適切なステップから続行します。

  クライアントがプロセスを続行できず、別のクライアントからプロセスが再始動された場合、-force オプションを使用すると、クライアントが更新を実行できるようになります。**osgiUpdate** コマンドは、複数のクライアントが同一マップ・セットを同時に更新しないようにします。**osgiUpdate** コマンドの詳細については、**xscmd** による eXtreme Scale プラグインの OSGi サービスの更新を参照してください。

OSGi Blueprint でのサーバーの構成

Java

OSGi Blueprint XML ファイルを使用して WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバーを構成できます。この方法によりパッケージ化が簡単になるほか、自己完結型サーバー・バンドルの作成が可能になります。

始める前に

このトピックは、以下のタスクが完了していることを前提としています。

- Eclipse Gemini または Apache Aries の Blueprint コンテナーを使用する Eclipse Equinox OSGi フレームワークをインストールし、開始していること。
- eXtreme Scale サーバー・バンドルをインストールし、開始していること。
- eXtreme Scale 動的プラグイン・バンドルの作成が完了していること。
- eXtreme Scale ObjectGrid 記述子 XML ファイルとデプロイメント・ポリシー XML ファイルの作成が完了していること。

このタスクについて

このタスクでは、Blueprint XML ファイルを使用して eXtreme Scale サーバーとコンテナーを構成する方法を説明します。この手順の結果として、コンテナー・バンドルが作成されます。コンテナー・バンドルが開始されると、eXtreme Scale サーバー・バンドルはそのバンドルを追跡し、サーバー XML を解析し、サーバーとコンテナーを開始します。

コンテナー・バンドルは、動的プラグイン更新が必要でない場合またはプラグインが動的更新をサポートしない場合に、オプションでアプリケーションおよび eXtreme Scale プラグインと結合できます。

手順

1. `objectgrid` 名前空間が組み込まれた Blueprint XML ファイルを作成します。ファイルには任意の名前を付けることができます。ただし、blueprint 名前空間を含める必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<blueprint xmlns="http://www.osgi.org/xmlns/blueprint/v1.0.0"
           xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance
           xmlns:objectgrid="http://www.ibm.com/schema/objectgrid"
           xsi:schemaLocation="http://www.ibm.com/schema/objectgrid
                http://www.ibm.com/schema/objectgrid/objectgrid.xsd">
...
</blueprint>
```

2. 適切なサーバー・プロパティーを使用して eXtreme Scale サーバーの XML 定義を追加します。 すべての使用可能な構成プロパティーの詳細については、Spring 記述子 XML ファイルを参照してください。次の XML 定義の例を参照してください。

```
<objectgrid:server id="xsServer" tracespec="ObjectGridOSGi=all=enabled"
tracefile="logs/osgi/wxsserver/trace.log" jmxport="1199" listenerPort="2909">
<objectgrid:catalog host="catserver1.mycompany.com" port="2809" />
<objectgrid:catalog host="catserver2.mycompany.com" port="2809" />
</objectgrid:server>
```

3. サーバー定義への参照と、バンドルに組み込まれている ObjectGrid 記述子 XML ファイルと ObjectGrid デプロイメント XML ファイルを使用して eXtreme Scale コンテナーの XML 定義を追加します。例えば、次のようにします。

```
<objectgrid:container id="container"
    objectgridxml="/META-INF/objectGrid.xml"
    deploymentxml="/META-INF/objectGridDeployment.xml"
    server="xsServer" />
```

4. Blueprint XML ファイルをコンテナー・バンドル内に保管します。 Blueprint XML は OSGI-INF/blueprint ディレクトリー内に保管し、Blueprint コンテナーが検出されるようにしなければなりません。

   Blueprint XML を他のディレクトリーに保管するには、Bundle-Blueprint マニフェスト・ヘッダーを指定する必要があります。例えば、次のようにします。

   ```
   Bundle-Blueprint: OSGI-INF/blueprint.xml
   ```

5. ファイルを単一バンドル JAR ファイルにパッケージ化します。 次のバンドル・ディレクトリー階層の例を参照してください。

   ```
   MyBundle.jar
       /META-INF/manifest.mf
       /META-INF/objectGrid.xml
       /META-INF/objectGridDeployment.xml
       /OSGI-INF/blueprint/blueprint.xml
   ```

タスクの結果

これで eXtreme Scale コンテナー・バンドルが作成されたので、Eclipse Equinox にインストールできます。コンテナー・バンドルが開始されると、eXtreme Scale サーバー・バンドル内の eXtreme Scale サーバー・ランタイム環境が、バンドルに定義されているパラメーターを使用して singleton eXtreme Scale サーバーを自動的に開始し、コンテナー・サーバーも開始します。バンドルは停止したり開始したりでき、それを受けてコンテナーも停止または開始されます。サーバーは singleton であり、バンドルがはじめて開始されたときは停止しません。

シナリオ: JCA を使用した eXtreme Scale クライアントへのトランザクション・アプリケーションの接続

次のシナリオは、トランザクションに関与するアプリケーションへのクライアントの接続に関するものです。

始める前に

Java EE アプリケーションにおけるトランザクション処理の概要トピックを読んで、トランザクション・サポートについての理解を深めてください。

このタスクについて

Java EE Connector Architecture (JCA) は、Java Transaction API (JTA) を使用するクライアントに対するサポートを提供します。 JTA を通じて、クライアント管理は Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) を使用して単純化され、遂行されます。JCA 仕様は、アプリケーションを eXtreme Scale クライアントに接続するために使用できるリソース・アダプターもサポートします。リソース・アダプターは、Java アプリケーションがエンタープライズ情報システム (EIS) への接続に使用する、システム・レベルのソフトウェア・ドライバーです。リソース・アダプターは、アプリケーション・サーバーにプラグインし、 EIS、アプリケーション・サーバー、およびエンタープライズ・アプリケーションとの間の接続を提供します。WebSphere eXtreme Scale は独自のリソース・アダプターを備えています。このリソース・アダプターは、構成を必要とせずにインストールすることができます。

以前の製品バージョンの場合と同様、トランザクションを使用して、データ・グリッドに対する単一の作業単位を処理することができます。 JCA のサポートがあるため、トランザクションをコミットするとき、そのトランザクション用のリソースを 1 フェーズ・コミットに登録することができます。これには以下の利点があります。

- eXtreme Scale アプリケーション開発を簡素化します。以前は、エンタープライズ Bean、サーブレット、Web コンテナーなどのリソースを使用して開発者が eXtreme Scale トランザクションを調整していました。ロールバック・メカニズムがなかったために、開発者には失敗をリカバリーするための簡単な手段がありませんでした。
- WebSphere Application Server との統合がより緊密です。必要な場合、WebSphere Application Server にはグローバル・トランザクションに登録するための最終参加者サポートが用意されています。

シナリオの目標

このシナリオを完了すると、以下の目標を達成する方法が分かります。

- Java Transaction API (JTA) サポートを活用して、トランザクションを使用するアプリケーション・コンポーネントを開発します。
- アプリケーションを eXtreme Scale クライアントに接続します。

Java EE アプリケーションにおけるトランザクション処理

WebSphere eXtreme Scale は独自のリソース・アダプターを備えています。このリソース・アダプターを使用して、アプリケーションをデータ・グリッドに接続し、ローカル・トランザクションを処理することができます。

eXtreme Scale リソース・アダプターによるサポートのため、Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーションは、Java EE ローカル・トランザクションや eXtreme Scale の API を使用して、eXtreme Scale のクライアント接続を調べたり、ローカル・トランザクションを区分したりすることができます。リソース・アダプターが構成されると、Java EE アプリケーションを使用して以下のアクションを実行できます。

- Java EE アプリケーション・コンポーネント内で eXtreme Scale のリソース・アダプター接続ファクトリーを検索したり注入したりする。
- eXtreme Scale クライアントへの標準接続ハンドルを取得し、Java EE 規則を使用してアプリケーション・コンポーネント間でそれらの接続ハンドルを共有する。
- javax.resource.cci.LocalTransaction API または com.ibm.websphere.objectgrid.Session インターフェースのいずれかを使用して eXtreme Scale トランザクションを区分する。
- eXtreme Scale クライアント API 全体 (ObjectMap API や EntityManager API など) を使用する。

以下の追加機能は、WebSphere Application Server で使用可能なものです。

- 最終参加者としてグローバル・トランザクションとの eXtreme Scale 接続を他の 2 フェーズ・コミット・リソースに登録する。 eXtreme Scale リソース・アダプターは、単一フェーズ・コミット・リソースと一緒にローカル・トランザクション・サポートを提供します。 WebSphere Application Server により、アプリケー

ションは、最終参加者サポートを通じて 1 つの単一フェーズ・コミット・リソースをグローバル・トランザクションに登録することができます。
- プロファイルが拡張されたときのリソース・アダプターの自動インストール。
- セキュリティー・プリンシパルの自動伝搬。

管理者の責任

eXtreme Scale リソース・アダプターは、Java EE アプリケーション・サーバーにインストールされるか、またはアプリケーションに組み込まれます。リソース・アダプターをインストールした後、管理者は各カタログ・サービス・ドメインおよび各データ・グリッド・インスタンス (後者はオプション) に対して 1 つ以上のリソース・アダプター接続ファクトリーを作成します。接続ファクトリーはデータ・グリッドとの通信に必要なプロパティーを識別します。

アプリケーションが接続ファクトリーを参照し、接続ファクトリーがリモート・データ・グリッドへの接続を確立します。各接続ファクトリーは単一の eXtreme Scale クライアント接続をホストし、この接続がすべてのアプリケーション・コンポーネントに対して再利用されます。

重要: eXtreme Scale クライアント接続にはニア・キャッシュが含まれることがあるため、アプリケーションは接続を共有してはなりません。アプリケーション間でオブジェクトを共有する問題を回避するためには、単一のアプリケーション・インスタンスに対して 1 つの接続ファクトリーが存在する必要があります。

接続ファクトリーは、すべての参照アプリケーション・コンポーネント間で共有される eXtreme Scale クライアント接続をホストします。Managed Bean (MBean) を使用して、クライアント接続に関する情報にアクセスしたり、不要になった接続をリセットしたりすることができます。

アプリケーション開発者の責任

アプリケーション開発者は、アプリケーション・デプロイメント記述子の中に、あるいはアノテーションを使用して、管理接続ファクトリーのリソース参照を作成します。各リソース参照には、eXtreme Scale 接続ファクトリーのローカル参照とリソース共有スコープが含まれます。

重要: リソース共有によりアプリケーション・コンポーネント間でのローカル・トランザクションの共有が可能となるため、リソース共有を有効にすることが重要です。

アプリケーションは、接続ファクトリーを Java EE アプリケーション・コンポーネントに注入することもできれば、Java Naming Directory Interface (JNDI) を使用して接続ファクトリーを検索することもできます。接続ファクトリーは、eXtreme Scale クライアント接続への接続ハンドルを取得するために使用されます。 eXtreme Scale クライアント接続は、リソース・アダプター接続とは別に管理されるもので、最初に使用されたときに確立され、その後のすべての接続で再利用されます。

アプリケーションは、接続を検出した後、eXtreme Scale セッション参照を検索します。 eXtreme Scale セッション参照により、アプリケーションは eXtreme Scale クライアント API およびフィーチャーの全体を使用することができます。

以下のいずれかの方法で、トランザクションを区分できます。

- com.ibm.websphere.objectgrid.Session トランザクション区分メソッドを使用する。
- javax.resource.cci.LocalTransaction ローカル・トランザクションを使用する。
- 最終参加者サポートが有効な状態で WebSphere Application Server を使用するときに、グローバル・トランザクションを使用する。この区分方法を選択したときには次のようにする必要があります。
  - アプリケーション管理グローバル・トランザクションを javax.transaction.UserTransaction と一緒に使用する。
  - コンテナー管理トランザクションを使用する。

アプリケーション・デプロイヤーの責任

アプリケーション・デプロイヤーは、アプリケーション開発者が定義するリソース・アダプター接続ファクトリーへのローカル参照を、管理者が定義するリソース・アダプター接続ファクトリーにバインドします。アプリケーション・デプロイヤーは、適切な接続ファクトリーのタイプとスコープをアプリケーションに割り当てるとともに、Java オブジェクトの共有を回避するためにアプリケーション間で接続ファクトリーが共有されないようにする必要があります。アプリケーション・デプロイヤーはまた、すべての接続ファクトリーに共通する他の適切な構成情報の構成とマッピングも行う必要があります。

関連情報:

共有不可能接続および共有可能接続

接続ハンドル

トランザクション・タイプおよび接続の振る舞い

WebSphere Application Server でのトランザクション・サポート

グローバル・トランザクション

ローカル・トランザクション内包

ローカル・トランザクションおよびグローバル・トランザクション

eXtreme Scale リソース・アダプターのインストール

WebSphere eXtreme Scale リソース・アダプターは Java Connector Architecture(JCA) 1.5 互換であり、Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) 1.5 1.6 以降、または WebSphere Application Server などのアプリケーション・サーバーにインストールできます。

始める前に

このリソース・アダプターは、eXtreme Scale のすべてのインストールで使用可能な `wxsra.rar` リソース・アダプター・アーカイブ (RAR) ファイルに入っています。RAR ファイルは次のディレクトリーにあります。

- WebSphere Application Server インストールの場合: *wxs_install_root*/`optionalLibraries/ObjectGrid`

- スタンドアロン・インストールの場合: *wxs_install_root*/ObjectGrid/lib directory

リソース・アダプターは、eXtreme Scale ランタイム環境に結合されています。eXtreme Scale ランタイム JAR ファイルが正しいクラスパスにあることが必要です。一般に、リソース・アダプターを更新せずに、eXtreme Scale ランタイム環境をアップグレードできます。eXtreme Scale ランタイム環境をアップグレードすると、リソース・アダプターのランタイム環境もアップグレードされます。リソース・アダプターは、eXtreme Scale ランタイム環境のバージョン 8.5 と、その後の最大 2 つのバージョンをサポートします。リソース・アダプターのバージョンを新しくした場合は、eXtreme Scale ランタイム環境の新しいバージョンが使用可能になったときに、その新しいバージョンにしなければならないことがあります。

wxsra.rar ファイルが作動するためには、eXtreme Scale クライアント・ランタイム JAR ファイルの 1 つが必要です。どのクライアント・ランタイム JAR ファイルが適切であるかについて詳しくは、WebSphere eXtreme Scale スタンドアロン・インストール用のランタイム・ファイルおよび WebSphere Application Server と統合された WebSphere eXtreme Scale 用のランタイム・ファイルを参照してください。これらのトピックには、使用可能なランタイム JAR ファイルに関する詳細情報が含まれています。

このタスクについて

eXtreme Scale リソース・アダプターをインストールする際には、柔軟なデプロイメント・シナリオを考慮した、いくつかのオプションを使用することができます。リソース・アダプターは、Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーションに組み込むこともできれば、アプリケーション間で共有されるスタンドアロン RAR ファイルとしてインストールすることもできます。

リソース・アダプターをアプリケーションに組み込むようにすると、接続ファクトリーがアプリケーションのスコープ内にのみ作成され、アプリケーション間で共有できなくなるため、デプロイメントが単純化されます。リソース・アダプターをアプリケーションに組み込むことによって、キャッシュ・オブジェクトや ObjectGrid クライアント・プラグイン・クラスもアプリケーション内に組み込むことができます。また、リソース・アダプターの組み込みはアプリケーション間で誤ってキャッシュ・オブジェクトを共有することを防いでくれます。アプリケーション間でキャッシュ・オブジェクトが共有されると java.lang.ClassCastException 例外が発生することがあります。

wxsra.rar ファイルをスタンドアロン・リソース・アダプターとしてインストールすることで、ノード・スコープにリソース・マネージャー接続ファクトリーを作成できます。このオプションは以下の状況で役に立ちます。

- wxsra.rar ファイルをアプリケーション内に組み込むことが実用的でないとき
- ビルド時に eXtreme Scale のバージョンが不明であるとき
- eXtreme Scale クライアント接続を複数のアプリケーションと共有したいとき

重要: WebSphere Application Server の複数のバージョン (バージョン 8.0.2 まで) では、eXtreme Scale リソース・アダプターをアプリケーション EAR ファイルとスタンドアロン・サーバーに同時にインストールすることはできません。そのため、

RAR ファイルもインストールされているエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルを使用すると、アプリケーションで `ClassCastException: com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionFactory incompatible with com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionFactory` などの例外が発生します。サーブレットでこの例外が発生すると、次の例のような WebSphere Application Server メッセージと、このエラーの呼び出しスタックが表示されます。

```
SRVE0068E: An exception was thrown by one of the service methods of the servlet [ClientServlet]
in application [JTASampleClientEAR]. Exception created : [java.lang.ClassCastException:
com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionFactory incompatible with com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionFactory
at com.ibm.websphere.xs.sample.jtasample.WXSClientServlet.connectClient(WXSClientServlet.java:484)
at com.ibm.websphere.xs.sample.jtasample.WXSClientServlet.doGet(WXSClientServlet.java:200)
at javax.servlet.http.HttpServlet.service(HttpServlet.java:575)
at javax.servlet.http.HttpServlet.service(HttpServlet.java:668)
at com.ibm.ws.webcontainer.servlet.ServletWrapper.service(ServletWrapper.java:1214)
at com.ibm.ws.webcontainer.servlet.ServletWrapper.handleRequest(ServletWrapper.java:774)
at com.ibm.ws.webcontainer.servlet.ServletWrapper.handleRequest(ServletWrapper.java:456)
```

手順

- **組み込まれた eXtreme Scale リソース・アダプターをインストールします。** `wxsra.rar` ファイルがアプリケーションの EAR ファイルに組み込まれたときは、リソース・アダプターが eXtreme Scale ランタイム・ライブラリーにアクセスできるようにする必要があります。

  WebSphere Application Server で実行されるアプリケーションの場合は、以下の選択とその結果としてのアクションが有効です。

オプション	説明
eXtreme Scale が WebSphere Application Server ノードに統合されている場合	ランタイム・ライブラリー・ファイルは既にシステム・クラスパス内で使用可能であり、その他のアクションは不要です。
eXtreme Scale が WebSphere Application Server ノードに統合されていない場合	`wsogclient.jar` ファイルを `wxsra.rar` クラスパスに組み込む必要があります。

  WebSphere Application Server で実行されないアプリケーションの場合は、クライアント・ランタイム・ライブラリー・ファイル `ogclient.jar` またはサーバー・ランタイム・ライブラリー・ファイル `objectgrid.jar` が RAR ファイルのクラスパスになければなりません。

- **スタンドアロン eXtreme Scale リソース・アダプターをインストールします。** `wxsra.rar` ファイルをスタンドアロン・リソース・アダプターとしてインストールしたときには、このファイルが eXtreme Scale ランタイム・ライブラリーにアクセスできるようにする必要があります。

  WebSphere Application Server で実行されるアプリケーションの場合は、以下の選択とその結果としてのアクションが有効です。

オプション	説明
eXtreme Scale が WebSphere Application Server ノードに統合されている場合	ランタイム・ライブラリー・ファイルは既にシステム・クラスパス内で使用可能であり、その他のアクションは不要です。
eXtreme Scale が WebSphere Application Server ノードに統合されていない場合	`wsogclient.jar` ファイルを `wxsra.rar` クラスパスに組み込む必要があります。

WebSphere Application Server で実行されないアプリケーションの場合は、クライアント・ランタイム・ライブラリー・ファイル ogclient.jar またはサーバー・ランタイム・ライブラリー・ファイル objectgrid.jar が RAR ファイルのクラスパスになければなりません。

1. リソース・アダプターがどの共有クラスにもアクセスできるようにします。すべての ObjectGrid プラグイン・クラスとそれらを使用するアプリケーションがクラス・ローダーを共有する必要があります。リソース・アダプターは複数のアプリケーションで共有されるため、同じクラス・ローダーですべてのクラスにアクセスできるようにする必要があります。このアクセスを可能にするには、リソース・アダプターと対話するすべてのアプリケーションが 1 つの共有ライブラリーを使用するようにします。

次のタスク

eXtreme Scale リソース・アダプターをインストールしたので、接続ファクトリーを構成して、Java EE アプリケーションがリモート eXtreme Scale データ・グリッドに接続できるようにすることができます。

関連情報:

リソース・アダプター・アーカイブのインストール

アプリケーション内に埋め込まれたリソース・アダプターのインストール

リソース・アダプター・コレクション

eXtreme Scale 接続ファクトリーの構成

Java

eXtreme Scale 接続ファクトリーは、Java EE アプリケーションがリモート WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドに接続できるようにします。カスタム・プロパティーを使用してリソース・アダプターを構成してください。

始める前に

接続ファクトリーを作成する前に、リソース・アダプターをインストールする必要があります。

このタスクについて

リソース・アダプターをインストールした後、リモート・データ・グリッドへの eXtreme Scale クライアント接続を表す 1 つ以上のリソース・アダプター接続ファクトリーを作成することができます。以下のステップを実行して、リソース・アダプター接続ファクトリーを構成し、アプリケーション内でこれを使用するようにします。

スタンドアロン・リソース・アダプターの場合はノード・スコープに、組み込みリソース・アダプターの場合はアプリケーション内に、eXtreme Scale 接続ファクトリーを作成することができます。 WebSphere Application Server 内に接続ファクトリーを作成する方法については、関連トピックを参照してください。

手順

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、eXtreme Scale クライアント接続を表す eXtreme Scale 接続ファクトリーを作成します。 「管理コンソールにおける Java EE コネクター接続ファクトリーの構成」を参照してください。「一般プロパティー」パネルで接続ファクトリーのプロパティーを指定した後、「**適用**」をクリックして、「カスタム・プロパティー」リンクをアクティブにする必要があります。
2. 管理コンソールの「**カスタム・プロパティー**」をクリックします。 以下のカスタム・プロパティーを設定して、リモート・データ・グリッドへのクライアント接続を構成します。

表 2. 接続ファクトリーを構成するためのカスタム・プロパティー

プロパティー名	タイプ	説明
ConnectionName	ストリング	(オプション) eXtreme Scale クライアント接続の名前。 ConnectionName は、Managed Bean として公開されたとき、接続を識別するのに役立ちます。このプロパティーはオプションです。ConnectionName は、指定されないと未定義になります。
CatalogServiceEndpoints	ストリング	(オプション) カタログ・サービス・ドメインのエンドポイントで、形式は次のとおりです。`<host>:<port>[,<host><port>]`。詳しくは、カタログ・サービス・ドメイン設定を参照してください。 このプロパティーは、カタログ・サービス・ドメインが設定されない場合に必須となります。
CatalogServiceDomain	ストリング	(オプション) WebSphere Application Server で定義されるカタログ・サービス・ドメイン名。詳しくは、カタログ・サーバーおよびカタログ・サービス・ドメインの構成を参照してください。 このプロパティーは、CatalogServiceEndpoints プロパティーが設定されない場合に必須となります。
ObjectGridName	ストリング	(オプション) この接続ファクトリーの接続先であるデータ・グリッドの名前。このプロパティーが指定されない場合は、アプリケーションが、接続ファクトリーから接続を取得するときに、名前を提供する必要があります。
ObjectGridURL	ストリング	(オプション) クライアント・データ・グリッド・オーバーライド XML ファイルの URL。このプロパティーは、同時に ObjectGridResource が指定された場合には無効となります。詳しくは、クライアントの構成を参照してください。
ObjectGridResource	ストリング	クライアント・データ・グリッド・オーバーライド XML ファイルのリソース・パス。このプロパティーはオプションであり、同時に ObjectGridURL が指定された場合は無効となります。詳しくは、クライアントの構成を参照してください。
ClientPropertiesURL	ストリング	(オプション) クライアント・プロパティー・ファイルの URL。このプロパティーは、同時に ClientPropertiesResource が指定された場合には無効となります。詳しくは、クライアント・プロパティー・ファイルを参照してください。
ClientPropertiesResource	ストリング	(オプション) クライアント・プロパティー・ファイルのリソース・パス。このプロパティーは、同時に ClientPropertiesURL が指定された場合には無効となります。詳しくは、クライアント・プロパティー・ファイルを参照してください。

WebSphere Application Server では、接続プールを調整したりセキュリティーを管理したりする、その他の構成オプションを使用することもできます。
WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピックへのリンクについては、関連情報を参照してください。

次のタスク

アプリケーション内に eXtreme Scale 接続ファクトリー参照を作成します。詳しくは、218 ページの『eXtreme Scale に接続するためのアプリケーションの構成』を参照してください。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

カタログ・サービス・ドメイン設定
このページを使用すると、特定のカタログ・サービス・ドメインの設定を管理できます。カタログ・サービス・ドメインは、断片の配置を管理し、データ・グリッド内のコンテナー・サーバーのヘルスをモニターするカタログ・サーバーのグループを定義します。デプロイメント・マネージャーと同じセルにあるカタログ・サービス・ドメインを定義できます。WebSphere eXtreme Scale 構成が異なるセルにある場合、またはデータ・グリッドが Java SE プロセスから構成される場合は、リモート・カタログ・サービス・ドメインも定義できます。

アプリケーション内のリソース・アダプターの接続ファクトリーの構成

管理コンソールにおける Java EE コネクター接続ファクトリーの構成

wsadmin スクリプトを使用した新規 J2C 接続ファクトリーの構成

J2C 接続ファクトリー・コレクション

接続ファクトリー JNDI 名のヒント

eXtreme Scale 接続ファクトリーを使用するための Eclipse 環境の構成

Java

eXtreme Scale リソース・アダプターには、カスタム接続ファクトリーが含まれています。これらのインターフェースを eXtreme Scale Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーションで使用するためには、`wxsra.rar` ファイルをワークスペースにインポートし、それをアプリケーション・プロジェクトにリンクする必要があります。

始める前に

- Rational® Application Developer バージョン 7 以降または Eclipse Java EE IDE for Web Developers バージョン 1.4 以降をインストールする必要があります。
- サーバー・ランタイム環境を構成する必要があります。

手順

1. `wxsra.rar` ファイルをプロジェクトにインポートします。そのためには、「**ファイル**」 > 「**インポート**」を選択します。 「インポート」ウィンドウが表示されます。
2. 「**Java EE**」 > 「**RAR ファイル**」を選択します。 「コネクター・インポート」ウィンドウが表示されます。
3. コネクター・ファイルを指定するには、「**参照**」をクリックして、`wxsra.rar` ファイルを見つけます。 リソース・アダプターをインストールすると、`wxsra.rar`

ファイルがインストールされています。リソース・アダプター・アーカイブ (RAR) ファイルは次のロケーションにあります。

- WebSphere Application Server インストールの場合: *wxs_install_root*/optionalLibraries/ObjectGrid
- スタンドアロン・インストールの場合: *wxs_install_root*/ObjectGrid/lib directory

4. 新しいコネクター・プロジェクトの名前を「**コネクター・プロジェクト**」フィールドに作成します。デフォルト名の wxsra を使用することができます。
5. Java EE サーバー・ランタイム環境を参照するターゲット・ランタイムを選択します。
6. オプションで、「**プロジェクトを EAR に追加**」を選択し、RAR を既存の EAR プロジェクトに組み込みます。

タスクの結果

これで、RAR ファイルが Eclipse ワークスペースにインポートされます。

次のタスク

次のステップを使用して、他の Java EE プロジェクトから RAR プロジェクトを参照することができます。

1. プロジェクトを右クリックして、「**プロパティー**」をクリックします。
2. 「**Java ビルド・パス**」を選択します。
3. 「プロジェクト」タブを選択します。
4. 「**追加**」をクリックします。
5. **wxsra** コネクター・プロジェクトを選択して、「**OK**」をクリックします。
6. 再び「**OK**」をクリックして、「プロパティー」ウィンドウを閉じます。

これで、eXtreme Scale リソース・アダプター・クラスがクラスパスに存在するようになりました。Eclipse コンソールを使用して製品ランタイム JAR ファイルをインストールするための詳細は、373 ページの『Eclipse でのスタンドアロン開発環境のセットアップ』を参照してください。

eXtreme Scale に接続するためのアプリケーションの構成

アプリケーションは、eXtreme Scale 接続ファクトリーを使用して、eXtreme Scale クライアント接続への接続ハンドルを作成します。このタスクを使用して、リソース・アダプター接続ファクトリー参照を構成できます。

始める前に

Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・コンポーネント (Enterprise JavaBeans (EJB) コンテナーまたはサーブレットなど) を作成します。

手順

アプリケーション・コンポーネントに javax.resource.cci.ConnectionFactory リソース参照を作成します。 リソース参照は、アプリケーション・プロバイダーによりデプロイメント記述子で宣言されます。接続ファクトリーは、カタログ・サービス・ド

メインで使用可能な 1 つ以上の指定されたデータ・グリッドと通信するために使用できる eXtreme Scale クライアント接続を表します。

関連情報:

共有不可能接続および共有可能接続

リソース参照の利点

リソース参照の作成または変更

J2C クライアント接続の保護

Java 2 Connector (J2C) アーキテクチャーを使用して、WebSphere eXtreme Scale クライアントとアプリケーションの間の接続を保護します。

このタスクについて

アプリケーションが接続ファクトリーを参照し、接続ファクトリーがリモート・データ・グリッドへの接続を確立します。各接続ファクトリーは単一の eXtreme Scale クライアント接続をホストし、この接続がすべてのアプリケーション・コンポーネントに対して再利用されます。

重要: eXtreme Scale クライアント接続にはニア・キャッシュが含まれることがあるため、アプリケーションが接続を共有しないことが重要です。アプリケーション間でオブジェクトを共有する問題を回避するためには、単一のアプリケーション・インスタンスに対して 1 つの接続ファクトリーが存在する必要があります。

資格情報生成プログラムは、API を使用するか、クライアント・プロパティー・ファイルの中で設定できます。クライアント・プロパティー・ファイルの中で、securityEnabled プロパティーと credentialGenerator プロパティーが使用されます。以下のコード例は、印刷の都合上、複数行で表示されています。

```
securityEnabled=true
credentialGeneratorClass=com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.
     UserPasswordCredentialGenerator
credentialGeneratorProps=operator XXXXXX
```

クライアント・プロパティー・ファイルの中の資格情報生成プログラムと資格情報は、eXtreme Scale 接続操作と、デフォルトの J2C 資格情報に使用されます。したがって、API で指定された資格情報は、J2C の接続時に、J2C 接続のために使用されます。ただし、J2C 接続時に資格情報が指定されなければ、クライアント・プロパティー・ファイルの中の資格情報生成プログラムが使用されます。

手順

1. J2C 接続が eXtreme Scale クライアントを表す場所のセキュア・アクセスをセットアップします。 ClientPropertiesResource 接続ファクトリー・プロパティーまたは ClientPropertiesURL 接続ファクトリー・プロパティーを使用して、クライアント認証を構成します。

   WebSphere Application Server とともに WebSphere eXtreme Scale を使用する場合は、カタログ・サービス・ドメイン構成でクライアント・プロパティーを指定します。接続ファクトリーはドメインを参照する際に、この構成を自動的に使用します。

2. eXtreme Scale の適切な資格情報生成プログラム・オブジェクトを参照する接続ファクトリーを使用するように、クライアント・セキュリティー・プロパティーを構成します。これらのプロパティーは、eXtreme Scale サーバー・セキュリティーとも互換性があります。 例えば、eXtreme Scale が WebSphere Application Server にインストールされている場合、WebSphere 資格情報には WSTokenCredentialGenerator 資格情報生成プログラムを使用します。あるいは、スタンドアロン環境で eXtreme Scale を実行するときは、UserPasswordCredentialGenerator 資格情報生成プログラムを使用します。次の例では、資格情報は、クライアント・プロパティー内の構成を使用するのではなく、API 呼び出しを使用して、プログラマチックに渡されます。

```
XSConnectionSpec spec = new XSConnectionSpec();
spec.setCredentialGenerator(new UserPasswordCredentialGenerator("operator", "xxxxxx"));
Connection conn = connectionFactory.getConnection(spec);
```

3. (オプション) 必要であれば、ニア・キャッシュを使用不可にします。

   単一の接続ファクトリーからのすべての J2C 接続は、単一のニア・キャッシュを共有します。グリッド・エントリー許可とマップ許可はサーバーで検証されますが、ニア・キャッシュでは検証されません。アプリケーションが J2C 接続を作成するために複数の資格情報を使用し、これらの資格情報に対して、構成が特定のグリッド・エントリー許可およびマップ許可を使用する場合、ニア・キャッシュを使用不可にします。接続ファクトリー・プロパティー ObjectGridResource または ObjectGridURL を使用して、ニア・キャッシュを使用不可にします。ニア・キャッシュを使用不可にする方法について詳しくは、ニア・キャッシュの構成を参照してください。

4. (オプション) 必要であれば、セキュリティー・ポリシー設定を設定します。

   J2EE アプリケーションに組み込みの eXtreme Scale リソース・アダプター・アーカイブ (RAR) ファイル構成が含まれる場合、アプリケーションのセキュリティー・ポリシー・ファイルの中に、追加のセキュリティー・ポリシー設定を設定することが必要な場合もあります。例えば、次のポリシーが必要です。

   ```
   permission com.ibm.websphere.security.WebSphereRuntimePermission "accessRuntimeClasses";
   permission java.lang.RuntimePermission "accessDeclaredMembers";
   permission javax.management.MBeanTrustPermission "register";
   permission java.lang.RuntimePermission "getClassLoader";
   ```

   さらに、接続ファクトリーが使用するすべてのプロパティー・ファイルまたはリソース・ファイルには、ファイルまたは他の許可 (`permission java.io.FilePermission "filePath";` など) が必要です。 WebSphere Application Server の場合、ポリシー・ファイルは `META-INF/was.policy` で、これは J2EE EAR ファイルの中にあります。

タスクの結果

カタログ・サービス・ドメインで構成したクライアント・セキュリティー・プロパティーが、デフォルト値として使用されます。ユーザーが指定する値は、`client.properties` ファイルに定義されているプロパティーをオーバーライドします。

次のタスク

eXtreme Scale データ・アクセス API を使用して、トランザクションに使用するクライアント・コンポーネントを開発します。

トランザクションを使用する eXtreme Scale クライアント・コンポーネントの開発

Java

WebSphere eXtreme Scale リソース・アダプターは、クライアント接続管理およびローカル・トランザクション・サポートを提供します。このサポートによって、Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーションは、Java EE ローカル・トランザクションや eXtreme Scale API を使用して、eXtreme Scale のクライアント接続を調べたり、ローカル・トランザクションを区分したりすることができます。

始める前に

eXtreme Scale 接続ファクトリーのリソース参照を作成してください。

このタスクについて

eXtreme Scale データ・アクセス API を使用した作業に関するオプションがいくつかあります。いずれの場合も、eXtreme Scale 接続ファクトリーをアプリケーション・コンポーネントに注入するか、Java Naming Directory Interface (JNDI) で検索する必要があります。接続ファクトリーが検索された後、トランザクションを区分し、eXtreme Scale API にアクセスするための接続を作成することができます。

オプションで、接続ハンドルを取得するための追加オプションを提供する com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionFactory に javax.resource.cci.ConnectionFactory インスタンスをキャストすることができます。結果の接続ハンドルは、getSession メソッドを提供する com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection インターフェースにキャストする必要があります。 getSession メソッドは com.ibm.websphere.objectgrid.Session オブジェクト・ハンドルを返します。このハンドルにより、アプリケーションが eXtreme Scale データ・アクセス API (ObjectMap API や EntityManager API など) をどれでも使用できるようになります。

Session ハンドルと派生オブジェクトは XSConnection ハンドルが存続している限り有効です。

以下の手順を使用して eXtreme Scale トランザクションを区分することができます。それぞれの手順を混合することはできません。例えば、同じアプリケーション・コンポーネントという状況下でグローバル・トランザクション区分とローカル・トランザクション区分を混用することはできません。

手順

- 自動コミット・ローカル・トランザクションを使用します。 データ・アクセス操作、またはアクティブ・トランザクションをサポートしない操作を自動的にコミットするには、以下のステップに従います。
  1. グローバル・トランザクションのコンテキスト外で com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  2. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得し、このセッションを使用してデータ・グリッドと対話します。
  3. 自動コミット・トランザクションをサポートするデータ・アクセス操作を呼び出します。

4. 接続をクローズします。

- ObjectGrid セッションを使用してローカル・トランザクションを区分します。 Session オブジェクトを使用して ObjectGrid トランザクションを区分するには、以下のステップに従います。
  1. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  2. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得します。
  3. Session.begin() メソッドを使用してトランザクションを開始します。
  4. セッションを使用してデータ・グリッドと対話します。
  5. Session.commit() メソッドまたは rollback() メソッドを使用してトランザクションを終了します。
  6. 接続をクローズします。
- javax.resource.cci.LocalTransction トランザクションを使用してローカル・トランザクションを区分します。 javax.resource.cci.LocalTransaction インターフェースを使用して ObjectGrid トランザクションを区分するには、以下のステップに従います。
  1. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  2. XSConnection.getLocalTransaction() メソッドを使用して javax.resource.cci.LocalTransaction トランザクションを取得します。
  3. LocalTransaction.begin() メソッドを使用してトランザクションを開始します。
  4. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得し、このセッションを使用してデータ・グリッドと対話します。
  5. LocalTransaction.commit() メソッドまたは rollback() メソッドを使用してトランザクションを終了します。
  6. 接続をクローズします。
- 接続をグローバル・トランザクションに登録します。 この手順はコンテナー管理トランザクションにも適用されます。
  1. javax.transaction.UserTransaction インターフェースを介すか、コンテナー管理トランザクションを使用するかして、グローバル・トランザクションを開始します。
  2. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  3. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得して使用します。
  4. 接続をクローズします。
  5. グローバル・トランザクションをコミットまたはロールバックします。
- **8.6+** トランザクションで複数の区画を作成するように接続を構成します。 Session オブジェクトを使用して ObjectGrid トランザクションを区分するには、以下のステップに従います。
  1. 新規 com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionSpec オブジェクトを作成します。
  2. XSConnectionSpec メソッドおよび setMultiPartitionSupportEnabled メソッドを、引数 `true` を指定して呼び出します。
  3. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得して、 XSConnectionSpec を ConnectionFactory.getConnection メソッドに渡します。
  4. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得して使用します。

例

次のコード例を参照してください。このコード例は、eXtreme Scale トランザクションを区分する先行ステップを示しています。

```
// (C) Copyright IBM Corp. 2001, 2012.
// All Rights Reserved. Licensed Materials - Property of IBM.
package com.ibm.ws.xs.ra.test.ee;

import javax.naming.InitialContext;
import javax.resource.cci.Connection;
import javax.resource.cci.ConnectionFactory;
import javax.resource.cci.LocalTransaction;
import javax.transaction.Status;
import javax.transaction.UserTransaction;

import junit.framework.TestCase;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection;

/**
* This sample requires that it runs in a J2EE context in your
* application server. For example, using the JUnitEE framework servlet.
*
* The code in these test methods would typically reside in your own servlet,
* EJB, or other web component.
*
* The sample depends on a configured WebSphere eXtreme Scale connection
* factory registered at of JNDI Name of "eis/embedded/wxscf" that defines
* a connection to a grid containing a Map with the name "Map1".
*
* The sample does a direct lookup of the JNDI name and does not require
* resource injection.
*/
public class DocSampleTests extends TestCase {
    public final static String CF_JNDI_NAME = "eis/embedded/wxscf";
    public final static String MAP_NAME = "Map1";

    Long                key = null;
    Long                value = null;
    InitialContext      ctx = null;
    ConnectionFactory   cf = null;

    public DocSampleTests() {
    }
    public DocSampleTests(String name) {
        super(name);
    }
    protected void setUp() throws Exception {
        ctx = new InitialContext();
        cf = (ConnectionFactory)ctx.lookup(CF_JNDI_NAME);
        key = System.nanoTime();
        value = System.nanoTime();
    }
    /**
     * This example runs when not in the context of a global transaction
     * and uses autocommit.
     */
    public void testLocalAutocommit() throws Exception {
        Connection conn = cf.getConnection();
        try {
            Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
            ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
            map.insert(key, value); // Or various data access operations
        }
        finally {
            conn.close();
        }
    }

    /**
     * This example runs when not in the context of a global transaction
     * and demarcates the transaction using session.begin()/session.commit()
     */
    public void testLocalSessionTransaction() throws Exception {
```

```
    Session    session = null;
    Connection conn = cf.getConnection();
    try {
        session = ((XSConnection)conn).getSession();
        session.begin();
        ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
        map.insert(key, value); // Or various data access operations
        session.commit();
    }
    finally {
        if (session != null && session.isTransactionActive()) {
            try { session.rollback(); }
            catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
        }
        conn.close();
    }
}

/**
 * This example uses the LocalTransaction interface to demarcate
 * transactions.
 */
public void testLocalTranTransaction() throws Exception {
    LocalTransaction tx = null;
    Connection conn = cf.getConnection();
    try {
        tx = conn.getLocalTransaction();
        tx.begin();
        Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
        ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
        map.insert(key, value); // Or various data access operations
        tx.commit(); tx = null;
    }
    finally {
        if (tx != null) {
            try { tx.rollback(); }
            catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
        }
        conn.close();
    }
}

/**
 * This example depends on an externally managed transaction,
 * the externally managed transaction might typically be present in
 * an EJB with its transaction attributes set to REQUIRED or REQUIRES_NEW.
 * NOTE: If there is NO global transaction active, this example runs in auto-commit
 *       mode because it doesn't verify a transaction exists.
 */
public void testGlobalTransactionContainerManaged() throws Exception {
    Connection      conn = cf.getConnection();
    try {
        Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
        ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
        map.insert(key, value); // Or various data access operations
    }
    catch (Throwable t) {
        t.printStackTrace();
        UserTransaction tx = (UserTransaction)ctx.lookup("java:comp/UserTransaction");
        if (tx.getStatus() != Status.STATUS_NO_TRANSACTION) {
            tx.setRollbackOnly();
        }
    }
    finally {
        conn.close();
    }
}

/**
 * This example demonstrates starting a new global transaction using the
 * UserTransaction interface. Typically the container starts the global
 * transaction (for example in an EJB with a transaction attribute of
 * REQUIRES_NEW), but this sample will also start the global transaction
 * using the UserTransaction API if it is not currently active.
 */
public void testGlobalTransactionTestManaged() throws Exception {
    boolean         started = false;
    UserTransaction tx = (UserTransaction)ctx.lookup("java:comp/UserTransaction");
    if (tx.getStatus() == Status.STATUS_NO_TRANSACTION) {
```

```
            tx.begin();
            started = true;
        }
        // else { called with an externally/container managed transaction }
        Connection      conn = null;
        try {
            conn = cf.getConnection(); // Get connection after the global tran starts
            Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
            ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
            map.insert(key, value); // Or various data access operations
            if (started) {
                tx.commit(); started = false; tx = null;
            }
        }
        finally {
            if (started) {
                try { tx.rollback(); }
                catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
            }
            if (conn != null) { conn.close(); }
        }
    }
/**
     /**
     * This example demonstrates a multi-partition transaction.
     */

  public void testGlobalTransactionTestManagedMultiPartition() throws Exception {
    boolean started = false;
    XSConnectionSpec connSpec = new XSConnectionSpec();
    connSpec.setWriteToMultiplePartitions(true);
    UserTransaction tx = (UserTransaction)ctx.lookup("java:comp/UserTransaction");
    if (tx.getStatus() == Status.STATUS_NO_TRANSACTION) {
      tx.begin();
    started = true;
   }
  // else { called with an externally/container managed transaction }
    Connection conn = null;
       try {
    conn = cf.getConnection(connSpec); // Get connection after the global tran starts
    Session session = ((XSConnection)conn).getSession();
    ObjectMap map = session.getMap(MAP_NAME);
    map.insert(key, value); // Or various data access operations
    if (started) {
      tx.commit(); started = false; tx = null;
      }
    }
    finally {
     if (started) {
       try { tx.rollback(); }
       catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
     }
     if (conn != null) { conn.close(); }
    }
   }
```

関連情報:

- リソース参照の利点
- トランザクションを使用するコンポーネントの開発

J2C クライアント接続の管理

Java

WebSphere eXtreme Scale 接続ファクトリーには、アプリケーション間で共有でき、かつアプリケーションの再始動を通じて永続化できる eXtreme Scale クライアント接続が含まれています。

このタスクについて

クライアント接続には、接続状況情報およびライフサイクル管理操作を提供する管理 Bean が含まれています。

手順

クライアント接続を維持します。 XSConnectionFactory 接続ファクトリー・オブジェクトから最初の接続が取得されると、リモート・データ・グリッドへの eXtreme Scale クライアント接続が確立され、ObjectGridJ2CConnection MBean が作成されます。クライアント接続は、プロセスが存続する限り維持されます。クライアント接続を終了するには、次のいずれかのイベントを呼び出します。

- リソース・アダプターを停止する。リソース・アダプターを停止することができます。例えば、リソース・アダプターがアプリケーションに組み込まれ、アプリケーションが停止されたときなどです。
- resetConnection MBean 操作を ObjectGridJ2CConnection MBean で呼び出す。接続がリセットされると、すべての接続が無効にされ、トランザクションが完了し、ObjectGrid クライアント接続が破棄されます。その後、接続ファクトリーで getConnection メソッドが呼び出されると、新しいクライアント接続が確立されます。

WebSphere Application Server は、J2C 接続の管理、接続プールのモニター、およびパフォーマンスのための追加の管理 Bean も提供します。

関連情報:

JCA ライフサイクル管理

オブジェクト・グリッド J2C 接続 MBean API 資料

シナリオ: Liberty プロファイルでの HTTP セッション・フェイルオーバーの構成

Web サーバーがセッション複製の HTTP 要求を受け取った場合に、Liberty プロファイルで実行されている 1 つ以上のサーバーにその要求を転送するように、Web アプリケーション・サーバーを構成できます。

始める前に

このタスクを実行するには、Liberty プロファイル をインストールする必要があります。詳しくは、Liberty プロファイル のインストールを参照してください。

このタスクについて

Liberty プロファイルには、セッション複製は含まれていません。ただし、Liberty プロファイルとともに WebSphere eXtreme Scale を使用した場合は、セッションを複製できます。これにより、サーバーで障害が発生した場合に、アプリケーション・ユーザーのセッション・データは失われません。

サーバー定義に webApp フィーチャー を追加してセッション・マネージャーを構成した後、 Liberty プロファイル内で実行される eXtreme Scale アプリケーションでセッション複製を使用できます。

Liberty プロファイルでの eXtreme Scale Web フィーチャーの使用可能化

Java

Web フィーチャーを使用可能にして、Liberty プロファイルで HTTP セッション・フェイルオーバーを使用できます。

このタスクについて

Web フィーチャーは推奨されません。代わりに webApp フィーチャーを使用してください。 webApp フィーチャーをサーバー定義に追加し、セッション・マネージャーを構成した場合、Liberty プロファイルで実行される WebSphere eXtreme Scale アプリケーションでセッション複製を使用できます。

インストールした WebSphere Application Server Liberty プロファイルには、セッション複製は含まれていません。ただし、Liberty プロファイルとともに WebSphere eXtreme Scale を使用した場合は、セッションを複製できます。これにより、サーバーがダウンした場合に、アプリケーション・ユーザーのセッション・データが失われなくなります。

Web フィーチャーをサーバー定義に追加し、セッション・マネージャーを構成した場合、Liberty プロファイルで実行される eXtreme Scale アプリケーションでセッション複製を使用できます。

手順

Liberty プロファイルで実行する Web アプリケーションを定義します。

次のタスク

次に、Liberty プロファイルで複数のサーバーに HTTP 要求を転送するように Web サーバー・プラグインを構成します。

関連資料:

Liberty プロファイル Web フィーチャー・プロパティー
サーバー定義用の Web フィーチャーを指定して、Web ベース・アプリケーションを特定し、セッション・レプリカ生成などの機能を追加します。

Liberty プロファイル webGrid フィーチャー・プロパティー
webGrid フィーチャーを指定して、HTTP セッション・レプリカ生成のためにクライアントをホストするコンテナーを自動的に開始します。

Liberty プロファイル webApp フィーチャー・プロパティー
webApp フィーチャーを指定して、Liberty プロファイル Web アプリケーションを拡張します。フォールト・トレランスのために HTTP セッション・データを複製するときは、webApp フィーチャーを追加してください。

Liberty プロファイルでの eXtreme Scale webGrid フィーチャーの使用可能化

webGrid フィーチャーを使用して、Liberty プロファイルで HTTP セッション複製用にクライアントをホストするコンテナーを自動的に開始します。

このタスクについて

インストールした WebSphere Application Server Liberty プロファイルには、セッション複製は含まれていません。ただし、Liberty プロファイルとともに WebSphere eXtreme Scale を使用した場合は、セッションを複製できます。これにより、サーバーがダウンした場合に、アプリケーション・ユーザーのセッション・データが失われなくなります。

webGrid フィーチャーをサーバー定義に追加し、セッション・マネージャーを構成した場合、Liberty プロファイルで実行される eXtreme Scale アプリケーションでセッション複製を使用できます。

手順

以下の webGrid フィーチャーを Liberty プロファイル `server.xml` ファイルに追加します。 webGrid フィーチャーには、クライアント・フィーチャーとサーバー・フィーチャーが含まれています。恐らく、Web アプリケーションはデータ・グリッドから分離する必要があります。例えば、Web アプリケーション用に 1 つの Liberty プロファイル サーバーを使用し、データ・グリッドをホストするために別の Liberty プロファイル サーバーを使用します。

```
<featureManager>
<feature>eXtremeScale_webGrid-1.1</feature>
</featureManager>
```

タスクの結果

Web アプリケーションは、WebSphere eXtreme Scale グリッドにセッション・データを永続化できるようになりました。

例

webGrid フィーチャーには、`server.xml` ファイルの xsWebGrid エレメントで設定できるメタ・タイプ・プロパティーが含まれています。 `server.xml` ファイルの以

下の例を参照してください。これには、データ・グリッドにリモート側で接続する場合に使用する webGrid フィーチャーが含まれています。

```
<server description="Airport Entry eXtremeScale Getting Started Client Web Server">
<!--
This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
without royalty payment by customer
(a) for its own instruction and study,
(b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
application, in customer's own products.
Licensed Materials - Property of IBM
5724-X67, 5655-V66 (C) COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2012
-->
<!-- Enable features -->
<featureManager>
<feature>eXtremeScale.webGrid-1.1</feature>
</featureManager>

<xsServer catalogServer="true"/>

<xsWebGrid objectGridName="session" catalogHostPort="remoteHost:2809" securityEnabled="false" />

</server>
```

関連資料:

Liberty プロファイル webGrid フィーチャー・プロパティー
webGrid フィーチャーを指定して、HTTP セッション・レプリカ生成のためにクライアントをホストするコンテナーを自動的に開始します。

Liberty プロファイルでの eXtreme Scale webApp フィーチャーの使用可能化

Liberty プロファイル・サーバーは、フォールト・トレランス用に HTTP セッション・データを複製するためにアプリケーションのデータをキャッシュに入れるデータ・グリッドをホストできます。

このタスクについて

インストールした WebSphere Application Server Liberty プロファイルには、セッション複製は含まれていません。ただし、Liberty プロファイルとともに WebSphere eXtreme Scale を使用した場合は、セッションを複製できます。これにより、サーバーがダウンした場合に、アプリケーション・ユーザーのセッション・データが失われなくなります。

webApp フィーチャーをサーバー定義に追加し、セッション・マネージャーを構成した場合、Liberty プロファイルで実行される eXtreme Scale アプリケーションでセッション複製を使用できます。

手順

以下の webApp フィーチャーを Liberty プロファイル `server.xml` ファイルに追加します。 webApp フィーチャーには、クライアント・フィーチャーが含まれていますが、サーバー・フィーチャーは含まれていません。恐らく、Web アプリケーションはデータ・グリッドから分離する必要があります。例えば、Web アプリケーション用に 1 つの Liberty プロファイル サーバーを使用し、データ・グリッドをホストするために別の Liberty プロファイル サーバーを使用します。

```
<featureManager>
<feature>eXtremeScale_webapp-1.1</feature>
</featureManager>
```

タスクの結果

Web アプリケーションは、WebSphere eXtreme Scale グリッドにセッション・データを永続化できるようになりました。

例

server.xml ファイルの以下の例を参照してください。これには、データ・グリッドにリモート側で接続する場合に使用する webApp フィーチャーが含まれています。

```
<server description="Airport Entry eXtremeScale Getting Started Client Web Server">
<!--
This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
without royalty payment by customer
(a) for its own instruction and study,
(b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
application, in customer's own products.
Licensed Materials - Property of IBM
5724-X67, 5655-V66 (C) COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2012
-->
<!-- Enable features -->
<featureManager>
<feature>eXtremeScale.webapp-1.1</feature>
</featureManager>

<httpEndpoint id="defaultHttpEndpoint"
host="*"
httpPort="${default.http.port}"
httpsPort="${default.https.port}" />

<xsWebApp objectGridName="session" catalogHostPort="remoteHost:2809" securityEnabled="false" />

</server>
```

次のタスク

webApp フィーチャーには、server.xml ファイルの xsWebApp エレメントで設定できるメタ・タイプ・プロパティーが含まれています。詳しくは、Liberty プロファイル webApp フィーチャー・プロパティーを参照してください。

関連資料:

Liberty プロファイル webApp フィーチャー・プロパティー
webApp フィーチャーを指定して、Liberty プロファイル Web アプリケーションを拡張します。フォールト・トレランスのために HTTP セッション・データを複製するときは、webApp フィーチャーを追加してください。

Liberty プロファイルの複数のサーバーに要求を転送するための Web サーバー・プラグインの構成

Java

このタスクを使用して、Liberty プロファイルの複数のサーバーに HTTP サーバー要求を分散するように、Web サーバー・プラグインを構成します。

始める前に

HTTP 要求を複数のサーバーにルーティングするように Web サーバー・プラグインを構成する前に、以下のタスクを完了します。

- 229 ページの『Liberty プロファイルでの eXtreme Scale webApp フィーチャーの使用可能化』

このタスクについて

Web サーバーが動的リソースの HTTP 要求を受け取り、その要求が Liberty プロファイルで実行されている複数のサーバーに転送されるように、Web サーバー・プラグインを構成します。

手順

WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『Web サーバー・プラグインを含む Liberty プロファイルの構成』を参照して、このタスクを完了します。

次のタスク

次に、複数のアプリケーション・サーバー・セルの `plugin-cfg.xml` ファイルをマージします。Liberty プロファイルで実行されている各アプリケーション・サーバーに固有のクローン ID が存在するようにする必要もあります。

アプリケーション・サーバー・プラグインへのデプロイメントのためのプラグイン構成ファイルのマージ

Java

Liberty server.xml 構成ファイルで固有のクローン ID を構成した後に、プラグイン構成ファイルを生成します。

始める前に

Liberty プロファイルで HTTP セッション・フェイルオーバーを構成するためにプラグイン構成ファイルを生成およびマージする場合は、以下のタスクを完了する必要があります。

- 227 ページの『Liberty プロファイルでの eXtreme Scale Web フィーチャーの使用可能化』
- 230 ページの『Liberty プロファイルの複数のサーバーに要求を転送するための Web サーバー・プラグインの構成』

このタスクについて

WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、このタスクを実行します。

手順

1. 複数のアプリケーション・サーバー・セルの `plugin-cfg.xml` ファイルをマージします。 手動で `plugin-cfg.xml` ファイルをマージするか、pluginCfgMerge ツールを用いて `plugin-cfg.xml` ファイルを複数のアプリケーション・サーバー・プロファイルから単一の出力ファイルへ自動的にマージするかのいずれかが可能です。 pluginCfgMerge.bat および pluginCfgMerge.sh ファイルは、*install_root*`/bin` ディレクトリーにあります。

plugin-cfg.xml ファイルの手動でのマージに関して詳しくは、複数のアプリケーション・サーバー・プロファイルからの plugin-cfg.xml ファイルのマージに関する技術情報を参照してください。

2. 各アプリケーション・サーバーの cloneID 値が確実に固有になるようにします。マージ・ファイル内の各アプリケーション・サーバーの cloneID の値を調べて、この値が各アプリケーション・サーバーで固有であることを確認します。マージ・ファイルの cloneID 値のすべてが固有とは限らない場合、あるいは、ピアツーピア・モードでセッションのメモリー間複製を使用して実行している場合は、管理コンソールを使用して固有の HTTP セッション cloneID を構成してください。

   WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して固有 HTTP セッション・クローン ID を構成するには、以下のステップを実行します。

   a. 「**サーバー**」 > 「**サーバー・タイプ**」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「***server_name***」をクリックします。
   b. 「コンテナー設定」で「**Web コンテナー設定**」 > 「**Web コンテナー**」をクリックします。
   c. 「追加プロパティー」で「**カスタム・プロパティー**」 > 「**新規**」をクリックします。
   d. 「**名前**」フィールドに「HttpSessionCloneId」と入力し、「**値**」フィールドにサーバーの固有値を入力します。固有値は、8 から 9 文字の英数字にする必要があります。例えば、test1234 は有効な cloneID 値です。
   e. 「**適用**」または「**OK**」をクリックします。
   f. 「**保存**」をクリックして、構成変更をマスター構成に保存します。

3. マージされた plugin-cfg.xml ファイルを、Web サーバー・ホスト上の *plugin_installation_root*/config/web_server_name ディレクトリーにコピーします。
4. マージされた plugin-cfg.xml ファイルに対して、正しいオペレーティング・システムのファイル・アクセス許可が定義されていることを確認します。これらのファイル・アクセス許可により、HTTP サーバー・プラグイン・プロセスはファイルを読み取ることができます。

タスクの結果

このタスクを完了すると、複数のアプリケーション・サーバー・セル用の 1 つのプラグイン構成ファイルが用意され、Liberty プロファイルで実行される eXtreme Scale アプリケーションで、セッション複製が使用可能になっています。

シナリオ: Eclipse ツールを使用した Liberty プロファイルでのグリッド・サーバーの実行

Eclipse ツールを使用して、WebSphere eXtreme Scale サーバーを WebSphere Application Server Liberty プロファイルで実行できます。Eclipse ツールには、eXtreme Scale アプリケーションを開発、構成、およびデプロイしたのと同じ Eclipse 環境でサーバーを実行するための簡便な手段が用意されています。

このタスクについて

Eclipse ツールで、Liberty プロファイルで実行するように eXtreme Scale サーバーを構成できます。このタスクを主導で実行する場合は、サポートされる Liberty フィーチャーを `server.xml` ファイルに追加します。ただし、Eclipse ツールを使用する場合は、Eclipse Java EE IDE for Web Developers, Version: Indigo Service Release 1 を使用して、このタスクおよびその他の開発タスクを実行できます。

WebSphere eXtreme Scale 用の Liberty プロファイル開発者ツールのインストール

Eclipse では、WebSphere eXtreme Scale サーバーを Liberty プロファイルで実行するために使用できるグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) が用意されています。この GUI を使用するには、WebSphere eXtreme Scale バージョン 8.5 Liberty プロファイル・ツールをインストールする必要があります。

このタスクについて

以下のいずれかの方法を使用してツールをインストールできます。

- Eclipse Marketplace からインストールします。「**ヘルプ**」 > 「**Eclipse Marketplace**」をクリックします。
- 稼働中のワークベンチまで「**インストール**」 アイコンをドラッグしてインストールします。このオプションは、Eclipse IDE for Java EE Developers 3.7 以降で開発者ツールをインストールする場合に限り有効です。

IBM WebSphere eXtreme Scale V8.5 Liberty Profile Developer Tools を使用するには、IBM WebSphere Application Server V8.5 Liberty Profile Developer Tools をインストールする必要があります。そのため、このタスクの手順には、両方の開発者ツールのインストールが含まれています。

手順

- Eclipse Marketplace からインストールします。
  1. Eclipse ワークベンチを開始します。
  2. 「ヘルプ」>「Eclipse Marketplace」をクリックします。
  3. 「検索」フィールドに WebSphere と入力します。
  4. 結果のリストで、「**IBM WebSphere Application Server V8.5 Liberty Profile Developer Tools**」を見つけ、「**インストール**」をクリックします。
  5. 「選択されたフィーチャーの確認」ページが開きます。『インストール手順を実行します』のインストール手順に進みます。
  6. 上記の各ステップを実行して、「**IBM WebSphere eXtreme Scale V8.5 Liberty Profile Developer Tools**」をインストールします。
- インストール手順を実行します。
  1. インストールしたツールのノードを展開します。
  2. 「**IBM WebSphere Application Server V8.5 Liberty Profile Developer Tools**」または「**IBM WebSphere eXtreme Scale V8.5 Liberty Profile Developer Tools**」を選択します。

3. インストールするオプション・フィーチャーを選択します。終了したら、「**次へ**」をクリックします。

   要確認: 追加のオプションのインストール・フィーチャー (バージョン 8.5、8.0、7.0 用の WebSphere Application Server Tools フィーチャーなど) のいずれかをインストールする場合は、WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピック『IBM WebSphere Application Server Developer Tools for Eclipse バージョン 8.5 の概要』に、別個の一連のインストール手順があります。
4. 「ライセンスの確認」ページで、ライセンス・テキストを確認します。
5. 条項に同意する場合は、「**ライセンスの条項に同意します**」をクリックしてから、「**完了**」をクリックします。インストール・プロセスが開始します。
6. インストール・プロセスが完了したら、ワークベンチを再始動します。

Eclipse を使用した開発環境のセットアップ

WebSphere eXtreme Scale 用の Liberty プロファイル Eclipse ツールをインストールした後に、eXtreme Scale サーバーを Liberty プロファイルで構成し、開発タスクを開始できる Eclipse プロジェクトを生成する必要があります。

Eclipse ツールを使用した Liberty プロファイルでの eXtreme Scale の構成

WebSphere Application Server Liberty プロファイル で実行するために WebSphere eXtreme Scale サーバーを構成する必要があります。このタスクを実行して、Eclipse ツールを使用して eXtreme Scale サーバーを構成します。

始める前に

Eclipse で Liberty プロファイル サーバーを定義する必要があります。このタスクを実行するには、『開発者ツールを使用した Liberty プロファイル・サーバーの作成』を参照してください。

このタスクについて

eXtreme Scale サーバーの構成では、サーバー・プロパティーを指定して、そのプロパティーを *wlp_home*/usr/servers/*your_server_name* ディレクトリー内の Liberty プロファイル server.xml ファイルに組み込みます。 eXtreme Scale を Liberty プロファイル で実行するために、このサーバー定義が必要になります。

この手順では、server.xml ファイルへの eXtreme Scale サーバー・プロパティー・ファイル xsServerConfig.xml の構成の追加も行います。

手順

1. eXtreme Scale サーバー・プロパティー・ファイルを生成します。
   a. 「**ファイル**」 > 「**新規**」 > 「**その他**」をクリックします。
   b. 「**WebSphere eXtreme Scale**」を展開し、「**コンテナー・サーバー構成ファイル (Container server configuration file)**」を選択します。「**次へ**」をクリックします。「eXtreme Scale サーバー構成ファイル (eXtreme Scale Server Configuration File)」ウィンドウが表示されます。

c. 「**参照**」をクリックして、Liberty プロファイルがインストールされている場所を指定します。次に、eXtreme Scale 用に構成する Liberty プロファイル・サーバー定義を選択します。「**次へ**」をクリックします。「汎用サーバー構成 (General Server Configuration)」ウィンドウが表示されます。

d. サーバー構成を完了します。「**次へ**」をクリックします。「コンテナー・サーバー構成 (Container Server Configuration)」ウィンドウが表示されます。

e. コンテナー・サーバー構成を完了します。「**次へ**」をクリックします。

f. カタログ・サーバー構成を組み込んだ場合は、別のウィンドウが表示され、そこでカタログ・サーバー設定を指定します。「**次へ**」をクリックします。「サーバー・ロギング構成 (Server Logging Configuration)」ウィンドウが表示されます。

g. ロギング情報ページを完了し、「セキュリティー構成」ウィンドウが表示されるまで「**次へ**」をクリックします。

h. オプション: `objectGridSecurity.xml` ファイルの場所を指定します。このファイルは、すべてのサーバー (カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを含む) に共通するセキュリティー・プロパティーを記述するものです。定義されたセキュリティー・プロパティーの例はオーセンティケーター構成で、これは、ユーザー・レジストリーおよび認証メカニズムを表します。このプロパティーに指定するファイル名は、URL 形式 (例えば `file:///tmp/og/objectGridSecurity.xml`) でなければなりません。

i. 「**終了**」をクリックします。

Liberty プロファイルに構成ファイルが生成されます。

2. eXtreme Scale サーバー・プロパティー・ファイルの構成を `server.xml` ファイルに組み込みます。

a. Eclipse で「サーバー」ビューを開きます。

b. 「Liberty サーバー (Liberty Server)」を展開し、サーバー構成 XML ファイルを見つけます。

c. サーバー構成のエントリーをダブルクリックしてファイルを開きます。

d. 「**追加**」をクリックし、「**インクルード**」をクリックして、インクルード・ステートメントを `server.xml` ファイルに追加します。「**OK**」をクリックします。

e. 「インクルードの詳細」で、「**参照**」をクリックします。「インクルード・ファイルの参照」ウィンドウが表示されます。

f. **xsServerConfig.xml** を選択し、ステップ 1 で作成したサーバー構成設定をインクルードします。「**OK**」をクリックします。

次のタスク

eXtreme Scale サーバー構成ファイル `xsServerConfig.xml` に、Liberty プロファイル `server.xml` ファイルがインクルードされました。これで、Liberty プロファイル・サーバーを始動する準備ができました。このサーバーで、eXtreme Scale サーバーが実行されます。

eXtreme Scale グリッド開発用の OSGi バンドル・プロジェクトの作成

Liberty プロファイルでの WebSphere eXtreme Scale サーバー用の開発環境として Eclipse を使用するには、サポートされる Open Services Gateway initiative (OSGi) フレームワーク内で Eclipse プロジェクトを作成する必要があります。

手順

1. Eclipse で OSGi バンドル・プロジェクトを作成します。
   a. 「**ファイル**」 > 「**新規**」 > 「**プロジェクト**」をクリックします。 「ウィザードを選択」ウィンドウが表示されます。
   b. WebSphere eXtreme Scale フォルダーを展開し、「**オブジェクト・グリッド**」プロジェクトを選択します。 「オブジェクト・グリッド・プロジェクト (Object grid project)」ウィンドウが表示されます。
   c. 「**追加**」をクリックし、バッキング・マップ名を入力して、開発アクティビティーを実行するオブジェクト・グリッド・マップを追加します。このページで複数のマップを入力できます。「**次へ**」をクリックします。
   d. 入力したマップごとにオブジェクト・グリッド・パラメーターを指定します。「**次へ**」をクリックします。
   e. デプロイメント・パラメーターを指定し、「**終了**」をクリックします。

   OSGi バンドル・プロジェクトが作成され、eXtreme Scale API を使用して、Liberty プロファイルの開発アクティビティーを完了できるようになりました。バンドルには、`gridBlueprint.xml` ファイルが含まれています。このファイルには、eXtreme Scale 構成ファイル `objectGrid.xml` および `gridDeployment.xml` の場所が含まれています。これらの構成ファイルには、ステップ c で作成したマップが含まれています。
2. バンドル・プロジェクトをエクスポートし、バンドルを grids フォルダーに配置します。 eXtreme Scale アプリケーションを Liberty プロファイルにデプロイするには、プロジェクトをエクスポートする必要があります。プロジェクトのエクスポート時に、プロジェクトは、バンドル Java アーカイブ (JAR) ファイルとして *Liberty_profile_Server_Definition*`/grids` フォルダーにエクスポートされます。
   a. 先ほど作成したプロジェクトを右クリックし、「**エクスポート**」 > 「**OSGi バンドルまたはフラグメント**」を選択します。 「OSGi アプリケーションのエクスポート」ウィンドウが表示されます。
   b. バンドル JAR ファイルをエクスポートする場所を指定します。「**終了**」をクリックします。

WebSphere eXtreme Scale セッション管理を使用するための WebSphere Application Server メモリー間複製セッションまたはデータベース・セッションのマイグレーション

Java

以前に設定したメモリー間複製セッションまたはデータベース・セッションをマイグレーションして、WebSphere eXtreme Scale セッション管理を使用できます。

始める前に

- WebSphere Application Server において実行されているクライアント・アプリケーション (クラスター) の用のセッション・サポートでは、WebSphere eXtreme Scale を、WebSphere Application Server ノード・デプロイメント (デプロイメント・マネージャー・ノードを含む) 上にインストールする必要があります。WebSphere Application Server での WebSphere eXtreme Scale または WebSphere eXtreme Scale クライアントのインストールを参照してください。
- 1 つ以上のカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーから成る WebSphere eXtreme Scale グリッド環境を開始する必要があります。詳しくは、スタンドアロン・サーバーの始動と停止を参照してください。

  注: WebSphere eXtreme Scale が表示されない場合は、WebSphere Application Server プロファイルが WebSphere eXtreme Scale 用に拡張されていません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のプロファイルの作成および拡張を参照してください。
- カタログ・サービス・ドメイン内のカタログ・サーバーで Secure Sockets Layer (SSL) が使用可能になっている場合、または SSL がサポートされたカタログ・サービス・ドメインで SSL を使用する場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールでグローバル・セキュリティーを有効にする必要があります。サーバー・プロパティー・ファイルで、transportType 属性を SSL-Required に設定して、カタログ・サーバーに SSL を要求します。詳しくは、『グローバル・セキュリティーの設定』を参照してください。

このタスクについて

このシナリオの手順は、WebSphere Application Server 管理コンソールのバージョン 8.5 用です。この情報は、ご使用の WebSphere Application Server バージョンによって、少し違う可能性があります。

注: WebSphere eXtreme Scale バージョン 8.6 は、バージョン 7.0 より前の WebSphere Application Server のバージョンではサポートされていません。

WebSphere Application Server 管理コンソールの前の構成設定のメモ

Java

WebSphere eXtreme Scale セッションへのマイグレーションの一部として、WebSphere Application Server 管理コンソールの前の構成設定をメモする必要があります。 WebSphere eXtreme Scale セッションにマイグレーションする際に、構成設定で、データベース・セッションおよびメモリー間セッション用に既に構成されている内容を反映する必要があります。

このタスクについて

WebSphere Application Server 管理コンソール内にメモする必要がある特定の設定があります。これらの値は、`splicer.properties` ファイルの更新時に必要になりま

す。この手順のステップは、WebSphere Application Server 管理コンソールのバージョン 8.5 用です。この情報は、ご使用の WebSphere Application Server バージョンによって、少し違う可能性があります。

注: WebSphere eXtreme Scale バージョン 8.6 は、バージョン 7.0 より前の WebSphere Application Server のバージョンではサポートされていません。

手順

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。
   - 以前にサーバー・レベルで設定を構成したことがある場合は、以下にアクセスします。
     a. 「**サーバー**」>「**サーバー・タイプ**」>「**WebSphere Application Server**」
     b. 「**アプリケーション・サーバー**」領域で、**ご使用のサーバー名**を選択します。
     c. 「**コンテナー設定**」領域で、「**セッション管理**」をクリックします。
   - 以前にアプリケーション・レベルで設定を構成したことがある場合は、以下にアクセスします。
     a. 「**アプリケーション**」>「**すべてのアプリケーション**」。
     b. 「**アプリケーション・サーバー**」領域で、**ご使用のアプリケーション名**を選択します。
     c. 「**Web モジュール・プロパティー**」領域で、「**セッション管理**」をクリックします。
2. 「**一般プロパティー**」で、「**オーバーフローの許可**」チェック・ボックスを選択します。
3. 「**一般プロパティー**」領域で、WebSphere Application Server 設定をメモします。 これらの値は後から、`splicer.properties` ファイルのプロパティーを更新する際に必要になります。

表 3. splicer.properties ファイルを更新するための構成設定

WebSphere Application Server 管理コンソールでの設定	splicer.properties ファイルで更新するプロパティー
Cookie 使用可能 (Enable cookies)	useCookies
URL 再書き込みを有効にする	useURLEncoding
メモリー内の最大セッション・カウント	sessionTableSize

4. 「**一般プロパティー**」領域で、「**Cookie 使用可能 (Enable cookies)**」チェック・ボックスが選択されている場合は、それをクリックし、WebSphere Application Server 設定をメモします。 これらの値は後から、`splicer.properties` ファイルのプロパティーを更新する際に必要になります。

表 4. splicer.properties ファイルのプロパティーの構成設定

WebSphere Application Server 管理コンソールでの設定	splicer.properties ファイルで更新するプロパティー
Cookie ドメイン	cookieDomain
Cookie パス	cookiePath

5. 「**セッション管理**」をクリックし、「**追加プロパティー**」領域で、「**分散環境設定**」をクリックします。
6. 「**分散セッション**」領域で、以前のデータベース構成またはメモリー間複製構成を「**なし**」に変更します。
7. 「**カスタム・チューニング・プロパティー (Custom Tuning Properties)**」をクリックし、WebSphere Application Server 設定をメモします。 これらの値は後から、`splicer.properties` ファイルのプロパティーを更新する際に必要になります。

表 5. splicer.properties ファイルのプロパティーの構成設定

WebSphere Application Server 管理コンソールでの設定	splicer.properties ファイルで更新するプロパティー
書き込み頻度	replicationInterval
書き込みの内容	fragmentedSession

次のタスク

次に、WebSphere eXtreme Scale セッション用のカタログ・サービス・ドメインを作成します。

WebSphere eXtreme Scale セッション管理用のカタログ・サービス・ドメインの作成

Java

WebSphere eXtreme Scale セッションへのマイグレーションの一部として、WebSphere Application Server 管理コンソールでカタログ・サービス・ドメインを作成する必要があります。

このタスクについて

この手順のステップは、WebSphere Application Server 管理コンソールのバージョン 8.5 用です。この情報は、ご使用の WebSphere Application Server バージョンによって、少し違う可能性があります。

注: WebSphere eXtreme Scale バージョン 8.6 は、バージョン 7.0 より前の WebSphere Application Server のバージョンではサポートされていません。WebSphere Application Server 管理コンソールで、WebSphere eXtreme Scale 用のカタログ・サービス・ドメインを作成します。詳しくは、WebSphere Application Server でのカタログ・サービス・ドメインの作成を参照してください。

手順

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。
2. 上部メニューで、「**システム管理**」>「**WebSphere eXtreme Scale**」>「**カタログ・サービス・ドメイン**」をクリックします。

注: WebSphere eXtreme Scale が表示されない場合は、WebSphere Application Server プロファイルが WebSphere eXtreme Scale 用に拡張されていません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のプロファイルの作成および拡張を参照してください。

3. 「**新規**」をクリックします。
4. 「**名前**」ボックスにカタログ・サービスの名前を指定します。
5. 「**カタログ・サーバー**」領域で、「**リモート・サーバー**」を選択し、ボックス内にリモート・サーバーの場所または名前を指定します。
6. 「**リスナー・ポート**」ボックスにポート番号を指定します。
7. 「**適用**」または「**OK**」をクリックし、構成を保存します。

次のタスク

次に、WebSphere Application Server 管理コンソール内のメモした以前の構成設定を使用して、アプリケーションまたはアプリケーション・サーバーのいずれかを WebSphere eXtreme Scale セッション管理に関連付けます。

以前の構成設定を使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成

Java

WebSphere Application Server 管理コンソール内のメモした以前の構成設定を使用して、アプリケーションまたはアプリケーション・サーバーのいずれかを WebSphere eXtreme Scale セッション管理に関連付ける必要があります。

このタスクについて

この手順のステップは、WebSphere Application Server 管理コンソールのバージョン 8.5 用です。この情報は、ご使用の WebSphere Application Server バージョンによって、少し違う可能性があります。

注: WebSphere eXtreme Scale バージョン 8.6 は、バージョン 7.0 より前の WebSphere Application Server のバージョンではサポートされていません。

手順

- WebSphere eXtreme Scale セッション管理に関連付けられるようにアプリケーションを構成する場合は、以下の手順に従います。
  1. WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。
  2. 上部メニューで、「**アプリケーション**」>「**すべてのアプリケーション**」をクリックします。
  3. 「**アプリケーション・サーバー**」領域で、**アプリケーション名**を選択します。
  4. 「**Web モジュール・プロパティー**」領域で、「**セッション管理**」をクリックします
  5. 「**eXtreme Scale セッション管理設定**」をクリックします。

6. WebSphere eXtreme Scale が表示されない場合は、WebSphere Application Server プロファイルが WebSphere eXtreme Scale 用に拡張されていません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のプロファイルの作成および拡張を参照してください。
7. スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale 用にアプリケーションを構成するには、以下の手順に従います。
   a. 「**セッション・パーシスタンスの管理**」リストで、「**リモート eXtreme Scale データ・グリッド**」を選択します。
   b. リストから、作成したカタログ・サービス・ドメインを選択します。
   c. 「**参照**」をクリックしてグリッドを選択します。
8. 「**適用**」または「**OK**」をクリックし、構成を保存します。
9. このアプリケーション用に新規 splicer.properties ファイルが作成されます。`splicer.properties` ファイルの場所は、新規プロパティー `{application name},com.ibm.websphere.xs.sessionFilterProps` の値です。このカスタム・プロパティーを見つけるには、「**システム管理**」>「**セル**」にアクセスし、「**カスタム・プロパティー**」をクリックします。
10. 237 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの前の構成設定のメモ』で取得した値を使用して、`splicer.properties` ファイルを更新します。
11. アプリケーション・サーバー・プロセスを再始動します。

注: デプロイメント・マネージャー・レベルで `splicer.properties` を変更して、プロパティーがノード・エージェントに同期されるようにします。ノード・レベルで `splicer.properties` を更新した場合は、次回同期時に、デプロイメント・マネージャーによって `splicer.properties` ファイルが上書きされます。

注: データベース・セッション管理に戻ってから WebSphere eXtreme Scale セッション管理に戻ると、`splicer.properties` ファイルが再作成されるため、行った変更がすべてオーバーライドされます。デプロイメント・マネージャーからノードへのファイル同期プロセスおよび変更される内容については、「System Management File Synchronization」を参照してください。

- WebSphere eXtreme Scale セッション管理に関連付けられるようにアプリケーション・サーバーを構成する場合は、以下の手順に従います。
  1. WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。
  2. 上部メニューで、「**サーバー**」>「**サーバー・タイプ**」>「**WebSphere Application Server**」をクリックします。
  3. 「**アプリケーション・サーバー**」領域で、**ご使用のサーバー名**を選択します。
  4. 「**コンテナー設定**」領域で、「**セッション管理**」をクリックします。
  5. 「**eXtreme Scale セッション管理設定**」をクリックします。

     注: WebSphere eXtreme Scale が表示されない場合は、WebSphere Application Server プロファイルが WebSphere eXtreme Scale 用に拡張されていません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のプロファイルの作成および拡張を参照してください。

6. スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale 用にアプリケーション・サーバーを構成するには、以下の手順に従います。
   a. 「**セッション・パーシスタンスの管理**」リストで、「**リモート eXtreme Scale データ・グリッド**」を選択します。
   b. リストから、作成したカタログ・サービス・ドメインを選択します。
   c. 「**参照**」をクリックしてグリッドを選択します。
7. 「**適用**」または「**OK**」をクリックし、構成を保存します。
8. このアプリケーション用に新規 splicer.properties ファイルが作成されます。splicer.properties ファイルの場所は、新規プロパティー `com.ibm.websphere.xs.sessionFilterProps` の値です。このカスタム・プロパティーを見つけるには、「**サーバー**」>「**サーバー・タイプ**」>「**WebSphere Application Server**」にアクセスします。
9. 「**アプリケーション・サーバー**」領域で、**ご使用のサーバー名**を選択します。
10. 「**サーバー・インフラストラクチャー**」領域で、「**カスタム・プロパティー**」を選択します。
11. 237 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの前の構成設定のメモ』で取得した値を使用して、`splicer.properties` ファイルを更新します。
12. アプリケーション・サーバー・プロセスを再始動します。

注: デプロイメント・マネージャー・レベルで `splicer.properties` を変更して、プロパティーがノード・エージェントに同期されるようにします。ノード・レベルで `splicer.properties` を更新した場合は、次回同期時に、デプロイメント・マネージャーによって `splicer.properties` ファイルが上書きされます。

注: データベース・セッション管理に戻ってから WebSphere eXtreme Scale セッション管理に戻ると、`splicer.properties` ファイルが再作成されるため、行った変更がすべてオーバーライドされます。デプロイメント・マネージャーからノードへのファイル同期プロセスおよび変更される内容については、「System Management File Synchronization」を参照してください。

タスクの結果

これで、WebSphere eXtreme Scale セッション管理で、メモリー間複製セッションまたはデータベース・セッション管理用に以前の構成設定が変更されました。

シナリオ: 動的キャッシュ・プロバイダーとしての WebSphere eXtreme Scale の使用

WebSphere Application Server は、デプロイされた Java EE アプリケーションが使用できる動的キャッシュ・サービスを提供します。このサービスは、ビジネス・データ、生成された HTML、コマンド出力などをキャッシュするために使用されます。最初は、動的キャッシュ・サービスのプロバイダーのみが、WebSphere Application Server に組み込まれているデフォルト動的キャッシュ・プロバイダーでした。現在、お客様は WebSphere eXtreme Scale を、任意のキャッシュ・インスタンス用のキャッシュ・プロバイダーとして指定することもできます。これにより、

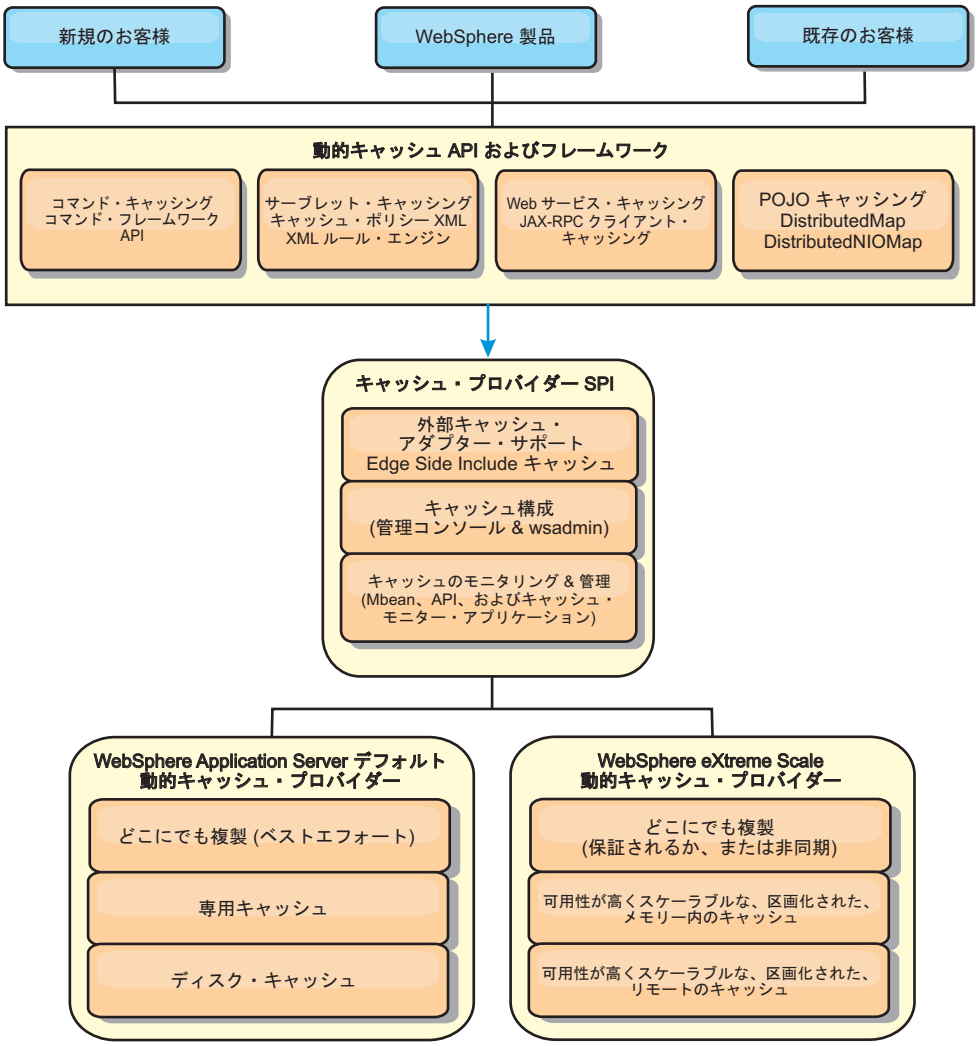
動的キャッシュ・サービスを使用するアプリケーションが WebSphere eXtreme Scale のフィーチャーおよびパフォーマンス機能を使用できるようになります。

このタスクについて

動的キャッシュ・プロバイダーの概要

WebSphere Application Server は、デプロイされた Java EE アプリケーションが使用できる動的キャッシュ・サービスを提供します。このサービスは、サーブレット、JSP、コマンドからの出力などのデータ、および DistributedMap API を使用してエンタープライズ・アプリケーション内でプログラマチックに指定されたオブジェクト・データをキャッシュするために使用されます。

最初は、動的キャッシュ・サービスのサービス・プロバイダーのみが WebSphere Application Server に組み込まれているデフォルト動的キャッシュ・エンジンでした。現在、お客様は WebSphere eXtreme Scale を任意のキャッシュ・インスタンス用のキャッシュ・プロバイダーとして指定することもできます。この機能をセットアップすることにより、動的キャッシュ・サービスを使用するアプリケーションが WebSphere eXtreme Scale のフィーチャーおよびパフォーマンス機能を使用できるようになります。



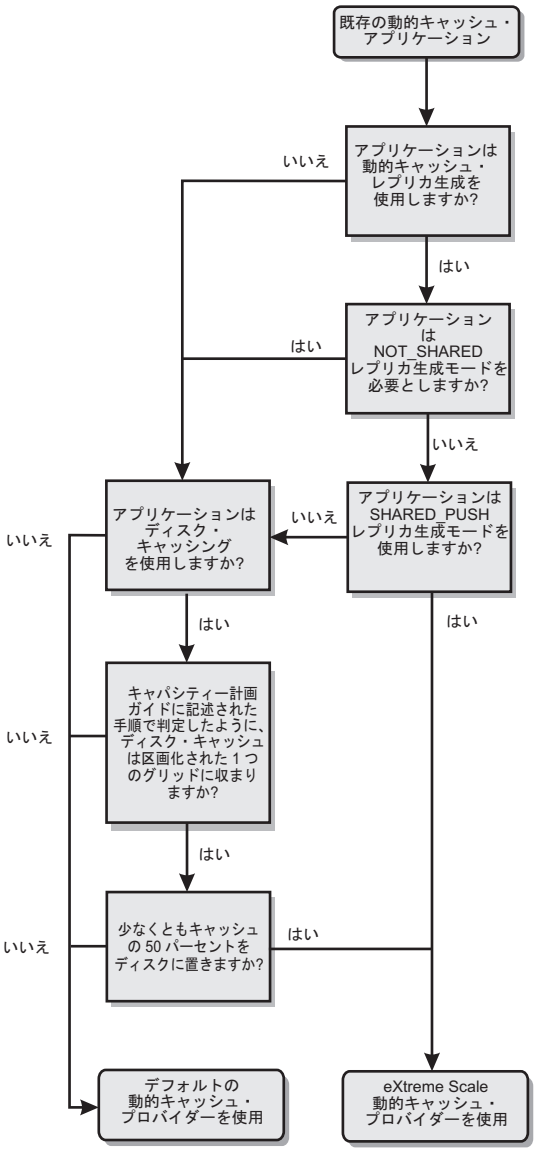
動的キャッシュ・プロバイダーのインストールと構成の手順については、デフォルト動的キャッシュ・インスタンス (baseCache) の構成を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale の使用方法の決定

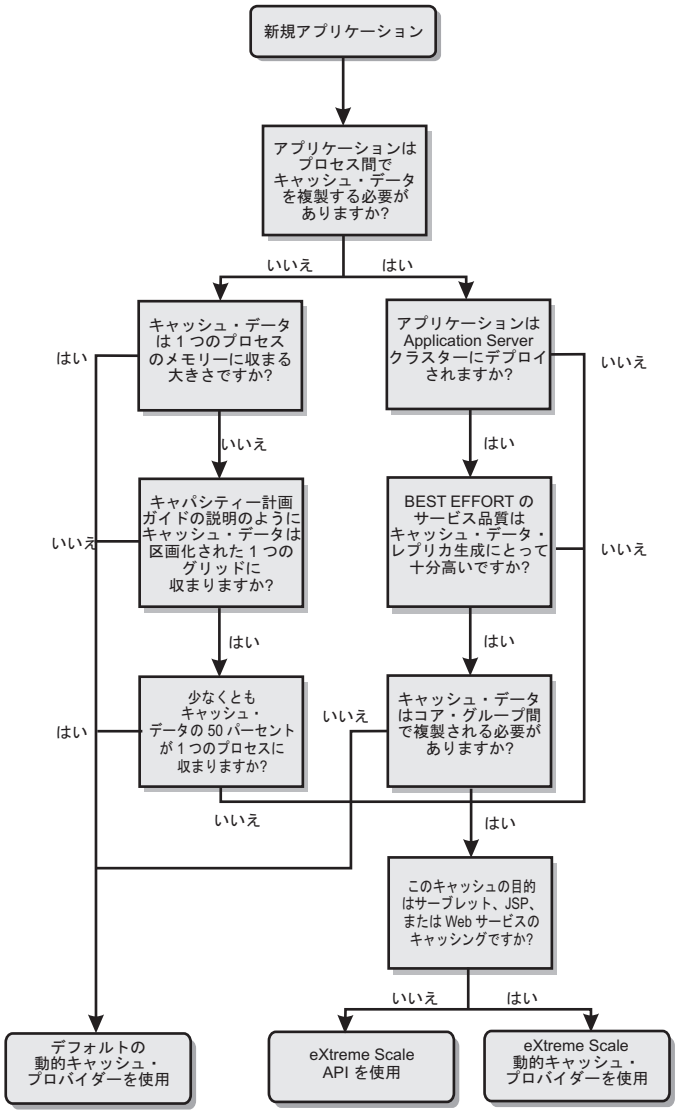
WebSphere eXtreme Scale の使用可能なフィーチャーにより、動的キャッシュ・サービスの分散機能は、デフォルト動的キャッシュ・プロバイダーおよびデータ・レプリカ生成サービスで提供される機能を超えて大幅に向上します。 eXtreme Scale を使用することにより、複数のサーバー間で単に複製し、同期化するだけでなく、サーバー間で本当に分散したキャッシュを作成できます。さらに、eXtreme Scale キャッシュは、トランザクション・ベースであり、可用性がとても高く、動的キャッシュ・サービスに関して各サーバーが同じ内容を参照することを保証します。
WebSphere eXtreme Scale は、キャッシュ・レプリカ生成に関して、DRS よりも高いサービス品質を提供します。

ただし、これらの利点は、どのようなアプリケーションでも eXtreme Scale 動的キャッシュ・プロバイダーが正しい選択であることを意味するわけではありません。以下のデシジョン・ツリーおよび機能比較マトリックスを使用して、ご使用のアプリケーションに最適のテクノロジーを決定してください。

既存の動的キャッシュ・アプリケーションをマイグレーションする際のデシジョン・ツリー



新規アプリケーションのキャッシュ・プロバイダーを選択する際のデシジョン・ツリー



機能比較

表 6. 機能比較

キャッシュ機能	デフォルト・プロバイダー	eXtreme Scale プロバイダー	eXtreme ScaleAPI
ローカルのメモリー内のキャッシング	はい	ニア・キャッシュ機能を介して	ニア・キャッシュ機能を介して
分散キャッシング	DRS を介して	はい	はい
直線的にスケーラブル	いいえ	はい	はい
信頼できるレプリカ生成 (同期)	いいえ	はい	はい

表 6. 機能比較 (続き)

キャッシュ機能	デフォルト・プロバイダー	eXtreme Scale プロバイダー	eXtreme ScaleAPI
ディスク・オーバーフロー	はい	N/A	N/A
除去	LRU/TTL/ヒープ・ベース	LRU/TTL (区画ごと)	LRU/TTL (区画ごと)
Invalidation	はい	はい	はい
関係	依存関係 / テンプレート ID の関係	はい	いいえ (他の関係は可能)
非キー検索	いいえ	いいえ	照会と索引を介して
バックエンド統合	いいえ	いいえ	ローダーを介して
トランザクションの	いいえ	はい	はい
キー・ベースの保管	はい	はい	はい
イベントおよびリスナー	はい	いいえ	はい
WebSphere Application Server 統合	単一セルのみ	複数セル	セルに無関係
Java Standard Edition サポート	いいえ	はい	はい
モニタリングおよび統計	はい	はい	はい
セキュリティー	はい	はい	はい

eXtreme Scale 分散キャッシュがどのように機能するかについて詳しくは、 286 ページの『トポロジーの計画』 を参照してください。

注: eXtreme Scale 分散キャッシュは、キーと値が両方とも java.io.Serializable インターフェースを実装するエントリーのみを保管できます。

トポロジーのタイプ

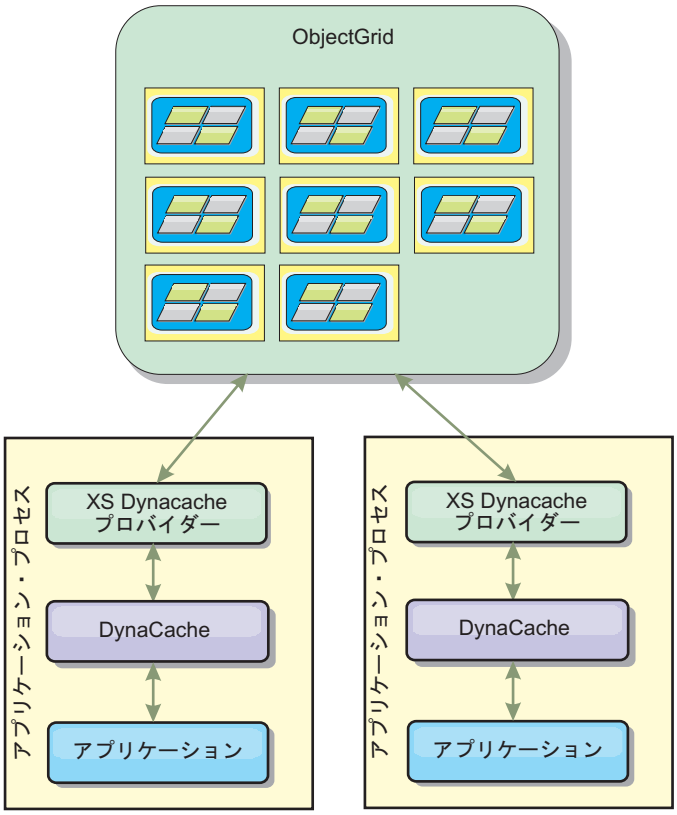
非推奨: 8.6+ ローカル、組み込み、および組み込み区画化の各トポロジー・タイプは非推奨です。

eXtreme Scale でプロバイダーとして作成された動的キャッシュ・サービスは、リモート・トポロジーにデプロイすることができます。

リモート・トポロジー

リモート・トポロジーによりディスク・キャッシュが不要になります。すべてのキャッシュ・データは WebSphere Application Server プロセスの外部に保管されます。 WebSphere eXtreme Scale は、キャッシュ・データ用にスタンドアロンのコンテナー・プロセスをサポートします。これらのコンテナー・プロセスのオーバーヘッドは WebSphere Application Server プロセスよりも小さく、特定の Java 仮想マシン (JVM) を使用しなければならないという制限もありません。例えば、 32 ビット WebSphere Application Server プロセスによってアクセスされる動的キャッシュ・サ

ービスのデータを、64 ビット JVM 上で実行している eXtreme Scale コンテナー・プロセス内に置くことが可能です。これによって、ユーザーは、64 ビット・プロセスの大きなメモリー容量をキャッシング用に使用できると同時に、アプリケーション・サーバー・プロセス用には 64 ビットの追加オーバーヘッドを負わなくてもすみます。次の図に、リモート・トポロジーを示します。



動的キャッシュ・エンジンおよび eXtreme Scale の機能の相違点

WebSphere eXtreme Scale がバックアップしたキャッシュは、メモリー内キャッシュのサイズに関係する統計および操作、またはディスク・オフロードをサポートしない点は除いて、ユーザーはこれら 2 つのキャッシュの機能的な違いに気付かないはずです。

デフォルト動的キャッシュ・プロバイダーを使用しているのか、eXtreme Scale キャッシュ・プロバイダーを使用しているかに関わらず、ほとんどの動的キャッシュ API 呼び出しが返す結果にはそれほどの相違はありません。一部の操作については、 eXtreme Scale を使用して動的キャッシュ・エンジンの動作をエミュレートできません。

動的キャッシュ統計

WebSphere eXtreme Scale 動的キャッシュの統計データは、eXtreme Scale モニター・ツールを使用して取得することができます。詳しくは、モニターを参照してください。

MBean 呼び出し

WebSphere eXtreme Scale 動的キャッシュ・プロバイダーはディスク・キャッシングをサポートしません。ディスク・キャッシングに関係する MBean 呼び出しはすべて機能しません。

動的キャッシュ・レプリカ生成ポリシーのマッピング

eXtreme Scale 動的キャッシュ・プロバイダーのリモート・トポロジーは、(デフォルトの WebSphere Application Server 動的キャッシュ・プロバイダーによって使用される用語を使用して) SHARED_PULL および SHARED_PUSH_PULL ポリシーに最も近いレプリカ生成ポリシーをサポートします。 eXtreme Scale 動的キャッシュでは、キャッシュの分散状態はすべてのサーバー間で完全に一貫しています。

8.6+
グローバル索引の無効化

グローバル索引を使用して、大規模な区画化環境 (例えば、区画数が 40 を超えるような環境) での無効化効率を向上させることができます。グローバル索引フィーチャーがないと、動的キャッシュ・テンプレートおよび依存関係無効化処理ですべての区画にリモート・エージェント要求を送らなければならないため、パフォーマンスが低下します。グローバル索引を構成すると、無効化エージェントは、テンプレート ID または依存関係 ID に関連するキャッシュ・エントリーを含む適用区画にのみ送られます。多数の区画が構成されている環境ではパフォーマンス向上の可能性がより大きくなります。動的キャッシュ objectGrid 記述子 XML ファイルの例にある依存関係 ID 索引およびテンプレート ID 索引を使用してグローバル索引を構成することができます。 250 ページの『スタンドアロン環境での動的キャッシングのためのエンタープライズ・データ・グリッドの構成』を参照してください。

セキュリティー

リモート・トポロジーでキャッシュが実行している場合、スタンドアロン eXtreme Scale クライアントはそのキャッシュに接続して、動的キャッシュ・インスタンスの内容に影響を与えることが可能です。したがって、動的キャッシュ・インスタンスを含む WebSphere eXtreme Scale サーバーは、内部ネットワーク内の、通常はネットワーク DMZ と呼ばれているものの後ろに常駐することが重要です。

SSL またはクライアント認証が必要な場合は、 335 ページの『セキュリティーの概要』に関する eXtreme Scale 資料を参照してください。

ニア・キャッシュ

ローカルでアプリケーション・サーバー JVM 内に存在し、かつリモート動的キャッシュ・インスタンス内に含まれるエントリーのサブセットを含むニア・キャッシュを作成して維持するように、動的キャッシュ・インスタンスを構成することができます。 dynacache-nearCache-ObjectGrid.xml ファイルを使用してニア・キャッシュ・インスタンスを構成することができます。詳しくは、 250 ページの『スタンドアロン環境での動的キャッシングのためのエンタープライズ・データ・グリッドの構成』を参照してください。ニア・キャッシュを調整するためのカスタム・プロパティーもあります。詳しくは、動的キャッシュ・カスタム・プロパティーを参照してください。

追加情報

- 動的キャッシュに関するレッドブック
- 動的キャッシュ文書
  - WebSphere Application Server 7.0
- DRS 資料
  - WebSphere Application Server 7.0

環境キャパシティーの計画

初期データ・セット・サイズおよび予測されるデータ・セット・サイズがわかっている場合、WebSphere eXtreme Scale を実行するために必要なキャパシティーを計画できます。これらの計画の策定を使用して、将来の変更に向けて WebSphere eXtreme Scale を効率よくデプロイし、データ・グリッドの柔軟性を最大限にすることができます。このような利点は、メモリー内のデータベースや他のタイプのデータベースなど、異なるシナリオでは実現されません。

スタンドアロン環境での動的キャッシングのためのエンタープライズ・データ・グリッドの構成

エンタープライズ・グリッドを動的キャッシング用に構成するために、これらのデプロイメント記述子ファイルおよび objectGrid 記述子ファイルをコピーして変更します。これらのファイルは、エンタープライズ・データ・グリッドを開始するために使用されます。

このタスクについて

WebSphere eXtreme Scale が WebSphere Application Server 動的キャッシュ・インスタンスのプロバイダーとして指定されると、WebSphere eXtreme Scale サーバーはスタンドアロン環境または WebSphere Application Server 環境のいずれかで始動されます。詳しくは、スタンドアロン・サーバーの始動と停止を参照してください。このプロセスでは、エンタープライズ・データ・グリッドの構成に使用されるデプロイメント記述子ファイルおよび objectGrid 記述子ファイルを使用する必要があります。動的キャッシングには固有の構成が必要です。そのため、エンタープライズ・データ・グリッドを開始するためにコピー、変更 (必要に応じて)、使用を意図されているいくつかの XML ファイルが WebSphere eXtreme Scale と一緒に配布されます。これらのファイルは現状のままで使用可能ですが、変更されることがあるので、変更したり使用したりする前に別の場所にコピーするようにしてください。

注: WebSphere eXtreme Scale のインストール方法に応じて、これらのファイルの置かれる場所は異なります。すなわち、WebSphere Application Server と一緒にインストールされた場合は `was_root/optionalLibraries/ObjectGrid/dynacache/etc` ディレクトリーに、スタンドアロン環境でインストールされた場合は `wxs_install_root/ObjectGrid/dynacache/etc` ディレクトリーに置かれます。

重要: これらのファイルは、編集したり使用したりする前に別の場所にコピーしておくことを強くお勧めします。

動的キャッシュ記述子ファイル (dynacache-remote-deployment.xml)
このファイルは、コンテナー・サーバーを動的キャッシング用に始動するためのデプロイメント記述子ファイルです。詳しくは、デプロイメント・ポリ

シー記述子 XML ファイルを参照してください。このファイルは現状のままで使用できますが、場合によっては、以下のエレメントまたは属性が変更されたり非常に重要になったりします。

- **mapSet name および map ref**

  mapSet の **name** 属性と map ref の定義値は WebSphere Application Server 用に構成された動的キャッシュ・インスタンス名に直接対応せず、通常は変更されません。ただし、これらの値が変更された場合は、対応するカスタム・プロパティーを動的キャッシュ・インスタンスの構成に追加する必要があります。詳しくは、カスタム・プロパティーを使用した動的キャッシュ・インスタンスのカスタマイズを参照してください。

- **numberOfPartitions**

  この属性は、ご使用の構成に適した区画数を表すように変更されることがあります。詳しくは、250 ページの『環境キャパシティーの計画』を参照してください。

- **maxAsyncReplicas**

  この属性は変更されることがあります。通常、動的キャッシュは、サイド・キャッシュ・モデルでデータベースその他のソースと一緒にデータ用の記録のシステムとして使用されます。その結果、eXtreme I/O (XIO) トランスポート・タイプが使用されたときは、この属性を OPTIMISTIC または NONE に設定するとニア・キャッシュ処理が起動され、データを高可用性にするために必要なスペースとパフォーマンスとの兼ね合いによってレプリカ生成の使用が抑止されます。ただし、場合によっては高可用性が重要となります。

- **numInitialContainers**

  この属性は、エンタープライズ・データ・グリッドの初期始動に組み込まれるコンテナーの数に設定する必要があります。この属性が正しく設定されると、データ・グリッド全体での区画の配置と配布に役立ちます。

動的キャッシュ ObjectGrid 記述子 XML ファイル (dynacache-remote-objectgrid.xml)

このファイルは、コンテナー・サーバーを動的キャッシング用に始動するための推奨される ObjectGrid 記述子ファイルです。詳しくは、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを参照してください。このファイルは、eXtreme Data Formatting (XDF) を使用して eXtreme I/O トランスポート・タイプ (XIO) と一緒に稼働するように構成されています。さらに、依存関係 ID およびテンプレート ID 索引が、無効化パフォーマンスを向上させるグローバル索引を使用するように構成されます。このファイルは現状のままで使用できますが、場合によっては、以下のエレメントまたは属性が変更されたり非常に重要になったりします。

- **objectGrid name および backingMap name**

  objectGrid および backingMap エレメントの **name** 属性は、WebSphere Application Server キャッシュ・インスタンス用に構成された動的キャッシュ・インスタンス名に直接対応せず、通常は変更する必要がありません。ただし、これらの属性が変更された場合は、対応するカスタム・プロ

パティーを動的キャッシュ・インスタンスの構成に追加する必要があります。詳しくは、カスタム・プロパティーを使用した動的キャッシュ・インスタンスのカスタマイズを参照してください。

- **copyMode**

  この属性は COPY_TO_BYTES に設定してください。 eXtreme I/O (XIO) トランスポート・タイプが使用されたとき、この値は eXtreme Data Format (XDF) を使用可能にします。他の copyMode に変更すると、XDF が使用不可になり、ObjectTransformer プラグイン Bean のコメントを外すことが必要になります。

- **lockStrategy**

  この属性を PESSIMISTIC に設定します。この属性を OPTIMISTIC または NONE に設定すると、ニア・キャッシュ処理が起動されます。この設定には dynamic-nearcache-objectgrid.xml からのプロパティーが伴わなければなりません。

- **backingMapPluginCollections**

  このエレメントは必須です。動的キャッシングのためには子エレメントの Evictor プラグインと MapIndex プラグインが両方とも必要であり、これらを削除してはなりません。

- **GlobalIndexEnabled**

  GlobalIndexEnabled プロパティーは DEPENDENCY_ID_INDEX と TEMPLATE_INDEX の両方に含まれており、true に設定されています。この値を false に設定すると、これらの索引に対するグローバル索引フィーチャーが使用不可になります。稼働している区画の合計数が少ない (例えば 40 未満である) 場合を除けば、これらのグローバル索引は使用可能のままにしておくことをお勧めします。

- **objectTransformer**

  この objectGrid 記述子ファイルは eXtreme Data Format (XDF) で実行するように意図されているので、これはコメント化されています。 XDF を使用不可にしたい場合は (copyMode 値を変更する)、このプラグインのコメントを外す必要があります。

動的ニア・キャッシュ ObjectGrid 記述子ファイル (dynacache-nearCache-ObjectGrid.xml)

このファイルは、ニア・キャッシュが望ましいときにグリッド・コンテナー・サーバーを動的キャッシング用に始動するための推奨される ObjectGrid 記述子ファイルです。このファイルは、eXtreme Data Formatting (XDF) を使用して eXtreme I/O トランスポート・タイプ (XIO) と一緒に稼働するように構成されています。さらに、依存関係 ID およびテンプレート索引が、無効化パフォーマンスを向上させるグローバル索引を使用するように構成されます。動的キャッシング・ニア・キャッシュ機能には、eXtreme I/O (XIO) トランスポート・タイプを使用する必要があります。

このファイルは現状のままで使用できますが、場合によっては、以下のエレメントまたは属性が変更されたり非常に重要になったりします。

- **objectGrid name および backingMap name**

  このファイル内にあるこれらの値は、WebSphere Application Server のキャッシュ・インスタンス用に構成された動的キャッシュ・インスタンス名に直接対応せず、通常は変更する必要がありません。ただし、これらの値が変更された場合は、対応するカスタム・プロパティーを動的キャッシュ・インスタンスの構成に追加する必要があります。

- **lockStrategy**

  ニア・キャッシュを使用可能にするためには、このプロパティーを OPTIMISTIC または NONE に設定する必要があります。これら以外の lockingStrategy はニア・キャッシュをサポートしません。

- **nearCacheInvalidationEnabled**

  動的キャッシング・ニア・キャッシュを使用可能にするためには、このプロパティーを true に設定する必要があります。このフィーチャーは pub-sub を使用して、無効化がファー・キャッシュからニア・キャッシュに流れるようにし、無効化が同期されるようにします。

- **nearCacheLastAccessTTLSyncEnabled**

  動的キャッシング・ニア・キャッシュを使用可能にするためには、このプロパティーを true に設定する必要があります。このフィーチャーは pub-sub を使用して、TTL 除去がファー・キャッシュからニア・キャッシュに流れるようにし、それらの除去が同期されるようにします。

- **copyMode**

  この backingMap プロパティーは COPY_TO_BYTES に設定されます。eXtreme I/O (XIO) トランスポート・タイプが使用されたとき、この値は eXtreme Data Format (XDF) を使用可能にします。他の copyMode に変更すると、XDF が使用不可になり、ObjectTransformer プラグイン Bean のコメントを外さなければならなくなります。

- **backingMapPluginCollections**

  MapIndexPlugins と Evictor は動的キャッシングに必須の項目であり、削除しないようにしてください。

- **GlobalIndexEnabled**

  GlobalIndexEnabled プロパティーは DEPENDENCY_ID_INDEX と TEMPLATE_INDEX の両方に含まれており、true に設定されています。この値を false に設定すると、これらの索引に対するグローバル索引フィーチャーが使用不可になります。稼働している区画の合計数が少ない (< 40) 場合を除けば、これらのグローバル索引は使用可能のままにしておくことをお勧めします。

- **ObjectTransformer**

  このファイルは eXtreme Data Format (XDF) で実行するように意図されているので、このプラグインはコメント化されています。 XDF を使用不可にする (copyMode の変更によって) 場合は、このプラグインのコメントを外す必要があります。

動的レガシー ObjectGrid 記述子ファイル (dynacache-legacy85-ObjectGrid.xml)
ニア・キャッシュを選択したときは、このファイルがコンテナー・サーバーを動的キャッシング用に始動するための推奨される ObjectGrid 記述子ファイルです。このファイルは現状のままで使用できますが、場合によっては、以下のエレメントまたは属性が変更されたり非常に重要になったりします。

- **objectGrid name および backingMap name**

  このファイル内にあるこれらの値は、WebSphere Application Server のキャッシュ・インスタンス用に構成された動的キャッシュ・インスタンス名に直接対応せず、通常は変更する必要がありません。ただし、これらの値が変更された場合は、対応するカスタム・プロパティーを動的キャッシュ・インスタンスの構成に追加する必要があります。

- **copyMode**

  この backingMap プロパティーは COPY_ON_READ_AND_COMMIT に設定されます。この値は変更しないでください。

- **lockStrategy**

  この backingMap プロパティーは PESSIMISTIC に設定されます。この値は変更しないでください。

- **backingMapPluginCollections**

  MapIndexPlugins、Evictor、および Object Transformer は動的キャッシングに必須の項目であり、削除しないようにしてください。

Liberty プロファイルを使用した動的キャッシングのためのエンタープライズ・データ・グリッドの構成

Liberty プロファイル サーバーは、動的キャッシュが使用可能になっているアプリケーションのデータをキャッシュに入れるデータ・グリッドをホストできます。

始める前に

- Liberty プロファイル をインストールします。詳しくは、Liberty プロファイルのインストールを参照してください。
- 動的キャッシュを使用するアプリケーションを作成します。詳しくは、デフォルト動的キャッシュ・インスタンス (baseCache) の構成を参照してください。

このタスクについて

Liberty プロファイル は、動的キャッシュが使用可能になっているアプリケーションをサポートするデータ・グリッドをホストします。これは、アプリケーションが、WebSphere Application Server の従来のインストール済み環境で実行されることを意味します。このようなアプリケーションを eXtreme Scale ランタイム環境でキャッシュに入れるには、Liberty プロファイル で指定したカタログ・ドメイン・サービスおよびサーバーのプロパティーを使用するように WebSphere Application Server を構成する必要があります。

手順

1. WebSphere eXtreme Scale 動的キャッシュ機能を使用可能にします。

a. 動的キャッシュ機能を Liberty プロファイル server.xml ファイルに追加します。 例えば、server.xml ファイルは、以下のコード・スタンザのようになります。

```
<featureManager>
<feature>eXtremeScale.server-1.1</feature>
<feature>eXtremeScale.dynacacheGrid-1.1</feature>
</featureManager>
```

2. オプション: server.xml ファイル内の xsDynacacheGrid エレメントのプロパティーを設定します。 以下の任意のプロパティーを変更できますが、デフォルト値を受け入れることをお勧めします。

globalIndexDisabled
グローバル索引無効化により、区画に分割された大規模環境 (例えば、40 区画を超える環境) での無効化の効率が改善されます。詳しくは、307 ページの『データの無効化』を参照してください。デフォルト値: false

objectGridName
データ・グリッドの名前を示すストリング。デフォルト値: DYNACACHE_REMOTE

ojectGridTxTimeout
トランザクションを完了するのに許されている時間を秒で指定します。トランザクションがこの時間内に完了しなかった場合、そのトランザクションはロールバック対象としてマークされ、TransactionTimeoutException 例外が発生します。デフォルト値: 30 (秒)

backingMapLockStrategy
トランザクションがマップ・エントリーにアクセスするたびに内部ロック・マネージャーを使用するかどうかを指定します。この属性は、OPTIMISTIC、PESSIMISTIC または NONE の 3 つの値のいずれかに設定できます。デフォルト値: PESSIMISTIC

backingMapCopyMode
BackingMap インスタンス内のエントリーの get 操作が実際の値、その値のコピー、またはその値のプロキシーを戻すかどうかを指定します。 Java と .NET の両方が同じデータ・グリッドにアクセスできるようにするために eXtreme Data Format (XDF) を使用した場合は、デフォルトおよび必要なコピー・モードは COPY_TO_BYTES です。そうでない場合は、コピー・モード COPY_ON_READ_AND_COMMIT が使用されます。 CopyMode 属性を次の 5 つの値のいずれかに設定します。

COPY_ON_READ_AND_COMMIT
デフォルト値は COPY_ON_READ_AND_COMMIT です。値を COPY_ON_READ_AND_COMMIT に設定すると、アプリケーションが BackingMap インスタンス内にある値オブジェクトへの参照を持たないようにすることができます。代わりに、アプリケーションは BackingMap インスタンス内にある値のコピーを常に使用します。(オプション)

COPY_ON_READ
値を COPY_ON_READ に設定すると、トランザクションがコミットされたときに発生するコピーを除去することによって、COPY_ON_READ_AND_COMMIT 値以上にパフォーマンスを向上させるこ

とができます。 BackingMap データの整合性を保持するため、アプリケーションは、トランザクションがコミットされた後、エントリーに対するすべての参照を削除します。この値を設定すると、ObjectMap.get メソッドは、値に対する参照の代わりにその値のコピーを戻し、トランザクションがコミットされるまで、アプリケーションによってその値に行われた変更が BackingMap エレメントに影響を与えないことを保証します。

COPY_ON_WRITE
値を COPY_ON_WRITE に設定すると、指定したキーのトランザクションによって ObjectMap.get メソッドが初めて呼び出されたときに発生するコピーを除去することにより、COPY_ON_READ_AND_COMMIT 値以上にパフォーマンスを向上させることができます。その代わりに、ObjectMap.get メソッドは、値オブジェクトを直接参照するのではなく、その値にプロキシーを戻します。プロキシーは、アプリケーションが値インターフェース上に set メソッドを呼び出さない限りは、その値のコピーを作成しないことを保証します。

NO_COPY
値を NO_COPY に設定すると、アプリケーションは、ObjectMap.get メソッドを使用して取得した値オブジェクトをパフォーマンス向上と交換に変更しないようにすることができます。 EntityManager API エンティティーに関連付けられているマップの場合は、値を NO_COPY に設定してください。

COPY_TO_BYTES
値を COPY_TO_BYTES に設定すると、オブジェクトのコピー処理がコピー作成のシリアライゼーションに依存している場合に、複雑なオブジェクト・タイプのメモリー・フットプリントを改善し、パフォーマンスを改善します。オブジェクトが Cloneable でないか、あるいは、効率的な copyValue メソッドを使用するカスタム ObjectTransformer が指定されていない場合、デフォルトのコピー・メカニズムは、コピー作成のためにオブジェクトをシリアライズしてインフレーションします。 COPY_TO_BYTES 設定を使用すると、読み取り時にのみインフレーションが実行されて、コミット時にのみシリアライズが実行されます。

デフォルト値: COPY_ON_READ_AND_COMMIT

backingMapNearCacheEnabled
クライアントのローカル・キャッシュを使用可能にするには、値を true に設定します。ニア・キャッシュを使用するには、**lockStrategy** 属性を NONE または OPTIMISTIC に設定する必要があります。デフォルト値: false

mapSetNumberOfPartitions
MapSet エレメント用の区画の数を指定します。デフォルト値: 47

mapSetMinSyncReplicas
同期レプリカの最小数を MapSet 内の区画ごとに指定します。断片は、ドメインが同期レプリカの最小数をサポートできるようになるまで配置されません。minSyncReplicas 値をサポートするには、**minSyncReplicas** 値よりも 1 つ多いコンテナー・サーバーが必要です。同期レプリカの数が

minSyncReplicas 値よりも小さくなると、その区画に対しては書き込みトランザクションを行えなくなります。デフォルト値: `0`

mapSetMaxSyncReplicas
同期レプリカの最大数を MapSet 内の区画ごとに指定します。ドメインがある区画のこの同期レプリカ数に達すると、その特定の区画に対しては他の同期レプリカは配置されません。まだ **maxSyncReplicas** 値を満たしていない場合には、この ObjectGrid をサポートできるコンテナー・サーバーを追加すると、同期レプリカの数を増やすことができます。デフォルト値: `0`

mapSetNumInitialContainers
この mapSet エレメント内の断片に対して初期配置が行われる前に必要となるコンテナー・サーバーの数を指定します。この属性を利用して、データ・グリッドをコールド・スタートからオンラインにするときに、プロセスとネットワーク帯域幅を節約することができます。デフォルト値: `1`

mapSetDevelopmentMode
この属性を使用すると、ある断片をそのピア断片との関係でどこに配置するかを制御できます。developmentMode 属性が `false` に設定されている場合は、同じ区画の 2 つの断片は同じコンピューターには配置されません。developmentMode 属性が `true` に設定されている場合は、同じ区画の断片を同じマシンに配置することができます。いずれの場合も、同一の区画の 2 つの断片は、同一のコンテナー・サーバーには配置されません。デフォルト値: `false`

mapSetReplicaReadEnabled
この属性が `true` に設定されている場合、プライマリー区画とそのレプリカに読み取り要求が配布されます。 replicaReadEnabled 属性が `false` の場合は、読み取り要求はプライマリーにのみ送付されます。デフォルト値: `false`

.

3. Liberty プロファイルを指すように WebSphere Application Server を構成します。

   WebSphere eXtreme Scale コンテナーおよび動的キャッシュが使用可能になっている Web アプリケーションを、別の WebSphere Application Server セルで実行されているかスタンドアロン・プロセスとして実行されているカタログ・サービス・ドメインに接続できます。リモートで構成されたカタログ・サーバーはセルの中で自動的に始動しないため、リモートで構成されたカタログ・サーバーは、すべて手動で始動する必要があります。

   リモート・カタログ・サービス・ドメインを構成する場合、ドメイン名は、リモート・カタログ・サーバーの始動時に指定するドメイン名と一致している必要があります。スタンドアロン・カタログ・サーバーのカタログ・サービスのデフォルトのドメイン名は、`DefaultDomain` です。カタログ・サービスのドメイン名は、**startOgServer**または **startXsServer** コマンド **-domain** パラメーター、サーバー・プロパティー・ファイル、または組み込まれたサーバー API を使用して指定します。リモート・ドメイン内の各リモート・カタログ・サーバー・プロセスは、同じドメイン名を使用して始動する必要があります。カタログ・サーバーの開始方法について詳しくは、ORB トランスポートを使用しているスタンドアロン・カタログ・サービスの開始を参照してください。

動的キャッシュ・インスタンスの構成

WebSphere 動的キャッシュ・サービスは、デフォルト・キャッシュ・インスタンス (baseCache) と追加のサーブレット・キャッシュ・インスタンスおよびオブジェクト・キャッシュ・インスタンスの両方の作成をサポートします。

このタスクについて

デフォルト・キャッシュ・インスタンス (baseCache) は、最初は WebSphere Application Server によってサポートされる唯一の動的キャッシュ・インスタンスでしたが、現在は、WebSphere Commerce Suite で使用される、すぐに使用可能な動的キャッシュ・インスタンスです。追加のサーブレット・キャッシュ・インスタンスおよびオブジェクト・キャッシュ・インスタンスは WebSphere Application Server の後継リリースで追加されたもので、WebSphere 管理コンソールの独立した「キャッシュ・インスタンス」セクションで構成されます。

第 3 章 始めに

製品のインストール後に、開始用 (getting started) サンプルを使用して、インストールをテストし、初めて製品を使用できます。

チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale 入門

WebSphere eXtreme Scale をスタンドアロン環境でインストールした後、入門用サンプル・アプリケーションを使用してインストール済み環境を検証することができます。入門用サンプル・アプリケーションは、メモリー内データ・グリッドおよびエンタープライズ・データ・グリッドの紹介です。入門用サンプル・アプリケーションは、WebSphere eXtreme Scale のフルインストール (クライアントおよびサーバーのインストール) にのみ含まれます。

学習目標

- 環境の構成に使用する ObjectGrid 記述子 XML ファイルとデプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルについて学習する。
- 構成ファイルでカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを開始する。
- クライアント・アプリケーションの開発について学習する (Java または .NET プログラミング言語での開発)。プログラミング言語間の相互運用方法およびエンタープライズ・データ・グリッドの作成について学習する。
- クライアント・アプリケーションを実行して、データをデータ・グリッドに挿入する。
- web コンソールでデータ・グリッドをモニターする。

所要時間

60 分

入門チュートリアル・レッスン 1.1: 構成ファイルを使用したデータ・グリッドの定義

コンテナー・サーバーを始動するために、`objectgrid.xml` ファイルと `deployment.xml` ファイルが必要です。

このサンプルでは、 *wxs_install_root*`/ObjectGrid/gettingstarted/server/config` ディレクトリーに入っている `objectgrid.xml` および `deployment.xml` ファイルを使用します。これらのファイルが開始コマンドに渡され、コンテナー・サーバーとカタログ・サーバーが開始されます。`objectgrid.xml` ファイルは ObjectGrid 記述子 XML ファイルです。`deployment.xml` ファイルは ObjectGrid デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルです。これらのファイルが一緒になって、分散トポロジーを定義します。

関連資料:

ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイル
デプロイメント・ポリシーを構成するには、デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルを使用します。

ObjectGrid 記述子 XML ファイル

ObjectGrid 記述子 XML ファイルは、アプリケーションによって使用される ObjectGrid の構造を定義するのに使用されます。このファイルには、パッキング・マップ構成のリストが含まれます。これらのパッキング・マップはキャッシュ・データを保管します。以下の例は、`objectgrid.xml` ファイルのサンプルです。ファイルの最初の数行には、各 ObjectGrid XML ファイルの必須ヘッダーが含まれています。このサンプル・ファイルは、`Map1` と `Map2` というパッキング・マップがある `Grid` ObjectGrid を定義しています。

```
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
 <objectGrids>
  <objectGrid name="Grid" txTimeout="30">
   <backingMap name="Map1" copyMode="COPY_TO_BYTES"  lockStrategy="PESSIMISTIC"
    nullValuesSupported="false"/>
   <backingMap name="Map2" copyMode="COPY_TO_BYTES"  lockStrategy="PESSIMISTIC"
    nullValuesSupported="false"/>
  </objectGrid>
 </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

8.6+

- ほとんどのデータ・グリッドの場合、30 秒という **txtTmeout** 値は十分なタイムアウト値です。
- シリアライゼーション用のオブジェクト・クラスを提供しないときは、**copyMode** 値が `COPY_TO_BYTES` でなければなりません。
- まずデータ・グリッド・アプリケーションを開発するときは、**lockStrategy** 値として `PESSIMISTIC` が適切なロック・ストラテジーです。このストラテジーでは、ニア・キャッシュや Loader プラグインを使用しません。アプリケーションはロッキングの問題を処理しません。
- **nullValuesSupported** 値を `false` に設定することで、キーからヌル値である値を取得したときに発生する可能性のある問題を回避することができます。この状況では、キーが存在していたかどうかは分かりません。パッキング・マップ内でのヌル値を許可しないようにすれば、この問題を回避することができます。

デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイル

デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルは、対応する ObjectGrid XML である `objectgrid.xml` ファイルと対で使用されることを想定しています。以下の例では、`deployment.xml` ファイルの最初の数行には、各デプロイメント・ポリシー XML ファイルの必須ヘッダーが含まれています。このファイルは、`objectgrid.xml`

ファイル内に定義された Grid ObjectGrid の **objectgridDeployment** エレメントを定義しています。 Grid ObjectGrid 内で定義される Map1 および Map2 BackingMap は、mapSet mapSet に含まれます。

```
<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy
 ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">

    <objectgridDeployment objectgridName="Grid">
        <mapSet name="mapSet" numberOfPartitions="13" minSyncReplicas="0"
     maxSyncReplicas="1" >
            <map ref="Map1"/>
            <map ref="Map2"/>
        </mapSet>
    </objectgridDeployment>

</deploymentPolicy>
```

mapSet エレメントの **numberOfPartitions** 属性は、mapSet の区画の数を指定します。この属性はオプションであり、デフォルト値は 1 です。属性値は、データ・グリッドの予想容量に適したものでなければなりません。

mapSet エレメントの **minSyncReplicas** 属性は、マップ・セット内の各区画の同期レプリカの最小数を指定します。この属性はオプションであり、デフォルトは 0 です。カタログ・サービス・ドメインが同期レプリカの最小数をサポートできるようになるまで、プライマリー断片とレプリカ断片は配置されません。**minSyncReplicas** 値をサポートするためには、**minSyncReplicas** 属性の値よりも 1 つ多くコンテナー・サーバーが必要です。同期レプリカの数が **minSyncReplicas** の値よりも小さくなると、その区画に対しては書き込みトランザクションを行えなくなります。

mapSet エレメントの **maxSyncReplicas** 属性は、マップ・セット内の各区画の同期レプリカの最大数を指定します。この属性はオプションであり、デフォルトは「0」です。カタログ・サービス・ドメインがある区画のこの同期レプリカ数に達すると、その特定の区画に対しては他の同期レプリカは配置されません。まだ **maxSyncReplicas** 値を満たしていない場合には、この ObjectGrid をサポートできるコンテナー・サーバーを追加すると、同期レプリカの数を増やすことができます。サンプルでは **maxSyncReplicas** が 1 に設定されています。つまり、カタログ・サービス・ドメインは最大で 1 つの同期レプリカを配置します。複数のコンテナー・サーバーを始動した場合は、それらのコンテナー・サーバー・インスタンスの 1 つに同期レプリカが 1 つだけ配置されます。

レッスンのチェックポイント

このレッスンでは、以下を学習しました。

- データを保管するマップを ObjectGrid 記述子 XML ファイル内で定義する方法
- デプロイメント記述子 XML ファイルを使用して、データ・グリッドの区画の数とレプリカの数を定義する方法

入門チュートリアル・モジュール 2: クライアント・アプリケーションの作成

データ・グリッドでデータを挿入、更新、削除、および取得するクライアント・アプリケーションを作成します。サンプル・アプリケーションを使用して、ご使用の環境でアプリケーションを作成する方法が学習できます。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下のタスクの実行方法が理解できるようになります。

- Java Java クライアント・アプリケーションの開発
- .NET 8.6+ .NET クライアント・アプリケーションの開発

入門チュートリアル・レッスン 2.1: Java クライアント・アプリケーションの作成

Java

データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる Java クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

wxs_install_root/ObjectGrid/gettingstarted/client/src/ ディレクトリーにある Client.java ファイルは、カタログ・サーバーへの接続方法、ObjectGrid インスタンスの取得方法、および ObjectMap API の使用法を示したクライアント・プログラムです。ObjectMap API は、データをキー値ペアとして保管し、リレーションシップを持たないオブジェクトのキャッシングに適しています。以下のステップでは、Client.java ファイルの内容を検討します。

リレーションシップを持つオブジェクトをキャッシュに入れる必要がある場合は、EntityManager API を使用してください。

1. ClientClusterContext インスタンスを取得することで、カタログ・サービスに接続します。

   カタログ・サーバーに接続するには、ObjectGridManager API の connect メソッドを使用します。使用する connect メソッドが必要とするのは、*hostname*:*port* という形式のカタログ・サーバー・エンドポイントのみです。*hostname*:*port* 値のリストをコンマで区切って、複数のカタログ・サーバー・エンドポイントを示すことができます。以下のコード・スニペットは、カタログ・サーバーへの接続方法と ClientClusterContext インスタンスの取得方法を示します。 8.6+

   ```
   ClientClusterContext ccc = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().connect(cep, null, null);
   ```

   カタログ・サーバーへの接続が成功すれば、connect メソッドは ClientClusterContext インスタンスを戻します。この ClientClusterContext インスタンスは、ObjectGridManager API から ObjectGrid を取得するのに必要です。
2. ObjectGrid インスタンスを取得します。

ObjectGrid インスタンスを取得するには、ObjectGridManager API の getObjectGrid メソッドを使用します。 getObjectGrid メソッドは、ClientClusterContext インスタンスと、データ・グリッド・インスタンスの名前との両方を必要とします。ClientClusterContext インスタンスは、カタログ・サーバーへの接続中に取得されます。 ObjectGrid インスタンスの名前は、`objectgrid.xml` ファイルに指定されている `Grid` です。 以下のコード・スニペットは、ObjectGridManager API の getObjectGrid メソッドを呼び出すことによってデータ・グリッドを取得する方法を示します。

```
ObjectGrid grid = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().getObjectGrid(ccc, "Grid");
```

3. Session インスタンスを取得します。

   取得した ObjectGrid インスタンスから、Session を取得することができます。Session インスタンスは、ObjectMap インスタンスの取得とトランザクション区分の実行のために必要です。以下のコード・スニペットは、ObjectGrid API の getSession メソッドを呼び出すことによって Session インスタンスを取得する方法を示します。

   ```
   Session sess = grid.getSession();
   ```

4. ObjectMap インスタンスを取得します。

   Session を取得した後、Session API の getMap メソッドを呼び出すことによって、Session インスタンスから ObjectMap インスタンスを取得することができます。ObjectMap インスタンスを取得するには、マップ名を getMap メソッドにパラメーターとして渡す必要があります。 以下のコード・スニペットは、Session API の getMap メソッドを呼び出すことによって ObjectMap を取得する方法を示します。

   8.6+

   ```
   ObjectMap map1 = sess.getMap(mapName);
   ```

5. ObjectMap メソッドを使用します。

   ObjectMap インスタンスを取得した後、ObjectMap API を使用できます。ObjectMap インターフェースはトランザクション・マップであり、Session API の begin メソッドおよび commit メソッドを使用したトランザクション区分を必要とすることに注意してください。アプリケーションに明示的なトランザクション区分がない場合、ObjectMap 操作は自動コミット・トランザクションで実行します。

   - 以下のコード・スニペットは、自動コミット・トランザクションでの ObjectMap API の使用方法を示しています。

     8.6+

     ```
     map1.insert(key1, value1);
     ```

   - **8.6+** 一度に 1 つの区画でトランザクションを実行することもできれば、複数の区画でトランザクションを実行することもできます。単一の区画でトランザクションを実行するには、1 フェーズ・コミット・トランザクションを使用します。

     ```
     sess.setTxCommitProtocol(TxCommitProtocol.ONEPHASE);
     sess.begin();
     map1.insert(k, v);
     sess.commit();
     ```

複数の区画でトランザクションを実行するには、2 フェーズ・コミット・トランザクションを使用します。

```
sess.setTxCommitProtocol(TxCommitProtocol.TWOPHASE);
sess.begin();
map1.insert(k, v);
sess.commit();
```

6. オプション: セッションを閉じます。 Session 操作および ObjectMap 操作がすべて完了したら、Session.close() メソッドを使用してセッションを閉じます。このメソッドを実行すると、セッションで使用されていたリソースが返されます。

   ```
   sess.close();
   ```

   結果として、後続の getSession() メソッド呼び出しはより早く戻り、ヒープでの Session オブジェクトが少なくなります。

関連概念:

409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』
ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

関連タスク:

280 ページの『アプリケーション開発入門』
WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発を開始するには、開発環境をセットアップし、使用できる API について学習し、アプリケーションの開発とテストを行う必要があります。

10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

関連情報:

API 資料

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、データ・グリッドの操作を実行するシンプルなクライアント・アプリケーションを作成する方法について学習しました。

入門チュートリアル・レッスン 2.2: .NET クライアント・アプリケーションの作成

.NET

データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる .NET クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

- WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET がインストールされていなければなりません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET のインストールを参照してください。
- このサンプルのプロジェクト・ファイルは Microsoft Visual Studio 2010 以降と連動します。 Microsoft Visual Studio の旧バージョンを使用している場合は、独自のプロジェクト・ファイルを作成する必要があります。

以下の目的で .NET 入門用サンプル・アプリケーションを使用することができます。

- WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET が正しくインストールされていることを確認するため。
- データ・グリッドと通信する .NET クライアント用アプリケーションを作成する方法を学んでカスタム・アプリケーションを作成できるようになるため。このサンプルでは、リモート・カタログ・サーバー上のデータ・グリッドに接続する方法を示します。対話モードは、GridMapPessimisticTx マップを使用して手動トランザクションを実行する方法を示します。コマンド行モードは、GridMapPessimisticAutoTx マップを使用した自動コミット・トランザクションを示します。
- Java 入門用サンプルと相互運用する方法を学習するため。これらのサンプル・アプリケーションは両方とも、項目を TestKey/TestValue のペアでデータ・グリッドに保管します。 .NET サンプルには、シリアライゼーションおよびデシリアライゼーション用の固有の ID を作成する ClassAlias および FieldAlias 属性があります。 Java クライアント・アプリケーションからキー挿入操作が実行されると、.NET クライアントは挿入されたキーに対して取得操作を実行することによって値を取得することができます。

.NET 入門用サンプル・アプリケーションには以下の制約があります。

- ペシミスティック・ロックのみがサポートされます。
- 2 フェーズ・コミット操作はサポートされていません。操作をコミットできる区画は 1 つのみです。複数の区画を伴うコミットを実行すると、MultiplePartitionWriteException 例外が発生します。
- サンプルでは、ヌル値はサポートされません。.NET API はヌル値を許可しますが、ヌル可能タイプを使用する必要があります。

`SimpleClient.csproj` プロジェクト・ファイルが *net_client_home*`/sample/SimpleClient` ディレクトリーにあります。このプロジェクト・ファイルは、カタログ・サーバーに接続し、ObjectGrid インスタンスを取得し、ObjectMap API を使用する方法を示すクライアント・プログラムです。 ObjectMap API は、データをキー値ペアとして保管し、リレーションシップを持たないオブジェクトのキャッシングに適しています。以下のステップには、`SimpleClient.csproj` ファイルの主な内容に関する情報が含まれています。 Microsoft Visual Studio でこのプロジェクト・ファイルをさらに詳細に調べることもできます。

このチュートリアルは、アプリケーションが対話モードで実行されるときに使用される手動トランザクション・マップである IGridMapPessimisticTx の使用を示します。アプリケーションをコマンド行モードで使用した場合は、IGridMapPessimisticAutoTx マップが使用されます。

1. IClientConnectionContext インスタンスを取得することで、カタログ・サービスに接続します。

   カタログ・サーバーに接続するには、IGridManager API の connect メソッドを使用します。

   ```
   IGridManager gm = GridManagerFactory.GetGridManager( );
   ICatalogDomainInfo cdi = gm.CatalogDomainManager.CreateCatalogDomainInfo( endpoint );
   ccc = gm.Connect( cdi, "SimpleClient.properties" );
   ```

   カタログ・サーバーへの接続が成功すれば、Connect メソッドは IClientConnectionContext インスタンスを戻します。IGridManager API からデータ・グリッドを取得するためには IClientConnectionContext インスタンスが必要です。

2. ObjectGrid インスタンスを取得します。

   ObjectGrid インスタンスを取得するには、IGridManager API の GetGrid メソッドを使用します。 GetGrid メソッドは、IClientConnectionContext インスタンスと、データ・グリッド・インスタンスの名前との両方を必要とします。IClientConnectionContext インスタンスは、カタログ・サーバーへの接続中に取得されます。データ・グリッド・インスタンスの名前は、`objectgrid.xml` ファイル内で指定されるグリッドです。

   ```
   grid = gm.GetGrid( ccc, gridName );
   ```

3. map インスタンスを取得します。

   IGrid API の GetGridMapPessimisticTx メソッドを呼び出すことによってマップ・インスタンスを取得することができます。マップの名前をパラメーターとして GetGridMapPessimisticTx メソッドに渡すことでマップ・インスタンスを取得します。

   ```
   pessMap = grid.GetGridMapPessimisticTx<Object, Object>( mapName );
   ```

4. IGridMapPessimisticTx メソッドを使用します。

   マップ・インスタンスが取得された後で、IGridMapPessimisticTx API を使用することができます。

   次のコード・スニペットは、IGridMapPessimisticTx API の使用法を示しています。

   - IGridMapPessimisticTx API でトランザクションを開始するには、map.Transaction.Begin() メソッドを呼び出す必要があります。このメソッドは、操作を実行できる新しいトランザクションを開始します。

     ```
     case "begin":
        map.Transaction.Begin( );
        return 0;
     ```

   - add メソッドは、新しいキー/値のペアを挿入します。キーが現在存在する場合は、例外がスローされます。

```
 case "a":
   if( key == null ) throw new MissingParameterException( "key" );
   if( value == null ) throw new MissingParameterException( "value" );
   map.Add( key, value );
   Console.WriteLine( "SUCCESS: Added key '{0}' with value '{1}',
   partitionId={2}", key, value, partitionId );
   return 0;
```

- put メソッドは、キー/値のペアを挿入または更新します。

```
case "p":
  if( key == null ) throw new MissingParameterException( "key" );
  if( value == null ) throw new MissingParameterException( "value" );
  map.Put( key, value );
  Console.WriteLine( "SUCCESS: Put key '{0}' with value '{1}',
  partitionId={2}", key, value, partitionId );
  return 0;
```

- replace メソッドは、既存のキー/値のペアを置き換えます。項目が存在しない場合には、例外がスローされます。

```
case "r":
  if( key == null ) throw new MissingParameterException( "key" );
  if( value == null ) throw new MissingParameterException( "value" );
  map.Replace( key, value );
  Console.WriteLine( "SUCCESS: Replaced key '{0}' with value '{1}',
  partitionId={2}", key, value, partitionId );
  return 0;
```

- remove メソッドは、キー/値のペアを削除します。

```
case "d":
  if( key == null ) throw new MissingParameterException( "key" );
  map.Remove( key );
  Console.WriteLine( "SUCCESS: Deleted value with key '{0}',
  partitionId={1}", key, partitionId );
   return 0;
```

- get メソッドは、与えられたキーの値を取得します。

```
 case "g":
  if( key == null ) throw new MissingParameterException( "key" );
  value = ( TestValue )map.Get( key );
  if( value != null )
  {
    Console.WriteLine( "SUCCESS: Value is '{0}',
  partitionId={1}", value, partitionId );
  }
  else
  {
    Console.WriteLine( "FAILED: Key not found" );
  }
  return 0;
```

- コミットする前の操作で実行した操作を取り消したい場合は、rollback メソッドを使用します。

```
case "rollback":
  map.Transaction.Rollback( );
  return 0;
```

- commit メソッドは、トランザクションで完了した操作をコミットします。

```
case "commit":
  map.Transaction.Commit( );
  return 0;
```

関連タスク:

.NET 8.6+ 757 ページの『.NET 開発環境の設定』
Microsoft Visual Studio で WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET を使用するには、開発環境をインストールし、WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET アセンブリーを使用するようにプロジェクトを構成する必要があります。

.NET 8.6+ 758 ページの『WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセス』
WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセスは、.chm ファイル内でも、インフォメーション・センターの API 資料を表示しても行うことができます。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、データ・グリッド操作を実行する簡単な .NET クライアント・アプリケーションを作成する方法について学習しました。

レッスン 2.3: エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの作成

Java クライアントと .NET クライアントの両方が同じデータ・グリッドを更新できるエンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを作成するには、ご使用のクラスが互換性を持つようにする必要があります。入門用サンプル・アプリケーションでは、.NET サンプル・アプリケーションが Java デフォルトと一致する別名を持っています。

クラス別名属性とフィールド別名属性を .NET アプリケーションに追加します。 クラス別名を .NET アプリケーション、Java アプリケーション、またはその両方に追加することができます。 .NET サンプルには Java デフォルトと一致する別名があるため、Java アプリケーションは別名を必要としません。 TestKey.cs および TestValue.cs ファイルが *net_client_home*/sample/SimpleClient ディレクトリーにあります。

```
[ClassAlias( "com.ibm.websphere.xs.sample.gettingstarted.model.TestKey" )]
```

図 12. TestKey.cs ファイル内のクラス別名属性

```
[ClassAlias( "com.ibm.websphere.xs.sample.gettingstarted.model.TestValue" )]
```

図 13. TestValue.cs ファイル内のクラス別名属性

関連概念:

8.6+ 139 ページの『ClassAlias および FieldAlias 注釈』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、クラス間でのデータ・グリッドのデータの共有を可能にします。 2 つの Java クラス間または Java クラスと .NET クラス間でデータを共有することができます。

関連タスク:

8.6+ 138 ページの『Java と .NET クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java と .NET クラス間でのデータ・グリッド・データの共有を使用可能にします。

レッスンのチェックポイント:

クラス属性を .NET 入門用アプリケーションに追加しました。その結果、Java 入門用アプリケーションと相互運用してエンタープライズ・データ・グリッドを作成できるようになりました。

モジュール 3: データ・グリッド内でのサンプル・アプリケーションの実行

サンプル・アプリケーションを実行するには、まずカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを始動する必要があります。その後、サンプル・アプリケーションを実行することができます。

カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを始動するためのプロセスは、.NET アプリケーションを実行する場合であろうと Java アプリケーションを実行する場合であろうと同じです。

学習目標

このモジュールのレッスンを完了すると、以下のタスクの実行方法が理解できるようになります。

- カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーの始動
- Java Java 入門用サンプル・クライアント・アプリケーションの実行
- .NET 8.6+ .NET サンプル・クライアント・アプリケーションの実行

8.6+ Java サンプル・アプリケーションと .NET サンプル・アプリケーションを別々に実行するほかに、これらを同じデータ・グリッド上で同時に実行することもできます。例えば、.NET アプリケーションを使用して値をデータ・グリッドに挿入し、次いで Java アプリケーションを使用してその値を取得することができます。このシナリオでは、エンタープライズ・データ・グリッドを実行します。

入門チュートリアル・レッスン 3.1: カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーの始動

サンプル・クライアント・アプリケーションを実行するには、カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを始動する必要があります。

env.sh|bat: このスクリプトは、他のスクリプトから呼び出されて、必要な環境変数を設定します。通常は、このスクリプトを変更する必要はありません。

- UNIX Linux ./env.sh
- Windows env.bat

アプリケーションを実行するには、まずカタログ・サービス・プロセスを開始する必要があります。カタログ・サービスはデータ・グリッドのコントロール・センターです。カタログ・サービスは、コンテナー・サーバーの場所を追跡し、ホスト・コンテナー・サーバーへのデータの配置を制御します。カタログ・サービスが開始したら、データ・グリッドのアプリケーション・データを保管するコンテナー・サーバーを開始できます。データのコピーを複数保管する場合は、複数のコンテナー・サーバーを開始できます。すべてのサーバーが開始したら、クライアント・アプリケーションを実行して、データ・グリッドのデータを挿入、更新、削除、および取得できます。

1. 端末セッションまたはコマンド行ウィンドウを開きます。
2. 端末セッション・ウィンドウまたはコマンド行ウィンドウで、サーバー・インストール済み環境の *wxs_install_root*/ObjectGrid/gettingstarted ディレクトリーに移動します。
3. 次のスクリプトを実行して、ローカル・ホストでカタログ・サービス・プロセスを開始します。 8.6+
   - UNIX Linux ./startcat.sh
   - Windows startcat.bat

   カタログ・サービス・プロセスは、現行の端末ウィンドウで実行されます。

   カタログ・サービスは **startXsServer** コマンドを使用して開始することもできます。 **startXsServer** を *wxs_install_root*/ObjectGrid/bin ディレクトリーから実行します。

   - UNIX Linux 8.6+ ./startXsServer.sh cs0 -catalogServiceEndPoints cs0:localhost:6600:6601 -listenerPort 2809
   - Windows 8.6+ startXsServer.bat cs0 -catalogServiceEndPoints cs0:localhost:6600:6601 -listenerPort 2809
4. 別の端末セッションまたはコマンド行ウィンドウを開き、次のコマンドを実行して、コンテナー・サーバー・インスタンスを開始します。 8.6+
   - UNIX Linux ./startcontainer.sh server0
   - Windows startcontainer.bat server0

   コンテナー・サーバーは、現行の端末ウィンドウで実行されます。レプリカ生成をサポートするためにさらに多くのコンテナー・サーバー・インスタンスを開始する場合、別のサーバー名を使用してこのステップを繰り返すことができます。

   コンテナー・サーバーは **startXsServer** コマンドを使用して開始することもできます。 **startXsServer** コマンドを *wxs_install_root*/ObjectGrid/bin ディレクトリーから実行します。

- UNIX Linux 8.6+ `./startXsServer.sh c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -objectgridFile gettingstarted/server/config/objectgrid.xml -deploymentPolicyFile gettingstarted/server/config/deployment.xml`
- Windows 8.6+ `startXsServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -objectgridFile gettingstarted¥server¥config¥objectgrid.xml -deploymentPolicyFile gettingstarted¥server¥config¥deployment.xml`

5. Java 8.6+ オプション: カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを別々に始動する代わりに、**runall** スクリプトを使用して、カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、および Java サンプル・クライアント・アプリケーションを同じ Java 仮想マシンで始動することができます。 8.6+
   - UNIX Linux `./runall.sh`
   - Windows `runall.bat`

   制約事項: runall スクリプトは組み込みコンテナー・サーバーを実行するため、モニター・コンソールを使用して環境をモニターすることはできません。コンテナー・サーバーについての統計は収集されません。

関連タスク:

スタンドアロン・サーバーの始動と停止
スタンドアロンのカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーの始動と停止は、スクリプトまたは組み込みのサーバー API を使用して行うことができます。

関連資料:

8.6+ **startXsServer** スクリプト (XIO)
startXsServer スクリプトは、IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムを使用するコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーを始動します。エンタープライズ・データ・グリッドが必要なときは、**startXsServer** を使用しなければなりません。サーバーの始動時に各種パラメーターを使用して、トレースを使用可能にしたり、ポート番号を指定するなど、さまざまな設定を行うことができます。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、以下を学習しました。

- カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを開始する方法

入門チュートリアル・レッスン 3.2: Java 入門用サンプル・クライアント・アプリケーションの実行

Java

以下のステップを使用して、データ・グリッドと対話する Java クライアントを実行します。この例では、カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびクライアントがすべて単一のサーバー上で実行されます。

- 8.6+ クライアントを対話モードで実行します。 コマンド行ウィンドウから、次のいずれかのコマンドを実行します。

– UNIX Linux `./runclient.sh`

– Windows `runclient.bat`

1. トランザクションを開始します。 トランザクションに対して 1 フェーズ・コミット操作または 2 フェーズ・コミット操作を使用することができます。1 フェーズ・コミットの場合は、トランザクションが単一の区画に書き込まれなければなりません。異なる区画に配置される複数のキーをトランザクション時に挿入すると、コミット時にトランザクションが失敗します。2 フェーズ・コミットを使用すれば、単一のトランザクションで複数の区画に書き込まれるようにすることができます。
   – 1 フェーズ・コミット・トランザクションを開始します。
   ```
   begin
   ```
   – 2 フェーズ・コミット・トランザクションを開始します。
   ```
   begin2pc
   ```
2. 値を挿入します。
   ```
   > i key1 helloWorld
   SUCCESS: Inserted TestValue [value=helloWorld] with key TestKey [key=key1], part
   itionId=6
   ```
3. 挿入した値を取得します。
   ```
   > g key1
   Value is TestValue [value=helloWorld], partitionId=6
   ```
4. 値を更新します。
   ```
   > u key1 goodbyeWorld
   SUCCESS: Updated key TestKey [key=key1] with value TestValue [value=goodbyeWorld
   ], partitionId=6
   ```
5. トランザクションをロールバックします。 トランザクションをロールバックすると、このトランザクションに関連するすべての操作がキャンセルされます。
   ```
   > rollback
   ```
6. ロールバック操作をテストするには、キーの取得を再び試みます。 トランザクションをロールバックしたので、キーが存在していません。
   ```
   > g key1
   ```
7. 値を挿入します。
   ```
   > i key1 helloWorld
   SUCCESS: Inserted TestValue [value=helloWorld] with key TestKey [key=key1], part
   itionId=6
   ```
8. 値をコミットします。 トランザクションをコミットした後から変更をロールバックすることはできません。

```
> commit
```

9. 挿入した値を削除します。

```
> d key1
SUCCESS: Deleted value with key TestKey [key=key1], partitionId=6
```

10. テスト項目をいくつか挿入します。 例えば、0 から 999 までの番号が付けられた 1000 個のキーおよび値を挿入するには、次のコマンドを使用します。

```
> n 1000
```

- **8.6+** クライアントをコマンド行モードで実行します。 クライアント・アプリケーションを実行するスクリプトを作成したい場合は、コマンド行モードが役立ちます。対話モードで実行するコマンドと同じコマンドを実行することができます。コマンド行モードの構文の例を以下に示します。
  - UNIX Linux

```
./runclient.sh i "key1" "helloWorld"
```

  - Windows

```
runclient.bat i "key1" "helloWorld"
```

レッスンのチェックポイント:

学習した内容

このレッスンでは、以下を学習しました。

- データ・グリッドに対してデータの挿入、取得、更新、および削除を行う Java サンプル・クライアント・アプリケーションを実行する方法。

入門チュートリアル・レッスン 3.3: .NET サンプル・クライアント・アプリケーションの実行

.NET

以下のステップを使用して、データ・グリッドと対話する .NET クライアント・アプリケーションを実行します。この例では、カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびクライアントがすべて単一のサーバー上で実行されます。

.NET クライアントは 1 フェーズ・コミットのみをサポートします。したがって、同じトランザクションで複数の値を挿入しようと試みた場合は、それらの値が異なる区画に送られるため例外が発生します。サンプルを実行したときこのような例外が発生しないようにするため、1 つの区画を使用するようにデプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルを変更することができます。区画数の更新について詳しくは、259 ページの『入門チュートリアル・レッスン 1.1: 構成ファイルを使用したデータ・グリッドの定義』を参照してください。

サンプル・アプリケーションは対話モードまたはコマンド行モードで実行することができます。対話モードでは、アプリケーションは IGridMapPessimisticTx API を使用して手動データ・グリッド・トランザクションを実行します。コマンド行モードでは、IGridMapPessimisticAutoTx API を使用して自動データ・グリッド・トランザクションを実行します。

サンプルは対話モードまたはコマンド行モードで実行することができます。

- サンプル・クライアント・アプリケーションを対話モードで実行します。
  1. シンプルなクライアント・アプリケーションを実行します。ファイルは *net_client_home*¥gettingstarted¥bin¥ ディレクトリーにあります。 サンプルを対話モードで実行するには、次のコマンドを実行します。

     ```
     SimpleClient.exe -i
     ```

     アプリケーションはデフォルトでは localhost:2809 ホストに接続します。デフォルトをオーバーライドするには、リモート・ホストおよびポートをパラメーターとしてアプリケーションに提供することもできます。

     ```
     SimpleClient.exe -i -h <endpoint>
     ```

     パラメーターなしでアプリケーションを実行した場合は、アプリケーションのヘルプが表示されます。
  2. 使用可能なコマンドのリストを表示します。

     ```
     Enter a command: help
     This program executes simple CRUD operations on a map.
             a - Adds a value with the specified key. If the key already exists,
             DuplicatKeyException is thrown
             p - Adds a value with the specified key, replacing the entry if it
             already exists
             r - Replaces the value of the specified key. If the key does not exist,
             a CacheKeyNotFound exception is thrown
             g - Retrieve and display the value of the specified key
             d - Deletes the key
             gp - Gets the partition id for the key
             ck - Checks if the map contains the key
             h - Display help
             begin - Begin manual transaction
             commit - Commit transactions
             rollback - Rollback transactions
             exit - Exit program
     ```

  3. トランザクションを開始します。 データ・グリッドでコマンドを実行するためにはトランザクションを開始する必要があります。トランザクションを開始しなかった場合は、NoActiveTransacationException 例外が発生します。

     ```
     Enter a command: begin
     ```

  4. データ・グリッドにデータを追加します。

     ```
     Enter a command: a key1 value1
     SUCCESS: Added 'TestKey [key=key1]' with value 'TestValue [value=value1]',
     partitionId=6
     ```

  5. 値を検索して表示します。

```
Enter a command: g key1
SUCCESS: Value is 'TestValue [value=value1]', partitionId=6
```

この例では、 value1 が戻されます。

6. キーを更新します。 put コマンドを使用します。このコマンドは、指定されたキーを持つ値を追加するもので、既存の値が存在する場合はそれを置き換えます。

```
Enter a command: p key1 value2
SUCCESS: Put key 'TestKey [key=key1]' with value 'TestValue [value=value2]',
 partitionId=6
Enter a command: g key1
SUCCESS: Value is 'TestValue [value=value2]', partitionId=6
```

7. キーを置き換えます。 replace コマンドは、指定されたキーの値を置き換えます。キーが存在しない場合は、CacheKeyException 例外が発生します。

```
Enter a command: r key1 value3
SUCCESS: Replaced key 'TestKey [key=key1]' with value 'TestValue [value=value3]'
, partitionId=6
```

8. トランザクションをロールバックし、キーと値の再表示を試みます。 トランザクションは、コミットする前であればいつでもロールバックすることができます。

```
Enter a command: rollback
Enter a command: begin
Enter a command: g key1
FAILED: Key not found
```

get コマンドを実行すると、キーが見つからなかった場合は例外が発生します。

9. キーと値をデータ・グリッドにコミットします。

```
Enter a command: begin
Enter a command: a key2 value2
SUCCESS: Added 'TestKey [key=key2]' with value 'TestValue [value=value2]',
partitionId=7
Enter a command: commit
```

10. キーの区画 ID を取得します。

```
Enter a command: begin
Enter a command: gp key2
SUCCESS: partitionId=7
```

11. キーのマップを確認します。

```
Enter a command: ck key2
SUCCESS: The map contains key 'TestKey [key=key2]'
Enter a command: ck key3
SUCCESS: The map does NOT contain key 'TestKey [key=key3]'
```

12. キーを削除し、終了します。

```
Enter a command: begin
Enter a command: d key2
SUCCESS: Deleted value with key 'TestKey [key=key2]', partitionId=7
Enter a command: commit
Enter a command: exit
```

- クライアントをコマンド行モードで実行します。コマンド行モードでは、IGridMapPessimisticAutoTx API を使用して自動データ・グリッド・トランザクションを実行します。このモードを使用するには、コマンド行でアクションを渡します。クライアント・アプリケーションを実行するスクリプトを作成したい場合は、コマンド行モードが役立ちます。対話モードで実行するコマンドと同じコマンドを実行することができます。コマンド行モードの構文の例を以下に示します。

```
SimpleClient [-h <host:port>] <a | p | r | g | d> <key> [<value>]
```

関連タスク:

.NET 8.6+ 757 ページの『.NET アプリケーションの開発』
Java アプリケーションと同じデータ・グリッドを使用する Microsoft .NET アプリケーションを開発できます。

758 ページの『WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセス』
WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセスは、.chm ファイル内でも、インフォメーション・センターの API 資料を表示しても行うことができます。

レッスンのチェックポイント:

このレッスンでは、以下を学習しました。

- データ・グリッドに対してオブジェクトの挿入、取得、更新、および削除を行う .NET サンプル・クライアント・アプリケーションを実行する方法。

入門チュートリアル・レッスン 4: 環境のモニター

xscmd ユーティリティーおよび Web コンソールのツールを使用して、データ・グリッド環境をモニターできます。

関連タスク:

Web コンソールでの統計の表示
統計やその他のパフォーマンス情報を Web コンソールでモニターできます。

Web コンソールによるモニター
Web コンソールでは、現在と過去の統計をグラフにできます。このコンソールには、概要を表示するように事前構成されたグラフがいくつか用意されているほか、使用可能な統計からグラフを作成できるカスタム・レポート・ページもあります。WebSphere eXtreme Scale のモニター・コンソールのグラフ機能を使用して、環境内のデータ・グリッドの全体的なパフォーマンスを表示できます。

Web コンソールの開始とログオン
startConsoleServer コマンドを実行してコンソール・サーバーを始動し、デフォルトのユーザー ID とパスワードを使用してサーバーにログオンします。

Web コンソールのカタログ・サーバーへの接続
Web コンソールで統計の表示を開始するには、最初に、モニターするカタログ・サーバーに接続する必要があります。カタログ・サーバーのセキュリティーが使用可能になっている場合は、追加のステップが必要です。

xscmd ユーティリティーによるモニター
xscmd ユーティリティーは、完全にサポートされたモニターおよび管理のツールとして、**xsadmin** サンプル・ユーティリティーに取って代わります。**xscmd** ユーティリティーを使用すれば、WebSphere eXtreme Scale トポロジーに関するテキスト情報を表示できます。

xscmd ユーティリティーによる管理
xscmd ユーティリティーを使用して、マルチマスター・レプリカ生成リンクの確立、クォーラムの上書き、ティアダウン・コマンドを使用したサーバー・グループの停止などの管理タスクを環境内で実行することができます。

関連資料:

Web コンソール統計
Web コンソールで使用しているビューに応じて、構成に関するさまざまな統計を表示できます。これらの統計値には、使用メモリー、上位使用データ・グリッド、およびキャッシュ・エントリー数などがあります。

8.6+ **startXsServer** スクリプト (XIO)
startXsServer スクリプトは、IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムを使用するコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーを始動します。エンタープライズ・データ・グリッドが必要なときは、**startXsServer** を使用しなければなりません。サーバーの始動時に各種パラメーターを使用して、トレースを使用可能にしたり、ポート番号を指定するなど、さまざまな設定を行うことができます。

Web コンソールによるモニター

Web コンソールでは、現在と過去の統計をグラフにできます。このコンソールには、概要を表示するように事前構成されたグラフがいくつか用意されているほか、使用可能な統計からグラフを作成できるカスタム・レポート・ページもあります。WebSphere eXtreme Scale のモニター・コンソールのグラフ機能を使用して、環境内のデータ・グリッドの全体的なパフォーマンスを表示できます。

インストール・ウィザードを実行するとき、オプション・フィーチャーとして Web コンソールをインストールします。

1. コンソール・サーバーを始動します。 コンソール・サーバーを始動する **startConsoleServer.bat|sh** スクリプトは、インストール済み環境の *wxs_install_root*/ObjectGrid/bin ディレクトリーにあります。
2. コンソールにログオンします。
   a. Web ブラウザーから、https://your.console.host:7443 に進み、your.console.host を、コンソールをインストールしたサーバーのホスト名に置き換えます。
   b. コンソールにログオンします。
      - **ユーザー ID:** admin
      - **パスワード:** admin

      コンソールのウェルカム・ページが表示されます。
3. コンソール構成を編集します。 「**設定**」 > 「**構成**」をクリックして、コンソール構成を確認します。コンソール構成には、以下のような情報があります。
   - WebSphere eXtreme Scale クライアントのトレース・ストリング (*=all=disabled など)
   - 管理者の名前とパスワード
   - 管理者の E メール・アドレス
4. モニター対象のカタログ・サーバーへの接続を確立して維持します。次のステップを繰り返して、それぞれのカタログ・サーバーを構成に追加します。
   a. 「**設定**」 > 「**eXtreme Scale カタログ・サーバー**」をクリックします。
   b. 新規カタログ・サーバーを追加します。

      1) 「追加」アイコン ( ) をクリックして、既存のカタログ・サーバーを登録します。
      2) ホスト名、リスナー・ポートなどの情報を指定します。ポートの構成およびデフォルトについて詳しくは、330 ページの『ネットワーク・ポートの計画』を参照してください。
      3) 「**OK**」をクリックします。
      4) カタログ・サーバーがナビゲーション・ツリーに追加されていることを確認します。
5. カタログ・サービス・ドメインの中に作成するカタログ・サーバーをグループにします。 カタログ・サービス・ドメインでセキュリティー設定が構成されているため、カタログ・サーバーでセキュリティーが使用可能にされているときはカタログ・サービス・ドメインを作成する必要があります。
   a. 「**設定**」 > 「**eXtreme Scale ドメイン**」ページをクリックします。
   b. 新規カタログ・サービス・ドメインを追加します。

      1) 「追加」アイコン ( ) をクリックして、カタログ・サービス・ドメインを登録します。カタログ・サービス・ドメインの名前を入力します。

2) カタログ・サービス・ドメインを作成した後、プロパティーを編集できます。カタログ・サービス・ドメインのプロパティーは次のとおりです。

Name 管理者によって割り当てられた、ドメインのホスト名を示します。

カタログ・サーバー
選択したドメインに属する 1 つ以上のカタログ・サーバーをリストします。前のステップで作成したカタログ・サーバーを追加できます。

生成プログラム・クラス
CredentialGenerator インターフェースを実装するクラスの名前を指定します。このクラスを使用して、クライアントの資格情報が取得されます。このフィールドに値を指定すると、`client.properties` ファイルにある **`crendentialGeneratorClass`** プロパティーが、指定した値でオーバーライドされます。

生成プログラム・プロパティー
CredentialGenerator 実装クラスのプロパティーを指定します。このプロパティーが、setProperties(String) メソッドを使用してオブジェクトに設定されます。 credentialGeneratorprops 値は、credentialGeneratorClass プロパティーの値が非ヌルの場合にのみ使用されます。このフィールドに値を指定すると、`client.properties` ファイルにある **`credentialGeneratorProps`** プロパティーが、指定した値でオーバーライドされます。

eXtreme Scale クライアント・プロパティー・パス
前のステップでセキュリティー・プロパティーを含める編集をしたクライアント・プロパティー・ファイルへのパスを指定します。例えば、`c:¥ObjectGridProperties¥sampleclient.properties` ファイルを示します。コンソールがセキュア接続を使用しないようにする場合は、このフィールドの値を削除できます。パスを設定した後、コンソールは非セキュアな接続を使用します。

3) 「**OK**」をクリックします。

4) ドメインがナビゲーション・ツリーに追加されていることを確認します。

既存のカタログ・サービス・ドメインに関する情報を表示するには、「**設定**」 > 「**eXtreme Scale ドメイン**」ページのナビゲーション・ツリーの中で、カタログ・サービス・ドメインの名前をクリックします。

6. 接続状況を表示します。 「**現行ドメイン**」フィールドは、Web コンソールの中で情報を表示するために現在使用されているカタログ・サービス・ドメインの名前を示します。接続状況が、カタログ・サービス・ドメインの名前の隣に表示されます。
7. データ・グリッドおよびサーバーの統計を表示するか、カスタム・レポートを作成します。

xscmd ユーティリティーによるモニター

1. オプション: クライアント認証が使用可能な場合: コマンド行ウィンドウを開きます。コマンド行で、適切な環境変数を設定します。
2. *wxs_home*`/bin` ディレクトリーに移動します。

```
cd wxs_home/bin
```

3. 各種コマンドを実行して、環境に関する情報を表示します。
   - Grid データ・グリッドと mapSet マップ・セットのすべてのオンライン・コンテナー・サーバーを表示します。

     ```
     xscmd -c showPlacement -g Grid -ms mapSet
     ```
   - データ・グリッドのルーティング情報を表示します。

     ```
     xscmd -c routetable -g Grid
     ```
   - データ・グリッド内のマップ・エントリーの数を表示します。

     ```
     xscmd -c showMapSizes -g Grid -ms mapSet
     ```

サーバーの停止

クライアント・アプリケーションの使用と入門用サンプル環境のモニターが終了したら、サーバーを停止できます。

- スクリプト・ファイルを使用してサーバーを開始した場合は、<ctrl+c> を使用して、カタログ・サービス・プロセスおよびコンテナー・サーバーをそれぞれのウィンドウで停止します。
- **startXsServer** コマンドを使用してサーバーを開始した場合は、**stopXsServer** コマンドを使用してサーバーを停止します。

  コンテナー・サーバーを停止します。

  - UNIX Linux
    ```
    stopXsServer.sh c0 -catalogServiceEndPoints
    localhost:2809
    ```
  - Windows
    ```
    stopXsServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints
    localhost:2809
    ```

  カタログ・サーバーを停止します。

  - UNIX Linux
    ```
    stopXsServer.sh cs1 -catalogServiceEndPoints
    localhost:2809
    ```
  - Windows
    ```
    stopXsServer.bat cs1 -catalogServiceEndPoints
    localhost:2809
    ```

レッスンのチェックポイント

このレッスンでは、以下を学習しました。

- Web コンソールを開始して、カタログ・サーバーに接続する方法
- データ・グリッドおよびサーバーの統計をモニターする方法
- サーバーを停止する方法

アプリケーション開発入門

Java

WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発を開始するには、開発環境をセットアップし、使用できる API について学習し、アプリケーションの開発とテストを行う必要があります。

始める前に

このタスクについて

8.6+ アプリケーションの開発を開始するために実行するステップは、使用しているプログラミング言語 (Java または .NET) に応じて若干異なります。 Java アプリケーションでは、API を使用してサーバー操作を制御することができます。これらの API では、サーバーや ObjectGrid インスタンスを作成および開始したり、データ・グリッドにデータを挿入したりすることができます。 .NET アプリケーションでは、アプリケーションは稼働中のカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーに接続します。したがって、.NET アプリケーションを使用している場合は、クライアント・アプリケーションを実行する前にサーバーを始動する必要があります。

手順

1. 開発環境をセットアップし、API 資料にアクセスします。

   API を使用してアプリケーションの開発を開始することができます。開発環境内で API 資料を使用することもできます。

   Java **詳細情報:** 373 ページの『Eclipse でのスタンドアロン開発環境のセットアップ』

   Java **詳細情報:** 372 ページの『Java API 資料へのアクセス』

   .NET 8.6+ **詳細情報:** 757 ページの『.NET 開発環境の設定』

   .NET 8.6+ **詳細情報:** 758 ページの『WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセス』

2. Java Java 環境では、サーバーを始動したり、ObjectGrid インスタンスを作成したり、データ・グリッドにデータを挿入したりする簡単なアプリケーションを作成することができます。

   a. サーバーを開始または停止するには、ServerFactory API を使用します。

      詳細情報: 組み込みサーバー API を使用したサーバーの開始と停止

   b. 作成した ObjectGrid インスタンスを取得するには、ObjectGridManager API を使用します。

      詳細情報: 387 ページの『ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid との対話』

   c. データをデータ・グリッドに挿入するには、ObjectMap API を使用します。

      詳細情報: 409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』ObjectMap API はデータ・グリッドにアクセスしたり、データをデータ・グリッドに書き込むための最もシンプルな方法です。オブジェクトが複雑なリレーションシップを含んでいる場合は、次の API を使用してデータの読み取り、書き込み、および更新ができます。

      - 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』

- 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
- 483 ページの『エンティティーおよびオブジェクトの取得 (Query API)』
- 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』

さまざまな API の選択の詳細については、 371 ページの『第 5 章 アプリケーションの開発』を参照してください。

3. .NET 8.6+ .NET 環境では、カタログ・サーバーに接続したり、データ・グリッドおよびマップ・インスタンスを取得したり、データの読み取り、書き込み、更新を行ったりするクライアント・アプリケーションを作成することができます。 基本的な .NET アプリケーションの作成について詳しくは、 264 ページの『入門チュートリアル・レッスン 2.2: .NET クライアント・アプリケーションの作成』を参照してください。
4. アプリケーションを単体テストします。

   xscmd ユーティリティーを使用して、実行中のサーバー、レプリカなどに関する情報を表示することもできます。詳しくは、**xscmd** ユーティリティーによる管理を参照してください。
5. 開発環境内でアプリケーションの確認が完了したら、XML 構成ファイルを作成し、その構成を使用するようにアプリケーションを更新します。 入門用サンプル・アプリケーションには、そのような構成ファイルのサンプルと構成ファイルを使用するシンプルなアプリケーションが用意されています。

   詳細情報: 259 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale 入門』
6. XML 構成ファイルを使用してアプリケーションを実行します。サーバーを開始する方法は、使用する環境によって異なります。

   アプリケーションは、次のいずれかのコンテナー内で実行できます。
   - スタンドアロン Java 仮想マシン (JVM)
   - Tomcat
   - WebSphere Application Server
   - OSGi

関連概念:

409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』
ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

Java 354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

関連情報:

API 資料

262 ページの『入門チュートリアル・レッスン 2.1: Java クライアント・アプリケーションの作成』
データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる Java クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

Java API 資料

第 4 章 計画

WebSphere eXtreme Scale をインストールして、データ・グリッド・アプリケーションをデプロイする前に、キャッシング・トポロジーを決定し、キャパシティー・プランニングを実行し、ハードウェア要件およびソフトウェア要件、ネットワーキングとチューニングの設定などを検討する必要があります。運用チェックリストを使用して、アプリケーションをデプロイできる環境になっているかどうかを確認することもできます。

使用する WebSphere eXtreme Scale アプリケーションを設計する際に利用できるベスト・プラクティスについては、developerWorks®: ハイパフォーマンスで高い回復力を持つ WebSphere eXtreme Scale アプリケーションを作成するための原則とベスト・プラクティス (Principles and best practices for building high performing and highly resilient WebSphere eXtreme Scale application) の記事を参照してください。

計画の概要

WebSphere eXtreme Scaleを実稼働環境で使用する前に、デプロイメントを最適化するための以下の問題を検討してください。

キャッシング・トポロジーに関する考慮事項

キャッシュ・トポロジーのタイプごとに利点と欠点があります。実装するキャッシング・トポロジーは、環境とアプリケーションの要件によって異なります。各種キャッシング・トポロジーについて詳しくは、 286 ページの『トポロジーの計画』を参照してください。

データ・キャパシティーに関する考慮事項

次のリストに、検討項目を示します。

- **システムおよびプロセッサーの数**: 環境内には物理マシンとプロセッサーがいくつ必要ですか?
- **サーバーの数**: いくつの eXtreme Scale サーバーが eXtreme Scale マップをホストしますか?
- **区画の数**: マップ内に保管されるデータの量は、必要な区画の数を決定する 1 つの要因です。
- **レプリカの数**: ドメイン内の各プライマリーに対してレプリカがいくつ必要ですか?
- **同期または非同期レプリカ生成**: データがきわめて重要であるため、同期レプリカ生成が必要ですか? それとも、パフォーマンスに高い優先度を置くため、非同期レプリカ生成が適切な選択ですか?
- **ヒープ・サイズ**: 各サーバーには、どれほどのデータが保管されますか?

上記の個々の考慮事項について詳しくは、 250 ページの『環境キャパシティーの計画』を参照してください。

インストールの注意点

WebSphere eXtreme Scale は、スタンドアロン環境にインストールできます。あるいは、そのインストールを WebSphere Application Server と統合できます。将来、サーバーをシームレスにアップグレードできるようにするには、そのように環境を計画する必要があります。最良のパフォーマンスのために、カタログ・サーバーは、コンテナー・サーバーと異なるマシンで実行してください。カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを同じマシン上で実行しなければならない場合は、カタログ・サーバーとコンテナー・サーバーで別個の WebSphere eXtreme Scale のインストールを使用してください。2 つのインストールを使用することにより、最初にカタログ・サーバーを実行しているインストールをアップグレードできます。eXtreme Scale サーバーの更新を参照してください。

トポロジーの計画

WebSphere eXtreme Scale を使用して、アーキテクチャーはローカルのメモリー内でのデータ・キャッシング、または分散クライアント/サーバーでのデータ・キャッシングを使用できます。 アーキテクチャーは、データベースとさまざまな関係を持つことができます。複数のデータ・センターに及ぶトポロジーを構成することもできます。

WebSphere eXtreme Scale を作動させるには、最低限の追加インフラストラクチャーが必要です。インフラストラクチャーは、サーバー上で Java Platform, Enterprise Edition アプリケーションをインストール、開始、および停止するためのスクリプトで構成されます。キャッシュ・データはコンテナー・サーバー内に保管され、クライアントはリモート側でサーバーに接続します。

メモリー内の環境

メモリー内のローカル環境にデプロイすると、WebSphere eXtreme Scale は、単一 Java 仮想マシン内で稼働するため、複製されません。ローカル環境を構成するには、ObjectGrid XML ファイルまたは ObjectGrid API を使用できます。

分散環境

分散環境にデプロイすると、WebSphere eXtreme Scale は Java 仮想マシンのセット内で稼働し、パフォーマンス、可用性、およびスケーラビリティーが向上します。この構成では、データのレプリカ生成および区画化の使用が可能です。また、既存の eXtreme Scale サーバーを再始動せずに、別のサーバーを追加することもできます。ローカル環境の場合と同じように、分散環境でも ObjectGrid XML ファイル、または同等のプログラマチック構成が必要です。構成詳細を持つデプロイメント・ポリシー XML ファイルも提供する必要があります。

単純なデプロイメントを作成することも、数千ものサーバーが必要になる大規模なテラバイト・サイズのデプロイメントを作成することもできます。

ローカルのメモリー内のキャッシュ

最も単純なケースでは、WebSphere eXtreme Scale は、ローカルの (非分散型の) メモリー内のデータ・グリッド・キャッシュとして使用できます。 ローカルのケースは、特に複数のスレッドにより一時データにアクセスして変更する必要がある、高

い並行性を持つアプリケーションで有効になります。 ローカル・データ・グリッドに保持されるデータは、索引を付け、照会を使用して検索することができます。照会は、大規模なメモリー内データ・セットを処理するのに役立ちます。Java 仮想マシン (JVM)で提供されるサポートは、すぐに使用する準備ができているものの、データ構造に制限があります。

WebSphere eXtreme Scale でのローカルのメモリー内キャッシュ・トポロジーは、単一 Java 仮想マシン内で、一時データへの整合したトランザクション・アクセスを可能にするために使用されます。

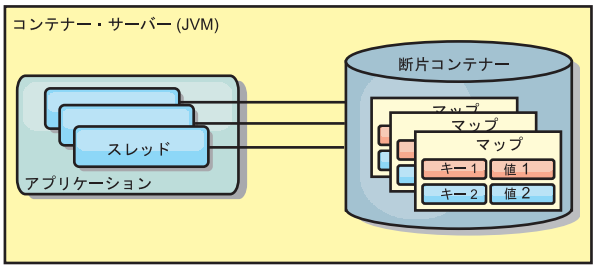


図 14. ローカルのメモリー内のキャッシュ・シナリオ

利点

- セットアップが簡単: ObjectGrid は、プログラマチックに作成することも、ObjectGrid デプロイメント記述子 XML ファイルまたは Spring などのその他のフレームワークを使用して宣言的に作成することもできます。
- 高速: 各 BackingMap は、最適のメモリー使用効率および並行性が得られるように独立して調整できます。
- 扱うデータ・セットが小さい単一 Java 仮想マシン・トポロジー、また頻繁にアクセスされるデータのキャッシングに最適。
- トランザクション型。BackingMap 更新は、単一の作業単位にまとめることができ、Java Transaction Architecture (JTA) トランザクションなどの 2 フェーズ・トランザクションの最終参加者として統合することができます。

欠点

- フォールト・トレラントでない。
- データは複製されない。メモリー内キャッシュは読み取り専用参照データに最適。
- スケーラブルでない。データベースが必要とするメモリーの量が Java 仮想マシンを圧倒するおそれがある。
- Java 仮想マシンを追加するときに、次のような問題が発生する。
  - データを簡単には区画化できない
  - Java 仮想マシン間で状態を手動で複製しなければならない。そうしないと、各キャッシュ・インスタンスが同一データの別バージョンを保持するようになります
  - 無効化にかかるコストが高い。
  - 各キャッシュは個別にウォームアップが必要になる。ウォームアップは、有効なデータがキャッシュに設定されるようにデータをロードする期間です。

使用する場合

ローカルのメモリー内キャッシュのデプロイメント・トポロジーは、キャッシュに入れるデータ量が小さく (1 つの Java 仮想マシンに収まる場合)、比較的安定している場合に限って使用するようにしてください。このアプローチの場合、不整合データの存在を許容する必要があります。Evictor を使用して、最も使用頻度が高いデータまたは最近使用されたデータをキャッシュに保持するようにすると、キャッシュ・サイズを小さく維持し、データの関連性を高くすることができます。

ピア複製されるローカル・キャッシュ

独立したキャッシュ・インスタンスを持つプロセスが複数ある場合は、確実にキャッシュが同期されるようにする必要があります。キャッシュ・インスタンスが確実に同期されるようにするには、Java Message Service (JMS)を使用して、ピア複製されるキャッシュを有効にします。

WebSphere eXtreme Scale には、ピア ObjectGrid インスタンス間にトランザクション変更を自動的に伝搬する 2 つのプラグインがあります。
JMSObjectGridEventListener プラグインは、JMS を使用して、eXtreme Scale 変更を自動的に伝搬します。

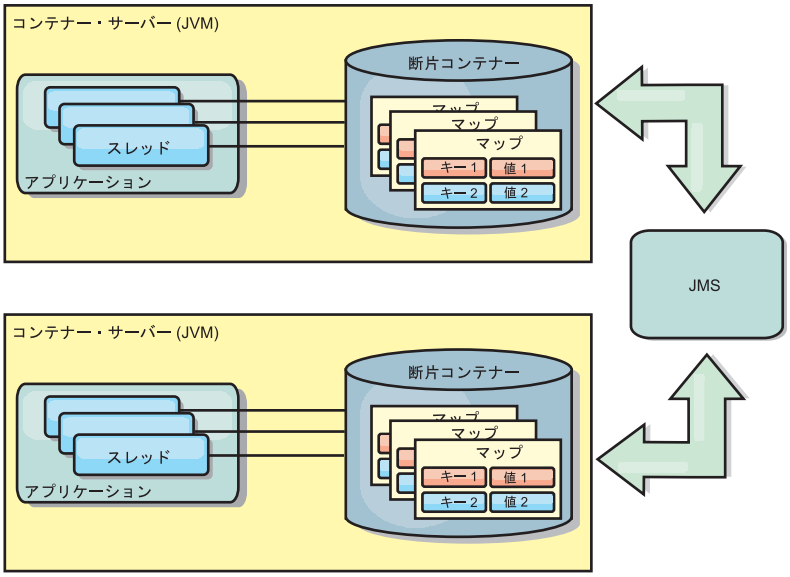


図 15. JMS によって変更が伝搬されるピア複製キャッシュ

WebSphere Application Server 環境を実行している場合は、TranPropListener プラグインも使用可能です。TranPropListener プラグインは、高可用性 (HA) マネージャーを使用して、各ピア・キャッシュ・インスタンスに変更を伝搬します。

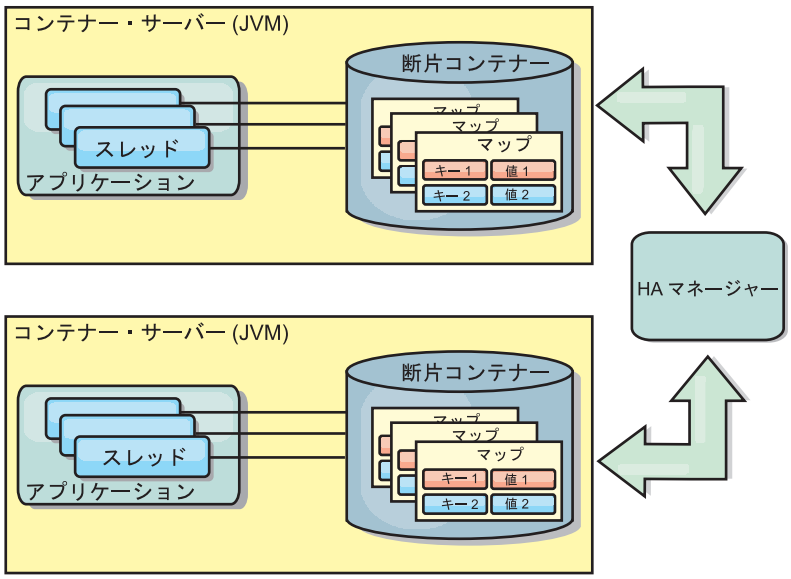


図 16. HA マネージャーによって変更が伝搬されるピア複製キャッシュ

利点

- より頻繁にデータが更新されるため、データが有効な場合が増えます。
- TranPropListener プラグインを使用すると、ローカル環境と同様、 eXtreme Scale デプロイメント記述子 XML ファイルや他のフレームワーク (Spring など) を使用して、eXtreme Scale をプログラマチックまたは宣言的に作成できます。HA マネージャーとの統合は自動的に行われます。
- 最適のメモリー使用効率および並行性が得られるように、各 BackingMap を独立して調整できます。
- BackingMap 更新は、単一の作業単位にまとめることができ、Java Transaction Architecture (JTA) トランザクションなどの 2 フェーズ・トランザクションの最終参加者として統合することができます。
- 十分小さなデータ・セットの少数 JVM トポロジー、または頻繁にアクセスされるデータのキャッシングに最適です。
- eXtreme Scale に対する変更は、すべてのピア eXtreme Scale インスタンスに複製されます。 変更は、永続サブスクリプションが使用されている限り、整合性が保たれます。

欠点

- JMSObjectGridEventListener の構成および保守は、複雑になる場合があります。eXtreme Scale は、eXtreme Scale デプロイメント記述子 XML ファイルまたは Spring などのその他のフレームワークを使用して、プログラマチックまたは宣言的に作成できます。
- スケーラブルではありません。データベースが必要とするメモリー量が、JVM の負担になる場合があります。
- Java 仮想マシンを追加する場合に不適切な機能:
  - データを簡単には区画化できない
  - 無効化にコストがかかります。
  - 各キャッシュは個別にウォームアップが必要になります。

使用する場合

デプロイメント・トポロジーは、キャッシュに入れるデータ量が小さく、1 つの JVM に収まり、かつ比較的安定している場合にのみ使用します。

組み込みキャッシュ

WebSphere eXtreme Scale グリッドは、組み込み eXtreme Scale サーバーとして既存のプロセス内で実行することも、外部プロセスとして管理することもできます。

組み込みグリッドは、WebSphere Application Server などのアプリケーション・サーバー内で実行する場合に便利です。組み込まれていない eXtreme Scale サーバーは、コマンド行スクリプトを使用し、Java プロセスで実行することによって開始できます。

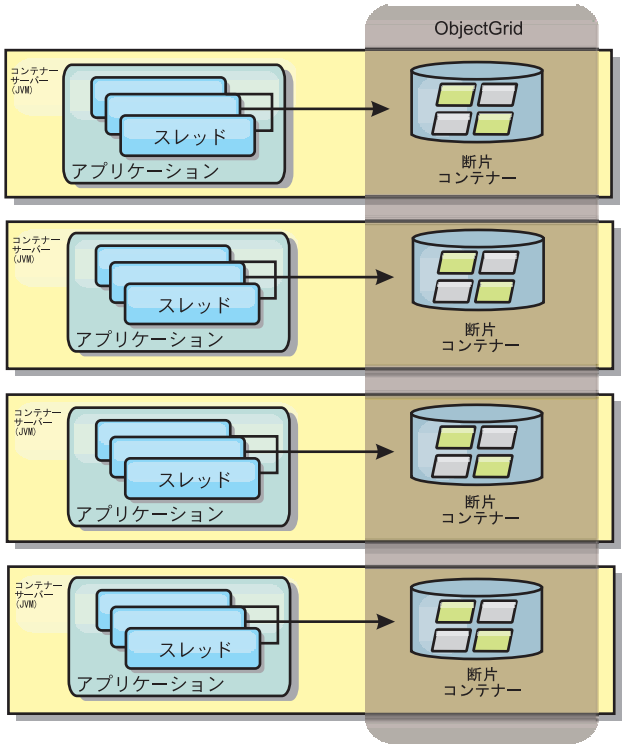


図 17. 組み込みキャッシュ

利点

- 管理するプロセスが減るため、管理が簡単になります。
- グリッドがクライアント・アプリケーションのクラス・ローダーを使用しているため、アプリケーションのデプロイメントが簡単です。
- 区画化と高可用性をサポートします。

欠点

- すべてのデータがプロセス内に連結されるため、クライアント・プロセスのメモリー占有スペースが増えます。
- クライアント要求にサービスを提供するための CPU 使用率が高くなります。

- クライアントがサーバーと同じアプリケーション Java アーカイブ・ファイルを使用しているため、アプリケーション・アップグレードの処理がさらに難しくなります。
- 柔軟性が低くなります。クライアントとグリッド・サーバーは、同じレートで拡張することができません。サーバーを外部で定義すると、プロセス数の管理の柔軟性が増します。

使用する場合

組み込みグリッドは、クライアント・プロセスにグリッド・データおよび潜在的なフェイルオーバー・データ用の空きメモリーが豊富にある場合に使用します。

詳しくは、Java Message Service (JMS) ベース・クライアント同期の構成を参照してください。

分散キャッシュ

WebSphere eXtreme Scale は、共有キャッシュとして使用されることが最も多く、これまで使用されていたような従来のデータベースに代わり、データへのトランザクション・アクセスを複数のコンポーネントに提供します。共有キャッシュにより、データベースを構成する必要がなくなります。

キャッシュのコヒーレンス

すべてのクライアントがキャッシュ内の同じデータを見るので、キャッシュはコヒーレントです。各データはキャッシュ内の 1 つのサーバーのみに保管されるため、さまざまなバージョンのデータを保管することになりかねない、レコードの無駄なコピーが防止されます。コヒーレントなキャッシュは、より多くのサーバーがデータ・グリッドに追加されるにつれて、より多くのデータを保持することができ、グリッドのサイズが増えるのにつれて直線的に増加します。クライアントはこのデータ・グリッドからのデータに、リモート・プロシージャー・コールを使用してアクセスするので、このキャッシュはリモート・キャッシュまたは、ファー・キャッシュとも呼ばれます。データの区画化により、各プロセスは、全データ・セットの中から固有のサブセットを保持します。データ・グリッドが大きいほどより多くのデータを保持でき、そのデータに対するより多くの要求にサービスを提供できます。コヒーレントであることによって、失効データが存在しないため、データ・グリッドの周囲で無効化データをプッシュする必要がなくなります。コヒーレント・キャッシュは、各データの最新コピーのみを保持します。

WebSphere Application Server 環境を実行している場合は、TranPropListener プラグインも使用可能です。TranPropListener プラグインは、WebSphere Application Server 高可用性コンポーネント (HA マネージャー) を使用して、変更を各ピア ObjectGrid キャッシュ・インスタンスに伝搬します。

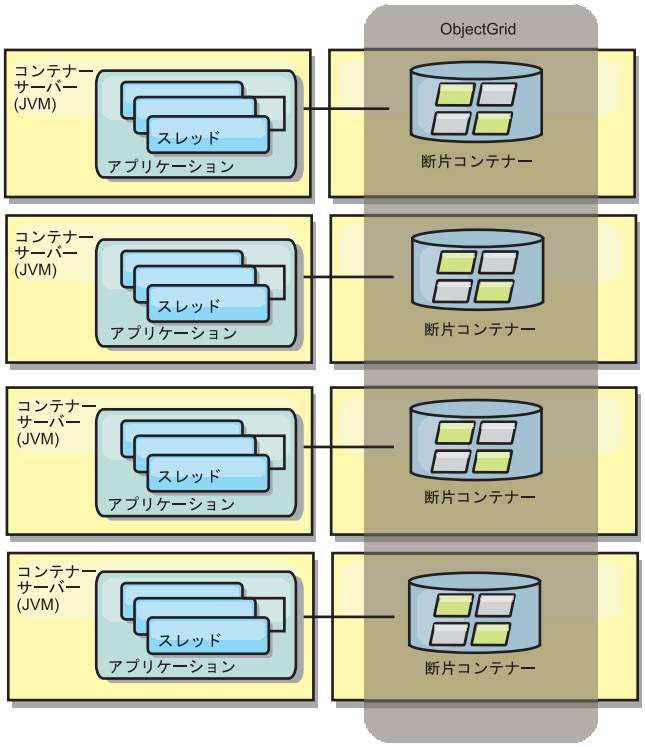


図 18. 分散キャッシュ

ニア・キャッシュ

クライアントは、eXtreme Scale が分散トポロジーで使用されている場合、オプションでローカルのインライン・キャッシュを持つことができます。オプションのこのキャッシュはニア・キャッシュと呼ばれます。これは、各クライアントにある独立した ObjectGrid であり、リモート用のキャッシュ (サーバー・サイド・キャッシュ) として機能します。ニア・キャッシュは、ロックがオプティミスティックまたはロックなしに構成されている場合、デフォルトで使用可能にされており、ロックがペシミスティックに構成されている場合は使用することができません。

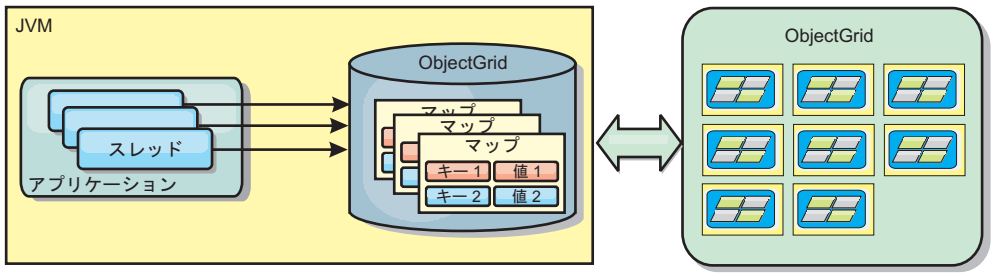


図 19. ニア・キャッシュ

ニア・キャッシュは、リモート側で eXtreme Scale サーバーに保管されているキャッシュ・データ・セット全体のサブセットへのメモリー内アクセスを可能にするため、非常に高速です。ニア・キャッシュは区画化されず、任意のリモート eXtreme Scale 区画からのデータを含みます。WebSphere eXtreme Scale は、以下のように、3 つまでのキャッシュ層を持つことができます。

1. トランザクション層キャッシュには、単一トランザクションのすべての変更が含まれます。トランザクション・キャッシュは、トランザクションがコミットされるまで、データの作業用コピーを保持します。クライアント・トランザクションが ObjectMap のデータを要求すると、最初にトランザクションがチェックされます。
2. クライアント層のニア・キャッシュは、サーバー層のデータのサブセットを保持します。トランザクション層にデータがない場合、データはクライアント層にあればクライアント層から取り出され、トランザクション・キャッシュに挿入されます。
3. サーバー層のデータ・グリッドには大半のデータが含まれ、すべてのクライアント間で共有されます。サーバー層は区画に分割できるので、大量のデータをキャッシュに入れることができます。クライアントのニア・キャッシュにデータが存在しないと、サーバー層からデータがフェッチされ、クライアント・キャッシュに挿入されます。サーバー層は、Loader プラグインを保持することもできます。データ・グリッドに要求されたデータがない場合、Loader が呼び出され、結果のデータがバックエンドのデータ・ストアからグリッドに挿入されます。

ニア・キャッシュを使用不可にするには、ニア・キャッシュの構成を参照してください。

利点

- データへのアクセスがすべてローカルで行われるため、応答時間が速くなります。ニア・キャッシュ内でデータを探すことで、まず、サーバーのグリッドにいく手間が省け、リモート・データでさえもローカルでアクセス可能になります。

欠点

- 各層のニア・キャッシュはデータ・グリッド内の現行データと同期していない場合があるため、失効データの期間が長くなります。
- メモリー不足を回避するため、エビクターに頼り、データを無効化する必要があります。

使用する場合

応答時間が重要で、失効したデータは許容できる場合に使用します。

データベース統合: 後書き、インライン、およびサイド・キャッシング

WebSphere eXtreme Scale が使用される目的は、従来のデータベースをその背後に置くことで、通常はデータベースにプッシュされる読み取りアクティビティーをなくすことです。コヒーレント・キャッシュは、オブジェクト関連マッパーを直接または間接に使用することにより、アプリケーションで使用できます。コヒーレント・キャッシュは、データベースまたは読み取りからの下流工程の負荷を軽減します。シナリオがもう少し複雑で、一部のデータのみが従来のパーシスタンス保証を必要とするデータ・セットへのトランザクション・アクセスなどの場合は、フィルター操作を使用して書き込みトランザクションの負荷を軽減します。

WebSphere eXtreme Scale は、高度にフレキシブルなメモリー内のデータベース処理スペースとして機能するように構成できます。ただし、WebSphere eXtreme Scale

は、オブジェクト・リレーショナル・マッパー (ORM) ではありません。データ・グリッドに含まれているデータがどこから取得されたのかを認識しません。アプリケーションまたは ORM は、データを eXtreme Scale サーバーに配置できます。データの発生元であるデータベースとの一貫性を保つのは、データのソースの責任です。これは、データベースから取り出されたデータを eXtreme Scale は自動的に無効化できないことを意味します。アプリケーションまたはマッパーは、この機能を提供して、eXtreme Scale に保管されているデータを管理する必要があります。

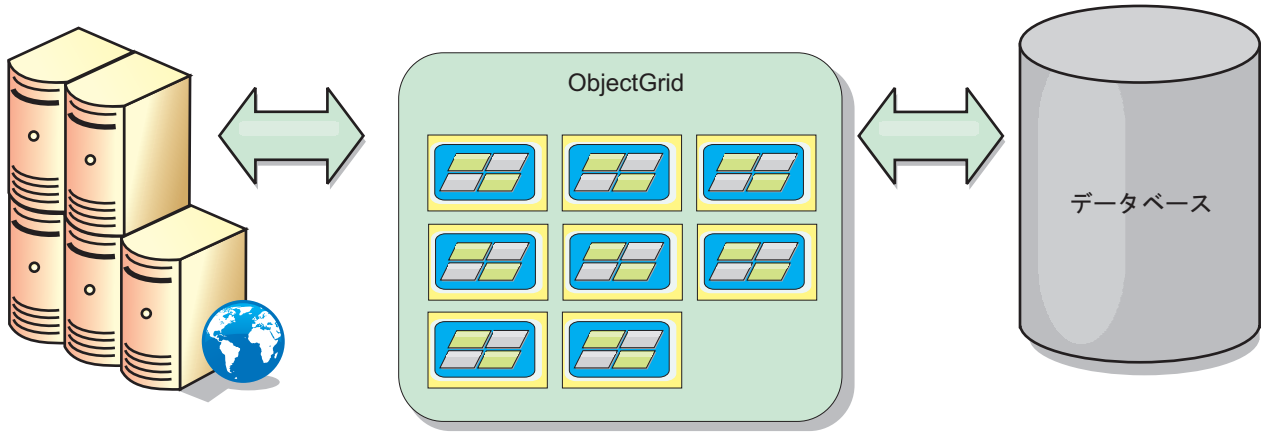


図 20. データベース・バッファーとしての ObjectGrid

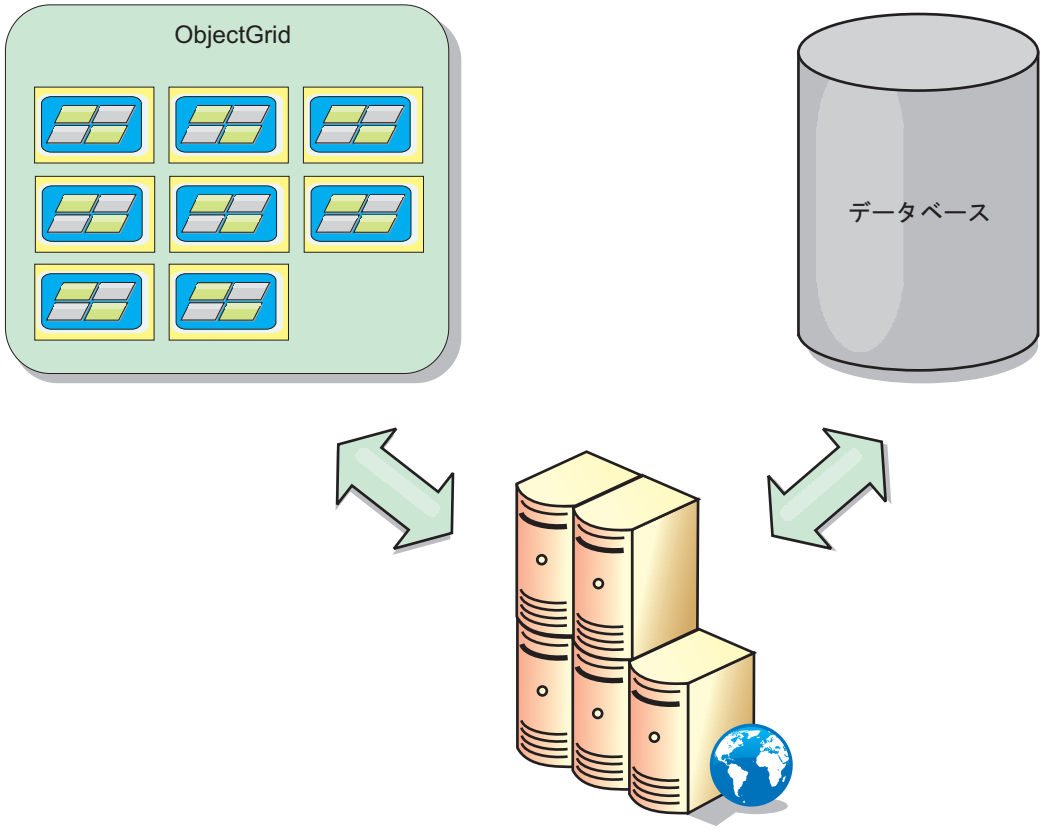


図 21. サイド・キャッシュとしての ObjectGrid

スパース・キャッシュおよび完全キャッシュ

WebSphere eXtreme Scale は、スパース・キャッシュまたは完全キャッシュとして使用できます。完全キャッシュがデータすべてを保持する一方で、スパース・キャッシュはデータ全体のサブセットしか保持しません。必要時には、データをゆっくりと取り込むことができます。通常、スパース・キャッシュは、データが部分的にしか使用可能でないため、キーを使用して (索引や照会を使用せず) アクセスされます。

スパース・キャッシュ

キーがスパース・キャッシュに存在しない場合、またはデータが使用できず、キャッシュ・ミスが発生している場合は、次の層が呼び出されます。データは、例えば、データベースからフェッチされ、データ・グリッド・キャッシュ層に挿入されます。照会または索引を使用する場合、現在ロードされている値のみがアクセスされ、要求は他の層に転送されません。

完全キャッシュ

完全キャッシュには必要なすべてのデータが含まれ、索引または照会により非キー属性を使用してアクセスできます。データベースから完全キャッシュにデータがプリロードされた後、アプリケーションはデータへのアクセスを試みます。データがロードされた後は、完全キャッシュをデータベースの代わりとして使用できます。すべてのデータがあるので、照会および索引を使用して、データの検出と集約を行うことができます。

サイド・キャッシュ

WebSphere eXtreme Scale をサイド・キャッシュとして使用する場合は、データ・グリッドと一緒にバックエンドが使用されます。

サイド・キャッシュ

アプリケーションのデータ・アクセス層のサイド・キャッシュとしてこの製品を構成できます。このシナリオの場合、WebSphere eXtreme Scale は、通常であればバックエンド・データベースから取得されるオブジェクトを一時的に保管するために使用されます。アプリケーションは、データがデータ・グリッドに含まれているかどうかチェックします。データがデータ・グリッドにあった場合、そのデータが呼び出し元に返されます。データがない場合、データがバックエンド・データベースから取得されます。そして、次の要求がキャッシュ・コピーを使用できるように、データがデータ・グリッドに挿入されます。次の図は、OpenJPA や Hibernate などの任意のデータ・アクセス層で WebSphere eXtreme Scale をサイド・キャッシュとして使用する方法を示しています。

Hibernate および OpenJPA 向けサイド・キャッシュ・プラグイン

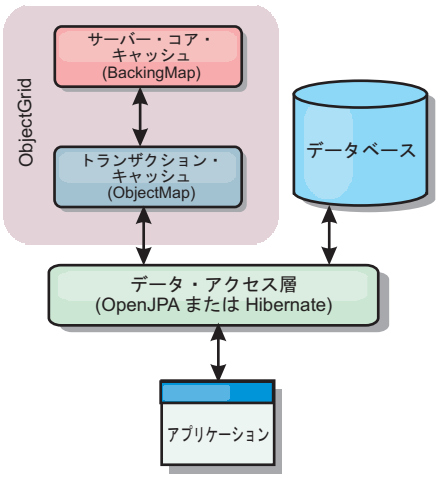


図 22. サイド・キャッシュ

WebSphere eXtreme Scale には、この製品を自動サイド・キャッシュとして使用できるようにする、OpenJPA 用と Hibernate 用のどちらのキャッシュ・プラグインも組み込まれています。WebSphere eXtreme Scale をキャッシュ・プロバイダーとして使用すると、データの読み取りおよび照会時のパフォーマンスが高まり、データベースへの負荷が軽減されます。WebSphere eXtreme Scale ではキャッシュが自動的にすべてのプロセス間で複製されるので、組み込みキャッシュ実装をしのぐ利点があります。あるクライアントが値をキャッシュに入れると、他のすべてのクライアントがキャッシュに入れられた値を使用できるようになります。

インライン・キャッシュ

インライン・キャッシングは、データベース・バックエンドに構成することも、データベースのサイド・キャッシュとして構成することもできます。インライン・キャッシングは、データと対話するための基本手段として eXtreme Scale を使用します。eXtreme Scale がインライン・キャッシュとして使用される場合、アプリケーションは、Loader プラグインを使用してバックエンドと対話します。

インライン・キャッシュ

インライン・キャッシュとして使用される場合、WebSphere eXtreme Scale は Loader プラグインを使用してバックエンドと対話します。このシナリオでは、アプリケーションが直接 eXtreme Scale API にアクセスできるため、データ・アクセスが単純化されます。キャッシュ内のデータとバックエンドのデータが確実に同期されるようにするための数種類のキャッシング・シナリオが、eXtreme Scale においてポートされています。次の図は、インライン・キャッシュがアプリケーションおよびバックエンドと対話する方法を示しています。

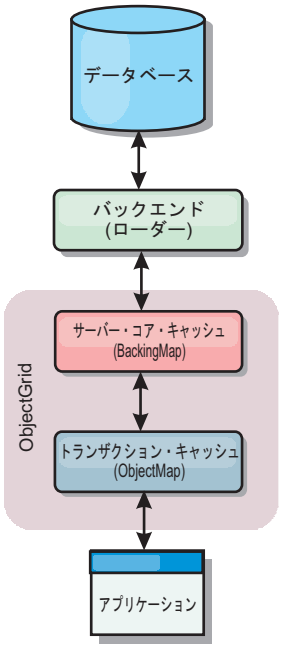


図 23. インライン・キャッシュ

インライン・キャッシング・オプションにより、アプリケーションが eXtreme Scale API に直接アクセスできるようになるため、データ・アクセスが単純化されます。WebSphere eXtreme Scale は、以下のような複数のインライン・キャッシング・シナリオをサポートします。

- リードスルー
- ライトスルー
- 後書き

リードスルー・キャッシングのシナリオ

リードスルー・キャッシュは、データ・エントリーの要求時にキーによるそのロードが暫時的に行われるスパース・キャッシュです。これが行われる場合、呼び出し元は、エントリーがどのように取り込まれるかを知る必要はありません。データが eXtreme Scale キャッシュに見つからない場合、eXtreme Scale は、その欠落データを Loader プラグインから取得します。このプラグインは、バックエンド・データベースからデータをロードして、そのデータをキャッシュに挿入します。同じデータ・キーに対する後続の要求は、削除、無効化、または除去されるまでキャッシュに存在します。

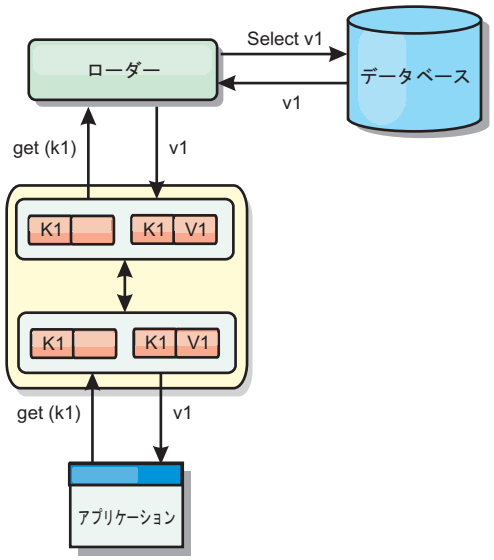


図 24. リードスルー・キャッシング

ライトスルー・キャッシングのシナリオ

ライトスルー・キャッシュでは、キャッシュへの書き込みが行われるたびに、ローダーを使用してデータベースへの書き込みが同期的に行われます。このメソッドでは、バックエンドとの整合性はありますが、データベース操作が同期されるため、書き込みパフォーマンスは低下します。キャッシュとデータベースがともに更新されるため、同じデータに対する後続の読み取りはキャッシュに残り、データベース呼び出しが回避されます。ライトスルー・キャッシュは、多くの場合、リードスルー・キャッシュと一緒に使用されます。

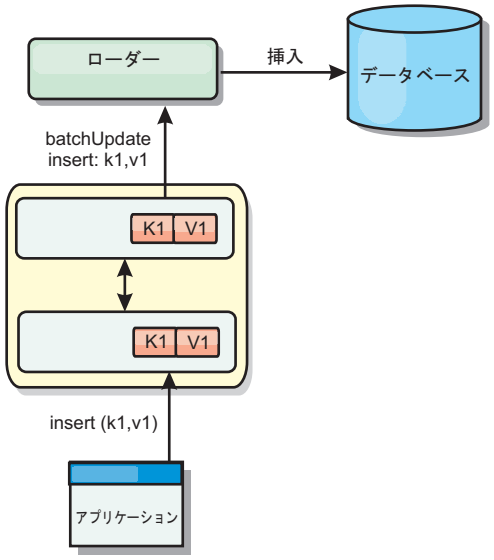


図 25. ライトスルー・キャッシング

後書きキャッシングのシナリオ

変更を非同期的に書き込むことにより、データベースの同期性が改善されます。後書きキャッシュまたはライト・バック・キャッシュとも呼ばれます。通常はローダーに対して同期的に書き込まれる変更は、eXtreme Scale 内でバッファー化されてから、バックグラウンド・スレッドを使用してデータベースに書き込まれます。データベース操作をクライアント・トランザクションから除去し、データベース書き込みを圧縮できるため、書き込みパフォーマンスが著しく向上します。

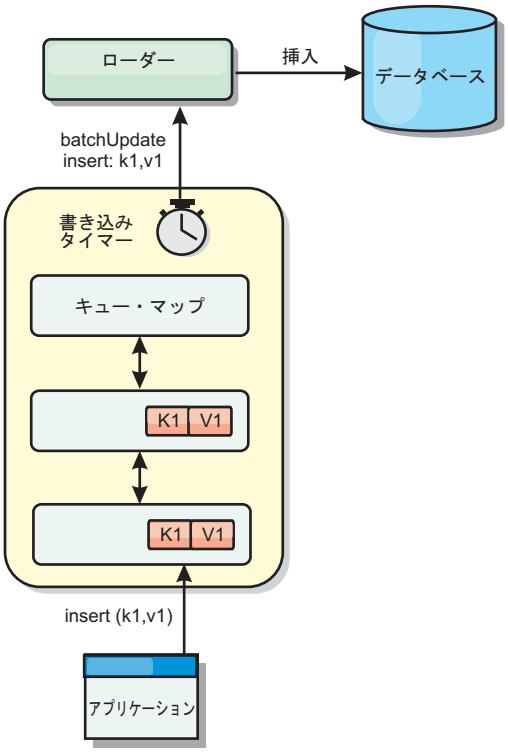


図 26. 後書きキャッシング

後書きキャッシング

Java

後書きキャッシングを使用して、バックエンドとして使用しているデータベースを更新する際に発生するオーバーヘッドを減らすことができます。

後書きキャッシングの概要

後書きキャッシングでは、Loader プラグインの更新が非同期にキューに入れられます。eXtreme Scale トランザクションをデータベース・トランザクションから分離することにより、マップの更新、挿入、および除去の、パフォーマンスを改善できます。非同期更新は、時間ベースの遅延 (例えば 5 分) またはエントリー・ベースの遅延 (例えば 1000 エントリー) 後に実行されます。

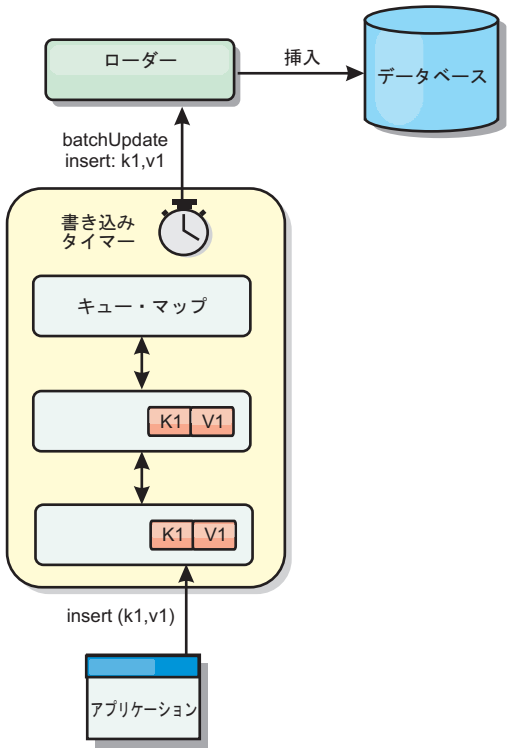


図 27. 後書きキャッシング

BackingMap の後書き構成により、ローダーとマップとの間にスレッドが作成されます。次に、ローダーは、BackingMap.setWriteBehind メソッド内の構成設定に従って、そのスレッドを通してデータ要求を委任します。eXtreme Scale トランザクションが、マップのエントリーを挿入、更新、または削除すると、これらの各レコードごとに 1 つずつ LogElement オブジェクトが作成されます。これらのエレメントは後書きローダーに送信され、キュー・マップと呼ばれる特別な ObjectMap 内でキューに入れられます。後書き設定が有効になっているパッキング・マップは、それぞれ独自のキュー・マップを持っています。後書きスレッドは、キューに入れられたデータをキュー・マップから定期的に除去して、実際のバックエンド・ローダーにプッシュします。

後書きローダーは、挿入、更新、および削除タイプの LogElement オブジェクトのみを実際のローダーに送信します。それ以外のタイプの LogElement オブジェクト (例えば、EVICT タイプ) はすべて無視されます。

後書きサポートは、eXtreme Scale をデータベースに組み込む際に使用する Loader プラグインの *拡張機能* です。例えば、JPA ローダーの構成については JPA ローダーの構成 の情報を参照してください。

利点

後書きサポートを使用可能にすると、以下のような利点があります。

- **バックエンド障害の分離:** 後書きキャッシングは、バックエンド障害からの分離層を提供します。バックエンドのデータベースで障害が発生すると、更新はキュー・マップ内でキューに入れられます。アプリケーションは、トランザクション

を eXtreme Scale に送り続けることができます。バックエンドが復旧すると、キュー・マップ内のデータはバックエンドにプッシュされます。

- **バックエンドの負荷の削減:** 後書きローダーは更新をキー単位でマージします。その結果、キュー・マップ内には、キーごとにマージされた更新が 1 つのみ存在します。このマージにより、バックエンド・データベースに対する更新の数が減ります。
- トランザクション・パフォーマンスの改善: データがバックエンドと同期されるのをトランザクションが待機する必要がないので、個別の eXtreme Scale トランザクション時間が削減されます。

関連資料:

Java 683 ページの『例: 後書きダンパー・クラスの作成』
このサンプル・ソース・コードは、失敗した後書き更新を扱うウォッチャー (ダンパー) の作成方法を示しています。

ローダー

Java

Loader プラグインを使用すると、通常は、同一システムあるいは別システムのパーシスタント・ストアに保持されるデータのメモリー・キャッシュとしてデータ・グリッド・マップを動作させることができます。通常、データベースまたはファイル・システムはパーシスタント・ストアとして使用されます。リモート Java 仮想マシン (JVM) もデータのソースとして使用でき、eXtreme Scale を使用してハブ・ベースのキャッシュを構築できます。ローダーには、パーシスタント・ストアとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うロジックが備わっています。

概要

ローダーは、変更がパッキング・マップに対して行われた場合、または、パッキング・マップがデータ要求を満足できない (キャッシュ・ミス) 場合に呼び出されるパッキング・マップ・プラグインです。ローダーは、キーに関する要求をキャッシュが満足できなくなったときに起動され、リードスルー機能や、キャッシュにデータをゆっくり設定する機能を提供します。また、ローダーによって、キャッシュ値が変わったときのデータベース更新が可能になります。1 つのトランザクション内のすべての変更は、データベースとの対話の数を最小化できるよう、まとめてグループ化されます。ローダーと共に TransactionCallback プラグインが、バックエンド・トランザクションの境界をトリガーするために使用されます。このプラグインの使用は、複数のマップが 1 つのトランザクションに含まれている場合、または、トランザクション・データがコミットなしでキャッシュに書き込まれる場合に重要です。

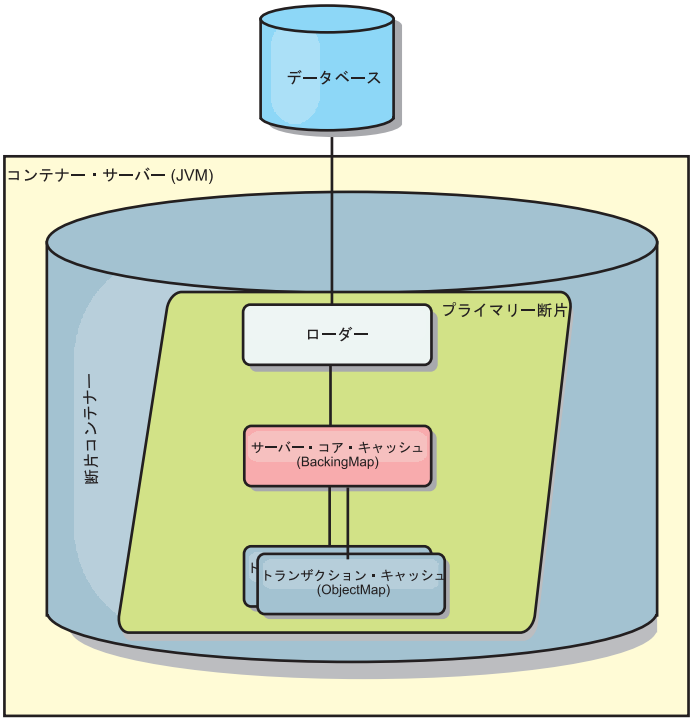


図 28. ローダー

ローダーは、データベース・ロックの保持を回避するために、資格過剰の更新を使用することもできます。バージョン属性をキャッシュ値の中に入れることによって、値がキャッシュ内で更新されるときにローダーは値の前と後のイメージを見ることができます。その後、データベースまたはバックエンドを更新する際にこの値を使用して、データが更新されていないことを検証できます。 ローダーは、開始時にデータ・グリッドをプリロードするよう構成することもできます。区画に分割されている場合、各区画ごとに 1 つのローダー・インスタンスが関連付けられます。例えば、「Company」マップに 10 個の区画がある場合、プライマリー区画ごとに 1 つずつ、10 個のローダー・インスタンスがあります。このマップのプライマリー断片がアクティブにされると、ローダーに対して preloadMap メソッドが同期または非同期で呼び出され、マップ区画にバックエンドからのデータが自動的にロードされます。非同期で呼び出される場合、すべてのクライアント・トランザクションはブロックされ、データ・グリッドへの矛盾するアクセスを防止します。代わりに、クライアント・プリローダーを使用してデータ・グリッド全体にデータをロードできます。

2 つの組み込みローダーにより、リレーショナル・データベース・バックエンドとの統合が非常に単純化されます。JPA ローダーは、Java Persistence API (JPA) 仕様の OpenJPA および Hibernate 実装の両方のオブジェクト関係マッピング (ORM) 機能を使用します。詳しくは、 718 ページの『JPA ローダー』を参照してください。

複数データ・センター構成でローダーを使用する場合は、どのようにして改訂データとキャッシュの整合性をデータ・グリッド間で維持するかを検討する必要があります。詳しくは、 318 ページの『マルチマスター・トポロジーでのローダーについての考慮事項』を参照してください。

ローダーの構成

ローダーを BackingMap 構成に追加するには、プログラマチック構成または XML 構成を使用します。ローダーには、パッキング・マップとの間で以下のような関係があります。

- 1 つのパッキング・マップは 1 つのローダーしか持てない。
- クライアント・パッキング・マップ (ニア・キャッシュ) はローダーを持てない。
- 1 つのローダー定義を複数のパッキング・マップに適用できるが、各パッキング・マップは独自のローダー・インスタンスを持つ。

関連資料:

Java 686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』
Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

データのプリロードおよびウォームアップ

ローダーのユーザーを組み込む多くのシナリオで、データ・グリッドをデータと一緒にプリロードして準備しておくことができます。

データ・グリッドは、完全キャッシュとして使用される場合、データのすべてを保持しなければならず、いずれかのクライアントが接続する前にデータがロードされている必要があります。スパース・キャッシュを使用する場合は、クライアントが接続時にデータにすぐにアクセスできるよう、キャッシュをデータでウォームアップしておくことができます。

以下のセクションで説明するように、データをデータ・グリッドにプリロードする方法は 2 つあります。1 つは Loader プラグインを使用する方法で、もう 1 つはクライアント・ローダーを使用する方法です。

Loader プラグイン

Loader プラグインは、各マップに関連付けられ、1 つのプライマリー区画断片をデータベースと同期化させる役割を担います。断片がアクティブになると、Loader プラグインの preloadMap メソッドが自動的に呼び出されます。 例えば、100 の区画がある場合、ローダーのインスタンスは 100 存在し、それぞれが、各自の区画のためにデータをロードします。同期的に実行された場合、プリロードが完了するまですべてのクライアントがブロックされます。

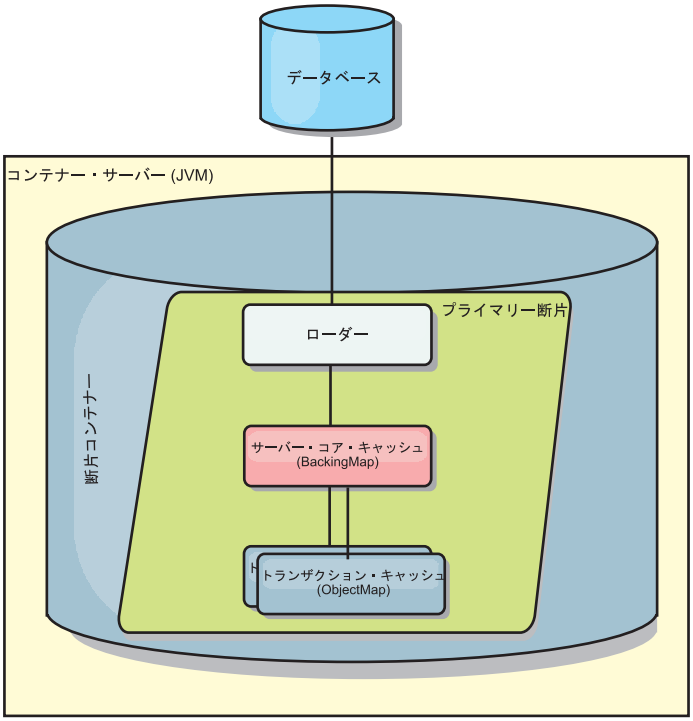


図 29. Loader プラグイン

詳しくは、 658 ページの『データベースとの通信のためのプラグイン』を参照してください。

クライアント・ローダー

クライアント・ローダーは、1 つ以上のクライアントを使用してグリッドにデータをロードするパターンです。複数のクライアントを使用してグリッドにデータをロードすることは、区画スキーマがデータベースに保管されない場合は効率的です。クライアント・ローダーは手動で呼び出すか、データ・グリッドの開始時に自動的に呼び出すことができます。データ・グリッドにデータをプリロードしている間はクライアントがデータ・グリッドにアクセスできないように、クライアント・ローダーは、オプションで、StateManager を使用してデータ・グリッドの状態をプリロード・モードに設定できます。WebSphere eXtreme Scale には Java Persistence API (JPA) ベースのローダーが組み込まれていて、OpenJPA または Hibernate JPA プロバイダーのどちらかでデータ・グリッドに自動的にロードするために使用できます。キャッシュ・プロバイダーについて詳しくは、JPA レベル 2 (L2) キャッシュ・プラグインを参照してください。

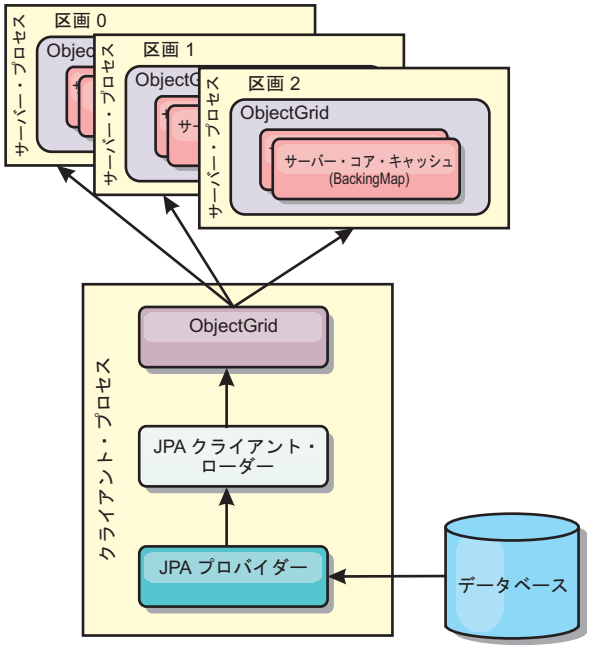


図 30. クライアント・ローダー

データベースの同期手法

WebSphere eXtreme Scale をキャッシュとして使用する際、データベースを eXtreme Scale トランザクションとは独立して更新できる場合、失効データを許容するようにアプリケーションを作成する必要があります。同期されたメモリー内データベース処理スペースとして機能するため、eXtreme Scale はキャッシュを常に最新の状態に保つ方法をいくつか備えています。

データベースの同期手法

定期的リフレッシュ

時間ベースの Java Persistence API (JPA) データベース・アップデーターを使用して、定期的なキャッシュの無効化または更新を自動的に実行できます。このアップデーターは、JPA プロバイダーを使用してデータベースを定期的に照会することによって、前回の更新以降に発生した更新または挿入があるかどうかを調べます。示された変更は、スパース・キャッシュで使用された場合、自動的に無効にされるか、更新されます。完全キャッシュで使用された場合、エントリーをディスカバーして、キャッシュに挿入することができます。エントリーがキャッシュから除去されることはありません。

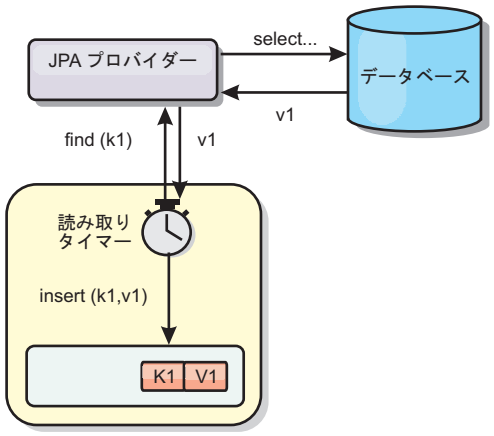


図 31. 定期的リフレッシュ

除去

スパース・キャッシュでは、除去ポリシーを使用して、データベースに影響を及ぼすことなく、キャッシュからデータを自動的に除去できます。eXtreme Scale には、Time-To-Live (存続時間)、Least-Recently-Used (最長未使用時間)、および Least-Frequently-Used (最も使用頻度の少ない) という 3 つの組み込みポリシーがあります。メモリー・ベースの除去オプションを使用可能にすると、メモリーが制約状態になるので、3 つのポリシーではすべて、必要であればデータをより積極的に除去することができます。さらなる詳細は、キャッシュ・オブジェクトの除去のためのプラグインを参照してください。

イベント・ベースの無効化

スパース・キャッシュおよび完全キャッシュは、Java Message Service (JMS) などのイベント生成プログラムを使用して無効化または更新することができます。JMS を使用した無効化は、データベース・トリガーを使用してバックエンドを更新するどのプロセスにも手動で関連付けることができます。サーバー・キャッシュで変更があった場合にクライアントに通知できる JMS ObjectGridEventListener プラグインが eXtreme Scale で提供されています。これにより、クライアントが失効データを表示する時間を短縮できます。

プログラマチックな無効化

eXtreme Scale API により、 Session.beginNoWriteThrough()、ObjectMap.invalidate()、および EntityManager.invalidate() API メソッドを使用したニア・キャッシュおよびサーバー・キャッシュの手動対話が可能になります。クライアントまたはサーバーのプロセスでデータの一部がもう必要ない場合、無効化メソッドを使用して、ニア・キャッシュまたはサーバー・キャッシュからデータを除去できます。beginNoWriteThrough メソッドは、ローダーを呼び出すことなく、ObjectMap または EntityManager 操作をローカル・キャッシュに適用します。クライアントから呼び出された場合のこの操作は、ニア・キャッシュのみに適用されます (リモート・ローダーは呼び出されません)。サーバーで呼び出された場合のこの操作は、ローダーを呼び出すことなく、サーバー・コア・キャッシュのみに適用されます。

データの無効化

失効したキャッシュ・データを削除するには、無効化メカニズムを使用することができます。

管理上の無効化

Web コンソールまたは **xscmd** ユーティリティーを使用して、キーに基づいてデータを無効化することができます。正規表現を使用してキャッシュ・データをフィルタリングしてから、その正規表現に基づいてデータを無効化することができます。

イベント・ベースの無効化

スパース・キャッシュおよび完全キャッシュは、Java Message Service (JMS) などのイベント生成プログラムを使用して無効化または更新することができます。JMS を使用した無効化は、データベース・トリガーを使用してバックエンドを更新するどのプロセスにも手動で関連付けることができます。サーバー・キャッシュが変更した場合にクライアントに通知できる JMS ObjectGridEventListener プラグインが eXtreme Scale で提供されています。 この通知タイプによって、クライアントが失効データを表示する時間を短縮します。

イベント・ベースの無効化は、一般的には以下の 3 つのコンポーネントで構成されます。

- **イベント・キュー:** イベント・キューには、データ変更イベントが保管されます。 データ変更イベントを管理できるのであれば、イベント・キューは JMS キュー、データベース、メモリー内の FIFO キュー、またはすべての種類のマニフェストの可能性があります。
- **イベント・パブリッシャー:** イベント・パブリッシャーは、データ変更イベントをイベント・キューにパブリッシュします。 イベント・パブリッシャーは、通常、作成されたアプリケーションまたは eXtreme Scale プラグインの実装です。イベント・パブリッシャーは、いつデータが変更されたかを知っています。あるいはイベント・パブリッシャーがデータ自体を変更します。トランザクションがコミットすると、変更されたデータに対してイベントが生成され、イベント・パブリッシャーはこれらのイベントをイベント・キューにパブリッシュします。
- **イベント・コンシューマー:** イベント・コンシューマーは、データ変更イベントをコンシュームします。 イベント・コンシューマーは、通常アプリケーションで、ターゲット・グリッド・データが他のグリッドからの最新の変更を使用して更新されることを確認します。 このイベント・コンシューマーは、イベント・キューと対話をして最新のデータ変更を取得し、ターゲット・グリッドのデータ変更を適用します。 イベント・コンシューマーは eXtreme Scale API を使用して、失効データを無効にしたり、グリッドを最新データで更新することができます。

例えば、JMSObjectGridEventListener にはクライアント/サーバー・モデルのオプションがあり、そのイベント・キューは指定された JMS 宛先です。 すべてのサーバー・プロセスがイベント・パブリッシャーです。 トランザクションがコミットすると、サーバーはデータ変更を取得し、それを指定された JMS 宛先にパブリッシュします。 すべてのクライアント・プロセスがイベント・コンシューマーです。 指定された JMS 宛先からデータ変更を受信し、その変更をクライアントのニア・キャッシュに適用します。

詳しくは、Java Message Service (JMS) ベース・クライアント同期の構成を参照してください。

プログラマチックな無効化

WebSphere eXtreme Scale API により、 Session.beginNoWriteThrough() 、ObjectMap.invalidate()、および EntityManager.invalidate() API メソッドを使用したニア・キャッシュおよびサーバー・キャッシュの手動対話が可能になります。クライアントまたはサーバーのプロセスでデータの一部がもう必要ない場合、無効化メソッドを使用して、ニア・キャッシュまたはサーバー・キャッシュからデータを除去できます。beginNoWriteThrough メソッドは、ローダーを呼び出すことなく、ObjectMap または EntityManager 操作をローカル・キャッシュに適用します。クライアントから呼び出された場合のこの操作は、ニア・キャッシュのみに適用されます (リモート・ローダーは呼び出されません)。サーバーで呼び出された場合のこの操作は、ローダーを呼び出すことなく、サーバー・コア・キャッシュのみに適用されます。

他の手法と一緒にプログラマチックな無効化を使用して、データをいつ無効にするかを決定します。 例えば、この無効化メソッドは、イベント・ベースの無効化メカニズムを使用してデータ変更イベントを受信し、API を使用して失効データを無効にします。

8.6+

ニア・キャッシュの無効化

ニア・キャッシュを使用している場合は、データ・グリッドに対して更新、削除、または無効化操作が実行されるたびにトリガーされる非同期無効化を構成することができます。これらの操作は非同期であるため、データ・グリッド内にまだ失効データが残っていることがあります。

ニア・キャッシュの無効化を使用可能にするには、ObjectGrid 記述子 XML ファイル内のパッキング・マップにある **nearCacheInvalidationEnabled** 属性を設定します。

索引付け

Java

MapIndexPlugin プラグインは、BackingMap 上にいくつかの索引を作成して、非キー・データ・アクセスをサポートするために使用します。

索引のタイプおよび構成

索引付けフィーチャーは、MapIndexPlugin プラグインと表されるか、または略して Index で表されます。Index は BackingMap プラグインです。BackingMap では、各索引プラグインが索引構成規則に従っている限り、複数の索引プラグインを構成できます。

索引付けフィーチャーは、1 つ以上の索引を BackingMap に作成する場合に使用できます。1 つの索引は、BackingMap 内の 1 つのオブジェクトの 1 つの属性または属性のリストから作成されます。このフィーチャーにより、アプリケーションはより迅速に特定のオブジェクトを見つけることができます。索引付けフィーチャーを

使用すると、アプリケーションは特定の値を持つオブジェクトや、ある範囲の索引属性値内にあるオブジェクトを見つけることができます。

可能な索引付けには、静的および動的という 2 つのタイプがあります。静的索引付けの場合、ObjectGrid インスタンスを初期化する前に、BackingMap に索引プラグインを構成する必要があります。この構成を行うには、BackingMap を XML で構成するか、またはプログラマチックに構成します。静的索引付けでは、まず最初に、ObjectGrid の初期化中に索引を作成します。索引は常に BackingMap に同期しており、いつでも使用できる準備ができています。静的索引付けプロセスが既に開始している場合、索引は、eXtreme Scale トランザクション管理プロセスの一環として保守されます。トランザクションが変更をコミットすると、それらの変更は静的索引も更新し、トランザクションがロールバックされれば索引の変更もロールバックされます。

動的索引付けの場合は、索引を含む ObjectGrid インスタンスの初期化の前または後に、BackingMap に索引を作成することができます。動的索引付けプロセスのライフサイクルはアプリケーションによって制御されるので、不要になったら動的索引を削除することができます。アプリケーションが動的索引を作成する場合は、索引作成プロセスを完了するまでに時間がかかるために、その索引をすぐに使用できないことがあります。この時間は索引付けされるデータの量に依存するので、特定の索引付けイベントが発生したときにそのことを通知してもらいたいアプリケーションのために、DynamicIndexCallback インターフェースが提供されています。これらのイベントには、準備完了、エラー、および破棄があります。アプリケーションは、このコールバック・インターフェースを実装し、動的索引付けプロセスに登録できます。

8.6+ BackingMap に索引プラグインが構成されている場合、対応する ObjectMap からアプリケーション索引プロキシー・オブジェクトを取得することができます。ObjectMap の getIndex メソッドを呼び出し、索引プラグインの名前を渡すと、索引プロキシー・オブジェクトが戻されます。索引プロキシー・オブジェクトを適切なアプリケーション索引インターフェース (MapIndex、MapRangeIndex、MapGlobalIndex、またはカスタマイズされた索引インターフェースなど) にキャストする必要があります。索引プロキシー・オブジェクトを取得したら、アプリケーション索引インターフェースで定義されたメソッドを使用して、キャッシュ・オブジェクトを検出することができます。

次のリストに、索引付けの使用手順をまとめます。

- 静的または動的索引プラグインを BackingMap に追加します。
- ObjectMap の getIndex メソッドを発行して、アプリケーション索引プロキシー・オブジェクトを取得します。
- MapIndex、MapRangeIndex またはカスタマイズされた索引インターフェースなどの適切なアプリケーション索引インターフェースに、索引プロキシー・オブジェクトをキャストします。
- アプリケーション索引インターフェースで定義されたメソッドを使用して、キャッシュ・オブジェクトを検出します。

8.6+ HashIndex クラスは、次の組み込みアプリケーション索引インターフェースをサポートできる組み込み索引プラグイン実装です。

- MapIndex
- MapRangeIndex
- MapGlobalIndex

ユーザー独自の索引を作成することもできます。HashIndex を静的索引または動的索引として BackingMap に追加し、MapIndex、MapRangeIndex、または MapGlobalIndex 索引プロキシー・オブジェクトを取得し、その索引プロキシー・オブジェクトを使用してキャッシュ・オブジェクトを検索することができます。

8.6+ グローバル索引

グローバル索引は、区画化された分散データ・グリッド環境で断片に対して実行される、組み込み HashIndex クラスの拡張です。索引付き属性の所在を追跡し、大規模な区画化されたデータ・グリッド環境で属性を使用して区画、キー、値、またはエントリーを探す効率的な方法を提供します。

組み込み HashIndex プラグインでグローバル索引が使用可能になっていると、アプリケーションは索引プロキシー・オブジェクトを MapGlobalIndex タイプにキャストし、それを使用してデータを検索することができます。

デフォルトの索引

ローカル・マップ内のキーを反復処理する場合は、デフォルトの索引を使用できます。この索引はまったく構成を必要としませんが、エージェントを使用するか ShardEvents.shardActivated(ObjectGrid shard) メソッドから取得した ObjectGrid インスタンスを使用して、断片に対して使用しなければなりません。

データ品質に関する考慮事項

索引照会メソッドの結果が表わすのは、特定の時刻におけるデータのスナップショットのみです。結果がアプリケーションに戻された後には、データ・エントリーに対するロックは取得されません。アプリケーションは、戻されたデータ・セットに対してデータ更新が発生する可能性があることに注意する必要があります。例えば、アプリケーションは MapIndex の findAll メソッドを実行して、キャッシュ・オブジェクトのキーを取得します。戻されたこのキー・オブジェクトは、キャッシュ内のデータ項目に関連付けられています。アプリケーションは、キー・オブジェクトを提供することにより、ObjectMap に対して get メソッドを実行して、オブジェクトを検出できるようになっている必要があります。get メソッドが呼び出される直前に、別のトランザクションがキャッシュからそのデータ・オブジェクトを削除した場合、戻される結果はヌルです。

索引付けのパフォーマンスに関する考慮事項

索引付けフィーチャーの主な目的の 1 つは、BackingMap の全体的なパフォーマンスを改善することです。索引付けの使い方が不適切な場合は、アプリケーションのパフォーマンスが低下する可能性があります。このフィーチャーを使用する前に、次の要因について検討します。

- **並行書き込みトランザクションの数:** 索引処理は、トランザクションが BackingMap にデータを書き込むたびに起こりえます。アプリケーションが索引照

会操作を試行しているときに、多くのトランザクションがデータをマップに書き込んでいると、パフォーマンスが低下します。

- **照会操作で戻される結果セットのサイズ:** 結果セットのサイズが大きくなるにつれて、照会のパフォーマンスは低下します。結果セットのサイズが BackingMap の 15% 以上になるとパフォーマンスは低下する傾向にあります。
- **同じ BackingMap に作成される索引の数:** 各索引がシステム・リソースを消費します。BackingMap に作成される索引の数が増えると、パフォーマンスは低下します。

索引付け機能は、BackingMap パフォーマンスを大幅に改善できることがあります。理想的なケースは、BackingMap の大部分の操作が読み取りであり、照会の結果セットが BackingMap エントリーのわずかな割合に過ぎず、ごく少数の索引が BackingMap に対して作成される場合です。

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

複数データ・センター・トポロジーの計画

マルチマスター非同期レプリカ生成機能を使用すると、2 つ以上のデータ・グリッドを、互いの正確なミラーにすることができます。 各データ・グリッドは独立したカタログ・サービス・ドメイン内でホストされ、独自のカタログ・サービス、コンテナー・サーバー、および固有の名前を所有しています。 マルチマスター非同期レプリカ生成機能により、リンクを使用してカタログ・サービス・ドメインのコレクションを接続できます。すると、カタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期されます。カタログ・サービス・ドメイン間のリンクの定義を使用して、ほとんどどのトポロジーでも構成できます。

関連タスク:

複数データ・センター・トポロジーの構成
マルチマスター非同期レプリカ生成の場合、一連のカタログ・サービス・ドメイン同士をリンクします。そうすると、接続されたカタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期化されます。リンクを定義するには、プロパティー・ファイルを使用するか、実行時に Java Management Extensions (JMX) プログラムを使用するか、またはコマンド行ユーティリティーを使用できます。ドメインの現在のリンク・セットは、カタログ・サービス内に保管されます。データ・グリッドをホスティングするカタログ・サービス・ドメインを再始動せずにリンクを追加および削除できます。

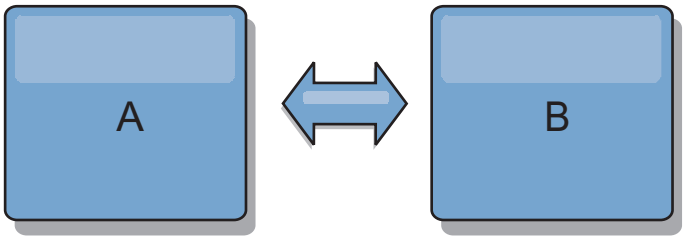
607 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成』
同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。マルチマスター・レプリカ生成トポロジーでは、カタログ・サービス・ドメインは競合を自動的に検出します。カタログ・サービス・ドメインは競合を検出すると、アービターを呼び出します。通常、競合は、デフォルト競合アービターを使用して解決されます。ただし、アプリケーションでカスタム競合アービターを提供できます。

マルチマスター・レプリカ生成のトポロジー

マルチマスター・レプリカ生成を組み込んだデプロイメントのトポロジーを選択する際、いくつかの異なるオプションがあります。

カタログ・サービス・ドメイン を接続するリンク

レプリカ生成データ・グリッドのインフラストラクチャーは、カタログ・サービス・ドメイン 間を双方向のリンクで接続したカタログ・サービス・ドメインのグラフです。 リンクを使用して、2 つの カタログ・サービス・ドメイン はデータ変更内容をやりとりできます。例えば、最も単純なトポロジーは、カタログ・サービス・ドメイン間に単一のリンクを持つ 1 対の カタログ・サービス・ドメイン です。 カタログ・サービス・ドメイン は、左から A、B、C というようにアルファベット順で指定されています。リンクは、遠距離にわたる広域ネットワーク (WAN) を経由する場合もあります。 リンクが遮断されたとしても、いずれかの カタログ・サービス・ドメイン でまだデータを変更できます。トポロジーは、リンクが カタログ・サービス・ドメイン と再接続したときに変更を調整します。ネットワーク接続が中断されると、リンクは自動的に再接続しようとします。

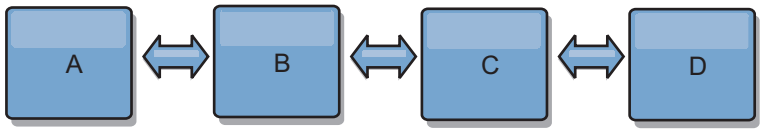


リンクをセットアップすると、この製品はまず、すべての カタログ・サービス・ドメイン を同一にしようと試みます。次に、いずれかの カタログ・サービス・ドメイン で変更が発生すると、eXtreme Scale は同一の状態を維持するよう試みます。目標は、各 カタログ・サービス・ドメイン がリンクで接続されたすべての他の カ

タログ・サービス・ドメイン の正確なミラーになることです。 カタログ・サービス・ドメイン 間のレプリカ生成リンクは、1 つの カタログ・サービス・ドメイン で行われたすべての変更を確実に他の カタログ・サービス・ドメイン にコピーするのに役立ちます。

ライン・トポロジー

ライン・トポロジーはこのような単純なデプロイメントですが、かなりのリンク品質を実証します。 まず、変更を受け取るために、カタログ・サービス・ドメインは直接すべての他の カタログ・サービス・ドメイン に接続する必要がありません。 カタログ・サービス・ドメイン B は カタログ・サービス・ドメイン A から変更をプルします。カタログ・サービス・ドメイン C は、カタログ・サービス・ドメイン A と C を接続する カタログ・サービス・ドメイン B を介して カタログ・サービス・ドメイン A から変更を受信します。同様に、カタログ・サービス・ドメイン D は カタログ・サービス・ドメイン C を介して別の カタログ・サービス・ドメイン から変更を受信します。この機能により、変更配布の負荷が変更のソースから離れた場所に分散できます。



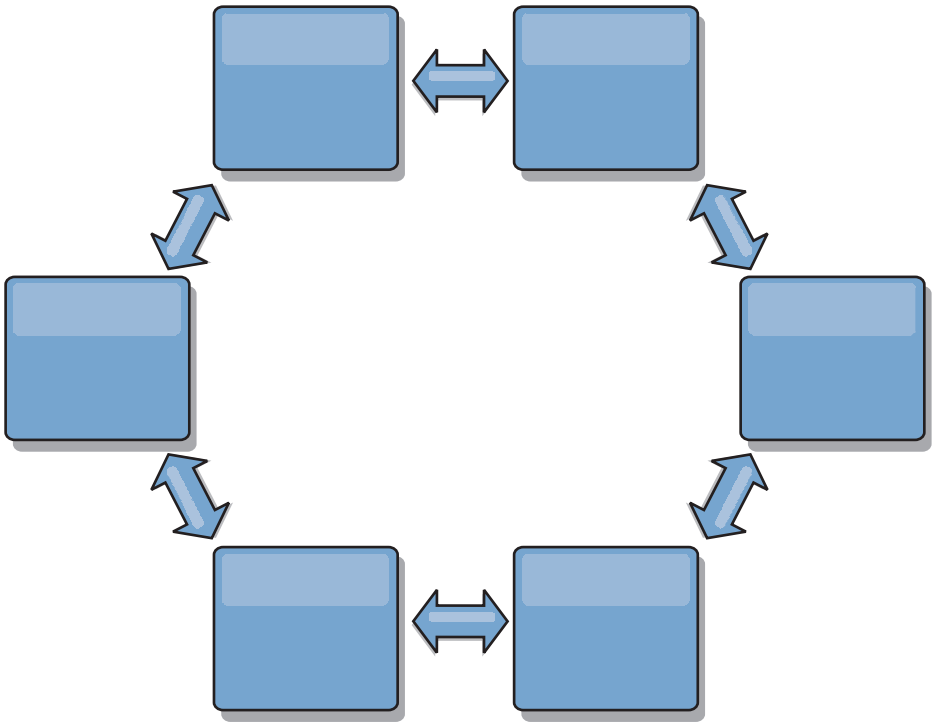
カタログ・サービス・ドメイン C に障害が起こった場合、以下のアクションの発生が考えられることに注意してください。

1. カタログ・サービス・ドメイン D は、カタログ・サービス・ドメイン C が再開されるまで孤立します。
2. カタログ・サービス・ドメイン C は、カタログ・サービス・ドメイン A のコピーであるカタログ・サービス・ドメイン B と自分自身を同期させます。
3. カタログ・サービス・ドメイン D は、カタログ・サービス・ドメイン C を使用して、カタログ・サービス・ドメイン A と B で発生した変更と自分自身を同期させます。これらの変更は最初は、カタログ・サービス・ドメイン D が孤立していた間 (カタログ・サービス・ドメイン C がダウンしていた間) に発生しました。

最終的に、カタログ・サービス・ドメイン A、B、C、および D はすべて、互いのドメインと再び同一になります。

リング・トポロジー

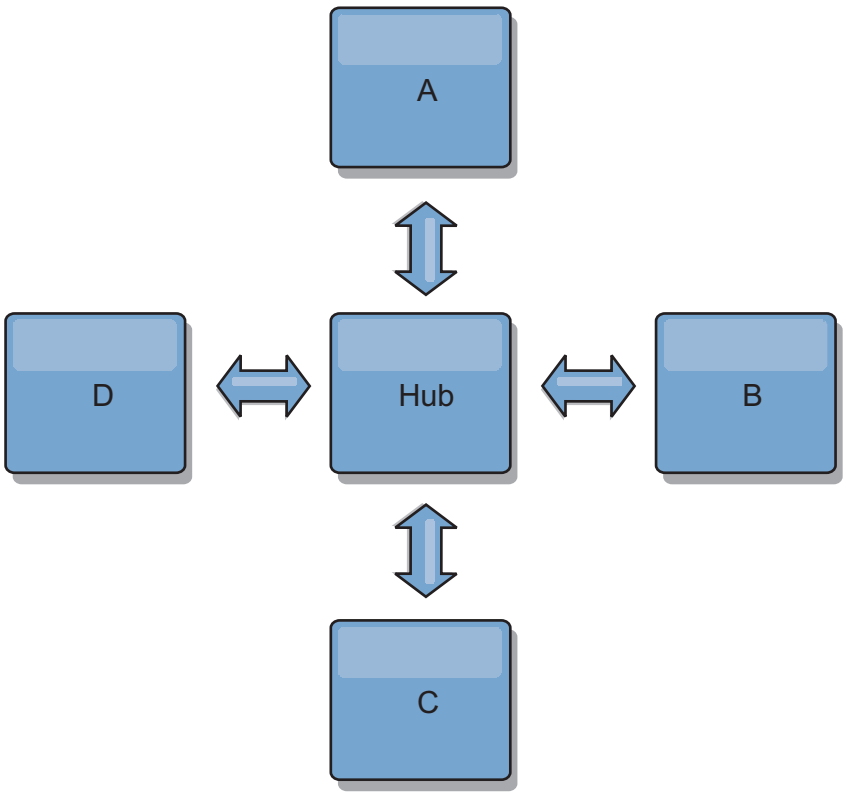
リング・トポロジーは、より回復力のあるトポロジーの例です。 カタログ・サービス・ドメイン または単一リンクに障害が起こった場合でも、残った カタログ・サービス・ドメイン がまだ変更を取得できます。その カタログ・サービス・ドメイン は、障害から離れて、リングの周りを回ります。リング・トポロジーの大きさには関係なく、各 カタログ・サービス・ドメイン は他の カタログ・サービス・ドメイン とのリンクを最大 2 つ持ちます。変更を伝搬するための待ち時間は長くなる場合があります。特定の カタログ・サービス・ドメイン での変更は、すべての カタログ・サービス・ドメイン にその変更が反映されるまで、複数のリンクを経由して伝搬する必要がある場合があります。ライン・トポロジーにも同じ特性があります。



リングの中心に置いたルート・カタログ・サービス・ドメイン を使用した、より洗練されたリング・トポロジーをデプロイすることも可能です。ルート・カタログ・サービス・ドメイン は、調整の中心点として機能します。他の カタログ・サービス・ドメイン は、ルート・カタログ・サービス・ドメイン で生じた変更に対する調整のリモート・ポイントとして働きます。ルート・カタログ・サービス・ドメイン は、カタログ・サービス・ドメイン 間の変更をアービトレーションすることができます。ルート・カタログ・サービス・ドメイン を囲む複数のリングがリング・トポロジーに含まれている場合、カタログ・サービス・ドメイン は最も内側にあるリング間の変更のみをアービトレーションすることができます。ただし、アービトレーションの結果は他のリングの カタログ・サービス・ドメイン にも広がります。

ハブ・アンド・スポーク・トポロジー

ハブ・アンド・スポーク・トポロジーでは、ハブ・カタログ・サービス・ドメインを経由して変更が伝搬します。ハブは指定される唯一の中間 カタログ・サービス・ドメイン であるため、ハブ・アンド・スポーク・トポロジーでは待ち時間が短縮されます。ハブ・カタログ・サービス・ドメイン は、リンク経由ですべてのスポーク・カタログ・サービス・ドメイン に接続されています。ハブは、カタログ・サービス・ドメイン 間で変更を配布します。ハブは、衝突に対して調整のポイントとして機能します。更新頻度の高い環境では、同期を保つために、スポークよりも多くのハードウェア上でハブを稼働する必要がある場合があります。 WebSphere eXtreme Scale は、直線的に拡大するように設計されています。つまり、問題なく、必要に応じてハブをさらに大きくすることができます。 ただし、ハブに障害が起こった場合は、変更はハブが再始動するまで配布されません。 スポーク・カタログ・サービス・ドメイン 上の変更は、ハブが再接続された後に配布されます。



また、完全に複製したクライアントを使用したストラテジー、すなわち、ハブとして稼働しているサーバーのペアを使用するトポロジーのバリエーションを使用することもできます。各クライアントは、クライアント JVM 内に、必要なものを完備した単一コンテナー・データ・グリッドとカタログを作成します。 クライアントは、そのデータ・グリッドを使用してハブ・カタログに接続します。この接続により、クライアントはハブへの接続を取得すると、すぐにハブと同期するようになります。

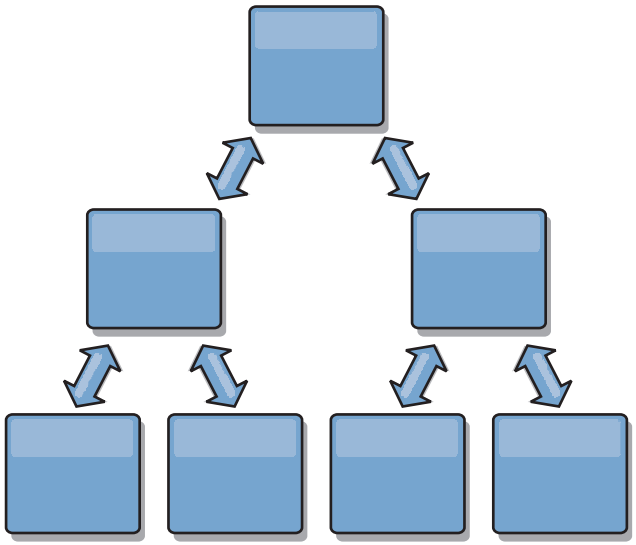
クライアントによって行われた変更は、クライアントに対してローカルで、非同期でハブに複製されます。 ハブはアービトレーション・カタログ・サービス・ドメイン として機能し、すべての接続されたクライアントに変更を配布します。完全複製クライアントのトポロジーは、OpenJPA などのオブジェクト・リレーショナル・マッパーに信頼性の高い L2 キャッシュを提供します。変更はハブを介してクライアント JVM 間に迅速に配布されます。 キャッシュ・サイズを使用可能なヒープ・スペース内に含むことができる場合、このトポロジーは L2 のこのスタイルにとって信頼できるアーキテクチャーです。

必要であれば、複数の区画を使用して、複数の JVM 上にハブ・カタログ・サービス・ドメイン を拡張します。 すべてのデータはまだ単一のクライアント JVM に収まらなければならないため、複数の区画を使用してハブの容量を増加させ、変更の配布とアービトレーションを行います。ただし、複数の区画を使用しても、単一カタログ・サービス・ドメイン の容量は変更されません。

ツリー・トポロジー

非循環有向ツリーを使用することもできます。非循環ツリーには循環やループはなく、有向セットアップにより、リンクの存在は親と子の間のみに制限されます。こ

の構成は、多くのカタログ・サービス・ドメインを含むトポロジーで役立ちます。これらのトポロジーでは、すべての接続可能なスポークに接続されている中央ハブを使用することは実用的ではありません。また、このタイプのトポロジーは、ルート・カタログ・サービス・ドメイン を更新することなく子 カタログ・サービス・ドメイン を追加する必要がある場合にも便利です。



ツリー・トポロジーでもまだ、ルート・カタログ・サービス・ドメイン に調整の中心点を置くことができます。第 2 レベルはまだ、それらの下の カタログ・サービス・ドメイン で生じた変更に対する調整のリモート・ポイントとして機能します。ルート・カタログ・サービス・ドメイン は、第 2 レベルにある カタログ・サービス・ドメイン 間の変更のみをアービトレーションすることができます。それぞれが各レベルで N 個の子を持つ、n 進ツリーを使用することもできます。それぞれのカタログ・サービス・ドメイン は、*n* 個のリンクに接続します。

完全複製クライアント

このトポロジー変化には、ハブとして稼働する 1 対のサーバーが含まれます。 各クライアントは、クライアント JVM 内に、必要なものを完備した単一コンテナー・データ・グリッドとカタログを作成します。 クライアントは、そのデータ・グリッドを使用してハブ・カタログに接続します。これにより、クライアントはハブへの接続を取得すると、すぐにハブと同期するようになります。

クライアントによって行われた変更は、クライアントに対してローカルで、非同期でハブに複製されます。 ハブはアービトレーション・カタログ・サービス・ドメイン として機能し、すべての接続されたクライアントに変更を配布します。完全複製クライアントのトポロジーは、OpenJPA などのオブジェクト・リレーショナル・マッパーに適した L2 キャッシュを提供します。変更はハブを介してクライアント JVM 間に迅速に配布されます。 キャッシュ・サイズをクライアントの使用可能なヒープ・スペース内に含むことができる限り、このトポロジーは L2 のこのスタイルに適したアーキテクチャーです。

必要であれば、複数の区画を使用して、複数の JVM 上にハブ・カタログ・サービス・ドメイン を拡張します。 すべてのデータはまだ単一のクライアント JVM に収まらなければならないため、複数の区画を使用してハブの容量を増加させ、変更

の配布とアービトレーションを行いますが、単一 カタログ・サービス・ドメインの容量は変更しません。

関連タスク:

複数データ・センター・トポロジーの構成
マルチマスター非同期レプリカ生成の場合、一連のカタログ・サービス・ドメイン同士をリンクします。そうすると、接続されたカタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期化されます。リンクを定義するには、プロパティー・ファイルを使用するか、実行時に Java Management Extensions (JMX) プログラムを使用するか、またはコマンド行ユーティリティーを使用できます。ドメインの現在のリンク・セットは、カタログ・サービス内に保管されます。データ・グリッドをホスティングするカタログ・サービス・ドメインを再始動せずにリンクを追加および削除できます。

607 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成』
同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。マルチマスター・レプリカ生成トポロジーでは、カタログ・サービス・ドメインは競合を自動的に検出します。カタログ・サービス・ドメインは競合を検出すると、アービターを呼び出します。通常、競合は、デフォルト競合アービターを使用して解決されます。ただし、アプリケーションでカスタム競合アービターを提供できます。

マルチマスター・トポロジーに関する構成の考慮事項

マルチマスター・レプリカ生成トポロジーを使用するかどうかを決定し、その使用方法について決定する際は、以下の問題を考慮してください。

- **マップ・セット要件**

  カタログ・サービス・ドメインのリンクを介して変更を複製するには、マップ・セットは以下の特性を持っている必要があります。

  – カタログ・サービス・ドメイン内の ObjectGrid 名およびマップ・セット名は、他のカタログ・サービス・ドメインの ObjectGrid 名およびマップ・セット名と一致していなければならない。例えば、ObjectGrid「og1」およびマップ・セット「ms1」がカタログ・サービス・ドメイン A とカタログ・サービス・ドメイン B で構成されていないと、それらのカタログ・サービス・ドメイン間でマップ・セット内のデータを複製できません。

  – FIXED_PARTITION データ・グリッドである。PER_CONTAINER データ・グリッドを複製できません。

  –

  – 各カタログ・サービス・ドメイン内の同じデータ・タイプが複製される

  – 各カタログ・サービス・ドメイン内に同じマップおよび動的マップ・テンプレートが含まれている。

  – エンティティー・マネージャーを使用しない。エンティティー・マップを含むマップ・セットは、カタログ・サービス・ドメインを介して複製されません。

  – 後書きキャッシング・サポートを使用しない。後書きサポートで構成されたマップを含むマップ・セットは、カタログ・サービス・ドメインを介して複製されません。

トポロジー内のカタログ・サービス・ドメインが開始されると、前述の特性を持つすべてのマップ・セットが複製を開始します。

- **複数のカタログ・サービス・ドメインを使用するクラス・ローダー**

  カタログ・サービス・ドメインは、キーおよび値として使用されるクラスすべてへのアクセス権限を持たなければなりません。すべての依存関係は、すべてのドメインのデータ・グリッド・コンテナー Java 仮想マシン (JVM) に対するすべてのクラスパスに反映されなければなりません。 CollisionArbiter プラグインがキャッシュ・エントリーの値を取得する場合、その値に対するクラスはアービターを開始するドメインに存在しなければなりません。

関連タスク:

複数データ・センター・トポロジーの構成
マルチマスター非同期レプリカ生成の場合、一連のカタログ・サービス・ドメイン同士をリンクします。そうすると、接続されたカタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期化されます。リンクを定義するには、プロパティー・ファイルを使用するか、実行時に Java Management Extensions (JMX) プログラムを使用するか、またはコマンド行ユーティリティーを使用できます。ドメインの現在のリンク・セットは、カタログ・サービス内に保管されます。データ・グリッドをホスティングするカタログ・サービス・ドメインを再始動せずにリンクを追加および削除できます。

607 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成』
同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。マルチマスター・レプリカ生成トポロジーでは、カタログ・サービス・ドメインは競合を自動的に検出します。カタログ・サービス・ドメインは競合を検出すると、アービターを呼び出します。通常、競合は、デフォルト競合アービターを使用して解決されます。ただし、アプリケーションでカスタム競合アービターを提供できます。

マルチマスター・トポロジーでのローダーについての考慮事項

マルチマスター・トポロジーでローダーを使用する場合は、起こり得る衝突および改訂情報の維持についての問題を考慮する必要があります。データ・グリッドはその中の各項目について改訂情報を維持しており、構成内の他のプライマリー断片がデータ・グリッドにエントリーを書き込むときに衝突を検出できるようになっています。エントリーがローダーから追加されると、この改訂情報は含められず、エントリーは新しい改訂を持つようになります。エントリーの改訂は新規挿入に見えるため、別のプライマリー断片もこの状態を変更したり、ローダーから同じ情報を引き込んだりした場合に、偽の衝突が発生する場合があります。

レプリカ生成の変更は、データ・グリッド内に今はないが、レプリカ生成トランザクション中に変更されるキーのリストを使用して、ローダーに対して get メソッドを呼び出します。レプリカ生成が行われると、これらのエントリーは衝突エントリーとなります。衝突をアービトレーションし、改訂を適用すると、バッチ更新がローダーで呼び出されて変更内容がデータベースに適用されます。改訂ウィンドウで変更されたマップはすべて、同じトランザクションで更新されます。

プリロードの問題

データ・センター A とデータ・センター B を使用した 2 つのデータ・センター・トポロジーがあるとします。2 つのデータ・センターはそれぞれ独立したデータベースを持っていますが、データ・センター A にのみ、実行中のデータ・グリッドがあります。マルチマスター構成でデータ・センター間のリンクを確立すると、データ・センター A 内のデータ・グリッドがデータ・センター B 内の新規データ・グリッドにデータをプッシュし始め、すべてのエントリーとの衝突を引き起こします。別の大きな問題は、データ・センター A 内のデータベースには存在せず、データ・センター B 内のデータベースにあるすべてのデータで発生します。これらの行にはデータが取り込まれず、アービトレーションされません。結果として、解決されない不整合が発生します。

プリロードの問題に対する解決策

データベース内にのみ存在するデータは改訂を持つことができないため、常にローカル・データベースからデータ・グリッドを完全にプリロードした後、マルチマスター・リンクを設定する必要があります。次に、両方のデータ・グリッドはデータを改訂し、アービトレーションすることができ、最終的に整合した状態に達します。

スパース・キャッシュの問題

スパース・キャッシュを使用すると、アプリケーションはまずデータ・グリッド内のデータの検索を試みます。データがデータ・グリッド内にないと、ローダーを使用してデータベースでデータが検索されます。キャッシュ・サイズを小規模に維持するために、エントリーは定期的にデータ・グリッドから除去されます。

このキャッシュ・タイプは、マルチマスター構成シナリオでは問題となる場合があります。なぜなら、データ・グリッド内のエントリーは、衝突が発生するときやどちら側が変更を行ったかを検出するのを助ける、改訂用メタデータを持っているためです。データ・センター間のリンクが機能していない場合、一方のデータ・センターがエントリーを更新し、最終的にデータ・グリッド内のデータベースを更新し、エントリーを無効化することができます。リンクが復旧すると、データ・センターは互いに改訂を同期しようとします。しかし、データベースが更新され、データ・グリッド・エントリーが無効化されているため、ダウンしていたデータ・センターの観点から見ると、変更が失われています。結果として、両側のデータ・グリッドで同期がとれず、整合性がなくなります。

スパース・キャッシュの問題に対する解決策

ハブおよびスポーク・トポロジー:

ハブおよびスポーク・トポロジーのハブでのみローダーを実行し、結果として、データの整合性を維持しながら、データ・グリッドをスケールアウトすることができます。ただし、このデプロイメントを検討している場合は、ローダーがデータ・グリッドを部分的にロードできることに注意してください。これは、Evictor が構成済みであることを意味します。構成のスポークがスパース・キャッシュだが、ローダーがない場合は、どのキャッシュ・ミスもデータベースからデータを取り出すことができません。この制約事項のため、ハブおよびスポーク構成では、完全に取り込まれたキャッシュ・トポロジーを使用する必要があります。

無効化および除去

無効化により、データ・グリッドとデータベース間の不整合が発生します。プログラマチックに、または除去機能を使用して、データ・グリッドからデータを削除できます。アプリケーションの開発時に、改訂処理では無効化された変更内容は複製されず、プライマリー断片間で不整合が発生しないよう注意する必要があります。

無効化イベントは、キャッシュ状態変更ではなく、レプリカ生成は生じません。いかなる構成済み Evictor も構成内の他の Evictor と独立して実行されます。例えば、カタログ・サービス・ドメインでのメモリーしきい値について構成済みの Evictor が 1 つあるが、リンクされている他のカタログ・サービス・ドメインに異なるタイプのあまり活動的でない Evictor がある場合があります。データ・グリッド・エントリーがメモリーしきい値ポリシーのために削除されても、他のカタログ・サービス・ドメイン内のエントリーは影響を受けません。

データベースの更新およびデータ・グリッドの無効化

問題が発生するのは、バックグラウンドで直接データベースを更新しながら、マルチマスター構成で更新済みエントリーについてデータ・グリッドに対して無効化を呼び出しているときです。この問題は、いくつかのタイプのキャッシュ・アクセスがエントリーをデータ・グリッドに移動するまで、データ・グリッドが別のプライマリー断片への変更を複製できないために発生します。

単一論理データベースへの複数の書き込みプログラム

ローダーを介して接続された複数のプライマリー断片と一緒に単一データベースを使用していると、トランザクションの競合が発生します。ローダーの実装は、特にこれらのタイプのシナリオを処理する必要があります。

マルチマスター・レプリカ生成を使用したデータのミラーリング

独立したカタログ・サービス・ドメインに接続された独立したデータベースを構成できます。この構成では、ローダーはあるデータ・センターの変更内容を別のデータ・センターにプッシュできます。

関連タスク:

複数データ・センター・トポロジーの構成
マルチマスター非同期レプリカ生成の場合、一連のカタログ・サービス・ドメイン同士をリンクします。そうすると、接続されたカタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期化されます。リンクを定義するには、プロパティー・ファイルを使用するか、実行時に Java Management Extensions (JMX) プログラムを使用するか、またはコマンド行ユーティリティーを使用できます。ドメインの現在のリンク・セットは、カタログ・サービス内に保管されます。データ・グリッドをホスティングするカタログ・サービス・ドメインを再始動せずにリンクを追加および削除できます。

607 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成』
同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。マルチマスター・レプリカ生成トポロジーでは、カタログ・サービス・ドメインは競合を自動的に検出します。カタログ・サービス・ドメインは競合を検出すると、アービターを呼び出します。通常、競合は、デフォルト競合アービターを使用して解決されます。ただし、アプリケーションでカスタム競合アービターを提供できます。

マルチマスター・レプリカ生成での設計上の考慮事項

マルチマスター・レプリカ生成を実装する場合、アービトレーション、リンク作成、およびパフォーマンスなど、設計における側面を考慮する必要があります。

トポロジー設計におけるアービトレーションの考慮事項

同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。各カタログ・サービス・ドメインが、同程度のプロセッサー、メモリー、ネットワーク・リソースを持つようにセットアップしてください。変更の衝突処理 (アービトレーション) を実行しているカタログ・サービス・ドメインは、他のカタログ・サービス・ドメインよりも多くのリソースを使用することに気付くことがあります。 衝突は、自動的に検出されます。 衝突は、以下の 2 つのメカニズムの 1 つを使用して処理されます。

- **デフォルト衝突アービター**: デフォルトのプロトコルは、字句的に最も小さい名前の付いたカタログ・サービス・ドメインからの変更を使用します。 例えば、カタログ・サービス・ドメイン A と B によってレコードの競合が生じる場合には、カタログ・サービス・ドメイン B の変更は無視されます。カタログ・サービス・ドメイン A はそのバージョンを保持し、カタログ・サービス・ドメイン B のレコードはカタログ・サービス・ドメイン A からのレコードに一致するように変更されます。この動作は、ユーザーやセッションが正常にバインドされているアプリケーション、またはユーザーやセッションがデータ・グリッドの 1 つにアフィニティーを持つ対象となるアプリケーションにも同様に適用されます。
- **カスタム衝突アービター**: アプリケーションはカスタム・アービターを提供することができます。カタログ・サービス・ドメインは衝突を検出すると、アービターを開始します。便利なカスタム・アービターの開発について詳しくは、 607 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成』を参照してください。

衝突が起こる可能性のあるトポロジーに対しては、ハブ・アンド・スポーク・トポロジーまたはツリー・トポロジーの実装を検討してください。これらの 2 つのトポロジーは、以下のシナリオで発生する可能性のある、恒常的な衝突の回避につながります。

1. 複数のカタログ・サービス・ドメインで衝突が発生します。
2. 各カタログ・サービス・ドメインが衝突をローカルで処理し、改訂を生成します。
3. 改訂が衝突し、その結果、改訂の改訂をもたらします。

衝突を回避するには、カタログ・サービス・ドメインのサブセットの衝突アービターとして、*アービトレーション・カタログ・サービス・ドメイン* と呼ばれる特定のカタログ・サービス・ドメインを選択します。例えば、ハブ・アンド・スポーク・トポロジーはハブを衝突ハンドラーとして使用する場合があります。 スポーク衝突ハンドラーは、スポーク・カタログ・サービス・ドメインで検出されたすべての衝突を無視します。ハブ・カタログ・サービス・ドメインは、改訂を作成し、予期しない衝突の改訂を回避します。衝突を処理するように割り当てられたカタログ・サービス・ドメインは、衝突の処理に責任を持つすべてのドメインにリンクしていなければなりません。 ツリー・トポロジーでは、内部の親ドメインが自分の直接の子の衝突を処理します。 対照的に、リング・トポロジーを使用する場合、リング内の 1 つのカタログ・サービス・ドメインをアービターとして指定することはできません。

次の表に、さまざまなトポロジーと互換性のあるアービトレーション・アプローチをまとめました。

表 7. アービトレーション・アプローチ : この表は、アプリケーション・アービトレーションがさまざまなトポロジーと互換性があるかどうかについて記述します。

トポロジー	アプリケーション・アービトレーション?	注
2 つのカタログ・サービス・ドメインのライン	はい	1 つのカタログ・サービス・ドメインをアービターとして選択します。
3 つのカタログ・サービス・ドメインのライン	はい	真ん中のカタログ・サービス・ドメインがアービターでなければなりません。 真ん中のカタログ・サービス・ドメインが、単純なハブ・アンド・スポーク・トポロジーのハブだと考えてください。
3 つより多いカタログ・サービス・ドメインのライン	いいえ	アプリケーション・アービトレーションはサポートされません。
N 個のスポークを持つハブ	はい	すべてのスポークへのリンクを持つハブがアービトレーション・カタログ・サービス・ドメインでなければなりません。
N 個のカタログ・サービス・ドメインのリング	いいえ	アプリケーション・アービトレーションはサポートされません。
非循環有向ツリー (n 進ツリー)	はい	すべてのルート・ノードは、自分の直接の子孫のみを評価する必要があります。

トポロジー設計におけるリンクの考慮事項

変更待ち時間、フォールト・トレランス、およびパフォーマンス特性におけるトレードオフを最適化している間、トポロジーにはリンクの最小数が含まれているのが理想的です。

- **変更待ち時間**

  変更待ち時間は、変更が特定のカタログ・サービス・ドメインに到着する前に経由しなければならない中間カタログ・サービス・ドメインの数によって決まります。

  トポロジーが、すべてのカタログ・サービス・ドメインを他のすべてのカタログ・サービス・ドメインにリンクすることによって中間カタログ・サービス・ドメインを除去すれば、トポロジーの変更待ち時間は最善になります。 ただし、カタログ・サービス・ドメインはそのリンク数に比例してレプリカ生成作業を実行しなければなりません。 大規模トポロジーの場合、非常に多くのリンクが定義され、管理が負担になる場合があります。

  変更が他のカタログ・サービス・ドメインにコピーされる速度は、以下の追加要因によって異なります。

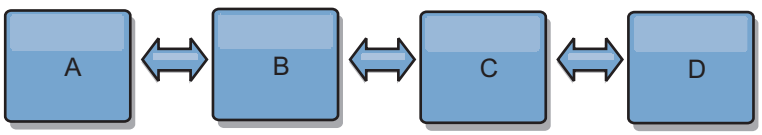
  - ソース・カタログ・サービス・ドメイン上のプロセッサーとネットワーク帯域幅
  - ソース・カタログ・サービス・ドメインとターゲット・カタログ・サービス・ドメインの間の中間カタログ・サービス・ドメイン数とリンク数
  - ソース・カタログ・サービス・ドメイン、ターゲット・カタログ・サービス・ドメイン、および中間カタログ・サービス・ドメインで使用可能なプロセッサーとネットワーク・リソース

- **フォールト・トレランス**

  フォールト・トレランスは、変更のレプリカ生成のために、2 つのカタログ・サービス・ドメイン間に存在するパス数によって決定します。

  特定のカタログ・サービス・ドメインのペア間に 1 つしかリンクがないと、リンク障害が発生した場合に変更を伝搬できません。同様に、中間ドメインのいずれかでリンク障害が発生すると、カタログ・サービス・ドメイン間で変更が伝搬されません。あるカタログ・サービス・ドメインから別のカタログ・サービス・ドメインへの単一リンクが中間ドメインを経由するトポロジーを考えることができます。その場合、中間カタログ・サービス・ドメインのいずれかがダウンすると、変更が伝搬されません。

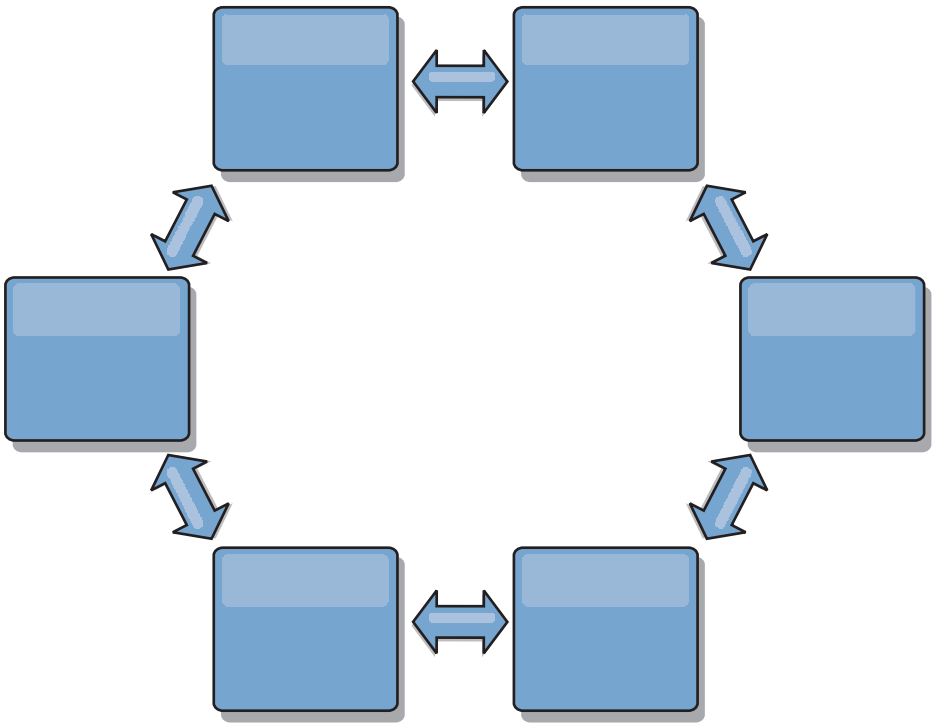
  4 つのカタログ・サービス・ドメイン A、B、C、および D を持つライン・トポロジーを考えてみます。



  以下のいくつかの状態のままであれば、ドメイン D は A からの変更はまったく見えません。

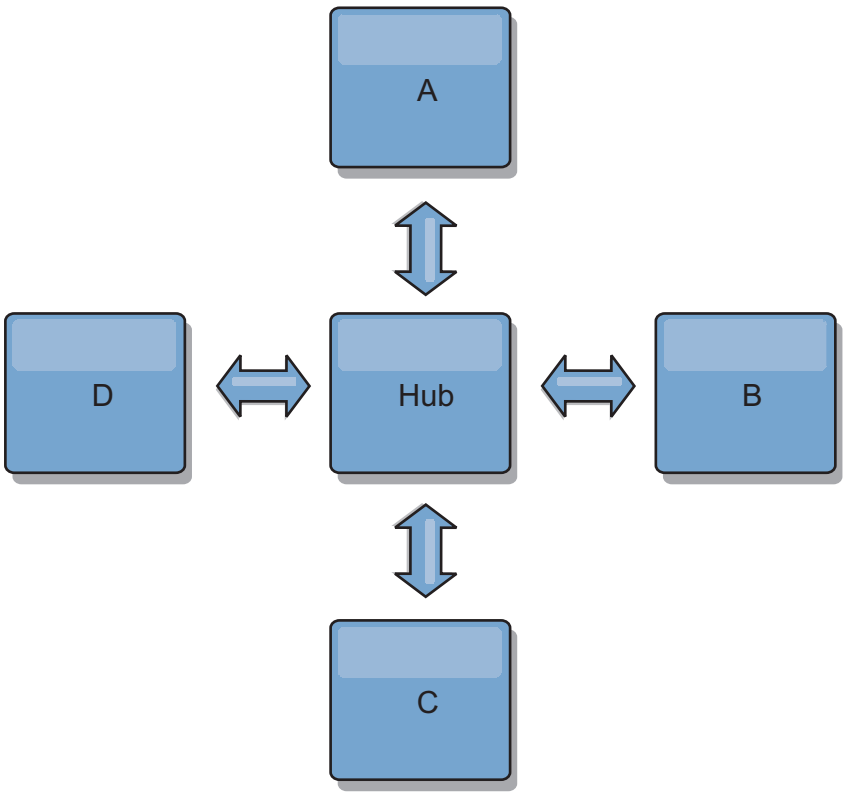
– ドメイン A が稼働中で B がダウン
– ドメイン A および B が稼働中で C がダウン
– A と B の間のリンクがダウン
– B と C の間のリンクがダウン
– C と D の間のリンクがダウン

対照的に、リング・トポロジーの場合、各カタログ・サービス・ドメインはどちらかの方向から変更を受け取ることができます。



例えば、リング・トポロジー内の特定のカタログ・サービスがダウンしている場合、2 つの隣接ドメインはまだ互いに変更を直接プルすることができます。

すべての変更はハブを経由して伝搬されます。したがって、ライン・トポロジーやリング・トポロジーとは対照的に、ハブ・アンド・スポーク設計は、ハブに障害が起きた場合に機能停止となる可能性が高いといえます。



単一カタログ・サービス・ドメインは、ある量のサービス損失に対しては回復力があります。ただし、広域ネットワーク障害や物理データ・センター間のリンク障害などのより大規模な障害が発生した場合は、いずれかのカタログ・サービス・ドメインが中断される可能性があります。

- **リンク作成およびパフォーマンス**

  カタログ・サービス・ドメイン上に定義されるリンク数は、パフォーマンスに影響します。リンクが多いと使われるリソースも多くなり、結果的にレプリカ生成パフォーマンスが落ちる場合もあります。 他のドメインを介してドメイン A の変更を取得する機能は、そのトランザクションを各場所に複製するドメイン A の負荷を効果的に軽減します。ドメイン上の変更配布の負荷は、トポロジー内のドメインの数ではなく、ドメインが使用するリンクの数によって制限されます。このロード・プロパティーは、スケーラビリティーを提供するため、トポロジー内のドメインは変更の配布に伴う負荷を分配できます。

  カタログ・サービス・ドメインは、他のカタログ・サービス・ドメインを間接的に経由して変更を取得できます。5 つのカタログ・サービス・ドメインを持つライン・トポロジーを考えてみます。

  ```
  A <=> B <=> C <=> D <=> E
  ```

  – A は、B、C、D、および E から B を介して変更をプルします。
  – B は、A と C からは直接、D と E からは C を介して変更をプルします。
  – C は、B と D からは直接、A からは B を介して、E からは D を介して変更をプルします。
  – D は、C と E からは直接、A と B からは C を介して変更をプルします。

– E は、D からは直接、A、B、および C からは D を介して変更をプルします。

カタログ・サービス・ドメイン A および E は、それぞれ単一カタログ・サービス・ドメインへのリンクのみを持っているので、配布の負荷は最も低くなります。 ドメイン B、C、および D は、それぞれ 2 つのドメインへのリンクを持っています。つまり、ドメイン B、C、および D 上の配布の負荷は、ドメイン A および E 上の負荷の 2 倍になります。ワークロードは、トポロジー内のドメイン総数ではなく、各ドメインのリンク数によって決まります。つまり、記述される負荷の分散は、ラインに 1000 ドメインを含んだとしても一定のままです。

マルチマスター・レプリカ生成のパフォーマンスに関する考慮事項

マルチマスター・レプリカ生成トポロジーを使用する際は、以下の制限を考慮してください。

- **変更の配布のチューニング**は、前のセクションで説明したとおりです。
- **レプリカ生成リンクのパフォーマンス** WebSphere eXtreme Scale は、任意の一対の JVM 間で、単一の TCP/IP ソケットを作成します。JVM 間のすべてのトラフィックは、マルチマスター・レプリカ生成のトラフィックも含め、単一ソケットを経由して発生します。カタログ・サービス・ドメインは少なくとも *n* 個のコンテナー JVM でホストされ、少なくとも *n* 個の TCP リンクをピア・カタログ・サービス・ドメインに提供しています。つまり、コンテナー数をより多く持つカタログ・サービス・ドメインには、より高いレプリカ生成のパフォーマンス・レベルがあります。より多くのコンテナーがあると、より多くのプロセッサーとネットワーク・リソースが必要になります。
- **TCP スライディング・ウィンドウのチューニングおよび RFC 1323** リンクの両端の RFC 1323 サポートを使用して、より多くのデータが往復します。このサポートにより高いスループットが実現され、約 16,000 の要因でウィンドウの容量が拡張されます。

  TCP ソケットが、スライディング・ウィンドウのメカニズムを使用して大量データのフローを制御することを思い出してください。このメカニズムは、通常、往復のインターバルのソケットを 64 KB に制限します。往復のインターバルが 100 ミリ秒の場合、追加チューニングをすることなく帯域幅は 640 KB/秒に制限されます。 リンクで使用可能な帯域幅を完全に使用する場合は、オペレーティング・システムに固有のチューニングが必要になることがあります。 ほとんどのオペレーティング・システムにはチューニング・パラメーターがあり、高度な待ち時間リンクのスループットを向上させる RFC 1323 オプションも含まれます。

  以下の複数の要因がレプリカ生成のパフォーマンスに影響する可能性があります。

  – eXtreme Scale が変更を取得する速度。
  – eXtreme Scale が取得レプリカ生成要求をサービスできる速度。
  – スライディング・ウィンドウの容量。
  – リンクの両端のネットワーク・バッファーをチューニングすると、eXtreme Scale は、効率的にソケット上の変更を取得します。
- **オブジェクト・シリアライゼーション** すべてのデータはシリアライズ可能でなければなりません。 カタログ・サービス・ドメインが `COPY_TO_BYTES` を使用して

いない場合、そのカタログ・サービス・ドメインは Java シリアライゼーションまたは ObjectTransformers を使用して、シリアライゼーション・パフォーマンスを最適化する必要があります。

- **圧縮** WebSphere eXtreme Scale は、デフォルトでカタログ・サービス・ドメイン間で送信されるすべてのデータを圧縮します。 現在、圧縮を使用不可にすることはできません。
- **メモリー・チューニング** マルチマスター・レプリカ生成トポロジーのメモリー使用量は、トポロジー内のカタログ・サービス・ドメイン数とはほとんど関係ありません。

  マルチマスター・レプリカ生成を使用すると、バージョン管理を扱うマップ・エントリーごとに一定の処理量が追加されます。各コンテナーはトポロジー内の各カタログ・サービス・ドメインの一定量のデータも追跡します。 2 つのカタログ・サービス・ドメインを持つトポロジーは、50 カタログ・サービス・ドメインを持つトポロジーとほぼ同じメモリーを使用します。 WebSphere eXtreme Scale は、その実装環境のリプレイ・ログや類似のキューを使用しません。すなわち、レプリカ生成リンクがかなりの期間使用できず、後で再開する場合、リカバリー構造は準備されていません。

関連タスク:

複数データ・センター・トポロジーの構成
マルチマスター非同期レプリカ生成の場合、一連のカタログ・サービス・ドメイン同士をリンクします。そうすると、接続されたカタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期化されます。リンクを定義するには、プロパティー・ファイルを使用するか、実行時に Java Management Extensions (JMX) プログラムを使用するか、またはコマンド行ユーティリティーを使用できます。ドメインの現在のリンク・セットは、カタログ・サービス内に保管されます。データ・グリッドをホスティングするカタログ・サービス・ドメインを再始動せずにリンクを追加および削除できます。

607 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成』
同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。マルチマスター・レプリカ生成トポロジーでは、カタログ・サービス・ドメインは競合を自動的に検出します。カタログ・サービス・ドメインは競合を検出すると、アービターを呼び出します。通常、競合は、デフォルト競合アービターを使用して解決されます。ただし、アプリケーションでカスタム競合アービターを提供できます。

他の製品とのインターオペラビリティー

WebSphere eXtreme Scale を他の製品 (WebSphere Application Server や WebSphere Application Server Community Edition など) と統合することができます。

WebSphere Application Server

WebSphere Application Server を WebSphere eXtreme Scale 構成のさまざまな側面に統合できます。データ・グリッド・アプリケーションをデプロイし、WebSphere Application Server を使用して、コンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーをホストできます。あるいは、スタンドアロンのカタログ・サーバーとコンテナー・

サーバーが存在する WebSphere Application Server 環境に WebSphere eXtreme Scale クライアントがインストールされた混合環境を使用することもできます。 WebSphere Application Server セキュリティーを WebSphere eXtreme Scale 環境で使用することもできます。

WebSphere Business Process Management および WebSphere Connectivity 製品

WebSphere Integration Developer、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Process Server などの WebSphere Business Process Management および WebSphere Connectivity 製品は、CICS®、Web サービス、データベース、または JMS トピックおよびキューといったバックエンド・システムを統合します。構成に WebSphere eXtreme Scale を追加して、これらのバックエンド・システムの出力をキャッシュすることで、構成の全体的パフォーマンスを向上させることができます。

WebSphere Commerce

WebSphere Commerce では動的キャッシュの代わりとして WebSphere eXtreme Scale キャッシングを利用できます。重複する動的キャッシュ・エントリーを除去し、高ストレス状況下でキャッシュの同期を維持するために頻繁に行わなければならない無効化処理を回避することで、パフォーマンス、スケーリング、および高可用性を向上させることができます。

WebSphere Portal

WebSphere Portal の HTTP セッションを WebSphere eXtreme Scale のデータ・グリッドに保持できます。さらに、IBM WebSphere Portal の IBM Web Content Manager は、動的キャッシュ・インスタンスを使用して、拡張キャッシングが使用可能のときに Web Content Manager から取得されるレンダリング内容を保管することができます。 WebSphere eXtreme Scale は、デフォルトの動的キャッシュ実装を使用する代わりに、キャッシュ内容を柔軟性のあるデータ・グリッドに保管する、動的キャッシュの実装を提供します。

WebSphere Application Server Community Edition

WebSphere Application Server Community Edition はセッション状態を共有できますが、効率的でスケーラブルな方法ではありません。 WebSphere eXtreme Scale は、状態の複製に使用できるハイパフォーマンスな分散パーシスタンス層を提供しますが、WebSphere Application Server の外部にあるアプリケーション・サーバーと容易には統合しません。この 2 つの製品を統合することで、スケーラブルなセッション管理ソリューションを提供することができます。

WebSphere Real Time

WebSphere Real Time (業界最先端のリアルタイム Java 製品) のサポートにより、WebSphere eXtreme Scale は、Extreme Transaction Processing (XTP) アプリケーションが、より安定した予測可能な応答時間を得られるようにします。

モニター

一般的によく使われるいくつかのエンタープライズ・モニタリング・ソリューションを使用して、WebSphere eXtreme Scale をモニターすることができます。 パブリックにアクセス可能な管理 Bean を使用して WebSphere eXtreme Scale をモニターする IBM Tivoli® Monitoring および Hyperic HQ 用に、プラグイン・エージェントが組み込まれています。CA Wily Introscope は Java メソッドのインスツルメンテーションを使用して、統計情報を収集します。

.NET 8.6+

Microsoft Visual Studio、IIS、および .NET 環境

サポートされる Microsoft Visual Studio、IIS、および .NET 環境について詳しくは、 339 ページの『Microsoft .NET に関する考慮事項』を参照してください。

関連タスク:

各種アプリケーション・サーバー用の HTTP セッション・マネージャーの構成
WebSphere eXtreme Scale には、Web コンテナーのデフォルト・セッション・マネージャーをオーバーライドするセッション管理実装がバンドルされています。この実装は、セッション・レプリカ生成、高可用性、より優れたスケーラビリティーと構成オプションを提供します。WebSphere eXtreme Scale セッション・レプリカ生成マネージャーおよび汎用組み込み ObjectGrid コンテナーの開始を有効にします。

WebSphere Portal での HTTP セッション・マネージャーの構成
WebSphere Portal の HTTP セッションをデータ・グリッドに保持できます。

WebSphere Application Server での HTTP セッション・マネージャーの構成
WebSphere Application Server はセッション管理機能を備えていますが、要求の数が増えるとパフォーマンスが低下します。WebSphere eXtreme Scale には、セッション・レプリカ生成、高可用性、優れたスケーラビリティー、および堅固な構成オプションを備えたセッション管理実装がバンドルされています。

WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server の構成
WebSphere Application Server でカタログ・サービスおよびコンテナー・サーバー・プロセスを実行できます。これらのサーバーを構成するプロセスは、スタンドアロン構成の場合とは異なります。カタログ・サービスは、WebSphere Application Server サーバーまたはデプロイメント・マネージャーで自動的に開始できます。eXtreme Scale アプリケーションが WebSphere Application Server 環境にデプロイされて、開始されるときに、コンテナー・プロセスは開始されます。

関連情報:

WebSphere eXtreme Scale を使用して動的キャッシュによりパフォーマンスおよびスケールを向上させるための WebSphere Commerce の構成

WebSphere Business Process Management および WebSphere Connectivity の統合

WebSphere eXtreme Scale を使用した WebSphere Portal および IBM Web Content Manager パフォーマンスの向上

構成の計画

ハードウェアまたはソフトウェアを構成する前に、次の考慮事項について理解する必要があります。

ネットワーク・ポートの計画

WebSphere eXtreme Scale は、Java 仮想マシン間の通信にオープン・ポートを必要とする分散キャッシュです。特に、ファイアウォールのある環境や、カタログ・サービスやコンテナーを複数ポートで使用している場合は、ポートを計画し、制御します。

重要: ポート番号を指定する際は、オペレーティング・システムで一時ポート範囲にあるポートを設定することは避けてください。一時ポート範囲にあるポートを使用すると、ポートの競合が発生する場合があります。

カタログ・サービス・ドメイン

カタログ・サービス・ドメインでは、以下のポートを定義する必要があります。

peerPort

高可用性 (HA) マネージャーがピア・カタログ・サーバー間で TCP スタックを介して通信するためのポートを指定します。WebSphere Application Server では、この設定は HA マネージャー・ポート構成によって継承されます。

clientPort

カタログ・サーバーがカタログ・サービス・データにアクセスするためのポートを指定します。WebSphere Application Server では、このポートは、カタログ・サービス・ドメイン構成を介して設定されます。

listenerPort

オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) または eXtremeIO (XIO) トランスポートがバインドする先のポート番号を指定します。この設定は、コンテナーおよびクライアントをカタログ・サービスと通信するように構成します。 WebSphere Application Server では、listenerPort は BOOTSTRAP_ADDRESS ポート構成 (ORB トランスポートを使用しているとき) または XIO_address ポート構成 (XIO トランスポートを使用しているとき) によって継承されます。このプロパティーは、コンテナー・サーバーとカタログ・サービスの両方に適用されます。

デフォルト: 2809

JMXConnectorPort

Java Management Extensions (JMX) サービスのバインド先の Secure Sockets Layer (SSL) ポートを定義します。

JMXServicePort

MBean サーバーが Java Management Extensions (JMX) との通信を listen するポート番号を指定します。JMXServicePort プロパティーは、JMX 用の非 SSL ポートを指定します。構成の中の各 JVM に対して、異なるポート番号を使用しなければなりません。JMX/RMI を使用する場合は、たとえデフォルトのポート値を使用する場合であっても、**JMXServicePort** とポート番号を明示的に指定してください。このプロパティーは、コンテナー・サーバーとカタログ・サービスの両方に適用されます。 (スタンドアロン環境の場合のみ必須。)

デフォルト: カタログ・サーバーの場合は 1099

jvmArgs (オプション)

Java 仮想マシン (JVM) 引数リストを指定します。セキュリティーが有効になっているときは、**startOgServer**または **startXsServer** スクリプトの -jvmArgs -Dcom.ibm.CSI.SSLPort=<sslPort> 引数を使用して、Secure Sockets Layer (SSL) ポートを構成する必要があります。

コンテナー・サーバー

WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバーも、いくつかのポートが作動することを必要とします。デフォルトでは、eXtreme Scale コンテナー・サーバーは、HA マネージャー・ポートおよびリスナー・ポートを、動的ポートと共に自動的に生成します。ファイアウォールのある環境では、ポートの計画を立て、それらを制御す

ることが有益です。コンテナー・サーバーが特定のポートを使用して始動するようにするために、**startOgServer** または **startXsServer** コマンドで以下のオプションを使用できます。

haManagerPort
HA マネージャーが使用するポート番号を指定します。このプロパティーが設定されていない場合、空きポートが選択されます。このプロパティーは、WebSphere Application Server 環境では無視されます。

listenerPort
オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) または eXtremeIO (XIO) トランスポートがバインドする先のポート番号を指定します。この設定は、コンテナーおよびクライアントをカタログ・サービスと通信するように構成します。 WebSphere Application Server では、listenerPort は BOOTSTRAP_ADDRESS ポート構成 (ORB トランスポートを使用しているとき) または XIO_address ポート構成 (XIO トランスポートを使用しているとき) によって継承されます。このプロパティーは、コンテナー・サーバーとカタログ・サービスの両方に適用されます。

デフォルト: 2809

JMXConnectorPort
Java Management Extensions (JMX) サービスのバインド先の Secure Sockets Layer (SSL) ポートを定義します。

JMXServicePort
MBean サーバーが Java Management Extensions (JMX) との通信を listen するポート番号を指定します。JMXServicePort プロパティーは、JMX 用の非 SSL ポートを指定します。構成の中の各 JVM に対して、異なるポート番号を使用しなければなりません。JMX/RMI を使用する場合は、たとえデフォルトのポート値を使用する場合であっても、**JMXServicePort** とポート番号を明示的に指定してください。このプロパティーは、コンテナー・サーバーとカタログ・サービスの両方に適用されます。 (スタンドアロン環境の場合のみ必須。)

デフォルト: カタログ・サーバーの場合は 1099

xioChannel.xioContainerTCPSecure.Port

非推奨: 8.6+ このプロパティーは非推奨です。 listenerPort プロパティーによって指定された値が使用されます。
サーバー上の eXtremeIO の SSL ポート番号を指定します。**transportType** プロパティーが SSL-Supported または SSL-Required に設定されている場合のみこのプロパティーが使用されます。

xioChannel.xioContainerTCPNonSecure.Port

非推奨: 8.6+ このプロパティーは非推奨です。 listenerPort プロパティーによって指定された値が使用されます。
サーバー上の eXtremeIO の非セキュア・リスナー・ポート番号を指定します。値を設定しなければ、一時ポートが使用されます。**transportType** プロパティーが TCP/IP に設定されている場合のみこのプロパティーが使用され

ます。

制約事項: xioChannel.xioContainerTCPNonSecure.Port プロパティーは Liberty プロファイルではサポートされません。

jvmArgs (オプション)
Java 仮想マシン (JVM) 引数リストを指定します。セキュリティーが有効になっているときは、**startOgServer** または **startXsServer** スクリプトの `-jvmArgs -Dcom.ibm.CSI.SSLPort=<sslPort>` 引数を使用して、Secure Sockets Layer (SSL) ポートを構成する必要があります。

ポート制御の適切な計画は、数百の Java 仮想マシンを 1 台のマシンで開始する場合、不可欠です。ポートの競合があると、コンテナー・サーバーが始動しません。

クライアント

WebSphere eXtreme Scale クライアントは、DataGrid API またはいくつかの他のコマンドを使用しているときに、サーバーからコールバックを受信できます。クライアントがサーバーからのコールバックを listen するポートを指定するには、クライアント・プロパティー・ファイル内の **listenerPort** プロパティーを使用します。

haManagerPort
HA マネージャーが使用するポート番号を指定します。このプロパティーが設定されていない場合、空きポートが選択されます。このプロパティーは、WebSphere Application Server 環境では無視されます。

JVM arguments (オプション)
Java 仮想マシン (JVM) 引数リストを指定します。セキュリティーが有効になっているときは、クライアント・プロセスの開始時に `-jvmArgs -Dcom.ibm.CSI.SSLPort=<sslPort>` システム・プロパティーを使用する必要があります。

listenerPort
オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) または eXtremeIO (XIO) トランスポートがバインドする先のポート番号を指定します。この設定は、コンテナーおよびクライアントをカタログ・サービスと通信するように構成します。 WebSphere Application Server では、listenerPort は BOOTSTRAP_ADDRESS ポート構成 (ORB トランスポートを使用しているとき) または XIO_address ポート構成 (XIO トランスポートを使用しているとき) によって継承されます。このプロパティーは、コンテナー・サーバーとカタログ・サービスの両方に適用されます。

デフォルト: 2809

WebSphere Application Server のポート

- 8.6+ **listenerPort** 値が継承されます。この値は使用しているトランスポートのタイプによって異なります。
  - ORB トランスポートを使用している場合は、各 WebSphere Application Server アプリケーション・サーバーの **BOOTSTRAP_ADDRESS** 値が使用されます。
  - IBM eXtremeIO トランスポートを使用している場合は、**XIO_ADDRESS** 値が使用されます。

- **haManagerPort** および **peerPort** 値は、各 WebSphere Application Server アプリケーション・サーバーの **DCS_UNICAST_ADDRESS** 値から継承されます。

カタログ・サービス・ドメインは管理コンソールで定義できます。詳しくは、WebSphere Application Server でのカタログ・サービス・ドメインの作成を参照してください。

管理コンソールで以下のパスの 1 つをクリックして、特定のサーバーのポートを表示できます。

- WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 以降: 「**サーバー**」 > 「**サーバー・タイプ**」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「*server_name*」 > 「**ポート**」 > 「***port_name***」。

IBM eXtremeMemory 使用の計画

eXtremeMemory を構成することにより、オブジェクトを Java ヒープでなくネイティブ・メモリーに保管できます。eXtremeMemory の構成時に、デフォルトのメモリー量を使用できるようにするか、eXtremeMemory 専用にするメモリー量を計算できます。

始める前に

- eXtremeMemory について詳しくは、IBM eXtremeMemoryを参照してください。
- 使用するマップ・セットに含まれるマップはすべて COPY_TO_BYTES または COPY_TO_BYTES_RAW コピー・モードで構成されている必要があります。マップ・セット内のいずれかのマップがこれらのコピー・モードを使用していない場合、オブジェクトは Java ヒープに保管されます。
- Linux 共有リソース libstdc++.so.5 がインストールされている必要があります。必要なリソース・ファイルをインストールするには、ご使用の 64 ビット Linux ディストリビューションのパッケージ・インストーラーを使用します。詳しくは、953 ページの『IBM eXtremeMemory のトラブルシューティング』を参照してください。
- 次の構成シナリオでは、eXtremeMemory は使用できません。
  - カスタム evictor プラグインを使用する場合
  - 複合索引を使用する場合
  - 動的索引を使用する場合
  - 組み込みの後書きローダーを使用する場合
- 合計マップ・サイズを判別できる既存のデータ・グリッドがある必要があります。

このタスクについて

デフォルトでは、eXtremeMemory は、システム上の合計メモリーの 25% を使用します。**maxXMSize** プロパティーを使用して、このデフォルトを変更できます。このプロパティーは、eXtremeMemory 専用に割り振るメガバイト数を指定します。

手順

オプション: 使用する適切な **maxXMSize** プロパティー値を計画します。この値は、eXtremeMemory 用にサーバーで使用する最大メモリー量をメガバイト単位で設定します。

1. 既存の構成内で、エントリーごとのサイズを判定します。 **xscmd -c showMapSizes** コマンドを実行して、このサイズを判定します。
2. **maxXMSize** の値を計算します。 エントリーの最大合計サイズ (*maximum_total_size*) を求めるには、*size_per_entry* と *maximum_number_of_entries* を乗算します。メタデータ処理に使用する割合が **maxXMSize** の 60% を超えないようにしてください。*maximum_total_size* * 1.65 を乗算して、**maxXMSize** の値を求めます。

次のタスク

関連概念:

IBM eXtremeMemory
IBM eXtremeMemory は、オブジェクトを、Java ヒープではなくネイティブ・メモリーに保管できるようにします。オブジェクトを Java ヒープから移動することで、ガーベッジ・コレクションに伴う一時停止を回避でき、より安定したパフォーマンスを得られるうえ、応答時間も予測可能になります。

セキュリティーの概要

WebSphere eXtreme Scale はデータ・アクセスを保護し、外部セキュリティー・プロバイダーと統合することができます。

注: データベースなど、既存の非キャッシュ・データ・ストアでは、積極的に構成したり、有効にしたりする必要のない組み込みセキュリティー・フィーチャーがある可能性があります。ただし、eXtreme Scale でデータをキャッシュした後では、その結果として生じる、バックエンドのセキュリティー・フィーチャーが効力を持たなくなるような重要な状況を考慮する必要があります。eXtreme Scale セキュリティーを必要なレベルで構成すると、データの新しいキャッシュ・アーキテクチャーも保護できます。
以下に、eXtreme Scale セキュリティー機能について簡単に説明します。セキュリティーの構成について詳しくは、「*管理ガイド*」および「*プログラミング・ガイド*」を参照してください。

分散セキュリティーの基礎

分散 eXtreme Scale セキュリティーは、次の 3 つの主要概念に基づいています。

信頼できる認証
: 要求側の ID を判別する能力。WebSphere eXtreme Scale は、クライアントとサーバー間の認証も、サーバー相互間の認証もともにサポートします。

許可
: 要求側にアクセス権を付与する許可を与える能力。WebSphere eXtreme Scale は、さまざまな操作に対しさまざまな許可をサポートします。

セキュア・トランスポート
: ネットワーク上での安全なデータ伝送。WebSphere eXtreme Scale は、Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) プロトコルをサポートします。

認証

WebSphere eXtreme Scale は、分散クライアント・サーバー・フレームワークをサポートします。クライアント・サーバー・セキュリティー・インフラストラクチャーは、eXtreme Scale サーバーへのアクセスを安全にするために配置されています。例えば、認証が eXtreme Scale サーバーによって必要とされる場合、認証のための資格情報を eXtreme Scale クライアントがサーバーに提供する必要があります。これらの資格情報は、ユーザー名とパスワードのペア、クライアント証明書、Kerberos チケット、またはクライアントとサーバーが合意した形式で示されたデータなどです。

許可

WebSphere eXtreme Scale の許可は、サブジェクトおよびアクセス権に基づいています。Java 認証・承認サービス (JAAS) を使用してアクセスを許可したり、Tivoli Access Manager (TAM) などのカスタム・アプローチを接続して許可を処理したりできます。クライアントまたはグループに対しては、以下の許可を与えることができます。

マップ許可
: マップに対して挿入、読み取り、更新、除去、または削除の操作を実行することを許可します。

ObjectGrid 許可
: ObjectGrid オブジェクトに対してオブジェクト照会またはエンティティー照会を実行することを許可します。

DataGrid エージェント許可
: DataGrid エージェントを ObjectGrid へデプロイすることを許可します。

サーバー・サイド・マップ許可
: サーバー・マップをクライアント・サイドに複製すること、またはサーバー・マップに動的索引を作成することを許可します。

管理許可
: 管理タスクを実行することを許可します。

トランスポート・セキュリティー

クライアント・サーバー通信を保護するため、WebSphere eXtreme Scale は TLS/SSL をサポートします。これらのプロトコルは、eXtreme Scale クライアントとサーバー間のセキュア接続のための、認証性、保全性、および機密性を備えたトランスポート層セキュリティーを提供します。

グリッド・セキュリティー

セキュア環境では、サーバーは他のサーバーの認証性を確認できる必要があります。WebSphere eXtreme Scale は、この目的のために共有秘密ストリングのメカニズムを使用します。この秘密鍵のメカニズムは、共有パスワードと同様です。すべて

の eXtreme Scale サーバーは、共有秘密ストリングについて同意します。データ・グリッドに加わるサーバーは、秘密ストリングを提示するよう求められます。参加しようとするサーバーの秘密ストリングがマスター・サーバーのものと一致すると、そのサーバーはグリッドに参加できます。一致しない場合、結合要求は拒否されます。

平文の機密事項の送信は保護されません。eXtreme Scale セキュリティー・インフラストラクチャーには、サーバーがこの機密事項を送信前に保護できるようにするため、SecureTokenManager プラグインが用意されています。セキュア操作の実装方法を選択できます。WebSphere eXtreme Scale は、セキュア操作が実装され、機密事項が暗号化され署名されるような実装を提供します。

動的デプロイメント・トポロジーでの Java Management Extensions (JMX) セキュリティー

JMX MBean セキュリティーは、すべてのバージョンの eXtreme Scale でサポートされています。カタログ・サーバー MBean およびコンテナー・サーバー MBean のクライアントを認証可能にして、MBean 操作へのアクセスを実施できるようになります。

ローカル eXtreme Scale セキュリティー

ローカル eXtreme Scale セキュリティーは、アプリケーションが ObjectGrid インスタンスを直接にインスタンス化して、使用するので、分散 eXtreme Scale モデルとは異なります。アプリケーションおよび eXtreme Scale インスタンスは、同じ Java 仮想マシン (JVM) 内にあります。このモデルにはクライアント/サーバーの概念が含まれていないので、認証はサポートされません。アプリケーションがそれ自身の認証を管理し、認証済みサブジェクト・オブジェクトを eXtreme Scale に渡す必要があります。ただし、ローカル eXtreme Scale プログラミング・モデルに使用される許可メカニズムは、クライアント/サーバー・モデルに使用されるものと同じです。

構成およびプログラミング

セキュリティーに関する構成とプログラミングについて詳しくは、860 ページの『外部プロバイダーとのセキュリティー統合』および 880 ページの『セキュリティー API』を参照してください。

関連タスク:

23 ページの『チュートリアル: Java SE セキュリティーの構成』
以下のチュートリアルにより、Java Platform, Standard Edition 環境で分散 eXtreme Scale 環境を作成できます。

関連情報:

53 ページの『概要: WebSphere Application Server 認証プラグインを使用した、WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』
このチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを WebSphere Application Server と統合します。まず、現行スレッドからの認証ユーザー資格情報を使用して ObjectGrid に接続する単純な Web アプリケーションの認証を構成します。次に、Transport Layer Security でクライアントとサーバー間を転送されるデータの暗号化を詳細に調べます。ユーザーにさまざまなレベルの許可を与えるために、Java 認証・承認サービス (JAAS) を構成できます。構成が終了すると、**xscmd** ユーティリティーを使用して、データ・グリッドとマップをモニターできます。

WebSphere Application Server: アプリケーションとその環境の保護

インストールの計画

製品をインストールする前に、ソフトウェア要件とハードウェア要件、および Java 環境の設定を検討する必要があります。

ハードウェアおよびソフトウェア要件

ハードウェア要件およびオペレーティング・システム要件の概要をご覧ください。WebSphere eXtreme Scale に対して使用するハードウェアまたはオペレーティング・システムのレベルについて、特定のレベルの要件はありませんが、公式にサポートされるハードウェアおよびソフトウェアのオプションは、製品サポート・サイトの「システム要件」ページから入手できます。インフォメーション・センターの情報と「システム要件」ページの情報に違いがある場合は、Web サイトの情報を優先してください。インフォメーション・センターの前提条件の情報は、便宜上提供されているだけです。

ハードウェアおよびソフトウェア要件の正式なセットについては、システム要件ページを参照してください。

この製品は、Java EE および Java SE 環境にインストールしてデプロイできます。また、クライアント・コンポーネントを WebSphere Application Server に統合せずに、直接 Java EE アプリケーションにバンドルすることができます。

ハードウェア要件

WebSphere eXtreme Scale では、ハードウェアの具体的なレベルの要件はありません。ハードウェア要件は、WebSphere eXtreme Scale を実行するのに使用される Java Platform, Standard Edition のインストール済み環境でサポートされるハードウェアによって異なります。 eXtreme Scale を WebSphere Application Server または別の Java Platform, Enterprise Edition 実装環境で使用する場合、これらのプラットフォームのハードウェア要件は WebSphere eXtreme Scale にとって十分です。

オペレーティング・システム要件

.NET 8.6+ .NET クライアント環境の要件について詳しくは、『Microsoft .NET に関する考慮事項』を参照してください。

Java 各 Java SE および Java EE 実装は、それぞれ異なるオペレーティング・システム・レベル、または、Java 実装のテスト中に発見された問題に対するフィックスを必要とします。これらの実装に必要なレベルは、eXtreme Scale にとって十分です。

Installation Manager の要件

WebSphere eXtreme Scale をインストールする前に、Installation Manager をインストールする必要があります。 Installation Manager をインストールするには、製品メディアを使用するか、Passport Advantage® サイトから入手したファイルを使用するか、あるいは、IBM Installation Manager ダウンロード Web サイトにある Installation Manager の最新バージョンが入っているファイルを使用します。詳しくは、IBM Installation Manager および WebSphere eXtreme Scale 製品オファリングのインストールを参照してください。

Web ブラウザー要件

Web コンソールは、以下の Web ブラウザーをサポートしています。

- Mozilla Firefox、バージョン 3.5.x 以降
- Microsoft Internet Explorer バージョン 7 以降

WebSphere Application Server 要件

8.6+

- WebSphere Application Server バージョン 7.0.0.21 以降
- WebSphere Application Server バージョン 8.0.0.2 以降

詳しくは、WebSphere Application Server の推奨フィックスを参照してください。

Java 要件

8.6+ その他の Java EE 実装は、ローカル・インスタンスとして、または、eXtreme Scale サーバーへのクライアントとして、eXtreme Scale ランタイムを使用できます。Java SE を実装する場合は、バージョン 6 以降を使用する必要があります。

Microsoft .NET に関する考慮事項

.NET

WebSphere eXtreme Scale には 2 つの .NET 環境 (開発環境とランタイム環境) が存在します。これらの環境はそれぞれ固有の要件を持っています。

開発環境の要件

Microsoft .NET バージョン

.NET 3.5 以降のバージョン (.NET 4.0 専用環境での実行を含む) がサポートされます。

Microsoft Visual Studio

次のいずれかの Visual Studio バージョンを使用することができます。

- Visual Studio 2008 SP1
- Visual Studio 2010 SP1

Windows

ご使用の Visual Studio のリリースでサポートされる任意の Windows バージョンかサポートされます。 Visual Studio の Windows 要件について詳しくは、次のリンクを参照してください。

- Visual Studio 2008 システム要件
- Visual Studio 2010 Professional システム要件

メモリー

- 1 GB (32 ビット・インストール)
- 2 GB (64 ビット・インストール)

ディスク・スペース

WebSphere eXtreme Scale は、Visual Studio 要件のほかに、さらに 50 MB の使用可能ディスク・スペースを必要とします。

ランタイム環境

Microsoft .NET バージョン

.NET 3.5 以降のバージョン (.NET 4.0 専用環境での実行を含む) がサポートされます。

Windows

- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
- Windows Server 2003 R2 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
- Windows Server 2008 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
- Windows Server 2008 R2 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
-
- リストされている Windows バージョンのどれかをホストする Windows Hyper-V ハイパーバイザー

Internet Information Services (IIS) サーバー

- IIS 6.0 (Windows Server 2003 に同梱)
- IIS 7.0 (Windows Server 2008 に同梱)
- IIS 7.5 (Windows Server 2008 R2 に同梱)

メモリー

ディスク・スペース

WebSphere eXtreme Scale は 20 MB の使用可能ディスク・スペースを必要とします。トレースが使用可能のときには、追加のディスク・スペースが必要です。

WebSphere eXtreme Scaleruntime

.NET クライアント・アプリケーションを使用しているときには、eXtremeIO トランスポート・メカニズムを使用していなければなりません。 eXtremeIO について詳しくは、 132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。

Java SE の考慮事項

Java

WebSphere eXtreme Scale は Java SE 6、または Java SE 7 を必要とします。一般に、Java SE は、バージョンが新しい方が機能性もパフォーマンスも優れています。

サポートされるバージョン

WebSphere eXtreme Scale は Java SE 6、および Java SE 7 と一緒に使用することができます。使用するバージョンは、Java ランタイム環境 (JRE) ベンダーによって現在サポートされているものでなければなりません。 Secure Sockets Layer (SSL) を使用する場合は、IBM Runtime Environment を使用する必要があります。

IBM Runtime Environment, Java Technology Edition バージョン 6、およびバージョン 7 は、本製品と一緒に広く使用するためにサポートされています。バージョン 6 サービス・リリース 9 フィックスパック 2 は完全にサポートされる JRE です。この JRE は、スタンドアロン WebSphere eXtreme Scale インストールおよび WebSphere eXtreme Scale クライアント インストールの一環として *wxs_install_root*/java ディレクトリーにインストールされるもので、クライアントとサーバーの両方で使用することができます。 WebSphere Application Server 内に WebSphere eXtreme Scale をインストールする場合は、WebSphere Application Server インストールに含まれている JRE を使用できます。Web コンソールの場合は、IBM Runtime Environment, Java Technology Edition バージョン 6 サービス・リリース 7 以降のサービス・リリースのみを使用する必要があります。

WebSphere eXtreme Scale は、バージョン 6、およびバージョン 7 の機能を、これが使用可能になったときに使用します。一般に、Java Development Kit (JDK) および Java SE は、バージョンが新しい方がパフォーマンスおよび機能が優れています。

詳しくは、サポートされるソフトウェアを参照してください。

Java SE に依存する WebSphere eXtreme Scale フィーチャー

表 8. Java SE 6、および Java SE 7 を必要とするフィーチャー:

WebSphere eXtreme Scale は、 Java SE 6 で導入された機能を使用して、以下の製品フィーチャーを提供します。

フィーチャー	**Java SE 5 以降のサービス・リリースでサポートされる** **注:** Java SE 5 は WebSphere eXtreme Scale バージョン 8.6 ではサポートされません	**Java SE バージョン 6、バージョン 7 以降のサービス・リリースでサポートされる**
EntityManager API アノテーション (オプション: XML ファイルも使用できます)	X	X
Java Persistence API (JPA): JPA ローダー、JPA クライアント・ローダー、および JPA 時間ベース・アップデーター	X	X
メモリー・ベース除去 (MemoryPoolMXBean を使用)	X	X
インスツルメンテーション・エージェント: • `wxssizeagent.jar`: 使用されるバイト・マップ・メトリックの精度を上げます。 • `ogagent.jar`: フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させます。	X	X
モニター用 Web コンソール		X

WebSphere eXtreme Scale の JDK のアップグレード

スタンドアロン環境と WebSphere Application Server 環境の両方にある WebSphere eXtreme Scale のリリースのアップグレード・プロセスについてのよくある質問を以下に示します。

- WebSphere eXtreme Scale for WebSphere Application Server と同梱の JDK をアップグレードするにはどうすればいいですか?

  WebSphere Application Server によって使用可能になる JDK アップグレード・プロセスを使用する必要があります。詳しくは、http://www-304.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21427178 を参照してください。

- WebSphere Application Server 環境で WebSphere eXtreme Scale を使用しているときには JDK のどのバージョンを使用すればいいですか?

  WebSphere Application Server がサポートする、WebSphere Application Server のサポートされるバージョン用の任意のレベルの JDK を使用することができます。

関連資料:

startOgServer スクリプト (ORB)
(非推奨) **startOgServer** スクリプトは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用するコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーを始動します。サーバーの始動時に各種パラメーターを使用して、トレースを使用可能にしたり、ポート番号を指定するなど、さまざまな設定を行うことができます。

関連情報:

IBM の Java 仮想マシンのチューニング

Java EE の考慮事項

Java

WebSphere eXtreme Scale を Java Platform, Enterprise Edition 環境に統合する準備をするときは、バージョン、構成オプション、要件と制約、およびアプリケーションのデプロイメントと管理などを考慮します。

Java EE 環境での eXtreme Scale アプリケーションの実行

Java EE アプリケーションは、eXtreme Scale のリモート・アプリケーションに接続できます。さらに、WebSphere Application Server 環境は、アプリケーションがアプリケーション・サーバーで開始するときに eXtreme Scale サーバーの始動をサポートします。

ObjectGrid インスタンスの作成に XML ファイルを使用する場合、かつ XML ファイルがエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルのモジュール内にある場合、getClass().getClassLoader().getResource("META-INF/objGrid.xml") メソッドを使用してファイルにアクセスし、ObjectGrid インスタンスの作成に使用する URL オブジェクトを取得してください。 メソッド呼び出しで使用している XML ファイルの名前に置き換えます。

アプリケーションの開始 Bean を使用して、アプリケーションが起動する際に ObjectGrid インスタンスをブートストラップし、アプリケーションが停止する際にそのインスタンスを破棄することができます。 開始 Bean は、com.ibm.websphere.startupservice.AppStartUpHome リモート・ロケーションと com.ibm.websphere.startupservice.AppStartUp リモート・インターフェースを持つ Stateless Session Bean です。 リモート・インターフェースには start メソッドと stop メソッドという 2 つのメソッドがあります。start メソッドを使用してインスタンスをブートストラップし、stop メソッドを使用してインスタンスを破棄します。 アプリケーションは ObjectGridManager.getObjectGrid メソッドを使用して、インスタンスへの参照を保持します。 詳しくは、 387 ページの『ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid との対話』を参照してください。

クラス・ローダーの使用

別のクラス・ローダーを使用するアプリケーション・モジュールが Java EE アプリケーションの単一 ObjectGrid インスタンスを共有する場合、eXtreme Scale に保管

されるオブジェクトと製品のプラグインがアプリケーションの共通ローダーにあることを確認してください。

サーブレット内の ObjectGrid インスタンスのライフサイクルの管理

サーブレットで ObjectGrid インスタンスのライフサイクルを管理するためには、init メソッドを使用してインスタンスを作成したり、destroy メソッドを使用してインスタンスを除去することができます。 インスタンスがキャッシュされた場合、サーブレット・コードで検索および操作を行います。 詳しくは、 387 ページの『ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid との対話』を参照してください。

関連資料:

startOgServer スクリプト (ORB)
(非推奨) **startOgServer** スクリプトは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用するコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーを始動します。サーバーの始動時に各種パラメーターを使用して、トレースを使用可能にしたり、ポート番号を指定するなど、さまざまな設定を行うことができます。

関連情報:

IBM の Java 仮想マシンのチューニング

ディレクトリー規則

wxs_install_root や *wxs_home* など、参照が必要な特別のディレクトリーに対して、資料全体で、次のディレクトリー規則が使用されます。インストール中、およびコマンド行ツールの使用時も含めて、さまざまなシナリオで、これらのディレクトリーにアクセスします。

wxs_install_root

wxs_install_root ディレクトリーは、WebSphere eXtreme Scale 製品ファイルがインストールされているルート・ディレクトリーです。*wxs_install_root* ディレクトリーは、試用版のアーカイブが解凍されたディレクトリー、または WebSphere eXtreme Scale 製品がインストールされているディレクトリーの可能性があります。

- 試用版を解凍した場合の例:

  例: `/opt/IBM/WebSphere/eXtremeScale`

- WebSphere eXtreme Scale がスタンドアロン・ディレクトリーにインストールされている場合の例:

  UNIX **例:** `/opt/IBM/eXtremeScale`

  Windows **例:** `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥eXtremeScale`

- WebSphere eXtreme Scale が WebSphere Application Server に統合されている場合の例:

  例: `/opt/IBM/WebSphere/AppServer`

wxs_home

wxs_home ディレクトリーは、WebSphere eXtreme Scale 製品ライブラリー、サンプル、およびコンポーネントのルート・ディレクトリーです。このディレクトリーは、試用版を解凍した場合は、*wxs_install_root* ディレクトリーと同じです。スタンドアロンのインストール済み環境の場合、*wxs_home* ディレクトリーは、*wxs_install_root* ディレクトリー内の ObjectGrid サブディレクトリーです。WebSphere Application Server に統合されているインストール済み環境の場合、このディレクトリーは、*wxs_install_root* ディレクトリー内の optionalLibraries/ObjectGrid ディレクトリーです。

- 試用版を解凍した場合の例:

  例: /opt/IBM/WebSphere/eXtremeScale

- WebSphere eXtreme Scale がスタンドアロン・ディレクトリーにインストールされている場合の例:

  UNIX **例:** /opt/IBM/eXtremeScale/ObjectGrid

  Windows **例:** *wxs_install_root*¥ObjectGrid

- WebSphere eXtreme Scale が WebSphere Application Server に統合されている場合の例:

  例: /opt/IBM/WebSphere/AppServer/optionalLibraries/ObjectGrid

was_root

was_root ディレクトリーは、WebSphere Application Server インストール済み環境のルート・ディレクトリーです。

例: /opt/IBM/WebSphere/AppServer

.NET 8.6+ **net_client_home**

net_client_home ディレクトリーは、.NET クライアント・インストール済み環境のルート・ディレクトリーです。

例: C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥eXtreme Scale .NET Client

restservice_home

restservice_home ディレクトリーは、WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスのライブラリーおよびサンプルが配置されるディレクトリーです。このディレクトリーは restservice という名前で、*wxs_home* ディレクトリー内のサブディレクトリーです。

- スタンドアロン・デプロイメントの場合の例:

  例: /opt/IBM/WebSphere/eXtremeScale/ObjectGrid/restservice

  例: *wxs_home*¥restservice

- WebSphere Application Server 統合デプロイメントの場合の例:

  例: /opt/IBM/WebSphere/AppServer/optionalLibraries/ObjectGrid/restservice

tomcat_root
tomcat_root は、Apache Tomcat インストール済み環境のルート・ディレクトリーです。

例: /opt/tomcat5.5

wasce_root
wasce_root は、WebSphere Application Server Community Edition インストール済み環境のルート・ディレクトリーです。

例: /opt/IBM/WebSphere/AppServerCE

java_home
java_home は、Java Runtime Environment (JRE) インストール済み環境のルート・ディレクトリーです。

UNIX **例:** /opt/IBM/WebSphere/eXtremeScale/java

Windows **例:** *wxs_install_root*¥java

samples_home
samples_home は、チュートリアルに使用するサンプル・ファイルを解凍したディレクトリーです。

UNIX **例:** *wxs_home*/samples

Windows **例:** *wxs_home*¥samples

dvd_root
dvd_root ディレクトリーは、製品が含まれた DVD のルート・ディレクトリーです。

例: dvd_root/docs/

equinox_root
equinox_root ディレクトリーは、Eclipse Equinox OSGi フレームワークのインストール済み環境のルート・ディレクトリーです。

例: /opt/equinox

user_home
user_home ディレクトリーは、ユーザー・ファイル (セキュリティー・プロファイルなど) が保管されている場所です。

Windows c:¥Documents and Settings¥*user_name*

UNIX /home/*user_name*

環境キャパシティーの計画

初期データ・セット・サイズおよび予測されるデータ・セット・サイズがわかっている場合、WebSphere eXtreme Scale を実行するために必要なキャパシティーを計画できます。これらの計画の策定を使用して、将来の変更に向けて WebSphere eXtreme Scale を効率よくデプロイし、データ・グリッドの柔軟性を最大限にすることができます。このような利点は、メモリー内のデータベースや他のタイプのデータベースなど、異なるシナリオでは実現されません。

ディスク・オーバーフローの使用可能化

ディスク・オーバーフローが使用可能になっていると、キャッシュ・エントリーをメモリーからディスクに移動することによってデータ・グリッドの容量を拡張することができます。ディスク・オーバーフロー・フィーチャーを使用可能にするには、サーバー・プロパティー・ファイル内の diskOverflowEnabled プロパティーを使用します。使用可能になっている場合は、コンテナー・サーバーの使用可能メモリー容量に収まらないエントリーは、ディスクに保管されます。ディスク・ストレージは、パーシスタント・ストアではありません。メモリーに保管されたキャッシュ・エントリーがコンテナー・サーバーの再始動時に失われるのと同様、ディスクに書き込まれたエントリーはコンテナー・サーバーの再始動時に削除されます。

始める前に

この機能が動作するようにするには、eXtreme メモリーを使用可能にする必要があります。詳しくは、IBM eXtremeMemory の構成を参照してください。

このタスクについて

ディスク・オーバーフローが使用可能になっていると、この機能は最近使用したキャッシュ・エントリーをメモリーに保持しようとします。ディスク・オーバーフローによってキャッシュ・エントリーがディスクに移動されるのは、メモリー内のエントリー数が **maxXMSize** サーバー・プロパティーで定義された最大メモリー割り振りを超えたときのみです。エントリーが多すぎてメモリーに収まらない場合は、使用されたのが最も古いエントリーがディスクに移動されます。したがって、ディスク上にあるエントリーにアクセスする操作は、メモリー内にあるエントリーの応答時間より遅くなります。初回アクセスの後は、当該項目は、使用されたのが最も古いエントリーに再度ならない限り、メモリー内にとどまります。最長未使用時間となったエントリーは、別のエントリーのためにディスクに移動されます。

手順

1. ディスク・オーバーフローを使用可能にするコンテナー・サーバーを停止します。詳しくは、IBM eXtremeIO トランスポートを使用するスタンドアロン・サーバーの停止を参照してください。
2. サーバー・プロパティー・ファイルで以下のプロパティーを設定します。

diskOverflowEnabled
ネイティブ・オーバーフロー・ディスク・フィーチャーを使用可能にします。このフィーチャーが機能するためには eXtreme メモリーを使用可能にする必要があります。

デフォルト: `false`

diskOverflowCapBytes
このサーバーがディスク・オーバーフローのために使用する最大ディスク・スペース量をバイト数で指定します。デフォルト値は、ディスクに保管されるデータの量に制限がないことを示します。

デフォルト: `Long.MAX_VALUE`

diskStoragePath
オーバーフローの内容物を保管するために使用されるディレクトリー・ロケーションへの絶対パスを指定します。

diskOverflowMinDiskSpaceBytes

diskStoragePath 内の空きスペース量がこのスペース量 (バイト数) に満たない場合はエントリーがディスクに移動されないことを指定します。

デフォルト: `0`

3. コンテナー・サーバーを再始動します。詳しくは、142 ページの『スタンドアロン・サーバーの始動 (XIO)』を参照してください。

メモリー・サイズ設定および区画数の計算

特定の構成に必要なメモリーの容量および区画数を計算できます。

重要: このトピックは、COPY_TO_BYTES コピー・モードを**使用していない**ときに当てはまります。 COPY_TO_BYTES モードを使用している場合は、メモリー・サイズがはるかに小さくなり、計算手順が異なります。このモードについて詳しくは、794 ページの『コピー・モードのチューニング』を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale は、データを Java 仮想マシン (JVM) のアドレス・スペースに保管します。各 JVM は、JVM に保管されたデータの作成、取得、更新、および削除の呼び出しをサービスするためのプロセッサー・スペースを提供します。さらに、各 JVM は、データ・エントリーおよびレプリカ用のメモリー・スペースを提供します。Java オブジェクトのサイズはさまざまなので、必要なメモリー量を見積もるための測定が必要です。

必要なメモリーのサイズを設定するには、アプリケーション・データを 1 つの JVM にロードします。ヒープ使用量が 60% に達している場合、使用されるオブジェクトの数に注意してください。この数値は、Java 仮想マシン のそれぞれの推奨されるオブジェクトの最大数です。最も的確なサイズ設定を行うには、現実に近いデータを使用します。索引もまたメモリーを消費するので、定義されているすべての索引をサイズ設定に含めてください。メモリー使用量のサイズ見積もりを行う最良の方法は、ガーベッジ・コレクション **verbosegc** 出力を実行することです。この出力によって、ガーベッジ・コレクション後の数値が分かるからです。ヒープ使用量については MBean またはプログラムでいつでも照会できますが、そういった照会ではヒープの現行スナップショットしか取得できません。このスナップショットには未収集のガーベッジが含まれている可能性があるため、この方法では消費メモリーは正確には示されません。

構成の拡張

区画当たりの断片数 (numShardsPerPartition 値)

区画当たりの断片数である numShardsPerPartition 値を計算するには、プライマリー断片の 1 に、必要なレプリカ断片の総数を加算します。区画化について詳しくは、区画化を参照してください。

```
numShardsPerPartition = 1 + total_number_of_replicas
```

Java 仮想マシン 数 (minNumJVMs 値)

構成を拡張するには、まず保管する必要のある合計オブジェクトの最大数を決定します。必要な Java 仮想マシンの数を決めるには、次の式を使用します。

```
minNumJVMS=(numShardsPerPartition * numObjs) / numObjsPerJVM
```

この値を切り上げて、最も近い整数値にしてください。

断片数 (numShards 値)

最終的な増加サイズでは、それぞれの JVM に 10 個の断片を使用します。前述したように、各 JVM には、1 つのプライマリー断片と (N-1) 個のレプリカ断片があります。この場合、9 個のレプリカがあります。データ保管用に既に多数の Java 仮想マシンがあるため、Java 仮想マシンの数に 10 を掛けて、断片の数を決定することができます。

```
numShards = minNumJVMs * 10 shards/JVM
```

区画数 区画に 1 つのプライマリー断片と 1 つのレプリカ断片がある場合、区画には 2 つの断片 (プライマリーとレプリカ) があります。区画数は、断片数を 2 で割って、一番近い素数に丸めたものです。区画に 1 つのプライマリーと 2 つのレプリカがある場合、区画数は、断片数を 3 で割って、一番近い素数に丸めたものになります。

```
numPartitions = numShards / numShardsPerPartition
```

拡張の例

この例では、エントリー数は当初 250,000,000 であるとします。毎年、エントリー数は 14% 増加します。7 年後には、エントリーの合計数が 500,000,000 となるため、それに応じた容量計画が必要になります。高可用性を実現するため、1 つのレプリカが必要になります。レプリカを使用すると、エントリー数は 2 倍、すなわち 1,000,000,000 となります。テストとして、2,000,000 のエントリーを各 JVM に保管できます。このシナリオの計算を使用すると、以下の構成が必要になります。

- 最終的な数のエントリーを保管するために 500 の Java 仮想マシン。
- 5000 の断片 (Java 仮想マシン数の 500 に 10 を掛けたもの)。
- 2500 の区画、すなわち次位の素数である 2503 (5000 の断片を 2 (プライマリー断片と複製断片) で割ったもの)。

構成の開始

前述の計算に基づいて、250 の Java 仮想マシンから始めて、5 年間で 500 の Java 仮想マシンに増やします。この構成を使用して、最終的なエントリー数に達するまで段階的な増加を管理できます。

この構成では、区画ごとに約 200,000 (500,000,000 のエントリーを区画数の 2503 で割ったもの) のエントリーが保管されます。

Java 仮想マシンの最大数に達した場合

500 という Java 仮想マシンの最大数に達しても、データ・グリッドを拡張できます。Java 仮想マシン の数が 500 を超えるまでになると、各 JVM について断片数が 10 (推奨数) を下回り始めます。つまり断片が大きくなり始めます。これは問題となる場合があります。将来の成長を考慮しながら、サイズ設定処理を繰り返し、区画数を設定し直します。この作業では、データ・グリッド全体の再始動が必要になります。さもないとデータ・グリッド不足となります。

サーバー数

重要: どのような場合にも、サーバーについてはページングは使用しないでください。

1 つの JVM は、ヒープ・サイズを超えるメモリーを使用します。例えば、JVM の 1 GB のヒープでは、実際には 1.4 GB の実メモリーが使用されます。サーバー上の使用可能な空き RAM を判別してください。RAM の容量を JVM あたりのメモリーで割って、サーバー上の Java 仮想マシンの最大数を計算してください。

トランザクションの区画ごとの CPU 見積もり

eXtreme Scale の主要な機能は、その弾力的なスケーリングですが、拡大のための CPU のサイズ変更の考慮および理想的な CPU 数の調整も重要です。

プロセッサーのコストには、以下が含まれます。

- クライアントからの作成、取得、更新、および削除操作にサービスを提供するコスト
- 他の Java 仮想マシンのレプリカ生成のコスト
- 無効化のコスト
- 除去ポリシーのコスト
- ガーベッジ・コレクションのコスト
- アプリケーション・ロジックのコスト
- シリアライゼーションのコスト

サーバーごとの Java 仮想マシン

サーバーは 2 台使用し、サーバーごとに最大の JVM 数を開始します。前のセクションで計算した区画数を使用します。その後、それら 2 台のコンピューターに収まるだけの十分なデータと Java 仮想マシンをプリロードします。クライアントには別のサーバーを使用してください。この 2 台のサーバーからなるデータ・グリッドに対し、現実的なトランザクション・シミュレーションを実行します。

ベースラインを計算するには、プロセッサー使用が飽和状態になるようにしてください。プロセッサーを飽和状態にできない場合は、ネットワークが飽和している可能性があります。ネットワークが飽和している場合は、ネットワーク・カードをさらに追加し、複数のネットワーク・カードで Java 仮想マシンをラウンドロビンさせてください。

プロセッサー使用量 60% でコンピューターを実行し、作成、取得、更新、および削除トランザクションの速度を測定します。この測定により、2 台のサーバーでのスループットがわかります。この数値は、サーバー 4 台で倍になり、サーバー 8 台でさらにその倍になり、以降も同様の割合で大きくなります。この拡張の前提は、ネットワーク容量とクライアントのキャパシティーも同様に拡大可能であることです。

結果的に、eXtreme Scale 応答時間は、サーバーの数が増しても安定しています。トランザクション・スループットは、データ・グリッドにコンピューターが追加されるにつれて直線的に増加します。

並列トランザクションの場合の CPU のサイズ設定

データ・グリッドが拡張するにつれ、単一区画トランザクションのスループットが直線的に増加します。並列トランザクションは、サーバーの集合 (これはすべてのサーバーの可能性があります) にタッチするので、単一区画トランザクションとは異なります。

トランザクションがすべてのサーバーにタッチする場合、スループットは、トランザクションを開始したクライアントまたはタッチされた最低速のサーバーのスループットに制限されます。データ・グリッドが大きくなれば、データはより広く分散され、提供されるプロセッサー・スペース、メモリー、ネットワークなどが拡張されます。ただし、クライアントは最低速のサーバーの応答を待たなければならなくなり、クライアントはトランザクションの結果を消費しなければならなくなります。

トランザクションがサーバーのサブセットにタッチする場合、N 個のサーバーのうちの M 個が要求を受け取ります。この結果、スループットは、最低速のサーバーのスループットより、N/M 倍した分だけ速くなります。例えば、20 のサーバーがある場合に、トランザクションが 5 つのサーバーにタッチすると、スループットは、データ・グリッド内の最低速のサーバーのスループットを 4 倍したものになります。

並列トランザクションが完了すると、結果がそのトランザクションを開始したクライアント・スレッドに送信されます。ここでこのクライアントは、単一スレッド化された結果を集約する必要があります。トランザクションでタッチされるサーバーの数が増えると、この集約時間が増加します。ただし、データ・グリッドが拡大すると、各サーバーが戻す結果が小さくなる可能性もあるので、この時間はアプリケーションに依存します。

一般的には、グリッド全体で区画が均等に配分されるので、並列トランザクションはデータ・グリッド内のすべてのサーバーにタッチします。この場合、スループットは、最初の事例に制限されます。

要約

このサイズ設定により、以下の 3 つのメトリックが得られます。

- 区画の数。
- 必須メモリーに必要なサーバーの数。
- 必須スループットに必要なサーバーの数。

メモリー所要量に対して 10 個のサーバーが必要であるが、プロセッサーが飽和状態であるため必要とするスループットの 50% しか得られない場合、2 倍の数のサーバーが必要になります。

最高の安定度を実現するために、60% のプロセッサー負荷でサーバー、さらに 60% のヒープ負荷で JVM ヒープを稼働してください。スパイクでプロセッサー使用量を 80% から 90% の間に引き上げることができますが、通常はこのレベルより高いレベルでサーバーを稼働しないようにしてください。

WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発の計画

開発環境をセットアップして、使用可能なプログラミング・インターフェースに関する詳細が説明されている場所について説明します。

8.6+
このタスクについて

エンタープライズ・データ・グリッドが構成されている場合は、同じデータ・グリッドにアクセスする Java アプリケーションと Microsoft .NET アプリケーションを作成できます。これらの開発環境には、アプリケーションの開発前に調べておく必要がある、異なる前提条件および要件があります。

Microsoft .NET アプリケーションの開発の計画

Microsoft .NET 環境は、開発環境、.NET バージョンなどの要件を満たす必要があります。

Microsoft .NET に関する考慮事項

.NET

WebSphere eXtreme Scale には 2 つの .NET 環境 (開発環境とランタイム環境) が存在します。これらの環境はそれぞれ固有の要件を持っています。

開発環境の要件

Microsoft .NET バージョン

.NET 3.5 以降のバージョン (.NET 4.0 専用環境での実行を含む) がサポートされます。

Microsoft Visual Studio

次のいずれかの Visual Studio バージョンを使用することができます。

- Visual Studio 2008 SP1
- Visual Studio 2010 SP1

Windows

ご使用の Visual Studio のリリースでサポートされる任意の Windows バージョンかサポートされます。 Visual Studio の Windows 要件について詳しくは、次のリンクを参照してください。

- Visual Studio 2008 システム要件
- Visual Studio 2010 Professional システム要件

メモリー

- 1 GB (32 ビット・インストール)
- 2 GB (64 ビット・インストール)

ディスク・スペース

WebSphere eXtreme Scale は、Visual Studio 要件のほかに、さらに 50 MB の使用可能ディスク・スペースを必要とします。

ランタイム環境

Microsoft .NET バージョン

.NET 3.5 以降のバージョン (.NET 4.0 専用環境での実行を含む) がサポートされます。

Windows

- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
- Windows Server 2003 R2 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
- Windows Server 2008 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
- Windows Server 2008 R2 (32 ビットおよび 64 ビット) Enterprise、Standard、Datacenter、Web Editions SP2
-
- リストされている Windows バージョンのどれかをホストする Windows Hyper-V ハイパーバイザー

Internet Information Services (IIS) サーバー

- IIS 6.0 (Windows Server 2003 に同梱)
- IIS 7.0 (Windows Server 2008 に同梱)
- IIS 7.5 (Windows Server 2008 R2 に同梱)

メモリー

ディスク・スペース

WebSphere eXtreme Scale は 20 MB の使用可能ディスク・スペースを必要とします。トレースが使用可能のときには、追加のディスク・スペースが必要です。

WebSphere eXtreme Scaleruntime

.NET クライアント・アプリケーションを使用しているときには、eXtremeIO トランスポート・メカニズムを使用していなければなりません。 eXtremeIO について詳しくは、 132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。

.NET API の概要

.NET

データ・グリッドにアクセスする Microsoft .NET アプリケーションは、特化された API のセットを使用します。

Java アプリケーションの開発の計画

Java

Java アプリケーションを開発する前に、使用可能な API、プラグイン、および必要な考慮事項を熟知しておく必要があります。

Java API の概要

Java

WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

WebSphere eXtreme Scale API

eXtreme Scale API を使用する場合は、トランザクション操作と非トランザクション操作とを区別する必要があります。トランザクション操作は、トランザクション内で実行される操作です。ObjectMap、EntityManager、Query、および DataGrid API は、1 つのトランザクション・コンテナーであるセッション内に包含されているトランザクション API です。非トランザクション操作は、構成操作などのトランザクションとは無関係です。

ObjectGrid、BackingMap、およびプラグイン API は、非トランザクションです。ObjectGrid、BackingMap、およびその他の構成 API は、ObjectGrid コア API としてカテゴリー化されます。プラグインは、キャッシュをカスタマイズして必要な機能を実現するためのものであり、システム・プログラミング API に分類されます。eXtreme Scale のプラグインは、ObjectGrid および BackingMap を含むプラグ可能な eXtreme Scale コンポーネントに特定の機能を提供するコンポーネントです。フィーチャーは、ObjectGrid、Session、BackingMap、ObjectMap など、eXtreme Scale コンポーネントの特定の機能または特性を表します。通常、フィーチャーは構成 API を使用して構成可能です。プラグインは、組み込むことができますが、状況によっては、独自のプラグインの開発が必要となる場合があります。

通常は、ObjectGrid および BackingMap を構成して、ユーザー・アプリケーションの要件を満たすことができます。アプリケーションに特殊な要件が存在する場合は、専用プラグインの使用を検討してください。WebSphere eXtreme Scale が要件を満たす組み込みプラグインを備えている場合があります。例えば、2 つのローカル ObjectGrid インスタンス間または 2 つの分散 eXtreme Scale グリッド間にピアツーピア・レプリカ生成モデルが必要な場合は、組み込み JMSObjectGridEventListener を使用することができます。 組み込みプラグインがどれもビジネス上の問題を解決できない場合は、『システム・プログラミング API』を参照して独自のプラグインを用意してください。

ObjectMap は、単純なマップ・ベースの API です。キャッシュ・オブジェクトが単純で相互関係がない場合、アプリケーションには ObjectMap API が理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、グラフのような関係をサポートする EntityManager API を使用してください。

Query は、ObjectGrid 内のデータを検索する強力なメカニズムです。Session と EntityManager は両方とも、従来の照会機能を提供します。

DataGrid API は、多くのマシン、レプリカ、および区画を含む分散 eXtreme Scale 環境における強力なコンピューティング機能です。アプリケーションは、分散

eXtreme Scale 環境内のすべてのノードでビジネス・ロジックを並行して実行できます。アプリケーションは、ObjectMap API を介して DataGrid API を取得できます。

WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。 REST データ・サービスは、HTTP クライアントを eXtreme Scale グリッドにアクセスできるようにします。 Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 で提供される WCF Data Services サポートと互換性があります。 Microsoft Visual Studio 2008 SP1 で提供されるリッチ・ツールを使用して RESTful アプリケーションを開発することができます。 詳しくは、「eXtreme Scale REST データ・サービス・ユーザー・ガイド」を参照してください。

関連タスク:

280 ページの『アプリケーション開発入門』
WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発を開始するには、開発環境をセットアップし、使用できる API について学習し、アプリケーションの開発とテストを行う必要があります。

372 ページの『Java API 資料へのアクセス』
WebSphere eXtreme Scale 用の Java API 資料は、zip ファイルのアーカイブをダウンロードしてご使用の開発環境に取り込んで利用するか、インフォメーション・センターで閲覧できます。

371 ページの『Java 開発環境の設定』
Java アプリケーションの開発を開始する前に、開発環境をセットアップする必要があります。

373 ページの『Eclipse でのスタンドアロン開発環境のセットアップ』
スタンドアロン・バージョンの WebSphere eXtreme Scale で Java SE アプリケーションを構築し実行するために Eclipse ベースの統合開発環境を構成します。

375 ページの『Rational Application Developer の Apache Tomcat で WebSphere eXtreme Scale のクライアント・アプリケーションまたはサーバー・アプリケーションを実行する』
クライアント・アプリケーションとサーバー・アプリケーションのいずれを持っている場合も、Rational Application Developer の Apache Tomcat でアプリケーションを実行するには同じ基本手順を踏みます。クライアント・アプリケーションの場合、Web アプリケーションを構成し、実行して、Rational Application Developer で WebSphere eXtreme Scale クライアントを使用します。WebSphere eXtreme Scale カタログ・サービスおよびコンテナーを実行するための Web プロジェクトを作成するには、以下の説明に従ってください。サーバー・アプリケーションの場合、WebSphere eXtreme Scale のスタンドアロン・インストール済み環境を使用した Rational Application Developer インターフェースで Java EE アプリケーションを使用可能に設定します。WebSphere eXtreme Scale クライアント・ライブラリーを使用するための Java EE アプリケーション・プロジェクトを構成するには、以下の説明に従ってください。

379 ページの『Rational Application Developer の WebSphere Application Server を使用して、組み込まれたクライアント・アプリケーションまたはサーバー・アプリケーションを実行する』
Rational Application Developer に組み込まれた WebSphere Application Server ランタイムを持つ WebSphere eXtreme Scale クライアントまたはサーバーを使用して、Java EE アプリケーションを構成し、実行します。サーバーを構成する場合、WebSphere Application Server を始動すると、自動的に WebSphere eXtreme Scale が開始されます。

280 ページの『アプリケーション開発入門』
WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発を開始するには、開発環境をセットアップし、使用できる API について学習し、アプリケーションの開発とテストを行う必要があります。

Java 372 ページの『Java API 資料へのアクセス』
WebSphere eXtreme Scale 用の Java API 資料は、zip ファイルのアーカイブをダウンロードしてご使用の開発環境に取り込んで利用するか、インフォメーション・センターで閲覧できます。

Java 371 ページの『Java 開発環境の設定』
Java アプリケーションの開発を開始する前に、開発環境をセットアップする必要があります。

Java 373 ページの『Eclipse でのスタンドアロン開発環境のセットアップ』
スタンドアロン・バージョンの WebSphere eXtreme Scale で Java SE アプリケーションを構築し実行するために Eclipse ベースの統合開発環境を構成します。

Java 375 ページの『Rational Application Developer の Apache Tomcat で WebSphere eXtreme Scale のクライアント・アプリケーションまたはサーバー・アプリケーションを実行する』
クライアント・アプリケーションとサーバー・アプリケーションのいずれを持っている場合も、Rational Application Developer の Apache Tomcat でアプリケーションを実行するには同じ基本手順を踏みます。クライアント・アプリケーションの場合、Web アプリケーションを構成し、実行して、Rational Application Developer で WebSphere eXtreme Scale クライアントを使用します。WebSphere eXtreme Scale カタログ・サービスおよびコンテナーを実行するための Web プロジェクトを作成するには、以下の説明に従ってください。サーバー・アプリケーションの場合、WebSphere eXtreme Scale のスタンドアロン・インストール済み環境を使用した Rational Application Developer インターフェースで Java EE アプリケーションを使用可能に設定します。WebSphere eXtreme Scale クライアント・ライブラリーを使用するための Java EE アプリケーション・プロジェクトを構成するには、以下の説明に従ってください。

Java 379 ページの『Rational Application Developer の WebSphere Application Server を使用して、組み込まれたクライアント・アプリケーションまたはサーバー・アプリケーションを実行する』
Rational Application Developer に組み込まれた WebSphere Application Server ランタイムを持つ WebSphere eXtreme Scale クライアントまたはサーバーを使用して、Java EE アプリケーションを構成し、実行します。サーバーを構成する場合、WebSphere Application Server を始動すると、自動的に WebSphere eXtreme Scale が開始されます。

Java 280 ページの『アプリケーション開発入門』
WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発を開始するには、開発環境をセットアップし、使用できる API について学習し、アプリケーションの開発とテストを行う必要があります。

関連情報:

API 資料

Java API 資料

Java プラグインの概要

Java

WebSphere eXtreme Scale プラグインは、プラグ可能なコンポーネント (ObjectGrid および BackingMap も含む) に、ある特定のタイプの機能を提供するコンポーネントです。 WebSphere eXtreme Scale には、いくつかのプラグ・ポイントが用意されていて、アプリケーションおよびキャッシュのプロバイダーは、それらを使用し

て、さまざまなデータ・ストアや代替クライアント API と統合することができ、キャッシュの全体的なパフォーマンスを向上させることができます。この製品には事前にビルド済みのデフォルトのプラグインがいくつか付属していますが、ユーザーはアプリケーションを使用してカスタム・プラグインをビルドすることもできます。

すべてのプラグインは、1 つ以上の eXtreme Scale プラグイン・インターフェースを実装する具象クラスです。これらのクラスは、適切なタイミングで ObjectGrid によってインスタンス化され、呼び出されます。ObjectGrid および BackingMap では、それぞれカスタム・プラグインの登録が可能です。

ObjectGrid プラグイン

ObjectGrid インスタンスでは以下のプラグインが使用可能です。プラグインがサーバー・サイドのみである場合、そのプラグインはクライアント ObjectGrid および BackingMap インスタンスで削除されます。ObjectGrid および BackingMap インスタンスは、サーバー上のみです。

- **TransactionCallback**: TransactionCallback プラグインは、トランザクション・ライフサイクル・イベントを提供します。TransactionCallback プラグインが組み込み JPATxCallback (com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPATxCallback) クラスの実装である場合、そのプラグインはサーバー・サイドのみになります。ただし、JPATxCallback クラスのサブクラスは、サーバー・サイドのみではありません。
- **ObjectGridEventListener**: ObjectGridEventListener プラグインは、ObjectGrid、断片、およびトランザクションに対して ObjectGrid ライフサイクル・イベントを提供します。
- **ObjectGridLifecycleListener**: ObjectGridLifecycleListener プラグインは、ObjectGrid インスタンスに対して ObjectGrid ライフサイクル・イベントを提供します。ObjectGridLifecycleListener プラグインは、他のすべての ObjectGrid プラグインでオプションのミックスイン・インターフェースとして使用できます。
- **ObjectGridPlugin**: ObjectGridPlugin は、他のすべての ObjectGrid プラグインに拡張ライフサイクル管理イベントを提供するオプションのミックスイン・インターフェースです。
- **SubjectSource、ObjectGridAuthorization、SubjectValidation**: eXtreme Scaleは、カスタム認証メカニズムを eXtreme Scale と統合することを可能にするいくつかのセキュリティー・エンドポイントを提供します。(サーバー・サイドのみ)

共通 ObjectGrid プラグイン要件

ObjectGrid は、JavaBeans 規則を使用し、プラグイン・インスタンスをインスタンス化して初期化します。前述のすべてのプラグインの実装には以下の要件があります。

- プラグイン・クラスは最上位レベルのパブリック・クラスでなければなりません。
- プラグイン・クラスは、引数を取らない public コンストラクターを提供する必要があります。
- プラグイン・クラスは、サーバーおよびクライアント (必要に応じて) の両方のクラスパスで使用可能でなければなりません。

- 属性は、JavaBeans スタイル・プロパティー・メソッドを使用して設定する必要があります。
- プラグインは、特に記述のない限り ObjectGrid の初期化より前に登録され、ObjectGrid が初期化された後は変更できません。

BackingMap プラグイン

BackingMap では、以下のプラグインが使用可能です。

- **Evictor**: デフォルトのキャッシュ・エントリー除去メカニズムと、カスタム・エビクターを作成するためのプラグインが提供されています。組み込み型存続時間 Evictor は、時間ベースのアルゴリズムを使用して、BackingMap 内のエントリーをいつ除去する必要があるかを判断します。アプリケーションの中には、キャッシュ・エントリーをいつ除去する必要があるかを判断するのに別のアルゴリズムを使用しなければならないものもあります。 Evictor プラグインは、カスタム設計された Evictor を有効にして、BackingMap が使用できるようにします。Evictor プラグインは、組み込み型存続時間 Evictor に追加されます。「最長未使用時間」や「最少使用頻度」など既知のアルゴリズムを実装する、提供されるカスタム Evictor プラグインを使用することができます。アプリケーションは、提供される Evictor プラグインのいずれか 1 つをプラグインすることも、独自の Evictor プラグインを提供することもできます。詳しくは、キャッシュ・オブジェクトの除去のためのプラグインを参照してください。

-  **ObjectTransformer**: ObjectTransformer プラグインを使用すると、キャッシュ内のオブジェクトをシリアライズ、デシリアライズ、およびコピーすることができます。ObjectTransformer インターフェースは、DataSerializer プラグインで置換されました。これを使用して、既存の製品 API がデータと効率的に対話できるように WebSphere eXtreme Scale 内の任意のデータを効率的に格納できます。詳しくは、 618 ページの『ObjectTransformer プラグイン』を参照してください。

-  **OptimisticCallback**: OptimisticCallback プラグインは、オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用している場合に、キャッシュ・オブジェクトのバージョン管理および比較操作のカスタマイズを可能にします。OptimisticCallback プラグインは、ValueDataSerializer.Versionable インターフェースに取り替えられました。このインターフェースは、COPY_TO_BYTES コピー・モードで DataSerializer プラグインを使用するとき、または EntityManager API で @Version アノテーションを使用するときに実装できます。詳しくは、 608 ページの『キャッシュ・オブジェクトのバージョン管理と比較のためのプラグイン』を参照してください。

- **MapEventListener**: MapEventListener プラグインは、BackingMap について発生するコールバック通知および重要なキャッシュ状態変更を提供します。アプリケーションは、マップ・エントリーの除去や BackingMap 完了のプリロードなどの BackingMap イベントを認識する必要がある場合があります。 BackingMap は、MapEventListener プラグインでメソッドを呼び出し、アプリケーションに BackingMap イベントを通知します。アプリケーションは、setMapEventListener メソッドを使用して、さまざまな BackingMap イベントの通知を受け取り、BackingMap に 1 つ以上のカスタム設計された MapEventListener プラグインを提供することができます。アプリケーションは、addMapEventListener メソッドまたは removeMapEventListener メソッドを使用して、リストされた MapEventListener

オブジェクトを変更することができます。詳しくは、 625 ページの『MapEventListener プラグイン』を参照してください。

- **BackingMapLifecycleListener**: BackingMapLifecycleListener プラグインは、BackingMap インスタンスに BackingMap ライフサイクル・イベントを提供します。 BackingMapLifecycleListener プラグインは、他のすべての BackingMap プラグインでオプションのミックスイン・インターフェースとして使用できます。
- **BackingMapPlugin**: BackingMapPlugin は、他のすべての BackingMap プラグインに拡張ライフサイクル管理イベントを提供するオプションのミックスイン・インターフェースです。
- **Indexing**: MapIndexplug-in プラグインで表される索引付け機能を使用して、1 つ以上の索引を BackingMap マップにビルドし、非キー・データ・アクセスをサポートできます。
- **Loader**: ObjectGrid マップ上のローダー・プラグインは、通常は同じシステムまたは他のシステム上のパーシスタント・ストアに保管されるデータ用のメモリー・キャッシュのような働きをします。(サーバー・サイドのみ) 例えば、Java Database Connectivity (JDBC) Loader を使用して、BackingMap およびリレーショナル・データベースの 1 つ以上のリレーショナル・テーブルとの間でデータを出し入れすることができます。リレーショナル・データベースは、BackingMap のパーシスタント・ストアとして使用する必要はありません。この Loader はまた、BackingMap と 1 つのファイル間、BackingMap と Hibernate マップ間、BackingMap と Java 2 Platform, Enterprise Edition (JEE) Entity Bean 間、および BackingMap と他のアプリケーション・サーバー間などで、データを移動させるために使用できます。アプリケーションは、使用されるすべての技術に関して、BackingMap とパーシスタント・ストアの間でデータを移動させるために、カスタム設計されたローダー・プラグインを提供する必要があります。 Loader が提供されない場合は、BackingMap は単純なメモリー内キャッシュになります。詳しくは、 658 ページの『データベースとの通信のためのプラグイン』を参照してください。
- **MapSerializerPlugin**: MapSerializerPlugin により、キャッシュ内の Java オブジェクトおよび非 Java データをシリアライズしてインフレートすることができます。このプラグインは DataSerializer ミックスイン・インターフェースと一緒に使用され、高性能アプリケーション用の堅固かつ柔軟なオプションを許可します。

関連タスク:

187 ページの『OSGi 環境での非動的プラグインを持つ eXtreme Scale コンテナーの実行』
OSGi 環境の動的機能を使用する必要がない場合でも、OSGi フレームワークが提供する密結合、宣言的パッケージ化、およびサービス依存関係を活用することができます。

REST データ・サービスの概要

Java

WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData)

を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

互換性の要件

REST データ・サービスは、HTTP クライアントをデータ・グリッドにアクセスできるようにします。REST データ・サービスは、Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 で提供される WCF Data Services サポートと互換性があります。Microsoft Visual Studio 2008 SP1 で提供されるリッチ・ツールを使用して RESTful アプリケーションを開発することができます。 この図では、WCF Data Services がクライアントおよびデータベースとどのように対話をするのかについて、概要が示されています。

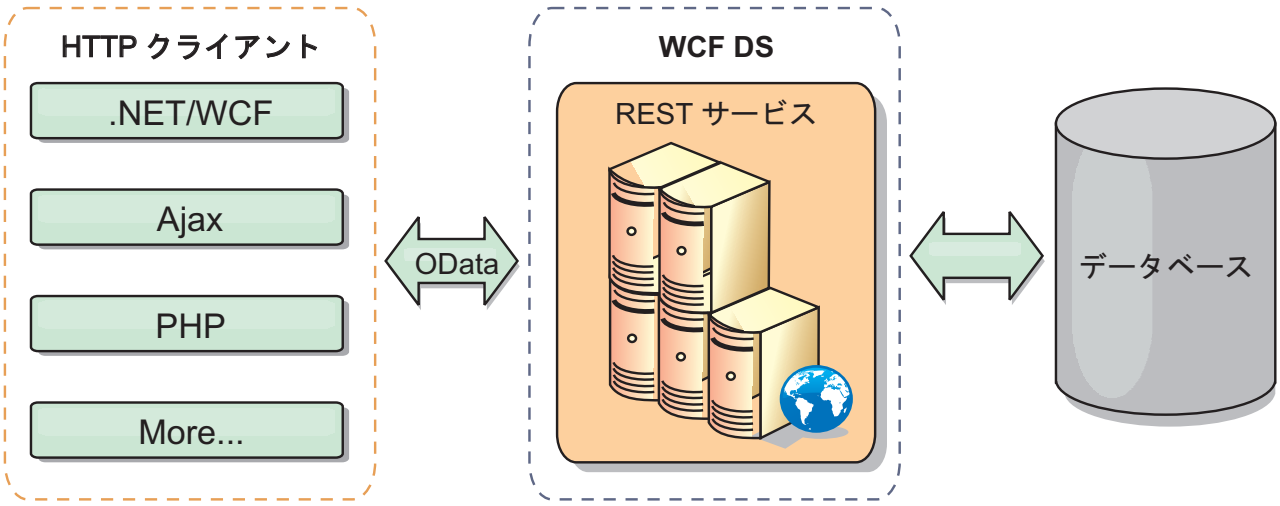


図 32. Microsoft WCF Data Services

WebSphere eXtreme Scale には Java クライアント用の機能の豊富な API セットが含まれています。 次の図で示されているように、REST データ・サービスは HTTP クライアントと WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドの間のゲートウェイで、WebSphere eXtreme Scale クライアントを介してグリッドと通信します。REST データ・サービスは Java サーブレットで、これにより、WebSphere Application Server などの共通 Java Platform, Enterprise Edition (JEE) プラットフォームに対する柔軟なデプロイメントが可能です。REST データ・サービスは、WebSphere eXtreme Scale Java API を使用して WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドと通信します。WCF Data Services クライアントまたはその他のクライアントが HTTP および XML と通信することができます。

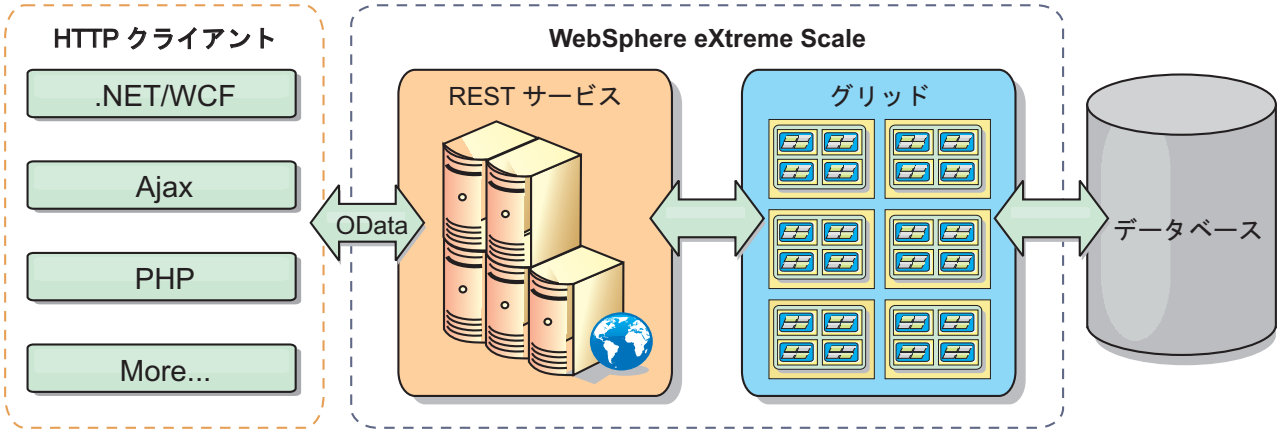


図 33. WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービス

WCF Data Services について詳しくは、REST データ・サービスの構成 を参照するか、以下のリンクを使用してください。

- MicrosoftWCF Data Services デベロッパー・センター (Microsoft WCF Data Services Developer Center)
- MSDN の ADO.NET Data Services の概要 (ADO.NET Data Services overview on MSDN)
- 「ADO.NET Data Service を使用する」ホワイトペーパー (Whitepaper: Using ADO.NET Data Services)
- Atom Publishing Protocol: データ・サービス URI およびペイロード拡張 (Atom Publish Protocol: Data Services URI and Payload Extensions)
- 概念スキーマ定義ファイル形式 (Conceptual Schema Definition File Format)
- データ・サービス・パッケージング形式のエンティティー・データ・モデル (Entity Data Model for Data Services Packaging Format)
- OData プロトコル (Open Data Protocol)
- OData プロトコルのよくある質問 (Open Data Protocol FAQ)

フィーチャー

このバージョンの eXtreme Scale REST データ・サービスは、以下のフィーチャーをサポートします。

- WCF Data Services エンティティーとしての eXtreme Scale EntityManager API エンティティーの自動モデリングには、以下のサポートが組み込まれます。
  - Java データ型の Entity Data Model 型への変換
  - エンティティー・アソシエーションのサポート
  - 区画に分割されたデータ・グリッドに必要なスキーマ・ルートおよびキー・アソシエーションのサポート

  詳しくは、エンティティー・モデルを参照してください。
- Atom Publishing Protocol (AtomPub または APP) XML および JavaScript Object Notation (JSON) データ・ペイロード形式。

- それぞれの HTTP 要求メソッドを使用する作成、読み取り、更新、および削除 (CRUD) 操作である、POST、GET、PUT および DELETE。 さらに、Microsoft 拡張機能の MERGE がサポートされます。

  注: 8.6+ upsert および upsertAll メソッドが ObjectMap の put および putAll メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、upsert メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。
- フィルターを使用した単純照会
- バッチ検索および変更設定要求
- 高可用性のための、区画に分割されたデータ・グリッドのサポート
- eXtreme Scale EntityManager API クライアントとのインターオペラビリティー
- 標準 JEE Web サーバーのサポート
- オプティミスティック並行性
- REST データ・サービスと eXtreme Scale データ・グリッドの間のユーザー許可およびユーザー認証

既知の問題と制限

- トンネル要求はサポートされません。

関連タスク:

REST データ・サービスの構成
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Community Edition、 および Apache Tomcat で使用できます。

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

関連資料:

Java 574 ページの『REST データ・サービスでのオプティミスティック並行性』
eXtreme Scale REST データ・サービスは、ネイティブ HTTP ヘッダーの If-Match、If-None-Match、および ETag を使用して、オプティミスティック・ロック・モデルを使用します。これらのヘッダーは、要求および応答メッセージで送信され、サーバーとクライアント間でエンティティーのバージョン情報を中継します。

Java 575 ページの『REST データ・サービスの要求プロトコル』
一般的に、REST サービスと対話するためのプロトコルは、WCF Data Services AtomPub プロトコルで説明したプロトコルと同じです。ただし、eXtreme Scale は、eXtreme Scale エンティティー・モデルの観点から、さらに詳細な情報を提供します。このセクションを読むには、ユーザーは、WCF Data Services プロトコルを熟知している必要があります。または、WCF Data Services プロトコルのセクションを参照しながらこのセクションを読むこともできます。

Java 576 ページの『REST データ・サービスでの取得要求』
RetrieveEntity 要求を使用して、クライアントで eXtreme Scale エンティティーを取得できます。応答ペイロードには、AtomPub または JSON フォーマットのエンティティー・データが含まれます。また、システム・オペレーター $expand を使用して、関係を拡張できます。関係は、Atom Feed Document (対多関係) または Atom Entry Document (対 1 関係) として、データ・サービスの応答内に線で表されます。

Java 584 ページの『REST データ・サービスでの非エンティティーの取得』
REST データ・サービスでは、エンティティー・コレクションやプロパティーなど、エンティティー以外のものも取得できます。

Java 590 ページの『REST データ・サービスでの挿入要求』
InsertEntity 要求を使用して、新しい関連エンティティーが含まれている可能性がある新しい eXtreme Scale エンティティー・インスタンスを eXtreme Scale REST データ・サービスに挿入できます。

Java 594 ページの『REST データ・サービスでの更新要求』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、エンティティー、エンティティー・プリミティブ・プロパティーなどの更新要求をサポートします。

Java 599 ページの『REST データ・サービスでの削除要求』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスでは、エンティティー、プロパティー値、およびリンクを削除できます。

Spring Framework の概要

Java

Spring は、Java アプリケーションの開発用のフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、 Spring を使用してトランザクションを管理し、デプロイされたメモリー内データ・グリッドに含まれるクライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Spring キャッシュ・プロバイダー

Spring Framework バージョン 3.1 では、新しいキャッシュ抽象化が導入されました。この新しい抽象化により、既存の Spring アプリケーションにキャッシングを透過的に追加できます。WebSphere eXtreme Scale をキャッシュ抽象化のキャッシュ・プロバイダーとして使用できます。詳しくは、Spring キャッシュ・プロバイダーの構成を参照してください。

Spring 管理ネイティブ・トランザクション

Spring は、 Java Platform, Enterprise Edition アプリケーション・サーバーに似たコンテナー管理トランザクションを提供します。しかし、Spring メカニズムはさまざまな実装環境を使用できます。WebSphere eXtreme Scale が提供するトランザクション・マネージャー統合は、Spring が ObjectGrid トランザクションのライフサイクルを管理することを可能にします。詳しくは、 740 ページの『Spring を使用したトランザクションの管理』を参照してください。

Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポート

また、eXtreme Scale が Spring と統合されることによって、拡張ポイントまたはプラグイン用に Spring スタイルの Bean を定義することが可能になります。この機能によって、拡張ポイントの構成の柔軟性が高まり、洗練された構成ができるようになります。

Spring 管理の拡張 Bean に加えて、 eXtreme Scale は、「objectgrid」という名前の Spring 名前空間を提供します。Bean および組み込みの実装がこの名前空間に事前定義されていて、ユーザーが eXtreme Scale をより簡単に構成できるようになっています。これらのトピックに関する詳しい説明と、Spring 構成を使用して eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動する方法の例については、 745 ページの『Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート』を参照してください。

断片有効範囲サポート

従来のスタイルの Spring 構成では、 ObjectGrid Bean は singleton タイプかプロトタイプ・タイプのどちらかです。ObjectGrid は、「断片」有効範囲と呼ばれる新しい有効範囲もサポートします。Bean が断片有効範囲と定義されている場合、断片当たり 1 つの Bean のみが作成されます。同じ断片内でその Bean 定義に一致する ID を持つ Bean に対する要求はすべて、その 1 つの特定の Bean インスタンスが Spring コンテナーによって戻される結果になります。

以下の例に示す com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.JPAPropFactoryImpl Bean の定義では、有効範囲が断片であると設定されています。したがって、断片当たり、JPAPropFactoryImpl クラスの 1 つのインスタンスのみが作成されます。

```
<bean id="jpaPropFactory" class="com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.JPAPropFactoryImpl" scope="shard" />
```

Spring Web Flow

Spring Web Flow は、デフォルトではセッション状態を HTTP セッションに保管します。Web アプリケーションでセッション管理のために eXtreme Scale を使用している場合、Spring は自動的に eXtreme Scale を使用して状態を保管します。また、フォールト・トレランスもセッションと同じように有効になります。

詳しくは、HTTP セッション管理を参照してください。

パッケージ化

eXtreme Scale Spring 拡張は `ogspring.jar` ファイルに入っています。Spring サポートが正しく機能するためには、この Java アーカイブ (JAR) ファイルがクラスパスになければなりません。 WebSphere Extended Deployment で実行している Java EE アプリケーションが WebSphere Application Server Network Deployment を拡張した場合、 `spring.jar` ファイルおよびその関連ファイルをエンタープライズ・アーカイブ (EAR) モジュールに入れます。同じ場所に `ogspring.jar` ファイルも入れる必要があります。

関連タスク:

Java 737 ページの『Spring フレームワークでのアプリケーション開発』
よく使用される Spring フレームワークに eXtreme Scale アプリケーションを統合する方法について説明します。

Java 748 ページの『Spring を使用したコンテナー・サーバーの始動』
Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポートを使用して、コンテナー・サーバーを始動できます。

Java 740 ページの『Spring を使用したトランザクションの管理』
Spring は、Java アプリケーションの開発によく使用されるフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、Spring を使用して eXtreme Scale トランザクションを管理したり、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

関連資料:

Java 743 ページの『Spring が管理する拡張 Bean』
`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

Java Spring 記述子 XML ファイル
Spring 記述子 XML ファイルを使用して、eXtreme Scale を構成して Spring と統合します。

Java Spring `objectgrid.xsd` ファイル
Spring `objectgrid.xsd` ファイルを使用して、 eXtreme Scale を Spring と統合し、eXtreme Scale トランザクションの管理と、クライアントおよびサーバーの構成を行います。

Java クラス・ローダーおよびクラスパスの考慮事項

Java

WebSphere eXtreme Scale はデフォルトで Java オブジェクトをキャッシュに保管するので、どこでデータがアクセスされてもいいように、クラスパスにクラスを定義する必要があります。

具体的には、WebSphere eXtreme Scale クライアントおよびコンテナー・プロセスは、プロセス開始時に、クラスパスにクラスまたは JAR ファイルを組み込む必要があります。 eXtreme Scale と共に使用するアプリケーションを設計する際、ビジネス・ロジックと永続データ・オブジェクトは分けて考えてください。

詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターでクラス・ロードを参照してください。

Spring Framework 設定内での考慮事項については、 365 ページの『Spring Framework の概要』のパッケージ化セクションを参照してください。

WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントの使用に関する設定については、 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』を参照してください。

スタンドアロン・コンテナー・サーバー・クラスパスへのクラスまたは JAR ファイルの追加について詳しくは、**startOgServer** スクリプト (ORB) または **startXsServer** スクリプト (XIO)を参照してください。

リレーションシップ管理

Java

Java などのオブジェクト指向言語、およびリレーショナル・データベースは、リレーションシップまたは関連をサポートします。リレーションシップは、オブジェクト参照または外部キーの使用を通してストレージ量を削減します。

データ・グリッド内でリレーションシップを使用するときには、データはコンストレインド・ツリーに編成されている必要があります。そのツリーには 1 つのルート・タイプがなければならず、すべての子は 1 つのルートのみに関連付けられていなければなりません。例: 部門には多数の従業員が属し、1 人の従業員が多くのプロジェクトを持つことができます。しかし、1 つのプロジェクトが異なる部門に属している多くの従業員を持つことはできません。ルートが定義されると、ルート・オブジェクトとその子孫へのすべてのアクセスはルートを通して管理されるようになります。WebSphere eXtreme Scale は、ルート・オブジェクトのキーのハッシュ・コードを使用して区画を選択します。以下に例を示します。

```
partition = (hashCode MOD numPartitions).
```

1 つのリレーションシップに関係するすべてのデータが単一のオブジェクト・インスタンスに結びついている場合、ツリー全体を 1 つの区画内に配列し、1 つのトランザクションを使用して非常に効率的にアクセスすることができます。データが複数のリレーションシップにまたがっている場合は、複数の区画についての処理が必要になるため、追加のリモート呼び出しが必要になり、結果的にパフォーマンス上のボトルネックとなることがあります。

参照データ

一部のリレーションシップは、ルックアップまたは参照データを含んでいます。例: `CountryName`。ルックアップ・データまたは参照データの場合、データはすべての区画に存在していなければなりません。データはどのルート・キーでもアクセスでき、同じ結果が戻ります。このような参照データは、データが相当に静的なケースに限って使用するべきです。このデータを更新する際、すべての区画で更新する必要があるため、コストがかかる場合があります。参照データを最新に保つ手法として、DataGrid API がよく使われます。

正規化のコストと利点

リレーションシップを使用してデータを正規化することは、データの重複が減るため、データ・グリッドによるメモリー使用量を削減するのに寄与します。ただし、一般的には、追加される関係データが多いほど、スケールアウトは少なくなります。データがグループ化されている場合、リレーションシップを維持し、管理できる程度のサイズに保つために、より多くのコストがかかるようになります。グリッ

ドは、ツリーのルートのキーに基づいてデータを区画に分けるので、ツリーのサイズは考慮には入れられません。したがって、1 つのツリー・インスタンスに対して多数のリレーションシップがある場合、データ・グリッドは不平衡になり、結果的に 1 つの区画に他の区画よりも多くのデータが入ってしまうことが起こりえます。

データが非正規化またはフラット化されている場合、通常であれば 2 つのオブジェクト間で共有されるデータが、そうされずに複写され、各表は別々に区画化されるので、より平衡したデータ・グリッドになります。 これは使用されるメモリー量を増やしますが、必要なデータがすべて入っている単一のデータ行にアクセスできるため、アプリケーションはスケーラブルになります。データ保守にかかるコストは最近ますます高くなっているため、読み取り主体のグリッドにはこれは理想的です。

詳しくは、 XTP システムの分類およびスケーリングを参照してください。

データ・アクセス API を使用したリレーションシップ管理

ObjectMap API は、最も高速かつ柔軟で粒度の細かいデータ・アクセス API であり、マップのグリッド内のデータにアクセスする手段として、トランザクションを使用する、セッション・ベースの方法を提供します。ObjectMap API によって、クライアントは、標準 CRUD (作成、読み取り、更新、および削除) 操作を使用して分散データ・グリッド内のオブジェクトのキーと値のペアを管理することができます。

ObjectMap API を使用するときには、オブジェクトのリレーションシップが、すべてのリレーションシップの外部キーを親オブジェクトに埋め込むことによって表される必要があります。

以下に例を示します。

```
public class Department {
 Collection<String> employeeIds;
}
```

EntityManager API は、外部キーを含んでいるオブジェクトから永続データを抽出することにより、リレーションシップ管理を単純にします。以下の例に示すように、オブジェクトが後でデータ・グリッドから取り出されるとき、リレーションシップ・グラフは再構築されます。

```
@Entity
public class Department {
 Collection<String> employees;
}
```

EntityManager API は、JPA や Hibernate といった他の Java オブジェクト・パーシスタンス・テクノロジー (管理対象 Java オブジェクト・インスタンスのグラフはパーシスタント・ストアと同期化されます) にとてもよく似ています。このケースでは、パーシスタント・ストアは eXtreme Scale データ・グリッドであり、そこでは、各エンティティーがマップとして表され、マップはオブジェクト・インスタンスではなくエンティティー・データを含みます。

キャッシュ・キーに関する考慮事項

Java

WebSphere eXtreme Scale は、ハッシュ・マップを使用してデータをグリッドに保管します。グリッドではキーに Java オブジェクトが使用されます。

指針

キーを選択するときには、以下の要件を考慮してください。

- キーは、決して変更できません。キーの一部分を変更する必要がある場合、キャッシュ・エントリーをいったん削除してから再挿入する必要があります。
- キーは小さくしてください。キーはすべてのデータ・アクセス操作で使用されるので、キーを小さくして、シリアライズが効率的に行われるようにし、使用されるメモリーを少なくするのが望ましい方法です。
- 優れたハッシュおよび同値アルゴリズムを実装してください。hashCode メソッドと equals(Object o) メソッドは、各キー・オブジェクトごとに常にオーバーライドされる必要があります。
- キーの hashCode をキャッシュに入れてください。 可能であれば、hashCode() 計算を速くするため、キー・オブジェクト・インスタンス内のハッシュ・コードをキャッシュに入れてください。 キーは不変なので、ハッシュ・コードはキャッシュに入れることができるはずです。
- キーを値に複写することを避けてください。ObjectMap API を使用している場合、値オブジェクトの中にキーを保管すると便利です。そうした場合、キー・データがメモリー内で重複します。

異なる時間帯のデータ

Java

カレンダー属性、java.util.Date 属性、およびタイム・スタンプ属性でデータを ObjectGrid に挿入する場合、特にさまざまな時間帯の複数のサーバーにデプロイするときには、これらの日時属性が同じ時間帯を基に作成されるようにする必要があります。同じ時間帯を基にした日時オブジェクトを使用すれば、アプリケーションの時間帯の問題はなくなり、データはカレンダー述部、java.util.Date 述部、タイム・スタンプ述部によって照会が可能です。

日時オブジェクトの作成時に明示的に時間帯を指定しないと、Java はローカル時間帯を使用し、クライアントとサーバーで日時値が不整合になる場合があります。

分散デプロイメントの例を考えてみます。client1 は時間帯 [GMT-0] にあり、client2 は [GMT-6] にあります。どちらも java.util.Date オブジェクトを値「1999-12-31 06:00:00」で作ろうとしています。次に、client1 は java.util.Date オブジェクトを値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-0]」で作成し、client2 は java.util.Date オブジェクトを値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-6]」で作成します。 時間帯が異なるため、両方の java.util.Date オブジェクトは等しくありません。 異なる時間帯のサーバーに存在する区画にデータをプリロードする際に、ローカル時間帯を使用して日時オブジェクトを作成していると同じような問題が起こります。

前述の問題を避けるため、カレンダー・オブジェクト、java.util.Date オブジェクト、およびタイム・スタンプ・オブジェクトを作成するための基本の時間帯として [GMT-0] などの時間帯をアプリケーションは選択することができます。

第 5 章 アプリケーションの開発

8.6+ データ・グリッドを使用するクライアント・アプリケーションを、Java プログラミング言語と .NET プログラミング言語の両方で開発することができます。

Java アプリケーションの開発

Java アプリケーションを開発して、データ・グリッドのデータにアクセスしたり、データを挿入したりすることができます。プラグインを使用して、プラグ可能コンポーネントの特定の機能を開発できます。アプリケーションは、他のフレームワーク (OSGi、JPA、Spring など) と統合することもできます。

このタスクについて

データ・グリッドを使用する Java アプリケーションを開発します。アプリケーションを開発するための作業として、以下があります。

- データへのアクセス
- システム API とプラグイン
- OSGi 統合
- JPA 統合
- Spring 統合

Java 開発環境の設定

Java

Java アプリケーションの開発を開始する前に、開発環境をセットアップする必要があります。

始める前に

使用可能なプログラミング・インターフェースおよび考慮事項について詳しくは、352 ページの『WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発の計画』を参照してください。

関連概念:

354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

Java 354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

関連情報:

API 資料

Java API 資料

Java API 資料へのアクセス

Java

WebSphere eXtreme Scale 用の Java API 資料は、zip ファイルのアーカイブをダウンロードしてご使用の開発環境に取り込んで利用するか、インフォメーション・センターで閲覧できます。

このタスクについて

Java API 資料は、次のいずれかの場所からアクセスできます。

インフォメーション・センター
情報の検索には、WebSphere eXtreme Scale の製品情報の他に、インフォメーション・センターの API 資料を利用すると便利です。

zip ファイル・アーカイブ
このファイルは、リリースごとにダウンロードできます。その後、比較ツールを使ってリリースごとの API の変更内容を確認できます。また、objectgrid.jar ファイルをコンパイルしている場合は、ご使用の Eclipse プロジェクトに圧縮ファイルを直接リンクできます。このリンクを使って、統合開発環境に API 資料を組み込みます。

オンライン形式
オンライン形式は、IBM の Web サイトにある API 資料の公開版です。サイトの URL は、Eclipse に直接リンクできます。現行バージョンに対するリンクは、常に最新バージョンにアップグレードされるので、修正や変更が加えられた資料を自動的に閲覧できます。

手順

- インフォメーション・センターの API 資料を閲覧します。 詳しくは、

  API 資料 (API documentation) を参照してください。
- API 資料の zip アーカイブをダウンロードします。

API 資料をダウンロードしてオフラインでご覧になる場合は、次のページから該当するリリースの zip ファイルをダウンロードしてください。WebSphere eXtreme Scale wiki: API 資料 (API documentation)

- オンライン形式の API 資料を閲覧します。 常に最新バージョンにアップグレードされるリンクをブックマークするか、特定のバージョンに対するリンクを選んでご利用ください。リンク一覧については、WebSphere eXtreme Scale wiki: API 資料 (API documentation) を参照してください。

次のタスク

開発環境での API 資料へのアクセスについての詳細は、『Eclipse でのスタンドアロン開発環境のセットアップ』 をご覧ください。

関連概念:

354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

Java 354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

関連情報:

API 資料

Java API 資料

Eclipse でのスタンドアロン開発環境のセットアップ

Java

スタンドアロン・バージョンの WebSphere eXtreme Scale で Java SE アプリケーションを構築し実行するために Eclipse ベースの統合開発環境を構成します。

始める前に

WebSphere eXtreme Scale 製品を新規ディレクトリーまたは空のディレクトリーにインストールし、最新の WebSphere eXtreme Scale 累積フィックスパックを適用します。 zip ファイルを unzip して、WebSphere eXtreme Scale 試用版を使用することもできます。インストールの詳細については、を参照してください。

手順

- WebSphere eXtreme Scale で Java SE アプリケーションを構築し実行するために Eclipse を構成します。
  1. ユーザー・ライブラリーを定義し、ご使用のアプリケーションが WebSphere eXtreme Scale アプリケーション・プログラミング・インターフェースを参照できるようにします。

a. ご使用の Eclipse または IBM Rational Application Developer 環境で、「**ウィンドウ**」 > 「**プリファレンス**」をクリックします。

b. 「**Java**」 > 「**ビルド・パス**」ブランチを展開し、「**ユーザー・ライブラリー**」を選択します。「**新規**」をクリックします。

c. eXtreme Scale ユーザー・ライブラリーを選択します。「**JAR を追加**」をクリックします。

1) *wxs_root*/lib ディレクトリーを参照し、objectgrid.jar ファイルまたは ogclient.jar ファイルを選択します。「**OK**」をクリックします。クライアント・アプリケーションまたはローカルのメモリー内キャッシュを作成する場合は、ogclient.jar ファイルを選択します。 eXtreme Scale サーバーの作成とテストを行う場合は、objectgrid.jar ファイルを使用してください。

2) ObjectGrid API の Javadoc を組み込むには、前のステップで追加した objectgrid.jar ファイルまたは ogclient.jar ファイルの Javadoc ロケーションを選択します。「**編集**」をクリックします。 Javadoc ロケーションのパス・ボックスに、次の Web アドレスを入力します。

```
http://www.ibm.com/developerworks/wikis/extremescale/docs/api/
```

d. 「**OK**」をクリックして設定を適用し、「プリファレンス」ウィンドウを閉じます。

これで、eXtreme Scale ライブラリーがプロジェクトのビルド・パスに組み込まれました。

2. ユーザー・ライブラリーを Java プロジェクトに追加します。

a. パッケージ・エクスプローラーで、プロジェクトを右クリックし、「**プロパティー**」を選択します。

b. 「**ライブラリー**」タブを選択します。

c. 「**ライブラリーの追加**」をクリックします。

d. 「**ユーザー・ライブラリー**」を選択してください。「**次へ**」をクリックします。

e. 先ほど構成した eXtreme Scale ユーザー・ライブラリーを選択してください。

f. 「**OK**」をクリックして変更を適用し、「プロパティー」ウィンドウを閉じます。

- Eclipse を使用した eXtreme Scale で、Java SE アプリケーションを実行します。アプリケーションを実行するための実行構成を作成します。

1. eXtreme Scale で Java SE アプリケーションを構築し実行するための Eclipse を構成します。 「**実行**」メニューから「**実行構成**」を選択します。

2. Java Application カテゴリーを右クリックし、「**新規**」を選択します。

3. 「*New_Configuration*」という名前の新規実行構成を選択します。

4. プロファイルを構成します。

– **プロジェクト** (メインのタブ付きページ): *your_project_name*

– **メイン・クラス** (メインのタブ付きページ): *your_main_class*

– **VM 引数** (引数タブ付きページ): -Djava.endorsed.dirs=wxs_root/lib/endorsed

java.endorsed.dirs へのパスは絶対パスでなければならず、変数やショートカットが含まれてはならないため、**VM 引数**に関する問題は頻繁に発生します。

その他の一般的なセットアップの問題には、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) が関係しています。次のエラーが発生する可能性があります。詳しくは、カスタム・オブジェクト・リクエスト・ブローカーの構成を参照してください。

```
Caused by: java.lang.RuntimeException: The ORB that comes
with the Sun Java implementation does not work with
ObjectGrid at this time.
```

アプリケーションからアクセス可能な objectGrid.xml または deployment.xml を持っていない場合、次のエラーが発生する可能性があります。

```
Exception in thread "P=211046:O=0:CT" com.ibm.websphere.objectgrid.
    ObjectGridRuntimeException: Cannot start OG container at

    Client.startTestServer(Client.java:161) at Client.

    main(Client.java:82) Caused by: java.lang.IllegalArgumentException:

    The objectGridXML must not be null at com.ibm.websphere.objectgrid.

    deployment.DeploymentPolicyFactory.createDeploymentPolicy

     (DeploymentPolicyFactory.java:55) at Client.startTestServer(Client.

    java:154) .. 1 more
```

5. 「**適用**」をクリックし、ウィンドウを閉じるか、もしくは「**実行**」をクリックします。

関連概念:

354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

Java 354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

関連情報:

API 資料

Java API 資料

Rational Application Developer の Apache Tomcat で WebSphere eXtreme Scale のクライアント・アプリケーションまたはサーバー・アプリケーションを実行する

Java

クライアント・アプリケーションとサーバー・アプリケーションのいずれを持っている場合も、Rational Application Developer の Apache Tomcat でアプリケーションを実行するには同じ基本手順を踏みます。クライアント・アプリケーションの場合、Web アプリケーションを構成し、実行して、Rational Application Developer で WebSphere eXtreme Scale クライアントを使用します。WebSphere eXtreme Scale カタログ・サービスおよびコンテナーを実行するための Web プロジェクトを作成するには、以下の説明に従ってください。サーバー・アプリケーションの場合、WebSphere eXtreme Scale のスタンドアロン・インストール済み環境を使用した Rational Application Developer インターフェースで Java EE アプリケーションを使用可能に設定します。WebSphere eXtreme Scale クライアント・ライブラリーを使用するための Java EE アプリケーション・プロジェクトを構成するには、以下の説明に従ってください。

始める前に

以下のように、WebSphere eXtreme Scale の試用版または完全な製品をインストールします。

- WebSphere eXtreme Scale 製品のスタンドアロン・バージョンをインストールします。
- WebSphere eXtreme Scale 試用版をダウンロードし、解凍します。
- Apache Tomcat バージョン 6.0 以降をインストールします。
- Rational Application Developer をインストールし、Java EE Web アプリケーションを作成します。

手順

1. WebSphere eXtreme Scale ランタイム・ライブラリーを Java EE ビルド・パスに追加します。

   クライアント・アプリケーション このシナリオでは、Rational Application Developer で WebSphere eXtreme Scale クライアントを使用するための Web アプリケーションを構成し、実行します。

   a. 「**ウィンドウ**」 > 「**プリファレンス**」 > 「**Java**」 > 「**ビルド・パス**」 > 「**ユーザー・ライブラリー**」。「**新規**」をクリックします。
   b. `eXtremeScaleClient` の「**ユーザー・ライブラリー名**」を入力し、「**OK**」をクリックします。
   c. 「**Jar を追加...**」をクリックし、`wxs_home/lib/ogclient.jar` ファイルにナビゲートして選択します。「**オープン**」をクリックします。
   d. オプション: (オプション) Javadoc を追加するには、Javadoc のロケーションを選択し、「**編集....**」をクリックしてください。 Javadoc ロケーション・パスでは、API 資料の URL を入力してもよいし、API 資料をダウンロードすることもできます。
      - オンライン版の API 資料を使用するには、`http://www.ibm.com/developerworks/wikis/extremescale/docs/api/` を Javadoc ロケーション・パスに入力します。
      - API 資料をダウンロードするには、WebSphere eXtreme Scale API 資料ダウンロード・ページ へ移動します。Javadoc ロケーション・パスには、ローカルのダウンロード・ロケーションを入力します。

e. 「**OK**」をクリックします。

f. 「**OK**」をクリックし、「ユーザー・ライブラリー」ダイアログを閉じます。

g. 「**プロジェクト**」 > 「**プロパティー**」をクリックします。

h. 「**Java ビルド・パス**」をクリックします。

i. 「**ライブラリーの追加**」をクリックします。

j. 「**ユーザー・ライブラリー**」を選択してください。「**次へ**」をクリックします。

k. 「**eXtremeScaleClient**」ライブラリーを確認し、「**終了**をクリックします。

l. 「**OK**」をクリックし、「**プロジェクト・プロパティー**」ダイアログを閉じます。

サーバー・アプリケーション このシナリオでは、Rational Application Developer で組み込み WebSphere eXtreme Scale サーバーを実行するための Web アプリケーションを構成し、実行します。

a. 「**ウィンドウ**」 > 「**プリファレンス**」 > 「**Java**」 > 「**ビルド・パス**」 > 「**ユーザー・ライブラリー**」をクリックします。「**新規**」をクリックします。

b. `eXtremeScale` の「**ユーザー・ライブラリー名**」を入力し、「**OK**」をクリックします。

c. 「**Jar を追加...**」をクリックし、*wxs_home*`/lib/objectgrid.jar` を選択します。「オープン」をクリックします。

d. (オプション) Javadoc を追加するには、Javadoc のロケーションを選択し、「**編集....**」をクリックしてください。`http://www.ibm.com/developerworks/wikis/extremescale/docs/api/` を Javadoc ロケーション・パスに入力します。

e. 「**OK**」をクリックします。

f. 「**OK**」をクリックし、「ユーザー・ライブラリー」ダイアログを閉じます。

g. 「**プロジェクト**」 > 「**プロパティー**」をクリックします。

h. 「**Java ビルド・パス**」をクリックします。

i. 「**ライブラリーの追加**」をクリックします。

j. 「**ユーザー・ライブラリー**」を選択してください。「**次へ**」をクリックします。

k. 「**eXtremeScaleClient**」ライブラリーを確認し、「**終了**をクリックします。

l. 「**OK**」をクリックし、「**プロジェクト・プロパティー**」ダイアログを閉じます。

2. プロジェクト用の Tomcat サーバーを定義します。

a. J2EE パースペクティブ内にいることを確認し、下のペインの「**サーバー**」タブをクリックします。「**ウィンドウ**」 > 「**ビューを表示**」 > 「**サーバー**」をクリックしてもよいです。

b. 「サーバー」ペイン内で右クリックし、「**新規**」 > 「**サーバー**」を選択します。

c. 「**Apache, Tomcat v6.0 Server**」を選択します。「**次へ**」をクリックします。

d. 「**参照..**」をクリックします。*tomcat_root* を選択します。「**OK**」をクリックします。

e. 「**次へ**」をクリックします。

f. 左側の「使用可能」ペインで Java EE アプリケーションを選択し、**追加 >** をクリックして、サーバーの右側の「構成済み」ペインに選択したアイテムを移動し、「**終了**」をクリックします。

3. プロジェクトの残りのエラーを解決します。 以下の手順で、「問題」ペインにあるエラーを除去します。

a. 「**プロジェクト**」 > 「**クリーン**」 > 「***project_name***」 をクリックします。「**OK**」をクリックします。プロジェクトをビルドします。

b. Java EE プロジェクトを右クリックし、「**ビルド・パス**」 > 「**ビルド・パスの構成**」を選択します。

c. 「**ライブラリー**」タブをクリックします。 パスが適切に構成されていることを確認してください。

- **クライアント・アプリケーションの場合:** Apache Tomcat、eXtremeScaleClient、および Java JRE がパス上にあることを確認してください。
- **サーバー・アプリケーションの場合:** Apache Tomcat、eXtremeScale、および Java JRE がパス上にあることを確認してください。

4. アプリケーションを実行するための実行構成を作成します。

a. 「**実行**」メニューから「**実行構成**」を選択します。

b. Java Application カテゴリーを右クリックし、「**新規**」を選択します。

c. 「*New_Configuration*」という名前の新規実行構成を選択します。

d. プロファイルを構成します。

- **プロジェクト** (メインのタブ付きページ): *your_project_name*
- **メイン・クラス** (メインのタブ付きページ): *your_main_class*
- **VM 引数** (引数タブ付きページ): `-Djava.endorsed.dirs=wxs_root/lib/endorsed`

`java.endorsed.dirs` へのパスは絶対パスでなければならず、変数やショートカットが含まれてはならないため、**VM 引数** に関する問題は頻繁に発生します。

その他の一般的なセットアップの問題には、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) が関係しています。次のエラーが発生する可能性があります。詳しくは、カスタム・オブジェクト・リクエスト・ブローカーの構成を参照してください。

```
Caused by: java.lang.RuntimeException: The ORB that comes with the
Java implementation does not work with ObjectGrid at this time.
```

アプリケーションからアクセス可能な `objectGrid.xml` ファイルまたは `deployment.xml` ファイルを持っていない場合、次のエラーが発生する可能性があります。

```
Exception in thread "P=211046:O=0:CT" com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException:
Cannot start OG container
 at Client.startTestServer(Client.java:161)
 at Client.main(Client.java:82)
```

```
Caused by: java.lang.IllegalArgumentException: The objectGridXML must
not be null
 at com.ibm.websphere.objectgrid.deployment.DeploymentPolicyFactory.
createDeploymentPolicy
  (DeploymentPolicyFactory.java:55)
 at Client.startTestServer(Client.java:154)
 ... 1 more
```

5. 「**適用**」をクリックし、ウィンドウを閉じるか、もしくは「**実行**」をクリックします。

次のタスク

Rational Application Developer で、WebSphere eXtreme Scale クライアントを使用する Web アプリケーションを構成し実行したら、サーブレットを作成できます。このサーブレットは、WebSphere eXtreme Scale API を使用してリモート・データ・グリッドにデータを保管したり、そこからデータを取得したりします。

スタンドアロン・インストールの WebSphere eXtreme Scale を使用する Rational Application Developer インターフェースで Java EE アプリケーションを使用可能にしたら、WebSphere eXtreme Scale システム API を使用してカタログ・サービスの開始と停止を行うサーブレットを作成できます。

関連概念:

354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

Java 354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

関連情報:

API 資料

Java API 資料

Rational Application Developer の WebSphere Application Server を使用して、組み込まれたクライアント・アプリケーションまたはサーバー・アプリケーションを実行する

Java

Rational Application Developer に組み込まれた WebSphere Application Server ランタイムを持つ WebSphere eXtreme Scale クライアントまたはサーバーを使用して、Java EE アプリケーションを構成し、実行します。サーバーを構成する場合、WebSphere Application Server を始動すると、自動的に WebSphere eXtreme Scale が開始されます。

始める前に

以下の手順は、Rational Application Developer バージョン 7.5 を使用した WebSphere Application Server バージョン 7.0 を対象としています。これらの製品の違うバージョンをご使用の場合は、手順が異なる場合があります。

WebSphere Application Server テスト環境拡張機能と、Rational Application Developer をインストールします。

WebSphere eXtreme Scale クライアントまたはサーバーを *rad_home*¥runtimes¥base_v7 ディレクトリー内の WebSphere Application Server バージョン 7.0 テスト環境にインストールします。詳しくは、WebSphere Application Server での WebSphere eXtreme Scale または WebSphere eXtreme Scale クライアントのインストール を参照してください。

手順

1. WebSphere Application Server に組み込まれた eXtreme Scale サーバーを、プロジェクト用に定義します。
   a. J2EE パースペクティブで、「**ウィンドウ**」>「**ビューを表示**」>「**サーバー**」をクリックします。
   b. 「**サーバー**」ペイン内を右クリックします。「**新規**」>「**サーバー**」を選択します。
   c. **IBM WebSphere Application Server v7.0** を選択します。「次へ」をクリックします。
   d. 使用するプロファイルを選択してください。デフォルトは「was70profile1」です。
   e. サーバー名を入力します。デフォルトは「server1」です。
   f. 「**次へ**」をクリックします。
   g. 「**使用可能**」ペイン内で Java EE アプリケーションを選択します。「**追加 >**」をクリックし、サーバーの「**構成済み**」ペインに選択したアイテムを移動します。「**終了**」をクリックします。
2. Java EE アプリケーションを実行するには、アプリケーション・サーバーを始動します。 **WebSphere Application Server v7.0** を右クリックし、「**開始**」を選択します。

関連概念:

354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

Java 354 ページの『Java API の概要』
WebSphere eXtreme Scale が提供するいくつかの機能には、Java プログラミング言語を使用し、いくつかのアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) およびシステム・プログラミング・インターフェースを通して、プログラマチックにアクセスできます。

関連情報:

API 資料

Java API 資料

クライアント・アプリケーションでのデータへのアクセス

Java

開発環境の構成後に、データ・グリッド内のデータを作成したり、それらのデータにアクセスしたり、それらのデータを管理したりするアプリケーションの開発を開始できます。

このタスクについて

クライアント・アプリケーションの観点からは、WebSphere eXtreme Scale を使用する際には以下のメイン・ステップを実行します。

- ClientClusterContext インスタンスを取得することによって、カタログ・サービスに接続する。
- クライアント ObjectGrid インスタンスを取得する。
- Session インスタンスを取得する。
- ObjectMap インスタンスを取得する。
- ObjectMap メソッドを使用する。

分散 ObjectGrid インスタンスへのプログラマチックな接続

Java

カタログ・サービス・ドメインの接続エンドポイントを使用して分散 ObjectGrid に接続できます。接続先のカタログ・サービス・ドメイン内の各カタログ・サーバーのホスト名とリスナー・ポートが必要です。

始める前に

- 分散データ・グリッドに接続するには、カタログ・サービス・サーバーとコンテナー・サーバーを含むサーバー・サイド環境を構成する必要があります。
- カタログ・サービスごとにリスナー・ポートが必要です。詳しくは、330 ページの『ネットワーク・ポートの計画』を参照してください。

- クライアント・アプリケーションが eXtreme Scale で拡張された WebSphere Application Server で実行されている場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールまたは wsadmin を使用してカタログ・サービス・ドメインを構成します。

このタスクについて

Java EE アプリケーションで実行しているときは、eXtreme Scale リソース・アダプターの使用を検討してください。リソース・アダプターがあれば、アプリケーションは、Java Connector Architecture (JCA) 接続ファクトリーを使用して Java Naming Directory Interface (JNDI) の中で ObjectGrid 接続を検索することができます。JCA 接続ファクトリーは、データ・グリッドへのアクセスを大幅に簡素化し、Java Transaction API (JTA) トランザクションとの統合を可能にします。詳しくは、209 ページの『シナリオ: JCA を使用した eXtreme Scale クライアントへのトランザクション・アプリケーションの接続』を参照してください。

ObjectGridManager.connect() メソッドは、提供された接続エンドポイントを使用してカタログ・サービス・ドメインに接続し、そのドメインの ObjectGrid インスタンスの取得に使用される ClientClusterContext オブジェクトを返します。接続エンドポイントは、カタログ・サービス・ドメイン内の各カタログ・サーバーのホストとポートの組み合わせを、コンマで区切ったリストです。カタログ・サービス・エンドポイントの形式は次のとおりです。

```
catalogServiceEndpoints ::= <catalogServiceEndpoint> [,<catalogServiceEndpoint>]
catalogServiceEndpoint  ::= <hostName> : <listenerPort>
hostName                ::= The IP address or host name of a catalog service.
listenerPort            ::= The listener port that the catalog service is configured to use.
```

カタログ・サービス・ドメインに接続した後、ObjectGridManagerFactory.getObjectGrid(ClientClusterContext ccc, String objectGridName) メソッドを使用して、指定された ObjectGrid クライアント・インスタンスを取得します。この ObjectGrid インスタンスは、指定されたデータ・グリッドのプロキシーであり、クライアント・アプリケーションの中にキャッシュされます。 ObjectGrid インスタンスは、リモート・データ・グリッドへの論理接続を表し、スレッド・セーフです。基礎になっている、データ・グリッドへのすべての物理接続は、自動的に管理され、障害イベントを容認することができます。

接続ステップは、スタンドアロン構成を使用する場合と WebSphere Application Server を使用する場合とで異なります。

手順

- 明示的なカタログ・サービス・エンドポイントを使用して、スタンドアロンの分散データ・グリッドに接続します。

```
// Retrieve an ObjectGridManager instance.
ObjectGridManager ogm = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();

// Obtain a ClientClusterContext by connecting to a catalog
// service domain, manually suppling the catalog service endpoints,
// and optionally specifying the ClientSecurityConfiguration and
// client ObjectGrid override XML file URL.
String catalogServiceEndpoints = "host1:2809,host2:2809";
ClientClusterContext ccc = ogm.connect(catalogServiceEndpoints,
  (ClientSecurityConfiguration) null, (URL) null);
```

```
// Obtain a distributed ObjectGrid using ObjectGridManager and providing
// the ClientClusterContext.
ObjectGrid og = ogm.getObjectGrid(ccc, "Mygrid");
```

- 管理コンソールまたは管理タスクを使用してカタログ・サービス・ドメインが構成された WebSphere Application Server でホストされるクライアント・アプリケーションから、カタログ・サービス・ドメインに接続します。カタログ・サービス・エンドポイントは、指定されたドメイン ID から取得できます。また、デフォルト・ドメインのカタログ・サービス・エンドポイントは、ObjectGridManager を使用して取得できます。

```
// Retrieve an ObjectGridManager instance.
ObjectGridManager ogm = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();

// Retrieve the domain by its ID (the name given to it in the admin console or wsadmin)
// The CatalogDomainManager also includes methods to retrieve all domains and the default domain.
CatalogDomainInfo di = ogm.getCatalogDomainManager().getDomainInfo("ProductionDomain");
if(di == null) throw new IllegalStateException("Domain not configured");

// Connect to the domain using the catalog service endpoints and the security configuration
// in the CatalogDomainInfo object.  The client override ObjectGrid XML is optional
// and is manually supplied.
ClientClusterContext ccc = ogm.connect(di.getClientCatalogServiceEndpoints(),
  di.getClientSecurityConfiguration(), (URL) null);

// Obtain a distributed ObjectGrid using ObjectGridManager and by providing
// the ClientClusterContext.
ObjectGrid og = ogm.getObjectGrid(ccc, "MyGrid");
```

次のタスク

カタログ・サービス・ドメインが WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャーでホストされている場合、セルの外部のクライアント (Java Platform, Enterprise Edition クライアントも含む) は、デプロイメント・マネージャーのホスト名と IIOP ブートストラップ・ポートを使用してカタログ・サービスに接続しなければなりません。カタログ・サービスが WebSphere Application Server セル内で実行され、クライアントがそのセル外で実行されているときは、WebSphere Application Server 管理コンソールの eXtreme Scale ドメイン構成ページを参照して、クライアントをカタログ・サービスに向けるために必要な情報を入手してください。

アプリケーションによるマップ更新の追跡

Java

アプリケーションがトランザクション中にマップに変更を加えた場合、LogSequence オブジェクトはこれらの変更を追跡します。アプリケーションがマップ内のエントリーを変更する場合には、対応する LogElement オブジェクトがその変更の詳細を提供します。

アプリケーションがフラッシュを必要とするか、トランザクションにコミットすると必ず、特定のマップのための LogSequence オブジェクトにローダーが提供されます。ローダーは LogSequence オブジェクト内の LogElement オブジェクトで繰り返されて、各 LogElement オブジェクトをバックエンドに適用します。

ObjectGrid に登録されている ObjectGridEventListener リスナーも LogSequence オブジェクトを使用します。これらのリスナーには、コミット済みトランザクションの各マップに LogSequence オブジェクトが提供されます。アプリケーションはこれらのリスナーを使用して、従来のデータベースでのトリガーのような、変更に対する特定のエントリーを待機できます。

以下のログ関連インターフェースまたはクラスは、eXtreme Scale フレームワークによって提供されます。

- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LogElement
- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LogSequence
- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LogSequenceFilter
- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LogSequenceTransformer

LogElement インターフェース

LogElement は、トランザクション中のエントリーに関する操作を示します。LogElement オブジェクトには、その各種の属性を取得するためのいくつかのメソッドがあります。最も一般的に使用される属性は、getType() でフェッチされる type 属性と getCurrentValue() でフェッチされる current value 属性です。

8.6+ type は、LogElement インターフェース内で定義される定数 INSERT、UPDATE、DELETE、 EVICT、FETCH、TOUCH、または UPSERT のうちの 1 つで表わされます。

操作が INSERT、UPDATE、FETCH、または UPSERT の場合、現行値は操作の新しい値を表します。操作が TOUCH、DELETE、または EVICT の場合は、current value は NULL になります。ValueInterface が使用中である場合、この値を ValueProxyInfo へキャストできます。

LogElement インターフェースについて詳しくは、API 資料を参照してください。

LogSequence インターフェース

ほとんどのトランザクションで、マップ内の複数エントリーに対する操作が行われるため、複数の LogElement オブジェクトが作成されます。複数の LogElement オブジェクトのコンポジットとして動作するオブジェクトを作成する必要があります。LogSequence インターフェースは、LogElement オブジェクトのリストを含むことによってこの目的に対応します。

LogSequence インターフェースについて詳しくは、API 資料を参照してください。

LogElement および LogSequence の使用

LogElement と LogSequence は、eXtreme Scale や、操作が 1 つのコンポーネントまたはサーバーから別のコンポーネントまたはサーバーに伝搬されるときにユーザーによって作成された ObjectGrid プラグインによって、幅広く使用されています。例えば、LogSequence オブジェクトは、分散 ObjectGrid トランザクション伝搬機能によって変更を他のサーバーに伝えるために使用できます。あるいは、ローダーによってパーシスタンス・ストアに適用することもできます。 LogSequence は主に以下のインターフェースによって使用されます。

- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridEventListener
- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.Loader
- com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.Evictor
- com.ibm.websphere.objectgrid.Session

ローダーの例

このセクションでは、LogSequence および LogElement オブジェクトがローダーで使用される方法について説明します。ローダーは、パーシスタント・ストアからデータをロードし、パーシスタント・ストアにデータを保管するために使用されます。ローダー・インターフェースの batchUpdate メソッドは、以下のように LogSequence オブジェクトを使用します。

```
void batchUpdate(TxID txid, LogSequence sequence) throws
   LoaderException, OptimisticCollisionException;
```

ObjectGrid が現在のすべての変更をローダーに適用する必要がある場合に、batchUpdate メソッドが呼び出されます。ローダーには、マップのための LogElement オブジェクトのリストが、カプセル化されて LogSequence オブジェクトに与えられています。batchUpdate メソッドの実装は変更を繰り返し、それらの変更をバックエンドに適用する必要があります。以下のコード・スニペットは、ローダーが LogSequence オブジェクトを使用する方法を示しています。このスニペットは、一連の変更を繰り返し、INSERT、UPDATE、および DELETE という 3 つのバッチ Java Database Connectivity (JDBC) ステートメントをビルドします。

```
public void batchUpdate(TxID tx, LogSequence sequence) throws LoaderException
{
    // Get a SQL connection to use.
    Connection conn = getConnection(tx);
    try
    {
    // Process the list of changes and build a set of prepared
    // statements for executing a batch update, insert, or delete
    // SQL operations. The statements are cached in stmtCache.
    Iterator iter = sequence.getPendingChanges();
    while ( iter.hasNext() )
    {
        LogElement logElement = (LogElement)iter.next();
        Object key = logElement.getCacheEntry().getKey();
        Object value = logElement.getCurrentValue();
        switch ( logElement.getType().getCode() )
        {
            case LogElement.CODE_INSERT:
                buildBatchSQLInsert( key, value, conn );
                break;
            case LogElement.CODE_UPDATE:
                buildBatchSQLUpdate( key, value, conn );
                break;
            case LogElement.CODE_DELETE:
                buildBatchSQLDelete( key, conn );
                break;
        }
    }
    // Run the batch statements that were built by above loop.
    Collection statements = getPreparedStatementCollection( tx, conn );
    iter = statements.iterator();
    while ( iter.hasNext() )
    {
        PreparedStatement pstmt = (PreparedStatement) iter.next();
        pstmt.executeBatch();
    }
} catch (SQLException e)
{
    LoaderException ex = new LoaderException(e);
    throw ex;
}
}
```

前のサンプルは、LogSequence 引数処理の高水準ロジックを示していますが、SQL の INSERT、UPDATE、または DELETE ステートメントのビルド方法の詳細は示していません。getPendingChanges メソッドが LogSequence 引数で呼び出され、ローダーが処理する必要のある LogElement オブジェクトのイテレーターを取得します。また、LogElement.getType().getCode() メソッドを使用して、LogElement が SQL の挿入、更新、または削除操作に使用されるかどうかを判別します。

Evictor の例

Evictor で LogSequence および LogElement オブジェクトを使用することもできます。Evictor は、特定の基準に基づいてバッキング・マップからマップ・エントリーを除去するために使用します。 Evictor インターフェースの apply メソッドは、LogSequence を使用します。

```
/**
* This is called during cache commit to allow the evictor to track object usage
* in a backing map. This will also report any entries that have been successfully
* evicted.
*
* @param sequence LogSequence of changes to the map
*/
void apply(LogSequence sequence);
```

apply メソッドが LogSequence を使用する方法について詳しくは、カスタム Evictor の作成 トピックのコード・サンプルを参照してください。

LogSequenceFilter および LogSequenceTransformer インターフェース

場合によっては、特定の基準の LogElement オブジェクトのみを受け入れ、その他のオブジェクトを拒否するように、 LogElement オブジェクトをフィルターに掛ける必要があります。例えば、何らかの基準に基づいて、特定の LogElement を直列化する場合があります。

LogSequenceFilter は、以下のメソッドでこの問題を解決します。

```
public boolean accept (LogElement logElement);
```

このメソッドは、操作で特定の LogElement を使用する必要がある場合は true を、その必要がない場合は false を返します。

LogSequenceTransformer は、LogSequenceFilter 関数を使用するクラスです。LogSequenceFilter を使用して一部の LogElement オブジェクトにフィルターを掛け、次に、その受け入れた LogElement オブジェクトを直列化します。このクラスには、2 つのメソッドがあります。最初のメソッドは以下のとおりです。

```
public static void serialize(Collection logSequences, ObjectOutputStream stream,
   LogSequenceFilter filter, DistributionMode mode) throws IOException
```

このメソッドにより、呼び出し元は、直列化プロセスに組み込む LogElements を判定するためのフィルターを提供できます。呼び出し元は、DistributionMode パラメーターを使用して直列化プロセスを制御します。例えば、分散モードが無効化のみである場合、値を直列化する必要はありません。このクラスの 2 番目のメソッドは、以下のような inflate メソッドです。

```
public static Collection inflate(ObjectInputStream stream, ObjectGrid
   objectGrid) throws IOException, ClassNotFoundException
```

inflate メソッドは、serialize メソッドによって作成されたログ・シーケンスの直列化済みフォームを、提供されたオブジェクト入力ストリームから読み取ります。

ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid との対話

Java

ObjectGridManagerFactory クラスと ObjectGridManager インターフェースは、データの作成、アクセス、および ObjectGrid インスタンスへの追加を行うメカニズムを提供します。ObjectGridManagerFactory クラスは、ObjectGridManager インターフェースにアクセスする静的ヘルパー・クラスであり、singleton クラスです。ObjectGridManager インターフェースには、 ObjectGrid オブジェクトのインスタンスを作成するいくつかの便利なメソッドがあります。また、ObjectGridManager は、複数のユーザーがアクセス可能な ObjectGrid インスタンスの作成とキャッシングも容易にします。

ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid インスタンスの作成 : Java

これらのメソッドはそれぞれ、ObjectGrid のローカル・インスタンスを 1 つ作成します。

ローカルのメモリー内インスタンス

以下のコード・スニペットは、eXtreme Scale でローカル ObjectGrid インスタンスを取得および構成する方法を示しています。

```
// Obtain a local ObjectGrid reference
        // you can create a new ObjectGrid, or get configured ObjectGrid
        // defined in ObjectGrid xml file
        ObjectGridManager objectGridManager =
     ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
        ObjectGrid ivObjectGrid =
     objectGridManager.createObjectGrid("objectgridName");

        // Add a TransactionCallback into ObjectGrid
        HeapTransactionCallback tcb = new HeapTransactionCallback();
        ivObjectGrid.setTransactionCallback(tcb);

        // Define a BackingMap
        // if the BackingMap is configured in ObjectGrid xml
        // file, you can just get it.
        BackingMap ivBackingMap = ivObjectGrid.defineMap("myMap");

        // Add a Loader into BackingMap
        Loader ivLoader = new HeapCacheLoader();
        ivBackingMap.setLoader(ivLoader);

        // initialize ObjectGrid
        ivObjectGrid.initialize();

        // Obtain a session to be used by the current thread.
        // Session can not be shared by multiple threads
        Session ivSession = ivObjectGrid.getSession();

        // Obtaining ObjectMap from ObjectGrid Session
        ObjectMap objectMap = ivSession.getMap("myMap");
```

デフォルトの共有構成

以下のコードは、ObjectGrid を作成して多くのユーザー間で共有する単純なケースです。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
final ObjectGridManager oGridManager=
  ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid employees =
 oGridManager.createObjectGrid("Employees",true);
employees.initialize();
employees.
/*sample continues..*/
```

前の Java コード・スニペットは、Employees ObjectGrid を作成し、キャッシュに入れます。Employees ObjectGrid は、デフォルト構成によって初期化され、すぐに使用できる状態になっています。createObjectGrid メソッド内の 2 番目のパラメーターは、true に設定されます。これにより、ObjectGridManager は、作成した ObjectGrid インスタンスをキャッシュに入れるよう指示されます。このパラメーターが false に設定されている場合、インスタンスはキャッシュに入れられません。各 ObjectGrid インスタンスには name があり、その名前に基づき、多くのクライアントまたはユーザー間でそのインスタンスを共有できます。

objectGrid インスタンスがピアツーピア共有で使用されている場合は、キャッシングを true に設定する必要があります。ピアツーピア共有について詳しくは、『ピア Java 仮想マシン間の変更の配布』を参照してください。

XML 構成

WebSphere eXtreme Scale は高度な構成が可能です。前の例では、構成を伴わない単純な ObjectGrid を作成する方法を示しました。この例では、XML 構成ファイルに基づいて事前構成された ObjectGrid インスタンスを作成する方法が示されています。ObjectGrid インスタンスは、プログラマチックに構成するか、または XML ベースの構成ファイルを使用して構成することができます。これら 2 つの方法を組み合わせて ObjectGrid を構成することもできます。 ObjectGridManager インターフェースを使用すると、 XML 構成に基づいて ObjectGrid インスタンスを作成できます。 ObjectGridManager インターフェースには、URL を引数として取るいくつかのメソッドがあります。 ObjectGridManager 内に渡される各 XML ファイルについて、スキーマに対する妥当性検査を行う必要があります。 XML の妥当性検査は、以前にファイルの妥当性検査が行われ、最後の妥当検査以降、そのファイルに対しては変更が行われていない場合に限り、使用不可にすることができます。妥当性検査を使用不可にすると、少量のオーバーヘッドが節約されますが、無効な XML ファイルが使用される可能性が生じます。 IBM Java Developer Kit (JDK) バージョン 6 以降は、XML 妥当性検査をサポートします。これをサポートしない JDK を使用すると、 Apache Xerces で XML を妥当性検査しなければならない場合があります。

以下の Java コード・スニペットは、ObjectGrid を作成するために XML 構成ファイルを渡す方法を示しています。

```
import java.net.MalformedURLException;
import java.net.URL;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
boolean validateXML = true; // turn XML validation on
boolean cacheInstance = true; // Cache the instance
String objectGridName="Employees"; // Name of Object Grid URL
allObjectGrids = new URL("file:test/myObjectGrid.xml");
final ObjectGridManager oGridManager=
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
 ObjectGrid employees =
 oGridManager.createObjectGrid(objectGridName, allObjectGrids,
  bvalidateXML, cacheInstance);
```

この XML ファイルには、いくつかの ObjectGrids の構成情報が含まれています。前のコード・スニペットは、具体的に ObjectGrid Employees を返します。この場合、Employees の構成は、この XML ファイルに定義されていることを想定しています。

createObjectGrid メソッド

```
.
/**
 * A simple factory method to return an instance of an
 * Object Grid. A unique name is assigned.
 * The instance of ObjectGrid is not cached.
 * Users can then use {@link ObjectGrid#setName(String)} to change the
 * ObjectGrid name.
 *
 * @return ObjectGrid an instance of ObjectGrid with a unique name assigned
 * @throws ObjectGridException any error encountered during the
 * ObjectGrid creation
 */
public ObjectGrid createObjectGrid() throws ObjectGridException;

/**
 * A simple factory method to return an instance of an ObjectGrid with the
 * specified name. The instances of ObjectGrid can be cached. If an ObjectGrid
 * with the this name has already been cached, an ObjectGridException
 * will be thrown.
 *
 * @param objectGridName the name of the ObjectGrid to be created.
 * @param cacheInstance true, if the ObjectGrid instance should be cached
 * @return an ObjectGrid instance
 * @this name has already been cached or
 * any error during the ObjectGrid creation.
 */
public ObjectGrid createObjectGrid(String objectGridName, boolean cacheInstance)
  throws ObjectGridException;

/**
 * Create an ObjectGrid instance with the specified ObjectGrid name. The
 * ObjectGrid instance created will be cached.
 * @param objectGridName the Name of the ObjectGrid instance to be created.
 * @return an ObjectGrid instance
 * @throws ObjectGridException if an ObjectGrid with this name has already
 * been cached, or any error encountered during the ObjectGrid creation
 */
public ObjectGrid createObjectGrid(String objectGridName)
  throws ObjectGridException;

/**
```

```
 * Create an ObjectGrid instance based on the specified ObjectGrid name and the
 * XML file. The ObjectGrid instance defined in the XML file with the specified
 * ObjectGrid name will be created and returned. If such an ObjectGrid
 * cannot be found in the xml file, an exception will be thrown.
 *
 * This ObjecGrid instance can be cached.
 *
 * If the URL is null, it will be simply ignored. In this case, this method behaves
 * the same as {@link #createObjectGrid(String, boolean)}.
 *
 * @param objectGridName the Name of the ObjectGrid instance to be returned. It
 * must not be null.
 * @param xmlFile a URL to a wellformed xml file based on the ObjectGrid schema.
 * @param enableXmlValidation if true the XML is validated
 * @param cacheInstance a boolean value indicating whether the ObjectGrid
 * instance(s)
 * defined in the XML will be cached or not. If true, the instance(s) will
 * be cached.
 *
 * @throws ObjectGridException if an ObjectGrid with the same name
 * has been previously cached, no ObjectGrid name can be found in the xml file,
 * or any other error during the ObjectGrid creation.
 * @return an ObjectGrid instance
 * @see ObjectGrid
 */
public ObjectGrid createObjectGrid(String objectGridName, final URL xmlFile,
final boolean enableXmlValidation, boolean cacheInstance)
 throws ObjectGridException;

/**
 * Process an XML file and create a List of ObjectGrid objects based
 * upon the file.
 * These ObjecGrid instances can be cached.
 * An ObjectGridException will be thrown when attempting to cache a
 * newly created ObjectGrid
 * that has the same name as an ObjectGrid that has already been cached.
 *
 * @param xmlFile the file that defines an ObjectGrid or multiple
 * ObjectGrids
 * @param enableXmlValidation setting to true will validate the XML
 * file against the schema
 * @param cacheInstances set to true to cache all ObjectGrid instances
 * created based on the file
 * @return an ObjectGrid instance
 * @throws ObjectGridException if attempting to create and cache an
 * ObjectGrid with the same name as
 * an ObjectGrid that has already been cached, or any other error
 * occurred during the
 * ObjectGrid creation
 */
public List createObjectGrids(final URL xmlFile, final boolean enableXmlValidation,
boolean cacheInstances) throws ObjectGridException;

/** Create all ObjectGrids that are found in the XML file. The XML file will be
 * validated against the schema. Each ObjectGrid instance that is created will
 * be cached. An ObjectGridException will be thrown when attempting to cache a
 * newly created ObjectGrid that has the same name as an ObjectGrid that has
 * already been cached.
 * @param xmlFile The XML file to process. ObjectGrids will be created based
 * on what is in the file.
 * @return A List of ObjectGrid instances that have been created.
 * @throws ObjectGridException if an ObjectGrid with the same name as any of
 * those found in the XML has already been cached, or
 * any other error encounterred during ObjectGrid creation.
 */
public List createObjectGrids(final URL xmlFile) throws ObjectGridException;
```

```
/**
 * Process the XML file and create a single ObjectGrid instance with the
 * objectGridName specified only if an ObjectGrid with that name is found in
 * the file. If there is no ObjectGrid with this name defined in the XML file,
 * an ObjectGridException
 * will be thrown. The ObjectGrid instance created will be cached.
 * @param objectGridName name of the ObjectGrid to create. This ObjectGrid
 * should be defined in the XML file.
 * @param xmlFile the XML file to process
 * @return A newly created ObjectGrid
 * @throws ObjectGridException if an ObjectGrid with the same name has been
 * previously cached, no ObjectGrid name can be found in the xml file,
 * or any other error during the ObjectGrid creation.
 */
public ObjectGrid createObjectGrid(String objectGridName, URL xmlFile)
  throws ObjectGridException;
```

関連タスク:

Java 949 ページの『クライアント接続のトラブルシューティング』
次のセクションで説明するとおり、ユーザーが解決できるクライアントおよびクライアント接続に固有の共通問題がいくつかあります。

ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid インスタンスの取得

: Java

キャッシュに入れられたインスタンスを取得するには、ObjectGridManager.getObjectGrid メソッドを使用します。

キャッシュに入れられたインスタンスの取得

Employees ObjectGrid インスタンスは ObjectGridManager インターフェースによってキャッシュに入れられたため、別のユーザーが次のコード・スニペットを使用してこのインスタンスにアクセスできます。

```
ObjectGrid myEmployees = oGridManager.getObjectGrid("Employees");
```

キャッシュに入れられた ObjectGrid インスタンスを戻す 2 つの getObjectGrid メソッドを以下に示します。

- **キャッシュに入れられたすべてのインスタンスを取得する**

  以前にキャッシュに入れられたすべての ObjectGrid インスタンスを取得するには、getObjectGrids メソッドを使用します。これは各インスタンスのリストを戻します。キャッシュに入れられたインスタンスが存在しない場合、このメソッドは null を戻します。
- **キャッシュに入れられたインスタンスを名前で取得する**

  キャッシュに入れられた ObjectGrid の 1 つのインスタンスを取得するには、getObjectGrid(String objectGridName) を使用し、キャッシュに入れられたインスタンスの名前をメソッドに渡します。このメソッドは、指定された名前の ObjectGrid インスタンスを戻すか、または、その名前の ObjectGrid インスタンスがない場合は null を戻します。

注: getObjectGrid メソッドを使用して分散グリッドに接続することもできます。詳しくは、381 ページの『分散 ObjectGrid インスタンスへのプログラマチックな接続』を参照してください。

ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid インスタンスの削除 : Java

ObjectGrid インスタンスをキャッシュから除去するには、2 つの異なる removeObjectGrid メソッドを使用できます。

ObjectGrid インスタンスの除去

キャッシュから ObjectGrid インスタンスを除去するには、 removeObjectGrid メソッドの 1 つを使用します。ObjectGridManager インターフェースは、除去されたインスタンスの参照は保持しません。 2 つの除去メソッドが存在します。 1 つのメソッドはブール値パラメーターを取ります。ブール値パラメーターが `true` に設定されている場合、destroy メソッドが ObjectGrid に対して呼び出されます。ObjectGrid に対して呼び出された destroy メソッドは、ObjectGrid をシャットダウンし、ObjectGrid が使用しているリソースをすべて解放します。2 つの removeObjectGrid メソッドの使用方法の説明は以下のとおりです。

```
/**
 * Remove an ObjectGrid from the cache of ObjectGrid instances
 *
 * @param objectGridName the name of the ObjectGrid instance to remove
 * from the cache
 *
 * @throws ObjectGridException if an ObjectGrid with the objectGridName
 * was not found in the cache
 */
public void removeObjectGrid(String objectGridName) throws ObjectGridException;

/**
 * Remove an ObjectGrid from the cache of ObjectGrid instances and
 * destroy its associated resources
 *
 * @param objectGridName the name of the ObjectGrid instance to remove
 * from the cache
 *
 * @param destroy destroy the objectgrid instance and its associated
 * resources
 *
 * @throws ObjectGridException if an ObjectGrid with the objectGridName
 * was not found in the cache
 */
public void removeObjectGrid(String objectGridName, boolean destroy)
 throws ObjectGridException;
```

ObjectGridManager インターフェースを使用した、ObjectGrid のライフサイクルの制御: Java

ObjectGridManager インターフェースで、スタートアップ Bean またはサーブレットのいずれかを使用すると ObjectGrid インスタンスのライフサイクルを制御できます。

スタートアップ Bean でのライフサイクルの管理

スタートアップ Bean は、ObjectGrid インスタンスのライフサイクルの制御に使用できます。スタートアップ Bean はアプリケーションの開始時にロードします。スタートアップ Bean では、アプリケーションが予想通りに開始または停止するときにはいつでもコードを実行できます。スタートアップ Bean を作成するために、ホ

ームの com.ibm.websphere.startupservice.AppStartUpHome インターフェースを使用し、また、リモート側の com.ibm.websphere.startupservice.AppStartUp インターフェースを使用します。 Bean で start メソッドおよび stop メソッドを実行します。 start メソッドは、アプリケーションの始動時に必ず起動されます。 stop メソッドは、アプリケーションのシャットダウン時に必ず起動されます。 start メソッドは、ObjectGrid インスタンスの作成に使用されます。 stop メソッドは、ObjectGrid インスタンスの除去に使用されます。以下は、スタートアップ Bean でのこの ObjectGrid のライフサイクル管理を示すコード・スニペットです。

```
public class MyStartupBean implements javax.ejb.SessionBean {
    private ObjectGridManager objectGridManager;

    /* The methods on the SessionBean interface have been
     * left out of this example for the sake of brevity */

    public boolean start(){
        // Starting the startup bean
        // This method is called when the application starts
        objectGridManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
        try {
            // create 2 ObjectGrids and cache these instances
            ObjectGrid bookstoreGrid = objectGridManager.createObjectGrid("bookstore", true);
            bookstoreGrid.defineMap("book");
            ObjectGrid videostoreGrid = objectGridManager.createObjectGrid("videostore", true);
            // within the JVM,
            // these ObjectGrids can now be retrieved from the
            //ObjectGridManager using the getObjectGrid(String) method
        } catch (ObjectGridException e) {
            e.printStackTrace();
            return false;
        }

        return true;
    }

    public void stop(){
        // Stopping the startup bean
        // This method is called when the application is stopped
        try {
            // remove the cached ObjectGrids and destroy them
            objectGridManager.removeObjectGrid("bookstore", true);
            objectGridManager.removeObjectGrid("videostore", true);
        } catch (ObjectGridException e) {
            e.printStackTrace();
        }
    }
}
```

start メソッドが呼び出された後、新規に作成された ObjectGrid インスタンスが ObjectGridManager インターフェースから取得されます。例えば、サーブレットがアプリケーションに含まれる場合、サーブレットは以下のコード・スニペットを使用して eXtreme Scale にアクセスします。

```
ObjectGridManager objectGridManager =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid bookstoreGrid = objectGridManager.getObjectGrid("bookstore");
ObjectGrid videostoreGrid = objectGridManager.getObjectGrid("videostore");
```

サーブレットでのライフサイクルの管理

サーブレットで ObjectGrid のライフサイクルを管理するためには、 init メソッドを使用して ObjectGrid インスタンスを作成したり、destroy メソッドを使用して ObjectGrid インスタンスを除去することができます。 ObjectGrid インスタンスがキャッシュされた場合、サーブレット・コードで検索および操作を行います。以下は、サーブレット内での ObjectGrid の作成、操作、および破棄を示すサンプル・コードです。

```
public class MyObjectGridServlet extends HttpServlet implements Servlet {
    private ObjectGridManager objectGridManager;

    public MyObjectGridServlet() {
```

```
        super();
    }

    public void init(ServletConfig arg0) throws ServletException {
        super.init();
        objectGridManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
        try {
            // create and cache an ObjectGrid named bookstore
            ObjectGrid bookstoreGrid =
      objectGridManager.createObjectGrid("bookstore", true);
            bookstoreGrid.defineMap("book");
        } catch (ObjectGridException e) {
            e.printStackTrace();
        }
    }

    protected void doGet(HttpServletRequest req, HttpServletResponse res)
        throws ServletException, IOException {
        ObjectGrid bookstoreGrid = objectGridManager.getObjectGrid("bookstore");
        Session session = bookstoreGrid.getSession();
        ObjectMap bookMap = session.getMap("book");
        // perform operations on the cached ObjectGrid
        // ...
 // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
 session.close();
  }
    public void destroy() {
        super.destroy();
        try {
            // remove and destroy the cached bookstore ObjectGrid
            objectGridManager.removeObjectGrid("bookstore", true);
        } catch (ObjectGridException e) {
            e.printStackTrace();
        }
    }
}
```

ObjectGrid 断片へのアクセス: Java

WebSphere eXtreme Scale は、データが存在する場所にロジックを移動し、結果のみをクライアントに戻すことによって、高い処理速度を実現します。

クライアント Java 仮想マシン (JVM)のアプリケーション論理では、データを保持しているサーバー JVM からデータをプルして、トランザクションがコミットされた時点でそのデータをプッシュ・バックすることが必要になります。このプロセスにより、データが処理されるレートが低下します。アプリケーション・ロジックが、データを保持している断片と同じ JVM 上にあれば、ネットワーク待ち時間およびマーシャル・コストはなくなり、パフォーマンスは大幅に向上します。

断片データへのローカル参照

ObjectGrid API には、サーバー・サイド・メソッドに対するセッションが用意されています。このセッションは、その断片のデータに対する直接のリファレンスになります。そのパスでは、ルーティング論理は存在しません。アプリケーション論理は、直接その断片のデータとともに作業できます。ルーティング論理が存在しないため、別の区画のデータにアクセスするのにセッションは使用できません。

Loader プラグインには、断片がプライマリー区画になる場合にイベントを受信する方法が用意されています。アプリケーションは、ローダーおよび ReplicaPreloadController インターフェースを実装できます。検査プリロード状態メソ

ッドは、断片がプライマリー区画になる場合にのみ呼び出されます。そのメソッドに提供されているセッションは、断片データに対するローカル・リファレンスです。これは、区画が主に一部のスレッドを開始したり、区画に関連するトラフィックのメッセージ・ファブリックに加入したりすることを必要としている場合に、通常使用される手法です。getNextKey API を使用して、ローカル・マップ内でメッセージを listen するスレッドを開始します。

連結されたクライアント/サーバーの最適化

アプリケーションがクライアント API を使用し、そのクライアントが含まれる JVM と連結されることになる区画にアクセスする場合は、ネットワークは回避されますが、現行の実装問題のためマーシャルが発生する場合があります。区画に分割されたグリッドが使用されている場合は、(N-1)/N 個の呼び出しが異なる JVM に送付されるため、アプリケーションのパフォーマンスに影響は与えません。常に断片を伴うローカル・アクセスが必要な場合は、ローダーまたは ObjectGrid API を使用してそのロジックを呼び出します。

索引によるデータへのアクセス (索引 API)

Java

より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

このタスクについて

HashIndex クラスは、組み込みアプリケーション索引インターフェースである MapIndex と MapRangeIndex の両方をサポートすることのできる組み込み索引プラグイン実装です。 ユーザー独自の索引を作成することもできます。HashIndex を静的索引または動的索引としてパッキング・マップに追加し、MapIndex または MapRangeIndex の索引プロキシー・オブジェクトを取得し、その索引プロキシー・オブジェクトを使用してキャッシュ・オブジェクトを検索することができます。

ローカル・マップ内のキーを反復処理する場合は、デフォルトの索引を使用できます。この索引はまったく構成を必要としませんが、エージェントを使用するか ShardEvents.shardActivated(ObjectGrid shard) メソッドから取得した ObjectGrid インスタンスを使用して、断片に対して使用しなければなりません。

注: 分散環境では、索引オブジェクトがクライアント ObjectGrid から取得された場合、その索引のタイプはクライアント索引オブジェクトになり、すべての索引操作はリモート・サーバー ObjectGrid で実行されます。マップが区画化されている場合、索引操作は各区画でリモートに実行されます。各区画の結果はマージされてからアプリケーションに返されます。パフォーマンスは、区画数と、各区画が戻す結果のサイズによって決まります。これらの要因が両方とも大きいと、パフォーマンスが低下することがあります。

手順

1. デフォルトのローカル索引以外の索引を使用する場合、索引プラグインをパッキング・マップに追加します。
   - **XML 構成:**

```
<backingMapPluginCollection id="person">
     <bean id="MapIndexplugin"
   className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
```

```
        <property name="Name" type="java.lang.String" value="CODE"
      description="index name" />
        <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
      description="true for MapRangeIndex" />
        <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="employeeCode"
      description="attribute name" />
     </bean>
</backingMapPluginCollection>
```

この XML 構成例では、組み込み HashIndex クラスが索引プラグインとして使用されています。HashIndex クラスは、ユーザーが構成できるプロパティーをサポートしています。上の例にある Name、RangeIndex、 AttributeName などです。

- **Name** プロパティーは、この索引プラグインを識別するストリングである CODE と構成されています。Name プロパティー値は、BackingMap の有効範囲内で固有でなければならず、BackingMap の ObjectMap インスタンスから名前で索引オブジェクトを取り出すのに使用できます。
- **RangeIndex** プロパティーは true と構成されています。これが意味するのは、取り出された索引オブジェクトをアプリケーションが MapRangeIndex インターフェースにキャストできるということです。RangeIndex プロパティーが false と構成されている場合は、アプリケーションは取り出された索引オブジェクトを MapIndex インターフェースにしかキャストできません。MapRangeIndex は、範囲関数 greater than や less than、あるいは両方を使用するデータ検出をサポートしますが、MapIndex は equals 関数のみをサポートします。索引が照会によって使用される場合、**RangeIndex** プロパティーは、単一属性索引に対して true と構成されていなければなりません。リレーションシップ索引および複合索引に対しては、RangeIndex プロパティーは false と構成される必要があります。
- **AttributeName** プロパティーは employeeCode と構成されています。これは、キャッシュ・オブジェクトの **employeeCode** 属性を使用して、単一属性索引が構築されることを意味しています。複数の属性を持つ、キャッシュ・オブジェクトをアプリケーションが検索する必要がある場合、**AttributeName** プロパティーには、属性をコンマで区切ったリストを設定でき、そうすると複合索引が生成されます。

- **プログラマチック構成:**

  BackingMap インターフェースには、静的索引プラグインを追加するために使用できるメソッドとして、addMapIndexplugin と setMapIndexplugins の 2 つがあります。詳しくは、BackingMap APIを参照してください。次の例は、XML 構成の例と同じ構成を作成します。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;

    ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
    ObjectGrid ivObjectGrid = ogManager.createObjectGrid( "grid" );
    BackingMap personBackingMap = ivObjectGrid.getMap("person");

    // use the builtin HashIndex class as the index plugin class.
    HashIndex mapIndexplugin = new HashIndex();
    mapIndexplugin.setName("CODE");
    mapIndexplugin.setAttributeName("EmployeeCode");
    mapIndexplugin.setRangeIndex(true);
    personBackingMap.addMapIndexplugin(mapIndexplugin);
```

2. 索引を使用してマップのキーと値にアクセスします。

   - **ローカル索引:**

ローカル・マップ内のキーと値を反復処理する場合は、デフォルトの索引を使用できます。デフォルトの索引は、エージェントを使用するか、ShardEvents.shardActivated(ObjectGrid shard) メソッドから取得した ObjectGrid インスタンスを使用するかして、断片に対してのみ機能します。次の例を参照してください。

```
MapIndex keyIndex = (MapIndex)
objMap.getIndex(MapIndexPlugin.SYSTEM_KEY_INDEX_NAME);
Iterator keyIterator = keyIndex.findAll();
```

- **静的索引:**

  静的索引プラグインが BackingMap 構成に追加され、含んでいる ObjectGrid インスタンスが初期化された後であれば、アプリケーションは BackingMap の ObjectMap インスタンスから名前によって索引オブジェクトを取得できます。索引オブジェクトは、アプリケーション索引インターフェースにキャストします。これで、アプリケーション索引インターフェースがサポートしている操作を実行できるようになります。

```
Session session = ivObjectGrid.getSession();
ObjectMap map = session.getMap("person ");
MapRangeIndex codeIndex = (MapRangeIndex) m.getIndex("CODE");
Iterator iter = codeIndex.findLessEqual(new Integer(15));
while (iter.hasNext()) {
  Object key = iter.next();
  Object value = map.get(key);
}
// Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
session.close();
```

- **動的索引:**

  BackingMap インスタンスから動的索引を、いつでもプログラマチックに作成および除去することができます。動的索引と静的索引の違いは、動的索引は、索引を含む ObjectGrid インスタンスが初期化されたあとでも作成できる、という点です。動的索引付けは、静的索引付けとは違って非同期プロセスであり、使用される前に作動可能状態になっている必要があります。このメソッドは、動的索引の取得および使用に、静的索引と同じアプローチを使用します。動的索引は、不要になると除去できます。BackingMap インターフェースには、動的索引を作成および除去するためのメソッドがあります。

  createDynamicIndex メソッドおよび removeDynamicIndex メソッドの詳細については、BackingMap API を参照してください。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;

        ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
        ObjectGrid og = ogManager.createObjectGrid("grid");
        BackingMap bm = og.getMap("person");
        og.initialize();

        // create index after ObjectGrid initialization without DynamicIndexCallback.
        bm.createDynamicIndex("CODE", true, "employeeCode", null);

        try {
            // If not using DynamicIndexCallback, need to wait for the Index to be ready.
            // The waiting time depends on the current size of the map
            Thread.sleep(3000);
        } catch (Throwable t) {
            // ...
        }

        // When the index is ready, applications can try to get application index
        // interface instance.
        // Applications have to find a way to ensure that the index is ready to use,
        // if not using DynamicIndexCallback interface.
        // The following example demonstrates the way to wait for the index to be ready
        // Consider the size of the map in the total waiting time.

        Session session = og.getSession();
        ObjectMap m = session.getMap("person");
        MapRangeIndex codeIndex = null;
```

```
        int counter = 0;
        int maxCounter = 10;
        boolean ready = false;
        while (!ready && counter < maxCounter) {
            try {
                counter++;
                codeIndex = (MapRangeIndex) m.getIndex("CODE");
                ready = true;
            } catch (IndexNotReadyException e) {
                // implies index is not ready, ...
                System.out.println("Index is not ready. continue to wait.");
                try {
                    Thread.sleep(3000);
                } catch (Throwable tt) {
                    // ...
                }
            } catch (Throwable t) {
                // unexpected exception
                t.printStackTrace();
            }
        }

        if (!ready) {
            System.out.println("Index is not ready.  Need to handle this situation.");
        }

        // Use the index to peform queries
        // Refer to the MapIndex or MapRangeIndex interface for supported operations.
        // The object attribute on which the index is created is the EmployeeCode.
        // Assume that the EmployeeCode attribute is Integer type: the
        // parameter that is passed into index operations has this data type.

        Iterator iter = codeIndex.findLessEqual(new Integer(15));

        // remove the dynamic index when no longer needed

        bm.removeDynamicIndex("CODE");
    // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
    session.close();
```

次のタスク

DynamicIndexCallback インターフェースを使用して、索引付けイベントの発生時に通知を受けることができます。詳しくは、400 ページの『DynamicIndexCallback インターフェース』を参照してください。

関連概念:

Java 635 ページの『データの索引付けのためのプラグイン』
WebSphere eXtreme Scale は、作成する索引のタイプに応じて、索引の作成のために BackingMap に追加できる組み込みプラグインを提供します。

Java 649 ページの『キャッシュ・オブジェクトのカスタム索引作成のためのプラグイン』
MapIndexPlugin プラグイン (つまり索引) を使用すると、eXtreme Scale が提供する組み込み索引以上の、カスタムの索引付けストラテジーを書き込めます。

Java 652 ページの『複合索引の使用』
複合 HashIndex により、照会のパフォーマンスが向上し、高いコストがかかるマップのスキャンを避けることができます。また、この機能は、検索条件に多くの属性が関係する際、キャッシュ・オブジェクトを検索するための便利な方法を HashIndex API に提供します。

Java 308 ページの『索引付け』
MapIndexPlugin プラグインは、BackingMap 上にいくつかの索引を作成して、非キー・データ・アクセスをサポートするために使用します。

Java 656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

824 ページの『グローバル索引を使用したクライアント照会の最適化』
クライアント ObjectGrid から照会を実行するときは、関連するマップが区画化されているのであれば、区画を設定する必要があります。大規模な区画化された ObjectGrid 環境では、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは通常すべての区画に対して同時に並行照会を実行する必要があります。例えば、100 個の区画がある場合、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは、100 個すべての区画に対して同じ照会を実行し、照会結果をマージする必要があります。これは通常、大量のシステム・リソースを消費します。

812 ページの『照会のパフォーマンスのチューニング』
照会のパフォーマンスを調整する場合は、以下の手法とヒントを使用してください。

関連資料:

Java 400 ページの『DynamicIndexCallback インターフェース』
DynamicIndexCallback インターフェースは、作動可能、エラー、または破棄という索引付けイベントの発生時に、そのことを通知してもらう必要のあるアプリケーションのために設計されています。 DynamicIndexCallback は、BackingMap の createDynamicIndex メソッドのオプション・パラメーターです。アプリケーションは、索引付けイベントの通知を受け取ると、登録済みの DynamicIndexCallback インスタンスを使用して、ビジネス・ロジックを実行することができます。

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属

性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

関連情報:

Java DynamicIndexCallback API

DynamicIndexCallback インターフェース: Java

DynamicIndexCallback インターフェースは、作動可能、エラー、または破棄という索引付けイベントの発生時に、そのことを通知してもらう必要のあるアプリケーションのために設計されています。 DynamicIndexCallback は、BackingMap の createDynamicIndex メソッドのオプション・パラメーターです。アプリケーションは、索引付けイベントの通知を受け取ると、登録済みの DynamicIndexCallback インスタンスを使用して、ビジネス・ロジックを実行することができます。

索引付けイベント

例えば、作動可能イベントは、索引を使用する準備が整ったことを意味します。アプリケーションは、このイベントの通知を受け取ると、アプリケーション索引インターフェースのインスタンスの取得および使用を試行することができます。

例: DynamicIndexCallback インターフェースの使用

```
BackingMap personBackingMap = ivObjectGrid.getMap("person");
    DynamicIndexCallback callback = new DynamicIndexCallbackImpl();
    personBackingMap.createDynamicIndex("CODE", true, "employeeCode", callback);


    class DynamicIndexCallbackImpl implements DynamicIndexCallback {
        public DynamicIndexCallbackImpl() {
        }

        public void ready(String indexName) {
            System.out.println("DynamicIndexCallbackImpl.ready() -> indexName = " + indexName);

            // Simulate what an application would do when notified that the index is ready.
            // Normally, the application would wait until the ready state is reached and then proceed
            // with any index usage logic.
            if("CODE".equals(indexName)) {
                ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
                ObjectGrid og = ogManager.createObjectGrid( "grid" );
                Session session = og.getSession();
                ObjectMap map = session.getMap("person");
                MapIndex codeIndex = (MapIndex) map.getIndex("CODE");
                Iterator iter = codeIndex.findAll(codeValue);
  // Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
  session.close();
    }
        }

        public void error(String indexName, Throwable t) {
            System.out.println("DynamicIndexCallbackImpl.error() -> indexName = " + indexName);
            t.printStackTrace();
        }

        public void destroy(String indexName) {
            System.out.println("DynamicIndexCallbackImpl.destroy() -> indexName = " + indexName);
        }
    }
```

関連タスク:

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連情報:

Java DynamicIndexCallback API

セッションを使用したグリッド内データへのアクセス

Java

アプリケーションは、Session インターフェースを介してトランザクションを開始および終了できます。Session インターフェースは、アプリケーションを基にした ObjectMap および JavaMap インターフェースへのアクセスも提供します。

各 ObjectMap または JavaMap インスタンスは、特定のセッション・オブジェクトに直接結合しています。eXtreme Scale にアクセスしたい各スレッドは、まず最初に ObjectGrid オブジェクトからセッションを取得しなければなりません。セッション・インスタンスは、スレッド間で同時に共有することはできません。 WebSphere eXtreme Scale は、スレッドのローカル・ストレージをまったく使用しませんが、プラットフォームの制約事項により、あるスレッドから別のスレッドへのセッションの受け渡しの機会が制限されることがあります。

方式

get メソッド

アプリケーションは ObjectGrid.getSession メソッドを使用して、セッション・インスタンスを ObjectGrid オブジェクトから取得します。次の例は、Session インターフェースを取得する方法を示しています。

```
ObjectGrid objectGrid = ...; Session sess = objectGrid.getSession();
```

セッションを取得した後、スレッドはそのセッションへの参照を専用に保持します。 getSession メソッドを複数回呼び出すと、その度に新規セッション・オブジェクトが戻されます。

トランザクション・メソッドとセッション・メソッド

セッションは、トランザクションの開始、コミット、またはロールバックに使用できます。 ObjectMap と JavaMap を使用した BackingMap に対する操作は、セッション・トランザクション内では非常に効率よく実行されます。トランザクションが開始された後は、そのトランザクションの有効範囲にある 1 つ以上の BackingMap に対するすべての変更は、そのトランザクションがコミットされるまで、特別のトランザクション・キャッシュに保管されます。トランザクションがコミットされると、保留になっている変更内容は BackingMap とローダーに適用され、その ObjectGrid のその他のクライアントから見えるようになります。

WebSphere eXtreme Scale は、トランザクションを自動的にコミットする機能 (自動コミットともいう) もサポートします。すべての ObjectMap オペレーションがアクティブ・トランザクションのコンテキストの外部で実行される場合は、暗黙のトラ

ンザクションはそのオペレーションの前に開始され、そのトランザクションはアプリケーションに制御が戻される前に自動的にコミットされます。

```
Session session = objectGrid.getSession();
ObjectMap objectMap = session.getMap("someMap");
session.begin();
objectMap.insert("key1", "value1");
objectMap.insert("key2", "value2");
session.commit();
objectMap.insert("key3", "value3"); // auto-commit
```

Session.flush メソッド

Session.flush メソッドは、ローダーが BackingMap に関連付けられているときにのみ意味があります。 flush メソッドは、トランザクション・キャッシュ内の変更内容の現行セットを使用してローダーを呼び出します。ローダーは、変更内容をバックエンドに適用します。これらの変更内容は、flush が呼び出されるときはコミットされません。 flush 呼び出しの後、セッション・トランザクションがコミットされると、 flush 呼び出しの後で発生する更新のみがローダーに適用されます。 flush 呼び出しの後、セッション・トランザクションがロールバックされると、フラッシュされた変更内容はトランザクション内のその他すべての保留している変更内容と一緒に廃棄されます。 flush メソッドは、ローダーに対するバッチ操作の機会を制限するので、慎重に使用してください。以下は、Session.flush メソッドの使用例です。

```
Session session = objectGrid.getSession();
session.begin();
// make some changes
...
session.flush(); // push these changes to the Loader, but don't commit yet
// make some more changes
...
session.commit();
```

NoWriteThrough メソッド

いくつかのマップはローダーによってバックアップされます。ローダーはマップ内のデータ用に永続ストレージを提供します。eXtreme Scale マップのみにデータをコミットし、ローダーにデータをプッシュアウトしないことが有益な場合があります。 Session インターフェースは、この目的のために beginNoWriteThrough メソッドを提供します。 beginNoWriteThrough メソッドは、begin メソッドのようなトランザクションを開始します。beginNoWriteThrough メソッドでは、トランザクションがコミットされると、データはメモリー内のマップにのみコミットされ、ローダーが提供する永続ストレージにはコミットされません。このメソッドが非常に役立つのは、データがマップにプリロードされるときです。

分散 ObjectGrid インスタンスを使用する場合、サーバーで遠くのキャッシュは変更せずにニア・キャッシュのみを変更するには、beginNoWriteThrough メソッドが役立ちます。ニア・キャッシュでデータが不整合であると認識されている場合は、beginNoWriteThrough メソッドを使用すると、エントリーをサーバーでは無効にせずに、ニア・キャッシュで無効にすることができます。

Session インターフェースは、現在活動中のトランザクション・タイプを判別する isWriteThroughEnabled メソッドも提供します。

```
Session session = objectGrid.getSession();
session.beginNoWriteThrough();
// make some changes ...
session.commit(); // these changes will not get pushed to the Loader
```

TxID オブジェクト・メソッドの取得

TxID オブジェクトは、内部が見えないオブジェクトで、活動中のトランザクションを識別します。以下の目的には、TxID オブジェクトを使用します。

- ある特定のトランザクションを検索している場合の比較用
- TransactionCallback とローダーのオブジェクト間で共有データを保管するため
- 1 フェーズ・コミット・プロトコルまたは 2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用しているセッション・トランザクションからこのトランザクションが開始されたかどうかを判別します。 TxID.toString() 出力を調べることによって、このトランザクションが単一区画トランザクションに対するものであったか複数区画トランザクションに対するものであったかを決定することができます。ストリングがキーワード「Local」で始まっている場合、これは単一区画トランザクションを示します。例えば、`Local-40000139-72B2-C037-E000-1C271366B073` などです。ストリングがキーワード「WXS」で始まっている場合、これは複数区画トランザクションを示します。例えば `WXS-40000139-72B2-BD3A-E000-1C271366B073` などです。

オブジェクト・スロット・フィーチャーについての追加情報は、『TransactionCallback プラグイン』と『ローダー』を参照してください。

パフォーマンス・モニター・メソッド

eXtreme Scale を WebSphere Application Server 内で使用する場合、パフォーマンス・モニタリング用にトランザクション・タイプをリセットすることが必要になることがあります。トランザクション・タイプの設定には、setTransactionType メソッドを使用できます。 setTransactionType メソッドについて詳しくは、『WebSphere Application Server Performance Monitoring Infrastructure (PMI) を使用した ObjectGrid パフォーマンスのモニター』を参照してください。

完全な LogSequence メソッドの処理

WebSphere eXtreme Scale は、ある Java 仮想マシンから別のマシンへマップを配布する手段として、マップ変更セットを ObjectGrid リスナーに伝搬できます。リスナーが受信済み LogSequences を処理するのを容易にするために、 Session インターフェースは processLogSequence メソッドを提供します。このメソッドは LogSequence 内で各 LogElement を検査し、 LogSequence MapName によって識別される BackingMap に対して適切なオペレーション (例えば、挿入、更新、無効化など) を実行します。 ObjectGrid セッションは、processLogSequence メソッドが呼び出される前に使用可能になっていなければなりません。アプリケーションは、セッションを完了するために適切な commit または rollback 呼び出しを実行する役割があります。自動コミット処理は、このメソッド呼び出しには使用できません。リモート JVM での受信側 ObjectGridEventListener による通常の処理では、この processLogSequence メソッドの呼び出しが続く beginNoWriteThrough メソッド (変更内容のエンドレスな伝搬を防止するもの) を使用し、次にトランザクションをコミットまたはロールバックすることで、セッションを開始することになります。

```
// Use the Session object that was passed in during
//ObjectGridEventListener.initialization...
session.beginNoWriteThrough();
// process the received LogSequence
try {
 session.processLogSequence(receivedLogSequence);
} catch (Exception e) {
 session.rollback(); throw e;
}
// commit the changes
session.commit();
```

markRollbackOnly メソッド

このメソッドを使用して、現行トランザクションに「rollback only」とマークを付けます。トランザクションに「rollback only」とマークを付けると、アプリケーションで commit メソッドが呼び出された場合でも、トランザクションはロールバックされます。このメソッドは、通常、トランザクションのコミットが許可されている場合にデータ破壊が発生する可能性があると認識されているとき、ObjectGrid 自体またはアプリケーションで使用されます。このメソッドが呼び出されると、このメソッドに渡される Throwable オブジェクトが com.ibm.websphere.objectgrid.TransactionException 例外にチェーニングされます。この例外は、以前に「rollback only」とマーク付けされたセッションで commit メソッドが呼び出された場合の結果です。既に「rollback only」とマーク付けされているトランザクションのこのメソッドに対する以降の呼び出しは、無視されます。つまり、ヌル以外の Throwable 参照を渡す最初の呼び出しのみが使用されます。マークされたトランザクションが完了すると、「rollback only」マークは除去されるため、セッションで開始される次のトランザクションはコミットされます。

isMarkedRollbackOnly メソッド

セッションが現在「rollback only」とマークされている場合に戻されます。markRollbackOnly メソッドが以前このセッションで呼び出されており、セッションで開始されたトランザクションがアクティブな場合、かつこの場合に限り、このメソッドによってブール値 true が戻されます。

setTransactionTimeout メソッド

このセッションで開始される次のトランザクションのトランザクション・タイムアウトを特定の秒数に設定します。このメソッドは、このセッションで以前に開始されたトランザクションのトランザクション・タイムアウトには影響を与えません。このメソッドが呼び出された後に開始されたトランザクションにのみ影響を与えます。このメソッドが呼び出されない場合は、com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid メソッドの setTxTimeout メソッドに渡されたタイムアウト値が使用されます。

getTransactionTimeout メソッド

このメソッドは、トランザクション・タイムアウト値 (秒単位) を戻します。タイムアウト値として setTransactionTimeout メソッドに渡された最後の値は、このメソッドによって戻されます。 setTransactionTimeout メソッドが呼び出されない場合は、com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid メソッドの setTxTimeout メソッドに渡されたタイムアウト値が使用されます。

transactionTimedOut

このメソッドは、このセッションで開始された現行トランザクションがタイムアウトになると、ブール値 true を戻します。

isFlushing メソッド

このメソッドは、呼び出されたセッション・インターフェースの flush メソッドの結果として、すべてのトランザクション変更が Loader プラグインにフラッシュされる場合、かつこの場合に限り、ブール値 true を戻します。 Loader プラグインでは、batchUpdate メソッドが呼び出された理由を確認する必要がある場合にこのメソッドが役立ちます。

isCommitting メソッド

このメソッドは、呼び出されたセッション・インターフェースの commit メソッドの結果として、すべてのトランザクション変更がコミットされる場合、かつこの場合に限り、ブール値 true を戻します。 Loader プラグインでは、batchUpdate メソッドが呼び出された理由を確認する必要がある場合にこのメソッドが役立ちます。

setRequestRetryTimeout メソッド

このメソッドは、セッションの要求再試行タイムアウト値 (ミリ秒) を設定します。クライアントが要求再試行タイムアウトを設定してある場合、セッション設定値がクライアント値をオーバーライドします。

getRequestRetryTimeout メソッド

このメソッドは、セッションの現行の要求再試行タイムアウト設定を取得します。値 -1 は、タイムアウトが設定されていないことを表します。値 0 は、フェイル・ファースト・モードであることを表します。0 より大きい値は、ミリ秒単位のタイムアウト設定値です。

ルーティング用の SessionHandle: Java

コンテナーごとの区画配置のポリシーを使用している場合、SessionHandle を使用することができます。SessionHandle オブジェクトは現行セッションの区画情報を含んでいて、新規セッションに再使用することができます。

SessionHandle オブジェクトは、現行セッションが結合されている区画の情報を保有しています。SessionHandle は、コンテナーごとの区画配置のポリシーを使用している場合に特に有用であり、標準 Java シリアライゼーションでシリアライズできます。

SessionHandle オブジェクトがあれば、setSessionHandle(SessionHandle target) メソッドを使用し、そのハンドルをターゲットとして渡すことで、そのハンドルをセッションに適用できます。 SessionHandle オブジェクトは、Session.getSessionHandle メソッドを使用して取得できます。

これはコンテナーごとの配置のシナリオにのみ有効なので、指定されたデータ・グリッドがコンテナー当たり複数のマップ・セットを保有していたり、コンテナー当たりのマップ・セットをまったく保有していない場合は、SessionHandle オブジェクトを取得しようとすると IllegalStateException がスローされます。 setSessionHandle

メソッドを前もって呼び出さずに、getSessionHandle メソッドを呼び出した場合、クライアント・プロパティーの構成に基づいて、適切な SessionHandle オブジェクトが選択されます。

SessionHandleTransformer helper クラスを使用して、ハンドルをさまざまなフォーマットに変換することもできます。このクラスのメソッドは、ハンドルの表現を、バイト配列からインスタンスに、ストリングからインスタンスに変換でき、これらの逆方向にも変換できます。さらに、ハンドルの内容を出力ストリームに書き込むこともできます。

SessionHandle オブジェクトの使用例については、優先ゾーン・ルーティングを参照してください。

SessionHandle 統合: Java

SessionHandle オブジェクトにはバインドされているセッションの区画情報が含まれ、ルーティングの要求が容易になります。SessionHandle オブジェクトは、コンテナーごとの区画配置のシナリオにのみ適用されます。

ルーティング要求のための SessionHandle オブジェクト

次の方法で、SessionHandle オブジェクトをセッションにバインドすることができます。

ヒント: 以下の各メソッド呼び出しで、SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされると、SessionHandle オブジェクトを Session.getSessionHandle メソッドから取得できます。

- **Session.getSessionHandle メソッドの呼び出し:** このメソッドが呼び出されたときに、SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされていない場合、SessionHandle オブジェクトはランダムに選択されてセッションにバインドされます。
- **トランザクションの作成、読み取り、更新、削除操作の呼び出し:** これらのメソッドが呼び出されたとき、またはコミット時に SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされていない場合は、SessionHandle オブジェクトはランダムに選択されてセッションにバインドされます。
- **ObjectMap.getNextKey メソッドの呼び出し:** このメソッドが呼び出されたときに、SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされていない場合、操作要求はキーが取得されるまで個々の区画にランダムに送付されます。キーが区画から戻されると、その区画に対応する SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされます。 キーが見つからなかった場合は、SessionHandle はセッションにバインドされません。
- **QueryQueue.getNextEntity または QueryQueue.getNextEntities メソッドの呼び出し:** このメソッドが呼び出されたときに、SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされていない場合、操作要求はオブジェクトが取得されるまで個々の区画にランダムに送付されます。オブジェクトが区画から戻されると、その区画に対応する SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされます。 オブジェクトが見つからなかった場合は、SessionHandle はセッションにバインドされません。

- **Session.setSessionHandle(SessionHandle sh) メソッドを使用した SessionHandle の設定:** SessionHandle を Session.getSessionHandle メソッドから取得すると、SessionHandle をセッションにバインドできます。 SessionHandle の設定は、バインドされているセッションの有効範囲内でのルーティングの要求に影響します。

Session.getSessionHandle メソッドは、常に SessionHandle オブジェクトを戻します。また、SessionHandle オブジェクトがセッションにバインドされていない場合、このメソッドはセッション上の SessionHandle も自動的にバインドします。セッションに SessionHandle オブジェクトがあるかどうかを確認するだけであれば、Session.isSessionHandleSet メソッドを呼び出してください。このメソッドが値 `false` を戻す場合は、SessionHandle オブジェクトは現在セッションにバインドされていません。

コンテナーごとの配置のシナリオにおける主要な操作タイプ

SessionHandle オブジェクトに関して、コンテナーごとの区画配置のシナリオにおける主要な操作タイプのルーティングの振る舞いの要約は、次のとおりです。

- **バインドされた SessionHandle オブジェクトを使用したセッション・オブジェクト**
  - 索引 - MapIndex API および MapRangeIndex API: SessionHandle
  - Query および ObjectQuery: SessionHandle
  - エージェント - MapGridAgent および ReduceGridAgent API: SessionHandle
  - ObjectMap.Clear: SessionHandle
  - ObjectMap.getNextKey: SessionHandle
  - QueryQueue.getNextEntity、QueryQueue.getNextEntities: SessionHandle
  - トランザクションの作成、取得、更新、および削除操作 (ObjectMap API および EntityManager API): SessionHandle
- **バインドされた SessionHandle オブジェクトを使用しないセッション・オブジェクト**
  - 索引 - MapIndex API および MapRangeIndex API: すべての現行アクティブ区画
  - Query および ObjectQuery: Query および ObjectQuery の setPartition メソッドを使用して指定された区画
  - エージェント - MapGridAgent および ReduceGridAgent
    - サポートなし: ReduceGridAgent.reduce(Session s, ObjectMap map, Collection keys) メソッドおよび MapGridAgent.process(Session s, ObjectMap map, Object key) メソッド。
    - すべての現行アクティブ区画: ReduceGridAgent.reduce(Session s, ObjectMap map) メソッドおよび MapGridAgent.processAllEntries(Session s, ObjectMap map) メソッド。
  - ObjectMap.clear: すべての現行アクティブ区画。
  - ObjectMap.getNextKey: ランダムに選択された区画の 1 つからキーが戻される場合は SessionHandle をセッションにバインドします。 キーが戻されない場合は、セッションは SessionHandle にバインドされません。

– QueryQueue: QueryQueue.setPartition メソッドを使用して区画を指定します。区画が設定されていない場合、メソッドは戻す区画をランダムに選択します。オブジェクトが戻されると、現行セッションは、オブジェクトを戻した区画にバインドされている SessionHandle にバインドされます。 オブジェクトが戻されない場合、セッションは SessionHandle にバインドされません。
– トランザクションの作成、取得、更新、および削除操作 (ObjectMap API および EntityManager API): 区画をランダムに選択します。

ほとんどの場合、SessionHandle を使用して特定の区画へのルーティングを制御します。データを挿入するセッションから SessionHandle を取得してキャッシュに入れることができます。 SessionHandle をキャッシュに入れた後、それを別のセッション上で設定することができるので、キャッシュに入れられた SessionHandle が指定する区画に要求を送付できます。 SessionHandle を使用しないで ObjectMap.clear などの操作を実行するには、Session.setSessionHandle(null) を呼び出して一時的に SessionHandle をヌルに設定します。SessionHandle を指定しないと、操作はすべての現行アクティブ区画で実行されます。

- **QueryQueue ルーティングの振る舞い**

  コンテナーごとの区画配置のシナリオでは、SessionHandle を使用して QueryQueue API の getNextEntity メソッドおよび getNextEntities メソッドのルーティングを制御することができます。 セッションが SessionHandle にバインドされている場合、要求は SessionHandle がバインドされている区画に送付されます。 セッションが SessionHandle にバインドされていない場合は、区画がこのような方法で設定されていなければ、QueryQueue.setPartition メソッドで設定された区画に要求が送付されます。 セッションにバインドされた SessionHandle または区画がない場合、ランダムに選択された区画が戻されます。 このような区画が見つからない場合は、プロセスは停止し、SessionHandle は現行セッションにバインドされません。

以下のコード・スニペットは、SessionHandle オブジェクトの使用方法を示しています。

```
Session ogSession = objectGrid.getSession();

// binding the SessionHandle
SessionHandle sessionHandle = ogSession.getSessionHandle();

ogSession.begin();
ObjectMap map = ogSession.getMap("planet");
map.insert("planet1", "mercury");

// transaction is routed to partition specified by SessionHandle
ogSession.commit();

// cache the SessionHandle that inserts data
SessionHandle cachedSessionHandle = ogSession.getSessionHandle();

// verify if SessionHandle is set on the Session
boolean isSessionHandleSet = ogSession.isSessionHandleSet();

// temporarily unbind the SessionHandle from the Session
if(isSessionHandleSet) {
    ogSession.setSessionHandle(null);
}

// if the Session has no SessionHandle bound,
```

```
// the clear operation will run on all current active partitions
// and thus remove all data from the map in the entire grid
map.clear();

// after clear is done, reset the SessionHandle back,
// if the Session needs to use previous SessionHandle.
// Optionally, calling getSessionHandle can get a new SessionHandle
ogSession.setSessionHandle(cachedSessionHandle);
```

アプリケーション設計に関する考慮事項

コンテナーごとの配置ストラテジーのシナリオでは、ほとんどの操作に対して SessionHandle オブジェクトを使用します。 SessionHandle オブジェクトは、区画へのルーティングを制御します。データを取得するために、セッションにバインドする SessionHandle オブジェクトは、どの挿入データ・トランザクションからも同じ SessionHandle オブジェクトでなければなりません。

セッション上に設定された SessionHandle を使用せずに操作を実行するには、Session.setSessionHandle(null) メソッド呼び出しを行って、SessionHandle をセッションからアンバインドします。

セッションが SessionHandle にバインドされているときは、SessionHandle オブジェクトで指定された区画にすべての操作要求が送付されます。SessionHandle オブジェクトを設定しないと、すべての区画またはランダムに選択された区画のどちらかに操作は送付されます。

リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)

Java

ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

EntityManager API について詳しくは、 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』を参照してください。

アプリケーションは通常、WebSphere eXtreme Scale 参照を取得し、その参照からスレッドごとにセッション・オブジェクトを取得します。セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの getMap メソッドは、このスレッドに対して使用する ObjectMap への参照を返します。

関連タスク:

280 ページの『アプリケーション開発入門』
WebSphere eXtreme Scale アプリケーションの開発を開始するには、開発環境をセットアップし、使用できる API について学習し、アプリケーションの開発とテストを行う必要があります。

10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

関連資料:

Java 『ObjectMap の概要』
ObjectMap インターフェースは、アプリケーションと BackingMap との間のトランザクション対話のために使用されます。

Java 421 ページの『ObjectMap および JavaMap』
JavaMap インスタンスは、ObjectMap オブジェクトから獲得されます。JavaMap インターフェースは、ObjectMap と同じメソッド・シグニチャーを持ちますが、例外処理の方法は異なります。JavaMap は、java.util.Map インターフェースを拡張します。このため、すべての例外は java.lang.RuntimeException クラスのインスタンスになります。JavaMap は java.util.Map インターフェースを拡張するので、オブジェクト・キャッシュ用に java.util.Map インターフェースを使用する既存のアプリケーションで簡単に WebSphere eXtreme Scale を使用できます。

Java 423 ページの『FIFO キューとしてのマップ』
WebSphere eXtreme Scale を使用すると、すべてのマップに first-in first-out (FIFO) キューと類似する機能を持たせることができます。WebSphere eXtreme Scale は、すべてのマップの挿入順序を追跡します。クライアントはマップに対して、マップ内への挿入順序で次のアンロック済みエントリーを要求し、そのエントリーをロックすることができます。このプロセスにより、複数のクライアントが、そのマップのエントリーを効率的に消費できるようになります。

関連情報:

API 資料

262 ページの『入門チュートリアル・レッスン 2.1: Java クライアント・アプリケーションの作成』
データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる Java クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

Java ObjectMap インターフェース

Java BackingMap インターフェース

Java JavaMap インターフェース

ObjectMap の概要: Java

ObjectMap インターフェースは、アプリケーションと BackingMap との間のトランザクション対話のために使用されます。

目的

ObjectMap インスタンスが、現行スレッドと対応するセッション・オブジェクトから獲得されます。 ObjectMap インターフェースは、BackingMap 内のエントリーを変更するためにアプリケーションが使用するメイン媒体です。

ObjectMap インスタンスの取得

アプリケーションは、Session.getMap(String) メソッドを使用して、セッション・オブジェクトから ObjectMap インスタンスを取得します。以下のコード・スニペットは、ObjectMap インスタンスの獲得方法を示すものです。

```
ObjectGrid objectGrid = ...;
BackingMap backingMap = objectGrid.defineMap("mapA");
Session sess = objectGrid.getSession();
ObjectMap objectMap = sess.getMap("mapA");
```

各 ObjectMap インスタンスは、特定のセッション・オブジェクトと対応しています。特定のセッション・オブジェクトで同じ BackingMap 名を使用して getMap メソッドを複数回呼び出すと、常に同じ ObjectMap インスタンスが戻されます。

トランザクションの自動コミット

ObjectMap と JavaMap を使用する BackingMap に対する操作は、セッション・トランザクション内では非常に効率よく実行されます。ObjectMap インターフェースおよび JavaMap インターフェース上のメソッドがセッション・トランザクションの外部で呼び出される場合、WebSphere eXtreme Scale は、自動コミット・サポートを提供します。メソッドは、暗黙のトランザクションを開始し、要求された操作を実行し、その暗黙のトランザクションをコミットします。

メソッドのセマンティクス

以下で、ObjectMap インターフェースおよび JavaMap インターフェース上の各メソッドの背後にあるセマンティクスについて説明します。

containsKey メソッド
: containsKey メソッドは、キーが BackingMap または Loader に値を持っているかどうかを判別します。アプリケーションが NULL 値をサポートしている場合は、このメソッドは get 操作から戻された NULL 参照が NULL 値を参照しているのか、 BackingMap および Loader がキーを含んでいないことを示すのかを判別するために使用できます。

flush メソッド
: flush メソッドのセマンティクスは、Session インターフェース上の flush メソッドと似ています。注意すべき相違点は、セッション・フラッシュが、現行セッション内で変更されたすべてのマップの現行の保留変更点を適用するということです。このメソッドを使用すると、この ObjectMap インスタンスでの変更のみがローダーにフラッシュされます。

get メソッド
: get メソッドは、BackingMap インスタンスからエントリーをフェッチしま

す。BackingMap インスタンス内でエントリーが検出されず、Loader が BackingMap インスタンスと関連付けられている場合、BackingMap インスタンスは、Loader からエントリーをフェッチしようとします。getAll メソッドは、バッチ・フェッチ処理を可能にするために提供されています。

getForUpdate メソッド

getForUpdate メソッドは get メソッドと同じですが、getForUpdate メソッドを使用すると、BackingMap および Loader に対してエントリーを更新することが目的であることが指示されます。Loader はこのヒントを使用して、データベース・バックエンドに「SELECT for UPDATE」照会を発行できます。 BackingMap にペシミスティック・ロック・ストラテジーが定義されている場合、ロック・マネージャーがエントリーをロックします。getAllForUpdate メソッドは、バッチ・フェッチ処理を可能にするために提供されています。

insert メソッド

insert メソッドは、BackingMap および Loader にエントリーを挿入します。このメソッドを使用すると、これまで存在していないエントリーを挿入するということが BackingMap および Loader に通知されます。既存のエントリー上でこのメソッドを起動すると、メソッドが起動されるとき、あるいは現行のトランザクションがコミットされるときに例外が発生します。

invalidate メソッド

invalidate メソッドのセマンティクスは、このメソッドに渡される **isGlobal** パラメーターの値によって決まります。invalidateAll メソッドは、バッチ無効化処理を可能にするために提供されています。

invalidate メソッドの **isGlobal** パラメーターとして値 false が渡される場合は、ローカル無効化を指定します。ローカル無効化は、トランザクション・キャッシュ内のエントリーへのいかなる変更も破棄します。アプリケーションが get メソッドを発行した場合、エントリーは BackingMap 内でコミットされた最後の値からフェッチします。 BackingMap 内にエントリーがない場合は、ローダー内で最後にフラッシュされたかまたはコミットされた値から、エントリーが取り出されます。トランザクションがコミットされるとき、ローカルに無効化されているとマークされたエントリーはいずれも BackingMap に影響を与えません。ローダーにフラッシュされたすべての変更は、エントリーが無効化された場合であってもコミットされます。

invalidate メソッドの **isGlobal** パラメーターとして true が渡される場合、グローバル無効化が指定されます。グローバル無効化は、トランザクション・キャッシュ内のエントリーに対するすべての保留中の変更を破棄し、エントリー上で実行された以降の操作で BackingMap 値をバイパスします。トランザクションがコミットされているとき、グローバルに無効化されているとマークされたエントリーはいずれも BackingMap から除去されます。 以下の無効化のユース・ケースを例として考えます。 BackingMap が自動増分列を持つデータベース表から戻されます。増分列はレコードに固有の番号を割り当てるために有効です。アプリケーションはエントリーを挿入します。挿入の後で、アプリケーションは挿入された行のシーケンス番号を認識しておく必要があります。オブジェクトのコピーが古いことが分かると、グローバル無効化を使用して Loader から値を入手します。以下のコードはこのユース・ケースを説明しています。

```
Session sess = objectGrid.getSession();
ObjectMap map = sess.getMap("mymap");
sess.begin();
map.insert("Billy", new Person("Joe", "Bloggs", "Manhattan"));
sess.flush();
map.invalidate("Billy", true);
Person p = map.get("Billy");
System.out.println("Version column is: " + p.getVersion());
map.commit();
// Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
session.close();
```

このサンプル・コードは、Billy にエントリーを追加します。 Person のバージョン属性が、データベースの自動増分列を使用して設定されます。アプリケーションは、最初に挿入コマンドを実行します。次にフラッシュを発行して、挿入を Loader およびデータベースに送信します。データベースはこのバージョン列をシーケンスの次の番号に設定します。これによりトランザクション内の Person オブジェクトが期限切れになります。このオブジェクトを更新するために、アプリケーションがグローバルに無効化されます。発行される次の get メソッドは、Loader からエントリーを取得し、トランザクションの値を無視します。エントリーは、更新されたバージョン値を持つデータベースから取り出されます。

put メソッド

put メソッドのセマンティクスは、前の get メソッドがキーに対するトランザクション内で呼び出されたかどうかに依存します。アプリケーションが BackingMap またはローダーに存在するエントリーを返す get 操作を発行すると、put メソッドの呼び出しは更新として解釈され、トランザクション内の前の値を返します。前に get メソッドが呼び出されることなく put メソッド呼び出しが実行された場合、または前の get メソッド呼び出しでエントリーが見つからなかった場合、操作は挿入と解釈されます。put 操作がコミットされると、insert メソッドおよび update メソッドのセマンティクスが適用されます。putAll メソッドは、バッチの挿入および更新処理を可能にするために提供されています。

注: 8.6+ setPutMode(PutMode.UPSERT) メソッドは、ObjectMap および JavaMap の put() および putAll() メソッドのデフォルト振る舞いを、ObjectMap.upsert() および upsertAll() メソッドと同様に振る舞うように変更するために追加されます。

PutMode.UPSERT メソッドが setPutMode(PutMode.INSERTUPDATE) メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、PutMode.UPSERT メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

8.6+ upsert メソッド

データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、upsert メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行っ

て値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

注: upsert メソッドの前は、アプリケーション・コード内で put または getForUpdate メソッドを使用してデータを挿入したり更新したりしていました。例えば、次のとおりです。

```
session.begin();
map.getForUpdate();
map.put();
session.commit();
```

upsert メソッドがあれば、次のコード行を使用してデータを挿入したり更新したりすることができます。

```
session.begin();
map.upsert();
session.commit();
```

8.6+ lock メソッド

ペシミスティック・ロックを使用しているときには、lock メソッドを使用して、データ値を返すことなくデータすなわちキーをロックすることができます。 lock メソッドにより、グリッド内のキーをロックするか、またはキーをロックして値がグリッド内に存在するかどうかを確認することができます。これまでのリリースでは、get API および getForUpdate API を使用してデータ・グリッド内のキーをロックしていました。しかし、クライアントからデータを取得する必要がなかった場合は、大きくなる可能性がある値オブジェクトを取得してクライアントに渡すことになるため、パフォーマンスが低下します。さらに、containsKey は現時点でロックを保持しないため、ペシミスティック・ロックを使用しているときには、get および getForUpdate を使用して適切なロックを取得しなければなりませんでした。現在は、ロックを保持しているとき、lock API により containsKey セマンティクスが提供されるようになりました。次の例を参照してください。

- `boolean ObjectMap.lock(Object key, LockMode lockMode);`

  マップ内のキーをロックします。キーが存在する場合は true を返し、キーが存在しない場合は false を返します。

- `List<Boolean> ObjectMap.lockAll(List keys, LockMode lockMode);`

  マップ内のキーのリストをロックし、true または false 値のリストを返します。キーが存在する場合は `true` を返し、キーが存在しない場合は `false` を返します。

LockMode は列挙型であり、取りうる値は SHARED、UPGRADABLE、および EXCLUSIVE です。ここでは、ロックしたいキーを指定することができます。次の表を参照して、これらのロック・モード値と既存のメソッドの振る舞いとの関係を理解してください。

表 9. LockMode 値と既存の等価メソッド

ロック・モード	等価メソッド
SHARED	get()

表 9. LockMode 値と既存の等価メソッド (続き)

ロック・モード	等価メソッド
UPGRADABLE	getForUpdate()
EXCLUSIVE	getNextKey() および commit()

次に示す LockMode パラメーターのコード例を参照してください。

```
session.begin();
map.lock(key, LockMode.UPGRADABLE);
map.upsert();
session.commit()
```

remove メソッド

remove メソッドは、BackingMap および Loader (Loader が接続されている場合) からエントリーを除去します。除去されたオブジェクトの値は、このメソッドによって戻されます。そのオブジェクトが存在していない場合、このメソッドはヌル値を戻します。removeAll メソッドは、戻り値なしでバッチ削除処理を可能にするために提供されています。

setCopyMode メソッド

setCopyMode メソッドは、この ObjectMap の CopyMode 値を指定します。このメソッドを使用すると、アプリケーションは、BackingMap 上で指定された CopyMode 値をオーバーライドできます。指定された CopyMode 値は、clearCopyMode メソッドが呼び出されるまで有効になっています。いずれのメソッドも、トランザクションの境界の外側で起動されます。
CopyMode 値は、トランザクションの途中で変更することはできません。

touch メソッド

touch メソッドは、エントリーの最終アクセス時間を更新します。このメソッドは、BackingMap からの値を検索しません。このメソッドは、自身のトランザクション内で使用します。無効化または除去のために、提供されたキーが BackingMap 内に存在しない場合は、コミット処理中に例外が発生します。

update メソッド

update メソッドは、BackingMap および Loader 内のエントリーを明示的に更新します。このメソッドを使用して、BackingMap および Loader に、既存のエントリーを更新することを示します。存在していないエントリー上でこのメソッドを起動すると、メソッドが起動されるとき、あるいはコミット処理中に例外が発生します。

getIndex メソッド

getIndex メソッドは、BackingMap に作成されている名前付き索引を取得しようとします。この索引は、スレッド間で共有することができず、セッションと同じ規則に基づいて機能します。戻された索引オブジェクトは、MapIndex インターフェース、MapRangeIndex インターフェース、カスタム索引インターフェースなど、正しいアプリケーション索引インターフェースにキャストする必要があります。

clear メソッド

clear メソッドは、すべての区画のマップからすべてのキャッシュ・エントリーを除去します。この操作は、自動コミット機能であるので、clear の呼び出し時には、アクティブ・トランザクションが存在しないようにします。

注: clear メソッドは、その呼び出しが行われたマップのみをクリアし、関連したエンティティー・マップはそのままにしておきます。このメソッドは、Loader プラグインを呼び出しません。

関連概念:

Java 409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』
ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

Java 『動的マップ』
動的マップを使用すると、データ・グリッドが既に初期化された後にマップを作成できます。

関連情報:

Java ObjectMap インターフェース

Java BackingMap インターフェース

Java JavaMap インターフェース

動的マップ: Java

動的マップを使用すると、データ・グリッドが既に初期化された後にマップを作成できます。

前のバージョンの WebSphere eXtreme Scale では、ObjectGrid を初期化する前にマップを定義する必要がありました。その結果として、使用されるすべてのマップを、いずれかのマップに対してトランザクションを実行する前に、作成しておく必要がありました。

動的マップの利点

動的マップの導入によって、初期化の前にすべてのマップを定義しなければならないという制約が軽減されました。テンプレート・マップの使用を通して、ObjectGrid が初期化された後にマップを作成できます。

テンプレート・マップは、ObjectGrid XML ファイル内に定義されます。前もって定義されていないマップをセッションが要求すると、テンプレート比較が実行されます。新規マップ名と、いずれかのテンプレート・マップの正規表現が一致する場合、動的にマップが作成され、要求されたマップの名前が割り当てられます。この新しく作成されたマップは、ObjectGrid XML ファイルで定義されたテンプレート・マップの設定のすべてを継承します。

動的マップの作成

動的マップ作成は、Session.getMap(String) メソッドと結びついています。このメソッドを呼び出すと、ObjectGrid XML ファイルによって構成された BackingMap に基づいて ObjectMap が戻されます。

いずれかのテンプレート・マップの正規表現に一致するストリングを渡すと、ObjectMap および関連する BackingMap が作成されるという結果になります。

Session.getMap(String cacheName) メソッドについて詳しくは、API 資料を参照してください。

XML 内でのテンプレート・マップの定義は、backingMap エレメントに template ブール値属性を設定するだけの単純さです。template が true に設定されている backingMap の名前は、正規表現であると解釈されます。

WebSphere eXtreme Scale は Java 正規表現パターン・マッチングを使用します。Java での正規表現エンジンについて詳しくは、java.util.regex パッケージおよびクラス関する API 資料を参照してください。

注: テンプレート・マップを定義する際、アプリケーションで Session.getMap(String mapName) メソッドを使用してテンプレート・マップの 1 つのみと一致させることが可能であるように、マップ名が固有であることを確認してください。getMap() メソッドで複数のパターンのテンプレート・マップが一致した場合、`IllegalArgumentException` 例外が発生します。

テンプレート・マップが 1 つ定義されたサンプル ObjectGrid XML ファイルを以下に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
 <objectGrids>
  <objectGrid name="accounting">
   <backingMap name="payroll" readOnly="false" />
   <backingMap name="templateMap.*" template="true"
    pluginCollectionRef="templatePlugins" lockStrategy="PESSIMISTIC" />
  </objectGrid>
 </objectGrids>

 <backingMapPluginCollections>
  <backingMapPluginCollection id="templatePlugins">
   <bean id="Evictor"
    className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.LFUEvictor" />
  </backingMapPluginCollection>
 </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

上記の XML ファイルは、1 つのテンプレート・マップと 1 つの非テンプレート・マップを定義しています。テンプレート・マップの名前は正規表現 `templateMap.*` です。この正規表現と一致するマップ名を指定して Session.getMap(String) メソッドが呼び出された場合、アプリケーションはマップを作成します。

例

動的マップを作成するために、テンプレート・マップの構成が必要です。ObjectGrid XML ファイル内で backingMap に template ブール値を追加します。

```
<backingMap name="templateMap.*" template="true" />
```

このテンプレート・マップの名前は、正規表現として扱われます。

この正規表現に一致する cacheName を指定して Session.getMap(String cacheName) メソッドを呼び出すと、動的マップが作成されるという結果になります。このメソッド呼び出しで 1 つの ObjectMap オブジェクトが戻され、関連する BackingMap オブジェクトが作成されます。

```
Session session = og.getSession();
ObjectMap map = session.getMap("templateMap1");
```

新しく作成されたマップは、テンプレート・マップ定義に定義されたすべての属性およびプラグインを使用して構成されます。前の ObjectGrid XML ファイルについてもう一度考えてみてください。

この XML ファイル中のテンプレート・マップをベースにして作成される動的マップにはエビクターが構成され、ロック・ストラテジーはペシミスティックになります。

注: テンプレートは実際の BackingMap ではありません。つまり、「accounting」ObjectGrid には、実際の「templateMap.*」マップが含まれているのではありません。テンプレートは動的マップ作成の基礎として使用されるだけです。ただし、ObjectGrid XML における名前とまったく同じ名前を持つデプロイメント・ポリシー XML ファイルの mapRef エレメントに、動的マップを組み込む必要があります。 このエレメントは、動的マップの定義先の mapSet を指定します。

テンプレート・マップを使用する際には、Session.getMap(String cacheName) メソッドの動作における変更点を考慮してください。WebSphere eXtreme Scale バージョン 7.0 より以前のバージョンでは、Session.getMap(String cacheName) メソッドの呼び出しはすべて、要求されたマップが存在していなければ UndefinedMapException 例外という結果になりました。動的マップでは、テンプレート・マップの正規表現に一致する名前であれば、マップが作成される結果になります。特に正規表現が総称である場合は、アプリケーションが作成するマップの数に注意するようにしてください。

また、eXtreme Scale セキュリティーが有効にされている場合は、動的マップ作成には ObjectGridPermission.DYNAMIC_MAP が必要です。この許可は Session.getMap(String) メソッドが呼び出されたときにチェックされます。詳しくは、844 ページの『アプリケーション・クライアントの許可』を参照してください。

追加の例

objectGrid.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
<objectGrids>
 <objectGrid name="session">
    <backingMap name="objectgrid.session.metadata.dynamicmap.*" template="true"
        lockStrategy="PESSIMISTIC" ttlEvictorType="LAST_ACCESS_TIME">
    <backingMap name="objectgrid.session.attribute.dynamicmap.*"
        template="true" lockStrategy="OPTIMISTIC"/>
    <backingMap name="datagrid.session.global.ids.dynamicmap.*"
```

```
        lockStrategy="PESSIMISTIC"/>
 </objectGrid>
</objectGrids>
</objectGridConfig>
```

objectGridDeployment.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
   xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy
   ../deploymentPolicy.xsd"
  xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">
  <objectgridDeployment objectgridName="session">
    <mapSet name="mapSet2" numberOfPartitions="5" minSyncReplicas="0"
      maxSyncReplicas="0" maxAsyncReplicas="1" developmentMode="false"
      placementStrategy="PER_CONTAINER">
     <map ref="logical.name"/>
     <map ref="objectgrid.session.metadata.dynamicmap.*"/>
     <map ref="objectgrid.session.attribute.dynamicmap.*"/>
     <map ref="datagrid.session.global.ids"/>
    </mapSet>
  </objectgridDeployment>

</deploymentPolicy>
```

制約および考慮事項

制約:

- QuerySchema エレメントは mapName 用のテンプレートをサポートしません。
- 動的マップと共にエンティティーを使用することはできません。
- エンティティー BackingMap は暗黙的に定義され、クラス名を通してエンティティーにマップされます。

考慮事項:

- 多くのプラグインには、各プラグインが関連付けられたマップを判定する方法がありません。
- 他のプラグインは、差別化するためにマップ名または BackingMap 名を引数として使用します。
- テンプレート・マップを定義する際、アプリケーションで Session.getMap(String mapName) メソッドを使用してテンプレート・マップの 1 つのみと一致させることが可能であるように、マップ名が固有であることを確認してください。getMap() メソッドで複数のパターンのテンプレート・マップが一致した場合、`IllegalArgumentException` 例外が発生します。

関連資料:

Java 410 ページの『ObjectMap の概要』
ObjectMap インターフェースは、アプリケーションと BackingMap との間のトランザクション対話のために使用されます。

Java 421 ページの『ObjectMap および JavaMap』
JavaMap インスタンスは、ObjectMap オブジェクトから獲得されます。JavaMap インターフェースは、ObjectMap と同じメソッド・シグニチャーを持ちますが、例外処理の方法は異なります。JavaMap は、java.util.Map インターフェースを拡張します。このため、すべての例外は java.lang.RuntimeException クラスのインスタンスになります。JavaMap は java.util.Map インターフェースを拡張するので、オブジェクト・キャッシュ用に java.util.Map インターフェースを使用する既存のアプリケーションで簡単に WebSphere eXtreme Scale を使用できます。

Java 423 ページの『FIFO キューとしてのマップ』
WebSphere eXtreme Scale を使用すると、すべてのマップに first-in first-out (FIFO) キューと類似する機能を持たせることができます。WebSphere eXtreme Scale は、すべてのマップの挿入順序を追跡します。クライアントはマップに対して、マップ内への挿入順序で次のアンロック済みエントリーを要求し、そのエントリーをロックすることができます。このプロセスにより、複数のクライアントが、そのマップのエントリーを効率的に消費できるようになります。

関連情報:

Java ObjectMap インターフェース

Java BackingMap インターフェース

Java JavaMap インターフェース

動的マップの構成オプション:

ご使用のクライアント・アプリケーションを特定の名前の付いたマップに接続させることで、データ・グリッド内に追加のマップを作成できます。この接続が発生すると、マップが自動的に作成されます。

動的マップの命名

データ・グリッドを作成すると、デフォルトで単一のマップが作成されます。このマップには、ご使用のデータ・グリッドと同じ名前が付けられます。例えば、`myGrid` というデータ・グリッドを作成すると、自動的に `myGrid` というマップが作成されます。しかし、データ・グリッドにマップを追加することも可能です。クライアント・アプリケーションが次の命名規則を使用したマップに接続する際、1 つのマップが自動作成されます。

<map_name>.<template>.<locking_option>

各部の意味は、次のとおりです。

map_name **(必須)**
マップの名前を指定します。

template **(必須)**
存続時間 (TTL) の動作を定義することで、エントリーの有効期限がマップ

から切れる時期を定義するテンプレートを指定します。使用できるオプションのリストについては、『マップ・テンプレート』 を参照してください。

locking_option
マップに使用されるロック・メカニズムを指定します。使用できるオプションのリストについては、『ロック・オプション』 を参照してください。

マップのテンプレート名を含める必要があります。ロック・オプションを指定しなければ、マップ上でロックは発生しません。

マップ・テンプレート

表 10. 動的マップ・テンプレート

マップ・テンプレート	説明
*.NONE	存続時間 (TTL) に有効期限がないマップを指定します。
*.LUT	項目の最終更新時間に基づいて項目の有効期限が切れるマップを指定します。デフォルトの TTL は 1 時間です。
*.LAT	項目の最終アクセス時間に基づいて項目の有効期限が切れるマップです。デフォルトの TTL は 1 時間です。
*.CT	エントリーの作成時間と TTL 値に基づいてエントリーの有効期限が切れるマップです。デフォルトの TTL は 1 時間です。

ロック・オプション

表 11. 動的マップのロック・オプション

ロック・オプション	説明
(ブランク)	ロック・オプションを指示しなければ、ロック・メカニズムは使用されません。
.P	マップにペシミスティック・ロックがあるよう指定します
.O	マップにオプティミスティック・ロックがあることを指定します

ObjectMap および JavaMap: Java

JavaMap インスタンスは、ObjectMap オブジェクトから獲得されます。JavaMap インターフェースは、ObjectMap と同じメソッド・シグニチャーを持ちますが、例外処理の方法は異なります。JavaMap は、java.util.Map インターフェースを拡張します。このため、すべての例外は java.lang.RuntimeException クラスのインスタンスになります。JavaMap は java.util.Map インターフェースを拡張するので、オブジェクト・キャッシュ用に java.util.Map インターフェースを使用する既存のアプリケーションで簡単に WebSphere eXtreme Scale を使用できます。

JavaMap インスタンスの獲得

アプリケーションは、ObjectMap.getJavaMap メソッドを使用して ObjectMap オブジェクトから JavaMap インスタンスを取得します。以下のコード・スニペットは、JavaMap インスタンスの獲得方法を示すものです。

```
ObjectGrid objectGrid = ...;
BackingMap backingMap = objectGrid.defineMap("mapA");
Session sess = objectGrid.getSession();
ObjectMap objectMap = sess.getMap("mapA");
java.util.Map map = objectMap.getJavaMap();
JavaMap javaMap = (JavaMap) javaMap;
```

JavaMap は、JavaMap の獲得元である ObjectMap によって戻されます。特定の ObjectMap を使用して getJavaMap メソッドを複数回呼び出すと、常に同じ JavaMap インスタンスが戻されます。

方式

JavaMap インターフェースは java.util.Map インターフェース上のメソッドのサブセットのみをサポートします。 java.util.Map インターフェースは、以下のメソッドをサポートします。

containsKey(java.lang.Object) メソッド

get(java.lang.Object) メソッド

put(java.lang.Object, java.lang.Object) メソッド

putAll(java.util.Map) メソッド

remove(java.lang.Object) メソッド

clear()

java.util.Map インターフェースから継承されたその他のすべてのメソッドは、java.lang.UnsupportedOperationException 例外を生じます。

関連概念:

Java 409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』
ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

Java 416 ページの『動的マップ』
動的マップを使用すると、データ・グリッドが既に初期化された後にマップを作成できます。

関連情報:

Java ObjectMap インターフェース

Java BackingMap インターフェース

Java JavaMap インターフェース

FIFO キューとしてのマップ: Java

WebSphere eXtreme Scale を使用すると、すべてのマップに first-in first-out (FIFO) キューと類似する機能を持たせることができます。WebSphere eXtreme Scale は、すべてのマップの挿入順序を追跡します。クライアントはマップに対して、マップ内への挿入順序で次のアンロック済みエントリーを要求し、そのエントリーをロックすることができます。このプロセスにより、複数のクライアントが、そのマップのエントリーを効率的に消費できるようになります。

FIFO の例

以下のコード・スニペットは、マップが使い切られるまで、マップからエントリーを処理するループに入るクライアントを示しています。このループはトランザクションを開始してから、ObjectMap.getNextKey(5000) メソッドを呼び出します。このメソッドは、次に使用可能なアンロック済みエントリーのキーを戻して、これをロックします。トランザクションが 5000 ミリ秒を超えてブロックされていると、メソッドはヌルを戻します。

```
Session session = ...;
ObjectMap map = session.getMap("xxx");
// this needs to be set somewhere to stop this loop
boolean timeToStop = false;

while(!timeToStop)
{
  session.begin();
  Object msgKey = map.getNextKey(5000);
  if(msgKey == null)
  {
    // current partition is exhausted, call it again in
    // a new transaction to move to next partition
    session.rollback();
    continue;
  }
  Message m = (Message)map.get(msgKey);
  // now consume the message
```

```
  ...
  // need to remove it
  map.remove(msgKey);
  session.commit();
}
```

ローカル・モードとクライアント・モードの比較

アプリケーションがクライアントではなくローカル・コアを使用している場合は、上述したメカニズムで処理が行われます。

クライアント・モードでは、Java 仮想マシン (JVM) がクライアントである場合、そのクライアントは、まずランダムのプライマリー区画に接続します。その区画に作業が存在しなければ、クライアントはその作業を求めて次の区画に移動します。クライアントは、エントリーの存在する区画を検出するか、最初のランダム区画の周辺でループするかのいずれかとなります。最初の区画の周辺でループすることになった場合のクライアントは、アプリケーションにヌル値を戻します。エントリーのあるマップを持つ区画を検出した場合のクライアントは、そのタイムアウト期間に使用可能なエントリーがなくなるまで、そのマップのエントリーを消費します。タイムアウトになると、ヌルが戻されます。このアクションでは、区画に分割されたマップが使用されている場合にヌルが戻されると、新規トランザクションを開始して listen を再開することになります。前述のコード例の断片は、このように振る舞います。

例

クライアントとしての実行中に、キーが戻されると、その時点では、該当のトランザクションは、そのキーのエントリーを持つ区画にバインドされています。そのトランザクション中に他のマップの更新を行わなければ、問題はありません。更新を行う場合は、キーを取得したマップと同じ区画にあるマップのみ更新可能です。getNextKey メソッドから戻されたエントリーは、その区画内にある関連データを検出する方法をアプリケーションに示す必要があります。例えば、イベントとそのイベントの影響を受けるジョブの 2 つのマップがあるとします。以下のエンティティーでこの 2 つのマップを定義します。

Job.java
```
package tutorial.fifo;

import com.ibm.websphere.projector.annotations.Entity;
import com.ibm.websphere.projector.annotations.Id;

@Entity
public class Job
{
 @Id String jobId;

 int jobState;
}
```

JobEvent.java
```
package tutorial.fifo;

import com.ibm.websphere.projector.annotations.Entity;
import com.ibm.websphere.projector.annotations.Id;
import com.ibm.websphere.projector.annotations.OneToOne;

@Entity
public class JobEvent
```

```
{
 @Id String eventId;
 @OneToOne Job job;
}
```

ジョブには ID と状態 (整数) があります。イベントが着信したら状態を増分するとします。イベントは JobEvent マップに保管されています。エントリーには、そのイベントが関与するジョブへの参照があります。リスナーがこれを実行するためのコードは、以下の例のようになります。

JobEventListener.java

```
package tutorial.fifo;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.em.EntityManager;

public class JobEventListener
{
 boolean stopListening;

 public synchronized void stopListening()
 {
  stopListening = true;
 }

 synchronized boolean isStopped()
 {
  return stopListening;
 }

 public void processJobEvents(Session session)
  throws ObjectGridException
 {
  EntityManager em = session.getEntityManager();
  ObjectMap jobEvents = session.getMap("JobEvent");
  while(!isStopped())
  {
   em.getTransaction().begin();

   Object jobEventKey = jobEvents.getNextKey(5000);
   if(jobEventKey == null)
   {
    em.getTransaction().rollback();
    continue;
   }
   JobEvent event = (JobEvent)em.find(JobEvent.class, jobEventKey);
   // process the event, here we just increment the
   // job state
   event.job.jobState++;
   em.getTransaction().commit();
  }
 }
}
```

リスナーは、スレッド上でアプリケーションによって開始されています。リスナーは、stopListening メソッドが呼び出されるまで実行されます。つまり、stopListening メソッドが呼び出されるまで、processJobEvents メソッドがスレッド上で実行されるということです。ループ・ブロックは JobEvent マップからの eventKey を待機してから、EntityManager を使用してイベント・オブジェクトにアクセスし、ジョブを逆参照し、状態を増分します。

EntityManager API には getNextKey メソッドがありませんが、ObjectMap にはあります。そのためこのコードでは、JobEvent にキーを取得させるために ObjectMap を使用します。エンティティーを持つマップを使用すると、そのマップはそれ以上オブジェクトを保管しません。その代わりに、Tuple を保管します。この Tuple とは、キーの Tuple オブジェクト、および値の Tuple オブジェクトです。EntityManager.find メソッドは、キーのタプルを受け入れます。

イベントを作成するためのコードは、以下の例のようになります。

```
em.getTransaction().begin();
Job job = em.find(Job.class, "Job Key");
JobEvent event = new JobEvent();
event.id = Random.toString();
event.job = job;
em.persist(event); // insert it
em.getTransaction().commit();
```

イベントのジョブを検索し、イベントを構成し、そのイベントにジョブを指示し、JobEvent マップに挿入し、トランザクションをコミットします。

ローダーおよび FIFO マップ

ローダーで FIFO キューとして使用されたマップを戻す場合は、追加作業がいくつか必要になることがあります。マップ内のエントリーの順序が問題ではない場合は、追加作業はありません。順序が問題となる場合は、挿入されたすべてのレコードをバックエンドに存続させる際に、それらのレコードにシーケンス番号を追加する必要があります。プリロードのメカニズムも、始動時にこの順序でレコードを挿入するように記述する必要があります。

関連概念:

Java 409 ページの『リレーションシップを含まないオブジェクトのキャッシング (ObjectMap API)』
ObjectMap は Java Map に似ていて、キーと値のペアでデータを保管できるようにします。ObjectMap は、アプリケーションがデータを保管するための簡素で直観的なアプローチを提供します。ObjectMap は、相互関係のないオブジェクトをキャッシュするのに理想的です。オブジェクト・リレーションシップがある場合は、EntityManager API を使用するようにしてください。

Java 416 ページの『動的マップ』
動的マップを使用すると、データ・グリッドが既に初期化された後にマップを作成できます。

関連情報:

Java ObjectMap インターフェース

Java BackingMap インターフェース

Java JavaMap インターフェース

オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)

Java

ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

マップ・ベースの API の制限

WebSphere Application Server の動的キャッシュや ObjectMap API などのマップ・ベースの API を使用している場合、以下のような制限を考慮します。

- 索引および照会は、キャッシュ・オブジェクト内のフィールドおよびプロパティーを照会するためにリフレクションを使用する必要があります。
- 複雑なオブジェクトでパフォーマンスを達成するには、カスタム・データのシリアライゼーションが必要です。
- オブジェクトのグラフを扱うのは困難です。 オブジェクト間の人工的な参照を保管し、手動でオブジェクトを結合するアプリケーションを開発する必要があります。

EntityManager API の利点

EntityManager API は、既存のマップ・ベースのインフラストラクチャーを使用しますが、マップへの保管またはマップからの読み取りの前に、エンティティー・オブジェクトとタプル間の変換を行います。エンティティー・オブジェクトはキー・タプルおよび値タプルに変換され、キーと値のペアとして保管されます。タプルとは、画素属性の配列です。

この API の集合は、ほとんどのフレームワークで採用されている Plain Old Java Object (POJO) スタイルのプログラミングに従っています。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

リレーションシップ管理: Java

Java などのオブジェクト指向言語、およびリレーショナル・データベースは、リレーションシップまたは関連をサポートします。リレーションシップは、オブジェクト参照または外部キーの使用を通してストレージ量を削減します。

データ・グリッド内でリレーションシップを使用するときには、データはコンストレインド・ツリーに編成されている必要があります。そのツリーには 1 つのルート・タイプがなければならず、すべての子は 1 つのルートのみに関連付けられていなければなりません。例: 部門には多数の従業員が属し、1 人の従業員が多くのプロジェクトを持つことができます。しかし、1 つのプロジェクトが異なる部門に属している多くの従業員を持つことはできません。ルートが定義されると、ルート・オブジェクトとその子孫へのすべてのアクセスはルートを通して管理されるようになります。WebSphere eXtreme Scale は、ルート・オブジェクトのキーのハッシュ・コードを使用して区画を選択します。以下に例を示します。

```
partition = (hashCode MOD numPartitions).
```

1 つのリレーションシップに関係するすべてのデータが単一のオブジェクト・インスタンスに結びついている場合、ツリー全体を 1 つの区画内に配列し、1 つのトランザクションを使用して非常に効率的にアクセスすることができます。データが複数のリレーションシップにまたがっている場合は、複数の区画についての処理が必要になるため、追加のリモート呼び出しが必要になり、結果的にパフォーマンス上のボトルネックとなることがあります。

参照データ

一部のリレーションシップは、ルックアップまたは参照データを含んでいます。例: CountryName。ルックアップ・データまたは参照データの場合、データはすべての区画に存在していなければなりません。データはどのルート・キーでもアクセスでき、同じ結果が戻ります。このような参照データは、データが相当に静的なケースに限って使用するべきです。このデータを更新する際、すべての区画で更新する必要があるため、コストがかかる場合があります。参照データを最新に保つ手法として、DataGrid API がよく使われます。

正規化のコストと利点

リレーションシップを使用してデータを正規化することは、データの重複が減るため、データ・グリッドによるメモリー使用量を削減するのに寄与します。ただし、一般的には、追加される関係データが多いほど、スケールアウトは少なくなります。データがグループ化されている場合、リレーションシップを維持し、管理できる程度のサイズに保つために、より多くのコストがかかるようになります。グリッドは、ツリーのルートのキーに基づいてデータを区画に分けるので、ツリーのサイズは考慮には入れられません。したがって、1 つのツリー・インスタンスに対して多数のリレーションシップがある場合、データ・グリッドは不平衡になり、結果的に 1 つの区画に他の区画よりも多くのデータが入ってしまうことが起こりえます。

データが非正規化またはフラット化されている場合、通常であれば 2 つのオブジェクト間で共有されるデータが、そうされずに複写され、各表は別々に区画化されるので、より平衡したデータ・グリッドになります。 これは使用されるメモリー量を増やしますが、必要なデータがすべて入っている単一のデータ行にアクセスできる

ため、アプリケーションはスケーラブルになります。データ保守にかかるコストは最近ますます高くなっているため、読み取り主体のグリッドにはこれは理想的です。

詳しくは、 XTP システムの分類およびスケーリングを参照してください。

データ・アクセス API を使用したリレーションシップ管理

ObjectMap API は、最も高速かつ柔軟で粒度の細かいデータ・アクセス API であり、マップのグリッド内のデータにアクセスする手段として、トランザクションを使用する、セッション・ベースの方法を提供します。ObjectMap API によって、クライアントは、標準 CRUD (作成、読み取り、更新、および削除) 操作を使用して分散データ・グリッド内のオブジェクトのキーと値のペアを管理することができます。

ObjectMap API を使用するときには、オブジェクトのリレーションシップが、すべてのリレーションシップの外部キーを親オブジェクトに埋め込むことによって表される必要があります。

以下に例を示します。

```
public class Department {
 Collection<String> employeeIds;
}
```

EntityManager API は、外部キーを含んでいるオブジェクトから永続データを抽出することにより、リレーションシップ管理を単純にします。以下の例に示すように、オブジェクトが後でデータ・グリッドから取り出されるとき、リレーションシップ・グラフは再構築されます。

```
@Entity
public class Department {
 Collection<String> employees;
}
```

EntityManager API は、JPA や Hibernate といった他の Java オブジェクト・パーシスタンス・テクノロジー (管理対象 Java オブジェクト・インスタンスのグラフはパーシスタント・ストアと同期化されます) にとてもよく似ています。このケースでは、パーシスタント・ストアは eXtreme Scale データ・グリッドであり、そこでは、各エンティティーがマップとして表され、マップはオブジェクト・インスタンスではなくエンティティー・データを含みます。

エンティティー・スキーマの定義: Java

ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

エンティティー・スキーマを設計する場合は、以下のタスクを完了する必要があります。

1. エンティティーおよびそのリレーションシップを定義します。
2. eXtreme Scale を構成します。

3. エンティティーを登録します。
4. eXtreme Scale EntityManager API と対話するエンティティー・ベース・アプリケーションを作成します。

エンティティー・スキーマ構成

エンティティー・スキーマとは、1 組のエンティティーとそれらエンティティーの間のリレーションシップのことです。複数の区画を持つ eXtreme Scale アプリケーションでは、エンティティー・スキーマには以下の制約事項およびオプションが適用されます。

- 各エンティティー・スキーマには、単一のルートが定義されている必要があります。これは、スキーマ・ルートと呼ばれます。
- 一定スキーマのすべてのエンティティーは、同じマップ・セットに入っている必要があります。つまり、キーまたは非キーのリレーションシップによってスキーマ・ルートから到達できるすべてのエンティティーは、スキーマ・ルートと同じマップ・セットに定義する必要があります。
- 各エンティティーは、1 つのエンティティー・スキーマのみに属することができます。
- 各 eXtreme Scale アプリケーションは、複数のスキーマを持つことができます。

エンティティーは、その初期化の前に ObjectGrid インスタンスに登録されます。定義された各エンティティーは、固有の名前を持つ必要があり、同じ名前の ObjectGrid BackingMap に自動的にバインドされます。初期化メソッドは、使用中の構成によって変わります。

ローカル eXtreme Scale 構成

ローカル ObjectGrid 構成を使用している場合は、エンティティー・スキーマをプログラマチックに構成できます。このモードでは、ObjectGrid.registerEntities メソッドを使用して、アノテーション付きエンティティー・クラスまたはエンティティー・メタデータ記述子ファイルを登録することができます。

分散 eXtreme Scale 構成

分散 eXtreme Scale 構成を使用している場合は、エンティティー・スキーマを含むエンティティー・メタデータ記述子ファイルを指定する必要があります。

詳しくは、 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』を参照してください。

エンティティー要件

エンティティー・メタデータは、Java クラス・ファイル、エンティティー記述子 XML ファイル、またはその両方を使用して構成します。エンティティーに関連付ける eXtreme Scale BackingMap を識別するには、少なくとも、エンティティー記述子 XML が必要です。アノテーション付き Java クラス (エンティティー・メタデータ・クラス) またはエンティティー記述子 XML ファイルで、エンティティーの永続属性および他のエンティティーとのリレーションシップを記述します。エンティティー・メタデータ・クラスを指定すると、そのクラスは、EntityManager API がグリッド内のデータと対話するためにも使用されます。

eXtreme Scale グリッドは、エンティティー・クラスを指定せずに定義できます。サーバーとクライアントが、基盤マップに保管されたタプル・データと直接対話する場合に、これは役立つことがあります。このようなエンティティーは、エンティティー記述子 XML ファイルで完全に定義され、クラスレス・エンティティーと呼ばれます。

クラスレス・エンティティー

クラスレス・エンティティーは、サーバーまたはクライアントのクラスパスにアプリケーション・クラスを含めることができない場合に、役立ちます。このようなエンティティーは、エンティティー・メタデータ記述子 XML ファイルに定義されます。このファイルで、クラスレス・エンティティー ID を使用して (形式は、「@<エンティティー ID>」)、エンティティーのクラス名を指定します。 @ 記号は、エンティティーをクラスレスとして識別し、エンティティー間の関連をマップするために使用されます。 2 つのクラスレス・エンティティーが定義されたエンティティー・メタデータ記述子 XML ファイルの例として、「クラスレス・エンティティー・メタデータ」の図を参照してください。

eXtreme Scale サーバーまたはクライアントがクラスに対するアクセス権限を備えていない場合でも、クラスレス・エンティティーを使用して、EntityManager API を使用できます。一般的なユース・ケースには、以下のものがあります。

- eXtreme Scale コンテナーが、クラスパス内のアプリケーション・クラスを許可しないサーバーにホストされている。この場合でも、クライアントは、クラスが許可されているクライアントから EntityManager API を使用して、グリッドにアクセスできます。
- eXtreme Scale クライアントが非 Java クライアント (eXtreme Scale REST データ・サービス) を使用しているか、ObjectMap API を使用してグリッド内のタプル・データにアクセスしているため、クライアントには、エンティティー・クラスに対するアクセス権限が必要ない。

クライアントとサーバー間でエンティティー・メタデータに互換性がある場合には、エンティティー・メタデータ・クラス、XML ファイル、またはその両方を使用して、エンティティー・メタデータを作成できます。

例えば、下図の「プログラマチック・エンティティー・クラス」は、次のセクションのクラスレス・メタデータ・コードと互換性があります。

プログラマチック・エンティティー・クラス

```
@Entity
public class Employee {
    @Id long serialNumber;
    @Basic byte[] picture;
    @Version int ver;
    @ManyToOne(fetch=FetchType.EAGER, cascade=CascadeType.PERSIST)
    Department department;
}

@Entity
public static class Department {
    @Id int number;
    @Basic String name;
    @OneToMany(fetch=FetchType.LAZY, cascade=CascadeType.ALL, mappedBy="department")
    Collection<Employee> employees;
}
```

クラスレス・フィールド、キー、およびバージョン

前述のとおり、クラスレス・エンティティーは、エンティティー XML 記述子ファイルで完全に構成されます。クラス・ベースのエンティティーは、Java フィールド、プロパティー、およびアノテーションを使用して属性を定義します。そのため、クラスレス・エンティティーは、<basic> タグおよび <id> タグを使用して、エンティティー XML 記述子でキーおよび属性構造を定義する必要があります。

クラスレス・エンティティー・メタデータ

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<entity-mappings xmlns="http://ibm.com/ws/projector/config/emd"
    xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/projector/config/emd ./emd.xsd">

<entity class-name="@Employee" name="Employee">
    <attributes>
        <id name="serialNumber" type="long"/>
        <basic name="firstName" type="java.lang.String"/>
        <basic name="picture" type="[B"/>
        <version name="ver" type="int"/>
        <many-to-one
            name="department"
            target-entity="@Department"
            fetch="EAGER"">
                <cascade><cascade-persist/></cascade>
        </many-to-one>
    </attributes>
</entity>

<entity class-name="@Department" name="Department" >
    <attributes>
        <id name="number" type="int"/>
        <basic name="name" type="java.lang.String"/>
        <version name="ver" type="int"/>
        <one-to-many
            name="employees"
            target-entity="@Employee"
            fetch="LAZY"
            mapped-by="department">
            <cascade><cascade-all/></cascade>
        </one-to-many>
    </attributes>
</entity>
```

上記の各エンティティーに <id> エレメントが含まれていることに注意してください。クラスレス・エンティティーには、1 つ以上の <id> エレメントを定義するか、エンティティーのキーを表す単一値のアソシエーションを指定する必要があります。エンティティーのフィールドは、<basic> エレメントによって表されます。クラスレス・エンティティーでは、<id>、<version>、および <basic> の各エレメントには名前および型が必要です。サポートされる型の詳細については、以下のサポートされる属性型のセクションを参照してください。

エンティティー・クラスの要件

クラス・ベースのエンティティーは、さまざまなメタデータを Java クラスに関連付けることによって識別されます。メタデータは、Java Platform, Standard Edition バージョン 5 のアノテーション、エンティティー・メタデータ記述子ファイル、またはアノテーションと記述子ファイルの組み合わせを使用して指定できます。エンティティー・クラスは、以下の基準を満たしている必要があります。

- `@Entity` アノテーションが、エンティティー XML 記述子ファイルで指定されている必要があります。
- クラスに、public または protected の引数なしのコンストラクターが含まれている必要があります。
- 最上位クラスである必要があります。インターフェースおよび列挙型は、有効なエンティティー・クラスではありません。
- final キーワードは使用できません。
- 継承を使用することはできません。
- ObjectGrid インスタンスごとに名前と型が固有である必要があります。

すべてのエンティティーは固有の名前と型を持っています。アノテーションを使用している場合、名前はデフォルトではクラスの単純名 (短い名前) ですが、`@Entity` アノテーションの name 属性を使用してオーバーライドできます。

パーシスタント属性

エンティティーのパーシスタント状態は、フィールド (インスタンス変数) を使用するか、Enterprise JavaBeans スタイルのプロパティー・アクセサーを使用して、クライアントおよびエンティティー・マネージャーによってアクセスされます。各エンティティーは、フィールドまたはプロパティー・ベースのいずれかのアクセスを定義する必要があります。アノテーション付きエンティティーは、クラス・フィールドがアノテーション付きの場合はフィールド・アクセスとなり、プロパティーの getter メソッドがアノテーション付きである場合はプロパティー・アクセスとなります。フィールド・アクセスとプロパティー・アクセスを混在させることはできません。タイプを自動的に判別できない場合は、`@Entity` アノテーションまたは同等の XML で **`accessType`** 属性を使用してアクセス・タイプを識別できます。

パーシスタント・フィールド

フィールド・アクセス・エンティティー・インスタンス変数は、エンティティー・マネージャーおよびクライアントから直接アクセスされます。transient 修飾子または transient アノテーションでマークされているフィールドは無視されます。パーシスタント・フィールドの修飾子を final または static にすることはできません。

パーシスタント・プロパティー

プロパティー・アクセス・エンティティーは、読み取りおよび書き込みプロパティーに関しては、JavaBeans シグニチャー規則に従う必要があります。JavaBeans 規則に従わないメソッド、または getter メソッドに Transient アノテーションを持つメソッドは無視されます。型 `T` のプロパティーの場合、型 T の値を返す getProperty という getter メソッドと、 setProperty(T) という void setter メソッドが必要です。ブール型の場合、getter メソッドは、true または false を返す isProperty と表すことができます。パーシスタント・プロパティーは、static 修飾子を持つことができません。

サポートされる属性タイプ

以下のパーシスタント・フィールドおよびプロパティー・タイプがサポートされます。

- ラッパーを含む Java プリミティブ型
- java.lang.String

- java.math.BigInteger
- java.math.BigDecimal
- java.util.Date
- java.util.Calendar
- java.sql.Date
- java.sql.Time
- java.sql.Timestamp
- byte[]
- java.lang.Byte[]
- char[]
- java.lang.Character[]
- enum

ユーザー・シリアライズ可能属性の型はサポートされてはいますが、パフォーマンス、照会、および変更検出に制約があります。配列やユーザー・シリアライズ可能オブジェクトなど、プロキシー処理できないパーシスタント・データは、変更された場合にはエンティティーに再割り当てする必要があります。

シリアライズ可能な属性は、エンティティー記述子 XML ファイルで、オブジェクトのクラス名を使用して表されます。オブジェクトが配列である場合には、データ型は Java 内部形式を使用して表されます。例えば、属性データ型が java.lang.Byte[][] である場合には、ストリング表現は [[Ljava.lang.Byte; になります。

ユーザー・シリアライズ可能型は、以下のベスト・プラクティスに従っている必要があります。

- ハイパフォーマンス・シリアライゼーション・メソッドを実装します。java.lang.Cloneable インターフェースおよび public clone メソッドを実装します。
- java.io.Externalizable インターフェースを実装します。
- equals および hashCode を実装します。

エンティティー・アソシエーション

双方向および単一方向のエンティティー・アソシエーションまたはエンティティー間リレーションシップは、1 対 1、多対 1、1 対多、および多対多として定義できます。エンティティー・マネージャーは、エンティティーを保管するときに、自動的にエンティティー・リレーションシップを適切なキー参照に解決します。

eXtreme Scale グリッドはデータ・キャッシュであり、データベースとは異なり、参照保全性を実施しません。リレーションシップでは子エンティティーに対して永続化操作および除去操作をカスケードすることができますが、オブジェクトとのリンク切れを検出または引き起こすことはありません。子オブジェクトを除去する場合は、そのオブジェクトへの参照を親から除去する必要があります。

2 つのエンティティー間の双方向アソシエーションを定義する場合、リレーションシップの所有者を識別する必要があります。対多アソシエーションでは、リレーシ

ョンシップの多側は常に所有側になります。所有権を自動的に判別できない場合、アノテーションの **mappedBy** 属性、または XML におけるそれと同等な属性を指定する必要があります。**mappedBy** 属性は、リレーションシップの所有者であるターゲット・エンティティー内のフィールドを識別します。この属性は、型と基数が同じである複数の属性が存在する場合に、関連するフィールドを識別するのにも役立ちます。

単一値アソシエーション

1 対 1 および多対 1 のアソシエーションは、@OneToOne および @ManyToOne アノテーションまたはそれと等価な XML 属性を使用して示されます。ターゲット・エンティティーの型は、属性の型によって決定されます。以下の例では、Person と Address の間に単一方向アソシエーションを定義しています。 Customer エンティティーは、1 つの Address エンティティーへの参照を持っています。この場合、逆のリレーションシップがないため、アソシエーションを多対 1 にすることもできます。

```
@Entity
public class Customer {
  @Id id;
  @OneToOne Address homeAddress;
}

@Entity
public class Address{
  @Id id
  @Basic String city;
}
```

Customer クラスと Address クラスの間の双方向リレーションシップを指定するには、 Address クラスから Customer クラスへの参照を追加し、適切なアノテーションを追加して、リレーションシップの反対側にマークを付けます。このアソシエーションは 1 対 1 であるため、@OneToOne アノテーションで mappedBy 属性を使用してリレーションシップの所有者を指定する必要があります。

```
@Entity
public class Address{
  @Id id
  @Basic String city;
  @OneToOne(mappedBy="homeAddress") Customer customer;
}
```

コレクション値アソシエーション

1 対多および多対多のアソシエーションは、@OneToMany および @ManyToMany アノテーションまたはそれと等価な XML 属性を使用して示されます。多くのリレーションシップはすべて、java.util.Collection、java.util.List、または java.util.Set という型を使用して表されます。ターゲット・エンティティーの型は、Collection、List、または Set という汎用型によって決定されるか、@OneToMany または @ManyToMany アノテーションの **targetEntity** 属性 (またはそれと等価な XML での属性) を使用して明示的に決定されます。

前出の例では、顧客ごとに 1 つの住所オブジェクトを持たせることは現実的ではありません。それは、多くの顧客が 1 つの住所を共有したり、複数の住所を持っていることがあるからです。これを解決する 1 つの良い方法は、「多」のアソシエーションを使用することです。

```
@Entity
public class Customer {
  @Id id;
  @ManyToOne Address homeAddress;
  @ManyToOne Address workAddress;
}

@Entity
public class Address{
  @Id id
  @Basic String city;
  @OneToMany(mappedBy="homeAddress") Collection<Customer> homeCustomers;


  @OneToMany(mappedBy="workAddress", targetEntity=Customer.class)
  Collection workCustomers;
}
```

この例では、同じエンティティー間に「自宅アドレス」リレーションシップと「勤務先アドレス」リレーションシップという 2 つの異なるリレーションシップが存在します。**workCustomers** 属性に非汎用型の Collection が使用されているのは、汎用型を使用できない場合に **targetEntity** 属性を使用する方法を示すためです。

クラスレス・アソシエーション

クラスレス・エンティティー・アソシエーションは、クラス・ベース・アソシエーションの定義方法と同じようなエンティティー・メタデータ記述子 XML ファイルで定義されます。唯一の違いは、ターゲット・エンティティーが実際のクラスを指すのではなく、エンティティーのクラス名で使用されるクラスレス・エンティティー ID を指すという点です。

次に例を挙げます。

```
<many-to-one name="department" target-entity="@Department" fetch="EAGER">
      <cascade><cascade-all/></cascade>
</many-to-one>
<one-to-many name="employees" target-entity="@Employee" fetch="LAZY">
      <cascade><cascade-all/></cascade>
</one-to-many>
```

1 次キー

すべてのエンティティーは 1 次キーを持つ必要があり、このキーは単純キー (単一属性) または複合キー (複数属性) として指定できます。キー属性は Id アノテーションを使用して示すか、またはエンティティー XML 記述子ファイルで定義します。キー属性には以下の要件があります。

- 1 次キーの値は変更できません。
- 1 次キー属性の型は、Java プリミティブ型およびラッパー、java.lang.String、java.util.Date、または java.sql.Date のいずれかにする必要があります。
- 1 次キーには、任意の数の単一値アソシエーションを含めることができます。 1 次キー・アソシエーションのターゲット・エンティティーは、ソース・エンティティーとの直接的または間接的な逆アソシエーションを持つことができません。

複合 1 次キーは、必要に応じて 1 次キー・クラスを定義できます。エンティティーは、`@IdClass` アノテーションまたはエンティティー XML 記述子ファイルを使用

して、1 次キー・クラスに関連付けられます。 @IdClass アノテーションは、EntityManager.find メソッドと一緒に使用する場合に役立ちます。

1 次キー・クラスには以下の要件があります。

- 引数なしのコンストラクターを使用した public である必要があります。
- 1 次キー・クラスのアクセス・タイプは、1 次キー・クラスを宣言しているエンティティーによって決定されます。
- プロパティー・アクセスの場合、1 次キー・クラスのプロパティーは、public または protected にする必要があります。
- 1 次キーのフィールドまたはプロパティーは、参照側のエンティティーで定義されているキー属性の名前と型に一致している必要があります。
- 1 次キー・クラスは、equals メソッドおよび hashCode メソッドを実装している必要があります。

次に例を挙げます。

```
@Entity
@IdClass(CustomerKey.class)
public class Customer {
    @Id @ManyToOne Zone zone;
    @Id int custId;
    String name;
    ...
}

@Entity
public class Zone{
    @Id String zoneCode;
    String name;
}

public class CustomerKey {
    Zone zone;
    int custId;

    public int hashCode() {...}
    public boolean equals(Object o) {...}
}
```

クラスレス 1 次キー

クラスレス・エンティティーは、XML ファイルで属性 id=true を指定した、少なくとも 1 つの <id> エレメントまたはアソシエーションを持つ必要があります。両方の例は、以下のようになります。

```
<id name="serialNumber" type="int"/>
<many-to-one name="department" target-entity="@Department" id="true">
<cascade><cascade-all/></cascade>
</many-to-one>
```

要確認:
クラスレス・エンティティーでは、<id-class> XML タグはサポートされません。

エンティティー・プロキシーおよびフィールド・インターセプト

エンティティー・クラスおよび可変のサポートされる属性型は、プロパティー・アクセス・エンティティーではプロキシー・クラスによって拡張され、フィールド・アクセス・エンティティーではバイト・コード拡張されています。内部ビジネス・

メソッドおよび equals メソッドを使用する場合であっても、エンティティーにアクセスする場合は常に、適切なフィールド・アクセス・メソッドまたはプロパティー・アクセス・メソッドを使用する必要があります。

プロキシーおよびフィールド・インターセプターを使用すると、エンティティー・マネージャーがエンティティーの状態を追跡して、エンティティーが変更されたかどうかを判別し、パフォーマンスを改善できるようになります。

重要: プロパティー・アクセス・エンティティーを使用している場合、equals メソッドによる現行のインスタンスと入力オブジェクトの比較には instanceof 演算子を使用する必要があります。ターゲット・オブジェクトのすべてのイントロスペクションは、フィールド自体ではなくオブジェクトのプロパティーを介して行う必要があります。これは、オブジェクト・インスタンスがプロキシーになるからです。

関連概念:

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

Java 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』
eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区

画にハッシュすることができます。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

分散環境におけるエンティティー・マネージャー: Java

ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

必須構成ファイル

以下に示した XML 構成ファイルが必要です。

- ObjectGrid 記述子 XML ファイル
- エンティティー記述子 XML ファイル
- デプロイメントまたはデータ・グリッド記述子 XML ファイル

これらのファイルには、サーバーがホストするエンティティーと BackingMaps を指定します。

エンティティー・メタデータ記述子ファイルには、使用されるエンティティーの記述が含まれています。少なくとも、エンティティー・クラスおよび名前を指定する必要があります。Java Platform, Standard Edition 5 環境で稼働している場合、eXtreme Scale は、エンティティー・クラスとそのアノテーションを自動的に読み取ります。エンティティー・クラスにアノテーションがない場合、またはクラス属性のオーバーライドが必要な場合には、追加の XML 属性を定義できます。 エンティティーをクラスレスで登録している場合は、すべてのエンティティー情報を XML ファイルのみに指定してください。

以下の XML 構成スニペットを使用して、データ・グリッドをエンティティーとともに定義できます。このスニペットでは、`bookstore` という名前の ObjectGrid と、関連付ける `order` という名前のパッキング・マップがサーバーによって作成されます。`objectgrid.xml` ファイルのスニペットは、`entity.xml` ファイルを参照します。この例では、`entity.xml` ファイルに含まれているエンティティーは Order エンティティーの 1 つのみです。

objectgrid.xml

```
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

 <objectGrids>
    <objectGrid name="bookstore" entityMetadataXMLFile="entity.xml">
     <backingMap name="Order"/>
    </objectGrid>
</objectGrids>

</objectGridConfig>
```

objectgrid.xml ファイルは、**entityMetadataXMLFile** 属性を使用して entity.xml ファイルを指定します。値は、相対ディレクトリーにすることも絶対パスにすることも可能です。

- **相対ディレクトリーの場合:** objectgrid.xml ファイルの場所に対して相対的な場所を指定します。
- **絶対パスの場合:** file:// または http:// などの URL 形式で場所を指定します。

entity.xml ファイルの例を以下に示します。

entity.xml

```
<entity-mappings xmlns="http://ibm.com/ws/projector/config/emd"
 xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/projector/config/emd ./emd.xsd">
 <entity class-name="com.ibm.websphere.tutorials.objectgrid.em.
    distributed.step1.Order" name="Order"/>
</entity-mappings>
```

この例では、**orderNumber** フィールドと **desc** フィールドが同じようにアノテーションを付けられて Order クラスにあると想定しています。

同等のクラスレス entity.xml は以下のようになります。

classless entity.xml

```
<entity-mappings xmlns="http://ibm.com/ws/projector/config/emd"
 xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/projector/config/emd ./emd.xsd">
 <entity class-name="@Order " name="Order">
     <description>"Entity named: Order"</description>
        <attributes>
            <id name="orderNumber" type="int"/>
            <basic name="desc" type="java.lang.String"/>
        </attributes>
 </entity>
</entity-mappings>
```

サーバーの開始方法について詳しくは、スタンドアロン・サーバーの始動と停止を参照してください。deployment.xml と objectgrid.xml の両方のファイルを使用して、カタログ・サーバーを始動します。

分散 eXtreme Scale サーバーへの接続

以下のコードは、同じコンピューター上にあるクライアントとサーバー用の接続メカニズムを有効にします。

```
String catalogEndpoints="localhost:2809";
URL clientOverrideURL= new URL("file:etc/emtutorial/distributed/step1/objectgrid.xml");
ClientClusterContext clusterCtx = ogMgr.connect(catalogEndpoints, null, clientOverrideURL);
ObjectGrid objectGrid=ogMgr.getObjectGrid(clusterCtx, "bookstore");
```

上のコード・スニペットで、リモート eXtreme Scale サーバーへの参照に注意してください。接続を確立した後、EntityManager API メソッド (persist、update、remove、および find など) を起動できます。

重要: エンティティーを使用している場合、クライアントのオーバーライド ObjectGrid 記述子 XML ファイルを connect メソッドに渡してください。ヌル値が clientOverrideURL プロパティーに渡され、クライアントのディレクトリー構造がサーバーと異なると、クライアントは、ObjectGrid またはエンティティー記述子 XML ファイルを見つけることができない場合があります。最低限できることは、サーバーの ObjectGrid およびエンティティー XML ファイルをクライアントにコピーすることです。

以前は、ObjectGrid クライアントでエンティティーを使用するには、以下の 2 つの方法のうちの 1 つで、ObjectGrid XML およびエンティティー XML をクライアントで使用できるようにする必要がありました。

1. 最優先の ObjectGrid XML を ObjectGridManager.connect(String catalogServerEndpoints, ClientSecurityConfiguration securityProps, URL overRideObjectGridXml) メソッドに渡します。

   ```
   String catalogEndpoints="myHost:2809";
   URL clientOverrideURL= new URL("file:etc/emtutorial/distributed/step1/objectgrid.xml");
   ClientClusterContext clusterCtx = ogMgr.connect(catalogEndpoints, null, clientOverrideURL);
   ObjectGrid objectGrid=ogMgr.getObjectGrid(clusterCtx, "bookstore");
   ```

2. 指定変更ファイルにヌルを渡し、ObjectGrid XML および参照先エンティティー XML がサーバー上と同じパスにあるクライアントで使用可能になるようにします。

   ```
   String catalogEndpoints="myHost:2809";
   ClientClusterContext clusterCtx = ogMgr.connect(catalogEndpoints, null, null);
   ObjectGrid objectGrid=ogMgr.getObjectGrid(clusterCtx, "bookstore");
   ```

クライアント・サイドでサブセット・エンティティーを使用するか使用しないかに関わらず、XML ファイルは必要でした。 サーバーで定義されたエンティティーを使用するために、これらのファイルは既に必要ありません。 その代わり、前のセクションのオプション 2 のように overRideObjectGridXml パラメーターとしてヌルを渡します。 XML ファイルがサーバーに設定された同じパス上で検出されない場合、クライアントはサーバーのエンティティー構成を使用します。

ただし、クライアントのサブセット・エンティティーを使用する場合は、オプション 1 のようにオーバーライドする ObjectGrid XML を指定してください。

クライアントおよびサーバー・サイドのスキーマ

サーバー・サイド・スキーマは、サーバー上のマップに保管されるデータのタイプを定義します。クライアント・サイド・スキーマは、サーバー上のスキーマからアプリケーション・オブジェクトへのマッピングです。例えば、以下のようなサーバー・サイド・スキーマもあります。

```
@Entity
class ServerPerson
{
  @Id String ssn;
  String firstName;
  String surname;
  int age;
  int salary;
}
```

クライアントには、以下の例に示しているようなアノテーション付きのオブジェクトもあります。

```
@Entity(name="ServerPerson")
class ClientPerson
{
  @Id @Basic(alias="ssn") String socialSecurityNumber;
  String surname;
}
```

このクライアントは、サーバー・サイド・エンティティーを受け取り、そのエンティティーのサブセットをクライアント・オブジェクトに射影します。 この射影により、クライアント側の処理能力とメモリーを節約できます。その理由は、クライアントは、サーバー・サイド・エンティティーに入っているすべての情報ではなく、クライアントが必要とする情報だけを保有するからです。異なるアプリケーションは、すべてのアプリケーションにデータ・アクセスのためのクラス・セットを強制的に共有させる代わりに、それぞれ独自のオブジェクトを使用することができます。

クライアント・サイド・エンティティー記述子 XML ファイルは、以下の場合に必要です。クライアント・サイドがクラスレスで実行されていて、サーバーがクラス・ベースのエンティティーとともに実行されている場合、あるいは、サーバーはクラスレスで、クライアントがクラス・ベースのエンティティーを使用している場合です。クラスレスのクライアント・モードでは、クライアントは物理クラスへのアクセス権を持たずに引き続きエンティティー照会を実行することができます。 サーバーが上記の ServerPerson エンティティーを登録したとすると、クライアントは以下のように `entity.xml` でデータ・グリッドをオーバーライドします。

```
<entity-mappings xmlns="http://ibm.com/ws/projector/config/emd"
 xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/projector/config/emd ./emd.xsd">
 <entity class-name="@ServerPerson" name="Order">
     <description>"Entity named: Order"</description>
        <attributes>
            <id name="socialSecurityNumber" type="java.lang.String"/>
            <basic name="surname" type="java.lang.String"/>
        </attributes>
 </entity>
</entity-mappings>
```

このファイルは、実際のアノテーション付きクラスの指定をクライアントに要求することなく、クライアントで同等のサブセット・エンティティーを取得します。サーバーがクラスレスで、クライアントがクラスレスでない場合、クライアントはオーバーライドするエンティティー記述子 XML ファイルを提供します。 このエンティティー記述子 XML ファイルには、クラス・ファイル参照へのオーバーライドが含まれます。

スキーマの参照

アプリケーションが Java SE 5 で実行している場合、アノテーションを使用してアプリケーションをオブジェクトに追加することができます。EntityManager は、それらのオブジェクトのアノテーションからスキーマを読み取ることができます。 アプリケーションは、`entity.xml` ファイルを使用して、これらのオブジェクトの参照とともに eXtreme Scale ランタイムを提供します。このファイルは、`objectgrid.xml` ファイルから参照されます。 `entity.xml` ファイルには、すべてのエンティティーがリストされ、各エンティティーはクラスまたはスキーマに関連付けられています。 適切なクラス名が指定されている場合には、アプリケーションはそれらのクラスから Java SE 5 のアノテーションを読み取って、スキーマを判別しようとします。クラス・ファイルにアノテーションを付けない場合、あるいはクラス名として

クラスレス ID を指定している場合は、スキーマは XML ファイルから取得されます。 この XML ファイルは、すべての属性、キー、およびリレーションシップをエンティティーごとに指定する場合に使用されます。

ローカル・データ・グリッドの場合、XML ファイルは不要です。 プログラムは ObjectGrid 参照を取得し、ObjectGrid.registerEntities メソッドを呼び出して、Java SE 5 のアノテーションを付けられたクラスのリストまたは XML ファイルを指定します。

ランタイムは、この XML ファイルまたはアノテーション付きクラスのリストを使用して、エンティティー名、属性名とタイプ、キー・フィールドとタイプ、およびエンティティー間のリレーションシップを見つけます。 eXtreme Scale がサーバーで実行している場合、またはスタンドアロン・モードで実行している場合は、各エンティティーから付けられた名前を持つマップが自動的に作成されます。アプリケーション、または Spring などの注入フレームワークのいずれかによって設定された、`objectgrid.xml` ファイルまたは API を使用して、これらのマップをさらにカスタマイズすることができます。

エンティティー・メタデータ記述子ファイル

メタデータ記述子ファイルについて詳しくは、`emd.xsd` ファイルを参照してください。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

EntityManager との対話: Java

アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有するこ

とはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

セッションからの EntityManager インスタンスの取得

getEntityManager メソッドは Session オブジェクトで使用可能です。以下のコードの例は、ローカル ObjectGrid インスタンスの作成方法および EntityManager へのアクセスの方法を示しています。サポートされているすべてのメソッドの詳細については、API 資料で EntityManager インターフェースを参照してください。

```
ObjectGrid og =
ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid("intro-grid");
Session s = og.getSession();
EntityManager em = s.getEntityManager();
```

Session オブジェクトと EntityManager オブジェクトの間には、1 対 1 のリレーションシップが存在します。EntityManager オブジェクトは複数回使用することができます。

エンティティーの永続化

エンティティーの永続化とは、新規エンティティーの状態を ObjectGrid キャッシュに保存することを意味します。 persist メソッドが呼び出されると、エンティティーは管理対象状態になります。永続化はトランザクションの操作であり、新規エンティティーはトランザクションのコミット後に ObjectGrid キャッシュに保管されます。

すべてのエンティティーに、タプルが保管されている、対応する BackingMap があります。 BackingMap はエンティティーと同じ名前で、クラスの登録時に作成されます。以下のコード例は、persist 操作を使用して Order オブジェクトを作成する方法を示します。

```
Order order = new Order(123);
em.persist(order);
order.setX();
...
```

Order オブジェクトはキー 123 を使用して作成され、 persist メソッドに渡されます。それに続けて、トランザクションをコミットする前にオブジェクトの状態を変更することができます。

重要: 前記の例には、begin や commit などの必要なトランザクション境界が含まれていません。詳しくは、 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』 を参照してください。

エンティティーの検索

ObjectGrid キャッシュ内のエンティティーは、キャッシュに保管された後に、キーを指定することにより find メソッドで見つけることができます。 このメソッド

は、トランザクション境界を必要としないため、読み取り専用セマンティクスに有用です。以下の例では、1 行のコードのみでエンティティーを見つけることができることを示しています。

```
Order foundOrder = (Order)em.find(Order.class, new Integer(123));
```

エンティティーの除去

remove メソッドは、persist メソッドと同様、トランザクション操作です。 以下の例は、begin メソッドと commit メソッドを呼び出すことによってトランザクション境界を示しています。

```
em.getTransaction().begin();
Order foundOrder = (Order)em.find(Order.class, new Integer(123));
em.remove(foundOrder );
em.getTransaction().commit();
```

エンティティーは、トランザクション境界の内側で find メソッドを呼び出すことによって管理された後でないと、除去できません。 その後で、EntityManager インターフェースで remove メソッドを呼び出します。

エンティティーの無効化

invalidate メソッドの動作は、remove メソッドとよく似ていますが、Loader プラグインを呼び出すことはありません。 ObjectGrid からエンティティーを除去するが、バックエンド・データ・ストアではそのまま保持するには、このメソッドを使用します。

```
em.getTransaction().begin();
Order foundOrder = (Order)em.find(Order.class, new Integer(123));
em.invalidate(foundOrder );
em.getTransaction().commit();
```

エンティティーは、トランザクション境界の内側で find メソッドを呼び出すことによって管理された後でないと、無効化できません。 find メソッドを呼び出した後、EntityManager インターフェースで invalidate メソッドを呼び出すことができます。

エンティティーの更新

update メソッドもトランザクション操作です。 更新を適用する前に、エンティティーを管理する必要があります。

```
em.getTransaction().begin();
Order foundOrder = (Order)em.find(Order.class, new Integer(123));
foundOrder.date = new Date(); // update the date of the order
em.getTransaction().commit();
```

上の例では、エンティティーが更新された後で persist メソッドは呼び出されていません。 エンティティーは、トランザクションのコミット時に ObjectGrid キャッシュで更新されます。

照会と照会キュー

柔軟な照会エンジンにより、EntityManager API を使用してエンティティーを取得することができます。ObjectGrid 照会言語を使用することにより、エンティティーまたはオブジェクト・ベースのスキーマで SELECT タイプ照会を作成します。Query

インターフェースでは、EntityManager API を使用して照会を実行する方法を詳細に説明しています。照会の使用について詳しくは、Query API を参照してください。

エンティティー QueryQueue は、キューに似たデータ構造体であり、エンティティー照会に関連付けられます。これは、照会フィルターの WHERE 条件に一致するすべてのエンティティーを選択し、結果のエンティティーをキューに入れます。その後、クライアントは、このキューからエンティティーを繰り返し取り出すことができます。詳しくは、464 ページの『エンティティー照会キュー』を参照してください。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド: Java

アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在

します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

エンティティー・インスタンスのライフサイクル

エンティティー・インスタンスには、以下の状態があります。

- **新規**: eXtreme Scale キャッシュに存在せず、新規に作成されたエンティティー・インスタンス。
- **管理対象**: eXtreme Scale キャッシュに存在し、エンティティー・マネージャーを使用して取得または永続化されるエンティティー・インスタンス。エンティティーを管理対象状態にするには、アクティブなトランザクションに関連付ける必要があります。
- **切り離し済み**: eXtreme Scale キャッシュに存在しているが、アクティブなトランザクションには関連付けられていないエンティティー・インスタンス。
- **除去済み**: eXtreme Scale キャッシュから除去されたか、トランザクションがフラッシュまたはコミットされるときにキャッシュから除去されたか、除去される予定のエンティティー・インスタンス。
- **無効化**: eXtreme Scale キャッシュで無効にされたか、トランザクションがフラッシュまたはコミットされるときにキャッシュで無効にされたか、無効にされる予定のエンティティー・インスタンス。

エンティティーの状態が変化するときは、ライフサイクル・コールバック・メソッドを起動できます。

以下のセクションでは、新規、管理対象、切り離し済み、除去済み、および無効化の状態がエンティティーに適用されるときの各状態の意味について詳細に説明します。

エンティティー・ライフサイクル・コールバック・メソッド

エンティティー・ライフサイクル・コールバック・メソッドは、エンティティー・クラスに定義でき、エンティティーの状態が変わると呼び出されます。こうしたメソッドは、エンティティー・フィールドの妥当性検査や、通常ではエンティティーで持続することのない過渡状態の更新で役立ちます。エンティティー・ライフサイクル・コールバック・メソッドは、エンティティーを使用していないクラスでも定義することができます。こうしたクラスは、複数のエンティティー・タイプに関連付けることができるエンティティー・リスナー・クラスです。ライフサイクル・コールバック・メソッドは、以下のようにメタデータ・アノテーションを使用しても、エンティティー・メタデータ XML 記述子ファイルを使用しても定義できます。

- **アノテーション**: ライフサイクル・コールバック・メソッドは、エンティティー・クラス内で PrePersist、PostPersist、PreRemove、PostRemove、PreUpdate、PostUpdate、および PostLoad アノテーションを使用して示すことができます。
- **エンティティー XML 記述子**: ライフサイクル・コールバック・メソッドは、アノテーションが使用可能でない場合は XML を使用して記述できます。

エンティティー・リスナー

エンティティー・リスナー・クラスは、エンティティーを使用しないクラスであり、1 つ以上のエンティティー・ライフサイクル・コールバック・メソッドを定義します。エンティティー・リスナーは、汎用の監査アプリケーションまたはロギング・アプリケーションで有用です。エンティティー・リスナーは、以下のようにメタデータ・アノテーションを使用しても、エンティティー・メタデータ XML 記述子ファイルを使用しても定義できます。

- **アノテーション**: EntityListeners アノテーションは、エンティティー・クラス上の 1 つ以上のエンティティー・リスナー・クラスを示す場合に使用できます。複数のエンティティー・リスナーが定義されている場合、それらが呼び出される順序は、EntityListeners アノテーションに指定されている順序によって決定されます。
- **エンティティー XML 記述子**: XML 記述子は、エンティティー・リスナーの呼び出し順序を指定するか、メタデータ・アノテーションに指定されている順序をオーバーライドするための代替方法として使用できます。

コールバック・メソッドの要件

アノテーションのどのようなサブセットまたは組み合わせでも、エンティティー・クラスまたはリスナー・クラスに指定できます。1 つのクラスは、同じライフサイクル・イベントに対する複数のライフサイクル・コールバック・メソッドを持つことができません。ただし、同じメソッドを複数のコールバック・イベントに使用することができます。エンティティー・リスナー・クラスには、引数を取らない public コンストラクターが必要です。エンティティー・リスナーはステートレスです。エンティティー・リスナーのライフサイクルは、指定されません。 eXtreme Scale はエンティティー継承をサポートしないため、コールバック・メソッドは、エンティティー・クラスでしか定義できず、スーパークラスでは定義できません。

コールバック・メソッド・シグニチャー

エンティティー・ライフサイクル・コールバック・メソッドは、エンティティー・リスナー・クラスで定義するか、エンティティー・クラスで直接定義するか、あるいはその両方で定義できます。エンティティー・ライフサイクル・コールバック・メソッドは、メタデータ・アノテーションを使用しても、エンティティー XML 記述子を使用しても定義できます。エンティティー・クラスとエンティティー・リスナー・クラスでコールバック・メソッドに使用されるアノテーションは、同じです。コールバック・メソッドのシグニチャーは、エンティティー・クラスで定義する場合と、エンティティー・リスナー・クラスで定義する場合とでは異なります。エンティティー・クラスまたはマップされたスーパークラスで定義されるコールバック・メソッドは、以下のシグニチャーを持ちます。

```
void <METHOD>()
```

エンティティー・リスナー・クラスで定義されるコールバック・メソッドは、以下のシグニチャーを持ちます。

```
void <METHOD>(Object)
```

Object 引数は、コールバック・メソッドの呼び出し対象のエンティティー・インスタンスです。 Object 引数は、java.lang.Object オブジェクトまたは実際のエンティティー・タイプとして宣言できます。

コールバック・メソッドには public、private、protected、または package レベルのアクセスが可能ですが、static または final は使用できません。

対応するタイプのライフサイクル・イベント・コールバック・メソッドを指定するために、以下のアノテーションが定義されます。

- com.ibm.websphere.projector.annotations.PrePersist
- com.ibm.websphere.projector.annotations.PostPersist
- com.ibm.websphere.projector.annotations.PreRemove
- com.ibm.websphere.projector.annotations.PostRemove
- com.ibm.websphere.projector.annotations.PreUpdate
- com.ibm.websphere.projector.annotations.PostUpdate
- com.ibm.websphere.projector.annotations.PostLoad

詳しくは、API 資料を参照してください。各アノテーションには、エンティティー・メタデータ XML 記述子ファイルで定義された同等の XML 属性があります。

ライフサイクル・コールバック・メソッドのセマンティクス

以下のように、異なるライフサイクル・コールバック・メソッドは、それぞれ異なる目的を持ち、エンティティー・ライフサイクルの異なるフェーズで呼び出されます。

PrePersist
エンティティーに対して、そのエンティティーがストアに対して永続化される前に呼び出されます。こうしたエンティティーには、カスケード操作のために永続化されているエンティティーが含まれます。このメソッドは、EntityManager.persist 操作のスレッドで呼び出されます。

PostPersist
エンティティーに対して、そのエンティティーがストアに対して永続化された後に呼び出されます。こうしたエンティティーには、カスケード操作のために永続化されているエンティティーが含まれます。このメソッドは、EntityManager.persist 操作のスレッドで呼び出されます。これは、EntityManager.flush または EntityManager.commit が呼び出された後で呼び出されます。

PreRemove
エンティティーに対して、そのエンティティーが除去される前に呼び出されます。こうしたエンティティーには、カスケード操作のために除去されたエンティティーが含まれます。このメソッドは、EntityManager.remove 操作のスレッドで呼び出されます。

PostRemove
エンティティーに対して、そのエンティティーが除去された後に呼び出されます。こうしたエンティティーには、カスケード操作のために除去されたエンティティーが含まれます。このメソッドは、EntityManager.remove 操作のスレッドで呼び出されます。これは、EntityManager.flush または EntityManager.commit が呼び出された後で呼び出されます。

PreUpdate
エンティティーに対して、そのエンティティーがストアに対して更新される

前に呼び出されます。このメソッドは、トランザクション・フラッシュ操作またはコミット操作のスレッドで呼び出されます。

PostUpdate
エンティティーに対して、そのエンティティーがストアに対して更新された後に呼び出されます。このメソッドは、トランザクション・フラッシュ操作またはコミット操作のスレッドで呼び出されます。

PostLoad
エンティティーに対して、そのエンティティーがストアからロードされた後に呼び出されます。こうしたエンティティーには、アソシエーションによってロードされたエンティティーが含まれます。このメソッドは、EntityManager.find や照会などのロード操作のスレッドで呼び出されます。

ライフサイクル・コールバック・メソッドの重複

エンティティー・ライフサイクル・イベントに対して複数のコールバック・メソッドが定義されている場合、これらのメソッドの呼び出し順序は以下のとおりです。

1. **エンティティー・リスナーで定義されたライフサイクル・コールバック・メソッド**: エンティティー・クラスのエンティティー・リスナー・クラスで定義されたライフサイクル・コールバック・メソッドは、EntityListeners アノテーションまたは XML 記述子でエンティティー・リスナー・クラスが指定されているのと同じ順序で呼び出されます。
2. **リスナー・スーパー・クラス**: エンティティー・リスナーのスーパー・クラスで定義されたコールバック・メソッドは、子の前に呼び出されます。
3. **エンティティー・ライフサイクル・メソッド**: WebSphere eXtreme Scale はエンティティー継承をサポートしないため、エンティティー・ライフサイクル・メソッドはエンティティー・クラス内でしか定義できません。

例外

ライフサイクル・コールバック・メソッドで実行時例外が発生する場合があります。ライフサイクル・コールバック・メソッドの結果としてトランザクション内で実行時例外が発生した場合、そのトランザクションがロールバックされます。実行時例外となった後は、それ以上ライフサイクル・コールバック・メソッドが呼び出されません。

関連概念:

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

Java 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』
eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区

画にハッシュすることができます。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

エンティティー・リスナーの例: Java

要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

アノテーションを使用するエンティティー・リスナーの例

以下の例では、ライフサイクル・コールバック・メソッド呼び出しとその呼び出し順序を示しています。エンティティー・クラス Employee および EmployeeListener と EmployeeListener2 という 2 つのエンティティー・リスナーが存在しているものとします。

```
@Entity
@EntityListeners({EmployeeListener.class, EmployeeListener2.class})
public class Employee {
    @PrePersist
    public void checkEmployeeID() {
        ....
    }
}

public class EmployeeListener {
    @PrePersist
    public void onEmployeePrePersist(Employee e) {
        ....
    }
}

public class PersonListener {
    @PrePersist
    public void onPersonPrePersist(Object person) {
        ....
    }
}

public class EmployeeListener2 extends PersonListener {
    @PrePersist
    public void onEmployeePrePersist2(Object employee) {
        ....
    }
}
```

Employee インスタンスで PrePersist イベントが発生した場合、以下のメソッドがこの順序で呼び出されます。

1. onEmployeePrePersist メソッド
2. onPersonPrePersist メソッド
3. onEmployeePrePersist2 メソッド
4. checkEmployeeID メソッド

XML を使用するエンティティー・リスナーの例

以下の例は、エンティティー記述子 XML ファイルを使用して、エンティティーでエンティティー・リスナーを設定する方法を示したものです。

```
<entity
    class-name="com.ibm.websphere.objectgrid.sample.Employee"
    name="Employee" access="FIELD">
    <attributes>
        <id name="id" />
        <basic name="value" />
    </attributes>
    <entity-listeners>
        <entity-listener
            class-name="com.ibm.websphere.objectgrid.sample.EmployeeListener">
            <pre-persist method-name="onListenerPrePersist" />
            <post-persist method-name="onListenerPostPersist" />
        </entity-listener>
    </entity-listeners>
    <pre-persist method-name="checkEmployeeID" />
</entity>
```

エンティティー Employee は、com.ibm.websphere.objectgrid.sample.EmployeeListener エンティティー・リスナー・クラスによって構成されています。このクラスには、2 つのライフサイクル・コールバック・メソッドが定義されています。onListenerPrePersist メソッドは PrePersist イベントに対応するもので、onListenerPostPersist メソッドは PostPersist イベントに対応するものです。また PrePersist イベントを listen するために、checkEmployeeID メソッドが Employee クラスで構成されています。

関連概念:

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

Java 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』
eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区

画にハッシュすることができます。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

EntityManager フェッチ・プランのサポート: Java

FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

例

例えば、ご使用のアプリケーションに Department と Employee の 2 つのエンティティーがあるとします。Department エンティティーと Employee エンティティーの間のリレーションシップは、双方向の 1 対多のリレーションシップです。1 つの部門には多くの従業員がいますが、1 人の従業員は 1 つの部門にのみ属します。Department エンティティーがフェッチされると、ほとんどの場合その部門の従業員もフェッチされるため、この 1 対多のリレーションシップのフェッチ・タイプは EAGER に設定されます。

以下に Department クラスのスニペットを示します。

```
 @Entity
public class Department {

    @Id
    private String deptId;

    @Basic
    String deptName;

  @OneToMany(fetch = FetchType.EAGER, mappedBy="department", cascade = {CascadeType.PERSIST})
  public Collection<Employee> employees;

}
```

分散環境では、アプリケーションが `em.find(Department.class, "dept1")` を呼び出して Department エンティティーをキー「dept1」で検索すると、この検索操作によって Department エンティティーとその Department の EAGER フェッチの関係すべてが取得されます。 上記のスニペットの場合、これは部門「dept1」のすべての従業員です。

WebSphere eXtreme Scale 6.1.0.5 より前では、クライアントは 1 回のクライアント/サーバー・トリップで 1 個のエンティティーを取得したので、1 個の

Department エンティティーと N 個の Employee エンティティーを取得するために、N + 1 回のクライアント/ サーバー・トリップが行われました。この N + 1 個のエンティティーを 1 回のトリップで取得すれば、パフォーマンスを改善できます。

フェッチ・プラン

フェッチ・プランを使用すると、リレーションシップの最大項目数をカスタマイズすることによって、EAGER リレーションシップをフェッチする方法をカスタマイズすることができます。 フェッチの項目数は、LAZY 関係に指定された項目数よりも多い EAGER 関係をオーバーライドします。 デフォルトでは、EAGER 関係のフェッチの項目数がフェッチの最大項目数です。 つまり、ルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER である、すべてのレベルの EAGER リレーションシップがフェッチされます。 EAGER リレーションシップは、そのルート・エンティティーから始まるすべてのリレーションシップが EAGER フェッチとして構成される場合、かつこの場合に限り、ルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER です。

前記の例では、Department と Employee のリレーションシップは EAGER フェッチとして構成されるため、Employee エンティティーは Department エンティティーからナビゲート可能な EAGER です。

Employee エンティティーに別の、例えば Address エンティティーへの EAGER リレーションシップがある場合は、Address エンティティーも Department エンティティーからナビゲート可能な EAGER です。 ただし、Department と Employee のリレーションシップが LAZY フェッチとして構成されていた場合は、Address エンティティーは Department エンティティーからナビゲート可能な EAGER ではありません。Department と Employee のリレーションシップが EAGER フェッチ・チェーンを断ち切るからです。

FetchPlan オブジェクトは EntityManager インスタンスから取得できます。 アプリケーションは setMaxFetchDepth メソッドを使用して、フェッチの最大項目数を変更します。

フェッチ・プランは EntityManager インスタンスに関連付けられています。 フェッチ・プランはどのフェッチ操作にも適用されますが、より厳密には次のとおりです。

- EntityManager `find(Class class, Object key)` 操作および `findForUpdate(Class class, Object key)` 操作
- Query 操作
- QueryQueue 操作

FetchPlan オブジェクトは可変です。 一度変更すると、後で実行されるフェッチ操作には変更された値が適用されます。

フェッチ・プランによって、EAGER フェッチのリレーションシップのエンティティーをルート・エンティティーを使用して取得するのに 1 回のクライアント/サーバー・トリップで行うのか、または複数回で行うのかが決まるため、フェッチ・プランは分散デプロイメントにとって重要です。

引き続き前述の例において、フェッチ・プランは最大項目数が無限大に設定されている、とさらに考えてみてください。 この場合、アプリケーションが `em.find(Department.class, "dept1")` を呼び出して Department を検索すると、この検索操作によって 1 個の Department エンティティーと N 個の従業員エンティティーが 1 回のクライアント/サーバー・トリップで取得されます。 ただし、フェッチの最大項目数がゼロに設定されているフェッチ・プランの場合は、Department オブジェクトのみがサーバーから取得されますが、Department オブジェクトの従業員集合がアクセスされるときのみ Employee エンティティーはサーバーから取得されます。

異なるフェッチ・プラン

要件に基づいていくつかの異なるフェッチ・プランがあります。以下のセクションで説明します。

分散グリッドへの影響

- *項目数無限のフェッチ・プラン:* 項目数無限のフェッチ・プランでは、フェッチの最大項目数は `FetchPlan.DEPTH_INFINITE` で設定されています。

  クライアント/サーバー環境で項目数無限のフェッチ・プランを使用すると、ルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER であるすべての関係は、1 回のクライアント/サーバー・トリップで取得されます。

  例: アプリケーションが、特定の Department の全従業員のすべての Address エンティティーに関係している場合、項目数無限のフェッチ・プランを使用して、すべての関連付けられた Address エンティティーを取得します。 以下のコードでは、1 回のクライアント/サーバー・トリップのみが行われます。

  ```
  em.getFetchPlan().setMaxFetchDepth(FetchPlan.DEPTH_INFINITE);

  tran.begin();
  Department dept = (Department) em.find(Department.class, "dept1");
  // do something with Address object.
  for (Employee e: dept.employees) {
      for (Address addr: e.addresses) {
      // do something with addresses.
      }
  }
  tran.commit();
  ```

- *項目数ゼロのフェッチ・プラン:* 項目数ゼロのフェッチ・プランでは、フェッチの最大項目数はゼロに設定されています。

  クライアント/サーバー環境でゼロのフェッチ・プランを使用すると、ルート・エンティティーのみが最初のクライアント/サーバー・トリップで取得されます。 すべての EAGER リレーションシップは LAZY であるかのように扱われます。

  例: この例では、アプリケーションは Department エンティティー属性にのみ関係します。その部門の従業員にアクセスする必要はないため、アプリケーションはフェッチ・プランの項目数をゼロに設定します。

  ```
  Session session = objectGrid.getSession();
  EntityManager em = session.getEntityManager();
  EntityTransaction tran = em.getTransaction();
  em.getFetchPlan().setMaxFetchDepth(0);

  tran.begin();
  Department dept = (Department) em.find(Department.class, "dept1");
  // do something with dept object.
  tran.commit();
  ```

- *項目数 k のフェッチ・プラン:*

  項目数 *k* のフェッチ・プランでは、フェッチの最大項目数は *k* に設定されています。

  クライアント/サーバー eXtreme Scale 環境で項目数 *k* のフェッチ・プランを使用すると、*k* ステップ以内でルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER リレーションシップすべてが最初のクライアント/サーバー・トリップで取得されます。

  項目数無限のフェッチ・プラン (*k* = 無限大) および項目数ゼロのフェッチ・プラン (*k* = 0) は、項目数 *k* のフェッチ・プランの 2 つの例にすぎません。

  前述の例でさらに詳しい説明を続けるため、エンティティー Employee からエンティティー Address へ別の EAGER リレーションシップがあるとします。フェッチ・プランで、フェッチの最大項目数が 1 に設定されていると、`em.find(Department.class, "dept1")` 操作によって、1 回のクライアント/サーバー・トリップで Department エンティティーおよびその Department のすべての Employee エンティティーが取得されます。 ただし、Address エンティティーは Department エンティティーへは 1 ステップ以内ではなく 2 ステップ以内でナビゲート可能な EAGER のため、取得されません。

  項目数が 2 に設定されたフェッチ・プランを使用すると、`em.find (Department.class, "dept1")` 操作によって、1 回のクライアント/サーバー・トリップで Department エンティティー、その Department のすべての Employee エンティティー、および Employee に関連付けられたすべての Address エンティティーが取得されます。

  ヒント: デフォルトのフェッチ・プランではフェッチの最大項目数は無限大に設定されているため、フェッチ操作のデフォルトの振る舞いは変更できます。 ルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER リレーションシップすべてが取得されます。 複数のトリップではなく、ここではフェッチ操作はデフォルトのフェッチ・プランを使用して 1 回のクライアント/サーバー・トリップのみが行われます。 前のバージョンからの製品の設定を保持するには、フェッチの項目数を 0 に設定してください。
- *照会で使用されるフェッチ・プラン:*

  エンティティー照会を実行する場合も、フェッチ・プランを使用してリレーションシップの取得をカスタマイズすることができます。

  例えば、照会 `SELECT d FROM Department d WHERE "d.deptName='Department'"` の結果には、Department エンティティーへのリレーションシップがあります。フェッチ・プランの項目数が照会結果のアソシエーションから始まることに注意してください。この場合は、照会結果そのものではなく、Department エンティティーです。つまり、Department エンティティーのフェッチの項目数はレベル 0 です。このため、フェッチの最大項目数が 1 のフェッチ・プランは、1 回のクライアント/サーバー・トリップで Department エンティティーおよびその Department の Employee エンティティーを取得します。

例: この例では、フェッチ・プランの項目数は 1 に設定されているため、Department エンティティーおよびその Department の Employee エンティティーは 1 回のクライアント/サーバー・トリップで取得されますが、Address エンティティーは同じトリップでは取得されません。

重要: OrderBy アノテーションまたは構成を使用してリレーションシップを順序付けている場合は、LAZY フェッチとして構成されていても EAGER リレーションシップであると見なされます。

分散環境でのパフォーマンスの考慮事項

デフォルトでは、ルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER であるすべてのリレーションシップが 1 回のクライアント/サーバー・トリップで取得されます。 これにより、すべてのリレーションシップを使用する予定がある場合は、パフォーマンスを改善することができます。 ただし、ある種の使用に関するシナリオにおいては、ルート・エンティティーからナビゲート可能な EAGER リレーションシップがすべて使用されるとは限らないため、その未使用エンティティーを取得することによってランタイム・オーバーヘッドと処理能力オーバーヘッドがかかります。

そのような場合に、アプリケーションはフェッチの最大項目数を小さな数に設定し、その特定の項目数の LAZY の後ですべての EAGER 関係を作成することで取得するエンティティーの項目数を減らすことができます。 この設定により、パフォーマンスを改善することができます。

前出の Department と Employee と Address の例をさらに続けると、デフォルトで、Department 「dept1」の従業員に関連付けられたすべての Address エンティティーは、`em.find(Department.class, "dept1")` が呼び出される場合に取得されます。アプリケーションが Address エンティティーを使用しない場合は、フェッチの最大項目数を 1 に設定することも考えられるため、Address エンティティーは Department エンティティーと一緒には取得されません。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

エンティティー照会キュー: Java

照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成でき

ます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

照会キューは複数のトランザクションおよびクライアントによって共有されます。照会キューが空になると、このキューに関連付けられたエンティティー照会が再実行され、新しい結果がキューに追加されます。照会キューは、エンティティー照会ストリングとパラメーターによって一意的に識別されます。 1 つの ObjectGrid インスタンス内に存在する各固有の照会キューのインスタンスは 1 つのみです。追加情報については、EntityManager API 資料を参照してください。

照会キューの例

次の例は、照会キューの使用法を示します。

```
/**
 * Get a unassigned question type task
 */
private void getUnassignedQuestionTask() throws Exception {
    EntityManager em = og.getSession().getEntityManager();
    EntityTransaction tran = em.getTransaction();

    QueryQueue queue = em.createQueryQueue("SELECT t FROM Task t
    WHERE t.type=?1 AND t.status=?2", Task.class);
    queue.setParameter(1, new Integer(Task.TYPE_QUESTION));
    queue.setParameter(2, new Integer(Task.STATUS_UNASSIGNED));

    tran.begin();
    Task nextTask = (Task) queue.getNextEntity(10000);
    System.out.println("next task is " + nextTask);
    if (nextTask != null) {
        assignTask(em, nextTask);
    }
    tran.commit();
}
```

上記の例は、最初にエンティティー照会ストリング "SELECT t FROM Task t WHERE t.type=?1 AND t.status=?2" を使用して QueryQueue を作成しています。その次に、QueryQueue オブジェクトのパラメーターを設定しています。この照会キューは、タイプが "question" のすべての "unassigned" (未割り当て) タスクを示します。 QueryQueue オブジェクトは、エンティティー Query オブジェクトに非常によく似ています。

QueryQueue が作成されると、エンティティー・トランザクションが開始され、getNextEntity メソッドが呼び出されます。このメソッドは、タイムアウト値が 10 秒に設定され、次に使用可能なエンティティーを取得します。エンティティーが取得されると、それは assignTask メソッドで処理されます。assignTask は Task エンティティー・インスタンスを変更し、状況を "assigned" (割り当て済み) に変更します。これにより、このエンティティーはもはや QueryQueue のフィルターに一致しなくなるため、事実上キューから削除されます。割り当てが終わると、トランザクションがコミットされます。

この簡単な例からわかるように、照会キューはエンティティー照会に似ています。しかし、両者には次のような違いがあります。

1. 照会キュー内のエンティティーは、反復方式で取得できます。取得するエンティティーの数は、ユーザー・アプリケーションが決定します。例えば、

QueryQueue.getNextEntity(timeout) が使用された場合、取得されるエンティティーは 1 つのみです。QueryQueue.getNextEntities(5, timeout) が使用された場合は、5 つのエンティティーが取得されます。分散環境では、エンティティーの数によって、サーバーからクライアントへ転送されるバイト数が直接決まります。

2. エンティティーが照会キューから取得される際、そのエンティティーには U ロックがかけられるため、他のトランザクションはアクセスできません。

ループでのエンティティーの取得

エンティティーをループで取得できます。以下に、未割り当て (UNASSIGNED) の質問 (QUESTION) タイプのすべてのタスクを完了させる方法の例を示します。

```
/**
 * Get all unassigned question type tasks
 */
private void getAllUnassignedQuestionTask() throws Exception {
    EntityManager em = og.getSession().getEntityManager();
    EntityTransaction tran = em.getTransaction();

    QueryQueue queue = em.createQueryQueue("SELECT t FROM Task t WHERE
   t.type=?1 AND t.status=?2", Task.class);
    queue.setParameter(1, new Integer(Task.TYPE_QUESTION));
    queue.setParameter(2, new Integer(Task.STATUS_UNASSIGNED));

    Task nextTask = null;

    do {
        tran.begin();
        nextTask = (Task) queue.getNextEntity(10000);
        if (nextTask != null) {
            System.out.println("next task is " + nextTask);
        }
        tran.commit();
    } while (nextTask != null);
}
```

エンティティー・マップ内に未割り当ての質問タイプのタスクが 10 個あった場合、ユーザーは、10 個のエンティティーがコンソールにプリントされると予想したでしょう。しかし、このサンプルを実行すると、予想に反して、プログラムは永久に終了しません。

照会キューが作成され、getNextEntity が呼び出されると、キューに関連付けられたエンティティー照会が実行され、キューには 10 件の結果が追加されます。getNextEntity が呼び出されると、1 つのエンティティーがキューから取り出されます。getNextEntity 呼び出しが 10 回実行されると、キューは空になります。エンティティー照会が自動的に再実行されます。これら 10 個のエンティティーはまだ存在し、照会キューのフィルター条件に一致するため、それらは再度キューに追加されます。

次の行を println() ステートメントの後に追加すれば、10 個のエンティティーのみがプリントされるようになります。

```
em.remove(nextTask);
```

コンテナーごとの配置デプロイメントでの SessionHandle と QueryQueue の使用について詳しくは、SessionHandle 統合を参照してください。

すべての区画にデプロイされる照会キュー

分散 eXtreme Scale では、照会キューを 1 つの区画またはすべての区画に作成できます。照会キューをすべての区画に作成する場合、各区画に 1 つの照会キュー・インスタンスが存在します。

クライアントは、QueryQueue.getNextEntity または QueryQueue.getNextEntities メソッドを使用して次のエンティティーを取得しようとするとき、要求を区画の 1 つに送信します。クライアントは、照合要求とピン要求をサーバーに送信します。

- 照合要求では、クライアントが要求をある区画に送信すると、すぐにサーバーから応答が返されます。エンティティーがキュー内にある場合、サーバーはエンティティーを付けて応答を返します。エンティティーがない場合、サーバーはエンティティーなしで応答を返します。いずれの場合も、サーバーは即時に応答を返します。
- ピン要求では、クライアントが要求をある区画に送信すると、サーバーは、エンティティーが使用可能になるまで待機します。エンティティーがキュー内にある場合、サーバーはエンティティーを付けて即時に応答を返します。エンティティーがない場合、サーバーは、エンティティーが使用可能になるか、または要求がタイムアウトになるまでキューで待機します。

すべての区画 (n 個) にデプロイされる照会キューのエンティティーを取得する方法の例を以下に示します。

1. QueryQueue.getNextEntity または QueryQueue.getNextEntities メソッドが呼び出されると、クライアントは 0 から n-1 の中からランダムに区画番号を選出します。
2. クライアントは照合要求を、そのランダムに選出した区画に送信します。
   - エンティティーが使用可能な場合は、エンティティーを返すことで、QueryQueue.getNextEntity または QueryQueue.getNextEntities メソッドは終了します。
   - エンティティーが使用不可で、かつそれがアクセスされていない最後の区画ではない場合、クライアントは照合要求を次の区画に送信します。
   - エンティティーが使用不可で、かつそれがアクセスされていない最後の区画だった場合、クライアントは代わりにピン要求を送信します。
   - 最後の区画に送信されたピン要求がタイムアウトになり、まだ使用可能なデータが存在しない場合、クライアントは、最後の試みとして、照合要求をもう 1 回すべての区画に順番に送信します。結果、以前の区画に使用可能なエンティティーがあれば、クライアントはそれを取得できます。

サブセット・エンティティーおよび非エンティティーのサポート

エンティティー・マネージャーに QueryQueue オブジェクトを作成するメソッドは、次のとおりです。

```
public QueryQueue createQueryQueue(String qlString, Class entityClass);
```

照会キュー内の結果は、メソッドの 2 番目のパラメーターで定義されたオブジェクトである Class entityClass に射影されます。

このパラメーターが指定された場合、クラスには、照会ストリングで指定されたものと同じエンティティー名が必要です。これは、エンティティーをサブセット・エンティティーに射影する場合に便利です。エンティティー・クラスにヌル値が使用された場合は、結果には何も射影されません。マップに保管される値は、エンティティー・タプル・フォーマットになります。

クライアント・サイドのキー競合

分散 eXtreme Scale 環境の場合、ペシミスティック・ロック・モードを使用する eXtreme Scale マップでのみ照会キューがサポートされます。したがって、クライアント・サイドにニア・キャッシュは存在しません。しかし、クライアントはトランザクション・マップ内にデータ (キーと値) を保持している可能性があります。このため、サーバーから取得されたエンティティーが、既にトランザクション・マップ内にあるエントリーと同じキーを共有していた場合、キー競合につながる可能性があります。

キー競合が発生すると、eXtreme Scale クライアント・ランタイムは、次の規則に従って、例外をスローするか、またはサイレントにデータをオーバーライドします。

1. 競合したキーが、照会キューに関連付けられたエンティティー照会で指定されたエンティティーのキーだった場合は、例外がスローされます。この場合、トランザクションはロールバックされ、このエンティティー・キーに対する U ロックはサーバー・サイドで解除されます。
2. そうでない場合、競合したキーがエンティティー・アソシエーションのキーであれば、トランザクション・マップ内のデータは警告なしでオーバーライドされます。

キー競合は、トランザクション・マップ内にデータが存在する場合のみ発生します。すなわち、それが発生するのは、既にダーティーな (新規データが挿入されたか、データが更新された) トランザクション内で getNextEntity または getNextEntities 呼び出しが呼び出されたときに限られます。アプリケーションでキー競合を発生させないようにするには、常にダーティーでないトランザクション内で getNextEntity または getNextEntities を呼び出す必要があります。

クライアント障害

クライアントは、getNextEntity または getNextEntities 要求をサーバーに送信した後、以下のような理由で失敗することがあります。

1. クライアントが要求をサーバーに送信してからダウンする。
2. クライアントが 1 つ以上のエンティティーをサーバーから取得した後でダウンする。

最初のケースでは、サーバーは応答をクライアントに送信しようとするときに、クライアントのダウンをディスカバーします。 2 番目のケースでは、クライアントが 1 つ以上のエンティティーをサーバーから取得すると、それらのエンティティーに X ロックがかけられます。クライアントがダウンすると、トランザクションは最終的にタイムアウトになり、X ロックは解放されます。

ORDER BY 文節を使用する照会

通常、照会キューでは ORDER BY 文節が守られません。照会キューから getNextEntity または getNextEntities を呼び出すと、エンティティーが順序どおりに返される保証はありません。その理由は、区画間でエンティティーを正しい順序にすることができないためです。照会キューがすべての区画にデプロイされるケースでは、getNextEntity または getNextEntities 呼び出しが実行されると、要求を処理する区画がランダムに選出されます。このため、順序は保証されません。

照会キューが単一区画にデプロイされる場合は、ORDER BY が守られます。

詳しくは、 494 ページの『EntityManager 照会 API』を参照してください。

トランザクションごとの 1 回の呼び出し

各 QueryQueue.getNextEntity 呼び出しまたは QueryQueue.getNextEntities 呼び出しは、1 つのランダム区画から一致したエンティティーを取得します。 アプリケーションは 1 つのトランザクションで QueryQueue.getNextEntity または QueryQueue.getNextEntities を 1 回だけ呼び出さなければなりません。 そうでなければ、eXtreme Scale は複数の区画からエンティティーをタッチすることになり、コミット時に例外がスローされます。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

EntityTransaction インターフェース: Java

EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

目的

トランザクションを区別するには、エンティティー・マネージャー・インスタンスに関連付けられた EntityTransaction インターフェースを使用できます。エンティティー・マネージャーの EntityTransaction インスタンスを取得するには、EntityManager.getTransaction メソッドを使用します。各 EntityManager インスタンスおよび EntityTransaction インスタンスは、Session に関連付けられます。トランザクションは、EntityTransaction か Session のいずれかを使用して区別できます。EntityTransaction インターフェースのメソッドには、チェック例外はありません。タイプ PersistenceException またはそのサブクラスの実行時例外のみが発生します。

EntityTransaction インターフェースに関して詳しくは、API 資料を参照してください。

関連概念:

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

Java 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』
eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区

画にハッシュすることができます。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置

同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

このタスクについて

同じマップ・セット内にマップを定義することで、単一の区画にデータを簡単に保管できます。ある区画に保管されたデータは、他のマップまたは同じマップ内に関連キャッシュ・エントリーのキーを保管することで、その同じ区画内の関連データを参照できます。 PartitionableKey ミックスイン・インターフェースまたは DataGrid API を使用して、キャッシュ・キーのネイティブ・キー・ルーティングをバイパスします。データは参照データとして保管することもでき、その場合、データは、区画に分割されるのではなく、各区画に複製されます。

固定区画ルーティングを使用した場合は、データは、キーのハッシュ・コードに基づいて、適切な区画にルーティングされます。データを同じ区画内に配置するために、WebSphere eXtreme Scale には、以下の方法が用意されています。

手順

1. PartitionableKey インターフェースを実装して、複数のマップ内の関連データを同じ区画に配置します。 PartitionableKey ミックスイン・インターフェースは、カスタム・キー・クラス用に使用されます。区画ルーティングに使用するキーは、キーに埋め込まれ、PartitionableKey.ibmGetPartition() メソッドによって返されます。詳しくは、 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』を参照してください。

   ParititonableKey インターフェースが定義されていないネイティブに区画に分割されたデータである参照を手動で複製します。

2. Java .NET @PartitionKey 注釈を実装して、eXtreme Data Format (XDF) で構成されたマップで使用するカスタム・キー・クラス内の 1 つ以上の属性を識別します。 エンタープライズ・データ・グリッドを使用している場合は、Java と .NET の両方が同じデータ・グリッド・オブジェクトにアクセスできるようにするために、XDF を使用可能にする必要があります。そのため、

Partitionkey 注釈は ParittionableKey インターフェースの代替手段となり、eXtreme Scale .NET Framework クライアントとのインターオペラビリティーを可能にします。

3. データ・アクセス API を使用し、EntityManager API を実装して関連データを管理します。 EntityManager API は、制約されたツリー関係を作成することで、区画ルーティングを強制します。この関係では、すべてのエントリーはツリーのルートへのパスを提供する必要があります。ルート・キーが区画ルーティングに使用され、各関連キーに埋め込まれます。

   schemaRoot 構成オプションを使用して、制約されたツリー・スキーマの 1 つのルートを指定します。詳しくは、 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』を参照してください。

例

データは、DataGrid API を使用して特定の区画にルーティングできます。これにより、従来のキー・ルーティングでは機能しない参照データなどの拡張パターンを保管することが可能になります。DataGrid API は、例えば、各区画に参照データを保管する場合などに役に立ち、区画に分割された大規模データ・セットで検索を常に連結できます。

以下の例では、データ・グリッド内のカスタマーに 1 つ以上のアドレスが設定されています。ただし、1 つのアドレスには 1 人のカスタマーしか設定されず、1 つのアドレスには 1 つの国が設定されます。

```
CustomerKey <-->  AddressKey
Address ->  CountryKey
```

Customer マップ内の CustomerKey は、Address マップ内の AddressKey と双方向の 1 対多の関係になっています。AddressKey は PartitionableKey インターフェースを実装することができ、その中に CustomerKey が埋め込まれ、ibmGetParittion() メソッドで CustomerKey が返されます。あるいは、XDF が使用可能になっている場合は、AddressKey 内の埋め込まれた CustomerKey フィールドに @PartitionKey 注釈を付けることもできます。

CountryKey を Address 値に埋め込むことができ、DataGrid API またはローダーを使用して CountryKey および Country 値を各区画に保管できます。これにより、デフォルトのキー・ベース・ルーティングをオーバーライドできます。

関連概念:

Java 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』
eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区画にハッシュすることができます。

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポ

ートされます。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング: Java

eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区画にハッシュすることができます。

PartitionableKey インターフェースは、複数のマップが存在し、かつコミットしたデータが関連付けられ、したがって同じ区画に配置されなければならないような状況で使用することができます。WebSphere eXtreme Scale は、複数のマップ・トランザクションが複数の区画にまたがる場合は、これらのトランザクションがコミットさ

れないようにするため、2 フェーズ・コミットをサポートしません。 同じマップ・セット内の異なるマップにあるキーについて PartitionableKey が同じ区画にハッシュする場合は、トランザクションをまとめてコミットすることができます。

また、キーのグループを同じ区画に配置する必要があるが、必ずしも単一トランザクションのときでない場合にも PartitionableKey インターフェースを使用することができます。ロケーション、部門、ドメイン・タイプ、またはその他のタイプの ID に基づいてキーをハッシュする必要がある場合は、子キーに親 PartitionableKey を与えることができます。

例えば、従業員はその所属する部門と同じ区画にハッシュする必要があります。各従業員キーは部門マップに属する PartitionableKey オブジェクトを持ちます。そうすると、従業員と部門の両方が同じ区画にハッシュされます。

PartitionableKey インターフェースには ibmGetPartition というメソッドが 1 つあります。このメソッドから戻されたオブジェクトは hashCode メソッドを実装する必要があります。代替 hashCode を使用したために戻された結果は区画のキーを経路指定するために使用されます。

例

次のキーの例では、PartitionableKey インターフェースと hashCode メソッドを使用して、既存のキーを複製し、複製されたキーを同じ区画にルーティングする方法が示されています。

```
package com.ibm.websphere.cjtester;

import java.io.Serializable;

import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.PartitionableKey;

public class RoutableKey implements Serializable, Cloneable, PartitionableKey {
    private static final long serialVersionUID = 1L;

    // The data that makes up the actual data object key.
    public final String realKey;

    // The key of the data object you want to use for routing.
    // This is typically the key of a parent object.
    public final Object keyToRouteWith;

    public RoutableKey(String realKey, Object keyToRouteWith) {
        super();
        this.realKey = realKey;
        this.keyToRouteWith = keyToRouteWith;
    }

    /**
     * Return the hashcode of the key we are using for routing.
     * If not supplied, eXtreme Scale will use the hashCode of THIS key.
     */
    public Object ibmGetPartition() {
        return new Integer(keyToRouteWith.hashCode());
    }

    @Override
    public RoutableKey clone() throws CloneNotSupportedException {
        return (RoutableKey) super.clone();
    }

    @Override
    public int hashCode() {
        final int prime = 31;
        int result = 1;
        result = prime * result + ((keyToRouteWith == null) ? 0 : keyToRouteWith.hashCode());
        result = prime * result + ((realKey == null) ? 0 : realKey.hashCode());
        return result;
```

```
    }

    @Override
    public boolean equals(Object obj) {
        if (this == obj) return true;
        if (obj == null) return false;
        if (getClass() != obj.getClass()) return false;
        RoutableKey other = (RoutableKey) obj;
        if (keyToRouteWith == null) {
            if (other.keyToRouteWith != null) return false;
        } else if (!keyToRouteWith.equals(other.keyToRouteWith)) return false;
        if (realKey == null) {
            if (other.realKey != null) return false;
        } else if (!realKey.equals(other.realKey)) return false;
        return true;
    }
}
```

関連タスク:

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 828 ページの『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

Java クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義

Java

異なる Java クラス間でのデータ・グリッド内のオブジェクトの共有を使用可能にするには、ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用します。2 つのクラスを相関付けると、クラス名が異なる場合でも、フィールドおよびフィールド・タイプがクラス間で一致するようになります。

始める前に

- IBM eXtremeIO が構成されている必要があります。詳しくは、 132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。
- ObjectGrid 記述子 XML ファイルの copyMode 属性が COPY_TO_BYTES に設定されている必要があります。詳しくは、 134 ページの『eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成』を参照してください。
- 異なるアプリケーション・スコープ (ランタイム) 内で 2 つの異なるクラスを実行している場合に、ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用します。2 つの異なるアプリケーション・ランタイムで、データ・グリッド内に保管されたデータを共有して再使用できます。結果として、2 つの異なるメタデータ記述子を保守する必要がなくなります。クラスが同じアプリケーション・スコープ (ランタイム) 内にある場合は、2 つのクラスを相関付けると、アプリケーション・プロバイダーまたは開発の観点から、混乱が生じる可能性があります。

このタスクについて

ClassAlias および FieldAlias 注釈について詳しくは、 139 ページの『ClassAlias および FieldAlias 注釈』を参照してください。

手順

1. Java ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、2 つの異なる Java クラス間のオブジェクトを相関付けます。 以下の例のクラスでは、`@ClassAlias("ACME_Customer")` Java 注釈が指定されています。一部のフィールドには、`@FieldAlias("")` 注釈が設定されています。これらの両方のクラスに同じ ClassAlias 注釈と FieldAlias 定義が設定されているため、オブジェクトは XDF によって同じクラス・タイプ ID を使用して保守されます。これらのオブジェクトが GET 操作および PUT 操作時にシリアライズまたはデシリアライズされる際には、同じ XDF メタデータが使用されます。

```
@ClassAlias("ACME_Customer")
class Customer1 {
    @FieldAlias("Employee ID")
    int empId = -1;

    @FieldAlias("Department No.")
    int deptId = -1;

    @FieldAlias("Year Salary")
    float salary = 0;

    String sex = "M";

    int age = -1;

    String homeAddress = "";

    public Customer1(int empId, int deptId, float salary, String sex, int age, String homeAddress) {
        this.empId = empId;
        this.deptId = deptId;
        this.salary = salary;
        this.sex = sex;
        this.age = age;
        this.homeAddress = homeAddress;
    }
}
```

図 34. @ClassAlias および @FieldAlias 注釈が設定された Customer1 クラス

```
@ClassAlias("ACME_Customer")
   class Customer2 {
       @FieldAlias("Employee ID")
       int empId = -1;

       @FieldAlias("Department No.")
       int deptId = -1;

       @FieldAlias("Year Salary")
       float salary = 0;


       String sex = "M";

       int age = -1;

       String homeAddress = "";

       public Customer2(int empId, int deptId, float salary, String sex, int age, String homeAddress) {
           this.empId = empId;
           this.deptId = deptId;
           this.salary = salary;
           this.sex = sex;
           this.age = age;
           this.homeAddress = homeAddress;
       }

   }
```

図 35. @ClassAlias および @FieldAlias 注釈が設定された Customer2 クラス

2. オプション: クラス別名ディスカバリー・パスを指定することで、クラス別名を使用してクライアント・クラス・パスの同等のクラスと相関付けることができるようにします。 デシリアライゼーション・プロセスでクライアントの同等のクラスが見つからない場合に、ディスカバリー・パスを設定します。同じクラス別名を定義しているが、現在のクラス・ローダーでロードされない別のクラスがクライアントにある場合は、ディスカバリー・パスを設定します。

   - Java Java アプリケーションが、指定した ClassAlias 値に一致するクラスをアプリケーション・クラス・パスでスキャンしてロードできるようにします。

     アプリケーションの開始時に、`-Dwxs.classalias.discovery.path` Java 仮想マシン (JVM) 引数を指定します。ユーザー定義クラスで定義されたクラス別名に突き合わせるための、Java アーカイブ (JAR) ファイル、または Java クラスが含まれた特定のフォルダーのリストがスキャンされます。

     例えば、`-Dwxs.classalias.discovery.path=c:¥myApp¥lib¥customer1.jar; c:¥myApp¥lib¥customer2.jar;c:¥myApp¥classes` と指定した場合、スキャン操作は、指定されているすべての JAR ファイルおよびクラス・パス・フォルダーをスキャンして、使用可能なすべての Java クラスを検出します。クライアント・アプリケーション環境で最初に突き合わされる Javaクラスは、取得操作時にロードされるクラス別名に基づきます。

ClassAlias および FieldAlias 注釈:

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、クラス間でのデータ・グリッドのデータの共有を可能にします。 2 つの Java クラス間または Java クラスと .NET クラス間でデータを共有することができます。

2 つのクラスを同じ名前およびフィールドで定義した場合は、データ・グリッドのデータは自動的にクラス間で共有されます。例えば、Customer1 クラスが Java アプ

リケーションにあり、同じフィールドを持つ Customer1 クラスが .NET アプリケーションにある場合は、データはこれらのクラス間で共有されます。これは、クラス名がクラス修飾子も含み、クラス修飾子がまた Java でパッケージ名であり、C# で名前空間であることを仮定しています。名前空間とパッケージ名は一致するため、パッケージ名と名前空間は自動的に共有されます。次の例を参照してください。名前は両方とも大/小文字を区別しません。

```
Java:
package com.mycompany.app
public class SampleClass {
int field1;
String field2;
}

C#
namespace Com.MyCompany.App
public class SampleClass {
int field1;
string field2;
}
```

ただし、異なる名前を持つクラス間でデータを相関することもできます。データ・グリッドに保管するデータを異なるクラス名間で相関するには、ClassAlias または FieldAlias 注釈を使用します。

2 つの Java アプリケーション間: 異なる名前を持つ 2 つの異なるクラスを別々の Java アプリケーション環境で定義することができます。同じ ClassAlias アノテーションを持つクラスにマークを付けることによって、この 2 つのクラス間ですべてのフィールドおよびフィールド・タイプが突き合わされます。これらのクラスは、異なるクラス名を持っている場合でも、同じクラス・タイプ ID で相関されます。そのため、異なる Java アプリケーション・ランタイムでは、同じクラス・タイプ ID とメタデータがこれらのクラス間で再使用されます。

Java アプリケーションと .NET アプリケーション間: C# アプリケーション内で類似のアノテーションを使用して、C# クラスを Java クラスと相関させることができます。クラス C# に対して定義されている ClassAlias 属性およびフィールドが、同じ ClassAlias アノテーションを持つ Java クラスに突き合わされます。

関連タスク:

8.6+ 138 ページの『Java と .NET クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java と .NET クラス間でのデータ・グリッド・データの共有を使用可能にします。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

8.6+ 268 ページの『レッスン 2.3: エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの作成』
Java クライアントと .NET クライアントの両方が同じデータ・グリッドを更新できるエンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを作成するには、ご使用のクラスが互換性を持つようにする必要があります。入門用サンプル・アプリケーションでは、.NET サンプル・アプリケーションが Java デフォルトと一致する別名を持っています。

エンティティーおよびオブジェクトの取得 (Query API)

Java

WebSphere eXtreme Scale は、EntityManager API を使用したエンティティーの検索、および ObjectQuery API を使用した Java オブジェクトの検索用の柔軟な照会エンジンを提供します。

WebSphere eXtreme Scale の照会機能

eXtreme Scale 照会エンジンを使用すると、eXtreme Scale 照会言語を使用して、エンティティーまたはオブジェクト・ベースのスキーマで SELECT タイプの照会ができます。

この照会言語では、以下の機能が提供されます。

- 単一および多値結果
- 集約関数
- ソートおよびグループ化
- 結合
- 副照会を使用した条件式
- 名前付きおよび定位置パラメーター
- eXtreme Scale 索引の使用
- オブジェクト・ナビゲーションのパス式構文
- ページ編集

Query インターフェース

エンティティー照会の実行を制御する場合に、照会インターフェースを使用します。

EntityManager.createQuery(String) メソッドを使用して、Query を作成します。各照会インスタンスを、それが取り出された EntityManager インスタンスと共に複数回使用できます。

各照会の結果、1 つのエンティティーが生成されます。この場合、エンティティー・キーは、行 ID (型 long の) であり、エンティティー値には、SELECT 文節のフィールド結果が含まれています。各照会結果を、それ以降の照会で使用できます。

以下のメソッドは、com.ibm.websphere.objectgrid.em.Query インターフェースで使用できます。

public ObjectMap getResultMap()

getResultMap メソッドは SELECT 照会を実行し、結果を照会で指定した順序で ObjectMap オブジェクトに戻します。結果の ObjectMap は、現行のトランザクションに対してのみ有効です。

マップ・キーは、結果の数値であり、型 long で 1 から始まります。マップ値は、タイプ com.ibm.websphere.projector.Tuple であり、この場合、各属性および関連は、照会の select 文節内の順序位置に基づいて指定されます。このメソッドを使用して、マップ内に保管されている Tuple オブジェクトに対する EntityMetadata を取り出してください。

getResultMap メソッドは、複数の結果が存在する可能性がある場合に、照会結果のデータを取り出す、最も高速なメソッドです。結果のエンティティーの名前は、ObjectMap.getEntityMetadata() および EntityMetadata.getName() メソッドを使用して取り出すことができます。

例: 以下の照会では、2 つの行を返します。

```
String ql = SELECT e.name, e.id, d from Employee e join e.dept d WHERE d.number=5
 Query q = em.createQuery(ql);
 ObjectMap resultMap = q.getResultMap();
 long rowID = 1; // starts with index 1
 Tuple tResult = (Tuple) resultMap.get(new Long(rowID));
 while(tResult != null) {
     // The first attribute is name and has an attribute name of 1
     // But has an ordinal position of 0.
     String name = (String)tResult.getAttribute(0);
     Integer id = (String)tResult.getAttribute(1);

     // Dept is an association with a name of 3, but
     // an ordinal position of 0 since it's the first association.
     // The association is always a OneToOne relationship,
     // so there is only one key.
     Tuple deptKey = tResult.getAssociation(0,0);
     ...
     ++rowID;
     tResult = (Tuple) resultMap.get(new Long(rowID));

 }
```

public Iterator getResultIterator

getResultIterator メソッドは SELECT 照会を実行し、照会の結果を Iterator を使用して戻します。この場合、各結果は、Object (単一値照会の場合) または Object[] (複数値照会の場合) のいずれかです。Object[] 結果内の値は、照会順序で保管されます。結果の Iterator は、現行のトランザクションに対してのみ有効です。

このメソッドは、EntityManager コンテキスト内の照会結果を取り出す場合に推奨されます。オプションの setResultEntityName(String) メソッドを使用して、結果のエンティティーを指定し、以降の照会で使用できるようにすることができます。

例: 以下の照会では、2 つの行を返します。

```
String ql = SELECT e.name, e.id, e.dept from Employee e WHERE e.dept.number=5
 Query q = em.createQuery(ql);
 Iterator results = q.getResultIterator();
 while(results.hasNext()) {
     Object[] curEmp = (Object[]) results.next();
     String name = (String) curEmp[0];
     Integer id = (Integer) curEmp[1];
     Dept d = (Dept) curEmp[2];
     ...
 }
```

public Iterator getResultIterator(Class resultType)

getResultIterator(Class resultType) メソッドは、SELECT 照会を実行し、エンティティー Iterator を使用して照会結果を戻します。エンティティーの型は、resultType パラメーターによって決定されます。結果の Iterator は、現行のトランザクションに対してのみ有効です。

EntityManager API を使用して結果のエンティティーにアクセスする場合は、このメソッドを使用してください。

例: 以下の照会では、1 つの事業部について、全従業員と、従業員が所属する部門を給与順に返します。給与の高い順に 5 人の従業員を印刷してから、同じ作業セット内の 1 つの部門のみから、従業員の作業を選択する場合は、以下のコードを使用します。

```
String string_ql = "SELECT e.name, e.id, e.dept from Employee e WHERE
  e.dept.division='Manufacturing' ORDER BY e.salary DESC";
Query query1 = em.createQuery(string_ql);
query1.setResultEntityName("AllEmployees");
Iterator results1 = query1.getResultIterator(EmployeeResult.class);
int curEmployee = 0;
System.out.println("Highest paid employees");
while (results1.hasNext() && curEmployee++ < 5) {
 EmployeeResult curEmp = (EmployeeResult) results1.next();
 System.out.println(curEmp);
 // Remove the employee from the resultset.
 em.remove(curEmp);
}

// Flush the changes to the result map.
em.flush();

// Run a query against the local working set without the employees we
// removed
String string_q2 = "SELECT e.name, e.id, e.dept from AllEmployees e
  WHERE e.dept.name='Hardware'";
Query query2 = em.createQuery(string_q2);
Iterator results2 = query2.getResultIterator(EmployeeResult.class);
System.out.println("Subset list of Employees");
while (results2.hasNext()) {
 EmployeeResult curEmp = (EmployeeResult) results2.next();
 System.out.println(curEmp);
}
```

public Object getSingleResult

getSingleResult メソッドは単一の結果を戻す SELECT 照会を実行します。

SELECT 文節に複数のフィールドが定義されている場合には、結果はオブジェクト配列となります。この場合、配列内の各エレメントは、照会の SELECT 文節内の順序位置に基づきます。

```
String ql = SELECT e from Employee e WHERE e.id=100"
 Employee e = em.createQuery(ql).getSingleResult();

 String ql = SELECT e.name, e.dept from Employee e WHERE e.id=100"
 Object[] empData = em.createQuery(ql).getSingleResult();
 String empName= (String) empData[0];
 Department empDept = (Department) empData[1];
```

public Query setResultEntityName(String entityName)

setResultEntityName(String entityName) メソッドは照会結果エンティティーの名前を指定します。

getResultIterator または getResultMap メソッドが呼び出されるたびに、ObjectMap を備えたエンティティーが動的に作成されて照会の結果を保持します。エンティティーが指定されていないか、またはヌルである場合、エンティティーおよび ObjectMap 名は自動的に生成されます。

すべての照会結果が、トランザクションの存続期間中に使用可能であるため、照会名は、単一トランザクション内で再使用することはできません。

public Query setPartition(int partitionId)

照会の経路指定先に区画を設定します。

このメソッドは、照会内のマップが区画化されており、エンティティー・マネージャーに、単一スキーマのルート・エンティティー区画に対するアフィニティーがない場合に、必要になります。

PartitionManager インターフェースを使用して、指定されたエンティティーのパッキング・マップに対する区画の数を決定してください。

以下の表に、照会インターフェースを通して使用可能なその他のメソッドの概要を示します。

表 12. その他のメソッド

メソッド	結果
public Query setMaxResults(int maxResult)	取り出す結果の最大数を設定します。
public Query setFirstResult(int startPosition)	取り出す最初の結果の位置を設定します。
public Query setParameter(String name, Object value)	引数を、名前付きパラメーターにバインドします。
public Query setParameter(int position, Object value)	引数を、定位置パラメーターにバインドします。
public Query setFlushMode(FlushModeType flushMode)	照会が実行されるときに使用されるフラッシュ・モード・タイプを設定し、EntityManager に対して設定されたフラッシュ・モード・タイプをオーバーライドします。

eXtreme Scale 照会のエレメント

eXtreme Scale 照会エンジンを使用すると、eXtreme Scale キャッシュの検索について単一の照会言語を使用することができます。この照会言語は、ObjectMap オブジェクトや Entity オブジェクトに保管されている Java オブジェクトの照会が可能です。以下の構文を使用して照会ストリングを作成します。

eXtreme Scale 照会は、以下のエレメントを含むストリングです。

- 返すオブジェクトまたは値を指定する SELECT 文節。
- オブジェクト集合に名前を付ける FROM 文節。
- 集合に対する検索述部を含むオプションの WHERE 文節。
- オプションの GROUP BY および HAVING 文節 (eXtreme Scale 照会の集約関数を参照)。
- 結果の集合の順序付けを指定するオプションの ORDER BY 文節。

Java オブジェクト集合は、照会の FROM 文節で名前が使用されることで識別されます。

照会言語の各エレメントについては、以下の関連トピックでより詳しく説明します。

- 507 ページの『ObjectGrid 照会の Backus-Naur Form』 構文
- 498 ページの『eXtreme Scale 照会のための参照』

以下のトピックでは、Query API の使用方法について説明しています。

- 494 ページの『EntityManager 照会 API』
- 489 ページの『ObjectQuery API の使用』

複数時間帯でのデータ照会: Java

分散シナリオでは、実際に照会がサーバー上で実行されます。カレンダー、java.util.Date、およびタイム・スタンプの述部タイプを使用してデータを照会しているとき、照会で指定される日時値は、サーバーのローカル時間帯に基づいています。

すべてのクライアントおよびサーバーが同じ時間帯で実行されている単一時間帯のシステムでは、カレンダー、java.util.Date、およびタイム・スタンプの述部タイプに関する問題を考慮する必要はありません。しかし、クライアントとサーバーが異なる時間帯にある場合、照会で指定される日時値はサーバーの時間帯に基づき、要求しないデータがクライアントに戻される場合があります。 サーバーの時間帯を知らなければ、指定される日時値は無意味なものになってしまいます。そのため、指定される日時値は、ターゲットの時間帯とサーバーの時間帯の時間帯オフセットの差を考慮しなければなりません。

時間帯オフセット

例えば、クライアントが [GMT-0] の時間帯にあり、サーバーが [GMT-6] の時間帯にあるとします。 サーバーの時間帯は、クライアントよりも 6 時間遅れています。 クライアントは、以下の照会を実行しようとします。

```
SELECT e FROM Employee e WHERE e.birthDate='1999-12-31 06:00:00'
```

エンティティー Employee にタイプ java.util.Date の birthDate 属性があると想定した場合、クライアントは [GMT-0] 時間帯にあり、自分の時間帯に基づいて「1999-12-31 06:00:00 [GMT-0]」の birthDate 値を持つ Employee を取得しようとします。

照会はサーバーで実行され、その照会エンジンで使用される birthDate 値は「1999-12-31 06:00:00 [GMT-6]」で、「1999-12-31 12:00:00 [GMT-0]」に相当します。 「1999-12-31 12:00:00 [GMT-0]」と等しい birthDate 値を持つ Employee がクライアントに戻されます。 したがって、クライアントは要求した birthDate 値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-0]」を持つ Employee を取得しません。

今説明した問題は、クライアントとサーバー間の時間帯の差のために発生します。この問題を解決する 1 つの方法は、クライアントとサーバー間の時間帯オフセットを計算し、照会のターゲット日時値にその時間帯オフセットを適用することです。前述の照会の例で、時間帯オフセットは -6 時間なので、クライアントが birthDate 値「12-31 06:00:00 [GMT-0]」を持つ Employee の取得しようとする場合、調整された birthDate の述部は「birthDate='1999-12-31 00:00:00'」にしなければなりません。調整された birthDate 値を使用すると、サーバーは、ターゲット値「12-31 06:00:00 [GMT-0]」に相当する「1999-12-31 00:00:00 [GMT-6]」を使用し、要求された Employee がクライアントに戻されます。

複数時間帯での分散デプロイメント

分散 eXtreme Scale グリッドがさまざまな時間帯にある複数の ObjectGrid サーバーにデプロイされている場合、時間帯オフセットを調整する方法は機能しません。クライアントは、どのサーバーがその照会を実行するのかを知らないため、使用する時間帯オフセットを決められないからです。 唯一の解決策は、GMT 時間帯に基づく日時値の使用を表す、JDBC 日時エスケープ形式のサフィックス「Z」(大/小文字の区別なし) を使用することです。 サフィックス「Z」(大/小文字の区別なし) は、GMT 時間帯に基づく日時値を使用することを指し示します。 サフィックス「Z」を使用しないと、ローカル時間帯に基づく日時値が、照会を実行するプロセスで使用されます。

以下の照会は前述の例と同じですが、代わりにサフィックス「Z」を使用しています。

```
SELECT e FROM Employee e WHERE e.birthDate='1999-12-31 06:00:00Z'
```

照会は、birthDate 値「1999-12-31 06:00:00」を持つ Employee を検索するはずです。サフィックス「Z」は、指定された birthDate 値が GMT 時間帯に基づくということを示すため、照会エンジンは、基準値の突き合わせに GMT 時間帯に基づいた birthDate 値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-0]」を使用します。 この GMT に基づいた birthDate 値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-0]」に等しい birthDate 属性値を持つ Employee が、照会結果に含まれます。 どのような照会でも、JDBC 日時エスケープ形式のサフィックス「Z」を使用することは、アプリケーションの時間帯の問題をなくすために重要です。 この方法を使用しなければ、日時値はサーバーの時間帯に基づき、クライアントとサーバーが異なる時間帯にある場合は、クライアントの観点からは無意味なものになります。

詳しくは、 370 ページの『異なる時間帯のデータ』を参照してください。

異なる時間帯のデータ: Java

カレンダー属性、java.util.Date 属性、およびタイム・スタンプ属性でデータを ObjectGrid に挿入する場合、特にさまざまな時間帯の複数のサーバーにデプロイするときには、これらの日時属性が同じ時間帯を基に作成されるようにする必要があります。同じ時間帯を基にした日時オブジェクトを使用すれば、アプリケーションの時間帯の問題はなくなり、データはカレンダー述部、java.util.Date 述部、タイム・スタンプ述部によって照会が可能です。

日時オブジェクトの作成時に明示的に時間帯を指定しないと、Java はローカル時間帯を使用し、クライアントとサーバーで日時値が不整合になる場合があります。

分散デプロイメントの例を考えてみます。client1 は時間帯 [GMT-0] にあり、client2 は [GMT-6] にあります。どちらも java.util.Date オブジェクトを値「1999-12-31 06:00:00」で作ろうとしています。次に、client1 は java.util.Date オブジェクトを値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-0]」で作成し、client2 は java.util.Date オブジェクトを値「1999-12-31 06:00:00 [GMT-6]」で作成します。 時間帯が異なるため、両方の java.util.Date オブジェクトは等しくありません。 異なる時間帯のサーバーに存在する区画にデータをプリロードする際に、ローカル時間帯を使用して日時オブジェクトを作成していると同じような問題が起こります。

前述の問題を避けるため、カレンダー・オブジェクト、java.util.Date オブジェクト、およびタイム・スタンプ・オブジェクトを作成するための基本の時間帯として [GMT-0] などの時間帯をアプリケーションは選択することができます。

ObjectQuery API の使用: Java

ObjectQuery API は、ObjectMap API を使用して保管された ObjectGrid 内のデータを照会するためのメソッドを提供します。スキーマが ObjectGrid インスタンスで定義される場合、ObjectQuery API を使用して、オブジェクト・マップに保管されている異種のオブジェクトに対して照会を作成し、実行することができます。

照会とオブジェクト・マップ

ObjectMap API を使用して保管されたオブジェクトに対して、拡張された照会機能を使用できます。 これらの照会によって、非キー属性を使用してオブジェクトを取り出すことや、照会条件と一致するすべてのデータに、sum、avg、min、max などの単純な集計を実行することができます。アプリケーションは、Session.createObjectQuery メソッドを使用して照会を構成できます。このメソッドは、ObjectQuery オブジェクトを戻します。このオブジェクトはその後、照会結果を取得するための問い合わせを受けることができます。また、照会オブジェクトを使用すれば、照会を実行する前にカスタマイズすることも可能です。照会結果を戻す任意のメソッドが呼び出されると、照会は自動的に実行されます。

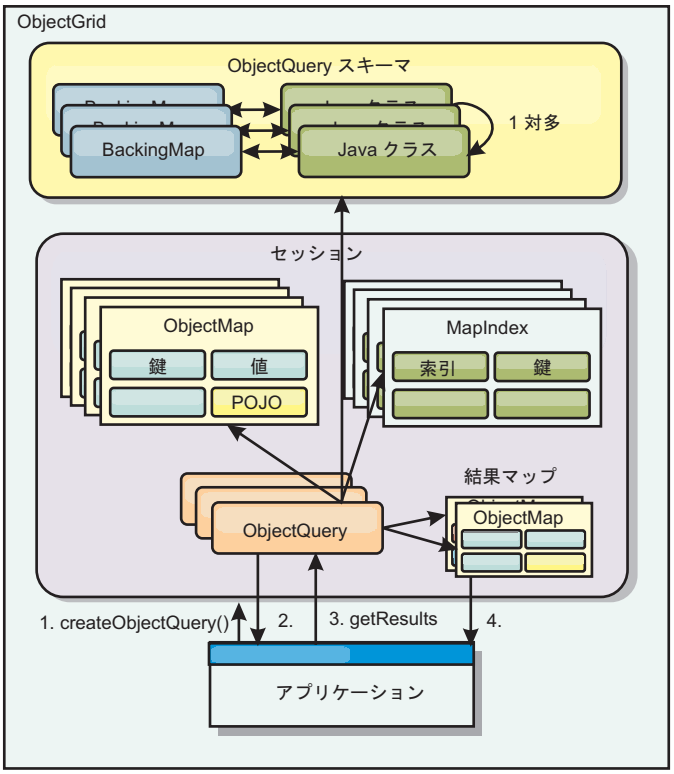


図 36. ObjectGrid オブジェクト・マップと照会との対話、および、スキーマがどのようにクラスに対して定義され、ObjectGrid マップと関連付けられるか

ObjectMap スキーマの定義

オブジェクト・マップは、さまざまな形式でオブジェクトを保管するために使用されるため、多くの場合、形式を認識しません。スキーマは、データのフォーマットを定義する ObjectGrid で定義される必要があります。スキーマは、以下のもので構成されます。

- ObjectMap に保管されているオブジェクトのタイプ
- ObjectMap 間のリレーションシップ
- それぞれの照会がオブジェクト (フィールドまたはプロパティー・メソッド) 内のデータ属性へのアクセスに使用するメソッド
- オブジェクト内の 1 次キー属性名。

詳細については、『ObjectQuery スキーマの構成』を参照してください。

スキーマをプログラマチックに作成する例、または ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用する例については、4 ページの『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 3』を参照してください。

ObjectQuery API を使用したオブジェクトの照会

ObjectQuery インターフェースを使用して、非エンティティー・オブジェクト (ObjectGrid ObjectMap に直接保管された異種のオブジェクト) の照会を行うことができます。ObjectQuery API には、索引メカニズムを直接使用することなく、ObjectMap オブジェクトを簡単に検索する方法があります。

ObjectQuery から結果を取得するには、getResultIterator と getResultMap の 2 つのメソッドがあります。

getResultIterator を使用した照会結果の取得

照会結果とは、基本的に属性のリストのことです。照会で、y=z の場合に X から a,b,c を選択するとします。この照会では、a、b、および c を含む行のリストが戻されます。このリストは実際に、トランザクション有効範囲マップに保管されます。つまり、人工キーを各行と関連付け、各行で増加される整数を使用する必要があります。このマップは、ObjectQuery.getResultMap() メソッドを使用して取得します。以下のようなコードを使用して、各行のエレメントにアクセスすることができます。

```
ObjectQuery q = session.createQuery(
    "select c.id, c.firstName, c.surname from Customer c where c.surname=?1");

  q.setParameter(1, "Claus");

  Iterator iter = q.getResultIterator();
  while(iter.hasNext())
  {
    Object[] row = (Object[])iter.next();
    System.out.println("Found a Claus with id "
      + row[objectgrid: 0 ] + ", firstName: "
      + row[objectgrid: 1 ] + ", surname: "
      + row[objectgrid: 2 ]);
  }
```

getResultMap を使用した照会結果の取得

また、照会結果は、結果マップを直接使用して取得することもできます。以下の例は、一致するカスタマーの特定部分を取得する照会、および、結果行へのアクセス方法を示しています。 ObjectQuery オブジェクトを使用してデータにアクセスする場合は、生成される long 行 ID は非表示になりますので注意してください。その long 行は、ObjectMap を使用して結果にアクセスした場合にのみ表示されます。

トランザクションが完了すると、このマップは消去されます。また、マップは使用されたセッション、つまり通常はそのマップを作成したスレッドに対してのみ可視となります。マップは、行 ID を表す Long タイプのキーを使用します。マップに保管される値は、Object タイプか Object[] タイプのいずれかです。 Object[] タイプの場合、各エレメントは、選択された照会の文節にあるエレメントのタイプと同じになります。

```
ObjectQuery q = em.createQuery(
      "select c.id, c.firstName, c.surname from Customer c where c.surname=?1");
  q.setParameter(1, "Claus");
  ObjectMap qmap = q.getResultMap();
  for(long rowId = 0; true; ++rowId)
  {
    Object[] row = (Object[]) qmap.get(new Long(rowId));
    if(row == null) break;
    System.out.println(" I Found a Claus with id " + row[0]
      + ", firstName: " + row[1]
      + ", surname: " + row[2]);
  }
```

ObjectQuery の使用例については、1 ページの『チュートリアル: ローカルのメモリー内データ・グリッドの照会』を参照してください。

ObjectQuery スキーマの構成: Java

ObjectQuery は、スキーマまたは形状情報によってセマンティック検査を実行し、パス式を評価します。このセクションでは、スキーマを XML で、またはプログラマチックに定義する方法について説明します。

スキーマの定義

ObjectMap スキーマの定義は、ObjectGrid デプロイメント記述子 XML で、または標準の eXtreme Scale 構成手法を用いてプログラマチックに行います。スキーマの作成方法の例については、6 ページの『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 4』を参照してください。

スキーマ情報は Plain Old Java Object (POJO) を記述します。つまり、POJO を構成している属性、存在する属性のタイプ、属性が 1 次キー・フィールドなのか、単一値のリレーションシップまたは多値のリレーションシップなのか、それとも双方向リレーションシップなのかを記述します。ObjectQuery は、スキーマ情報に基づいてフィールド・アクセスまたはプロパティー・アクセスを使用します。

照会可能属性

スキーマが ObjectGrid で定義されていると、そのスキーマ内のオブジェクトはリフレクションを使用してイントロスペクトされ、照会に使用できる属性が決定されます。以下の属性タイプを照会できます。

- ラッパーを含む Java プリミティブ型
- java.lang.String
- java.math.BigInteger
- java.math.BigDecimal
- java.util.Date
- java.sql.Date
- java.sql.Time
- java.sql.Timestamp
- java.util.Calendar
- byte[]
- java.lang.Byte[]
- char[]
- java.lang.Character[]
- J2SE 列挙型

上記以外の組み込みのシリアライズ可能な型も、照会結果に組み込むことができますが、照会の WHERE 文節または FROM 文節に組み込むことはできません。シリアライズ可能属性はナビゲート可能ではありません。

型がシリアライズ可能ではない場合、フィールドまたはプロパティーが静的な場合、またはフィールドが一時的なものである場合は、属性型をスキーマから除外で

きます。すべてのマップ・オブジェクトはシリアライズ可能でなければならないため、ObjectGrid は、オブジェクトからの永続可能な属性のみを含みます。それ以外のオブジェクトは無視されます。

フィールド属性

フィールドを使用してオブジェクトにアクセスするようスキーマが構成されている場合、すべてのシリアライズ可能な非一時的フィールドは自動的にスキーマに組み込まれます。照会内のフィールド属性を選択するには、クラス定義に記述されているとおりのフィールド ID 名を使用します。

スキーマには、すべての public、private、protected、および package protected フィールドが組み込まれます。

プロパティー属性

プロパティーを使用してオブジェクトにアクセスするようスキーマが構成されている場合、JavaBeans プロパティー命名規則に従うすべてのシリアライズ可能メソッドが自動的にスキーマに組み込まれます。照会用にプロパティー属性を選択するには、JavaBeans スタイルのプロパティー命名規則を使用します。

スキーマには、すべての public、private、protected および package protected プロパティーが組み込まれます。

以下のクラスでは、名前、誕生日、および有効性を示す属性がスキーマに追加されます。

```
public class Person {
  public String getName(){}
  private java.util.Date getBirthday(){}
  boolean isValid(){}
  public NonSerializableObject getData(){}
}
```

COPY_ON_WRITE の CopyMode を使用する場合、照会スキーマは、常にプロパティー・ベースのアクセスを使用しなければなりません。COPY_ON_WRITE では、マップからオブジェクトが取得される場合は常にプロキシー・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトにアクセスできるのはプロパティー・メソッドを使用する場合に限られます。そうしない場合、各照会結果がヌルに設定されます。

関係

各リレーションシップは、スキーマ構成に明示的に定義する必要があります。リレーションシップの基数は、属性の型によって自動的に決定されます。属性が java.util.Collection インターフェースを実装している場合、リレーションシップは 1 対多または多対多のいずれかのリレーションシップです。

エンティティー照会とは異なり、キャッシュされている他のオブジェクトを参照している属性は、そのオブジェクトへの直接参照を保管することはできません。他のオブジェクトへの参照は、そのオブジェクトを包含するオブジェクトのデータの一部としてシリアライズされます。代わりに、関連するオブジェクトへのキーを保管してください。

例えば、Customer と Order の間に、以下のような多対 1 のリレーションシップがあるとします。

誤。オブジェクト参照を保管しています。

```
public class Customer {
  String customerId;
  Collection<Order> orders;
}

public class Order {
  String orderId;
  Customer customer;
}
```

正。関連オブジェクトへのキー。

```
public class Customer {
  String customerId;
  Collection<String> orders;
}

public class Order {
  String orderId;
  String customer;
}
```

2 つのマップ・オブジェクトを 1 つに結合する照会を実行すると、キーは自動的に大きくなります。例えば、以下の照会は Customer オブジェクトを返します。

```
SELECT c FROM Order o JOIN Customer c WHERE orderId=5
```

索引の使用

ObjectGrid は、索引プラグインを使用して、マップに索引を追加します。照会エンジンは、com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex 型のスキーマ・マップ・エレメントで定義されている索引を自動的に組み込み、rangeIndex プロパティーは true に設定されます。索引の型が HashIndex ではなく、rangeIndex プロパティーが true に設定されていない場合、照会はその索引を無視します。スキーマに索引を追加する方法の例については、3 ページの『ObjectQuery チュートリアル - ステップ 2』 を参照してください。

EntityManager 照会 API: Java

EntityManager API は、EntityManager API を使用して保管された ObjectGrid 内のデータを照会するためのメソッドを提供します。EntityManager 照会 API は、eXtreme Scale に定義された 1 つ以上のエンティティーに関する照会の作成と実行に使用されます。

エンティティーの照会と ObjectMap

eXtreme Scale に保管されたエンティティーの拡張照会機能が WebSphere Extended Deployment v6.1 で導入されました。これらの照会によって、非キー属性を使用してオブジェクトを取り出すことや、照会条件と一致するすべてのデータに、合計、平均、最小、最大などの単純な集計を実行することができます。アプリケーションは、EntityManager.createQuery API を使用して照会を構成します。これにより、Query オブジェクトを戻した後、照会結果を取得するための問い合わせを受けるこ

とができます。また、照会オブジェクトを使用すれば、照会を実行する前にカスタマイズすることも可能です。照会結果を戻す任意のメソッドが呼び出されると、照会は自動的に実行されます。

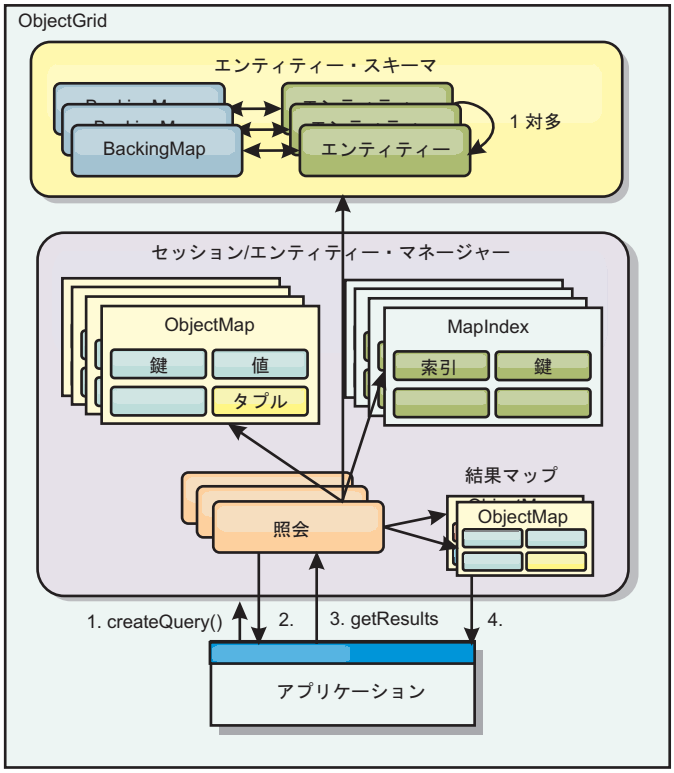


図 37. ObjectGrid オブジェクト・マップと照会との対話、および、エンティティー・スキーマがどのように定義され、ObjectGrid マップと関連付けられるか。

getResultIterator メソッドを使用した照会結果の取得

照会結果は、属性のリストです。照会で、y=z の場合に X から a,b,c を選択すると、a、b、および c を含む行のリストが戻されます。このリストは、トランザクション有効範囲マップに保管されます。これはつまり、人工キーが各行と関連付けられており、各行で増加される整数を使用する必要があることを意味します。このマップは、Query.getResultMap メソッドを使用して取得されます。 マップには、関連付けられているマップ内の各行について説明する、EntityMetaData があります。以下のようなコードを使用して、各行のエレメントにアクセスすることができます。

```
Query q = em.createQuery("select c.id, c.firstName, c.surname from Customer c where c.surname=?1");

  q.setParameter(1, "Claus");

  Iterator iter = q.getResultIterator();
  while(iter.hasNext())
  {
    Object[] row = (Object[])iter.next();
    System.out.println("Found a Claus with id "  + row[objectgrid: 0 ]
      + ", firstName: " + row[objectgrid: 1 ]
      + ", surname: " + row[objectgrid: 2 ]);
  }
```

getResultMap を使用した照会結果の取得

以下のコードは、一致するカスタマーの特定部分の取得、および、結果行へのアクセス方法を示しています。 Query オブジェクトを使用してデータにアクセスする場

合は、生成される long 行 ID は非表示になります。その long は、ObjectMap を使用して結果にアクセスした場合にのみ表示されます。トランザクションが完了すると、このマップは消えます。 マップは、使用されたセッション、つまり通常はそのマップを作成したスレッドに対してのみ可視となります。マップは単一の属性、long 行 ID を持つキーのタプルを使用します。その値は、結果セット内の各列の属性を持つ別のタプルです。

以下は、これを示したサンプル・コードです。

```
Query q = em.createQuery("select c.id, c.firstName, c.surname from
Customer c where c.surname=?1");
q.setParameter(1, "Claus");
ObjectMap qmap = q.getResultMap();
Tuple keyTuple = qmap.getEntityMetadata().getKeyMetadata().createTuple();
for(long i = 0; true; ++i)
{
  keyTuple.setAttribute(0, new Long(i));
  Tuple row = (Tuple)qmap.get(keyTuple);
  if(row == null) break;
  System.out.println(" I Found a Claus with id "  + row.getAttribute(0)
    + ", firstName: " + row.getAttribute(1)
    + ", surname: " + row.getAttribute(2));
}
```

エンティティー結果イテレーターを使用した照会結果の取得

以下のコードは、通常のマップ API を使用して各結果行を取得する、照会とループを示しています。マップのキーは Tuple です。そのため、createTuple メソッドを使用して適切なタイプの 1 つを構成した結果は、keyTuple になります。rowIds を持つすべての行を、0 以上の値から取得しようとします。キーが見つからなかったことを示すヌルが戻された場合、ループは終了します。keyTuple の最初の属性が、検索する long になるように設定します。 get によって戻される値も、照会結果内の各列の属性を持つタプルです。その後、getAttribute を使用して、値タプルから各属性をプルします。

以下は、次のコードの断片です。

```
Query q2 = em.createQuery("select c.id, c.firstName, c.surname from Customer c where c.surname=?1");
q2.setResultEntityName("CustomerQueryResult");
q2.setParameter(1, "Claus");

Iterator iter2 = q2.getResultIterator(CustomerQueryResult.class);
while(iter2.hasNext())
{
  CustomerQueryResult row = (CustomerQueryResult)iter2.next();
  // firstName is the id not the firstName.
  System.out.println("Found a Claus with id " + row.id
    + ", firstName: " + row.firstName
    + ", surname: " + row.surname);
}

em.getTransaction().commit();
```

照会に ResultEntityName 値が指定されています。この値は、各行を特定の 1 つのオブジェクト、この例では CustomerQueryResult に射影することを、照会エンジンに指示します。クラスは次のとおりです。

```
@Entity
public class CustomerQueryResult {
 @Id long rowId;
 String id;
 String firstName;
 String surname;
};
```

最初のスニペットで、各照会行が Object[] ではなく CustomerQueryResult オブジェクトとして戻される点に注意してください。照会の結果列は、CustomerQueryResult オブジェクトに射影されます。結果を射影することは、実行時には少し遅くなりますが、読みやすさは優れています。照会結果エンティティーは、開始時に eXtreme Scale に登録されていてはなりません。エンティティーが登録されている場合、同じ名前のグローバル・マップが作成され、マップ名が重複していることを示すエラーによって照会は失敗します。

EntityManager を使用した単純照会: Java

WebSphere eXtreme Scale には EntityManager 照会 API が入っています。

EntityManager 照会 API は、オブジェクトを照会する、SQL の他の照会エンジンにとても似ています。照会が定義されてから、各種の getResult メソッドを使用して、照会から結果が取り出されます。

以下の例は、「製品概要」にある EntityManager チュートリアルで使用されているエンティティーを参照しています。

単純照会の実行

次の例では、Claus という名字の顧客が照会されます。

```
em.getTransaction().begin();

  Query q = em.createQuery("select c from Customer c where c.surname='Claus'");

  Iterator iter = q.getResultIterator();
  while(iter.hasNext())
  {
    Customer c = (Customer)iter.next();
    System.out.println("Found a claus with id " + c.id);
  }

  em.getTransaction().commit();
```

パラメーターの使用

Claus という名字のすべての顧客の検索で、この照会を複数回使用する場合もあるので、名字を指定するパラメーターが使用されます。

定位置パラメーターの例

```
Query q = em.createQuery("select c from Customer c where c.surname=?1");
  q.setParameter(1, "Claus");
```

照会が複数回使用される場合、パラメーターの使用は非常に重要です。
EntityManager は、照会ストリングを構文解析して、照会の計画をビルドする必要があり、これにはコストがかかります。パラメーターを使用することで、
EntityManager は照会の計画をキャッシュに入れるので、照会の実行にかかる時間が削減されます。

定位置パラメーターと、名前が指定されたパラメーターの両方が使用されます。

名前が指定されたパラメーターの例

```
Query q = em.createQuery("select c from Customer c where c.surname=:name");
  q.setParameter("name", "Claus");
```

パフォーマンスを改善するための索引の使用

顧客が何百万人もいる場合には、前述の照会では、顧客マップ内のすべての行をスキャンする必要があります。これは、あまり効率的ではありません。しかし、eXtreme Scale は、エンティティーの個々の属性に対する索引を定義するためのメカニズムを提供しています。照会では適宜、この索引が自動的に使用されるため、照会の速度が大幅に上がります。

エンティティー属性で @Index 注釈を使用すれば、索引付けする属性を非常に簡単に指定できます。

```
@Entity
public class Customer
{
  @Id String id;
  String firstName;
  @Index String surname;
  String address;
  String phoneNumber;
}
```

EntityManager は、名字属性に対する適切な ObjectGrid 索引を Customer エンティティー内に作成し、照会エンジンはこの索引を自動的に使用します。これにより、照会時間は大幅に短縮されます。

パフォーマンスを改善するためのページ編集の使用

Claus という名前の顧客が 100 万人いる場合には、100 万人の顧客を表示したページを表示するのは現実的ではありません。一度に 10 または 25 人の顧客を表示することになると考えられます。

Query setFirstResult メソッドおよび setMaxResults メソッドは、結果のサブセットのみを戻すため、役に立ちます。

ページ編集の例

```
Query q = em.createQuery("select c from Customer c where c.surname=:name");
  q.setParameter("name", "Claus");
  // Display the first page
  q.setFirstResult=1;
  q.setMaxResults=25;
  displayPage(q.getResultIterator());

  // Display the second page
  q.setFirstResult=26;
  displayPage(q.getResultIterator());
```

eXtreme Scale 照会のための参照: Java

WebSphere eXtreme Scale は独自の言語を持ち、それによってユーザーはデータを照会することができます。

ObjectGrid 照会の FROM 文節

FROM 文節は、照会を適用するオブジェクトの集合を指定します。各集合は、抽象スキーマ名と識別変数 (範囲変数)、または単一値または多値リレーションシップと識別変数を識別する集合メンバー宣言のいずれかによって識別されます。

概念的には、照会のセマンティクスは、まずタプルの一時的な集合を形成することであり、R と呼ばれます。タプルは、FROM 文節で識別される集合からのエレメントで構成されています。各タプルには、FROM 文節内の各集合からのエレメントが 1 つ含まれています。集合のメンバー宣言で指定された制約に従って、すべての可能な組み合わせが形成されます。パーシスタント・ストア内にレコードがないコレクションを識別するスキーマ名がある場合は、一時集合 R は空です。

FROM の使用例

DeptBean オブジェクトには、レコード 10、20、30 があります。EmpBean オブジェクトには、部門 10 に関連付けられたレコード 1、2、および 3 と、部門 20 に関連付けられたレコード 4 および 5 があります。部門 30 に関連付けられた従業員はいません。

```
FROM DeptBean d, EmpBean e
```

この文節によって、15 のタプルを持つ一時集合 R が形成されます。

```
FROM  DeptBean d,  DeptBean d1
```

この文節によって、9 のタプルを持つ一時集合 R が形成されます。

```
FROM  DeptBean d,  IN (d.emps) AS e
```

この文節によって、5 のタプルを持つ一時集合 R が形成されます。部門 30 には従業員がいないため、R 一時集合内にはありません。部門 10 は 3 回、部門 20 は 2 回、R 一時集合に含まれます。

IN(d.emps) as e を使用する代わりに、JOIN 述部を使用すると次のようになります。

```
FROM DeptBean d JOIN d.emps as e
```

一時集合が形成されると、WHERE 文節の検索条件が R 一時集合に適用され、新しい一時集合 R1 が形成されます。ORDER BY 文節と SELECT 文節が R1 に適用されて、最終的な結果セットが形成されます。

識別変数は、FROM 文節で IN 演算子またはオプションの AS 演算子を使用して宣言される変数です。

```
FROM DeptBean AS d,  IN (d.emps) AS e
```

これは、下記と同じです。

```
FROM DeptBean d, IN (d.emps) e
```

抽象スキーマ名として宣言される識別変数は、範囲変数と呼びます。前の照会では、「d」が範囲変数です。多値パス式として宣言される識別変数は、コレクション・メンバー宣言と呼びます。前の例では、「d」および「e」の値がコレクション・メンバー宣言です。

FROM 文節内での単一値パス式の使用例を示します。

```
FROM EmpBean e, IN(e.dept.mgr) as m
```

ObjectGrid 照会の SELECT 文節

SELECT 文節の構文を、以下の例に示します。

```
SELECT { ALL | DISTINCT }  [ selection , ]*  selection
selection  ::= {single_valued_path_expression |
                identification_variable |
                OBJECT ( identification_variable) |
        aggregate_functions } [[ AS ] id ]
```

SELECT 文節は、以下のエレメントの 1 つ以上で構成されます。FROM 文節で定義される単一の識別変数、オブジェクト参照やオブジェクト値を評価する単一値パス式、および集約関数。DISTINCT キーワードを使用し、重複参照を取り除くことができます。

スカラー副選択は、単一値を返す副選択です。

SELECT の使用例

従業員 John の収入を超える従業員をすべて検索します。

```
SELECT OBJECT(e) FROM EmpBean ej, EmpBean eWHERE  ej.name = 'John'  and
e.salary > ej.salary
```

収入が 20000 に満たない従業員が 1 人以上いる部門をすべて検索します。

```
SELECT DISTINCT e.dept  FROM EmpBean e where e.salary < 20000
```

照会には、任意の値を評価するパス式を含めることができます。

```
SELECT e.dept.name  FROM EmpBean e where e.salary < 20000
```

前の照会では、収入が 20000 に満たない従業員がいる部門の名前値の集合が返されます。

照会は、集約値を返すこともできます。

```
SELECT  avg(e.salary)  FROM EmpBean e
```

収入の低い従業員について、名前とオブジェクト参照を取得する照会は、次のようになります。

```
SELECT e.name as name, object(e) as emp from EmpBean e where e.salary <
50000
```

ObjectGrid 照会の WHERE 文節

WHERE 文節には、以下のエレメントで構成される検索条件が含まれています。検索条件が TRUE と評価されると、結果セットにタプルが追加されます。

ObjectGrid 照会のリテラル

ストリング・リテラルは、単一引用符で囲みます。ストリング・リテラル内にある単一引用符は、2 つの単一引用符で表します。例: 'Tom"s。

数値リテラルは、以下の任意の値が使用可能です。

- 57、-957、+66 などの厳密値
- Java long 型でサポートされる任意の値
- 57.5、-47.02 などの小数リテラル
- 7E3、-57.4E-2 などの概算数値
- 「F」修飾子を含めた浮動小数点型 (例えば、「1.0F」)
- 「L」修飾子を含めた long 型 (例えば、「123L」)

ブール・リテラルは TRUE および FALSE です。

一時リテラルは、属性のタイプに基づいて JDBC エスケープ構文の後に続きます。

- java.util.Date: yyyy-mm-ss
- java.sql.Date: yyyy-mm-ss
- java.sql.Time: hh-mm-ss
- java.sql.Timestamp: yyyy-mm-dd hh:mm:ss.f...
- java.util.Calendar: yyyy-mm-dd hh:mm:ss.f...

列挙型リテラルは、完全修飾列挙型クラス名を使用する Java 列挙型リテラル構文によって表されます。

ObjectGrid 照会の入力パラメーター

順序位置または変数名を使用して、入力パラメーターを指定することができます。入力パラメーターを使用して照会を記述することを強く推奨します。入力パラメーターを使用すると、ObjectGrid が実行アクションの間に照会計画をキャッチできるようになり、パフォーマンスが向上するためです。

入力パラメーターは、以下の型のいずれかが可能です。
Byte、Short、Integer、Long、Float、Double、BigDecimal、BigInteger、String、Boolean、Char、java.util.Date、java.sql.Date、java.sql.Time、java.sql.Timestamp、java.util.Calendar、Java SE 5 enum、Entity または POJO Object、または Java byte[] 形式のバイナリー・データ・ストリング。

入力パラメーターにヌル値を含めないでください。ヌル値の存在を検索するには、NULL 述部を使用してください。

定位置パラメーター

定位置入力パラメーターは、次のように疑問符 (?) の後ろに正数を付けたものを使用して定義します。

?[正整数]

定位置入力パラメーターは 1 から始まる番号が付けられており、照会の引数に対応しています。したがって、入力引数の数を超える入力パラメーターを照会に含めることはできません。

例: SELECT e FROM Employee e WHERE e.city = ?1 and e.salary >= ?2

名前付きパラメーター

名前付き入力パラメーターは、次の形式で変数名を使用して定義します。:[パラメーター名]

例: SELECT e FROM Employee e WHERE e.city = :city and e.salary >= :salary

ObjectGrid 照会の BETWEEN 述部

BETWEEN 述部は、ある値が他の 2 つの値の間にあるかどうかを調べます。

式 [NOT] BETWEEN 式 2 AND 式 3

例 1

```
e.salary BETWEEN 50000 AND 60000
```

これは、下記と同じです。

```
e.salary >= 50000  AND e.salary <= 60000
```

例 2

```
e.name NOT BETWEEN 'A' AND 'B'
```

これは、下記と同じです。

```
e.name < 'A'  OR e.name > 'B'
```

ObjectGrid 照会の IN 述部

IN 述部は、1 つの値を、値のセットと比較します。以下の 2 つの形式のいずれかを使用して IN 述部を使用できます。

```
expression [NOT] IN ( subselect )expression [NOT] IN  ( value1, value2,
.... )
```

ValueN の値は、リテラル値でも入力パラメーターでも構いません。式は、参照型に対する評価は行うことができません。

例 1

```
e.salary IN ( 10000, 15000 )
```

is equivalent to

```
( e.salary = 10000  OR  e.salary = 15000 )
```

例 2

```
e.salary IN ( select  e1.salary from EmpBean e1 where e1.dept.deptno = 10)
```

is equivalent to

```
e.salary = ANY   ( select  e1.salary from EmpBean e1 where e1.dept.deptno =
10)
```

例 3

```
e.salary NOT IN ( select  e1.salary from EmpBean e1 where e1.dept.deptno =
10)
```

is equivalent to

```
e.salary <> ALL    ( select  e1.salary from EmpBean e1 where e1.dept.deptno
= 10)
```

ObjectGrid 照会の LIKE 述部

LIKE 述部は、ある特定のパターンのストリング値を検索します。

```
string-expression   [NOT]  LIKE  pattern    [ ESCAPE escape-character ]
```

パターン値は、ストリング型のストリング・リテラルまたはパラメーター・マーカーで、アンダースコアー (_) は任意の 1 文字を表し、パーセント (%) は空シーケンスを含む任意の文字シーケンスを表します。その他の文字はその文字自身を表します。エスケープ文字は、文字 _ および % の検索に使用できます。エスケープ文字は、ストリング・リテラルとしても、入力パラメーターとしても指定できます。

ストリング式がヌルの場合、結果は不明となります。

ストリング式とパターンの両方が空の場合は、結果は true となります。

例

```
'' LIKE '' is true
'' LIKE '%' is true
e.name LIKE '12%3' is true for '123' '12993' and false for '1234'
e.name LIKE 's_me' is true for 'some' and 'same', false for 'soome'
e.name LIKE '/_foo' escape '/' is true for '_foo', false for 'afoo'
e.name LIKE '//_foo' escape '/' is true for '/afoo' and for '/bfoo'
e.name LIKE '///_foo' escape '/' is true for '/_foo' but false for '/afoo'
```

ObjectGrid 照会の NULL 述部

NULL 述部は、ヌル値をテストします。

```
{single-valued-path-expression | input_parameter} IS [NOT] NULL
```

例

```
e.name IS NULL
e.dept.name IS NOT NULL
e.dept IS NOT NULL
```

ObjectGrid 照会の EMPTY コレクション述部

EMPTY コレクション述部を使用して、コレクションが空であるかどうかを検査します。

多値リレーションシップが空であるかどうかを検査するには、次の構文を使用します。

```
collection-valued-path-expression  IS [NOT]  EMPTY
```

例

Empty コレクション述部。従業員のいない部門を検索する照会は次のようになります。

```
SELECT OBJECT(d) FROM DeptBean d  WHERE  d.emps IS EMPTY
```

ObjectGrid 照会の MEMBER OF 述部

以下の式は、単一値パス式または入力パラメーターで指定されたオブジェクト参照が、指定した集合のメンバーであるかどうかを検査します。集合価パス式が空の集合を指定している場合、MEMBER OF 式の値は FALSE になります。

```
{ single-valued-path-expression | input_parameter } [ NOT ] MEMBER [ OF ]
collection-valued-path-expression
```

例

指定する部門番号のメンバーではない従業員を検索する照会は、次のようになります。

```
SELECT OBJECT(e) FROM EmpBean e , DeptBean d
WHERE e NOT MEMBER OF d.emps AND d.deptno = ?1
```

以下は、マネージャーが指定の部門番号のメンバーである従業員を検出します。

```
SELECT OBJECT(e) FROM EmpBean e, DeptBean d
WHERE e.dept.mgr MEMBER  OF d.emps  and d.deptno=?1
```

ObjectGrid 照会の EXISTS 述部

EXISTS 述部は、副選択によって指定された条件の有無を検査します。

```
EXISTS (副選択)
```

副選択から最低 1 つの値が返されると EXISTS の結果は true になり、値が返されない場合は結果は false になります。

EXISTS 述部を否定するには、述部の前に NOT 論理演算子を指定します。

例

1000000 を超える収入がある従業員が最低 1 人いる部門を返す照会は、次のようになります。

```
SELECT  OBJECT(d) FROM  DeptBean d
WHERE EXISTS ( SELECT  e  FROM IN (d.emps) e WHERE  e.salary > 1000000 )
```

従業員がいない部門を返す照会は次のようになります。

```
SELECT OBJECT(d) FROM DeptBean d
WHERE NOT EXISTS  ( SELECT e FROM IN (d.emps) e)
```

次の例に示すように、前の照会を書き換えることもできます。

```
SELECT OBJECT(d) FROM DeptBean d WHERE SIZE(d.emps)=0
```

ObjectGrid 照会の ORDER BY 文節

ORDER BY 文節は、結果集合内のオブジェクトの順序を指定します。次に例を挙げます。

ORDER BY [order_element ,]* order_element order_element ::={ path-expression }[ASC | DESC]

パス式では、byte、short、int、long、float、double、char などのプリミティブ型、または Byte、Short、Integer、Long、Float、Double、BigDecimal、String、Character、java.util.Date、java.sql.Date、java.sql.Time、 java.sql.Timestamp、java.util.Calendar などのラッパー型の単一値フィールドを指定する必要があります。ASC 順序エレメントは、結果を昇順に表示するよう指定します (デフォルト)。DESC 順序エレメントは、結果を降順に表示するよう指定します。

例

部門オブジェクトを返します。部門番号を降順で表示します。

```
SELECT OBJECT(d) FROM DeptBean d ORDER BY d.deptno DESC
```

従業員オブジェクトを返し、部門番号と部門名でソートします。

```
SELECT OBJECT(e) FROM EmpBean e ORDER BY e.dept.deptno ASC, e.name DESC
```

ObjectGrid 照会集約関数

集約関数は、1 セットの値を操作して単一のスカラー値を返します。これらの関数は、select メソッドおよび subselect メソッドで使用できます。以下に、集約の例を示します。

```
SELECT SUM (e.salary) FROM EmpBean e WHERE e.dept.deptno =20
```

この集約では、部門 20 の給料の合計を計算します。

集約関数は、AVG、COUNT、MAX、MIN、および SUM です。集約関数の構文を、以下の例で示します。

```
aggregation-function ( [ ALL | DISTINCT ] expression )
```

または:

```
COUNT( [ ALL | DISTINCT ] identification-variable )
```

DISTINCT オプションを使用すると、関数を適用する前に重複値が除去されます。ALL オプションは、デフォルトのオプションで、重複値は除去されません。NULL 値は集約関数の計算においては無視されますが、COUNT(identification-variable) 関数を使用する場合は無視されず、セット内のすべてのエレメントの数が返されます。

戻りの型の定義

MAX および MIN 関数は、すべての数値、ストリング、または日時のデータ型に適用でき、対応するデータ型を返します。SUM および AVG 関数は、入力として数値型を必要とします。AVG 関数は double 型を返します。SUM 関数は、入力型が integer 型の場合は long 型を返しますが、入力が Java BigInteger 型の場合は、Java BigInteger 型を返します。SUM 関数は、入力型が integer 型でない場合は double 型を返しますが、入力が Java BigDecimal 型の場合は、Java BigDecimal 型を返します。COUNT 関数は、コレクション以外のすべてのデータ型を入力でき、long 型を返します。

空集合に適用される場合は、SUM、AVG、MAX、および MIN 関数は NULL 値を返すことができます。COUNT 関数は、空集合に適用されるとゼロ (0) を戻します。

GROUP BY および HAVING 文節の使用

集約関数で使用される値のセットは、照会の FROM および WHERE 文節に起因するコレクションによって決定されます。セットをグループに分割して、各グループに集約関数を適用することができます。このアクションを実行するには、照会で GROUP BY 文節を使用します。GROUP BY 文節によりグループ化メンバーが定義され、パス式のリストが構成されます。各パス式には、プリミティブ型の byte、short、int、long、float、double、boolean、char か、またはラッパー型の Byte、Short、Integer、Long、Float、Double、BigDecimal、String、Boolean、Character、java.util.Date、java.sql.Date、java.sql.Time、java.sql.Timestamp、java.util.Calendar、Java SE 5 enum の各フィールドを指定します。

以下の例では、照会で GROUP BY 文節を使用して各部門の平均給与を計算する場合を示します。

```
SELECT e.dept.deptno, AVG ( e.salary) FROM EmpBean e GROUP BY e.dept.deptno
```

セットをグループに分割する場合は、NULL 値は別の NULL 値と等しいとみなされます。

グループ化は HAVING 文節を使用してフィルター操作でき、集約関数またはグループ化メンバーを組み込む前にグループ・プロパティーをテストします。このフィルター操作は、WHERE 文節が FROM 文節からタプル (すなわち、戻りコレクション値のレコード) をフィルター操作する方法に類似しています。HAVING 文節の例を以下に示します。

```
SELECT e.dept.deptno, AVG ( e.salary) FROM EmpBean e
GROUP BY e.dept.deptno
HAVING COUNT(e) > 3 AND e.dept.deptno > 5
```

この照会は、従業員が 3 人より多く、部門番号が 5 より大きい部門の平均給与を返します。

GROUP BY 文節がなくても、HAVING 文節を使用することができます。この場合は、完全なセットは単一グループとして扱われ、HAVING 文節が適用されます。

ObjectGrid 照会の Backus-Naur Form: Java

ObjectGrid 照会の BNF (Backus-Naur Form) 記法のまとめを以下に示します。

表 13. BNF 要約への鍵

表記	説明
{...}	グループ化
[...]	オプションの構文
太字	キーワード
*	ゼロ以上
|	代替

```
ObjectGrid QL ::=select_clause from_clause [where_clause] [group_by_clause]
  [having_clause] [order_by_clause]

from_clause ::=FROM identification_variable_declaration
  [,identification_variable_declaration]*

identification_variable_declaration ::=collection_member_declaration |
  range_variable_declaration

collection_member_declaration ::=IN ( collection_valued_path_expression |
  single_valued_navigation) [AS] identifier | [LEFT [OUTER]
  | INNER] JOIN collection_valued_path_expression |
  single_valued_navigation [AS] identifier

range_variable_declaration ::=abstract_schema_name [AS] identifier

single_valued_path_expression ::={single_valued_navigation | identification_variable}.
  { state_field | state_field.value_object_attribute } | single_valued_navigation

single_valued_navigation ::=identification_variable.[ single_valued_association_field. ]*
  single_valued_association_field

collection_valued_path_expression ::=identification_variable.[
  single_valued_association_field. ]* collection_valued_association_field

select_clause ::= SELECT [DISTINCT] [ selection , ]* selection

selection ::= {single_valued_path_expression |identification_variable | OBJECT
  ( identification_variable) |aggregate_functions } [[ AS ] id ]

order_by_clause ::= ORDER BY [ {identification_variable.[ single_valued_association_field.
  ]*state_field} [ASC|DESC],]* {identification_variable.[
  single_valued_association_field. ]*state_field}[ASC|DESC]

where_clause ::= WHERE conditional_expression

conditional_expression ::= conditional_term | conditional_expression OR conditional_term

conditional_term ::= conditional_factor | conditional_term AND conditional_factor

conditional_factor ::= [NOT] conditional_primary

conditional_primary ::= simple_cond_expression | (conditional_expression)

simple_cond_expression ::= comparison_expression | between_expression | like_expression |
  in_expression | null_comparison_expression | empty_collection_comparison_expression |
  exists_expression | collection_member_expression

between_expression ::= numeric_expression [NOT] BETWEEN numeric_expression
  AND numeric_expression | string_expression [NOT] BETWEEN
  string_expression AND string_expression | datetime_expression [NOT]
  BETWEEN datetime_expression AND datetime_expression

in_expression ::= identification_variable.[ single_valued_association_field. ]state_field
  [*NOT] IN { (subselect) | ( atom ,]* atom) }
```

```
atom ::= { string_literal | numeric_literal | input_parameter }

like_expression ::=string_expression [NOT] LIKE {string_literal | input_parameter}
  [ESCAPE {string_literal | input_parameter}]

null_comparison_expression ::= {single_valued_path_expression | input_parameter} IS
  [ NOT ] NULL

empty_collection_comparison_expression ::= collection_valued_path_expression IS
  [NOT] EMPTY

collection_member_expression ::={ ssingle_valued_path_expression | input_parameter }[
  NOT ] MEMBER [ OF ]collection_valued_path_expression

exists_expression ::= EXISTS {(subselect)}

subselect ::= SELECT [{ ALL | DISTINCT }] subselection from_clause
  [where_clause] [group_by_clause] [having_clause]

subselection ::= {single_valued_path_expression |identification_variable |
  aggregate_functions }

group_by_clause ::= GROUP BY[single_valued_path_expression,]*
  single_valued_path_expression

having_clause ::= HAVING conditional_expression

comparison_expression ::= numeric_ expression comparison_operator { numeric_expression
  | {SOME | ANY | ALL} (subselect) } | string_expression
  comparison_operator {

string_expression | {SOME | ANY | ALL}(subselect) } |

datetime_expression comparison_operator {

datetime_expression {SOME | ANY | ALL}(subselect) } |

boolean_expression {=|<>} {

boolean_expression {SOME | ANY | ALL}(subselect) } |

entity_expression {=|<>} {

entity_expression {SOME| ANY | ALL}(subselect) }

comparison_operator ::= = | > | >= | < | <= | <>

string_expression ::= string_primary | (subselect)

string_primary ::=state_field_path_expression |string_literal | input_parameter |
  functions_returning_strings

datetime_expression ::= datetime_primary |(subselect)

datetime_primary ::=state_field_path_expression | string_literal | long_literal
  | input_parameter | functions_returning_datetime

boolean_expression ::= boolean_primary |(subselect)

boolean_primary ::=state_field_path_expression | boolean_literal | input_parameter

entity_expression ::=single_valued_association_path_expression |
  identification_variable | input_parameter

numeric_expression ::= simple_numeric_expression |(subselect)

simple_numeric_expression ::= numeric_term | numeric_expression {+|-} numeric_term

numeric_term ::= numeric_factor | numeric_term {*|/} numeric_factor

numeric_factor ::= {+|-} numeric_primary

numeric_primary ::= single_valued_path_expression | numeric_literal |
  ( numeric_expression ) | input_parameter | functions

aggregate_functions :=

AVG([ALL|DISTINCT] identification_variable.
  [ single_valued_association_field. ]*state_field) |

COUNT([ALL|DISTINCT] {single_valued_path_expression |
  identification_variable}) |

MAX([ALL|DISTINCT] identification_variable.[
  single_valued_association_field. ]*state_field) |

MIN([ALL|DISTINCT] identification_variable.[
  single_valued_association_field. ]*state_field) |
```

```
SUM([ALL|DISTINCT] identification_variable.[
  single_valued_association_field. ]*state_field)

functions ::=

ABS (simple_numeric_expression) |

CONCAT (string_primary , string_primary) |

LOWER (string_primary) |

LENGTH(string_primary) |

LOCATE(string_primary, string_primary [, simple_numeric_expression]) |

MOD (simple_numeric_expression, simple_numeric_expression) |

SIZE (collection_valued_path_expression) |

SQRT (simple_numeric_expression) |

SUBSTRING (string_primary, simple_numeric_expression[, simple_numeric_expression]) |

UPPER (string_primary) |

TRIM ([[LEADING | TRAILING | BOTH] [trim_character]
  FROM] string_primary)
```

クライアントへの連続照会を使用したマップ更新の通知

データ・グリッドでオブジェクトまたはエントリーが挿入または更新されたときに、クライアント Java 仮想マシン (JVM) で通知を受けることができます。

始める前に

連続照会を使用する場合は、コンテナー・サーバーとクライアント間の通信に使用されるトランスポート・メカニズムである IBM eXtremeIO を使用可能にする必要があります。eXtremeIO の使用可能化について詳しくは、132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。

このタスクについて

データ・グリッドと対話するクライアント・アプリケーションを開発する場合は、フィルター条件に一致するエントリーが挿入、更新、または削除されたときに自動的なリアルタイムの結果を取得する照会が必要になることがあります。例えば、頻繁な更新が必要な株価アプリケーションを開発するとします。この更新は、株式市場で行われた変更を反映します。そのため、正確でタイムリーな結果を提供できるように、アプリケーションが変更について即時に通知を受けるのが重要になります。連続照会は低メモリー・フットプリントであり、データ・グリッド内で変更が行われたときに能動的にクライアントに通知することができます。

以下の手順を使用して、連続照会を使用するようにクライアント・アプリケーションをプログラミングします。

手順

1. クライアント・アプリケーションで連続照会マネージャーを呼び出します。 例えば、以下のコード行を挿入します。

   ```
   ContinuousQueryManager cqMan = ContinuousQueryManagerFactory.getManager(og);
   ```

2. フィルターまたはフィルター・チェーンを定義します。 独自のフィルターを実装するか、提供されている基本フィルター AND、OR、LT、GT、EQ などを使用できます。インスタンス化されたフィルターまたはフィルター・チェーンには、固

有 ID が付与されます。サポートされるすべてのフィルターについて詳しくは、372 ページの『Java API 資料へのアクセス』を参照して、連続照会 API を確認してください。

以下のコード例で、等価 (EQ) 基本フィルターを使用する一つの方法を示します。データ・グリッドに、フィールド firstName がある Customer オブジェクトが含まれているものと仮定します。フィルターは、firstName が Larry に等しいと、true を返します。

```
EQFilter<String, String> equalsFilter = new EQFilter<String, String>("firstName", "Larry");
```

3. 前のステップで作成したフィルターを使用して照会を定義します。例えば、以下のようにします。

```
ContinuousQueryTopicImpl<String, Customer> topic =
  cqMan.<String, Customer> defineContinuousQuery("myMapName", equalsFilter, true, true, true);
```

4. オプション: 連続照会キャッシュを取得して、連続照会のクライアント・サイドの結果にアクセスします。 照会が鍵のみの照会として定義されている場合は、照会を満たす鍵のみが、連続照会キャッシュに入ります。例:

```
ContinuousQueryCache cache = topic.getCache();
```

5. オプション: さらに、ContinuousQueryTopic インスタンスを使用して ContinuousQueryListener インターフェースを実装するクラスを登録して、連続照会の結果が変更されたときに通知を受け取ることができます。 addListener メソッドを呼び出してリスナーを登録します。例えば、以下のようにします。

```
ContinuousQueryListener<String, Customer> listener = new MyCQListener<String, Customer>();
topic.addListener(listener);
```

次のタスク

連続照会 API について詳しくは、API 資料: パッケージ com.ibm.websphere.objectgrid.continuousquery を参照してください。

トランザクションのためのプログラミング

Java

トランザクションが必要なアプリケーションでは、ロックの処理、競合の処理、トランザクションの独立性などを考慮する必要があります。

トランザクション処理の概要: Java

WebSphere eXtreme Scale は、データとの相互作用のメカニズムとしてトランザクションを使用します。

データとの相互作用のために、アプリケーション内のスレッドは、独自のセッションを必要とします。アプリケーションがスレッド上で ObjectGrid を使用する必要がある場合、ObjectGrid.getSession メソッドの 1 つを呼び出してセッションを取得します。このセッションを使用すると、アプリケーションは ObjectGrid マップに保管されているデータの処理を行うことができます。

アプリケーションが Session オブジェクトを使用する場合、そのセッションはトランザクションのコンテキスト内にある必要があります。 Session オブジェクトに対する begin メソッド、commit メソッド、および rollback メソッドにより、トランザクションは、開始してコミット、あるいは開始してロールバックを行います。ま

た、アプリケーションは自動コミット・モードで動作することも可能で、この場合、マップに対する操作が実行されるたびに、Session は自動的にトランザクションを開始してコミットします。自動コミット・モードでは複数の操作を単一トランザクションにグループ化することはできないため、複数操作のバッチを作成して単一トランザクションにする場合は、自動コミット・モードの方が時間がかかるオプションです。ただし、単一の操作しか含まないトランザクションの場合は、自動コミット・モードの方が速いオプションになります。

アプリケーションがセッションを終了したときは、オプションの Session.close() メソッドを使用してセッションを閉じます。セッションを閉じると、セッションがヒープから解放され、getSession() メソッドの後続の呼び出しの再利用が可能となるため、パフォーマンスが向上します。

関連タスク:

Java 971 ページの『ロック・タイムアウト例外の解決』
xscmd -c listindoubt コマンドを使用して、トランザクションの状態を表示して、アクションの方針を判別できます。

Java 970 ページの『マルチ区画トランザクションのロック・タイムアウト例外のトラブルシューティング』
説明するシナリオは、ロック・タイムアウト例外を引き起こしているマルチ区画トランザクションの例です。トランザクションの状態に応じて、解決策で、この問題を手動で解決する方法を説明します。

データ・アクセスおよびトランザクション: Java

アプリケーションが ObjectGrid インスタンスへの参照またはリモート・データ・グリッドへのクライアント接続を取得すると、データ・グリッド内のデータにアクセスし、対話することができます。 ObjectGridManager API を使用して、ローカル・インスタンスを作成したり、分散インスタンスへのクライアント接続を確立したりすることができます。ローカル・インスタンスを作成するには、createObjectGrid メソッドの 1 つを使用します。リモート・データ・グリッドへのクライアント接続を確立するには、getObjectGrid メソッドを使用します。

アプリケーション内のスレッドには、独自のセッションが必要です。アプリケーションがスレッド上で ObjectGrid を使用するようにしたい場合は、getSession メソッドの 1 つを呼び出してセッションを取得します。アプリケーションがそのセッションを終了した後、Session.close() メソッドを呼び出します。このメソッドはセッションを閉じて、そのセッションをプールに返し、そのセッションのリソースを解放します。セッションを閉じるのはオプションですが、そうすると、getSession() メソッドに対する後続の呼び出しのパフォーマンスが向上します。アプリケーションが、Spring のような依存性注入フレームワークを使用する場合、必要なときにセッションをアプリケーション Bean に注入することができます。

セッションを取得した後、アプリケーションは ObjectGrid 内のマップに保管されたデータにアクセスできます。ObjectGrid がエンティティーを使用する場合、Session.getEntityManager メソッドで取得できる EntityManager API を使用できます。 EntityManager インターフェースは、Java 仕様に近いため、マップ・ベースの API よりもシンプルです。しかし、 EntityManager API はオブジェクト内の変更を

追跡するため、パフォーマンスのオーバーヘッドが生じます。マップ・ベースの API は Session.getMap メソッドを使用して取得されます。

WebSphere eXtreme Scale はトランザクションを使用します。アプリケーションがセッションとの対話を行う場合、そのセッションはトランザクションのコンテキストの中にある必要があります。トランザクションはセッション・オブジェクトの Session.begin、Session.commit、および Session.rollback メソッドを使用して、開始されたり、コミットまたはロールバックされます。アプリケーションは、自動コミット・モードで作業を行うこともできます。このモードの場合、アプリケーションがマップとの対話を行うたび、セッションが自動的に開始し、トランザクションをコミットします。ただし、自動コミット・モードは低速です。

トランザクション使用のロジック

トランザクションは遅く感じられるかもしれません。以下の理由からトランザクションを使用する必要があります。

1. 例外が発生した場合や、状態変更を元に戻すことをビジネス・ロジックが必要とする場合に、変更のロールバックが可能であること。
2. 1 つのトランザクションの存続時間中にデータに対するロックの保持と解除を行うことで、一連の変更がアトミックに行われる、つまり、データに対してすべての変更を行うか、何も変更しないかにできること。
3. 複製のアトミックな単位を生成できること。

どの程度のトランザクション・サポートが必要であるかをカスタマイズすることができます。アプリケーションでロールバック・サポートおよびロックをオフにすることもできますが、アプリケーション側の負担もあります。アプリケーションはこれらのフィーチャーの欠如に対処する必要があります。

例えば、アプリケーションで BackingMap ロック・ストラテジーを NONE に構成することで、ロックをオフにすることができます。このストラテジーは高速ですが、並行トランザクションが互いに保護されずに、同じデータを変更できるようになります。NONE を使用する場合は、そのアプリケーションが、すべてのロックおよびデータの整合性に対する責任を持つことになります。

アプリケーションは、トランザクションによってアクセスされたときのオブジェクトのコピー方法を変更することもできます。アプリケーションは、ObjectMap.setCopyMode メソッドを使用して、オブジェクトがどのようにコピーされるのかを指定できます。このメソッドを使用して、CopyMode をオフにすることができます。通常、CopyMode をオフにする操作は、1 つのトランザクション内で同じオブジェクトに対して複数の異なる値が戻されることもある場合に、読み取り専用トランザクションに対して使用されます。1 つのトランザクション内で同じオブジェクトに対して複数の異なる値が戻されることがあり得ます。

例えば、トランザクションが T1 でオブジェクトに対して ObjectMap.get メソッドを呼び出した場合、その時点での値を取得します。その後の T2 で、そのトランザクションの中で get メソッドが再度呼び出された場合、値は別のスレッドによって変更されている可能性があります。値は別のスレッドによって変更されたため、アプリケーションは異なる値を取得することになります。 NONE CopyMode 値を使用して取得されたオブジェクトがアプリケーションによって変更されると、そのオブ

ジェクトのコミット済みのコピーが直接変更されます。このモードでは、トランザクションのロールバックは意味がありません。ObjectGrids での唯一のコピーが変更されます。NONE CopyMode を使用すると処理は速くなりますが、その影響に注意する必要があります。NONE CopyMode を使用するアプリケーションは、トランザクションを決してロールバックしてはなりません。もしアプリケーションがトランザクションをロールバックした場合、索引に変更を反映する更新は行われず、かつ、レプリカ生成がオンにされていても変更は複製されません。デフォルト値を使用するほうが簡単で、誤りの可能性も低くなります。データ信頼性を犠牲にしてもパフォーマンスを上げたい場合は、意図しない問題を回避するために、アプリケーションは実行内容をよく認識する必要があります。

注意:
ロック値または CopyMode 値のどちらかを変更するときは、慎重に行ってください。これらの値を変更すると、予測不能なアプリケーション動作が発生します。

保管データ対話

セッションを取得した後、次のコード・フラグメントを使用して、データの挿入に Map API を使用することができます。

```
Session session = ...;
ObjectMap personMap = session.getMap("PERSON");
session.begin();
Person p = new Person();
p.name = "John Doe";
personMap.insert(p.name, p);
session.commit();
```

以下は、EntityManager API を使用した場合の同じ例です。このコード例は、Person オブジェクトがエンティティーにマップされていると想定しています。

```
Session session = ...;
EntityManager em = session.getEntityManager();
session.begin();
Person p = new Person();
p.name = "John Doe";
em.persist(p);
session.commit();
```

このパターンは、スレッドが使用するマップの ObjectMap への参照を取得し、トランザクションを開始し、データを操作し、トランザクションをコミットするように設計されています。

ObjectMap インターフェースには、put、get、および remove などの一般的なマップ操作が含まれています。しかし、 get、getForUpdate、insert、update、および remove といった、より具体的な操作名を使用してください。これらのメソッドは、従来のマップ API より意図を正確に伝えます。

注: 8.6+ upsert および upsertAll メソッドが ObjectMap の put および putAll メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、upsert メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これに

より、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

また、フレキシブルな索引付けサポートを使用することもできます。

オブジェクトの更新については次の例を参照してください。

```
session.begin();
Person p = (Person)personMap.getForUpdate("John Doe");
p.name = "John Doe";
p.age = 30;
personMap.update(p.name, p);
session.commit();
```

アプリケーションでは、通常は、単純な get ではなく、getForUpdate メソッドを使用してレコードをロックします。 update メソッドは、更新済みの値を実際にマップに提供するために呼び出す必要があります。 update を呼び出さないと、そのマップは変更されません。以下のコードは、EntityManager API を使用した場合の同じコード断片です。

```
session.begin();
Person p = (Person)em.findForUpdate(Person.class, "John Doe");
p.age = 30;
session.commit();
```

EntityManager API はマップを使用した方法よりも単純です。このケースでは、eXtreme Scale がエンティティーを検索し、管理対象オブジェクトをアプリケーションに返します。アプリケーションがオブジェクトを変更し、トランザクションをコミットすると、eXtreme Scale は、管理対象オブジェクトに加えられた変更をコミット時に自動的に追跡し、必要な更新を行います。

トランザクションと区画

WebSphere eXtreme Scale トランザクションは単一の区画でも複数の区画でも更新できますが、単一区画の更新がデフォルトの振る舞いです。メソッド `session.setTxCommitProtocol(Session.TxCommitProtocol.TWOPHASE);` `session.begin();` を呼び出すことによって 2 フェーズ・コミットメント・プロトコルを使用可能にすることができます。次のコード・スニペットは、2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用してグリッド内で作成、検索、更新、および削除操作を実行する方法を示しています。

```
Session session = og.getSession();
Objectmap map1 = session.getMap("Map1");
Objectmap map2 = session.getMap("Map2");
Objectmap map3 = session.getMap("Map3");
session.setTxCommitProtocol(Session.TxCommitProtocol.TWOPHASE);
session.begin();
map1.insert("randKey345", "HelloMap1");
map2.insert("randKey58901", "HelloMap2");
map3.insert("randKey58", "HelloMap3");
session.commit();
```

設定された新しい TxCommitProtocol Session API を使用して、スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale の複数区画トランザクション・サポートを使用可能にします。この新しい API には次の 2 つのオプションがあります。

- TxCommitProtocol.ONEPHASE: これはデフォルトです。クライアントからのトランザクションは複数の区画から読み取ることができますが、更新できるのは 1 つの区画のみです。複数区画の更新は失敗します。
- TxCommitProtocol.TWOPHASE: クライアントからのトランザクションは複数の区画を読み取って更新することができます。このトランザクションは、2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用して、これらの区画に書き込まれたデータが自動的にコミットまたはロールバックされるようにします。このトランザクションが単一の区画にのみ書き込む場合は、1 フェーズ・コミットメント・プロトコルが使用されます。このフィーチャーは新しい eXtremeIO プロトコルによって決まります。

WebSphere eXtreme Scale で複数トランザクションを構成する前に、eXtremeIO を使用可能にして構成する必要があります。詳しくは、 132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。

照会と区画

トランザクションが既にエンティティーを検索済みの場合、そのトランザクションは、そのエンティティーの区画に関連付けられます。エンティティーと関連付けられたトランザクションで実行する照会は、関連付けられた区画に送付されます。

以前に関連付けられた区画で照会が実行される場合は、照会に使用される区画 ID を設定する必要があります。区画 ID は整数値です。これで、その照会はその区画に送付されます。これは、1 フェーズ・コミットメント・プロトコルを使用するようにトランザクションが構成された場合にのみ適用されます。

照会は単一の区画内のみを検索します。ただし、2 フェーズ・コミットメント・プロトコルを使用してセッションが設定された場合は、照会の区画 ID を -1 に設定してください。そうすれば、すべての区画から結果が取得されます。それと同時に同じ照会を、DataGrid API を使用してすべての区画または区画のサブセットに対して実行します。どの区画にあるかわからないエントリーを検索するには、DataGrid API を使用します。

REST データ・サービスは、HTTP クライアントをデータ・ グリッドにアクセスできるようにし、Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 の WCF Data Services と互換性があります。 詳しくは、REST データ・サービスの構成を参照してください。

.

関連タスク:

Java 535 ページの『スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale のマルチ区画トランザクションに書き込むアプリケーションの開発』
スタンドアロン WebSphere eXtreme Scale 環境で複数の区画を備えた分散データ・グリッド用のアプリケーションを作成できます。

トランザクション: Java

トランザクションには、データ保管および操作に関して多くの利点があります。トランザクションを使用すれば、同時変更からデータ・グリッドを保護したり、複数の変更を 1 つの並行ユニットとして適用したり、データを複製したり、変更に対するロックのライフサイクルを実装したりすることができます。

トランザクションが開始すると、WebSphere eXtreme Scale は別の特別なマップを割り振って、そのトランザクションが使用するキーと値のペアの現在の変更またはコピーを保持します。通常、キーと値のペアにアクセスすると、アプリケーションがその値を受け取る前に、値のコピーが作成されます。その別のマップは、挿入、更新、取得、除去などの操作についてすべての変更を追跡します。キーは不変のものと見なされているため、コピーされません。ObjectTransformer オブジェクトを指定すると、このオブジェクトが値をコピーするために使用されます。 トランザクションがオプティミスティック・ロックを使用している場合は、トランザクションのコミット時に、以前の値のイメージも比較のために追跡されます。

トランザクションがロールバックされる場合、その別のマップの情報は破棄され、エントリーに対するロックは解除されます。トランザクションをコミットすると、変更がマップに適用され、ロックが解除されます。オプティミスティック・ロックが使用されている場合、eXtreme Scale は、以前のイメージ・バージョンの値とマップ内の値を比較します。トランザクションをコミットするには、これらの値が一致している必要があります。こうした比較によって複数バージョンのロック体系が可能になりますが、トランザクションがそのエントリーにアクセスすると、代わりに 2 つのコピーが作成されます。すべての値が再度コピーされ、新しいコピーがマップに保管されます。 WebSphere eXtreme Scale は、コミット後に値へのアプリケーション参照を変更するアプリケーションから自身を保護するために、このコピーを実行します。

情報の複数のコピーを使用しないようにできます。アプリケーションは、並行性を制限する代償としてオプティミスティック・ロックの代わりにペシミスティック・ロックを使用することで、コピーを節約できます。コミット後に値を変更しないことにアプリケーションが同意すれば、コミット時の値のコピーも回避することができます。

トランザクションの利点

トランザクションを使用するのは、以下の理由からです。

トランザクションを使用して、以下の操作を行うことができます。

- 例外が発生した場合や、ビジネス・ロジックにより状態変更を元に戻す必要がある場合に、変更をロールバックします。
- コミット時に複数の変更をアトミック単位で適用する
- データに対するロックの保持および解除を行い、コミット時に複数の変更をアトミック単位で適用します。
- 同時変更からスレッドを保護します。
- 変更に対するロックのライフサイクルを実装します。
- アトミック単位のレプリカ生成をします。

トランザクション・サイズ

トランザクションは、特にレプリカ生成の場合には、大きいほど効果的です。ただし、大きなトランザクションの場合はエントリーのロックの保持時間が長くなるため、並行性に悪影響を及ぼします。大きなトランザクションを使用すると、レプリカ生成のパフォーマンスが向上する場合があります。このパフォーマンスの向上

は、マップを事前にロードする場合には重要です。さまざまなバッチ・サイズで実験を行い、使用するシナリオに最適なサイズを判別してください。

大きなトランザクションはローダーにとっても好都合です。 SQL バッチを実行できるローダーを使用している場合は、トランザクションによっては著しくパフォーマンスが向上する可能性があり、データベース側ではロードを著しく削減することができます。このパフォーマンス向上は、ローダーの実装方法によって異なります。

自動コミット・モード

アクティブに始動されたトランザクションがない場合は、アプリケーションが ObjectMap オブジェクトとの対話を行うと、アプリケーションの代わりに自動的に開始およびコミット操作が行われます。この自動的な開始およびコミット操作は役に立ちますが、ロールバックおよびロックが有効に機能する妨げとなります。トランザクションのサイズが小さすぎると、同期レプリカ生成スピードに影響します。エンティティー・マネージャー・アプリケーションを使用している場合は、自動コミット・モードは使用しないでください。その理由は、EntityManager.find メソッドで検索されたオブジェクトが、そのメソッドが戻されると同時に管理不能となり、使用不可となるためです。

外部トランザクション・コーディネーター

通常、トランザクションは、session.begin メソッドで開始し、session.commit メソッドで終了します。ただし、eXtreme Scale が組み込まれていると、トランザクションは、外部トランザクション・コーディネーターによって開始および終了する場合があります。外部トランザクション・コーディネーターを使用している場合は、session.begin メソッドを呼び出す必要も、session.commit メソッドで終了する必要もありません。 WebSphere Application Server を使用している場合は、WebSphereTranscationCallback プラグインを使用できます。

Java EE トランザクション統合

eXtreme Scale は、リモート・データ・グリッドへのクライアント接続とローカル・トランザクション管理の両方をサポートする Java Connector Architecture (JCA) 1.5 準拠リソース・アダプターを含みます。サーブレットなどの Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション、 JavaServer Pages (JSP) ファイル、および Enterprise JavaBeans (EJB) コンポーネントは、標準 javax.resource.cci.LocalTransaction インターフェースまたは eXtreme Scale セッション・インターフェースを使用して、eXtreme Scale トランザクションを区分することができます。

WebSphere Application Server で最終参加者サポートが有効になっている状態でアプリケーションを実行しているときには、eXtreme Scale トランザクションを、他の 2 フェーズ・コミット・トランザクション・リソースと共にグローバル・トランザクションに登録することができます。

***CopyMode* 属性:** Java

ObjectGrid 記述子 XML ファイルで BackingMap または ObjectMap オブジェクトの CopyMode 属性を定義することで、コピーの数を調整することができます。

BackingMap または ObjectMap オブジェクトの CopyMode 属性を定義することで、コピーの数を調整することができます。コピー・モードには以下の値があります。

- COPY_ON_READ_AND_COMMIT
- COPY_ON_READ
- NO_COPY
- COPY_ON_WRITE
- COPY_TO_BYTES
- COPY_TO_BYTES_RAW

COPY_ON_READ_AND_COMMIT がデフォルト値です。 COPY_ON_READ 値は、最初のデータ取得時にはコピーを行いますが、コミット時にはコピーを行いません。アプリケーションが、トランザクションのコミット後の値を変更しなければ、このモードが安全です。NO_COPY 値は、データをコピーしないため、読み取り専用データの場合のみ安全です。データが変更されない限り、分離目的でデータをコピーする必要はありません。

更新される可能性があるマップに NO_COPY 属性値を使用する場合は、注意が必要です。WebSphere eXtreme Scale は最初のタッチ時のコピーを使用して、トランザクションのロールバックを可能にします。アプリケーションはコピーを変更しただけなので、eXtreme Scale はそのコピーを破棄します。 NO_COPY 属性値が使用され、かつアプリケーションがコミットされた値を変更した場合は、ロールバックを完了することが不可能になります。 索引やレプリカはトランザクションのコミット時に更新されるため、コミット済みの値を変更すると、索引、レプリカ生成などに問題が生じます。コミット済みのデータを変更してからトランザクションをロールバックした場合は、これによって実際にはまったくロールバックされないため、索引は更新されず、レプリカ生成は行われません。他のスレッドは、コミットされていない変更を、ロックがあっても即時に参照することができます。読み取り専用マップ、または値を変更する前に適切なコピーを完了するアプリケーションの場合は、NO_COPY 属性値を使用してください。 NO_COPY 属性値を使用した場合に、データ保全性の問題で IBM サポートに連絡すると、コピー・モードを COPY_ON_READ_AND_COMMIT に設定して問題を再現するように求められます。

COPY_TO_BYTES 値は、マップ内の値をシリアライズ・フォームに保管します。eXtreme Scale は、読み取り時にシリアライズ・フォームからの値を拡張し、コミット時に値をシリアライズ・フォームに保管します。この方法によれば、読み取り時とコミット時の両方でコピーが行われます。

制約事項: 8.6+

オプティミスティック・ロックを COPY_TO_BYTES で使用すると、キャッシュ・エントリーの無効化などのよくある操作を実行したとき、ClassNotFoundException 例外が発生することがあります。この例外が発生するのは次のような理由によります。つまり、トランザクションがコミットされる前に変更を検出するためには、オプティミスティック・ロック・メカニズムがキャッシュ・オブジェクトの「 equals(...) 」メソッドを呼び出さなければならないからです。 equals(...) メソッドを呼び出すためには、eXtreme Scale サーバーがキャッシュ・オブジェクトをデシリアライズできなければなりません。つまり、eXtreme Scale がオブジェクト・クラスをロードする必要があります。

この例外を解決するために、キャッシュ・オブジェクト・クラスをパッケージ化することができます。そうすると、eXtreme Scale サーバーがスタンドアロン環境でクラスをロードできるようになります。そのためには、クラスをクラスパスに入れる必要があります。

ご使用の環境に OSGi フレームワークが含まれている場合は、クラスを objectgrid.jar バンドルのフラグメントにパッケージ化します。 eXtreme Scale サーバーを Liberty プロファイルで稼働している場合は、クラスを OSGi バンドルとしてパッケージ化し、そのクラスの Java パッケージをエクスポートします。その後、バンドルを、grids ディレクトリーにコピーすることによってインストールします。

WebSphere Application Server では、アプリケーション、またはアプリケーションがアクセスできる共有ライブラリーにクラスをパッケージ化します。

あるいは、eXtreme Scale に保管されているバイト配列を比較できるカスタム・シリアライザーを使用して変更を検出することもできます。

マップのデフォルトのコピー・モードは、BackingMap オブジェクトで構成することができます。さらに、トランザクションを開始する前に、ObjectMap.setCopyMode メソッドを使用してマップのコピー・モードを変更することができます。

objectgrid.xml ファイルにあり、指定のパッキング・マップのコピー・モードを設定する方法を示すパッキング・マップ・スニペットの例は以下のとおりです。この例では、objectgrid/config 名前空間として cc を使用しているものとします。

```
<cc:backingMap name="RuntimeLifespan" copyMode="NO_COPY"/>
```

関連資料:

ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

ロック・マネージャー: Java

ロック・ストラテジーを構成すると、キャッシュ・エントリーの整合性を維持するために、ロック・マネージャーがバッキング・マップに作成されます。

ロック・マネージャー構成

ロック・ストラテジーに OPTIMISTIC または PESSIMISTIC が使用されている場合は、BackingMap に対してロック・マネージャーが作成されます。ロック・マネージャーは、ハッシュ・マップを使用して、1 つ以上のトランザクションによってロックされるエントリーを追跡します。 ハッシュ・マップに多くのマップ・エントリーが存在する場合、ロック・バケットが多いほど、パフォーマンスが良好になる可能性が高くなります。バケット数が増えるにつれて、Java 同期の衝突のリスクは下がります。またロック・バケットを増やすことが、並行性の増大につながります。前の例では、特定の BackingMap インスタンスに使用するロック・バケットの数をアプリケーションでどのように設定できるかを示しています。

java.lang.IllegalStateException 例外を避けるには、ObjectGrid インスタンスで initialize メソッドまたは getSession メソッドを呼び出す前に

setNumberOfLockBuckets メソッドを呼び出す必要があります。
setNumberOfLockBuckets メソッド・パラメーターは、使用するロック・バケットの数を指定する Java プリミティブ整数です。素数を使用すると、ロック・バケット上のマップ・エントリーの一様分布が可能になります。最良のパフォーマンスを得るために適した開始点は、BackingMap エントリーの予想される数のおよそ 10 パーセントにロック・バケットの数を設定することです。

ロック・ストラテジー: Java

ロック・ストラテジーには、ペシミスティック、オプティミスティック、およびロックなしがあります。 ロック・ストラテジーを選択する場合、各タイプの操作の比率、ローダーを使用するかどうかなどの問題を考慮する必要があります。

ロックはトランザクションに束縛されます。以下のロック設定を指定することができます。

- **ロックなし**: ロック設定を使用しないと、実行は最速になります。読み取り専用データを使用していれば、ロックは必要ない場合があります。
- **ペシミスティック・ロック**: エントリーに対するロックを取得し、コミット時までそのロックを保持します。このロック戦略は、スループットを低下させる代わりに、優れた一貫性を提供します。
- **オプティミスティック・ロック**: トランザクションがタッチするすべてのレコードの以前のイメージを取得して、トランザクションのコミット時に、そのイメージと現在のエントリーの値を比較します。エントリーの値が変更された場合、そのトランザクションはロールバックします。コミット時までロックは保持されません。このロック戦略は、ペシミスティック戦略よりも並行性において優れていますが、トランザクション・ロールバックのリスクがあり、エントリーのコピーを作成するためにメモリーを消費します。

BackingMap でロック戦略を設定します。各トランザクションのロック戦略を変更することはできません。XML ファイルを使用してマップに対してロック・モードを設定する方法を示す XML スニペットの例は以下のとおりです。この場合、cc は、objectgrid/config 名前空間用の名前空間であるとします。

```
<cc:backingMap name="RuntimeLifespan" lockStrategy="PESSIMISTIC" />
```

ペシミスティック・ロック

ほかのロック・ストラテジーが可能でない場合は、マップの読み書きにペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用します。ObjectGrid マップがペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用するように構成されている場合、トランザクションが最初に BackingMap からのエントリーを取得すると、マップ・エントリーのペシミスティック・トランザクション・ロックが取得されます。ペシミスティック・ロックは、アプリケーションがトランザクションを完了するまでは保留されます。通常の場合、ペシミスティック・ロック・ストラテジーは、以下の状態で使用されます。

- BackingMap がローダー付き、またはローダーなしで構成され、バージョン管理情報が使用可能でない場合。
- BackingMap が、並行処理制御について eXtreme Scale からの支援を必要とするアプリケーションによって直接使用されている場合。

- バージョン管理情報は使用できるが、更新トランザクションがバッキング・エントリー上で頻繁に衝突し、その結果、オプティミスティック更新が失敗する場合。

ペシミスティック・ロック・ストラテジーは、パフォーマンスとスケーラビリティーに最大のインパクトを与えるので、このストラテジーはほかのロック・ストラテジーが実行可能でないときのマップの読み取りと書き込みにのみ使用してください。例えば、こうした状態には、オプティミスティック更新の失敗が頻繁に発生する場合や、オプティミスティック障害からのリカバリーをアプリケーションが処理するには難しい場合が含まれます。

8.6+ ペシミスティック・ロックを使用しているときには、lock メソッドを使用して、データ値を返すことなくデータすなわちキーをロックすることができます。lock メソッドにより、グリッド内のキーをロックするか、またはキーをロックして値がグリッド内に存在するかどうかを確認することができます。これまでのリリースでは、get API および getForUpdate API を使用してデータ・グリッド内のキーをロックしていました。しかし、クライアントからデータを取得する必要がなかった場合は、大きくなる可能性がある値オブジェクトを取得してクライアントに渡すことになるため、パフォーマンスが低下します。さらに、containsKey は現時点でロックを保持しないため、ペシミスティック・ロックを使用しているときには、get および getForUpdate を使用して適切なロックを取得しなければなりませんでした。現在は、ロックを保持しているとき、lock API により containsKey セマンティクスが提供されるようになりました。次の例を参照してください。

- `boolean ObjectMap.lock(Object key, LockMode lockMode);`

  マップ内のキーをロックします。キーが存在する場合は true を返し、キーが存在しない場合は false を返します。

- `List<Boolean> ObjectMap.lockAll(List keys, LockMode lockMode);`

  マップ内のキーのリストをロックし、true または false 値のリストを返します。キーが存在する場合は `true` を返し、キーが存在しない場合は `false` を返します。

LockMode は列挙型であり、取りうる値は SHARED、UPGRADABLE、および EXCLUSIVE です。ここでは、ロックしたいキーを指定することができます。次の表を参照して、これらのロック・モード値と既存のメソッドの振る舞いとの関係を理解してください。

表 14. LockMode 値と既存の等価メソッド

ロック・モード	等価メソッド
SHARED	get()
UPGRADABLE	getForUpdate()
EXCLUSIVE	getNextKey() および commit()

次に示す LockMode パラメーターのコード例を参照してください。

```
session.begin();
map.lock(key, LockMode.UPGRADABLE);
map.upsert();
session.commit()
```

オプティミスティック・ロック

オプティミスティック・ロック・ストラテジーでは、並行して実行中に、2 つのトランザクションが同じマップ・エントリーを更新することはないと想定します。このことから、トランザクションのライフサイクル中、ロック・モードを保留する必要はありません。これは、複数のトランザクションがマップ・エントリーを並行して更新するとは考えられないためです。オプティミスティック・ロック・ストラテジーは通常、以下の場合に使用されます。

- BackingMap がローダー付き、またはローダーなしで構成され、バージョン管理情報が使用可能である場合。
- BackingMap のほとんどのトランザクションが読み取り操作を実行するトランザクションである場合。 BackingMap に対するエントリーの挿入、更新、または除去操作は、あまり行われません。
- BackingMap は、読み取りと比べてより頻繁に挿入、更新、または除去されるが、トランザクションは同じマップ・エントリー上でほとんど衝突しない場合。

ペシミスティック・ロック・ストラテジーと同様に、 ObjectMap インターフェース上のメソッドは、eXtreme Scale が、アクセス中のマップ・エントリーのロック・モードを自動的に取得する方法を決定します。ただし、ペシミスティック・ストラテジーとオプティミスティック・ストラテジーの間には、以下のような違いがあります。

- ペシミスティック・ロック・ストラテジーと同様に、メソッドの呼び出しの際、get メソッドおよび getAll メソッドによって S ロック・モードが取得されます。しかし、オプティミスティック・ロックを使用すると、 S ロック・モードはトランザクションが完了するまで保留されません。代わりに、S ロック・モードはメソッドがアプリケーションに戻す前に保留解除されます。ロック・モードの取得の目的は、eXtreme Scale が、その他のトランザクションからのコミット済みデータのみが現行トランザクションに可視となるように保証できるようにすることです。 eXtreme Scale がそのデータがコミット済みであることを確認した後で、S ロック・モードは保留解除されます。コミット時に、オプティミスティック・バージョン管理チェックが実行され、現行トランザクションがその S ロック・モードを保留解除した後で、マップ・エントリーを変更したトランザクションが他にないことが確認されます。更新、無効化、または削除される前にマップからエントリーがフェッチされない場合、eXtreme Scale ランタイムによって、暗黙的にマップからエントリーがフェッチされます。この暗黙的な get 操作は、エントリーの変更が要求された時点における現行値を取得するために実行されます。
- ペシミスティック・ロック・ストラテジーとは異なり、 getForUpdate メソッドと getAllForUpdate メソッドは、オプティミスティック・ロック・ストラテジーが使用された場合には、 get メソッドと getAll メソッドと同様に処理されます。つまり、S ロック・モードはメソッドの開始時に取得され、S ロック・モードはアプリケーションに戻る前に保留解除されます。

その他の ObjectMap メソッドは、すべてペシミスティック・ロック・ストラテジーの場合と同様に処理されます。つまり、commit メソッドが呼び出されると、挿入、更新、除去、タッチ、または無効化されたマップ・エントリー用に X ロック・モードが獲得され、トランザクションがコミット処理を完了するまで X ロック・モードが保留されます。

オプティミスティック・ロック・ストラテジーでは、並行して実行中のトランザクションが同じマップ・エントリーを更新することはないと想定します。この想定から、トランザクションの存続期間中、ロック・モードを保留する必要はありません。これは、複数のトランザクションがマップ・エントリーを並行して更新するとは考えられないためです。しかし、ロック・モードが保留されなかったため、現行トランザクションがその S ロック・モードを保留解除した後で、別の並行トランザクションがマップ・エントリーを更新する可能性があります。

この可能性に対処するため、eXtreme Scale はコミット時に X ロックを取得し、オプティミスティック・バージョン管理チェックを行って、現行トランザクションが BackingMap からマップ・エントリーを読み取って以降、他にマップ・エントリーを変更したトランザクションがないことを確認します。別のトランザクションがマップ・エントリーを変更した場合、バージョン・チェックは失敗し、OptimisticCollisionException 例外が発生します。この例外により、現行トランザクションが強制的にロールバックされ、トランザクション全体がアプリケーションによって再試行されることになります。オプティミスティック・ロック・ストラテジーは、マップがほとんど既読で、同じマップ・エントリーに対する更新が起こる可能性が低い場合に非常に便利です。

制約事項: 8.6+

オプティミスティック・ロックを COPY_TO_BYTES で使用すると、キャッシュ・エントリーの無効化などのよくある操作を実行したとき、ClassNotFoundException 例外が発生することがあります。この例外が発生するのは次のような理由によります。つまり、トランザクションがコミットされる前に変更を検出するためには、オプティミスティック・ロック・メカニズムがキャッシュ・オブジェクトの「 equals(...) 」メソッドを呼び出さなければならないからです。 equals(...) メソッドを呼び出すためには、eXtreme Scale サーバーがキャッシュ・オブジェクトをデシリアライズできなければなりません。つまり、eXtreme Scale がオブジェクト・クラスをロードする必要があります。

この例外を解決するために、キャッシュ・オブジェクト・クラスをパッケージ化することができます。そうすると、eXtreme Scale サーバーがスタンドアロン環境でクラスをロードできるようになります。そのためには、クラスをクラスパスに入れる必要があります。

ご使用の環境に OSGi フレームワークが含まれている場合は、クラスを `objectgrid.jar` バンドルのフラグメントにパッケージ化します。 eXtreme Scale サーバーを Liberty プロファイルで稼働している場合は、クラスを OSGi バンドルとしてパッケージ化し、そのクラスの Java パッケージをエクスポートします。その後、バンドルを、`grids` ディレクトリーにコピーすることによってインストールします。

WebSphere Application Server では、アプリケーション、またはアプリケーションがアクセスできる共有ライブラリーにクラスをパッケージ化します。

あるいは、eXtreme Scale に保管されているバイト配列を比較できるカスタム・シリアライザーを使用して変更を検出することもできます。

ロックなし

BackingMap がロックなしストラテジーを使用するよう構成されている場合、マップ・エントリーのトランザクション・ロックは獲得されません。

注: 8.6+ ロックなしストラテジーを使用するように構成された BackingMap は、複数区画トランザクションに関与できません。

ロックなしストラテジーは、アプリケーションが Enterprise JavaBeans (EJB) コンテナーなどのパーシスタンス・マネージャーである場合や、アプリケーションが Hibernate を使用して永続データを取得している場合に有効です。このシナリオでは、BackingMap はローダーを使用せずに構成され、パーシスタンス・マネージャーによってデータ・キャッシュとして使用されます。またこのシナリオでは、パーシスタンス・マネージャーにより、同じマップ・エントリーにアクセスするトランザクション間の並行性制御が提供されます。

WebSphere eXtreme Scale は、並行性制御のためにトランザクション・ロックを入手する必要はありません。これは、パーシスタンス・マネージャーが、コミットされた変更で ObjectGrid マップを更新する前にそのトランザクション・ロックをリリースしないことを前提としています。パーシスタンス・マネージャーがロックを解放する場合は、ペシミスティックまたはオプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用しなければなりません。例えば、EJB コンテナーのパーシスタンス・マネージャーが、EJB コンテナー管理のトランザクション内でコミットされたデータで ObjectGrid Map を更新していると仮定します。ObjectGrid マップの更新が、パーシスタンス・マネージャーのトランザクション・ロックが解放される前に発生する場合、ロックなしストラテジーを使用することができます。パーシスタンス・マネージャーのトランザクション・ロックが解放された後で ObjectGrid マップ更新が発生する場合は、オプティミスティックまたはペシミスティックのいずれかのロック・ストラテジーを使用してください。

ロックなしストラテジーの使用が可能なもう 1 つのシナリオは、アプリケーションが BackingMap を直接使用し、ローダーがマップに対して構成されているときです。このシナリオでは、ローダーは、Java Database Connectivity (JDBC) または Hibernate のいずれかを使用してリレーショナル・データベース内のデータにアクセスすることによって、リレーショナル・データベース管理システム (RDBMS) によって提供される並行性制御サポートを使用します。ローダーの実装は、オプティミスティックまたはペシミスティックのいずれかの方法を使用できます。オプティミスティック・ロックまたはバージョン管理方法を使用するローダーは、大量の並行性およびパフォーマンスの達成を支援します。オプティミスティック・ロック手法の実装について詳しくは、 661 ページの『データベース・ローダーの構成』の OptimisticCallback セクションを参照してください。基礎となるバックエンドのペシミスティック・ロック・サポートを使用するローダーを使用する場合は、ローダー・インターフェースの get メソッドに渡される forUpdate パラメーターを使用することがあります。アプリケーションがデータを取得するために ObjectMap インターフェースの getForUpdate メソッドを使用した場合は、このパラメーターを true に設定します。ローダーはこのパラメーターを使用して、読み取り中の行のアップグレード可能なロックを要求するかどうかを判別できます。例えば、DB2® は、SQL の SELECT ステートメントに `FOR UPDATE` 節が含まれている場合、アップグレード

可能なロックを獲得します。このアプローチは、 520 ページの『ペシミスティック・ロック』で説明されているのと同じデッドロック防止を提供します。

詳しくは、 542 ページの『ロック』 または 519 ページの『ロック・マネージャー』を参照してください。

関連タスク:

Java 970 ページの『マルチ区画トランザクションのロック・タイムアウト例外のトラブルシューティング』
説明するシナリオは、ロック・タイムアウト例外を引き起こしているマルチ区画トランザクションの例です。トランザクションの状態に応じて、解決策で、この問題を手動で解決する方法を説明します。

Java 971 ページの『ロック・タイムアウト例外の解決』
xscmd -c listindoubt コマンドを使用して、トランザクションの状態を表示して、アクションの方針を判別できます。

Java 535 ページの『スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale のマルチ区画トランザクションに書き込むアプリケーションの開発』
スタンドアロン WebSphere eXtreme Scale 環境で複数の区画を備えた分散データ・グリッド用のアプリケーションを作成できます。

トランザクションの配布: Java

異なる層間、または混合プラットフォーム上の環境間で、トランザクションの変更を配布するために Java Message Service (JMS) を使用します。

JMS は、異なる層または混合しているプラットフォームの環境で配布された変更に理想的なプロトコルです。例えば、eXtreme Scale を使用するいくつかのアプリケーションが、IBM WebSphere Application Server Community Edition、Apache Geronimo、または Apache Tomcat にデプロイされていて、別のアプリケーションが WebSphere Application Server バージョン 6.x で実行しているとします。このような多様な環境における eXtreme Scale ピア間で配布される変更には、JMS が理想的です。HA マネージャーのメッセージ・トランスポートは非常に高速ですが、単一コア・グループに属する Java 仮想マシン にのみ変更を配布できます。 JMS はそれに比較すれば低速ですが、より広範囲で、多様なアプリケーション・クライアントのセットに ObjectGrid を共有させることができます。 JMS は、ファット Swing クライアントと、 WebSphere Extended Deployment にデプロイされているアプリケーションとの間で、ObjectGrid 内のデータを共有する場合に理想的です。

JMS を使用したトランザクションの変更の配布の例としては、組み込みのクライアント無効化メカニズムやピアツーピア・レプリカ生成メカニズムなどがあります。詳しくは、Java Message Service (JMS) ベース・クライアント同期の構成および JMS を使用したピアツーピア・レプリカ生成の構成を参照してください。

JMS の実装

JMS は、ObjectGridEventListener として動作する Java オブジェクトを使用してトランザクションの変更を配布するために実装されます。このオブジェクトは、以下の 4 つの方法で状態を伝搬することができます。

1. 無効化: 除去、更新、または削除されるエントリーは、メッセージを受け取ると、すべてのピア Java 仮想マシンで除去されます。
2. 無効化の条件: ローカル・バージョンがパブリッシャーのバージョンと同じか、またはそれより古い場合のみ、エントリーが除去されます。
3. プッシュ: 除去、更新、削除または挿入されたエントリーは、JMS メッセージを受信する場合、すべてのピア Java 仮想マシンに追加または上書きされます。
4. プッシュ条件: ローカル・エントリーがパブリッシュされているバージョンより新しくない場合に、エントリーは受信サイドで更新または追加のみ行われます。

パブリッシュする変更の listen

プラグインは、ObjectGridEventListener インターフェースを実装し、transactionEnd イベントをインターセプトします。 eXtreme Scale がこのメソッドを呼び出す場合、プラグインはトランザクションによってタッチされる各マップの LogSequence リストを JMS メッセージに変換し、それをパブリッシュしようとします。プラグインは、すべてのマップまたはマップのサブセットの変更をパブリッシュするよう構成することができます。 LogSequence オブジェクトは、パブリッシュが使用可能なマップのために処理されます。 LogSequenceTransformer ObjectGrid クラスは、ストリームに対して各マップのフィルタリングされた LogSequence をシリアライズします。すべての LogSequences がストリームにシリアライズされたら、JMS ObjectMessage が作成され、既知のトピックにパブリッシュされます。

JMS メッセージの listen およびローカル ObjectGrid への適用

同じプラグインはまた、既知のトピックにパブリッシュされるすべてのメッセージを受け取りながら、ループでスピンするスレッドを開始します。メッセージを受け取ると、LogSequenceTransformer クラスにメッセージ・コンテンツを渡します。このクラスでメッセージ・コンテンツは LogSequence オブジェクトのセットに変換されます。その後、ノー・ライトスルー・トランザクションが開始されます。各 LogSequence オブジェクトは Session.processLogSequence メソッドに提供され、その変更でローカル Map を更新します。 processLogSequence メソッドは、配布モードを理解しています。トランザクションはコミットされ、ローカル・キャッシュが変更を反映します。 JMS を使用してトランザクションの変更を配布する方法について詳しくは、ピア JVM 間の変更の配布を参照してください。

単一区画トランザクションおよびクロスデータ・グリッド・トランザクション:

Java

WebSphere eXtreme Scale とリレーショナル・データベースやメモリー内データベースなどの従来のデータ・ストレージ・ソリューションとの間の主な相違は、キャッシュの直線的な増加を可能にする区画化を使用することにあります。考慮すべき重要なトランザクションのタイプに、単一区画トランザクションと各区画 (クロスデータ・グリッド) トランザクションがあります。

一般的に、以下のセクションで説明するようにキャッシュとの対話は、単一区画トランザクションまたはクロスデータ・グリッド・トランザクションとして分類できます。

単一区画トランザクション

単一区画トランザクションは、WebSphere eXtreme Scale によってホストされるキャッシュと対話する場合に適した方法です。単一区画に制限されている場合のトランザクションは、デフォルトで単一の Java 仮想マシン、すなわち単一のサーバー・コンピューターに制限されます。サーバーは、こうしたトランザクションを毎秒 *M* 個実行することができるので、*N* 台のコンピューターがある場合は、毎秒 `M*N` 個のトランザクションを実行できます。ビジネスが拡大し、毎秒こうしたトランザクションを 2 倍の数実行する必要性が出てきた場合、さらにコンピューターを購入して *N* を 2 倍にすることができます。これにより、アプリケーションを変更したり、ハードウェアをアップグレードしたり、さらにはアプリケーションをオフラインにしたりすることさえなく、容量ニーズを満たすことができます。

単一区画トランザクションは、キャッシュの拡大をかなり大幅に行えるようになっているほか、キャッシュの可用性を最大限に引き出します。各トランザクションは、1 台のコンピューターのみに依存します。他の `(N-1)` 台のコンピューターのいずれかに障害が起こっても、このトランザクションの成否および応答時間には影響しません。したがって、100 台のコンピューター (サーバー) を稼働していて、そのうち 1 台に障害が生じても、そのサーバーに障害が生じた時点で進行中であった 1 パーセントのトランザクションしかロールバックされません。サーバーの障害後、WebSphere eXtreme Scale は、障害を起こしたサーバーによってホストされる区画を他の 99 台のコンピューターに再配置します。これは短時間の処理であり、この操作の完了前であれば、この時間内に他の 99 台のコンピューターはトランザクションを完了できます。再配置される区画に関係するトランザクションしか、ブロックされません。フェイルオーバー・プロセスが完了すると、キャッシュは、元のスループット量の 99 パーセントで完全に操作可能状態で引き続き稼働できるようになります。障害のあるサーバーが交換されて、データ・グリッドに戻されると、キャッシュは 100 パーセントのスループット量に戻ります。

クロスデータ・グリッド・トランザクション

パフォーマンス、可用性、およびスケーラビリティーの面では、クロスデータ・グリッド・トランザクションは、単一区画トランザクションの対極にあります。クロスデータ・グリッド・トランザクションは、すべての区画、つまり構成内のすべてのコンピューターにアクセスします。データ・グリッド内の各コンピューターは、ある種のデータを検索して、その結果を戻すように求められます。トランザクションは、すべてのコンピューターが応答するまで完了できません。したがってデータ・グリッド全体のスループットは、最低速のコンピューターによって制限されます。コンピューターを追加しても、最低速のコンピューターの処理速度が増すわけではなく、キャッシュのスループットは改善しません。

クロスデータ・グリッド・トランザクションは、可用性についても同じ影響を及ぼします。先の例を拡大すると、100 台のサーバーが稼働していて、そのうち 1 台に障害が生じたとすると、そのサーバーに障害が生じた時点で進行中であったトランザクションの 100 パーセントがロールバックされます。サーバーの障害後、WebSphere eXtreme Scale は、このサーバーによってホストされる区画を他の 99 台のコンピューターに再配置する処理を開始します。この時間の間、フェイルオーバー・プロセスが完了するまでは、データ・グリッドは、該当するトランザクションをどれも処理できなくなります。フェイルオーバー・プロセスが完了すると、キャ

ッシュは、続行できるようになりますが、容量は減少します。データ・グリッド内の各コンピューターが 10 個の区画をサービスしていた場合、残りの 99 台のコンピューターのうち 10 台は、フェイルオーバー・プロセスの一部として少なくとも 1 つの余分の区画を受け取ることになります。余分の区画を 1 つ追加すると、該当コンピューターのワークロードは 10 パーセント以上増えます。データ・グリッドのスループットは、クロスデータ・グリッド・トランザクション内の最低速のコンピューターのスループットに制限されるので、平均して、スループットは 10 パーセント減少します。

WebSphere eXtreme Scale のような高可用性の分散オブジェクト・キャッシュでのスケールアウトの場合は、単一区画トランザクションのほうがクロスデータ・グリッド・トランザクションよりも適しています。こうした種類のシステムのパフォーマンスを最大限にするには、従来のリレーショナルの方法論とは異なる手法を使用する必要がありますが、クロスデータ・グリッド・トランザクションをスケーラブルな単一区画トランザクションに変えることができます。

スケーラブル・データ・モデルのビルドのベスト・プラクティス

WebSphere eXtreme Scale のような製品でのスケーラブル・アプリケーションをビルドする際のベスト・プラクティスには、基本原則と実装ヒントという 2 つのカテゴリーがあります。基本原則は、データ自体の設計に取り込む必要がある中心的なアイデアです。こうした原則を守らないアプリケーションは、たとえそのメインライン・トランザクションに対しても、適切に拡大できる可能性が低くなります。実装ヒントは、スケーラブル・データ・モデルの本来は一般的な原則に従って適切に設計されたアプリケーション内の問題のあるトランザクションに適用されます。

基本原則

スケーラビリティーを最適化する重要な手段の一部として、基本的な概念または原則を考慮する必要があります。

正規化に代わる重複

WebSphere eXtreme Scale のような製品の場合、その製品が多数のコンピューター間でデータを展開できるように設計されているということを念頭に入れておくことが重要です。ほとんどまたはすべてのトランザクションを単一区画で完全なものとすることが目標である場合は、データ・モデル設計で、トランザクションが必要とする可能性のあるすべてのデータがその区画に存在するようにする必要があります。ほとんどの場合、データを複製することによってのみ、この目標を実現できます。

例えば、メッセージ・ボードのようなアプリケーションを考えてみます。メッセージ・ボードの 2 つの極めて重要なトランザクションとして、一定のユーザーからのすべてのポスト・メッセージを表示するものと、特定のトピックに関するすべてのポスト・メッセージを表示するものがあります。まずこうしたトランザクションがユーザー・レコード、トピック・レコード、さらに実際のテキストが含まれるポスト・レコードを含む正規化されたデータ・モデルをどのように扱うかを考えてみます。ポスト・メッセージがユーザー・レコードによって区画に分割されている場合、トピックを表示することは、クロスグリッド・トランザクションとなります。またその逆もいえま

す。トピックおよびユーザーは、多対多のリレーションシップを持っているので一緒に区画に分割することはできません。

このメッセージ・ボードの拡大を行う最善の策は、ポスト・メッセージを複製して、トピック・レコードを持つコピーを 1 つ、ユーザー・レコードを持つコピーを 1 つ保存することです。この結果、ユーザーからのポスト・メッセージを表示することは単一区画トランザクションとなり、トピックに関するポスト・メッセージを表示することは単一区画トランザクションとなり、ポスト・メッセージを更新または削除することは、2 区画トランザクションとなります。データ・グリッド内のコンピューターの数が増えるにつれ、これら 3 つのトランザクションがすべて直線的に拡大します。

リソースに代わるスケーラビリティー

非正規化されたデータ・モデルを考慮する場合に克服すべき最大の障害は、こうしたモデルがリソースに与える影響です。ある種のデータのコピーを 2 つ、3 つ、またはそれ以上保持すると、利用される資源が多すぎるように見える場合があります。こうしたシナリオに直面したら、ハードウェア・リソースが年々低価格になっているという事実を思い出してください。第 2 に (さらに重要)、WebSphere eXtreme Scaleは、追加資源のデプロイに関連した隠れコストを削減します。

メガバイトやプロセッサーといったコンピューター関連ではなく、コスト関連でリソースを測定してください。正規化された関係データを扱うデータ・ストアは、一般的に同じコンピューターに存在する必要があります。こうしたコロケーションの必要性から、いくつか小型コンピューターを購入するのではなく、1 台の大型の企業向けコンピューターを購入したほうがよいという結果が導かれます。ただし企業向けハードウェアの場合、通常では、毎秒 100 万のトランザクションの実行が可能な 1 台のコンピューターを使用するほうが、それぞれ毎秒 10 万のトランザクションの実行が可能な 10 台のコンピューターを結合した場合よりコストがかなりかかることは珍しいことではありません。

リソースを追加する際のビジネス・コストも存在します。ビジネスが成長していくと、結果的に容量不足となります。容量不足となると、より大型の高速コンピューターに移行する際にシャットダウンが必要になるか、切り替え可能な第 2 の実稼働環境の作成が必要になります。いずれにせよ、ビジネス損失が発生するか、遷移期間にほぼ 2 倍の容量の維持が必要になるという形で追加コストが発生します。

WebSphere eXtreme Scale を使用すると、容量追加のためにアプリケーションをシャットダウンする必要がなくなります。ビジネスで翌年に 10 パーセントの追加容量が必要になることが見込まれた場合、データ・グリッド内のコンピューターの数を 10 パーセント増加します。このパーセンテージ分の増加の際に、アプリケーション・ダウン時間もなく、超過容量の購入の必要もありません。

データ形式変更の防止

WebSphere eXtreme Scale を使用している場合、データは、ビジネス・ロジックで直接消費可能な形式で保管されます。データをよりプリミティブな形式に分解することには、コストがかかります。データの書き込みおよび読み取り時に、変換を実行する必要があります。リレーショナル・データベース

を使用する場合、データが最終的にディスクにパーシストされることがごく頻繁に行われるため、この変換は必要に応じて実行されますが、WebSphere eXtreme Scale を使用すると、こうした変換を実行する必要がなくなります。データは大部分メモリーに保管されるため、アプリケーションが必要とするそのままの形式で保管することができます。

この単純な規則に従うと、最初の原則に従ってデータを非正規化するのに役立ちます。ビジネス・データ用の最も一般的なタイプの変換は、正規化されたデータをアプリケーションのニーズに合う結果セットに変えるために必要な JOIN 演算です。データを正しい形式で保管すると、暗黙的にこうした JOIN 演算の実行が避けられ、非正規化されたデータ・モデルが作成されます。

未結合照会の除去

いくらデータを適切に構成しても、未結合照会は正しく拡張されません。例えば、値でソートされたすべての項目のリストを要求するようなトランザクションは使用しないでください。こうしたトランザクションは、はじめのうち合計項目数が 1000 であると、機能するかもしれませんが、合計項目数が 1000 万に達すると、トランザクションは 1000 万すべての項目を戻します。このトランザクションを実行した場合、最も考えられる 2 つの結果は、トランザクションのタイムアウトになるか、クライアントにメモリー不足エラーが発生するかのいずれかです。

最善のオプションは、上位 10 または 20 の項目だけが戻されるように、ビジネス・ロジックを変更することです。このロジック変更によって、キャッシュ内の項目数に関係なく、トランザクションのサイズが管理可能な程度に保たれます。

スキーマの定義

データの正規化の主な利点は、データベース・システムが状況の背後にあるデータの整合性を考慮できることです。データがスケーラビリティーのために非正規化されると、この自動データ整合性管理は存在しなくなります。データの整合性を保証するために、アプリケーション層で機能できるか、分散データ・グリッドに対するプラグインとして機能できるデータ・モデルを実装する必要があります。

メッセージ・ボードの例を考えてみます。トランザクションがトピックからポスト・メッセージを除去した場合、ユーザー・レコード上の重複するポスト・メッセージを除去する必要があります。データ・モデルがなくても、開発者は、トピックからポスト・メッセージを除去し、さらに確実にユーザー・レコードからそのポスト・メッセージを除去するアプリケーション・コードを作成することができます。ただし、仮に開発者がキャッシュと直接に対話する代わりにデータ・モデルを使用していたとしても、データ・モデル上の removePost メソッドによって、ポスト・メッセージからユーザー ID を抜き出して、ユーザー・レコードを検索し、この状況の背後にある重複ポスト・メッセージを除去することができます。

あるいは、実際の区画で実行し、トピックの変更を検出して、ユーザー・レコードを自動的に調整するリスナーを実装することができます。リスナーは、役に立ちます。区画がユーザー・レコードを持つようになった場合に、ユーザー・レコードの調整がローカルで可能になるか、ユーザー・レコード

が異なる区画にあっても、トランザクションがクライアントとサーバーの間ではなく、サーバー間で実行されるためです。サーバー間のネットワーク接続のほうが、クライアントとサーバーの間のネットワーク接続よりも高速である可能性があります。

競合の防止

グローバル・カウンターを持つようなシナリオは避けてください。1 つのレコードが残りのレコードと比べて極端に多く使用されている場合は、データ・グリッドは拡張されません。データ・グリッドのパフォーマンスは、この特定のレコードを保持するコンピューターのパフォーマンスによって制限されています。

このような状態では、そのレコードを区画単位で管理できるように分割してみてください。例えば、分散キャッシュ内の合計エントリー数を戻すトランザクションを考えます。すべての挿入および除去操作で増大する単一のレコードにアクセスする代わりに、各区画のリスナーに挿入および除去操作を追跡させます。このリスナーによるトラッキングを使用すると、挿入および除去を単一区画操作とすることができます。

カウンターの読み取りはクロスデータ・グリッド操作となりますが、ほとんどの場合、それは元々クロスデータ・グリッド操作と同じく非効率的です。そのパフォーマンスがレコードをホストするコンピューターのパフォーマンスと関係しているためです。

実装ヒント

最善のスケーラビリティーを達成するには、以下のヒントも考慮してください。

逆引き索引の使用

顧客レコードが顧客 ID 番号に基づいて区画化されるような適切に非正規化されたデータ・モデルを考えます。この区画化方法は論理的な選択といえます。顧客レコードによって実行されるほぼすべてのビジネス・オペレーションは、顧客 ID 番号を使用するからです。ただし、顧客 ID 番号を使用しない重要なトランザクションに、ログイン・トランザクションがあります。ログインには顧客 ID 番号よりもユーザー名や電子メール・アドレスが使用されるほうが一般的です。

ログイン・シナリオの簡単な方法は、顧客レコードを見つけるためにクロスデータ・グリッド・トランザクションを使用することです。先に説明したように、この方法は拡張されません。

次のオプションとして、ユーザー名または電子メールに基づいて区画化することがあります。このオプションは、顧客 ID に基づくすべての操作がクロスデータ・グリッド・トランザクションとなるので、実用的でありません。またサイトのユーザーがユーザー名や電子メール・アドレスを変更したい場合もあります。WebSphere eXtreme Scale のような製品は、データをその不変性の維持のために区画化するのに使用される値を必要とします。

適切な解決方法として、逆引き索引を使用することができます。WebSphere eXtreme Scale を使用すると、すべてのユーザー・レコードを保持するキャッシュと同じ分散グリッドにキャッシュを作成できます。このキャッシュは、高可用性で、区画化され、しかもスケーラブルです。このキャッシュ

は、ユーザー名または電子メール・アドレスを顧客 ID にマップするために使用できます。このキャッシュでは、ログインは、クロスグリッド操作ではなく 2 区画操作となります。このシナリオは単一区画トランザクションほどよくはありませんが、コンピューターの数が増えるにつれ、スループットが直線的に増加します。

書き込み時の計算

平均や合計などの一般的な計算値は、作成にコストがかかることがあります。こうした操作には、通常膨大な数のエントリーを読み取る必要があるためです。ほとんどのアプリケーションでは、読み取りのほうが書き込みよりも一般的であるため、こうした値を書き込み時に計算し、結果をキャッシュに保管するほうが効率的です。これにより、読み取り操作は高速になり、よりスケーラブルになります。

オプション・フィールド

業務内容、自宅住所、および電話番号を保持するユーザー・レコードを考えます。これらすべてが定義されているユーザーもいれば、まったく定義されていないユーザーもいれば、一部が定義されているユーザーもいます。データが正規化されていると、ユーザー・テーブルおよび電話番号テーブルが存在することになります。一定ユーザーの電話番号は、この 2 つのテーブル間の JOIN 操作を使用して検出できます。

このレコードを非正規化する場合、データの重複は必要ありません。ほとんどのユーザーが電話番号を共有しないためです。代わりに、ユーザー・レコードで空スロットを使用できるようになっている必要があります。電話番号テーブルを使用する代わりに、各ユーザー・レコードに電話番号タイプごとに 1 つずつ 3 つの属性を追加します。この属性の追加により、JOIN 操作がなくなり、ユーザーの電話番号検索が単一区画操作となります。

多対多リレーションシップの配置

製品とその販売店を追跡するアプリケーションを考えてみます。1 つの製品が多くの店舗で販売され、1 つの店舗で多くの製品が販売されます。このアプリケーションが 50 の大規模小売業者を追跡するものとします。各製品が最大 50 の店舗で販売され、それぞれの店舗で何千もの製品が販売されます。

各店舗エンティティー内に製品リストを保持する (配置 B) 代わりに、製品エンティティーの内部に店舗リストを保持します (配置 A)。このアプリケーションが実行する必要があるトランザクションの一部を見ると、配置 A がよりスケーラブルである理由が明らかになります。

まず更新に注目します。配置 A では、店舗の在庫から製品を除去する場合、製品エンティティーがロックされます。データ・グリッドに 10000 の製品が保持されている場合、グリッドの 1/10000 しか更新の実行をロックする必要がありません。配置 B では、データ・グリッドには 50 の店舗しか含まれていないので、更新を完了するには、グリッドの 1/50 をロックする必要があります。これらは両方とも単一区画操作と考えることができますが、配置 A のほうがより効率よくスケールアウトされます。

現在、配置 A による読み取りを考えていますから、トランザクションで少量のデータのみが転送されるため、製品の販売店舗の検索は拡張され、高速

な単一区画トランザクションとなります。配置 B では、製品が店舗で販売されているかどうかを確認するために、各店舗エンティティーにアクセスする必要があるため、このトランザクションはクロスデータ・グリッド・トランザクションになります。これは、配置 A の大きなパフォーマンス上の利点を明らかにします。

正規化されたデータによる拡張

クロスデータ・グリッド・トランザクションの正当な使用法の 1 つにデータ処理の拡張があります。データ・グリッドに 5 台のコンピューターがあり、各コンピューターについて約 100,000 のレコード全部をソートするクロスグリッド・トランザクションがディスパッチされると、そのトランザクションは全体で 500,000 個のレコードをソートします。データ・グリッド内の最低速のコンピューターが毎秒これらのトランザクションのうちの 10 個を実行できる場合、データ・グリッドは全体で毎秒 5,000,000 レコードをソートできます。グリッド内のデータが 2 倍になると、各コンピューターは全体で 200,000 個のレコードをソートする必要があり、各トランザクションは全体で 1,000,000 個のレコードをソートします。このデータの増加は、最低速のコンピューターのスループットを毎秒 5 トランザクションに減少させるので、データ・グリッドのスループットは毎秒 5 トランザクションに減少します。それでもデータ・グリッドは全体で毎秒 5,000,000 レコードをソートします。

このシナリオでは、コンピューターの数を 2 倍にすると、各コンピューターは元の 100,000 レコードのソートという負荷状態に戻るので、最低速のコンピューターは、これらのトランザクションを毎秒 10 個で処理できるようになります。データ・グリッドのスループットは、毎秒 10 要求という同じ状態ですが、現在では各トランザクションは 1,000,000 レコードを処理するので、処理するレコードに関してはグリッドの容量は毎秒 10,000,000 レコードと 2 倍になります。

ユーザー数の増加に合わせてインターネットとスループットの規模を拡大するため、データ処理に関して両方を拡張する必要のある検索エンジンなどのアプリケーションでは、グリッド間の要求のラウンドロビンを備えた複数のデータ・グリッドを作成する必要があります。スループットを拡大する必要がある場合、要求をサービスするために、コンピューターを追加し、別のデータ・グリッドを追加します。データ処理を拡大する必要がある場合、コンピューターを追加して、データ・グリッド数を一定に保ちます。

単一のトランザクションで複数の区画を更新するアプリケーションの開発:

Java 8.6+

データがデータ・グリッド内の複数の区画に分散されている場合は、単一のトランザクションで複数の区画を読み取って更新することができます。このタイプのトランザクションは複数区画トランザクションと呼ばれ、障害の際は 2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用してトランザクションの調整とリカバリーを行います。

2 フェーズ・コミットとエラー・リカバリー: Java

2 フェーズ・コミット・プロトコルは、分散トランザクションに関与するすべての区画を、そのトランザクションをコミットするかロールバックするかに基づいて調整します。

分散データ・グリッドでは、区画は複数の Java 仮想マシンに分散されます。これらの JVM は複数のシステムに存在することができます。複数の区画に書き込むトランザクションは、複数のシステムに影響を及ぼすトランザクション決定を伴うことがあります。このようなトランザクションが 2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用してコミットされると、このコミット・プロセスは、トランザクション全体が保持されるか、またはトランザクションがまったく保持されないようにします。 2 フェーズ・コミット・プロセスは、区画、システム、または通信に障害が起こった場合でも、この結果を保証します。第 2 フェーズで障害が起こると、そのエラーが手動で介入できる一定基準を満たしているとき以外は、WebSphere eXtreme Scale クライアントが障害を自動的に解決しようと試みます。

複数の区画への書き込みが有効になっているトランザクションは 2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用します。 2 フェーズ・コミット・プロトコルは、すべての区画およびシステムでコミット・プロセスが整合性を保てるようにします。 WebSphere eXtreme Scale は、2 フェーズ・コミット・プロセスを制御するコーディネーターとなります。このようなトランザクションに関係する区画を参加者あるいはリソース・マネージャー (RM) と呼びます。コーディネーターは、コミット・プロトコルの第 2 フェーズで、区画の 1 つがトランザクション・マネージャー (TM) として動作するように委任します。 TM は、各トランザクションの決定の追跡と、障害が発生した場合のトランザクションのリカバリーを行います。

第 1 フェーズ:

アプリケーションがトランザクションをコミットすると、WebSphere eXtreme Scale クライアントはまず、RM として特定された各区画にコミット準備要求を送ることによって第 1 フェーズを開始します。各区画はトランザクション変更をパッキング・マップに適用し、データ保全性を確保するためにすべてのロックを保持します。 RM は WebSphere eXtreme Scale クライアントに通知します。 RM として特定されたすべての区画が成功で応答すると、WebSphere eXtreme Scale クライアントはコミット・プロトコルの第 2 フェーズを開始します。

第 2 フェーズ:

第 1 フェーズで少なくとも 1 つの区画が障害を起こすと、コーディネーターは第 2 フェーズですべての区画をロールバックします。すべての RM 区画が成功で応答すると、WebSphere eXtreme Scale クライアントは区画の 1 つを TM 区画となるように任命します。 WebSphere eXtreme Scale は、コーディネーターとして、トランザクションに関係するすべての区画にコミット要求またはロールバック要求を送ることによってコミット・プロトコルの第 2 フェーズを開始します。そうすると、RM として特定された各区画が変更をパッキング・マップに適用するかまたはロールバックし、すべてのロックを解除します。その後、RM は WebSphere eXtreme Scale クライアントに通知します。第 2 フェーズで少なくとも 1 つの区画が障害を起こした場合は、委任された TM 区画が自動的にトランザクションをリカバリーします。自動リカバリーにより、トランザクションに関係するすべての区画が整合性を確保されます。

未確定フェーズ:

未確定フェーズとは、RM 区画が第 1 フェーズを正常に処理し終えてから第 2 フェーズを開始するまでの待機期間を指します。未確定期間中、RM 区画はトランザクションをコミットするかロールバックするかを知りません。 RM 区画はロックを保持し続けます。ロックが保持されていると、他のトランザクションでロック競合が増加する可能性があります。

2 フェーズ・コミット中のエラー・リカバリー

第 1 フェーズで障害が起こると、WebSphere eXtreme Scale クライアントはトランザクションをロールバックします。区画の 1 つがトランザクションのコミットに失敗すると、TM は、トランザクションのコミットを周期的に試みることによってトランザクションがコミットされるようにします。次のようなログ・メッセージが表示されます。

```
00000099 TransactionLog I  CWOBJ8705I: Automatic resolution of
transaction WXS-40000139-DF01-216D-E002-1CB456931719 at RM:TestGrid:TestSet2:20 is still waiting for a decision.
Another attempt to resolve the transaction will occur in 30 seconds.
```

WebSphere eXtreme Scale クライアントがトランザクションを解決できるようにしてください。トランザクションが 1 分以内にリカバリーされない場合や、トランザクションが未確定トランザクションであるためアプリケーションが何度もロック競合に遭遇している場合は、手動介入のみを試みるようにしてください。トランザクションの手動リカバリーについて詳しくは、970 ページの『マルチ区画トランザクションのロック・タイムアウト例外のトラブルシューティング』を参照してください。

関連タスク:

Java 971 ページの『ロック・タイムアウト例外の解決』

xscmd -c listindoubt コマンドを使用して、トランザクションの状態を表示して、アクションの方針を判別できます。

Java 970 ページの『マルチ区画トランザクションのロック・タイムアウト例外のトラブルシューティング』

説明するシナリオは、ロック・タイムアウト例外を引き起こしているマルチ区画トランザクションの例です。トランザクションの状態に応じて、解決策で、この問題を手動で解決する方法を説明します。

スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale のマルチ区画トランザクションに書き込むアプリケーションの開発: Java

スタンドアロン WebSphere eXtreme Scale 環境で複数の区画を備えた分散データ・グリッド用のアプリケーションを作成できます。

始める前に

- eXtremeIO プロトコルを使用可能にします。詳しくは、132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。
- 複数の区画に書き込むトランザクションでマルチマスター複製を使用することはできません。
- .NET 環境において WebSphere eXtreme Scale クライアントでマルチ区画を使用することはできません。

- ローダー・プラグインで構成された BackingMap は、マルチ区画トランザクションのマップを読み取ることはできますが、書き込むことはできません。
- ロック・ストラテジー NONE を使用している BackingMap は、マルチ区画トランザクションに参加できません。

このタスクについて

TxCommitProtocol 設定セッション API を使用して、スタンドアロン環境で WebSphere eXtreme Scale のマルチ区画トランザクション・サポートを使用可能にします。新規 API では、以下の 2 つのオプションが用意されています。

- TxCommitProtocol.ONEPHASE: デフォルトの 1 フェーズ・コミットでトランザクションをコミットする必要があることを指示するトランザクション・コミット・プロトコル定数。このオプションを使用すると、トランザクションは複数の区画から読み取ることができますが、書き込みは単一の区画にしか行えません。トランザクションが複数の区画に書き込むと、TransactionException 例外が発生します。
- TxCommitProtocol.TWOPHASE: 1 フェーズ・コミットまたは 2 フェーズ・コミットのいずれかでトランザクションをコミットする必要があることを指示するトランザクション・コミット・プロトコル定数。トランザクションが単一の区画に書き込む場合は、1 フェーズ・コミット・プロトコルが使用されます。そうではない場合は、トランザクションのコミットに 2 フェーズ・プロトコルが使用され、複数の区画への書き込み操作が行われます。

WebSphere Application Server 内で WebSphere eXtreme Scale のマルチトランザクション・サポートを構成することもできます。詳しくは、221 ページの『トランザクションを使用する eXtreme Scale クライアント・コンポーネントの開発』を参照してください。

手順

1. ObjectGrid.getSession メソッドを使用して、データ・グリッド・セッション・インスタンスを取得します。詳しくは、401 ページの『セッションを使用したグリッド内データへのアクセス』を参照してください。
2. データ・グリッドに接続します。 詳しくは、381 ページの『分散 ObjectGrid インスタンスへのプログラマチックな接続』を参照してください。
3. 以下のコード・スニペットを設定することで、2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用可能にします。 `session.setTxCommitProtocol (Session.TxCommitProtocol.TWOPHASE); session.begin();` 以下のコード・スニペットで、2 フェーズ・コミット・プロトコルを使用してグリッドで操作を作成、取得、更新、および削除する方法を示します。

```
Session session = og.getSession();
Objectmap map1 = session.getMap("Map1");
Objectmap map2 = session.getMap("Map2");
Objectmap map3 = session.getMap("Map3");
session.setTxCommitProtocol(Session.TxCommitProtocol.TWOPHASE);
session.begin();
map1.insert("randKey345", "HelloMap1");
map2.insert("randKey58901", "HelloMap2");
map3.insert("randKey58", "HelloMap3");
session.commit();
```

次のタスク

マルチ区画トランザクションに対してトレースを使用可能にすることができます。詳しくは、 935 ページの『サーバー・トレース・オプション』を参照してください。

関連概念:

Java 520 ページの『ロック・ストラテジー』
ロック・ストラテジーには、ペシミスティック、オプティミスティック、およびロックなしがあります。 ロック・ストラテジーを選択する場合、各タイプの操作の比率、ローダーを使用するかどうかなどの問題を考慮する必要があります。

Java 511 ページの『データ・アクセスおよびトランザクション』
アプリケーションが ObjectGrid インスタンスへの参照またはリモート・データ・グリッドへのクライアント接続を取得すると、データ・グリッド内のデータにアクセスし、対話することができます。 ObjectGridManager API を使用して、ローカル・インスタンスを作成したり、分散インスタンスへのクライアント接続を確立したりすることができます。ローカル・インスタンスを作成するには、createObjectGrid メソッドの 1 つを使用します。リモート・データ・グリッドへのクライアント接続を確立するには、getObjectGrid メソッドを使用します。

トランザクションを使用する eXtreme Scale クライアント・コンポーネントの開発

: Java

WebSphere eXtreme Scale リソース・アダプターは、クライアント接続管理およびローカル・トランザクション・サポートを提供します。このサポートによって、Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーションは、Java EE ローカル・トランザクションや eXtreme Scale API を使用して、eXtreme Scale のクライアント接続を調べたり、ローカル・トランザクションを区分したりすることができます。

始める前に

eXtreme Scale 接続ファクトリーのリソース参照を作成してください。

このタスクについて

eXtreme Scale データ・アクセス API を使用した作業に関するオプションがいくつかあります。いずれの場合も、eXtreme Scale 接続ファクトリーをアプリケーション・コンポーネントに注入するか、Java Naming Directory Interface (JNDI) で検索する必要があります。接続ファクトリーが検索された後、トランザクションを区分し、eXtreme Scale API にアクセスするための接続を作成することができます。

オプションで、接続ハンドルを取得するための追加オプションを提供する com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionFactory に javax.resource.cci.ConnectionFactory インスタンスをキャストすることができます。結果の接続ハンドルは、getSession メソッドを提供する com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection インターフェースにキャストする必要があります。 getSession メソッドは com.ibm.websphere.objectgrid.Session オブジェクト・ハンドルを返します。このハンドルにより、アプリケーションが eXtreme Scale データ・アクセス API (ObjectMap API や EntityManager API など) をどれでも使用できるようになります。

Session ハンドルと派生オブジェクトは XSConnection ハンドルが存続している限り有効です。

以下の手順を使用して eXtreme Scale トランザクションを区分することができます。それぞれの手順を混合することはできません。例えば、同じアプリケーション・コンポーネントという状況下でグローバル・トランザクション区分とローカル・トランザクション区分を混用することはできません。

手順

- 自動コミット・ローカル・トランザクションを使用します。 データ・アクセス操作、またはアクティブ・トランザクションをサポートしない操作を自動的にコミットするには、以下のステップに従います。
  1. グローバル・トランザクションのコンテキスト外で com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  2. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得し、このセッションを使用してデータ・グリッドと対話します。
  3. 自動コミット・トランザクションをサポートするデータ・アクセス操作を呼び出します。
  4. 接続をクローズします。
- ObjectGrid セッションを使用してローカル・トランザクションを区分します。 Session オブジェクトを使用して ObjectGrid トランザクションを区分するには、以下のステップに従います。
  1. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  2. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得します。
  3. Session.begin() メソッドを使用してトランザクションを開始します。
  4. セッションを使用してデータ・グリッドと対話します。
  5. Session.commit() メソッドまたは rollback() メソッドを使用してトランザクションを終了します。
  6. 接続をクローズします。
- javax.resource.cci.LocalTransction トランザクションを使用してローカル・トランザクションを区分します。 javax.resource.cci.LocalTransaction インターフェースを使用して ObjectGrid トランザクションを区分するには、以下のステップに従います。
  1. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
  2. XSConnection.getLocalTransaction() メソッドを使用して javax.resource.cci.LocalTransaction トランザクションを取得します。
  3. LocalTransaction.begin() メソッドを使用してトランザクションを開始します。
  4. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得し、このセッションを使用してデータ・グリッドと対話します。
  5. LocalTransaction.commit() メソッドまたは rollback() メソッドを使用してトランザクションを終了します。
  6. 接続をクローズします。
- 接続をグローバル・トランザクションに登録します。 この手順はコンテナー管理トランザクションにも適用されます。

1. javax.transaction.UserTransaction インターフェースを介すか、コンテナー管理トランザクションを使用するかして、グローバル・トランザクションを開始します。
2. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得します。
3. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得して使用します。
4. 接続をクローズします。
5. グローバル・トランザクションをコミットまたはロールバックします。

- **8.6+** トランザクションで複数の区画を作成するように接続を構成します。Session オブジェクトを使用して ObjectGrid トランザクションを区分するには、以下のステップに従います。
  1. 新規 com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnectionSpec オブジェクトを作成します。
  2. XSConnectionSpec メソッドおよび setMultiPartitionSupportEnabled メソッドを、引数 `true` を指定して呼び出します。
  3. com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection 接続を取得して、 XSConnectionSpec を ConnectionFactory.getConnection メソッドに渡します。
  4. com.ibm.websphere.objectgrid.Session セッションを取得して使用します。

例

次のコード例を参照してください。このコード例は、eXtreme Scale トランザクションを区分する先行ステップを示しています。

```
// (C) Copyright IBM Corp. 2001, 2012.
// All Rights Reserved. Licensed Materials - Property of IBM.
package com.ibm.ws.xs.ra.test.ee;

import javax.naming.InitialContext;
import javax.resource.cci.Connection;
import javax.resource.cci.ConnectionFactory;
import javax.resource.cci.LocalTransaction;
import javax.transaction.Status;
import javax.transaction.UserTransaction;

import junit.framework.TestCase;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.xs.ra.XSConnection;

/**
* This sample requires that it runs in a J2EE context in your
* application server. For example, using the JUnitEE framework servlet.
*
* The code in these test methods would typically reside in your own servlet,
* EJB, or other web component.
*
* The sample depends on a configured WebSphere eXtreme Scale connection
* factory registered at of JNDI Name of "eis/embedded/wxscf" that defines
* a connection to a grid containing a Map with the name "Map1".
*
* The sample does a direct lookup of the JNDI name and does not require
* resource injection.
*/
public class DocSampleTests extends TestCase {
    public final static String CF_JNDI_NAME = "eis/embedded/wxscf";
    public final static String MAP_NAME = "Map1";

    Long                key = null;
    Long                value = null;
    InitialContext      ctx = null;
    ConnectionFactory   cf = null;

    public DocSampleTests() {
    }
```

```
public DocSampleTests(String name) {
    super(name);
}
protected void setUp() throws Exception {
    ctx = new InitialContext();
    cf = (ConnectionFactory)ctx.lookup(CF_JNDI_NAME);
    key = System.nanoTime();
    value = System.nanoTime();
}
/**
 * This example runs when not in the context of a global transaction
 * and uses autocommit.
 */
public void testLocalAutocommit() throws Exception {
    Connection conn = cf.getConnection();
    try {
        Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
        ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
        map.insert(key, value); // Or various data access operations
    }
    finally {
        conn.close();
    }
}

/**
 * This example runs when not in the context of a global transaction
 * and demarcates the transaction using session.begin()/session.commit()
 */
public void testLocalSessionTransaction() throws Exception {
    Session    session = null;
    Connection conn = cf.getConnection();
    try {
        session = ((XSConnection)conn).getSession();
        session.begin();
        ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
        map.insert(key, value); // Or various data access operations
        session.commit();
    }
    finally {
        if (session != null && session.isTransactionActive()) {
            try { session.rollback(); }
            catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
        }
        conn.close();
    }
}

/**
 * This example uses the LocalTransaction interface to demarcate
 * transactions.
 */
public void testLocalTranTransaction() throws Exception {
    LocalTransaction tx = null;
    Connection conn = cf.getConnection();
    try {
        tx = conn.getLocalTransaction();
        tx.begin();
        Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
        ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
        map.insert(key, value); // Or various data access operations
        tx.commit(); tx = null;
    }
    finally {
        if (tx != null) {
            try { tx.rollback(); }
            catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
        }
        conn.close();
    }
}

/**
 * This example depends on an externally managed transaction,
 * the externally managed transaction might typically be present in
 * an EJB with its transaction attributes set to REQUIRED or REQUIRES_NEW.
 * NOTE: If there is NO global transaction active, this example runs in auto-commit
 *       mode because it doesn't verify a transaction exists.
 */
```

```
        public void testGlobalTransactionContainerManaged() throws Exception {
            Connection      conn = cf.getConnection();
            try {
                Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
                ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
                map.insert(key, value); // Or various data access operations
            }
            catch (Throwable t) {
                t.printStackTrace();
                UserTransaction tx = (UserTransaction)ctx.lookup("java:comp/UserTransaction");
                if (tx.getStatus() != Status.STATUS_NO_TRANSACTION) {
                    tx.setRollbackOnly();
                }
            }
            finally {
                conn.close();
            }
        }

        /**
         * This example demonstrates starting a new global transaction using the
         * UserTransaction interface. Typically the container starts the global
         * transaction (for example in an EJB with a transaction attribute of
         * REQUIRES_NEW), but this sample will also start the global transaction
         * using the UserTransaction API if it is not currently active.
         */
        public void testGlobalTransactionTestManaged() throws Exception {
            boolean         started = false;
            UserTransaction tx = (UserTransaction)ctx.lookup("java:comp/UserTransaction");
            if (tx.getStatus() == Status.STATUS_NO_TRANSACTION) {
                tx.begin();
                started = true;
            }
            // else { called with an externally/container managed transaction }
            Connection      conn = null;
            try {
                conn = cf.getConnection(); // Get connection after the global tran starts
                Session    session = ((XSConnection)conn).getSession();
                ObjectMap  map = session.getMap(MAP_NAME);
                map.insert(key, value); // Or various data access operations
                if (started) {
                    tx.commit(); started = false; tx = null;
                }
            }
            finally {
                if (started) {
                    try { tx.rollback(); }
                    catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
                }
                if (conn != null) { conn.close(); }
            }
        }
/**
         /**
         * This example demonstrates a multi-partition transaction.
         */

    public void testGlobalTransactionTestManagedMultiPartition() throws Exception {
      boolean started = false;
      XSConnectionSpec connSpec = new XSConnectionSpec();
      connSpec.setWriteToMultiplePartitions(true);
      UserTransaction tx = (UserTransaction)ctx.lookup("java:comp/UserTransaction");
      if (tx.getStatus() == Status.STATUS_NO_TRANSACTION) {
        tx.begin();
      started = true;
     }
    // else { called with an externally/container managed transaction }
      Connection conn = null;
         try {
      conn = cf.getConnection(connSpec); // Get connection after the global tran starts
      Session session = ((XSConnection)conn).getSession();
      ObjectMap map = session.getMap(MAP_NAME);
      map.insert(key, value); // Or various data access operations
      if (started) {
        tx.commit(); started = false; tx = null;
        }
      }
      finally {
       if (started) {
```

```
    try { tx.rollback(); }
    catch (Exception e) { e.printStackTrace(); }
  }
  if (conn != null) { conn.close(); }
 }
}
```

関連情報:

- リソース参照の利点
- トランザクションを使用するコンポーネントの開発

ロックの使用: Java

ロックにはライフサイクルがあり、さまざまな種類のロックはさまざまな方法で他のロックと互換性を持ちます。ロックはデッドロック・シナリオにならないように、正しい順序で処理する必要があります。

ロック: Java

ロックにはライフサイクルがあり、さまざまな種類のロックはさまざまな方法で他のロックと互換性を持ちます。ロックはデッドロック・シナリオにならないように、正しい順序で処理する必要があります。

共有ロック、アップグレード可能ロック、および排他的ロック

アプリケーションが ObjectMap インターフェースのいずれかのメソッドを呼び出すか、索引に対して検索メソッドを使用するか、照会を行うと、eXtreme Scale は、アクセスするマップ・エントリーに対して自動的にロックを取得しようとします。

8.6+ ペシミスティック・ロックを使用しているときには、lock メソッドを使用して、データ値を返すことなくデータすなわちキーをロックすることができます。lock メソッドにより、グリッド内のキーをロックするか、またはキーをロックして値がグリッド内に存在するかどうかを確認することができます。これまでのリリースでは、get API および getForUpdate API を使用してデータ・グリッド内のキーをロックしていました。しかし、クライアントからデータを取得する必要がなかった場合は、大きくなる可能性がある値オブジェクトを取得してクライアントに渡すことになるため、パフォーマンスが低下します。さらに、containsKey は現時点でロックを保持しないため、ペシミスティック・ロックを使用しているときには、get および getForUpdate を使用して適切なロックを取得しなければなりませんでした。現在は、ロックを保持しているとき、lock API により containsKey セマンティクスが提供されるようになりました。次の例を参照してください。

- `boolean ObjectMap.lock(Object key, LockMode lockMode);`

  マップ内のキーをロックします。キーが存在する場合は true を返し、キーが存在しない場合は false を返します。

- `List<Boolean> ObjectMap.lockAll(List keys, LockMode lockMode);`

  マップ内のキーのリストをロックし、true または false 値のリストを返します。キーが存在する場合は `true` を返し、キーが存在しない場合は `false` を返します。

LockMode は列挙型であり、取りうる値は SHARED、UPGRADABLE、および EXCLUSIVE です。ここでは、ロックしたいキーを指定することができます。次の表を参照して、これらのロック・モード値と既存のメソッドの振る舞いとの関係を理解してください。

表 15. LockMode 値と既存の等価メソッド

ロック・モード	等価メソッド
SHARED	get()
UPGRADABLE	getForUpdate()
EXCLUSIVE	getNextKey() および commit()

次に示す LockMode パラメーターのコード例を参照してください。

```
session.begin();
map.lock(key, LockMode.UPGRADABLE);
map.upsert();
session.commit()
```

WebSphereeXtreme Scale は、アプリケーションが ObjectMap インターフェース内で呼び出すメソッドを基にした以下のロック・モードを使用します。

- ObjectMap インターフェース上の get と getAll メソッド、索引メソッド、および照会は、マップ・エントリーのキーに対する *S ロック*、つまり共有ロック・モードを取得します。S ロックが保持されている期間は、使用されるトランザクション分離レベルによります。S ロック・モードでは、同一キーに対して S ロック・モードまたはアップグレード可能ロック (U ロック) モードを取得しようとするトランザクション間での並行処理が許されますが、同一キーに対して排他的ロック (X ロック) モードを取得しようとする他のトランザクションはブロックされます。
- getForUpdate および getAllForUpdate メソッドは、マップ・エントリーのキーに対する *U ロック*、つまりアップグレード可能ロック・モードを取得します。 U ロックは、トランザクションが完了するまで保留になります。U ロック・モードでは、同一キーに対して S ロック・モードを取得するトランザクション間での並行処理が許されますが、同一キーに対して U ロック・モードまたは X ロック・モードを取得しようとする他のトランザクションはブロックされます。
- put、putAll、remove、removeAll、insert、update、および touch は、マップ・エントリーのキーに対する *X ロック*、つまり排他的ロック・モードを取得します。X ロックは、トランザクションが完了するまで保留になります。 X ロック・モードでは、1 つのトランザクションのみが所定のキー値のマップ・エントリーを挿入、更新、または除去することになります。 X ロックは、同一キーに対する S、U、または X ロック・モードを取得しようとする他のすべてのトランザクションをブロックします。

注: 8.6+ upsert および upsertAll メソッドが ObjectMap の put および putAll メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、upsert メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを

取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

- global invalidate および global invalidateAll メソッドは、無効化されている各マップ・エントリーに対する X ロックを取得します。 X ロックは、トランザクションが完了するまで保留になります。local invalidate および local invalidateAll メソッドはロックを取得しません。local invalidate メソッドの呼び出しによって無効化される BackingMap エントリーがないためです。

前の定義から、S ロック・モードが U ロック・モードよりも弱体であることは明白です。それは、同一マップ・エントリーにアクセスするときに、より多くのトランザクションが並行して実行されることを許すためです。 U ロック・モードは、S ロック・モードよりも少し強力です。それは、U ロック・モードまたは X ロック・モードのどちらかを要求している他のトランザクションをブロックするためです。S ロック・モードは、X ロック・モードを要求しているその他のトランザクションのみをブロックします。この小さな差が、一部のデッドロックの発生を防止するには重要です。 X ロック・モードは、最強のロック・モードです。これは、同一のマップ・エントリーに対して S、U、または X ロックのモードを取得しようとしているその他すべてのトランザクションをブロックするためにです。 X ロック・モードの最終的な効果は、1 つのトランザクションのみがマップ・エントリーを挿入、更新、または除去できるようにすることと、複数のトランザクションが同一のマップ・エントリーを更新しようとしているときに、更新が失われないようにすることです。

次表は、ロック・モードの互換性マトリックスです。前述のロック・モードをまとめたもので、互いに互換性のあるロック・モードはいずれかを調べる場合に使用してください。このマトリックスを読み取る場合、マトリックスの行は既に認可されているロック・モードを表します。列は、別のトランザクションによって要求されたロック・モードを表します。列に「あり」と表示されている場合は、別のトランザクションによって要求されたロック・モードは認可されています。これは、既に認可されているロック・モードと互換性があるためです。「なし」は、ロック・モードの互換性がないことを表します。その他のトランザクションは、最初のトランザクションが保持しているロックを解放するのを待たなければなりません。

表 16. ロック・モードの互換性マトリックス

ロック	ロック・タイプ S (共有)	ロック・タイプ U (アップグレード可能)	ロック・タイプ X (排他的)	強さ
S (共有)	はい	はい	いいえ	最弱
U (アップグレード可能)	はい	いいえ	いいえ	通常
X (排他的)	いいえ	いいえ	いいえ	最強

ロックのデッドロック

ロック・モード要求の以下のシーケンスについて検討します。

1. X ロックは、トランザクション 1 の key1 に対して認可されています。
2. X ロックは、トランザクション 2 の key2 に対して認可されています。

3. トランザクション 1 によって要求された、key2 に対する X ロック (トランザクション 1 は、トランザクション 2 によって所有されたロックを待機するのをブロックします。)
4. トランザクション 2 によって要求された、key1 に対する X ロック (トランザクション 2 は、トランザクション 1 によって所有されたロックを待機するのをブロックします。)

上記のシーケンスは、2 つのトランザクションからなる古典的なデッドロックの例です。 2 つのトランザクションが複数のロックを取得しようとし、各トランザクションは異なる順序でロック取得します。このデッドロックを防止するには、各トランザクションが複数ロックを同じ順序で獲得しなければなりません。オプティミスティック・ロック・ストラテジーが使用され、 ObjectMap インターフェースの flush メソッドがアプリケーションによって絶対に使用されない場合は、ロック・モードがトランザクションによって要求されるのはコミット・サイクル中のみです。コミット・サイクル中、eXtreme Scale は、ロックする必要があるマップ・エントリーのキーを決定し、キー・シーケンスのロック・モードを要求します (決定論的振る舞い)。この方法で、eXtreme Scale は古典的デッドロックの大多数を防止します。しかし、eXtreme Scale がすべてのデッドロック・シナリオを防止するわけでも、防止できるわけでもありません。アプリケーションが考慮する必要があるシナリオがいくつか存在します。以下は、アプリケーションが注意し、予防アクションを取らなければならないシナリオです。

1 つのシナリオは、ロック待ちタイムアウトが発生するのを待たなくとも eXtreme Scale がデッドロックを検出できる場合です。このシナリオが起こる場合、com.ibm.websphere.objectgrid.LockDeadlockException 例外が発生します。次のコード例をご覧ください。

```
Session sess = ...;
ObjectMap person = sess.getMap("PERSON");
sess.begin();
Person p = (IPerson)person.get("Lynn");
// Lynn had a birthday; so make her 1 year older.
p.setAge( p.getAge() + 1 );
person.put( "Lynn", p );
sess.commit();
```

8.6+ 同じシナリオで、次のコード例のように upsert メソッドを使用することができます。

```
Session sess = ...;
ObjectMap person = sess.getMap("PERSON");
sess.begin();
Person p = (IPerson)person.get("Lynn");
// Lynn had a birthday; so make her 1 year older.
p.setAge( p.getAge() + 1 );
person.upsert( "Lynn", p );
sess.commit();
```

この状況では、Lynn の知人は Lynn の年齢を加算しようとするので、Lynn とその知人が同時にこのトランザクションを実行します。この状態では、person.get("Lynn") メソッド呼び出しの結果として両方のトランザクションが PERSON マップの Lynn エントリーに対して S ロック・モードを保持します。person.put ("Lynn", p) メソッド呼び出しの結果として、両方のトランザクションは S ロック・モードを X ロック・モードに格上げしようとします。両方のトランザクションは、他方のトランザクションが所有している S ロック・モードを解放するのを待つことをブロックしま

す。結果として、デッドロックが発生します。 2 つのトランザクション間に循環待ち条件が存在するためです。循環待ち条件は、複数のトランザクションが同一のマップ・エントリーに対して弱いモードから強いモードへロックを格上げするときに発生します。このシナリオでは、LockTimeoutException 例外ではなく、LockDeadlockException 例外になります。

アプリケーションは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーではなく、オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用すれば、前例の LockDeadlockException 例外を防止できます。オプティミスティック・ロック・ストラテジーの使用は、マップが主として読み取りで、マップの更新がまれにしか行われない場合、推奨される解決策です。ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用する必要がある場合は、上記の例の get メソッドの代わりに、 getForUpdate メソッドを使用するか、TRANSACTION_READ_COMMITTED のトランザクション分離レベルを使用する方法があります。

詳しくは、 520 ページの『ロック・ストラテジー』を参照してください。

TRANSACTION_READ_COMMITTED トランザクション分離レベルを使用すると、通常、get メソッドによって取得される S ロックは、トランザクション完了まで保持されることがなくなります。キーがトランザクション・キャッシュで無効化されない場合、反復可能読み取りは引き続き保証されます。 詳しくは、 519 ページの『ロック・マネージャー』を参照してください。

トランザクション分離レベルを変更する方法の代替方法が、getForUpdate メソッドの使用です。getForUpdate メソッドを呼び出す最初のトランザクションは、S ロックではなく U ロック・モードを取得します。このロック・モードにより、2 番目のトランザクションは、getForUpdate メソッドを呼び出したときにブロックされます。U ロック・モードで認可されるトランザクションは 1 つのみだからです。2 番目のトランザクションはブロックされるので、Lynn マップ・エントリーに対するロック・モードを何も所有しません。最初のトランザクションは、最初のトランザクションからの put メソッド呼び出しの結果として、 U ロック・モードから X ロック・モードへの格上げをしようとしたときに、ブロックしません。この働きは、U ロック・モードが*アップグレード可能* ロック・モードと呼ばれる理由を説明しています。最初のトランザクションが完了すると、2 番目のトランザクションがブロックを解除し、U ロック・モードを認可されます。アプリケーションは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーが使用されている場合、 get メソッドの代わりに getForUpdate メソッドを使用することにより、ロック格上げによるデッドロック・シナリオを回避できます。

重要: この解決策は、読み取り専用トランザクションがマップ・エントリーを読み取るのを妨げません。読み取り専用トランザクションは、get メソッドを呼び出しますが、put、insert、update、または remove メソッドを呼び出すことはありません。並行性は、通常の get メソッドが使用されているときと同様に高く維持されます。唯一、並行性が低減するのは、複数のトランザクションによって同一のマップ・エントリーに対して getForUpdate メソッドが呼び出されるときです。

あるトランザクションが複数のマップ・エントリーに対して getForUpdate メソッドを呼び出す場合、各トランザクションによって確実に U ロックが同じ順序で取得されるように注意しなければなりません。例えば、最初のトランザクションがキー 1 に対する getForUpdate メソッドと、キー 2 に対する getForUpdate メソッドを呼び

出すとします。別の並行トランザクションが 2 つの同一キーに対する getForUpdate メソッドを呼び出しますが、逆順で呼び出します。このシーケンスにより、古典的なデッドロックが発生します。複数ロックが異なるトランザクションによって異なる順序で獲得されるためです。アプリケーションでは引き続き、複数のマップ・エントリーにアクセスするどのトランザクションもキー・シーケンスに従い、デッドロックを発生しないようにする必要があります。 U ロックはコミット時ではなく、getForUpdate メソッドが呼び出される時に獲得されるので、eXtreme Scale は、コミット・サイクル中に行われるようにロック要求を順序付けることはできません。アプリケーションは、このケースではロックの順序付けを制御する必要があります。

コミットの前に ObjectMap インターフェースの flush メソッドを使用すれば、ロックの順序付けの考慮を加えることができます。 flush メソッドは、通常、Loader プラグインにより、マップに行われた変更をバックエンドに強制する目的に使用されます。この状態では、バックエンドは独自のロック・マネージャーを使用して並行処理を制御するので、ロック待ち条件とデッドロックは、 eXtreme Scale ロック・マネージャー内よりもむしろバックエンド内で発生します。次のトランザクションについて検討します。

```
Session sess = ...;
ObjectMap person = sess.getMap("PERSON");
boolean activeTran = false;
try
{
    sess.begin();
    activeTran = true;
    Person p = (IPerson)person.get("Lynn");
    p.setAge( p.getAge() + 1 );
    person.put( "Lynn", p );
    person.flush();
    ...
    p = (IPerson)person.get("Tom");
    p.setAge( p.getAge() + 1 );
    sess.commit();
    activeTran = false;
}
finally
{
    if ( activeTran ) sess.rollback();
}
```

何かほかのトランザクションが Tom も更新し、flush メソッドを呼び出し、次に Lynn を更新したとします。この状態が発生した場合、2 つのトランザクションの以下のインターリービングの結果、データベースはデッドロック状態になります。

```
flush の実行時に "Lynn" のトランザクション 1 に対して X ロックが認可されます。
flush の実行時に "Tom" のトランザクション 2 に対して X ロックが認可されます。
コミット処理中に "Tom" のトランザクション 1 によって、X ロックが要求されます。
(トランザクション 1 は、
トランザクション 2 によって所有されたロックを待機するのをブロックします。)
コミット処理中に "Lynn" のトランザクション 2 によって、X ロックが要求されます。
(トランザクション 2 は、
トランザクション 1 によって所有されたロックを待機するのをブロックします。)
```

この例は、flush メソッドの使用により、eXtreme Scale 内ではなくデータベース内でデッドロックが発生することを示しています。このデッドロック例は、どのロック・ストラテジーを使用しても発生する可能性があります。アプリケーションは、flush メソッドを使用しているときと、 Loader が BackingMap にプラグインされているときは、この種のデッドロックの発生を防止することに留意する必要がありま

す。上記の例は、eXtreme Scale がロック待ちタイムアウト機構を備えているもう 1 つの理由を示しています。データベース・ロックを待機するトランザクションは、eXtreme Scale マップ・エントリーのロックを所有している間、待機し続ける可能性があります。その結果、データベース・レベルの問題により、eXtreme Scale ロック・モードの待機時間が過大になり、LockTimeoutException 例外が発生する可能性があります。

関連タスク:

964 ページの『デッドロックのトラブルシューティング』
以下のセクションでは、いくつかの最も一般的なデッドロック・シナリオを説明し、その回避方法を提示します。

ロック・シナリオでの例外処理の実装: Java

LockTimeoutException 例外または LockDeadlockException 例外が発生したときに、ロックが過度に長い時間保留されないようにするために、アプリケーションは、予期しない例外をキャッチし、予期しないことが発生したときに rollback メソッドを呼び出す必要があります。

手順

1. 例外をキャッチし、結果のメッセージを表示します。

   ```
   try {
   ...
   } catch (ObjectGridException oe) {
   System.out.println(oe);
   }
   ```

   結果、次の例外が表示されます。

   ```
   com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LockDeadlockException: Message
   ```

   このメッセージは、例外が作成されてスローされるときに、パラメーターとして渡されるストリングを表します。
2. 例外の後、トランザクションをロールバックします。

   ```
   Session sess = ...;
   ObjectMap person = sess.getMap("PERSON");
   boolean activeTran = false;
   try
   {
       sess.begin();
       activeTran = true;
       Person p = (IPerson)person.get("Lynn");
       // Lynn had a birthday, so we make her 1 year older.
       p.setAge( p.getAge() + 1 );
       person.put( "Lynn", p );
       sess.commit();
       activeTran = false;
   }
   finally
   {
       if ( activeTran ) sess.rollback();
   }
   ```

   コード・スニペットの `finally` ブロックは、予期しない例外が発生したときにトランザクションがロールバックされるようにしています。
   LockDeadlockException 例外のみでなく、発生する可能性のあるその他の予期し

ない例外もすべて処理します。finally ブロックは、commit メソッドの呼び出し時に例外が発生するケースも処理します。この例は、予期しない例外を処理する唯一の方法ではありません。アプリケーションが、発生する予期しない例外のいくつかをキャッチし、そのアプリケーション例外の 1 つを表示するケースも存在するかもしれません。適宜 catch ブロックを追加できますが、アプリケーションは、コード・スニペットがトランザクションを完了せずに終了しないようにする必要があります。

ロック・ストラテジーの構成: Java

WebSphere eXtreme Scale 構成の各 BackingMap に対するオプティミスティック、ペシミスティック、あるいはロックなしのストラテジーを定義できます。

このタスクについて

各 BackingMap インスタンスは、次のいずれかのロック・ストラテジーを使用するよう構成できます。

1. オプティミスティック・ロック・モード
2. ペシミスティック・ロック・モード
3. なし

デフォルトのロック・ストラテジーは、OPTIMISTIC です。データの変更が頻繁でない場合は、このオプティミスティック・ロックを使用します。データがキャッシュから読み取られ、トランザクションにコピーされる間、ロックは短期間だけ保持されます。トランザクション・キャッシュがメイン・キャッシュと同期されると、更新されたあらゆるキャッシュ・オブジェクトが元のバージョンに対してチェックされます。チェックが失敗すると、トランザクションはロールバックされ、OptimisticCollisionException 例外となります。

ペシミスティック・ロック・ストラテジーは、キャッシュ・エントリーに対してロックを取得するため、データが頻繁に変更される場合に使用するようにしてください。キャッシュ・エントリーが読み取られる場合は、必ずロックが取得され、トランザクションが完了するまでロックが条件付きで保持されます。ロックによっては、セッションのトランザクション分離レベルを使用して、その期間を調整することができます。

データがまったく更新されないか、静止期間のみに更新されるため、ロックが必要ない場合は、NONE ロック・ストラテジーを使用すれば、ロックを使用不可にすることができます。このストラテジーは、ロック・マネージャーを必要としないため、非常に高速です。NONE ロック・ストラテジーは、ルックアップ表または読み取り専用のマップの場合に理想的です。

ロック・ストラテジーについて詳しくは、 520 ページの『ロック・ストラテジー』を参照してください。

手順

- **オプティミスティック・ロック・ストラテジーの構成**
  - setLockStrategy メソッドを使用するプログラマチックな方法

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.LockStrategy;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
...
ObjectGrid og =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid("test");
BackingMap bm = og.defineMap("optimisticMap");
bm.setLockStrategy( LockStrategy.OPTIMISTIC );
```

– ObjectGrid 記述子 XML ファイル内の lockStrategy 属性を使用する方法

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="test">
            <backingMap name="optimisticMap"
                lockStrategy="OPTIMISTIC"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

- **ペシミスティック・ロック・ストラテジーの構成**

  – setLockStrategy メソッドを使用するプログラマチックな方法

  プログラムでのペシミスティック・ストラテジーの指定

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.LockStrategy;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
...
ObjectGrid og =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid("test");
BackingMap bm = og.defineMap("pessimisticMap");
bm.setLockStrategy( LockStrategy.PESSIMISTIC);
```

  – ObjectGrid 記述子 XML ファイル内の lockStrategy 属性を使用する方法

  XML を使用したペシミスティック・ストラテジーの指定

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

    <objectGrids>
        <objectGrid name="test">
            <backingMap name="pessimisticMap"
                lockStrategy="PESSIMISTIC"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

- **ロックなしストラテジーの構成**

  – setLockStrategy メソッドを使用するプログラマチックな方法

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.LockStrategy;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
...
ObjectGrid og =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid("test");
BackingMap bm = og.defineMap("noLockingMap");
bm.setLockStrategy( LockStrategy.NONE);
```

  – ObjectGrid 記述子 XML ファイル内の lockStrategy 属性を使用する方法

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">

    <objectGrids>
        <objectGrid name="test">
            <backingMap name="noLockingMap"
                lockStrategy="NONE"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

次のタスク

java.lang.IllegalStateException 例外を避けるために、ObjectGrid インスタンスで initialize メソッドまたは getSession メソッドを呼び出す前に、setLockStrategy メソッドを呼び出す必要があります。

ロック・タイムアウト値の構成: Java

BackingMap インスタンスのロック・タイムアウト値を使用すると、アプリケーション・エラーが原因でデッドロック状態が発生しても、アプリケーションがロック・モードを認可されるまで無期限に待つことがないようにできます。

始める前に

ロック・タイムアウト値を構成するには、ロック・ストラテジーを OPTIMISTIC または PESSIMISTIC に設定しなければなりません。詳しくは、549 ページの『ロック・ストラテジーの構成』を参照してください。

このタスクについて

LockTimeoutException 例外が発生したら、アプリケーションは、アプリケーションの実行が予想よりも遅くなっているためにタイムアウトが発生しているのか、それともデッドロック状態のためにタイムアウトが発生したのかを判別しなければなりません。実際にデッドロック条件が発生した場合は、ロック待ちタイムアウト値を増やしても例外は除去されません。タイムアウト値を増やすと、例外の発生期間が長くなります。しかし、ロック待ちタイムアウト値を増やして例外を除去している場合は、アプリケーションが予想よりも低速で実行されるために問題が発生しました。このケースのアプリケーションでは、パフォーマンスの低下原因を判別しなければなりません。

デッドロックの発生を回避するために、ロック・マネージャーにはデフォルトのタイムアウト値 (15 秒) があります。このタイムアウト制限を超過すると、LockTimeoutException 例外が発生します。システムの負荷が重いと、デッドロックが存在しない場合でも、デフォルトのタイムアウト値によって LockTimeoutException 例外が発生する可能性があります。このような場合は、プログラマチックに、または ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用してロック・タイムアウト値を大きくできます。

手順

- setLockTimeout メソッドを使用して、BackingMap インスタンスのロック・タイムアウト値をプログラマチックに構成します。

以下の例は、map1 パッキング・マップのロック待ちタイムアウト値を 60 秒に設定する方法を示しています。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.LockStrategy;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
...
ObjectGrid og =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager().createObjectGrid("test");
BackingMap bm = og.defineMap("map1");
bm.setLockStrategy( LockStrategy.PESSIMISTIC );
bm.setLockTimeout( 60 );
```

java.lang.IllegalStateException 例外を回避するには、ObjectGrid インスタンスの initialize または getSession メソッドのいずれかを呼び出す前に、setLockStrategy メソッドと setLockTimeout メソッドの両方を呼び出します。setLockTimeout メソッドのパラメーターは、Java プリミティブの整数で、eXtreme Scale がロック・モードを認可されるのを待たなければならない秒数を指定します。 BackingMap に構成されているロック待ちタイムアウト値よりも長くトランザクションが待つ場合は、com.ibm.websphere.objectgrid.LockTimeoutException 例外が発生します。

- ObjectGrid 記述子 XML ファイル内の lockTimeout 属性を使用して、ロック・タイムアウト値を構成します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="test">
            <backingMap name="optimisticMap"
                lockStrategy="OPTIMISTIC"
         lockTimeout="60"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

- 単一 ObjectMap インスタンスのロック待ちタイムアウトをオーバーライドします。 ObjectMap.setLockTimeout メソッドを使用して、特定の ObjectMap インスタンスのロック・タイムアウト値をオーバーライドします。ロック・タイムアウト値は、新規のタイムアウト値の設定後に開始されたすべてのトランザクションに影響します。このメソッドは、ロック競合が選択トランザクションで起こりうる、あるいは予想される場合に便利です。

マップ・エントリー・ロックと照会および索引: Java

このトピックでは、eXtreme Scale Query API および MapRangeIndex 索引付けプラグインがロックとどのように相互作用するのかを説明し、マップに対してペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用する際に並行性を増し、デッドロックを減らす、ベスト・プラクティスをいくつか示します。

概要

ObjectGrid Query API では、ObjectMap キャッシュ・オブジェクトおよびエンティティーに対して SELECT 照会を行うことができます。照会エンジンが実行されると、可能であれば MapRangeIndex を使用して、照会の WHERE 文節にある値に一致する一致キーを検索し、または、リレーションシップをブリッジします。索引が

使用可能でない場合、照会エンジンは、1 つ以上のマップの各エントリーをスキャンして、適切なエントリーを検索します。照会エンジンおよび索引プラグインは、どちらもロックを取得して、ロック・ストラテジー、トランザクション分離レベル、およびトランザクション状態に応じて、整合データを検査します。

HashIndex プラグインによるロック

eXtreme Scale HashIndex プラグインを使用すると、キャッシュ・エントリー値に保管された単一の属性に基づいてキーを検出できます。索引は、キャッシュ・マップとは別のデータ構造に索引付けされた値を保管します。索引は、ユーザーに返す前にマップ・エントリーに対してキーを検証し、正確な結果セットになるようにします。ペシミスティック・ロック・ストラテジーが使用され、ローカル ObjectMap インスタンス (クライアント/サーバー ObjectMap に対するものとして) に対して索引が使用される場合、索引は各一致エントリーに対してロックを取得します。オプティミスティック・ロックまたはリモート ObjectMap を使用する場合、ロックは直ちに解放されます。

取得されるロックのタイプは、ObjectMap.getIndex メソッドに渡される forUpdate 引数によって異なります。forUpdate 引数は、索引が取得すべきロックのタイプを指定します。false の場合、共有可能 (S) ロックが取得され、true の場合は、アップグレード可能 (U) ロックが取得されます。

ロック・タイプが共有可能の場合、セッションのトランザクション分離設定が適用され、ロックの期間に影響します。トランザクション分離を使用してアプリケーションに並行性を追加する方法についての詳細は、トランザクション分離のトピックを参照してください。

共有ロックと照会

eXtreme Scale 照会エンジンは、キャッシュ・エントリーが照会のフィルター基準を満たしているかどうかを検査するためにキャッシュ・エントリーをイントロスペクトするのに必要な場合は、S ロックを取得します。ペシミスティック・ロックで反復可能読み取りトランザクション分離を使用する場合、照会結果に含まれるエレメントに対してのみ S ロックが保持され、結果に含まれていないエントリーについては解放されます。低いトランザクション分離レベルまたはオプティミスティック・ロックを使用している場合、S ロックは保持されません。

共有ロックと、クライアントからサーバーに対する照会

eXtreme Scale 照会をクライアントから使用する場合、照会内で参照されているすべてのマップまたはエンティティーがクライアントに対してローカル (例: クライアント複製マップまたは照会結果エンティティー) でない限り、通常、照会はサーバーで実行されます。読み取り/書き込みトランザクションで実行されるすべての照会は、前のセクションで説明したように S ロックを保持します。トランザクションが読み取り/書き込みトランザクションでない場合は、セッションはサーバーで保持されず、S ロックは解放されます。

読み取り/書き込みトランザクションは、プライマリー区画に対してのみ送付され、セッションは、クライアント・セッションについてはサーバーで維持されます。トランザクションは、以下の条件で読み取り/書き込みにプロモートできます。

1. ペシミスティック・ロックを使用するように構成されたマップが、ObjectMap get および getAll API メソッド、または、EntityManager.find メソッドを使用してアクセスされる場合。
2. トランザクションがフラッシュされ、それによって更新がサーバーに送られる場合。
3. オプティミスティック・ロックを使用するように構成されたマップが、ObjectMap.getForUpdate メソッド、または、EntityManager.findForUpdate メソッドを使用してアクセスされる場合。

アップグレード可能ロックと照会

共有可能ロックは、並行性および整合性が重要な場合に有効です。共有可能ロックでは、トランザクションの存続期間中、エントリーの値が変わらないことが保証されます。他の S ロックが保持されている間、他のトランザクションが値を変更することはできず、エントリーを更新するインテントを設定できるのは他の 1 つのトランザクションのみです。S、U、および X ロック・モードに関する詳細は、ペシミスティック・ロック・モードのトピックを参照してください。

アップグレード可能ロックは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用する場合にキャッシュ・エントリーの更新インテントを特定するために使用されます。アップグレード可能ロックでは、キャッシュ・エントリーを変更しようとするトランザクション間の同期を行うことができます。トランザクションは、S ロックを使用して引き続きエントリーを参照することができますが、他のトランザクションは U ロックまたは X ロックを取得できなくなります。多くのシナリオでは、デッドロックを回避するため、先に S ロックを取得せずに U ロックを取得することが必要になります。一般的なデッドロックの例については、ペシミスティック・ロック・モードのトピックを参照してください。

ObjectQuery および EntityManager Query インターフェースでは、照会結果の用途の特定に setForUpdate メソッドを提供しています。特に、照会エンジンは、照会結果に含まれる各マップ・エントリーに対して S ロックではなく U ロックを取得します。

```
ObjectMap orderMap = session.getMap("Order");
ObjectQuery q = session.createQuery("SELECT o FROM Order o WHERE o.orderDate=?1");
q.setParameter(1, "20080101");
q.setForUpdate(true);
session.begin();
// Run the query.  Each order has  U lock
Iterator result = q.getResultIterator();
// For each order, update the status.
while(result.hasNext()) {
    Order o = (Order) result.next();
    o.status = "shipped";
    orderMap.update(o.getId(), o);
}
// When committed, the
session.commit();
```

```
Query q = em.createQuery("SELECT o FROM Order o WHERE o.orderDate=?1");
q.setParameter(1, "20080101");
q.setForUpdate(true);
emTran.begin();
// Run the query.  Each order has  U lock
Iterator result = q.getResultIterator();
// For each order, update the status.
```

```
while(result.hasNext()) {
    Order o = (Order) result.next();
    o.status = "shipped";
}
tmTran.commit();
```

setForUpdate 属性が使用可能になっている場合、トランザクションは、自動的に読み取り/書き込みトランザクションに変換され、予期されたようにサーバーに対してロックが保持されます。照会が索引を使用できない場合、マップをスキャンして、照会結果を満足しないマップ・エントリーに対して一時的に U ロックをかけ、結果に含まれるエントリーに対しては U ロックを保持するようにする必要があります。

トランザクション分離: Java

トランザクションに関して、各パッキング・マップ構成を、pessimistic、optimistic、または none の 3 種類のロック・ストラテジーのうちの 1 つで構成できます。pessimistic ロックおよび optimistic ロックを使用する場合、eXtreme Scale は共有 (S) ロック、アップグレード可能 (U) ロック、および排他的 (X) ロックを使用して、整合性を維持します。 optimistic ロックは保持されないため、このロック動作が最も目立つのは pessimistic ロックを使用しているときです。3 つのトランザクション分離レベル (反復可能読み取り、読み取りコミット済み、および読み取りアンコミット) のうちの 1 つを使用して、各キャッシュ・マップ内で eXtreme Scale が整合性を保持するために使用するロック・セマンティクスを調整することができます。

トランザクション分離の概説

トランザクション分離は、1 つの操作で行われた変更がどのように他の並行操作に可視になるのかを定義します。

WebSphere eXtreme Scale でサポートされている 3 つのトランザクション分離レベル (反復可能読み取り、読み取りコミット済み、および読み取りアンコミット) を利用して、eXtreme Scale が各キャッシュ・マップ内での整合性を保持するために使用するロック・セマンティクスをさらに調整できます。トランザクション分離レベルは、setTransactionIsolation メソッドを使用して Session インターフェースに設定されます。トランザクション分離は、現在進行中のトランザクションがなければ、セッションの存続期間中いつでも変更できます。

この製品では、共有 (S) ロックが要求および保持される方法を調整することによって、さまざまなトランザクション分離セマンティクスが施行されます。トランザクション分離は、オプティミスティック・ロックまたはロックなしストラテジーを使用するように構成されたマップに対して、あるいはアップグレード可能 (U) ロックが取得される場合は何の影響もありません。

ペシミスティック・ロックでの反復可能読み取り

反復可能読み取りは、デフォルトのトランザクション分離レベルです。この分離レベルは、ダーティー読み取りおよび反復不能読み取りを防止しますが、ファントム読み取りは防止しません。ダーティー読み取りとは、あるトランザクションによって変更されたが、コミットされていないという状態のデータに対して発生する読み取り操作のことです。反復不能読み取りは、読み取り操作実行時に読み取りロックが取得されていない場合に発生する可能性があります。ファントム読み取りは、2

つの同一の読み取り操作が実行されたが、操作と操作との間にデータに対する更新があったために 2 つの異なる結果セットが戻される場合に、発生する可能性があります。この製品は、すべての S ロックを、ロックを所有するトランザクションが完了するまで保持し続けることによって、反復可能読み取りを実現します。 X ロックは、すべての S ロックが解放されるまで認可されないため、S ロックを保持するすべてのトランザクションは、再読み取り時に同じ値を参照することが保証されます。

```
map = session.getMap("Order");
session.setTransactionIsolation(Session.TRANSACTION_REPEATABLE_READ);
session.begin();

// An S lock is requested and held and the value is copied into
// the transactional cache.
Order order = (Order) map.get("100");
// The entry is evicted from the transactional cache.
map.invalidate("100", false);

// The same value is requested again.  It already holds the
// lock, so the same value is retrieved and copied into the
// transactional cache.
Order order2 (Order) = map.get("100");

// All locks are released after the transaction is synchronized
// with cache map.
session.commit();
```

ファントム読み取りが可能なのは、照会または索引を使用しているときです。なぜなら、ロックはデータ範囲に対して取得されるのではなく、索引または照会基準に一致するキャッシュ・エントリーに対してのみ取得されるからです。例:

```
session1.setTransactionIsolation(Session.TRANSACTION_REPEATABLE_READ);
session1.begin();

// A query is run which selects a range of values.
ObjectQuery query = session1.createObjectQuery
    ("SELECT o FROM Order o WHERE o.itemName='Widget'");

// In this case, only one order matches the query filter.
// The order has a key of "100".
// The query engine automatically acquires an S lock for Order "100".
Iterator result = query.getResultIterator();

// A second transaction inserts an order that also matches the query.
Map orderMap = session2.getMap("Order");
orderMap.insert("101", new Order("101", "Widget"));

// When the query runs again in the current transaction, the
// new order is visible and will return both Orders "100" and "101".
result = query.getResultIterator();

// All locks are released after the transaction is synchronized
// with cache map.
session.commit();
```

ペシミスティック・ロックでの読み取りコミット済み

読み取りコミット済みのトランザクション分離レベルを eXtreme Scale で使用できます。この分離レベルは、ダーティー読み取りを防止しますが、反復不能読み取りまたはファントム読み取りを防止しないため、eXtreme Scale は S ロックを引き続き使用してキャッシュ・マップからデータを読み取りますが、すぐにロックを解放します。

```
map1 = session1.getMap("Order");
session1.setTransactionIsolation(Session.TRANSACTION_READ_COMMITTED);
session1.begin();

// An S lock is requested but immediately released and
//the value is copied into the transactional cache.

Order order = (Order) map1.get("100");

// The entry is evicted from the transactional cache.
map1.invalidate("100", false);

// A second transaction updates the same order.
// It acquires a U lock, updates the value, and commits.
// The ObjectGrid successfully acquires the X lock during
// commit since the first transaction is using read
// committed isolation.

Map orderMap2 = session2.getMap("Order");
session2.begin();
order2 = (Order) orderMap2.getForUpdate("100");
order2.quantity=2;
orderMap2.update("100", order2);
session2.commit();

// The same value is requested again.  This time, they
// want to update the value, but it now reflects
// the new value
Order order1Copy (Order) = map1.getForUpdate("100");
```

ペシミスティック・ロックでの読み取りアンコミット

読み取りアンコミットのトランザクション分離レベルを eXtreme Scale で使用できます。この分離レベルは、ダーティー読み取り、反復不能読み取り、およびファントム読み取りを許容します。

オプティミスティック衝突例外: Java

OptimisticCollisionException は、直接受け取るか、ObjectGridException と一緒に受け取ることができます。

以下のコードは、例外を catch し、そのメッセージを表示する方法の例です。

```
try {
...
} catch (ObjectGridException oe) {
    System.out.println(oe);
}
```

例外の原因

OptimisticCollisionException は、ほとんど同じ時間に 2 つの異なるクライアントが同じマップ・エントリーを更新しようとしたとき作成されます。例えば、あるクライアントがセッションをコミットしてマップ・エントリーを更新しようとした場合に、そのコミットの直前に別のクライアントがデータを読み取っていたとすると、そのデータは正しくありません。このクライアントが正しくないデータをコミットしようとすると、例外が作成されます。

例外をトリガーしたキーの検索

そのような例外のトラブルシューティングのとき、例外をトリガーしたエントリーに対応するキーを検索すると便利です。OptimisticCollisionException の利点は、キーを表すオブジェクトを戻す getKey メソッドが含まれていることです。次の例は、OptimisticCollisionException をキャッチするときの、キーを検索し印刷する方法を示しています。

```
try {
...
} catch (OptimisticCollisionException oce) {
    System.out.println(oce.getKey());
}
```

OptimisticCollisionException の原因となる ObjectGridException

OptimisticCollisionException は、ObjectGridException が表示される原因となる場合があります。この場合、以下のコードを使用して例外タイプを判別し、キーを印刷できます。以下のコードは、以下のセクションで説明するように、findRootCause ユーティリティー・メソッドを使用しています。

```
try {
...
}
catch (ObjectGridException oe) {
    Throwable Root = findRootCause( oe );
    if (Root instanceof OptimisticCollisionException) {
        OptimisticCollisionException oce = (OptimisticCollisionException)Root;
        System.out.println(oce.getKey());
    }
}
```

一般的な例外処理技法

Throwable オブジェクトの根本原因がわかると、エラーの発生源を分離する場合に役立ちます。次の例では、例外ハンドラーでユーティリティー・メソッドを使用して Throwable オブジェクトの根本原因を検出する方法について説明します。

例:

```
static public Throwable findRootCause( Throwable t )
{
     // Start with Throwable that occurred as the root.
     Throwable root = t;

     // Follow cause chain until last Throwable in chain is found.
     Throwable cause = root.getCause();
     while ( cause != null )
     {
        root = cause;
        cause = root.getCause();
     }

     // Return last Throwable in the chain as the root cause.
     return root;
}
```

データ・グリッド (DataGrid API) での並列ビジネス・ロジックの実行: Java

DataGrid API は、データ・グリッドのすべてまたはサブセットに対して、データが置かれている場所と並行してビジネス・ロジックを実行するための、単純なプログラミング・インターフェースを提供します。

関連情報:

Java DataGrid API

DataGrid API と区画化: Java

DataGrid API を使用して、クライアントは、データ・グリッド内の 1 つの区画、区画のサブセット、またはすべての区画に、要求を送信できます。クライアントはキーのリストを指定でき、WebSphere eXtreme Scale はそれらのキーをホスティングしている区画のセットを判定します。次に要求はセット内のすべての区画に並行して送信され、クライアントはその結果を待ちます。クライアントは、キーを指定せずに要求を送信することもでき、したがって、要求はすべての区画に送信されます。

データ・グリッドにデプロイされているエージェントは、クライアント・モードでは動作しません。これらのエージェントは、プライマリーの断片を直接操作します。プライマリーの断片を直接操作すると、最高のパフォーマンスが得られ、秒当たり何万あるいはそれ以上のトランザクションを処理できます。これは、エージェントがメモリーの最高速度でデータを操作するからです。プライマリー断片を直接操作するということは、エージェントはその断片内のデータしか見ることができないということでもあります。これにより、クライアントでは実行できない興味あるいくつかの機会が与えられます。

標準的な eXtreme Scale クライアントは、要求を送付する必要があるため、トランザクションから区画を決定できなければなりません。エージェントが断片に直接接続されている場合は、ルーティングは不要です。すべての要求はその断片に送られます。エージェントは断片に直接接続されているためにルーティングが発生しないので、共通の区画化キーなどを考慮しなくても、その断片内の他のマップに含まれるデータにアクセスすることができます。

関連情報:

Java DataGrid API

DataGrid エージェントとエンティティー・ベースのマップ: Java

マップは、キー・オブジェクトと値オブジェクトを保持します。キー・オブジェクトは生成済みタプルであり、値オブジェクトもそうです。通常エージェントにはアプリケーションによって指定されたキー・オブジェクトが与えられます。

キー・オブジェクトは生成済みタプルであり、値オブジェクトもそうです。通常エージェントにはアプリケーションによって指定されたキー・オブジェクトが与えられます。このキー・オブジェクトが、アプリケーション、またはアプリケーションがエンティティー・マップの場合はタプルによって使用されるキー・オブジェクトになります。エンティティーを使用するアプリケーションがタプルを直接操作することはあまりなく、エンティティーにマップされた Java オブジェクトを使用して作業するほうが一般的です。

したがって、Agent クラスは EntityAgentMixin インターフェースを実装できます。これにより、Agent クラスは強制的にもう 1 つのメソッドである getClassForEntity() を実装します。このメソッドは、サーバー・サイドのエージェントとともに使用されるエンティティー・クラスを返します。キーは、process メソッドおよび reduce メソッドを呼び出す前に、このエンティティーに変換されます。

これは、これらのメソッドにキーのみが与えられている非 EntityAgentMixin エージェントとは異なるセマンティックです。EntityAgentMixin を実装しているエージェントは、1 つのオブジェクトにキーと値を組み込んでいるエンティティー・オブジェクトを受け取ります。

注: エンティティーがサーバー上に存在しない場合、キーは、管理対象エンティティーではなく、キーの未加工のタプル・フォーマットになります。

関連情報:

Java DataGrid API

DataGrid API の例: Java

DataGrid API では、グリッド・プログラミングの 2 つの一般的なパターンである、並列マップと並列削減がサポートされます。

並列マップ

並列マップでは、一連のキーのエントリーを処理することができ、処理されたそれぞれのエントリーに対する結果が返されます。アプリケーションでは、キーのリストが作成され、Map オペレーションの呼び出し後、キー/結果ペアの Map を受け取ります。結果は、各キーのエントリーに対して関数が適用されたものです。関数はアプリケーションによって提供されます。

MapGridAgent 呼び出しのフロー

キーのコレクションを使用して AgentManager.callMapAgent メソッドが呼び出されると、MapGridAgent インスタンスがシリアライズされ、各キーで解決されたそれぞれのプライマリー区画に送信されます。すなわち、エージェントに保管されているインスタンス・データは、すべてサーバーに送信できます。したがって、各プライマリー区画は、エージェントのインスタンスを 1 つ保持します。各キーのインスタンスごとに 1 回 process メソッドが呼び出され、その結果、区画が解決されます。各 process メソッドの結果はその後、シリアライズされてクライアントへ返され、マップ・インスタンス内で呼び出し元に返されます。そこでは、結果はマップの中の値として提示されます。

キーのコレクションが指定されずに AgentManager.callMapAgent メソッドが呼び出されると、MapGridAgent インスタンスがシリアライズされ、すべてのプライマリー区画に送信されます。すなわち、エージェントに保管されているインスタンス・データは、すべてサーバーに送信できます。したがって、各プライマリー区画は、エージェントのインスタンス (区画) を 1 つ保持します。processAllEntries メソッドは、区画ごとに呼び出されます。各 processAllEntries メソッドの結果はその後、シリアライズされてクライアントへ返され、マップ・インスタンス内で呼び出し元に返されます。以下の例は、次のような形状の Person エンティティーが存在することを前提とします。

```
import com.ibm.websphere.projector.annotations.Entity;
import com.ibm.websphere.projector.annotations.Id;
@Entity
public class Person
{
  @Id String ssn;
  String firstName;
  String surname;
  int age;
}
```

アプリケーション提供の関数は、MapAgentGrid インターフェースを実装するクラスとして作成されます。次のエージェントの例は、Person の年齢を 2 倍にした値を返す関数を示しています。

```
public class DoublePersonAgeAgent implements MapGridAgent, EntityAgentMixin
{
  private static final long serialVersionUID = -2006093916067992974L;

  int lowAge;
  int highAge;

  public Object process(Session s, ObjectMap map, Object key)
  {
    Person p = (Person)key;
    return new Integer(p.age * 2);
  }

  public Map processAllEntries(Session s, ObjectMap map)
  {
    EntityManager em = s.getEntityManager();
    Query q = em.createQuery("select p from Person p where p.age > ?1 and p.age < ?2");
    q.setParameter(1, lowAge);
    q.setParameter(2, highAge);
    Iterator iter = q.getResultIterator();
    Map<Person, Interger> rc = new HashMap<Person, Integer>();
   while(iter.hasNext())
    {
   Person p = (Person)iter.next();
   rc.put(p, (Integer)process(s, map, p));
  }
  return rc;
 }
 public Class getClassForEntity()
 {
  return Person.class;
 }
}
```

上記の例は、Person を 2 倍にする Map エージェントを示しています。最初の process メソッドでは、処理する Person が提供され、そのエントリーの 2 倍の年齢を返します。 2 番目の process メソッドは、各区画で呼び出され、年齢が lowAge と highAge 間にあるすべての Person オブジェクトを検出し、その年齢を 2 倍にした値を返します。

```
Session s = grid.getSession();
ObjectMap map = s.getMap("Person");
AgentManager amgr = map.getAgentManager();

DoublePersonAgeAgent agent = new DoublePersonAgeAgent();

// make a list of keys
ArrayList<Person> keyList = new ArrayList<Person>();
Person p = new Person();
p.ssn = "1";
keyList.add(p);
p = new Person ();
p.ssn = "2";
keyList.add(p);
```

```
// get the results for those entries
Map<Tuple, Object> = amgr.callMapAgent(agent, keyList);
// Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
s.close();
```

上記の例は、Session の取得と Person Map への参照の取得を行うクライアントを示しています。 エージェント・オペレーションは、特定の Map に対して実行されます。AgentManager インターフェースはその Map から取得されます。呼び出されるエージェントのインスタンスが作成され、属性を設定することにより、必要な状態がオブジェクトに追加されます。ただし、この例では追加はありません。次に、キーのリストが構成されます。person 1 については 2 倍にした値と、person 2 については同じ値を保持する Map が戻されます。

エージェントがキー・セットに対して呼び出されます。指定したキーを使用して、グリッド内の各区画で、並行してエージェントの process メソッドが呼び出されます。Map は、指定のキーに対する結果をマージして戻されます。この例では、person 1 の年齢を 2 倍にした値および person 2 の同様の値を保持する Map が返されます。

キーが存在しない場合でも、エージェントは呼び出されます。この呼び出しによって、マップ・エントリーを作成する機会がエージェントに与えられます。EntityAgentMixin を使用している場合は、処理するキーはエンティティーではなく、エンティティーに対する実際の Tuple キー値になります。キーが不明である場合は、特定の形状の Person オブジェクトを検出して、それぞれの年齢の 2 倍の値を返すよう、すべての区画に要求することができます。次に例を挙げます。

```
Session s = grid.getSession();
  ObjectMap map = s.getMap("Person");
  AgentManager amgr = map.getAgentManager();

  DoublePersonAgeAgent agent = new DoublePersonAgeAgent();
  agent.lowAge = 20;
  agent.highAge = 9999;

  Map m = amgr.callMapAgent(agent);
```

上の例では、 AgentManager が Person Map のために取得され、エージェントは、該当の Person の最小年齢と最大年齢で構成され、初期化されています。次に、callMapAgent メソッドを使用してエージェントが呼び出されます。キーが提供されていないことに注意してください。結果として、ObjectGrid は、グリッド内のすべての区画でエージェントを並行して呼び出し、マージした結果をクライアントに返します。このリターンのセットは、最低と最高の間にある年齢を持つ、グリッド内のすべての Person オブジェクトを含み、それらの Person オブジェクトの年齢の 2 倍を計算します。この例は、グリッド API をどのように使用すれば、特定の照会と一致するエンティティーを検出する照会を実行できるかを示しています。エージェントは、ObjectGrid により、シリアライズされて、必要なエントリーとともに区画へトランスポートされます。結果も同様に、クライアントへのトランスポートのためにシリアライズされます。Map API には注意が必要です。仮に、ObjectGrid がテラバイト単位のオブジェクトをホストしていて、多数のサーバーで実行されるようなことがあったとすると、クライアント・マシンはこの処理に対応できなかったと思われます。 Map API を使用して小規模のサブセットを処理するようにしてくだ

さい。大規模なサブセットを処理する必要がある場合は、削減エージェントを使用して、1 つのクライアントではなくデータ・グリッド内で処理を行うようにしてください。

並列削減または集約エージェント

このスタイルのプログラミングでは、エントリーのサブセットが処理され、エントリーのグループに対して単一の結果が計算されます。このような結果の例は、次のとおりです。

- 最小値
- 最大値
- その他のビジネス固有関数

削減エージェントのコーディングおよび呼び出しは、Map エージェントと似ています。

ReduceGridAgent 呼び出しのフロー

キーのコレクションを使用して AgentManager.callReduceAgent メソッドが呼び出されると、ReduceGridAgent インスタンスがシリアライズされ、各キーで解決されたそれぞれのプライマリー区画に送信されます。すなわち、エージェントに保管されているインスタンス・データは、すべてサーバーに送信できます。したがって、各プライマリー区画は、エージェントのインスタンスを 1 つ保持します。reduce(Sessions, ObjectMap map, Collection keys) メソッドは、インスタンス (区画) ごとに 1 回、区画に解決されるキーのサブセットを指定して呼び出されます。各 reduce メソッドの結果はその後、シリアライズされてクライアントへ返されます。reduceResults メソッドは、各リモートでの reduce 呼び出しから返されたそれぞれの結果のコレクションを使用して、クライアント ReduceGridAgent インスタンスに対して呼び出されます。reduceResults メソッドの結果は、callReduceAgent メソッドの呼び出し元に返されます。

キーのコレクションが指定されずに AgentManager.callReduceAgent メソッドが呼び出されると、ReduceGridAgent インスタンスがシリアライズされ、各プライマリー区画に送信されます。すなわち、エージェントに保管されているインスタンス・データは、すべてサーバーに送信できます。したがって、各プライマリー区画は、エージェントのインスタンスを 1 つ保持します。reduce(Session s, ObjectMap map) メソッドは、インスタンス (区画) ごとに 1 回呼び出されます。各 reduce メソッドの結果はその後、シリアライズされてクライアントへ返されます。reduceResults メソッドは、各リモートでの reduce 呼び出しから返されたそれぞれの結果のコレクションを使用して、クライアント ReduceGridAgent インスタンスに対して呼び出されます。reduceResults メソッドの結果は、callReduceAgent メソッドの呼び出し元に返されます。適合するエントリーの年齢を単純に加算する削減エージェントの例を以下に示します。

```
package com.ibm.ws.objectgrid.test.agent.jdk5;

import java.util.Collection;
import java.util.Iterator;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.EntryErrorValue;
import com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.ReduceGridAgent;
import com.ibm.websphere.objectgrid.query.ObjectQuery;
import com.ibm.websphere.samples.objectgrid.entityxmlgen.PersonFeature1Entity.PersonKey;
```

```
public class SumAgeReduceAgent implements ReduceGridAgent {
 private static final long serialVersionUID = 2521080771723284899L;

 /**
  * Invoked on the server if a collection of keys is passed to
  * AgentManager.callReduceAgent(). This is invoked on each primary shard
  * where the key applies.
  */
 public Object reduce(Session s, ObjectMap map, Collection keyList) {
  try {
   int sum = 0;
   Iterator<PersonKey> iter = keyList.iterator();
   while (iter.hasNext()) {
    Object nextKey = iter.next();
    PersonKey pk = (PersonKey) nextKey;
    Person p = (Person) map.get(pk);
    sum += p.age;
   }

   return sum;
  } catch (Exception e) {
   throw new RuntimeException(e.getMessage(), e);
  }
 }

 /**
  * Invoked on the server if a collection of keys is NOT passed to
  * AgentManager.callReduceAgent(). This is invoked on every primary shard.
  */
 public Object reduce(Session s, ObjectMap map) {
  ObjectQuery q = s
    .createObjectQuery("select p from Person p where p.age > -1");
  Iterator<Person> iter = q.getResultIterator();
  int sum = 0;
  while (iter.hasNext()) {
   Object nextKey = iter.next();
   Person p = (Person) nextKey;
   sum += p.age;
  }
  return sum;
 }

 /**
  * Invoked on the client to reduce the results from all partitions.
  */
 public Object reduceResults(Collection results) {
  // If we encounter an EntryErrorValue, then throw a RuntimeException
  // to indicate that there was at least one failure and include each
  // EntryErrorValue
  // as part of the thrown exception.
  Iterator<Integer> iter = results.iterator();
  int sum = 0;
  while (iter.hasNext()) {
   Object nextResult = iter.next();
   if (nextResult instanceof EntryErrorValue) {
    EntryErrorValue eev = (EntryErrorValue) nextResult;
    throw new RuntimeException(
      "Error encountered on one of the partitions: "
        + nextResult, eev.getException());
   }

   sum += ((Integer) nextResult).intValue();
  }
  return new Integer(sum);
 }
}
```

上の例はエージェントを示しています。このエージェントには、3 つの重要部分があります。1 番目の部分では、特定のエントリー・セットが照会なしで処理されます。そのエントリー・セットが繰り返されて、年齢が加算されます。メソッドから合計が返されます。 2 番目の部分では、照会が使用され、集約されるエントリーが選択されます。該当するすべての Person の年齢が合計されます。 3 番目のメソッドは、各区画からの結果を単一の結果に集約するために使用されます。ObjectGrid では、グリッド中のエントリー集約が並行して実行されます。各区画で中間結果が作成されるので、それを他の区画の中間結果と合わせて集約する必要があります。3 番目のメソッドでこのタスクが実行されます。次の例では、エージェントが呼び出され、年齢を 10 歳から 20 歳までに限定したすべての Person の年齢が集約されます。

```
Session s = grid.getSession();
ObjectMap map = s.getMap("Person");
AgentManager amgr = map.getAgentManager();

SumAgeReduceAgent agent = new SumAgeReduceAgent();

Person p = new Person();
p.ssn = "1";
ArrayList<Person> list = new ArrayList<Person>();
list.add(p);
p = new Person ();
p.ssn = "2";
list.add(p);
Integer v = (Integer)amgr.callReduceAgent(agent, list);
// Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
s.close();
```

エージェントの機能

エージェントは、それが稼働しているローカル断片の内部で、自由に ObjectMap または EntityManager 操作を実行できます。エージェントは Session を受け取り、その Session が表す区画のデータの追加、更新、照会、読み取り、または削除を行うことができます。グリッドからデータを照会するだけのアプリケーションもありますが、特定の照会に一致するすべての Person の年齢を 1 だけ増やすようなエージェントを作成することもできます。エージェントが呼び出されるときには Session にトランザクションがあり、例外がスローされない限り、エージェントが戻るときにそのトランザクションはコミットされます。

エラー処理

マップ・エージェントが不明なキーで呼び出されると、返される値は、EntryErrorValue インターフェースを実装するエラー・オブジェクトです。

トランザクション

マップ・エージェントはクライアントから分離したトランザクションで実行されます。エージェントの呼び出しは単一トランザクションにグループ化される場合があります。エージェントが失敗して、例外をスローすると、トランザクションはロールバックされます。トランザクション内で正常に実行したエージェントがある場合、失敗したエージェントと一緒にそれらのエージェントもロールバックされます。AgentManager は、正常に実行した、ロールバックされたエージェントを、新しいトランザクションで再実行します。

関連情報:

Java DataGrid API

クライアントのプログラマチック構成

Java

クライアント・サイドの設定をプログラマチックにオーバーライドすることができます。サーバー・サイド ObjectGrid インスタンスと同様の構造を持つ ObjectGridConfiguration オブジェクトを作成します。

このタスクについて

以下のコード例では、XML 構成を使用したクライアントの構成で説明されているのと同じオーバーライドを作成します。

クライアントでオーバーライドできるプラグインおよび属性のリストについては、『クライアント・オーバーライド』を参照してください。

手順

以下のコードでは、クライアント・サイドの ObjectGrid インスタンスを作成します。

```
ObjectGridConfiguration companyGridConfig = ObjectGridConfigFactory
    .createObjectGridConfiguration("CompanyGrid");
Plugin txCallbackPlugin = ObjectGridConfigFactory.createPlugin(
    PluginType.TRANSACTION_CALLBACK, "com.company.MyClientTxCallback");
companyGridConfig.addPlugin(txCallbackPlugin);

Plugin ogEventListenerPlugin = ObjectGridConfigFactory.createPlugin(
    PluginType.OBJECTGRID_EVENT_LISTENER, "");
companyGridConfig.addPlugin(ogEventListenerPlugin);

BackingMapConfiguration customerMapConfig = ObjectGridConfigFactory
    .createBackingMapConfiguration("Customer");
customerMapConfig.setNumberOfBuckets(1429);
Plugin evictorPlugin = ObjectGridConfigFactory.createPlugin(PluginType.EVICTOR,
    "com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.LRUEvictor");
customerMapConfig.addPlugin(evictorPlugin);

companyGridConfig.addBackingMapConfiguration(customerMapConfig);

BackingMapConfiguration orderLineMapConfig = ObjectGridConfigFactory
    .createBackingMapConfiguration("OrderLine");
orderLineMapConfig.setNumberOfBuckets(701);
orderLineMapConfig.setTimeToLive(800);
orderLineMapConfig.setTtlEvictorType(TTLType.LAST_ACCESS_TIME);

companyGridConfig.addBackingMapConfiguration(orderLineMapConfig);

List ogConfigs = new ArrayList();
ogConfigs.add(companyGridConfig);

Map overrideMap = new HashMap();
overrideMap.put(CatalogServerProperties.DEFAULT_DOMAIN, ogConfigs);

ogManager.setOverrideObjectGridConfigurations(overrideMap);
ClientClusterContext client = ogManager.connect(catalogServerEndpoints, null, null);
ObjectGrid companyGrid = ogManager.getObjectGrid(client, objectGridName);
```

ObjectGridManager の ogManager インスタンスは、overrideMap マップに組み込まれている ObjectGridConfiguration オブジェクトおよび BackingMapConfiguration オブジェクトのオーバーライドのみをチェックします。例えば、上記のコードは、OrderLine マップ上のバケットの数をオーバーライドします。ただし、そのマップに対する構成が組み込まれていないため、クライアント・サイドの Order マップは変更されないままです。

クライアント・オーバーライド: Java

サーバーの設定をオーバーライドすることにより、要件に基づいて WebSphere eXtreme Scale クライアントを構成することができます。いくつかのプラグインおよび属性をオーバーライドすることができます。

クライアントの設定をオーバーライドするには、XML 構成またはプログラマチック構成のいずれかを使用することができます。クライアント設定のオーバーライドに

ついて詳しくは、XML 構成を使用したクライアントの構成および 565 ページの『クライアントのプログラマチック構成』を参照してください。

クライアント上で以下のプラグインをオーバーライドできます。

- **BackingMap プラグイン**
  - Evictor プラグイン
  - MapEventListener プラグイン
  - BackingMapLifecycleListener プラグイン
  - MapSerializerPlugin プラグイン
- **BackingMap 属性**
  - numberOfBuckets 属性

    非推奨:  このプロパティーは非推奨です。ニア・キャッシュを使用可能にするには nearCacheEnabled 属性を使用します。
  - timeToLive 属性
  - ttlEvictorType 属性
  - evictionTriggers 属性
  - 8.6+ nearCacheEnabled 属性
  - 8.6+ nearCacheInvalidationEnabled 属性
  - 8.6+ nearCacheLastAccessTTLSyncEnabled 属性
- **ObjectGrid プラグイン**
  - TransactionCallback プラグイン
  - ObjectGridEventListener プラグイン
  - ObjectGridLifecycleListener プラグイン
- **ObjectGrid 属性**
  - entityMetadataXMLFile 属性
  - txTimeout 属性
  - txIsolation 属性

クライアント・サイドのマップ・レプリカ生成の使用可能化: Java

より速くデータを使用できるようにするため、クライアント・サイド上のマップのレプリカ生成を使用可能にすることもできます。

eXtreme Scale により、非同期レプリカ生成を使用して、サーバー・マップを 1 つ以上のクライアントに複製することができます。クライアントは ClientReplicableMap.enableClientReplication メソッドを使用して、サーバー・サイド・マップのローカルの読み取り専用コピーを要求できます。

```
void enableClientReplication(Mode mode, int[] partitions,
 ReplicationMapListener listener) throws ObjectGridException;
```

最初のパラメーターはレプリカ生成モードです。このモードには、連続レプリカ生成またはスナップショット・レプリカ生成を指定できます。2 番目のパラメーターは、データの複製元の区画を表す区画 ID の配列です。この値がヌルの場合、また

は空の配列の場合、データはすべての区画から複製されます。最後のパラメーターは、クライアント・レプリカ生成イベントを受信するためのリスナーです。詳しくは、API 資料の ClientReplicableMap および ReplicationMapListener を参照してください。

レプリカ生成が有効になると、サーバーはクライアントへのマップの複製を開始します。結局のところ、クライアントは、どの時点においてもわずか数トランザクションでサーバーに到達します。

REST データ・サービスでのデータへのアクセス

Java

REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連資料:

Java 574 ページの『REST データ・サービスでのオプティミスティック並行性』
eXtreme Scale REST データ・サービスは、ネイティブ HTTP ヘッダーの If-Match、If-None-Match、および ETag を使用して、オプティミスティック・ロック・モデルを使用します。これらのヘッダーは、要求および応答メッセージで送信され、サーバーとクライアント間でエンティティーのバージョン情報を中継します。

Java 575 ページの『REST データ・サービスの要求プロトコル』
一般的に、REST サービスと対話するためのプロトコルは、WCF Data Services AtomPub プロトコルで説明したプロトコルと同じです。ただし、eXtreme Scale は、eXtreme Scale エンティティー・モデルの観点から、さらに詳細な情報を提供します。このセクションを読むには、ユーザーは、WCF Data Services プロトコルを熟知している必要があります。または、WCF Data Services プロトコルのセクションを参照しながらこのセクションを読むこともできます。

Java 576 ページの『REST データ・サービスでの取得要求』
RetrieveEntity 要求を使用して、クライアントで eXtreme Scale エンティティーを取得できます。応答ペイロードには、AtomPub または JSON フォーマットのエンティティー・データが含まれます。また、システム・オペレーター $expand を使用して、関係を拡張できます。関係は、Atom Feed Document (対多関係) または Atom Entry Document (対 1 関係) として、データ・サービスの応答内に線で表されます。

Java 584 ページの『REST データ・サービスでの非エンティティーの取得』
REST データ・サービスでは、エンティティー・コレクションやプロパティーなど、エンティティー以外のものも取得できます。

Java 590 ページの『REST データ・サービスでの挿入要求』
InsertEntity 要求を使用して、新しい関連エンティティーが含まれている可能性がある新しい eXtreme Scale エンティティー・インスタンスを eXtreme Scale REST データ・サービスに挿入できます。

Java 594 ページの『REST データ・サービスでの更新要求』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、エンティティー、エンティテ

ィー・プリミティブ・プロパティーなどの更新要求をサポートします。

Java 599 ページの『REST データ・サービスでの削除要求』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスでは、エンティティー、プロパティー値、およびリンクを削除できます。

REST データ・サービスの操作

Java

eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

REST サービスは、OData プロトコル (OData protocol) の一部である MicrosoftAtom Publishing Protocol: データ・サービス URI およびペイロード拡張 (Microsoft Atom Publishing Protocol: Data Services URI and Payload Extensions) の仕様バージョン 1.0 のサブセットを実装します。 このトピックでは、仕様のどのフィーチャーがサポートされ、どのように eXtreme Scale にマップされるのかについて説明します。

サービス・ルート URI

Microsoft WCF Data Services は通常、データ・ソースごとまたはエンティティー・モデルごとにサービスを定義します。 eXtreme Scale REST データ・サービスは、定義された ObjectGrid ごとにサービスを定義します。eXtreme Scale ObjectGrid クライアント・オーバーライド XML ファイルで定義された各 ObjectGrid は、個別の REST サービス・ルートとして自動的に公開されます。

ルート・サービスの URI は以下のとおりです。

`http://host:port/contextroot/restservice/gridname`

各部の意味は、次のとおりです。

- *contextroot* は、REST データ・サービス・アプリケーションをデプロイする際に定義され、アプリケーション・サーバーに依存する。
- *gridname* は、ObjectGrid の名前である。

要求の種類

以下のリストで、eXtreme Scale REST データ・サービスがサポートする Microsoft WCF Data Services の要求の種類を説明します。WCF Data Services がサポートする各要求の種類について詳しくは、MSDN: Request Types を参照してください。

挿入要求の種類

クライアントは、POST HTTP verb を使用してリソースを挿入できますが、以下の制限があります。

- InsertEntity 要求: サポートされます。
- InsertLink 要求: サポートされます。

- InsertMediaResource 要求: メディア・リソースのサポート制限のためにサポートされません。

追加情報については、MSDN: Insert Request Types を参照してください。

更新要求の種類

クライアントは、PUT verb および MERGE HTTP verb を使用してリソースを更新できますが、以下の制限があります。

注: 8.6+ upsert および upsertAll メソッドが ObjectMap の put および putAll メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、upsert メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

- UpdateEntity 要求: サポートされます。
- UpdateComplexType 要求: 複合型制限のためにサポートされません。
- UpdatePrimitiveProperty 要求: サポートされます。
- UpdateValue 要求: サポートされます。
- UpdateLink 要求: サポートされます。
- UpdateMediaResource 要求: メディア・リソースのサポート制限のためにサポートされません。

追加情報については、MSDN: Insert Request Types を参照してください。

削除要求の種類

クライアントは、DELETE HTTP verb を使用してリソースを削除できますが、以下の制限があります。

- DeleteEntity 要求: サポートされます。
- DeleteLink 要求: サポートされます。
- DeleteValue 要求: サポートされます。

追加情報については、MSDN: Delete Request Types を参照してください。

取得要求の種類

クライアントは、GET HTTP verb を使用してリソースを取得できますが、以下の制限があります。

- RetrieveEntitySet 要求: サポートされます。
- RetrieveEntity 要求: サポートされます。
- RetrieveComplexType 要求: 複合型制限のためにサポートされません。
- RetrievePrimitiveProperty 要求: サポートされます。
- RetrieveValue 要求: サポートされます。
- RetrieveServiceMetadata 要求: サポートされます。
- RetrieveServiceDocument 要求: サポートされます。

- RetrieveLink 要求: サポートされます。
- カスタマイズ可能なフィード・マッピングを含む取得要求: サポートされません。
- RetrieveMediaResource: メディア・リソースのサポート制限のためにサポートされません。

追加情報については、MSDN: Retrieve Request Types を参照してください。

システム照会オプション

クライアントがエンティティーの集合、または単一エンティティーを識別できるような照会がサポートされます。 システム照会オプションは、データ・サービス URI で指定され、以下の制限の下でサポートされます。

- $expand: サポートされます。
- $filter: サポートされます。
- $orderby: サポートされます。
- $format: サポートされません。 許容可能な形式は、HTTP Accept 要求ヘッダーで認識されます。
- $skip: サポートされます。
- $top: サポートされます。

追加情報については、MSDN: System Query Options を参照してください。

区画ルーティング

区画ルーティングはルート・エンティティーを基にします。要求 URI のリソース・パスがルート・エンティティーから始まる場合、あるいはルート・エンティティーに直接的または間接的なアソシエーションを持つエンティティーから始まる場合、要求 URI はルート・エンティティーを示します。区画に分割された環境では、ルート・エンティティーを示すことのできない要求はすべて拒否されます。 ルート・エンティティーを示す要求はいずれも正しい区画に経路指定されます。

アソシエーションおよびルート・エンティティーを使ったスキーマの定義に関する追加情報は、eXtreme Scale のスケーラブル・データ・モデルおよび区画化参照してください。

呼び出し要求

呼び出し要求はサポートされません。追加情報については、MSDN: Invoke Request を参照してください。

バッチ要求

クライアントは、単一の要求内で複数の変更設定または照会操作をバッチ処理することができます。これによって、サーバーへの往復回数は減り、単一トランザクションに関与する複数の要求が可能になります。追加情報については、MSDN: Batch Request を参照してください。

トンネル要求

トンネル要求はサポートされません。追加情報については、MSDN: Tunneled Requests を参照してください。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

関連資料:

Java 『REST データ・サービスでのオプティミスティック並行性』
eXtreme Scale REST データ・サービスは、ネイティブ HTTP ヘッダーの If-Match、If-None-Match、および ETag を使用して、オプティミスティック・ロック・モデルを使用します。これらのヘッダーは、要求および応答メッセージで送信され、サーバーとクライアント間でエンティティーのバージョン情報を中継します。

Java 575 ページの『REST データ・サービスの要求プロトコル』
一般的に、REST サービスと対話するためのプロトコルは、WCF Data Services AtomPub プロトコルで説明したプロトコルと同じです。ただし、eXtreme Scale は、eXtreme Scale エンティティー・モデルの観点から、さらに詳細な情報を提供します。このセクションを読むには、ユーザーは、WCF Data Services プロトコルを熟知している必要があります。または、WCF Data Services プロトコルのセクションを参照しながらこのセクションを読むこともできます。

Java 576 ページの『REST データ・サービスでの取得要求』
RetrieveEntity 要求を使用して、クライアントで eXtreme Scale エンティティーを取得できます。応答ペイロードには、AtomPub または JSON フォーマットのエンティティー・データが含まれます。また、システム・オペレーター $expand を使用して、関係を拡張できます。関係は、Atom Feed Document (対多関係) または Atom Entry Document (対 1 関係) として、データ・サービスの応答内に線で表されます。

Java 584 ページの『REST データ・サービスでの非エンティティーの取得』
REST データ・サービスでは、エンティティー・コレクションやプロパティーなど、エンティティー以外のものも取得できます。

Java 590 ページの『REST データ・サービスでの挿入要求』
InsertEntity 要求を使用して、新しい関連エンティティーが含まれている可能性がある新しい eXtreme Scale エンティティー・インスタンスを eXtreme Scale REST データ・サービスに挿入できます。

Java 594 ページの『REST データ・サービスでの更新要求』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、エンティティー、エンティティー・プリミティブ・プロパティーなどの更新要求をサポートします。

Java 599 ページの『REST データ・サービスでの削除要求』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスでは、エンティティー、プロパティー値、およびリンクを削除できます。

REST データ・サービスでのオプティミスティック並行性

Java

eXtreme Scale REST データ・サービスは、ネイティブ HTTP ヘッダーの If-Match、If-None-Match、および ETag を使用して、オプティミスティック・ロック・モデルを使用します。これらのヘッダーは、要求および応答メッセージで送信され、サーバーとクライアント間でエンティティーのバージョン情報を中継します。

オプティミスティック並行性の詳細については、MSDN Library: Optimistic Concurrency (ADO.NET) を参照してください。

eXtreme Scale REST データ・サービスでは、バージョン属性がエンティティーのエンティティー・スキーマで定義されている場合は、そのエンティティーでオプティミスティック並行性を使用できます。Java クラスの @Version アノテーション、またはエンティティー記述子 XML ファイルを使用して定義されたエンティティーの <version/> 属性によって、エンティティー・スキーマでバージョン・プロパティーを定義できます。 eXtreme Scale REST データ・サービスは、複数のエンティティー XML 応答のペイロード内で m:etag 属性を使用して、そして複数のエンティティー JSON 応答のペイロード内で etag 属性を使用して、単一エンティティー応答の ETag ヘッダーに入れ、バージョン・プロパティーの値をクライアントに自動的に伝搬します。

eXtreme Scale エンティティー・スキーマの定義の詳細については、 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』を参照してください。

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

REST データ・サービスの要求プロトコル

Java

一般的に、REST サービスと対話するためのプロトコルは、WCF Data Services AtomPub プロトコルで説明したプロトコルと同じです。ただし、eXtreme Scale は、eXtreme Scale エンティティー・モデルの観点から、さらに詳細な情報を提供します。このセクションを読むには、ユーザーは、WCF Data Services プロトコルを

熟知している必要があります。または、WCF Data Services プロトコルのセクションを参照しながらこのセクションを読むこともできます。

要求および応答について説明するために例を示しています。これらの例は、eXtreme Scale REST データ・サービスと WCF Data Services の両方に適用されます。Web ブラウザーではデータを取得することしかできないため、CUD (作成、更新、および削除) 操作は、Java、JavaScript、RUBY、PHP などの別のクライアントで実行する必要があります。

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

REST データ・サービスでの取得要求: Java

RetrieveEntity 要求を使用して、クライアントで eXtreme Scale エンティティーを取得できます。応答ペイロードには、AtomPub または JSON フォーマットのエンティティー・データが含まれます。また、システム・オペレーター $expand を使用して、関係を拡張できます。関係は、Atom Feed Document (対多関係) または Atom Entry Document (対 1 関係) として、データ・サービスの応答内に線で表されます。

ヒント: WCF Data Services で定義されている RetrieveEntity プロトコルの詳細については、MSDN: RetrieveEntity Request を参照してください。

エンティティーの取得

以下の RetrieveEntity の例では、キーで Customer エンティティーを取得します。

AtomPub

- メソッド

  GET
- 要求 URI:

  http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('ACME')

- 要求ヘッダー:

  Accept: application/atom+xml
- 要求ペイロード:

  なし
- 応答ヘッダー:

  Content-Type: application/atom+xml
- 応答ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<entry xml:base = "http://localhost:8080/wxsrestservice/
restservice" xmlns:d= "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/
08/dataservices" xmlns:m = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/
08/dataservices/metadata" xmlns = "http://www.w3.org/2005/Atom">

<category term = "NorthwindGridModel.Customer" scheme = "http://
schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme"/>
<id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
   NorthwindGrid/Customer('ACME')</id>
    <title type = "text"/>
    <updated>2009-12-16T19:52:10.593Z</updated>
    <author>
        <name/>
    </author>
    <link rel = "edit" title = "Customer" href = "Customer(
     'ACME')"/>
    <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
     dataservices/related/
orders" type = "application/atom+xml;type=feed" title =
  "orders" href ="Customer('ACME')/orders"/>
    <content type = "application/xml">
        <m:properties>
            <d:customerId>ACME</d:customerId>
            <d:city m:null = "true"/>
            <d:companyName>RoaderRunner</d:companyName>
            <d:contactName>ACME</d:contactName>
            <d:country m:null = "true"/>
            <d:version m:type = "Edm.Int32">3</d:version>
        </m:properties>
    </content>
</entry>
```

- 応答コード:

  200 OK

JSON

- メソッド

  GET
- 要求 URI:

  http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('ACME')
- 要求ヘッダー:

  Accept: application/json
- 要求ペイロード:

なし

- 応答ヘッダー:

  Content-Type: application/json

- 応答ペイロード:

```
{"d":{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/
   restservice/NorthwindGrid/Customer('ACME')",
   "type":"NorthwindGridModel.Customer"},
   "customerId":"ACME",
   "city":null,
   "companyName":"RoaderRunner",
   "contactName":"ACME",
   "country":null,
   "version":3,
   "orders":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
      wxsrestservice/restservice/
   NorthwindGrid/Customer('ACME')/orders"}}}}
```

- 応答コード:

  200 OK

照会

RetrieveEntitySet 要求または RetrieveEntity 要求で照会を使用することもできます。照会は、$filter システム・オペレーターで指定します。

$filter オペレーターの詳細については、MSDN: Filter System Query Option ($filter) を参照してください。

OData プロトコルは、いくつかの一般的な式をサポートします。 eXtreme Scale REST データ・サービスは、仕様で定義されている式の以下のサブセットをサポートします。

- ブール式:
  - eq、ne、lt、le、gt、ge
  - 否定
  - not
  - 括弧
  - and、or
- 演算式:
  - add
  - sub
  - mul
  - div
- プリミティブ・リテラル
  - ストリング
  - date-time
  - decimal
  - single

  - double
  - int16
  - int32
  - int64
  - バイナリー
  - ヌル
  - バイト

以下の式は、使用できません。

- ブール式:
  - isof
  - cast
- メソッド呼び出し式
- 演算式:
  - mod
- プリミティブ・リテラル:
  - Guid
- メンバー式

Microsoft WCF Data Services で使用可能な式の完全なリストおよび説明については、セクション 2.2.3.6.1.1 (Common Expression Syntax) を参照してください。

以下の例では、照会を使用した RetrieveEntity 要求を示します。この例では、契約名が「RoadRunner」であるすべての Customer が取得されます。応答ペイロードに示すように、このフィルターに一致する唯一の Customer は Customer('ACME') です。

制約事項: この照会は、非区画化エンティティーでのみ機能します。 Customer が区画化されている場合は、Customer に属するキーが取得されます。

AtomPub

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer?$filter=contactName eq 'RoadRunner'
- 要求ヘッダー: Accept: application/atom+xml
- 入力ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/atom+xml
- 応答ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="Shift_JIS"?>
<feed
 xml:base="http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice"
 xmlns:d="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
   dataservices"
 xmlns:m="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
   dataservices/metadata"
 xmlns="http://www.w3.org/2005/Atom">
 <title type="text">Customer</title>
```

```
 <id>  http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
   NorthwindGrid/Customer </id>
 <updated>2009-09-16T04:59:28.656Z</updated>
 <link rel="self" title="Customer" href="Customer" />
 <entry>
  <category term="NorthwindGridModel.Customer"
   scheme="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
   dataservices/scheme" />
  <id>
http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
  Customer('ACME')</id>
  <title type="text" />
  <updated>2009-09-16T04:59:28.656Z</updated>
  <author>
   <name />
  </author>
  <link rel="edit" title="Customer" href="Customer('ACME')" />
  <link
   rel="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/
      related/orders"
   type="application/atom+xml;type=feed" title="orders"
   href="Customer('ACME')/orders" />
  <content type="application/xml">
     <m:properties>
            <d:customerId>ACME</d:customerId>
            <d:city m:null = "true"/>
            <d:companyName>RoaderRunner</d:companyName>
            <d:contactName>ACME</d:contactName>
            <d:country m:null = "true"/>
            <d:version m:type = "Edm.Int32">3</d:version>
       </m:properties>
  </content>
 </entry>
</feed>
```

- 応答コード: 200 OK

JSON

- メソッド: GET
- 要求 URI:

  http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
  Customer?$filter=contactName eq 'RoadRunner'

- 要求ヘッダー: Accept: application/json
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/json
- 応答ペイロード:

```
{"d":[{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/
   restservice/NorthwindGrid/Customer('ACME')",
   "type":"NorthwindGridModel.Customer"},
   "customerId":"ACME",
   "city":null,
   "companyName":"RoaderRunner",
   "contactName":"ACME",
   "country":null,
   "version":3,
   "orders":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
     wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
     Customer('ACME')/orders"}}}]}
```

- 応答コード: 200 OK

$expand システム・オペレーター

$expand システム・オペレーターを使用して、アソシエーションを拡張できます。データ・サービス応答内で、アソシエーションは線で表されます。多値 (対多) アソシエーションは、Atom Feed Document または JSON 配列として表されます。単一値 (対 1) アソシエーションは、Atom Entry Document または JSON オブジェクトとして表されます。

$expand システム・オペレーターの詳細については、Expand System Query Option ($expand) を参照してください。

ここでは、$expand システム・オペレーターの使用例を示します。この例では、5000、5001、およびその他の Order が関連付けられているエンティティー Customer('IBM') を取得します。 $expand 節は「orders」に設定され、応答ペイロード内で、オーダー・コレクションはインラインで拡張されます。この例では、5000 および 5001 の Order のみが表示されます。

AtomPub

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer ('IBM')?$expand=orders
- 要求ヘッダー: Accept: application/atom+xml
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/atom+xml
- 応答ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<entry xml:base = "http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice"
   xmlns:d ="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices"
   xmlns:m = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/
   metadata" xmlns = "http://www.w3.org/2005/Atom">
<category term = "NorthwindGridModel.Customer" scheme = "http://schemas.

microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme"/>
    <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
    Customer('IBM')</id>
    <title type = "text"/>
    <updated>2009-12-16T22:50:18.156Z</updated>
    <author>
        <name/>
    </author><link rel = "edit" title = "Customer" href =
    "Customer('IBM')"/>
    <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/
    related/orders" type = "application/atom+xml;type=feed" title =
    "orders" href = "Customer('IBM')/orders">
        <m:inline>
            <feed>
                <title type = "text">orders</title>
                <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
             NorthwindGrid/Customer('IBM')/orders</id>
                <updated>2009-12-16T22:50:18.156Z</updated>
                <link rel = "self" title = "orders" href = "Customer
          ('IBM')/orders"/>
                <entry>
                    <category term = "NorthwindGridModel.Order" scheme =
           "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
           dataservices/scheme"/>
                    <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
```

```
                NorthwindGrid/Order(orderId=5000,customer_customerId=
                  'IBM')</id>
                          <title type = "text"/>
                          <updated>2009-12-16T22:50:18.156Z</updated>
                          <author>
                              <name/>
                          </author>
                          <link rel = "edit" title = "Order" href =
                "Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')"/>
                          <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
                dataservices/related/customer" type = "application/
                atom+xml;type=entry" title ="customer" href =
                "Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')/customer"/>
                          <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
                dataservices/related/orderDetails" type = "application/
                 atom+xml;type=feed" title ="orderDetails" href =
                 "Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')/orderDetails"/>
                          <content type = "application/xml">
                              <m:properties>
                                  <d:orderId m:type = "Edm.Int32">5000</d:orderId>
                                  <d:customer_customerId>IBM</d:customer_customerId>
                                  <d:orderDate m:type = "Edm.DateTime">
                       2009-12-16T19:46:29.562</d:orderDate>
                                  <d:shipCity>Rochester</d:shipCity>
                                  <d:shipCountry m:null = "true"/>
                                  <d:version m:type = "Edm.Int32">0</d:version>
                              </m:properties>
                          </content>
                       </entry>
                       <entry>
                          <category term = "NorthwindGridModel.Order" scheme =
                 "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
                 dataservices/scheme"/>
                          <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
                NorthwindGrid/Order(orderId=5001,customer_customerId=
                'IBM')</id>
                          <title type = "text"/>
                          <updated>2009-12-16T22:50:18.156Z</updated>
                          <author>
                              <name/></author>
                          <link rel = "edit" title = "Order" href = "Order(
          orderId=5001,customer_customerId='IBM')"/>
                          <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/
                    08/dataservices/related/customer" type =
                    "application/atom+xml;type=entry" title =
                    "customer" href = "Order(orderId=5001,customer_customerId=
                    'IBM')/customer"/>
                          <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
                     dataservices/related/orderDetails" type =
                     "application/atom+xml;type=feed" title =
                     "orderDetails" href = "Order(orderId=5001,
                     customer_customerId='IBM')/orderDetails"/>
                          <content type = "application/xml">
                              <m:properties>
                                  <d:orderId m:type = "Edm.Int32">5001</d:orderId>
                                  <d:customer_customerId>IBM</d:customer_customerId>
                                  <d:orderDate m:type = "Edm.DateTime">2009-12-16T19:
                          50:11.125</d:orderDate>
                                  <d:shipCity>Rochester</d:shipCity>
                                  <d:shipCountry m:null = "true"/>
                                  <d:version m:type = "Edm.Int32">0</d:version>
                              </m:properties>
                          </content>
                       </entry>
                    </feed>
                 </m:inline>
              </link>
```

```
    <content type = "application/xml">
        <m:properties>
            <d:customerId>IBM</d:customerId>
            <d:city m:null = "true"/>
            <d:companyName>IBM Corporation</d:companyName>
            <d:contactName>John Doe</d:contactName>
            <d:country m:null = "true"/>
            <d:version m:type = "Edm.Int32">4</d:version>
        </m:properties>
    </content>
</entry>
```

- 応答コード: 200 OK

JSON

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')?$expand=orders
- 要求ヘッダー: Accept: application/json
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/json
- 応答ペイロード:

```
{"d":{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/
   restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')",
 "type":"NorthwindGridModel.Customer"},
"customerId":"IBM",
"city":null,
"companyName":"IBM Corporation",
"contactName":"John Doe",
"country":null,
"version":4,
"orders":[{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/
    wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(
    orderId=5000,customer_customerId='IBM')",
"type":"NorthwindGridModel.Order"},
"orderId":5000,
"customer_customerId":"IBM",
"orderDate":"¥/Date(1260992789562)¥/",
"shipCity":"Rochester",
"shipCountry":null,
"version":0,
"customer":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
   wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(
   orderId=5000,customer_customerId='IBM')/customer"}},
"orderDetails":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:
     8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
     Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')/
     orderDetails"}}},
{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/
     restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=5001,
     customer_customerId='IBM')","type":
     "NorthwindGridModel.Order"},
"orderId":5001,
"customer_customerId":"IBM",
"orderDate":"¥/Date(1260993011125)¥/",
"shipCity":"Rochester",
"shipCountry":null,
"version":0,
"customer":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:
   8080/wxsrestservice/restservice/
NorthwindGrid/Order(orderId=5001,customer_customerId
   ='IBM')/customer"}},
```

```
"orderDetails":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
   wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(
   orderId=5001, customer_customerId='IBM')/
   orderDetails"}}}]}}
```

- 応答コード: 200 OK

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

REST データ・サービスでの非エンティティーの取得: Java

REST データ・サービスでは、エンティティー・コレクションやプロパティーなど、エンティティー以外のものも取得できます。

エンティティー・コレクションの取得

RetrieveEntitySet 要求を使用して、クライアントで eXtreme Scale エンティティーのセットを取得できます。エンティティーは、応答ペイロードで、Atom Feed Document または JSON 配列として表されます。 WCF Data Services で定義されている RetrieveEntitySet プロトコルの詳細については、MSDN: RetrieveEntitySet Request を参照してください。

以下の RetrieveEntitySet 要求の例では、Customer('IBM') エンティティーに関連付けられたすべての Order エンティティーを取得します。この例では、5000 および 5001 の Order のみが表示されます。

AtomPub

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/orders
- 要求ヘッダー: Accept: application/atom+xml
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/atom+xml
- 応答ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<feed xml:base = "http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice"
   xmlns:d = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices"
   xmlns:m = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/
   metadata" xmlns = "http://www.w3.org/2005/Atom">
    <title type = "text">Order</title>
    <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
     Order</id>
    <updated>2009-12-16T22:53:09.062Z</updated>
    <link rel = "self" title = "Order" href = "Order"/>
    <entry>
        <category term = "NorthwindGridModel.Order" scheme = "http://
      schemas.microsoft.com/
      ado/2007/08/dataservices/scheme"/>
        <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
      NorthwindGrid/Order(orderId=5000,customer_customerId=
      'IBM')</id>
        <title type = "text"/>
        <updated>2009-12-16T22:53:09.062Z</updated>
        <author>
            <name/>
        </author>
        <link rel = "edit" title = "Order" href = "Order(orderId=5000,
      customer_customerId='IBM')"/>
        <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
      dataservices/related/customer"
      type = "application/atom+xml;type=entry"
      title = "customer" href = "Order(orderId=5000,
      customer_customerId='IBM')/customer"/>
        <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
      dataservices/related/orderDetails"
      type = "application/atom+xml;type=feed"
      title = "orderDetails" href = "Order(orderId=5000,
         customer_customerId='IBM')/
        orderDetails"/>
        <content type = "application/xml">
            <m:properties>
                <d:orderId m:type = "Edm.Int32">5000</d:orderId>
                <d:customer_customerId>IBM</d:customer_customerId>
                <d:orderDate m:type = "Edm.DateTime">2009-12-16T19:
          46:29.562</d:orderDate>
                <d:shipCity>Rochester</d:shipCity>
                <d:shipCountry m:null = "true"/>
                <d:version m:type = "Edm.Int32">0</d:version>
            </m:properties>
        </content>
    </entry>
    <entry>
        <category term = "NorthwindGridModel.Order" scheme = "http://
      schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme"/>
        <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
      NorthwindGrid/Order(orderId=5001, customer_customerId='IBM')
    </id>
        <title type = "text"/>
        <updated>2009-12-16T22:53:09.062Z</updated>
        <author>
            <name/>
        </author>
        <link rel = "edit" title = "Order" href = "Order(orderId=5001,
       customer_customerId='IBM')"/>
        <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
       dataservices/related/customer"
       type = "application/atom+xml;type=entry"
       title = "customer" href = "Order(orderId=5001,
         customer_customerId='IBM')/customer"/>
        <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/
         dataservices/related/orderDetails"
```

```
        type = "application/atom+xml;type=feed"
        title = "orderDetails" href = "Order(orderId=5001,
          customer_customerId='IBM')/orderDetails"/>
         <content type = "application/xml">
             <m:properties>
                 <d:orderId m:type = "Edm.Int32">5001</d:orderId>
                 <d:customer_customerId>IBM</d:customer_customerId>
                 <d:orderDate m:type = "Edm.DateTime">2009-12-16T19:50:
           11.125</d:orderDate>
                 <d:shipCity>Rochester</d:shipCity>
                 <d:shipCountry m:null = "true"/>
                 <d:version m:type = "Edm.Int32">0</d:version>
             </m:properties>
         </content>
     </entry>
</feed>
```

- 応答コード: 200 OK

JSON

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/orders
- 要求ヘッダー: Accept: application/json
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/json
- 応答ペイロード:

```
{"d":[{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/
   restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=5000,
   customer_customerId='IBM')",
"type":"NorthwindGridModel.Order"},
"orderId":5000,
"customer_customerId":"IBM",
"orderDate":"¥/Date(1260992789562)¥/",
"shipCity":"Rochester",
"shipCountry":null,
"version":0,
"customer":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
   wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=
   5000,customer_customerId='IBM')/customer"}},
"orderDetails":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
   wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=
   5000,customer_customerId='IBM')/orderDetails"}}},
{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/
     restservice/NorthwindGrid/
   Order(orderId=5001,
   customer_customerId='IBM')",
"type":"NorthwindGridModel.Order"},
"orderId":5001,
"customer_customerId":"IBM",
"orderDate":"¥/Date(1260993011125)¥/",
"shipCity":"Rochester",
"shipCountry":null,
"version":0,
"customer":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
   wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=
   5001,customer_customerId='IBM')/customer"}},
"orderDetails":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/
   wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=
   5001,customer_customerId='IBM')/orderDetails"}}}]}
```

- 応答コード: 200 OK

プロパティーの取得

RetrievePrimitiveProperty 要求を使用して、eXtreme Scale エンティティー・インスタンスのプロパティーの値を取得できます。応答ペイロードで、プロパティーの値は、AtomPub 要求の場合は XML フォーマットとして、JSON 要求の場合は JSON オブジェクトとして表されます。 RetrievePrimitiveProperty 要求の詳細については、MSDN: RetrievePrimitiveProperty Request を参照してください。

以下の RetrievePrimitiveProperty 要求の例では、Customer('IBM') エンティティーの contactName プロパティーを取得します。

AtomPub

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/contactName
- 要求ヘッダー: Accept: application/xml
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/atom+xml
- 応答ペイロード:

```
<contactName xmlns:d="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices">
    John Doe
</contactName>
```

- 応答コード: 200 OK

JSON

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/contactName
- 要求ヘッダー: Accept: application/json
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/json
- 応答ペイロード: `{"d":{"contactName":"John Doe"}}`
- 応答コード: 200 OK

プロパティーの値の取得

RetrieveValue 要求を使用して、eXtreme Scale エンティティー・インスタンスのプロパティーの未加工値を取得できます。応答ペイロードで、プロパティーの値は、未加工値として表されます。エンティティー型が以下のいずれかの場合、応答のメディア・タイプは「text/plain」です。それ以外の場合は、応答のメディア・タイプは「application/octet-stream」です。以下に型をリストします。

- Java プリミティブ型およびそれぞれのラッパー
- java.lang.String
- byte[]
- Byte[]
- char[]

- Character[]
- enums
- java.math.BigInteger
- java.math.BigDecimal
- java.util.Date
- java.util.Calendar
- java.sql.Date
- java.sql.Time
- java.sql.Timestamp

RetrieveValue 要求の詳細については、MSDN: RetrieveValue Request を参照してください。

以下の RetrieveValue 要求の例では、Customer('IBM') エンティティーの contactName プロパティーの未加工値を取得します。

- 要求メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/contactName/$value
- 要求ヘッダー: Accept: text/plain
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: text/plain
- 応答ペイロード: John Doe
- 応答コード: 200 OK

リンクの取得

RetrieveLink 要求を使用して、対 1 アソシエーションまたは対多アソシエーションを表すリンクを取得できます。対 1 アソシエーションの場合、リンクはある eXtreme Scale エンティティー・インスタンスから別のエンティティー・インスタンスに張られ、そのリンクは応答ペイロードで表されます。対多アソシエーションの場合、リンクはある eXtreme Scale エンティティー・インスタンスから、指定した eXtreme Scale エンティティー・コレクション内の他のすべてのエンティティー・インスタンスに張られ、応答は応答ペイロードでリンクのセットとして表されます。RetrieveLink 要求の詳細については、MSDN: RetrieveLink Request を参照してください。

以下に、RetrieveLink 要求の例を示します。この例では、エンティティー Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM') とその Customer 間のアソシエーションを取得します。応答では、Customer エンティティー URI が示されます。

AtomPub

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')/$links/customer
- 要求ヘッダー: Accept: application/xml
- 要求ペイロード: なし

- 応答ヘッダー: Content-Type: application/xml
- 応答ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<uri>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
   NorthwindGrid/Customer('IBM')</uri>
```

- 応答コード: 200 OK

JSON

- メソッド: GET
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')/$links/customer
- 要求ヘッダー: Accept: application/json
- 要求ペイロード: なし
- 応答ヘッダー: Content-Type: application/json
- 応答ペイロード: {"d":{"uri":"http:¥/¥/localhost:8080¥/wxsrestservice¥/restservice¥/NorthwindGrid¥/Customer('IBM')"}}

サービス・メタデータの取得

RetrieveServiceMetadata 要求を使用して、概念スキーマ定義言語 (CSDL) 文書を取得できます。この文書には、eXtreme Scale REST データ・サービスに関連したデータ・モデルが記述されています。RetrieveServiceMetadata 要求の詳細については、MSDN: RetrieveServiceMetadata Request を参照してください。

サービス文書の取得

RetrieveServiceDocument 要求を使用して、eXtreme Scale REST データ・サービスによって公開されたリソースのコレクションが記述されたサービス文書を取得できます。RetrieveServiceDocument 要求の詳細については、MSDN: RetrieveServiceDocument Request を参照してください。

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

REST データ・サービスでの挿入要求: Java

InsertEntity 要求を使用して、新しい関連エンティティーが含まれている可能性がある新しい eXtreme Scale エンティティー・インスタンスを eXtreme Scale REST データ・サービスに挿入できます。

エンティティー挿入要求

InsertEntity 要求を使用して、新しい関連エンティティーが含まれている可能性がある新しい eXtreme Scale エンティティー・インスタンスを eXtreme Scale REST データ・サービスに挿入できます。エンティティーの挿入時に、クライアントは、リソースまたはエンティティーをデータ・サービス内の既存の他のエンティティーに自動的にリンクする必要があるかどうかを指定できます。

クライアントは、関連した関係の表現で、必要なバインディング情報を要求ペイロードに含める必要があります。

新しい EntityType インスタンス (E1) の挿入のサポートに加えて、 InsertEntity 要求によって、(エンティティー関係で記述された) E1 に関連した新しいエンティティーを単一の要求で挿入することもできます。例えば、Customer('IBM') を挿入する際に、Customer('IBM') に関するすべての Order を挿入できます。この形式の InsertEntity 要求は、*ディープ挿入* とも呼ばれます。ディープ挿入の場合、関連したエンティティーは、挿入する関連したエンティティーへのリンクを識別する、E1 に関連した関係のインライン表現を使用して表す必要があります。

挿入するエンティティーのプロパティーは、要求ペイロードで指定されます。プロパティーは、REST データ・サービスで構文解析されてから、エンティティー・インスタンスの対応するプロパティーに設定されます。 AtomPub フォーマットの場合、プロパティーは <d:PROPERTY_NAME> XML エレメントとして指定されます。 JSON の場合、プロパティーは JSON オブジェクトのプロパティーとして指定されます。

要求ペイロード内にプロパティーが存在しない場合には、 REST データ・サービスは、エンティティー・プロパティー値を Java のデフォルト値に設定します。ただし、データベース・バックエンドは、例えばデータベース内で列がヌル可能ではない場合などに、そのようなデフォルト値を拒否する可能性があります。その場合、500 応答コードが返されて、Internal Server Error が示されます。

ペイロード内に重複プロパティーが指定されている場合には、最後のプロパティーが使用されます。同じプロパティー名のそれより前のすべての値は、REST データ・サービスによって無視されます。

存在しないプロパティーがペイロードに含まれている場合には、 REST データ・サービスは 400 (Bad Request) 応答コードを返し、クライアントによって送信された要求の構文が正しくないことが示されます。

キー・プロパティーが存在しない場合には、 REST データ・サービスは 400 (Bad Request) 応答コードを返し、存在しないキー・プロパティーが示されます。

存在しないキーが含まれた関連エンティティーへのリンクがペイロードに含まれている場合には、 REST データ・サービスは 404 (Not Found) 応答コードを返し、リンクされたエンティティーが見つからないことが示されます。

アソシエーション名が正しくない関連エンティティーへのリンクがペイロードに含まれている場合には、 REST データ・サービスは 400 (Bad Request) 応答コードを返して、リンクが見つからないことが示されます。

対 1 関係への複数のリンクがペイロードに含まれている場合には、最後のリンクが使用されます。同じアソシエーションのそれより前のすべてのリンクは無視されます。

InsertEntity 要求の詳細については、MSDN Library: InsertEntity Request を参照してください。

InsertEntity 要求は、キー「IBM」の Customer エンティティーを挿入します。

AtomPub

- メソッド: POST
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')
- 要求ヘッダー: Accept: application/atom+xml Content-Type: application/atom+xml
- 要求ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<entry xmlns:d="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices"
 xmlns:m="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/metadata"
 xmlns="http://www.w3.org/2005/Atom">
 <category term="NorthwindGridModel.Customer"
  scheme="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme" />
<content type="application/xml">
  <m:properties>
   <d:customerId>Rational</d:customerId>
   <d:city>Rochester</d:city>
   <d:companyName>Rational</d:companyName>
   <d:contactName>John Doe</d:contactName>
```

```
    <d:country>USA</d:country>
   </m:properties>
  </content>
</entry>
```

- 応答ヘッダー: Content-Type: application/atom+xml
- 応答ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<entry xmlns:d="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices"
 xmlns:m="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/metadata"
 xmlns="http://www.w3.org/2005/Atom">
 <category term="NorthwindGridModel.Customer"
  scheme="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme" />
<content type="application/xml">
  <m:properties>
   <d:customerId>Rational</d:customerId>
   <d:city>Rochester</d:city>
   <d:companyName>Rational</d:companyName>
   <d:contactName>John Doe</d:contactName>
   <d:country>USA</d:country>
  </m:properties>
 </content>
</entry>
応答ヘッダー:
Content-Type: application/atom+xml
応答ペイロード:
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<entry xml:base = "http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice" xmlns:d =
   "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices" xmlns:m =
     "http://schemas.microsoft.com/
   ado/2007/08/dataservices/metadata" xmlns = "http://www.w3.org/2005/Atom">
    <category term = "NorthwindGridModel.Customer" scheme = "http://schemas.
     microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme"/>
    <id>http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/
     Customer('Rational')</id>
    <title type = "text"/>
    <updated>2009-12-16T23:25:50.875Z</updated>
    <author>
        <name/>
    </author>
    <link rel = "edit" title = "Customer" href = "Customer('Rational')"/>
    <link rel = "http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/related/
    orders" type = "application/atom+xml;type=feed"
    title = "orders" href = "Customer('Rational')/orders"/>
    <content type = "application/xml">
        <m:properties>
            <d:customerId>Rational</d:customerId>
            <d:city>Rochester</d:city>
            <d:companyName>Rational</d:companyName>
            <d:contactName>John Doe</d:contactName>
            <d:country>USA</d:country>
            <d:version m:type = "Edm.Int32">0</d:version>
        </m:properties>
    </content>
</entry>
```

- 応答コード: 201 Created

JSON

- メソッド: POST
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer
- 要求ヘッダー: Accept: application/json Content-Type: application/json
- 要求ペイロード:

```
{"customerId":"Rational",
"city":null,
"companyName":"Rational",
"contactName":"John Doe",
"country": "USA",}
```

- 応答ヘッダー: Content-Type: application/json
- 応答ペイロード:

```
{"d":{"__metadata":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
   NorthwindGrid/Customer('Rational')",
"type":"NorthwindGridModel.Customer"},
"customerId":"Rational",
"city":null,
"companyName":"Rational",
"contactName":"John Doe",
"country":"USA",
"version":0,
"orders":{"__deferred":{"uri":"http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/
   NorthwindGrid/Customer('Rational')/orders"}}}}
```

- 応答コード: 201 Created

リンク挿入要求

InsertLink 要求を使用して、2 つの eXtreme Scale エンティティー・インスタンス間に新しいリンクを作成できます。要求の URI は、eXtreme Scale の対多アソシエーションに解決される必要があります。要求のペイロードには、対多アソシエーション・ターゲット・エンティティーを指す単一のリンクが含まれます。

InsertLink 要求の URI が対 1 アソシエーションを表す場合には、 REST データ・サービスは 400 (Bad request) 応答を返します。

InsertLink 要求の URI が、存在しないアソシエーションを指す場合には、 REST データ・サービスは 404 (Not Found) 応答を返し、リンクが見つからないことが示されます。

存在しないキーが存在するリンクがペイロードに含まれている場合には、 REST データ・サービスは 404 (Not Found) 応答を返し、リンクされたエンティティーが見つからないことが示されます。

ペイロードに複数のリンクが含まれている場合には、eXtreme Scale REST データ・サービスは最初のリンクを構文解析します。残りのリンクは無視されます。

InsertLink 要求の詳細については、MSDN Library: InsertLink Request を参照してください。

以下の InsertLink 要求の例では、Customer('IBM') から Order (orderId=5000,customer_customerId='IBM') へのリンクを作成します。

AtomPub

- メソッド: POST
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/$link/orders
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/xml
- 要求ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<uri>http://host:1000/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=
   5000,customer_customerId='IBM')</uri>
```

- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

JSON

- メソッド: POST
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/$links/orders
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/json
- 要求ペイロード:

```
{"uri": "http://host:1000/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId
    =5000,customer_customerId='IBM')"}
```

- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

REST データ・サービスでの更新要求: Java

WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、エンティティー、エンティティー・プリミティブ・プロパティーなどの更新要求をサポートします。

エンティティーの更新

UpdateEntity 要求を使用して、既存の eXtreme Scale エンティティーを更新できます。クライアントは、HTTP PUT メソッドを使用して既存の eXtreme Scale エンティティーを置き換えたり、HTTP MERGE メソッドを使用して変更を既存の eXtreme Scale エンティティーにマージしたりすることができます。

注:  **8.6+** upsert および upsertAll メソッドが ObjectMap の put および putAll メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、upsert メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

エンティティーの更新時に、クライアントは、更新に加えて、そのエンティティーを、単一値 (対 1) アソシエーションを通じて関係付けられている、データ・サービス内の他の既存エンティティーに自動的にリンクさせる必要があるかどうかを指定することができます。

更新するエンティティーのプロパティーは、要求ペイロード内に含まれます。プロパティーは、REST データ・サービスで構文解析されてから、エンティティーの対応するプロパティーに設定されます。 AtomPub フォーマットの場合、プロパティーは `<d:PROPERTY_NAME>` XML エレメントとして指定されます。 JSON の場合、プロパティーは JSON オブジェクトのプロパティーとして指定されます。

要求ペイロード内にプロパティーが存在しない場合には、 REST データ・サービスは、エンティティー・プロパティー値を、HTTP PUT メソッドの Java デフォルト値に設定します。ただし、データベース・バックエンドは、例えばデータベース内で列がヌル可能ではない場合などに、そのようなデフォルト値を拒否する可能性があります。その場合、500 (Internal Server Error) 応答コードが返されて、Internal Server Error が示されます。 HTTP MERGE 要求ペイロード内にプロパティーが存在しない場合は、REST データ・サービスは既存のプロパティー値を変更しません。

ペイロード内に重複プロパティーが指定されている場合には、最後のプロパティーが使用されます。同じプロパティー名のそれより前のすべての値は、REST データ・サービスによって無視されます。

存在しないプロパティーがペイロードに含まれている場合には、 REST データ・サービスは 400 (Bad Request) 応答コードを返し、クライアントによって送信された要求の構文が正しくないことが示されます。

リソースのシリアライゼーションの一部として、更新要求のペイロードにエンティティーのキー・プロパティーが含まれている場合には、エンティティー・キーは不変であるため、REST データ・サービスはそのキー値を無視します。

UpdateEntity 要求の詳細については、MSDN Library: UpdateEntity Request を参照してください。

以下の例の UpdateEntity 要求は、Customer('IBM') の都市名を「Raleigh」に更新します。

AtomPub

- メソッド: PUT

- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer ('IBM')
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/atom+xml
- 要求ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<entry xmlns:d="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices"
 xmlns:m="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/metadata"
 xmlns="http://www.w3.org/2005/Atom">
 <category term="NorthwindGridModel.Customer"
  scheme="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices/scheme" />
 <title />
 <updated>2009-07-28T21:17:50.609Z</updated>
 <author>
  <name />
 </author>
 <id />
 <content type="application/xml">
  <m:properties>
   <d:customerId>IBM</d:customerId>
   <d:city>Raleigh</d:city>
   <d:companyName>IBM Corporation</d:companyName>
   <d:contactName>Big Blue</d:contactName>
   <d:country>USA</d:country>
  </m:properties>
 </content>
</entry>
```

- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

JSON

- メソッド: PUT
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer ('IBM')
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/json
- 要求ペイロード:

```
{"customerId":"IBM",
"city":"Raleigh",
"companyName":"IBM Corporation",
"contactName":"Big Blue",
"country":"USA",}
```

- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

エンティティー・プリミティブ・プロパティーの更新

UpdatePrimitiveProperty 要求で、eXtreme Scale エンティティーのプロパティー値を更新できます。更新するプロパティーおよび値は、要求ペイロードに入れます。eXtreme Scale ではクライアントはエンティティー・キーを変更できないため、プロパティーをキー・プロパティーにすることはできません。

UpdatePrimitiveProperty 要求の詳細については、MSDN Library: UpdatePrimitiveProperty Request を参照してください。

以下に、UpdatePrimitiveProperty 要求の例を示します。この例では、Customer('IBM') の都市名を「Raleigh」に更新します。

AtomPub

- メソッド: PUT
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer ('IBM')/city
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/xml
- 要求ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<city xmlns:d="http://schemas.microsoft.com/ado/2007/08/dataservices">
 Raleigh
</city>
```

- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

JSON

- メソッド: PUT
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer ('IBM')/city
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/json
- 要求ペイロード: {"city":"Raleigh"}
- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

エンティティー・プリミティブ・プロパティー値の更新

UpdateValue 要求で、eXtreme Scale エンティティーの未加工プロパティー値を更新できます。更新する値は、要求ペイロードで未加工値として表します。 eXtreme Scale ではクライアントはエンティティー・キーを変更できないため、プロパティーをキー・プロパティーにすることはできません。

要求のコンテンツ・タイプは、プロパティー・タイプに応じて、「text/plain」または「application/octet-stream」にすることができます。詳しくは、584 ページの『REST データ・サービスでの非エンティティーの取得』を参照してください。

UpdateValue 要求の詳細については、MSDN Library: UpdateValue Request を参照してください。

以下に、UpdateValue 要求の例を示します。この例では、Customer('IBM') の都市名を「Raleigh」に更新します。

- メソッド: PUT
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer ('IBM')/city/$value
- 要求ヘッダー: Content-Type: text/plain
- 要求ペイロード: Raleigh
- 応答ペイロード: なし

- 応答コード: 204 No Content

リンクの更新

UpdateLink 要求を使用して、2 つの eXtreme Scale エンティティー・インスタンス間にアソシエーションを設定できます。アソシエーションは、単一値 (対 1) 関係または多値 (対多) 関係にすることができます。

2 つの eXtreme Scale エンティティー・インスタンス間のリンクを更新することで、アソシエーションを設定したり、アソシエーションを削除したりできます。例えば、クライアントが `Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')` エンティティーと `Customer('ALFKI')` インスタンスとの間に対 1 アソシエーションを設定する場合、`Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')` エンティティーと現在関連付けられている Customer インスタンスとの間のアソシエーションを削除する必要があります。

UpdateLink 要求で指定されたエンティティー・インスタンスがいずれも見つからない場合は、 REST データ・サービスは 404 (Not Found) 応答を返します。

存在しないアソシエーションが UpdateLink 要求の URI で指定された場合は、REST データ・サービスは 404 (Not Found) 応答を返し、リンクが見つからないことが示されます。

UpdateLink 要求ペイロードで指定された URI が、URI で指定されたものと同じエンティティーまたはキーに解決されない場合、eXtreme Scale REST データ・サービスは 400 (Bad Request) 応答を返します。

UpdateLink 要求ペイロードに複数のリンクが含まれている場合は、REST データ・サービスは最初のリンクのみを構文解析します。残りのリンクは無視されます。

UpdateLink 要求の詳細については、MSDN Library: UpdateLink Request を参照してください。

以下に、UpdateLink 要求の例を示します。この例では、`Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')` エンティティーの顧客関係を Customer('IBM') に更新します。

要確認: 前の例は、説明のみを目的としています。すべてのアソシエーションは通常、区画化されたグリッドのキー・アソシエーションであるため、リンクは変更できません。

AtomPub

- メソッド: PUT
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(101)/$links/customer
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/xml
- 要求ペイロード:

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<uri>
 http://host:1000/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')
</uri>
```

- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

JSON

- メソッド: PUT
- 要求 URI: `http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(orderId=5000,customer_customerId='IBM')/$links/customer`
- 要求ヘッダー: Content-Type: application/xml
- 要求ペイロード: `{"uri": "http://host:1000/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')"}`
- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

REST データ・サービスでの削除要求: Java

WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスでは、エンティティー、プロパティー値、およびリンクを削除できます。

エンティティーの削除

DeleteEntity 要求は、eXtreme Scale エンティティーを REST データ・サービスから削除できます。

cascade-delete が設定された削除対象エンティティーに対する関係がある場合は、eXtreme Scale REST データ・サービスでは、関連するエンティティーが削除されます。DeleteEntity 要求の詳細については、MSDN Library: DeleteEntity Request を参照してください。

以下の DeleteEntity 要求は、キーが「IBM」の Customer を削除します。

- メソッド: DELETE

- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')
- 要求ペイロード: なし
- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

プロパティー値の削除

DeleteValue 要求は、eXtreme Scale エンティティー・プロパティーをヌルに設定します。

DeleteValue 要求を使用すると、eXtreme Scale エンティティーのすべてのプロパティーがヌルに設定されます。プロパティーをヌルに設定するには、以下のすべてを確認します。

- プリミティブ数値型およびそのラッパー (BigInteger、BigDecimal) の場合、プロパティー値が 0 に設定されている。
- Boolean (boolean) 型の場合、プロパティー値が false に設定されている。
- char (Character) 型の場合、プロパティー値が文字 #X1 (NIL) に設定されている。
- enum 型の場合、プロパティー値が、序数が 0 の enum 値に設定されている。
- それ以外の型の場合、プロパティー値がヌルに設定されている。

ただし、例えばデータベース内でプロパティーがヌル可能ではない場合などに、このような削除要求はデータベース・バックエンドによって拒否される可能性があります。その場合、REST データ・サービスは 500 (Internal Server Error) 応答を返します。 DeleteValue 要求の詳細については、MSDN Library: DeleteValue Request を参照してください。

以下に、DeleteValue 要求の例を示します。この例では、Customer('IBM') の連絡先名をヌルに設定します。

- メソッド: DELETE
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Customer('IBM')/contactName
- 要求ペイロード: なし
- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

リンクの削除

DeleteLink 要求は、2 つの eXtreme Scale エンティティー・インスタンス間のアソシエーションを削除できます。アソシエーションは、対 1 関係または対多関係にすることができます。ただし、例えば外部キー制約が設定されている場合などに、このような削除要求はデータベース・バックエンドによって拒否される可能性があります。その場合、REST データ・サービスは 500 (Internal Server Error) 応答を返します。 DeleteLink 要求の詳細については、MSDN Library: DeleteLink Request を参照してください。

以下の DeleteLink 要求は、Order(101) と関連付けられた Customer との間のアソシエーションを削除します。

- メソッド: DELETE
- 要求 URI: http://localhost:8080/wxsrestservice/restservice/NorthwindGrid/Order(101)/$links/customer
- 要求ペイロード: なし
- 応答ペイロード: なし
- 応答コード: 204 No Content

関連概念:

Java 570 ページの『REST データ・サービスの操作』
eXtreme Scale REST データ・サービスを開始すると、HTTP クライアントを使用して対話ができます。Web ブラウザー、PHP クライアント、Java クライアント、または WCF Data Services クライアントを使用して、サポートされる要求の操作を任意に実行することができます。

Java 360 ページの『REST データ・サービスの概要』
WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスは、Microsoft WCF Data Services (正式には ADO.NET Data Services) と互換性があり、Open Data Protocol (OData) を実装する Java HTTP サービスです。Microsoft WCF Data Services は、Visual Studio 2008 SP1 および .NET Framework 3.5 SP1 を使用する場合、この仕様と互換性があります。

関連タスク:

Java 568 ページの『REST データ・サービスでのデータへのアクセス』
REST データ・サービス・プロトコルを使用して操作を実行するアプリケーションを開発します。

システム API とプラグイン

Java

プラグインとは、プラグ可能なコンポーネントに特定の機能を提供するコンポーネントです。ObjectGrid や BackingMap があります。eXtreme Scale をメモリー内データ・グリッドまたはデータベース処理スペースとして最も効果的に使用するために、使用可能なプラグインのパフォーマンスを最大限に活用できる最善の方法を慎重に決定してください。

プラグイン・ライフサイクルの管理

Java

各プラグインの特殊なメソッドを使用して、プラグインのライフサイクルを管理できます。それらのメソッドは、指定された機能ポイントで呼び出すことができます。initialize メソッドと destroy メソッドの両方でプラグインのライフサイクルが定義されます。これらのメソッドは、その「*所有者*」オブジェクトによって制御されます。所有者オブジェクトは、実際に指定のプラグインを使用するオブジェクトです。所有者はグリッド・クライアント、サーバー、またはパッキング・マップである場合があります。

このタスクについて

すべてのプラグインは、それぞれの所有者オブジェクトに適したオプションのミックスイン・インターフェースを同じように実装できます。ObjectGrid プラグインは、オプションのミックスイン・インターフェース ObjectGridPlugin を実装できます。BackingMap プラグインは、オプションのミックスイン・インターフェース BackingMapPlugin を実装できます。オプションのミックスイン・インターフェースには、基本プラグイン用の initialize() メソッドと destroy() メソッドに加えて、いくつかの追加メソッドの実装が必要です。これらのインターフェースの詳細については、API 資料を参照してください。

所有者オブジェクトの初期化時、それらのオブジェクトはプラグインの属性を設定し、次に所有するプラグインの initialize メソッドを呼び出します。所有者オブジェクトの破棄サイクル中は、最終的にプラグインの destroy メソッドも呼び出されます。各プラグインで使用できる他のメソッドと同様に、initialize メソッドと destroy メソッドの特性ついて詳しくは、各プラグインの関連トピックを参照してください。

例えば、分散環境を考えてみます。クライアント・サイド ObjectGrid およびサーバー・サイド ObjectGrid は両方とも、独自のプラグインを持っています。クライアント・サイド ObjectGrid のライフサイクルは (したがってそのプラグイン・インスタンスも同様に)、すべてのサーバー・サイドの ObjectGrid とプラグイン・インスタンスから独立しています。

こうした分散トポロジーで、`objectGrid.xml` ファイル内に `myGrid` という名前の ObjectGrid が定義されていて、myObjectGridEventListener という名前のカスタマイズされた ObjectGridEventListener が構成されているとします。`objectGridDeployment.xml` ファイルは、`myGrid` ObjectGrid のデプロイメント・ポリシーを定義します。コンテナー・サーバーを始動するために、`objectGrid.xml` と `objectGridDeployment.xml` の両方が使用されます。コンテナー・サーバーの始動時、サーバー・サイドの `myGrid` ObjectGrid インスタンスが初期化されます。それと同時に、myObjectGrid インスタンスが所有する myObjectGridEventListener インスタンスの initialize メソッドが呼び出されます。コンテナー・サーバーの始動後、アプリケーションはサーバー・サイド `myGrid` ObjectGrid インスタンスに接続して、クライアント・サイド・インスタンスを取得できます。

クライアント・サイドの myGrid ObjectGrid インスタンスを取得する際は、クライアント・サイドの `myGrid` インスタンスが自身の初期化サイクルを経て、自身のクライアント・サイド myObjectGridEventListener インスタンスの initialize メソッドを呼び出します。このクライアント・サイド myObjectGridEventListener インスタンスは、サーバー・サイド myObjectGridEventListener インスタンスとは独立しています。そのライフサイクルは、その所有者、つまりクライアント・サイド `myGrid` ObjectGrid インスタンスによって制御されます。

アプリケーションがクライアント・サイド `myGrid` ObjectGrid インスタンスを切断または破棄すると、クライアント・サイド myObjectGridEventListener インスタンスに属している destroy メソッドが自動的に呼び出されます。ただし、このプロセスは、サーバー・サイド myObjectGridEventListener インスタンスには何の影響もありません。サーバー・サイド myObjectGridEventListener インスタンスの destroy メソッドは、コンテナー・サーバーを停止する際、サーバー・サイド `myGrid` ObjectGrid

インスタンスの破棄ライフサイクルの中でのみ呼び出すことができます。具体的には、コンテナー・サーバーを停止すると、そこに含まれる ObjectGrid インスタンスが破棄され、それらが所有するすべてのプラグインの destroy メソッドが呼び出されます。

前の例は特にクライアントとサーバーの ObjectGrid インスタンスのケースに適用されますが、プラグインの所有者は BackingMap インターフェースの場合もあります。さらに、プラグインを作成する場合は、これらのライフサイクルについての考慮事項を基に、プラグインの構成を慎重に決定してください。環境内のリソースをセットアップまたは削除するときに使用できる拡張ライフサイクル管理イベントを提供するプラグインを作成するには、次のトピックを使用してください。

関連概念:

180 ページの『OSGi フレームワークの概要』
OSGi は、Java に対して動的モジュール・システムを定義します。OSGi サービス・プラットフォームは、階層化アーキテクチャーを持ち、さまざまな標準 Java プロファイルで実行されるように設計されています。OSGi コンテナー内の WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびクライアントを始動できます。

関連情報:

API 資料

ObjectGridPlugin プラグインの記述: Java

ObjectGridPlugin は、オプションのミックスイン・インターフェースであり、これを使用して、その他のすべての ObjectGrid プラグインに拡張ライフサイクル管理イベントを提供できます。

このタスクについて

ObjectGridPlugin を実装する ObjectGrid プラグインは、リソースのセットアップまたは削除に使用できるライフサイクル・イベントの拡張セットを受け取り、リソースの管理を強化できます。区画化されたデータ・グリッドのコンテナーの場合、コンテナーによって管理される区画ごとに 1 つの ObjectGrid インスタンス (プラグイン所有者) が存在します。個々の区画が削除されるときは、その ObjectGrid インスタンスが使用しているリソースも同様に削除されなければなりません。したがって、あるリソースを所有する区画を削除するときは、そのリソース (開いている構成ファイル、プラグインが管理する実行中のスレッドなど) を閉じたり、終了したりする必要がある可能性があります。

ObjectGridPlugin インターフェースは、プラグインの状態を設定または変更するメソッドや、プラグインの現在の状態をイントロスペクトするメソッドを提供します。すべてのメソッドは正しく実装される必要があり、WebSphere eXtreme Scale ランタイム環境は、特定の状況においてメソッドの振る舞いを検査します。例えば、initialize() メソッドを呼び出した後、eXtreme Scale ランタイム環境は isInitialized() メソッドを呼び出して、メソッドが該当の初期化を正常に完了したか確認します。

手順

1. ObjectGridPlugin プラグインが重大な eXtreme Scale イベントについての通知を受け取ることができるように、ObjectGridPlugin インターフェースを実装します。 メソッドは主に 3 つのカテゴリーに分かれます。

プロパティー・メソッド	目的
setObjectGrid()	プラグインを使用する ObjectGrid インスタンスを設定するために呼び出します。
getObjectGrid()	プラグインを使用する ObjectGrid インスタンスを取得または確認するために呼び出します。

初期設定メソッド	目的
initialize()	ObjectGridPlugin を初期化するために呼び出します。
isInitialized()	プラグインの初期化状況を取得または確認するために呼び出します。

消滅メソッド	目的
destroy()	ObjectGridPlugin を破棄するために呼び出します。
isDestroyed()	プラグインの破棄状況を取得または確認するために呼び出します。

これらのインターフェースの詳細については、API 資料を参照してください。

2. XML を使用して ObjectGridPlugin プラグインを構成します。TransactionCallback インターフェースと ObjectGridPlugin インターフェースを実装する com.company.org.MyObjectGridPluginTxCallback クラスを使用します。

   次のサンプル・コードでは、最終的に拡張ライフサイクル・イベントを受け取るカスタム・トランザクション・コールバックが生成され、ObjectGrid に追加されます。

   重要: TransactionCallback インターフェースには既に initialize メソッドがありますが、新規 initialize メソッドが追加されるほか、destroy メソッドや ObjectGridPlugin のその他のメソッドも追加されます。各メソッドが使用されますが、initialize メソッドが実行する初期化は 1 回のみです。次の XML は拡張された TransactionCallback インターフェースを使用する構成を作成します。

   以下のテキストは、myGrid.xml ファイルに存在しなければなりません。

```
?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <bean id="TransactionCallback"
                  className="com.company.org.MyObjectGridPluginTxCallback" />
            <backingMap name="Book"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

   Bean 宣言が backingMap 宣言の前にあることに注意してください。

3. myGrid.xml ファイルを ObjectGridManager プラグインに提供することで、この構成の作成が容易になります。

関連タスク:

『BackingMapPlugin プラグインの作成』
BackingMap プラグインは、BackingMapPlugin ミックスイン・インターフェースを実装します。このインターフェースを使用すると、プラグインの ライフサイクルを管理する拡張機能を受け取ることができます。

関連情報:

../com.ibm.websphere.extremescale.javadoc.doc/topics/com/ibm/websphere/objectgrid/management/package-summary.html

BackingMapPlugin プラグインの作成: Java

BackingMap プラグインは、BackingMapPlugin ミックスイン・インターフェースを実装します。このインターフェースを使用すると、プラグインのライフサイクルを管理する拡張機能を受け取ることができます。

このタスクについて

BackingMapPlugin インターフェースも実装している既存の BackingMap プラグインは、構成して使用する際にライフサイクル・イベントの拡張セットを自動的に受け取ります。

BackingMapPlugin インターフェースは、プラグインの状態を設定または変更するメソッドや、プラグインの現在の状態をイントロスペクトするメソッドを提供します。

すべてのメソッドは正しく実装される必要があり、WebSphere eXtreme Scale ランタイム環境は、特定の状況においてメソッドの振る舞いを検査します。例えば、initialize() メソッドを呼び出した後、eXtreme Scale ランタイム環境は isInitialized() メソッドを呼び出して、メソッドが該当の初期化を正常に完了したか確認します。

手順

1. BackingMapPlugin プラグインが重大な eXtreme Scale イベントについての通知を受け取ることができるように、BackingMapPlugin インターフェースを実装します。 メソッドは主に 3 つのカテゴリーに分かれます。

プロパティー・メソッド	目的
setBackingMap()	プラグインを使用する BackingMap インスタンスを設定するために呼び出します。
getBackingMap()	プラグインを使用する BackingMap インスタンスを取得または確認するために呼び出します。

初期設定メソッド	目的
initialize()	BackingMapPlugin プラグインを初期化するために呼び出します。
isInitialized()	プラグインの初期化状況を取得または確認するために呼び出します。

消滅メソッド	目的
destroy()	BackingMapPlugin プラグインを破棄するために呼び出します。
isDestroyed()	プラグインの破棄状況を取得または確認するために呼び出します。

これらのインターフェースの詳細については、API 資料を参照してください。

2. XML を使用して BackingMapPlugin プラグインを構成します。 eXtreme Scale Loader プラグインのクラス名は com.company.org.MyBackingMapPluginLoader クラスとします。このクラスは Loader インターフェースと BackingMapPlugin インターフェースを実装します。

   次のサンプル・コードでは、最終的に拡張ライフサイクル・イベントを受け取るカスタム・トランザクション・コールバックが生成され、BackingMap に追加されます。

   BackingMapPlugin プラグインは、XML を使用して構成することもできます。以下のテキストは、myGrid.xml ファイルに存在しなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<objectGridconfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config../objectGrid.xsd"
        xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <backingMap name="Book" pluginCollectionRef="myPlugins" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>
    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="myPlugins">
            <bean id="Loader"
                  className="com.company.org.MyBackingMapPluginLoader" />
        </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

3. myGrid.xml ファイルを ObjectGridManager プラグインに提供することで、この構成の作成が容易になります。

タスクの結果

作成した BackingMap インスタンスは、BackingMapPlugin ライフサイクル・イベントを受け取る Loader を保持します。

関連タスク:

603 ページの『ObjectGridPlugin プラグインの記述』
ObjectGridPlugin は、オプションの ミックスイン・インターフェースであり、これを使用して、その他のすべての ObjectGrid プラグインに 拡張ライフサイクル管理イベントを提供できます。

関連情報:

../com.ibm.websphere.extremescale.javadoc.doc/topics/com/ibm/websphere/objectgrid/management/package-summary.html

マルチマスター・レプリカ生成のプラグイン

Java

キャッシュの効率を上げるには、キャッシュ・オブジェクトの変換を検討してみてください。ご使用のプロセッサーの使用量が大きいときは、ObjectTransformer プラグインを使用できます。合計プロセッサー時間の 60 から 70 パーセントまではエントリーのシリアライズとコピーに費やされます。ObjectTransformer プラグインを実装すると、自分の実装環境でオブジェクトのシリアライズおよびデシリアライズ

を行うことができます。ドメイン内で変更の競合をどのように処理するかを定義するには、CollisionArbiter プラグインを使用できます。

マルチマスター・レプリカ生成のためのカスタム・アービターの作成: Java

同じレコードが 2 個所で同時に変更される可能性がある場合には、変更の競合が生じることがあります。マルチマスター・レプリカ生成トポロジーでは、カタログ・サービス・ドメインは競合を自動的に検出します。カタログ・サービス・ドメインは競合を検出すると、アービターを呼び出します。通常、競合は、デフォルト競合アービターを使用して解決されます。ただし、アプリケーションでカスタム競合アービターを提供できます。

始める前に

- マルチマスター・レプリカ生成トポロジーの計画と設計の詳細については、311 ページの『複数データ・センター・トポロジーの計画』を参照してください。
- カタログ・サービス・ドメイン間にリンクをセットアップする方法の詳細については、複数データ・センター・トポロジーの構成を参照してください。

このタスクについて

カタログ・サービス・ドメインが競合レコードと対立する複製項目を受け取った場合、デフォルト・アービターは、字句的に最も小さい名前のカタログ・サービス・ドメインからの変更を使用します。例えば、ドメイン A と B によってレコードの競合が生じる場合には、ドメイン B の変更は無視されます。ドメイン A はそのバージョンを保持し、ドメイン B のレコードは、ドメイン A のレコードに一致するように変更されます。比較では、ドメイン・ネームは大文字に変換されます。

代わりのオプションとしては、マルチマスター・レプリカ生成トポロジーで、カスタム競合プラグインによって結果を決定します。ここでは、カスタム競合アービターを開発して、そのアービターを使用するようにマルチマスター・レプリカ生成トポロジーを構成する方法の概要を説明します。

手順

1. カスタム競合アービターを開発して、そのアービターをアプリケーションに統合します。

   クラスは次のインターフェースを実装する必要があります。

   ```
   com.ibm.websphere.objectgrid.revision.CollisionArbiter
   ```

   競合プラグインには、競合の結果を決定するための 3 つの選択肢があります。ローカル・コピーを選択するか、リモート・コピーを選択するか、項目の改訂バージョンを提供できます。カタログ・サービス・ドメインは、以下の情報をカスタム競合アービターに提供します。

   - レコードの既存バージョン
   - レコードの競合バージョン
   - 競合項目の改訂バージョンを作成するために使用する必要があるセッション・オブジェクト

   プラグイン・メソッドは、決定を示すオブジェクトを返します。プラグインを呼び出すためにドメインによって呼び出されたメソッドは、true または false を返

す必要があります。 false は競合を無視することを意味します。競合を無視すると、ローカル・バージョンはそのまま変更されず、アービターは既存バージョンの存在をなかったものとします。メソッドが提供されたセッションを使用し、レコードのマージされた新バージョンを作成して変更を調整した場合には、メソッドは値 true を返します。

2. objectgrid.xml ファイル内で、カスタム・アービター・プラグインを指定します。

   ID は CollisionArbiter でなければなりません。

```
<dgc:objectGrid name="revisionGrid" txTimeout="10">
     <dgc:bean className="com.you.your_application.
      CustomArbiter" id="CollisionArbiter">
      <dgc:property name="property" type="java.lang.String"
      value="propertyValue"/>
     </dgc:bean>
</dgc:objectGrid>
```

関連概念:

311 ページの『複数データ・センター・トポロジーの計画』
マルチマスター非同期レプリカ生成機能を使用すると、2 つ以上のデータ・グリッドを、互いの正確なミラーにすることができます。 各データ・グリッドは独立したカタログ・サービス・ドメイン内でホストされ、独自のカタログ・サービス、コンテナー・サーバー、および固有の名前を所有しています。 マルチマスター非同期レプリカ生成機能により、リンクを使用してカタログ・サービス・ドメインのコレクションを接続できます。すると、カタログ・サービス・ドメインは、リンクを介したレプリカ生成を使用して同期されます。カタログ・サービス・ドメイン間のリンクの定義を使用して、ほとんどどのトポロジーでも構成できます。

312 ページの『マルチマスター・レプリカ生成のトポロジー』
マルチマスター・レプリカ生成を組み込んだデプロイメントのトポロジーを選択する際、いくつかの異なるオプションがあります。

317 ページの『マルチマスター・トポロジーに関する構成の考慮事項』
マルチマスター・レプリカ生成トポロジーを使用するかどうかを決定し、その使用方法について決定する際は、以下の問題を考慮してください。

321 ページの『マルチマスター・レプリカ生成での設計上の考慮事項』
マルチマスター・レプリカ生成を実装する場合、アービトレーション、リンク作成、およびパフォーマンスなど、設計における側面を考慮する必要があります。

318 ページの『マルチマスター・トポロジーでのローダーについての考慮事項』
マルチマスター・トポロジーでローダーを使用する場合は、起こり得る衝突および改訂情報の維持についての問題を考慮する必要があります。データ・グリッドはその中の各項目について改訂情報を維持しており、構成内の他のプライマリー断片がデータ・グリッドにエントリーを書き込むときに衝突を検出できるようになっています。エントリーがローダーから追加されると、この改訂情報は含められず、エントリーは新しい改訂を持つようになります。エントリーの改訂は新規挿入に見えるため、別のプライマリー断片もこの状態を変更したり、ローダーから同じ情報を引き込んだりした場合に、偽の衝突が発生する場合があります。

キャッシュ・オブジェクトのバージョン管理と比較のためのプラグイン

Java

オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているときは、OptimisticCallback プラグインによってキャッシュ・オブジェクトのバージョン管理および比較操作をカスタマイズすることができます。

com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.OptimisticCallback インターフェースを実装するプラグ可能オプティミスティック・コールバック・オブジェクトを用意できます。エンティティー・マップの場合、ハイパフォーマンス OptimisticCallback プラグインが自動的に構成されます。

目的

OptimisticCallback インターフェースを使用して、マップの値としてオプティミスティック比較演算を提供します。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用するときは、OptimisticCallback プラグインが必要です。この製品はデフォルトの OptimisticCallback 実装を提供しています。ただし、通常、アプリケーションは独自の OptimisticCallback インターフェースの実装をプラグインする必要があります。

デフォルト実装

eXtreme Scale フレームワークは、 OptimisticCallback インターフェースのデフォルト実装を提供します。この実装は、アプリケーション提供の OptimisticCallback オブジェクトをアプリケーションがプラグインしない場合に使用します。デフォルト実装は、値のバージョン・オブジェクトとして、常に特殊値 NULL_OPTIMISTIC_VERSION を戻し、バージョン・オブジェクトの更新は行いません。このアクションにより、オプティミスティック比較は「ノーオペレーション」関数になります。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているとき、たいていの場合、「ノーオペレーション」関数が発生することは望まないと思われます。ご使用のアプリケーションが OptimisticCallback インターフェースを実装し、独自の OptimisticCallback 実装をプラグインする必要がある場合、デフォルト実装は使用しません。ただし、デフォルト提供の OptimisticCallback 実装が有用なシナリオが、少なくとも 1 つ存在します。次のような状態について考えてみます。

- ローダーがパッキング・マップ用にプラグインされている。
- ローダーが、OptimisticCallback プラグインからの支援なしに、オプティミスティック比較を実行する方法を認識している。

ローダーが、OptimisticCallback オブジェクトからの支援なしで、オプティミスティック・バージョン管理を実行できる方法について考えてみます。 ローダーは、値クラス・オブジェクトを認知し、オプティミスティック・バージョン管理の値としてどの値オブジェクトのフィールドを使用するかを認識しています。例えば、従業員マップの値オブジェクトに対して次のインターフェースを使用するとします。

```
public interface Employee
{
    // Sequential sequence number used for optimistic versioning.
    public long getSequenceNumber();
    public void setSequenceNumber(long newSequenceNumber);
    // Other get/set methods for other fields of Employee object.
}
```

この例では、ローダーは、getSequenceNumber メソッドを使用して、Employee 値オブジェクトの現行バージョン情報を取得できることを認識しています。ローダーは、戻り値を増分して、新規 Employee 値で永続ストレージを更新する前に、新規バージョン番号を生成します。 Java Database Connectivity (JDBC) ローダーの場

合、過剰 SQL UPDATE ステートメントの WHERE 文節内の現行シーケンス番号が使用され、新規生成シーケンス番号を使用して、シーケンス番号列が新規シーケンス番号の値に設定されます。このほかにも、オプティミスティック・バージョン管理に使用できる非表示の列を自動的に更新するなんらかのバックエンド提供の関数をローダーが利用する可能性があります。

状況によっては、ストアード・プロシージャーまたはトリガーを使用して、バージョン情報が入っている列を保守できるようにすることもあります。ローダーが、オプティミスティック・バージョン情報を保守するためにこれらの技法のいずれかを使用している場合は、アプリケーションが OptimisticCallback 実装を提供する必要はありません。デフォルトの OptimisticCallback 実装は、ローダーが OptimisticCallback オブジェクトからの支援なしにオプティミスティック・バージョン管理を処理できるため、このシナリオでは便利です。

エンティティーのデフォルト実装

エンティティーは、タプル・オブジェクトを使用して、ObjectGrid に保管されます。デフォルトの OptimisticCallback 実装の振る舞いは、非エンティティー・マップに対する振る舞いと似ています。ただし、エンティティー内のバージョン・フィールドは、エンティティー記述子 XML ファイルの @Version アノテーションまたはバージョン属性を使用して識別されます。

バージョン属性の型は、int、Integer、short、Short、long、Long、java.sql.Timestamp のいずれかになります。エンティティーにはバージョン属性を 1 つだけ定義することができます。バージョン属性は構成時にのみ設定するようにしてください。エンティティーが永続化されると、バージョン属性の値は変更してはなりません。

バージョン属性が構成されず、オプティミスティック・ロック・ストラテジーが使用される場合、タプルの全体の状態を使用して、タプル全体が暗黙的にバージョン設定されますが、これははるかに高コストになります。

以下の例では、Employee エンティティーに SequenceNumber という long バージョン属性が設定されています。

```
@Entity
public class Employee
{
private long sequence;
    // Sequential sequence number used for optimistic versioning.
    @Version
    public long getSequenceNumber() {
        return sequence;
    }
    public void setSequenceNumber(long newSequenceNumber) {
        this.sequence = newSequenceNumber;
    }
    // Other get/set methods for other fields of Employee object.
}
```

OptimisticCallback プラグインの記述

OptimisticCallback プラグインは、OptimisticCallback インターフェースを実装し、共通 ObjectGrid プラグイン規則に準拠する必要があります。詳しくは、OptimisticCallback インターフェースを参照してください。

次のリストには、OptimisticCallback インターフェース内の各メソッドについての説明または考慮事項があります。

NULL_OPTIMISTIC_VERSION

この特殊値は、OptimisticCallback 実装がバージョン検査を必要としない場合に、getVersionedObjectForValue メソッドによって戻されます。com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.NoVersioningOptimisticCallback クラスの組み込みプラグイン実装では、このプラグイン実装を指定するとバージョン管理が使用不可になるため、この値が使用されます。

getVersionedObjectForValue メソッド

getVersionedObjectForValue メソッドは、バージョン管理のために使用できる値のコピーまたは値の属性を戻すことがあります。このメソッドは、オブジェクトがトランザクションに関連付けられるたびに呼び出されます。ローダーがパッキング・マップ内にプラグインしていない場合、パッキング・マップは、コミット時刻にこの値を使用してオプティミスティック・バージョン管理比較を行います。オプティミスティック・バージョン管理比較は、このトランザクションがこのトランザクションによって変更されたマップ・エントリーに最初にアクセスした後でバージョンが変更されていないことを確認するために、パッキング・マップによって使用されます。別のトランザクションが既にこのマップ・エントリーのバージョンを変更している場合、バージョン比較は失敗し、パッキング・マップは OptimisticCollisionException 例外を表示して、トランザクションを強制的にロールバックします。ローダーがプラグインされている場合、パッキング・マップはオプティミスティック・バージョン管理情報を使用しません。代わりに、ローダーは、オプティミスティック・バージョン管理比較を行い、必要に応じてバージョン管理情報を更新する責任があります。ローダーは通常、ローダーの batchUpdate メソッドに渡される LogElement から、初期バージョン管理オブジェクトを取得します。このオブジェクトは、フラッシュ操作が発生するか、トランザクションがコミットされたときに呼び出されます。

次のコードは、EmployeeOptimisticCallbackImpl オブジェクトによって使用される実装を示しています。

```
public Object getVersionedObjectForValue(Object value)
{
    if (value == null)
    {
        return null;
    }
    else
    {
        Employee emp = (Employee) value;
        return new Long( emp.getSequenceNumber() );
    }
}
```

前の例に示すように、sequenceNumber 属性は、ローダーが予期するように、java.lang.Long オブジェクト内に戻されます。これは、ローダーの作成者と同一人物が EmployeeOptimisticCallbackImpl を作成したか、 EmployeeOptimisticCallbackImpl を実装した人物と協力して作業を行ったか (例えば、getVersionedObjectForValue メソッドによって戻された値に合意した) のいずれかであることを示しています。デフォルトの OptimisticCallback プラグインは、特殊値

NULL_OPTIMISTIC_VERSION をバージョン・オブジェクトとして戻します。

updateVersionedObjectForValue メソッド

このメソッドは、トランザクションが値を更新し、新バージョンのオブジェクトが必要になるたびに呼び出されます。 getVersionedObjectForValue メソッドがこの値の属性を戻した場合、このメソッドは通常、属性値を新バージョンのオブジェクトに更新します。 getVersionedObjectForValue メソッドがこの値のコピーを戻した場合、このメソッドは通常、いかなるアクションも完了しません。デフォルトの OptimisticCallback プラグインは、getVersionedObjectForValue のデフォルト実装がバージョン・オブジェクトとして常に特殊値 NULL_OPTIMISTIC_VERSION を戻すため、このメソッドではいかなるアクションも完了しません。次の例は、OptimisticCallback セクションで使用される EmployeeOptimisticCallbackImpl オブジェクトによって使用される実装を示しています。

```
public void updateVersionedObjectForValue(Object value)
{
    if ( value != null )
    {
        Employee emp = (Employee) value;
        long next = emp.getSequenceNumber() + 1;
        emp.updateSequenceNumber( next );
    }
}
```

前の例で示すように、sequenceNumber 属性は、次に getVersionedObjectForValue メソッドが呼び出されたときに、戻される java.lang.Long 値が長整数値を持つように、1 ずつ増分されます。この長整数値は、元のシーケンス番号の値に 1 を加えたもの (例えば、この従業員インスタンスの次のバージョン値) です。この例は、ローダーを作成者が EmployeeOptimisticCallbackImpl の作成者と同一人物であるか、EmployeeOptimisticCallbackImpl を実装した人物と協力して作業を行ったかのいずれかであることを示しています。

serializeVersionedValue メソッド

このメソッドは、指定されたストリームにバージョン値を書き込みます。実装によっては、バージョン値を使用して、オプティミスティック更新の衝突を識別することができます。一部の実装では、バージョン値は元の値のコピーです。それ以外の実装では、値のバージョンを示すシーケンス番号またはその他のいくつかのオブジェクトがあります。実際の実装が不明であるため、このメソッドは適切なシリアライゼーションを実行するために提供されます。デフォルト実装は writeObject メソッドを呼び出します。

inflateVersionedValue メソッド

このメソッドは、バージョン値のシリアライズ・バージョンを取り、実際のバージョン値オブジェクトを戻します。実装によっては、バージョン値を使用して、オプティミスティック更新の衝突を識別することができます。一部の実装では、バージョン値は元の値のコピーです。それ以外の実装では、値のバージョンを示すシーケンス番号またはその他のいくつかのオブジェクトがあります。実際の実装が不明であるため、このメソッドは適切なデシリアライゼーションを行うために提供されます。デフォルト実装は readObject メソッドを呼び出します。

アプリケーション提供の OptimisticCallback オブジェクトの使用

アプリケーション提供の OptimisticCallback オブジェクトを BackingMap 構成に追加する場合、XML 構成とプログラマチック構成の 2 つの方法があります。

OptimisticCallback オブジェクトのプログラマチックなプラグイン

次の例は、ローカル grid1 ObjectGrid インスタンス内の従業員のパッキング・マップ用に、アプリケーションで OptimisticCallback オブジェクトをプログラマチックにプラグインする方法を示しています。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid og = ogManager.createObjectGrid( "grid1" );
BackingMap bm = dg.defineMap("employees");
EmployeeOptimisticCallbackImpl cb = new EmployeeOptimisticCallbackImpl();
bm.setOptimisticCallback( cb );
```

OptimisticCallback オブジェクトをプラグインするための XML 構成方法

次の例に示すように、アプリケーションは、XML ファイルを使用して、その OptimisticCallback オブジェクトをプラグインすることができます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
<objectGrids>
    <objectGrid name="grid1">
        <backingMap name="employees" pluginCollectionRef="employees" lockStrategy="OPTIMISTIC" />
    </objectGrid>
</objectGrids>

<backingMapPluginCollections>
    <backingMapPluginCollection id="employees">
        <bean id="OptimisticCallback" className="com.xyz.EmployeeOptimisticCallbackImpl" />
    </backingMapPluginCollection>
</backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

キャッシュ・オブジェクトのシリアライズのためのプラグイン

Java

WebSphere eXtreme Scale は、クライアント・プロセスとサーバー・プロセスの間でのデータ移動のために、複数の Java プロセスを使用して、Java オブジェクト・インスタンスをバイトに変換し、必要に応じて再度オブジェクトに戻すことによって、データをシリアライズします。

eXtreme Scale でデータをシリアライズするために、Java シリアライゼーション、ObjectTransformer プラグイン、または DataSerializer プラグインを使用できます。

 ObjectTransformer インターフェースは、DataSerializer プラグインで置換されました。これを使用して、既存の製品 API がデータと効率的に対話できるように WebSphere eXtreme Scale 内の任意のデータを効率的に格納できます。

関連概念:

シリアライゼーションの概要

データは、データ・グリッドで Java オブジェクトとして常に表されていますが、必ずしも保管されているとは限りません。WebSphere eXtreme Scale は、クライアント・プロセスとサーバー・プロセスの間でのデータ移動のために、複数の Java プロセスを使用して、Java オブジェクト・インスタンスをバイトに変換し、必要に応じて再度オブジェクトに戻すことによって、データをシリアライズします。

シリアライザーのプログラミングの概要: Java

DataSerializer プラグインを使用して、Java オブジェクトおよびその他のデータをバイナリー形成でグリッドに保管する最適化されたシリアライザーを作成できます。プラグインは、データ・オブジェクト全体のインフレートを必要とせずに、バイナリー・データ内の属性を照会するために使用できるメソッドも提供します。

DataSerializer プラグインには、3 つのメインのプラグインと、いくつかのオプションのミックスイン・インターフェースが含まれます。MapSerializerPlugin プラグインは、マップと他のマップ間のリレーションシップに関するメタデータを含みます。また、KeySerializerPlugin および ValueSerializerPlugin への参照も含みます。キーおよび値のシリアライザーのプラグインは、マップの個々のキーおよび値データとの対話を担当するメタデータおよびシリアライゼーション・コードを含みます。MapSerializerPlugin プラグインは、キーおよび値のどちらかのシリアライザーまたは両方のシリアライザーを含む必要があります。

KeySerializerPlugin プラグインは、キーのシリアライズ、インフレート、およびイントロスペクトのためのメソッドとメタデータを提供します。ValueSerializer プラグインは、値のシリアライズ、インフレート、およびイントロスペクトのためのメソッドとメタデータを提供します。両方のインターフェースの要件は異なります。DataSerializer プラグインで使用可能なメソッドについて詳しくは、com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.io パッケージに関する API 資料を参照してください。

MapSerializerPlugin プラグイン

MapSerializerPlugin は、BackingMap インターフェースへのメイン・プラグイン・ポイントであり、2 つのネストされたプラグイン (KeySerializerPlugin および ValueSerializerPlugin) を含みます。 eXtreme Scale はネストされたプラグインやワイヤード・プラグインをサポートしないため、BasicMapSerializerPlugin プラグインはこれらのネストされたプラグインに人工的にアクセスします。これらのプラグインを OSGi フレームワークで使用する場合、MapSerializerPlugin プラグインが唯一のプロキシーとなります。ローダーなど他の従属プラグイン内では、ネストされたすべてのプラグインは、それらのプラグインも BackingMap ライフサイクル・イベントを listen していない限り、キャッシュに入れてはいけません。それらのプラグインへの参照がリフレッシュされ続ける場合があるため、OSGi フレームワークで実行している場合、これは重要になります。

KeySerializerPlugin プラグイン

KeySerializerPlugin プラグインは、DataSerializer インターフェースを拡張し、他のミックスイン・インターフェースと、キーを記述しているメタデー

タを含みます。このプラグインを使用して、キー・データ・オブジェクトおよび属性をシリアライズし、インフレートします。

ValueSerializerPlugin プラグイン

ValueSerializerPlugin プラグインは、DataSerializer インターフェースを拡張しますが、追加のメソッドを公開することはありません。このプラグインを使用して、値データ・オブジェクトおよび属性をシリアライズし、インフレートします。

オプションのミックスイン・インターフェース

オプションのミックスイン・インターフェースは、以下を含む追加機能を提供します。

オプティミスティック・バージョン管理

Versionable インターフェースは、オプティミスティック・ロックの使用時に、ValueSerializerPlugin プラグインがバージョン・チェックおよびバージョンの更新を処理できるようにします。Versioning が実装されておらず、オプティミスティック・ロックが有効な場合、バージョンは全体がシリアライズされた形式のデータ・オブジェクト値です。

Non-hashCode-based ルーティング

Partitionable インターフェースは、KeySerializerPlugin 実装が要求を明示区画へ経路指定できるようにします。これは、KeySerializerPlugin なしで ObjectMap API が使用された場合の PartitionableKey インターフェースと同等です。このフィーチャーがない場合、キーは、結果の hashCode に基づく区画に経路指定されます。

UserReadable (toString) インターフェース

UserReadable (toString) インターフェースによって、すべての DataSerializer の実装がログ・ファイルおよびデバッガー内のデータを表示するための代替メソッドを提供することができます。この機能を使用して、パスワードなどの機密データを非表示にできます。DataSerializer 実装がこのインターフェースを実装しなければ、ランタイム環境は、必要に応じて、オブジェクトで toString() を直接呼び出したり、代替表現を含めたりすることがあります。

進化サポート

Mergeable インターフェースを ValueSerializerPlugin プラグイン実装で実装することにより、グリッド内のデータをその存続期間中絶えず更新するさまざまな DataSerializer バージョンが存在するとき、オブジェクトの複数バージョン間のインターオペラビリティーが可能になります。 Mergeable メソッドにより、DataSerializer プラグインは、これ以外の方法では理解しないデータを保持することができます。

関連タスク:

Java 『キャッシュ・データの更新および取得時におけるオブジェクト・インフレーションの回避』
DataSerializer プラグインを使用して、自動のオブジェクト・インフレーションを迂回して、既にシリアライズされたデータから手動で属性を取得できます。
DataSerializer を使用して、データをシリアライズ形式で挿入したり更新したりすることもできます。この使用法は、データの一部のみにアクセスする必要があるときや、システム間でデータを受け渡しする必要があるときに有用です。

Java 713 ページの『OSGi フレームワークを使用するためのプログラミング』
OSGi コンテナー内で eXtreme Scale サーバーとクライアントを開始できます。これにより、eXtreme Scale プラグインをランタイム環境に動的に追加し、更新できるようになります。

関連情報:

Java DataSerializer API 資料

キャッシュ・データの更新および取得時におけるオブジェクト・インフレーションの回避: Java

DataSerializer プラグインを使用して、自動のオブジェクト・インフレーションを迂回して、既にシリアライズされたデータから手動で属性を取得できます。
DataSerializer を使用して、データをシリアライズ形式で挿入したり更新したりすることもできます。この使用法は、データの一部のみにアクセスする必要があるときや、システム間でデータを受け渡しする必要があるときに有用です。

このタスクについて

このタスクは、MapSerializerPlugin プラグインと ValueSerializerPlugin プラグインで COPY_TO_BYTES_RAW コピー・モードを使用します。MapSerializer は、BackingMap インターフェースをポイントする、メインのプラグインです。これには、KeyDataSerializer と ValueDataSerializer という、ネストされた 2 つのプラグインが含まれます。製品はネストされたプラグインをサポートしないため、BaseMapSerializer は、ネストまたは接続されたプラグインを人工的にサポートします。したがって、OSGi コンテナーの中でこれらの API を使用する場合、MapSerializer が唯一のプロキシーになります。サポートする参照をリフレッシュできるように BackingMap ライフサイクル・イベントも listen していない限り、必ずしもすべてのネストされたプラグインが、例えばローダーなどの他の従属プラグイン内にキャッシュしなければならないというわけではありません。

COPY_TO_BYTES_RAW が設定されると、すべての ObjectMap メソッドは SerializedValue オブジェクトを返し、ユーザーはシリアライズ形式または Java オブジェクト形式の値を取得することができます。

KeySerializerPlugin プラグインを使用したとき、キーを返すすべてのメソッド (MapIndexPlugin プラグインや Loader プラグインなど) は SerializedKey オブジェクトを返します。

データが既にシリアライズ形式であるとき、データは同じ SerializedKey オブジェクトおよび SerializedValue オブジェクトを使用して挿入されます。データが byte[] 形

式であるときは、適切なキーまたは値ラッパーを作成するために DataObjectKeyFactory ファクトリーおよび DataObjectValueFactory ファクトリーが使用されます。これらのファクトリーは、BackingMap の SerializerAccessor から、または DataSerializer 実装内からアクセスできる DataObjectContext で使用可能です。

このトピック内の例は、以下のアクションを実行する方法を示しています。

手順

1. DataSerializer プラグインを使用して、データ・オブジェクトをシリアライズしてインフレートします。
2. シリアライズされた値を取得します。
3. シリアライズされた値から個々の属性を取得します。
4. プリシリアライズされたキーと値を挿入します。

例

この例を使用してキャッシュ・データを更新したり取得したりします。

```
import java.io.IOException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.CopyMode;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.io.XsDataOutputStream;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.io.SerializerAccessor;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.io.ValueSerializerPlugin;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.io.dataobject.DataObjectContext;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.io.dataobject.SerializedKey;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.io.dataobject.SerializedValue;

    /**
     * Use the DataSerializer to serialize an Order key.
     */
    public byte[] serializeOrderKey(ObjectGrid grid, String key)
            throws IOException {
        SerializerAccessor sa = grid.getMap("Order").getSerializerAccessor();
        DataObjectContext dftObjCtx = sa.getDefaultContext();
        XsDataOutputStream out = dftObjCtx.getDataStreamManager()
                .createOutputStream();
        sa.getMapSerializerPlugin().getKeySerializerPlugin()
                .serializeDataObject(sa.getDefaultContext(), key, out);
        return out.toByteArray();
    }

    /**
     * Use the DataSerializer to serialize an Order value.
     */
    public byte[] serializeOrderValue(ObjectGrid grid, Order value)
            throws IOException {
        SerializerAccessor sa = grid.getMap("Order").getSerializerAccessor();
        DataObjectContext dftObjCtx = sa.getDefaultContext();
        XsDataOutputStream out = dftObjCtx.getDataStreamManager()
                .createOutputStream();
        sa.getMapSerializerPlugin().getValueSerializerPlugin()
                .serializeDataObject(sa.getDefaultContext(), value, out);
        return out.toByteArray();
    }

    /**
     * Retrieve a single Order in serialized form.
     */
    public byte[] fetchOrderRAWBytes(Session session, String key)
            throws ObjectGridException {
        ObjectMap map = session.getMap("Order");

        // Override the CopyMode to retrieve the serialized form of the value.
        // This process affects all API methods from this point on for the life
        // of the Session.
        map.setCopyMode(CopyMode.COPY_TO_BYTES_RAW, null);
        SerializedValue serValue = (SerializedValue) map.get(key);

        if (serValue == null)
            return null;

        // Retrieve the byte array and return it to the caller.
        return serValue.getInputStream().toByteArray();
```

```
    }

    /**
     * Retrieve one or more attributes from the Order without inflating the
     * Order object.
     */
    public Object[] fetchOrderAttribute(Session session, String key,
            String... attributes) throws ObjectGridException, IOException {
        ObjectMap map = session.getMap("Order");

        // Override the CopyMode to retrieve the serialized form of the value.
        // This process affects all API methods from this point on for the life
        // of the Session.
        map.setCopyMode(CopyMode.COPY_TO_BYTES_RAW, null);
        SerializedValue serValue = (SerializedValue) map.get(key);

        if (serValue == null)
            return null;

        // Retrieve a single attribute from the byte buffer.
        ValueSerializerPlugin valSer = session.getObjectGrid()
                .getMap(map.getName()).getSerializerAccessor()
                .getMapSerializerPlugin().getValueSerializerPlugin();
        Object attrCtx = valSer.getAttributeContexts(attributes);
        return valSer.inflateDataObjectAttributes(serValue.getContext(),
                serValue.getInputStream(), attrCtx);
    }

    /**
     * Inserts a pre-serialized key and value into the Order map.
     */
    public void insertRAWOrder(Session session, byte[] key, byte[] value)
            throws ObjectGridException {
        ObjectMap map = session.getMap("Order");

        // Get a referece to the default DataObjectContext for the map.
        DataObjectContext dftDtaObjCtx = session.getObjectGrid()
                .getMap(map.getName()).getSerializerAccessor()
                .getDefaultContext();

        // Wrap the key and value in a SerializedKey and SerializedValue
        // wrapper.
        SerializedKey serKey = dftDtaObjCtx.getKeyFactory().createKey(key);
        SerializedValue serValue = dftDtaObjCtx.getValueFactory().createValue(
                value);

        // Insert the serialized form of the key and value.
        map.insert(serKey, serValue);
    }
}
```

関連概念:

Java 614 ページの『シリアライザーのプログラミングの概要』
DataSerializer プラグインを使用して、Java オブジェクトおよびその他のデータをバイナリー形成でグリッドに保管する最適化されたシリアライザーを作成できます。プラグインは、データ・オブジェクト全体のインフレートを必要とせずに、バイナリー・データ内の属性を照会するために使用できるメソッドも提供します。

Java シリアライゼーションの概要
データは、データ・グリッドで Java オブジェクトとして常に表されていますが、必ずしも保管されているとは限りません。WebSphere eXtreme Scale は、クライアント・プロセスとサーバー・プロセスの間でのデータ移動のために、複数の Java プロセスを使用して、Java オブジェクト・インスタンスをバイトに変換し、必要に応じて再度オブジェクトに戻すことによって、データをシリアライズします。

Java サンプル

関連情報:

Java DataSerializer API 資料

ObjectTransformer プラグイン: Java

ObjectTransformer プラグインを使用すると、パフォーマンス向上のために、キャッシュ内のオブジェクトをシリアライズ、デシリアライズ、およびコピーすることができます。

 ObjectTransformer インターフェースは、DataSerializer プラグインで置換されました。これを使用して、既存の製品 API がデータと効率的に対話できるように WebSphere eXtreme Scale 内の任意のデータを効率的に格納できます。

プロセッサーの使用に関するパフォーマンス上の問題がある場合は、各マップに ObjectTransformer プラグインを追加します。 ObjectTransformer プラグインを使用しない場合、合計プロセッサー時間の 60 から 70 パーセントまではエントリーのシリアライズとコピーに費やされます。

目的

ObjectTransformer プラグインがあれば、アプリケーションで以下の操作に対するカスタム・メソッドを提供できます。

- エントリーに対するキーのシリアライズまたはデシリアライズ
- エントリーに対する値のシリアライズまたはデシリアライズ
- エントリーに対するキーまたは値のコピー

ObjectTransformer プラグインが提供されない場合、 ObjectGrid はシリアライズおよびデシリアライズのシーケンスを使用してオブジェクトをコピーするので、ユーザーがキーと値のシリアライズを行う必要があります。この方法には費用がかかるので、パフォーマンスが重大である場合には ObjectTransformer プラグインを使用してください。アプリケーションが、トランザクションのオブジェクトを最初に検索する際に、コピーが行われます。このコピーは、マップのコピー・モードを NO_COPY に設定すると行われません。あるいは、コピー・モードを COPY_ON_READ に設定すると、コピー数を軽減できます。アプリケーションの必要に応じて、このプラグインにカスタム・コピー・メソッドを提供することによって、コピー操作を最適化します。このようなプラグインにより、コピー・オーバーヘッドを合計プロセッサー時間の 65-70 パラメーターから 2/3 パーセントに軽減できます。

デフォルトの copyKey および copyValue メソッド実装では、最初に clone メソッド (このメソッドが提供されている場合) を使用しようとします。 clone メソッド実装が提供されていない場合は、実装のデフォルトはシリアライゼーションになります。

eXtreme Scale が分散モードで実行されているときは、オブジェクト・シリアライゼーションも直接使用されます。 LogSequence は、変更内容を ObjectGrid のピアに送信する前に、ObjectTransformer プラグインを使用して、キーおよび値のシリアライズを支援します。組み込み Java Developer Kit シリアライゼーションを使用するのではなく、シリアライゼーションのカスタム・メソッドを提供するときは、注意が必要です。オブジェクトのバージョン管理は複雑な問題であり、カスタム・メソッドがバージョン管理用に設計されていることが確認できない場合、バージョンの互換性に問題が発生することがあります。

以下のリストでは、eXtreme Scale がキーと値の両方のシリアライズを試みる方法を説明しています。

- カスタム ObjectTransformer プラグインが作成され、プラグインされている場合、eXtreme Scale は ObjectTransformer インターフェース内のメソッドを呼び出して、キーと値をシリアライズし、オブジェクトのキーおよび値のコピーを取得します。
- カスタム ObjectTransformer プラグインが使用されていない場合、eXtreme Scale はデフォルトに従って値のシリアライズとデシリアライズを行います。デフォルト・プラグインが使用されている場合、各オブジェクトは、外部化可能またはシリアライズ可能として実装されます。
  - オブジェクトが Externalizable インターフェースをサポートする場合、writeExternal メソッドが呼び出されます。外部化可能として実装されたオブジェクトは、パフォーマンスを向上させます。
  - Externalizablee インターフェースをサポートせず、Serializable インターフェースを実装しないオブジェクトは、ObjectOutputStream メソッドを使用して保存されます。

ObjectTransformer インターフェースの使用

ObjectTransformer は、ObjectTransformer インターフェースを実装し、共通 ObjectGrid プラグイン規則に準拠している必要があります。

ObjectTransformer オブジェクトを BackingMap 構成に追加する場合、以下のように、プログラマチック構成と XML 構成の 2 つの方法が使用されます。

ObjectTransformer オブジェクトのプログラマチックなプラグイン

以下のコード・スニペットは、カスタム ObjectTransformer オブジェクトを作成し、それを BackingMap に追加します。

```
ObjectGridManager objectGridManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid myGrid = objectGridManager.createObjectGrid("myGrid", false);
BackingMap backingMap = myGrid.getMap("myMap");
MyObjectTransformer myObjectTransformer = new MyObjectTransformer();
backingMap.setObjectTransformer(myObjectTransformer);
```

ObjectTransformer をプラグインするための XML 構成方法

ObjectTransformer 実装のクラス名が、com.company.org.MyObjectTransformer クラスであると仮定します。このクラスは、ObjectTransformer インターフェースを実装します。ObjectTransformer 実装は、以下の XML を使用して構成することができます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
     <backingMap name="myMap" pluginCollectionRef="myMap" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>

    <backingMapPluginCollections>
 <backingMapPluginCollection id="myMap">
      <bean id="ObjectTransformer" className="com.company.org.MyObjectTransformer" />
 </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

ObjectTransformer の使用に関するシナリオ

ObjectTransformer プラグインは、以下の状態で使用できます。

- シリアライズ不能オブジェクト
- シリアライズ可能オブジェクトであるが、シリアライゼーション・パフォーマンスを改善する
- キーまたは値のコピー

以下の例で、ObjectGrid は Stock クラスのストアに使用されます。

```
/**
* Stock object for ObjectGrid demo
*
*
*/
public class Stock implements Cloneable {
    String ticket;
    double price;
    String company;
    String description;
    int serialNumber;
    long lastTransactionTime;
    /**
    * @return Returns the description.
    */
    public String getDescription() {
        return description;
    }
    /**
    * @param description The description to set.
    */
    public void setDescription(String description) {
        this.description = description;
    }
    /**
    * @return Returns the lastTransactionTime.
    */
    public long getLastTransactionTime() {
        return lastTransactionTime;
    }
    /**
    * @param lastTransactionTime The lastTransactionTime to set.
    */
    public void setLastTransactionTime(long lastTransactionTime) {
        this.lastTransactionTime = lastTransactionTime;
    }
    /**
    * @return Returns the price.
    */
    public double getPrice() {
        return price;
    }
    /**
    * @param price The price to set.
    */
    public void setPrice(double price) {
        this.price = price;
    }
    /**
    * @return Returns the serialNumber.
    */
    public int getSerialNumber() {
        return serialNumber;
    }
    /**
    * @param serialNumber The serialNumber to set.
    */
    public void setSerialNumber(int serialNumber) {
        this.serialNumber = serialNumber;
    }
    /**
    * @return Returns the ticket.
    */
    public String getTicket() {
        return ticket;
```

```
    }
    /**
    * @param ticket The ticket to set.
    */
    public void setTicket(String ticket) {
        this.ticket = ticket;
    }
    /**
    * @return Returns the company.
    */
    public String getCompany() {
        return company;
    }
    /**
    * @param company The company to set.
    */
    public void setCompany(String company) {
        this.company = company;
    }
    //clone
    public Object clone() throws CloneNotSupportedException
    {
        return super.clone();
    }
}
```

Stock クラス用に、カスタム・オブジェクト変換プログラム・クラスを作成できます。

```
/**
* Custom implementation of ObjectGrid ObjectTransformer for stock object
*
*/
public class MyStockObjectTransformer implements ObjectTransformer {
/* (non-Javadoc)
* @see
* com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectTransformer#serializeKey
* (java.lang.Object,
* java.io.ObjectOutputStream)
*/
public void serializeKey(Object key, ObjectOutputStream stream) throws IOException {
    String ticket= (String) key;
    stream.writeUTF(ticket);
}

/* (non-Javadoc)
* @see com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.
ObjectTransformer#serializeValue(java.lang.Object,
java.io.ObjectOutputStream)
*/
public void serializeValue(Object value, ObjectOutputStream stream) throws IOException {
    Stock stock= (Stock) value;
    stream.writeUTF(stock.getTicket());
    stream.writeUTF(stock.getCompany());
    stream.writeUTF(stock.getDescription());
    stream.writeDouble(stock.getPrice());
    stream.writeLong(stock.getLastTransactionTime());
    stream.writeInt(stock.getSerialNumber());
}

/* (non-Javadoc)
* @see com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.
ObjectTransformer#inflateKey(java.io.ObjectInputStream)
*/
public Object inflateKey(ObjectInputStream stream) throws IOException, ClassNotFoundException {
    String ticket=stream.readUTF();
    return ticket;
}

/* (non-Javadoc)
* @see com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.
ObjectTransformer#inflateValue(java.io.ObjectInputStream)
*/

public Object inflateValue(ObjectInputStream stream) throws IOException, ClassNotFoundException {
    Stock stock=new Stock();
    stock.setTicket(stream.readUTF());
    stock.setCompany(stream.readUTF());
    stock.setDescription(stream.readUTF());
    stock.setPrice(stream.readDouble());
    stock.setLastTransactionTime(stream.readLong());
    stock.setSerialNumber(stream.readInt());
    return stock;
}

/* (non-Javadoc)
```

```
* @see com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.
ObjectTransformer#copyValue(java.lang.Object)
*/
public Object copyValue(Object value) {
    Stock stock = (Stock) value;
    try {
        return stock.clone();
    }
    catch (CloneNotSupportedException e)
    {
        // display exception message    }
}

/* (non-Javadoc)
* @see com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.
ObjectTransformer#copyKey(java.lang.Object)
*/
public Object copyKey(Object key) {
    String ticket=(String) key;
    String ticketCopy= new String (ticket);
    return ticketCopy;
}
}
```

次に、このカスタム MyStockObjectTransformer クラスを BackingMap にプラグインします。

```
ObjectGridManager ogf=ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid og = ogf.getObjectGrid("NYSE");
BackingMap bm = og.defineMap("NYSEStocks");
MyStockObjectTransformer ot = new MyStockObjectTransformer();
bm.setObjectTransformer(ot);
```

イベント・リスナーの指定のためのプラグイン

Java

ObjectGridEventListener、MapEventListener、ObjectGridLifecycleListener、および BackingMapLifecycleListener プラグインを使用すると、eXtreme Scale キャッシュ内のさまざまなイベントの通知を構成できます。リスナー・プラグインは、他の eXtreme Scale プラグインと同様に、ObjectGrid または BackingMap インスタンスに登録されて、アプリケーションおよびキャッシュ・プロバイダーの統合およびカスタマイズの場所になります。

ObjectGridEventListener プラグイン

ObjectGridEventListener プラグインは、ObjectGrid インスタンス、断片、およびトランザクション用の eXtreme Scale ライフサイクル・イベントを提供します。ObjectGridEventListener プラグインを使用して、ObjectGrid で重大なイベントが発生したときに通知を受け取ります。これらのイベントには、ObjectGrid の初期化、トランザクションの開始、トランザクションの終了、および ObjectGrid の破棄などがあります。これらのイベントを listen するには、ObjectGridEventListener インターフェースを実装するクラスを作成して、eXtreme Scale に追加します。

ObjectGridEventListener プラグインの作成について詳しくは、626 ページの『ObjectGridEventListener プラグイン』を参照してください。また、 API 資料でも詳細を参照できます。

ObjectGridEventListener インスタンスの追加および除去

ObjectGrid は、複数の ObjectGridEventListener リスナーを持つことが可能です。リスナーの追加および除去は、ObjectGrid インターフェースで addEventListener、および removeEventListener メソッドを使用して行います。また、ObjectGridEventListener プラグインを ObjectGrid 記述子ファイルに明示的に登録す

ることもできます。例については、 626 ページの『ObjectGridEventListener プラグイン』を参照してください。

MapEventListener プラグイン

MapEventListener プラグインは、BackingMap インスタンスに対して発生するコールバック通知および重要なキャッシュ状態変更を提供します。MapEventListener プラグインの作成について詳しくは、 625 ページの『MapEventListener プラグイン』を参照してください。また、 API 資料でも詳細を参照できます。

MapEventListener インスタンスの追加および除去

eXtreme Scale は、複数の MapEventListener リスナーを持つことが可能です。リスナーの追加および除去は、BackingMap インターフェースで addMapEventListener、および removeMapEventListener メソッドを使用して行います。また、MapEventListener リスナーを ObjectGrid 記述子ファイルに明示的に登録することもできます。例については、 625 ページの『MapEventListener プラグイン』を参照してください。

BackingMapLifecycleListener プラグイン

BackingMapLifecycleListener プラグインは、BackingMap インスタンスに対して発生するライフサイクル状態変更のコールバック通知を提供します。BackingMap インスタンスは、その存続時間の間、事前定義の状態のセットを通過していきます。

BackingMapLifecycleListener インスタンスの追加および除去

eXtreme Scale サーバーは、複数の BackingMapLifecycleListener リスナーを持つことが可能です。リスナーの追加および除去は、BackingMap インターフェースで addMapEventListener および removeMapEventListener メソッドを使用して行います。BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装するすべての BackingMap プラグインもまた、それらが登録されている ObjectGrid インスタンスの BackingMapLifecycleListener として自動的に追加されます。また、BackingMapLifecycleListener リスナーを ObjectGrid 記述子ファイルに明示的に登録することもできます。例については、BackingMapLifecycleListener プラグインを参照してください。

ObjectGridLifecycleListener プラグイン

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、ObjectGrid インスタンスに対して発生するライフサイクル状態変更のコールバック通知を提供します。ObjectGrid インスタンスは、その存続時間の間、事前定義の状態のセットを通過していきます。

ObjectGridLifecycleListener インスタンスの追加および除去

eXtreme Scale は、複数の ObjectGridLifecycleListener リスナーを持つことが可能です。リスナーの追加および除去は、ObjectGrid インターフェースで addEventListener および removeEventListener メソッドを使用して行います。ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装するすべての ObjectGrid プラグインは、それらが登録されている ObjectGrid インスタンスの ObjectGridLifecycleListener として自動的に追加されます。また、ObjectGridLifecycleListener リスナーを ObjectGrid デプロイメント記述子ファイルに

明示的に登録することもできます。例については、ObjectGridLifecycleListener プラグインを参照してください。

MapEventListener プラグイン: Java

MapEventListener プラグインは、マップがプリロードを終了したり、エントリーがマップから除去されたりしたときに、BackingMap オブジェクトに対して発生するコールバック通知および重要なキャッシュ状態変更を提供します。特定の MapEventListener プラグインは、MapEventListener インターフェースを実装して作成するカスタム・クラスです。

MapEventListener プラグイン規則

MapEventListener プラグインを開発する際には、共通のプラグイン規則に従う必要があります。プラグイン規則について詳しくは、357 ページの『Java プラグインの概要』を参照してください。その他のタイプのリスナー・プラグインについては、623 ページの『イベント・リスナーの指定のためのプラグイン』を参照してください。

MapEventListener 実装を作成すると、プログラムで、あるいは、XML 構成を使用してそれを BackingMap 構成にプラグインできます。

MapEventListener 実装の作成

MapEventListener プラグインの実装は、アプリケーションに組み込むことができます。このプラグインで、MapEventListener インターフェースを実装し、マップに関する重要なイベントを受信する必要があります。エントリーがマップから除去されたとき、およびマップのプリロードが完了したときに、イベントが MapEventListener プラグインに送られます。

MapEventListener 実装のプログラムによるプラグイン

カスタム MapEventListener のクラス名は、com.company.org.MyMapEventListener クラスです。このクラスは MapEventListener インターフェースを実装します。以下のコード・スニペットは、カスタム MapEventListener オブジェクトを作成し、それを BackingMap オブジェクトに追加します。

```
ObjectGridManager objectGridManager =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid myGrid = objectGridManager.createObjectGrid("myGrid", false);
BackingMap myMap = myGrid.defineMap("myMap");
MyMapEventListener myListener = new MyMapEventListener();
myMap.addMapEventListener(myListener);
```

XML を使用した MapEventListener 実装のプラグイン

MapEventListner 実装は、XML を使用して構成できます。以下の XML は、myGrid.xml ファイルに存在しなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<objectGridconfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <backingMap name="myMap" pluginCollectionRef="myPlugins" />
```

```
        </objectGrid>
    </objectGrids>
    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="myPlugins">
            <bean id="MapEventListener" className=
           "com.company.org.MyMapEventListener" />
        </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

このファイルを ObjectGridManager インスタンスに提供すると、この構成の作成が容易になります。以下のコード・スニペットは、この XML ファイルを使用して ObjectGrid インスタンスを作成する方法を示しています。新規に作成された ObjectGrid インスタンスにおいて、myMap BackingMap で MapEventListener が設定されます。

```
ObjectGridManager objectGridManager =
 ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid myGrid =
 objectGridManager.createObjectGrid("myGrid", new URL("file:etc/test/myGrid.xml"),
  true, false);
```

ObjectGridEventListener プラグイン: Java

ObjectGridEventListener プラグインは、ObjectGrid、断片、およびトランザクション用の WebSphere eXtreme Scale ライフサイクル・イベントを提供します。ObjectGridEventListener プラグインは、ObjectGrid が初期化または破棄されたとき、およびトランザクションが開始または終了したときに通知を行います。ObjectGridEventListener プラグインは、 ObjectGridEventListener インターフェースを実装して作成するカスタム・クラスです。必要な場合、この実装は、ObjectGridEventGroup サブインターフェースを含み、共通の eXtreme Scale プラグイン規則に従います。

概要

ObjectGridEventListener プラグインは Loader プラグインが使用可能である場合に便利で、トランザクションの開始時と終了時に Java Database Connectivity (JDBC) 接続またはバックエンドへの接続を初期化する必要があります。通常、ObjectGridEventListener プラグインと Loader プラグインは一緒に作成します。

ObjectGridEventListener プラグインの作成

ObjectGridEventListener プラグインは、重要な eXtreme Scale イベントに関する通知を受け取るために ObjectGridEventListener インターフェースを実装する必要があります。以下のインターフェースを実装して、追加のイベント通知を受け取ることができます。以下のサブインターフェースが ObjectGridEventGroup インターフェースに組み込まれています。

- ShardEvents インターフェース
- ShardLifecycle インターフェース
- TransactionEvents インターフェース

これらのインターフェースについて詳しくは、 API 資料を参照してください。

断片イベント

カタログ・サービスがプライマリー区画やレプリカの断片を Java 仮想マシン (JVM) に配置すると、その JVM 内に新しい ObjectGrid インスタンスが作成されて、その断片をホスティングします。JVM ホスト上でスレッドを開始する必要があるアプリケーションでは、プライマリーがこれらのイベントの通知を必要とします。ObjectGridEventGroup.ShardEvents インターフェースは、shardActivate メソッドおよび shardDeactivate メソッドを宣言します。これらのメソッドは、断片がプライマリーとして活動化される場合と、断片がプライマリーから非活動化される場合にのみ呼び出されます。アプリケーションでは、これら 2 つのイベントを使用することで、断片がプライマリーのときに追加スレッドを開始したり、断片がレプリカに戻ったときやサービスから除外されたときにスレッドを停止したりできます。

アプリケーションは、 shardActivate メソッドに提供されている ObjectGrid 参照で ObjectGrid#getMap メソッドを使用して特定の BackingMap を検索することで、どの区画が活動状態になっているかを特定できます。それからアプリケーションは、BackingMap#getPartitionId() メソッドを使用して区画番号を確認できます。各区画の番号は 0 から始まるため、最後の区画番号はデプロイメント記述子内の区画数 - 1 になります。

断片のライフサイクル・イベント

ObjectGridEventListener.initialize メソッドおよび ObjectGridEventListener.destroy メソッドのイベントは、ObjectGridEventGroup.ShardLifecycle インターフェースを使用して配信されます。

トランザクション・イベント

ObjectGridEventListener.transactionBegin メソッドおよび ObjectGridEventListener.transactionEnd メソッドは、ObjectGridEventGroup.TransactionEvents インターフェースを通じて導き出されます。

ObjectGridEventListener プラグインが ObjectGridEventListener インターフェースおよび ShardLifecycle インターフェースを実装すると、リスナーに配信されるイベントは断片ライフサイクル・イベントだけになります。どの新規 ObjectGridEventGroup 内部インターフェースを実装しても、eXtreme Scale は、新規インターフェースを使用してそうした特定のイベントのみを配信するようになります。この実装では、コードの下位互換性が維持されます。新しい内部インターフェースを使用する場合は、必要な特定のイベントのみを受け取るようにすることができます。

ObjectGridEventListener プラグインの使用

カスタム ObjectGridEventListener プラグインを使用するには、ObjectGridEventListener インターフェースおよびオプションの ObjectGridEventGroup サブインターフェースを実装するクラスをまず作成します。重大なイベントの通知を受け取れるように、カスタム・リスナーを ObjectGrid に追加します。ObjectGridEventListener プラグインを eXtreme Scale 構成に追加するには、プログラマチック構成と XML 構成の 2 つの方法があります。

ObjectGridEventListener プラグインのプログラマチックな構成

eXtreme Scale イベント・リスナーのクラス名が com.company.org.MyObjectGridEventListener クラスであると想定します。このクラスは、ObjectGridEventListener インターフェースを実装します。以下のコード・スニペットは、カスタム ObjectGridEventListener を作成し、ObjectGrid に追加します。

```
ObjectGridManager objectGridManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid myGrid = objectGridManager.createObjectGrid("myGrid", false);
MyObjectGridEventListener myListener = new MyObjectGridEventListener();
myGrid.addEventListener(myListener);
```

XML を使用した ObjectGridEventListener プラグインの構成

ObjectGridEventListener プラグインは、XML を使用して構成することもできます。以下の XML は、前述のプログラムで作成した ObjectGrid イベント・リスナーと同等の構成を作成します。以下のテキストは、myGrid.xml ファイルに存在しなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <bean id="ObjectGridEventListener"
       className="com.company.org.MyObjectGridEventListener" />
            <backingMap name="Book"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

Bean 宣言が backingMap 宣言の前にあることに注意してください。このファイルを ObjectGridManager プラグインに提供することで、この構成の作成が容易になります。以下のコード・スニペットは、この XML ファイルを使用して ObjectGrid インスタンスを作成する方法を示しています。作成した ObjectGrid インスタンスの myGrid ObjectGrid には、ObjectGridEventListener リスナーが設定されています。

```
ObjectGridManager objectGridManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid myGrid = objectGridManager.createObjectGrid("myGrid",
 new URL("file:etc/test/myGrid.xml"), true, false);
```

BackingMapLifecycleListener プラグイン: Java

BackingMapLifecycleListener プラグインは、パッキング・マップの WebSphere eXtreme Scale ライフサイクル状態変更イベントの通知を受け取ります。

BackingMapLifecycleListener プラグインは、パッキング・マップのそれぞれの状態変更について BackingMapLifecycleListener.State オブジェクトを含んだイベントを受け取ります。 BackingMapLifecycleListener インターフェースも実装する BackingMap プラグインは、このプラグインが登録されている BackingMap インスタンスのリスナーとして自動的に追加されます。

概要

BackingMapLifecycleListener プラグインは、既存の BackingMap プラグインが関連したプラグインの中のアクティビティーに関係するアクティビティーを実行する必

要がある場合に役立ちます。例として、Loader プラグインは、協力する MapIndexPlugin または DataSerializer プラグインから構成を取得する必要が生じる場合もあります。

BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装し、BackingMapLifecycleListener.State.INITIALIZED イベントを検出することで、ローダーは、BackingMap インスタンス内の他のプラグインの状態について知ることができます。BackingMap が INITIALIZED 状態にある、つまり、他のプラグインがそれの initialize() メソッドを呼び出し済みであるため、ローダーは、協力する MapIndexPlugin または DataSerializer プラグインから情報を安全に取得できます。

BackingMapLifecycleListener は、ObjectGrid およびその BackingMaps が初期化される前または後のどの時点においても、追加または削除できます。

BackingMapLifecycleListener プラグインの作成

BackingMapLifecycleListener プラグインは、重要な eXtreme Scale イベントに関する通知を受け取るために BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装する必要があります。BackingMap プラグインは BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装できます。また、このプラグインは、パッキング・マップに追加されるときにリスナーとして自動的に追加することができます。

これらのインターフェースについて詳しくは、API 資料を参照してください。

ライフサイクル・イベントとプラグインの関係

BackingMapLifecycleListener は、backingMapStateChanged メソッドでイベントからライフサイクル状態を取得します。例えば、次のとおりです。

```
public void backingMapStateChanged(BackingMap map,
                                   LifecycleEvent event)
throws LifecycleFailedException {
  switch(event.getState()) {
    case INITIALIZED: // All other plug-ins are initialized.
      // Retrieve reference to plug-in X for use from map.
      break;
    case DESTROYING:  // Destroy phase is starting
      // Eliminate reference to plug-in X it may be destroyed before this plug-in
      break;
  }
}
```

次の図は、ライフサイクル・イベントが発生して、BackingMapLifecycleListener プラグインに送られるときの BackingMap オブジェクトの状態を要約したものです。

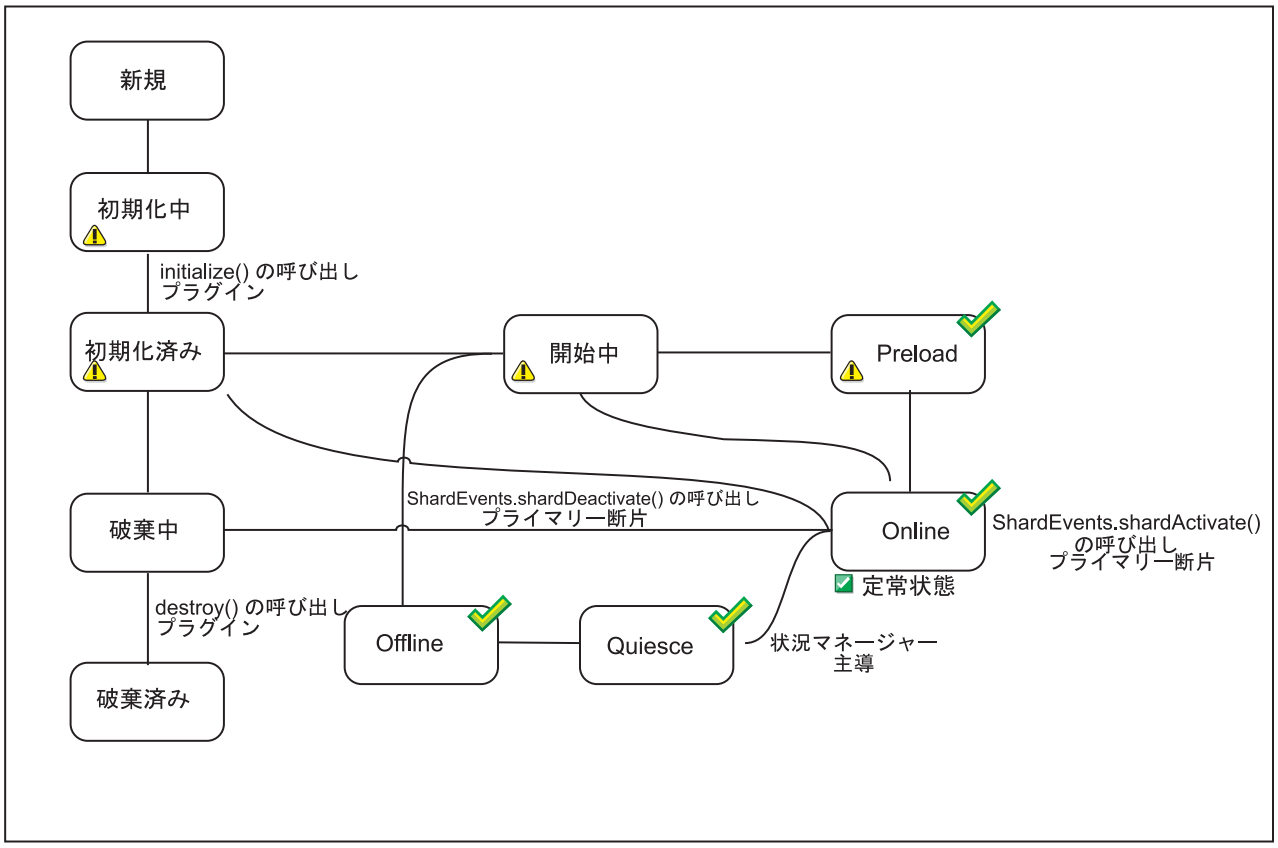


図 38. BackingMap 状態の要約

次の表に、BackingMapLifecycleListener プラグインに送信したライフサイクル・イベントと、BackingMap および他のプラグイン・オブジェクトとの関係を説明します。

BackingMapLifecycleListener.State 値	説明
INITIALIZING	BackingMap 初期化フェーズを開始しています。BackingMap および BackingMap プラグインが初期化されるところです。
INITIALIZED	BackingMap 初期化フェーズが完了しました。すべての BackingMap プラグインが初期化されました。INITIALIZED 状態は、断片配置アクティビティー (プロモーションまたはデモーション) が発生すると、再発する可能性があります。
STARTING	BackingMap インスタンスは、ローカル・インスタンス、クライアント・インスタンス、あるいは、サーバー上のプライマリーまたはレプリカ断片のインスタンスとしての使用のためにアクティブ化されつつあります。この BackingMap インスタンスを所有する ObjectGrid インスタンス内のすべての ObjectGrid プラグインが初期化されました。STARTING 状態は、断片配置アクティビティー (プロモーションまたはデモーション) が発生すると、再発する可能性があります。
PRELOAD	BackingMap インスタンスがプリロードに備えて StateManager API によって PRELOAD 状態に設定されているか、構成済みのローダーがデータをパッキング・マップにプリロードしています。

BackingMapLifecycleListener.State 値	説明
ONLINE	BackingMap インスタンスは、ローカル・インスタンス、クライアント・インスタンス、あるいは、サーバー上のプライマリーまたはレプリカ断片のインスタンスとして作動可能です。この BackingMap インスタンスを所有する ObjectGrid インスタンス内のすべての ObjectGrid プラグインが初期化されました。この定常状態は、BackingMap で典型的な状態です。ONLINE 状態は、断片配置アクティビティー (プロモーションまたはデモーション) が発生すると、再発する可能性があります。
QUIESCE	StateManager API または他のイベントの結果として、BackingMap での作業を停止しつつあります。新規の作業はできません。プラグインは、すべての既存の作業をできるだけ速やかに終了します。
OFFLINE	StateManager API または別のイベントの結果として、BackingMap 上ですべての作業は停止しています。新規の作業はできません。
DESTROYING	BackingMap インスタンスは破棄フェーズを開始しています。インスタンスの BackingMap プラグインは、破棄されるところです。
DESTROYED	BackingMap インスタンスとすべての BackingMap プラグインは破棄されました。

XML を使用した BackingMapLifecycleListener プラグインの構成

eXtreme Scale イベント・リスナーのクラス名が com.company.org.MyBackingMapLifecycleListener クラスであると想定します。このクラスは、BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装します。

BackingMapLifecycleListener プラグインは、XML を使用して構成することができます。次のテキストがオブジェクト・グリッド XML ファイルの中に存在していなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<objectGridconfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config../objectGrid.xsd"
        xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <backingMap name="myMap" pluginCollectionRef="myPlugins" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>
    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="myPlugins">
            <bean id="BackingMapLifecycleListener"
                  className="com.company.org.MyBackingMapLifecycleListener" />
        </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

このファイルを ObjectGridManager プラグインに提供することで、この構成の作成が容易になります。作成した BackingMap インスタンスの myGrid ObjectGrid には、BackingMapLifecycleListener リスナーが設定されています。

BackingMapLifecycleListener と同様に、やはり BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装する、XML を使用して指定される他の BackingMap プラグイン (Loader や MapIndexPlugin など) も、ライフサイクル・リスナーとして自動的に追加されます。

関連資料:

『ObjectGridLifecycleListener プラグイン』
ObjectGridLifecycleListener プラグインは、データ・グリッドの WebSphere eXtreme Scale ライフサイクル状態変更イベントの通知を受け取ります。

ObjectGridLifecycleListener プラグイン: Java

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、データ・グリッドの WebSphere eXtreme Scale ライフサイクル状態変更イベントの通知を受け取ります。

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、ObjectGrid のそれぞれの状態変更について ObjectGridLifecycleListener.State オブジェクトを含んだイベントを受け取ります。ObjectGridLifecycleListener インターフェースも実装する ObjectGrid プラグインは、このプラグインが登録されている ObjectGrid インスタンスのリスナーとして自動的に追加されます。

概要

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、既存の ObjectGrid プラグインが関連したプラグインの中のアクティビティーに関係するアクティビティーを実行する必要がある場合に役立ちます。例として、TransactionCallback プラグインは、協力する ObjectGridEventListener または ShardListener プラグインから構成を取得する必要が生じる場合もあります。

ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装し、ObjectGridLifecycleListener.State.INITIALIZED イベントを検出することで、TransactionCallback プラグインは、ObjectGrid インスタンス内の他のプラグインの状態を検出できます。 ObjectGrid が INITIALIZED 状態にある、つまり、他のプラグインがそれの initialize() メソッドを呼び出し済みであるため、TransactionCallback プラグインは、協力する ObjectGridEventListener プラグインまたは ShardListener プラグインから情報を安全に取得できます。

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、ObjectGrid が初期化される前または後のどの時点においても追加できます。

ObjectGridLifecycleListener プラグインの作成

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、重要な eXtreme Scale イベントに関する通知を受け取るために ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装する必要があります。ObjectGrid プラグインは ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装できます。また、このプラグインは、ObjectGrid に追加されるときにリスナーとして自動的に追加することができます。

これらのインターフェースについて詳しくは、API 資料を参照してください。

ライフサイクル・イベントとプラグインの関係

ObjectGridLifecycleListener は、objectgridStateChanged メソッドでイベントからライフサイクル状態を取得します。例えば、次のとおりです。

```
public void objectGridStateChanged(ObjectGrid grid,
                                   LifecycleEvent event)
throws LifecycleFailedException {
  switch(event.getState()) {
    case INITIALIZED: // All other plug-ins are initialized.
      // Retrieve reference to plug-in X for use from grid.
      break;
    case DESTROYING:  // Destroy phase is starting
      // Eliminate reference to plug-in X it may be destroyed before this plug-in
      break;
  }
```

次の図は、ライフサイクル・イベントが発生して、ObjectGridLifecycleListener プラグインに送られるときの ObjectGrid オブジェクトの状態を要約したものです。

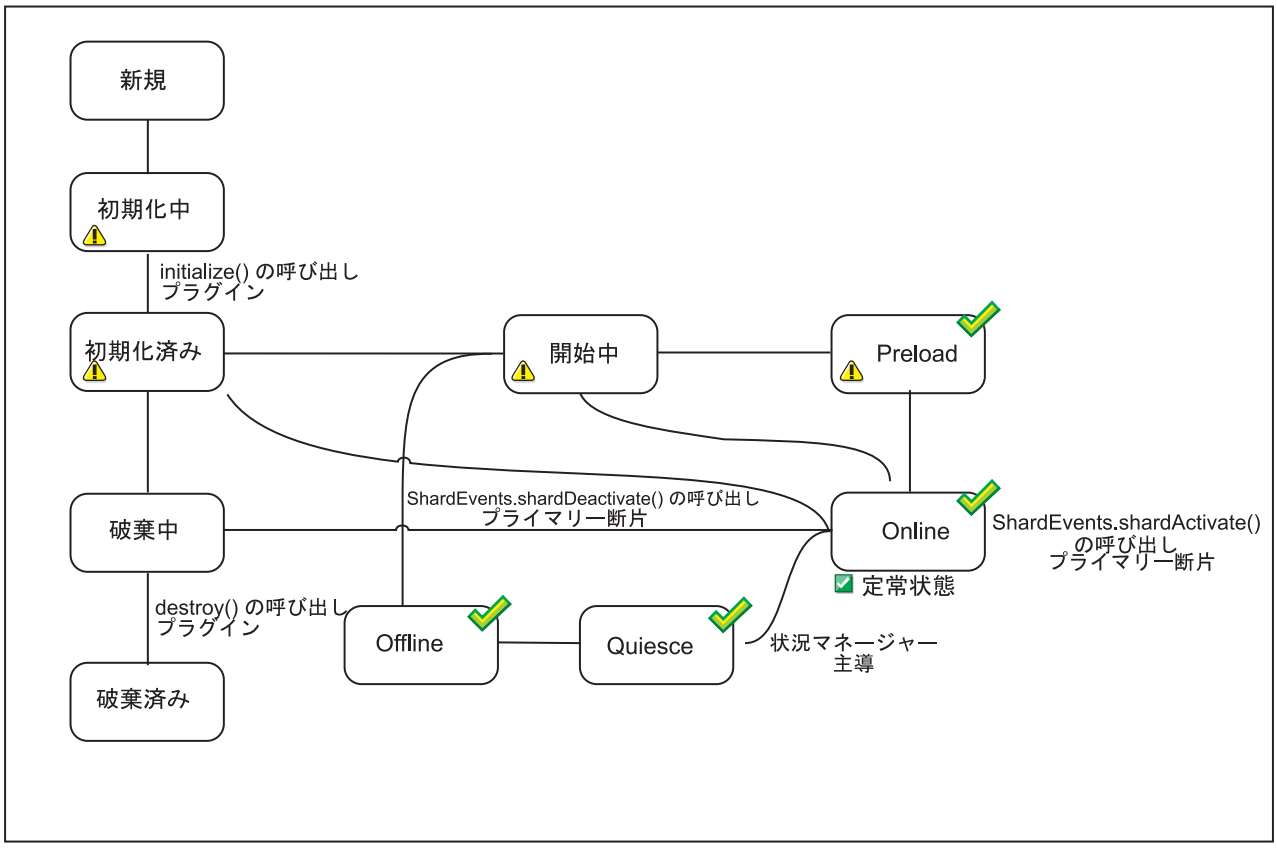


図 39. ObjectGrid 状態の要約

次の表は、ObjectGridLifecycleListener に送られるライフサイクル・イベントと ObjectGrid およびその他のプラグイン・オブジェクトの状態との関係を詳しく説明したものです。

ObjectGridLifecycleListener.State 値	説明
INITIALIZING	ObjectGrid 初期化フェーズを開始しています。ObjectGrid および ObjectGrid プラグインが初期化されるところです。

ObjectGridLifecycleListener.State 値	説明
INITIALIZED	ObjectGrid 初期化フェーズが完了しました。すべての ObjectGrid プラグインが初期化されました。INITIALIZED 状態は、断片配置アクティビティー (プロモーションまたはデモーション) が発生すると、再発する可能性があります。この ObjectGrid インスタンスが所有する BackingMap インスタンス内のすべての BackingMap プラグインは、初期化されました。
STARTING	ObjectGrid インスタンスは、ローカル・インスタンス、クライアント・インスタンス、あるいは、サーバー上のプライマリーまたはレプリカ断片のインスタンスとしての使用のためにアクティブ化されつつあります。 STARTING 状態は、断片配置アクティビティー (プロモーションまたはデモーション) が発生すると、再発する可能性があります。
PRELOAD	ObjectGrid インスタンスは、StateManager API または他の構成によって、PRELOAD 状態に設定されます。
ONLINE	ObjectGrid インスタンスは、ローカル・インスタンス、クライアント・インスタンス、あるいは、サーバー上のプライマリーまたはレプリカ断片のインスタンスとして作動可能です。この定常状態は、ObjectGrid で典型的な状態です。ONLINE 状態は、断片配置アクティビティー (プロモーションまたはデモーション) が発生すると、再発する可能性があります。
QUIESCE	StateManager API または他のイベントの結果として、ObjectGrid での作業を停止しつつあります。新規の作業はできません。すべての既存の作業をできるだけ速やかに終了します。
OFFLINE	StateManager API または別のイベントの結果として、ObjectGrid 上ですべての作業は停止しています。新規の作業はできません。
DESTROYING	ObjectGrid インスタンスは破棄フェーズを開始しています。インスタンスの ObjectGrid プラグインは、破棄されるところです。破棄フェーズで、この ObjectGrid インスタンスが所有する BackingMap インスタンスもすべて破棄されます。
DESTROYED	ObjectGrid インスタンス、その BackingMap インスタンス、およびすべての ObjectGrid プラグインは破棄されました。

XML を使用した ObjectGridLifecycleListener プラグインの構成

eXtreme Scale イベント・リスナーのクラス名が com.company.org.MyObjectGridLifecycleListener クラスであると想定します。このクラスは、ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装します。

ObjectGridLifecycleListener プラグインは、XML を使用して構成することができます。次の XML は、ObjectGridLifecycleListener を使用して構成を作成します。次のテキストがオブジェクト・グリッド xml ファイルの中に存在していなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <bean id="ObjectGridLifecycleListener"
                  className="com.company.org.MyObjectGridLifecycleListener" />
```

```
            <backingMap name="Book"/>
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

Bean 宣言が backingMap 宣言の前にあることに注意してください。このファイルを ObjectGridManager プラグインに提供することで、この構成の作成が容易になります。

前の例の登録済み ObjectGridLifecycleListener と同様に、やはり ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装する、XML を使用して指定される他の ObjectGrid プラグイン (CollisionArbiter や TransactionCallback など) も、ライフサイクル・リスナーとして自動的に追加されます。

関連資料:

628 ページの『BackingMapLifecycleListener プラグイン』
BackingMapLifecycleListener プラグインは、パッキング・マップの WebSphere eXtreme Scale ライフサイクル状態変更イベントの通知を受け取ります。

データの索引付けのためのプラグイン

Java

WebSphere eXtreme Scale は、作成する索引のタイプに応じて、索引の作成のために BackingMap に追加できる組み込みプラグインを提供します。

HashIndex

組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスは、静的索引または動的索引を作成するために BackingMap に追加可能な MapIndexPlugin プラグインです。このクラスは、MapIndex と MapRangeIndex の両方のインターフェースをサポートします。索引を定義し、実装すると、照会のパフォーマンスを大幅に改善できます。

8.6+ InverseRangeIndex

組み込み InverseRangeIndex (com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.InverseRangeIndex クラス) は、静的索引の作成のために BackingMap に追加できる MapIndexPlugin プラグインです。このクラスは MapIndex インターフェースをサポートします。この索引を定義して実装することにより、グリッドから範囲データを取得できるようになります。

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

InverseRangeIndex プラグインの構成: Java

XML ファイルを使用して、またはプログラムで、組み込みの InverseRangeIndex の com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.InverseRangeIndex クラスを構成できます。

始める前に

- 区画に分割された環境では、InverseRangeIndex の主要な要件の 1 つは、特定の索引に構成された非範囲属性に基づいたデータの区画化です。非範囲属性の同じ値を持つすべてのキャッシュ・エントリーおよび検索キーは、同じ区画に経路指定する必要があります。区画化について詳しくは、 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』を参照してください。
- InverseRangeIndex は、MapIndexPlugin の実装です。MapIndexPlugin には、オブジェクト・グリッドのサーバー・サイドからのみアクセスでき、クライアント・サイドからはアクセスできません。クライアント・サイドで検索操作を使用可能にするには、MapGridAgent インターフェースを実装します。詳しくは、 560 ページの『DataGrid API の例』を参照してください。

このタスクについて

InverseRangeIndex プラグインは、範囲スタイル・データでの特定の検索キーを使用した検索をサポートするように設計されています。範囲スタイル・データには、境界値を持つ属性が含まれます。非範囲スタイル・データと範囲スタイル・データの両方が含まれた以下のサンプル表について考えてみます。表 Product Data には、ProductName、Condition、Country など、非範囲属性が含まれています。これらの属性は、索引キーの一部です。この表には、StartPromotionDate、EndPromotionDate、MinimumRAM、MaximumRAM など、範囲スタイル属性も含まれています。これらも索引キーの一部です。属性 Price は、データ・グリッド内の索引キーおよび検索キーの一部ではない、キャッシュ・オブジェクトの値です。逆範囲索引を定義するには、AttributeName プロパティーを使用す

る必要があります。このプロパティーはコンマ区切りの属性のリストであり、1 つ以上の非範囲属性と 1 つ以上の範囲スタイル属性が含まれている必要があります。索引付け属性は、キャッシュ・キーまたはキャッシュ値の一部にすることができ、AddressableKeyName プロパティーで指定できます。 AttributeName について詳しくは、 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』を参照してください。

表 17. 例: Product Data

ProductName	StartPromotionDate	EndPromotionDate	MinimumRAM	MaximumRAM	Condition	Country	Price
PC01	01/01/11	12/31/11	2	4	Good		199
PC01	01/01/11	12/31/11	6	8	Good		259
PC01	01/01/12	12/31/12	2	4	Good		299
PC01	01/01/12	12/31/12	2	8	Good		499
PC02	01/01/08	12/31/10	2	4	Good		99
PC02	01/01/10	12/31/11	2	4	Good		289
PC02	01/01/12	12/31/12	4	6	Good		389

索引キー・クラス ProductKey には、3 つの非範囲属性 (productName、condition、および country) があります。また、4 つの境界値を持つ範囲スタイル属性 ([startPromotionDate, endPromotionDate]、[minimumRAM, maximumRAM]) もあります。オブジェクトがマップに配置される際に、以下のクラスが使用されます。

```
public class ProductKey {
String productName;
Date startPromotionDate;
Date endPromotionDate;
Integer minimumRAM;
Integer maximumRAM;
String condition;
String country;
}
```

検索キー・クラス ProductSearchKey には、範囲スタイル・データを検索する 5 つの属性 (productName、promotionDate、RAM、condition、および country) があります。MapIndexPlugin 操作では、以下のオブジェクトが使用されます。

```
public class ProductSearchKey {
String productName;
Date promotionDate;
Integer RAM;
String condition;
String country;
}
```

これらのクラスに基づいて、InverseRangeIndex は、以下のように AttributeName プロパティーを使用して構成できます。

```
key.productName, promotionDate[key.startPromotionDate,
key.endPromotionDate], RAM[key.minimumRAM,key.maximumRAM],
condition[key.condition], key.country
```

AttributeName の構文について詳しくは、 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』を参照してください。

手順

• ObjectGrid 記述子 XML ファイルで InverseRangeIndex を構成します。backingMapPluginCollections エレメントを使用してプラグインを定義します。

```
<bean id="MapIndexPlugin"
   className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.InverseRangeIndex">
 <property name="Name" type="java.lang.String" value="productData"/>
 <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="key.productName,
 promotionDate[key.startPromotionDate, key.endPromotionDate],
  RAM[key.minimumRAM,key.maximumRAM],
 condition[key.condition], key.country"/>
</bean>
```

backingMapPluginCollections エレメントについて詳しくは、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを参照してください。

- InverseRangeIndex をプログラマチックに構成します。 以下のサンプル・コードでは、同じ逆範囲索引を作成しています。

  ```
  InverseRangeIndex mapIndex = new InverseRangeIndex();
  mapIndex.setName("productInfo");
  mapIndex.setAttributeName(("key.productName, promotionDate[key.startPromotionDate,
  key.endPromotionDate], RAM[key.minimumRAM,key.maximumRAM],
  condition[key.condition], key.country"));
  BackingMap bm = objectGrid.defineMap("mymap");
  bm.addMapIndexPlugin(mapIndex);
  ```

  InverseRangeIndex プラグインをバッキング・マップに追加できます。以下の例のように、静的索引プラグインを XML ファイルに追加することで、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。

  ```
  <backingMapPluginCollection id="product">
     <bean id="MapIndexPlugin"
        className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.InverseRangeIndex">
           <property name="Name" type="java.lang.String" value="productData"
              description="index name" />
           <property name="AddressableKeyName" type="java.lang.String" value="key"
              description="key is default" />
           <property name="AttributeName" type="java.lang.String"
  value="key.productName, promotionDate[key.startPromotionDate, key.endPromotionDate],
  RAM[key.minimumRAM,key.maximumRAM], condition[key.condition], key.country"
              description="attribute names for indexing" />
     </bean>
  </backingMapPluginCollection>
  ```

  組み込みの InverseRangeIndex クラスが、索引プラグインとして使用されています。InverseRangeIndex では、ユーザーが構成できるプロパティー (Name、AddressableKeyName、AttributeName、FieldAccessAttribute など) がサポートされます。

  Name プロパティーは、この索引プラグインを識別ストリングである productData として構成されています。Name プロパティーの値は、パッキング・マップのスコープ内で固有でなければなりません。この名前を使用して、BackingMap の ObjectMap インスタンスから名前ごとの索引オブジェクトを取得できます。

  AttributeName プロパティーは `"key.productName, promotionDate[key.startPromotionDate, key.endPromotionDate], RAM[key.minimumRAM,key.maximumRAM], condition[key.condition], key.country"` として構成されており、これは、productName、condition、country が非範囲属性であり、startPromotionDate、endPromotionDate、minimumRAM、maximumRAM が索引を作成するためにキャッシュに入れられるキー・オブジェクトの範囲属性であることを意味します。

  キャッシュ・オブジェクトを異なる属性名を使用してアプリケーションで検索する必要がある場合は、例に示されているように、各属性に別名を設定できます。

InverseRangeIndex プラグイン属性: Java

次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

属性

Name 索引の名前を指定します。名前は各マップで固有でなければなりません。この名前は、パッキング・マップのオブジェクト・マップ・インスタンスから索引オブジェクトを取り出すのに使用されます。

AddressableKeyName
索引付けキーから読み取られる属性名の接頭部を指定します。接頭部が設定された場合は、この値で始まり、ドットをパス分離文字として使用する属性名を索引付けロジックが検査します。この属性はオプションであり、この属性のデフォルト値は「key」です。この接頭部を持たない属性名はすべて値属性とみなされます。シリアライザーを使用していると、このプロパティーは適用されません。

注: AddressableKeyName プロパティーは索引付けキー属性名の場合にのみ適用され、検索キー属性として使用することはできません。

AttributeName
逆範囲索引の照会に組み込まれる属性名のコンマ区切り値。 **AttributeName** の構文は次のもので構成されます。

- 1 つ以上の非範囲属性と 1 つ以上の単純範囲属性
- 1 つ以上の非範囲属性とただ 1 つの複数範囲属性

したがって、**AttributeName** の構文は次のとおりです。

```
attribute_name_string ::= ({non_range_attribute}, {simple_range_attribute})
| ({non_range_attribute}, multi_range_attribute)

non_range_attribute ::= (search_attribute_name, "[", index_attribute_name, "]")
| (index_attribute_name);

simple_range_attribute ::= search_attribute_name "
[" low_index_attribute_name "," high_index_attribute_name "]";

multi_range_attribute ::= [search_attribute_list_name]
"[[" index_attribute_list_name "]]";
```

属性には次の 3 つのタイプがあります。

- **non_range_attribute**

  非範囲属性。構文は、オプションの検索キー名と必須の索引付けキー名で構成されます。**search_attribute_name** を使用して、逆範囲検索キーにある属性名を検索することができます。この属性が指定されないと、**index_attribute_name** 属性が使用されます。**index_attribute_name** 属性は必須であり、非範囲属性を逆範囲索引キーの一部として指定します。次の例は、その下にある InverseRangeIndex の定義の非範囲属性を示しています。

```
<backingMapPluginCollection id="productData">
 <bean id="MapIndexPlugin"
   className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.InverseRangeIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String"
    value="InverseRangeIndex"description="inverse range index"/>
  <property name="AddressableKeyName"
    type="java.lang.String"value="KeyAttribute"
     description="attribute name for range values"/>
```

```
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String"
     value="productName KeyAttribute.productName],promotionDate
     KeyAttribute.startPromotionDate,
    KeyAttribute.endPromotionDate],RAM[KeyAttribute.minRAM,KeyAttribute.maxRAM],
     condition[KeyAttribute.condition],KeyAttribute.country"
    description="attribute name for inverse range index"/>
 </bean>
</backingMapPluginCollection>
```

- productName、condition、および country はキー内の検索される非範囲属性であり、同じ名前が索引検索キーに対しても使用されます。
- startPromotionDate と endPromotionDate はキーから読み取られ、1 つの単純範囲属性とみなされます。 promotionDate は **findAll(Object searchKey)** 操作の検索キーから読み取られます。
- minRAM と maxRAM はキーから読み取られ、1 つの単純範囲属性とみなされます。 RAM は **findAll(Object searchKey)** 操作の検索キーから読み取られます。

- **simple_range_attribute**

  範囲の境界値を含みます。構文は、必須の検索キー名と必須の索引付けキー名で構成されます。 **search_attribute_name** 属性を使用して、逆範囲検索キーにある属性名を検索することができます。 **low_index_attribute_name** 属性は下方境界値を指定し、対応する **high_index_attribute_name** 属性は上方境界値を指定します。索引キーは両方とも必須であり、また逆範囲索引キーの一部として使用されます。

- **multi_range_attribute**

  範囲属性の配列またはリストで、各要素は 2 つの境界値を持つ配列またはリストにも含まれます。構文は、オプションの検索キー名と必須の索引付けキー名で構成されます。 **search_attribute_list_names** 属性を使用して、リストまたは配列内の属性名を逆範囲検索キーの一部として検索することができます。この属性が指定されないと、 **index_attribute_list_name** が使用されます。この属性は必須であり、逆範囲索引キーの一部として使用する必要があります。リストまたは配列内の各要素は 2 つの値を持つリストまたは配列にも含まれます。この 2 つの値は範囲の下方境界値と上方境界値です。

  次の例は、InverseRangeIndex の複数範囲属性を示しています。

```
<backingMapPluginCollection id="productData">
  <bean id="MapIndexPlugin"
   <className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.InverseRangeIndex">
   <property name="Name" type="java.lang.String"
   value="InverseRangeIndex"
   description="inverse range index "/>
   <property name="AttributeName" type="java.lang.String"
   value="key.identifier,rangeValues [[key.rangeValues]]"
   description="attribute name for inverse range index" />
  </bean>
</backingMapPluginCollection>
```

FieldAccessAttribute

非エンティティー・マップに使用されます。true の場合、フィールドを使用してオブジェクトに直接アクセスします。指定されていないか、false の場合、データのアクセスには、属性の getter メソッドが使用されます。

関連概念:

Java 635 ページの『データの索引付けのためのプラグイン』
WebSphere eXtreme Scale は、作成する索引のタイプに応じて、索引の作成のために BackingMap に追加できる組み込みプラグインを提供します。

Java 649 ページの『キャッシュ・オブジェクトのカスタム索引作成のためのプラグイン』
MapIndexPlugin プラグイン (つまり索引) を使用すると、eXtreme Scale が提供する組み込み索引以上の、カスタムの索引付けストラテジーを書き込めます。

Java 652 ページの『複合索引の使用』
複合 HashIndex により、照会のパフォーマンスが向上し、高いコストがかかるマップのスキャンを避けることができます。また、この機能は、検索条件に多くの属性が関係する際、キャッシュ・オブジェクトを検索するための便利な方法を HashIndex API に提供します。

Java 308 ページの『索引付け』
MapIndexPlugin プラグインは、BackingMap 上にいくつかの索引を作成して、非キー・データ・アクセスをサポートするために使用します。

Java 656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

824 ページの『グローバル索引を使用したクライアント照会の最適化』
クライアント ObjectGrid から照会を実行するときは、関連するマップが区画化されているのであれば、区画を設定する必要があります。大規模な区画化された ObjectGrid 環境では、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは通常すべての区画に対して同時に並行照会を実行する必要があります。例えば、100 個の区画がある場合、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは、100 個すべての区画に対して同じ照会を実行し、照会結果をマージする必要があります。これは通常、大量のシステム・リソースを消費します。

812 ページの『照会のパフォーマンスのチューニング』
照会のパフォーマンスを調整する場合は、以下の手法とヒントを使用してください。

関連タスク:

Java 『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

HashIndex プラグインの構成: Java

組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

このタスクについて

複合索引の構成は、XML を使用した通常の索引の構成と同じですが、**attributeName** プロパティー値は例外です。複合索引の場合、**attributeName** プロパティーの値は、コンマ区切りの属性のリストです。例えば、値クラス Address は、city、state、および zipcode の 3 つの属性を持つとします。この場合、`"city,state,zipcode"` という **attributeName** プロパティー値を使用して複合索引を定義し、複合索引に city、state、および zipcode が含まれていることを示すことができます。

また、複合 HashIndexes は、範囲検索をサポートしないため、RangeIndex プロパティーを true に設定しないよう注意してください。

手順

- ObjectGrid 記述子 XML ファイルで複合索引を構成します。

  backingMapPluginCollections エレメントを使用してプラグインを定義します。

```
<bean id="MapIndexPlugin"  className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
 <property name="Name" type="java.lang.String" value="Address.CityStateZip"/>
 <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="city,state,zipcode"/>
</bean>
```

- プログラムで複合索引を構成します。

  次のサンプル・コードも同じ複合索引を作成します。

```
   HashIndex mapIndex = new HashIndex();
    mapIndex.setName("Address.CityStateZip");
    mapIndex.setAttributeName(("city,state,zipcode"));
    mapIndex.setRangeIndex(true);

    BackingMap bm = objectGrid.defineMap("mymap");
    bm.addMapIndexPlugin(mapIndex);
```

- エンティティー表記で複合索引を構成します。

  エンティティー・マップを使用する場合は、アノテーションを使用する方法で複合索引を定義できます。エンティティー・クラスのレベルで、CompositeIndexes アノテーション内に CompositeIndex のリストを定義できます。CompositeIndex には name と **attributeNames** プロパティーがあります。各 CompositeIndex は、エンティティーに関連付けられたパッキング・マップに適用される HashIndex インスタンスに関連付けられます。HashIndex は、非範囲索引として構成されます。

```
@Entity
@CompositeIndexes({
    @CompositeIndex(name="CityStateZip", attributeNames="city,state,zipcode"),
    @CompositeIndex(name="lastnameBirthday", attributeNames="lastname,birthday")
 })
public class Address {
    @Id int id;
    String street;
    String city;
    String state;
    String zipcode;
    String lastname;
    Date birthday;
}
```

  各複合索引の name プロパティーは、エンティティーおよびパッキング・マップ内で固有でなければなりません。名前が指定されない場合は、生成された名前が

使用されます。**attributeName** プロパティーを使用して、HashIndex attributeName のデータ (コンマ区切りの属性のリスト) が設定されます。属性名は、エンティティーがフィールド・アクセスを使用するように構成されているときは、パーシスタント・フィールド名と一致します。そのように構成されていない場合は、プロパティー・アクセス・エンティティーに対する JavaBeans 命名規則の定義に従いプロパティー名と一致します。例えば、属性名が street だった場合、プロパティー getter メソッドの名前は getStreet です。

例: BackingMap への HashIndex の追加

次の例では、静的索引プラグインを XML ファイルに追加して HashIndex プラグインを構成します。

```
<backingMapPluginCollection id="person">
   <bean id="MapIndexPlugin"
      className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
         <property name="Name" type="java.lang.String" value="CODE"
            description="index name" />
         <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
            description="true for MapRangeIndex" />
         <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="employeeCode"
            description="attribute name" />
   </bean>
</backingMapPluginCollection>
```

この XML 構成例では、組み込み HashIndex クラスが索引プラグインとして使用されています。HashIndex は、Name、RangeIndex、AttributeName などの、ユーザーが構成できるプロパティーをサポートしています。

- **Name** プロパティーは、この索引プラグインを識別するストリングである CODE と構成されています。**Name** プロパティーの値は、パッキング・マップのスコープ内で固有でなければなりません。この名前を使用して、BackingMap の ObjectMap インスタンスから名前ごとの索引オブジェクトを取得できます。
- **RangeIndex** プロパティーは true と構成されています。これが意味するのは、取り出された索引オブジェクトをアプリケーションが MapRangeIndex インターフェースにキャストできるということです。RangeIndex プロパティーが false と構成されている場合は、アプリケーションは取り出された索引オブジェクトを MapIndex インターフェースにしかキャストできません。MapRangeIndex は、範囲関数 greater than や less than、あるいは両方を使用するデータ検出をサポートしますが、MapIndex は equals 関数のみをサポートします。索引を照会で使用する場合は、**RangeIndex** プロパティーを、単一属性索引に対して true、関係または複合索引に対して false に構成する必要があります。リレーションシップ索引および複合索引に対しては、**RangeIndex** プロパティーは false と構成される必要があります。
- **AttributeName** プロパティーは employeeCode と構成されています。これは、キャッシュ・オブジェクトの employeeCode 属性を使用して、単一属性索引が構築されることを意味しています。複数の属性を持つ、キャッシュ・オブジェクトをアプリケーションが検索する必要がある場合、**AttributeName** プロパティーには、属性をコンマで区切ったリストを設定でき、そうすると複合索引が生成されます。

つまり、上記の例では、単一属性範囲 HashIndex を定義しています。 単一属性 HashIndex である理由は、**AttributeName** プロパティーの値が employeeCode であ

り、1 つの属性名しか含まれていないためです。また、範囲 HashIndex でもあります。

関連概念:

Java 635 ページの『データの索引付けのためのプラグイン』
WebSphere eXtreme Scale は、作成する索引のタイプに応じて、索引の作成のために BackingMap に追加できる組み込みプラグインを提供します。

Java 649 ページの『キャッシュ・オブジェクトのカスタム索引作成のためのプラグイン』
MapIndexPlugin プラグイン (つまり索引) を使用すると、eXtreme Scale が提供する組み込み索引以上の、カスタムの索引付けストラテジーを書き込めます。

Java 652 ページの『複合索引の使用』
複合 HashIndex により、照会のパフォーマンスが向上し、高いコストがかかるマップのスキャンを避けることができます。また、この機能は、検索条件に多くの属性が関係する際、キャッシュ・オブジェクトを検索するための便利な方法を HashIndex API に提供します。

Java 308 ページの『索引付け』
MapIndexPlugin プラグインは、BackingMap 上にいくつかの索引を作成して、非キー・データ・アクセスをサポートするために使用します。

Java 656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

824 ページの『グローバル索引を使用したクライアント照会の最適化』
クライアント ObjectGrid から照会を実行するときは、関連するマップが区画化されているのであれば、区画を設定する必要があります。大規模な区画化された ObjectGrid 環境では、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは通常すべての区画に対して同時に並行照会を実行する必要があります。例えば、100 個の区画がある場合、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは、100 個すべての区画に対して同じ照会を実行し、照会結果をマージする必要があります。これは通常、大量のシステム・リソースを消費します。

812 ページの『照会のパフォーマンスのチューニング』
照会のパフォーマンスを調整する場合は、以下の手法とヒントを使用してください。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

HashIndex プラグイン属性: Java

次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

属性

Name 索引の名前を指定します。名前は各マップで固有でなければなりません。この名前は、パッキング・マップのオブジェクト・マップ・インスタンスから索引オブジェクトを取り出すのに使用されます。

AttributeName
索引に対する属性の名前をコンマで区切ったリストを指定します。フィールド・アクセス索引の場合、属性名はフィールド名と同じです。プロパティー・アクセス索引の場合、属性名は JavaBean 互換のプロパティー名です。属性名が 1 つだけであれば、HashIndex は単一属性索引です。この属性がリレーションシップの場合は、リレーションシップ索引でもあります。複数の属性名が含まれている場合は、HashIndex は複合索引です。

FieldAccessAttribute
非エンティティー・マップに使用されます。`true` の場合、フィールドを使用してオブジェクトに直接アクセスします。指定されていないか、`false` の場合、データのアクセスには、属性の getter メソッドが使用されます。

8.6+ GlobalIndexEnabled
true の場合は、グローバル索引が使用可能であり、アプリケーションは取得した索引オブジェクトを MapGlobalIndex インターフェースにキャストすることができます。

HashIndex の GlobalIndexEnabled プロパティーが true に設定されると、HashIndex 構成のほかに MapGlobalIndex インターフェースもサポートするように HashIndex のグローバル索引機能が使用可能になります。大規模な区画化環境でデータを効率的に検索する方法を提供します。

次の例は、単一属性 HashIndex でグローバル索引が使用可能であることを示しています。

```
<bean id="MapIndexPlugin"
      className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
         <property name="Name" type="java.lang.String" value="CODE"
            description="index name" />
         <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="employeeCode"
            description="attribute name" />
  <property name="GlobalIndexEnabled" type="boolean" value="true"
            description="true for global index" />
   </bean>
```

POJOKeyIndex
非エンティティー・マップに使用されます。`true` の場合、索引はマップのキー部分でオブジェクトをイントロスペクトします。この設定は、キーが複合キーで、値にキーが組み込まれていない場合に役立ちます。指定されていないか、`false` の場合、索引はマップの値部分でオブジェクトをイントロスペクトします。

RangeIndex
`true` の場合、範囲索引付けが使用可能にされ、アプリケーションは取り出された索引オブジェクトを MapRangeIndex インターフェースにキャストで

きます。**RangeIndex** プロパティーが false と構成されている場合は、アプリケーションは取り出された索引オブジェクトを MapIndex インターフェースにしかキャストできません。

単一属性 HashIndex と複合 HashIndex

HashIndex の **AttributeName** プロパティーに複数の属性名が含まれている場合、HashIndex は複合索引です。そうではなく、含まれている属性名が 1 つのみの場合は、単一属性索引です。例えば、AttributeName プロパティー値が city,state,zipcode であるような、複合 HashIndex が考えられます。この例では、3 つの属性がコンマで区切られています。もし **AttributeName** プロパティー値が単に zipcode であれば、属性は 1 つだけなので、単一属性 HashIndex であるということになります。

複合 HashIndex は、検索条件に多くの属性が関係するような場合に、キャッシュ・オブジェクトを検索する効果的な方法を提供します。ただし、範囲索引はサポートしないため、 RangeIndex プロパティーは false に設定されている必要があります。

詳しくは、 652 ページの『複合索引の使用』を参照してください。

リレーションシップ HashIndex

単一属性 HashIndex の索引属性が、単一値または複数値のリレーションシップの場合、その HashIndex はリレーションシップ HashIndex です。リレーションシップ HashIndex の場合、 HashIndex の RangeIndex プロパティーは「false」に設定されている必要があります。

リレーションシップ HashIndex は、循環参照を使用する照会や、IS NULL、IS EMPTY、SIZE、および MEMBER OF 照会フィルターを使用する照会を速くすることができます。詳しくは、 816 ページの『索引を使用した照会の最適化』を参照してください。

キー HashIndex

非エンティティー・マップの場合、HashIndex の **POJOKeyIndex** プロパティーが true に設定されていると、HashIndex はキー HashIndex であり、エントリーのキー部分が索引付けに使用されます。HashIndex の AttributeName プロパティーが指定されていないと、キー全体に索引が付けられます。指定されていると、キー HashIndex は単一属性 HashIndex にしかなりません。

例えば、以下のプロパティーを前記の例に追加すると、POJOKeyIndex プロパティーの値が true のため、HashIndex はキー HashIndex になります。

```
<property name="POJOKeyIndex" type="boolean" value="true"
description="indicates if POJO key HashIndex" />
```

前記のキー索引の例では、**AttributeName** プロパティーの値が employeeCode として指定されているため、索引付き属性はマップ・エントリーのキー部分の **employeeCode** フィールドです。 キー索引をマップ・エントリーのキー部分全体で作成する場合は、**AttributeName** プロパティーを除去してください。

範囲 HashIndex

HashIndex の RangeIndex プロパティーが `true` に設定されている場合、その HashIndex は範囲索引であり、MapRangeIndex インターフェースをサポートできます。MapRangeIndex は、範囲関数 greater than や less than、あるいは両方を使用するデータ検出をサポートしますが、MapIndex は equals 関数のみをサポートします。単一属性索引の場合、**`RangeIndex`** プロパティーを `true` に設定できるのは、索引付けられる属性のタイプが Comparable の場合に限ります。単一属性索引が照会によって使用される場合、RangeIndex プロパティーは `true` に設定されていなければならず、索引付けられる属性のタイプは Comparable でなければなりません。リレーションシップ HashIndex および複合 HashIndex の場合、RangeIndex プロパティーは `false` に設定されていなければなりません。

RangeIndex プロパティーの値が `true` なので、前記の例は範囲 HashIndex です。

以下の表に、範囲索引の使用についての要約を示します。

表 18. 範囲索引のサポート： HashIndex のタイプが範囲索引をサポートするかどうかを記述します。

HashIndex タイプ	範囲索引のサポート
単一属性 HashIndex: 索引付けられるキーまたは属性のタイプは Comparable である	はい
単一属性 HashIndex: 索引付けられるキーまたは属性のタイプは Comparable でない	いいえ
複合 HashIndex	いいえ
リレーションシップ HashIndex	いいえ

HashIndex プラグインを使用した照会の最適化

索引を定義することで、照会パフォーマンスを大きく向上させることができます。WebSphere eXtreme Scale 照会は、組み込みの HashIndex プラグインを使用して、照会パフォーマンスを向上させることができます。索引の使用は、照会パフォーマンスを大きく向上させることができますが、トランザクションのマップ操作のパフォーマンスに影響を与えることもあります。

関連概念:

Java 635 ページの『データの索引付けのためのプラグイン』
WebSphere eXtreme Scale は、作成する索引のタイプに応じて、索引の作成のために BackingMap に追加できる組み込みプラグインを提供します。

Java 『キャッシュ・オブジェクトのカスタム索引作成のためのプラグイン』
MapIndexPlugin プラグイン (つまり索引) を使用すると、eXtreme Scale が提供する組み込み索引以上の、カスタムの索引付けストラテジーを書き込めます。

Java 652 ページの『複合索引の使用』
複合 HashIndex により、照会のパフォーマンスが向上し、高いコストがかかるマップのスキャンを避けることができます。また、この機能は、検索条件に多くの属性が関係する際、キャッシュ・オブジェクトを検索するための便利な方法を HashIndex API に提供します。

Java 308 ページの『索引付け』
MapIndexPlugin プラグインは、BackingMap 上にいくつかの索引を作成して、非キー・データ・アクセスをサポートするために使用します。

Java 656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

656 ページの『グローバル索引の使用』
グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

824 ページの『グローバル索引を使用したクライアント照会の最適化』
クライアント ObjectGrid から照会を実行するときは、関連するマップが区画化されているのであれば、区画を設定する必要があります。大規模な区画化された ObjectGrid 環境では、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは通常すべての区画に対して同時に並行照会を実行する必要があります。例えば、100 個の区画がある場合、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは、100 個すべての区画に対して同じ照会を実行し、照会結果をマージする必要があります。これは通常、大量のシステム・リソースを消費します。

812 ページの『照会のパフォーマンスのチューニング』
照会のパフォーマンスを調整する場合は、以下の手法とヒントを使用してください。

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

キャッシュ・オブジェクトのカスタム索引作成のためのプラグイン: Java

MapIndexPlugin プラグイン (つまり索引) を使用すると、eXtreme Scale が提供する組み込み索引以上の、カスタムの索引付けストラテジーを書き込めます。

MapIndexPlugin 実装は、MapIndexPlugin インターフェースを使用し、 eXtreme Scale プラグインの共通規則に従う必要があります。

以下のセクションに、この索引インターフェースの重要なメソッドをいくつか示します。

setProperties メソッド

setProperties メソッドを使用して、索引プラグインをプログラマチックに初期化することができます。このメソッドに渡される Properties オブジェクト・パラメーターには、索引プラグインの適切な初期化に必要な構成情報を含める必要があります。分散環境では、索引プラグインの構成がクライアントとサーバーのプロセス間で移動するため、getProperties メソッドの実装と一緒に setProperties メソッドの実装が必要です。以下に、このメソッドの実装例を示します。

```
setProperties(Properties properties)

// setProperties method sample code
    public void setProperties(Properties properties) {
        ivIndexProperties = properties;

        String ivRangeIndexString = properties.getProperty("rangeIndex");
        if (ivRangeIndexString != null && ivRangeIndexString.equals("true")) {
            setRangeIndex(true);
        }
        setName(properties.getProperty("indexName"));
        setAttributeName(properties.getProperty("attributeName"));

        String ivFieldAccessAttributeString = properties.getProperty("fieldAccessAttribute");
        if (ivFieldAccessAttributeString != null && ivFieldAccessAttributeString.equals("true")) {
            setFieldAccessAttribute(true);
        }

        String ivPOJOKeyIndexString = properties.getProperty("POJOKeyIndex");
        if (ivPOJOKeyIndexString != null && ivPOJOKeyIndexString.equals("true")) {
            setPOJOKeyIndex(true);
        }
    }
```

getProperties メソッド

getProperties メソッドは、MapIndexPlugin インスタンスから索引プラグインの構成を抽出します。抽出したプロパティーを使用して、別の MapIndexPlugin インスタンスを初期化し内部状態が同一になるようにすることができます。分散環境では、getProperties メソッドと setProperties メソッドの実装が必要です。以下に、getProperties メソッドの実装例を示します。

```
getProperties()

// getProperties method sample code
    public Properties getProperties() {
        Properties p = new Properties();
        p.put("indexName", indexName);
        p.put("attributeName", attributeName);
        p.put("rangeIndex", ivRangeIndex ? "true" : "false");
        p.put("fieldAccessAttribute", ivFieldAccessAttribute ? "true" : "false");
        p.put("POJOKeyIndex", ivPOJOKeyIndex ? "true" : "false");
        return p;
    }
```

setEntityMetadata メソッド

setEntityMetadata メソッドは、初期化時に WebSphere eXtreme Scale ランタイムにより呼び出され、関連する BackingMap の EntityMetadata を MapIndexPlugin インスタンスに設定します。 EntityMetadata は、タプル・オブジェクトの索引のサポートに必要です。タプルとは、エンティティー・オブジェクトまたはそのキーを表すデータ・セットです。 BackingMap がエンティティー用である場合は、このメソッドを実装する必要があります。

以下のコード例は、setEntityMetadata メソッドを実装します。

```
setEntityMetadata(EntityMetadata entityMetadata)

// setEntityMetadata method sample code
    public void setEntityMetadata(EntityMetadata entityMetadata) {
        ivEntityMetadata = entityMetadata;
        if (ivEntityMetadata != null) {
            // this is a tuple map
            TupleMetadata valueMetadata = ivEntityMetadata.getValueMetadata();
            int numAttributes = valueMetadata.getNumAttributes();
            for (int i = 0; i < numAttributes; i++) {
                String tupleAttributeName = valueMetadata.getAttribute(i).getName();
                if (attributeName.equals(tupleAttributeName)) {
                    ivTupleValueIndex = i;
                    break;
                }
            }

            if (ivTupleValueIndex == -1) {
                // did not find the attribute in value tuple, try to find it on key tuple.
                // if found on key tuple, implies key indexing on one of tuple key attributes.
                TupleMetadata keyMetadata = ivEntityMetadata.getKeyMetadata();
                numAttributes = keyMetadata.getNumAttributes();
                for (int i = 0; i < numAttributes; i++) {
                    String tupleAttributeName = keyMetadata.getAttribute(i).getName();
                    if (attributeName.equals(tupleAttributeName)) {
                        ivTupleValueIndex = i;
                        ivKeyTupleAttributeIndex = true;
                        break;
                    }
                }
            }

            if (ivTupleValueIndex == -1) {
                // if entityMetadata is not null and we could not find the
       // attributeName in entityMetadata, this is an
                // error
                throw new ObjectGridRuntimeException("Invalid attributeName.  Entity: " +
         ivEntityMetadata.getName());
            }
        }
    }
```

属性名メソッド

setAttributeName メソッドは、索引付けされる属性の名前を設定します。キャッシュ・オブジェクト・クラスは、索引付き属性に対し get メソッドを提供する必要があります。例えば、オブジェクトに属性 employeeName または EmployeeName がある場合、索引ではそのオブジェクトで getEmployeeName メソッドを呼び出し、属性値を抽出します。属性名はその get メソッド内の名前と同一にし、その属性では Comparable インターフェースを実装している必要があります。属性がブール・タイプである場合は、isAttributeName メソッドのパターンを使用することもできます。

getAttributeName メソッドは、索引付き属性の名前を戻します。

getAttribute メソッド

getAttribute メソッドは、指定したオブジェクトからの索引付き属性値を戻します。例えば、Employee オブジェクトに索引が付けられた employeeName という属性が

ある場合は、getAttribute メソッドを使用して、指定された Employee オブジェクトから employeeName の属性値を抽出できます。このメソッドは、分散 WebSphere eXtreme Scale 環境の場合には必須です。

```
getAttribute(Object value)

// getAttribute method sample code
    public Object getAttribute(Object value) throws ObjectGridRuntimeException {
        if (ivPOJOKeyIndex) {
            // In the POJO key indexing case, no need to get attribute from value object.
            // The key itself is the attribute value used to build the index.
            return null;
        }

        try {
            Object attribute = null;
            if (value != null) {
                // handle Tuple value if ivTupleValueIndex != -1
                if (ivTupleValueIndex == -1) {
                    // regular value
                    if (ivFieldAccessAttribute) {
                        attribute = this.getAttributeField(value).get(value);
                    } else {
                        attribute = getAttributeMethod(value).invoke(value, emptyArray);
                    }
                } else {
                    // Tuple value
                    attribute = extractValueFromTuple(value);
                }
            }
            return attribute;
        } catch (InvocationTargetException e) {
             throw new ObjectGridRuntimeException(
                    "Caught unexpected Throwable during index update processing,
           index name = " + indexName + ": " + t,
                    t);
        } catch (Throwable t) {
             throw new ObjectGridRuntimeException(
                    "Caught unexpected Throwable during index update processing,
          index name = " + indexName + ": " + t,
                    t);
        }
    }
```

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

複合索引の使用: Java

複合 HashIndex により、照会のパフォーマンスが向上し、高いコストがかかるマップのスキャンを避けることができます。また、この機能は、検索条件に多くの属性が関係する際、キャッシュ・オブジェクトを検索するための便利な方法を HashIndex API に提供します。

パフォーマンスの改善

複合 HashIndex を使用すると、一致検索条件に入れた複数の属性によって、キャッシュ・オブジェクトを高速かつ簡単に見つけることができます。複合索引は、完全属性一致検索をサポートしますが、範囲検索はサポートしません。

注: 複合索引は ObjectGrid 照会言語での BETWEEN 演算子の使用をサポートしません。BETWEEN は範囲サポートを必要とすることがあるためです。より大 (>)、より小 (<) 条件も、範囲索引を必要とするため機能しません。

適切な複合索引が WHERE 条件で使用可能な場合、複合索引によって照会のパフォーマンスを改善できます。適切な複合索引とは、全属性一致の WHERE 条件に含まれているのとまったく同じ属性をその複合索引が持っているという意味です。

照会では、次の例のように 1 つの条件に多数の属性が関係することがあります。

```
SELECT a FROM Address a WHERE a.city='Rochester' AND a.state='MN' AND
a.zipcode='55901'
```

複合索引では、マップのスキャンを回避したり、複数の単一属性索引の結果を結合したりすることで、照会のパフォーマンスを改善できます。例では、属性 (city、state、zipcode) を持つ複合索引が定義されている場合は、照会エンジンは、複合索引を使用して、`city='Rochester'`、`state='MN'`、および `zipcode='55901'` のエントリーを検索できます。 複合索引も、city、state、および zipcode 属性に対する属性索引もなければ、照会エンジンは、マップをスキャンするか、複数の単一属性検索を結合する必要があり、それには通常コストの高いオーバーヘッドが生じます。また、複合索引の照会がサポートするのは、完全一致パターンのみです。

複合索引の構成

複合索引を構成する方法は 3 とおりあります。XML を使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・アノテーションを付ける (エンティティー・マップの場合のみ) 方法です。

プログラマチック構成

次の例は複合索引を作成するものです。

```
HashIndex mapIndex = new HashIndex();
 mapIndex.setName("Address.CityStateZip");
 mapIndex.setAttributeName(("city,state,zipcode"));
 mapIndex.setRangeIndex(false);

 BackingMap bm = objectGrid.defineMap("mymap");
 bm.addMapIndexPlugin(mapIndex);
```

複合索引の構成は、XML を使用した通常の索引の構成と同じですが、attributeName プロパティー値は例外なので注意してください。複合索引の場合、attributeName の値は、コンマ区切りの属性のリストです。例えば、値クラス Address は、city、state、および zipcode の 3 つの属性を持つとします。この場合、

"city,state,zipcode" という attributeName プロパティー値を使用して複合索引を定義し、複合索引に city、state、および zipcode が含まれていることを示すことができます。

複合 HashIndexes は、範囲検索をサポートしないため、true に設定された RangeIndex プロパティーを持つことができません。

XML の使用

XML で複合索引を構成するには、ObjectGrid 記述子 XML ファイル内の backingMapPluginCollections エレメントに次の構成を組み込みます。

```
Composite index - XML configuration approach
<bean id="MapIndexPlugin"  className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
<property name="Name" type="java.lang.String" value="Address.CityStateZip"/>
<property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="city,state,zipcode"/>
</bean>
```

エンティティー・アノテーション

エンティティー・マップの場合、アノテーションによる方法を使用して複合索引を定義できます。エンティティー・クラスのレベルで、CompositeIndexes アノテーション内に CompositeIndex のリストを定義できます。CompositeIndex には name と attributeNames プロパティーがあります。各 CompositeIndex は、エンティティーに関連付けられたパッキング・マップに適用される HashIndex インスタンスに関連付けられます。HashIndex は、非範囲索引として構成されます。

```
@Entity
@CompositeIndexes({
    @CompositeIndex(name="CityStateZip", attributeNames="city,state,zipcode"),
    @CompositeIndex(name="lastnameBirthday", attributeNames="lastname,birthday")
 })
public class Address {
    @Id int id;
    String street;
    String city;
    String state;
    String zipcode;
    String lastname;
    Date birthday;
}
```

各複合索引の name プロパティーは、エンティティーおよび BackingMap 内で固有でなければなりません。名前が指定されない場合は、生成された名前が使用されます。attributeNames プロパティーを使用して、HashIndex attributeName のデータ (コンマ区切りの属性のリスト) が設定されます。属性名は、エンティティーがフィールド・アクセスを使用するように構成されているときは、パーシスタント・フィールド名と一致します。そのように構成されていない場合は、プロパティー・アクセス・エンティティーに対する JavaBeans 命名規則の定義に従いプロパティー名と一致します。例えば、属性名が「street」だった場合、プロパティー getter メソッドの名前は getStreet です。

複合索引の検索の実行

複合索引が構成されたら、アプリケーションは、MapIndex インターフェースの findAll(Object) メソッドを使用して、検索を実行できます。

```
Session sess = objectgrid.getSession();
ObjectMap map = sess.getMap("MAP_NAME");
MapIndex codeIndex = (MapIndex) map.getIndex("INDEX_NAME");
Object[] compositeValue = new Object[]{ MapIndex.EMPTY_VALUE,
```

```
   "MN", "55901"};
Iterator iter = mapIndex.findAll(compositeValue);
// Close the session (optional in Version 7.1.1 and later) for improved performance
sess.close();
```

MapIndex.EMPTY_VALUE は compositeValue[0] に割り当てられ、評価から city 属性が除外されることを示します。結果には、state 属性が"MN" に等しく、zipcode 属性が"55901" に等しいオブジェクトのみが含まれます。

次の照会では、上記の複合索引の構成が有効です。

```
SELECT a FROM Address a WHERE a.city='Rochester' AND a.state='MN' AND
a.zipcode='55901'

SELECT a FROM Address a WHERE a.state='MN' AND a.zipcode='55901'
```

照会エンジンは適切な複合索引を見つけ、それを使用して全属性一致のケースで照会のパフォーマンスを高めます。

シナリオによっては、全属性一致のすべての照会に対応するために、一部の属性がオーバーラップする複数の複合索引をアプリケーションで定義する必要がある場合があります。索引の数が増えることの欠点は、マップ操作でパフォーマンス・オーバーヘッドが生じる可能性があることです。

マイグレーションおよびインターオペラビリティー

複合索引の使用に関する唯一の制約は、異種のコンテナーがある分散環境では、アプリケーションが複合索引を構成できないことです。古いコンテナー・サーバーと新しいコンテナー・サーバーを混用することはできません。というのは、古いほうのコンテナー・サーバーは複合索引構成を認識しないからです。複合索引は、既存の通常の属性索引とよく似ていますが、複合索引では、複数の属性にまたがる索引付けが許可される点が異なります。通常の属性索引のみを使用する場合、コンテナー混在環境はそのまま存続できます。

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

グローバル索引の使用:

グローバル索引の使用により、大規模な区画化環境 (例えば、100 個の区画を含む環境) におけるデータ検索パフォーマンスを向上させることができます。

このフィーチャーはまた、索引付き属性の所在を検索する手段を提供し、索引付き属性に関連するエージェント操作や照会操作を向上させることができます。グローバル索引の機能について詳しくは、MapGlobalIndex API 資料を参照してください。

パフォーマンスの改善

大規模な区画化環境では、キャッシュ・オブジェクトがすべての区画に分布しています。完全な結果を得るためには、すべての区画で索引、照会、およびエージェントが定期的に稼働する必要がありますが、これはコストが高い処理です。理想をいえば、これらの操作は適用区画でのみ実行されるようにすべきであり、したがって、余計なオーバーヘッドを排除する必要があります。グローバル索引フィーチャーは、索引付き属性の所在を追跡したり、すべての区画から属性に合った適用区画を決定したりすることができます。通常、適用区画は全区画のサブセットです。したがって、適用区画での索引、照会、およびエージェントの実行は、グローバル索引によって相殺されるときでさえ、すべての区画でこれらの項目を実行するときよりもはるかに速くなります。

データの検索

アプリケーションは、索引を使用している属性とキーとでデータを検索することができます。従来から、アプリケーションは、クライアント索引プロキシーを使用してすべての区画からエントリー・キーを取得することもできれば、エージェントを使用してすべての区画で索引検索を実行し、キャッシュ・キー、値、またはその両方を返すこともできます。グローバル索引フィーチャーを使用すれば、アプリケーションは、MapGlobalndex API を通じ

て、操作を適用区画のみで実行する効率的方法によりエントリー・キー、値、またはその両方を検索することができます。

エージェント操作

例えば、エージェント操作が索引付き属性に関連している場合は、索引付き属性を使用してエントリーを無効化することにより、アプリケーションはグローバル索引を使用してまず属性で適用区画を検索することができます。その後、アプリケーションはエージェントをこれらの適用区画に送ることができます。 MapGlobalIndex.findPartitions() メソッドを使用して、属性によって適用区画を検索することができます。

クライアント照会操作

クライアント照会を実行するときは、区画を設定する必要があります。通常、アプリケーションは、完全な照会結果を得るためには、すべての区画に対して同じ照会を実行しなければなりません。グローバル索引フィーチャーにより、アプリケーションは、MapGlobalIndex.findPartitions() メソッドを使用して、照会の等価述部にある属性で適用区画を検索することができます。その後、見つかった適用区画に対して照会を実行することができます。

グローバル索引の使用可能化

グローバル索引は HashIndex プラグインの拡張機能であり、既存の任意の HashIndex 構成で使用可能にすることができます。 XML 構成を例に取れば、HashIndex プラグインの GlobalIndexEnabled プロパティーを true に設定すると、その HashIndex プラグインでグローバル索引が使用可能になります。

```
<bean id="MapIndexPlugin"
      className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
         <property name="Name" type="java.lang.String" value="CODE"
            description="index name" />
         <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="employeeCode"
            description="attribute name" />
  <property name="GlobalIndexEnabled" type="boolean" value="true"
            description="true for global index" />
   </bean>
```

グローバル索引検索の実行

グローバル索引機能は MapGlobalIndex API で定義されます。 HashIndex プラグインでグローバル索引が使用可能になれば、アプリケーションは、取得した索引プロキシーを MapGlobalIndex タイプにキャストし、グローバル索引を開始することができます。

```
// in client ObjectGrid process
MapGlobalIndex mapGlobalIndexCODE = (MapGlobalIndex)m.getIndex("CODE", false);
Object[] attributes = new Object[] {new Integer(1)};
Collection partitions = mapGlobalIndexCODE.findPartitions(attributes);
Set keys = mapGlobalIndexDependency.findKeys(attributes);
Set values = mapGlobalIndexDependency.findValues(attributes);
Map entries = mapGlobalIndexDependency.findEntries(attributes);
```

マイグレーションおよびインターオペラビリティー

グローバル索引を使用する際の唯一の制約は、異種コンテナーを含む分散環境ではアプリケーションがグローバル索引を構成できないということです。古いコンテナ

ー・サーバーと新しいコンテナー・サーバーを混用することはできません。というのは、古いほうのコンテナー・サーバーはグローバル索引構成を認識しないからです。

グローバル索引を使用するためには、まず、あるアプリケーションについてコンテナー・サーバーとコンテナー・クライアントをすべて停止する必要があります。その後、HashIndex 構成でグローバル索引を使用可能にし、コンテナー・サーバーとコンテナー・クライアントを再始動します。

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

データベースとの通信のためのプラグイン

Java

Loader プラグインを使用すると、通常は、同一システムあるいは別システムのパーシスタント・ストアに保持されるデータのメモリー・キャッシュとして ObjectGrid マップを動作させることができます。通常、データベースまたはファイル・システムはパーシスタント・ストアとして使用されます。リモート Java 仮想マシン (JVM) は、データ・ソースとして使用することもでき、ObjectGrid を使用したハブ・ベースのキャッシュを作成できます。ローダーには、パーシスタント・ストアとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うロジックが備わっています。

ローダーは、変更がパッキング・マップに対して行われた場合、または、パッキング・マップがデータ要求を満足できない (キャッシュ・ミス) 場合に呼び出されるパッキング・マップ・プラグインです。

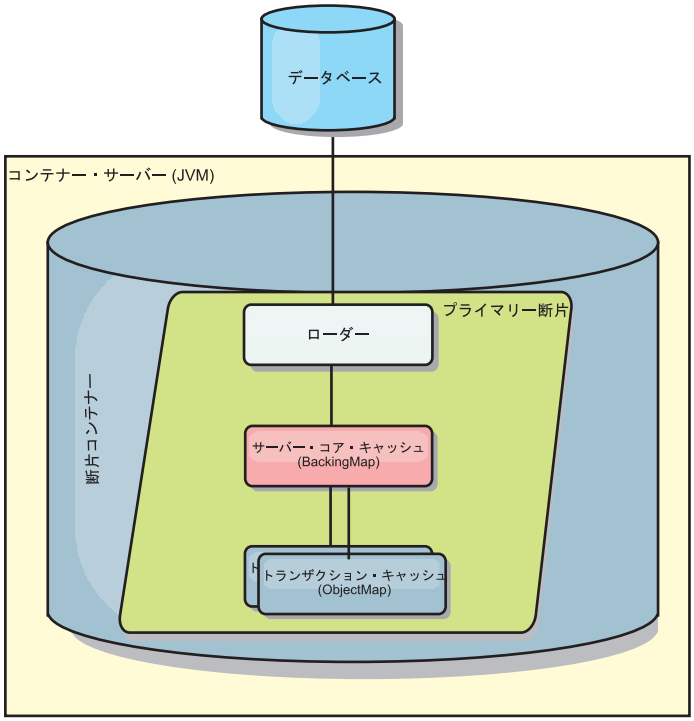


図 40. ローダー

WebSphere eXtreme Scale には、リレーショナル・データベース・バックエンドと統合する 2 つの組み込みローダーがあります。 Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA 仕様の OpenJPA 実装と Hibernate 実装の両方のオブジェクト・リレーショナル・マッピング (ORM) 機能を使用します。

ローダーの使用

ローダーを BackingMap 構成に追加するには、プログラマチック構成または XML 構成を使用します。ローダーには、パッキング・マップとの間で以下のような関係があります。

- パッキング・マップは 1 つしかローダーを持つことができません。
- クライアント・パッキング・マップ (ニア・キャッシュ) はローダーを持つことができません。
- ローダー定義は複数のパッキング・マップに適用できますが、各パッキング・マップには独自のローダー・インスタンスがあります。

制約事項: ローダー・プラグインで構成された BackMap は、マルチ区画トランザクションのマップを読み取ることはできますが、書き込むことはできません。

マルチマスター構成でのローダー

マルチマスター構成でのローダーの使用に関する考慮事項については、318 ページの『マルチマスター・トポロジーでのローダーについての考慮事項』を参照してください。

ローダーのプログラマチックなプラグイン

以下のコード・スニペットは、ObjectGrid API を使用してアプリケーションが提供するローダーを map1 のパッキング・マップに接続する方法を示しています。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid og = ogManager.createObjectGrid( "grid" );
BackingMap bm = og.defineMap( "map1" );
MyLoader loader = new MyLoader();
loader.setDataBaseName("testdb");
loader.setIsolationLevel("read committed");
bm.setLoader( loader );
```

このスニペットでは、 MyLoader クラスは、com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.Loader インターフェースを実装するアプリケーション提供のクラスであることが前提になります。 ObjectGrid の初期化後は、ローダーとパッキング・マップとの関連付けを変更できないので、呼び出されている ObjectGrid インターフェースの initialize メソッドを起動する前にコードを実行する必要があります。初期化が起こった後に setLoader メソッドが呼び出された場合、IllegalStateException 例外が発生します。

アプリケーションが提供する Loader には、set プロパティーがあります。例では、MyLoader ローダーを使用して、リレーショナル・データベースの表からデータを読み書きします。ローダーにより、データベースの名前と SQL 分離レベルが指定されることが必要です。 MyLoader ローダーには、setDataBaseName メソッドと setIsolationLevel メソッドがあり、アプリケーションはこれらのメソッドを使用してこれら 2 つの Loader プロパティーを設定できます。

ローダーのプラグインの XML 構成アプローチ

アプリケーションが提供するローダーは、XML ファイルを使用して接続することも可能です。以下の例は、MyLoader ローダーが、同じデータベース名および分離レベル・ローダー・プロパティーで map1 パッキング・マップに接続される方法を示しています。ローダーの className、データベース名と接続詳細、および分離レベル・プロパティーを指定する必要があります。完全なローダー・クラス名ではなく、プリローダー・クラス名を指定して、プリローダーだけを使用している場合、同じ XML 構造を使用できます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
<objectGrids>
    <objectGrid name="grid">
        <backingMap name="map1" pluginCollectionRef="map1" lockStrategy="OPTIMISTIC" />
    </objectGrid>
</objectGrids>
<backingMapPluginCollections>
    <backingMapPluginCollection id="map1">
        <bean id="Loader" className="com.myapplication.MyLoader">
            <property name="dataBaseName"
                      type="java.lang.String"
                      value="testdb"
                      description="database name" />
            <property name="isolationLevel"
                      type="java.lang.String"
                      value="read committed"
                      description="iso level" />
```

```
        </bean>
    </backingMapPluginCollection>
</backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

関連資料:

Java 686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』
Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

データベース・ローダーの構成: Java

ローダーは、変更がパッキング・マップに対して行われた場合、または、パッキング・マップがデータ要求を満足できない (キャッシュ・ミス) 場合に呼び出されるパッキング・マップ・プラグインです。

プリロードの考慮事項

ローダーは、変更がパッキング・マップに対して行われた場合、または、パッキング・マップがデータ要求を満足できない (キャッシュ・ミス) 場合に呼び出されるパッキング・マップ・プラグインです。eXtreme Scale がローダーとどのように対話するのかについての概要は、296 ページの『インライン・キャッシュ』を参照してください。

各パッキング・マップには、マップのプリロードが非同期的に実行されるかどうかを示すために設定できるブール値の preloadMode 属性があります。 デフォルトでは、preloadMode 属性は false に設定されており、マップのプリロードが完了するまでパッキング・マップの初期化が完了しないことを示します。例えば、preloadMap メソッドが戻されるまで、パッキング・マップの初期化は完了しません。preloadMap メソッドによりバックエンドから大量のデータが読み取られて、それがマップにロードされる場合は、完了するまでに比較的長い時間を要する場合があります。このような場合、preloadMode 属性を true に設定して、マップの非同期プリロードを使用するようにパッキング・マップを構成できます。この設定により、パッキング・マップ初期化コードが preloadMap メソッドを呼び出すスレッドを開始し、マップのプリロードの進行中に、パッキング・マップの初期化を完了できるようになります。

分散 eXtreme Scale のシナリオでは、プリロード・パターンの 1 つがクライアントのプリロードです。 クライアントのプリロード・パターンでは、DataGrid エージェントを使用したバックエンドからのデータの取得および分散コンテナー・サーバーへのデータの挿入という役割を、eXtreme Scale クライアントが担います。 さらに、クライアントのプリロードは 1 つの特定の区画のみの Loader.preloadMap メソッドで実行される可能性があります。 この場合、グリッドに非同期でデータをロードすることがとても重要になります。 クライアントのプリロードが同じスレッドで実行されると、パッキング・マップは決して初期化されないため、クライアントのプリロードが常駐する区画は一度も ONLINE になりません。 このため、eXtreme Scale クライアントは要求を区画に送信することができず、最終的にそれが例外の原因となります。

eXtreme Scale クライアントが preloadMap メソッドで使用されている場合は、**preloadMode** 属性を true に設定してください。 代替案は、クライアントのプリロード・コードでスレッドを開始することです。

以下のコード・スニペットは、非同期プリロードが有効になるよう preloadMode 属性を設定する方法を表しています。

```
BackingMap bm = og.defineMap( "map1" );
bm.setPreloadMode( true );
```

preloadMode 属性は、以下の例に示すように、 XML ファイルを使用して設定することもできます。

```
<backingMap name="map1" preloadMode="true" pluginCollectionRef="map1"
 lockStrategy="OPTIMISTIC" />
```

TxID と TransactionCallback インターフェースの使用

Loader インターフェースの get メソッドと batchUpdate メソッドの両方に、get 操作または batchUpdate 操作の実行を必要とするセッション・トランザクションを表す TxID オブジェクトが渡されます。 get および batchUpdate メソッドは、トランザクションごとに複数回呼び出すことが可能です。したがって、ローダーが必要とするトランザクション・スコープのオブジェクトは通常 TxID オブジェクトのスロットに保持されます。ローダーが TxID および TransactionCallback インターフェースをどのように使用するのかを示すため、Java Database Connectivity (JDBC) ローダーが使用されます。

複数の ObjectGrid マップを同じデータベースに格納できます。各マップは独自のローダーを持ち、各ローダーは同一のデータベースに接続しなければならない場合があります。ローダーは、データベースに接続するときに同じ JDBC 接続を使用する必要があります。同じ接続を使用すると、各テーブルへの変更が同じデータベース・トランザクションの一部としてコミットされます。通常、Loader 実装を作成する同じ担当者が TransactionCallback 実装も作成します。最適な方法は、TransactionCallback インターフェースが拡張されて、ローダーにデータベースが接続され、ローダーが準備済みステートメントのキャッシングを必要とするメソッドを追加する場合です。この方法論の理由は、ローダーが TransactionCallback インターフェースおよび TxID インターフェースを使用する方法を調査すると明らかになります。

例として、ローダーが、以下のように拡張される TransactionCallback インターフェースを必要とする場合を示します。

```
import java.sql.Connection;
import java.sql.PreparedStatement;
import java.sql.SQLException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.TxID;
public interface MyTransactionCallback extends TransactionCallback
{
    Connection getAutoCommitConnection(TxID tx, String databaseName) throws SQLException;
    Connection getConnection(TxID tx, String databaseName, int isolationLevel ) throws SQLException;
    PreparedStatement getPreparedStatement(TxID tx, Connection conn, String tableName, String sql)
   throws SQLException;
    Collection getPreparedStatementCollection( TxID tx, Connection conn,  String tableName );
}
```

これらの新しいメソッドを使用すると、Loader の get メソッドおよび batchUpdate メソッドにより、以下のようにして接続が取得されます。

```
import java.sql.Connection;
import java.sql.PreparedStatement;
import java.sql.SQLException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.TxID;
private Connection getConnection(TxID tx, int isolationLevel)
{
    Connection conn = ivTcb.getConnection(tx, databaseName, isolationLevel );
    return conn;
}
```

前の例および以下の例において、ivTcb および ivOcb はプリロードの考慮事項のセクションで説明する方法で初期化されたローダーのインスタンス変数です。ivTcb 変数は MyTransactionCallback インスタンスへの参照であり、ivOcb は MyOptimisticCallback インスタンスへの参照です。 databaseName 変数は、ローダーのインスタンス変数であり、パッキング・マップの初期化中に Loader プロパティーとして設定されています。 isolationLevel 引数は、JDBC がサポートするさまざまな分離レベルに対して定義されている JDBC 接続定数の 1 つです。ローダーがオプティミスティック実装を使用している場合は、get メソッドは通常 JDBC 自動コミット接続を使用してデータをデータベースからフェッチします。この場合、ローダーは以下のように実装される getAutoCommitConnection メソッドを備えている場合があります。

```
import java.sql.Connection;
import java.sql.PreparedStatement;
import java.sql.SQLException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.TxID;
private Connection getAutoCommitConnection(TxID tx)
{
    Connection conn = ivTcb.getAutoCommitConnection(tx, databaseName);
    return conn;
}
```

batchUpdate メソッドに以下の switch ステートメントがあれば、再呼び出しします。

```
switch ( logElement.getType().getCode() )
{
    case LogElement.CODE_INSERT:
        buildBatchSQLInsert( tx, key, value, conn );
        break;
    case LogElement.CODE_UPDATE:
        buildBatchSQLUpdate( tx, key, value, conn );
        break;
    case LogElement.CODE_DELETE:
        buildBatchSQLDelete( tx, key, conn );
        break;
}
```

各 buildBatchSQL メソッドは、MyTransactionCallback インターフェースを使用して、準備済みステートメントを取得します。以下は、EmployeeRecord エントリーを更新する SQL UPDATE ステートメントをビルドして、それをバッチ更新用に追加する buildBatchSQLUpdate メソッドを示すコード・スニペットです。

```
private void buildBatchSQLUpdate( TxID tx, Object key, Object value,
 Connection conn )
throws SQLException, LoaderException
{
    String sql = "update EMPLOYEE set LASTNAME = ?, FIRSTNAME = ?, DEPTNO = ?,
    SEQNO = ?, MGRNO = ? where EMPNO = ?";
    PreparedStatement sqlUpdate = ivTcb.getPreparedStatement( tx, conn,
   "employee", sql );
    EmployeeRecord emp = (EmployeeRecord) value;
```

```
    sqlUpdate.setString(1, emp.getLastName());
    sqlUpdate.setString(2, emp.getFirstName());
    sqlUpdate.setString(3, emp.getDepartmentName());
    sqlUpdate.setLong(4, emp.getSequenceNumber());
    sqlUpdate.setInt(5, emp.getManagerNumber());
    sqlUpdate.setInt(6, key);
    sqlUpdate.addBatch();
}
```

batchUpdate ループは、準備済みステートメントをすべてビルドした後で、getPreparedStatementCollection メソッドを呼び出します。このメソッドは、以下のように実装されます。

```
private Collection getPreparedStatementCollection( TxID tx, Connection conn )
{
    return ( ivTcb.getPreparedStatementCollection( tx, conn, "employee" ) );
}
```

アプリケーションによりセッションの commit メソッドが呼び出されると、セッション・コードは、トランザクションによって変更された各マップのローダーに、トランザクションによって変更されたすべての変更がプッシュされた後で、TransactionCallback メソッドの commit メソッドを呼び出します。すべてのローダーにより、必要なすべての接続と準備済みステートメントを取得するために MyTransactionCallback メソッドが使用されたため、TransactionCallback メソッドは、バックエンドが変更をコミットすることを要求するために使用する接続を認識しています。したがって、各ローダーが必要とするメソッドを持つ TransactionCallback インターフェースを拡張することによって、以下の利点が得られます。

- TransactionCallback オブジェクトは、トランザクション・スコープ・データの TxID スロットの使用をカプセル化するので、ローダーは TxID スロットに関する情報を必要としません。ローダーは、ローダーが必要とする機能をサポートするための、 MyTransactionCallback インターフェースを使用する TransactionCallback に追加されるメソッドに関してのみ認識する必要があります。
- TransactionCallback オブジェクトは、2 フェーズ・コミット・プロトコルを回避できるようにするため、同じバックエンドに接続する各ローダー間で、接続の共有が確実に起こるようにすることができます。
- TransactionCallback オブジェクトは、バックエンドへの接続が適切な場合接続に呼び出されたコミットまたはロールバックを通して確実に完了できるようにします。
- TransactionCallback は、トランザクションの完了時にデータベース・リソースのクリーンアップが実行されることを保証します。
- TransactionCallback は、WebSphere Application Server、または他の Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) 準拠のアプリケーション・サーバーなどの管理された環境から、管理対象の接続を取得している場合は、隠蔽されます。この利点により、環境が管理されている、いないにかかわらず、同じローダーのコードを使用できます。 TransactionCallback プラグインのみを変更する必要があります。
- TransactionCallback の実装がトランザクション・スコープのデータの TxID スロットを使用する方法の詳細については、TransactionCallback プラグインを参照してください。

OptimisticCallback

これまでに述べたように、ローダーは、並行性制御にオプティミスティック・アプローチを使用する場合があります。その場合、オプティミスティック・アプローチを実装するために、buildBatchSQLUpdate メソッドの例に若干の変更を加える必要があります。オプティミスティック・アプローチを使用する方法は、いくつかあります。行の各更新をバージョン管理するために、タイム・スタンプの列かシーケンス番号のカウンターの列のいずれかを設ける方法が一般的です。従業員のテーブルには、行が更新されるたびに増分するシーケンス番号の列があります。次に、buildBatchSQLUpdate メソッドのシグニチャーを変更して、鍵と値のペアの代わりに LogElement オブジェクトが渡されるようにします。初期バージョンのオブジェクトを取得し、そのバージョンのオブジェクトを更新するには、パッキング・マップにプラグインされた OptimisticCallback オブジェクトも使用する必要があります。以下は、preloadMap のセクションで説明されている、初期化された ivOcb インスタンス変数を使用する変更済み buildBatchSQLUpdate メソッドの例です。

```
modified batch-update method code example
private void buildBatchSQLUpdate( TxID tx, LogElement le, Connection conn )
 throws SQLException, LoaderException
{
    // Get the initial version object when this map entry was last read
    // or updated in the database.
    Employee emp = (Employee) le.getCurrentValue();
    long initialVersion = ((Long) le.getVersionedValue()).longValue();
    // Get the version object from the updated Employee for the SQL update
    //operation.
    Long currentVersion = (Long)ivOcb.getVersionedObjectForValue( emp );
    long nextVersion = currentVersion.longValue();
    // Now build SQL update that includes the version object in where clause
    // for optimistic checking.
    String sql = "update EMPLOYEE set LASTNAME = ?, FIRSTNAME = ?,
    DEPTNO = ?,SEQNO = ?, MGRNO = ? where EMPNO = ? and SEQNO = ?";
    PreparedStatement sqlUpdate = ivTcb.getPreparedStatement( tx, conn,
   "employee", sql );
    sqlUpdate.setString(1, emp.getLastName());
    sqlUpdate.setString(2, emp.getFirstName());
    sqlUpdate.setString(3, emp.getDepartmentName());
    sqlUpdate.setLong(4, nextVersion );
    sqlUpdate.setInt(5, emp.getManagerNumber());
    sqlUpdate.setInt(6, key);
    sqlUpdate.setLong(7, initialVersion);
    sqlUpdate.addBatch();
}
```

この例は、初期バージョンの値を取得するために LogElement が使用されることを示しています。トランザクションがマップ・エントリーに最初にアクセスするとき、マップから取得した初期の従業員のオブジェクトに関して LogElement が作成されます。この初期 Employee オブジェクトは、OptimisticCallback インターフェースの getVersionedObjectForValue メソッドにも渡され、その結果は LogElement に保存されます。この処理が実行されるのは、初期 Employee オブジェクトへの参照がアプリケーションに与えられ、そのアプリケーションが初期 Employee オブジェクトの状態を変更する何らかのメソッドを呼び出す時の前です。

この例は、Loader が getVersiondObjectForValue メソッドを使用して、現行の更新済み Employee オブジェクトのバージョン・オブジェクトを取得しているところを示しています。Loader インターフェースの batchUpdate メソッドを呼び出す前に、eXtreme Scale は OptimisticCallback インターフェースの

updateVersionedObjectForValue メソッドを呼び出して、更新された Employee オブジェクトに対する新しいバージョン・オブジェクトが生成されるようにします。batchUpdate メソッドが ObjectGrid に戻された後、LogElement は新規の初期バージョン・オブジェクトになるように、現行バージョン・オブジェクトで更新されます。アプリケーションは Session の commit メソッドの代わりに、マップ上の flush メソッドを呼び出す可能性があるので、このステップが必要になります。同一のキー用の単一のトランザクションによって、ローダーを複数回呼び出すことは可能です。その理由のため、eXtreme Scale は、従業員テーブル内の行が更新されるたびに LogElement が新しいバージョン・オブジェクトで更新されることを保証しています。

ローダーには、初期バージョンのオブジェクトと次期バージョンのオブジェクトが用意されているので、次期バージョンのオブジェクト値に SEQNO 列を設定し、where 文節で初期バージョンのオブジェクト値を使用する SQL UPDATE ステートメントを実行できます。この方法は、過剰 update ステートメントと呼ばれることがあります。この過剰 update ステートメントを使用することにより、リレーショナル・データベースは、このトランザクションがデータベースからデータを読み取り後データベースを更新するまでの間に、別のトランザクションにより行が変更されていないかどうかを検証できます。別のトランザクションが行を変更していた場合、バッチ更新によって戻されるカウント配列は、このキーに関してゼロ行が更新されたことを示します。ローダーは、SQL update 操作が実際に行を更新したことを検証します。更新されていない場合は、ローダーは com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.OptimisticCollisionException 例外を表示して、複数の並行トランザクションがデータベース表の同一行に対して更新を試みたため、batchUpdate メソッドが失敗したことをセッションに通知します。この例外はセッションにロールバックを行わせるので、アプリケーションはトランザクション全体を再試行する必要があります。この方法は、再試行が成功することを予測して行われるため、オプティミスティックと呼ばれます。データがまれにしか変更されないか、または並行トランザクションによる同一行の更新がほとんど試行されない場合は、オプティミスティック・アプローチは実際に適切に機能します。

ローダーが OptimisticCollisionException コンストラクターのキー・パラメーターを使用して、オプティミスティック batchUpdate メソッドの失敗の原因になったキーまたはキーのセットを識別することが重要です。キー・パラメーターには、キー・オブジェクトそのものを使用することもできますし、複数のキーが原因でオプティミスティック更新が失敗した場合は、キー・オブジェクトの配列とすることもできます。 eXtreme Scale は、OptimisticCollisionException コンストラクターの getKey メソッドを使用して、どのマップ・エントリーに失効データが含まれていて、例外の発生原因となったのかを判別します。ロールバック処理の一環として、失効した各マップ・エントリーをマップから除去します。失効したエントリーを除去する必要があるのは、同じキーまたは複数のキーにアクセスする後続のいずれかのトランザクションで、Loader インターフェースの get メソッドが呼び出されて、データベースの現在のデータによってマップ・エントリーが更新されるようにするためです。

ローダーがオプティミスティック・アプローチを実施するそれ以外の方法として、以下のようなものがあります。

- タイム・スタンプまたはシーケンス番号の列を無くします。この場合、OptimisticCallback インターフェースの getVersionObjectForValue メソッドは、単

に、値オブジェクト自身をバージョンとして戻します。この方法では、ローダーは初期バージョン・オブジェクトの各フィールドを組み込む where 文節をビルドする必要があります。この方法は効率的ではなく、列タイプのすべてが過剰 SQL UPDATE ステートメントの where 文節での使用に適しているわけではありません。この方法は通常使用しません。

- タイム・スタンプまたはシーケンス番号の列を無くします。ただし、前の方法とは異なり、where 文節にはトランザクションによって変更された値フィールドのみが含まれています。変更されたフィールドを検出する方法の 1 つに、パッキング・マップのコピー・モードを CopyMode.COPY_ON_WRITE モードに設定することがあります。このコピー・モードは、BackingMap インターフェースの setCopyMode メソッドに渡される値インターフェースを必要とします。BackingMap は、提供される値インターフェースを実装する動的プロキシー・オブジェクトを作成します。このコピー・モードにより、ローダーは com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ValueProxyInfo オブジェクトに各値をキャストできます。 ValueProxyInfo インターフェースには、トランザクションによって変更された属性名のリストをローダーが取得できるメソッドがあります。このメソッドにより、ローダーは属性名の値インターフェースで get メソッドを呼び出して、変更されたデータを取得し、変更された属性のみを設定する SQL UPDATE ステートメントをビルドすることができます。 where 文節は、基本キーの列と変更された各属性の列を持つようにビルドされます。この方法は前の方法よりも効果的ですが、ローダーにさらに多くのコードを書き込む必要があり、さまざまな置換を処理するために、さらに多くの準備済みステートメントのキャッシュが必要になる可能性があります。ただし、トランザクションが、通常ごく一部の属性しか変更しない場合、この制限は問題になりません。
- 一部のリレーショナル・データベースには API があるため、オプティミスティックなバージョン管理に役立つ列データを自動的に保守します。ご使用のデータベースの資料を参照して、この可能性が該当するかどうかを判断してください。

ローダーの作成: Java

アプリケーション内でユーザー独自の Loader プラグイン実装を作成することができますが、WebSphere eXtreme Scale の共通プラグイン規則に従う必要があります。

Loader プラグインの組み込み

この Loader インターフェースには、以下の定義があります。

```
public interface Loader
{
    static final SpecialValue KEY_NOT_FOUND;
    List get(TxID txid, List keyList, boolean forUpdate) throws LoaderException;
    void batchUpdate(TxID txid, LogSequence sequence) throws
    LoaderException, OptimisticCollisionException;
    void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException;
}
```

詳しくは、 301 ページの『ローダー』を参照してください。

get メソッド

バッキング・マップは Loader の get メソッドを呼び出し、keyList 引数として渡されるキー・リストに関連付けられた値を取得します。 get メソッドは、キー・リストにある各キーのうちの 1 つの値の java.lang.util.List リストを戻す必要があります。値リストに戻される最初の値はキー・リストの最初のキーに対応し、値リスト

に戻される 2 番目の値はキー・リストの 2 番目のキーに対応し、以降同様になります。キー・リスト内でキーの値を検出できなかったローダーは、 Loader インターフェースで定義された特別な KEY_NOT_FOUND 値オブジェクトを戻す必要があります。バッキング・マップは、null を有効な値として許可するよう構成できるので、キーを検出できない Loader が特別な KEY_NOT_FOUND オブジェクトを戻すことが極めて重要になります。この特殊値により、バッキング・マップは null 値とキーが検出できなかったため存在しない値とを区別できます。パッキング・マップが null 値をサポートしない場合、存在しないキーについて KEY_NOT_FOUND オブジェクトではなく null 値を戻す Loader は、例外を発生します。

forUpdate 引数は、アプリケーションがマップ上で get メソッドまたは getForUpdate メソッドのいずれを呼び出したかを Loader に通知します。詳しくは、ObjectMap interfaceを参照してください。ローダーは、パーシスタント・ストアへの並行アクセスを制御する、並行性制御ポリシーの実装を担当します。例えば、多くのリレーショナル・データベース管理システムは、リレーショナル・テーブルからデータを読み取るために使用される SQL SELECT ステートメントの FOR UPDATE 構文をサポートします。ローダーは、ブール値 true が、このメソッドの forUpdate パラメーターに引数値として渡されるかどうかに基づいて、SQL SELECT ステートメントの FOR UPDATE 構文を使用することを選択できます。通常、ローダーはペシミスティック並行性の制御ポリシーが使用される場合にのみ FOR UPDATE 構文を使用します。オプティミスティック並行性制御の場合、ローダーは SQL SELECT ステートメントで FOR UPDATE 構文を使用することはありません。ローダーは、そのローダーが使用している並行性制御ポリシーに基づいて forUpdate 引数の使用を判別します。

txid パラメーターの説明については、 702 ページの『トランザクションのライフサイクル・イベントの管理のためのプラグイン』を参照してください。

batchUpdate メソッド

batchUpdate メソッドは、Loader インターフェースにおいて重要です。eXtreme Scale によって現在のすべての変更が Loader に適用される必要がある場合、必ずこのメソッドが呼び出されます。ローダーには、選択されたマップの変更のリストが与えられます。変更は繰り返され、バックエンドに適用されます。このメソッドは現行の TxID 値および適用する変更を受け取ります。以下のサンプルは、一連の変更に対して繰り返し適応され、3 つの Java Database Connectivity (JDBC) ステートメント (INSERT、UPDATE、および DELETE) をバッチ処理します。

```
import java.util.Collection;
import java.util.Map;
import java.sql.PreparedStatement;
import java.sql.SQLException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.TxID;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.Loader;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LoaderException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LogElement;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LogSequence;

    public void batchUpdate(TxID tx, LogSequence sequence) throws LoaderException {
        // Get a SQL connection to use.
        Connection conn = getConnection(tx);
        try {
            // Process the list of changes and build a set of prepared
            // statements for executing a batch update, insert, or delete
            // SQL operation.
            Iterator iter = sequence.getPendingChanges();
            while (iter.hasNext()) {
                LogElement logElement = (LogElement) iter.next();
                Object key = logElement.getKey();
                Object value = logElement.getCurrentValue();
                switch (logElement.getType().getCode()) {
```

```
                case LogElement.CODE_INSERT:
                    buildBatchSQLInsert(tx, key, value, conn);
                    break;
                case LogElement.CODE_UPDATE:
                    buildBatchSQLUpdate(tx, key, value, conn);
                    break;
                case LogElement.CODE_DELETE:
                    buildBatchSQLDelete(tx, key, conn);
                    break;
                }
            }
            // Execute the batch statements that were built by above loop.
            Collection statements = getPreparedStatementCollection(tx, conn);
            iter = statements.iterator();
            while (iter.hasNext()) {
                PreparedStatement pstmt = (PreparedStatement) iter.next();
                pstmt.executeBatch();
            }
        } catch (SQLException e) {
            LoaderException ex = new LoaderException(e);
            throw ex;
        }
    }
```

前のサンプルは、LogSequence 引数の処理の高水準ロジックを示していますが、SQL の INSERT、UPDATE、または DELETE ステートメントがビルドされる方法の詳細については示されていません。示されているキーポイントには、以下のようなものがあります。

- getPendingChanges メソッドは、LogSequence 引数で呼び出され、ローダーが処理を必要とする LogElements のリストのイテレーターを取得します。
- LogElement.getType().getCode() メソッドを使用して、LogElement が SQL の INSERT、UPDATE、または DELETE 操作用であるかどうかを判断します。
- SQLException 例外はキャッチされ、バッチ更新中に発生した例外を報告するために発行される LoaderException 例外にチェーンされます。
- JDBC バッチ更新サポートは、作成する必要のあるバックエンドへの照会の数を最小化するために使用されます。

preloadMap メソッド

eXtreme Scale の初期化中に、定義された各パッキング・マップが初期化されます。Loader がバッキング・マップにプラグインされると、バッキング・マップは Loader インターフェースで preloadMap メソッドを呼び出し、ローダーがバックエンドからデータをプリフェッチし、マップにデータをロードできるようにします。以下のサンプルでは、Employee テーブルの最初の 100 行がデータベースから読み取られて、マップにロードされると仮定します。 EmployeeRecord クラスはアプリケーションが提供するクラスであり、従業員テーブルから読み取った従業員データを保持します。

注: このサンプルは、すべてのデータをデータベースからフェッチし、それを 1 つの区画のベース・マップへ挿入します。 実際の分散 eXtreme Scale デプロイメントのシナリオでは、データはすべての区画に配布されなければなりません。 詳しくは、 720 ページの『クライアント・ベースの JPA ローダーの開発』を参照してください。

```
import java.sql.PreparedStatement;
import java.sql.SQLException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.TxID;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.Loader;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LoaderException

    public void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException {
        boolean tranActive = false;
        ResultSet results = null;
        Statement stmt = null;
```

```
        Connection conn = null;
        try {
            session.beginNoWriteThrough();
            tranActive = true;
            ObjectMap map = session.getMap(backingMap.getName());
            TxID tx = session.getTxID();
            // Get a auto-commit connection to use that is set to
            // a read committed isolation level.
            conn = getAutoCommitConnection(tx);
            // Preload the Employee Map with EmployeeRecord
            // objects. Read all Employees from table, but
            // limit preload to first 100 rows.
            stmt = conn.createStatement();
            results = stmt.executeQuery(SELECT_ALL);
            int rows = 0;
            while (results.next() && rows < 100) {
                int key = results.getInt(EMPNO_INDEX);
                EmployeeRecord emp = new EmployeeRecord(key);
                emp.setLastName(results.getString(LASTNAME_INDEX));
                emp.setFirstName(results.getString(FIRSTNAME_INDEX));
                emp.setDepartmentName(results.getString(DEPTNAME_INDEX));
                emp.updateSequenceNumber(results.getLong(SEQNO_INDEX));
                emp.setManagerNumber(results.getInt(MGRNO_INDEX));
                map.put(new Integer(key), emp);
                ++rows;
            }
            // Commit the transaction.
            session.commit();
            tranActive = false;
        } catch (Throwable t) {
            throw new LoaderException("preload failure: " + t, t);
        } finally {
            if (tranActive) {
                try {
                    session.rollback();
                } catch (Throwable t2) {
                    // Tolerate any rollback failures and
                    // allow original Throwable to be thrown.
                }
            }
            // Be sure to clean up other databases resources here
            // as well such a closing statements, result sets, etc.
        }
    }
```

このサンプルは以下のキーポイントを示します。

- preloadMap のパッキング・マップはセッション引数として渡されるセッション・オブジェクトを使用します。
- Session.beginNoWriteThrough メソッドを使用して、begin メソッドの代わりにトランザクションを開始します。
- マップのロードに関してこのメソッドで発生する各 put 操作にローダーを呼び出すことはできません。
- ローダーは、従業員テーブルの列を EmployeeRecord Java オブジェクトのフィールドにマップすることができます。 ローダーは、発生したすべてのスロー可能な例外をキャッチし、 LoaderException 例外を、その例外にチェーンされているキャッチしたスロー可能な例外と一緒にスローします。
- finally ブロックにより、beginNoWriteThrough メソッドが呼び出される時点から commit メソッドが呼び出される時点までの間に発生するすべてのスロー可能な例外は、確実に finally ブロックにアクティブなトランザクションをロールバックします。このアクションは、preloadMap メソッドによって開始されたすべてのトランザクションが、呼び出し側に戻される前に確実に完了させるために、重要です。 finally ブロックは、Java Database Connectivity (JDBC) 接続やその他の JDBC オブジェクトのクローズのような、必要とされる可能性のあるそれ以外のクリーンアップ・アクションを行う場所としても適切です。

preloadMap サンプルは、テーブルの行をすべて選択する SQL SELECT ステートメントを使用しています。アプリケーションが提供する Loader では、マップにプリロードするテーブルの数を制御するために、 1 つ以上の Loader プロパティーを設定します。

preloadMap メソッドは BackingMap の初期化中に 1 回しか呼び出されないので、1 回だけのローダー初期化コードの実行場所としても適切です。ローダーがバックエンドからデータをプリフェッチせず、データをマップにロードしないことを選択した場合であっても、それ以外に何らかの 1 回だけの初期化を実行し、さらに効率的なローダーの別のメソッドを作成する必要があると考えられます。以下は、TransactionCallback オブジェクトおよび OptimisticCallback オブジェクトを Loader のインスタンス変数としてキャッシングして、Loader の別のメソッドがこれらのオブジェクトにアクセスするためにメソッド呼び出しを行わなくても済むようにする例です。 BackingMap の初期化後に、TransactionCallback オブジェクトおよび OptimisticCallback オブジェクトを変更または置換できなくなるため、この ObjectGrid プラグインの値のキャッシングを行うことが可能です。これらのオブジェクト参照をローダーのインスタンス変数としてキャッシュに入れることは許容されます。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.OptimisticCallback;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.TransactionCallback;

    // Loader instance variables.
    MyTransactionCallback ivTcb; // MyTransactionCallback

    // extends TransactionCallback
    MyOptimisticCallback ivOcb; // MyOptimisticCallback

    // implements OptimisticCallback
    // ...
    public void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException
   [Replication programming]
        // Cache TransactionCallback and OptimisticCallback objects
        // in instance variables of this Loader.
        ivTcb = (MyTransactionCallback) session.getObjectGrid().getTransactionCallback();
        ivOcb = (MyOptimisticCallback) backingMap.getOptimisticCallback();
        // The remainder of preloadMap code (such as shown in prior example).
    }
```

レプリカ生成フェイルオーバーに関係するプリロードおよび回復可能なプリロードについて詳しくは、可用性向上のためのレプリカ生成*製品概要*でレプリカ生成に関する説明を参照してください。

エンティティー・マップが設定されたローダー

ローダーがエンティティー・マップにプラグインされている場合は、ローダーでタプル・オブジェクトを処理する必要があります。タプル・オブジェクトは特別なエンティティー・データ・フォーマットです。ローダーでは、タプルとその他のデータ・フォーマット間でデータ変換を実行する必要があります。例えば、get メソッドにより、このメソッドに渡されるキーのセットに対応する値のリストが返されます。渡されたキーは Tuple のタイプに置かれ、キー・タプルと呼ばれます。ローダーが JDBC を使用しているデータベースでマップをパーシストすると想定した場合、get メソッドは、各キー・タプルをエンティティー・マップにマップされているテーブルの 1 次キーの列に対応する属性値リストに変換し、データベースからデータをフェッチする基準として変換された属性値を使用する WHERE 文節が含まれている SELECT ステートメントを実行した後、返されたデータを値タプルに変換する必要があります。get メソッドは、データベースからデータを取得し、渡されたキー・タプルに対する値タプルにそのデータを変換した後、呼び出し元に渡されたタ

プル・キーのセットに対応する値タプルのリストを返します。get メソッドは 1 つの SELECT ステートメントを実行して一度にすべてのデータをフェッチするか、または各キー・タプルに対して SELECT ステートメントを実行します。データがエンティティー・マネージャーを使用して保管されるときにローダーをどのように使用するのかを示すプログラミングの詳細は、 692 ページの『エンティティー・マップおよびタプルとのローダーの使用』を参照してください。

関連資料:

Java 686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』

Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

プリロードのマップ: Java

マップはローダーに関連付けることができます。ローダーは、オブジェクトがマップに見つからない場合 (キャッシュ・ミスの場合) に、そのオブジェクトをフェッチするためにも、またトランザクションのコミット時に変更をバックエンドに書き込むためにも使用されます。ローダーは、マップへのデータのプリロードに使用することもできます。Loader インターフェースの preloadMap メソッドは、マップ・セット内のその対応する区画がプライマリーとなると、各マップで呼び出されます。preloadMap メソッドは、レプリカでは呼び出されません。このメソッドは、提供されたセッションを使用して、対象となる参照データのすべてをバックエンドからマップにロードしようとします。関係するマップは、preloadMap メソッドに渡される BackingMap 引数によって識別されます。

```
void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException;
```

区画に分割されたマップ・セットでのプリロード

マップは、N 個の区画に分割することができます。したがってマップは、複数のサーバーに渡ってストライプすることができます。この場合、各エントリーは、これらのサーバーのうちの 1 つにのみ保管されているキーによって識別されます。アプリケーションは、マップのすべてのエントリーを保持するに際して単一の Java 仮想マシン (JVM) のヒープ・サイズによる制限を受けなくなったため、非常に大きいマップをデータ・グリッドに保持することができます。 Loader インターフェースの preloadMap メソッドがプリロードされるアプリケーションは、それがプリロードするデータのサブセットを識別する必要があります。常に、固定数の区画が存在します。この数を判別するには、以下のコード例を使用してください。

```
int numPartitions = backingMap.getPartitionManager().getNumOfPartitions();
int myPartition = backingMap.getPartitionId();
```

このコード例は、データベースからプリロードするデータのサブセットを、アプリケーションがどのように識別できるかを示しています。アプリケーションは、マップが最初に区画に分割されていない場合でも、これらのメソッドを常に使用しなければなりません。これらのメソッドによって柔軟性が実現されます。管理者が後でマップを区画に分割した場合でも、ローダーは正常に機能し続けます。

アプリケーションは、バックエンドから *myPartition* サブセットを検索する照会を発行する必要があります。テーブル内のデータを簡単に区画に分割できるなんらかの

自然な照会がある場合を除き、データベースが使用される場合は、所定レコードの区画 ID の列を持つ方が、処理が容易である可能性があります。

複製されたデータ・グリッド用のローダーを実装する方法の例については、697 ページの『レプリカ・プリロード・コントローラーを使用したローダーの作成』を参照してください。

パフォーマンス

プリロードの実装では、複数のオブジェクトを単一トランザクションでマップに保管して、データをバックエンドからマップにコピーします。トランザクションごとに保管されるレコードの最適数は、複雑さやサイズなど、いくつかの要因によって決まります。例えば、トランザクションに 100 エントリーを超えるブロックが含まれると、以後は、エントリーの数を増やすに従ってパフォーマンス利益が減少していきます。 最適数を知るためには、まず 100 エントリーから始めて、徐々に数を増やしていきます。これをパフォーマンス利益がゼロに減少するまで続けます。 トランザクションが大きいほど、レプリカ生成パフォーマンスが向上します。ただし、プライマリーのみがプリロード・コードを実行することに注意してください。プリロードされたデータは、プライマリーから、オンラインになっているすべてのレプリカに複製されます。

マップ・セットのプリロード

アプリケーションが複数のマップを持つマップ・セットを使用する場合、各マップはそれぞれ独自のローダーを持ちます。各ローダーに、プリロード・メソッドがあります。各マップはデータ・グリッドによって順次にロードされます。 1 つのマップをプリロード・マップに指定して全マップをプリロードすると、より効率的になる可能性があります。このプロセスは、アプリケーション規則です。例えば、部門と従業員という 2 つのマップが、部門マップと従業員マップの両方をプリロードするために、部門 Loader を使用するとします。このプロシージャーにより、トランザクション上、アプリケーションで部門が必要な場合、その部門の従業員がキャッシュされます。部門 Loader が部門をバックエンドからプリロードするときに、その部門の従業員もフェッチします。その後で、部門オブジェクトとそれに関連する従業員オブジェクトが、単一のトランザクションを使用して、マップに追加されます。

リカバリー可能なプリロード

非常に大きいデータ・セットをキャッシュする必要がある場合があります。このデータのプリロードは、非常に時間がかかる可能性があります。アプリケーションがオンラインになる前に、プリロードを完了しなければならない場合もあります。プリロードをリカバリー可能にすると、便利です。100 万個のレコードをプリロードする必要があるとします。プライマリーがこれらのレコードをプリロードし、800,000 件目のレコードの時点でプライマリーが失敗するとします。通常、新規プライマリーとして選択されたレプリカは、複製状態をクリアして、最初からプリロードを開始します。eXtreme Scale では、ReplicaPreloadController インターフェースを使用できます。アプリケーションのローダーで、ReplicaPreloadController インターフェースを実装する必要が生じることもあります。この例では、単一メソッド `Status checkPreloadStatus(Session session, BackingMap bmap);` をローダーに追加します。Loader インターフェースのプリロード・メソッドが正常に呼び出されるために

は、このメソッドが eXtreme Scale ランタイムによって呼び出されます。レプリカがプライマリーにプロモートされると、常に eXtreme Scale がこのメソッド (Status) の結果をテストして、その振る舞いを決定します。

表 19. 状況値および応答

返される状況値	eXtreme Scale の応答
Status.PRELOADED_ALREADY	この状況値は、マップが完全にプリロードされていることを示しているため、eXtreme Scale はプリロード・メソッドをまったく呼び出しません。
Status.FULL_PRELOAD_NEEDED	eXtreme Scale はマップをクリアし、プリロード・メソッドを正常に呼び出します。
Status.PARTIAL_PRELOAD_NEEDED	eXtreme Scale は、マップを現状のままにして、プリロードを呼び出します。このストラテジーによって、アプリケーション・ローダーは、この時点以降プリロードを継続することができます。

プライマリーは、マップのプリロード中、返す必要のある状況をレプリカ側で判別できるように、複製中の MapSet 内のマップに必ず何らかの状態を残す必要があります。RecoveryMap マップなどと呼ばれる追加のマップを使用することができます。マップがプリロード中のデータで一貫して複製されるようにするため、この RecoveryMap マップは、プリロード中の同じ MapSet マップ・セットの一部である必要があります。推奨の実装は、以下のとおりです。

プリロードがレコードの各ブロックをコミットすると、プロセスも、RecoveryMap マップ内のカウンターまたは値をそのトランザクションの一部として更新します。プリロードされたデータと RecoveryMap マップ・データは、レプリカにアトミックに複製されます。レプリカがプライマリーに格上げされると、RecoveryMap マップをチェックして何が起こったかを確認できるようになります。

RecoveryMap マップは、状態キーを持つ単一エントリーを保持できます。このキーに対するオブジェクトが存在しない場合には、完全な preload (checkPreloadStatus returns FULL_PRELOAD_NEEDED) が必要です。この状態キーに対するオブジェクトが存在し、値が COMPLETE の場合は、プリロードが完了し、checkPreloadStatus メソッドで PRELOADED_ALREADY が返されます。これ以外の場合、値オブジェクトは、プリロードを再開する場所を示し、checkPreloadStatus メソッドは PARTIAL_PRELOAD_NEEDED を返します。ローダーは、プリロードが呼び出されたときにローダーに開始点がわかるように、ローダーのインスタンス変数にリカバリー・ポイントを保管できます。また、各マップが個別にプリロードされる場合、RecoveryMap マップもマップごとにエントリーを保持できます。

Loader での同期レプリカ生成モードにおけるリカバリーの処理

eXtreme Scale ランタイムは、プライマリーが失敗したときにコミット済みデータを失わないよう設計されています。次のセクションでは、使用されるアルゴリズムについて説明します。これらのアルゴリズムは、レプリカ生成グループが同期レプリカ生成を使用する場合にのみ適用されます。ローダーはオプションです。

eXtreme Scale ランタイムは、すべての変更がプライマリーからレプリカに同期複製されるように構成することができます。同期レプリカが配置されると、その同期レプリカは、プライマリー断片にある既存データのコピーを受け取ります。この間も

プライマリーはトランザクションを受け取り続け、受け取ったトランザクションを非同期にレプリカにコピーします。レプリカはこの時点ではオンラインであるとは見なされません。

レプリカがプライマリーに追いついた後、レプリカはピア・モードに入り、同期レプリカ生成が始まります。プライマリーでコミットされたトランザクションはすべて同期レプリカに送信され、プライマリーは各レプリカからの応答を待ちます。ローダーを使用する、プライマリーでの同期コミット・シーケンスは、以下の一連のステップのようになります。

表 20. プライマリーでのコミット・シーケンス

Loader を使用する場合のステップ	**Loader を使用しない場合のステップ**
エントリーのロックを取得します。	同じ
変更をローダーにフラッシュします。	操作しない
キャッシュに変更を保存します。	同じ
変更をレプリカに送信し、確認通知を待機します。	同じ
TransactionCallback プラグインでローダーをコミットします。	プラグイン・コミットが呼び出されますが、何も実行しません。
エントリーのロックを解除します。	同じ

変更がレプリカに送信された後、ローダーにコミットされることに注意してください。変更がレプリカでコミットされる条件を判別するには、このシーケンスを訂正します。初期化時に、以下のようにプライマリーで tx リストを初期化します。

```
CommitedTx = {}, RolledBackTx = {}
```

同期コミットの処理中に、以下のシーケンスを使用します。

表 21. 同期コミット処理

Loader を使用する場合のステップ	**Loader を使用しない場合のステップ**
エントリーのロックを取得します。	同じ
変更をローダーにフラッシュします。	操作しない
キャッシュに変更を保存します。	同じ
コミット済みトランザクションで変更を送信し、トランザクションをレプリカにロールバックし、肯定応答を待機します。	同じ
コミット済みトランザクションおよびロールバック済みトランザクションのリストをクリアします。	同じ
TransactionCallBack プラグインでローダーをコミットします。	TransactionCallBack プラグイン・コミットがやはり呼び出されますが、通常、何も行われません。
コミットが成功した場合、トランザクションがコミット済みトランザクションに追加され、成功しなかった場合はロールバック済みトランザクションに追加されます。	操作しない
エントリーのロックを解除します。	同じ

レプリカ処理の場合、以下のシーケンスを使用します。

1. レプリカが変更されます。
2. コミット済みトランザクション・リスト内のすべての受信済みトランザクションをコミットします。
3. ロールバック済みトランザクション・リスト内のすべての受信済みトランザクションをロールバックします。
4. トランザクションまたはセッションを開始します。
5. トランザクションまたはセッションに変更を適用します。
6. 保留リストにトランザクションまたはセッションを保存します。
7. 応答を返信します。

レプリカがレプリカ・モードである間は、レプリカ上でローダーによる相互作用が行われないことに注意してください。プライマリーは、すべての変更を Loader を介してプッシュする必要があります。レプリカはデータを変更しません。このアルゴリズムの副次作用は、レプリカに常にトランザクションがあるが、次のプライマリー・トランザクションによってこれらのトランザクションのコミット状況が送信されるまで、コミットされないことです。その場合には、トランザクションはレプリカ上でコミットまたはロールバックされます。このようになるまでは、トランザクションはコミットされません。短い時間 (数秒) 後にトランザクションの結果が送信されるようなタイマーをプライマリーに追加することができます。このタイマーは、その時刻ウィンドウに対する失効性を制限しますが、除去はしません。こうした失効性は、レプリカ読み取りモードを使用する場合のみの問題です。それ以外の点では、失効性は、アプリケーションに影響を与えません。

プライマリーが失敗した場合、プライマリーでコミットまたはロールバックされたトランザクションがいくつかある可能性がありますが、これらの結果が含まれるメッセージがレプリカに到達しませんでした。レプリカが新規プライマリーにプロモートされる際の最初のアクションの 1 つは、この状態に対処することです。保留中の各トランザクションは、新規プライマリーのマップ・セットに対して再処理されます。ローダーがある場合は、そのローダーに各トランザクションが送られます。これらのトランザクションには、厳密な先入れ先出し法 (FIFO) 順序が適用されます。失敗したトランザクションは無視されます。例えば、3 つのトランザクション A、B、および C が保留中の場合、A はコミットし、B はロールバックし、C もコミットする可能性があります。1 つのトランザクションが他のトランザクションに影響を与えることはありません。これらのトランザクションは独立したものと見なされます。

ローダーで使用されるロジックは、フェイルオーバー・リカバリー・モードと通常モードの場合では若干異なることがあります。ローダーがフェイルオーバー・リカバリー・モードであるときは、ReplicaPreloadController インターフェースを実装することで容易に識別できます。checkPreloadStatus メソッドは、フェイルオーバー・リカバリーが完了した場合にのみ呼び出されます。このため、Loader インターフェースの apply メソッドが checkPreloadStatus メソッドより前に呼び出される場合は、リカバリー・トランザクションになります。checkPreloadStatus メソッドが呼び出されると、フェイルオーバー・リカバリーが完了します。

後書きローダー・サポートの構成: Java

後書きサポートを使用可能にするには、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用するか、BackingMap インターフェースでプログラマチックに行います。

後書きサポートを使用可能にするには、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用するか、BackingMap インターフェースでプログラマチックに行います。

ObjectGrid 記述子 XML ファイル

ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用して ObjectGrid を構成する場合、backingMap タグで writeBehind 属性を設定すると、後書きローダーが使用可能になります。次に例を挙げます。

```
<objectGrid name="library" >
     <backingMap name="book" writeBehind="T300;C900" pluginCollectionRef="bookPlugins"/>
```

この例では、book パッキング・マップの後書きサポートがパラメーター T300;C900 で使用可能になります。後書き属性は、最大更新時間または最大キー更新数、あるいはその両方を指定します。後書きパラメーターの形式は以下のとおりです。

```
write-behind attribute  ::= <defaults> | <update time> | <update key count> | <update time> ";" <update key count>
update time  ::= "T" <positive integer>
update key count  ::= "C" <positive integer>
defaults  ::= "" {table}
```

ローダーに対する更新は、以下のいずれかのイベントが発生すると実行されます。

1. 最終更新以降、最大更新時間 (秒数) を経過する
2. キュー・マップ内の更新キーの数が最大更新キー数に達する。

これらのパラメーターはヒントにすぎません。実際の更新数および更新時間は、これらのパラメーターの近似値になります。ただし、実際の更新数または更新時間がパラメーターで定義されたものと同じであることを保証するものではありません。また、更新時間の範囲内で、最大 2 回まで更新が発生した後、最初の後書き更新が発生することがあります。これは、すべての区画で同時にデータベースにアクセスしないように ObjectGrid が更新開始時間をランダム化するためです。

前記の例の T300;C900 では、最終更新以降 300 秒が経過するか、900 個のキーが更新保留状態になると、ローダーはデータをバックエンドに書き込みます。デフォルトの更新時間は 300 秒で、デフォルトの更新キー数は 1000 です。

表 22. いくつかの後書きオプション

属性値	時間
T100	更新時間は 100 秒で、更新キー数は 1000 (デフォルト値) です。
C2000	更新時間は 300 秒 (デフォルト値) で、更新キー数は 2000 です。
T300;C900	更新時間は 300 秒で、更新キー数は 900 です。
""	更新時間は 300 秒 (デフォルト値) で、更新キー数は 1000 (デフォルト値) です。 **注:** 後書きローダーを空ストリング `writeBehind=""` として構成すると、後書きローダーはデフォルト値を使用して使用可能になります。したがって、後書きサポートを使用可能にしたくない場合、writeBehind 属性を指定しないでください。

後書きサポートをプログラマチックに使用可能化

ローカルのメモリー内の eXtreme Scale 用のパッキング・マップをプログラムで作成する場合、以下のメソッドを BackingMap インターフェースで使用すると、後書きサポートを使用可能または使用不可にできます。

```
public void setWriteBehind(String writeBehindParam);
```

setWriteBehind メソッドの使用方法について詳しくは、BackingMap インターフェースを参照してください。

関連資料:

Java 683 ページの『例: 後書きダンパー・クラスの作成』
このサンプル・ソース・コードは、失敗した後書き更新を扱うウォッチャー (ダンパー) の作成方法を示しています。

後書きキャッシング: Java

後書きキャッシングを使用して、バックエンドとして使用しているデータベースを更新する際に発生するオーバーヘッドを減らすことができます。

後書きキャッシングの概要

後書きキャッシングでは、Loader プラグインの更新が非同期にキューに入れられます。eXtreme Scale トランザクションをデータベース・トランザクションから分離することにより、マップの更新、挿入、および除去の、パフォーマンスを改善できます。非同期更新は、時間ベースの遅延 (例えば 5 分) またはエントリー・ベースの遅延 (例えば 1000 エントリー) 後に実行されます。

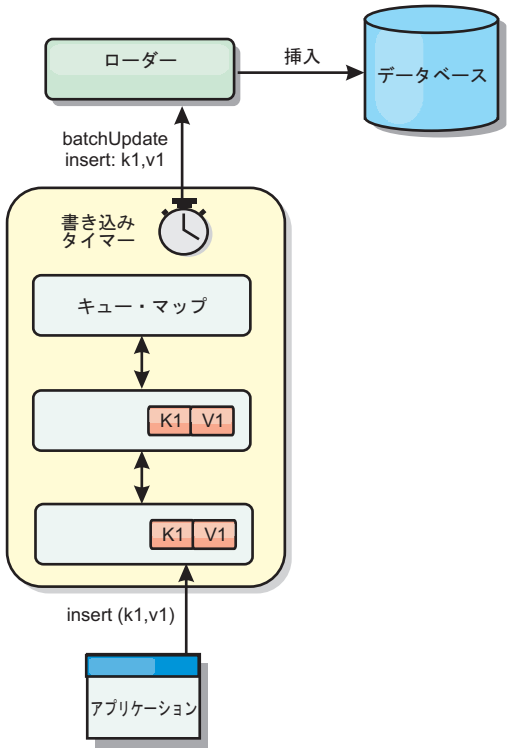


図 41. 後書きキャッシング

BackingMap の後書き構成により、ローダーとマップとの間にスレッドが作成されます。次に、ローダーは、BackingMap.setWriteBehind メソッド内の構成設定に従って、そのスレッドを通してデータ要求を委任します。eXtreme Scale トランザクションが、マップのエントリーを挿入、更新、または削除すると、これらの各レコードごとに 1 つずつ LogElement オブジェクトが作成されます。これらのエレメントは

後書きローダーに送信され、キュー・マップと呼ばれる特別な ObjectMap 内でキューに入れられます。後書き設定が有効になっているパッキング・マップは、それぞれ独自のキュー・マップを持っています。後書きスレッドは、キューに入れられたデータをキュー・マップから定期的に除去して、実際のバックエンド・ローダーにプッシュします。

後書きローダーは、挿入、更新、および削除タイプの LogElement オブジェクトのみを実際のローダーに送信します。それ以外のタイプの LogElement オブジェクト (例えば、EVICT タイプ) はすべて無視されます。

後書きサポートは、eXtreme Scale をデータベースに組み込む際に使用する Loader プラグインの *拡張機能*です。例えば、JPA ローダーの構成については JPA ローダーの構成 の情報を参照してください。

利点

後書きサポートを使用可能にすると、以下のような利点があります。

- **バックエンド障害の分離:** 後書きキャッシングは、バックエンド障害からの分離層を提供します。バックエンドのデータベースで障害が発生すると、更新はキュー・マップ内でキューに入れられます。アプリケーションは、トランザクションを eXtreme Scale に送り続けることができます。バックエンドが復旧すると、キュー・マップ内のデータはバックエンドにプッシュされます。
- **バックエンドの負荷の削減:** 後書きローダーは更新をキー単位でマージします。その結果、キュー・マップ内には、キーごとにマージされた更新が 1 つのみ存在します。このマージにより、バックエンド・データベースに対する更新の数が減ります。
- トランザクション・パフォーマンスの改善: データがバックエンドと同期されるのをトランザクションが待機する必要がないので、個別の eXtreme Scale トランザクション時間が削減されます。

関連資料:

Java 683 ページの『例: 後書きダンパー・クラスの作成』
このサンプル・ソース・コードは、失敗した後書き更新を扱うウォッチャー (ダンパー) の作成方法を示しています。

後書きローダー・アプリケーション設計に関する考慮事項: Java

後書きローダーを実装する際は、保全性制約、ロックの振る舞い、パフォーマンスといった、いくつかの問題を考慮する必要があります。

アプリケーション設計に関する考慮事項

後書きサポートを使用可能にすることは簡単ですが、後書きサポートを扱うアプリケーションを設計する際には、注意すべき考慮事項があります。後書きサポートがない場合、ObjectGrid トランザクションにバックエンド・トランザクションが包含されます。 ObjectGrid トランザクションはバックエンド・トランザクションの開始前に開始し、バックエンド・トランザクションの終了後に終了します。

後書きサポートが有効な場合、ObjectGrid トランザクションは、バックエンド・トランザクションが開始する前に終了します。ObjectGrid トランザクションとバック

エンド・トランザクションは切り離されます。

参照保全性の制約

後書きサポートで構成されているそれぞれのパッキング・マップは、データをバックエンドにプッシュするための独自の後書きスレッドを持ちます。したがって、1 つの ObjectGrid トランザクションにさまざまなマップを更新するデータが含まれていても、バックエンドでは、それぞれ異なるバックエンド・トランザクションでデータの更新が行われます。例えば、トランザクション T1 はマップ Map1 のキー key1 とマップ Map2 のキー key2 を更新するとします。マップ Map1 に対する key1 更新は、1 つのバックエンド・トランザクションでバックエンドに対して更新され、マップ Map2 に対する key2 更新は、異なる後書きスレッドにより別のバックエンド・トランザクションでバックエンドに対して更新されます。Map1 に保管されたデータと Map2 に保管されたデータがバックエンドでの外部キー制約などの関係を持つ場合、更新が失敗する可能性があります。

バックエンド・データベースの参照保全性制約を設計するときは、順不同の更新に必ず対応できるようにしてください。

キュー・マップのロックの振る舞い

トランザクションの動作で他に大きく異なる点は、ロックの振る舞いです。ObjectGrid は、PESSIMISTIC、OPTIMISITIC、および NONE の 3 つの異なるロック・ストラテジーをサポートします。後書きキュー・マップは、 *パッキング・マップに構成されているロック・ストラテジーに関係なく、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用します。キュー・マップのロックを取得する操作には 2 つの異なるタイプがあります。

- ObjectGrid トランザクションのコミット時、またはフラッシュ (マップ・フラッシュまたはセッション・フラッシュ) の発生時、トランザクションはキュー・マップ内のキーを読み取り、キーに S ロックをかけます。
- ObjectGrid トランザクションのコミット時、トランザクションは、キーの S ロックを X ロックにアップグレードしようとします。

キュー・マップのこの余分な動作のため、ロックの動作に少々違いがあります。

- ユーザー・マップがペシミスティック・ロック・ストラテジーで構成されている場合、ロックの動作にほとんど違いはありません。フラッシュまたはコミットが呼び出されるたび、キュー・マップ内の同じキーに S ロックがかけられます。コミット時間中、ユーザー・マップ内のキーに X ロックが取得されるだけでなく、キュー・マップ内のキーに対しても X ロックが取得されます。
- ユーザー・マップが OPTIMISTIC または NONE ロック・ストラテジーで構成されている場合、ユーザー・トランザクションは PESSIMISTIC ロック・ストラテジーのパターンに従います。フラッシュまたはコミットが呼び出されるたびに、キュー・マップ内の同じキーに対して S ロックが取得されます。コミット時間の間、同じトランザクションを使用するキュー・マップ内のキーに対して X ロックが設定されます。

ローダー・トランザクションの再試行

ObjectGrid は、2 フェーズ・トランザクションまたは XA トランザクションをサポートしません。後書きスレッドは、キュー・マップからレコードを除去して、バックエンドに対してそのレコードを更新します。トランザクションの最中にサーバーに障害が起こると、一部のバックエンドの更新が失われる可能性があります。

後書きローダーは、失敗したトランザクションの書き込みを自動的に再試行し、データ損失を防ぐために未確定 LogSequence をバックエンドに送信します。このアクションを行うには、ローダーがべき等である必要があります。この意味は、Loader.batchUpdate(TxId, LogSequence) が同じ値で 2 回呼び出されたとき、それは適用された回数があたかも 1 回だったかのように、同じ結果を返すということです。ローダー実装は、この機能を使用可能にするため、RetryableLoader インターフェースを実装しなければなりません。詳しくは、API 資料を参照してください。

後書きキャッシングのパフォーマンスに関する考慮事項

後書きキャッシング・サポートの場合、ローダー更新をトランザクションから除去することで、応答時間が改善されます。また、データベース更新が結合されるため、データベース・スループットも増加します。データをキュー・マップからプルし、ローダーにプッシュされる後書きスレッドの導入によって生じるオーバーヘッドを理解しておく必要があります。

予想される使用パターンおよび環境に基づいて、最大更新数または最大更新時間を調整する必要があります。最大更新カウントまたは最大更新時間の値が小さすぎると、後書きスレッドのオーバーヘッドが、その利点を帳消しにするおそれがあります。これら 2 つのパラメーターに大きな値を設定する場合も、データのキューイングに必要なメモリー使用が増え、データベース・レコードが不整合になる時間が増加するおそれがあります。

最善のパフォーマンスを得るために、後書き関係のパラメーターは、以下の要因を考慮に入れて調整してください。

- 読み取りトランザクションと書き込みトランザクションの比率
- 同一レコード更新の頻度
- データベース更新の待ち時間

失敗した後書き更新の処理: Java

WebSphere eXtreme Scale トランザクションが、バックエンド・トランザクションの開始前に終了するため、トランザクションが誤って正常となる場合があります。

パッキング・マップには存在しないが、バックエンド・データベースに存在するエントリーを eXtreme Scale トランザクションに挿入すると、重複キーになることになりますが、eXtreme Scale トランザクションは成功します。しかしながら、後書きスレッドがバックエンド・データベースにそのオブジェクトを挿入するトランザクションは、重複キー例外で失敗します。

失敗した後書き更新の処理: クライアント・サイド

このような更新、あるいはその他失敗したバックエンド更新は、失敗した後書き更新となります。失敗した後書き更新は、失敗した後書き更新マップに保管されます。このマップは、失敗した更新のイベント・キューとして機能します。更新のキーは、固有の Integer オブジェクトで、値は、FailedUpdateElement のインスタンスになります。失敗した後書き更新マップは、エビクターによって構成されます。エビクターは、レコードを挿入後 1 時間経過すると除去します。このため、失敗した更新レコードは、1 時間以内に取得されないと失われます。

失敗した後書き更新マップのエントリーを取り出すには、ObjectMap API を使用できます。失敗した後書き更新マップの名前は IBM_WB_FAILED_UPDATES_<map name> です。各後書きシステム・マップの接頭部名については、WriteBehindLoaderConstants API の資料を参照してください。以下に例を示します。

```
process failed - example code
ObjectMap failedMap = session.getMap(
    WriteBehindLoaderConstants.WRITE_BEHIND_FAILED_UPDATES_MAP_PREFIX + "Employee");
Object key = null;

session.begin();
while(key = failedMap.getNextKey(ObjectMap.QUEUE_TIMEOUT_NONE)) {
    FailedUpdateElement element = (FailedUpdateElement) failedMap.get(key);
    Throwable throwable = element.getThrowable();
    Object failedKey = element.getKey();
    Object failedValue = element.getAfterImage();
    failedMap.remove(key);
    // Do something interesting with the key, value, or exception.

}
session.commit();
```

getNextKey 呼び出しは、各 eXtreme Scale トランザクションごとに特定の 1 つの区画について作業します。分散環境では、すべての区画からキーを取得するため、以下の例に示すように複数のトランザクションを開始する必要があります。

```
getting keys from all partitions - example code
ObjectMap failedMap = session.getMap(
    WriteBehindLoaderConstants.WRITE_BEHIND_FAILED_UPDATES_MAP_PREFIX + "Employee");
while (true) {
    session.begin();
    Object key = null;
    while(( key = failedMap.getNextKey(5000) )!= null ) {
        FailedUpdateElement element = (FailedUpdateElement) failedMap.get(key);
    Throwable throwable = element.getThrowable();
        Object failedKey = element.getKey();
        Object failedValue = element.getAfterImage();
        failedMap.remove(key);
        // Do something interesting with the key, value, or exception.

    }
    Session.commit();
}
```

注: 失敗した更新マップは、アプリケーションのヘルスをモニターする 1 つの手段です。システムが失敗した更新マップに数多くのレコードを作成した場合、それは、後書きサポートを使用するように、アプリケーションまたはアーキテクチャーを修正する必要があるというサインです。**xscmd -showMapSizes** コマンドを使用すると、失敗した更新マップのエントリー・サイズを表示できます。

失敗した後書き更新の処理: 断片リスナー

後書きトランザクションが失敗した場合、それを検出し、ログに記録することが重要です。後書きを使用するアプリケーションはすべて、失敗した後書き更新を処理するウォッチャーを実装する必要があります。これによって、アプリケーションが正しくない更新マップ内のレコードを処理することが期待されるため、それらが除去されずに潜在的なメモリー不足になることを防ぐことができます。

以下のコードは、そのようなウォッチャー (ダンパー) の接続方法を示しています。これは、ObjectGrid 記述子 XML にスニペットとして追加する必要があります。

```
<objectGrid name="Grid">
 <bean id="ObjectGridEventListener" className="utils.WriteBehindDumper"/>
```

ObjectGridEventListener Bean が追加されていることがわかります。これは、上記で取り上げた後書きウォッチャーです。このウォッチャーは、JVM 内のすべてのプライマリー断片のマップと対話し、後書きが使用可能になったものを検索します。後書きが使用可能になったものを検出すると、ウォッチャーは最大 100 の不適切な更新をログに記録しようとします。ウォッチャーは、プライマリー断片が別の JVM に移動されるまで、その断片を監視します。後書きを使用するすべてのアプリケーションは、これと似たウォッチャーを使用する必要があります。使用しないと、このエラー・マップが除去されないため、Java 仮想マシン がメモリー不足になります。

詳しくは、『例: 後書きダンパー・クラスの作成』を参照してください。

関連資料:

Java 『例: 後書きダンパー・クラスの作成』
このサンプル・ソース・コードは、失敗した後書き更新を扱うウォッチャー (ダンパー) の作成方法を示しています。

例: 後書きダンパー・クラスの作成: Java

このサンプル・ソース・コードは、失敗した後書き更新を扱うウォッチャー (ダンパー) の作成方法を示しています。

```
//
//This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and
//modified without royalty payment by customer (a) for its own instruction and
//study, (b) in order to develop applications designed to run with an IBM
//WebSphere product, either for customer's own internal use or for redistribution
//by customer, as part of such an application, in customer's own products. "
//
//5724-J34 (C) COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2009
//All Rights Reserved * Licensed Materials - Property of IBM
//
package utils;

import java.util.Collection;
import java.util.Iterator;
import java.util.concurrent.Callable;
import java.util.concurrent.ScheduledExecutorService;
import java.util.concurrent.ScheduledFuture;
import java.util.concurrent.ScheduledThreadPoolExecutor;
import java.util.concurrent.TimeUnit;
import java.util.logging.Logger;

import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.UndefinedMapException;
```

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridEventGroup;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridEventListener;
import com.ibm.websphere.objectgrid.writebehind.FailedUpdateElement;
import com.ibm.websphere.objectgrid.writebehind.WriteBehindLoaderConstants;

/**
 * Write behind expects transactions to the Loader to succeed. If a transaction for a key fails then
 * it inserts an entry in a Map called PREFIX + mapName. The application should be checking this
 * map for entries to dump out write behind transaction failures. The application is responsible for
 * analyzing and then removing these entries. These entries can be large as they include the key, before
 * and after images of the value and the exception itself. Exceptions can easily be 20k on their own.
 *
 * The class is registered with the grid and an instance is created per primary shard in a JVM. It creates
 * a single thread
 * and that thread then checks each write behind error map for the shard, prints out the problem and
 * then removes the entry.
 *
 * This means there will be one thread per shard. If the shard is moved to another JVM then the deactivate
 * method stops the thread.
 * @author bnewport
 *
 */
public class WriteBehindDumper implements ObjectGridEventListener, ObjectGridEventGroup.ShardEvents,
 Callable<Boolean>
{
 static Logger logger = Logger.getLogger(WriteBehindDumper.class.getName());

 ObjectGrid grid;

 /**
  * Thread pool to handle table checkers. If the application has it's own pool
  * then change this to reuse the existing pool
  */
 static ScheduledExecutorService pool = new ScheduledThreadPoolExecutor(2); // two threads to dump records

 // the future for this shard
 ScheduledFuture<Boolean> future;

 // true if this shard is active
 volatile boolean isShardActive;

 /**
  * Normal time between checking Maps for write behind errors
  */
 final long BLOCKTIME_SECS = 20L;

 /**
  * An allocated session for this shard. No point in allocating them again and again
  */
 Session session;
 /**
  * When a primary shard is activated then schedule the checks to periodically check
  * the write behind error maps and print out any problems
  */
 public void shardActivated(ObjectGrid grid)
 {
  try
  {
   this.grid = grid;
   session = grid.getSession();

   isShardActive = true;
   future = pool.schedule(this, BLOCKTIME_SECS, TimeUnit.SECONDS); // check every BLOCKTIME_SECS seconds initially
  }
  catch(ObjectGridException e)
  {
   throw new ObjectGridRuntimeException("Exception activating write dumper", e);
  }
 }

 /**
  * Mark shard as inactive and then cancel the checker
  */
 public void shardDeactivate(ObjectGrid arg0)
 {
  isShardActive = false;
  // if it's cancelled then cancel returns true
  if(future.cancel(false) == false)
  {
   // otherwise just block until the checker completes
   while(future.isDone() == false) // wait for the task to finish one way or the other
   {
    try
    {
     Thread.sleep(1000L); // check every second
    }
    catch(InterruptedException e)
    {
    }
   }
  }
```

```
}

/**
 * Simple test to see if the map has write behind enabled and if so then return
 * the name of the error map for it.
 * @param mapName The map to test
 * @return The name of the write behind error map if it exists otherwise null
 */
static public String getWriteBehindNameIfPossible(ObjectGrid grid, String mapName)
{
 BackingMap map = grid.getMap(mapName);
 if(map != null && map.getWriteBehind() != null)
 {
  return WriteBehindLoaderConstants.WRITE_BEHIND_FAILED_UPDATES_MAP_PREFIX + mapName;
 }
 else
  return null;
}

/**
 * This runs for each shard. It checks if each map has write behind enabled and if it does
  * then it prints out any write behind
 * transaction errors and then removes the record.
 */
public Boolean call()
{
 logger.fine("Called for " + grid.toString());
 try
 {
  // while the primary shard is present in this JVM
  // only user defined maps are returned here, no system maps like write behind maps are in
  // this list.
  Iterator<String> iter = grid.getListOfMapNames().iterator();
  boolean foundErrors = false;
  // iterate over all the current Maps
  while(iter.hasNext() && isShardActive)
  {
   String origName = iter.next();

   // if it's a write behind error map
   String name = getWriteBehindNameIfPossible(grid, origName);
   if(name != null)
   {
    // try to remove blocks of N errors at a time
    ObjectMap errorMap = null;
    try
    {
     errorMap = session.getMap(name);
    }
    catch(UndefinedMapException e)
    {
     // at startup, the error maps may not exist yet, patience...
     continue;
    }
    // try to dump out up to N records at once
    session.begin();
    for(int counter = 0; counter < 100; ++counter)
    {
     Integer seqKey = (Integer)errorMap.getNextKey(1L);
     if(seqKey != null)
     {
      foundErrors = true;
      FailedUpdateElement elem = (FailedUpdateElement)errorMap.get(seqKey);
      //
      // Your application should log the problem here
      logger.info("WriteBehindDumper ( " + origName + ") for key (" + elem.getKey() + ") Exception: " +
       elem.getThrowable().toString());
      //
      //
      errorMap.remove(seqKey);
     }
     else
      break;
    }
    session.commit();
   }
  } // do next map
  // loop faster if there are errors
  if(isShardActive)
  {
   // reschedule after one second if there were bad records
   // otherwise, wait 20 seconds.
   if(foundErrors)
    future = pool.schedule(this, 1L, TimeUnit.SECONDS);
   else
    future = pool.schedule(this, BLOCKTIME_SECS, TimeUnit.SECONDS);
  }
 }
 catch(ObjectGridException e)
 {
  logger.fine("Exception in WriteBehindDumper" + e.toString());
```

```
    e.printStackTrace();

    //don't leave a transaction on the session.
    if(session.isTransactionActive())
    {
     try { session.rollback(); } catch(Exception e2) {}
    }
   }
   return true;
  }

  public void destroy() {
   // TODO Auto-generated method stub

  }

  public void initialize(Session arg0) {
   // TODO Auto-generated method stub

  }

  public void transactionBegin(String arg0, boolean arg1) {
   // TODO Auto-generated method stub

  }

  public void transactionEnd(String arg0, boolean arg1, boolean arg2,
    Collection arg3) {
   // TODO Auto-generated method stub

  }
}
```

関連概念:

Java 676 ページの『後書きローダー・サポートの構成』
後書きサポートを使用可能にするには、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用するか、BackingMap インターフェースでプログラマチックに行います。

Java 299 ページの『後書きキャッシング』
後書きキャッシングを使用して、バックエンドとして使用しているデータベースを更新する際に発生するオーバーヘッドを減らすことができます。

Java 681 ページの『失敗した後書き更新の処理』
WebSphere eXtreme Scale トランザクションが、バックエンド・トランザクションの開始前に終了するため、トランザクションが誤って正常となる場合があります。

JPA ローダーのプログラミング考慮事項: Java

Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

eXtreme Scale エンティティーと JPA エンティティー

eXtreme Scale エンティティー・アノテーション、XML 構成、あるいはその両方を使用して、POJO クラスを eXtreme Scale エンティティーに指定することができます。また、JPA エンティティー・アノテーション、XML 構成、あるいはその両方を使用して、同じ POJO クラスを JPA エンティティーに指定することもできます。

eXtreme Scale エンティティー: eXtreme Scale エンティティーは、ObjectGrid マップに保管された永続データを表します。エンティティー・オブジェクトはキー・タプルおよび値タプルに変換され、キーと値のペアとしてマップに保管されます。タプルとは、画素属性の配列です。

JPA エンティティー: JPA エンティティーは、コンテナー管理パーシスタンスを使用して自動的にリレーショナル・データベースに保管された永続データを表します。データは、例えば、データベース内のデータベース・タプルのように、何らかのデータ・ストレージ・システム形式内の適切な形式で永続化されます。

eXtreme Scale エンティティーが永続化される場合、その関係は別のエンティティー・マップに保管されます。例えば、ShippingAddress エンティティーと 1 対多の関係にある Consumer エンティティーを永続化する場合、cascade-persist が有効になっている場合、ShippingAddress エンティティーは、タプル形式で shippingAddress マップに保管されます。JPA エンティティーを永続化する場合、JPA エンティティーも、cascade-persist が有効になっている場合、データベース表に対して永続化されます。 POJO クラスが、eXtreme Scale エンティティーと JPA エンティティーの両方として指定される場合、データは ObjectGrid エンティティー・マップとデータベースの両方に対して永続化できます。一般的な使用は以下のようになります。

- **プリロード・シナリオ**: JPA プロバイダーを使用してエンティティーがデータベースからロードされ、これを ObjectGrid エンティティー・マップに永続化します。
- **ローダー・シナリオ**: ローダー実装が、ObjectGrid エンティティー・マップに対してプラグインされ、ObjectGrid エンティティー・マップに保管されたエンティティーが JPA プロバイダーを使用してデータベースに対して永続化され、またはこれをデータベースからロードできるようにします。

また、POJO クラスが JPA エンティティーのみとして指定されることも一般的です。その場合、ObjectGrid マップに保管されるのは POJO インスタンスで、これに対してエンティティー・タプルは ObjectGrid エンティティー・ケースに保管されます。

エンティティー・マップに関するアプリケーション設計の考慮事項

JPALoader インターフェースをプラグインする場合、オブジェクト・インスタンスは直接 ObjectGrid マップに保管されます。

しかし、JPAEntityLoader をプラグインする場合、エンティティー・クラスは、eXtreme Scale エンティティーと JPA エンティティーの両方として指定されます。その場合、このエンティティーには、ObjectGrid エンティティー・マップと JPA パーシスタンス・ストアの 2 つのパーシスタント・ストアがあるものとしてこれを取り扱います。アーキテクチャーは、JPALoader の場合よりも複雑になります。

JPAEntityLoader プラグインおよびアプリケーション設計の考慮事項に関して詳しくは、689 ページの『JPAEntityLoader プラグイン』を参照してください。エンティティー・マップに独自のローダーを実装する予定の場合にも、この情報が参考になります。

パフォーマンスの考慮事項

リレーションシップに対して適切な EAGER または LAZY のフェッチ・タイプを必ず設定してください。例えば、パフォーマンスの違いを説明するため、OpenJPA による 1 対多の双方向リレーションシップ Consumer と ShippingAddress を参考にします。この例では、JPA 照会では `select o from Consumer o where . . .` を実

行して、バルク・ロードを行い、さらに関連するすべての ShippingAddress オブジェクトをロードしようとします。Consumer クラスに定義される 1 対多のリレーションシップは以下のようになります。

```
@Entity
public class Consumer implements Serializable {

    @OneToMany(mappedBy="consumer",cascade=CascadeType.ALL, fetch =FetchType.EAGER)
    ArrayList <ShippingAddress> addresses;
```

ShippingAddress クラスに定義された多対 1 の関係 consumer を以下に示します。

```
@Entity
public class ShippingAddress implements Serializable{

    @ManyToOne(fetch=FetchType.EAGER)
    Consumer consumer;
}
```

どちらのリレーションシップのフェッチ・タイプも EAGER で構成されている場合、OpenJPA では、N+1+1 の照会を使用してすべての Consumer オブジェクトおよび ShippingAddress オブジェクトを取得します。ここで、N は ShippingAddress オブジェクトの数です。しかし、次のように ShippingAddress が LAZY のフェッチ・タイプを使用するように変更されると、2 つだけの照会を使用してすべてのデータを取得します。

```
@Entity
public class ShippingAddress implements Serializable{

    @ManyToOne(fetch=FetchType.LAZY)
    Consumer consumer;
}
```

照会は同じ結果を返しますが、照会の数が少なくなると、データベースとの相互作用が著しく減り、その結果、アプリケーション・パフォーマンスが向上する可能性があります。

関連概念:

Java 658 ページの『データベースとの通信のためのプラグイン』
Loader プラグインを使用すると、通常は、同一システムあるいは別システムのパーシスタント・ストアに保持されるデータのメモリー・キャッシュとして ObjectGrid マップを動作させることができます。通常、データベースまたはファイル・システムはパーシスタント・ストアとして使用されます。リモート Java 仮想マシン (JVM) は、データ・ソースとして使用することもでき、ObjectGrid を使用したハブ・ベースのキャッシュを作成できます。ローダーには、パーシスタント・ストアとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うロジックが備わっています。

Java 667 ページの『ローダーの作成』
アプリケーション内でユーザー独自の Loader プラグイン実装を作成することができますが、WebSphere eXtreme Scale の共通プラグイン規則に従う必要があります。

Java 『JPAEntityLoader プラグイン』
JPAEntityLoader プラグインは、EntityManager API を使用する場合に Java Persistence API (JPA) を使用してデータベースと通信する組み込みローダー実装です。 ObjectMap API を使用する場合は、JPALoader ローダーを使用します。

Java 692 ページの『エンティティー・マップおよびタプルとのローダーの使用』
エンティティー・マネージャーは、すべてのエンティティー・オブジェクトをタプル・オブジェクトに変換してから、WebSphere eXtreme Scale マップに保管します。どのエンティティーにもキー・タプルと値タプルがあります。 このキーと値のペアは、エンティティーの関連 eXtreme Scale マップに保管されます。eXtreme Scale マップをローダーと共に使用する場合、ローダーは、タプル・オブジェクトと対話する必要があります。

Java 697 ページの『レプリカ・プリロード・コントローラーを使用したローダーの作成』
レプリカ・プリロード・コントローラーを使用した Loader は、Loader インターフェースに加えて ReplicaPreloadController インターフェースを実装することができます。

Java 301 ページの『ローダー』
Loader プラグインを使用すると、通常は、同一システムあるいは別システムのパーシスタント・ストアに保持されるデータのメモリー・キャッシュとしてデータ・グリッド・マップを動作させることができます。通常、データベースまたはファイル・システムはパーシスタント・ストアとして使用されます。リモート Java 仮想マシン (JVM) もデータのソースとして使用でき、eXtreme Scale を使用してハブ・ベースのキャッシュを構築できます。ローダーには、パーシスタント・ストアとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うロジックが備わっています。

JPAEntityLoader プラグイン: Java

JPAEntityLoader プラグインは、EntityManager API を使用する場合に Java Persistence API (JPA) を使用してデータベースと通信する組み込みローダー実装です。 ObjectMap API を使用する場合は、JPALoader ローダーを使用します。

ローダーの詳細

ObjectMap API を使用してデータを保管する場合、JPALoader プラグインを使用します。 EntityManager API を使用してデータを保管する場合、JPAEntityLoader プラグインを使用します。

ローダーでは、2 つの主要な関数を提供しています。

1. **get**: get メソッドでは、JPAEntityLoader プラグインは、まず、javax.persistence.EntityManager.find(Class entityClass, Object key) メソッドを呼び出し、JPA エンティティーを検索します。次にこの JPA エンティティーをエンティティー・タプルに射影します。射影時には、タプル属性とアソシエーション・キーの両方が値タプルに保管されます。各キーの処理後、get メソッドは、エンティティー値タプルのリストを返します。
2. **batchUpdate**: batchUpdate メソッドでは、LogElement オブジェクトのリストを含む LogSequence オブジェクトを使用します。各 LogElement オブジェクトには、キー・タプルと値タプルが含まれています。JPA プロバイダーと対話するため、まず、キー・タプルに基づいて eXtreme Scale エンティティーを検出する必要があります。LogElement タイプに基づいて、以下の JPA 呼び出しを実行します。
   - **insert**: javax.persistence.EntityManager.persist(Object o)
   - **update**: javax.persistence.EntityManager.merge(Object o)
   - **remove**: javax.persistence.EntityManager.remove(Object o)

タイプが **update** の LogElement は、JPAEntityLoader に javax.persistence.EntityManager.merge(Object o) メソッドを呼び出させ、エンティティーをマージします。しかし、**update** タイプの LogElement は、com.ibm.websphere.objectgrid.em.EntityManager.merge(object o) 呼び出しか、eXtreme Scale EntityManager 管理インスタンスの属性変更のいずれかの結果である可能性があります。次の例を参照してください。

```
com.ibm.websphere.objectgrid.em.EntityManager em = og.getSession().getEntityManager();
em.getTransaction().begin();
Consumer c1 = (Consumer) em.find(Consumer.class, c.getConsumerId());
c1.setName("New Name");
em.getTransaction().commit();
```

この例では、update タイプの LogElement が、マップ・コンシューマーの JPAEntityLoader に送られます。 JPA 管理エンティティーに対しては属性更新が呼び出されますが、JPA エンティティー・マネージャーに対しては javax.persistence.EntityManager.merge(Object o) メソッドが呼び出されます。この変更された振る舞いのため、このプログラミング・モデルの使用にはいくつかの制限があります。

アプリケーション設計の規則

エンティティーには、他のエンティティーとのリレーションシップがあります。リレーションシップが含まれ、JPAEntityLoader がプラグインされているアプリケーションを設計する場合、さらなる考慮が必要です。アプリケーションは、以下のセクションに記載しているように、次の 4 つの規則に従う必要があります。

リレーションシップの深さのサポートの制限

JPAEntityLoader がサポートされるのは、リレーションシップのないエンティティー、または 1 レベルのリレーションシップのエンティティーを使用する場合に限られます。`Company > Department > Employee` など、複数レベルのリレーションシップはサポートされません。

マップごとに 1 つのローダー

Consumer-ShippingAddress エンティティーのリレーションシップを例に使用して、EAGER フェッチを使用可能にして、1 件の consumer をロードする場合、すべての関連 ShippingAddress オブジェクトをロードできます。Consumer オブジェクトを永続化またはマージする場合、cascade-persist または cascade-merge が有効化されている場合は、関連する ShippingAddress オブジェクトを永続化またはマージできます。

Consumer エンティティー・タプルを保管するルート・エンティティーのローダーをプラグインすることはできません。各エンティティー・マップごとに 1 つのローダーを構成する必要があります。

JPA と eXtreme Scale に同じカスケード・タイプを設定

改めてエンティティー Consumer が ShippingAddress と 1 対多のリレーションシップがあるシナリオを考えます。このリレーションシップに cascade-persist が有効化されたシナリオを見てみます。Consumer オブジェクトが eXtreme Scale にパーシストされる場合、関連する N 個の ShippingAddress オブジェクトも eXtreme Scale にパーシストされます。

ShippingAddress に対して cascade-persist リレーションシップがある Consumer オブジェクトの persist 呼び出しは、JPAEntityLoader 層により 1 つの javax.persistence.EntityManager.persist(consumer) メソッド呼び出しと *N* 個の javax.persistence.EntityManager.persist(shippingAddress) メソッド呼び出しに変換されます。しかし、ShippingAddress オブジェクトに対するこれら N 個の余分の persist 呼び出しは、JPA プロバイダーの観点からは、cascade-persist 設定のため不必要です。この問題を解決するため、eXtreme Scale では、新たなメソッド isCascaded を LogElement インターフェースに提供しています。isCascaded メソッドは、LogElement が eXtreme Scale EntityManager のカスケード操作の結果であるかどうかを示します。この例では、ShippingAddress マップの JPAEntityLoader は、cascade persist 呼び出しにより *N* 個の LogElement オブジェクトを受け取ります。JPAEntityLoader は、isCascaded メソッドが true を返すことを検出し、JPA 呼び出しを行わずにこれらを無視します。したがって、JPA の観点からは、1 つの javax.persistence.EntityManager.persist(consumer) メソッド呼び出しのみを受け取ります。

カスケードを有効にしてエンティティーをマージしたり、エンティティーを除去する場合、同じ振る舞いが示されます。カスケードされた操作は、JPAEntityLoader プラグインによって無視されます。

カスケード・サポートの設計では、JPA プロバイダーに対して eXtreme Scale EntityManager 操作をやり直すことになります。これらの操作には、パーシスト、マージ、および除去操作があります。カスケード・サポートを使用可能にするには、

JPA のカスケード設定と eXtreme Scale EntityManager が同じであることを確認してください。

エンティティー更新の使用は注意すること

前述のようにカスケード・サポートの設計では、JPA プロバイダーに対して eXtreme Scale EntityManager 操作をやり直すことになります。アプリケーションが eXtreme Scale EntityManager に対して ogEM.persist(consumer) メソッドを呼び出す場合、cascade-persist 設定のために関連の ShippingAddress オブジェクトがパーシストされていても、JPAEntityLoader は JPA プロバイダーに対して jpAEM.persist(consumer) メソッドのみを呼び出します。

ただし、アプリケーションが管理エンティティーを更新する場合、この更新は JPAEntityLoader プラグインによる JPA merge 呼び出しに変換されます。このシナリオでは、複数レベルのリレーションシップおよびキー・アソシエーションのサポートは保証されません。この場合、ベスト・プラクティスは、管理エンティティーを更新する代わりに javax.persistence.EntityManager.merge(o) メソッドを使用することです。

関連資料:

Java 686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』

Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

エンティティー・マップおよびタプルとのローダーの使用: Java

エンティティー・マネージャーは、すべてのエンティティー・オブジェクトをタプル・オブジェクトに変換してから、WebSphere eXtreme Scale マップに保管します。どのエンティティーにもキー・タプルと値タプルがあります。 このキーと値のペアは、エンティティーの関連 eXtreme Scale マップに保管されます。eXtreme Scale マップをローダーと共に使用する場合、ローダーは、タプル・オブジェクトと対話する必要があります。

eXtreme Scale には、リレーショナル・データベースとの統合を簡素化する Loader プラグインが含まれています。Java Persistence API (JPA) ローダーは、Java Persistence API を使用して、データベースと対話し、エンティティー・オブジェクトを作成します。この JPA ローダーは、eXtreme Scale エンティティーと互換性があります。

タプル

タプルには、エンティティーの属性およびアソシエーションに関する情報が入っています。プリミティブ値は、プリミティブ・ラッパーを使用して保管されます。他のサポートされるオブジェクト・タイプは、そのネイティブ・フォーマットで保管されます。他のエンティティーに対するアソシエーションは、ターゲット・エンティティーのキーを表すキー・タプル・オブジェクトのコレクションとして保管されます。

各属性またはアソシエーションは、ゼロ・ベース索引を使用して保管されます。各属性の索引を getAttributePosition メソッド、または getAssociationPosition メソッド

を使用して取得できます。位置が取得されると、その位置は eXtreme Scale ライフサイクルの実行期間中は変更されません。位置が変更される可能性があるのは、eXtreme Scale が再始動されるときです。タプルのエレメントの更新には、setAttribute メソッド、setAssociation メソッド、および setAssociations メソッドが使用されます。

重要: タプル・オブジェクトを作成または更新する場合、各プリミティブ・フィールドを非ヌル値で更新します。int などのプリミティブ値は、ヌルであってはなりません。値をデフォルトに変更しないと、パフォーマンスが低下するという問題が起こる可能性があり、エンティティー記述子 XML ファイル内の @Version アノテーションでマークされたフィールドやバージョン属性にも影響します。

以下の例では、タプルの処理方法について詳しく説明します。 この例の場合のエンティティーの定義について詳しくは、 16 ページの『エンティティー・マネージャーのチュートリアル: Order エンティティー・スキーマ』を参照してください。
WebSphere eXtreme Scale は各エンティティーでローダーを使用するよう構成されています。また、取得されるのは Order エンティティーのみで、この特定のエンティティーは Customer エンティティーと多対 1 のリレーションシップを保有しています。属性名は customer で、これは OrderLine エンティティーと 1 対多のリレーションシップを保有しています。

プロジェクターを使用して、エンティティーから自動的にタプル・オブジェクトを作成します。プロジェクターを使用すると、Hibernate や JPA などのオブジェクト関係マッピング・ユーティリティーを使用する場合にローダーを簡素化することができます。

order.java

```
@Entity
public class Order
{
    @Id  String orderNumber;
    java.util.Date date;
    @OneToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Customer customer;
    @OneToMany(cascade=CascadeType.ALL, mappedBy="order") @OrderBy("lineNumber") List<OrderLine> lines;
}
```

customer.java

```
@Entity
public class Customer {
    @Id String id;
    String firstName;
    String surname;
    String address;
    String phoneNumber;
}
```

orderLine.java

```
@Entity
public class OrderLine
{
    @Id @ManyToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Order order;
    @Id int lineNumber;
    @OneToOne(cascade=CascadeType.PERSIST) Item item;
    int quantity;
    double price;
}
```

Loader インターフェースを実装する OrderLoader クラスを以下のコードに示します。以下の例では、関連の TransactionCallback プラグインが定義されているものとします。

orderLoader.java

```
public class OrderLoader implements com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.Loader {

 private EntityMetadata entityMetaData;
 public void batchUpdate(TxID txid, LogSequence sequence)
            throws LoaderException, OptimisticCollisionException {
        ...
        }
        public List get(TxID txid, List keyList, boolean forUpdate)
            throws LoaderException {
        ...
        }
        public void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap)
            throws LoaderException {
  this.entityMetaData=backingMap.getEntityMetadata();
 }

}
```

eXtreme Scale からの preLoadMap メソッド呼び出し中に、インスタンス変数 entityMetaData が初期化されます。エンティティーを使用するようにマップが構成されている場合、*entityMetaData* 変数はヌルにはなりません。それ以外の場合、値は NULL です。

batchUpdate メソッド

batchUpdate メソッドを使用することで、アプリケーションがどのアクションを実行しようとしているかを知ることができます。挿入、更新、または削除操作に基づいて、データベースへの接続がオープンされ、作業が実行されます。キーと値のタイプは Tuple のため、これらを SQL ステートメントで意味を成す値に変換する必要があります。

以下のコードに示されているように、ORDER テーブルは、以下のデータ定義言語 (DDL) 定義を使用して作成されました。

```
CREATE TABLE ORDER (ORDERNUMBER VARCHAR(250) NOT NULL, DATE TIMESTAMP, CUSTOMER_ID VARCHAR(250))
ALTER TABLE ORDER ADD CONSTRAINT PK_ORDER PRIMARY KEY (ORDERNUMBER)
```

以下のコードは、Tuple を Object に変換する方法を示しています。

```
public void batchUpdate(TxID txid, LogSequence sequence)
            throws LoaderException, OptimisticCollisionException {
        Iterator iter = sequence.getPendingChanges();
        while (iter.hasNext()) {
            LogElement logElement = (LogElement) iter.next();
            Object key = logElement.getKey();
            Object value = logElement.getCurrentValue();

            switch (logElement.getType().getCode()) {
            case LogElement.CODE_INSERT:

1)              if (entityMetaData!=null) {

// The order has just one key orderNumber
2)                  String ORDERNUMBER=(String) getKeyAttribute("orderNumber", (Tuple) key);
// Get the value of date
3)                  java.util.Date unFormattedDate = (java.util.Date) getValueAttribute("date",(Tuple)value);
// The values are 2 associations. Lets process customer because
// the our table contains customer.id as primary key
4)                  Object[] keys= getForeignKeyForValueAssociation("customer","id",(Tuple) value);
                    //Order to Customer is M to 1. There can only be 1 key
5)                  String CUSTOMER_ID=(String)keys[0];
// parse variable unFormattedDate and format it for the database as formattedDate
6)                   String formattedDate = "2007-05-08-14.01.59.780272"; // formatted for DB2
// Finally, the following SQL statement to insert the record
7) //INSERT INTO ORDER (ORDERNUMBER, DATE, CUSTOMER_ID) VALUES(ORDERNUMBER,formattedDate, CUSTOMER_ID)
                }
                break;
            case LogElement.CODE_UPDATE:
                break;
```

```
            case LogElement.CODE_DELETE:
                break;
            }
        }

    }
// returns the value to attribute as stored in the key Tuple
 private Object getKeyAttribute(String attr, Tuple key) {
        //get key metadata
        TupleMetadata keyMD = entityMetaData.getKeyMetadata();
        //get position of the attribute
        int keyAt = keyMD.getAttributePosition(attr);
        if (keyAt > -1) {
            return key.getAttribute(keyAt);
        } else { // attribute undefined
            throw new IllegalArgumentException("Invalid position index for  "+attr);
        }

    }
// returns the value to attribute as stored in the value Tuple
    private Object getValueAttribute(String attr, Tuple value) {
        //similar to above, except we work with value metadata instead
        TupleMetadata valueMD = entityMetaData.getValueMetadata();

        int keyAt = valueMD.getAttributePosition(attr);
        if (keyAt > -1) {
            return value.getAttribute(keyAt);
        } else {
            throw new IllegalArgumentException("Invalid position index for  "+attr);
        }
    }
// returns an array of keys that refer to association.
    private Object[] getForeignKeyForValueAssociation(String attr, String fk_attr, Tuple value) {
        TupleMetadata valueMD = entityMetaData.getValueMetadata();
        Object[] ro;

        int customerAssociation = valueMD.getAssociationPosition(attr);
        TupleAssociation tupleAssociation = valueMD.getAssociation(customerAssociation);

        EntityMetadata targetEntityMetaData = tupleAssociation.getTargetEntityMetadata();

        Tuple[] customerKeyTuple = ((Tuple) value).getAssociations(customerAssociation);

        int numberOfKeys = customerKeyTuple.length;
        ro = new Object[numberOfKeys];

        TupleMetadata keyMD = targetEntityMetaData.getKeyMetadata();
        int keyAt = keyMD.getAttributePosition(fk_attr);
        if (keyAt < 0) {
            throw new IllegalArgumentException("Invalid position index for  " + attr);
        }
        for (int i = 0; i < numberOfKeys; ++i) {
            ro[i] = customerKeyTuple[i].getAttribute(keyAt);
        }

        return ro;

    }
```

1. entityMetaData が非ヌルであることを確認します。これは、そのキーと値のキャッシュ・エントリーのタイプが Tuple であることを意味します。 entityMetaData から Key TupleMetaData が取り出されます。これは、Order メタデータのキー部分のみを実際に反映したものです。
2. KeyTuple を処理して Key Attribute orderNumber の値を取得します。
3. ValueTuple を処理して属性の日付の値を取得します。
4. ValueTuple を処理して、関連するカスタマーから Keys の値を取得します。
5. CUSTOMER_ID を抽出します。リレーションシップをベースにして、Order には単一のカスタマーのみが存在し、ユーザーは単一のキーのみを保有することができます。そのため、キーのサイズは 1 です。簡単にするために、フォーマットを訂正する日付の構文解析はスキップします。
6. これは挿入操作のため、SQL ステートメントがデータ・ソース接続に渡されて、挿入操作が完了されます。

トランザクション区分およびデータベースへのアクセスは、667 ページの『ローダーの作成』で取り上げています。

get メソッド

キャッシュ内でキーが検出されなかった場合は、Loader プラグインの get メソッドを呼び出し、キーを検出します。

キーは Tuple です。最初のステップは Tuple から、SELECT SQL ステートメントに渡すことができるプリミティブ値への変換を行います。データベースからすべての属性を取得したら、Tuple に変換する必要があります。以下のコードは Order クラスを示しています。

```
public List get(TxID txid, List keyList, boolean forUpdate) throws LoaderException {
  System.out.println("OrderLoader: Get called");
  ArrayList returnList = new ArrayList();

1)  if (entityMetaData != null) {
   int index=0;
   for (Iterator iter = keyList.iterator(); iter.hasNext();) {
2)    Tuple orderKeyTuple=(Tuple) iter.next();

    // The order has just one key orderNumber
3)    String ORDERNUMBERKEY = (String) getKeyAttribute("orderNumber",orderKeyTuple);
    //We need to run a query to get values of
4)    // SELECT CUSTOMER_ID, date FROM ORDER WHERE ORDERNUMBER='ORDERNUMBERKEY'

5)    //1) Foreign key: CUSTOMER_ID
6)    //2) date
    // Assuming those two are returned as
7)                              String  CUSTOMER_ID = "C001"; // Assuming Retrieved and initialized
8)    java.util.Date retrievedDate = new java.util.Date();
                                // Assuming this date reflects the one in database

    // We now need to convert this data into a tuple before returning

    //create a value tuple
9)    TupleMetadata valueMD = entityMetaData.getValueMetadata();
    Tuple valueTuple=valueMD.createTuple();


    //add retrievedDate object to Tuple
    int datePosition = valueMD.getAttributePosition("date");
10)    valueTuple.setAttribute(datePosition, retrievedDate);

    //Next need to add the Association
11)    int customerPosition=valueMD.getAssociationPosition("customer");
    TupleAssociation customerTupleAssociation =
                                  valueMD.getAssociation(customerPosition);
    EntityMetadata customerEMD = customerTupleAssociation.getTargetEntityMetadata();
    TupleMetadata customerTupleMDForKEY=customerEMD.getKeyMetadata();
12)    int customerKeyAt=customerTupleMDForKEY.getAttributePosition("id");


    Tuple customerKeyTuple=customerTupleMDForKEY.createTuple();
    customerKeyTuple.setAttribute(customerKeyAt, CUSTOMER_ID);
13)    valueTuple.addAssociationKeys(customerPosition, new Tuple[] {customerKeyTuple});


14)    int linesPosition = valueMD.getAssociationPosition("lines");
    TupleAssociation linesTupleAssociation = valueMD.getAssociation(linesPosition);
    EntityMetadata orderLineEMD = linesTupleAssociation.getTargetEntityMetadata();
    TupleMetadata orderLineTupleMDForKEY = orderLineEMD.getKeyMetadata();
    int lineNumberAt = orderLineTupleMDForKEY.getAttributePosition("lineNumber");
    int orderAt = orderLineTupleMDForKEY.getAssociationPosition("order");

    if (lineNumberAt < 0 || orderAt < 0) {
     throw new IllegalArgumentException(
                                     "Invalid position index for lineNumber or order "+
                                     lineNumberAt + " " + orderAt);
    }
15) // SELECT LINENUMBER FROM ORDERLINE WHERE ORDERNUMBER='ORDERNUMBERKEY'
    // Assuming two rows of line number are returned with values 1 and 2

    Tuple orderLineKeyTuple1 = orderLineTupleMDForKEY.createTuple();
    orderLineKeyTuple1.setAttribute(lineNumberAt, new Integer(1));// set Key
    orderLineKeyTuple1.addAssociationKey(orderAt, orderKeyTuple);

    Tuple orderLineKeyTuple2 = orderLineTupleMDForKEY.createTuple();
    orderLineKeyTuple2.setAttribute(lineNumberAt, new Integer(2));// Init Key
    orderLineKeyTuple2.addAssociationKey(orderAt, orderKeyTuple);

16)    valueTuple.addAssociationKeys(linesPosition, new Tuple[]
                                  {orderLineKeyTuple1, orderLineKeyTuple2 });

    returnList.add(index, valueTuple);

    index++;
```

```
 }
 }else {
  // does not support tuples
 }
 return returnList;
}
```

1. get メソッドは、ローダーが取り出すキーと要求を ObjectGrid キャッシュによって検出できなかった場合に呼び出されます。entityMetaData 値を検査し、非ヌルであれば処理を続行します。
2. keyList に Tuple が含まれます。
3. 属性 orderNumber の値を取得します。
4. 日付 (値) およびカスタマー ID (外部キー) を取得するには、照会を実行します。
5. CUSTOMER_ID は、アソシエーション・タプルで設定する必要がある外部キーです。
6. 日付は値で、事前に設定されている必要があります。
7. この例は JDBC 呼び出しを実行しないため、CUSTOMER_ID が想定されます。
8. この例は JDBC 呼び出しを実行しないため、日付が想定されます。
9. 値 Tuple を作成します。
10. その位置をベースにして、Tuple に日付の値を設定します。
11. Order には 2 つのアソシエーションがあります。まず、Customer エンティティーを参照する属性 customer から開始します。Tuple に設定する ID の値が必要です。
12. カスタマー・エンティティー上で ID の位置を検索します。
13. アソシエーション・キーの値のみを設定します。
14. また、行はカスタマー・アソシエーションの場合と同様にアソシエーション・キーのグループとしてセットアップする必要があるアソシエーションです。
15. このオーダーと関連する lineNumber のキーをセットアップする必要があるため、SQL を実行して lineNumber の値を取得します。
16. valueTuple でアソシエーション・キーをセットアップします。これで BackingMap に戻される Tuple の作成が完了します。

このトピックには、タプルの作成手順、および Order エンティティーの説明のみが含まれています。他のエンティティーや TransactionCallback プラグインと結び付けられているプロセス全体に対しても同様の手順を実行してください。詳しくは、702 ページの『トランザクションのライフサイクル・イベントの管理のためのプラグイン』を参照してください。

関連資料:

Java 686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』
Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

レプリカ・プリロード・コントローラーを使用したローダーの作成: Java

レプリカ・プリロード・コントローラーを使用した Loader は、Loader インターフェースに加えて ReplicaPreloadController インターフェースを実装することができます。

ReplicaPreloadController インターフェースは、プライマリー断片になるレプリカが、以前のプライマリー断片がプリロード・プロセスを完了したかどうかを認識する方法を提供するように設計されています。プリロードが部分的に完了している場合は、以前のプライマリーが完了していない部分をピックアップする情報が提供されます。ReplicaPreloadController インターフェースを実装すると、プライマリーとなるレプリカは、以前のプライマリーが完了していないプリロード・プロセスを続行し、プリロード全体が完了するまで続行します。

分散 WebSphere eXtreme Scale 環境では、マップは、レプリカを含み、初期化中に大容量のデータをプリロードすることも可能です。プリロードは Loader アクティビティーであり、初期化中のプライマリー・マップでのみ行われます。大容量のデータがプリロードされる場合は、プリロードの完了に長時間かかる場合があります。プライマリー・マップでプリロード・データのほとんどが処理されたものの、初期化中に不明な理由でプリロードが停止した場合、レプリカはプライマリーとなります。この場合には、通常、新しいプライマリーが無条件にプリロードを実行するため、以前のプライマリーによってプリロードされたデータは失われます。無条件プリロードにより、新しいプライマリーはプリロード・プロセスを初期状態から開始し、以前にプリロードされたデータは無視されます。以前のプライマリーがプリロード・プロセス中に完了しなかった部分を、新しいプライマリーにピックアップさせるには、ReplicaPreloadController インターフェースを実装した Loader を指定します。詳しくは、API 資料を参照してください。

ローダーについて詳しくは、 301 ページの『ローダー』を参照してください。通常の Loader プラグインの作成については、 667 ページの『ローダーの作成』を参照してください。

ReplicaPreloadController インターフェースの定義は、以下のとおりです。

```
public interface ReplicaPreloadController
{
    public static final class Status
    {
        static public final Status PRELOADED_ALREADY =
       new Status(K_PRELOADED_ALREADY);
        static public final Status FULL_PRELOAD_NEEDED =
       new Status(K_FULL_PRELOAD_NEEDED);
        static public final Status PARTIAL_PRELOAD_NEEDED =
       new Status(K_PARTIAL_PRELOAD_NEEDED);
    }

    Status checkPreloadStatus(Session session,
    BackingMap bmap);
}
```

以下のセクションでは、Loader および ReplicaPreloadController インターフェースのいくつかのメソッドについて説明します。

checkPreloadStatus メソッド

Loader で ReplicaPreloadController インターフェースが実装されると、マップ初期化中に preloadMap メソッドが呼び出される前に、checkPreloadStatus メソッドが呼び出されます。このメソッドの戻り状況により、preloadMap メソッドが呼び出されるかどうかが決まります。このメソッドによって Status#PRELOADED_ALREADY が返さ

れた場合、preload メソッドは呼び出されません。返されない場合は、preload メソッドが実行されます。この動作によって、このメソッドは Loader 初期化メソッドとして機能します。このメソッドで Loader プロパティーを初期化する必要があります。このメソッドにより正しい状況が返される必要があり、返されない場合は、プリロードは予定通りに動作しません。

```
public Status checkPreloadStatus(Session session,
       BackingMap backingMap) {
        // When a loader implements ReplicaPreloadController interface,
    // this method will be called before preloadMap method during
    // map initialization. Whether the preloadMap method will be
    // called depends on teh returned status of this method. So, this
    // method also serve as Loader's initialization method. This method
    // has to return the right staus, otherwise the preload may not
    // work as expected.

        // Note: must initialize this loader instance here.
        ivOptimisticCallback = backingMap.getOptimisticCallback();
        ivBackingMapName = backingMap.getName();
        ivPartitionId = backingMap.getPartitionId();
        ivPartitionManager = backingMap.getPartitionManager();
        ivTransformer = backingMap.getObjectTransformer();
        preloadStatusKey = ivBackingMapName + "_" + ivPartitionId;

        try {
            // get the preloadStatusMap to retrieve preload status that
      // could be set by other JVMs.
            ObjectMap preloadStatusMap = session.getMap(ivPreloadStatusMapName);

            // retrieve last recorded preload data chunk index.
            Integer lastPreloadedDataChunk = (Integer) preloadStatusMap
         .get(preloadStatusKey);

            if (lastPreloadedDataChunk == null) {
                preloadStatus = Status.FULL_PRELOAD_NEEDED;
            } else {
                preloadedLastDataChunkIndex = lastPreloadedDataChunk.intValue();
                if (preloadedLastDataChunkIndex == preloadCompleteMark) {
                    preloadStatus = Status.PRELOADED_ALREADY;
                } else {
                    preloadStatus = Status.PARTIAL_PRELOAD_NEEDED;
                }
            }

            System.out.println("TupleHeapCacheWithReplicaPreloadControllerLoader.
        checkPreloadStatus()
     -> map = " + ivBackingMapName + ", preloadStatusKey = " + preloadStatusKey
                    + ", retrieved lastPreloadedDataChunk =" + lastPreloadedDataChunk + ",
         determined preloadStatus = "
                    + getStatusString(preloadStatus));

        } catch (Throwable t) {
            t.printStackTrace();
        }

        return preloadStatus;
    }
```

preloadMap メソッド

preloadMap メソッドの実行は、checkPreloadStatus メソッドから返された結果によって異なります。preloadMap メソッドが呼び出されると、このメソッドは、通常、指定されたプリロード状況マップからプリロード状況の情報を取得し、どのようにプリロードを進行するかを決定する必要があります。理想的には、プリロードが部分的に完了されており、どこから開始すればよいかが preloadMap メソッドで正確に認識されている必要があります。データ・プリロード中に、preloadMap メソッドは、指定されたプリロード状況マップでプリロード状況を更新する必要があります。プリロード状況マップに保管されているプリロード状況は、プリロード状況を確認する必要がある場合に、checkPreloadStatus メソッドによって取得されます。

```
public void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap)
     throws LoaderException {
        EntityMetadata emd = backingMap.getEntityMetadata();
        if (emd != null && tupleHeapPreloadData != null) {
            // The getPreLoadData method is similar to fetching data
      // from database. These data will be push into cache as
      // preload process.
            ivPreloadData = tupleHeapPreloadData.getPreLoadData(emd);

            ivOptimisticCallback = backingMap.getOptimisticCallback();
            ivBackingMapName = backingMap.getName();
            ivPartitionId = backingMap.getPartitionId();
            ivPartitionManager = backingMap.getPartitionManager();
            ivTransformer = backingMap.getObjectTransformer();
            Map preloadMap;

            if (ivPreloadData != null) {
                try {
                    ObjectMap map = session.getMap(ivBackingMapName);

                    // get the preloadStatusMap to record preload status.
                    ObjectMap preloadStatusMap = session.
               getMap(ivPreloadStatusMapName);

                    // Note: when this preloadMap method is invoked, the
           // checkPreloadStatus has been called, Both preloadStatus
           // and preloadedLastDataChunkIndex have been set. And the
           // preloadStatus must be either PARTIAL_PRELOAD_NEEDED
           // or FULL_PRELOAD_NEEDED that will require a preload again.

                    // If large amount of data will be preloaded, the data usually
           // is divided into few chunks and the preload process will
           // process each chunk within its own tran. This sample only
           // preload few entries and assuming each entry represent a chunk.
                    // so that the preload process an entry in a tran to simulate
           // chunk preloading.

                    Set entrySet = ivPreloadData.entrySet();
                    preloadMap = new HashMap();
                    ivMap = preloadMap;

                    // The dataChunkIndex represent the data chunk that is in
           // processing
                    int dataChunkIndex = -1;
                    boolean shouldRecordPreloadStatus = false;
                    int numberOfDataChunk = entrySet.size();
                    System.out.println("    numberOfDataChunk to be preloaded = "
             + numberOfDataChunk);

                    Iterator it = entrySet.iterator();
                    int whileCounter = 0;
                    while (it.hasNext()) {
                        whileCounter++;
                        System.out.println("preloadStatusKey = " + preloadStatusKey
               + " ,
              whileCounter = " + whileCounter);

                        dataChunkIndex++;

                        // if the current dataChunkIndex <= preloadedLastDataChunkIndex
                        // no need to process, becasue it has been preloaded by
           // other JVM before. only need to process dataChunkIndex
           // > preloadedLastDataChunkIndex
                        if (dataChunkIndex <= preloadedLastDataChunkIndex) {
                            System.out.println("ignore current dataChunkIndex =
               " + dataChunkIndex + " that has been previously
               preloaded.");
                            continue;
                        }

                        // Note: This sample simulate data chunk as an entry.
                        // each key represent a data chunk for simplicity.
                        // If the primary server or shard stopped for unknown
            // reason, the preload status that indicates the progress
            // of preload should be available in preloadStatusMap. A
           // replica that become a primary can get the preload status
           // and determine how to preload again.
                        // Note: recording preload status should be in the same
            // tran as putting data into cache; so that if tran
           // rollback or error, the recorded preload status is the
```

```
// actual status.

            Map.Entry entry = (Entry) it.next();
            Object key = entry.getKey();
            Object value = entry.getValue();
            boolean tranActive = false;

            System.out.println("processing data chunk. map = " +
  this.ivBackingMapName + ", current dataChunkIndex = " +
  dataChunkIndex + ", key = " + key);

            try {
                shouldRecordPreloadStatus = false; // re-set to false
                session.beginNoWriteThrough();
                tranActive = true;

                if (ivPartitionManager.getNumOfPartitions() == 1) {
                    // if just only 1 partition, no need to deal with
    // partition.
                    // just push data into cache
                    map.put(key, value);
                    preloadMap.put(key, value);
                    shouldRecordPreloadStatus = true;
                } else if (ivPartitionManager.getPartition(key) ==
    ivPartitionId) {
                    // if map is partitioned, need to consider the
    // partition key only preload data that belongs
    // to this partition.
                    map.put(key, value);
                    preloadMap.put(key, value);
                    shouldRecordPreloadStatus = true;
                } else {
                    // ignore this entry, because it does not belong to
    // this partition.
                }

                if (shouldRecordPreloadStatus) {
                    System.out.println("record preload status. map = " +
       this.ivBackingMapName + ", preloadStatusKey = " +
       preloadStatusKey + ", current dataChunkIndex ="
       + dataChunkIndex);
                    if (dataChunkIndex == numberOfDataChunk) {
                        System.out.println("record preload status. map = " +
          this.ivBackingMapName + ", preloadStatusKey = " +
          preloadStatusKey + ", mark complete =" +
          preloadCompleteMark);
                        // means we are at the lastest data chunk, if commit
     // successfully, record preload complete.
     // at this point, the preload is considered to be done
                        // use -99 as special mark for preload complete status.

                        preloadStatusMap.get(preloadStatusKey);

                        // a put follow a get will become update if the get
      // return an object, otherwise, it will be insert.
                        preloadStatusMap.put(preloadStatusKey, new
        Integer(preloadCompleteMark));

                    } else {
                        // record preloaded current dataChunkIndex into
      // preloadStatusMap a put follow a get will become
      // update if teh get return an object, otherwise, it
      // will be insert.
                        preloadStatusMap.get(preloadStatusKey);
                        preloadStatusMap.put(preloadStatusKey, new
     Integer(dataChunkIndex));
                    }
                }

                session.commit();
                tranActive = false;

                // to simulate preloading large amount of data
                // put this thread into sleep for 30 secs.
                // The real app should NOT put this thread to sleep
                Thread.sleep(10000);

            } catch (Throwable e) {
                e.printStackTrace();
                throw new LoaderException("preload failed with
```

```
                exception: " + e, e);
                          } finally {
                              if (tranActive && session != null) {
                                  try {
                                      session.rollback();
                                  } catch (Throwable e1) {
                                      // preload ignoring exception from rollback
                                  }
                              }
                          }
                      }

                      // at this point, the preload is considered to be done for sure
                      // use -99 as special mark for preload complete status.
                      // this is a insurance to make sure the complete mark is set.
                      // besides, when partitioning, each partition does not know when
            // is its last data chunk. so the following block serves as the
            // overall preload status complete reporting.
                      System.out.println("Overall preload status complete -> record
                 preload status. map = " + this.ivBackingMapName + ",
                 preloadStatusKey = " + preloadStatusKey + ", mark complete =" +
                preloadCompleteMark);
                      session.begin();
                      preloadStatusMap.get(preloadStatusKey);
                      // a put follow a get will become update if teh get return an object,
                      // otherwise, it will be insert.
                      preloadStatusMap.put(preloadStatusKey, new Integer(preloadCompleteMark));
                      session.commit();

                      ivMap = preloadMap;
                  } catch (Throwable e) {
                      e.printStackTrace();
                      throw new LoaderException("preload failed with exception: " + e, e);
                  }
              }
          }
      }
```

プリロード状況マップ

ReplicaPreloadController インターフェースの実装をサポートするには、プリロード状況マップを使用する必要があります。preloadMap メソッドは、常にプリロード状況マップに保管されているプリロード状況を最初に確認し、データがキャッシュにプッシュされた場合には、プリロード状況マップのプリロード状況を更新する必要があります。checkPreloadStatus メソッドはプリロード状況マップからプリロード状況を取得することができ、プリロード状況を判別して、その状況を呼び出し元に返します。プリロード状況マップは、レプリカ・プリロード・コントローラー Loader を持つ他のマップと同じ mapSet に置かれている必要があります。

関連資料:

Java 686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』
Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話する Loader プラグイン実装です。JPA ローダーを使用するアプリケーションの開発時には、以下の考慮事項に注意してください。

トランザクションのライフサイクル・イベントの管理のためのプラグイン

Java

オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているときは、TransactionCallback プラグインによってキャッシュ・オブジェクトのバージョン管理および比較操作をカスタマイズすることができます。

com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.OptimisticCallback インターフェースを実装するプラグ可能オプティミスティック・コールバック・オブジェクトを用意できます。エンティティー・マップの場合、ハイパフォーマンス OptimisticCallback プラグインが自動的に構成されます。

目的

OptimisticCallback インターフェースを使用して、マップの値としてオプティミスティック比較演算を提供します。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用するときは、OptimisticCallback の実装が必要です。 WebSphere eXtreme Scale はデフォルトの OptimisticCallback 実装を提供します。ただし、通常、アプリケーションは独自の OptimisticCallback インターフェースの実装をプラグインする必要があります。詳しくは、520 ページの『ロック・ストラテジー』を参照してください。

デフォルト実装

eXtreme Scale フレームワークは、 OptimisticCallback インターフェースのデフォルト実装を提供します。この実装は、前のセクションで説明したように、アプリケーション提供の OptimisticCallback オブジェクトをアプリケーションがプラグインしない場合に使用します。デフォルト実装は、値のバージョン・オブジェクトとして、常に特殊値 NULL_OPTIMISTIC_VERSION を戻し、バージョン・オブジェクトの更新は行いません。このアクションにより、オプティミスティック比較はノーオペレーション関数になります。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているとき、たいていの場合、ノーオペレーション関数が発生することは望まないと思われます。ご使用のアプリケーションが OptimisticCallback インターフェースを実装し、独自の OptimisticCallback 実装をプラグインする必要がある場合、デフォルト実装は使用しません。ただし、デフォルト提供の OptimisticCallback 実装が有用なシナリオが、少なくとも 1 つ存在します。次のような状態について考えてみます。

- ローダーがパッキング・マップ用にプラグインされている。
- ローダーが、OptimisticCallback プラグインからの支援なしに、オプティミスティック比較を実行する方法を認識している。

ローダーが、OptimisticCallback オブジェクトからの支援なしで、オプティミスティック・バージョン管理を認識できる方法について考えてみます。 ローダーは、値クラス・オブジェクトを認知し、オプティミスティック・バージョン管理の値としてどの値オブジェクトのフィールドを使用するかを認識しています。例えば、従業員マップの値オブジェクトに対して次のインターフェースを使用するとします。

```
public interface Employee
{
    // Sequential sequence number used for optimistic versioning.
    public long getSequenceNumber();
    public void setSequenceNumber(long newSequenceNumber);
    // Other get/set methods for other fields of Employee object.
}
```

この場合、ローダーは、getSequenceNumber メソッドを使用して、Employee 値オブジェクトの現行バージョン情報を取得できることを認識しています。ローダーは、戻り値を増分して、新規 Employee 値で永続ストレージを更新する前に、新規バージョン番号を生成します。 Java Database Connectivity (JDBC) ローダーの場合、過

剰 SQL UPDATE ステートメントの WHERE 文節内の現行シーケンス番号が使用され、新規生成シーケンス番号を使用して、シーケンス番号列が新規シーケンス番号の値に設定されます。

このほかにも、オプティミスティック・バージョン管理に使用できる非表示の列を自動的に更新するなんらかのバックエンド提供の関数をローダーが利用する可能性があります。場合によっては、ストアード・プロシージャーまたはトリガーを使用して、バージョン情報が入っている列を保守できるようにすることもあります。ローダーが、オプティミスティック・バージョン情報を保守するためにこれらの技法のいずれかを使用している場合は、アプリケーションが OptimisticCallback 実装を提供する必要はありません。ローダーは OptimisticCallback オブジェクトからの支援なしにオプティミスティック・バージョン管理を処理できるため、デフォルトの OptimisticCallback 実装を使用することができます。

エンティティーのデフォルト実装

エンティティーは、タプル・オブジェクトを使用して、ObjectGrid に保管されます。デフォルトの OptimisticCallback 実装は、非エンティティー・マップに対する振る舞いと同様の振る舞いをします。ただし、エンティティー内のバージョン・フィールドは、エンティティー記述子 XML ファイルの @Version アノテーションまたはバージョン属性を使用して識別されます。

バージョン属性の型は、int、Integer、short、Short、long、Long、java.sql.Timestamp のいずれかになります。エンティティーには、1 つだけのバージョン属性が定義される必要があります。バージョン属性は、構成時にのみ設定される必要があります。エンティティーが永続化されると、バージョン属性の値は変更してはなりません。

バージョン属性が構成されず、オプティミスティック・ロック・ストラテジーが使用される場合、タプルの全体の状態を使用して、タプル全体が暗黙的にバージョン設定されます。

以下の例では、Employee エンティティーに SequenceNumber という long バージョン属性が設定されています。

```
@Entity
public class Employee
{
private long sequence;
    // Sequential sequence number used for optimistic versioning.
    @Version
    public long getSequenceNumber() {
        return sequence;
    }
    public void setSequenceNumber(long newSequenceNumber) {
        this.sequence = newSequenceNumber;
    }
    // Other get/set methods for other fields of Employee object.
}
```

OptimisticCallback 実装の記述

OptimisticCallback 実装は、OptimisticCallback インターフェースを実装し、共通 ObjectGrid プラグイン規則に準拠する必要があります。

次のリストには、OptimisticCallback インターフェース内の各メソッドについての説明または考慮事項があります。

NULL_OPTIMISTIC_VERSION

この特殊値は、アプリケーション提供の OptimisticCallback 実装の代わりにデフォルトの OptimisticCallback 実装が使用される場合に、getVersionedObjectForValue メソッドによって戻されます。

getVersionedObjectForValue メソッド

getVersionedObjectForValue メソッドは、値のコピーを戻します。あるいはバージョン管理のために使用できる値の属性を戻すことがあります。このメソッドは、オブジェクトがトランザクションに関連付けられるたびに呼び出されます。ローダーがパッキング・マップ内に設定されていない場合、パッキング・マップは、コミット時刻にこの値を使用してオプティミスティック・バージョン管理比較を行います。オプティミスティック・バージョン管理比較は、このトランザクションが、このトランザクションによって変更されたマップ・エントリーに最初にアクセスしてから、バージョンが変更されていないことを確認するために、パッキング・マップによって使用されます。別のトランザクションが既にこのマップ・エントリーのバージョンを変更している場合、バージョン比較は失敗し、パッキング・マップは OptimisticCollisionException 例外を表示して、トランザクションを強制的にロールバックします。ローダーがプラグインされている場合、パッキング・マップはオプティミスティック・バージョン管理情報を使用しません。代わりに、ローダーは、オプティミスティック・バージョン管理比較を行い、必要に応じてバージョン管理情報を更新する責任があります。ローダーは通常、ローダーの batchUpdate メソッドに渡される LogElement から、初期バージョン管理オブジェクトを取得します。このオブジェクトは、フラッシュ操作が発生するか、トランザクションがコミットされたときに呼び出されます。

次のコードは、EmployeeOptimisticCallbackImpl オブジェクトによって使用される実装を示しています。

```
public Object getVersionedObjectForValue(Object value)
{
    if (value == null)
    {
        return null;
    }
    else
    {
        Employee emp = (Employee) value;
        return new Long( emp.getSequenceNumber() );
    }
}
```

前の例に示すように、sequenceNumber 属性は、ローダーが予期するように、java.lang.Long オブジェクト内に戻されます。これは、ローダーの作成者と同一人物が EmployeeOptimisticCallbackImpl を作成したか、 EmployeeOptimisticCallbackImpl を実装した人物と協力して作業を行ったかのいずれかであることを示しています。例えば、これらの人物は getVersionedObjectForValue メソッドによって戻された値に合意しました。前に示したように、デフォルトの OptimisticCallback 実装は、バージョン・オブジェクトとして特殊値 NULL_OPTIMISTIC_VERSION を戻します。

updateVersionedObjectForValue メソッド

updateVersionedObjectForValue メソッドは、トランザクションが値を更新し、新バージョンのオブジェクトが必要になったときに呼び出されます。
getVersionedObjectForValue メソッドがこの値の属性を戻した場合、このメソッドは通常、属性値を新バージョンのオブジェクトに更新します。
getVersionedObjectForValue メソッドがこの値のコピーを戻した場合、このメソッドは通常、更新しません。デフォルトの OptimisticCallback は、getVersionedObjectForValue メソッドのデフォルト実装がバージョン・オブジェクトとして常に特殊値 NULL_OPTIMISTIC_VERSION を戻すため、更新は行いません。
次の例は、OptimisticCallback セクションで使用される EmployeeOptimisticCallbackImpl オブジェクトによって使用される実装を示しています。

```
public void updateVersionedObjectForValue(Object value)
{
    if ( value != null )
    {
        Employee emp = (Employee) value;
        long next = emp.getSequenceNumber() + 1;
        emp.updateSequenceNumber( next );
    }
}
```

前の例で示すように、sequenceNumber 属性は、次に getVersionedObjectForValue メソッドが呼び出されたときに、戻される java.lang.Long 値が元のシーケンス番号である長整数値を持つように、1 ずつ増分されます。例えば、1 を加えたものは、この従業員インスタンスの次のバージョン値です。この場合も、この例は、ローダーを作成者が EmployeeOptimisticCallbackImpl 実装の作成者と同一人物であるか、EmployeeOptimisticCallbackImpl 実装を実装した人物と協力して作業を行ったかのいずれかであることを示しています。

serializeVersionedValue メソッド

このメソッドは、指定されたストリームにバージョン値を書き込みます。実装によっては、バージョン値を使用して、オプティミスティック更新の衝突を識別することができます。一部の実装では、バージョン値は元の値のコピーです。それ以外の実装では、値のバージョンを示すシーケンス番号またはその他のいくつかのオブジェクトがあります。実際の実装が不明であるため、このメソッドは適切なシリアライゼーションを実行するために提供されます。デフォルト実装は writeObject メソッドを呼び出します。

inflateVersionedValue メソッド

このメソッドは、バージョン値のシリアライズ・バージョンを取り、実際のバージョン値オブジェクトを戻します。実装によっては、バージョン値を使用して、オプティミスティック更新の衝突を識別することができます。一部の実装では、バージョン値は元の値のコピーです。それ以外の実装では、値のバージョンを示すシーケンス番号またはその他のいくつかのオブジェクトがあります。実際の実装が不明であるため、このメソッドは適切なデシリアライゼーションを行うために提供されます。デフォルト実装は readObject メソッドを呼び出します。

アプリケーション提供の OptimisticCallback 実装の使用

アプリケーション提供の OptimisticCallback を BackingMap 構成に追加する場合、プログラマチック構成と XML 構成の 2 つの方法があります。

OptimisticCallback のプログラマチックなプラグイン

次の例は、grid1 ObjectGrid インターフェース内の従業員のパッキング・マップ用に、アプリケーションで OptimisticCallback オブジェクトをプログラマチックにプラグインする方法を示しています。

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManager;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGrid;
import com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap;
ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid og = ogManager.createObjectGrid( "grid1" );
BackingMap bm = dg.defineMap("employees");
EmployeeOptimisticCallbackImpl cb = new EmployeeOptimisticCallbackImpl();
bm.setOptimisticCallback( cb );
```

OptimisticCallback 実装をプラグインするための XML 構成方法

前の例の EmployeeOptimisticCallbackImpl オブジェクトは、OptimisticCallback インターフェースを実装する必要があります。次の例に示すように、アプリケーションは、XML ファイルを使用して、その OptimisticCallback オブジェクトをプラグインすることもできます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
<objectGrids>
    <objectGrid name="grid1">
        <backingMap name="employees" pluginCollectionRef="employees" lockStrategy="OPTIMISTIC" />
    </objectGrid>
</objectGrids>

<backingMapPluginCollections>
    <backingMapPluginCollection id="employees">
        <bean id="OptimisticCallback" className="com.xyz.EmployeeOptimisticCallbackImpl" />
    </backingMapPluginCollection>
</backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

プラグイン・スロットの概要: Java

プラグイン・スロットは、トランザクション・コンテキストを共有するプラグイン用に予約された、トランザクション・ストレージ・スペースです。これらのスロットは、eXtreme Scale プラグインが互いに通信し、トランザクション・コンテキストを共有し、トランザクション内でトランザクション・リソースが整合性を保って正しく使用されるようにする手段を提供します。

プラグインは、トランザクション・コンテキスト (データベース接続、Java Message Service (JMS) 接続など) をプラグイン・スロットに保管できます。保管されたトランザクション・コンテキストは、プラグイン・スロット番号 (トランザクション・コンテキストを検索するキーとして機能する) を認識しているいずれのプラグインからも検索することができます。

プラグイン・スロットの使用

プラグイン・スロットは TxID インターフェースの一部です。このインターフェースについて詳しくは、API 資料を参照してください。スロットは、ArrayList 配列のエントリーです。プラグインは、ObjectGrid.reserveSlot メソッドを呼び出し、すべて

の TxID オブジェクトでスロットが必要であることを示すことによって、ArrayList 配列のエントリーを予約できます。スロットが予約されると、プラグインはそれぞれの TxID オブジェクトのスロットにトランザクション・コンテキストを保管し、後でそれを取得することができます。 put および get 操作は、ObjectGrid.reserveSlot メソッドから返されるスロット番号によって調整されます。

プラグインには通常、ライフサイクルがあります。プラグイン・スロットの使用はプラグインのライフサイクルに適合する必要があります。通常、プラグインは初期化ステージの間にプラグイン・スロットを予約し、それぞれのスロットのスロット番号を取得する必要があります。標準的なランタイムでは、プラグインは適切なポイントで TxID オブジェクトの予約済みスロットにトランザクション・コンテキストを保管します。このポイントは、通常はトランザクションの開始時点です。当該のプラグインまたは他のプラグインが、スロット番号によってトランザクション内の TxID から保管されたトランザクション・コンテキストを取得することができます。

通常、プラグインは、トランザクション・コンテキストおよびスロットを削除することによってクリーンアップを実行します。以下のコード・スニペットは、TransactionCallback プラグインでプラグイン・スロットを使用する方法を示しています。

```
public class DatabaseTransactionCallback implements TransactionCallback {
    int connectionSlot;
    int autoCommitConnectionSlot;
    int psCacheSlot;
    Properties ivProperties = new Properties();

    public void initialize(ObjectGrid objectGrid) throws TransactionCallbackException {
        // In initialization stage, reserve desired plug-in slots by calling the
        //reserveSlot method of ObjectGrid and
        // passing in the designated slot name, TxID.SLOT_NAME.
        // Note: you have to pass in this TxID.SLOT_NAME that is designated
        // for application.
        try {
            // cache the returned slot numbers
            connectionSlot = objectGrid.reserveSlot(TxID.SLOT_NAME);
            psCacheSlot = objectGrid.reserveSlot(TxID.SLOT_NAME);
            autoCommitConnectionSlot = objectGrid.reserveSlot(TxID.SLOT_NAME);
        } catch (Exception e) {
            }
    }

    public void begin(TxID tx) throws TransactionCallbackException {
        // put transactional contexts into the reserved slots at the
        // beginning of the transaction.
        try {
            Connection conn = null;
            conn = DriverManager.getConnection(ivDriverUrl, ivProperties);
            tx.putSlot(connectionSlot, conn);
            conn = DriverManager.getConnection(ivDriverUrl, ivProperties);
            conn.setAutoCommit(true);
            tx.putSlot(autoCommitConnectionSlot, conn);
            tx.putSlot(psCacheSlot, new HashMap());
        } catch (SQLException e) {
            SQLException ex = getLastSQLException(e);
            throw new TransactionCallbackException("unable to get connection", ex);
        }
    }

    public void commit(TxID id) throws TransactionCallbackException {
        // get the stored transactional contexts and use them
        // then, clean up all transactional resources.
        try {
            Connection conn = (Connection) id.getSlot(connectionSlot);
            conn.commit();
            cleanUpSlots(id);
        } catch (SQLException e) {
            SQLException ex = getLastSQLException(e);
            throw new TransactionCallbackException("commit failure", ex);
        }
    }

    void cleanUpSlots(TxID tx) throws TransactionCallbackException {
        closePreparedStatements((Map) tx.getSlot(psCacheSlot));
        closeConnection((Connection) tx.getSlot(connectionSlot));
```

```
        closeConnection((Connection) tx.getSlot(autoCommitConnectionSlot));
    }

    /**
     * @param map
     */
    private void closePreparedStatements(Map psCache) {
        try {
            Collection statements = psCache.values();
            Iterator iter = statements.iterator();
            while (iter.hasNext()) {
                PreparedStatement stmt = (PreparedStatement) iter.next();
                stmt.close();
            }
        } catch (Throwable e) {
        }

    }

    /**
     * Close connection and swallow any Throwable that occurs.
     *
     * @param connection
     */
    private void closeConnection(Connection connection) {
        try {
            connection.close();
        } catch (Throwable e1) {
        }
    }

    public void rollback(TxID id) throws TransactionCallbackException
        // get the stored transactional contexts and use them
        // then, clean up all transactional resources.
        try {
            Connection conn = (Connection) id.getSlot(connectionSlot);
            conn.rollback();
            cleanUpSlots(id);
        } catch (SQLException e) {
        }
    }

    public boolean isExternalTransactionActive(Session session) {
        return false;
    }

    // Getter methods for the slot numbers, other plug-in can obtain the slot numbers
    // from these getter methods.

    public int getConnectionSlot() {
        return connectionSlot;
    }
    public int getAutoCommitConnectionSlot() {
        return autoCommitConnectionSlot;
    }
    public int getPreparedStatementSlot() {
        return psCacheSlot;
    }
```

以下のコード・スニペットは、直前の TransactionCallback プラグインの例で保管されたトランザクション・コンテキストを、Loader が取得する方法の例を示しています。

```
public class DatabaseLoader implements Loader
{
    DatabaseTransactionCallback tcb;
    public void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException
    {
        // The preload method is the initialization method of the Loader.
        // Obtain interested plug-in from Session or ObjectGrid instance.
        tcb =
   (DatabaseTransactionCallback)session.getObjectGrid().getTransactionCallback();
    }
    public List get(TxID txid, List keyList, boolean forUpdate) throws LoaderException
    {
        // get the stored transactional contexts that is put by tcb's begin method.
        Connection conn = (Connection)txid.getSlot(tcb.getConnectionSlot());
        // implement get here
        return null;
    }
    public void batchUpdate(TxID txid, LogSequence sequence) throws LoaderException,
   OptimisticCollisionException
    {
        // get the stored transactional contexts that is put by tcb's begin method.
        Connection conn = (Connection)txid.getSlot(tcb.getConnectionSlot());
        // implement batch update here ...
    }
}
```

外部トランザクション・マネージャー: Java

通常、eXtreme Scale トランザクションは、Session.begin メソッドで開始し、Session.commit メソッドで終了します。 しかし、ObjectGrid が組み込まれている場合、外部トランザクション・コーディネーターがトランザクションの開始と終了を行うことができます。 この場合、begin メソッドまたは commit メソッドを呼び出す必要はありません。

外部トランザクションの調整

TransactionCallback プラグインは、eXtreme Scale セッションと外部トランザクションを関連づける isExternalTransactionActive(Session session) メソッドにより拡張されます。このメソッドのヘッダーは次のとおりです。

```
public synchronized boolean isExternalTransactionActive(Session session)
```

例えば、eXtreme Scale をセットアップして WebSphere Application Server および WebSphere Extended Deployment と統合することができます。

また、eXtreme Scale には、WebSphere という名前の組み込みプラグインもあります (702 ページの『トランザクションのライフサイクル・イベントの管理のためのプラグイン』)。これは、WebSphere Application Server 環境向けにプラグインをビルドする方法を記述しますが、他のフレームワーク用にプラグインを適応させることもできます。

このシームレスな統合の鍵は、WebSphere Application Server バージョン 7.1 の ExtendedJTATransaction API の活用です。次のサンプル・コードを使用して、ObjectGrid セッションを WebSphere Application Server トランザクション ID と関連付けます。

```
/**
* This method is required to associate an objectGrid session with a WebSphere
* Application Server transaction ID.
*/
Map/**/ localIdToSession;
public synchronized boolean isExternalTransactionActive(Session session)
{
    // remember that this localid means this session is saved for later.
    localIdToSession.put(new Integer(jta.getLocalId()), session);
    return true;
}
```

外部トランザクションの検索

TransactionCallback プラグインを使用するために、外部トランザクション・サービス・オブジェクトを検索しなければならない場合があります。WebSphere Application Server サーバーでは、次の例に示すように、名前空間から ExtendedJTATransaction オブジェクトを検索します。

```
public J2EETransactionCallback() {
    super();
    localIdToSession = new HashMap();
    String lookupName="java:comp/websphere/ExtendedJTATransaction";
    try
    {
        InitialContext ic = new InitialContext();
        jta = (ExtendedJTATransaction)ic.lookup(lookupName);
        jta.registerSynchronizationCallback(this);
```

```
    }
    catch(NotSupportedException e)
    {
        throw new RuntimeException("Cannot register jta callback", e);
    }
    catch(NamingException e){
        throw new RuntimeException("Cannot get transaction object");
    }
}
```

他の製品の場合は、トランザクション・サービス・オブジェクトを検索するために同じような方法を使用することができます。

外部コールバックによりコミットを制御する

TransactionCallback プラグインは、eXtreme Scale セッションをコミットまたはロールバックするために、外部信号を受信する必要があります。この外部信号を受信するには、外部トランザクション・サービスからのコールバックを使用します。外部コールバック・インターフェースを実装し、それを外部トランザクション・サービスで登録する必要があります。例えば、WebSphere Application Server の場合、次の例に示すように、SynchronizationCallback インターフェースを実装します。

```
public class J2EETransactionCallback implements
 com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.TransactionCallback, SynchronizationCallback {
   public J2EETransactionCallback() {
      super();
      String lookupName="java:comp/websphere/ExtendedJTATransaction";
      localIdToSession = new HashMap();
      try {
         InitialContext ic = new InitialContext();
         jta = (ExtendedJTATransaction)ic.lookup(lookupName);
         jta.registerSynchronizationCallback(this);
      } catch(NotSupportedException e) {
         throw new RuntimeException("Cannot register jta callback", e);
      }
      catch(NamingException e) {
         throw new RuntimeException("Cannot get transaction object");
      }
   }

   public synchronized void afterCompletion(int localId, byte[] arg1,boolean didCommit) {
      Integer lid = new Integer(localId);
      // find the Session for the localId
      Session session = (Session)localIdToSession.get(lid);
      if(session != null) {
          try {
            // if WebSphere Application Server is committed when
            // hardening the transaction to backingMap.
            // We already did a flush in beforeCompletion
            if(didCommit) {
               session.commit();
            } else {
               // otherwise rollback
               session.rollback();
            }
         } catch(NoActiveTransactionException e) {
            // impossible in theory
         } catch(TransactionException e) {
            // given that we already did a flush, this should not fail
         } finally {
            // always clear the session from the mapping map.
            localIdToSession.remove(lid);
         }
      }
   }

   public synchronized void beforeCompletion(int localId, byte[] arg1) {
      Session session = (Session)localIdToSession.get(new Integer(localId));
      if(session != null) {
         try {
            session.flush();
         } catch(TransactionException e) {
            // WebSphere Application Server  does not formally define
            // a way to signal the
            // transaction has failed so do this
            throw new RuntimeException("Cache flush failed", e);
```

```
        }
    }
  }
}
```

TransactionCallback プラグインでの eXtreme Scale API の使用

TransactionCallback プラグインは、eXtreme Scale 内での自動コミットを使用不可にします。eXtreme Scale の通常の使用パターンは以下のとおりです。

```
Session ogSession = ...;
ObjectMap myMap = ogSession.getMap("MyMap");
ogSession.begin();
MyObject v = myMap.get("key");
v.setAttribute("newValue");
myMap.update("key", v);
ogSession.commit();
```

この TransactionCallback プラグインが使用されている場合、 eXtreme Scale は、コンテナー管理対象トランザクションが存在するときにアプリケーションが eXtreme Scale を使用すると想定します。前出のコードの断片は、この環境で次のコードに変わります。

```
public void myMethod() {
   UserTransaction tx = ...;
   tx.begin();
   Session ogSession = ...;
   ObjectMap myMap = ogSession.getMap("MyMap");
   yObject v = myMap.get("key");
   v.setAttribute("newValue");
   myMap.update("key", v);
   tx.commit();
}
```

myMethod メソッドは、Web アプリケーションのシナリオに類似しています。アプリケーションは通常の UserTransaction インターフェースを使用してトランザクションを開始、コミット、およびロールバックします。 eXtreme Scale はコンテナー・トランザクションなどを自動的に開始およびコミットします。メソッドが TX_REQUIRES 属性を使用する Enterprise JavaBeans (EJB) メソッドの場合は、UserTransaction 参照および UserTransaction 呼び出しを除去してトランザクションを開始、コミットすると、メソッドが同じように動作します。この場合、コンテナーがトランザクションの開始と終了を行います。

WebSphereTransactionCallback プラグイン: Java

WebSphereTransactionCallback プラグインを使用すると、WebSphere Application Server 環境で実行しているエンタープライズ・アプリケーションは ObjectGrid トランザクションを管理できます。このプラグインは推奨されません。代わりに、WebSphere eXtreme Scale リソース・アダプターを使用してください。

WebSphereTransactionCallback インターフェースは、Java Transaction API (JTA) トランザクション管理を可能にする WebSphere eXtreme Scale リソース・アダプターで置き換えられました。このリソース・アダプターは、WebSphere Application Server または他の Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーにインストールすることができます。 WebSphereTransactionCallback プラ

グインは登録済みの JTA API ではありません。したがって、このプラグインは、コミットが失敗したときに JTA トランザクションをロールバックするようには設計されていません。

コンテナー管理トランザクションを使用するよう構成されているメソッド内で ObjectGrid セッションを使用している場合、エンタープライズ・コンテナーが ObjectGrid トランザクションを自動的に、開始、コミットまたはロールバックします。 Java Transaction API (JTA) UserTransaction オブジェクトを使用していると、ObjectGrid トランザクションは UserTransaction オブジェクトによって自動的に管理されます。

このプラグインの実装について詳しくは、 710 ページの『外部トランザクション・マネージャー』を参照してください。

注: ObjectGrid では、2 フェーズの XA トランザクションはサポートしていません。このプラグインは、ObjectGrid トランザクションをトランザクション・マネージャーに登録しません。したがって、ObjectGrid がコミットに失敗した場合、XA トランザクションによって管理される他のリソースはロールバックしません。

WebSphereTransactionCallback オブジェクトのプログラマチックなプラグイン

プログラマチック構成または XML 構成によって ObjectGrid 構成への WebSphereTransactionCallback を使用可能にすることができます。以下のコード・スニペットは、アプリケーションを使用して WebSphereTransactionCallback オブジェクトを作成し、それを ObjectGrid に追加します。

```
ObjectGridManager objectGridManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
ObjectGrid myGrid = objectGridManager.createObjectGrid("myGrid", false);
WebSphereTransactionCallback wsTxCallback= new WebSphereTransactionCallback ();
myGrid.setTransactionCallback(wsTxCallback);
```

WebSphereTransactionCallback オブジェクトをプラグインするための XML 構成方法

以下の XML 構成は、WebSphereTransactionCallback オブジェクトを作成して、ObjectGrid に追加するものです。以下のテキストは、`myGrid.xml` ファイルに存在しなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
    xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="myGrid">
            <bean id="TransactionCallback" className=
 "com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.WebSphereTransactionCallback" />

        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

OSGi フレームワークを使用するためのプログラミング

Java

OSGi コンテナー内で eXtreme Scale サーバーとクライアントを開始できます。これにより、eXtreme Scale プラグインをランタイム環境に動的に追加し、更新できるようになります。

関連概念:

Java 614 ページの『シリアライザーのプログラミングの概要』
DataSerializer プラグインを使用して、Java オブジェクトおよびその他のデータをバイナリー形成でグリッドに保管する最適化されたシリアライザーを作成できます。プラグインは、データ・オブジェクト全体のインフレートを必要とせずに、バイナリー・データ内の属性を照会するために使用できるメソッドも提供します。

Java シリアライゼーションの概要
データは、データ・グリッドで Java オブジェクトとして常に表されていますが、必ずしも保管されているとは限りません。WebSphere eXtreme Scale は、クライアント・プロセスとサーバー・プロセスの間でのデータ移動のために、複数の Java プロセスを使用して、Java オブジェクト・インスタンスをバイトに変換し、必要に応じて再度オブジェクトに戻すことによって、データをシリアライズします。

Java サンプル

関連情報:

Java DataSerializer API 資料

eXtreme Scale 動的プラグインのビルド

Java

WebSphere eXtreme Scale には、ObjectGrid および BackingMap プラグインが含まれます。 これらのプラグインは Java で実装され、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを使用して構成されます。動的にアップグレードできる動的プラグインを作成する場合、動的プラグインは更新時に何らかのアクションを完了する必要がある可能性があるため、ObjectGrid および BackingMap ライフサイクル・イベントを認識する必要があります。ライフサイクルのコールバック・メソッド、イベント・リスナー、あるいはその両方でプラグイン・バンドルを拡張すると、プラグインが適切なタイミングでそれらのアクションを完了できるようになります。

始める前に

このトピックは、適切なプラグインのビルドが完了していることを前提とします。eXtreme Scale プラグインの作成法の詳細については、システム API とプラグインのトピックを参照してください。

このタスクについて

すべての eXtreme Scale プラグインは、BackingMap または ObjectGrid インスタンスに適用されます。多くのプラグインは他のプラグインと対話もします。例えば、Loader および TransactionCallback プラグインは連携して、データベース・トランザクションやさまざまなデータベース JDBC 呼び出しと適切に対話します。プラグインの中には、パフォーマンスを改善するために、他のプラグインの構成データをキャッシュに入れる必要があるものもあります。

BackingMapLifecycleListener および ObjectGridLifecycleListener プラグインは、個別の BackingMap および ObjectGrid インスタンスのライフサイクル操作が可能です。このプロセスにより、プラグインは親の BackingMap または ObjectGrid とそれぞれのプラグインに変更があると、通知を受けることができます。 BackingMap プラグ

インは BackingMapLifecyleListener インターフェースを実装し、ObjectGrid プラグインは ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装します。親の BackingMap または ObjectGrid のライフサイクルに変化があると、これらのプラグインが自動的に呼び出されます。ライフサイクル・プラグインの詳細については、601 ページの『プラグイン・ライフサイクルの管理』のトピックを参照してください。

ライフサイクル・メソッドまたはイベント・リスナーを使用したバンドルの拡張は、次の共通タスクの中で必要になる可能性があります。

- リソース (スレッド、メッセージング・サブスクライバーなど) の開始と停止
- ピア・プラグインが更新された際の通知指定、プラグインへの直接アクセスの許可、変更の検出

別のプラグインに直接アクセスするときは、必ず OSGi コンテナー経由でそのプラグインにアクセスして、システムのすべてのパーツが正しいプラグインを参照できるようにしてください。例えば、アプリケーション内のあるコンポーネントがプラグインのインスタンスを直接参照するかキャッシュに入れると、そのプラグインが動的に更新された後も、コンポーネントはそのバージョンのプラグインへの参照を維持します。この振る舞いは、メモリー・リークのほかにアプリケーション関連の問題の原因にもなります。したがって、コードを作成するときは、OSGi の getService() セマンティクスを使用して参照を獲得する動的プラグインを使用してください。アプリケーションが 1 つ以上のプラグインをキャッシュに入れる必要がある場合は、ObjectGridLifecycleListener および BackingMapLifecycleListener インターフェースを使用してライフサイクル・イベントを listen します。また、アプリケーションは、スレッド・セーフな方法で、必要なときにキャッシュをリフレッシュできなければなりません。

OSGi で使用するすべての eXtreme Scale プラグインは、BackingMapPlugin または ObjectGridPlugin インターフェースもそれぞれ実装する必要があります。MapSerializerPlugin インターフェースなどの新しいプラグインでは、この実装が実施されます。これらのインターフェースは、状態をプラグインに注入したり、プラグインのライフサイクルを制御したりするための一貫性のあるインターフェースを eXtreme Scale ランタイム環境と OSGi に提供します。

このタスクを使用して、ピア・プラグインが更新されたときに通知するよう指定します。リスナー・インスタンスを生成するリスナー・ファクトリーを作成してもかまいません。

手順

- ObjectGrid プラグイン・クラスを更新して、ObjectGridPlugin インターフェースを実装します。 このインターフェースは、eXtreme Scale がプラグインを初期化したり、ObjectGrid インスタンスを設定したり、プラグインを破棄したりできるようにするメソッドを組み込みます。次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridPlugin;
...

public class MyTranCallback implements TransactionCallback, ObjectGridPlugin {

    private ObjectGrid og = null;

    private enum State {
        NEW, INITIALIZED, DESTROYED
    }

    private State state = State.NEW;
```

```
    public void setObjectGrid(ObjectGrid grid) {
        this.og = grid;
    }

    public ObjectGrid getObjectGrid() {
        return this.og;
    }
    void initialize() {
        // Handle any plug-in initialization here.  This is called by
        // eXtreme Scale, and not the OSGi bean manager.
        state = State.INITIALIZED;
    }
    boolean isInitialized() {
        return state == State.INITIALIZED;
    }

    public void destroy() {
        // Destroy the plug-in and release any resources.  This
        // can be callsed by the OSGi Bean Manager or by eXtreme Scale.
        state = State.DESTROYED;
    }

    public boolean isDestroyed() {
        return state == State.DESTROYED;
    }
}
```

- ObjectGrid プラグイン・クラスを更新して、ObjectGridLifecycleListener インターフェースを実装します。次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridLifecycleListener;
      import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.ObjectGridLifecycleListener.LifecycleEvent;
      ...

      public class MyTranCallback implements TransactionCallback, ObjectGridPlugin, ObjectGridLifecycleListener{
          public void objectGridStateChanged(LifecycleEvent event) {
              switch(event.getState()) {
              case NEW:
              case DESTROYED:
              case DESTROYING:
              case INITIALIZING:
                  break;
              case INITIALIZED:
                  // Lookup a Loader or MapSerializerPlugin using
                  // OSGi or directly from the ObjectGrid instance.
                  lookupOtherPlugins()
                  break;
              case STARTING:
              case PRELOAD:
                  break;
              case ONLINE:
                  if (event.isWritable()) {
                      startupProcessingForPrimary();
                  } else {
                      startupProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case QUIESCE:
                  if (event.isWritable()) {
                      quiesceProcessingForPrimary();
                  } else {
                      quiesceProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case OFFLINE:
                  shutdownShardComponents();
                  break;
              }
          }
          ...
      }
```

- BackingMap プラグインを更新します。 BackingMap プラグイン・クラスを更新して、BackingMap インターフェースを実装します。このインターフェースは、eXtreme Scale がプラグインを初期化したり、BackingMap インスタンスを設定したり、プラグインを破棄したりできるようにするメソッドを組み込みます。次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;
import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.BackingMapPlugin;
...

public class MyLoader implements Loader, BackingMapPlugin {

    private BackingMap bmap = null;

    private enum State {
```

```
        NEW, INITIALIZED, DESTROYED
    }

    private State state = State.NEW;

    public void setBackingMap(BackingMap map) {
        this.bmap = map;
    }

    public BackingMap getBackingMap() {
        return this.bmap;
    }
    void initialize() {
        // Handle any plug-in initialization here.  This is called by
        // eXtreme Scale, and not the OSGi bean manager.
        state = State.INITIALIZED;
    }
    boolean isInitialized() {
        return state == State.INITIALIZED;
    }

    public void destroy() {
        // Destroy the plug-in and release any resources.  This
        // can be callsed by the OSGi Bean Manager or by eXtreme Scale.
        state = State.DESTROYED;
    }

    public boolean isDestroyed() {
        return state == State.DESTROYED;
    }
}
```

- BackingMap プラグイン・クラスを更新して、BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装します。 次のサンプル・コードを参照してください。

```
package com.mycompany;

      import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.BackingMapLifecycleListener;
      import com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.BackingMapLifecycleListener.LifecycleEvent;
      ...

      public class MyLoader implements Loader, ObjectGridPlugin, ObjectGridLifecycleListener{
          ...
          public void backingMapStateChanged(LifecycleEvent event) {
              switch(event.getState()) {
              case NEW:
              case DESTROYED:
              case DESTROYING:
              case INITIALIZING:
                  break;
              case INITIALIZED:
                  // Lookup a MapSerializerPlugin using
                  // OSGi or directly from the ObjectGrid instance.
                  lookupOtherPlugins()
                  break;
              case STARTING:
              case PRELOAD:
                  break;
              case ONLINE:
                  if (event.isWritable()) {
                      startupProcessingForPrimary();
                  } else {
                      startupProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case QUIESCE:
                  if (event.isWritable()) {
                      quiesceProcessingForPrimary();
                  } else {
                      quiesceProcessingForReplica();
                  }
                  break;
              case OFFLINE:
                  shutdownShardComponents();
                  break;
              }
          }
          ...
      }
```

タスクの結果

ObjectGridPlugin または BackingMapPlugin インターフェースを実装することで、eXtreme Scale はプラグインのライフサイクルを正しいタイミングで制御できます。

ObjectGridLifecycleListener または BackingMapLifecycleListener インターフェースを実装すると、プラグインは、関連付けられた ObjectGrid または BackingMap ライフ

サイクル・イベントのリスナーとして自動的に登録されます。すべての ObjectGrid および BackingMap プラグインの初期化が完了し、検索および使用が可能になったことをシグナル通知するときは INITIALIZING イベントが使用されます。ObjectGrid がオンラインになり、イベントの処理を開始する準備ができたことをシグナル通知するときは ONLINE イベントが使用されます。

JPA 統合のためのプログラミング

Java

Java Persistence API (JPA) は、 Java オブジェクトをリレーショナル・データベースにマップするための仕様です。JPA には、Java 言語メタデータ・アノテーション、XML 記述子、またはその両方を使用して、Java オブジェクトとリレーショナル・データベースとの間のマッピングを定義するための、完全なオブジェクト・リレーショナル・マッピング (ORM) 仕様が含まれています。オープン・ソースおよび商用の実装がいくつか使用できます。

JPA を使用するには、サポートされる JPA プロバイダー (OpenJPA や Hibernate など)、JAR ファイル、および `META-INF/persistence.xml` ファイルがクラスパスになければなりません。

関連タスク:

958 ページの『ローダーのトラブルシューティング』
データベース・ローダーの問題をトラブルシューティングする場合、この情報を使用してください。

JPA ローダーの構成
Java Persistence API (JPA) ローダーは、JPA を使用してデータベースと対話するプラグイン実装です。

JPA ローダー

Java

Java Persistence API (JPA) は、 Java オブジェクトをリレーショナル・データベースにマップするための仕様です。JPA には、Java 言語メタデータ・アノテーション、XML 記述子、またはその両方を使用して、Java オブジェクトとリレーショナル・データベースとの間のマッピングを定義するための、完全なオブジェクト・リレーショナル・マッピング (ORM) 仕様が含まれています。オープン・ソースおよび商用の実装がいくつか使用できます。

eXtreme Scale と一緒に Java Persistence API (JPA) Loader プラグイン実装を使用すると、選択されたローダーがサポートする任意のデータベースと対話することができます。JPA を使用するには、サポートされる JPA プロバイダー (OpenJPA や Hibernate など)、JAR ファイル、および `META-INF/persistence.xml` ファイルがクラスパスになければなりません。

JPALoader の com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPALoader および JPAEntityLoader com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPAEntityLoader プラグインは、ObjectGrid マップとデータベースを同期するために使用される 2 つの組み込み JPA Loader プラグイン

です。この機能を使用するには、Hibernate または OpenJPA などの JPA 実装がなくてはなりません。データベースは、選択された JPA プロバイダーがサポートする任意のバックエンドを使用できます。

ObjectMap API を使用してデータを保管する場合、JPALoader プラグインを使用することができます。EntityManager API を使用してデータを保管する場合、JPAEntityLoader プラグインを使用します。

JPA ローダー・アーキテクチャー

JPA ローダー は、Plain Old Java Object (POJO) を保管する eXtreme Scale マップに使用されます。

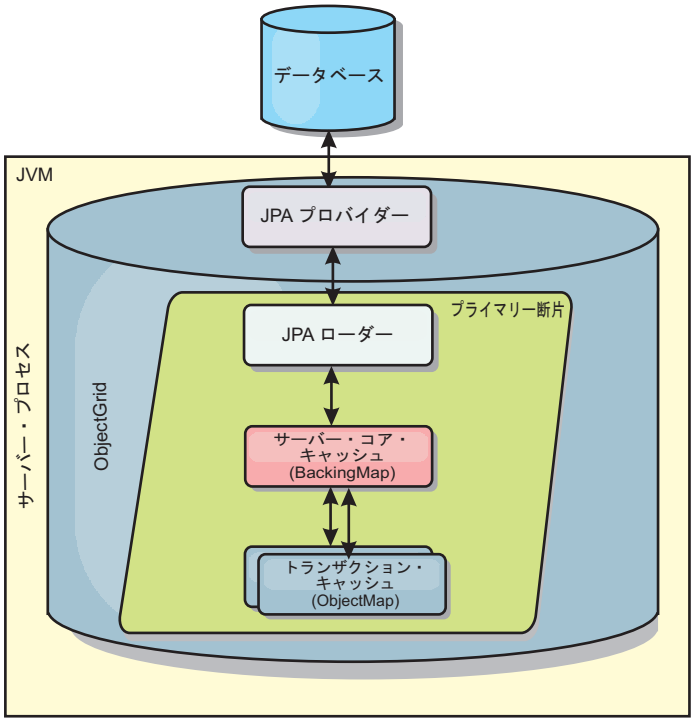


図 42. JPA ローダー・アーキテクチャー

ObjectMap.get(Object key) メソッドが呼び出されると、eXtreme Scale ランタイムが、まず ObjectMap 層にエントリーがあるかどうかをチェックします。ない場合、ランタイムは、要求を JPA Loader に委任します。キーのロード要求時に、JPALoader は JPA EntityManager.find(Object key) メソッドを呼び出して、JPA 層からのデータを検索します。データが JPA エンティティー・マネージャーに含まれている場合、そのデータが返されます。含まれていない場合は、JPA プロバイダーがデータベースと対話して値を取得します。

例えば、ObjectMap.update(Object key, Object value) メソッドを使用して ObjectMap に対する更新が行われると、eXtreme Scale ランタイムは、この更新に対する LogElement を作成し、これを JPALoader に送ります。JPALoader は、JPA EntityManager.merge(Object value) メソッドを呼び出して、データベースに対する値を更新します。

JPAEntityLoader の場合も、同じ 4 つの層が含まれます。ただし、JPAEntityLoader プラグインは、eXtreme Scale エンティティーを保管するマップに使用されるため、エンティティー間の関係が使用シナリオを複雑にする可能性があります。eXtreme Scale エンティティーは、JPA エンティティーとは区別されます。詳しくは、689 ページの『JPAEntityLoader プラグイン』を参照してください。詳しくは、689 ページの『JPAEntityLoader プラグイン』を参照してください。詳しくは、*プログラミング・ガイドの* JPAEntityLoader プラグインに関する説明を参照してください。

方式

ローダーでは、3 つの主要なメソッドを提供しています。

1. get: JPA を使用してデータを取得することにより、渡されたキーのリストに対応する値のリストを返します。このメソッドは、JPA を使用して、データベース内のエンティティーを検出します。JPALoader プラグインの場合、返されるリストには、find 操作から直接得られた JPA エンティティーのリストが含まれます。JPAEntityLoader プラグインの場合、返されるリストには、JPA エンティティーから変換された eXtreme Scale エンティティー値タプルが含まれます。
2. batchUpdate: ObjectGrid マップのデータをデータベースに書き込みます。異なる操作タイプ (挿入、更新、削除) に応じて、ローダーは、JPA パーシスト、マージ、および除去操作を使用してデータベースに対するデータを更新します。JPALoader の場合、マップ内のオブジェクトが JPA エンティティーとして直接使用されます。JPAEntityLoader の場合、マップ内のエンティティー・タプルが、JPA エンティティーとして使用されるオブジェクトに変換されます。
3. preloadMap: ClientLoader.load クライアント・ローダー・メソッドを使用してマップをプリロードします。区画化マップの場合、preloadMap メソッドは 1 つの区画でのみ呼び出されます。区画は、JPALoader または JPAEntityLoader クラスの preloadPartition プロパティーに指定します。 preloadPartition 値がゼロより小さく設定されているか、*total_number_of_partitions* - 1) より大きく設定されている場合、プリロードは使用不可になります。

JPALoader と JPAEntityLoader のいずれのプラグインも、JPATxCallback クラスで動作し、eXtreme Scale トランザクションと JPA トランザクションを調整します。これら 2 つのローダーを使用するには、JPATxCallback を ObjectGrid インスタンス内に構成する必要があります。

構成およびプログラミング

JPA ローダーをマルチマスター環境で使用する場合は、318 ページの『マルチマスター・トポロジーでのローダーについての考慮事項』を参照してください。JPA ローダーの構成について詳しくは、JPA ローダーの構成を参照してください。JPA ローダーのプログラミングについて詳しくは、686 ページの『JPA ローダーのプログラミング考慮事項』を参照してください。

クライアント・ベースの JPA ローダーの開発

Java

Java Persistence API (JPA) ユーティリティーを使用して、データのプリロードおよび再ロードをアプリケーションに実装できます。この機能は、データベース照会の区画化が行えない場合にマップにデータをロードする作業を簡素化します。

始める前に

- JPA プロバイダーとサポートされるデータベースを使用する必要があります。
- マップをプリロードまたは再ロードする前に、ObjectGrid の可用性状態を PRELOAD に設定する必要があります。可用性状態は StateManager インターフェースの setObjectGridState メソッドで設定できます。StateManager インターフェースは、ObjectGrid がまだオンラインでない場合に、他のクライアントがこれにアクセスしないようにします。マップのプリロードまたは再ロードが終了したら、状態をオンラインに戻すことができます。
- 異なるマップを 1 つの ObjectGrid にプリロードする場合、ObjectGrid 状態を一度 PRELOAD に設定し、すべてのマップがデータ・ロードを終了した後に値を ONLINE に戻します。この調整は、ClientLoadCallback インターフェースで行うことができます。 ObjectGrid インスタンスからの最初の preStart 通知後に ObjectGrid 状態を PRELOAD に設定し、最後の postFinish 通知後にこれを ONLINE に戻します。
- 異なる Java 仮想マシンからマップをプリロードする必要がある場合、複数の Java 仮想マシンの間で調整しなければなりません。Java 仮想マシンのいずれかに最初のマップがプリロードされる前に、ObjectGrid 状態を一度 PRELOAD に設定し、すべての Java 仮想マシンにおいてすべてのマップがデータ・ロードを終了した後に値を ONLINE に戻します。詳しくは、ObjectGrid の可用性の管理を参照してください。

このタスクについて

マップのプリロードまたは再ロード操作を実行すると、次のアクションが発生します。

1. 最初に実行されるアクションは、プリロード操作を実行する場合と再ロード操作を実行する場合とで異なります。
   - **プリロード操作:** プリロード対象のマップがクリアされます。エンティティー・マップの場合、cascade-remove と構成されている関係がある場合、関連マップもクリアされます。
   - **再ロード操作:** 指定された照会がマップで実行され、結果は無効化されます。エンティティー・マップの場合、**CascadeType.INVALIDATE** オプションで構成された関係がある場合、関連エンティティーもマップから無効化されます。
2. JPA に対する照会をバッチ内のエンティティーについて実行します。
3. バッチごとに、各区画のキー・リストおよび値リストが作成されます。
4. 各区画に対して、データ・グリッド・エージェントが呼び出され、それが eXtreme Scale クライアントの場合、サーバー・サイドのデータが直接挿入または更新されます。データ・グリッドがローカル・インスタンスだった場合は、マップのデータが直接挿入または更新されます。

関連概念:

Java 『クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの概要』
クライアント・ベース Java Persistence API (JPA) プリロード・ユーティリティーは、ObjectGrid に対するクライアント接続を使用して、データを eXtreme Scale パッキング・マップにロードします。

関連資料:

Java 724 ページの『例: ClientLoader インターフェースを使用した、マップのプリロード』
クライアントがマップへのアクセスを開始する前に、マップをプリロードしてマップ・データを取り込むことができます。

Java 725 ページの『例: ClientLoader インターフェースを使用した、マップの再ロード』
マップの再ロードは、**isPreload** 引数が ClientLoader.load メソッドで false に設定されることを除き、マップのプリロードと同じです。

Java 726 ページの『例: クライアント・ローダーの呼び出し』
Loader インターフェースでプリロード・メソッドを使用して、クライアント・ローダーを呼び出すことができます。

関連情報:

Java インターフェース ClientLoader

Java インターフェース StateManager

クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの概要: Java

クライアント・ベース Java Persistence API (JPA) プリロード・ユーティリティーは、ObjectGrid に対するクライアント接続を使用して、データを eXtreme Scale パッキング・マップにロードします。

この機能は、データベース照会の区画化が行えない場合にマップにデータをロードする作業を簡素化します。JPA ローダーなどのローダーを使用することもでき、これはデータを並行してロードできる場合は理想的です。

クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーは、OpenJPA または Hibernate JPA 実装のいずれかを使用して、データベースから ObjectGrid にデータをロードすることができます。WebSphere eXtreme Scale はデータベースまたは Java Database Connectivity (JDBC) と直接対話するわけではないため、OpenJPA または Hibernate がサポートする任意のデータベースを使用して ObjectGrid にデータをロードできます。

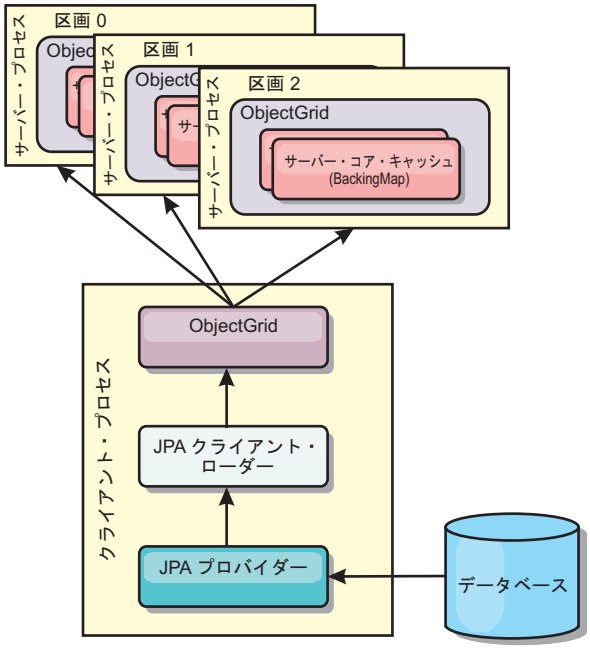


図 43. ObjectGrid へのロードに JPA 実装を使用するクライアント・ローダー

通常、ユーザー・アプリケーションが、パーシスタンス・ユニット名、エンティティー・クラス名、およびクライアント・ローダーに対する JPA 照会を提供します。クライアント・ローダーは、パーシスタンス・ユニット名に基づいて JPA エンティティー・マネージャーを取得し、このエンティティー・マネージャーを使用して、提供されたエンティティー・クラスと JPA 照会によりデータベースからデータを照会し、最終的にデータを分散 ObjectGrid マップにロードします。この照会にマルチレベルの関係が関与する場合、パフォーマンスを最適化するためにカスタム照会ストリングを使用できます。オプションで、パーシスタンス・プロパティー・マップを提供し、構成されたパーシスタンス・プロパティーをオーバーライドすることができます。

クライアント・ローダーは、以下の表に示すように 2 つの異なるモードでデータをロードできます。

表 23. クライアント・ローダーのモード

モード	説明
プリロード	すべてのエントリーをクリアし、パッキング・マップにロードします。マップがエンティティー・マップの場合、ObjectGrid CascadeType.REMOVE オプションが有効になっている場合、関連するエンティティー・マップもすべてクリアされます。
再ロード	JPA 照会が ObjectGrid に対して実行され、照会に一致するマップ内のエンティティーをすべて無効化します。マップがエンティティー・マップの場合、ObjectGrid CascadeType.INVALIDATE オプションが有効になっている場合、関連するエンティティー・マップもすべてクリアされます。

いずれの場合も、JPA 照会を使用して、必要なエンティティーをデータベースから選択およびロードして、それらを ObjectGrid マップに保管します。ObjectGrid マップがエンティティー・マップでない場合は、JPA エンティティーは切り離され、直接保管されます。ObjectGrid マップがエンティティー・マップである場合は、JPA エンティティーは、ObjectGrid エンティティー・タプルとして保管されます。JPA 照会を指定するか、デフォルトの照会 `select o from EntityName o` を使用することができます。

クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの構成について詳しくは、720 ページの『クライアント・ベースの JPA ローダーの開発』を参照してください。

関連タスク:

Java 720 ページの『クライアント・ベースの JPA ローダーの開発』
Java Persistence API (JPA) ユーティリティーを使用して、データのプリロードおよび再ロードをアプリケーションに実装できます。この機能は、データベース照会の区画化が行えない場合にマップにデータをロードする作業を簡素化します。

関連資料:

Java 『例: ClientLoader インターフェースを使用した、マップのプリロード』
クライアントがマップへのアクセスを開始する前に、マップをプリロードしてマップ・データを取り込むことができます。

Java 725 ページの『例: ClientLoader インターフェースを使用した、マップの再ロード』
マップの再ロードは、**isPreload** 引数が ClientLoader.load メソッドで false に設定されることを除き、マップのプリロードと同じです。

Java 726 ページの『例: クライアント・ローダーの呼び出し』
Loader インターフェースでプリロード・メソッドを使用して、クライアント・ローダーを呼び出すことができます。

関連情報:

Java インターフェース ClientLoader

Java インターフェース StateManager

例: ClientLoader インターフェースを使用した、マップのプリロード: Java

クライアントがマップへのアクセスを開始する前に、マップをプリロードしてマップ・データを取り込むことができます。

Client ベースのプリロードの例

次のサンプル・コード・スニペットは、単純なクライアントのロードを示しています。この例では、CUSTOMER マップがエンティティー・マップとして構成されています。ObjectGrid エンティティー・メタデータ記述子 XML ファイルに構成されている Customer エンティティー・クラスには、Order エンティティーと 1 対多の関係があります。Customer エンティティーは、Order エンティティーとの関係で、

CascadeType.ALL オプションが有効になっています。ClientLoader.load が呼び出される前に、ObjectGrid 状態が PRELOAD に設定されます。ロード・メソッドの **isPreload** パラメーターは、true に設定されます。

```
// Get the StateManager
StateManager stateMgr = StateManagerFactory.getStateManager();

// Set ObjectGrid state to PRELOAD before calling ClientLoader.loader
stateMgr.setObjectGridState(AvailabilityState.PRELOAD, objectGrid);

ClientLoader c = ClientLoaderFactory.getClientLoader();

// Load the data
c.load(objectGrid, "CUSTOMER", "customerPU", null,
    null, null, null, true, null);

// Set ObjectGrid state back to ONLINE
stateMgr.setObjectGridState(AvailabilityState.ONLINE, objectGrid);
```

関連概念:

Java 722 ページの『クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの概要』
クライアント・ベース Java Persistence API (JPA) プリロード・ユーティリティーは、ObjectGrid に対するクライアント接続を使用して、データを eXtreme Scale パッキング・マップにロードします。

関連タスク:

Java 720 ページの『クライアント・ベースの JPA ローダーの開発』
Java Persistence API (JPA) ユーティリティーを使用して、データのプリロードおよび再ロードをアプリケーションに実装できます。この機能は、データベース照会の区画化が行えない場合にマップにデータをロードする作業を簡素化します。

関連情報:

Java インターフェース ClientLoader

Java インターフェース StateManager

例: ClientLoader インターフェースを使用した、マップの再ロード: Java

マップの再ロードは、**isPreload** 引数が ClientLoader.load メソッドで false に設定されることを除き、マップのプリロードと同じです。

クライアント・ベースの再ロードの例

次のサンプルは、マップの再ロードの方法を示しています。プリロード・サンプルと比較した場合の主な違いは、loadSql とパラメーターを指定している点です。このサンプルでは、ID が 1000 と 2000 の間の Customer データのみを再ロードします。ロード・メソッドの **isPreload** パラメーターは、false に設定されます。

```
// Get the StateManager
StateManager stateMgr = StateManagerFactory.getStateManager();

// Set ObjectGrid state to PRELOAD before calling ClientLoader.loader
stateMgr.setObjectGridState(AvailabilityState.PRELOAD, objectGrid);

ClientLoader c = ClientLoaderFactory.getClientLoader();

// Load the data
```

```
String loadSql = "select c from CUSTOMER c
    where c.custId >= :startCustId and c.custId < :endCustId ";
Map<String, Long> params = new HashMap<String, Long>();
params.put("startCustId", 1000L);
params.put("endCustId", 2000L);

c.load(objectGrid, "CUSTOMER", "customerPU", null, null,
    loadSql, params, false, null);

// Set ObjectGrid state back to ONLINE
stateMgr.setObjectGridState(AvailabilityState.ONLINE, objectGrid);
```

要確認: この照会ストリングは、JPA 照会構文と eXtreme Scale エンティティー照会構文の両方に準拠しています。この照会ストリングは、一致する ObjectGrid エンティティーの無効化と、一致する JPA エンティティーのロードのために、2 回実行されるため、重要です。

関連概念:

Java 722 ページの『クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの概要』
クライアント・ベース Java Persistence API (JPA) プリロード・ユーティリティーは、ObjectGrid に対するクライアント接続を使用して、データを eXtreme Scale パッキング・マップにロードします。

関連タスク:

Java 720 ページの『クライアント・ベースの JPA ローダーの開発』
Java Persistence API (JPA) ユーティリティーを使用して、データのプリロードおよび再ロードをアプリケーションに実装できます。この機能は、データベース照会の区画化が行えない場合にマップにデータをロードする作業を簡素化します。

関連情報:

Java インターフェース ClientLoader

Java インターフェース StateManager

例: クライアント・ローダーの呼び出し: Java

Loader インターフェースでプリロード・メソッドを使用して、クライアント・ローダーを呼び出すことができます。

Loader インターフェースでプリロード・メソッドを使用して、クライアント・ローダーを呼び出します。

```
void preloadMap(Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException;
```

このメソッドは、ローダーにデータをマップにプリロードするように通知します。ローダー実装では、クライアント・ローダーを使用して、データをそのすべての区画にプリロードすることができます。例えば、JPA ローダーでは、クライアント・ローダーを使用して、データをマップにプリロードします。詳しくは、 722 ページの『クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの概要』を参照してください。

例: preloadMap メソッドを使用した、クライアント・ローダーの呼び出し

preloadMappreloadMap メソッドでクライアント・ローダーを使用してマップをプリロードする方法の例は以下のとおりです。この例では、まず、現在の区画番号がプリロード区画と同じかどうかをチェックします。区画番号がプリロード区画と同じでない場合は、何もアクションはありません。区画番号が一致する場合、クライアント・ローダーが呼び出されてデータがマップにロードされます。クライアント・ローダーの呼び出しは、1 つのみの区画で行われる必要があります。

```
void preloadMap (Session session, BackingMap backingMap) throws LoaderException {

....
 ObjectGrid objectGrid = session.getObjectGrid();
 int partitionId = backingMap.getPartitionId();
 int numPartitions = backingMap.getPartitionManager().getNumOfPartitions();

 // Only call client loader data in one partition
 if (partitionId == preloadPartition) {
     ClientLoader c = ClientLoaderFactory.getClientLoader();
    // Call the client loader to load the data
    try {
        c.load(objectGrid, "CUSTOMER", "customerPU",
     null, entityClass, null, null, true, null);
    } catch (ObjectGridException e) {
        LoaderException le = new LoaderException("Exception caught in ObjectMap " +
     ogName + "." + mapName);
        le.initCause(e);
        throw le;
    }
 }
}
```

要確認: backingMap 属性「preloadMode」を `true` に構成して、プリロード・メソッドが非同期で実行されるようにします。そのように構成しないと、プリロード・メソッドが ObjectGrid インスタンスをブロックし、アクティブ化を妨げます。

関連概念:

Java 722 ページの『クライアント・ベース JPA プリロード・ユーティリティーの概要』
クライアント・ベース Java Persistence API (JPA) プリロード・ユーティリティーは、ObjectGrid に対するクライアント接続を使用して、データを eXtreme Scale パッキング・マップにロードします。

関連タスク:

Java 720 ページの『クライアント・ベースの JPA ローダーの開発』
Java Persistence API (JPA) ユーティリティーを使用して、データのプリロードおよび再ロードをアプリケーションに実装できます。この機能は、データベース照会の区画化が行えない場合にマップにデータをロードする作業を簡素化します。

関連情報:

Java インターフェース ClientLoader

Java インターフェース StateManager

例: カスタムのクライアント・ベース JPA ローダーの作成: Java

Loader インターフェースの ClientLoader.load メソッドは、ほとんどのシナリオを満足するクライアント・ロード機能を提供しています。ただし、ClientLoader.load メソッドを使用しないでデータをロードする必要がある場合は、独自のプリロード・ユーティリティーを実装できます。

カスタム・ローダー・テンプレート

次のテンプレートを使用して、独自のローダーを作成します。

```
// Get the StateManager
StateManager stateMgr = StateManagerFactory.getStateManager();

// Set ObjectGrid state to PRELOAD before calling ClientLoader.loader
stateMgr.setObjectGridState(AvailabilityState.PRELOAD, objectGrid);


// Load the data
...<your preload utility implementation>...

// Set ObjectGrid state back to ONLINE
stateMgr.setObjectGridState(AvailabilityState.ONLINE, objectGrid);
```

DataGrid エージェントを使用するクライアント・ベースの JPA ローダーの開発:

Java

クライアント・サイドからロードする場合、DataGrid エージェントを使用するとパフォーマンスを高めることができます。 DataGrid エージェントを使用すれば、すべてのデータ読み取りおよび書き込みが、サーバー・プロセスで行われます。また、複数の区画の DataGrid エージェントが確実に並列実行されるようにアプリケーションを設計して、さらにパフォーマンスを向上させることもできます。

このタスクについて

DataGrid エージェントの詳細については、 559 ページの『DataGrid API と区画化』を参照してください。

データ・プリロード実装を作成したら、以下のタスクを実行する一般のローダーを作成できます。

- データベースからのデータをバッチで照会する。
- 各区画のキー・リストおよび値リストを作成する。
- 各区画について、agentMgr.callReduceAgent(agent, aKey) を呼び出して、スレッド内でそのサーバーのエージェントを実行します。スレッド内で実行すると、複数の区画で同時にエージェントを実行できます。

例

次のコード・スニペットは、DataGrid エージェントを使用してロードする方法の例です。

```
import java.io.Externalizable;
import java.io.IOException;
import java.io.ObjectInput;
import java.io.ObjectOutput;
import java.util.ArrayList;
import java.util.Collection;
import java.util.Iterator;
import java.util.List;
```

```
import com.ibm.websphere.objectgrid.NoActiveTransactionException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectMap;
import com.ibm.websphere.objectgrid.Session;
import com.ibm.websphere.objectgrid.TransactionException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.ReduceGridAgent;
import com.ibm.websphere.objectgrid.em.EntityManager;

public class InsertAgent implements ReduceGridAgent, Externalizable {

    private static final long serialVersionUID = 6568906743945108310L;

    private List keys = null;

    private List vals = null;

    protected boolean isEntityMap;

    public InsertAgent() {
    }

    public InsertAgent(boolean entityMap) {
        isEntityMap = entityMap;
    }

    public Object reduce(Session sess, ObjectMap map) {
        throw new UnsupportedOperationException(
            "ReduceGridAgent.reduce(Session, ObjectMap)");
    }

    public Object reduce(Session sess, ObjectMap map, Collection arg2) {
        Session s = null;
        try {
            s = sess.getObjectGrid().getSession();
            ObjectMap m = s.getMap(map.getName());
            s.beginNoWriteThrough();
            Object ret = process(s, m);
            s.commit();
            return ret;
        } catch (ObjectGridRuntimeException e) {
            if (s.isTransactionActive()) {
                try {
                    s.rollback();
                } catch (TransactionException e1) {
                } catch (NoActiveTransactionException e1) {
                }
            }
            throw e;
        } catch (Throwable t) {
            if (s.isTransactionActive()) {
                try {
                    s.rollback();
                } catch (TransactionException e1) {
                } catch (NoActiveTransactionException e1) {
                }
            }
            throw new ObjectGridRuntimeException(t);
        }

    }

    public Object process(Session s, ObjectMap m) {
        try {

            if (!isEntityMap) {
```

```
            // In the POJO case, it is very straightforward,
            // we can just put everything in the
            // map using insert
            insert(m);
        } else {
            // 2. Entity case.
            // In the Entity case, we can persist the entities
            EntityManager em = s.getEntityManager();
            persistEntities(em);

        }
        return Boolean.TRUE;
    } catch (ObjectGridRuntimeException e) {
        throw e;
    } catch (ObjectGridException e) {
        throw new ObjectGridRuntimeException(e);
    } catch (Throwable t) {
        throw new ObjectGridRuntimeException(t);
    }

}

/**
 * Basically this is fresh load.
 * @param s
 * @param m
 * @throws ObjectGridException
 */
protected void insert(ObjectMap m) throws ObjectGridException {

    int size = keys.size();

    for (int i = 0; i < size; i++) {
        m.insert(keys.get(i), vals.get(i));
    }

}


protected void persistEntities(EntityManager em) {
    Iterator<Object> iter = vals.iterator();

    while (iter.hasNext()) {
        Object value = iter.next();
        em.persist(value);
    }
}

public Object reduceResults(Collection arg0) {
    return arg0;
}

public void readExternal(ObjectInput in)
  throws IOException, ClassNotFoundException {
    int v = in.readByte();
    isEntityMap = in.readBoolean();
    vals = readList(in);
    if (!isEntityMap) {
        keys = readList(in);
    }
}

public void writeExternal(ObjectOutput out) throws IOException {
    out.write(1);
    out.writeBoolean(isEntityMap);

    writeList(out, vals);
```

```
        if (!isEntityMap) {
            writeList(out, keys);
        }

    }

    public void setData(List ks, List vs) {
        vals = vs;
        if (!isEntityMap) {
            keys = ks;
        }
    }

    /**
     * @return Returns the isEntityMap.
     */
    public boolean isEntityMap() {
        return isEntityMap;
    }

    static public void writeList(ObjectOutput oo, Collection l)
      throws IOException {
        int size = l == null ? -1 : l.size();
        oo.writeInt(size);
        if (size > 0) {
            Iterator iter = l.iterator();
            while (iter.hasNext()) {
                Object o = iter.next();
                oo.writeObject(o);
            }
        }
    }

    public static List readList(ObjectInput oi)
      throws IOException, ClassNotFoundException {
        int size = oi.readInt();
        if (size == -1) {
            return null;
        }


        ArrayList list = new ArrayList(size);
        for (int i = 0; i < size; ++i) {
            Object o = oi.readObject();
            list.add(o);
        }
        return list;
    }
}
```

例: ObjectGrid キャッシュにデータをプリロードするための Hibernate プラグインの使用

Java

ObjectGridHibernateCacheProvider クラスの preload メソッドを使用して、特定のエンティティー・クラスの ObjectGrid キャッシュにデータをプリロードできます。

例: EntityManagerFactory クラスの使用

```
EntityManagerFactory emf = Persistence.createEntityManagerFactory("testPU");
ObjectGridHibernateCacheProvider.preload("objectGridName", emf, TargetEntity.class, 100, 100);
```

重要: デフォルトでは、エンティティーは第 2 レベル・キャッシュの一部ではありません。キャッシングが必要な Entity クラスの中に、@cache アノテーションを追加します。以下に例を示します。

```
import org.hibernate.annotations.Cache;
import org.hibernate.annotations.CacheConcurrencyStrategy;
@Entity
@Cache(usage=CacheConcurrencyStrategy.TRANSACTIONAL)
public class HibernateCacheTest { ... }
```

このデフォルトは、persistence.xml ファイルの中に shared-cache-mode エレメントを設定するか、javax.persistence.sharedCache.mode プロパティーを使用することによって、オーバーライドできます。

例: SessionFactory クラスの使用

```
org.hibernate.cfg.Configuration cfg = new Configuration();
// use addResource, addClass, and setProperty method of Configuration to prepare
// configuration required to create SessionFactor
SessionFactory sessionFactory= cfg.buildSessionFactory();
ObjectGridHibernateCacheProvider.preload("objectGridName", sessionFactory,
TargetEntity.class, 100, 100);
```

注:

1. 分散システムでは、このプリロード・メカニズムは、1 つの Java 仮想マシンからのみ呼び出すことができます。プリロード・メカニズムは、複数の Java 仮想マシン から同時に実行することはできません。
2. プリロードを実行する前に、eXtreme Scale キャッシュを初期化する必要があります。この初期化は、対応するすべての BackingMap が作成されるようにするため、EntityManagerFactory を使用して EntityManager を作成することによって行います。そうしないでプリロードを実行すると、1 つのみのデフォルト BackingMap がすべてのエンティティーをサポートするようにキャッシュが初期化されてしまいます。これは、単一の BackingMap がすべてのエンティティーで共有されることを示しています。

JPA 時間ベース・アップデーターの開始

Java

Java Persistence API (JPA) 時間ベース・アップデーターの開始時に、ObjectGrid マップがデータベース内の最新の変更で更新されます。

始める前に

時間ベース・アップデーターを構成します。 JPA 時間ベース・データ・アップデーターの構成を参照してください。

このタスクについて

Java Persistence API (JPA) 時間ベース・データ・アップデーターがどのように機能するかについて詳しくは、 735 ページの『JPA 時間ベース・データ・アップデーター』を参照してください。

手順

- 時間ベース・データベース・アップデーターを開始します。
  - **分散 eXtreme Scale に対する自動開始:**

パッキング・マップに対して timeBasedDBUpdate 構成を作成する場合、時間ベース・データベース・アップデーターは、分散 ObjectGrid プライマリー断片がアクティブ化された時点で自動的に開始されます。複数区画がある ObjectGrid の場合、時間ベース・データベース・アップデーターは、区画 0 でのみ開始されます。

– **ローカル eXtreme Scale に対する自動開始:**

パッキング・マップに対して timeBasedDBUpdate 構成を作成する場合、時間ベース・データベース・アップデーターは、ローカル・マップがアクティブ化された時点で自動的に開始されます。

– **手動開始:**

また、時間ベース・データベース・アップデーターは、TimeBasedDBUpdater API を使用して、手動で開始または停止することもできます。

```
public synchronized void startDBUpdate(ObjectGrid objectGrid, String mapName,
 String punitName, Class entityClass, String timestampField, DBUpdateMode mode) {
```

1. **ObjectGrid**: ObjectGrid インスタンス (ローカルまたはクライアント)。
2. **mapName**: 時間ベース・データベース・アップデーターが開始されるパッキング・マップの名前。
3. **punitName**: JPA エンティティー・マネージャー・ファクトリーを作成するための JPA パーシスタンス・ユニット名。デフォルト値は、`persistence.xml` ファイル内で定義された最初のパーシスタンス・ユニット名です。
4. **entityClass**: Java Persistence API (JPA) プロバイダーと対話するために使用されるエンティティー・クラス名。このエンティティー・クラス名は、エンティティー照会を使用した JPA エンティティーの取得に使用されます。
5. **timestampField**: データベース・バックエンド・レコードが最終更新または挿入された時間ないし順序を識別するための、エンティティー・クラスのタイム・スタンプ・フィールド。
6. **mode**: 時間ベース・データベース更新モード。INVALIDATE_ONLY タイプでは、データベース内の対応するレコードが変更された場合、ObjectGrid マップのエントリーが無効化されます。UPDATE_ONLY タイプは、ObjectGrid マップの既存のエントリーがデータベースの最新の値で更新されることを示しますが、データベースに新たに挿入されたレコードはすべて無視されます。INSERT_UPDATE タイプは、ObjectGrid マップの既存のエントリーがデータベースの最新の値で更新され、新たにデータベースに挿入されたレコードもすべて ObjectGrid マップに挿入されます。

時間ベース・データベース・アップデーターを停止したい場合は、以下のメソッドを呼び出せば、アップデーターを停止することができます。

```
public synchronized void stopDBUpdate(ObjectGrid objectGrid, String mapName)
```

ObjectGrid および mapName パラメーターは、startDBUpdate メソッドに渡されたものと同じにする必要があります。

- ご使用のデータベースにタイム・スタンプ・フィールドを作成します。

– **DB2**

オプティミスティック・ロック機能の一部として、DB2 9.5 では、行変更タイム・スタンプ機能を提供しています。ROW CHANGE TIMESTAMP 形式を使用して列 ROWCHGTS を次のように定義できます。

```
ROWCHGTS TIMESTAMP NOT NULL
     GENERATED ALWAYS
     FOR EACH ROW ON UPDATE AS
     ROW CHANGE TIMESTAMP
```

次に、アノテーションまたは構成によって、この列に対応するエンティティー・フィールドをタイム・スタンプ・フィールドとして指示することができます。次に例を挙げます。

```
@Entity(name = "USER_DB2")
@Table(name = "USER1")
public class User_DB2 implements Serializable {

    private static final long serialVersionUID = 1L;

    public User_DB2() {
    }

    public User_DB2(int id, String firstName, String lastName) {
        this.id = id;
        this.firstName = firstName;
        this.lastName = lastName;
    }

    @Id
    @Column(name = "ID")
    public int id;

    @Column(name = "FIRSTNAME")
    public String firstName;

    @Column(name = "LASTNAME")
    public String lastName;

    @com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.dbupdate.annotation.Timestamp
    @Column(name = "ROWCHGTS", updatable = false, insertable = false)
    public Timestamp rowChgTs;
}
```

– **Oracle**

Oracle の場合、レコードのシステム変更番号用に疑似列 ora_rowscn があります。この列を同じ目的に使用することができます。時間ベース・データベース更新のタイム・スタンプ・フィールドとしてこの ora_rowscn フィールドを使用するエンティティーの例を以下に示します。

```
@Entity(name = "USER_ORA")
@Table(name = "USER1")
public class User_ORA implements Serializable  {

    private static final long serialVersionUID = 1L;

    public User_ORA() {
    }

    public User_ORA(int id, String firstName, String lastName) {
        this.id = id;
        this.firstName = firstName;
        this.lastName = lastName;
    }
```

```
    @Id
    @Column(name = "ID")
    public int id;

    @Column(name = "FIRSTNAME")
    public String firstName;

    @Column(name = "LASTNAME")
    public String lastName;

    @com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.dbupdate.annotation.Timestamp
    @Column(name = "ora_rowscn", updatable = false, insertable = false)
    public long rowChgTs;
}
```

– **その他のデータベース**

その他のタイプのデータベースの場合、変更を追跡する表列を作成できます。列の値は、表を更新するアプリケーションによって手動で管理する必要があります。

Apache Derby データベースを例として取り上げます。変更番号をトラッキングするために列 "ROWCHGTS" を作成します。また、この表に対する最新変更番号もトラッキングされます。レコードが挿入または更新されるたびに、表の最新変更番号が増分され、レコードの ROWCHGTS 列の値がその増分された番号で更新されます。

```
@Entity(name = "USER_DER")
@Table(name = "USER1")
public class User_DER implements Serializable {

    private static final long serialVersionUID = 1L;

    public User_DER() {
    }

    public User_DER(int id, String firstName, String lastName) {
        this.id = id;
        this.firstName = firstName;
        this.lastName = lastName;
    }

    @Id
    @Column(name = "ID")
    public int id;

    @Column(name = "FIRSTNAME")
    public String firstName;

    @Column(name = "LASTNAME")
    public String lastName;

    @com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.dbupdate.annotation.Timestamp
    @Column(name = "ROWCHGTS", updatable = true, insertable = true)
    public long rowChgTs;
}
```

JPA 時間ベース・データ・アップデーター: Java

Java Persistence API (JPA) 時間ベース・データベース・アップデーターは、データベース内の最新の変更で ObjectGrid マップを更新します。

WebSphere eXtreme Scale グリッドの背後にあるデータベースに変更が直接行われた場合、それらの変更は同時には eXtreme Scale グリッドに反映されません。eXtreme Scale をメモリー内のデータベース処理スペースとして正しく実装するには、グリッドがデータベースと同期しなくなる可能性があることを考慮する必要があります。時間ベース・データベース・アップデーターは、Oracle 10g のシステム変更番号 (SCN) 機能および DB2 9.5 の行変更タイム・スタンプを使用して、無効化または更新のためにデータベース内の変更をモニターします。また、アップデーターを使用すると、複数のアプリケーションが同じ目的でユーザー定義フィールドを設定することもできます。

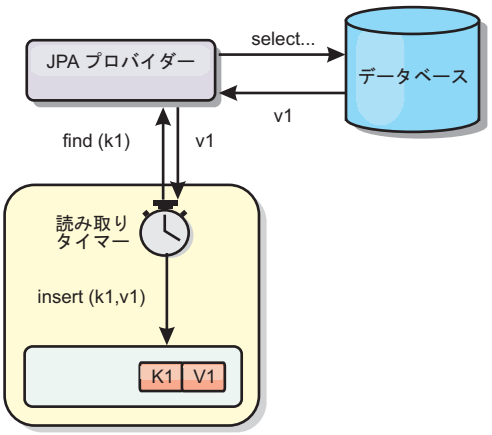


図 44. 定期的リフレッシュ

時間ベース・データベース・アップデーターでは、JPA インターフェースを使用して、定期的にデータベースを照会し、データベース内で新たに挿入され、更新されたレコードを示す JPA エンティティーを取得します。レコードを定期的に更新するために、データベース内のすべてのレコードには、レコードが最後に更新または挿入された時点の時刻または順序を識別するためのタイム・スタンプが必要です。タイム・スタンプはタイム・スタンプ形式になっている必要はありません。タイム・スタンプ値は、固有の漸増値を生成する場合は、整数または長形式とすることができます。

この機能は、いくつかの市販のデータベースで提供されています。

例えば、DB2 9.5 では、 ROW CHANGE TIMESTAMP 形式を使用する列を以下のように定義できます。

```
ROWCHGTS TIMESTAMP NOT NULL
      GENERATED ALWAYS
      FOR EACH ROW ON UPDATE AS
      ROW CHANGE TIMESTAMP
```

Oracle では、レコードのシステム変更番号を示す **ora_rowscn** という疑似列を使用することができます。

時間ベース・データベース・アップデーターは、ObjectGrid マップを次の 3 つの異なる方法で更新します。

1. INVALIDATE_ONLY: データベース内の対応するレコードが変更された場合に、ObjectGrid マップのエントリーを無効化します。

2. UPDATE_ONLY: データベース内の対応するレコードが変更された場合に、ObjectGrid マップのエントリーを更新します。ただし、データベースに新たに挿入されたレコードは、すべて無視されます。
3. INSERT_UPDATE: ObjectGrid マップの既存のエントリーをデータベースの最新の値で更新します。また、データベースに新たに挿入されたレコードが、すべて ObjectGrid マップに挿入されます。

JPA 時間ベース・データ・アップデーターについて詳しくは、 JPA 時間ベース・データ・アップデーターの構成を参照してください。

Spring フレームワークでのアプリケーション開発

Java

よく使用される Spring フレームワークに eXtreme Scale アプリケーションを統合する方法について説明します。

関連概念:

Java 365 ページの『Spring Framework の概要』
Spring は、Java アプリケーションの開発用のフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、 Spring を使用してトランザクションを管理し、デプロイされたメモリー内データ・グリッドに含まれるクライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Java 745 ページの『Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート』
WebSphere eXtreme Scaleには、`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用するために Plain Old Java Object (POJO) を宣言する機能があり、Bean を指定してからクラス名を指定する方法が提供されています。 通常、指定されたクラスのインスタンスが作成され、それらのオブジェクトはプラグインとして使用されます。eXtreme Scale は、これらのプラグイン・オブジェクトのインスタンスの取得を Spring に委任できます。アプリケーションが Spring を使用する場合は、通常、このような POJO をアプリケーションの残り部分に接続する必要があります。

関連資料:

Java 743 ページの『Spring が管理する拡張 Bean』
`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

Java Spring 記述子 XML ファイル
Spring 記述子 XML ファイルを使用して、eXtreme Scale を構成して Spring と統合します。

Java Spring `objectgrid.xsd` ファイル
Spring `objectgrid.xsd` ファイルを使用して、 eXtreme Scale を Spring と統合し、eXtreme Scale トランザクションの管理と、クライアントおよびサーバーの構成を行います。

Spring Framework の概要

Java

Spring は、Java アプリケーションの開発用のフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、 Spring を使用してトランザクションを管理し、デプロイされたメモリー内データ・グリッドに含まれるクライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Spring キャッシュ・プロバイダー

Spring Framework バージョン 3.1 では、新しいキャッシュ抽象化が導入されました。この新しい抽象化により、既存の Spring アプリケーションにキャッシングを透過的に追加できます。WebSphere eXtreme Scale をキャッシュ抽象化のキャッシュ・プロバイダーとして使用できます。詳しくは、Spring キャッシュ・プロバイダーの構成を参照してください。

Spring 管理ネイティブ・トランザクション

Spring は、 Java Platform, Enterprise Edition アプリケーション・サーバーに似たコンテナー管理トランザクションを提供します。しかし、Spring メカニズムはさまざまな実装環境を使用できます。WebSphere eXtreme Scale が提供するトランザクション・マネージャー統合は、Spring が ObjectGrid トランザクションのライフサイクルを管理することを可能にします。詳しくは、740 ページの『Spring を使用したトランザクションの管理』を参照してください。

Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポート

また、eXtreme Scale が Spring と統合されることによって、拡張ポイントまたはプラグイン用に Spring スタイルの Bean を定義することが可能になります。この機能によって、拡張ポイントの構成の柔軟性が高まり、洗練された構成ができるようになります。

Spring 管理の拡張 Bean に加えて、 eXtreme Scale は、「objectgrid」という名前の Spring 名前空間を提供します。Bean および組み込みの実装がこの名前空間に事前定義されていて、ユーザーが eXtreme Scale をより簡単に構成できるようになっています。これらのトピックに関する詳しい説明と、Spring 構成を使用して eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動する方法の例については、745 ページの『Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート』を参照してください。

断片有効範囲サポート

従来のスタイルの Spring 構成では、 ObjectGrid Bean は singleton タイプかプロトタイプ・タイプのどちらかです。ObjectGrid は、「断片」有効範囲と呼ばれる新しい有効範囲もサポートします。Bean が断片有効範囲と定義されている場合、断片当たり 1 つの Bean のみが作成されます。同じ断片内でその Bean 定義に一致する ID を持つ Bean に対する要求はすべて、その 1 つの特定の Bean インスタンスが Spring コンテナーによって戻される結果になります。

以下の例に示す com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.JPAPropFactoryImpl Bean の定義では、有効範囲が断片であると設定されています。したがって、断片当たり、JPAPropFactoryImpl クラスの 1 つのインスタンスのみが作成されます。

```
<bean id="jpaPropFactory" class="com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.JPAPropFactoryImpl" scope="shard" />
```

Spring Web Flow

Spring Web Flow は、デフォルトではセッション状態を HTTP セッションに保管します。Web アプリケーションでセッション管理のために eXtreme Scale を使用している場合、Spring は自動的に eXtreme Scale を使用して状態を保管します。また、フォールト・トレランスもセッションと同じように有効になります。

詳しくは、HTTP セッション管理を参照してください。

パッケージ化

eXtreme Scale Spring 拡張は `ogspring.jar` ファイルに入っています。Spring サポートが正しく機能するためには、この Java アーカイブ (JAR) ファイルがクラスパスになければなりません。 WebSphere Extended Deployment で実行している Java

EE アプリケーションが WebSphere Application Server Network Deployment を拡張した場合、 spring.jar ファイルおよびその関連ファイルをエンタープライズ・アーカイブ (EAR) モジュールに入れます。同じ場所に ogspring.jar ファイルも入れる必要があります。

関連タスク:

Java 737 ページの『Spring フレームワークでのアプリケーション開発』
よく使用される Spring フレームワークに eXtreme Scale アプリケーションを統合する方法について説明します。

Java 748 ページの『Spring を使用したコンテナー・サーバーの始動』
Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポートを使用して、コンテナー・サーバーを始動できます。

Java 『Spring を使用したトランザクションの管理』
Spring は、Java アプリケーションの開発によく使用されるフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、Spring を使用して eXtreme Scale トランザクションを管理したり、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

関連資料:

Java 743 ページの『Spring が管理する拡張 Bean』
objectgrid.xml ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

Java Spring 記述子 XML ファイル
Spring 記述子 XML ファイルを使用して、eXtreme Scale を構成して Spring と統合します。

Java Spring objectgrid.xsd ファイル
Spring objectgrid.xsd ファイルを使用して、 eXtreme Scale を Spring と統合し、eXtreme Scale トランザクションの管理と、クライアントおよびサーバーの構成を行います。

Spring を使用したトランザクションの管理

Java

Spring は、Java アプリケーションの開発によく使用されるフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、Spring を使用して eXtreme Scale トランザクションを管理したり、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

このタスクについて

以下のセクションで説明するように、Spring Framework は eXtreme Scale と高度に統合可能です。

手順

- **ネイティブ・トランザクション:** Spring は、Java Platform, Enterprise Edition アプリケーション・サーバーのスタイルに沿ったコンテナー管理トランザクションを提供しますが、Spring のメカニズムによりさまざまな実装を組み込むことができるという利点があります。このトピックでは、Spring とともに使用できる eXtreme Scale プラットフォーム・トランザクション・マネージャーについて説明します。これを使用すると、プログラマーは、POJO (Plain Old Java Object) にアノテーションを付けてから、 Spring に eXtreme Scale からの Session を自動取得させて、 eXtreme Scale トランザクションを開始、コミット、ロールバック、中断、および再開させることができます。Spring トランザクションの詳細については、 公式の Spring 参照資料の第 10 章を参照してください。次に、eXtreme Scale トランザクション・マネージャーを作成して、それをアノテーション付きの POJO で使用する方法を説明します。また、この方法をクライアントまたはローカル eXtreme Scale および連結された Data Grid スタイル・アプリケーションとともに使用する方法についても説明します。
- **トランザクション・マネージャー:** Spring と連動するために、eXtreme Scale は Spring PlatformTransactionManager の実装を提供します。このマネージャーは、管理対象の eXtreme Scale セッションを Spring が管理する POJO に提供することができます。 Spring は、アノテーションの使用により、トランザクション・ライフサイクルの単位で POJO のセッションを管理します。次の XML スニペットは、トランザクション・マネージャーの作成方法を示しています。

```
<aop:aspectj-autoproxy/>
 <tx:annotation-driven transaction-manager="transactionManager"/>

 <bean id="ObjectGridManager"
    class="com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory"
    factory-method="getObjectGridManager"/>

 <bean id="ObjectGrid"
    factory-bean="ObjectGridManager"
    factory-method="createObjectGrid"/>

 <bean id="transactionManager"
    class="com.ibm.websphere.objectgrid.spring.ObjectGridSpringFactory"
    factory-method="getLocalPlatformTransactionManager"/>
 </bean>

 <bean id="Service" class="com.ibm.websphere.objectgrid.spring.test.TestService">
  <property name="txManager" ref+"transactionManager"/>
 </bean>
```

  これは、transactionManager Bean が宣言され、Spring トランザクションを使用する Service Bean に接続されるところを示しています。これはアノテーションを使用して示されますが、これが先頭に tx:annotation 文節のある理由です。

- **ObjectGrid セッションの取得:** Spring が管理するメソッドを持つ POJO は現在、次のメソッドを使用して現行トランザクションのための ObjectGrid セッションを取得することができます。

```
Session s = txManager.getSession();
```

  これは、POJO が使用するセッションを返します。同じトランザクションに関係する Bean は、このメソッドを呼び出したとき、同じセッションを受け取ります。 Spring はセッションに対して begin を自動的に処理し、また必要なときに commit または rollback を自動的に呼び出します。また、セッション・オブジェクトから getEntityManager を呼び出すだけでも ObjectGrid EntityManager を取得することができます。

- **スレッドの ObjectGrid インスタンスの設定:** 単一の Java 仮想マシン (JVM) で多数の ObjectGrid インスタンスをホストすることができます。JVM に置かれた各プライマリー断片には独自の ObjectGrid インスタンスがあります。リモート ObjectGrid に対してクライアントとして機能する JVM は、connect メソッドの ClientClusterContext から戻される ObjectGrid インスタンスを使用して、その Grid と対話します。 ObjectGrid の Spring トランザクションを使用して POJO でメソッドを呼び出す前に、使用する ObjectGrid インスタンスでスレッドを事前準備する必要があります。 TransactionManager インスタンスには、特定の ObjectGrid インスタンスの指定を可能にするメソッドがあります。これが指定されると、後続の txManager.getSession 呼び出しはその ObjectGrid インスタンスのセッションを返します。

  次の例は、この機能を実行するためのサンプル・メインを示しています。

```
ClassPathXmlApplicationContext ctx = new ClassPathXmlApplicationContext(new String[]
            {"applicationContext.xml"});
    SpringLocalTxManager txManager = (SpringLocalTxManager)ctx.getBean("transactionManager");
    txManager.setObjectGridForThread(og);

    ITestService s = (ITestService)ctx.getBean("Service");
    s.initialize();
    assertEquals(s.query(), "Billy");
    s.update("Bobby");
    assertEquals(s.query(), "Bobby");
    System.out.println("Requires new test");
    s.testRequiresNew(s);
    assertEquals(s.query(), "1");
```

  ここでは Spring ApplicationContext を使用します。 ApplicationContext は、txManager への参照を取得して、このスレッドで使用する ObjectGrid を指定するために使用されます。次にコードは、サービスへの参照を取得して、そのサービス上でメソッドを呼び出します。このレベルの各メソッドにより、Spring はセッションを作成し、メソッド呼び出しの周辺で begin/commit 呼び出しを行います。例外が発生するとロールバックが行われます。

- **SpringLocalTxManager インターフェース:** SpringLocalTxManager インターフェースは ObjectGrid プラットフォーム・トランザクション・マネージャーによって実装されるもので、パブリック・インターフェースをすべて持っています。このインターフェース上のメソッドは、スレッドで使用する ObjectGrid インスタンスを選択し、そのスレッドのセッションを取得するためのものです。 ObjectGrid ローカル・トランザクションを使用する POJO には、このマネージャー・インスタンスへの参照を入れる必要があります。また、単一インスタンスのみを作成する必要があります (つまり、そのスコープは singleton でなければなりません)。このインスタンスは、ObjectGridSpringFactory 上の静的メソッドを使用して作成されます。 getLocalPlatformTransactionManager()。

  制約事項: WebSphere eXtreme Scale は、主としてスケーラビリティーと関係があるさまざまな理由から、JTA および 2 フェーズ・コミットをサポートしません。したがって、最後の単一フェーズ参加者の場合を除き、ObjectGrid は XA または JTA タイプのグローバル・トランザクションでは対話しません。このプラットフォーム・マネージャーは、ローカル ObjectGrid トランザクションの使用を Spring 開発者のためにできるだけ容易にするように意図されています。

関連概念:

Java 365 ページの『Spring Framework の概要』
Spring は、Java アプリケーションの開発用のフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、 Spring を使用してトランザクションを管理し、デプロイされたメモリー内データ・グリッドに含まれるクライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Java 745 ページの『Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート』
WebSphere eXtreme Scaleには、`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用するために Plain Old Java Object (POJO) を宣言する機能があり、Bean を指定してからクラス名を指定する方法が提供されています。 通常、指定されたクラスのインスタンスが作成され、それらのオブジェクトはプラグインとして使用されます。eXtreme Scale は、これらのプラグイン・オブジェクトのインスタンスの取得を Spring に委任できます。アプリケーションが Spring を使用する場合は、通常、このような POJO をアプリケーションの残り部分に接続する必要があります。

関連資料:

Java 『Spring が管理する拡張 Bean』
`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

Java Spring 記述子 XML ファイル
Spring 記述子 XML ファイルを使用して、eXtreme Scale を構成して Spring と統合します。

Java Spring `objectgrid.xsd` ファイル
Spring `objectgrid.xsd` ファイルを使用して、 eXtreme Scale を Spring と統合し、eXtreme Scale トランザクションの管理と、クライアントおよびサーバーの構成を行います。

Spring が管理する拡張 Bean

Java

`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

アプリケーションが Spring を使用する場合、POJO はアプリケーションの残り部分にアクセス可能である必要があります。

アプリケーションは、名前で指定された ObjectGrid で使用するために、Spring Bean ファクトリー・インスタンスを登録できます。アプリケーションは、BeanFactory の

インスタンスまたは Spring アプリケーション・コンテキストを作成してから、次の静的メソッドを使用してそれを ObjectGrid に登録します。

```
void registerSpringBeanFactoryAdapter(String objectGridName, Object springBeanFactory)
```

上記のメソッドは、className が接頭部 {spring} で始まる拡張 Bean を eXtreme Scale が検出する場合に当てはまります。このような拡張 Bean (ObjectTransformer、Loader、TransactionCallback など) は、名前の残り部分を Spring Bean 名として使用します。その後、Spring Bean ファクトリーを使用して Bean インスタンスを取得します。

eXtreme Scale デプロイメント環境は、デフォルトの Spring XML 構成ファイルから Spring Bean ファクトリーを作成することもできます。与えられた ObjectGrid の Bean ファクトリーが登録されていなかった場合、デプロイメントは、「/<ObjectGridName>_spring.xml」という XML ファイルを検索します。例えば、データ・グリッドの名前が GRID の場合、XML ファイルの名前は「/GRID_spring.xml」で、このファイルはルート・パッケージのクラスパスにあります。 ObjectGrid は、/<ObjectGridName>_spring.xml ファイルを使用して ApplicationContext を作成し、その Bean ファクトリーから Bean を作成します。

次にクラス名の例を示します。

```
"{spring}MyLoaderBean"
```

上記のクラス名を使用すると、eXtreme Scale は Spring を使用して「MyLoaderBean」という名前の Bean を検索できます。Bean ファクトリーが登録されている場合は、任意の拡張ポイントに対して Spring が管理する POJO を指定できます。Spring 拡張は、ogspring.jar ファイルに入っています。Spring サポートのためには、この JAR ファイルがクラスパスになければなりません。WebSphere Extended Deployment で拡張された WebSphere Application Server Network Deployment の中で J2EE アプリケーションを実行する場合、そのアプリケーションは spring.jar ファイルとその関連ファイルを EAR モジュールに入れる必要があります。 ogspring.jar も同じロケーションに置く必要があります。

関連概念:

Java 365 ページの『Spring Framework の概要』
Spring は、Java アプリケーションの開発用のフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、 Spring を使用してトランザクションを管理し、デプロイされたメモリー内データ・グリッドに含まれるクライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Java 『Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート』
WebSphere eXtreme Scaleには、`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用するために Plain Old Java Object (POJO) を宣言する機能があり、Bean を指定してからクラス名を指定する方法が提供されています。 通常、指定されたクラスのインスタンスが作成され、それらのオブジェクトはプラグインとして使用されます。eXtreme Scale は、これらのプラグイン・オブジェクトのインスタンスの取得を Spring に委任できます。アプリケーションが Spring を使用する場合は、通常、このような POJO をアプリケーションの残り部分に接続する必要があります。

関連タスク:

Java 737 ページの『Spring フレームワークでのアプリケーション開発』
よく使用される Spring フレームワークに eXtreme Scale アプリケーションを統合する方法について説明します。

Java 748 ページの『Spring を使用したコンテナー・サーバーの始動』
Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポートを使用して、コンテナー・サーバーを始動できます。

Java 740 ページの『Spring を使用したトランザクションの管理』
Spring は、Java アプリケーションの開発によく使用されるフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、Spring を使用して eXtreme Scale トランザクションを管理したり、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート

Java

WebSphere eXtreme Scaleには、`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用するために Plain Old Java Object (POJO) を宣言する機能があり、Bean を指定してからクラス名を指定する方法が提供されています。 通常、指定されたクラスのインスタンスが作成され、それらのオブジェクトはプラグインとして使用されます。eXtreme Scale は、これらのプラグイン・オブジェクトのインスタンスの取得を Spring に委任できます。アプリケーションが Spring を使用する場合は、通常、このような POJO をアプリケーションの残り部分に接続する必要があります。

シナリオによっては、以下の例のようにプラグインを構成するのに Spring を使用する必要があります。

```
<objectGrid name="Grid">
    <bean id="TransactionCallback" className="com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPATxCallback">
        <property name="persistenceUnitName" type="java.lang.String"  value="employeePU" />
    </bean>
    ...
</objectGrid>
```

組み込み TransactionCallback 実装である com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPATxCallback クラスは、TransactionCallback クラスとして構成されます。このクラスは上の例のように、**persistenceUnitName** プロパティーを使用して構成されます。JPATxCallback クラスには JPAPropertyFactory 属性もあり、これのタイプは java.lang.Object です。ObjectGrid XML 構成は、このタイプの構成をサポートできません。

eXtreme Scale Spring 統合は Bean 作成を Spring フレームワークに委任することでこの問題を解決します。修正後の構成は、次のようになります。

```
<objectGrid name="Grid">
    <bean id="TransactionCallback" className="{spring}jpaTxCallback"/>
    ...
</objectGrid>
```

"Grid" オブジェクト用の Spring ファイルには以下の情報が入っています。

```
<bean id="jpaTxCallback" class="com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPATxCallback" scope="shard">
    <property name="persistenceUnitName" value="employeeEMPU"/>
    <property name="JPAPropertyFactory" ref ="jpaPropFactory"/>
</bean>

<bean id="jpaPropFactory" class="com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.
JPAPropFactoryImpl" scope="shard">
</bean>
```

ここでは、上の例に示されているように、{spring}jpaTxCallback として TransactionCallback が指定され、 Spring ファイル内に jpaTxCallback および jpaPropFactory Bean が構成されています。このような Spring 構成によって、JPAPropertyFactory Bean を JPATxCallback オブジェクトのパラメーターとして構成することが可能になります。

デフォルトの Spring Bean ファクトリー

eXtreme Scale が、接頭部 {spring} で始まる classname 値を持つプラグインまたは拡張 Bean (ObjectTransformer、Loader、TransactionCallback など) を検出した場合、eXtreme Scale は名前の残りの部分を Spring Bean 名として使用し、Spring Bean ファクトリーを使用して Bean インスタンスを取得します。

デフォルトでは、与えられた ObjectGrid 用に登録された Bean ファクトリーがない場合、ObjectGridName_spring.xml ファイルを見つけようとします。例えば、データ・グリッドの名前が "Grid" の場合は、XML ファイルの名前は /Grid_spring.xml です。このファイルはクラスパスにあるか、クラスパス内の META-INF ディレクトリーにあるはずです。このファイルが見つかったら、eXtreme Scale は、そのファイルを使用して ApplicationContext を作成し、その Bean ファクトリーから Bean を作成します。

カスタム Spring Bean ファクトリー

WebSphere eXtreme Scale には ObjectGridSpringFactory API もあり、これを使用して、特定の指定された ObjectGrid のために使用するよう Spring Bean ファクトリー・インスタンスを登録できます。この API は、以下の静的メソッドを使用して、BeanFactory のインスタンスを eXtreme Scale に登録します。

```
void registerSpringBeanFactoryAdapter(String objectGridName, Object
springBeanFactory)
```

名前空間サポート

バージョン 2.0 以降の Spring には、Bean の定義と構成のため、基本的な Spring XML フォーマットをスキーマ・ベースで拡張するメカニズムが備わっています。ObjectGrid はこの新しい機能を使用して、ObjectGrid Bean の定義と構成を行います。Spring XML スキーマ拡張では、eXtreme Scale プラグインのいくつかの組み込み実装、およびいくつかの ObjectGrid Bean が "objectgrid" 名前空間に事前定義されます。 Spring 構成ファイルを作成するとき、これらの組み込み実装の完全クラス名を指定する必要はありません。代わりに、事前定義された Bean を参照するようにできます。

また、XML スキーマ内に Bean の属性が定義されていることによって、間違った属性名を指定する可能性が減少します。XML スキーマに基づいた XML 妥当性検査は、この種のエラーを開発サイクルの初期にキャッチできます。

XML スキーマ拡張に定義されている Bean は、以下のとおりです。

- transactionManager
- register
- server
- カタログ (catalog)
- catalogServerProperties
- コンテナー
- JPALoader
- JPATxCallback
- JPAEntityLoader
- LRUEvictor
- LFUEvictor
- HashIndex

これらの Bean は objectgrid.xsd XML スキーマ内に定義されています。この XSD ファイルは、`ogspring.jar` ファイル中の `com/ibm/ws/objectgrid/spring/namespace/objectgrid.xsd` ファイルとして出荷されます。XSD ファイルおよび XSD ファイルで定義された Bean について詳しくは、Spring 記述子 XML ファイルを参照してください。

前のセクションにある JPATxCallback 例を使用します。前のセクションでは、JPATxCallback Bean は次のように構成されていました。

```
<bean id="jpaTxCallback" class="com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPATxCallback" scope="shard">
    <property name="persistenceUnitName" value="employeeEMPU"/>
    <property name="JPAPropertyFactory" ref ="jpaPropFactory"/>
</bean>

<bean id="jpaPropFactory" class="com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.JPAPropFactoryImpl" scope="shard">
</bean>
```

この名前空間フィーチャーを使用して、Spring XML 構成を次のようにコーディングできます。

```
<objectgrid:JPATxCallback id="jpaTxCallback" persistenceUnitName="employeeEMPU"
 jpaPropertyFactory="jpaPropFactory" />

<bean id="jpaPropFactory" class="com.ibm.ws.objectgrid.jpa.plugins.JPAPropFactoryImpl"
 scope="shard">
</bean>
```

ここでは、前の例でのように com.ibm.websphere.objectgrid.jpa.JPATxCallback クラスを指定する代わりに、事前定義された objectgrid:JPATxCallback Bean を直接使用することに注意してください。見て分かるように、この構成のほうが冗長でなく、誤りがないかチェックするのも簡単です。

Spring Bean を使用した作業については、『Spring を使用したコンテナー・サーバーの始動』を参照してください。

関連タスク:

Java 737 ページの『Spring フレームワークでのアプリケーション開発』
よく使用される Spring フレームワークに eXtreme Scale アプリケーションを統合する方法について説明します。

Java 『Spring を使用したコンテナー・サーバーの始動』
Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポートを使用して、コンテナー・サーバーを始動できます。

Java 740 ページの『Spring を使用したトランザクションの管理』
Spring は、Java アプリケーションの開発によく使用されるフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、Spring を使用して eXtreme Scale トランザクションを管理したり、eXtreme Scale クライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

関連資料:

Java 743 ページの『Spring が管理する拡張 Bean』
`objectgrid.xml` ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

Java Spring 記述子 XML ファイル
Spring 記述子 XML ファイルを使用して、eXtreme Scale を構成して Spring と統合します。

Java Spring `objectgrid.xsd` ファイル
Spring `objectgrid.xsd` ファイルを使用して、 eXtreme Scale を Spring と統合し、eXtreme Scale トランザクションの管理と、クライアントおよびサーバーの構成を行います。

Spring を使用したコンテナー・サーバーの始動

Java

Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポートを使用して、コンテナー・サーバーを始動できます。

このタスクについて

Spring 用に構成されたいくつかの XML ファイルを使用して、基本的な eXtreme Scale コンテナー・サーバーを始動できます。

手順

1. **ObjectGrid XML ファイル:**

   まず最初に、1 つの ObjectGrid "Grid" と 1 つのマップ "Test" が含まれているだけの、単純な ObjectGrid XML ファイルを定義します。この ObjectGrid には "partitionListener" という名前の ObjectGridEventListener プラグインがあり、マップ "Test" には "testLRUEvictor" という名前の Evictor プラグインがあります。ObjectGridEventListener プラグインと Evictor プラグインの両方とも、名前に "{spring}" が含まれるため、Spring を使用して構成されることに注意してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="Grid">
     <bean id="ObjectGridEventListener" className="{spring}partitionListener" />
            <backingMap name="Test" pluginCollectionRef="test" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>

    <backingMapPluginCollections>
        <backingMapPluginCollection id="test">
            <bean id="Evictor" className="{spring}testLRUEvictor"/>
        </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

2. **ObjectGrid デプロイメント XML ファイル:**

   次に、以下に示すように単純な ObjectGrid デプロイメント XML ファイルを作成します。これは ObjectGrid を 5 個の区画に分けます。レプリカは必要ありません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">
    <objectgridDeployment objectgridName="Grid">
        <mapSet name="mapSet" numInitialContainers="1" numberOfPartitions="5" minSyncReplicas="0"
            maxSyncReplicas="1" maxAsyncReplicas="0">
            <map ref="Test"/>
        </mapSet>
    </objectgridDeployment>
</deploymentPolicy>
```

3. **ObjectGrid Spring XML ファイル:**

   次に、 ObjectGrid Spring 管理拡張 Bean および名前空間のサポート機能を両方とも使用して、ObjectGrid Bean を構成します。spring xml ファイルの名前は `Grid_spring.xml` です。この XML ファイルには 2 つのスキーマが含まれていることに注意してください。`spring-beans-2.0.xsd` は Spring 管理 Bean を使用するためのもので、`objectgrid.xsd` は objectgrid 名前空間内に事前定義された Bean を使用するためのものです。

```
<beans xmlns="http://www.springframework.org/schema/beans"
       xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
       xmlns:aop="http://www.springframework.org/schema/aop"
```

```
        xmlns:tx="http://www.springframework.org/schema/tx"
        xmlns:objectgrid="http://www.ibm.com/schema/objectgrid"
        xsi:schemaLocation="
        http://www.ibm.com/schema/objectgrid
    http://www.ibm.com/schema/objectgrid/objectgrid.xsd
        http://www.springframework.org/schema/beans
    http://www.springframework.org/schema/beans/spring-beans-2.0.xsd">

     <objectgrid:register id="ogregister" gridname="Grid"/>

     <objectgrid:server id="server" isCatalog="true" name="server">
         <objectgrid:catalog host="localhost" port="2809"/>
     </objectgrid:server>

     <objectgrid:container id="container"
    objectgridxml="com/ibm/ws/objectgrid/test/springshard/objectgrid.xml"
        deploymentxml="com/ibm/ws/objectgrid/test/springshard/deployment.xml"
    server="server"/>

     <objectgrid:LRUEvictor id="testLRUEvictor" numberOfLRUQueues="31"/>

     <bean id="partitionListener"
    class="com.ibm.websphere.objectgrid.springshard.ShardListener" scope="shard"/>
</beans>
```

この spring XML ファイルには、次の 6 個の Bean が定義されました。

a. *objectgrid:register*: これは、ObjectGrid "Grid" に対してデフォルトの Bean ファクトリーを登録します。

b. *objectgrid:server*: これは、"server" という名前で ObjectGrid サーバーを定義します。objectgrid:catalog Bean がネストされているので、このサーバーはカタログ・サービスも提供します。

c. *objectgrid:catalog*: これは、"localhost:2809" に設定された ObjectGrid カタログ・サービス・エンドポイントを定義します。

d. *objectgrid:container*: これは、前述したように、指定された objectgrid XML ファイルおよびデプロイメント XML ファイルと共に ObjectGrid コンテナーを定義します。server プロパティーは、このコンテナーがどのサーバーでホストされているのかを指定します。

e. *objectgrid:LRUEvictor*: これは、使用する LRU キューの数を 31 に設定して LRUEvictor を定義します。

f. *bean partitionListener*: これは ShardListener プラグインを定義します。このプラグインの実装を指定する必要があるため、事前定義された Bean を使用することはできません。また、この Bean の有効範囲は "shard" (断片) に設定されています。これは、この ShardListener のインスタンスが ObjectGrid 断片当たり 1 つのみであることを意味します。

4. **サーバーの始動:**

以下のスニペットは、コンテナー・サービスとカタログ・サービスの両方をホストする ObjectGrid サーバーを開始します。これを見て分かるように、サーバーを開始するために呼び出す必要のあるメソッドは、Bean ファクトリーからの Bean "container" の get だけです。これは、ロジックの大部分を Spring 構成に移すことになり、プログラミングの複雑さが軽減されます。

```
public class ShardServer extends TestCase
{
    Container container;
    org.springframework.beans.factory.BeanFactory bf;

    public void startServer(String cep)
    {
        try
        {
            bf = new org.springframework.context.support.ClassPathXmlApplicationContext(
```

```
                "/com/ibm/ws/objectgrid/test/springshard/Grid_spring.xml", ShardServer.class);
            container = (Container)bf.getBean("container");
        }
        catch(Exception e)
        {
            throw new ObjectGridRuntimeException("Cannot start OG container", e);
        }
    }

    public void stopServer()
    {
        if(container != null)
            container.teardown();
    }
}
```

関連概念:

Java 365 ページの『Spring Framework の概要』
Spring は、Java アプリケーションの開発用のフレームワークです。WebSphere eXtreme Scale では、 Spring を使用してトランザクションを管理し、デプロイされたメモリー内データ・グリッドに含まれるクライアントおよびサーバーの構成を行うことがサポートされています。

Java 745 ページの『Spring 拡張 Bean および名前空間のサポート』
WebSphere eXtreme Scaleには、objectgrid.xml ファイル内で拡張ポイントとして使用するために Plain Old Java Object (POJO) を宣言する機能があり、Bean を指定してからクラス名を指定する方法が提供されています。 通常、指定されたクラスのインスタンスが作成され、それらのオブジェクトはプラグインとして使用されます。eXtreme Scale は、これらのプラグイン・オブジェクトのインスタンスの取得を Spring に委任できます。アプリケーションが Spring を使用する場合は、通常、このような POJO をアプリケーションの残り部分に接続する必要があります。

関連資料:

Java 743 ページの『Spring が管理する拡張 Bean』
objectgrid.xml ファイル内で拡張ポイントとして使用する Plain Old Java Object (POJO) を宣言できます。 Bean の名前を指定し、クラス名を指定すると、eXtreme Scale は通常、指定されたクラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスをプラグインとして使用します。WebSphere eXtreme Scale は現在、このプラグイン・オブジェクトのインスタンスを取得するための Bean ファクトリーとして機能するように Spring に委任することができます。

Java Spring 記述子 XML ファイル
Spring 記述子 XML ファイルを使用して、eXtreme Scale を構成して Spring と統合します。

Java Spring objectgrid.xsd ファイル
Spring objectgrid.xsd ファイルを使用して、 eXtreme Scale を Spring と統合し、eXtreme Scale トランザクションの管理と、クライアントおよびサーバーの構成を行います。

Spring フレームワークでのクライアントの構成

Java

Spring Framework を使用して、クライアント・サイドの ObjectGrid 設定をオーバーライドできます。

このタスクについて

以下の例の XML ファイルは、ObjectGridConfiguration エレメントをビルドし、それをクライアント・サイド設定をオーバーライドするために使用する方法を示しています。 プログラマチックな構成を使用するか、ObjectGrid 記述子 XML ファイルを構成して、同様の構成を作成することもできます。

ObjectGridClientBean Bean および ObjectGridCatalogServiceDomainBean Bean を使用して Spring Framework バージョン 3.1 のキャッシュ抽象化をサポートする方法については、Spring キャッシュ・プロバイダーの構成を参照してください。

手順

1. Spring フレームワークを使用して、XML ファイルを作成してクライアントを構成します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE beans PUBLIC "-//SPRING//DTD BEAN//EN"
  "http://www.springframework.org/dtd/spring-beans.dtd">
<beans>
  <bean id="companyGrid" factory-bean="manager" factory-method="getObjectGrid"
    singleton="true">
    <constructor-arg type="com.ibm.websphere.objectgrid.ClientClusterContext">
      <ref bean="client" />
    </constructor-arg>
    <constructor-arg type="java.lang.String" value="CompanyGrid" />
</bean>

  <bean id="manager" class="com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridManagerFactory"
    factory-method="getObjectGridManager" singleton="true">
    <property name="overrideObjectGridConfigurations">
      <map>
        <entry key="DefaultDomain">
          <list>
            <ref bean="ogConfig" />
          </list>
        </entry>
      </map>
    </property>
  </bean>

  <bean id="ogConfig"
    class="com.ibm.websphere.objectgrid.config.ObjectGridConfigFactory"
    factory-method="createObjectGridConfiguration">
    <constructor-arg type="java.lang.String">
      <value>CompanyGrid</value>
    </constructor-arg>
    <property name="plugins">
      <list>
   <bean class="com.ibm.websphere.objectgrid.config.ObjectGridConfigFactory"
         factory-method="createPlugin">
         <constructor-arg type="com.ibm.websphere.objectgrid.config.PluginType"
           value="TRANSACTION_CALLBACK" />
         <constructor-arg type="java.lang.String"
           value="com.company.MyClientTxCallback" />
       </bean>
       <bean class="com.ibm.websphere.objectgrid.config.ObjectGridConfigFactory"
         factory-method="createPlugin">
         <constructor-arg type="com.ibm.websphere.objectgrid.config.PluginType"
           value="OBJECTGRID_EVENT_LISTENER" />
         <constructor-arg type="java.lang.String" value="" />
       </bean>
     </list>
 </property>
     <property name="backingMapConfigurations">
       <list>
    <bean class="com.ibm.websphere.objectgrid.config.ObjectGridConfigFactory"
          factory-method="createBackingMapConfiguration">
          <constructor-arg type="java.lang.String" value="Customer" />
            <property name="plugins">
     <bean class="com.ibm.websphere.objectgrid.config.ObjectGridConfigFactory"
                factory-method="createPlugin">
                <constructor-arg type="com.ibm.websphere.objectgrid.config.PluginType"
    value="EVICTOR" />
  <constructor-arg type="java.lang.String"
                  value="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.LRUEvictor" />
```

```
                </bean>
              </property>

            </bean>
            <bean class="com.ibm.websphere.objectgrid.config.ObjectGridConfigFactory"
              factory-method="createBackingMapConfiguration">
                <constructor-arg type="java.lang.String" value="OrderLine" />
                     <property name="timeToLive" value="800" />
    <property name="ttlEvictorType">
                    <value type="com.ibm.websphere.objectgrid.
           TTLType">LAST_ACCESS_TIME</value>
    </property>
             </bean>
           </list>
         </property>
       </bean>

       <bean id="client" factory-bean="manager" factory-method="connect"
         singleton="true">
         <constructor-arg type="java.lang.String">
      <value>localhost:2809</value>
         </constructor-arg>
    <constructor-arg
           type="com.ibm.websphere.objectgrid.security.
       config.ClientSecurityConfiguration">
           <null />
         </constructor-arg>
    <constructor-arg type="java.net.URL">
      <null />
         </constructor-arg>
       </bean>
</beans>
```

2. 作成した XML ファイルをロードし、ObjectGrid をビルドします。

```
BeanFactory beanFactory = new XmlBeanFactory(newUrlResource
  ("file:test/companyGridSpring.xml"));
ObjectGrid companyGrid = (ObjectGrid) beanFactory.getBean("companyGrid");
```

   XML 記述子ファイルの作成について詳しくは、365 ページの『Spring Framework の概要』を参照してください。

REST ゲートウェイを使用したデータ・グリッド・アプリケーションの開発

Representational State Transfer (REST) ゲートウェイを使用して、集合がホスティングする単純データ・グリッドにアクセスできます。この REST ゲートウェイは、非 Java 環境からデータ・グリッドにアクセスする必要があるときに便利です。

始める前に

- **8.6+** REST ゲートウェイは、WebSphere eXtreme Scale、バージョン 8.6 以降で使用できます。

このタスクについて

REST ゲートウェイを使用して、DataPower® XI50 アプライアンスや .NET アプリケーションなどの非 Java 環境から単純データ・グリッドのデータにアクセスします。REST ゲートウェイを使用すると、Java ベースの ObjectMap API が使用する IBM オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) をホスティングできない Java 仮想マシンからマップ・データにアクセスすることもできます。

トランザクション

WebSphere eXtreme Scaleに対する各 REST 操作により、データ・グリッドへの独立したトランザクションが開始して終わります。複数の操作をチェーニングして、単一トランザクションにまとめることはできません。

ロード・バランシング

REST ゲートウェイを使用するときは、クライアントの責任において、WebSphere eXtreme Scale集合への要求のロード・バランスを取る必要があります。クライアント・プログラムでは、外部ロード・バランサーを使用するか、使用する HTTP クライアントにロジックを追加できます。

セキュリティー

REST ゲートウェイを介した通信はセキュア構成にはなりません。 REST ゲートウェイでアクセス制御を使用可能にするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで Web アプリケーション・セキュリティーを参照してください。

WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスへの関係

REST ゲートウェイは、Microsoft ADO.NET データ・サービス・インターフェースを実装する WebSphere eXtreme Scale REST データ・サービスとは別個のエンティティーです。

REST ゲートウェイ: URI フォーマット

特定のフォーマットで URI を指定すると、単純データ・グリッドにアクセスし、操作を実行できます。

URI フォーマット

WebSphere eXtreme Scale上の単純データ・グリッドにアクセスするための REST URI フォーマットは次のとおりです。

```
/[context_root]/datacaches/[grid_name]/[map_name]/[key]
```

デフォルトのコンテキスト・ルートは `resources` です。

ホスト名 `mydatagrid.ibm.com` を持つ、`MyMap` という名前の単純データ・グリッドを作成した場合、キー名 `my.data.item` にアクセスするための URL は、結果として次のようになります。

```
http://mydatagrid.ibm.com/resources/datacaches/MyDataGrid/MyMap/my.data.item
```

前の例では、`MyDataGrid` グリッド内の `MyMap` マップが使用されます。このマップに存続時間 (TTL) の期限はありません。データ・グリッド内に配置された項目は、明示的に削除されるまでデータ・グリッド内にとどまります。 TTL の期限を構成するには、757 ページの『REST ゲートウェイの例: 存続時間 (TTL) の有効期限』を参照してください。

REST ゲートウェイ: データ・フォーマット

REST ゲートウェイは、HTTP 要求内の Content-Type ヘッダーを使用して、データ・グリッドに保管するデータのデータ・フォーマットを判定します。

データ・フォーマット

REST ゲートウェイは、HTTP 要求内の Content-Type ヘッダーを使用して、データ・グリッド内に保管するデータのデータ・フォーマットを判定します。タイプが application/xml のコンテンツを挿入した場合に、アプリケーションが同じキャッシュ・キーに対して GET 操作を実行すると、応答の本体と Content-type は同じフォーマット・タイプになります。この例の場合、応答の本体は application/xml フォーマットになります。複数のコンテンツ・タイプのデータを同一データ・グリッドに保管できます。以下に、有効なコンテンツ・タイプの例をいくつか示します。

表 24. HTTP 要求内の content-type ヘッダーのコンテンツ・タイプ

コンテンツ・タイプ	用途
application/xml	XML
application/json	JavaScript データ
application/octet-stream	シリアライズド・オブジェクト、汎用データ

REST ゲートウェイ: REST 操作

HTTP POST、GET、および DELETE 操作を使用して、データ・グリッドのデータの挿入、更新、取得、および削除を行います。

REST 操作

表 25. 操作、それに相当する HTTP メソッド、および応答コードの定義

操作	HTTP メソッド	応答コード
挿入または更新	POST	• 200 CREATED: データは正常にデータ・グリッドに挿入されたか、更新されました。 • 400 BAD REQUEST: データの挿入操作または更新操作は正常に完了しませんでした。
取得	GET	• 200 OK: 直前の挿入操作または更新操作の応答の本体と content-type が取得されました。 • 404 NOT FOUND: 指定されたキーがデータ・グリッド内に存在しません。 • 400 BAD REQUEST: データ・グリッドは要求を処理できませんでした。

表 25. 操作、それに相当する HTTP メソッド、および応答コードの定義 (続き)

操作	HTTP メソッド	応答コード
削除	DELETE	• 200 NO CONTENT: 項目がデータ・グリッドから削除されました。 • 400 BAD REQUEST: データ・グリッドは要求を処理できませんでした。

REST ゲートウェイの例: データ・グリッドのマップ項目の挿入と取得

HTTP メソッドの POST および GET を使用して、データ・グリッドのマップ項目を挿入および取得できます。

例: 挿入操作

定義済み URI とデータ・フォーマットを使用して、データ・グリッドに情報を挿入できます。次の例では、キー「bob」を MyGrid グリッドと MyGrid マップに挿入します。

```
POST /resources/datacaches/MyGrid/MyGrid/bob
Content-type: application/xml
<mydata>this is some data</mydata>
```

例: 取得操作

前の例で挿入したキーを取得するには、次の URI を使用できます。

```
GET /resources/datacaches/MyGrid/MyGrid/bob
```

GET 操作は、個々のキーに対して実行しなければなりません。すべてのマップ項目を取得することはできません。

REST ゲートウェイの例: データ・グリッドのマップ項目のクリア

REST ゲートウェイの HTTP DELETE メソッドを使用して、データ・グリッド内のマップをクリアできます。

個々の項目のクリア

個々の項目を削除するには、DELETE メソッドとオブジェクトのキー名を使用します。

```
DELETE http://mydatagrid.ibm.com/resources/datacaches/MyDataGrid/MyDataGrid/my.data.item
```

データ・グリッド上のマップ全体のクリア

データ・グリッド内のマップ全体をクリアするには、URI のキー部分を省略して HTTP DELETE メソッドを使用します。例えば、MyDataGrid データ・グリッド上の MyDataMap.LUT マップをクリアするには、次の操作を使用します。

```
DELETE http://mydatagrid.ibm.com/resources/datacaches/MyDataGrid/MyDataMap.LUT
```

REST ゲートウェイの例: 動的マップの作成

アプリケーションの必要に応じて、マップ・テンプレートを使用してマップを作成することもできます。

動的マップの作成

あるマップに対して最初の操作を実行したとき、そのマップがマップ・テンプレートと一致しても、まだ作成されていないマップであると、新規動的マップが作成されます。例えば、新規動的マップを作成するには、GET、DELETE、または POST 操作に次の URI を使用します。

```
http://mydatagrid.ibm.com/resources/datacaches/MyDataGrid/MyMap1/a.key
```

上記の例では、動的に作成されるマップは `MyMap1` で (マップ・テンプレート名は `MyMap.*`)、そのマップ内の `template` 属性は `true` に設定されています。

動的マップを命名する方法について詳しくは、420 ページの『動的マップの構成オプション』 を参照してください。

REST ゲートウェイの例: 存続時間 (TTL) の有効期限

WebSphere eXtreme Scale 内のキーで TTL 有効期限を設定することができます。

例

TTL 値を設定するには、値を秒数で指定した TTL 要求パラメーターを提供します。例えば、`a.key` キーに対して TTL 値 600 秒を設定するには、HTTP POST メソッドを使用して値をデータ・グリッドに挿入または更新するときに `ttl` 要求パラメーターを指定します。

```
http://mydatagrid.ibm.com/resources/datacaches/MyDataGrid/MyMap.LUT/a.key?ttl=600
```

.NET アプリケーションの開発

.NET

Java アプリケーションと同じデータ・グリッドを使用する Microsoft .NET アプリケーションを開発できます。

関連情報:

.NET 8.6+ 273 ページの『入門チュートリアル・レッスン 3.3: .NET サンプル・クライアント・アプリケーションの実行』
以下のステップを使用して、データ・グリッドと対話する .NET クライアント・アプリケーションを実行します。この例では、カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびクライアントがすべて単一のサーバー上で実行されます。

.NET 開発環境の設定

.NET

Microsoft Visual Studio で WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET を使用するには、開発環境をインストールし、WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET アセンブリーを使用するようにプロジェクトを構成する必要があります。

始める前に

- サポートされる Microsoft Visual Studio リリースのリストについては、339 ページの『Microsoft .NET に関する考慮事項』を参照してください。
- WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET をインストールします。インストール・ウィザードで、「**カスタム**」パスを選択し、開発環境を選択します。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET のインストールを参照してください。

手順

1. Microsoft Visual Studio 環境で、プロジェクトを開きます。
2. WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET アセンブリーへの参照を追加します。 アセンブリーは、*net_client_home*¥bin ディレクトリーにあります。IBM.WebSphere.Caching.dll ファイルを選択します。
3. WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API を使用するために、以下の行をアプリケーションに追加します。

```
using IBM.WebSphere.Caching;
using IBM.WebSphere.Caching.Map;
```

タスクの結果

アセンブリーを開発環境に統合すると、WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 用に IntelliSense が使用可能になります。

次のタスク

クライアント・アプリケーションで WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API を使用します。API 資料へのアクセスについて詳しくは、『WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセス』を参照してください。

関連情報:

.NET 8.6+ 264 ページの『入門チュートリアル・レッスン 2.2: .NET クライアント・アプリケーションの作成』
データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる .NET クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセス

.NET

WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料へのアクセスは、.chm ファイル内でも、インフォメーション・センターの API 資料を表示しても行うことができます。

手順

次のいずれかのオプションを使用して WebSphere eXtreme Scale クライアント for .NET API 資料を開きます。

- 製品と一緒にインストールされる .NET Client API 資料を使用します。 .NET クライアント API 資料をローカルで開くには、*net_client_home*¥doc¥IBM.WebSphere.Caching.chm ファイルを開きます。
- インフォメーション・センターの API 資料を閲覧します。 詳しくは、Client for .NET API 資料を参照してください。

関連情報:

.NET 8.6+ 264 ページの『入門チュートリアル・レッスン 2.2: .NET クライアント・アプリケーションの作成』
データ・グリッドのデータを挿入、削除、更新、および取得するには、クライアント・アプリケーションを作成する必要があります。入門用サンプルには、独自のクライアント・アプリケーションの作成方法を学習できる .NET クライアント・アプリケーションが組み込まれています。

.NET 8.6+ 273 ページの『入門チュートリアル・レッスン 3.3: .NET サンプル・クライアント・アプリケーションの実行』
以下のステップを使用して、データ・グリッドと対話する .NET クライアント・アプリケーションを実行します。この例では、カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびクライアントがすべて単一のサーバー上で実行されます。

Java と .NET クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java と .NET クラス間でのデータ・グリッド・データの共有を使用可能にします。

始める前に

- IBM eXtremeIO が構成されている必要があります。詳しくは、 132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』を参照してください。
- ObjectGrid 記述子 XML ファイルの copyMode 属性が COPY_TO_BYTES に設定されている必要があります。詳しくは、 134 ページの『eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成』を参照してください。

このタスクについて

既存の Java クラスがあり、対応する C# クラスを作成する場合は、ClassAlias 注釈と FieldAlias 注釈の使用を検討することができます。このシナリオでは、Java クラス名を含む注釈を C# クラスに追加できます。ClassAlias および FieldAlias 注釈について詳しくは、 139 ページの『ClassAlias および FieldAlias 注釈』を参照してください。

手順

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java クラスと C# クラス間でオブジェクトを相関付けます。 Java

Java

```
@ClassAlias("Employee")
class com.company.department.Employee {

     @FieldAlias("id")
     int myId;

      String name;
}
```

図 45. ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用した Java の例

.NET

.NET

```
[ ClassAlias( "Employee") ]
class Com.MyCompany.Employee {

     [ FieldAlias("id") ]
      int identifier;

      string name;
}
```

図 46. ClassAlias および FieldAlias 属性を使用した .NET の例

関連概念:

8.6+ 139 ページの『ClassAlias および FieldAlias 注釈』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、クラス間でのデータ・グリッドのデータの共有を可能にします。 2 つの Java クラス間または Java クラスと .NET クラス間でデータを共有することができます。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

8.6+ 268 ページの『レッスン 2.3: エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの作成』
Java クライアントと .NET クライアントの両方が同じデータ・グリッドを更新できるエンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを作成するには、ご使用のクラスが互換性を持つようにする必要があります。入門用サンプル・アプリケーションでは、.NET サンプル・アプリケーションが Java デフォルトと一致する別名を持っています。

ClassAlias および FieldAlias 注釈

ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、クラス間でのデータ・グリッドのデータの共有を可能にします。 2 つの Java クラス間または Java クラスと .NET クラス間でデータを共有することができます。

2 つのクラスを同じ名前およびフィールドで定義した場合は、データ・グリッドのデータは自動的にクラス間で共有されます。例えば、Customer1 クラスが Java アプリケーションにあり、同じフィールドを持つ Customer1 クラスが .NET アプリケーションにある場合は、データはこれらのクラス間で共有されます。これは、クラス名がクラス修飾子も含み、クラス修飾子がまた Java でパッケージ名であり、C# で名前空間であることを仮定しています。名前空間とパッケージ名は一致するため、パッケージ名と名前空間は自動的に共有されます。次の例を参照してください。名前は両方とも大/小文字を区別しません。

```
Java:
package com.mycompany.app
public class SampleClass {
int field1;
String field2;
}

C#
namespace Com.MyCompany.App
public class SampleClass {
int field1;
string field2;
}
```

ただし、異なる名前を持つクラス間でデータを相関することもできます。データ・グリッドに保管するデータを異なるクラス名間で相関するには、ClassAlias または FieldAlias 注釈を使用します。

2 つの Java アプリケーション間: 異なる名前を持つ 2 つの異なるクラスを別々の Java アプリケーション環境で定義することができます。同じ ClassAlias アノテーシ

ョンを持つクラスにマークを付けることによって、この 2 つのクラス間ですべてのフィールドおよびフィールド・タイプが突き合わされます。これらのクラスは、異なるクラス名を持っている場合でも、同じクラス・タイプ ID で相関されます。そのため、異なる Java アプリケーション・ランタイムでは、同じクラス・タイプ ID とメタデータがこれらのクラス間で再使用されます。

Java アプリケーションと .NET アプリケーション間: C# アプリケーション内で類似のアノテーションを使用して、C# クラスを Java クラスと相関させることができます。クラス C# に対して定義されている ClassAlias 属性およびフィールドが、同じ ClassAlias アノテーションを持つ Java クラスに突き合わされます。

関連タスク:

8.6+ 138 ページの『Java と .NET クラスを相関付けるための ClassAlias および FieldAlias 注釈の定義』
ClassAlias および FieldAlias 注釈を使用して、Java と .NET クラス間でのデータ・グリッド・データの共有を使用可能にします。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

8.6+ 268 ページの『レッスン 2.3: エンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションの作成』
Java クライアントと .NET クライアントの両方が同じデータ・グリッドを更新できるエンタープライズ・データ・グリッド・アプリケーションを作成するには、ご使用のクラスが互換性を持つようにする必要があります。入門用サンプル・アプリケーションでは、.NET サンプル・アプリケーションが Java デフォルトと一致する別名を持っています。

PartitionKey 注釈を使用したキーから区画へのマップ

PartitionKey 別名を使用して、データが保存される区画を判別するためにハッシュ・コード計算を実行するフィールドまたは属性を識別します。 PartitionKey 注釈は、キー属性でのみ有効です。

始める前に

eXtreme Data Format を使用している必要があります。詳しくは、 134 ページの『eXtreme Data Format (XDF) を使用するためのデータ・グリッドの構成』を参照してください。

このタスクについて

PartitionKey 別名を設定して、複数のクラスでデータが同じ区画に保存されるようにすることができます。例えば、PartitionKey 値を departmentID キーに設定した場合は、従業員レコードは、同じ区画に配置されることになります。

PartionableKey インターフェースは既存の Java インターフェースであり、C# の PartitionableKey 注釈よりも優先されます。

手順

- Java Java アプリケーションのフィールドに PartitionKey 注釈を定義します。 Java

```
class Employee {
    int empId;

    @PartitionKey(order = 0)
    int deptId;

}
```

  複数のキーで PartitionKey 注釈を設定できます。また、クラスで PartitionKey 別名を設定できます。Java アプリケーションで PartitionKey 注釈を設定する方法のさらなる例については、『Java API documentation: Annotation Type PartitionKeys』を参照してください。

- .NET .NET アプリケーションのフィールドで PartitionKey 属性を定義します。

```
class Employee {
    int empId;

    [PartitionKey]
    int deptId;
}
```

  .NET クラスでも PartitionKey 属性を設定できます。詳しくは、『.NET API documentation: PartitionKeyAttribute Class』を参照してください。

.NET 用のデータ・グリッド・セキュリティーおよび SSL の構成

.NET

Secure Sockets Layer (SSL) を介して通信し、ユーザー/パスワード認証ロジックを使用するように .NET および Java を構成できます。

始める前に

ご使用の環境用の `key.jks` ファイルおよび `trust.jks` ファイルを用意しておく必要があります。鍵ストア・ファイルおよびトラストストア・ファイルの作成について詳しくは、39 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 6』を参照してください。

手順

1. サーバーでセキュリティーを使用可能にして構成します。 セキュリティーがサーバーでまだ構成されていない場合は、以下の手順を使用して、外部オーセンティケーター・サンプルでセキュリティーを構成します。
   a. サンプル・セキュリティー・ファイルを取得します。 `security_extauth.zip` ファイルのサンプル・ファイルを、WebSphere eXtreme Scale wiki からダウンロードします。
      - `xsjaas3.config`: Java Authentication and Authorization Service (JAAS) 構成を定義します。

- sampleKS3.jks: JAAS ユーザーおよびパスワードの値の鍵ストアが入っています。
- security3.xml: セキュリティーに使用するオーセンティケーターを定義します。

b. xsjaas3.config ファイルを編集し、sampleKS3.jks ファイルのパスを修正します。

c. サンプル sampleKS3.jks ファイルではなく、独自の秘密鍵ストアを生成する場合は、**keytool** ユーティリティーを使用して秘密鍵を生成します。

```
keytool -genkey -alias myalias -keysize 2048 -keystore key.jks -keyalg rsa -dname
"CN=www.mydomain.com" -storepass password -keypass password -validity 3650
```

d. sampleServer.properties を編集して、セキュリティーを使用可能にします。 sampleServer.properties ファイルは、*wxs_install_root*¥properties ディレクトリーにあります。以下のプロパティー値のコメントを外して編集します。

```
securityEnabled=true
secureTokenManagerType=none
alias=ogsample
contextProvider=IBMJSSE2
protocol=SSL
keyStoreType=JKS
keyStore=../../../../xio.test/etc/test/security/key.jks
keyStorePassword=ogpass
trustStoreType=JKS
trustStore=../../../../xio.test/etc/test/security/trust.jks
trustStorePassword=ogpass
```

e. カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動します。

```
startXsServer.bat cs0 -catalogServiceEndPoints cs0:localhost:6600:6601 -listenerPort 2809 -objectgridFile gettingstarted¥xml¥objectgrid.xml
-deploymentPolicyFile gettingstarted¥xml¥deployment.xml -serverProps ..¥properties¥sampleServer.properties
-clusterSecurityFile security3.xml -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="xsjaas3.config"

startXsServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -objectgridFile gettingstarted¥xml¥objectgrid.xml
-deploymentPolicyFile gettingstarted¥xml¥deployment.xml -serverProps ..¥properties¥sampleServer.properties
-clusterSecurityFile security3.xml -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="xsjaas3.config"
```

2. .NET クライアント用のセキュリティーを構成します。

a. オプション: keytool ユーティリティーを使用して、サーバー用に構成した key.jks ファイルから公開証明書を抽出します。

```
keytool -export -alias myalias -keystore key.jks -file public.cer -storepass password
```

証明書管理ツール certmgr.msc を使用して、この公開鍵を Windows の証明書ストアにインポートして、鍵を「信頼されたルート証明機関」または「信頼されたユーザー」証明書フォルダーにインポートします。
(client.properties ファイルの **keyStore** プロパティーは、このファイルを指すことができます)

b. Client.Net.properties ファイルを編集して、以下のプロパティーの値を含めます。

```
securityEnabled=true
credentialAuthentication=supported
authenticationRetryCount=3
credentialGeneratorAssembly=IBM.WebSphere.Caching.CredentialGenerator,Version=8.6.0.0,
Culture=neutral,PublicKeyToken=b439a24ee43b0816
credentialGeneratorProps=manager manager1
transportType=ssl-supported
publicKeyFile=<name>.cer
```

credentialGeneratorProps プロパティーの値 manager manager1 は、Credential オブジェクトでサーバーに提供されるユーザー名とパスワードの値として使用されます。

publicKeyFile プロパティーは、.NET ランタイムの相対パスとして設定されます。**publicKeyFile** プロパティーが設定されていない場合は、Windows 証明書ストアで public.cer ファイルが検索されます。 **publicKeyFile** プロパティーが設定されている場合は、指定されたファイルが SSL 公開証明書ファイルとして使用されます。指定されたファイルが見つからない場合は、.NET クライアントは、一致する public.cer ファイルを証明書ストアで見つけようとします。

c. *net_client_home*¥IBM.WebSphere.Caching.CredentialGenerator.dll を *net_client_home*¥sample¥SimpleClient¥bin¥<*ConfigurationName*> ディレクトリーにコピーします。

d. *ConfigurationName* プロジェクト・コンテキストを使用してサンプルをビルドします。サンプルをサーバーに対して実行します。

.NET クライアント認証のプログラミング

.NET

.NET クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するには、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装する必要があります。これらのインターフェースでは、データ・グリッドに渡されてサーバー・サイドで解釈される資格情報オブジェクトが生成されます。サーバー・サイドで、対応するプラグインが資格情報オブジェクトを解釈します。

このタスクについて

認証を実行するには、.NET アプリケーションが以下のインターフェースを実装している必要があります。

- ICredential: Credential は、クライアント資格情報 (ユーザー ID とパスワードのペアなど) を表します。
- ICredentialGenerator: CredentialGenerator は、資格情報を生成するための資格情報ファクトリーを表します。

.NET クライアント・アプリケーションが認証を必要とするサーバーに接続すると、クライアントはクライアント資格情報を提供するように要求されます。クライアント資格情報は、ICredential インターフェースによって表されます。クライアント資格情報には、ユーザー名とパスワードのペア、Kerberos チケット、クライアント証明書、またはクライアントとサーバーが同意する任意の形式でのデータがあります。このインターフェースでは、equals(Object) メソッドおよび hashCode メソッドを定義します。 Credential オブジェクトをサーバー・サイドの鍵として使用することによって認証済み Subject オブジェクトがキャッシュされるため、この 2 つのメソッドは重要です。ICredentialGenerator インターフェースを使用して資格情報を生成することもできます。このインターフェースは、資格情報に有効期限がある場合に役立ちます。 Credential プロパティーを取得するごとに、新規資格情報が生成されます。

また、提供されている CredentialGenerator プラグインを使用して、Client.Net.Properties ファイルの **Client.Net.Properties credentialGeneratorProps=** 設定に基づいた資格情報を作成することもできます。資格情報プラグインを定義する追加設定は、**credentialGeneratorAssembly** および **credentialGeneratorClass** です。

手順

.NET クライアント・アプリケーションで、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装します。 以下の例を使用して、アプリケーションを開発できます。

- 『例: .NET アプリケーション用のユーザー・パスワード資格情報の実装』
- 768 ページの『例: .NET アプリケーション用のユーザー資格情報生成プログラムの実装』

関連資料:

『例: .NET アプリケーション用のユーザー・パスワード資格情報の実装』
この例を使用して、ICredential インターフェースの実装を独自に作成することができます。ユーザー・パスワードの資格情報では、ユーザー ID とパスワードを保管します。

768 ページの『例: .NET アプリケーション用のユーザー資格情報生成プログラムの実装』
この例を使用して、ICredentialGenerator インターフェースの実装を独自に作成することができます。このインターフェースはユーザー ID およびパスワードを受け取ります。 UserPasswordCredential オブジェクトには、読み取り専用の資格情報プロパティーから取得される、ユーザー ID およびパスワードが含まれています。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

ICredential インターフェース

ICredentialGenerator インターフェース

例: .NET アプリケーション用のユーザー・パスワード資格情報の実装

.NET

この例を使用して、ICredential インターフェースの実装を独自に作成することができます。ユーザー・パスワードの資格情報では、ユーザー ID とパスワードを保管します。

UserPasswordCredential.cs

```
// Module  :  UserPasswordCrediential.cs

using System;
using IBM.WebSphere.Caching.Security;
```

```
namespace com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins
{
    public class UserPasswordCredential : ICredential
    {
        private String ivUserName;

        private String ivPassword;

        /// <summary>
        ///Creates a UserPasswordCredential with the specified user name and
        /// password.
        ///
        /// ArgumentException if userName or password is null
        /// </summary>
        /// <param name="userName">the user name for this credential</param>
        /// <param name="password">the password for this credential</param>
        public UserPasswordCredential(String userName, String password)
        {
            if (userName == null || password == null) {
                throw new ArgumentException("User name and password cannot be null.");
            }
            this.ivUserName = userName;
            this.ivPassword = password;
        }

        /// <summary>Gets the user name for this credential.</summary>
        /// <returns>the user name argument that was passed to the constructor
        ///or the setUserName(String) method of this class </returns>
        public String GetUserName() {
            return ivUserName;
        }

        /// <summary>Sets the user name for this credential.
        ///ArgumentException if userName is null
        /// </summary>
        /// <param name="userName">userName the user name to set.</param>
        public void SetUserName(String userName) {
            if (userName == null) {
                throw new ArgumentException("User name cannot be null.");
            }
            this.ivUserName = userName;
        }

        /// <summary>Gets the password for this credential.
        /// </summary>
        /// <returns>the password argument that was passed to the constructor or the setPassword(String) method of this class</returns>
        public String GetPassword() {
            return ivPassword;
        }

        /// <summary>Sets the password for this credential.
        ///ArgumentException if password is null
        /// </summary>
        /// <param name="password">the password to set.</param>
        public void SetPassword(String password) {
            if (password == null)
            {
                throw new ArgumentException("Password cannot be null.");
            }
            this.ivPassword = password;
        }

        /// <summary>Checks two UserPasswordCredential objects for equality.
        ///<p>
        /// Two UserPasswordCredential objects are equal if and only if their user names
        /// and passwords are equal.
        /// </summary>
        /// <param name="o">the object we are testing for equality with this object.</param>
        /// <returns>true if both UserPasswordCredential objects are equivalent.</returns>
        public bool Equals(ICredential credential)
        {
            if (this == credential) {
                return true;
            }
            if (credential is UserPasswordCredential) {
                UserPasswordCredential other = (UserPasswordCredential)credential;
                return other.ivPassword.Equals(ivPassword) && other.ivUserName.Equals(ivUserName);
            }
            return false;
```

```
        }

        /// <summary>Returns the hashcode of the UserPasswordCredential object.
        /// </summary>
        /// <returns>return the hash code of this object</returns>
        public override int GetHashCode() {
            int ret = ivUserName.GetHashCode() + ivPassword.GetHashCode();
            return ret;
        }

        /// <summary>this.Object as a string
        /// </summary>
        /// <returns>return the string presentation of the UserPasswordCredential object.</returns>
        public override String ToString() {
            return typeof(UserPasswordCredential).FullName + "[" + ivUserName + ",xxxxxx]";
        }

    }
}
```

関連タスク:

765 ページの『.NET クライアント認証のプログラミング』

.NET クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するには、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装する必要があります。これらのインターフェースでは、データ・グリッドに渡されてサーバー・サイドで解釈される資格情報オブジェクトが生成されます。サーバー・サイドで、対応するプラグインが資格情報オブジェクトを解釈します。

関連情報:

ICredential インターフェース

ICredentialGenerator インターフェース

例: .NET アプリケーション用のユーザー資格情報生成プログラムの実装

この例を使用して、ICredentialGenerator インターフェースの実装を独自に作成することができます。このインターフェースはユーザー ID およびパスワードを受け取ります。 UserPasswordCredential オブジェクトには、読み取り専用の資格情報プロパティーから取得される、ユーザー ID およびパスワードが含まれています。

UserPasswordCredentialGenerator.cs

```
// Module  :  UserPasswordCredientialGenerator.cs
//
// Source File Description: Reference Documentation
//
using System;
using System.Security.Authentication;
using IBM.WebSphere.Caching.Security;
using com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins;

namespace IBM.WebSphere.Caching.Security
{
    public class UserPasswordCredentialGenerator : ICredentialGenerator
    {

        private String ivUser;

        private String ivPwd;

        public ICredential Credential { get { return _getCredential(); } }

        public string Properties { set {_setProperties(value);} }

        public UserPasswordCredentialGenerator()
        {
            ivUser = null;
            ivPwd = null;
```

```
}


public UserPasswordCredentialGenerator(String user=null, String pwd=null)
{
    ivUser = user;
    ivPwd = pwd;
}

/// <summary>Creates a new UserPasswordCredential object using this object's user name and password.
/// </summary>
/// <returns>new UserPasswordCredential instance</returns>
private ICredential _getCredential()
{
    try
    {
        ICredential MyCredential = new UserPasswordCredential(ivUser, ivPwd) as ICredential;
        return (ICredential) MyCredential;
    }
    catch (Exception e)
    {
        AuthenticationException CannotGenerateCredentialException = new AuthenticationException(e.ToString());
        throw CannotGenerateCredentialException;
    }
}

/// <summary>Gets the password for this credential generator.
/// </summary>
/// <returns>the password argument that was passed to the constructor</returns>
public String getPassword()
{
    return ivPwd;
}

/// <summary>Gets the user name for this credential.
/// </summary>
/// <returns>the user argument that was passed to the constructor of this class</returns>
public String getUserName()
{
    return ivUser;
}

/// <summary>Sets additional properties namely a user name and password.
///Throws ArgumentException if the format is not valid
/// </summary>
/// <param name="properties">properties a properties string  with a user name and a password separated by a blank.</param>
private void _setProperties(string properties)
{
    String token = properties;
    char[] Seperator = { ' ' };
    String[] StringProperty = properties.Split(Seperator);
    if (StringProperty.Length != 2)
    {
        throw new ArgumentException(
            "The properties should have a user name and password and separated by a space.");
    }

    ivUser = StringProperty[0];
    ivPwd = StringProperty[1];
}

/// <summary>Checks two UserPasswordCredentialGenerator objects for equality.
///<p>
///Two UserPasswordCredentialGenerator objects are equal if and only if
///their user names and passwords are equal.
/// </summary>
/// <param name="obj">the object we are testing for equality with this object.</param>
/// <returns><code>true</code> if both UserPasswordCredentialGenerator objects are equivalent</returns>
public override bool Equals(Object obj)
{
    if (obj == this)
    {
        return true;
    }

    if (obj != null && obj is UserPasswordCredentialGenerator)
    {
        UserPasswordCredentialGenerator other = (UserPasswordCredentialGenerator)obj;
```

```
                Boolean bothUserNull = false;
                Boolean bothPwdNull = false;

                if (ivUser == null)
                {
                    if (other.ivUser == null)
                    {
                        bothUserNull = true;
                    }
                    else
                    {
                        return false;
                    }
                }

                if (ivPwd == null)
                {
                    if (other.ivPwd == null)
                    {
                        bothPwdNull = true;
                    }
                    else
                    {
                        return false;
                    }
                }
                return (bothUserNull || ivUser.Equals(other.ivUser)) && (bothPwdNull || ivPwd.Equals(other.ivPwd));
            }
            return false;
        }

        /// <summary>Returns the hashcode of the UserPasswordCredentialGenerator object.
        /// </summary>
        /// <returns>the hash code of this object</returns>
        public override int GetHashCode()
        {
           return ivUser.GetHashCode() + ivPwd.GetHashCode();
        }

    }

}
```

関連タスク:

765 ページの『.NET クライアント認証のプログラミング』

.NET クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するには、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装する必要があります。これらのインターフェースでは、データ・グリッドに渡されてサーバー・サイドで解釈される資格情報オブジェクトが生成されます。サーバー・サイドで、対応するプラグインが資格情報オブジェクトを解釈します。

関連情報:

ICredential インターフェース

ICredentialGenerator インターフェース

第 6 章 パフォーマンスのチューニング

環境の設定をチューニングして、WebSphere eXtreme Scale 環境全体のパフォーマンスを上げることができます。

オペレーティング・システムおよびネットワーク設定のチューニング

ネットワークのチューニングは、接続設定の変更によって伝送制御プロトコル (TCP) スタックの遅延を減らすことができ、TCP バッファーの変更によってスループットを改善することができます。

オペレーティング・システム

チューニングが最も少なくてすむのが Windows システムで、最も必要なのが Solaris システムです。以下の説明は、指定された各システムに固有のものであり、WebSphere eXtreme Scale パフォーマンスを向上させる可能性があります。ご使用の環境でのネットワークおよびアプリケーション負荷に応じて調整を行ってください。

Windows

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥
Tcpip¥Parameters
MaxFreeTcbs = dword:00011940
MaxHashTableSize = dword:00010000
MaxUserPort = dword:0000fffe
TcpTimedWaitDelay = dword:0000001e
```

Solaris

```
ndd -set /dev/tcp tcp_time_wait_interval 60000
fndd -set /dev/tcp tcp_keepalive_interval 15000
ndd -set /dev/tcp tcp_fin_wait_2_flush_interval 67500
ndd -set /dev/tcp tcp_conn_req_max_q 16384
ndd -set /dev/tcp tcp_conn_req_max_q0 16384
ndd -set /dev/tcp tcp_xmit_hiwat 400000
ndd -set /dev/tcp tcp_recv_hiwat 400000
ndd -set /dev/tcp tcp_cwnd_max 2097152
ndd -set /dev/tcp tcp_ip_abort_interval 20000
ndd -set /dev/tcp tcp_rexmit_interval_initial 4000
ndd -set /dev/tcp tcp_rexmit_interval_max 10000
ndd -set /dev/tcp tcp_rexmit_interval_min 3000
ndd -set /dev/tcp tcp_max_buf 4194304
```

AIX®

```
/usr/sbin/no -o tcp_sendspace=65536
/usr/sbin/no -o tcp_recvspace=65536
/usr/sbin/no -o udp_sendspace=65536
/usr/sbin/no -o udp_recvspace=65536
/usr/sbin/no -o somaxconn=10000
/usr/sbin/no -o tcp_nodelayack=1
/usr/sbin/no –o tcp_keepinit=40
/usr/sbin/no –o tcp_keepintvl=10
```

LINUX

```
sysctl -w net.ipv4.tcp_timestamps=0
sysctl -w net.ipv4.tcp_tw_reuse=1
sysctl -w net.ipv4.tcp_tw_recycle=1
sysctl -w net.ipv4.tcp_fin_timeout=30
```

```
sysctl -w net.ipv4.tcp_keepalive_time=1800
sysctl -w net.ipv4.tcp_rmem="4096 87380 8388608"
sysctl -w net.ipv4.tcp_wmem="4096 87380 8388608"
sysctl -w net.ipv4.tcp_max_syn_backlog=4096
```

HP-UX

```
ndd -set /dev/tcp tcp_ip_abort_cinterval 20000
```

ORB プロパティー

Java

(非推奨) オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) プロパティーは、データ・グリッドのトランスポート動作を変更します。これらのプロパティーは、orb.properties ファイルを使用して設定するか、WebSphere Application Server 管理コンソールで設定として設定するか、または WebSphere Application Server 管理コンソールで ORB のカスタム・プロパティーとして設定することができます。

非推奨: 8.6+ オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) は非推奨です。前のリリースで ORB を使用していなかった場合は、IBM eXtremeIO (XIO) をトランスポート・メカニズムとして使用してください。 ORB を使用している場合は、XIO を使用するように構成をマイグレーションすることを検討してください。

orb.properties

orb.properties ファイルは、java/jre/lib ディレクトリーにあります。WebSphere Application Server java/jre/lib ディレクトリーにある orb.properties ファイルを変更すると、Java ランタイム環境 (JRE) を使用しているノード・エージェントおよびその他の Java 仮想マシン (JVM) で ORB プロパティーが更新されます。この動作を望まない場合は、カスタム・プロパティーまたは ORB 設定 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してください。

デフォルトの WebSphere Application Server 設定

WebSphere Application Server には、デフォルトで、ORB に定義されたプロパティーがいくつかあります。これらの設定は、アプリケーション・サーバー・コンテナー・サービスおよびデプロイメント・マネージャーにあります。これらのデフォルト設定は、orb.properties ファイルで行われた設定をオーバーライドします。説明されたそれぞれのプロパティーについては、「**指定するところ**」のセクションを参照して、推奨値を定義する場所を決定してください。

ファイル記述子設定

UNIX システムおよび Linux システムでは、プロセス当たりに許容されるオープン・ファイルの数に制限があります。オペレーティング・システムが、許容されるオープン・ファイルの数を指定します。この値が小さすぎる場合、AIX ではメモリー割り振りエラーが発生し、多すぎるオープン・ファイルはログに記録されます。

UNIX システム端末ウィンドウで、この値をデフォルトのシステム値よりも大きく設定してください。クローンを持つ大容量 SMP マシンの場合、無限に設定してください。

AIX 構成の場合は、コマンド ulimit -n unlimited を使用して、この値を unlimited に設定します。

Solaris 構成の場合、コマンド ulimit -n 16384 を使用して、この値を 16384 に設定してください。

コマンド ulimit –a を使用すれば、現行値を表示できます。

ベースラインの設定

以下の設定は、適切なベースラインですが、必ずしもすべての環境に最適な設定とは限りません。ご使用の環境においてどの値が適切であるか、正しい決定をできるようにこれらの設定をよく理解してください。

```
com.ibm.CORBA.RequestTimeout=30
com.ibm.CORBA.ConnectTimeout=10
com.ibm.CORBA.FragmentTimeout=30
com.ibm.CORBA.LocateRequestTimeout=10
com.ibm.CORBA.ThreadPool.MinimumSize=256
com.ibm.CORBA.ThreadPool.MaximumSize=256
com.ibm.CORBA.ThreadPool.IsGrowable=false
com.ibm.CORBA.ConnectionMultiplicity=1
com.ibm.CORBA.MinOpenConnections=1024
com.ibm.CORBA.MaxOpenConnections=1024
com.ibm.CORBA.ServerSocketQueueDepth=1024
com.ibm.CORBA.FragmentSize=0
com.ibm.CORBA.iiop.NoLocalCopies=true
com.ibm.CORBA.NoLocalInterceptors=true
```

プロパティーの説明

タイムアウト設定

以下の設定は、ORB が要求の操作に見切りをつけるまで待機する時間に関係しています。これらの設定を使用して、異常な状況下で余分なスレッドが作られるのを防いでください。

要求タイムアウト

プロパティー名: com.ibm.CORBA.RequestTimeout

有効な値: 秒数を表す整数値。

推奨値: 30

指定するところ: WebSphere Application Server 管理コンソール

説明: 要求 (任意) が応答を待機する秒数。その秒数を過ぎると待機を止めます。このプロパティーは、ネットワーク停止の障害が発生した場合にクライアントがフェイルオーバーするまでに要する時間に影響します。このプロパティーの値を極端に低く設定すると、要求が誤ってタイムアウトになる可能性があります。不用意なタイムアウトを回避するためにこのプロパティーの値は慎重に考慮してください。

接続タイムアウト

プロパティー名: com.ibm.CORBA.ConnectTimeout

有効な値: 秒数を表す整数値。

推奨値: 10

指定するところ: orb.properties ファイル

説明: ソケット接続試行で待機する秒数。その秒数を過ぎると待機を止めます。このプロパティーは、要求タイムアウトと同様に、ネットワーク停止の障害が発生した場合にクライアントがフェイルオーバーするまでに要する時間に影響します。一般に、このプロパティーは要求タイムアウト値よりも小さい値に設定します。接続の確立に要する時間は比較的一定であるためです。

フラグメント・タイムアウト

プロパティー名: com.ibm.CORBA.FragmentTimeout

有効な値: 秒数を表す整数値。

推奨値: 30

指定するところ: orb.properties ファイル

説明: フラグメント要求が待機する秒数。その秒数を過ぎると待機を止めます。このプロパティーは、要求タイムアウト・プロパティーと類似しています。

スレッド・プールの設定

このプロパティーは、スレッド・プール・サイズを特定のスレッド数に制約します。サーバー要求がソケットで受信されると、そのサーバー要求をスピンオフさせるために、ORB によってスレッドが使用されます。このプロパティー値を低い値に設定すると、ソケットのキュー項目数が増加して、タイムアウトになる可能性もあります。

接続多重度

プロパティー名: com.ibm.CORBA.ConnectionMultiplicity

有効な値: クライアントとサーバーの間の接続数を表す整数値。デフォルト値は 1 です。これより大きい値に設定すると、複数接続にまたがる多重化の設定になります。

推奨値: 1

指定するところ: orb.properties ファイル**説明:** ORB が任意のサーバーとの複数の接続を使用できるようにします。理論的に、この値の設定は、複数接続にまたがる並列性を促進します。実際には、接続多重度の設定によるパフォーマンス上の利点はありません。このパラメーターは設定しないでください。

オープン接続

プロパティー名:
com.ibm.CORBA.MinOpenConnections、com.ibm.CORBA.MaxOpenConnections

有効な値: 接続数を表す整数値。

推奨値: 1024

指定するところ: WebSphere Application Server 管理コンソール**説明:** オープン接続の最小数と最大数。 ORB は、クライアントとの間に確立された接続

のキャッシュを保持します。この値を超えると、これらの接続は消去されます。接続の消去は、データ・グリッド内の動作の低下の原因になる可能性があります。

成長可能

プロパティー名: com.ibm.CORBA.ThreadPool.IsGrowable

有効な値: ブール値。`true` または `false` に設定します。

推奨値: `false`

指定するところ: `orb.properties` ファイル**説明:** `true` に設定すると、ORB が着信要求用に使用するスレッド・プールは、そのプールがサポートする以上に成長する可能性があります。プール・サイズを上回ると、要求の処理のために新規スレッドが作成されますが、そのスレッドはプールされません。値を `false` に設定することで、スレッド・プールの成長を防ぎます。

サーバー・ソケットのキュー項目数

プロパティー名: com.ibm.CORBA.ServerSocketQueueDepth

有効な値: 接続数を表す整数値。

推奨値: `1024`

指定するところ: `orb.properties` ファイル**説明:** クライアントからの着呼接続のキューの長さを指定します。 ORB は、クライアントからの着呼接続をキューに入れます。キューがフルになると、接続は拒否されます。接続の拒否は、データ・グリッド内の動作の低下の原因になる可能性があります。

フラグメント・サイズ

プロパティー名: com.ibm.CORBA.FragmentSize

有効な値: バイト数を指定する整数。デフォルトは 1024 です。

推奨値: `0`

指定するところ: `orb.properties` ファイル**説明:** ORB が要求の送信時に使用する最大パケット・サイズを指定します。要求がフラグメント・サイズ制限より大きい場合、その要求は要求フラグメントに分割されて、それぞれ別々に送信されて、サーバー上で再組み立てされます。要求のフラグメント化は、パケットの再送が必要になる可能性のある不安定なネットワークで有効です。ただし、ネットワークの信頼性が高い場合、要求をフラグメントに分割すると、不必要な処理の原因になる可能性があります。

ローカル・コピーなし

プロパティー名: com.ibm.CORBA.iiop.NoLocalCopies

有効な値: ブール値。`true` または `false` に設定します。

推奨値: `true`

指定するところ: WebSphere Application Server 管理コンソール、「**参照による受け渡し**」設定 **説明:** ORB が参照による受け渡しをするかどうかを指定します。 ORB は、デフォルトで、値の呼び出しによる受け渡しを使用します。インターフェースがローカルで開始されるとき、値の呼び出しによる受け渡しは、パスに余分なガーベッジやシリアライゼーションのコストをも

たらす原因になります。この値を true に設定すると、ORB は、値の呼び出しによる受け渡しよりも効率的な参照による受け渡し方式を使用します。

ローカル・インターセプターなし

プロパティー名: com.ibm.CORBA.NoLocalInterceptors

有効な値: ブール値。`true` または `false` に設定します。

推奨値: `true`

指定するところ: `orb.properties` ファイル **説明:** ローカル要求 (プロセス内) を行うときにも ORB が要求インターセプターを開始するかどうかを指定します。 WebSphere eXtreme Scale が使用するインターセプターは、セキュリティーと経路処理を目的とし、要求がプロセス内で処理される場合には必須ではありません。プロセス間を仲介するインターセプターは、リモート・プロシージャー・コール (RPC) 操作の場合にのみ必要です。ローカル・インターセプターなしを設定すると、ローカル・インターセプターを使用することにより生じる余分な処理を回避できます。

重要: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーを使用している場合は、com.ibm.CORBA.NoLocalInterceptors プロパティー値を `false` に設定してください。セキュリティー・インフラストラクチャーは、認証のためにインターセプターを使用します。

IBM eXtremeIO (XIO) のチューニング

XIO サーバー・プロパティーを使用して、データ・グリッド内での XIO トランスポートの動作をチューニングすることができます。

XIO をチューニングするためのサーバー・プロパティー

サーバー・プロパティー・ファイルで以下のプロパティーを設定することができます。

maxXIONetworkThreads

eXtremeIO トランスポート・ネットワーク・スレッド・プールに割り振るスレッドの最大数を設定します。

デフォルト:`50`

minXIONetworkThreads

eXtremeIO トランスポート・ネットワーク・スレッド・プールに割り振るスレッドの最小数を設定します。

デフォルト:`50`

maxXIOWorkerThreads

eXtremeIO トランスポート要求処理スレッド・プールに割り振るスレッドの最大数を設定します。

デフォルト:`128`

minXIOWorkerThreads

eXtremeIO トランスポート要求処理スレッド・プールに割り振るスレッドの最小数を設定します。

デフォルト:128

8.6+ transport

カタログ・サービス・ドメイン内のすべてのサーバーに対して使用するトランスポートのタイプを指定します。設定できる値は `XIO` または `ORB` です。

startOgServer または **startXsServer** コマンドを使用すれば、このプロパティーを設定する必要はありません。これらのスクリプトはこのプロパティーをオーバーライドします。ただし、これ以外の方法でサーバーを始動した場合は、このプロパティーの値が使用されます。

このプロパティーは、カタログ・サービスにのみ適用されます。

始動スクリプトの **-transport** パラメーターと **transport** サーバー・プロパティーの両方がカタログ・サーバーで定義されている場合は、**-transport** パラメーターの値が使用されます。

8.6+ xioTimeout

IBM eXtremeIO (XIO) トランスポートを使用しているサーバー要求のタイムアウトを秒数で設定します。設定できる値は 1 秒以上の任意の値です。

デフォルト: 30 秒

関連タスク:

132 ページの『IBM eXtremeIO (XIO) の構成』
IBM eXtremeIO (XIO) は、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) を置き換えるトランスポート・メカニズムです。

Java 仮想マシンのチューニング

Java

WebSphere eXtreme Scale の最善のパフォーマンスを得るために、Java 仮想マシン (JVM) チューニングの特定の局面をいくつか考慮してください。ほとんどの場合、特殊な JVM 設定はほとんどまたはまったく必要ありません。データ・グリッドに保管されるオブジェクトが多数ある場合は、ヒープ・サイズを適切なレベルに調整して、メモリー不足の状態で実行されるのを避けます。

IBM eXtremeMemory

eXtremeMemory を構成することにより、オブジェクトを Java ヒープでなくネイティブ・メモリーに保管できます。eXtremeMemory を構成すると、新しいトランスポート・メカニズムである eXtremeIO が使用可能になります。オブジェクトを Java ヒープから移動することで、ガーベッジ・コレクションに伴う一時停止を回避でき、より安定したパフォーマンスを得られるうえ、応答時間も予測可能になります。詳しくは、IBM eXtremeMemory の構成を参照してください。

試験済みプラットフォーム

パフォーマンス・テストは、まず AIX (32 way)、Linux (4 way)、および Windows (8 way) のコンピューターで実行されました。 ハイエンド AIX コンピューターを使用すると、大量のマルチスレッド・シナリオをテストして、競合ポイントを特定して修正できます。

ガーベッジ・コレクション

WebSphere eXtreme Scale は、要求や応答など各トランザクション、およびログ・シーケンスに関連した一時オブジェクトを作成します。これらのオブジェクトはガーベッジ・コレクションの効率に影響するため、ガーベッジ・コレクションのチューニングは重要です。

最新の JVM はすべてパラレル・ガーベッジ・コレクション・アルゴリズムを使用しています。つまり、より多くのコアを使用することでガーベッジ・コレクションの中断を減らせるようになっています。 8 個のコアを使用している物理サーバーは、4 個のコアを使用している物理サーバーよりガーベッジ・コレクションの速度が上がります。

アプリケーションにより区画ごとに大量のデータを管理する必要がある場合は、ガーベッジ・コレクションが要因になっている可能性があります。世代のコレクターが使用されている場合は、大きなヒープ (20 GB 以上) でも、ほとんどが読み取りのシナリオは正常に機能します。ただし、保有ヒープがいっぱいになった後は、コンピューターで使用可能なヒープ・サイズおよびプロセッサー数に比例して一時停止が発生します。この一時停止は、大きいヒープを持つ小さいコンピューターで大きくなる可能性があります。

Java ガーベッジ・コレクション用の IBM 仮想マシン

IBM の Java 仮想マシンの場合、更新率が高いシナリオ (トランザクションの 100% がエントリーを変更する) には **optavgpause** コレクターを使用してください。データがほとんど更新されない (10% 以下の頻度) ようなシナリオでは、**optavgpause** コレクターより **gencon** コレクターの方がより適切に機能します。両方のコレクターを使用して実験を行い、シナリオで最も適切に機能するコレクターを確認します。詳細ガーベッジ・コレクションをオンにして実行し、ガーベッジの収集に費やされている時間の割合を確認します。チューニングで問題が修正されるまでガーベッジ・コレクションで時間の 80% が費やされたシナリオが発生しました。

ガーベッジ・コレクションのメカニズムを変更するには、**-Xgcpolicy** パラメーターを使用します。**-Xgcpolicy** パラメーターの値は、使用するガーベッジ・コレクターに応じて、**-Xgcpolicy:gencon** または **-Xgcpolicy:optavgpause** に設定できます。

- WebSphere Application Server 構成では、管理コンソールで **-Xgcpolicy** パラメーターを設定します。「**サーバー**」 > 「**アプリケーション・サーバー**」 > 「**server_name**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」をクリックします。「**汎用 JVM 引数**」フィールドに、パラメーターを追加します。
- スタンドアロン構成では、**-jvmArgs** パラメーターをサーバー始動スクリプトに渡して、ガーベッジ・コレクターを指定します。 **-jvmArgs** パラメーターは、スクリプトに渡す最後のパラメーターでなければなりません。

その他のガーベッジ・コレクション・オプション

重要: Oracle JVM を使用している場合は、デフォルトのガーベッジ・コレクションの調整とポリシーのチューニングが必要となることがあります。

WebSphere eXtreme Scale は、WebSphere Real Time Java をサポートします。WebSphere Real Time Java を一緒に使用することによって、WebSphere eXtreme Scale のトランザクション処理応答はより一貫性のある、予測可能なものになります。結果として、ガーベッジ・コレクションおよびスレッド・スケジューリングの影響は大幅に小さくなります。応答時間の標準偏差が標準 Java の 10% よりも小さくなる程度まで、影響は少なくなります。

JVM パフォーマンス

WebSphere eXtreme Scale は、Java Platform, Standard Edition の各種バージョンで稼働します。WebSphere eXtreme Scale は Java SE バージョン 6 をサポートします。開発者の生産性およびパフォーマンスを向上させるためには、 Java SE バージョン 6 以降 、または Java SE バージョン 7 を使用して、アノテーションおよび改良されたガーベッジ・コレクションを活用してください。 WebSphere eXtreme Scale は、32 ビットまたは 64 ビット版の Java 仮想マシンで動作します。

WebSphere eXtreme Scale がテストされたのは、使用可能な仮想マシンの一部ですが、サポートのリストは排他的なものではありません。Edition 5 以降のどのベンダー JVM 上でも WebSphere eXtreme Scale を実行できます。ただし、ベンダー JVM で問題が発生した場合は、その JVM ベンダーにサポートを依頼する必要があります。可能であれば、 WebSphere Application Server がサポートするどのプラットフォーム上でも、WebSphere ランタイムの JVM を使用してください。

一般に、最良のパフォーマンスを得るためには Java Platform, Standard Edition の最新バージョンを使用してください。

ヒープ・サイズ

4 コア当たり 1 JVM で 1 から 2 GB のヒープをお勧めします。最適なヒープ・サイズ値は、次の要因に基づきます。

- ヒープ内のライブ・オブジェクトの数。
- ヒープ内のライブ・オブジェクトの複雑さ。
- JVM 用に使用可能なコアの数。

例えば、10 K バイトの配列を保管するアプリケーションは、POJO の複雑なグラフを使用するアプリケーションよりもずっと大きなヒープを実行できます。

スレッド数

スレッド数はいくつかの要因に依存します。単一の断片が管理できるスレッド数には制限があります。断片とは区画のインスタンスであり、プライマリーまたはレプリカとすることができます。JVM ごとの断片数が多いほど、それぞれ追加断片を持つスレッドが増えるので、データへの並行パスが多くなります。各断片は可能な限り並行ですが、それでも並行性について制限はあります。

オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) 要件

IBM SDK には、WebSphere Application Server および WebSphere eXtreme Scale を使用してテスト済みの IBM ORB 実装が組み込まれています。サポート・プロセスを簡単にするため、IBM 提供の JVM を使用してください。他の JVM 実装では、異なる ORB が使用されます。IBM ORB は、IBM 提供の Java 仮想マシンと共に

しか提供されていません。WebSphere eXtreme Scale には、操作する作業 ORB が必要です。WebSphere eXtreme Scale は、他のベンダーの ORB と一緒に使用できます。ただし、ベンダー ORB で問題が発生した場合は、その ORB ベンダーにサポートを依頼する必要があります。IBM ORB 実装は、サード・パーティーの Java 仮想マシンと互換性があり、必要な場合は置換できます。

orb.properties のチューニング

研究所では、最大 1500 の JVM のデータ・グリッドで以下のファイルが使用されました。 `orb.properties` ファイルは、ランタイム環境の `lib` フォルダーにあります。

```
# IBM JDK properties for ORB
org.omg.CORBA.ORBClass=com.ibm.CORBA.iiop.ORB
org.omg.CORBA.ORBSingletonClass=com.ibm.rmi.corba.ORBSingleton

# WS Interceptors
org.omg.PortableInterceptor.ORBInitializerClass.com.ibm.ws.objectgrid.corba.ObjectGridInitializer

# WS ORB & Plugins properties
com.ibm.CORBA.ForceTunnel=never
com.ibm.CORBA.RequestTimeout=10
com.ibm.CORBA.ConnectTimeout=10

# Needed when lots of JVMs connect to the catalog at the same time
com.ibm.CORBA.ServerSocketQueueDepth=2048

# Clients and the catalog server can have sockets open to all JVMs
com.ibm.CORBA.MaxOpenConnections=1016

# Thread Pool for handling incoming requests, 200 threads here
com.ibm.CORBA.ThreadPool.IsGrowable=false
com.ibm.CORBA.ThreadPool.MaximumSize=200
com.ibm.CORBA.ThreadPool.MinimumSize=200
com.ibm.CORBA.ThreadPool.InactivityTimeout=180000

# No splitting up large requests/responses in to smaller chunks
com.ibm.CORBA.FragmentSize=0
```

関連資料:

startOgServer スクリプト (ORB)
(非推奨) **startOgServer** スクリプトは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用するコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーを始動します。サーバーの始動時に各種パラメーターを使用して、トレースを使用可能にしたり、ポート番号を指定するなど、さまざまな設定を行うことができます。

関連情報:

IBM の Java 仮想マシンのチューニング

フェイルオーバー検出のためのハートビート間隔設定のチューニング

ハートビート間隔設定で、障害の起きたサーバーがないかを調べるシステム・チェックの間の時間を構成できます。この設定は、カタログ・サーバーにのみ適用されます。

このタスクについて

フェイルオーバーの構成は、使用している環境のタイプによって異なります。スタンドアロン環境を使用している場合は、コマンド行でフェイルオーバーを構成できます。 WebSphere Application Server Network Deployment 環境を使用している場合は、WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールでフェイルオーバーを構成する必要があります。

手順

- スタンドアロン環境のフェイルオーバーを構成します。

  カタログ・サーバーのハートビート間隔を構成するには、**startOgServer** の **-heartbeat** パラメーターまたは **startXsServer** スクリプト・ファイルを使用します。このパラメーターは以下のいずれかの値に設定します。

  表 26. ハートビート間隔

値	アクション	説明
0	標準 (デフォルト)	通常、30 秒以内にフェイルオーバーが検出されます。
-1	高速	通常、5 秒以内にフェイルオーバーが検出されます。
1	低速	通常、180 秒以内にフェイルオーバーが検出されます。

  高速のハートビート間隔は、プロセスおよびネットワークが安定している場合に役立ちます。ネットワークまたはプロセスが最適に構成されていないと、ハートビートを見逃す可能性があり、そうなった場合は誤って障害検出が示されることがあります。

- WebSphere Application Server 環境のフェイルオーバーを構成します。

  WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 以降は、WebSphere eXtreme Scale のフェイルオーバーを高速で行えるように構成できます。ハード障害の場合のデフォルトのフェイルオーバー時間は、約 200 秒です。ハード障害は、物理的なコンピューターまたはサーバーの破損、ネットワーク・ケーブルの切断、オペレーティング・システム・エラーのことです。プロセスの異常終了やソフト障害による障害は、一般的に 1 秒未満でフェイルオーバーされます。ソフト障害の障害検出は、デッド・プロセスのネットワーク・ソケットがそのプロセスをホスティングするサーバーのオペレーティング・システムにより自動的にクローズされるときに発生します。

  コア・グループのハートビート構成

  WebSphere Application Server プロセスで実行されているWebSphere eXtreme Scale は、アプリケーション・サーバーのコア・グループ設定のフェイルオーバー特性を継承します。以下のセクションでは、以下のようなさまざまなバージョンの WebSphere Application Server Network Deployment のコア・グループ・ハートビート設定を構成する方法について説明します。

  – **WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 でのコア・グループ設定を更新します。**

    バージョン 7.0 の WebSphere Application Server Network Deployment は、フェイルオーバー検出を増減するために調整できる以下の 2 つのコア・グループ設定を提供します。

    - **ハートビート伝送期間。** デフォルト値は 30000 ミリ秒です。
    - **ハートビート・タイムアウト期間。** デフォルト値は 180000 ミリ秒です。

    これらの設定を変更する方法について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センター: ディスカバリーおよび障害検出の設定を参照してください。

WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7 サーバーで 1500 ミリ秒の障害検出時間を実現するには、以下の設定を使用します。

- ハートビート伝送期間を 750 ミリ秒に設定します。
- ハートビート・タイムアウト期間を 1500 ミリ秒に設定します。

次のタスク

短いフェイルオーバー時間を指定するようにこれらの設定を変更すると、注意すべきシステム・チューニング上の問題が生じます。まず Java はリアルタイム環境ではありません。JVM に長期のガーベッジ・コレクション時間が発生すると、スレッドが遅延する可能性があります。JVM をホスティングするマシンの負荷が大きくなった (JVM 自身またはマシンで実行中の他のプロセスが原因) 場合にも、スレッドが遅延する可能性があります。スレッドが遅延された場合、ハートビートが正確な時間で送信されない可能性があります。最悪の場合、必要なフェイルオーバー時間で遅延が生じる可能性があります。 スレッドが遅延すると、誤障害検出が発生します。実動環境で誤障害検出が発生しないように、システムを調整し、サイズ設定する必要があります。これを確実にするには、適切な負荷テストが最善の策です。

注: eXtreme Scale の現行バージョンは、WebSphere Real Time をサポートします。

WebSphere Real Time を使用したガーベッジ・コレクションのチューニング

WebSphere eXtreme Scale を WebSphere Real Time と一緒に使用すると、標準 IBM Java™ SE Runtime Environment (JRE) で採用されているデフォルトのガーベッジ・コレクション・ポリシーと比べてパフォーマンス・スループットは犠牲にしますが、一貫性および予測可能性は高まります。 費用対効果の提案が変わる可能性があります。 WebSphere eXtreme Scale は、各トランザクションに関連付けられる多数の一時オブジェクトを作成します。これらの一時オブジェクトは、要求、応答、ログ・シーケンス、およびセッションを処理します。 WebSphere Real Time がない場合は、トランザクションの応答時間が数百ミリ秒まで増大することがあります。しかし、WebSphere eXtreme Scale のもとで WebSphere Real Time を使用すると、ガーベッジ・コレクションの効率が上がり、応答時間がスタンドアロン構成応答時間の 10% に減少します。

関連タスク:

各種アプリケーション・サーバー用の HTTP セッション・マネージャーの構成
WebSphere eXtreme Scale には、Web コンテナーのデフォルト・セッション・マネージャーをオーバーライドするセッション管理実装がバンドルされています。この実装は、セッション・レプリカ生成、高可用性、より優れたスケーラビリティーと構成オプションを提供します。WebSphere eXtreme Scale セッション・レプリカ生成マネージャーおよび汎用組み込み ObjectGrid コンテナーの開始を有効にします。

WebSphere Portal での HTTP セッション・マネージャーの構成
WebSphere Portal の HTTP セッションをデータ・グリッドに保持できます。

WebSphere Application Server での HTTP セッション・マネージャーの構成
WebSphere Application Server はセッション管理機能を備えていますが、要求の数が増えるとパフォーマンスが低下します。WebSphere eXtreme Scale には、セッション・レプリカ生成、高可用性、優れたスケーラビリティー、および堅固な構成オプションを備えたセッション管理実装がバンドルされています。

WebSphere eXtreme Scale と WebSphere Application Server の構成
WebSphere Application Server でカタログ・サービスおよびコンテナー・サーバー・プロセスを実行できます。これらのサーバーを構成するプロセスは、スタンドアロン構成の場合とは異なります。カタログ・サービスは、WebSphere Application Server サーバーまたはデプロイメント・マネージャーで自動的に開始できます。eXtreme Scale アプリケーションが WebSphere Application Server 環境にデプロイされて、開始されるときに、コンテナー・プロセスは開始されます。

関連資料:

startOgServer スクリプト (ORB)
(非推奨) **startOgServer** スクリプトは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用するコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーを始動します。サーバーの始動時に各種パラメーターを使用して、トレースを使用可能にしたり、ポート番号を指定するなど、さまざまな設定を行うことができます。

関連情報:

WebSphere eXtreme Scale を使用して動的キャッシュによりパフォーマンスおよびスケールを向上させるための WebSphere Commerce の構成

WebSphere Business Process Management および WebSphere Connectivity の統合

IBM の Java 仮想マシンのチューニング

スタンドアロン環境の WebSphere Real Time

WebSphere eXtreme Scale のもとで WebSphere Real Time を使用することができます。 WebSphere Real Time を使用可能にすることにより、ガーベッジ・コレクションはより予測可能になり、スタンドアロン eXtreme Scale 環境でのトランザクションの応答時間とスループットは安定した一貫性のあるものになります。

WebSphere Real Time の利点

WebSphere eXtreme Scale は、各トランザクションに関連付けられる多数の一時オブジェクトを作成します。これらの一時オブジェクトは、要求、応答、ログ・シーケンス、およびセッションを処理します。 WebSphere Real Time がない場合は、トラ

ンザクションの応答時間が数百ミリ秒まで増大することがあります。しかし、WebSphere eXtreme Scale のもとで WebSphere Real Time を使用すると、ガーベッジ・コレクションの効率が上がり、応答時間がスタンドアロン構成応答時間の 10% に減少します。

WebSphere Real Time の使用可能化

Install eXtreme Scale を実行するコンピューターに、WebSphere Real Time とスタンドアロン WebSphere eXtreme Scale をインストールしてください。 JAVA_HOME 環境変数が標準 Java SE Runtime Environment (JRE) を指すように設定してください。

インストールされた WebSphere Real Time をポイントするよう、JAVA_HOME 環境変数を設定します。その後、次のようにして WebSphere Real Time を使用可能にします。

1. 次の行からコメントを除去することによって、スタンドアロン・インストール `objectgridRoot/bin/setupCmdLine.sh | .bat` ファイルを編集します。

   ```
   WXS_REAL_TIME_JAVA="-Xrealtime -Xgcpolicy:metronome
   -Xgc:targetUtilization=80"
   ```

2. ファイルを保存します。

これで、WebSphere Real Time が使用可能になります。WebSphere Real Time を使用不可にしたい場合は、同じ行にコメントを戻します。

ベスト・プラクティス

WebSphere Real Time によって、eXtreme Scale トランザクションの応答時間はより予測可能なものになります。 その結果、eXtreme Scale トランザクションの応答時間の偏差は、WebSphere Real Time を使用すると、デフォルトのガーベッジ・コレクターを使用する標準 Java と比較して、大幅に改善されます。 eXtreme Scale とともに WebSphere Real Time を使用可能にすることは、安定度および応答時間が重要なアプリケーションを使用している場合に最適です。

このセクションで説明するベスト・プラクティスは、WebSphere eXtreme Scaleをより効率的にするチューニング方法と、予期される負荷に応じたコード例を示します。

- アプリケーションおよびガーベッジ・コレクター用のプロセッサー使用量を正しく設定する。

  WebSphere Real Time にはプロセッサー使用量を制御する機能があり、ガーベッジ・コレクションがアプリケーションに与える影響を制御し、最小化することができます。 `-Xgc:targetUtilization=NN` パラメーターを使用して、20 秒ごとにアプリケーションが使用するプロセッサーの `NN` パーセントを指定します。 WebSphere eXtreme Scale のデフォルトは 80% ですが、それとは異なる値 (例えば `70` など、ガーベッジ・コレクターにより多くのプロセッサー容量を提供する値) を設定するように `objectgridRoot/bin/setupCmdLine.sh` ファイル内のスクリプトを変更することができます。使用するアプリケーションのプロセッサー負荷を 80% 未満に保つことができる十分な数のサーバーをデプロイします。
- ヒープ・メモリーのサイズを大きく設定する。

WebSphere Real Time は正規の Java より多くのメモリーを使用するため、大きいヒープ・メモリーを持つ WebSphere eXtreme Scale を計画して、カタログ・サーバーおよびコンテナーを開始する際、**ogStartServer** コマンドの `–jvmArgs –XmxNNNM` パラメーターでヒープ・サイズを設定してください。例えば、`–jvmArgs –Xmx500M` パラメーターを使用してカタログ・サーバーを開始し、適切なメモリー・サイズを使用してコンテナーを開始します。メモリー・サイズは、JVM ごとに予想データ・サイズの 60-70% に設定することができます。この値を設定しないと、OutOfMemoryError エラーが発生するおそれがあります。さらに、必要ならば、`–jvmArgs –Xgc:noSynchronousGCOnOOM` パラメーターを使用して、JVM がメモリー不足になったときの非決定的振る舞いを回避することができます。

- ガーベッジ・コレクションのスレッドを調整する。

  WebSphere eXtreme Scale は、各トランザクションおよびリモート・プロシージャー・コール (RPC) スレッドに関連付けられる多数の一時オブジェクトを作成します。ご使用のコンピューターに十分なプロセッサー・サイクルがある場合は、ガーベッジ・コレクションに対してパフォーマンスが有益に働きます。デフォルトのスレッド数は 1 です。スレッド数は `–Xgcthreads n` 引数によって変更できます。この引数の推奨値は、コンピューターごとの Java 仮想マシン数を考慮して使用可能となるコアの数です。

- WebSphere eXtreme Scale のもとで短時間実行されるアプリケーションのパフォーマンスを調整する。

  WebSphere Real Time は、長時間実行するアプリケーション向けに調整されています。通常、信頼できるパフォーマンス・データを取得するには、WebSphere eXtreme Scale のトランザクションを連続して 2 時間実行する必要があります。`–Xquickstart` パラメーターを使用して、短時間実行アプリケーションのパフォーマンスを最適にすることができます。このパラメーターは、JIT (Just-In-Time) コンパイラーに対して、低レベルの最適化を使用するように指示を出します。

- WebSphere eXtreme Scale クライアント・キューおよび WebSphere eXtreme Scale クライアント・リレーを最小化する。

  WebSphere eXtreme Scale を WebSphere Real Time と共に使用する主な利点は、信頼性の高いトランザクション応答時間を実現できることです。通常、トランザクション応答時間の偏差について、桁が数桁も違うような改善が見られます。キューに入れられたクライアント要求、および他のソフトウェアを経由するクライアント要求リレーは応答時間に影響しますが、それは WebSphere Real Time および WebSphere eXtreme Scale の制御範囲外です。スレッドおよびソケットのパラメーターを変更して、顕著な遅延のない安定的かつ平滑な負荷を維持し、キュー項目数を減らすようにする必要があります。

- WebSphere Real Time スレッド化を使用する WebSphere eXtreme Scale アプリケーションを開発する。

  アプリケーションを変更することなく、信頼性の高い WebSphere eXtreme Scale トランザクション応答時間を実現でき、応答時間の偏差に関して桁が数桁も違うほど改善されます。トランザクションを処理するユーザー・アプリケーションは、通常の Java スレッドではなく、スレッド優先順位およびスケジューリングの制御に優れた RealtimeThread を使用することで、スレッド使用の利点をさらに活用できます。

アプリケーションが現在は以下のようなコードを含んでいるとします。

```
public class WXSCacheAppImpl extends Thread implements WXSCacheAppIF
```

必要ならば、このコードを次のもので置き換えることができます。

```
public class WXSCacheAppImpl extends RealtimeThread implements
WXSCacheAppIF
```

WebSphere Application Server における WebSphere Real Time

WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 環境で eXtreme Scale とともに WebSphere® Real Time を使用することができます。 WebSphere Real Time を使用可能にすることにより、ガーベッジ・コレクションはより予測可能になり、トランザクションの応答時間とスループットは安定した一貫性のあるものになります。

利点

WebSphere eXtreme Scale を WebSphere Real Time と一緒に使用すると、標準 IBM Java™ SE Runtime Environment (JRE) で採用されているデフォルトのガーベッジ・コレクション・ポリシーと比べてパフォーマンス・スループットは犠牲にしますが、一貫性および予測可能性は高まります。 いくつかの基準を基にすると、費用対効果の提案が変わる可能性があります。 以下は、主要な基準の一部です。

- サーバーの機能 - 使用可能メモリー、CPU の速度とサイズ、ネットワークの速度と使用
- サーバーの負荷 – 連続的な CPU 負荷、ピークの CPU 負荷
- Java 構成 – ヒープ・サイズ、目標使用、ガーベッジ・コレクション・スレッド
- WebSphere eXtreme Scale コピー・モード構成 – バイト配列と POJO 保管の対比
- アプリケーション特性 – スレッド使用量、応答の要件と許容範囲、オブジェクト・サイズなど。

WebSphere Real Time で使用可能なこのメトロノーム・ガーベッジ・コレクション・ポリシーの他に、標準 IBM Java™ SE Runtime Environment (JRE) で使用可能なオプションのガーベッジ・コレクション・ポリシーがあります。 これらのポリシー、optthruput (デフォルト)、gencon、optavgpause、および subpool は、特に異なるアプリケーション要件と環境を解決するように設計されています。 これらのポリシーについて詳しくは、777 ページの『Java 仮想マシンのチューニング』を参照してください。アプリケーションと環境の要件、資源と制約に応じて、これらのガーベッジ・コレクション・ポリシーを 1 つ以上プロトタイピングすることにより、確実に要件は満たされ、最適なポリシーを決定することができます。

WebSphere Application Server Network Deployment との機能

1. 以下はサポートされるバージョンの一部です。
   - WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0.0.5 以降。
   - WebSphere Real Time V2 SR2 for Linux 以降。詳しくは、IBM WebSphere Real Time V2 for Linux を参照してください。

- WebSphere eXtreme Scale バージョン 7.0.0.0 以降。
- Linux 32 および 64 ビット・オペレーティング・システム。

2. WebSphere eXtreme Scale サーバーは、WebSphere Application Server DMgr と連結することはできません。
3. Real Time は DMgr をサポートしません。
4. Real Time は WebSphere ノード・エージェントをサポートしません。

WebSphere Real Time の使用可能化

eXtreme Scale を実行するコンピューターに、WebSphere Real Time と WebSphere eXtreme Scale をインストールしてください。 WebSphere Real Time Java を SR2 に更新します。

以下のように、WebSphere Application Server バージョン 7.0 コンソールから、各サーバーの JVM 設定を指定できます。

「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」 > <必要なインストール済みサーバー>を選択します。

結果のページで「プロセス定義」を選択します。

次ページで、右側の列最上部の「Java 仮想マシン」をクリックします。 (ここで各サーバーのヒープ・サイズ、ガーベッジ・コレクション、およびその他のフラグを設定できます。)

以下のフラグを「汎用 JVM 引数」フィールドに設定します。

```
-Xrealtime -Xgcpolicy:metronome  -Xnocompressedrefs -Xgc:targetUtilization=80
```

変更内容を適用し、保存します。

eXtreme Scale サーバーが上記の JVM フラグを組み込んだ WebSphere Application Server 7.0 で Real Time を使用するには、JAVA_HOME 環境変数を作成する必要があります。

以下のように JAVA_HOME を設定します。

1. 「環境」を展開します。
2. 「WebSphere 変数」を選択します。
3. 「スコープの表示」の下の「すべてのスコープ」にチェック・マークが付いていることを確認します。
4. ドロップダウン・リストから必要なサーバーを選択します。 (DMgr サーバーまたはノード・エージェント・サーバーは選択しないでください。)
5. JAVA_HOME 環境変数がリストされていない場合は、「新規」を選択し、変数名に JAVA_HOME を指定します。 「値」フィールドに、Real Time への完全修飾パス名を入力します。
6. 変更内容を適用してから保存します。

ベスト・プラクティス

一連のベスト・プラクティスについては、 782 ページの『WebSphere Real Time を使用したガーベッジ・コレクションのチューニング』のベスト・プラクティスのセクションを参照してください。スタンドアロン WebSphere eXtreme Scale 環境に対するベスト・プラクティスのこのリストには、WebSphere Application Server Network Deployment 環境にデプロイする際に注意する、重要な変更がいくつかあります。

追加の JVM コマンド行パラメーターは、前のセクションで指定したガーベッジ・コレクション・ポリシーと同じロケーションに置かなければなりません。

連続的なプロセッサー負荷に対する許容できる初期目標は 50% で、短期間のピークの負荷のヒットは 75% までです。 これを超えると、予測可能性と一貫性における低下が測定できるようになる前に、追加キャパシティーを追加しなければなりません。より長い応答時間が許容できれば、パフォーマンスを少し向上させることができます。 80% のしきい値を超えると、一貫性と予測可能性において、重大な低下を招くことがあります。

正確なメモリー消費予測のために、キャッシュ・サイジング・エージェントをチューニングする

WebSphere eXtreme Scale は、分散データ・グリッド内にある BackingMap インスタンスのメモリー消費量の見積もりをサポートします。メモリー消費量の見積もりは、ローカル・データ・グリッドのインスタンスではサポートされません。特定のマップについて WebSphere eXtreme Scale が報告する値は、ヒープ・ダンプ分析によって報告される値と非常に近いものになります。マップ・オブジェクトが複雑な場合、見積もりの精度が下がる可能性があります。複雑すぎて正確な見積もりができないキャッシュ・エントリー・オブジェクトについては、ログに CWOBJ4543 メッセージが表示されます。不必要にマップを複雑にすることを避ければ、より正確な計算が可能になります。

手順

- サイジング・エージェントを使用可能にします。

  Java 5 以上の Java 仮想マシン (JVM) を使用している場合、サイジング・エージェントを使用します。サイジング・エージェントにより、WebSphere eXtreme Scale は、JVM から追加情報を取得して見積もりを改善できます。このエージェントは、次の引数を JVM コマンド行に加えることでロードすることができます。

  ```
  -javaagent:WXS lib directory/wxssizeagent.jar
  ```

  組み込みトポロジーでは、 WebSphere Application Server プロセスのコマンド行に引数を追加します。

  分散トポロジーでは、eXtreme Scale プロセス (コンテナー) および WebSphere Application Server プロセスのコマンド行に引数を追加します。

  正しくロードされると、次のメッセージが SystemOut.log ファイルに書き込まれます。

CWOBJ4541I: 拡張された BackingMap メモリー見積もりが使用可能です。

- 可能な場合は、カスタム・データ型よりも Java データ型を優先させてください。

  WebSphere eXtreme Scale は、以下の型のメモリー・コストを正確に見積もることができます。

  – java.lang.String およびストリングがコンポーネント・クラス (String[]) の配列
  – すべてのプリミティブ・ラッパー型 (Byte、Short、Character、Boolean、Long、Double、Float、Integer) およびプリミティブ・ラッパーがコンポーネント型 (Integer[]、Character[] など) の配列
  – java.math.BigDecimal および java.math.BigInteger、そしてこれら 2 つのクラスがコンポーネント型である配列 (BigInteger[] および BigDecimal[])
  – 時間型 (java.util.Date、java.sql.Date、java.util.Time、java.sql.Timestamp)
  – java.util.Calendar および java.util.GregorianCalendar

- 可能であれば、オブジェクトの収容を避けてください。

  あるオブジェクトがマップに挿入されると、WebSphere eXtreme Scale は、マップがそのオブジェクトへの参照を唯一保持し、さらにそのオブジェクトが直接参照しているすべてのオブジェクトもマップが保持するものと想定します。例えば、1000 個のカスタム・オブジェクトをマップに挿入し、そのそれぞれが同一ストリング・インスタンスを参照している場合、WebSphere eXtreme Scale は、そのストリング・インスタンスを 1000 回分見積もり、その結果、ヒープ上のマップの実際のサイズより多く見積もります。しかし、WebSphere eXtreme Scale は以下の一般的な収容シナリオに対し、正しい補正を行います。

  – Java 5 Enums への参照
  – Typesafe Enum パターンに従ったクラスへの参照このパターンに従ったクラスは、プライベート・コンストラクターのみが定義され、独自の型の private static final フィールドを少なくとも 1 つ保持し、Serializable を実装する場合は、readResolve() メソッドを実装します。
  – Java 5 Primitive ラッパー収容。例えば、new Integer(1) の代わりに Integer.valueOf(1) を使用するなど。

  収容を使用する必要がある場合は、前述の手法のいずれかを使用して、より正確な見積もりを入手してください。

- カスタム・タイプはよく考えて使用してください。

  カスタム・タイプを使用する場合、オブジェクト・タイプよりもフィールドのプリミティブ・データ・タイプを優先させてください。

  また、ユーザー独自のカスタム実装よりも、エントリー 2 にリストされたオブジェクト・タイプを優先させてください。

  カスタム・タイプを使用する際は、オブジェクト・ツリーを 1 レベルに保ってください。カスタム・オブジェクトをマップに挿入する場合、WebSphere eXtreme Scale は挿入されたオブジェクトのコストのみを計算します。これには任意のプリミティブ・フィールドおよびこのオブジェクトが直接参照するすべてのオブジェクトが含まれます。WebSphere eXtreme Scale は、オブジェクト・ツリーのさら

に下の階層までは参照をフォローしません。マップにオブジェクトを挿入し、WebSphere eXtreme Scale が、見積もりプロセスでフォローされなかった参照を検出した場合、見積もりが不完全だったクラスの名前が組み込まれたメッセージ・コード CWOBJ4543 が発生します。このエラーが発生したら、正確な合計値としてサイズ統計を信頼するのではなく、マップのサイズ統計を傾向データとして扱うようにしてください。

- 可能な場合、CopyMode.COPY_TO_BYTES コピー・モードを使用します。

  CopyMode.COPY_TO_BYTES コピー・モードを使用すると、正常に見積もるにはオブジェクト・ツリーのレベルが深すぎる (その結果として CWOBJ4543 メッセージが発生する) 場合であっても、マップに挿入される値オブジェクトの見積もりにおける不確実性を取り除くことができます。

関連概念:

『キャッシュ・メモリー消費量の見積もり』

WebSphere eXtreme Scale は、特定の BackingMap の Java ヒープ・メモリーの使用量 (バイト単位) を正確に見積もることができます。この機能を使用して、Java 仮想マシンのヒープ設定および除去ポリシーを正しくサイズ設定してください。 この機能の動作は、パッキング・マップに配置されるオブジェクトの複雑さおよびマップの構成方法によって異なります。 現在、この機能は分散データ・グリッドのみでサポートされています。 ローカル・データ・グリッドのインスタンスは使用バイトの見積もりをサポートしません。

キャッシュ・メモリー消費量の見積もり

WebSphere eXtreme Scale は、特定の BackingMap の Java ヒープ・メモリーの使用量 (バイト単位) を正確に見積もることができます。この機能を使用して、Java 仮想マシンのヒープ設定および除去ポリシーを正しくサイズ設定してください。 この機能の動作は、パッキング・マップに配置されるオブジェクトの複雑さおよびマップの構成方法によって異なります。 現在、この機能は分散データ・グリッドのみでサポートされています。 ローカル・データ・グリッドのインスタンスは使用バイトの見積もりをサポートしません。

ヒープ消費量に関する考慮事項

eXtreme Scale は、データ・グリッドを構成する JVM プロセスのヒープ・スペース内に、所有するすべてのデータを保管します。特定のマップの場合、そのマップが消費するヒープ・スペースは、以下のコンポーネントに分割できます。

- 現在マップ内に存在するすべてのキー・オブジェクトのサイズ
- 現在マップ内に存在するすべての値オブジェクトのサイズ
- マップ上の Evictor プラグインによって使用中のすべての EvictorData オブジェクトのサイズ
- 基本データ構造のオーバーヘッド

見積もり統計によって報告される使用バイト数は、これら 4 つの構成要素の合計です。 これらの値は、マップの挿入、更新、および除去の操作を基にしてエントリーごとに計算されます。すなわち、eXtreme Scale は、特定のバッキング・マップが消費するバイト数のための現行値を常に持っています。

データ・グリッドが区画に分割されている場合、各区画にはバッキング・マップの一部が含まれます。 見積もり統計は最下位の eXtreme Scale コードで計算されるため、バッキング・マップの各区画は自分自身のサイズを追跡します。eXtreme Scale 統計 API を使用すると、個々の区画のサイズと同様に、マップの累積サイズを追跡できます。

一般に、見積もりデータは、一定時間におけるデータの傾向の指標として使用し、マップによって使用されているヒープ・スペースの正確な測定としては使用されません。例えば、マップの報告されたサイズが 5 MB から 10 MB に 2 倍になると、マップのメモリー消費量は 2 倍になるかのように表示されます。 実測値の 10 MB は、複数の理由から正確でない場合があります。この理由を考慮してベスト・プラクティスに従えば、サイズ測定の精度は Java ヒープ・ダンプの後処理の精度に近づきます。

精度に関する主要な問題は、Java Memory Model は、非常に正確なメモリー測定を可能にするほど制限されていないことです。 基本的な問題は、オブジェクトは複数参照のためにヒープ上でライブになっている可能性があるということです。 例えば、同じ 5 KB のオブジェクト・インスタンスを 3 つの別々のマップに挿入すると、この 3 つのマップのいずれかはオブジェクトがガーベッジ・コレクションされないようにします。 この場合、以下のいずれかの測定が正当だと思われます。

- 各マップのサイズは 5 KB ずつ増加します。
- オブジェクトが最初に配置されるマップのサイズは 5 KB ずつ増加します。
- 他の 2 つのマップのサイズは増加しません。 各マップのサイズはオブジェクトのサイズの何分の 1 かずつ増加します。

より正確な統計を提供できる設計選択、ベスト・プラクティス、および実装選択の理解からあいまいさがなくならない限り、このあいまいさのために上記の測定は傾向データとして考えられてしまいます。

eXtreme Scale は、特定のマップに含まれるキー・オブジェクトまたは値オブジェクトへの参照のうち、長く存続する参照だけをそのマップは保持すると想定します。同じ 5 KB オブジェクトを 3 つのマップに入れた場合、各マップのサイズは 5 KB ずつ増加します。 この増加は、通常問題ではありません。この機能は分散データ・グリッドでのみサポートされているからです。 リモート・クライアント上にある 3 つの異なるマップに同じオブジェクトを挿入すると、各マップはそのオブジェクトの独自のコピーを受け取ります。 デフォルト・トランザクションの COPY MODE 設定も、各マップがある特定のオブジェクトの独自のコピーを持つことを通常保証します。

オブジェクト収容

オブジェクト収容は、ヒープ・メモリー使用量の見積もりで問題を引き起こす場合があります。オブジェクト収容を実装すると、アプリケーション・コードで意図的に、ある特定のオブジェクト値へのすべての参照がヒープ上の同じオブジェクト・インスタンス、つまり、メモリー内の同じロケーションを実際に指すようになります。この例が以下のクラスです。

```
public class ShippingOrder implements Serializeable,Cloneable{

    public static final STATE_NEW = "new";
    public static final STATE_PROCESSING = "processing";
```

```
    public static final STATE_SHIPPED = "shipped";

    private String state;
    private int orderNumber;
private int customerNumber;

public Object clone(){
       ShippingOrder toReturn = new ShippingOrder();
       toReturn.state = this.state;
       toReturn.orderNumber = this.orderNumber;
       toReturn.customerNumber = this.customerNumber;
       return toReturn;
    }

    private void readResolve(){
        if (this.state.equalsIgnoreCase("new")
            this.state = STATE_NEW;
        else if (this.state.equalsIgnoreCase("processing")
            this.state = STATE_PROCESSING;
        else if (this.state.equalsIgnoreCase("shipped")
            this.state = STATE_SHIPPED:
    }
}
```

eXtreme Scale はオブジェクトが異なるメモリー・ロケーションを使用していると想定しているため、オブジェクト収容は見積もり統計による過大見積もりを引き起こしてしまいます。100 万個の ShippingOrder オブジェクトがある場合、見積もり統計には、状態情報を保持する 100 万個のストリングのコストが示されます。実際は、静的クラス・メンバーである 3 個のストリングしか存在していません。静的クラス・メンバーのメモリー・コストは、いずれの eXtreme Scale マップにも追加されるべきではありません。しかし、実行時にこの状況は検出できません。同様のオブジェクト収容を実装できる方法がたくさんあるため、検出はとても困難です。eXtreme Scale が可能なすべての実装から保護することは実用的ではありません。ただし、eXtreme Scale は、最もよく使用されるタイプのオブジェクト収容から保護します。オブジェクト収容を使用してメモリー使用量を最適化するには、以下の 2 つのカテゴリーに入るカスタム・オブジェクトにのみ収容を実装して、メモリー消費量の統計の精度を向上させます。

- eXtreme Scale は、『Java 2 Platform Standard Edition 5.0 の概要: 列挙型』で説明があるように、自動的に Java 5 列挙型および Typesafe Enum パターンを調整します。
- eXtreme Scale は、自動的に Integer などのプリミティブ・ラッパー・タイプの自動収容を明らかにします。プリミティブ・ラッパー・タイプの自動収容は、Java 5 で静的 valueOf メソッドの使用を介して導入されました。

メモリー消費量の統計

以下のいずれかの方法を使用して、メモリー消費量の統計にアクセスします。

統計 API

エントリー数やヒット率など、単一マップの統計を提供する MapStatsModule.getUsedBytes() メソッドを使用します。

詳しくは、統計モジュールを参照してください。

Managed Bean (MBean)

管理対象 MBean 統計の MapUsedBytes を使用します。 デプロイメントを管理およびモニターするには、さまざまなタイプの Java Management Extensions (JMX) MBeans を使用できます。各 MBean は、マップ、eXtreme Scale、サーバー、レプリカ生成グループ、またはレプリカ生成グループ・メンバーなどの特定のエンティティーを参照します。

詳しくは、Managed Beans (MBeans) を使用した管理を参照してください。

Performance Monitoring Infrastructure (PMI) モジュール

PMI モジュールを使用してアプリケーションのパフォーマンスをモニターすることができます。 特に、WebSphere Application Server に組み込まれているコンテナーに対してマップ PMI モジュールを使用します。

詳しくは、PMI モジュールを参照してください。

WebSphere eXtreme Scale コンソール

コンソールで、メモリー消費量の統計を表示できます。 Web コンソールによるモニターを参照してください。

上記すべての方法で、特定の BaseMap インスタンスのメモリー消費量の、基本となる同一の測定が利用できます。WebSphere eXtreme Scale ランタイムは、マップそのもののオーバーヘッドと同様に、マップに保管されたキー・オブジェクトおよび値オブジェクトが消費するヒープ・メモリーのバイト数をベストエフォートで計算しようとします。分散データ・グリッド全体で各マップが消費しているヒープ・メモリーの量を表示することができます。

多くの場合、指定のマップに対して WebSphere eXtreme Scale が報告する値は、ヒープ・ダンプ分析によって報告される値と非常に近いものになります。 WebSphere eXtreme Scale は自分自身のオーバーヘッドを正確に見積もりますが、マップに入れられる可能性のあるすべてのオブジェクトを明らかにすることはできません。 788 ページの『正確なメモリー消費予測のために、キャッシュ・サイジング・エージェントをチューニングする』で説明されているベスト・プラクティスに従えば、WebSphere eXtreme Scale で提供されるバイト測定において、見積もりの精度を向上させることができます。

関連タスク:

788 ページの『正確なメモリー消費予測のために、キャッシュ・サイジング・エージェントをチューニングする』

WebSphere eXtreme Scale は、分散データ・グリッド内にある BackingMap インスタンスの メモリー消費量の見積もりをサポートします。メモリー消費量の見積もりは、ローカル・データ・グリッドの インスタンスではサポートされません。特定のマップについて WebSphere eXtreme Scale が 報告する値は、ヒープ・ダンプ分析によって報告される値と非常に近いものになります。マップ・オブジェクトが複雑な場合、見積もりの 精度が下がる可能性があります。複雑すぎて正確な見積もりができない キャッシュ・エントリー・オブジェクトについては、ログに CWOBJ4543 メッセージが表示されます。 不必要にマップを複雑にすることを避ければ、より正確な計算が可能になります。

アプリケーション開発のチューニングおよびパフォーマンス

メモリー内データ・グリッドまたはデータベース処理スペースのパフォーマンスを向上させるために、ロック、シリアライゼーション、照会の実行などの製品フィーチャーに関するベスト・プラクティスを使用して、いくつかの考慮事項を調べることができます。

コピー・モードのチューニング

WebSphere eXtreme Scale は、使用可能な CopyMode 設定に基づいて値をコピーします。デプロイメント要件に対して最も適切に機能する設定を判別してください。

BackingMap API setCopyMode(CopyMode, valueInterfaceClass) メソッドを使用して、com.ibm.websphere.objectgrid.CopyMode クラスで定義される、次の最終の静的フィールドの 1 つに、コピー・モードを設定することができます。

アプリケーションが ObjectMap インターフェースを使用してマップ・エントリーに対する参照を取得する場合、その参照は、それを取得したデータ・グリッド・トランザクション内でのみ使用してください。別のトランザクションでその参照を使用するとエラーになることがあります。例えば BackingMap に対してペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用する場合は、get メソッド呼び出しまたは getForUpdate メソッド呼び出しにより、トランザクションに応じて S (shared) ロックまたは U (update) ロックを取得します。トランザクションの終了時に get メソッドは値に参照を戻し、取得されているロックは解放されます。トランザクションは get メソッドまたは getForUpdate メソッドを呼び出して、別のトランザクションでマップ・エントリーをロックする必要があります。各トランザクションは、複数のトランザクションで同じ値参照を再利用する代わりに get メソッドまたは getForUpdate メソッドを呼び出すことにより、値への独自の参照を取得する必要があります。

エンティティー・マップに対する CopyMode

EntityManager API エンティティーと関連付けられたマップを使用する場合、そのマップは常にエンティティー Tuple オブジェクトを直接戻し、 COPY_TO_BYTES コピー・モードが使用されていない限り、コピーは作成しません。変更を行う場合、CopyMode が更新される、または、Tuple が適切にコピーされることが重要です。

COPY_ON_READ_AND_COMMIT

COPY_ON_READ_AND_COMMIT モードはデフォルトのモードです。このモードが使用される場合、valueInterfaceClass 引数は無視されます。このモードは、BackingMap に含まれている値オブジェクトへの参照がアプリケーションに含まれていないことを保証します。その代わりに、アプリケーションは常に BackingMap 内の値のコピーを操作します。COPY_ON_READ_AND_COMMIT モードでは、BackingMap にキャッシュされているデータをアプリケーションが誤って壊してしまうことはありません。アプリケーションのトランザクションが指定されたキーの ObjectMap.get メソッドを呼び出し、それがそのキーにとって、ObjectMap エントリーへの初めてのアクセスの場合は、値のコピーが戻されます。トランザクションがコミットされると、アプリケーションによってコミットされたすべての変更は BackingMap にコピーされ、BackingMap にコミットされた値への参照をアプリケーションが持つことはありません。

COPY_ON_READ

COPY_ON_READ モードは、トランザクションがコミットされたときに発生するコピーを除去することによって、COPY_ON_READ_AND_COMMIT モード全体にわたるパフォーマンスを改善します。このモードが使用される場合、valueInterfaceClass 引数は無視されます。 BackingMap データの整合性を保持するために、アプリケーションは、エントリーに対する各参照がトランザクションのコミット後に破棄されることを保証します。このモードでは、ObjectMap.get メソッドは、値への参照の代わりに値のコピーを返し、アプリケーションがその値に対して行った変更が、トランザクションがコミットされるまで BackingMap 値に影響しないことを保証します。ただし、トランザクションがコミットすると変更のコピーは行われません。代わりに、ObjectMap.get メソッドによって戻された、コピーへの参照が BackingMap に保管されます。トランザクションがコミットされた後、アプリケーションはすべてのマップ・エントリー参照を破棄します。アプリケーションがマップ・エントリー参照を破棄しなかった場合、そのアプリケーションは、BackingMap 内にキャッシュされているデータを破壊してしまうことがあります。アプリケーションがこのモードを使用し、問題がある場合は、COPY_ON_READ_AND_COMMIT モードに切り替えてその問題がまだ続いているかどうかを調べます。問題が解消されている場合は、トランザクションがコミットされた後でアプリケーションはその参照のすべてを破棄するのに失敗したことになります。

COPY_ON_WRITE

COPY_ON_WRITE モードは、指定したキーのトランザクションによって ObjectMap.get メソッドが初めて呼び出されるときに起こるコピーを排除することにより、COPY_ON_READ_AND_COMMIT モードを超えるパフォーマンスを実現します。 ObjectMap.get メソッドは、値オブジェクトへの直接参照の代わりに値のプロキシーを戻します。プロキシーは、アプリケーションが valueInterfaceClass 引数によって指定した値インターフェース上で set メソッドを呼び出さない限り、値のコピーが行われないことを保証します。プロキシーは、copy on write インプリメンテーションを提供します。トランザクションがコミットすると、BackingMap はプロキシーを検査して、呼び出される set メソッドの結果としてコピーが行われたかどうかを判別します。コピーが行われた場合は、そのコピーへの参照が BackingMap に

保管されます。このモードの大きな利点は、トランザクションが値を変更するために set メソッドを呼び出さない場合には、読み取りまたはコミットの時点で値がコピーされないことです。

COPY_ON_READ_AND_COMMIT および COPY_ON_READ モードはどちらも、値が ObjectMap から検索される場合にディープ・コピーを行います。アプリケーションがトランザクションで検索されたいくつかの値を更新するだけの場合は、このモードは最適ではありません。 COPY_ON_WRITE モードはこの振る舞いを効率的にサポートしますが、このモードではアプリケーションが単純なパターンを使用する必要があります。インターフェースをサポートするには、値オブジェクトが必要です。アプリケーションは、セッション内で値と対話するときに、このインターフェースのメソッドを使用する必要があります。その場合は、アプリケーションに返される値のプロキシーが作成されます。プロキシーは実際の値への参照を持ちます。アプリケーションが読み取り操作のみを実行した場合、その読み取り操作は常に実際のコピーに対して実行されます。アプリケーションがオブジェクト上の属性を変更すると、プロキシーは実際のオブジェクトのコピーを作成してから、そのコピーを変更します。プロキシーは次に、そのポイントからコピーを使用します。このコピーを使用することにより、アプリケーションによって読み取られるだけのオブジェクトに対するコピー操作は完全に避けることができます。すべての変更操作は設定されたプレフィックスで開始する必要があります。 Enterprise JavaBeans は通常、オブジェクト属性を変更するメソッドに対してこのスタイルのメソッドの名前付けを使用するためにコード化されます。この規則に従わなければいけません。変更されたすべてのオブジェクトは、アプリケーションによって変更されるときにコピーされます。この読み取りと書き込みのシナリオは、eXtreme Scale がサポートしている、最も効率的なシナリオです。COPY_ON_WRITE モードを使用するようマップを構成するには、以下の例を使用してください。この例では、アプリケーションは、Map 内の名前を使用してキーが付けられている Person オブジェクトを保管します。Person オブジェクトは以下のコード・スニペットで表されます。

```
class Person {
    String name;
    int age;
    public Person() {
    }
    public void setName(String n)  {
        name = n;
    }
    public String getName() {
        return name;
    }
    public void setAge(int a) {
        age = a;
    }
    public int getAge() {
        return age;
    }
}
```

アプリケーションは、ObjectMap から取り出された値と対話する場合にのみ IPerson インターフェースを使用します。次の例のようにオブジェクトを変更してインターフェースを使用します。

```
interface IPerson
{
    void setName(String n);
    String getName();
```

```
    void setAge(int a);
    int getAge();
}
// Modify Person to implement IPerson interface
class Person implements IPerson {
    ...
}
```

それからアプリケーションは、次の例のように、COPY_ON_WRITE モードを使用するために BackingMap を構成する必要があります。

```
ObjectGrid dg = ...;
BackingMap bm = dg.defineMap("PERSON");
// use COPY_ON_WRITE for this Map with
// IPerson as the valueProxyInfo Class
bm.setCopyMode(CopyMode.COPY_ON_WRITE,IPerson.class);
// The application should then use the following
// pattern when using the PERSON Map.
Session sess = ...;
ObjectMap person = sess.getMap("PERSON");
...
sess.begin();
// the application casts the returned value to IPerson and not Person
IPerson p = (IPerson)person.get("Billy");
p.setAge(p.getAge()+1);
...
// make a new Person and add to Map
Person p1 = new Person();
p1.setName("Bobby");
p1.setAge(12);
person.insert(p1.getName(), p1);
sess.commit();
// the following snippet WON'T WORK. Will result in ClassCastException
sess.begin();
// the mistake here is that Person is used rather than
// IPerson
Person a = (Person)person.get("Bobby");
sess.commit();
```

アプリケーションの最初のセクションは、マップで Billy という名前を付けられた値を検索します。このアプリケーションは、戻り値を Person オブジェクトではなく、IPerson オブジェクトにキャストします。その理由は、返されたプロキシーは以下の 2 つのインターフェースを実装しているからです。

- BackingMap.setCopyMode メソッド呼び出しで指定されたインターフェース
- com.ibm.websphere.objectgrid.ValueProxyInfo インターフェース

プロキシーを 2 つのタイプにキャストすることができます。先ほどのコード・スニペットの最後の部分は、COPY_ON_WRITE モードでは許可されないことを示しています。このアプリケーションは Bobby レコードを取り出して、そのレコードを Person オブジェクトにキャストしようとします。このアクションはクラス・キャスト例外により失敗します。戻されるプロキシーが Person オブジェクトではないからです。戻されたプロキシーは IPerson オブジェクトと ValueProxyInfo を実装します。

ValueProxyInfo インターフェースおよび部分更新サポート: このインターフェースはアプリケーションに対して、プロキシーによって参照される、コミットされた読み取り専用の値か、またはこのトランザクション中に変更された属性セットのどちらかの検索を許可します。

```
public interface ValueProxyInfo {
    List /**/ ibmGetDirtyAttributes();
    Object ibmGetRealValue();
}
```

ibmGetRealValue メソッドは、オブジェクトの読み取り専用のコピーを戻します。アプリケーションはこの値を変更してはいけません。ibmGetDirtyAttributes メソッドは、このトランザクション中にアプリケーションによって変更された属性を表すストリングのリストを返します。 ibmGetDirtyAttributes メソッドの主要ユース・ケースは、Java Database Connectivity (JDBC) ローダーまたは CMP ベースのローダーにあります。リスト内の命名された属性のみを、SQL ステートメントまたはテーブルにマップされたオブジェクトのいずれかで更新する必要があります。こうすることで、より効率的な SQL がローダーによって生成されます。 copy on write トランザクションがコミットされ、ローダーが接続されると、ローダーは変更されたオブジェクトの値を ValueProxyInfo インターフェースにキャストしてこの情報を取得することができます。

COPY_ON_WRITE またはプロキシーを使用する場合の equals メソッドの処理: 例えば、次のコードは Person オブジェクトを構成してから、それを ObjectMap に挿入します。次に、ObjectMap.get メソッドを使用して同じオブジェクトを取り出します。値はインターフェースにキャストされます。値が Person インターフェースにキャストされる場合は、ClassCastException 例外が起こります。戻り値が、Person オブジェクトではなく、IPerson インターフェースをインプリメントするプロキシーだからです。== 操作を使用する場合は、等価チェックが失敗します。これらは同じオブジェクトではないからです。

```
session.begin();
// new the Person object
Person p = new Person(...);
personMap.insert(p.getName, p);
// retrieve it again, remember to use the interface for the cast
IPerson p2 = personMap.get(p.getName());
if(p2 == p) {
    // they are the same
} else {
    // they are not
}
```

equals メソッドをオーバーライドする必要がある場合は、ほかにも考慮しなければならないことがあります。equals メソッドは、引数が IPerson インターフェースを実装するオブジェクトであることを確認し、引数を IPerson オブジェクトとしてキャストする必要があります。引数が、IPerson インターフェースをインプリメントするプロキシーかもしれないので、インスタンス変数が等しいかどうかを比較するときに getAge メソッドと getName メソッドを使用する必要があります。次の例を参照してください。

```
{
    if ( obj == null ) return false;
    if ( obj instanceof IPerson ) {
        IPerson x = (IPerson) obj;
        return ( age.equals( x.getAge() ) && name.equals( x.getName() ) )
    }
    return false;
}
```

ObjectQuery および HashIndex の構成要件: COPY_ON_WRITE を ObjectQuery または HashIndex プラグインと一緒に使用するときは、プロパティー・メソッドを使用

してオブジェクトにアクセスするように ObjectQuery スキーマと HashIndex プラグインを構成する必要があります。これがデフォルトです。フィールド・アクセスを構成した場合は、照会エンジンおよび索引がプロキシー・オブジェクト内のフィールドへのアクセスを試みますが、オブジェクト・インスタンスがプロキシーであるため、常にヌルまたは 0 を返します。

NO_COPY

NO_COPY モードでは、アプリケーションのパフォーマンスは向上しますが、そのアプリケーションが、ObjectMap.get メソッドを使用して取得される値オブジェクトを絶対に変更しないようにする必要があります。このモードが使用される場合、valueInterfaceClass 引数は無視されます。このモードを使用する場合は、値がコピーされることはありません。 ObjectMap から取得される値オブジェクト・インスタンスや、ObjectMap に追加される値オブジェクト・インスタンスをアプリケーションが変更すると、BackingMap 内のデータは破壊されます。 NO_COPY モードは基本的に、アプリケーションによってデータが変更されることのない、読み取り専用マップで有用です。アプリケーションがこのモードを使用し、問題がある場合は、COPY_ON_READ_AND_COMMIT モードに切り替えてその問題がまだ存在するかどうかを調べます。問題が解消されている場合は、トランザクション中またはトランザクションがコミットされた後でアプリケーションは ObjectMap.get メソッドによって戻された値を変更しています。 EntityManager API エンティティーに関連付けられたすべてのマップは、eXtreme Scale 構成の指定にかかわらず、自動的にこのモードを使用します。

EntityManager API エンティティーに関連付けられたすべてのマップは、eXtreme Scale 構成の指定にかかわらず、自動的にこのモードを使用します。

COPY_TO_BYTES

POJO 形式の代わりに、シリアライズ形式でオブジェクトを保管できます。COPY_TO_BYTES 設定を使用すると、大きなオブジェクト・グラフが消費するメモリー占有スペースを削減できます。詳しくは、801 ページの『バイト配列マップを使用したパフォーマンスの向上』を参照してください。

制約事項: 8.6+

オプティミスティック・ロックを COPY_TO_BYTES で使用すると、キャッシュ・エントリーの無効化などのよくある操作を実行したとき、ClassNotFoundException 例外が発生することがあります。この例外が発生するのは次のような理由によります。つまり、トランザクションがコミットされる前に変更を検出するためには、オプティミスティック・ロック・メカニズムがキャッシュ・オブジェクトの「equals(...) 」メソッドを呼び出さなければならないからです。 equals(...) メソッドを呼び出すためには、eXtreme Scale サーバーがキャッシュ・オブジェクトをデシリアライズできなければなりません。つまり、eXtreme Scale がオブジェクト・クラスをロードする必要があります。

この例外を解決するために、キャッシュ・オブジェクト・クラスをパッケージ化することができます。そうすると、eXtreme Scale サーバーがスタンドアロン環境でクラスをロードできるようになります。そのためには、クラスをクラスパスに入れる必要があります。

ご使用の環境に OSGi フレームワークが含まれている場合は、クラスを objectgrid.jar バンドルのフラグメントにパッケージ化します。 eXtreme Scale サーバーを Liberty プロファイルで稼働している場合は、クラスを OSGi バンドルとしてパッケージ化し、そのクラスの Java パッケージをエクスポートします。その後、バンドルを、grids ディレクトリーにコピーすることによってインストールします。

WebSphere Application Server では、アプリケーション、またはアプリケーションがアクセスできる共有ライブラリーにクラスをパッケージ化します。

あるいは、eXtreme Scale に保管されているバイト配列を比較できるカスタム・シリアライザーを使用して変更を検出することもできます。

COPY_TO_BYTES_RAW

COPY_TO_BYTES_RAW を使用して、シリアライズ形式のデータに直接アクセスできます。このコピー・モードは、シリアライズされたバイトと対話するための効率的な方法を提供します。このモードを使用すると、メモリー内のオブジェクトにアクセスするためにデシリアライゼーション・プロセスをバイパスできます。

ObjectGrid 記述子 XML ファイルでは、コピー・モードを COPY_TO_BYTES に設定でき、生のシリアライズされたデータにアクセスしたいインスタンスでは、プログラマチックにコピー・モードを COPY_TO_BYTES_RAW に設定できます。アプリケーションがメイン・アプリケーション・プロセスの一部として生データを使用する場合に限り、ObjectGrid 記述子 XML ファイルでコピー・モードを COPY_TO_BYTES _RAW に設定します。

CopyMode の不正な使用

上記で説明したように、アプリケーションが COPY_ON_READ、COPY_ON_WRITE、または NO_COPY コピー・モードを使用してパフォーマンスを改善しようとすると、エラーが発生します。コピー・モードを COPY_ON_READ_AND_COMMIT モードに変更する際には偶発的なエラーは発生しません。

問題

この問題は、使用したコピー・モードのプログラミング契約にアプリケーションが違反し、その結果発生した ObjectGrid マップ内のデータ破壊に起因する場合があります。データ破壊は、予測不能なエラーが、偶発的または解明不能または予期しない形で発生する原因になることがあります。

解決策

アプリケーションは、使用中のコピー・モード用プログラミング契約に従う必要があります。 COPY_ON_READ および COPY_ON_WRITE コピー・モードの場合、アプリケーションは、値参照を取得したトランザクションの有効範囲外の値オブジェクトへの参照を使用します。これらのモードを使用するためには、アプリケーションはトランザクションの完了後に値オブジェクトへの参照を削除し、値オブジェクトにアクセスするそれぞれのトランザクションの値オブジェクトへの新規参照を取得する必要があります。NO_COPY コピー・モードの場合、アプリケーションが

値オブジェクトを一切変更しないようにする必要があります。この場合、値オブジェクトを変更しないようにアプリケーションを作成するか、別のコピー・モードを使用するようにアプリケーションを設定します。

関連資料:

ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

バイト配列マップを使用したパフォーマンスの向上

POJO 形式の代わりにバイト配列でマップに値を保管することができます。そうすると、大きなオブジェクト・グラフが消費する可能性のあるメモリー占有スペースが減ります。

利点

オブジェクト・グラフ中のオブジェクト数が増えるのにしたがって、メモリー消費量は増加します。複雑なオブジェクト・グラフを縮小して 1 つのバイト配列にすることによって、いくつかのオブジェクトの代わりに、1 つだけのオブジェクトがヒープ内に保持されるようになります。このようにヒープ内のオブジェクト数が減ることで、Java ランタイムがガーベッジ・コレクション中に検索するオブジェクトが少なくなります。

WebSphere eXtreme Scale が使用するデフォルトのコピー・メカニズムは、シリアライゼーションであり、これは高コストの処理です。例えば、デフォルトのコピー・モード `COPY_ON_READ_AND_COMMIT` を使用している場合、読み取り時と取得時の両方でコピーが作成されます。バイト配列を使用すると、読み取り時にコピーを作成する代わりに、値はバイトから送り込まれ、コミット時にコピーを作成する代わりに、値はシリアライズされてバイトに入れられます。バイト配列を使用した結果、データ整合性に関してはデフォルト設定と同等であり、使用メモリーは削減されます。

バイト配列を使用する際は、メモリー消費量の削減を実現するには、最適化されたシリアライゼーション・メカニズムが重要であることに注意してください。詳しくは、808 ページの『シリアライゼーション・パフォーマンスのチューニング』を参照してください。

バイト配列マップの構成

バイト配列マップを使用可能にするには、以下の例に示すように、ObjectGrid XML ファイルで、マップが使用する CopyMode 属性の設定を COPY_TO_BYTES に変更します。

```
<backingMap name="byteMap" copyMode="COPY_TO_BYTES" />
```

考慮事項

特定のシナリオでバイト配列マップを使用するかどうかは、よく検討する必要があります。バイト配列を使用すると、メモリー使用量は減らせますが、プロセッサー使用量は増える場合があります。

以下に、バイト配列マップ機能の使用を選択する前に検討する必要があるいくつかの要因の概略を示します。

オブジェクト・タイプ

オブジェクト・タイプによっては、バイト配列マップを使用してもメモリー削減を期待できないものがあります。 つまり、バイト配列マップを使用するべきでない、いくつかのタイプのオブジェクトがあるということです。Java プリミティブ・ラッパーのいずれかを値として使用している場合、または、他のオブジェクトへの参照を含んでいない (プリミティブ・フィールドのみを保管する) POJO を 1 つ使用している場合、Java オブジェクトの数は既に最小限になっていて、1 つしかありません。オブジェクトが使用するメモリー量は既に最適化されているので、バイト配列マップをこれらのタイプのオブジェクトに使用することはお勧めしません。バイト配列マップが適しているのは、POJO オブジェクト総数が 1 より大きい、他のオブジェクトまたはオブジェクトのコレクションを含んでいるオブジェクト・タイプです。

例えば、顧客オブジェクトが職場住所と自宅住所を 1 つずつ含んでいて、さらに、注文のコレクションも含んでいる場合、バイト配列マップの使用によって、ヒープ内のオブジェクト数と、これらのオブジェクトが使用するバイト数を減らすことができます。

ローカル・アクセス

その他のコピー・モードを使用する際、コピーが作成されているとき (オブジェクトがデフォルトの ObjectTransformer により Cloneable である場合)、または最適化された copyValue メソッドがカスタム ObjectTransformer に提供されているときに、アプリケーションを最適化できます。他のコピー・モードと比べて、オブジェクトにローカルでアクセスする場合、読み取り、書き込み、またはコミット操作時のコピー作成で追加コストがかかります。例えば、分散トポロジーでニア・キャッシュがある場合、またはローカルまたはサーバーの ObjectGrid インスタンスに直接アクセスしている場合は、アクセスおよびコミットの時間は、バイト配列マップを使用すると、直列化のコストがかかるため増加します。同様のコストは、ObjectGridEventGroup.ShardEvents プラグイン使用時に、データ・グリッド・エージェントを使用したり、サーバー・プライマリーにアクセスすると、分散トポロジーでも発生します。

プラグイン対話

バイト配列マップを使用すると、クライアントからサーバーに通信しているときには、サーバーが POJO フォームを必要としない限りオブジェクトはインフレートされません。マップ値と対話するプラグインでは、値をインフレートする要求が原因のパフォーマンス低下が起こります。

この追加コストは、LogElement.getCacheEntry または LogElement.getCurrentValue を使用するすべてのプラグインで発生します。キーを取得したい場合は、LogElement.getKey を使用すると、LogElement.getCacheEntry().getKey メソッドに関連した追加オーバーヘッドを回避できます。以下のセクションでは、プラグインについて、バイト配列の使用を考慮に入れて説明します。

索引および照会

オブジェクトが POJO 形式で保管されている場合、オブジェクトをインフレートする必要がないので、索引付けおよび照会を実行するコストは最小限ですみます。バイト配列マップを使用している場合、オブジェクトをインフレートするための追加コストがかかります。一般的に、アプリケーションが索引または照会を使用する場合は、キー属性に対してのみ照会を実行するのでない場合は、バイト配列マップの使用は推奨されません。

オプティミスティック・ロック

オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用している場合、更新操作および無効化操作中に追加コストがかかります。これは、サーバー上の値をインフレートして、オプティミスティック衝突のチェックを行うためのバージョン値を取得する必要があるためです。フェッチ操作を保証するためだけにオプティミスティック・ロックを使用していて、オプティミスティック衝突のチェックは必要ない場合、com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.NoVersioningOptimisticCallback を使用して、バージョン検査を使用不可にできます。

ローダー

ローダーを使用している場合、値をインフレートしてから再シリアライズする操作をローダーが値を使用するときに行うため、eXtreme Scale ランタイムでもコストがかかります。それでも、ローダーと共にバイト配列マップを使用することができますが、そのようなシナリオでは値に変更を加えるためのコストを考慮に入れる必要があります。例えば、ほとんどが読み取りのキャッシュという状況でバイト配列機能を使用できます。この場合、ヒープ内のオブジェクト数が少なく、使用されるメモリーも少ないという利点のほうが、挿入および更新操作時にバイト配列の使用でコストが生じるというマイナス点を上回ります。

ObjectGridEventListener

ObjectGridEventListener プラグイン内で transactionEnd メソッドを使用している場合、LogElement の CacheEntry または現行値にアクセスするときのリモート要求に対する追加コストがサーバー・サイドで生じます。このメソッドの実装がこれらのフィールドにアクセスしないようになっている場合は、このような追加コストはありません。

関連資料:

ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

ObjectTransformer インターフェースを使用したコピー操作のチューニング

ObjectTransformer インターフェースは、アプリケーションへのコールバックを使用して、通常の操作と、オブジェクト・シリアライゼーションやオブジェクトのディープ・コピーなどのコストのかかる操作のカスタム実装を提供します。

 ObjectTransformer インターフェースは、DataSerializer プラグインで置換されました。これを使用して、既存の製品 API がデータと効率的に対話できるように WebSphere eXtreme Scale 内の任意のデータを効率的に格納できます。

概要

NO_COPY モードが使用されている場合を除いて、値のコピーは常に行われます。eXtreme Scale 内で採用されているデフォルトのコピー・メカニズムはシリアライゼーションであり、これはコストのかかる操作として知られています。ObjectTransformer インターフェースはこのような状況で使用します。ObjectTransformer インターフェースは、アプリケーションへのコールバックを使用して、通常の操作と、オブジェクト・シリアライズやオブジェクトに対するディープ・コピーなどのコストのかかる操作のカスタム実装を提供します。

アプリケーションで、マップに対する ObjectTransformer インターフェースの実装が提供できると、eXtreme Scale は、このオブジェクトに対するメソッドに権限を委任し、インターフェースにおける各メソッドの最適化バージョンの提供はアプリケーションに頼ります。 ObjectTransformer インターフェースは以下のようになります。

```
public interface ObjectTransformer {
    void serializeKey(Object key, ObjectOutputStream stream) throws IOException;
    void serializeValue(Object value, ObjectOutputStream stream) throws IOException;
    Object inflateKey(ObjectInputStream stream) throws IOException, ClassNotFoundException;
    Object inflateValue(ObjectInputStream stream) throws IOException, ClassNotFoundException;
    Object copyValue(Object value);
    Object copyKey(Object key);
}
```

次のコード例を使用して、ObjectTransformer インターフェースを BackingMap に関連付けることができます。

```
ObjectGrid g = ...;
BackingMap bm = g.defineMap("PERSON");
MyObjectTransformer ot = new MyObjectTransformer();
bm.setObjectTransformer(ot);
```

ディープ・コピー操作を調整する

アプリケーションが ObjectMap からオブジェクトを受け取った後で、eXtreme Scale は、オブジェクト値に対してディープ・コピーを実行し、BaseMap マップ内のコピーがデータ保全性を維持するようにします。その後アプリケーションはこのオブジェクト値を安全に変更できます。トランザクションがコミットすると、BaseMap マップ内のオブジェクト値のコピーは新しく変更される値に更新され、アプリケーションはその時点からその値の使用を停止します。コミット・フェーズで再度オブジェクトをコピーして、プライベート・コピーを作成した可能性があります。ただし、この場合は、このアクションのパフォーマンス・コストは、トランザクションのコミットの後で値を使用しないようアプリケーション・プログラマーに要求することに対してトレードオフされました。デフォルトの ObjectTransformer は、clone または serialize と inflate のペアを使用して、コピーを生成しようとします。直列化とインフレーションのペアは、最悪なパフォーマンス・シナリオです。プロファイル作成によって、serialize と inflate がご使用のアプリケーションにとって問題であることが判明したら、ディープ・コピーを作成する適切な clone メソッドを書きます。クラスを変更できない場合は、カスタム ObjectTransformer プラグインを作成し、より効率的な copyValue および copyKey メソッドを実装します。

Evictor のチューニング

Java

プラグイン Evictor を使用する場合、Evictor を作成してパッキング・マップと関連付けるまで、これらはアクティブになりません。 以下のベスト・プラクティスにより、最少使用頻度 (LFU) Evictor および最長未使用時間 (LRU) Evictor に対するパフォーマンスが向上します。

LFU Evictor

LFU Evictor の概念は、頻繁に使用されないマップからエントリーを除去することです。マップのエントリーは、一定量のバイナリー・ヒープを超えて広がります。特定のキャッシュ・エントリーの使用量が増えると、それはヒープの高位に配列されます。Evictor が一連の除去を試行する場合、バイナリー・ヒープの特定のポイントよりも低い位置にあるキャッシュ・エントリーだけを除去します。この結果として、頻繁に使用されないエントリーが除去されます。

LRU Evictor

LRU Evictor は LFU Evictor と同じ概念に従いますが、2、3 の点が異なります。主な違いは、LRU ではバイナリー・ヒープのセットの代わりに先入れ先出し (FIFO) キューを使用することです。キャッシュ・エントリーにアクセスされるたびに、そのエントリーはキューの先頭に移動します。この結果、キューの先頭には最後に使用されたマップ・エントリーが含まれ、キューの最後は最長未使用時間のマップ・エントリーになります。例えば、A キャッシュ・エントリーが 50 回使用され、B キャッシュ・エントリーが A キャッシュ・エントリーの直後に 1 回だけ使用されるとします。この場合、最後に使用された B キャッシュ・エントリーがキューの先頭になり、A キャッシュ・エントリーはキューの最後になります。 LRU Evictor は、キューの末尾にあるキャッシュ・エントリー、すなわち最も古いマップ・エントリーを除去します。

LFU および LRU プロパティーおよびパフォーマンスを向上させるためのベスト・プラクティス

ヒープ数

LFU Evictor を使用する場合は、特定のマップのすべてのキャッシュ・エントリーが指定するヒープ数を超えて配列されます。これによってパフォーマンスが劇的に上がり、また、そのマップのすべての配列を含む、1 つのバイナリー・ヒープ上ですべての除去が同期するのを防ぎます。ヒープが多い場合も、各ヒープのエントリーが少ないので再配列に必要な時間を短縮できます。ご使用の BaseMap でエントリー数の 10% のヒープ数を設定してください。

キューの数

LRU Evictor を使用する場合は、特定のマップのすべてのキャッシュ・エントリーは指定する LRU キューの数を超えて配列されます。これによってパフォーマンスが劇的に上がり、また、そのマップのすべての配列を含む、1 つのキュー上ですべての除去が同期するのを防ぎます。ご使用の BaseMap でエントリー数の 10% のキューの数を設定してください。

MaxSize プロパティー

LFU または LRU Evictor がエントリーの除去を開始すると、MaxSize Evictor プロパティーを使用して、いくつのバイナリー・ヒープまたは LRU キュー・エレメントを除去するかを判別します。例えば、各マップ・キューにおよそ 10 のマップ・エントリーを持つようにヒープまたはキューの数を設定するとします。 MaxSize プロパティーが 7 に設定されている場合は、Evictor は各ヒープまたはキュー・オブジェクトの 3 つのエントリーを除去して、各ヒープまたはキューのサイズを 7 にします。Evictor は、ヒープまたはキューに、エレメントの MaxSize プロパティーの値を超えるエレメントがある場合にのみ、マップ・エントリーをヒープまたはキューから除去します。MaxSize をヒープまたはキュー・サイズの 70% に設定してください。この例の場合、値は 7 に設定されます。ユーザーは、BaseMap エントリーの数を、使用するヒープまたはキューの数で割ることによって、各ヒープまたはキューのおおよそのサイズを得ることができます。

SleepTime プロパティー

Evictor はマップから常にエントリーを除去するわけではありません。その代わり、一定時間アイドル状態となり、マップの検査のみが n 秒間に 1 回行われます。ここで、n は SleepTime プロパティーを示します。このプロパティーも確実にパフォーマンスに影響します。あまり頻繁に除去スイープを実行すると、それを処理するためにリソースが必要となり、パフォーマンスが低下します。ただし、エビクターを頻繁に使用しないと、不要なエントリーがマップ内に存在するという結果となります。不要なエントリーでいっぱいのマップは、メモリー所要量にもマップに必要な処理用リソースにも悪影響を与えます。除去スイープ間隔を 15 秒に設定すると、ほとんどのマップで良好な事例が得られます。マップが頻繁に書き込まれ、高速のトランザクションで使用される場合は、この値をより低く設定することを検討してください。頻繁にマップにアクセスしない場合は、この時間をより高い値に設定することができます。

例

以下の例ではマップを定義し、新しい LFU Evictor を作成し、Evictor のプロパティーを設定し、Evictor を使用するようにマップを設定します。

```
//Use ObjectGridManager to create/get the ObjectGrid. Refer to
// the ObjectGridManger section
ObjectGrid objGrid = ObjectGridManager.create.....
BackingMap bMap = objGrid.defineMap("SomeMap");

//Set properties assuming 50,000 map entries
LFUEvictor someEvictor = new LFUEvictor();
someEvictor.setNumberOfHeaps(5000);
someEvictor.setMaxSize(7);
someEvictor.setSleepTime(15);
bMap.setEvictor(someEvictor);
```

LRU Evictor を使用するのは LFU Evictor を使用するのとよく似ています。次に例を挙げます。

```
ObjectGrid objGrid = new ObjectGrid;
BackingMap bMap = objGrid.defineMap("SomeMap");

//Set properties assuming 50,000 map entries
LRUEvictor someEvictor = new LRUEvictor();
```

```
someEvictor.setNumberOfLRUQueues(5000);
someEvictor.setMaxSize(7);
someEvictor.setSleepTime(15);
bMap.setEvictor(someEvictor);
```

LFU Evictor の例とは 2 行だけ異なっていることに注意してください。

関連タスク:

Java プログラマチックに Evictor を使用可能にする
Evictor は、BackingMap インスタンスと関連しています。

Java XML ファイルを使用したエビクターの構成
BackingMap インターフェースで存続時間 (TTL) エビクターをプログラマチックに設定する以外に、XML ファイルを使用して、各 BackingMap インスタンスでエビクターを構成できます。

関連資料:

Java ObjectGrid 記述子 XML ファイル
WebSphere eXtreme Scale を構成するには、ObjectGrid ディスクリプター XML ファイルおよび ObjectGrid API を使用します。

ロック・パフォーマンスのチューニング

ロック・ストラテジーおよびトランザクション分離設定は、アプリケーションのパフォーマンスに影響します。

キャッシュ付きインスタンスの検索

詳しくは、 519 ページの『ロック・マネージャー』を参照してください。

ペシミスティック・ロック・ストラテジー

キーがしばしば衝突する場合のマップの読み取りおよび書き込み操作には、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用します。ペシミスティック・ロック・ストラテジーは、パフォーマンスに最大の影響があります。

読み取りコミット済みおよび読み取りアンコミットのトランザクション分離

ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用する場合、Session.setTransactionIsolation メソッドを使用してトランザクション分離レベルを設定します。読み取りコミット済み分離または読み取りアンコミット分離の場合、分離に応じて Session.TRANSACTION_READ_COMMITTED 引数または Session.TRANSACTION_READ_UNCOMMITTED 引数を使用します。トランザクション分離レベルをデフォルトのペシミスティック・ロックの振る舞いにリセットするには、Session.REPEATABLE_READ 引数を持つ Session.setTransactionIsolation メソッドを使用します。

読み取りコミット済み分離では、共有ロックの期間が短縮され、並行性が向上して、デッドロックの可能性が低くなります。この分離レベルは、トランザクションが、トランザクションの期間中、読み取り値が変更されないままである保証が不要な場合に使用してください。

アンコミット読み取りは、トランザクションがコミット済みデータを参照する必要がない場合に使用します。

オプティミスティック・ロック・ストラテジー

オプティミスティック・ロックはデフォルト構成です。このストラテジーはペシミスティック・ストラテジーと比較して、パフォーマンスおよびスケーラビリティーの両方において優れています。アプリケーションが若干のオプティミスティック更新の失敗を許容でき、ペシミスティック・ストラテジーよりもパフォーマンスに優れている場合は、このストラテジーを使用します。このストラテジーは、読み取り操作や、更新頻度の低いアプリケーションに最適です。

OptimisticCallback プラグイン

オプティミスティック・ロック・ストラテジーでは、キャッシュ・エントリーのコピーを作成し、必要に応じてそれらを比較します。エントリーのコピーには、クローン作成やシリアライゼーションが関係する可能性があるため、この操作はコストが高くつきます。パフォーマンスをできる限り高速にするには、非エンティティー・マップ用にカスタム・プラグインを実装してください。

詳しくは、 608 ページの『キャッシュ・オブジェクトのバージョン管理と比較のためのプラグイン』を参照してください。

エンティティーに対するバージョン・フィールドの使用

エンティティーに対してオプティミスティック・ロックを使用している場合、@Version アノテーション、または、エンティティー・メタデータ記述子ファイルの同等の属性を使用します。バージョン・アノテーションを使用すれば、ObjectGrid で非常に効率的にオブジェクトのバージョンを追跡することができます。エンティティーにバージョン・フィールドがなく、エンティティーに対してオプティミスティック・ロックが使用されている場合、エンティティー全体がコピーされ、比較されます。

ロックなしストラテジー

読み取り専用アプリケーションでは、ロックなしストラテジーを使用します。ロックなしストラテジーではいかなるロックも取得せず、ロック・マネージャーも使用しません。このため、このストラテジーは最も並行性、パフォーマンス、スケーラビリティーに優れています。

シリアライゼーション・パフォーマンスのチューニング

WebSphere eXtreme Scale は、複数の Java プロセスを使用してデータを保持します。これらのプロセスはデータをシリアライズします。つまり、クライアント・プロセスとサーバー・プロセスの間でデータを移動させるために、(Java オブジェクト・インスタンス形式の) データをバイトに変換し、必要に応じて再びオブジェクトに戻します。 データのマーシャルは最もコストのかかる操作であり、アプリケーション開発者は、スキーマを設計し、データ・グリッドを構成し、データ・アクセス API と対話する際に、それに対処する必要があります。

デフォルトの Java シリアライゼーション・ルーチンおよびコピー・ルーチンは、比較的遅く、標準的なセットアップではプロセッサーの 60 から 70 パーセントを消

費する場合があります。以降のセクションに、シリアライゼーションのパフォーマンスを改善するための選択肢を示します。

 ObjectTransformer インターフェースは、DataSerializer プラグインで置換されました。これを使用して、既存の製品 API がデータと効率的に対話できるように WebSphere eXtreme Scale 内の任意のデータを効率的に格納できます。

各 BackingMap 用 ObjectTransformer の作成

ObjectTransformer は、BackingMap に関連付けることができます。ObjectTransformer インターフェースを実装し、かつ以下の操作のための実装を提供するクラスを、アプリケーションに含めることができます。

- 値のコピー
- ストリーム間での、キーのシリアライズとインフレーション
- ストリーム間での、値のシリアライズとインフレーション

キーは不変であると見なされるため、アプリケーションはキーをコピーする必要はありません。

注: ObjectTransformer は、変換中のデータを ObjectGrid が理解している場合にのみ起動されます。例えば、DataGrid API エージェントが使用される場合は、エージェントそのものに加えて、エージェント・インスタンス・データまたはエージェントから返されるデータも、カスタムのシリアライゼーション技法を使用して最適化されなければなりません。ObjectTransformer は、DataGrid API エージェントに対しては起動されません。

エンティティーの使用

EntityManager API を使用している場合、エンティティー・オブジェクトは BackingMap には直接保管されません。EntityManager API はエンティティー・オブジェクトを Tuple オブジェクトに変換します。エンティティー・マップは、高度に最適化された ObjectTransformer と自動的に関連付けられます。ObjectMap API または EntityManager API を使用してエンティティー・マップと対話する際、必ずエンティティー ObjectTransformer が起動されます。

カスタムのシリアライゼーション

一部のケースでは、オブジェクトを変更して、カスタム・シリアライゼーションを使用するようにする必要があります (例えば、java.io.Externalizable インターフェースを実装する、または java.io.Serializable インターフェースを実装しているクラスの writeObject および readObject メソッドを実装するなど)。 ObjectGrid API または EntityManager API のメソッド以外のメカニズムを使用してオブジェクトをシリアライゼーションするときは、カスタムのシリアライズした技法を採用する必要があります。

例えば、オブジェクトまたはエンティティーがインスタンス・データとして DataGrid API エージェント内に保管されるとき、またはエージェントがオブジェクトやエンティティーを返すとき、それらのオブジェクトは ObjectTransformer を使用して変換されません。ただし、`EntityMixin` インターフェースが使用されている場合、エージェントは、自動的に ObjectTransformer を使用します。詳しくは、

『DataGrid エージェントとエンティティー・ベースのマップ』を参照してください。

バイト配列

ObjectMap または DataGrid API を使用している場合、クライアントがデータ・グリッドと対話するとき、および、オブジェクトが複製されるときには、キーと値のオブジェクトがシリアライズされます。シリアライゼーションのオーバーヘッドを避けるには、Java オブジェクトの代わりにバイト配列を使用します。バイト配列を使用すればメモリーへの保管にかかるコストはずっと少なくてすみます。これは、JDK がガーベッジ・コレクション中に検索するオブジェクトが少なく、必要なときだけインフレートできるためです。バイト配列は、照会または索引を使用してオブジェクトにアクセスする必要がない場合にのみ使用するべきです。データはバイトとして保管されるので、データにはキーを介してのみアクセスできます。

WebSphere eXtreme Scale は、 CopyMode.COPY_TO_BYTES マップ構成オプションを使用して、自動的にデータをバイト配列として保管できますが、クライアントによる手動での処理も可能です。このオプションは、データをメモリーに効率的に保管し、照会および索引によるオンデマンドでの使用のために、バイト配列内のオブジェクトを自動的にインフレートすることもできます。

COPY_TO_BYTES または COPY_TO_BYTES_RAW コピー・モードを使用しているときに、MapSerializerPlugin プラグインを BackingMap プラグインと関連付けることができます。このアソシエーションにより、データをネイティブ Java オブジェクトの形式ではなく、メモリー内にシリアライズされた形式で保管することができます。シリアライズされたデータを保管することで、メモリーが節約され、クライアントおよびサーバー上のレプリカ生成およびパフォーマンスが向上します。
DataSerializer プラグインを使用すると、圧縮、暗号化、展開および照会が可能な高性能のシリアライゼーション・ストリームを開発できます。

シリアライゼーションのチューニング

DataSerializer プラグインは、WebSphere eXtreme Scale に、シリアライゼーション中に直接使用できるのはどの属性で、直接使用できないのはどの属性か、シリアライズされるデータのパス、メモリーに保管されるデータのタイプを指示するメタデータを公開します。バイト配列と効率的に対話できるように、オブジェクト・シリアライゼーションおよびインフレーションのパフォーマンスを最適化できます。

概要


ObjectTransformer インターフェースは、DataSerializer プラグインで置換されました。これを使用して、既存の製品 API がデータと効率的に対話できるように WebSphere eXtreme Scale 内の任意のデータを効率的に格納できます。

NO_COPY モードが使用されている場合を除いて、値のコピーは常に行われます。eXtreme Scale 内で採用されているデフォルトのコピー・メカニズムはシリアライゼーションであり、これはコストのかかる操作として知られています。
ObjectTransformer インターフェースはこのような状況で使用します。
ObjectTransformer インターフェースは、アプリケーションへのコールバックを使用して、通常の操作と、オブジェクト・シリアライズやオブジェクトに対するディー

プ・コピーなどのコストのかかる操作のカスタム実装を提供します。ただし、ほとんどの場合、パフォーマンスを向上させるために、DataSerializer プラグインを使用してオブジェクトをシリアライズできます。DataSerializer プラグインを利用するには、COPY_TO_BYTES または COPY_TO_BYTES_RAW のいずれかのコピー・モードを使用する必要があります。詳しくは、DataSerializer プラグインを使用したシリアライゼーションを参照してください。

アプリケーションで、マップに対する ObjectTransformer インターフェースの実装が提供できると、eXtreme Scale は、このオブジェクトに対するメソッドに権限を委任し、インターフェースにおける各メソッドの最適化バージョンの提供はアプリケーションに頼ります。 ObjectTransformer インターフェースは以下のようになります。

```
public interface ObjectTransformer {
    void serializeKey(Object key, ObjectOutputStream stream) throws IOException;
    void serializeValue(Object value, ObjectOutputStream stream) throws IOException;
    Object inflateKey(ObjectInputStream stream) throws IOException, ClassNotFoundException;
    Object inflateValue(ObjectInputStream stream) throws IOException, ClassNotFoundException;
    Object copyValue(Object value);
    Object copyKey(Object key);
}
```

次のコード例を使用して、ObjectTransformer インターフェースを BackingMap に関連付けることができます。

```
ObjectGrid g = ...;
BackingMap bm = g.defineMap("PERSON");
MyObjectTransformer ot = new MyObjectTransformer();
bm.setObjectTransformer(ot);
```

オブジェクト・シリアライゼーションおよびオブジェクト・インフレーションの調整

オブジェクト・シリアライゼーションは、eXtreme Scale を使用した場合に通常、最も重要なパフォーマンスの考慮事項です。この eXtreme Scale は、アプリケーションで ObjectTransformer プラグインが提供されない場合に、デフォルトのシリアライズ化メカニズムを使用します。アプリケーションは Serializable readObject と writeObject の実装を供給するか、または、Externalizable インターフェースを実装するオブジェクトを持つことができますが、後者の方が 10 倍高速です。マップ内のオブジェクトを変更できない場合、アプリケーションは ObjectTransformer インターフェースを ObjectMap に関連付けることができます。serialize メソッドおよび inflate メソッドが提供されることにより、アプリケーションは、システムのパフォーマンスに大きく影響するこれらの操作を最適化するためのカスタム・コードを提供できます。serialize メソッドは、与えられたストリームにオブジェクトをシリアライズします。 inflate メソッドは入力ストリームを提供します。そしてアプリケーションがオブジェクトを作成し、ストリーム内のデータを使用してオブジェクトをインフレートし、最後にオブジェクトを戻すものと想定します。 serialize メソッドと inflate メソッドの実装は、相互にミラーリングする必要があります。

DataSerializer プラグインは、ObjectTransformer で置き換えられましたが、これは推奨されません。データを最も効率的な方法でシリアライズするには、DataSerializer プラグインを使用すると、ほとんどの場合でパフォーマンスが向上します。例えば、照会および索引付けなどの機能を使用しようとしている場合、DataSerializer プラグインはアプリケーション・コードに構成またはプログラムの変更を加えることなく、パフォーマンスを向上させるため、そのメリットをすぐに利用できます。

照会のパフォーマンスのチューニング

Java

照会のパフォーマンスを調整する場合は、以下の手法とヒントを使用してください。

パラメーターの使用

照会を実行する場合、照会ストリングを構文解析し、照会を実行する計画を開発する必要がありますが、両方ともコストがかかる可能性があります。WebSphere eXtreme Scale は、照会ストリングによって照会計画をキャッシュに入れます。キャッシュは有限サイズであるため、照会ストリングを可能な限り再利用することが重要です。名前付きパラメーターまたは定位置パラメーターを使用しても、照会計画の再利用が促進され、パフォーマンスが向上します。

```
Positional Parameter Example  Query q = em.createQuery("select c from
Customer c where c.surname=?1");   q.setParameter(1, "Claus");
```

索引の使用

マップに対する適切な索引付けは、マップ・パフォーマンス全体にいくらかのオーバーヘッドをもたらしますが、照会パフォーマンスに著しい効果をもたらす場合があります。照会に関係するオブジェクト属性に索引付けを行わない場合、照会エンジンは、属性ごとにテーブル・スキャンを実行します。テーブル・スキャンは、照会実行時に最もコストのかかる操作です。照会に関係するオブジェクト属性に対する索引付けにより、照会エンジンは、不必要なテーブル・スキャンを回避でき、照会パフォーマンス全体を改善することができます。アプリケーションが最も読み取られるマップに対して照会を集中的に使用するように設計されている場合は、照会に関係するオブジェクト属性に対して索引を構成してください。マップがほとんど更新される場合は、照会パフォーマンスの改善と、マップに対する索引付けオーバーヘッドとのバランスを取る必要があります。

Plain Old Java Object (POJO) がマップ内に保管されている場合、適切に索引付けすることによって、Java リフレクションを回避できます。次の例では、予算フィールドに索引が作成済みである場合、照会は WHERE 文節を範囲見出し検索と置換します。それ以外の場合、照会では、マップ全体をスキャンし、Java リフレクションを使用して最初に予算を取得してから、予算を値 50000 と比較することによって、WHERE 文節を評価します。

```
SELECT d FROM DeptBean d WHERE d.budget=50000
```

個別照会を最適に調整する方法、および各種の構文、オブジェクト・モデル、および索引が照会のパフォーマンスにどのように影響するかについて詳しくは、813 ページの『照会計画』を参照してください。

ページ編集の使用

クライアント/サーバー環境では、照会エンジンは、結果マップ全体をクライアントにトランスポートします。戻されるデータは、妥当なチャンクに分割される必要があります。EntityManager Query および ObjectMap ObjectQuery の両インターフェー

スは、結果のサブセットを戻すことを照会に許可する setFirstResult および setMaxResults メソッドをサポートします。

エンティティーの代わりにプリミティブ値を戻す

EntityManager Query API を使用すると、エンティティーは照会パラメーターとして戻されます。照会エンジンは、現在のところ、これらのエンティティーに対するキーをクライアントに戻します。クライアントが getResultIterator メソッドからの Iterator を使用して、これらのエンティティーを繰り返すとき、各エンティティーは、EntityManager インターフェース上の find メソッドで作成されたかのように、自動的に拡張され、管理されます。エンティティー・グラフ全体は、クライアント上のエンティティー ObjectMap からビルドされます。エンティティー値属性およびその他の関連エンティティーは、可能な限り解決されます。

コストのかかるグラフのビルドを回避するには、パス・ナビゲーションを使用して個々の属性を戻すように照会を変更してください。

例:

```
// Returns an entity
SELECT p FROM Person p
// Returns attributes SELECT p.name, p.address.street, p.address.city, p.gender FROM Person p
```

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

照会計画

Java

すべての eXtreme Scale 照会には照会計画があります。この計画は、照会エンジンが ObjectMap および索引とどのように対話するかを説明するものです。照会計画を表示すると、照会ストリングまたは索引が適切に使用されているかどうかを判断できます。また照会計画を使用すると、照会ストリング中のわずかな変更が eXtreme Scale による照会の実行方法に及ぼす変化を検討することもできます。

照会計画は、以下のいずれかの手段で表示できます。

- EntityManager Query または ObjectQuery の getPlan API メソッド
- ObjectGrid 診断トレース

getPlan メソッド

ObjectQuery および Query インターフェースの getPlan メソッドは、照会計画を説明するストリングを戻します。このストリングは、標準出力で表示することも、照会計画を表示するためのログで表示することもできます。

注: 注: 分散環境では、getPlan メソッドは、サーバーに対して実行されず、定義された索引を示しません。計画を表示するには、エージェントを使用して、サーバー上でその計画を表示します。

照会計画トレース

照会計画は、ObjectGrid トレースを使用して表示できます。照会計画トレースを有効とするには、以下のトレース仕様を使用します。

```
QueryEnginePlan=debug=enabled
```

トレース・ログ・ファイルを有効にする方法およびその検出方法について詳しくは、933 ページの『トレースの収集』を参照してください。

照会計画の例

この照会計画では、for という単語を使用して、この照会が ObjectMap コレクションで繰り返されるか、または派生するコレクション (q2.getEmps()、q2.dept、または内部ループによって返される一時的コレクションなど) で繰り返されることを示します。コレクションが ObjectMap のコレクションである場合、照会計画は、順次スキャン (INDEX SCAN で指示) や固有または非固有の索引が使用されているかどうかを示します。また、照会計画ではフィルター・ストリングを使用して、コレクションに適用される条件式をリストします。

通常、デカルト積は対象照会では使用されません。以下の照会では、外部ループ内の EmpBean マップ全体をスキャンし、内部ループ内の DeptBean マップ全体をスキャンします。

```
SELECT e, d FROM EmpBean e, DeptBean d

Plan trace:

for q2 in EmpBean ObjectMap using INDEX SCAN
     for q3 in DeptBean ObjectMap using INDEX SCAN
   returning new Tuple( q2,  q3  )
```

以下の照会では、EmpBean マップを順次スキャンして特定部門の全従業員名を検索し、従業員オブジェクトを取得します。この照会では、従業員オブジェクトからその部門オブジェクトにナビゲートして、d.no=1 フィルターを適用します。この例の場合、各従業員はただ 1 つの部門オブジェクト参照を持つため、内部ループが 1 回実行されます。

```
SELECT e.name FROM EmpBean e JOIN e.dept d WHERE d.no=1

Plan trace:
```

```
for q2 in EmpBean ObjectMap using INDEX SCAN
     for q3 in  q2.dept
      filter ( q3.getNo() = 1 )
   returning new Tuple( q2.name  )
```

以下の照会は、前記の照会と同等です。ただし、以下の照会では、まず DeptBean 1 次キー・フィールド番号に対して定義された固有索引を使用することで、結果が 1 つの部門オブジェクトに絞り込まれるため、実行効率が高まります。照会により、この部門オブジェクトから従業員オブジェクトにナビゲートされ、以下のように従業員名が取得されます。

```
SELECT e.name FROM DeptBean d JOIN d.emps e WHERE d.no=1

Plan trace:

for q2 in DeptBean ObjectMap using UNIQUE INDEX key=(1)
     for q3 in  q2.getEmps()
   returning new Tuple( q3.name  )
```

以下の照会を使用して、開発または販売に従事するすべての従業員を検索します。この照会では、EmpBean マップ全体をスキャンするとともに、式 d.name = 'Sales' or d.name='Dev' を評価することで追加のフィルタリングを実行します。

```
SELECT e FROM EmpBean e, in (e.dept) d WHERE d.name = 'Sales'
 or d.name='Dev'

Plan trace:

for q2 in EmpBean ObjectMap using INDEX SCAN
     for q3 in  q2.dept
      filter (( q3.getName() = Sales ) OR ( q3.getName() = Dev ) )
   returning new Tuple( q2  )
```

以下の照会は前記の照会と同等ですが、この照会では異なる照会計画を実行し、フィールド名について作成された範囲索引を使用します。一般的に、部門オブジェクトの範囲の絞り込みに名前フィールドの索引が使用されることにより、開発または販売部門がごく少数である場合は照会が高速実行されるため、この照会の方が性能が高くなります。

```
SELECT e FROM DeptBean d, in(d.emps) e WHERE d.name='Dev' or d.name='Sales'

Plan trace:

IteratorUnionIndex of

     for q2 in DeptBean ObjectMap using INDEX on name = (Dev)
       for q3 in  q2.getEmps()


     for q2 in DeptBean ObjectMap using INDEX on name = (Sales)
       for q3 in  q2.getEmps()
```

以下の照会を使用して、従業員のいない部門を検索します。

```
SELECT d FROM DeptBean d WHERE NOT EXISTS(select e from d.emps e)

Plan trace:

for q2 in DeptBean ObjectMap using INDEX SCAN
    filter ( NOT  EXISTS (    correlated collection defined as
```

```
       for q3 in  q2.getEmps()
       returning new Tuple( q3      )

   returning new Tuple( q2  )
```

以下の照会は前述の照会と同等ですが、この照会では SIZE スカラー関数が使用されます。この照会でパフォーマンスは同じですが、作成が容易になっています。

```
SELECT d FROM DeptBean d WHERE SIZE(d.emps)=0
for q2 in DeptBean ObjectMap using INDEX SCAN
    filter (SIZE( q2.getEmps()) = 0 )
   returning new Tuple( q2  )
```

以下の例は、同様の性能を持つ前述の照会と同じ照会を書き込む別の方法を示していますが、この照会も容易に書き込むことができます。

```
SELECT d FROM DeptBean d WHERE d.emps is EMPTY

Plan trace:

for q2 in DeptBean ObjectMap using INDEX SCAN
    filter ( q2.getEmps() IS EMPTY  )
   returning new Tuple( q2  )
```

以下の照会では、パラメーターの値と等しい名前を持つ従業員の住所のうち少なくとも 1 つと一致する住所を持つすべての従業員を検索します。内部ループは外部ループに依存関係を持ちません。この照会では、内部ループは 1 回実行されます。

```
SELECT e FROM EmpBean e WHERE e.home =  any (SELECT e1.home FROM EmpBean e1
 WHERE e1.name=?1)
for q2 in EmpBean ObjectMap using INDEX SCAN
    filter ( q2.home =ANY     temp collection defined as

       for q3 in EmpBean ObjectMap using INDEX on name = ( ?1)
       returning new Tuple( q3.home      )
 )
   returning new Tuple( q2  )
```

以下の照会は前述の照会と同等ですが、この照会には相関副照会があり、さらに内部ループが繰り返し実行されます。

```
SELECT e FROM EmpBean e WHERE EXISTS(SELECT e1 FROM EmpBean e1 WHERE
 e.home=e1.home and e1.name=?1)

Plan trace:

for q2 in EmpBean ObjectMap using INDEX SCAN
    filter ( EXISTS (    correlated collection defined as

       for q3 in EmpBean ObjectMap using INDEX on name = (?1)
        filter ( q2.home =  q3.home )
       returning new Tuple( q3      )

   returning new Tuple( q2  )
```

索引を使用した照会の最適化

Java

索引を適切に定義および使用すると、照会のパフォーマンスをかなり改善できます。

WebSphere eXtreme Scale 照会では、組み込み HashIndex プラグインを使用すると、照会のパフォーマンスを改善できます。索引は、エンティティーまたはオブジェクト属性に対して定義できます。照会エンジンは、その WHERE 文節で以下のいずれかのストリングが使用されると、定義された索引を自動的に使用します。

- 以下の演算子を使用する比較式: =、<、>、<=、または >= (等しくない <> を除くすべての比較式)
- BETWEEN 式
- 式のオペランドが定数またはシンプル・ターム

要件

照会で使用される場合、索引には以下の要件があります。

- すべての索引は組み込み HashIndex プラグインを使用する必要があります。
- すべての索引は静的に定義されていなければなりません。動的索引はサポートされません。
- 自動的に静的 HashIndex プラグインを作成するために @Index アノテーションを使用できます。
- すべての単一属性索引の RangeIndex プロパティーは true に設定されていなければなりません。
- すべての複合索引の RangeIndex プロパティーは false に設定されていなければなりません。
- すべてのアソシエーション (リレーションシップ) 索引の RangeIndex プロパティーは false に設定されていなければなりません。

HashIndex の構成について詳しくは、635 ページの『データの索引付けのためのプラグイン』を参照してください。

索引付けについては、308 ページの『索引付け』を参照してください。

キャッシュ・オブジェクトを検索するためのより効果的な方法については、652 ページの『複合索引の使用』を参照してください。

索引選択に関するヒントの使用

索引は、HINT_USEINDEX 定数付きの setHint メソッドを Query および ObjectQuery インターフェースで使用すると、手動で選択することができます。これは、最も効率的な索引を使用するよう照会を最適化する際に役立ちます。

属性索引を使用する照会例

以下の例では、シンプル・ターム e.empid、e.name、e.salary、d.name、d.budget、および e.isManager が使用されています。これらの例では、索引がエンティティーまたは値オブジェクトの名前、給与、および予算フィールドに対して定義済みであることを前提としています。empid フィールドは 1 次キーであり、isManager には索引が定義されていません。

以下の照会では、名前と給与の両フィールドに対して索引を使用します。この場合、名前が最初のパラメーターの値に一致するか、給与が 2 番目のパラメーターの値に一致するすべての従業員が戻されます。

```
SELECT e FROM EmpBean e where e.name=?1 or e.salary=?2
```

以下の照会では、名前と予算の両フィールドに対して索引を使用します。この照会は、2000 より大きい予算を持つ 'DEV' という名前の付いたすべての部門を戻します。

```
SELECT d FROM DeptBean dwhere d.name='DEV' and d.budget>2000
```

以下の照会では、給与が 3000 より高く、かつパラメーターの値と等しい isManager フラグ値を持つ従業員をすべて戻します。この照会では、給与フィールドに対して定義された索引を使用するとともに、比較式 `e.isManager=?1.` を評価することで追加のフィルタリングを実行します。

```
SELECT e FROM EmpBean e where e.salary>3000 and e.isManager=?1
```

次の照会では、1 番目のパラメーターより大きい給与を得ているか、または管理者である従業員をすべて検索します。給与フィールドには索引が定義済みですが、照会では、EmpBean フィールドの 1 次キーに対して作成された組み込み索引をスキャンし、式 `e.salary>?1` または `e.isManager=TRUE` を評価します。

```
SELECT e FROM EmpBean e WHERE e.salary>?1 or e.isManager=TRUE
```

以下の照会では、文字 a が含まれている名前の従業員を戻します。名前フィールドには索引が定義済みですが、名前フィールドが LIKE 式で使用されているため、照会ではこの索引を使用しません。

```
SELECT e FROM EmpBean e WHERE e.name LIKE '%a%'
```

以下の照会では、名前が「Smith」ではない従業員をすべて検索します。名前フィールドには索引が定義済みですが、照会では等しくない (<>) 比較演算子を使用するため、この索引を使用しません。

```
SELECT e FROM EmpBean e where e.name<>'Smith'
```

以下の照会では、予算がパラメーターの値より小さく、かつ従業員給与が 3000 より大きい部門をすべて検索します。この照会では、給与の索引を使用しますが、dept.budget がシンプル・タームではないため、予算の索引を使用しません。dept オブジェクトは、コレクション e から導き出されます。dept オブジェクトを検索するのに、予算の索引を使用する必要はありません。

```
SELECT dept from EmpBean e, in (e.dept) dept where e.salary>3000 and
dept.budget<?
```

以下の照会では、1、2、および 3 の empid を持つ従業員の給与より大きい給与の従業員をすべて検索します。比較には副照会が含まれているため、索引 salary は使用されません。empid は、1 次キーですが、すべての 1 次キーには組み込み索引が定義済みであるため、固有索引の検索に使用されます。

```
SELECT e FROM EmpBean e WHERE e.salary > ALL (SELECT e1.salary    FROM
EmpBean e1 WHERE e1.empid=1 or e1.empid =2 or e1.empid=99)
```

索引が照会で使用されているかどうかを確認する場合は、 813 ページの『照会計画』を表示できます。以下に、前述の照会の照会計画例を示します。

```
for q2 in EmpBean ObjectMap using INDEX SCAN
    filter ( q2.salary >ALL     temp collection defined as
       IteratorUnionIndex of

         for q3 in EmpBean ObjectMap using UNIQUE INDEX key=(1)
        )

         for q3 in EmpBean ObjectMap using UNIQUE INDEX key=(2)
        )

         for q3 in EmpBean ObjectMap using UNIQUE INDEX key=(99)
        )
       returning new Tuple( q3.salary )
   returning new Tuple( q2  )

for q2 in EmpBean ObjectMap using RANGE INDEX on salary with range(3000,)
     for q3 in  q2.dept
      filter ( q3.budget <  ?1 )
   returning new Tuple( q3  )
```

属性の索引付け

前に定義された制約付きで、任意の単一属性タイプに対して索引を定義できます。

@Index を使用したエンティティー索引の定義

エンティティーに索引を定義するには、単にアノテーションを定義します。

Entities using annotations

```
  @Entity
  public class Employee {
  @Id int empid;
  @Index String name
  @Index double salary
  @ManyToOne Department dept;
}
@Entity
  public class Department {
  @Id int deptid;
  @Index String name;
  @Index double budget;
  boolean isManager;
  @OneToMany Collection<Employee> employees;
  }
```

XML の使用

XML を使用して索引を定義することもできます。

Entities without annotations

```
  public class Employee {
  int empid;
  String name
  double salary
  Department dept;
  }

  public class Department {
  int deptid;
  String name;
```

```
  double budget;
  boolean isManager;
  Collection employees;
  }
```

ObjectGrid XML with attribute indexes

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
  <objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
  xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
  <objectGrids>
  <objectGrid name="DepartmentGrid" entityMetadataXMLFile="entity.xml>
  <backingMap name="Employee" pluginCollectionRef="Emp"/>
  <backingMap name="Department" pluginCollectionRef="Dept"/>
  </objectGrid>
  </objectGrids>
  <backingMapPluginCollections>
  <backingMapPluginCollection id="Emp">
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Employee.name"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="name"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Employee.salary"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="salary"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  </backingMapPluginCollection>
  <backingMapPluginCollection id="Dept">
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Department.name"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="name"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Department.budget"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="budget"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  </backingMapPluginCollection>
  </backingMapPluginCollections>
  </objectGridConfig>
```

Entity XML

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
  <entity-mappings xmlns="http://ibm.com/ws/projector/config/emd"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/projector/config/emd ./emd.xsd">

  <description>Department entities</description>
  <entity class-name="acme.Employee" name="Employee" access="FIELD">
  <attributes>
  <id name="empid" />
  <basic name="name" />
  <basic name="salary" />
  <many-to-one name="department"
  target-entity="acme.Department"
  fetch="EAGER">
  <cascade><cascade-persist/></cascade>
  </many-to-one>
  </attributes>
  </entity>
  <entity class-name="acme.Department" name="Department" access="FIELD">
  <attributes>
  <id name="deptid" />
  <basic name="name" />
  <basic name="budget" />
  <basic name="isManager" />
  <one-to-many name="employees"
  target-entity="acme.Employee"
  fetch="LAZY" mapped-by="parentNode">
  <cascade><cascade-persist/></cascade>
  </one-to-many>
  </attributes>
  </entity>
  </entity-mappings>
```

XML を使用した非エンティティーの索引の定義

非エンティティー・タイプに対する索引は XML 内で定義されます。
MapIndexPlugin を作成するときに、エンティティー・マップに対しての場合と非エンティティー・マップに対しての場合で相違はありません。

Java bean

```
public class Employee {
  int empid;
  String name
  double salary
  Department dept;

 public class Department {
  int deptid;
  String name;
  double budget;
  boolean isManager;
  Collection employees;
  }
```

ObjectGrid XML with attribute indexes

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
  <objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
  xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
  <objectGrids>
  <objectGrid name="DepartmentGrid">
  <backingMap name="Employee" pluginCollectionRef="Emp"/>
  <backingMap name="Department" pluginCollectionRef="Dept"/>
  <querySchema>
  <mapSchemas>
  <mapSchema mapName="Employee" valueClass="acme.Employee"
  primaryKeyField="empid" />
  <mapSchema mapName="Department" valueClass="acme.Department"
  primaryKeyField="deptid" />
  </mapSchemas>
  <relationships>
  <relationship source="acme.Employee"
  target="acme.Department"
  relationField="dept" invRelationField="employees" />
  </relationships>
  </querySchema>
  </objectGrid>
  </objectGrids>
  <backingMapPluginCollections>
  <backingMapPluginCollection id="Emp">
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Employee.name"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="name"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Employee.salary"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="salary"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  </backingMapPluginCollection>
  <backingMapPluginCollection id="Dept">
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Department.name"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="name"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="Department.budget"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="budget"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="true"
  description="Ranges are must be set to true for attributes." />
  </bean>
  </backingMapPluginCollection>
  </backingMapPluginCollections>
  </objectGridConfig>
```

索引付けのリレーションシップ

WebSphere eXtreme Scale は、関連エンティティーの外部キーを親オブジェクト内に保管します。エンティティーの場合、キーは基本となるタプルに保管されます。非エンティティー・オブジェクトの場合、キーは親オブジェクトに明示的に保管されます。

リレーションシップ属性に索引を追加すると、循環参照を使用するか、IS NULL、IS EMPTY、SIZE、および MEMBER OF 照会フィルターを使用する照会をスピードアップすることができます。単一値関連と多値関連がともに、ObjectGrid 記述子 XML ファイル内に @Index アノテーションまたは HashIndex プラグイン構成を持つ場合があります。

@Index を使用したエンティティー・リレーションシップ索引の定義

以下の例では、@Index アノテーションのあるエンティティーを定義します。

Entity with annotation

```
@Entity
public class Node {
    @ManyToOne @Index
    Node parentNode;

    @OneToMany @Index
    List<Node> childrenNodes = new ArrayList();

    @OneToMany @Index
    List<BusinessUnitType> businessUnitTypes = new ArrayList();
}
```

XML を使用したエンティティー・リレーションシップ索引の定義

以下の例は、XML と HashIndex プラグインを使用して、同じエンティティーおよび索引を定義しています。

Entity without annotations

```
public class Node {
int nodeId;
Node parentNode;
List<Node> childrenNodes = new ArrayList();
List<BusinessUnitType> businessUnitTypes = new ArrayList();
}
```

ObjectGrid XML

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
  <objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
  xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
  <objectGrids>
  <objectGrid name="ObjectGrid_Entity" entityMetadataXMLFile="entity.xml>
  <backingMap name="Node" pluginCollectionRef="Node"/>
  <backingMap name="BusinessUnitType" pluginCollectionRef="BusinessUnitType"/>
  </objectGrid>
  </objectGrids>
  <backingMapPluginCollections>
  <backingMapPluginCollection id="Node">
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="parentNode"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="parentNode"/>
<property name="RangeIndex" type="boolean" value="false"
  description="Ranges are not supported for association indexes." />  </bean>
  <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
  <property name="Name" type="java.lang.String" value="businessUnitType"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="businessUnitTypes"/>

<property name="RangeIndex" type="boolean" value="false"
```

```
 description="Ranges are not supported for association indexes." />
</bean>
 <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
 <property name="Name" type="java.lang.String" value="childrenNodes"/>
 <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="childrenNodes"/>
<property name="RangeIndex" type="boolean" value="false"
 description="Ranges are not supported for association indexes." />
 </bean>
 </backingMapPluginCollection>
 </backingMapPluginCollections>
 </objectGridConfig>
```

Entity XML

```
 <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
 <entity-mappings xmlns="http://ibm.com/ws/projector/config/emd"
 xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/projector/config/emd ./emd.xsd">

 <description>My entities</description>
 <entity class-name="acme.Node" name="Account" access="FIELD">
 <attributes>
 <id name="nodeId" />
 <one-to-many name="childrenNodes"
 target-entity="acme.Node"
 fetch="EAGER" mapped-by="parentNode">
 <cascade><cascade-all/></cascade>
 </one-to-many>
 <many-to-one name="parentNodes"
 target-entity="acme.Node"
 fetch="LAZY" mapped-by="childrenNodes">
 <cascade><cascade-none/></cascade>
 </one-to-many>
 <many-to-one name="businessUnitTypes"
 target-entity="acme.BusinessUnitType"
 fetch="EAGER">
 <cascade><cascade-persist/></cascade>
 </many-to-one>
</attributes>
 </entity>
 <entity class-name="acme.BusinessUnitType" name="BusinessUnitType" access="FIELD">
 <attributes>
 <id name="buId" />
 <basic name="TypeDescription" />
 </attributes>
 </entity>
 </entity-mappings>
```

前に定義された索引を使用すると、以下の例のエンティティー照会が最適化されます。

```
SELECT n FROM Node n WHERE n.parentNode is null
SELECT n FROM Node n WHERE n.businessUnitTypes is EMPTY
  SELECT n FROM Node n WHERE size(n.businessUnitTypes)>=10
  SELECT n FROM BusinessUnitType b, Node n WHERE b member of n.businessUnitTypes and b.name='TELECOM'
```

非エンティティー・リレーションシップ索引の定義

以下の例では、ObjectGrid 記述子 XML ファイル内の非エンティティー・マップの HashIndex プラグインを定義します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
  xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
  <objectGrids>
    <objectGrid name="ObjectGrid_POJO">
      <backingMap name="Node" pluginCollectionRef="Node"/>
      <backingMap name="BusinessUnitType" pluginCollectionRef="BusinessUnitType"/>
      <querySchema>
        <mapSchemas>
          <mapSchema mapName="Node"
     valueClass="com.ibm.websphere.objectgrid.samples.entity.Node"
            primaryKeyField="id" />
          <mapSchema mapName="BusinessUnitType"
            valueClass="com.ibm.websphere.objectgrid.samples.entity.BusinessUnitType"
            primaryKeyField="id" />
        </mapSchemas>
        <relationships>
          <relationship source="com.ibm.websphere.objectgrid.samples.entity.Node"
            target="com.ibm.websphere.objectgrid.samples.entity.Node"
            relationField="parentNodeId" invRelationField="childrenNodeIds" />
          <relationship source="com.ibm.websphere.objectgrid.samples.entity.Node"
            target="com.ibm.websphere.objectgrid.samples.entity.BusinessUnitType"
            relationField="businessUnitTypeKeys" invRelationField="" />
        </relationships>
```

```
      </querySchema>
    </objectGrid>
  </objectGrids>
  <backingMapPluginCollections>
    <backingMapPluginCollection id="Node">
      <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
        <property name="Name" type="java.lang.String" value="parentNode"/>
<property name="Name" type="java.lang.String" value="parentNodeId"/>
<property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="parentNodeId"/>
<property name="RangeIndex" type="boolean" value="false"
  description="Ranges are not supported for association indexes." />
      </bean>
      <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
        <property name="Name" type="java.lang.String" value="businessUnitType"/>
        <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="businessUnitTypeKeys"/>

<property name="RangeIndex" type="boolean" value="false"
  description="Ranges are not supported for association indexes." />
   </bean>
      <bean id="MapIndexPlugin" className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
<property name="Name" type="java.lang.String" value="childrenNodeIds"/>
  <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="childrenNodeIds"/>
  <property name="RangeIndex" type="boolean" value="false"
      description="Ranges are not supported for association indexes." />
</bean>
    </backingMapPluginCollection>
  </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

上記の索引構成が指定されると、以下の例のオブジェクト照会が最適化されます。

```
SELECT n FROM Node n WHERE n.parentNodeId is null
SELECT n FROM Node n WHERE n.businessUnitTypeKeys is EMPTY
SELECT n FROM Node n WHERE size(n.businessUnitTypeKeys)>=10
SELECT n FROM BusinessUnitType b, Node n WHERE
 b member of n.businessUnitTypeKeys and b.name='TELECOM'
```

グローバル索引を使用したクライアント照会の最適化

クライアント ObjectGrid から照会を実行するときは、関連するマップが区画化されているのであれば、区画を設定する必要があります。大規模な区画化された ObjectGrid 環境では、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは通常すべての区画に対して同時に並行照会を実行する必要があります。例えば、100 個の区画がある場合、完全な照会結果を得るためには、アプリケーションは、100 個すべての区画に対して同じ照会を実行し、照会結果をマージする必要があります。これは通常、大量のシステム・リソースを消費します。

照会の述部で対応する HashIndex プラグインが定義されている場合は、クライアント照会が HashIndex プラグインに対してグローバル索引を使用可能にし、MapGlobalIndex API を使用して、その述部の値を表す属性で区画を検索することができます。

例えば、次の照会は、employeeCode が 1 1 のとき、すべての従業員を返します。この照会では、employeeCode フィールドに対して定義される索引が使用されます。

```
SELECT e FROM EmpBean e where e.employeeCode  = 1
```

次の例は、この照会のために使用される HashIndex 構成です。

```
<bean id="MapIndexPlugin"
      className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex">
         <property name="Name" type="java.lang.String" value="CODE"
            description="index name" />
         <property name="AttributeName" type="java.lang.String" value="employeeCode"
            description="attribute name" />
  <property name="GlobalIndexEnabled" type="boolean" value="true"
            description="true for global index" />
   </bean>
```

索引付き属性は、照会の述部で使用される employeeCode です。グローバル索引は、MapGlobalIndex 索引プロキシーを使用できるように、その索引に対して使用可能になっています。

アプリケーションは、MapGlobalIndex.findPartitions() メソッドを使用して、まず適用区画を検索することができます。次に、これらの適用区画に対してのみ照会を実行します。次のコードはこの方法を示したものです。

```
// in client ObjectGrid process
MapGlobalIndex mapGlobalIndexCODE = (MapGlobalIndex)m.getIndex("CODE", false);
Object attribute1 = new Integer(1);
Object[] attributes = new Object[] {attribute1};
Collection partitions = mapGlobalIndexCODE.findPartitions(attributes);
// the returned partitions is a subset of all partitions.
Iterator partitionsIter = partitions.iterator();
String query = "SELECT e FROM EmpBean e where e.employeeCode = ?1";
ObjectQuery oQuery = session.createObjectQuery(query);
// set the query parameter value as the attribute1 that is used in
// mapGlobalIndexCode.findPartitions
oQuery.setParameter(1, attribute1);

Set completeQueryResultSet = new HashSet();
// the following code shows serial query pattern, it runs the query on one partition at a time.
// production code should use parallel query pattern to run query on all applicable partitions in parallel.
while (partitionsIter.hasNext()) {
Integer pid = (Integer)partitionsIter.next();
oQuery.setPartition(pid);
Iterator queryResultIter = oQuery.getResultIterator();
while (queryResultIter.hasNext()) {
completeQueryResultSet.add(queryResultIter.next());
}
}
```

クライアント照会でグローバル索引を使用する目的は、適用区画に対してのみ照会を実行することにあります。そうすることによって、不必要なリモート呼び出しを避けることができます。ただし、グローバル索引はパフォーマンスの向上を保証するものではありません。 MapGlobalIndex.findPartitions() メソッドから返された区画が完全な区画の一定割合 (例えば 90%) を超えた場合は、グローバル索引を使用するオーバーヘッドがその目的にそぐわないことがあります。

関連タスク:

Java 641 ページの『HashIndex プラグインの構成』
組み込み HashIndex である com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.index.HashIndex クラスを構成するには、XML ファイルを使用するか、プログラマチックに行うか、またはエンティティー・マップのエンティティー・アノテーションを使用できます。

Java 395 ページの『索引によるデータへのアクセス (索引 API)』
より効率的なデータ・アクセスのために索引付けを使用します。

関連資料:

Java 646 ページの『HashIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、HashIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、属性 HashIndex を使用しているか複合 HashIndex を使用しているか、または範囲を指定した索引付けが使用可能かどうかといったプロパティーを定義します。

Java 639 ページの『InverseRangeIndex プラグイン属性』
次の属性を使用して、InverseRangeIndex プラグインを構成できます。これらの属性は、索引がどのように作成されるかについてのプロパティーを定義するものです。

Java インターフェース GlobalIndex

EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング

Java

EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

EntityManager インターフェースを使用するためのコストは高いものではなく、実行する作業の種類により異なります。アプリケーションが完成した後、必ず EntityManager インターフェースを使用して重要なビジネス・ロジックを最適化してください。EntityManager インターフェースを使用するコードを、マップとタプルを使用するように修正できます。通常、このコードの修正は、コードの 10 % について必要になる可能性があります。

オブジェクト間のリレーションシップを利用すると、パフォーマンスへの影響が小さくなります。これは、マップを使用しているアプリケーションが、このようなリレーションシップを EntityManager インターフェースと同様に管理する必要があるからです。

EntityManager インターフェースを使用するアプリケーションは、ObjectTransformer 実装環境を提供する必要がありません。アプリケーションは自動的に最適化されます。

マップ用の EntityManager コードの修正

以下にサンプル・エンティティーを示します。

```
@Entity
public class Person
{
```

```
 @Id
 String ssn;
 String firstName;
 @Index
 String middleName;
 String surname;
}
```

エンティティーを検索し、エンティティーを更新するコードを以下に示します。

```
Person p = null;
s.begin();
p = (Person)em.find(Person.class, "1234567890");
p.middleName = String.valueOf(inner);
s.commit();
```

マップおよびタプルを使用する場合のコードは以下のとおりです。

```
Tuple key = null;
key = map.getEntityMetadata().getKeyMetadata().createTuple();
key.setAttribute(0, "1234567890");

// The Copy Mode is always NO_COPY for entity maps if not using COPY_TO_BYTES.
// Either we need to copy the tuple or we can ask the ObjectGrid to do it for us:
map.setCopyMode(CopyMode.COPY_ON_READ);
s.begin();
Tuple value = (Tuple)map.get(key);
value.setAttribute(1, String.valueOf(inner));
map.update(key, value);
value = null;
s.commit();
```

これらのコード・スニペットは両方とも同じ結果になります。アプリケーションは、いずれか一方、または両方のスニペットを使用できます。

2 番目のコード・スニペットは、マップを直接使用する方法およびタプル (キーと値の組) を操作する方法を示しています。値タプルには 0、1 および 2 に索引が設定された **firstName**、**middlename**、および **surname** という 3 つの属性があります。キー・タプルには 0 に索引が設定された、ID 番号という単一の属性があります。EntityMetadata#getKeyMetaData メソッドまたは EntityMetadata#getValueMetaData メソッドを使用して、タプルを作成する方法を確認できます。エンティティーのタプルを作成するには、これらのメソッドを使用する必要があります。タプル・インターフェースを実装して、そのタプル実装のインスタンスを渡すような操作は、実行できません。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連資料:

Java 『エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント』
Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

Java 430 ページの『エンティティー・スキーマの定義』
ObjectGrid は、任意の数の論理エンティティー・スキーマを持つことができます。エンティティーは、アノテーション付き Java クラス、XML、または XML と Java クラスの組み合わせを使用して定義されます。定義されたエンティティーは、eXtreme Scale サーバーに登録され、BackingMap、索引、およびその他のプラグインにバインドされます。

Java 450 ページの『エンティティー・リスナーおよびコールバック・メソッド』
アプリケーションは、エンティティーの状態が遷移した場合に通知を受けることができます。状態変更イベントに対しては、2 つのコールバック・メカニズムが存在します。1 つはエンティティー・クラスに定義されているライフサイクル・コールバック・メソッドで、エンティティーの状態が変更されると必ず呼び出されます。もう 1 つはエンティティー・リスナーで、いくつかのエンティティーに登録できるのでより一般的になっています。

Java 456 ページの『エンティティー・リスナーの例』
要件に基づいて、EntityListener を作成できます。以下にスクリプト例をいくつか示します。

Java 470 ページの『EntityTransaction インターフェース』
EntityTransaction インターフェースを使用すると、トランザクションを区別できます。

関連情報:

Java サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

エンティティー・パフォーマンス・インスツルメンテーション・エージェント

Java

Java Development Kit (JDK) バージョン 6 以降を使用している場合、 WebSphere eXtreme Scale インスツルメンテーション・エージェントを使用可能にすることで、フィールド・アクセス・エンティティーのパフォーマンスを向上させることができます。

JDK バージョン 6 以降での eXtreme Scale エージェントの使用可能化

以下の構文で Java コマンド行オプションを使用して ObjectGrid エージェントを使用可能化することができます。

```
-javaagent:jarpath[=options]
```

jarpath 値は、eXtreme Scale エージェント・クラスおよびサポート・クラスが入っている eXtreme Scale ランタイムの Java アーカイブ (JAR) ファイル (objectgrid.jar、wsobjectgrid.jar、ogclient.jar、wsogclient.jar、および ogagent.jar ファイルなど) へのパスです。通常、スタンドアロン Java プログラム、または WebSphere Application Server を稼働していない Java Platform, Enterprise Edition 環境では、objectgrid.jar ファイルまたは ogclient.jar ファイルを使用します。 WebSphere Application Server または複数クラス・ローダー環境では、Java コマンド行エージェント・オプションで ogagent.jar ファイルを使用する必要があります。追加情報を指定するには、クラスパスに ogagent.config ファイルを指定するか、エージェント・オプションを使用します。

eXtreme Scale エージェント・オプション

config 構成ファイル名をオーバーライドします。

include
構成ファイルの最初の部分である変換ドメイン定義を指定またはオーバーライドします。

exclude
@Exclude 定義を指定またはオーバーライドします。

fieldAccessEntity
@FieldAccessEntity 定義を指定またはオーバーライドします。

trace トレース・レベルを指定します。レベルには ALL、CONFIG、FINE、FINER、FINEST、SEVERE、WARNING、INFO、および OFF があります。

trace.file
トレース・ファイルのロケーションを指定します。

各オプションを区切るために、区切り文字としてセミコロン (;) を使用します。コンマ (,) は、オプション内の各エレメントの区切り文字として使用します。以下の例は、Java プログラムの eXtreme Scale エージェント・オプションを示します。

```
-javaagent:objectgridRoot/lib/objectgrid.jar=config=myConfigFile;
include=includedPackage;exclude=excludedPackage;
fieldAccessEntity=package1,package2
```

ogagent.config ファイル

ogagent.config ファイルは、指定された eXtreme Scale エージェント構成ファイル名です。ファイル名がクラスパス内にある場合、eXtreme Scale エージェントはそのファイルを検索し、解析します。eXtreme Scale エージェントの構成オプションを使

用して、指定されたファイル名をオーバーライドすることができます。以下の例は、構成ファイルの指定方法を示しています。

```
-javaagent:objectgridRoot/lib/objectgrid.jar=config=myOverrideConfigFile
```

eXtreme Scale エージェント構成ファイルには、以下の部分があります。

- **変換ドメイン:** 変換ドメイン部分は、構成ファイルの最初にあります。変換ドメインは、クラス変換プロセスに組み込まれているパッケージおよびクラスのリストです。この変換ドメインには、フィールド・アクセス・エンティティー・クラスであるすべてのクラス、およびそれらのフィールド・アクセス・エンティティー・クラスを参照するその他のクラスが組み込まれる必要があります。フィールド・アクセス・エンティティー・クラス、およびそれらのフィールド・アクセス・エンティティー・クラスを参照するその他のクラスによって、変換ドメインは構成されます。フィールド・アクセス・エンティティー・クラスを @FieldAccessEntity 部分に指定する場合は、この部分にフィールド・アクセス・エンティティー・クラスを組み込む必要はありません。変換ドメインは、完全なものである必要があります。そうでないと、FieldAccessEntityNotInstrumentedException 例外が発生する場合があります。
- **@Exclude:** @Exclude トークンは、このトークンの後にリストされるパッケージおよびクラスが、変換ドメインから除外されることを示します。
- **@FieldAccessEntity:** @FieldAccessEntity トークンは、このトークンの後にリストされるパッケージおよびクラスが、フィールド・アクセス・エンティティー・パッケージおよびクラスであることを示します。@FieldAccessEntity トークンの後に行がない場合は、「@FieldAccessEntity が指定されていない」ことと同じになります。eXtreme Scale エージェントは、定義済みのフィールド・アクセス・エンティティー・パッケージおよびクラスはないものと判断します。@FieldAccessEntity トークンの後に行が存在する場合、それらの行は、ユーザー指定のフィールド・アクセス・エンティティー・パッケージおよびクラスを表します。例えば、「フィールド・アクセス・エンティティー・ドメイン」などです。フィールド・アクセス・エンティティー・ドメインは、変換ドメインのサブドメインです。フィールド・アクセス・エンティティー・ドメインにリストされているパッケージおよびクラスは、それらが変換ドメインにリストされていない場合でも変換ドメインの一部です。変換から除外されているパッケージおよびクラスをリストする @Exclude トークンは、フィールド・アクセス・エンティティー・ドメインにはまったく影響しません。 @FieldAccessEntity トークンが指定されている場合、すべてのフィールド・アクセス・エンティティーが、このフィールド・アクセス・エンティティー・ドメインに入っている必要があります。そうでないと、FieldAccessEntityNotInstrumentedException 例外が発生する場合があります。

エージェント構成ファイル (ogagent.config) の例

```
##############################
# The # indicates comment line
##############################
# This is an ObjectGrid agent config file (the designated file name is ogagent.config) that can be found and parsed by the ObjectGrid agent
# if it is in classpath.
# If the file name is "ogagent.config" and in classpath, Java program runs with -javaagent:objectgridRoot/ogagent.jar will have
# ObjectGrid agent enabled.
# If the file name is not "ogagent.config" but in classpath, you can specify the file name in config option of ObjectGrid agent
#     -javaagent:objectgridRoot/lib/objectgrid.jar=config=myOverrideConfigFile
# See comments below for more info regarding instrumentation setting override.

# The first part of the configuration is the list of packages and classes that should be included in transformation domain.
# The includes (packages/classes, construct the instrumentation doamin) should be in the beginning of the file.
com.testpackage
com.testClass

# Transformation domain: The above lines are packages/classes that construct the transformation domain.
# The system will process classes with name starting with above packages/classes for transformation.
#
# @Exclude token : Exclude from transformation domain.
```

```
# The @Exclude token indicates packages/classes after that line should be excluded from transformation domain.
# It is used when user want to exclude some packages/classes from above specified included packages
#
# @FieldAccessEntity token: Field-access Entity domain.
# The @FieldAccessEntity token indicates packages/classes after that line are field-access Entity packages/classes.
# If there is no lilne after the @FieldAccessEntity token, it is equivalent to "No @FieldAccessEntity specified".
# The runtime will consider the user does not specify any field-access Entity packages/classes.
# The "field-acces Entity domain" is a sub-domain of transformation domain.
#
# Packages/classes listed in the "field-access Entity domain" will always be part of transformation domain,
# even they are not listed in transformation domain.
# The @Exclude, which lists packages/classes excluded from transformation, has no impact on the "field-acces Entity domain".
# Note: When @FieldAccessEntity is specified, all field-access entities must be in this field-acces Entity domain,
#       otherwise, FieldAccessEntityNotInstrumentedException may occur.
#
# The default ObjectGrid agent config file name is ogagent.config
# The runtime will look for this file as a resource in classpath and process it.
# Users can override this designated ObjectGrid agent config file name via config option of agent.
#
# e.g.
# javaagent:objectgridRoot/lib/objectgrid.jar=config=myOverrideConfigFile
#
# The instrumentation definition, including transformation domain, @Exclude, and  @FieldAccessEntity can be overriden individually
# by corresponding designated agent options.
# Designated agent options include:
#    include              -> used to override instrumentation domain definition that is the first part of the config file
#    exclude              -> used to override @Exclude definition
#    fieldAccessEntity    -> used to override @FieldAccessEntity definition
#
# Each agent option should be separated by ";"
# Within the agent option, the package or class should be seperated by ","
#
# The following is an example that does not override the config file name:
#    -javaagent:objectgridRoot/lib/objectgrid.jar=include=includedPackage;exclude=excludedPackage;fieldAccessEntity=package1,package2
#
################################

@Exclude
com.excludedPackage
com.excludedClass

@FieldAccessEntity
```

パフォーマンスの考慮

パフォーマンスを向上させるために、変換ドメインおよびフィールド・アクセス・エンティティー・ドメインを指定します。

関連概念:

Java 826 ページの『EntityManager インターフェースのパフォーマンスのチューニング』
EntityManager インターフェースは、サーバー・グリッド・データ・ストアに保持された状態からアプリケーションを切り離します。

Java 426 ページの『オブジェクトおよびそのリレーションシップのキャッシング (EntityManager API)』
ほとんどのキャッシュ製品では、マップ・ベースの API を使用して、データをキーと値のペアとして保管していました。特に ObjectMap API および WebSphere Application Server の動的キャッシュでは、この方法を使用しています。ただし、マップ・ベースの API には、制限があります。 EntityManager API は、関連したオブジェクトからなる複雑なグラフを宣言したり、そのようなグラフと対話するための簡単な方法を提供することにより、データ・グリッドとの対話を単純化します。

Java 441 ページの『分散環境におけるエンティティー・マネージャー』
ローカル ObjectGrid とともに、あるいは分散 eXtreme Scale 環境で EntityManager API を使用することができます。主な違いは、このリモート環境への接続方法です。 接続を確立した後は、Session オブジェクトを使用した場合と EntityManager API を使用した場合に違いはありません。

Java 446 ページの『EntityManager との対話』
アプリケーションは通常、最初に ObjectGrid 参照を取得し、次にその参照からそれぞれのスレッドのセッションを取得します。 セッションはスレッド間で共有することはできません。セッションの追加メソッドである getEntityManager メソッドが使用可能です。 このメソッドは、このスレッド用に使用するエンティティー・マネージャーへの参照を戻します。EntityManager インターフェースは、すべてのアプリケーションの Session インターフェースと ObjectMap インターフェースを置換することができます。クライアントが定義済みのエンティティー・クラスに対するアクセス権を持つ場合、これらの EntityManager API を使用することができます。

Java 459 ページの『EntityManager フェッチ・プランのサポート』
FetchPlan は、アプリケーションがリレーションシップにアクセスする必要がある場合、関連付けられたオブジェクトを取得するためにエンティティー・マネージャーが使用するストラテジーです。

Java 464 ページの『エンティティー照会キュー』
照会キューを使用して、アプリケーションはエンティティーに対し、照会によって限定されるキューをサーバー・サイドまたはローカルの eXtreme Scale に作成できます。照会結果のエンティティーは、このキューに保管されます。現在、照会キューは、ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用しているマップでのみサポートされます。

Java 476 ページの『キャッシュ・オブジェクトの同じ区画へのルーティング』
eXtreme Scale 構成が固定区画配置ストラテジーを使用しているとき、この構成は区画のキーのハッシュに応じて値の挿入、取得、更新、または除去を行います。このキーで hashCode メソッドが呼び出され、カスタム・キーが作成される場合は、hashCode メソッドが明確に定義されていなければなりません。ただし、PartitionableKey インターフェースを使用するもう 1 つのオプションがあります。PartitionableKey インターフェースがあれば、キー以外のオブジェクトを使用して区

画にハッシュすることができます。

関連タスク:

Java 10 ページの『チュートリアル: オーダー情報のエンティティーへの保管』
エンティティー・マネージャーのチュートリアルでは、WebSphere eXtreme Scale を使用して Web サイトのオーダー情報を格納する方法を示します。メモリー内のローカル eXtreme Scale を使用する、簡単な Java Platform, Standard Edition 5 アプリケーションを作成できます。エンティティーは Java SE 5 のアノテーションおよび汎用を使用します。

473 ページの『同じ区画への複数のキャッシュ・オブジェクトの配置』
同じ区画内に編成された関連データをマップ・セット内に定義すると、データの重複を回避することができ、微細化されたデータ・アクセスが可能になります。

関連情報:

Java  サンプル: ReduceGridAgent を使用した照会の並行実行

第 7 章 セキュリティー

WebSphere eXtreme Scale はデータ・アクセスを保護し、外部セキュリティー・プロバイダーと統合することができます。セキュリティーには、認証、許可、トランスポート・セキュリティー、データ・グリッド・セキュリティー、ローカル・セキュリティー、JMX (Mbean) セキュリティーなどの側面があります。

シナリオ: eXtreme Scale でのデータ・グリッドの保護

WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドは、保護する必要がある機密情報を保管します。

始める前に

- 製品をインストールします。サーバー・ランタイムとクライアントの両方をインストールする必要があります。クライアントの場合は、Java クライアントと .NET クライアントの両方を使用することができます。詳しくは、インストールを参照してください。
- 前のリリースからアップグレードする場合は、すべてのコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーが同じリリース・レベルでなければなりません。詳しくは、WebSphere eXtreme Scale のアップグレードおよびマイグレーションを参照してください。

このタスクについて

セキュア・デプロイメントでは、セキュリティーを最適化するために、複数の層の保護を使用します。保護の最初のエレメントは、ネットワークをセグメント化するファイアウォールの使用です。Web アプリケーションの標準階層モデルは、Web クライアント、HTTP サーバーのプレゼンテーション層、アプリケーション・サーバーから成るアプリケーション層、データ層、およびストレージ層で構成されます。

eXtreme Scale データ・グリッド・サーバーは、データ層の一部としてデプロイされます。標準プラクティスとしては、1 つのファイアウォールで保護された非武装地帯 (DMZ) にプレゼンテーション層のサーバーを配置し、追加ファイアウォールで保護されたネットワーク・セグメントにアプリケーション、データ、およびストレージの各層を配置します。eXtreme Scale サーバーを DMZ にデプロイしないでください。データ層のすべてのエレメントと同様に、標準的な業界のプラクティスに従って eXtreme Scale サーバーを保護する必要があります。

ただし、セキュリティー上の脅威に対する保護を最適化するために、複数の追加手段により、eXtreme Scale 操作およびデータ・グリッドに保管されたデータを保護する徹底的な防御メカニズムを使用します。これらの追加手段は、外部からの脅威に対する保護に役立つだけではなく、eXtreme Scale サーバーが存在するネットワーク・セグメントにアクセスできる可能性がある従業員や請負業者による無許可データ・アクセスも防止します。

環境にインストールされているのがスタンドアロン・サーバーなのか、Liberty プロファイルなのか、OSGi フレームワークなのか、WebSphere Application Server なのかに関係なく、以下の徹底的な手順を使用して、WebSphere eXtreme Scale でのセキュリティーを構成します。

データ・グリッドの認証

Java

セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

generateToken(Object) メソッドは保護されるオブジェクトを取得し、外部に識別されないトークンを生成します。verifyTokens(byte[]) メソッドは逆に、トークンを元のオブジェクトに変換して戻します。

単純な SecureTokenManager 実装は XOR アルゴリズムなど単純なエンコード・アルゴリズムを使用して、オブジェクトをシリアライズ済みフォームでエンコードし、対応するデコード・アルゴリズムを使用してトークンをデコードします。この実装は保護されていないため、簡単に中断されます。

WebSphere eXtreme Scale デフォルト実装

WebSphere eXtreme Scale には、このインターフェース用のすぐに使用可能な実装が用意されています。このデフォルト実装は、鍵ペアを使用して署名し、署名を検査します。また、秘密鍵を使用してコンテンツを暗号化します。すべてのサーバーには JCKES タイプの鍵ストアが備えられており、鍵ペア、秘密鍵と公開鍵、および秘密鍵が保管されています。鍵ストアは、秘密鍵を保管する JCKES タイプである必要があります。これらの鍵は、送信側で秘密ストリングを暗号化し、署名または検証する場合に使用されます。また、トークンは有効期限の時間に関連付けられています。受信側で、データの検証、暗号化解除、および受信側の秘密ストリングとの比較が行われます。サーバーのペアの間での認証には、Secure Sockets Layer (SSL) 通信プロトコルは必要ありません。これは、秘密鍵と公開鍵の目的が同じであるためです。ただし、サーバー通信が暗号化されていない場合は、通信時に侵入者にデータを盗まれる可能性があります。トークンの有効期限が近いため、リプレイ・アタックの危険性は少なくなっています。この可能性は、すべてのサーバーをファイアウォールの後ろにデプロイすると、非常に小さくなります。

この方法の欠点は、WebSphere eXtreme Scale 管理者が鍵を生成し、生成した鍵をすべてのサーバーにトランスポートする必要があるため、トランスポート中にセキュリティー・ブリーチ (抜け穴) が発生する可能性があることです。

関連タスク:

8.6+ 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』
WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびカタログ・サーバーで、認証に使用される Java Authentication and Authorization Service (JAAS) ポリシー・ファイルを使用して、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用可能にします。

840 ページの『クライアントの認証と許可』
セキュリティーおよび資格情報認証を使用可能にして、クライアントを認証することができます。さらに、管理クライアントにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。

841 ページの『アプリケーション・クライアントの認証』
アプリケーション・クライアントの認証は、クライアント/サーバー・セキュリティーおよびクレデンシャル認証の使用可能化と、オーセンティケーターおよびシステム・クレデンシャル生成プログラムの構成からなります。

844 ページの『アプリケーション・クライアントの許可』
アプリケーション・クライアントの許可は、ObjectGrid 許可クラス、許可メカニズム、許可検査期間、および作成者限定アクセス許可から構成されます。

8.6+ 848 ページの『管理クライアントへの権限の付与』
管理セキュリティーによって、ユーザーにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。ご使用の WebSphere eXtreme Scale インストール環境およびアクセス権限を付与したいユーザーに応じて、一定の条件が必要です。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

データ・グリッド・セキュリティー

データ・グリッド・セキュリティーによって、結合サーバーの資格情報が適切であることが保証されるため、悪意のあるサーバーはデータ・グリッドを結合することができません。データ・グリッド・セキュリティーは共有秘密ストリング・メカニズムを使用します。

カタログ・サーバーを含むすべての WebSphere eXtreme Scale サーバーが、共有秘密ストリングと一致しています。サーバーがデータ・グリッドに結合する場合、秘密ストリングの表示を求められます。結合サーバーの秘密ストリングがプレジデント・サーバーまたはカタログ・サーバーのいずれかの秘密ストリングと一致する場合は、結合サーバーは受け入れられます。ストリングが一致しない場合、結合要求は拒否されます。

平文の機密事項の送信は保護されません。WebSphere eXtreme Scale セキュリティー・インフラストラクチャーには、セキュア・トークン・マネージャー・プラグインが用意されており、サーバーはこの機密事項を送信する前にセキュアにできます。セキュア操作の実装方法を決定する必要があります。WebSphere eXtreme Scale は、すぐに使用可能な実装を提供し、これによりセキュア操作が実装され、機密事項が暗号化されて署名が行われます。

秘密ストリングは server.properties ファイルに設定されます。authenticationSecret プロパティーについての詳細は、サーバー・プロパティー・ファイル を参照してください。

SecureTokenManager プラグイン

セキュア・トークン・マネージャー・プラグインは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.SecureTokenManager インターフェースによって表されます。

SecureTokenManager プラグインについて詳しくは、SecureTokenManager API 資料を参照してください。

generateToken(Object) メソッドはオブジェクトを取得し、外部に識別されないトークンを生成します。verifyTokens(byte[]) メソッドは逆に、トークンを元のオブジェクトに変換して戻します。

単純な SecureTokenManager 実装は、排他 OR (XOR) アルゴリズムなどの単純なエンコード・アルゴリズムを使用して、シリアライズ形式でオブジェクトをエンコードし、対応するデコード・アルゴリズムを使用してトークンをデコードします。この実装は保護されません。

WebSphere eXtreme Scale には、このインターフェースに対してすぐに使用可能な実装が用意されています。

デフォルトの実装では鍵ペアを使用して、署名し、シグニチャーを検査します。また、秘密鍵を使用して、コンテンツを暗号化します。すべてのサーバーには JCKES タイプの鍵ストアが備えられており、鍵ペア、秘密鍵と公開鍵、および秘密鍵が保管されています。鍵ストアは、秘密鍵を保管する JCKES タイプである必要があります。

これらの鍵は、送信側で秘密ストリングを暗号化し、署名または検証する場合に使用されます。また、トークンは有効期限の時間に関連付けられています。受信側で、データの検証、暗号化解除、および受信側の秘密ストリングとの比較が行われます。サーバーのペアの間での認証には、Secure Sockets Layer (SSL) 通信プロトコルは必要ありません。これは、秘密鍵と公開鍵の目的が同じであるためです。ただし、サーバー通信が暗号化されていない場合は、通信時に侵入者にデータを盗まれる可能性があります。トークンの有効期限が近いため、リプレイ・アタックの危険性は少なくなっています。この可能性は、すべてのサーバーをファイアウォールの後ろにデプロイすると、非常に小さくなります。

この方法の欠点は、WebSphere eXtreme Scale 管理者が鍵を生成し、生成した鍵をすべてのサーバーに移送する必要があるため、移送中にセキュリティー・ブリーチが発生する可能性があることです。

セキュア・トークン・マネージャーのデフォルト・プロパティーを作成するためのサンプル・スクリプト

前のセクションで記述したように、署名とシグニチャーの検査を行う鍵ペアおよびコンテンツを暗号化する秘密鍵を含む、鍵ストアを作成することができます。

例えば、以下のように JDK 6 keytool コマンドを使用して鍵を作成できます。

```
keytool -genkeypair -alias keypair1 -keystore key1.jck -storetype JCEKS -keyalg
rsa -dname "CN=sample.ibm.com, OU=WebSphere eXtreme Scale" -storepass key111 -keypass
keypair1 -validity 10000

keytool -genseckey -alias seckey1 -keystore key1.jck -storetype JCEKS -keyalg
DES  -storepass key111 -keypass seckey1 -validity 1000
```

上記 2 つのコマンドは、鍵ペア「keypair1」と秘密鍵「seckey1」を作成します。次に、サーバー・プロパティー・ファイルで以下のように構成することができます。

```
secureTokenKeyStore=key1.jck
secureTokenKeyStorePassword=key111
secureTokenKeyStoreType=JCEKS
secureTokenKeyPairAlias=keypair1
secureTokenKeyPairPassword=keypair1
secureTokenSecretKeyAlias=seckey1
secureTokenSecretKeyPassword=seckey1
secureTokenCipherAlgorithm=DES
secureTokenSignAlgorithm=RSA
```

構成

セキュア・トークン・マネージャーの構成に使用するプロパティーについて詳しくは、サーバー・プロパティーを参照してください。

関連タスク:

8.6+ 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』
WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびカタログ・サーバーで、認証に使用される Java Authentication and Authorization Service (JAAS) ポリシー・ファイルを使用して、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用可能にします。

『クライアントの認証と許可』
セキュリティーおよび資格情報認証を使用可能にして、クライアントを認証することができます。さらに、管理クライアントにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。

841 ページの『アプリケーション・クライアントの認証』
アプリケーション・クライアントの認証は、クライアント/サーバー・セキュリティーおよびクレデンシャル認証の使用可能化と、オーセンティケーターおよびシステム・クレデンシャル生成プログラムの構成からなります。

844 ページの『アプリケーション・クライアントの許可』
アプリケーション・クライアントの許可は、ObjectGrid 許可クラス、許可メカニズム、許可検査期間、および作成者限定アクセス許可から構成されます。

8.6+ 848 ページの『管理クライアントへの権限の付与』
管理セキュリティーによって、ユーザーにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。ご使用の WebSphere eXtreme Scale インストール環境およびアクセス権限を付与したいユーザーに応じて、一定の条件が必要です。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

クライアントの認証と許可

セキュリティーおよび資格情報認証を使用可能にして、クライアントを認証することができます。さらに、管理クライアントにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。

関連概念:

836 ページの『データ・グリッドの認証』
セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

837 ページの『データ・グリッド・セキュリティー』
データ・グリッド・セキュリティーによって、結合サーバーの資格情報が適切であることが保証されるため、悪意のあるサーバーはデータ・グリッドを結合することができません。データ・グリッド・セキュリティーは共有秘密ストリング・メカニズムを使用します。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

アプリケーション・クライアントの認証

アプリケーション・クライアントの認証は、クライアント/サーバー・セキュリティーおよびクレデンシャル認証の使用可能化と、オーセンティケーターおよびシステム・クレデンシャル生成プログラムの構成からなります。

手順

- クライアント/サーバー・セキュリティーの使用可能化

  ObjectGrid による認証を正常に行うには、クライアントとサーバーの両方でセキュリティーを使用可能にする必要があります。

  1. クライアント・セキュリティーの使用可能化。

     WebSphere eXtreme Scale は、クライアント・プロパティー・サンプル・ファイル (`sampleClient.properties` ファイル) を WebSphere Application Server インストール済み環境では *was_root*`/optionalLibraries/ObjectGrid/properties` ディレクトリー内、混合サーバー・インストール済み環境では `/ObjectGrid/properties` ディレクトリー内に提供しています。このテンプレート・ファイルを、適切な値で変更することができます。`objectgridClient.properties` ファイル内の **`securityEnabled`** プロパティーを `true` に設定してください。**`securityEnabled`** プロパティーは、セキュリティーが有効かどうかを示します。クライアントがサーバーに接続されている場合、クライアント・サイドとサーバー・サイドのこの値は、両方とも `true` か、両方とも `false` である必要があります。例えば、接続されているサーバーのセキュリティーが有効な場合、クライアントがサーバーに接続するには、このプロパティー値をクライアント・サイドで `true` に設定する必要があります。

     com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfiguration インターフェースは、`security.ogclient.props` ファイルを表しています。com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfigurationFactory public API を使用して、このインターフェースのインスタンスをデフォルト値

で作成することができます。または ObjectGrid クライアント・セキュリティー・プロパティー・ファイルを渡して、インスタンスを作成することもできます。 security.ogclient.props ファイルには、その他のプロパティーが含まれています。詳しくは、ClientSecurityConfiguration API 資料および ClientSecurityConfigurationFactory API 資料を参照してください。

2. サーバー・セキュリティーの使用可能化。

   サーバー・サイドでセキュリティーを使用可能にするには、security.xml ファイル内の **securityEnabled** プロパティーを true に設定します。セキュリティー記述子 XML ファイルを使用してデータ・グリッドのセキュリティー構成を指定し、グリッド全体のセキュリティー構成を非セキュリティー構成から分離します。

- 資格情報認証を使用可能にします。

  eXtreme Scale クライアントが CredentialGenerator オブジェクトを使用して Credential オブジェクトを取得すると、この Credential オブジェクトがクライアント要求とともに eXtreme Scale サーバーに送信されます。サーバーは、要求の処理前に Credential オブジェクトの認証を行います。 Credential オブジェクトが正常に認証されると、この Credential オブジェクトを表す Subject オブジェクトが戻されます。その後、この Subject オブジェクトは要求の認証に使用されます。

  クライアントおよびサーバーのプロパティー・ファイルで **credentialAuthentication** プロパティーを設定して、資格情報認証を使用可能にします。詳しくは、クライアント・プロパティー・ファイルおよびサーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

  以下の 2 つの表に、さまざまな設定で、いずれの認証メカニズムが使用されるかを示します。

表 27. クライアントおよびサーバーの設定における資格情報認証

クライアント資格情報認証	サーバー資格情報認証	結果
いいえ	常になし	使用不可
いいえ	サポートされる	使用不可
いいえ	必須	Error case
サポートされる	常になし	使用不可
サポートされる	サポートされる	使用可能
サポートされる	必須	使用可能
必須	常になし	Error case
必須	サポートされる	使用可能
必須	必須	使用可能

- オーセンティケーターを構成します。

  eXtreme Scale サーバーは、Authenticator プラグインを使用して、Credential オブジェクトの認証を行います。Authenticator インターフェースの実装では、Credential オブジェクトを取得し、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバーなどのユーザー・レジストリーに対してこのオブジェクトを認証しま

す。eXtreme Scale は、レジストリー構成を提供しません。ユーザー・レジストリーへの接続およびユーザー・レジストリーに対する認証は、このプラグインで実装する必要があります。

例えば、1 つの Authenticator 実装では、資格情報からユーザー ID とパスワードが抽出され、このユーザー ID とパスワードを使用して、LDAP サーバーに対する接続と検証が行われます。認証の結果として、Subject オブジェクトが作成されます。この実装では、Java 認証・承認サービス (JAAS) ログイン・モジュールを使用できます。認証の結果として、Subject オブジェクトが戻されます。

以下の例のように、セキュリティー記述子 XML ファイルでオーセンティケーターを構成できます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">

 <security securityEnabled="true"
        loginSessionExpirationTime="300">

  <authenticator className ="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginAuthenticator">
        </authenticator>

 </security>

</securityConfig>
```

セキュア・サーバーを開始して、セキュリティー XML ファイルを設定する場合は、**-clusterSecurityFile** オプションを使用します。セキュア・サーバーを開始する方法の例については、25 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 2』を参照してください。

- システム資格情報生成プログラムを構成します。

  このシステム資格情報生成プログラムは、システム資格情報のファクトリーを表すために使用されます。システム資格情報は、管理者資格情報に似ています。以下の例のように、カタログ・セキュリティー XML ファイル内で SystemCredentialGenerator エレメントを構成できます。

  ```
  <systemCredentialGenerator className ="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.
   builtins.UserPasswordCredentialGenerator">
            <property name="properties" type="java.lang.String" value="manager manager1"
       description="username password" />
   </systemCredentialGenerator>
  ```

  デモンストレーション用のため、ユーザー名およびパスワードは平文で保管されます。実稼働環境では、ユーザー名およびパスワードは平文で保管しないでください。

  WebSphere eXtreme Scale が提供するデフォルトのシステム資格情報生成プログラムは、サーバー資格情報を使用します。システム資格情報生成プログラムを明示的に指定しないと、このデフォルトのシステム資格情報生成プログラムが使用されます。

関連概念:

836 ページの『データ・グリッドの認証』
セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

837 ページの『データ・グリッド・セキュリティー』
データ・グリッド・セキュリティーによって、結合サーバーの資格情報が適切であることが保証されるため、悪意のあるサーバーはデータ・グリッドを結合することができません。データ・グリッド・セキュリティーは共有秘密ストリング・メカニズムを使用します。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

アプリケーション・クライアントの許可

アプリケーション・クライアントの許可は、ObjectGrid 許可クラス、許可メカニズム、許可検査期間、および作成者限定アクセス許可から構成されます。

このタスクについて

eXtreme Scale の許可は Subject オブジェクトおよびアクセス権に基づいています。本製品は、2 種類の許可メカニズム、つまり、Java 認証・承認サービス (JAAS) とカスタム許可をサポートしています。

許可クラスには次の 4 つの異なるタイプがあります。

- MapPermission クラスは、ObjectGrid マップ内のデータへのアクセスの許可を表します。
- ObjectGridPermission クラスは、ObjectGrid へのアクセスの許可を表します。
- ServerMapPermission クラスは、クライアントからのサーバー・サイドの ObjectGrid マップへのアクセスの許可を表します。
- AgentPermission クラスは、サーバー・サイドのエージェントを開始する許可を表します。

詳しくは、 900 ページの『クライアント許可プログラミング』を参照してください。

手順

1. 許可検査期間を設定します。

   eXtreme Scale は、パフォーマンス上の理由で、マップ許可検査結果のキャッシングをサポートしています。このメカニズムがないと、特定の許可クラスのメソッドのリストにあるメソッドが呼び出されたときに、ランタイムは、構成された許可メカニズムを呼び出してアクセスを許可します。この許可検査期間が設定されていると、許可メカニズムは、許可検査期間に基づいて定期的に呼び出されます。各許可クラスのメソッドのリストについては、 900 ページの『クライアント許可プログラミング』を参照してください。

アクセス権の許可情報は Subject オブジェクトに基づいています。クライアントがメソッドにアクセスしようとすると、eXtreme Scale ランタイムは、Subject オブジェクトに基づいてキャッシュ内を検索します。キャッシュ内でオブジェクトが見つからない場合、ランタイムは、この Subject オブジェクトに付与されている許可を確認し、この許可をキャッシュに格納します。

許可検査期間は、ObjectGrid が初期化される前に定義しておく必要があります。許可検査期間は、以下の 2 とおりの方法で構成できます。

ObjectGrid XML ファイルを使用して ObjectGrid を定義し、許可検査期間を設定できます。以下の例では、許可検査期間が 45 秒に設定されています。

```
<objectGrids>
 <objectGrid name="secureClusterObjectGrid" securityEnabled="true"
 authorizationMechanism="AUTHORIZATION_MECHANISM_JAAS"
 permissionCheckPeriod="45">
  <bean id="bean id="TransactionCallback"
className="com.ibm.websphere.samples.objectgrid.HeapTransactionCallback" />
...
</objectGrids>
```

API を使用して ObjectGrid を作成する場合、以下のメソッドを呼び出して、許可検査期間を設定します。このメソッドは、ObjectGrid インスタンスを初期化する前にのみ呼び出すことができます。このメソッドは、ObjectGrid を直接インスタンス化する場合のローカル eXtreme Scale プログラミング・モデルにのみ適用されます。

```
/**
 * This method takes a single parameter indicating how often you
 * want to check the permission used to allow a client access. If the
 * parameter is 0 then every single get/put/update/remove/evict call
 * asks the authorization mechanism, either JAAS authorization or custom
 * authorization, to check if the current subject has permission. This might be
 * prohibitively expensive from a performance point of view depending on
 * the authorization implementation, but if you need to have ever call check the
 * authorization mechanism, then set the parameter to 0.
 * Alternatively, if the parameter is > 0 then it indicates the number
 * of seconds to cache a set of permissions before returning to
 * the authorization mechanism to refresh them. This value provides much
 * better performance, but if the back-end
 * permissions are changed during this time then the ObjectGrid can
 * allow or prevent access even though the back-end security
 * provider was modified.
 *
 * @param period the permission check period in seconds.
 */
void setPermissionCheckPeriod(int period);
```

2. 作成者限定アクセス許可を構成します。

作成者限定アクセス許可を使用すると、エントリーを ObjectGrid マップに挿入したユーザーのみ (関連付けられた Principal オブジェクトによって表される) が、そのエントリーにアクセス (read、update、invalidate、および remove) できます。

既存の ObjectGrid マップの許可モデルは、アクセス・タイプに基づいていて、データ・エントリーには基づいていません。すなわち、ユーザーは、read、write、insert、delete、または invalidate などの特定のアクセス・タイプをマップ内のすべてのデータに対して保持しているか、またはどのデータに対しても保持していないかのいずれかです。しかし、eXtreme Scale は、個別のデータ・エントリーに対するユーザーの許可は行いません。この機能は、データ・エントリーに対してユーザーを許可するための新しい方法を提供します。

さまざまなユーザーが異なるデータのセットにアクセスするようなシナリオでは、このモデルが便利です。ユーザーがデータをパーシスタント・ストアから

ObjectGrid マップにロードするときに、パーシスタント・ストアによってアクセスを許可できます。このケースでは、ObjectGrid マップ層で別の許可を実行する必要がありません。必要な処理は、作成者限定アクセスの機能を使用可能にして、データをマップにロードするユーザーが、確実にそのデータにアクセスできるようにするのみです。

以下の作成者限定モード属性値があります。

disabled
作成者限定アクセス機能は使用不可になっています。

complement
作成者限定アクセス機能が使用可能になり、マップ許可を補完します。すなわち、マップ許可と作成者限定アクセスの機能の両方が有効になります。結果、データに対する操作をさらに制限することができます。例えば、作成者はデータを無効化できないようにすることができます。

supersede
作成者限定アクセス機能が使用可能になり、マップ許可を置き換えます。すなわち、作成者限定アクセス機能がマップ許可に取って代わり、マップ許可は実行されなくなります。

a. XML ファイルで作成者限定アクセス・モードを構成します。

以下の例のように、ObjectGrid XML ファイルを使用して ObjectGrid を定義し、作成者限定アクセス・モードを disabled、complement、または supersede のいずれかに設定できます。

```
<objectGrids>
    <objectGrid name="secureClusterObjectGrid" securityEnabled="true"
         accessByCreatorOnlyMode="supersede"
        <bean id="TransactionCallback"
              classname="com.ibm.websphere.samples.objectgrid.HeapTransactionCallback" />
    ...
</objectGrids>
```

b. 作成者限定アクセス・モードをプログラマチックに構成します。

ObjectGrid をプログラマチックに作成する場合、以下のメソッドを呼び出して作成者限定アクセス・モードを設定できます。このメソッドの呼び出しは、直接 ObjectGrid インスタンスを生成する場合のローカル eXtreme Scale プログラミング・モデルにのみ適用されます。

```
/**
 * Set the "access by creator only" mode.
 * Enabling "access by creator only" mode ensures that only the user (represented
 * by the Principals associated with it), who inserts the record into the map,
 * can access (read, update, invalidate, and remove) the record.
 * The "access by creator only" mode can be disabled, or can complement the
 * ObjectGrid authorization model, or it can supersede the ObjectGrid
 * authorization model. The default value is disabled:
 * {@link SecurityConstants#ACCESS_BY_CREATOR_ONLY_DISABLED}.
 * @see SecurityConstants#ACCESS_BY_CREATOR_ONLY_DISABLED
 * @see SecurityConstants#ACCESS_BY_CREATOR_ONLY_COMPLEMENT
 * @see SecurityConstants#ACCESS_BY_CREATOR_ONLY_SUPERSEDE
 *
 * @param accessByCreatorOnlyMode the access by creator mode.
 *
 * @since WAS XD 6.1 FIX3
*/
void setAccessByCreatorOnlyMode(int accessByCreatorOnlyMode);
```

詳細を示すために、ObjectGrid マップ・アカウントがバンキング・グリッドにあり、Manager1 と Employee1 が 2 人のユーザーであるようなシナリオを考えてみます。この場合、eXtreme Scale 許可ポリシーは、「Manager1」に対

してはすべてのアクセス権を付与しますが、「Employee1」に対しては読み取りアクセス権しか付与しません。以下の例に示すのは、ObjectGrid マップ許可の JAAS ポリシーです。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    Principal com.acme.PrincipalImpl "Manager1" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission
        "banking.account", "all"
};
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    Principal com.acme.PrincipalImpl "Employee1" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission
        "banking.account", "read, insert"
};
```

要確認: 作成者限定アクセスの機能が、どのように許可に影響するか検討してください。

- **disabled**: 作成者限定アクセスの機能が使用不可に設定された場合、マップ許可への影響はありません。ユーザー「Manager1」は、「account」マップ内のすべてのデータにアクセスできます。ユーザー「Employee1」は、マップ内のすべてのデータの read および insert は許可されますが、マップ内のデータに対する update、invalidate、remove はできません。
- **complement**: 「complement」オプションを使用して作成者限定アクセスの機能を使用可能にした場合、マップ許可と作成者限定アクセスの機能の両方が有効になります。ユーザー「Manager1」は、自身が単独でデータをマップにロードした場合のみ、「account」マップ内のデータにアクセスできます。ユーザー「Employee1」は、自身が単独でデータをマップにロードした場合のみ、「account」マップ内のデータを読み取ることができます。(しかし、このユーザーは、マップ内のデータに対する update、invalidate、または remove は許可されません。)
- **supersede**: 「supersede」オプションを使用して作成者限定アクセスの機能を使用可能にした場合、マップ許可は実施されません。許可ポリシーは、作成者限定アクセスの許可のみになります。ユーザー「Manager1」には、「complement」モードの場合と同じ特権が与えられます。このユーザーは、自身がデータをマップにロードした場合のみ、「account」マップ内のデータにアクセスできます。しかし、今回はユーザー「Employee1」も、自身がデータをマップにロードすれば、「account」マップ内のデータに対する全アクセス権限が与えられます。つまり、Java 認証・承認サービス (JAAS) ポリシーに定義されている許可ポリシーは実施されません。

関連概念:

836 ページの『データ・グリッドの認証』
セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

837 ページの『データ・グリッド・セキュリティー』
データ・グリッド・セキュリティーによって、結合サーバーの資格情報が適切であることが保証されるため、悪意のあるサーバーはデータ・グリッドを結合することができません。データ・グリッド・セキュリティーは共有秘密ストリング・メカニズムを使用します。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

管理クライアントへの権限の付与

管理セキュリティーによって、ユーザーにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。ご使用の WebSphere eXtreme Scale インストール環境およびアクセス権限を付与したいユーザーに応じて、一定の条件が必要です。

このタスクについて

ユーザーに WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドへのアクセス権限が付与されると、それらのユーザーには **xscmd** コマンドまたは **stopOgServer** コマンドを使用して管理操作を実行する権限も付与されることがあります。ほとんどのデータ・グリッド・デプロイヤーでは、グリッド・データにアクセスできるユーザーのサブセットのみに管理アクセスを制限します。

手順

1. **xscmd** 操作および **stopOgServer** コマンドを実行する権限を構成します。

   次のコマンドを使用してデータ・グリッドにアクセスした場合は、**listAllJMXAddresses** コマンドの実行などの管理アクションを実行する権限も付与されることがあります。

   ```
   ./xscmd.sh -user <user> -password <password> <other_parameters>
   ```

   ユーザーが前述のコマンドを実行できる場合は、**xscmd** 操作または **stopOgServer** コマンドが同じユーザーによって実行されることもあります。

   eXtreme Scale コンポーネントが WebSphere Application Server と一緒に稼働するときは、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してセキュリティー・マネージャーをアクティブにしてください。アプリケーション・アクセスをローカル・リソースに制限するため、「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」をクリックし、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」および「**Java 2 セキュリティーを使用する (Use Java 2 Security)**」チェック・ボックスを選択します。これで、アプリケーション・アクセスがローカル・リソースに制限されます。

管理操作へのアクセスは WebSphere Application Server セキュリティー・マネージャーによって制御され、その権限は WebSphere 管理者ロールに属するユーザーにのみ付与されます。 WebSphere Application Server ディレクトリーから **xscmd** コマンドおよび **stopOgServer** コマンドを実行する必要があります。

2. スタンドアロン・インストール済み環境で管理許可を構成します。

   eXtreme Scale コンポーネントがスタンドアロン環境で稼働するときは、管理セキュリティーを実装するために追加のステップが必要になります。 Java セキュリティー・マネージャーを使用してカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを実行する必要があります。これにはポリシー・ファイルが必要となります。

   ポリシー・ファイルは、以下の例のようなものです。

   要確認: 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』 に示されているように、通常、ポリシー・ファイルには MapPermission エントリーも含まれています。

```
grant codeBase "file:${objectgrid.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

grant principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
permission javax.management.MBeanPermission "*", "getAttribute,setAttribute,invoke,queryNames";
};
```

   クライアントが Java Spring アプリケーションである場合は、CN=manager アカウントが Spring クライアントからデータ・グリッドにアクセスできるようにするために、ポリシー・ファイルに次の AgentPermission エントリーが必要です。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.AgentPermission "*", "com.ibm.ws.objectgrid.spring.PutAgent";
};
```

   この例では、**xscmd** コマンドまたは **stopOgServer** コマンドによる管理操作は manager プリンシパルにのみ許可されます。必要に応じて他の行を追加して、さらなるプリンシパルに MBean 許可を付与することができます。 LDAP 認証を使用する場合は、別のタイプのプリンシパルが必要です。

   次のコマンドを入力します。 UNIX Linux

```
startOgServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

   UNIX Linux 8.6+

```
startXsServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

   Windows

```
startOgServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJCTGRID_HOME%
```

   Windows 8.6+

```
startXsServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
 -Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJCTGRID_HOME%
```

関連概念:

836 ページの『データ・グリッドの認証』
セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

837 ページの『データ・グリッド・セキュリティー』
データ・グリッド・セキュリティーによって、結合サーバーの資格情報が適切であることが保証されるため、悪意のあるサーバーはデータ・グリッドを結合することができません。データ・グリッド・セキュリティーは共有秘密ストリング・メカニズムを使用します。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

---

eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化

WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびカタログ・サーバーで、認証に使用される Java Authentication and Authorization Service (JAAS) ポリシー・ファイルを使用して、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用可能にします。

このタスクについて

このタスクでは、JAAS 許可ポリシー構成ファイルに設定した許可に従って、データ・グリッドへのアクセスを提供する認証メカニズムとして LDAP を使用します。

手順

1. wxs_ldap.config ファイルを作成します。例えば、以下のようにします。

```
LDAPLogin {
 com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.SimpleLDAPLoginModule required
 providerURL="ldap://yourldapserver.yourcompany.com:389/"
 factoryClass="com.sun.jndi.ldap.LdapCtxFactory"
};
```

2. wxs_ldap.auth.config ファイルを作成します。 データ・グリッドにログインするユーザーでプリンシパルを置き換えます。また、データ・グリッドの名前で YourGridName を置き換えます。追加のユーザーおよびデータ・グリッドについて、この手順を必要に応じて繰り返します。次の例を参照してください。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=sample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "*.*", "all";

    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.ObjectGridPermission "*.*", "all";
};
```

あるいは、例えば以下のようにして、すべてのデータ・グリッドに対する許可を付与できます。

```
grant codebase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
    principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=sample" {
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission "*", "all";

    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.ObjectGridPermission "*", "all";
};
```

3. サーバー・サイドの security.xml ファイルを作成します。例えば、以下のようにします。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
    xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">
<security securityEnabled="true" loginSessionExpirationTime="300" >
        <authenticator className ="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.LDAPAuthenticator">
        </authenticator>
    </security>
</securityConfig>
```

4. 以下のプロパティーを使用して、objectGridServer.properties ファイルを編集します。 objectGridServer.properties ファイルがない場合は、*wxs_home*/properties ディレクトリーにある sampleServer.properties ファイルを使用して、プロパティー・ファイルを作成できます。

```
securityEnabled=true

credentialAuthentication=Required
```

5. カタログ・サーバーを始動します。

   非推奨: 8.6+ **startOgServer** および **stopOgServer** コマンドは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用しているサーバーの始動および停止を行います。 ORB は非推奨ですが、前のリリースで ORB を使用していた場合は、これらのスクリプトを引き続き使用することができます。 IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムが ORB に取って代わります。 XIO トランスポートを使用しているサーバーの始動および停止には、**startXsServer** および **stopXsServer** スクリプトを使用します。

```
-Dobjectgrid.cluster.security.url=file:///security/security.xml
-Dobjectgrid.server.props="/security/objectGridServer.properties"
-Djava.security.policy="/security/wxs_ldap_auth.config"
```

   WebSphere Application Server でカタログ・サーバーを始動するには、850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』を参照してください。

6. コンテナー・サーバーを始動します。

```
Dobjectgrid.server.props="/security/objectGridServer.properties"
-Djava.security.policy="/security/wxs_ldap_auth.config"
```

   WebSphere Application Server でコンテナー・サーバーを開始するには、850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』を参照してください。

7. クライアント・サイドの objectGridClient.properties ファイルを編集します。 WebSphere Application Server がクライアントの場合は、更新するファイルは *was_profile_dir*/properties です。

```
securityEnabled=true

credentialAuthentication=Supported
```

8. クライアントを構成して、必要な LDAP ログイン資格情報を渡します。 クライアント・プロパティー・ファイルをロードします。このファイルにユーザー ID とパスワードを含めることができます。プロパティー・ファイルにユーザー ID とパスワードが含まれていない場合は、クライアント・プログラムの構成にそれらを追加してください。以下の例では、クライアント・プロパティー・ファイルは、プログラム・パラメーターを使用してロードされます。次に、ユーザー ID とパスワードが構成に追加されています。

```
String userid = "CN=manager,O=acme,OU=sample";

String pw="password";

//Creates a ClientSecurityConfiguration object using the specified file
ClientSecurityConfiguration clientSC = ClientSecurityConfigurationFactory
.getClientSecurityConfiguration(args[0]);

//Creates a CredentialGenerator using the user and password.
CredentialGenerator credGen = new UserPasswordCredentialGenerator(userid,password);
clientSC.setCredentialGenerator(credGen);

// Create an ObjectGrid by connecting to the catalog server
ClientClusterContext ccContext = ogManager.connect("cataloghostname:2809", clientSC, null);
ObjectGrid og = ogManager.getObjectGrid(ccContext, "YourGridName");'
```

関連概念:

836 ページの『データ・グリッドの認証』
セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

837 ページの『データ・グリッド・セキュリティー』
データ・グリッド・セキュリティーによって、結合サーバーの資格情報が適切であることが保証されるため、悪意のあるサーバーはデータ・グリッドを結合することができません。データ・グリッド・セキュリティーは共有秘密ストリング・メカニズムを使用します。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーでの鍵ストア認証の使用可能化

WebSphere eXtreme Scale のコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーで、認証に使用される Java Authentication and Authorization Service (JAAS) ポリシー・ファイルによる鍵ストア認証を使用可能にします。

このタスクについて

このタスクでは、JAAS 許可ポリシー構成ファイルに設定した許可に従って、データ・グリッドへのアクセスを提供する認証メカニズムとして鍵ストアを使用します。

手順

1. 29 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 4』の説明に従って、ログイン別名で鍵ストアを作成します。
2. wxs_keystore.config ファイルを作成します。 データ・グリッドにログインするユーザーでプリンシパルを置き換えます。また、データ・グリッドの名前で YourGridName を置き換えます。追加のユーザーおよびデータ・グリッドについて、この手順を必要に応じて繰り返します。次の例を参照してください。

   ```
   KeyStoreLogin {
   com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginModule required
   keyStoreFile="/security/sampleKS.jks";

   }
   ```

3. サーバー・サイドの security.xml ファイルを作成します。例えば、以下のようにします。

   ```
   <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
   <securityConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
       xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security ../objectGridSecurity.xsd"
   xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config/security">
   <security securityEnabled="true" loginSessionExpirationTime="300" >
           <authenticator className="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeyStoreLoginAuthenticator>
           </authenticator>
       </security>
   </securityConfig>
   ```

4. 以下のプロパティーを使用して、objectGridServer.properties ファイルを編集します。 objectGridServer.properties ファイルがない場合は、*wxs_home*/properties ディレクトリーにある sampleServer.properties ファイルを使用して、プロパティー・ファイルを作成できます。詳しくは、クォーラム・メカニズムの構成を参照してください。

   ```
   securityEnabled=true

   credentialAuthentication=Required
   ```

5. カタログ・サーバーを始動します。

   非推奨: 8.6+ **startOgServer** および **stopOgServer** コマンドは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用しているサーバーの始動および停止を行います。 ORB は非推奨ですが、前のリリースで ORB を使用していた場合は、これらのスクリプトを引き続き使用することができます。 IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムが ORB に取って代わります。 XIO トランスポートを使用しているサーバーの始動および停止には、**startXsServer** および **stopXsServer** スクリプトを使用します。

   ```
   startOgServer.sh catalogServer -clusterSecurityFile /security/security.xml
   -serverProps /security/objectGridServer.properties -jvmArgs
   -Djava.security.auth.login.config="/security/wxs_keystore.config"

   -Djava.security.policy="/security/wxs_ldap_auth.config"
   ```

   8.6+

   ```
   startXsServer.sh catalogServer -clusterSecurityFile /security/security.xml
   -serverProps /security/objectGridServer.properties -jvmArgs
   -Djava.security.auth.login.config="/security/wxs_keystore.config"

   -Djava.security.policy="/security/wxs_ldap_auth.config"
   ```

6. コンテナー・サーバーを始動します。

```
startOgServer.sh c0 -objectgridFile /xml/objectgrid.xml
-deploymentPolicyFile /xml/deployment.xml
-catalogServiceEndPoints cataloghostname:2809
-serverProps /security/objectGridServer.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="/security/wxs_keystore.config"

-Djava.security.policy="/security/wxs_ldap_auth.config"
```

8.6+

```
startXsServer.sh c0 -objectgridFile /xml/objectgrid.xml
-deploymentPolicyFile /xml/deployment.xml
-catalogServiceEndPoints cataloghostname:2809
-serverProps /security/objectGridServer.properties
-jvmArgs -Djava.security.auth.login.config="/security/wxs_keystore.config"

-Djava.security.policy="/security/wxs_ldap_auth.config"
```

7. クライアント・サイドの objectGridClient.properties ファイルを編集します。 WebSphere Application Server がクライアントの場合は、更新するファイルは *was_profile_dir*/properties です。

```
securityEnabled=true

credentialAuthentication=Supported

transportType=TCP/IP

singleSignOnEnabled=false
```

8. クライアント・アプリケーションを変更して、必要な鍵ストア・ログイン資格情報を渡します。

```
String userid = "CN=manager,O=acme,OU=sample";

String pw="password";
// Creates a ClientSecurityConfiguration object using the specified file
ClientSecurityConfiguration clientSC = ClientSecurityConfigurationFactory
.getClientSecurityConfiguration(args[0]);

// Creates a CredentialGenerator using the passed-in user and password.
CredentialGenerator credGen = new UserPasswordCredentialGenerator(userid,password);
clientSC.setCredentialGenerator(credGen);

// Create an ObjectGrid by connecting to the catalog server
ClientClusterContext ccContext = ogManager.connect("cataloghostname:2809", clientSC, null);
ObjectGrid og = ogManager.getObjectGrid(ccContext, "YourGridName");'
```

セキュア・トランスポート・タイプの構成

Transport Layer Security (TLS) は、クライアントとサーバーとの間のセキュア通信を可能にします。使用される通信メカニズムは、クライアントおよびサーバーの構成ファイル内に指定された **transportType** パラメーターの値によって決まります。

このタスクについて

Secure Sockets Layer (SSL) が使用される場合、クライアント・サイドとサーバー・サイドの両方で SSL 構成パラメーターが指定されている必要があります。Java SE 環境では、SSL 構成はクライアントまたはサーバーのプロパティー・ファイル内で構成されます。クライアントまたはサーバーが WebSphere Application Server 内にある場合は、コンテナー・サーバーおよびクライアント用の既存の WebSphere

Application Server CSIV2 トランスポート設定を使用できます。詳しくは、 865 ページの『WebSphere Application Server とのセキュリティー統合』を参照してください。

表 28. クライアント・トランスポートおよびサーバー・トランスポートの設定で使用されるトランスポート・プロトコル :

transportType 設定がクライアントとサーバーで異なる場合、結果のプロトコルは別のものになるかエラーになる可能性があります。

クライアントの transportType プロパティー	サーバーの transportType プロパティー	結果のプロトコル
TCP/IP	TCP/IP	TCP/IP
TCP/IP	SSL サポート	TCP/IP
TCP/IP	SSL 必須	エラー
SSL サポート	TCP/IP	TCP/IP
SSL サポート	SSL サポート	SSL (SSL が失敗した場合は TCP/IP)
SSL サポート	SSL 必須	SSL
SSL 必須	TCP/IP	エラー
SSL 必須	SSL サポート	SSL
SSL 必須	SSL 必須	SSL

手順

1. クライアント・セキュリティー構成に **transportType** プロパティーを設定する方法については、クライアント・プロパティー・ファイルを参照してください。
2. コンテナーおよびカタログ・サーバー・セキュリティー構成に **transportType** プロパティーを設定する方法については、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

トランスポート層セキュリティーおよび Secure Sockets Layer

WebSphere eXtreme Scale は、クライアントとサーバーとの間のセキュア通信に TCP/IP も、Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) もサポートします。

両方向での TLS/SSL の使用可能化

TLS/SSL は、一方向で使用可能に設定されている場合があります。例えば、サーバーの公開証明書はクライアントのトラストストアにインポートされますが、クライアントの公開証明書はサーバーのトラストストアにインポートされません。しかし、WebSphere eXtreme Scale は、データ・グリッド・エージェントを広範囲にわたって使用します。データ・グリッド・エージェントの特性は、サーバーがクライアントに応答を返すとき、新しい接続を作成することです。このとき、eXtreme Scale サーバーはクライアントとして機能します。したがって、クライアントの公開証明書をサーバーのトラストストアにインポートする必要があります。

Oracle JDK のトランスポート・セキュリティーの使用可能化

WebSphere eXtreme Scale には IBM Java Secure Sockets Extension (IBMJSSE) または IBM Java Secure Sockets Extension 2 (IBMJSSE2) が必要です。 IBMJSSE プロバイダーおよび IBMJSSE2 プロバイダーには、SSL プロトコル、Transport Layer Security (TLS) プロトコル、およびアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) フレームワークをサポートするリファレンス実装が含まれています。

Oracle JDK には IBM JSSE プロバイダーおよび IBM JSSE2 プロバイダーが含まれていないため、Oracle JDK でトランスポート・セキュリティーを使用可能にすることはできません。この処理を行うためには、WebSphere Application Server に同梱されている Oracle JDK が必要です。WebSphere Application Server に同梱された Oracle JDK には IBM JSSE プロバイダーおよび IBM JSSE2 プロバイダーが含まれています。

WebSphere eXtreme Scale での IBM 以外の JDK の使用については、カスタム・オブジェクト・リクエスト・ブローカーの構成を参照してください。`-Djava.endorsed.dirs` を構成する場合は、`objectgridRoot/lib/endorsed` ディレクトリーと `JRE/lib/endorsed` ディレクトリーのどちらもポイントします。 ディレクトリー `objectgridRoot/lib/endorsed` は IBM ORB を使用するために必要で、ディレクトリー `JRE/lib/endorsed` は、IBM JSSE プロバイダーおよび IBM JSSE2 プロバイダーをロードするために必要です。

29 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 4』を使用して、SSL 必須プロパティーの構成、鍵ストアとトラストストアの作成、および WebSphere eXtreme Scale でのセキュア・サーバーの開始を行います。

クライアントまたはサーバーの Secure Sockets Layer (SSL) パラメーターの構成

クライアントとサーバーでは、SSL パラメーターの構成方法は異なります。

このタスクについて

TLS/SSL は、一方向で使用可能に設定されている場合があります。例えば、サーバーの公開証明書はクライアントのトラストストアにインポートされますが、クライアントの公開証明書はサーバーのトラストストアにインポートされません。しかし、WebSphere eXtreme Scale は、データ・グリッド・エージェントを広範囲にわたって使用します。データ・グリッド・エージェントの特性は、サーバーがクライアントに応答を返すとき、接続を作成することです。このとき、eXtreme Scale サーバーはクライアントとして機能します。したがって、クライアントの公開証明書をサーバーのトラストストアにインポートする必要があります。

手順

- クライアント SSL パラメーターを構成します。

  次のいずれかのオプションを使用して、クライアント上に SSL パラメーターを構成します。

  - com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfigurationFactory ファクトリー・クラスを使用して、com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.SSLConfiguration オブジェクトを作成します。
  - `client.properties` ファイル内のパラメーターを構成します。その後、このプロパティー・ファイルを JVM クライアント・プロパティーとして設定することもできれば、WebSphere eXtreme Scale API を使用することもできます。プロパティー・ファイルをクライアントの ClientSecurityConfigurationFactory.getClientSecurityConfiguration(String) メソッド

に渡し、返されたオブジェクトを ObjectGridManager.connect(String, ClientSecurityConfiguration, URL) メソッドのパラメーターとして使用します。

- サーバー SSL パラメーターを構成します。

  サーバー用の SSL パラメーターは、server.properties ファイルを使用して構成されます。特定のプロパティー・ファイルを使用してコンテナー・サーバーまたはカタログ・サーバーを始動するには、**startOgServer** または **startXsServer** スクリプトの **-serverProps** パラメーターを使用します。 eXtreme Scale サーバー用に設定できる SSL パラメーターについて詳しくは、セキュリティー・サーバー・プロパティーを参照してください。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Java Management Extensions (JMX) セキュリティー

分散環境での Managed Bean (MBean) 呼び出しを保護することができます。

使用可能な MBean について詳しくは、Managed Beans (MBeans) を使用した管理を参照してください。

分散デプロイメント・トポロジーでは、MBean は、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーで直接ホストされます。 一般に、分散トポロジーの JMX セキュリティーは、Java Management Extensions (JMX) 仕様に指定された JMX セキュリティー仕様に従います。これは、以下の 3 つのパートで構成されます。

1. 認証: リモート・クライアントは、コネクター・サーバー内で認証される必要があります。
2. アクセス制御: MBean アクセス制御は、MBean 情報にアクセスできるユーザー、および MBean 操作を実行できるユーザーを制限します。
3. セキュア・トランスポート: JMX クライアントとサーバー間のトランスポートは、TLS/SSL を使用して保護することができます。

認証

JMX では、コネクター・サーバーがリモート・クライアントを認証するメソッドを提供しています。RMI コネクターの場合、認証は、コネクター・サーバーが作成される場合に JMXAuthenticator インターフェースを実装するオブジェクトを提供することにより実行されます。eXtreme Scale は、この JMXAuthenticator インターフェースを実装し、 ObjectGrid Authenticator プラグインを使用してリモート・クライアントを認証します。 eXtreme Scale がどのようにしてクライアントを認証するかについて詳しくは、25 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 2』を参照してください。

JMX クライアントは、JMX API に従って、コネクター・サーバーに接続するための資格情報を提供します。JMX フレームワークは、資格情報をコネクター・サーバーに渡し、認証のため、JMXAuthenticator 実装を呼び出します。前述のように、JMXAuthenticator 実装は、ObjectGrid Authenticator 実装に認証を委任します。

以下の例は、資格情報を使用してコネクター・サーバーに接続する方法を説明していますので、参考にしてください。

```
javax.management.remote.JMXServiceURL jmxUrl = new JMXServiceURL(
        "service:jmx:rmi:///jndi/rmi://localhost:1099/objectgrid/MBeanServer");

    environment.put(JMXConnector.CREDENTIALS, new UserPasswordCredential("admin", "xxxxxx"));

    // Create the JMXCconnectorServer
    JMXConnector cntor = JMXConnectorFactory.newJMXConnector(jmxUrl, null);

    // Connect and invoke an operation on the remote MBeanServer
    cntor.connect(environment);
```

上記の例では、UserPasswordCredential オブジェクトが、ユーザー ID が admin に、パスワードが xxxxx に設定されて提供されます。この UserPasswordCredential オブジェクトは、環境マップに設定され、これは、JMXConnector.connect(Map) メソッドで使用されます。次に、この UserPasswordCredential オブジェクトは、JMX フレームワークによってサーバーに渡され、最終的に認証のために ObjectGrid 認証フレームワークに渡されます。

クライアント・プログラミング・モデルは、厳格に JMX 仕様に従います。

アクセス制御

JMX MBean サーバーは、機密情報に対するアクセス権を持つことがあり、機密操作を実行することができる場合があります。JMX では、どのクライアントがその情報にアクセスでき、どのユーザーがそうした操作を実行できるかを識別する、必要なアクセス制御を提供しています。アクセス制御は、標準 Java セキュリティー・モデルに基づいて、MBean サーバーおよびその操作へのアクセスを制御する許可を定義することによって構築されます。

JMX 操作のアクセス制御または許可に関して、eXtreme Scale は、JMX 実装で提供される JAAS サポートに依存しています。プログラム実行の任意の時点で、実行のスレッドが保持する現行の許可セットがあります。このようなスレッドが JMX 仕様操作を呼び出す場合、これらの許可は保持許可と呼ばれます。 JMX 操作が実行されると、セキュリティー・チェックが行われ、必要な許可が保持許可によって暗黙的に示されているかどうかがチェックされます。

MBean ポリシー定義は、Java ポリシー形式に従います。例えば、次のポリシーでは、すべての署名者およびすべてのコード・ベースに PlacementServiceMBean のサーバー JMX アドレスを取得する権限を付与します。ただし、これらの署名者およびコード・ベースは com.ibm.websphere.objectgrid ドメインに制限されます。

```
grant {
    permission javax.management.MBeanPermission
        "com.ibm.websphere.objectgrid.management.PlacementServiceMBean#retrieveServerJMXAddress
     [com.ibm.websphere.objectgrid:*,type=PlacementService]",
        "invoke";
}
```

以下のポリシー・サンプルを使用すれば、リモート・クライアント ID に基づく許可を完了することができます。このポリシーでは、前の例に示されたものと同じ MBean 許可を付与していますが、X500Principal 名が CN=Administrator、OU=software、O=IBM、L=Rochester、ST=MN、C=US のユーザーだけは除きます。

```
grant principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=Administrator,OU=software,O=IBM,
    L=Rochester,ST=MN,C=US" {permission javax.management.MBeanPermission
        "com.ibm.websphere.objectgrid.management.PlacementServiceMBean#retrieveServerJMXAddress
    [com.ibm.websphere.objectgrid:*,type=PlacementService]",
        "invoke";
}
```

Java ポリシーは、セキュリティー・マネージャーがオンになっている場合に限ってチェックされます。-Djava.security.manager JVM 引数を設定してカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動し、MBean 操作のアクセス制御を強制するようにしてください。

セキュア・トランスポート

JMX クライアントと JMX サーバー間のトランスポートは、TLS/SSL を使用して保護することができます。カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーの transportType が SSL_Required または SSL_Supported に設定されている場合、SSL を使用して JMX サーバーに接続する必要があります。

SSL を使用するには、以下のように -D システム・プロパティーを指定して、トラストストア、トラストストア・タイプ、およびトラストストア・パスワードを MBean クライアントで構成する必要があります。

1. `-Djavax.net.ssl.trustStore=TRUST_STORE_LOCATION`
2. `-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=TRUST_STORE_PASSWORD`
3. `-Djavax.net.ssl.trustStoreType=TRUST_STORE_TYPE`

java_home`/jre/lib/security/java.security` ファイルで SSL ソケット・ファクトリーとして com.ibm.websphere.ssl.protocol.SSLSocketFactory を使用する場合は、次のプロパティーを使用します。

1. `-Dcom.ibm.ssl.trustStore=TRUST_STORE_LOCATION`
2. `-Dcom.ibm.ssl.trustStorePassword=TRUST_STORE_PASSWORD`
3. `-Dcom.ibm.ssl.trustStoreType=TRUST_STORE_TYPE`

スタンドアロン構成で Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) が有効であるとき、この情報を取得するには、JMX サービス・ポートを設定してカタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動する必要があります。以下のいずれかの方法を使用して、JMX サービス・ポートを設定します。

- **startOgServer**または **startXsServer** スクリプトで **-JMXServicePort** オプションを使用します。
- 組み込みサーバーを使用している場合は、ServerProperties インターフェースの setJMXServicePort メソッドを呼び出して、JMX サービス・ポートを設定します。

カタログ・サーバー上の JMX サービス・ポートのデフォルト値は `1099` です。構成の中の各 JVM に対して、異なるポート番号を使用しなければなりません。JMX/RMI を使用する場合は、たとえデフォルトのポート値を使用する場合であっても、**-JMXServicePort** オプションとポート番号を明示的に指定してください。

カタログ・サーバーからコンテナー・サーバー情報を表示するときは、JMX サービス・ポートを設定する必要があります。例えば、このポートは、**xscmd -c showMapSizes** コマンドを使用する場合に必要となります。

JMX コネクター・ポートを設定して、一時ポートが作成されないようにします。以下のいずれかの方法を使用して、JMX コネクター・ポートを設定します。

- **startOgServer** または **startXsServer** スクリプトで **-JMXConnectorPort** オプションを使用します。
- 組み込みサーバーを使用している場合は、ServerProperties インターフェースの setJMVConnectorPort メソッドを呼び出します。

外部プロバイダーとのセキュリティー統合

データを保護するために、いくつかのセキュリティー・プロバイダーと製品を統合できます。

WebSphere eXtreme Scale は、外部のセキュリティー実装と統合できます。この外部実装は、WebSphere eXtreme Scale に認証サービスおよび許可サービスを提供する必要があります。WebSphere eXtreme Scale には、セキュリティー実装と統合するためのプラグイン・ポイントがあります。WebSphere eXtreme Scale は、以下のコンポーネントと正常に統合されています。

- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)
- Kerberos
- ObjectGrid セキュリティー
- Tivoli Access Manager
- Java 認証・承認サービス (JAAS)

eXtreme Scale は、以下のタスクにセキュリティー・プロバイダーを使用します。

- クライアントをサーバーに認証する。
- クライアントに対して、特定の eXtreme Scale 成果物へアクセスする権限、または eXtreme Scale 成果物に対して行うことができる操作を指定する権限を与える。

eXtreme Scale には、以下のタイプの許可があります。

マップ許可
クライアントまたはグループに、マップに対する挿入、読み取り、更新、除去、および削除の操作を許可することができます。

ObjectGrid 許可
クライアントまたはグループに、objectGrid でオブジェクト照会またはエンティティー照会を実行する許可を与えることができます。

DataGrid エージェント許可
クライアントまたはグループに、DataGrid エージェントの ObjectGrid へのデプロイを許可することができます。

サーバー・サイド・マップ許可
クライアントまたはグループに、サーバー・マップをクライアント・サイドに複製すること、またはサーバー・マップに動的索引を作成することを許可できます。

管理許可
クライアントまたはグループに、管理タスク実行の許可を与えることができます。

注: バックエンドに対して既にセキュリティーを有効にしている場合、こうしたセキュリティー設定ではもはや十分にデータを保護できないことに注意してください。データベースまたは他のデータ・ストアのセキュリティー設定は、決してキャッシュに転送されません。認証、許可、トランスポートのレベルのセキュリティーなど、eXtreme Scale のセキュリティー・メカニズムを使用して、現在キャッシュされているデータを個別に保護する必要があります。

重要: バージョン 1.6 以降の Development Kit または Runtime Environment を使用して、WebSphere eXtreme Scale バージョン 7.1.1 以降で SSL トランスポート・セキュリティーをサポートします。

REST データ・サービスの保護

REST データ・サービスの複数の側面を保護します。認証および許可を使用して、eXtreme Scale REST データ・サービスへのアクセスを保護できます。また、アクセス規則として知られるサービス・スコープ構成規則によって、アクセスを制御することもできます。 3 番目のセキュリティーとして、トランスポート・セキュリティーを考慮します。

このタスクについて

認証および許可を使用して、eXtreme Scale REST データ・サービスへのアクセスを保護できます。認証および許可は、eXtreme Scale セキュリティーとの統合を伴います。

また、アクセス規則として知られるサービス・スコープ構成規則によってアクセスを制御することもできます。 2 つのタイプのアクセス規則が存在します。1 つはサービスによって許可される CRUD 操作を制御するサービス操作アクセス権限で、もう 1 つは特定のエンティティー・タイプに対して許可される CRUD 操作を制御するエンティティー・アクセス権限です。

トランスポート・セキュリティーは、Web クライアントと REST サービス間の接続に対しては、ホスティングしているコンテナー構成によって提供されます。また、トランスポート・セキュリティーは、(REST サービスから eXtreme Scale データ・グリッドへの接続に対して) eXtreme Scale クライアント構成によっても提供されます。

手順

- 認証および許可を制御します。

  認証および許可を使用して、eXtreme Scale REST データ・サービスへのアクセスを保護できます。認証および許可は、eXtreme Scale セキュリティーとの統合を伴います。

  eXtreme Scale REST データ・サービスは、認証および許可のために eXtreme Scale セキュリティーを使用して、サービスにアクセスできるユーザーやユーザー

がサービス経由で実行を許可される操作を制御します。 eXtreme Scale REST データ・サービスは、構成済みグローバル資格情報 (ユーザーとパスワード) を使用するか、各トランザクションで、認証および許可が実行される eXtreme Scale データ・グリッドに送信される HTTP BASIC チャレンジから得た資格情報を使用します。

1. グリッドで、eXtreme Scale クライアント認証および許可を構成します。 eXtreme Scale クライアント認証および許可を構成する方法の詳細については、 860 ページの『外部プロバイダーとのセキュリティー統合』を参照してください。
2. REST サービスによって使用される eXtreme Scale クライアントのセキュリティーを構成します。

   eXtreme Scale REST データ・サービスは、 eXtreme Scale グリッドとの通信時に eXtreme Scale クライアント・ライブラリーを呼び出します。そのため、eXtreme Scale クライアントで eXtreme Scale セキュリティーを構成する必要があります。

   eXtreme Scale クライアント認証は、objectgrid クライアント・プロパティー・ファイル内のプロパティーで使用可能にします。 REST サービスでクライアント・セキュリティーを使用する場合には、最低でも以下の属性を使用可能にする必要があります。

   ```
   securityEnabled=true
   credentialAuthentication=Supported [-or-] Required
   credentialGeneratorProps=user:pass [-or-] {xor encoded user:pass}
   ```

   要確認: credentialGeneratorProps プロパティーに指定するユーザーとパスワードは、認証レジストリー内の ID にマップできなければなりません。また、ObjectGrid に接続したり ObjectGrid を作成したりできる十分な ObjectGrid ポリシー権限を備えている必要があります。

   サンプル ObjectGrid クライアント・ポリシー・ファイルは *restservice_home*/security/security.ogclient.properties にあります。 クライアント・プロパティー・ファイルも参照してください。
3. eXtreme Scale REST データ・サービスでセキュリティーを構成します。

   eXtreme Scale セキュリティーと統合するには、 eXtreme Scale REST データ・サービス構成プロパティー・ファイルには、以下の項目が含まれている必要があります。

   ```
   ogClientPropertyFile=file_name
   ```

   ogClientPropertyFile は、前のステップで言及した ObjectGrid クライアント・プロパティーが入っているプロパティー・ファイルの場所です。 REST サービスはこのファイルを使用して、セキュリティーが使用可能になっている場合にグリッドに通信する eXtreme Scale クライアントを初期設定します。

   ```
   loginType=basic [-or-] none
   ```

   loginType プロパティーは、REST サービスでログイン・タイプを構成します。値 none を指定すると、credentialGeneratorProps で定義された「グローバル」ユーザー ID とパスワードが、各トランザクションでグリッドに送信され

ます。値 basic を指定すると、REST サービスは HTTP BASIC チャレンジをクライアントに提示して、グリッドとの通信時に各トランザクションで送信する資格情報を要求します。

ogClientPropertyFile プロパティーおよび loginType プロパティーの詳細については、REST データ・サービスのプロパティー・ファイルを参照してください。

- アクセス規則を適用します。

また、アクセス規則として知られるサービス・スコープ構成規則によってアクセスを制御することもできます。 2 つのタイプのアクセス規則が存在します。1 つはサービスによって許可される CRUD 操作を制御するサービス操作アクセス権限で、もう 1 つは特定のエンティティー・タイプに対して許可される CRUD 操作を制御するエンティティー・アクセス権限です。

eXtreme Scale REST データ・サービスでは、オプションとして、サービスおよびサービス内のエンティティーに対するアクセスを制限するために構成可能なアクセス規則を使用できます。これらのアクセス規則は、REST サービスのアクセス権限プロパティー・ファイルで指定します。このファイルの名前は、REST データ・サービスのプロパティー・ファイル内で、wxsRestAccessRightsFile プロパティーを使用して指定します。このプロパティーについて詳しくは、REST データ・サービスのプロパティー・ファイルを参照してください。このファイルは通常、キーと値のペアが含まれた Java プロパティー・ファイルです。 2 つのタイプのアクセス規則が存在します。1 つはサービスによって許可される CRUD 操作を制御するサービス操作アクセス権限で、もう 1 つは特定のエンティティー・タイプに対して許可される CRUD 操作を制御するエンティティー・アクセス権限です。

1. サービス操作権限を構成します。

   サービス操作権限では、REST サービスで公開するすべての ObjectGrid または指定した個別 ObjectGrid のすべてのエンティティーに適用するアクセス権限を指定します。

   以下の構文を使用します。

   ```
   serviceOperationRights=service_operation_right
   serviceOperationRights.grid_name -OR- *=service_operation_right
   ```

   各部の意味は、次のとおりです。

   – serviceOperationRights には、
   NONE、READSINGLE、READMULTIPLE、ALLREAD、ALL のいずれかを指定できます。

   – serviceOperationRights.*grid_name -OR-* * は、アクセス権限がすべての ObjectGrid に適用されることを暗黙指定します。また、特定の ObjectGrid の名前を指定することもできます。

   例:

   ```
   serviceOperationsRights=ALL
   serviceOperationsRights.*=NONE
   serviceOperationsRights.EMPLOYEEGRID=READSINGLE
   ```

最初の例では、この REST サービスで公開されるすべての ObjectGrid ですべてのサービス操作を許可することを指定しています。 2 番目の例では、最初の例と同様に、REST サービスによって公開されるすべての ObjectGrid に適用しています。ただし、アクセス権限を NONE として指定しており、ObjectGrid ではどのサービス操作も許可されません。最後の例では、特定のグリッドのサービス操作を制御する方法を示しています。この例では、EMPLOYEEGRID のすべてのエンティティーに対して、結果が単一のレコードになる読み取りのみが許可されます。

REST サービスで想定されるデフォルトは `serviceOperationsRights=ALL` であり、このサービスで公開されるすべての ObjectGrid ですべての操作が許可されます。これは、デフォルトが `NONE` で、REST サービスでどの操作も許可されない Microsoft の実装とは異なります。

重要: サービス操作権限は、このファイルで指定された順序で評価されます。そのため、最後に指定された権限によって、それより前の権限がオーバーライドされます。

2. エンティティー・アクセス権限を構成します。

   エンティティー・セット権限は、REST サービスで公開される特定の ObjectGrid エンティティーに適用するアクセス権限を指定します。この権限により、サービス操作権限と比較して、個別 ObjectGrid エンティティーに対するアクセス制御を厳格化および詳細化できます。

   以下の構文を使用します。

   `entitySetRights.`*`grid_name.entity_name=entity_set_right`*

   各部の意味は、次のとおりです。

   – *entity_set_right* には、以下の権限のいずれかを指定できます。

表 29. エンティティー・アクセス権限 : サポートされる値。

アクセス権限	説明
NONE	データにアクセスするためのすべての権限を拒否します。
READSINGLE	単一のデータ項目の読み取りを許可します。
READMULTIPLE	データ・セットの読み取りを許可します。
ALLREAD	単一データ/複数のデータ・セットの読み取りを許可します。
WRITEAPPEND	データ・セットでの新規データ項目の作成を許可します。
WRITEREPLACE	データの置換を許可します。
WRITEDELETE	データ・セットからのデータ項目の削除を許可します。
WRITEMERGE	データのマージを許可します。
ALLWRITE	データの書き込み (つまり、作成、置換、マージ、削除) を許可します。
ALL	データの作成、読み取り、更新、および削除を許可します。

   – *entity_name* は、REST サービス内の特定の ObjectGrid の名前です。
   – *grid_name* は、指定した ObjectGrid 内の特定のエンティティーの名前です。

注: それぞれの ObjectGrid およびそのエンティティーに対してサービス操作権限とエンティティー・セット権限の両方を指定した場合は、以下の例に示すように、制限の厳しい方の権限が適用されます。なお、エンティティー・セット権限は、ファイル内で指定された順序で評価されます。最後に指定された権限によって、それより前の権限がオーバーライドされます。

例 1: serviceOperationsRights.NorthwindGrid=READSINGLE と entitySetRights.NorthwindGrid.Customer=ALL を指定した場合。 Customer エンティティーには、READSINGLE が適用されます。

例 2: serviceOperationsRights.NorthwindGrid=ALLREAD を指定し、entitySetRights.NorthwindGrid.Customer=ALLWRITE を指定すると、NorthwindGrid のすべてのエンティティーに対して、読み取りのみが許可されます。ただし、Customer に対しては、(ALLWRITE が指定されているため) エンティティー・セット権限によってすべての読み取りが拒否されます。そのため、実質上、Customer エンティティーのアクセス権限は NONE になります。

- トランスポートを保護します。

  トランスポート・セキュリティーは、Web クライアントと REST サービス間の接続に対しては、ホスティングしているコンテナー構成によって提供されます。REST サービスと eXtreme Scale グリッド間の接続に対しては、eXtreme Scale クライアント構成によってトランスポート・セキュリティーが提供されます。

  1. クライアントおよび REST サービスからの接続を保護します。 この接続のトランスポート・セキュリティーは、eXtreme Scale ではなくホスティング・コンテナー環境によって提供されます。
  2. REST サービスおよび eXtreme Scale グリッドからの接続を保護します。 この接続のトランスポート・セキュリティーは、eXtreme Scale で構成します。855 ページの『トランスポート層セキュリティーおよび Secure Sockets Layer』を参照してください。

WebSphere Application Server とのセキュリティー統合

WebSphere eXtreme Scale が WebSphere Application Server 環境にデプロイされている場合、WebSphere Application Server からの認証フローおよびトランスポート層セキュリティー構成を簡略化できます。

簡略化された認証フロー

eXtreme Scale クライアントおよびサーバーが WebSphere Application Server および同じセキュリティー・ドメインで稼働中の場合、 WebSphere Application Server セキュリティー・インフラストラクチャーを使用して、クライアント認証資格情報を eXtreme Scale サーバーに伝搬することができます。例えば、サーブレットが eXtreme Scale クライアントとして動作して、同じセキュリティー・ドメインの eXtreme Scale サーバーに接続し、そのサーブレットが既に認証されている場合、認証トークンをクライアント (サーブレット) からサーバーに伝搬し、その後、WebSphere Application Server セキュリティー・インフラストラクチャーを使用して、認証トークンを元のクライアント資格情報に変換することができます。

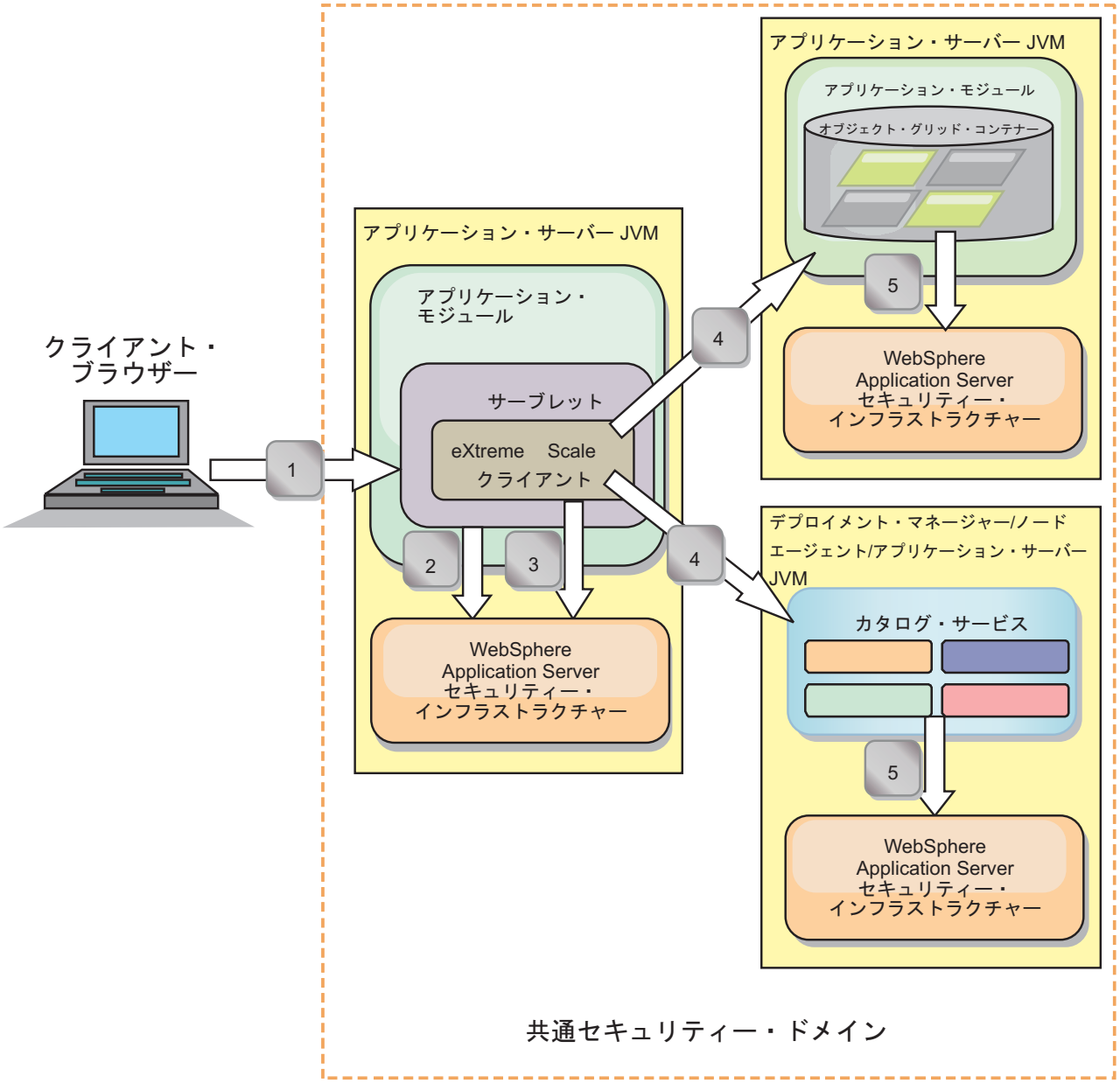


図 47. 同じセキュリティー・ドメイン内のサーバーの認証フロー

前の図で、アプリケーション・サーバーは同じセキュリティー・ドメイン内にあります。1 台のアプリケーション・サーバーが Web アプリケーションをホストしており、eXtreme Scale クライアントでもあります。別のアプリケーション・サーバーは、コンテナー・サーバーをホストしています。デプロイメント・マネージャーまたはノード・エージェントの Java 仮想マシン (JVM) は、カタログ・サービスをホストしています。

注: このタイプの構成は開発環境で使用します。ただし、実稼働環境の場合は、カタログ・サーバーを別々のプロセスで実行し、可能であれば、コンテナー・サーバーが実行されているのとは別のシステムでカタログ・サーバーを実行します。
図の矢印は、認証プロセス・フローを示しています。

1. エンタープライズ・アプリケーション・ユーザーは、Web ブラウザーを使用して、最初のアプリケーション・サーバーにユーザー名とパスワードを指定してログインします。
2. 最初のアプリケーション・サーバーは、クライアントのユーザー名とパスワードを WebSphere Application Server セキュリティー・インフラストラクチャーに送信して、ユーザー・レジストリーに対して認証を行います。例えば、このユーザー・レジストリーは LDAP サーバーである場合があります。この結果として、セキュリティー情報がアプリケーション・サーバー・スレッドに保管されます。
3. JavaServer Pages (JSP) ファイルは、サーバー・スレッドからセキュリティー情報を取得するために eXtreme Scale クライアントとして機能します。JSP ファイルは、WebSphere Application Server セキュリティー・インフラストラクチャーを呼び出して、エンタープライズ・アプリケーション・ユーザーを表すセキュリティー・トークンを取得します。
4. eXtreme Scale クライアント、すなわち、JSP ファイルは、要求と一緒にセキュリティー・トークンを、他の JVM でホストされているコンテナー・サーバーおよびカタログ・サービスに送信します。カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーは、WebSphere Application Server セキュリティー・トークンを eXtreme Scale クライアント資格情報として使用します。
5. カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーは、セキュリティー・トークンをユーザーのセキュリティー・トークン情報に変換するために、セキュリティー・トークンを WebSphere Application Server セキュリティー・インフラストラクチャーに送信します。このユーザー・セキュリティー情報は、Subject オブジェクトによって示され、プリンシパル、公開資格情報、および秘密資格情報を含んでいます。この変換を行うことができるのは、eXtreme Scale クライアント、カタログ・サーバー、およびコンテナー・サーバーをホストしているアプリケーション・サーバーが同じ WebSphere Application Server Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) トークンを共有しているためです。

認証統合

WebSphere Application Server との分散セキュリティー統合:

分散モデルでは、以下のクラスを使用します。

- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredentialGenerator
- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenAuthenticator
- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredential

これらのクラスの使用例については、53 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』を参照してください。

サーバー・サイドで、WSTokenAuthentication オーセンティケーターを使用して、WSTokenCredential オブジェクトを認証します。

WebSphere Application Server とのローカル・セキュリティー統合:

ローカル ObjectGrid モデルでは、以下のクラスを使用します。

- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSSubjectSourceImpl

- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSSubjectValidationImpl

これらのクラスについて詳しくは、909 ページの『ローカル・セキュリティー・プログラミング』を参照してください。 WSSubjectSourceImpl クラスを SubjectSource プラグインとして構成し、WSSubjectValidationImpl クラスを SubjectValidation プラグインとして構成することができます。

WebSphere Application Server でのトランスポート層セキュリティー・サポート

eXtreme Scale クライアント、コンテナー・サーバー、またはカタログ・サーバーが WebSphere Application Server プロセスで実行している場合、eXtreme Scale トランスポート・セキュリティーは WebSphere Application Server CSIV2 トランスポート設定によって管理されます。 eXtreme Scale クライアントまたはコンテナー・サーバーについては、SSL 設定を構成するために eXtreme Scale クライアントまたはサーバーのプロパティーを使用するべきではありません。 すべての SSL 設定は、WebSphere Application Server 構成で指定するようにしてください。

ただし、カタログ・サーバーは少し異なります。 カタログ・サーバーは独自の専有トランスポート・パスを持っていますが、これは WebSphere Application Server CSIV2 トランスポート設定では管理できません。このため、SSL プロパティーは引き続き、カタログ・サーバーに対してサーバー・プロパティー・ファイルで構成する必要があります。詳しくは、53 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』を参照してください。

カタログ・サービス・ドメインのクライアント・セキュリティーの構成

カタログ・サービス・ドメインのクライアント・セキュリティーを構成して、デフォルトのクライアント認証構成プロパティーを定義できます。クライアントをホスティングしている Java 仮想マシン (JVM) 内でクライアント・プロパティー・ファイルが見つからない場合、またはクライアントがセキュリティー・プロパティーをプログラムで指定しない場合、これらのプロパティーが使用されます。クライアント・プロパティー・ファイルが存在する場合、コンソールで指定したプロパティーがファイル内の値をオーバーライドします。これらのプロパティーは、com.ibm.websphere.xs.sessionFilterProps カスタム・プロパティーを使用して `splicer.properties` ファイルを指定するか、アプリケーション EAR ファイルを接合することでオーバーライドできます。

始める前に

- リモート・データ・グリッドでのクライアントの認証にどのような CredentialGenerator 実装を使用しているか把握しておく必要があります。 WebSphere eXtreme Scale が提供する実装 (UserPasswordCredentialGenerator または WSTokenCredentialGenerator) のいずれかを使用できます。

  CredentialGenerator インターフェースのカスタム実装を使用することもできます。カスタム実装はランタイム・クライアントおよびサーバーのクラスパス内に存在しなければなりません。WebSphere Application Server を使用して HTTP セッシ

ョン・シナリオを構成する場合は、デプロイメント・マネージャーのクラスパス内とクライアントを実行しているアプリケーション・サーバーのクラスパス内に実装を配置する必要があります。

- カタログ・サービス・ドメインが定義されている必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server でのカタログ・サービス・ドメインの作成を参照してください。

このタスクについて

サーバー・サイドの資格情報認証を有効にした場合は、次のいずれかのシナリオを構成して、カタログ・サービス・ドメインのクライアント・セキュリティーを構成する必要があります。

- サーバー・サイドのセキュリティー・ポリシーの **credentialAuthentication** プロパティーを「Required」に設定する。
- サーバー・サイドのセキュリティー・ポリシーの **credentialAuthentication** プロパティーを「Supported」に設定し、さらに ObjectGrid XML ファイル内に **authorizationMechanism** を指定する。

これらのシナリオでは、クライアントから資格情報が渡される必要があります。クライアントから渡される資格情報は、CredentialGenerator インターフェースを実装するクラスの getCredential メソッドから取得されます。 HTTP セッション構成シナリオでは、ランタイムが、リモート・データ・グリッドに渡される資格情報を生成するときに使用する CredentialGenerator 実装を把握している必要があります。使用する CredentialGenerator 実装クラスを指定しないと、クライアントが認証されないため、リモート・データ・グリッドは、クライアントからの要求を拒否します。

手順

クライアント・セキュリティー・プロパティーを定義します。 WebSphere Application Server 管理コンソールで、「**システム管理**」 > 「**WebSphere eXtreme Scale**」 > 「**カタログ・サービス・ドメイン**」 > 「*catalog_service_domain_name*」 > 「**クライアント・セキュリティー・プロパティー**」をクリックします。そのページにあるクライアント・セキュリティー・プロパティーを指定し、変更を保存します。設定できるプロパティーのリストについては、クライアント・セキュリティー・プロパティーを参照してください。

タスクの結果

カタログ・サービス・ドメインで構成したクライアント・セキュリティー・プロパティーが、デフォルト値として使用されます。ユーザーが指定する値は、client.properties ファイルに定義されているプロパティーをオーバーライドします。

次のタスク

セッション管理に WebSphere eXtreme Scale を使用するようにアプリケーションを構成します。詳しくは、WebSphere Application Server の HTTP セッション管理のためのアプリケーションの自動接続を参照してください。

.NET 用のデータ・グリッド・セキュリティーおよび SSL の構成

.NET

Secure Sockets Layer (SSL) を介して通信し、ユーザー/パスワード認証ロジックを使用するように .NET および Java を構成できます。

始める前に

ご使用の環境用の key.jks ファイルおよび trust.jks ファイルを用意しておく必要があります。鍵ストア・ファイルおよびトラストストア・ファイルの作成について詳しくは、39 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 6』を参照してください。

手順

1. サーバーでセキュリティーを使用可能にして構成します。 セキュリティーがサーバーでまだ構成されていない場合は、以下の手順を使用して、外部オーセンティケーター・サンプルでセキュリティーを構成します。
   a. サンプル・セキュリティー・ファイルを取得します。 security_extauth.zip ファイルのサンプル・ファイルを、WebSphere eXtreme Scale wiki からダウンロードします。
      - xsjaas3.config: Java Authentication and Authorization Service (JAAS) 構成を定義します。
      - sampleKS3.jks: JAAS ユーザーおよびパスワードの値の鍵ストアが入っています。
      - security3.xml: セキュリティーに使用するオーセンティケーターを定義します。
   b. xsjaas3.config ファイルを編集し、sampleKS3.jks ファイルのパスを修正します。
   c. サンプル sampleKS3.jks ファイルではなく、独自の秘密鍵ストアを生成する場合は、**keytool** ユーティリティーを使用して秘密鍵を生成します。

      ```
      keytool -genkey -alias myalias -keysize 2048 -keystore key.jks -keyalg rsa -dname
      "CN=www.mydomain.com" -storepass password -keypass password -validity 3650
      ```

   d. sampleServer.properties を編集して、セキュリティーを使用可能にします。 sampleServer.properties ファイルは、*wxs_install_root*¥properties ディレクトリーにあります。以下のプロパティー値のコメントを外して編集します。

      ```
      securityEnabled=true
      secureTokenManagerType=none
      alias=ogsample
      contextProvider=IBMJSSE2
      protocol=SSL
      keyStoreType=JKS
      keyStore=../../../../xio.test/etc/test/security/key.jks
      keyStorePassword=ogpass
      trustStoreType=JKS
      trustStore=../../../../xio.test/etc/test/security/trust.jks
      trustStorePassword=ogpass
      ```

   e. カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動します。

```
startXsServer.bat cs0 -catalogServiceEndPoints cs0:localhost:6600:6601 -listenerPort 2809 -objectgridFile gettingstarted¥xml¥objectgrid.xml
-deploymentPolicyFile gettingstarted¥xml¥deployment.xml -serverProps ..¥properties¥sampleServer.properties
-clusterSecurityFile security3.xml -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="xsjaas3.config"

startXsServer.bat c0 -catalogServiceEndPoints localhost:2809 -objectgridFile gettingstarted¥xml¥objectgrid.xml
-deploymentPolicyFile gettingstarted¥xml¥deployment.xml -serverProps ..¥properties¥sampleServer.properties
-clusterSecurityFile security3.xml -jvmArgs
-Djava.security.auth.login.config="xsjaas3.config"
```

2. .NET クライアント用のセキュリティーを構成します。
   a. オプション: keytool ユーティリティーを使用して、サーバー用に構成した key.jks ファイルから公開証明書を抽出します。

      ```
      keytool -export -alias myalias -keystore key.jks -file public.cer -storepass password
      ```

      証明書管理ツール certmgr.msc を使用して、この公開鍵を Windows の証明書ストアにインポートして、鍵を「信頼されたルート証明機関」または「信頼されたユーザー」証明書フォルダーにインポートします。
      (client.properties ファイルの **keyStore** プロパティーは、このファイルを指すことができます)
   b. Client.Net.properties ファイルを編集して、以下のプロパティーの値を含めます。

      ```
      securityEnabled=true
      credentialAuthentication=supported
      authenticationRetryCount=3
      credentialGeneratorAssembly=IBM.WebSphere.Caching.CredentialGenerator,Version=8.6.0.0,
      Culture=neutral,PublicKeyToken=b439a24ee43b0816
      credentialGeneratorProps=manager manager1
      transportType=ssl-supported
      publicKeyFile=<name>.cer
      ```

      credentialGeneratorProps プロパティーの値 manager manager1 は、Credential オブジェクトでサーバーに提供されるユーザー名とパスワードの値として使用されます。

      publicKeyFile プロパティーは、.NET ランタイムの相対パスとして設定されます。**publicKeyFile** プロパティーが設定されていない場合は、Windows 証明書ストアで public.cer ファイルが検索されます。 **publicKeyFile** プロパティーが設定されている場合は、指定されたファイルが SSL 公開証明書ファイルとして使用されます。指定されたファイルが見つからない場合は、.NET クライアントは、一致する public.cer ファイルを証明書ストアで見つけようとします。
   c. *net_client_home*¥IBM.WebSphere.Caching.CredentialGenerator.dll を *net_client_home*¥sample¥SimpleClient¥bin¥<*ConfigurationName*> ディレクトリーにコピーします。
   d. *ConfigurationName* プロジェクト・コンテキストを使用してサンプルをビルドします。サンプルをサーバーに対して実行します。

データ・グリッド許可の使用可能化

WebSphere eXtreme Scale によりいくつかのセキュリティー・エンドポイントが提供され、カスタム・メカニズムを統合できるようになります。ローカル・プログラミング・モデルにおける主なセキュリティー機能は許可で、認証サポートはありません。既存の WebSphere Application Server 認証とは別個に認証を行う必要があります。しかし、提供されるプラグインを使用して、Subject オブジェクトを取得および検証できます。

このタスクについて

ローカル・セキュリティーは、ObjectGrid XML 記述子ファイルまたはプログラムで使用可能に設定できます。

手順

- ローカル・セキュリティーを ObjectGrid XML 記述子ファイルで使用可能に設定します。

  ObjectGridSample エンタープライズ・アプリケーションの例で使用される `secure-objectgrid-definition.xml` ファイルを以下の例に示します。セキュリティーを使用可能にするには、securityEnabled attribute 属性を `true` に設定します。

```
<objectGrids>
    <objectGrid name="secureClusterObjectGrid" securityEnabled="true"
        authorizationMechanism="AUTHORIZATION_MECHANISM_JAAS">
    ...
</objectGrids>
```

- ローカル・セキュリティーをプログラムで使用可能に設定します。

  ObjectGrid.setSecurityEnabled メソッドを使用して ObjectGrid を作成するには、ObjectGrid インターフェース上で以下のメソッドを呼び出します。

```
/**
 * Enable the ObjectGrid security
 */
void setSecurityEnabled();
```

次のタスク

セキュリティーが使用可能に設定されたコンテナー・サーバーとカタログ・サーバーを開始します。

関連資料:

デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイル
デプロイメント・ポリシーを構成するには、デプロイメント・ポリシー記述子 XML ファイルを使用します。

セキュア・サーバーの始動と停止

サーバーを始動および停止するときに、セキュリティー固有の構成を指定することで、セキュリティーが使用可能になります。

スタンドアロン環境でのセキュア・サーバーの始動

セキュアなスタンドアロン・サーバーを始動するには、**startOgServer** または **startXsServer** コマンドにパラメーターを指定することで、適切な構成ファイルを渡します。

8.6+

このタスクについて

非推奨: 8.6+ **startOgServer** および **stopOgServer** コマンドは、オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) トランスポート・メカニズムを使用しているサーバーの始動および停止を行います。 ORB は非推奨ですが、前のリリースで ORB

を使用していた場合は、これらのスクリプトを引き続き使用することができます。IBM eXtremeIO (XIO) トランスポート・メカニズムが ORB に取って代わります。XIO トランスポートを使用しているサーバーの始動および停止には、**startXsServer** および **stopXsServer** スクリプトを使用します。

手順

- セキュア・コンテナー・サーバーを始動します。

  セキュア・コンテナー・サーバーの始動には、次のセキュリティー構成ファイルが必要です。

  – **サーバー・プロパティー・ファイル:** サーバー・プロパティー・ファイルは、サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーを構成します。詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

  startOgServer または **startXsServer** スクリプトの中に次の引数を指定して、この構成ファイルの場所を指定します。

  -serverProps
  サーバー固有のセキュリティー・プロパティーが含まれているサーバー・プロパティー・ファイルへのパスを指定します。このプロパティーに対して指定されるファイル名の形式は、プレーン・ファイル・パス形式です。例えば、`../security/server.properties` などです。

  startOgServer コマンドまたは **startXsServer** コマンドを実行する際に、以下の行を入力します。 UNIX Linux

```
startOgServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

UNIX Linux 8.6+

```
startXsServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

Windows

```
startOgServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
-Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJECTGRID_HOME%
```

Windows 8.6+

```
startXsServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config
 -Djava.security.manager -Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJECTGRID_HOME%
```

- セキュア・カタログ・サーバーを始動します。

  セキュア・カタログ・サービスを開始するには、次の構成ファイルが必要です。

  – **セキュリティー記述子 XML ファイル:** セキュリティー記述子 XML ファイルは、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを含む、すべてのサーバーに共通するセキュリティー・プロパティーを記述します。プロパティーの例の 1 つは、ユーザー・レジストリーおよび認証メカニズムを表すオーセンティケーター構成です。

  – **サーバー・プロパティー・ファイル:** サーバー・プロパティー・ファイルは、サーバーに固有のセキュリティー・プロパティーを構成します。

startOgServer または **startXsServer** スクリプトの中に次の引数を指定して、構成ファイルの場所を指定します。

-clusterSecurityFile および -clusterSecurityUrl
これらの引数は、セキュリティー記述子 XML ファイルの場所を指定します。**-clusterSecurityFile** パラメーターを使用してローカル・ファイルを指定するか、**-clusterSecurityUrl** パラメーターを使用して objectGridSecurity.xml ファイルの URL を指定します。

-serverProps
サーバー固有のセキュリティー・プロパティーが含まれているサーバー・プロパティー・ファイルへのパスを指定します。このプロパティーに対して指定されるファイル名の形式は、プレーン・ファイル・パス形式です。例えば、c:/tmp/og/catalogserver.props などです。

WebSphere Application Server でのセキュア・サーバーの始動

WebSphere Application Server でセキュア・サーバーを始動するには、汎用 Java 仮想マシン (JVM) 引数でセキュリティー構成ファイルを指定する必要があります。

手順

- 管理コンソールを使用して、WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーを WebSphere アプリケーション・サーバーに関連付けます。 管理コンソールで、**「システム管理」 > 「WebSphere eXtreme Scale」 > 「カタログ・サービス・ドメイン」**をクリックします。
- データ・グリッドに必要な XML 記述子が含まれたエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルをデプロイすることで、WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバーを特定の WebSphere Application Server に関連付けます。 この手順について詳しくは、 53 ページの『チュートリアル: WebSphere eXtreme Scale セキュリティーの WebSphere Application Server との統合』を参照してください。
- カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーをセキュアにするための構成ファイルを指す Java 仮想マシン (JVM) 引数を指定します。 この手順について詳しくは、 WebSphere Application Server でのクライアント要求の認証 および 161 ページの『WebSphere Application Server でのデータ・グリッドへのアクセスの許可』 を参照してください。また、データ・グリッドごとに、objectgrid xml ファイルに securityEnabled="true" を指定します。 JVM 引数を指定し、データ・グリッドでセキュリティーを有効にすると、eXtreme Scale カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーとして機能するサーバーまたはクラスターを始動できます。
- WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを始動します。または、WebSphere Application Server コマンド行を使用します。

次のタスク

179 ページの『セキュア・サーバーの停止』

セキュア・サーバーの停止

セキュアなカタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーを停止するには、1 つのセキュリティー構成ファイルが必要です。

手順

- スタンドアロン・デプロイメントのセキュアなカタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーを停止します。 スタンドアロン環境では、**xscmd** コマンドの teardown 関数を使用するか、**stopXsServer** コマンドまたは **stopOgServer** コマンドを使用して、WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを停止します。

  162 ページの『スタンドアロン環境における管理操作に対するアクセスの許可』のセクションで説明されているように、これらの操作に対するアクセスを、許可された管理者のみに制限します。認証または SSL を使用している場合は、**stopXsServer** コマンドおよび **stopOgServer** コマンドでは、クライアント・プロパティー・ファイルをパラメーターとして渡す必要があります。クライアント・プロパティー・ファイルの内容については、150 ページの『スタンドアロン環境でのクライアント要求の認証』および 166 ページの『SSL 暗号化を使用したスタンドアロン環境の eXtreme Scale サーバー間をフローするデータの保護』で説明されています。
- WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、WebSphere Application Server で実行されている eXtreme Scale サーバーを停止します。 165 ページの『WebSphere Application Server での管理操作に対するアクセスの許可』で説明されているように、サーバーを始動および停止するためのアクセス権限を、許可された管理者に制限するように、WebSphere Application Server 管理セキュリティーが構成されている必要があります。

FIPS 140-2 を使用するための WebSphere eXtreme Scale の構成

連邦情報処理標準 (FIPS) 140-2 は、Transport Layer Security/Secure Sockets Layer (TLS/SSL) に要求される暗号化レベルを規定しています。この標準により、通信で送信されるデータの優れた保護が確保されます。

始める前に

- IBM Runtime Environment を使用している必要があります。詳しくは、341 ページの『Java SE の考慮事項』を参照してください。
- Transport Layer Security および Secure Sockets Layer を双方向で構成します。カタログ・サーバーのトラストストア・ファイルには、コンテナー・サーバーの自己署名証明書が含まれている必要があります。コンテナー・サーバーには、カタログ・サーバーの自己署名証明書が含まれている必要があります。詳しくは、855 ページの『トランスポート層セキュリティーおよび Secure Sockets Layer』を参照してください。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere eXtreme Scale スタンドアロン・インストール済み環境でカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを FIPS を使用するように構成できます。

WebSphere Application Server と統合された WebSphere eXtreme Scale を使用している場合は、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーは、アプリケーション・サーバーからセキュリティー・プロパティーを継承します。WebSphere Application Server での FIPS の構成について詳しくは、『連邦情報処理標準 (FIPS)

Java セキュア・ソケット拡張機能ファイルの構成』を参照してください。カタログ・サーバーが WebSphere Application Server で実行されている場合は、一部の通信は server.properties ファイルによって制御されます。 server.properties ファイルを更新して、スタンドアロン・カタログ・サーバーに必要なものと同じプロパティーが含まれるようにします。

手順

1. java.security ファイルを編集します。 以下のように、java.security の場所は、ご使用の Java 仮想マシン (JVM) 構成によって異なります。
   - 製品に付属のデフォルト JVM を使用している場合は、ファイルは *wxs_install_root*/java/jre/lib/security ディレクトリーにあります。
   - 異なる JVM を使用している場合は、*java_home*/jre/lib/security ディレクトリー内のファイルを編集します。

   ファイルには、以下のテキストが含まれている必要があります。

   ```
   security.provider.1=com.ibm.crypto.fips.provider.IBMJCEFIPS
   security.provider.2=com.ibm.jsse2.IBMJSSEProvider2
   security.provider.3=com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
   security.provider.4=com.ibm.security.jgss.IBMJGSSProvider
   security.provider.5=com.ibm.security.cert.IBMCertPath
   security.provider.6=com.ibm.security.sasl.IBMSASL
   security.provider.7=com.ibm.xml.crypto.IBMXMLCryptoProvider
   security.provider.8=com.ibm.xml.enc.IBMXMLEncProvider
   security.provider.9=org.apache.harmony.security.provider.PolicyProvider
   security.provider.10=com.ibm.security.jgss.mech.spnego.IBMSPNEGO
   ```

2. カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルを編集します。

   これらのファイルには、以下のプロパティーおよび値が含まれている必要があります。

   ```
   contextProvider=IBMJSSE2
   transportType=SSL-Required
   ```

   サーバー・プロパティーについて詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

3. RSA 鍵生成アルゴリズムを使用する鍵ペアを、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバー用の鍵リングに構成します。最小鍵長は、1024 ビットです。
4. カタログおよびコンテナー・サーバーを再始動します。

   カタログ・サーバーを始動する際に、Java 仮想マシン (JVM) 引数を指定する必要があります。使用する引数は、使用している Java SE のバージョンによって異なります。

   - Java 5 および Java 6 から SR 9 までの場合は、サーバーの始動時に **-Dcom.ibm.jsse2.JSSEFIPS=true** 引数を指定します。
   - Java 6 SR 10 以降または Java 7 の場合は、サーバーの始動時に **-Dcom.ibm.jsse2.usefipsprovider=true** 引数を指定します。

   詳しくは、 175 ページの『セキュア・サーバーの始動と停止』を参照してください。

xscmd ユーティリティーのためのセキュリティー・プロファイルの構成

セキュリティー・プロファイルを作成すると、保存されたセキュリティー・パラメーターを使用して、セキュアな環境で **xscmd** ユーティリティーを使用できます。

始める前に

xscmd ユーティリティーのセットアップについて詳しくは、**xscmd** ユーティリティーによる管理を参照してください。

このタスクについて

xscmd コマンドの残り部分で **-ssp** *profile_name* または **--saveSecProfile** *profile_name* パラメーターを使用して、セキュリティー・プロファイルを保存できます。プロファイルには、ユーザー名とパスワード、資格情報生成プログラム、鍵ストア、トラストストア、およびトランスポート・タイプについての設定を含めることができます。

xscmd ユーティリティー内の **ProfileManagement** コマンド・グループには、セキュリティー・プロファイルの管理のためのコマンドが含まれます。

手順

- セキュリティー・プロファイルを保存します。

  セキュリティー・プロファイルを保存するには、コマンドの残り部分で **-ssp** *profile_name* または **--saveSecProfile** *profile_name* パラメーターを使用します。このパラメーターをコマンドに追加すると、次のパラメーターが保存されます。

  ```
  -al,--alias <alias>
  -arc,--authRetryCount <integer>
  -ca,--credAuth <support>
  -cgc,--credGenClass <className>
  -cgp,--credGenProps <property>
  -cxpv,--contextProvider <provider>
  -ks,--keyStore <filePath>
  -ksp,--keyStorePassword <password>
  -kst,--keyStoreType <type>
  -prot,--protocol <protocol>
  -pwd,--password <password>
  -ts,--trustStore <filePath>
  -tsp,--trustStorePassword <password>
  -tst,--trustStoreType <type>
  -tt,--transportType <type>
  -user,--username <username>
  ```

  セキュリティー・プロファイルは、*user_home*¥.xscmd¥profiles¥security¥<*profile_name*>.properties ディレクトリーに保存されます。

  重要: *profile_name* パラメーターでは、ファイル名拡張子 .properties を含めないようにしてください。この拡張子は自動的にファイル名に付加されます。
- 保存したセキュリティー・プロファイルを使用します。

保存したセキュリティー・プロファイルを使用するには、実行するコマンドに、**-sp** *profile_name* または **--securityProfile** *profile_name* パラメーターを追加します。 コマンド例: `xscmd -c listHosts -cep myhost.mycompany.com -sp myprofile`

- **ProfileManagement** コマンド・グループの中のコマンドをリストします。

  次のコマンドを実行します。**xscmd -lc ProfileManagement**
- 既存のセキュリティー・プロファイルをリストします。

  次のコマンドを実行します。**xscmd -c listProfiles -v**
- セキュリティー・プロファイルの中に保存されている設定を表示します。

  次のコマンドを実行します。**xscmd -c showProfile -pn** *profile_name*
- 既存のセキュリティー・プロファイルを削除します。

  次のコマンドを実行します。**xscmd -c RemoveProfile -pn** *profile_name*

関連資料:

xsadmin ツールから **xscmd** ツールへのマイグレーション
これまでのリリースでは、**xsadmin** ツールは環境の状態をモニターするサンプルのコマンド行ユーティリティーでした。 **xscmd** ツールは、管理およびモニター用の、正式にサポートされるコマンド行ツールとして導入されました。これまで **xsadmin** ツールを使用していた場合は、新しい **xscmd** ツールにコマンドをマイグレーションすることを検討してください。

J2C クライアント接続の保護

Java 2 Connector (J2C) アーキテクチャーを使用して、WebSphere eXtreme Scale クライアントとアプリケーションの間の接続を保護します。

このタスクについて

アプリケーションが接続ファクトリーを参照し、接続ファクトリーがリモート・データ・グリッドへの接続を確立します。各接続ファクトリーは単一の eXtreme Scale クライアント接続をホストし、この接続がすべてのアプリケーション・コンポーネントに対して再利用されます。

重要: eXtreme Scale クライアント接続にはニア・キャッシュが含まれることがあるため、アプリケーションが接続を共有しないことが重要です。アプリケーション間でオブジェクトを共有する問題を回避するためには、単一のアプリケーション・インスタンスに対して 1 つの接続ファクトリーが存在する必要があります。

資格情報生成プログラムは、API を使用するか、クライアント・プロパティー・ファイルの中で設定できます。クライアント・プロパティー・ファイルの中で、securityEnabled プロパティーと credentialGenerator プロパティーが使用されます。以下のコード例は、印刷の都合上、複数行で表示されています。

```
securityEnabled=true
credentialGeneratorClass=com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.
     UserPasswordCredentialGenerator
credentialGeneratorProps=operator XXXXXX
```

クライアント・プロパティー・ファイルの中の資格情報生成プログラムと資格情報は、eXtreme Scale 接続操作と、デフォルトの J2C 資格情報に使用されます。したがって、API で指定された資格情報は、J2C の接続時に、J2C 接続のために使用されます。ただし、J2C 接続時に資格情報が指定されなければ、クライアント・プロパティー・ファイルの中の資格情報生成プログラムが使用されます。

手順

1. J2C 接続が eXtreme Scale クライアントを表す場所のセキュア・アクセスをセットアップします。 ClientPropertiesResource 接続ファクトリー・プロパティーまたは ClientPropertiesURL 接続ファクトリー・プロパティーを使用して、クライアント認証を構成します。

   WebSphere Application Server とともに WebSphere eXtreme Scale を使用する場合は、カタログ・サービス・ドメイン構成でクライアント・プロパティーを指定します。接続ファクトリーはドメインを参照する際に、この構成を自動的に使用します。

2. eXtreme Scale の適切な資格情報生成プログラム・オブジェクトを参照する接続ファクトリーを使用するように、クライアント・セキュリティー・プロパティーを構成します。これらのプロパティーは、eXtreme Scale サーバー・セキュリティーとも互換性があります。 例えば、eXtreme Scale が WebSphere Application Server にインストールされている場合、WebSphere 資格情報には WSTokenCredentialGenerator 資格情報生成プログラムを使用します。あるいは、スタンドアロン環境で eXtreme Scale を実行するときは、UserPasswordCredentialGenerator 資格情報生成プログラムを使用します。次の例では、資格情報は、クライアント・プロパティー内の構成を使用するのではなく、API 呼び出しを使用して、プログラマチックに渡されます。

   ```
   XSConnectionSpec spec = new XSConnectionSpec();
   spec.setCredentialGenerator(new UserPasswordCredentialGenerator("operator", "xxxxxx"));
   Connection conn = connectionFactory.getConnection(spec);
   ```

3. (オプション) 必要であれば、ニア・キャッシュを使用不可にします。

   単一の接続ファクトリーからのすべての J2C 接続は、単一のニア・キャッシュを共有します。グリッド・エントリー許可とマップ許可はサーバーで検証されますが、ニア・キャッシュでは検証されません。アプリケーションが J2C 接続を作成するために複数の資格情報を使用し、これらの資格情報に対して、構成が特定のグリッド・エントリー許可およびマップ許可を使用する場合、ニア・キャッシュを使用不可にします。接続ファクトリー・プロパティー ObjectGridResource または ObjectGridURL を使用して、ニア・キャッシュを使用不可にします。ニア・キャッシュを使用不可にする方法について詳しくは、ニア・キャッシュの構成を参照してください。

4. (オプション) 必要であれば、セキュリティー・ポリシー設定を設定します。

   J2EE アプリケーションに組み込みの eXtreme Scale リソース・アダプター・アーカイブ (RAR) ファイル構成が含まれる場合、アプリケーションのセキュリティー・ポリシー・ファイルの中に、追加のセキュリティー・ポリシー設定を設定することが必要な場合もあります。例えば、次のポリシーが必要です。

   ```
   permission com.ibm.websphere.security.WebSphereRuntimePermission "accessRuntimeClasses";
   permission java.lang.RuntimePermission "accessDeclaredMembers";
   permission javax.management.MBeanTrustPermission "register";
   permission java.lang.RuntimePermission "getClassLoader";
   ```

さらに、接続ファクトリーが使用するすべてのプロパティー・ファイルまたはリソース・ファイルには、ファイルまたは他の許可 (`permission java.io.FilePermission "filePath";` など) が必要です。 WebSphere Application Server の場合、ポリシー・ファイルは `META-INF/was.policy` で、これは J2EE EAR ファイルの中にあります。

タスクの結果

カタログ・サービス・ドメインで構成したクライアント・セキュリティー・プロパティーが、デフォルト値として使用されます。ユーザーが指定する値は、`client.properties` ファイルに定義されているプロパティーをオーバーライドします。

次のタスク

eXtreme Scale データ・アクセス API を使用して、トランザクションに使用するクライアント・コンポーネントを開発します。

セキュリティーのためのプログラミング

プログラミング・インターフェースを使用して、WebSphere eXtreme Scale 環境におけるさまざまなセキュリティーの側面を処理します。

セキュリティー API

Java

WebSphere eXtreme Scale は、オープン・セキュリティー・アーキテクチャーを採用しています。認証、許可、およびトランスポート・セキュリティーの基本的なセキュリティー・フレームワークを提供し、さらにセキュリティー・インフラストラクチャーを完全なものにするためにユーザーにプラグインの実装を求めています。

次の図は、eXtreme Scale サーバーにおけるクライアントの認証および許可の基本的フローを示しています。

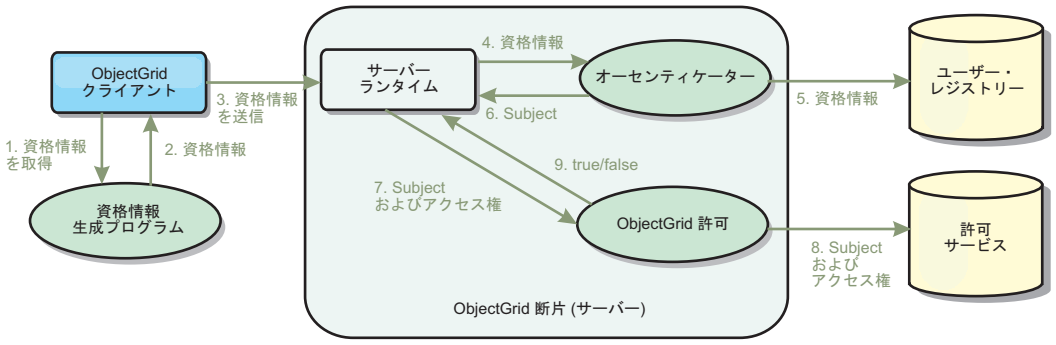


図 48. クライアントの認証および許可のフロー

認証フローと許可フローは、以下のようになります。

認証フロー

1. 認証フローは、eXtreme Scale クライアントの資格情報取得で始まります。これは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator プラグインにより実行されます。
2. CredentialGenerator オブジェクトは、有効なクライアント資格情報 (例えば、ユーザー ID とパスワードのペア、Kerberos チケットなど) の生成方法を認識しています。生成されたこの資格情報は、クライアントに送り戻されます。
3. クライアントが CredentialGenerator オブジェクトを使用して Credential オブジェクトを取得すると、この Credential オブジェクトは、eXtreme Scale サーバーに eXtreme Scale 要求と共に送信されます。
4. eXtreme Scale サーバーは、eXtreme Scale 要求を処理する前に、 Credential オブジェクトの認証を行います。その後、サーバーは Authenticator プラグインを使用して Credential オブジェクトを認証します。
5. Authenticator プラグインは、ユーザー・レジストリーへのインターフェース (例えば、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバーまたはオペレーティング・システムのユーザー・レジストリーなど) になります。Authenticator は、ユーザー・レジストリーを参考にして、認証の決定をします。
6. 正常に認証されると、このクライアントを表す Subject オブジェクトが戻されます。

許可フロー

WebSphere eXtreme Scale は、アクセス権ベースの許可メカニズムを採用し、各種の許可クラスによって表されるさまざまな許可カテゴリーがあります。例えば、com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission オブジェクトは、ObjectMap のデータ・エントリーの読み取り、書き込み、挿入、無効化、および除去の許可を表します。 WebSphere eXtreme Scale は、Java 認証および承認サービス (JAAS) 許可をそのままサポートするため、許可ポリシーを指定すれば JAAS を使用して許可を処理できます。

また、eXtreme Scale は、カスタム許可もサポートします。カスタム許可は、プラグイン com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.ObjectGridAuthorization によって組み込まれます。カスタム許可のフローは以下のとおりです。

7. サーバー・ランタイムが Subject オブジェクトと必要なアクセス権を許可プラグインに送信します。
8. 許可プラグインは、許可サービスを参照して、許可決定を下します。この Subject オブジェクトに対してアクセス権が許可される場合、値 `true` が戻されて、そうでない場合は `false` が戻されます。
9. この true または false の許可決定がサーバー・ランタイムに戻されます。

セキュリティーの実装

このセクションのトピックでは、セキュアな WebSphere eXtreme Scale デプロイメントのプログラム化とプラグイン実装のプログラム化方法について説明します。このセクションは、さまざまなセキュリティー機能を基にして編成されています。各サブトピックで、関係するプラグインとそのプラグインの実装方法を説明します。認証のセクションでは、WebSphere eXtreme Scale のセキュアなデプロイメント環境への接続方法を示します。

クライアント認証: クライアント認証のトピックでは、WebSphere eXtreme Scale クライアントがどのように資格情報を取得し、サーバーがどのようにクライアントを認証するかについて説明します。また、WebSphere eXtreme Scale クライアントが WebSphere eXtreme Scale のセキュアなサーバーに接続する方法についても説明します。

許可: 許可のトピックでは、JAAS 許可の他にカスタム許可を行うためにどのように ObjectGridAuthorization を使用するかを説明します。

グリッド認証: データ・グリッド認証のトピックでは、サーバー秘密のセキュア・トランスポートのためにどのように SecureTokenManager を使用できるかについて解説します。

Java Management Extensions (JMX) プログラミング: WebSphere eXtreme Scale サーバーを保護する際、JMX クライアントが、サーバーに JMX 資格情報を送信する必要がある場合があります。

クライアント認証プログラミング

Java

認証のために WebSphere eXtreme Scale は、クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するランタイムを提供し、次にオーセンティケーター・プラグインを呼び出してユーザーを認証します。

WebSphere eXtreme Scale のユーザーは、認証を実行するために以下のプラグインを実装する必要があります。

- Credential: Credential は、クライアント資格情報 (ユーザー ID とパスワードのペアなど) を表します。
- CredentialGenerator: CredentialGenerator は、資格情報を生成するための資格情報ファクトリーを表します。
- Authenticator: Authenticator は、クライアント資格情報を認証し、クライアント情報を取得します。

Credential および CredentialGenerator プラグイン

eXtreme Scale クライアントは、認証を必要とするサーバーに接続するときにはクライアント資格情報を提示する必要があります。クライアントの資格情報は、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.Credential インターフェースによって表されます。クライアント資格情報には、ユーザー名とパスワードのペア、Kerberos チケット、クライアント証明書、またはクライアントとサーバーが同意する任意の形式でのデータがあります。このインターフェースでは、equals(Object) メソッドおよび hashCode メソッドを定義します。 Credential オブジェクトをサーバー・サイドの鍵として使用することによって認証済み Subject オブジェクトがキャッシュされるため、この 2 つのメソッドは重要です。さらに、WebSphere eXtreme Scale は資格情報を生成するプラグインを提供します。このプラグインは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator インターフェースによって示され、資格情報が期限切れになる可能性がある場合に役立ちます。この場合は、getCredential メソッドが呼び出されて資格情報が更新されます。

Credential インターフェースでは、equals(Object) メソッドおよび hashCode メソッドを明示的に定義します。 Credential オブジェクトをサーバー・サイドの鍵として使用することによって認証済み Subject オブジェクトがキャッシュされるため、この 2 つのメソッドは重要です。

また、資格情報を生成するために提供されたプラグインも使用することができます。このプラグインは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator インターフェースによって示され、資格情報が期限切れになる可能性がある場合に役立ちます。この場合は、getCredential メソッドが呼び出されて資格情報が更新されます。詳しくは、CredentialGenerator インターフェースを参照してください。

資格情報インターフェース用として次の 3 つのデフォルトの実装が提供されています。

- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredential 実装は、ユーザー ID とパスワードのペアを含みます。
- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredential 実装は、WebSphere Application Server 固有の認証および許可トークンを含みます。これらのトークンを使用すると、同じセキュリティー・ドメイン内のアプリケーション・サーバーにセキュリティー属性を伝搬することができます。

さらに、WebSphere eXtreme Scale は資格情報を生成するプラグインを提供します。このプラグインは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator インターフェースによって表されます。WebSphere eXtreme Scale は、次に示す 2 つのデフォルト組み込み実装を提供します。

- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredentialGenerator コンストラクターは、ユーザー ID およびパスワードを取ります。getCredential メソッドは、呼び出されると、ユーザー ID およびパスワードが含まれている UserPasswordCredential オブジェクトを返します。
- com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredentialGenerator は、WebSphere Application Server で実行中の資格情報 (セキュリティー・トークン) 生成プログラムを表します。getCredential メソッドを呼び出すと、現在のスレッドに関連した Subject が取得されます。その後、この Subject オブジェクトのセキュリティー情報が WSTokenCredential オブジェクトに変換されます。定数 WSTokenCredentialGenerator.RUN_AS_SUBJECT または WSTokenCredentialGenerator.CALLER_SUBJECT を使用して、スレッドから runAs サブジェクトか呼び出し元サブジェクトのいずれを検索するかを指定できます。

UserPasswordCredential および UserPasswordCredentialGenerator

テストの目的で、WebSphere eXtreme Scale は以下のプラグイン実装を提供します。

1. `com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredential`
2. `com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.UserPasswordCredentialGenerator`

ユーザー・パスワードの資格情報では、ユーザー ID とパスワードを保管します。次にユーザー・パスワードの資格情報生成プログラムは、このユーザー ID とパスワードを収容します。

これら 2 つのプラグインを実装する方法を、以下のコード例で示します。

UserPasswordCredential.java

```
// This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
// without royalty payment by customer
// (a) for its own instruction and study,
// (b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
// either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
// application, in customer's own products.
// Licensed Materials - Property of IBM
// 5724-J34 © COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2007
package com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins;

import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.Credential;

/**
 * This class represents a credential containing a user ID and password.
 *
 * @ibm-api
 * @since WAS XD 6.0.1
 *
 * @see Credential
 * @see UserPasswordCredentialGenerator#getCredential()
 */
public class UserPasswordCredential implements Credential {

    private static final long serialVersionUID = 1409044825541007228L;

    private String ivUserName;

    private String ivPassword;

    /**
     * Creates a UserPasswordCredential with the specified user name and
     * password.
     *
     * @param userName the user name for this credential
     * @param password the password for this credential
     *
     * @throws IllegalArgumentException if userName or password is <code>null</code>
     */
    public UserPasswordCredential(String userName, String password) {
        super();
        if (userName == null || password == null) {
            throw new IllegalArgumentException("User name and password cannot be null.");
        }
        this.ivUserName = userName;
        this.ivPassword = password;
    }

    /**
     * Gets the user name for this credential.
     *
     * @return   the user name argument that was passed to the constructor
     *           or the <code>setUserName(String)</code>
     *           method of this class
     *
     * @see #setUserName(String)
     */
    public String getUserName() {
        return ivUserName;
    }

    /**
     * Sets the user name for this credential.
     *
     * @param userName the user name to set.
     *
     * @throws IllegalArgumentException if userName is <code>null</code>
     */
    public void setUserName(String userName) {
        if (userName == null) {
            throw new IllegalArgumentException("User name cannot be null.");
        }
        this.ivUserName = userName;
    }

    /**
     * Gets the password for this credential.
     *
     * @return   the password argument that was passed to the constructor
     *           or the <code>setPassword(String)</code>
     *           method of this class
     *
     * @see #setPassword(String)
     */
    public String getPassword() {
        return ivPassword;
    }

    /**
     * Sets the password for this credential.
     *
     * @param password the password to set.
     *
     * @throws IllegalArgumentException if password is <code>null</code>
     */
    public void setPassword(String password) {
        if (password == null) {
            throw new IllegalArgumentException("Password cannot be null.");
        }
        this.ivPassword = password;
    }

    /**
     * Checks two UserPasswordCredential objects for equality.
```

```
     * <p>
     * Two UserPasswordCredential objects are equal if and only if their user names
     * and passwords are equal.
     *
     * @param o the object we are testing for equality with this object.
     *
     * @return <code>true</code> if both UserPasswordCredential objects are equivalent.
     *
     * @see Credential#equals(Object)
     */
    public boolean equals(Object o) {
        if (this == o) {
            return true;
        }
        if (o instanceof UserPasswordCredential) {
            UserPasswordCredential other = (UserPasswordCredential) o;
            return other.ivPassword.equals(ivPassword) && other.ivUserName.equals(ivUserName);
        }

        return false;
    }

    /**
     * Returns the hashcode of the UserPasswordCredential object.
     *
     * @return the hash code of this object
     *
     * @see Credential#hashCode()
     */
    public int hashCode() {
        return ivUserName.hashCode() + ivPassword.hashCode();
    }
}
```

UserPasswordCredentialGenerator.java

```
// This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
// without royalty payment by customer
// (a) for its own instruction and study,
// (b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
// either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
// application, in customer's own products.
// Licensed Materials - Property of IBM
// 5724-J34 © COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2007
package com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins;

import java.util.StringTokenizer;

import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.Credential;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.CredentialGenerator;

/**
 * This credential generator creates <code>UserPasswordCredential</code> objects.
 * <p>
 * UserPasswordCredentialGenerator has a one to one relationship with
 * UserPasswordCredential because it can only create a UserPasswordCredential
 * representing one identity.
 *
 * @since WAS XD 6.0.1
 * @ibm-api
 *
 * @see CredentialGenerator
 * @see UserPasswordCredential
 */
public class UserPasswordCredentialGenerator implements CredentialGenerator {

    private String ivUser;

    private String ivPwd;

    /**
     * Creates a UserPasswordCredentialGenerator with no user name or password.
     *
     * @see #setProperties(String)
     */
    public UserPasswordCredentialGenerator() {
        super();
    }

    /**
     * Creates a UserPasswordCredentialGenerator with a specified user name and
     * password
     *
     * @param user the user name
     * @param pwd the password
     */
    public UserPasswordCredentialGenerator(String user, String pwd) {
        ivUser = user;
        ivPwd = pwd;
    }

    /**
     * Creates a new <code>UserPasswordCredential</code> object using this
     * object's user name and password.
     *
     * @return a new <code>UserPasswordCredential</code> instance
     *
```

```
 * @see CredentialGenerator#getCredential()
 * @see UserPasswordCredential
 */
public Credential getCredential() {
    return new UserPasswordCredential(ivUser, ivPwd);
}

/**
 * Gets the password for this credential generator.
 *
 * @return   the password argument that was passed to the constructor
 */
public String getPassword() {
    return ivPwd;
}

/**
 * Gets the user name for this credential.
 *
 * @return   the user argument that was passed to the constructor
 *           of this class
 */
public String getUserName() {
    return ivUser;
}
/**
 * Sets additional properties namely a user name and password.
 *
 * @param properties a properties string  with a user name and
 *                   a password separated by a blank.
 *
 * @throws IllegalArgumentException if the format is not valid
 */
public void setProperties(String properties) {
    StringTokenizer token = new StringTokenizer(properties, " ");
    if (token.countTokens() != 2) {
        throw new IllegalArgumentException(
            "The properties should have a user name and password and separated by a blank.");
    }

    ivUser = token.nextToken();
    ivPwd = token.nextToken();
}
/**
 * Checks two UserPasswordCredentialGenerator objects for equality.
 * <p>
 * Two UserPasswordCredentialGenerator objects are equal if and only if
 * their user names and passwords are equal.
 *
 * @param obj the object we are testing for equality with this object.
 *
 * @return <code>true</code> if both UserPasswordCredentialGenerator objects
 *         are equivalent.
 */
public boolean equals(Object obj) {
    if (obj == this) {
        return true;
    }

    if (obj != null && obj instanceof UserPasswordCredentialGenerator) {
        UserPasswordCredentialGenerator other = (UserPasswordCredentialGenerator) obj;

        boolean bothUserNull = false;
        boolean bothPwdNull = false;

        if (ivUser == null) {
            if (other.ivUser == null) {
                bothUserNull = true;
            } else {
                return false;
            }
        }

        if (ivPwd == null) {
            if (other.ivPwd == null) {
                bothPwdNull = true;
            } else {
                return false;
            }
        }

        return (bothUserNull || ivUser.equals(other.ivUser)) && (bothPwdNull || ivPwd.equals(other.ivPwd));
    }

    return false;
}

/**
 * Returns the hashcode of the UserPasswordCredentialGenerator object.
 *
 * @return the hash code of this object
```

```
     */
    public int hashCode() {

        return ivUser.hashCode() + ivPwd.hashCode();
    }

}
```

UserPasswordCredential クラスには、2 つの属性、ユーザー名およびパスワードが含まれています。 UserPasswordCredentialGenerator は、UserPasswordCredential オブジェクトが含まれるファクトリーとしてサービス提供します。

WSTokenCredential および WSTokenCredentialGenerator

WebSphere eXtreme Scale クライアントおよびサーバーがすべて WebSphere Application Server にデプロイされている場合、クライアント・アプリケーションは、以下の条件が満たされている場合は、これら 2 つの組み込み実装を使用することができます。

1. WebSphere Application Server グローバル・セキュリティーがオンになっている。
2. すべての WebSphere eXtreme Scale クライアントおよびサーバーが WebSphere Application Server Java 仮想マシンで実行されている。
3. アプリケーション・サーバーが、同じセキュリティー・ドメインにある。
4. クライアントが WebSphere Application Server で既に認証されている。

この場合、クライアントは com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredentialGenerator クラスを使用して、資格情報を生成できます。サーバーでは、WSAuthenticator 実装クラスを使用して、資格情報を認証します。

このシナリオは、eXtreme Scale クライアントが既に認証済みであるという事実を利用します。サーバーがあるアプリケーション・サーバーが、クライアントを格納するアプリケーション・サーバーと同じセキュリティー・ドメインにあるため、クライアントからサーバーにセキュリティー・トークンを伝搬することができます。これにより、同じユーザー・レジストリーを再認証する必要がなくなります。

注: CredentialGenerator が常に同じ資格情報を生成するわけではありません。有効期限があるリフレッシュ可能な資格情報の場合、CredentialGenerator は、認証が確実に成功するようにするため、最新の有効な資格情報を生成できなければなりません。Credential オブジェクトとして Kerberos チケットを使用することが、1 つの例です。Kerberos チケットがリフレッシュされると、CredentialGenerator は、CredentialGenerator.getCredential が呼び出されたときに、リフレッシュ後のチケットを取得しなければなりません。

Authenticator プラグイン

eXtreme Scale クライアントが CredentialGenerator オブジェクトを使用して Credential オブジェクトを取得すると、このクライアント Credential オブジェクトがクライアント要求とともに eXtreme Scale サーバーに送信されます。サーバーは、要求の処理前に Credential オブジェクトの認証を行います。 Credential オブジェクトが正常に認証されると、このクライアントを表す Subject オブジェクトが戻されます。

そうすると、この Subject オブジェクトはキャッシュされますが、存続時間がセッション・タイムアウト値に達すると有効期限が切れます。ログイン・セッション・タイムアウト値は、クラスター XML ファイル内にある loginSessionExpirationTime プロパティーを使用して設定できます。例えば、`loginSessionExpirationTime="300"` と設定すると、Subject オブジェクトの有効期限は 300 秒で切れます。

この Subject オブジェクトは、後で示すように、要求の認可に使用されます。eXtreme Scale サーバーは、Authenticator プラグインを使用して、Credential オブジェクトの認証を行います。詳しくは、オーセンティケーターを参照してください。

Authenticator プラグインは、eXtreme Scale ランタイムがクライアント・ユーザー・レジストリー (例えば、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバー) からの Credential オブジェクトを認証する所です。

WebSphere eXtreme Scale は即時に使用可能なユーザー・レジストリー構成を提供するわけではありません。ユーザー・レジストリーの構成と管理は、単純化と柔軟性のため、WebSphere eXtreme Scale の外部に残されています。このプラグインはユーザー・レジストリーへの接続と認証時に実装されます。例えば、Authenticator の実装では、資格情報からユーザー ID とパスワードを抽出し、その情報を使用して LDAP サーバーに接続し、検証します。この認証の結果として、Subject オブジェクトが作成されます。この実装で、JAAS ログイン・モジュールを使用する可能性があります。認証の結果として、Subject オブジェクトが戻されます。

このメソッドでは、2 つの例外 InvalidCredentialException および ExpiredCredentialException が作成されることに注意してください。InvalidCredentialException 例外は、資格情報が無効であることを示します。ExpiredCredentialException 例外は、資格情報の期限が切れていることを示します。認証メソッドの結果としてこの 2 つの例外のいずれかが発生した場合、例外はクライアントに送り返されます。ただし、クライアント・ランタイムによって、この 2 つの例外は別々に処理されます。

- エラーが InvalidCredentialException 例外である場合は、クライアント・ランタイムにこの例外が表示されます。ご使用のアプリケーションで例外を処理する必要があります。例えば CredentialGenerator を修正してから、操作を再試行することができます。
- エラーが ExpiredCredentialException 例外であり、再試行数 0 以外の場合は、クライアント・ランタイムによって、CredentialGenerator.getCredential メソッドが再度呼び出され、新しい Credential オブジェクトがサーバーに送信されます。新しい資格情報認証が成功すると、サーバーは要求を処理します。新しい資格情報認証が失敗すると、クライアントに例外が送り返されます。認証の再試行を試みた回数がサポートされる値に達したが、それでもクライアントが ExpiredCredentialException 例外を受け取った場合は、ExpiredCredentialException 例外となります。ご使用のアプリケーションでエラーを処理する必要があります。

Authenticator インターフェースは、柔軟性に優れています。Authenticator インターフェースは、独自の方法で実装することができます。例えば、2 種類のユーザー・レジストリーをサポートするように、このインターフェースを実装することもできます。

WebSphere eXtreme Scale には、サンプルのオーセンティケーター・プラグイン実装があります。WebSphere Application Server オーセンティケーター・プラグインの場合を除いて、他の実装はテスト目的のサンプルに過ぎません。

KeyStoreLoginAuthenticator

この例では、テストとサンプルを目的とする eXtreme Scale 組み込み実装である KeyStoreLoginAuthenticator を使用しています (鍵ストアは単純なユーザー・レジストリーであり、実動環境には使用しないようにしてください)。このクラスは、オーセンティケーターの実装方法の説明が目的で表示されていることに注意してください。

KeyStoreLoginAuthenticator.java

```
// This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
// without royalty payment by customer
// (a) for its own instruction and study,
// (b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
// either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
// application, in customer's own products.
// Licensed Materials - Property of IBM
// 5724-J34 © COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2007

package com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins;

import javax.security.auth.Subject;
import javax.security.auth.login.LoginContext;
import javax.security.auth.login.LoginException;

import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.Authenticator;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.Credential;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.ExpiredCredentialException;
import com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.InvalidCredentialException;
import com.ibm.ws.objectgrid.Constants;
import com.ibm.ws.objectgrid.ObjectGridManagerImpl;
import com.ibm.ws.objectgrid.security.auth.callback.UserPasswordCallbackHandlerImpl;

/**
 * This class is an implementation of the <code>Authenticator</code> interface
 * when a user name and password are used as a credential.
 * <p>
 * When user ID and password authentication is used, the credential passed to the
 * <code>authenticate(Credential)</code> method is a UserPasswordCredential object.
 * <p>
 * This implementation will use a <code>KeyStoreLoginModule</code> to authenticate
 * the user into the keystore using the JAAS login module "KeyStoreLogin". The key
 * store can be configured as an option to the <code>KeyStoreLoginModule</code>
 * class. Please see the <code>KeyStoreLoginModule</code> class for more details
 * about how to set up the JAAS login configuration file.
 * <p>
 * This class is only for sample and quick testing purpose. Users should
 * write your own Authenticator implementation which can fit better into
 * the environment.
 *
 * @ibm-api
 * @since WAS XD 6.0.1
 *
 * @see Authenticator
 * @see KeyStoreLoginModule
 * @see UserPasswordCredential
 */
public class KeyStoreLoginAuthenticator implements Authenticator {

    /**
     * Creates a new KeyStoreLoginAuthenticator.
     */
    public KeyStoreLoginAuthenticator() {
        super();
    }

    /**
     * Authenticates a <code>UserPasswordCredential</code>.
     * <p>
     * Uses the user name and password from the specified UserPasswordCredential
     * to login to the KeyStoreLoginModule named "KeyStoreLogin".
     *
     * @throws InvalidCredentialException if credential isn't a
     *         UserPasswordCredential or some error occurs during processing
     *         of the supplied UserPasswordCredential
     *
     * @throws ExpiredCredentialException if credential is expired.  This exception
     *         is not used by this implementation
     *
     * @see Authenticator#authenticate(Credential)
```

```
     * @see KeyStoreLoginModule
     */
    public Subject authenticate(Credential credential) throws InvalidCredentialException,
   ExpiredCredentialException {

        if (credential == null) {
            throw new InvalidCredentialException("Supplied credential is null");
        }

        if (! (credential instanceof UserPasswordCredential) ) {
            throw new InvalidCredentialException("Supplied credential is not a UserPasswordCredential");
        }

        UserPasswordCredential cred = (UserPasswordCredential) credential;
        LoginContext lc = null;
        try {
            lc = new LoginContext("KeyStoreLogin",
                    new UserPasswordCallbackHandlerImpl(cred.getUserName(), cred.getPassword().toCharArray()));

            lc.login();

            Subject subject = lc.getSubject();

            return subject;
        }
        catch (LoginException le) {
            throw new InvalidCredentialException(le);
        }
        catch (IllegalArgumentException ile) {
            throw new InvalidCredentialException(ile);
        }
    }
}
```

KeyStoreLoginModule.java

```
// This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied and modified
// without royalty payment by customer
// (a) for its own instruction and study,
// (b) in order to develop applications designed to run with an IBM WebSphere product,
// either for customer's own internal use or for redistribution by customer, as part of such an
// application, in customer's own products.
// Licensed Materials - Property of IBM
// 5724-J34 © COPYRIGHT International Business Machines Corp. 2007
package com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins;

import java.io.File;
import java.io.FileInputStream;
import java.security.KeyStore;
import java.security.KeyStoreException;
import java.security.NoSuchAlgorithmException;
import java.security.PrivateKey;
import java.security.UnrecoverableKeyException;
import java.security.cert.Certificate;
import java.security.cert.CertificateException;
import java.security.cert.CertificateFactory;
import java.security.cert.X509Certificate;
import java.util.Arrays;
import java.util.HashSet;
import java.util.Map;
import java.util.Set;

import javax.security.auth.Subject;
import javax.security.auth.callback.Callback;
import javax.security.auth.callback.CallbackHandler;
import javax.security.auth.callback.NameCallback;
import javax.security.auth.callback.PasswordCallback;
import javax.security.auth.login.LoginException;
import javax.security.auth.spi.LoginModule;
import javax.security.auth.x500.X500Principal;
import javax.security.auth.x500.X500PrivateCredential;

import com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException;
import com.ibm.ws.objectgrid.Constants;
import com.ibm.ws.objectgrid.ObjectGridManagerImpl;
import com.ibm.ws.objectgrid.util.ObjectGridUtil;

/**
 * A KeyStoreLoginModule is keystore authentication login module based on
 * JAAS authentication.
 * <p>
 * A login configuration should provide an option "<code>keyStoreFile</code>" to
 * indicate where the keystore file is located. If the <code>keyStoreFile</code>
 * value contains a system property in the form, <code>${system.property}</code>,
 * it will be expanded to the value of the system property.
 * <p>
 * If an option "<code>keyStoreFile</code>" is not provided, the default keystore
 * file name is <code>"${java.home}${/}.keystore"</code>.
 * <p>
 * Here is a Login module configuration example:
 * <pre><code>
 *    KeyStoreLogin {
```

```
 *        com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.KeystoreLoginModule required
 *            keyStoreFile="${user.dir}${/}security${/}.keystore";
 *    };
 * </code></pre>
 *
 * @ibm-api
 * @since WAS XD 6.0.1
 *
 * @see LoginModule
 */
public class KeyStoreLoginModule implements LoginModule {

    private static final String CLASS_NAME = KeyStoreLoginModule.class.getName();

    /**
     * keystore file property name
     */
    public static final String KEY_STORE_FILE_PROPERTY_NAME = "keyStoreFile";

    /**
     * keystore type. Only JKS is supported
     */
    public static final String KEYSTORE_TYPE = "JKS";

    /**
     * The default keystore file name
     */
    public static final String DEFAULT_KEY_STORE_FILE = "${java.home}${/}.keystore";

    private CallbackHandler handler;

    private Subject subject;

    private boolean debug = false;

    private Set principals = new HashSet();

    private Set publicCreds = new HashSet();

    private Set privateCreds = new HashSet();

    protected KeyStore keyStore;

    /**
     * Creates a new KeyStoreLoginModule.
     */
    public KeyStoreLoginModule() {
    }

    /**
     * Initializes the login module.
     *
     * @see LoginModule#initialize(Subject, CallbackHandler, Map, Map)
     */
    public void initialize(Subject sub, CallbackHandler callbackHandler,
            Map mapSharedState, Map mapOptions) {

        // initialize any configured options
        debug = "true".equalsIgnoreCase((String) mapOptions.get("debug"));

        if (sub == null)
            throw new IllegalArgumentException("Subject is not specified");

        if (callbackHandler == null)
            throw new IllegalArgumentException(
            "CallbackHander is not specified");

        // Get the keystore path
        String sKeyStorePath = (String) mapOptions
            .get(KEY_STORE_FILE_PROPERTY_NAME);

        // If there is no keystore path, the default one is the .keystore
        // file in the java home directory
        if (sKeyStorePath == null) {
            sKeyStorePath = DEFAULT_KEY_STORE_FILE;
        }

        // Replace the system enviroment variable
        sKeyStorePath = ObjectGridUtil.replaceVar(sKeyStorePath);

        File fileKeyStore = new File(sKeyStorePath);

        try {
            KeyStore store = KeyStore.getInstance("JKS");
            store.load(new FileInputStream(fileKeyStore), null);

            // Save the keystore
            keyStore = store;

            if (debug) {
                System.out.println("[KeyStoreLoginModule] initialize: Successfully loaded keystore");
```

```
            }
        }
        catch (Exception e) {
            ObjectGridRuntimeException re = new ObjectGridRuntimeException(
                    "Failed to load keystore: " + fileKeyStore.getAbsolutePath());
            re.initCause(e);
            if (debug) {
                System.out.println("[KeyStoreLoginModule] initialize: keystore loading failed with exception "
                        + e.getMessage());
            }
        }

        this.subject = sub;
        this.handler = callbackHandler;
    }

    /**
     * Authenticates a user based on the keystore file.
     *
     * @see LoginModule#login()
     */
    public boolean login() throws LoginException {

        if (debug) {
            System.out.println("[KeyStoreLoginModule] login: entry");
        }

        String name = null;
        char pwd[] = null;

        if (keyStore == null || subject == null || handler == null) {
            throw new LoginException("Module initialization failed");
        }

        NameCallback nameCallback = new NameCallback("Username:");
        PasswordCallback pwdCallback = new PasswordCallback("Password:", false);

        try {
            handler.handle(new Callback[] { nameCallback, pwdCallback });
        }
        catch (Exception e) {
            throw new LoginException("Callback failed: " + e);
        }

        name = nameCallback.getName();
        char[] tempPwd = pwdCallback.getPassword();

        if (tempPwd == null) {
            // treat a NULL password as an empty password
            tempPwd = new char[0];
        }
        pwd = new char[tempPwd.length];
        System.arraycopy(tempPwd, 0, pwd, 0, tempPwd.length);

        pwdCallback.clearPassword();

        if (debug) {
            System.out.println("[KeyStoreLoginModule] login: "
                    + "user entered user name: " + name);
        }

        // Validate the user name and password
        try {
            validate(name, pwd);
        }
        catch (SecurityException se) {
            principals.clear();
            publicCreds.clear();
            privateCreds.clear();
            LoginException le = new LoginException(
            "Exception encountered during login");
            le.initCause(se);

            throw le;
        }

        if (debug) {
            System.out.println("[KeyStoreLoginModule] login: exit");
        }
        return true;
    }

    /**
     * Indicates the user is accepted.
     * <p>
     * This method is called only if the user is authenticated by all modules in
     * the login configuration file. The principal objects will be added to the
     * stored subject.
     *
     * @return false if for some reason the principals cannot be added; true
     *         otherwise
```

```
 *
 * @exception LoginException
 *                LoginException is thrown if the subject is readonly or if
 *                any unrecoverable exceptions is encountered.
 *
 * @see LoginModule#commit()
 */
public boolean commit() throws LoginException {
    if (debug) {
        System.out.println("[KeyStoreLoginModule] commit: entry");
    }

    if (principals.isEmpty()) {
        throw new IllegalStateException("Commit is called out of sequence");
    }

    if (subject.isReadOnly()) {
        throw new LoginException("Subject is Readonly");
    }

    subject.getPrincipals().addAll(principals);
    subject.getPublicCredentials().addAll(publicCreds);
    subject.getPrivateCredentials().addAll(privateCreds);

    principals.clear();
    publicCreds.clear();
    privateCreds.clear();

    if (debug) {
        System.out.println("[KeyStoreLoginModule] commit: exit");
    }
    return true;
}

/**
 * Indicates the user is not accepted
 *
 * @see LoginModule#abort()
 */
public boolean abort() throws LoginException {
    boolean b = logout();
    return b;
}

/**
 * Logs the user out. Clear all the maps.
 *
 * @see LoginModule#logout()
 */
public boolean logout() throws LoginException {


    // Clear the instance variables
    principals.clear();
    publicCreds.clear();
    privateCreds.clear();

    // clear maps in the subject
    if (!subject.isReadOnly()) {
        if (subject.getPrincipals() != null) {
            subject.getPrincipals().clear();
        }

        if (subject.getPublicCredentials() != null) {
            subject.getPublicCredentials().clear();
        }

        if (subject.getPrivateCredentials() != null) {
            subject.getPrivateCredentials().clear();
        }
    }
    return true;
}

/**
 * Validates the user name and password based on the keystore.
 *
 * @param userName user name
 * @param password password
 * @throws SecurityException if any exceptions encountered
 */
private void validate(String userName, char password[])
    throws SecurityException {

    PrivateKey privateKey = null;

    // Get the private key from the keystore
    try {
        privateKey = (PrivateKey) keyStore.getKey(userName, password);
    }
    catch (NoSuchAlgorithmException nsae) {
```

```
            SecurityException se = new SecurityException();
            se.initCause(nsae);
            throw se;
        }
        catch (KeyStoreException kse) {
            SecurityException se = new SecurityException();
            se.initCause(kse);
            throw se;
        }
        catch (UnrecoverableKeyException uke) {
            SecurityException se = new SecurityException();
            se.initCause(uke);
            throw se;
        }

        if (privateKey == null) {
            throw new SecurityException("Invalid name: " + userName);
        }

        // Check the certificats
        Certificate certs[] = null;
        try {
            certs = keyStore.getCertificateChain(userName);
        }
        catch (KeyStoreException kse) {
            SecurityException se = new SecurityException();
            se.initCause(kse);
            throw se;
        }

        if (debug) {
            System.out.println("  Print out the certificates:");
            for (int i = 0; i < certs.length; i++) {
                System.out.println("  certificate " + i);
                System.out.println("    " + certs[i]);
            }
        }

        if (certs != null && certs.length > 0) {

            // If the first certificate is an X509Certificate
            if (certs[0] instanceof X509Certificate) {
                try {
                    // Get the first certificate which represents the user
                    X509Certificate certX509 = (X509Certificate) certs[0];

                    // Create a principal
                    X500Principal principal = new X500Principal(certX509
                            .getIssuerDN()
                            .getName());
                    principals.add(principal);

                    if (debug) {
                        System.out.println("  Principal added: " + principal);
                    }
                    // Create the certification path object and add it to the
                    // public credential set
                    CertificateFactory factory = CertificateFactory
                        .getInstance("X.509");
                    java.security.cert.CertPath certPath = factory
                        .generateCertPath(Arrays.asList(certs));
                    publicCreds.add(certPath);

                    // Add the private credential to the private credential set
                    privateCreds.add(new X500PrivateCredential(certX509,
                            privateKey, userName));

                }
                catch (CertificateException ce) {
                    SecurityException se = new SecurityException();
                    se.initCause(ce);
                    throw se;
                }
            }
            else {
                // The first certificate is not an X509Certificate
                // We just add the certificate to the public credential set
                // and the private key to the private credential set.
                publicCreds.add(certs[0]);
                privateCreds.add(privateKey);
            }
        }
    }
}
```

LDAP オーセンティケーター・プラグインの使用

LDAP サーバーに対するユーザー名およびパスワード認証を処理するために、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.LDAPAuthenticator のデフォルトの実装が用意されています。この実装では、LDAPLogin ログイン・モジュールを使用して、ユーザーを Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバーにログインさせます。以下のスニペットでは、認証メソッドの実装方法を説明しています。

```
/**
* @see com.ibm.ws.objectgrid.security.plugins.Authenticator#
* authenticate(LDAPLogin)
*/
public Subject authenticate(Credential credential) throws
InvalidCredentialException, ExpiredCredentialException {

    UserPasswordCredential cred = (UserPasswordCredential) credential;
    LoginContext lc = null;
    try {
        lc = new LoginContext("LDAPLogin",
            new UserPasswordCallbackHandlerImpl(cred.getUserName(),
            cred.getPassword().toCharArray()));

        lc.login();

        Subject subject = lc.getSubject();

        return subject;
    }
    catch (LoginException le) {
        throw new InvalidCredentialException(le);
    }
    catch (IllegalArgumentException ile) {
        throw new InvalidCredentialException(ile);
    }
}
```

また、この目的のため、eXtreme Scale には、ログイン・モジュール com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.LDAPLoginModule が同梱されています。JAAS ログイン構成ファイルに以下の 2 つのオプションを指定する必要があります。

- providerURL: LDAP サーバー・プロバイダー URL
- factoryClass: LDAP コンテキスト・ファクトリー実装クラス

LDAPLoginModule モジュールは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.LDAPAuthentcationHelper.authenticate メソッドを呼び出します。以下のコード・スニペットは、LDAPAuthenticationHelper の認証メソッドを実装する方法を示しています。

```
/**
* Authenticate the user to the LDAP directory.
* @param user the user ID, e.g., uid=xxxxxx,c=us,ou=bluepages,o=ibm.com
* @param pwd the password
*
* @throws NamingException
*/
public String[] authenticate(String user, String pwd)
throws NamingException {
    Hashtable env = new Hashtable();
    env.put(Context.INITIAL_CONTEXT_FACTORY, factoryClass);
    env.put(Context.PROVIDER_URL, providerURL);
    env.put(Context.SECURITY_PRINCIPAL, user);
    env.put(Context.SECURITY_CREDENTIALS, pwd);
    env.put(Context.SECURITY_AUTHENTICATION, "simple");

    InitialContext initialContext = new InitialContext(env);

    // Look up for the user
    DirContext dirCtx = (DirContext) initialContext.lookup(user);
```

```
        String uid = null;
        int iComma = user.indexOf(",");
        int iEqual = user.indexOf("=");
        if (iComma > 0 && iComma > 0) {
            uid = user.substring(iEqual + 1, iComma);
        }
        else {
            uid = user;
        }

        Attributes attributes = dirCtx.getAttributes("");

        // Check the UID
        String thisUID = (String) (attributes.get(UID).get());

        String thisDept = (String) (attributes.get(HR_DEPT).get());

        if (thisUID.equals(uid)) {
            return new String[] { thisUID, thisDept };
        }
        else {
            return null;
        }
    }
```

認証が成功した場合、ID とパスワードは有効であるとみなされます。次に、ログイン・モジュールは、この認証メソッドから ID 情報および部門情報を取得します。ログイン・モジュールでは、2 つのプリンシパル SimpleUserPrincipal および SimpleDeptPrincipal が作成されます。認証済みサブジェクトを使用して、グループ許可 (ここでは、部門がグループです) および個々の許可を行うことができます。

以下に、LDAP サーバーへのログインに使用されるログイン・モジュールの構成例を示します。

```
LDAPLogin { com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.LDAPLoginModule required
    providerURL="ldap://directory.acme.com:389/"
    factoryClass="com.sun.jndi.ldap.LdapCtxFactory";
};
```

前の構成では、LDAP サーバーは `ldap://directory.acme.com:389/server` を指しています。この設定をご使用の LDAP サーバーに変更します。このログイン・モジュールでは、指定された ID およびパスワードを使用して、LDAP サーバーに接続します。この実装は、テスト目的のみです。

WebSphere Application Server オーセンティケーター・プラグインの使用

さらに、eXtreme Scale には、WebSphere Application Server セキュリティー・インフラストラクチャーを使用するための com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenAuthenticator 組み込み実装も用意されています。この組み込み実装は、以下の条件が満たされている場合に使用できます。

1. WebSphere Application Server グローバル・セキュリティーがオンになっている。
2. すべての eXtreme Scale クライアントおよびサーバーが WebSphere Application Server JVM で起動している。
3. これらのアプリケーション・サーバーが、同じセキュリティー・ドメインにある。

4. eXtreme Scale クライアントが、WebSphere Application Server で認証済みである。

クライアントは com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSTokenCredentialGenerator クラスを使用して、資格情報を生成できます。サーバーでは、Authenticator 実装クラスを使用して、資格情報を認証します。トークンが正常に認証されると、Subject オブジェクトが戻されます。

このシナリオの利点は、クライアントが既に認証済みであることです。サーバーがあるアプリケーション・サーバーが、クライアントを格納するアプリケーション・サーバーと同じセキュリティー・ドメインにあるため、クライアントからサーバーにセキュリティー・トークンを伝搬することができます。これにより、同じユーザー・レジストリーを再認証する必要がなくなります。

Tivoli Access Manager オーセンティケーター・プラグインの使用

Tivoli Access Manager は、セキュリティー・サーバーとして幅広く使用されています。Tivoli Access Manager が提供するログイン・モジュールを使用して、オーセンティケーターを実装することもできます。

Tivoli Access Manager でユーザーを認証するには、com.tivoli.mts.PDLoginModule ログイン・モジュールを適用します。このモジュールの場合、呼び出し側アプリケーションが以下の情報を提供する必要があります。

1. 短縮名または X.500 名 (DN) として指定されたプリンシパル名
2. パスワード

ログイン・モジュールはプリンシパルを認証し、Tivoli Access Manager 資格情報を返します。ログイン・モジュールは、呼び出し側アプリケーションによって以下の情報が提供されると想定しています。

1. javax.security.auth.callback.NameCallback オブジェクトを通してのユーザー名
2. javax.security.auth.callback.PasswordCallback オブジェクトを通してのパスワード

Tivoli Access Manager 資格情報が正常に取得されると、JAAS LoginModule によって Subject および PDPrincipal が作成されます。Tivoli Access Manager 認証用の組み込みは、PDLoginModule モジュールで使用されるだけなので、用意されていません。詳しくは、「IBM Tivoli Access Manager Authorization Java Classes デベロッパーズ・リファレンス」を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale へのセキュアな接続

eXtreme Scale クライアントをサーバーにセキュアに接続するには、ObjectGridManager インターフェースで、ClientSecurityConfiguration オブジェクトを使用する connect メソッドを使用します。以下に簡単な例を示します。

```
public ClientClusterContext connect(String catalogServerEndpoints,
   ClientSecurityConfiguration securityProps,
     URL overRideObjectGridXml) throws ConnectException;
```

このメソッドは、クライアント・セキュリティー構成を表すインターフェースである ClientSecurityConfiguration タイプのパラメーターを使用します。

com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfigurationFactory public API を使用して、このインターフェースのインスタンスをデフォルト値で作成するか、または WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロパティー・ファイルを渡してインスタンスを作成します。このファイルには、認証に関連した以下のプロパティーが含まれています。正符号 (+) でマークされた値はデフォルトです。

- `securityEnabled (true, false+):` このプロパティーは、セキュリティーが有効かどうかを示します。クライアントがサーバーに接続されている場合、クライアント・サイドとサーバー・サイドの securityEnabled 値は、両方とも `true` または `false` である必要があります。例えば、接続されるサーバーのセキュリティーが有効な場合、クライアントはこのプロパティーを true に設定してサーバーに接続する必要があります。
- authenticationRetryCount (an integer value, 0+): このプロパティーでは、資格情報の期限が切れている場合のログインの再試行回数を決定します。値が 0 の場合、再試行は行われません。認証再試行は、資格情報の期限が切れている場合にのみ適用されます。資格情報が無効な場合、再試行は行われません。操作の再試行は、ご使用のアプリケーションで対応する必要があります。

com.ibm.websphere.objectgrid.security.config.ClientSecurityConfiguration オブジェクトを作成した後、以下のメソッドを使用して、クライアントに credentialGenerator オブジェクトを設定します。

```
/**
* Set the {@link CredentialGenerator} object for this client.
* @param generator the CredentialGenerator object associated with this client
*/
void setCredentialGenerator(CredentialGenerator generator);
```

以下のように、WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロパティー・ファイルにも CredentialGenerator オブジェクトを設定できます。

- credentialGeneratorClass: CredentialGenerator オブジェクトのクラス実装名。デフォルトのコンストラクターを指定する必要があります。
- credentialGeneratorProps: CredentialGenerator クラスのプロパティー。この値がヌル以外の場合、このプロパティーは、setProperties(String) メソッドを使用して、構成済みの CredentialGenerator オブジェクトに設定されます。

以下に、ClientSecurityConfiguration のインスタンスを生成し、このインスタンスを使用してサーバーに接続する例を示します。

```
/**
* Get a secure ClientClusterContext
* @return a secure ClientClusterContext object
*/
protected ClientClusterContext connect() throws ConnectException {
ClientSecurityConfiguration csConfig = ClientSecurityConfigurationFactory
.getClientSecurityConfiguration("/properties/security.ogclient.props");

UserPasswordCredentialGenerator gen= new
UserPasswordCredentialGenerator("manager", "manager1");

csConfig.setCredentialGenerator(gen);

return objectGridManager.connect(csConfig, null);
}
```

接続が呼び出されると、WebSphere eXtreme Scale クライアントは、CredentialGenerator.getCredential メソッドを呼び出してクライアント資格情報を取得します。この資格情報は、接続要求とともにサーバーに送信されて、認証されます。

セッションごとに異なる CredentialGenerator インスタンスの使用

WebSphere eXtreme Scale クライアントは 1 つのクライアント ID を表す場合もあれば、複数の ID を表す場合もあります。以下に、複数の ID を表す場合の例を示します。この例では、WebSphere eXtreme Scale クライアントは、Web サーバーで作成され、共有されます。この Web サーバーのすべてのサーブレットで、この 1 つの WebSphere eXtreme Scale クライアントが使用されます。各サーブレットが異なる Web クライアントを表すため、WebSphere eXtreme Scale サーバーへ要求を送信するときは、異なる資格情報を使用します。

WebSphere eXtreme Scale は、セッション・レベルでの資格情報の変更に対応しています。各セッションでは、個別の CredentialGenerator オブジェクトを使用できます。したがって、前のシナリオは、サーブレットで個別の CredentialGenerator オブジェクトを使用してセッションを取得することにより実装されます。以下の例は、ObjectGridManager インターフェースの ObjectGrid.getSession(CredentialGenerator) メソッドを示しています。

```
/**
     * Get a session using a <code>CredentialGenerator</code>.
     * <p>
     * This method can only be called by the ObjectGrid client in an ObjectGrid
     * client server environment. If ObjectGrid is used in a local model, that is,
     * within the same JVM with no client or server existing, <code>getSession(Subject)</code>
     * or the <code>SubjectSource</code> plugin should be used to secure the ObjectGrid.
     *
     * <p>If the <code>initialize()</code> method has not been invoked prior to
     * the first <code>getSession</code> invocation, an implicit initialization
     * will occur.  This ensures that all of the configuration is complete
     * before any runtime usage is required.</p>
     *
     * @param credGen A <code>CredentialGenerator</code> for generating a credential
     *                for the session returned.
     *
     * @return An instance of <code>Session</code>
     *
     * @throws ObjectGridException if an error occurs during processing
     * @throws TransactionCallbackException if the <code>TransactionCallback</code>
     *         throws an exception
     * @throws IllegalStateException if this method is called after the
     *         <code>destroy()</code> method is called.
     *
     * @see #destroy()
     * @see #initialize()
     * @see CredentialGenerator
     * @see Session
     * @since WAS XD 6.0.1
 */
Session getSession(CredentialGenerator credGen) throws
ObjectGridException, TransactionCallbackException;
```

以下に例を示します。

```
ObjectGridManager ogManager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();

CredentialGenerator credGenManager = new UserPasswordCredentialGenerator("manager", "xxxxxx");
CredentialGenerator credGenEmployee = new UserPasswordCredentialGenerator("employee", "xxxxxx");

ObjectGrid og = ogManager.getObjectGrid(ctx, "accounting");

// Get a session with CredentialGenerator;
Session session = og.getSession(credGenManager );

// Get the employee map
ObjectMap om = session.getMap("employee");

// start a transaction.
session.begin();
```

```
Object rec1 = map.get("xxxxxx");

session.commit();

// Get another session with a different CredentialGenerator;
session = og.getSession(credGenEmployee );

// Get the employee map
om = session.getMap("employee");

// start a transaction.
session.begin();

Object rec2 = map.get("xxxxx");

session.commit();
```

ObjectGird.getSession メソッドを使用して Session オブジェクトを取得する場合、このセッションでは、ClientConfigurationSecurity オブジェクトに設定されている CredentialGenerator オブジェクトを使用します。ObjectGrid.getSession (CredentialGenerator) メソッドは、ClientSecurityConfiguration オブジェクトに設定されている CredentialGenerator をオーバーライドします。

Session オブジェクトを再使用できる場合は、パフォーマンスが向上します。ただし、ObjectGrid.getSession(CredentialGenerator) メソッドの呼び出しにかかるコストは、さほど高くありません。主なオーバーヘッドは、増加したオブジェクト・ガーベッジ・コレクション時間となります。Session オブジェクトの完了後には、必ず参照を解放してください。一般的に、Session オブジェクトで ID を共有できる場合は、Session オブジェクトを再使用してください。そうでない場合は、ObjectGrid.getSession(CredentialGenerator) メソッドを使用してください。

関連情報:

資格情報 API

クライアント許可プログラミング

Java

WebSphere eXtreme Scale は、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可をすぐに使用できるようサポートし、ObjectGridAuthorization インターフェースを使用するカスタム許可もサポートします。

ObjectGridAuthorization プラグインは、Subject オブジェクトで表されるプリンシパルに対して ObjectGrid、ObjectMap、および JavaMap の各アクセスを独自の方法で許可する場合に使用します。このプラグインの通常の実装の目的は、Subject オブジェクトからプリンシパルを取得し、このプリンシパルに指定の許可が付与されているかどうかを確認することです。

checkPermission(Subject, Permission) メソッドに渡される許可は、以下の許可のいずれかです。

- MapPermission
- ObjectGridPermission
- ServerMapPermission
- AgentPermission

詳しくは、ObjectGridAuthorization API 資料を参照してください。

MapPermission

com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission パブリック・クラスは ObjectGrid リソース、特に ObjectMap または JavaMap インターフェースのメソッドへの許可を表します。 WebSphere eXtreme Scale は、ObjectMap および JavaMap のメソッドにアクセスするための以下の許可ストリングを定義します。

- **read:** マップからデータを読み取る許可。整数定数は `MapPermission.READ` として定義されます。
- **write:** マップのデータを更新する許可。整数定数は `MapPermission.WRITE` として定義されます。
- **insert:** マップにデータを挿入する許可。整数定数は `MapPermission.INSERT` として定義されます。
- **remove:** マップからデータを読み取る許可。整数定数は `MapPermission.REMOVE` として定義されます。
- **invalidate:** マップのデータを無効にする許可。整数定数は `MapPermission.INVALIDATE` として定義されます。
- **all:** 上記すべての許可(read、write、insert、remote、invalidate)。整数定数は `MapPermission.ALL` として定義されます。

詳しくは、MapPermission API 資料を参照してください。

([ObjectGrid_name].[ObjectMap_name]) というフォーマットの完全修飾 ObjectGrid マップ名、および許可ストリングまたは整数値を渡すことによって、MapPermission オブジェクトを構成できます。許可ストリングは、上記の許可ストリングで構成されるコンマ区切りストリングにしたり (read, insert など)、または all にしたりできます。許可整数値は、上記のすべての許可整数定数いずれにも、または MapPermission.READ|MapPermission.WRITE など、いくつかの整数許可定数の数値にすることができます。

ObjectMap または JavaMap メソッドが呼び出されると、許可が実行されます。ランタイムはさまざまなメソッドに対するさまざまな許可を検査します。必要な許可がクライアントに与えられていない場合は、AccessControlException が発生します。

表 30. メソッドと必要な MapPermission のリスト

許可	ObjectMap/JavaMap
read	Boolean containsKey(Object)
	Boolean equals(Object)
	Object get(Object)
	Object get(Object, Serializable)
	List getAll(List)
	List getAll(List keyList, Serializable)
	List getAllForUpdate(List)
	List getAllForUpdate(List, Serializable)
	Object getForUpdate(Object)
	Object getForUpdate(Object, Serializable)
	public Object getNextKey(long)

表 30. メソッドと必要な MapPermission のリスト (続き)

許可	ObjectMap/JavaMap
write	Object put(Object key, Object value)
	void put(Object, Object, Serializable)
	void putAll(Map)
	void putAll(Map, Serializable)
	void update(Object, Object)
	void update(Object, Object, Serializable)
insert	public void insert (Object, Object)
	void insert(Object, Object, Serializable)
remove	Object remove (Object)
	void removeAll(Collection)
	void clear()
invalidate	public void invalidate (Object, Boolean)
	void invalidateAll(Collection, Boolean)
	void invalidateUsingKeyword(Serializable)
	int setTimeToLive(int)

許可の基になるのは、使用するメソッドのみであり、メソッドが実際に行う機能ではありません。例えば、put メソッドでは、レコードの有無に基づいて、レコードを挿入または更新できます。ただし、挿入と更新の事例の区別はされません。

注: 8.6+ setPutMode(PutMode.UPSERT) メソッドは、ObjectMap および JavaMap の put() および putAll() メソッドのデフォルト振る舞いを、ObjectMap.upsert() および upsertAll() メソッドと同様に振る舞うように変更するために追加されます。

PutMode.UPSERT メソッドが setPutMode(PutMode.INSERTUPDATE) メソッドに取って代わります。データ・グリッド内のエントリーがキーと値をグリッドに挿入する必要があることを BackingMap とローダーに知らせるには、PutMode.UPSERT メソッドを使用します。 BackingMap とローダーは、insert または update のいずれかを行って値をグリッドとローダーに挿入します。アプリケーション内で upsert API を実行すると、ローダーは UPSERT LogElement タイプを取得します。これにより、ローダーは、insert や update を使用する代わりにデータベースの merge 呼び出し または upsert 呼び出しを行うことができます。

ある種類の操作を組み合わせて、別の種類の操作を実現することもできます。例えば、更新は、除去と挿入によって達成することができます。許可ポリシーを設計する場合は、これらの組み合わせを考慮に入れてください。

ObjectGridPermission

com.ibm.websphere.objectgrid.security.ObjectGridPermission は、ObjectGrid への許可を表します。

- Query: オブジェクト照会またはエンティティー照会を作成する許可。整数定数は ObjectGridPermission.QUERY として定義されます。

- Dynamic map: マップ・テンプレートに基づいて動的マップを作成する許可。整数定数は ObjectGridPermission.DYNAMIC_MAP として定義されます。

詳しくは、ObjectGridPermission API 資料を参照してください。

以下の表は、メソッドと必要な ObjectGridPermission のリストです。

表 31. メソッドと必要な ObjectGridPermission のリスト

許可アクション	方式
query	com.ibm.websphere.objectgrid.Session.createObjectQuery(String)
query	com.ibm.websphere.objectgrid.em.EntityManager.createQuery(String)
dynamicmap	com.ibm.websphere.objectgrid.Session.getMap(String)

ServerMapPermission

ServerMapPermission は、サーバーでホストされる ObjectMap への許可を表します。許可の名前は ObjectGrid マップ名のフルネームです。以下の 2 つのアクションを備えています。

- **replicate**: ニア・キャッシュにサーバー・マップを複製するための許可
- **dynamicIndex**: クライアントがサーバーの動的索引を作成または削除するための許可

詳しくは、ServerMapPermission API 資料を参照してください。以下の表に、さまざまな ServerMapPermission を必要とするメソッドを示します。

表 32. サーバーでホストされる ObjectMap への許可

許可アクション	方式
replicate	com.ibm.websphere.objectgrid.ClientReplicableMap.enableClientReplication(Mode, int[], ReplicationMapListener)
dynamicIndex	com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap.createDynamicIndex(String, Boolean, String, DynamicIndexCallback)
dynamicIndex	com.ibm.websphere.objectgrid.BackingMap.removeDynamicIndex(String)

AgentPermission

AgentPermission は、datagrid エージェントに対する許可を表します。許可の名前は、ObjectGrid マップのフルネームで、アクションの名前は、エージェント実装クラス名またはパッケージ名をコンマで区切ったストリングです。

詳しくは、AgentPermission API 資料を参照してください。

クラス com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.AgentManager の以下のメソッドには、AgentPermission が必要です。

```
com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.AgentManager#callMapAgent(MapGridAgent, Collection)
com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.AgentManager#callMapAgent(MapGridAgent)
com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.AgentManager#callReduceAgent(ReduceGridAgent, Collection)
com.ibm.websphere.objectgrid.datagrid.AgentManager#callReduceAgent(ReduceGridAgent, Collection)
```

許可メカニズム

WebSphere eXtreme Scale は、2 種類の許可メカニズム、Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可とカスタム許可をサポートしています。これらのメカニズムは、すべての許可に適用されます。JAAS 許可は、ユーザー中心のアクセス制御により Java セ

キュリティー・ポリシーを拡張します。許可の付与は、実行されているコードだけではなく、コードの実行者に基づいて行うこともできます。JAAS 許可は、SDK バージョン 5 以降に付属しています。

さらに、WebSphere eXtreme Scale では、以下のプラグインによってカスタム許可もサポートしています。

- ObjectGridAuthorization: すべての成果物へのアクセスの許可方法をカスタマイズします。

JAAS 許可を使用したくない場合は、独自の許可メカニズムを実装できます。カスタム許可メカニズムでは、ポリシー・データベース、ポリシー・サーバー、または Tivoli Access Manager を使用して、許可を管理できます。

許可メカニズムを構成するには、以下の 2 とおりの方法があります。

- XML 構成

  ObjectGrid XML ファイルを使用して ObjectGrid を定義し、許可メカニズムを AUTHORIZATION_MECHANISM_JAAS または AUTHORIZATION_MECHANISM_CUSTOM のいずれかに設定します。以下は、エンタープライズ・アプリケーション ObjectGridSample で使用している secure-objectgrid-definition.xml ファイルです。

```
<objectGrids>
 <objectGrid name="secureClusterObjectGrid" securityEnabled="true"
  authorizationMechanism="AUTHORIZATION_MECHANISM_JAAS">
  <bean id="TransactionCallback"
classname="com.ibm.websphere.samples.objectgrid.HeapTransactionCallback" />
...
</objectGrids>
```

- プログラマチック構成

  メソッド ObjectGrid.setAuthorizationMechanism(int) を使用して ObjectGrid を作成する場合、以下のメソッドを呼び出して許可メカニズムを設定できます。このメソッドの呼び出しは、直接 ObjectGrid インスタンスを生成する場合のローカル WebSphere eXtreme Scale プログラミング・モデルにのみ適用されます。

```
/**
 * Set the authorization Mechanism. The default is
 * com.ibm.websphere.objectgrid.security.SecurityConstants.
 * AUTHORIZATION_MECHANISM_JAAS.
 * @param authMechanism the map authorization mechanism
*/
void setAuthorizationMechanism(int authMechanism);
```

JAAS 許可

javax.security.auth.Subject オブジェクトは、認証済みユーザーを表します。 Subject は、プリンシパルのセットから構成され、各プリンシパルはそのユーザーの ID を表します。例えば、Subject には、名前のプリンシパル (Joe Smith など) とグループのプリンシパル (manager など) を持たせることができます。

JAAS 許可ポリシーを使用すると、許可を特定のプリンシパルに付与することができます。WebSphere eXtreme Scale は、Subject と現行のアクセス制御コンテキストを関連付けます。 ObjectMap または JavaMap メソッドに対する各呼び出しごとに、Java ランタイムによって自動的に、ポリシーが特定のプリンシパルのみに必要

な許可を付与しているかどうかが判断されます。付与している場合、アクセス制御コンテキストに関連付けられた Subject に、指定されたプリンシパルが含まれているときにのみ操作が許可されます。

ポリシー・ファイルのポリシー構文について理解している必要があります。JAAS 許可について詳しくは、「JAAS Reference Guide」を参照してください。

WebSphere eXtreme Scale には、ObjectMap および JavaMap メソッドの呼び出しに対する JAAS 許可の検査に使用される特別なコードベースがあります。この特別なコードベースは、`http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction` です。プリンシパルに ObjectMap または JavaMap 許可を与える場合は、このコード・ベースを使用します。この特別なコードは、eXtreme Scale の Java アーカイブ (JAR) ファイルにすべての許可が与えられるため、作成されました。

MapPermission 許可を付与するためのポリシーのテンプレートは、以下のとおりです。

```
grant codeBase "http://www.ibm.com/com/ibm/ws/objectgrid/security/PrivilegedAction"
   <Principal field(s)>{
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission
               "[ObjectGrid_name].[ObjectMap_name]", "action";
    ....
    permission com.ibm.websphere.objectgrid.security.MapPermission
               "[ObjectGrid_name].[ObjectMap_name]", "action";
  };
```

Principal フィールドの例は、以下のとおりです。

```
principal Principal_class "principal_name"
```

このポリシーでは、特定のプリンシパルに、これらの 4 つのマップに対する insert 許可および read 許可のみが付与されます。他のポリシー・ファイル `fullAccessAuth.policy` では、プリンシパルに、これらのマップに対するすべての許可が付与されます。アプリケーションを実行する前に、principal_name とプリンシパル・クラスを適切な値に変更してください。 principal_name の値は、ユーザー・レジストリーに応じて異なります。例えば、ローカル OS をユーザー・レジストリーとして使用する場合は、マシン名は MACH1、ユーザー ID は user1、principal_name は `MACH1/user1` になります。

JAAS 許可ポリシーは、Java ポリシー・ファイルに直接入れることができます。または、別の JAAS 許可ファイルに入れてから、以下の 2 つのうちいずれかの方法で設定することができます。

- 次の JVM 引数を使用する。

  ```
  -Djava.security.policy=file:[JAAS_AUTH_POLICY_FILE]
  ```

- java.security ファイル内の以下のプロパティーを使用する。

  ```
  -Dauth.policy.url.x=file:[JAAS_AUTH_POLICY_FILE]
  ```

カスタム ObjectGrid 許可

ObjectGridAuthorization プラグインは、Subject オブジェクトで表されるプリンシパルに対して ObjectGrid、ObjectMap、および JavaMap の各アクセスを独自の方法で

許可する場合に使用します。このプラグインの通常の実装の目的は、Subject オブジェクトからプリンシパルを取得し、このプリンシパルに指定の許可が付与されているかどうかを確認することです。

checkPermission(Subject, Permission) メソッドに渡される許可は、以下のいずれかです。

- MapPermission
- ObjectGridPermission
- AgentPermission
- ServerMapPermission

詳しくは、ObjectGridAuthorization API 資料を参照してください。

ObjectGridAuthorization プラグインは、以下の方法で構成することができます。

- XML 構成

  ObjectGrid XML ファイルを使用して、ObjectAuthorization プラグインを定義できます。以下に例を示します。

```
<objectGrids>
 <objectGrid name="secureClusterObjectGrid" securityEnabled="true"
  authorizationMechanism="AUTHORIZATION_MECHANISM_CUSTOM">
...
  <bean id="ObjectGridAuthorization"
className="com.acme.ObjectGridAuthorizationImpl" />
</objectGrids>
```

- プログラマチック構成

  API メソッド ObjectGrid.setObjectGridAuthorization(ObjectGridAuthorization) を使用して ObjectGrid を作成する場合、以下のメソッドを呼び出して許可プラグインを設定できます。このメソッドは、直接 ObjectGrid インスタンスを生成するときに、ローカル eXtreme Scale プログラミング・モデルにのみ適用されます。

```
/**
     * Sets the <code>ObjectGridAuthorization</code> for this ObjectGrid instance.
     * <p>
     * Passing <code>null</code> to this method removes a previously set
     * <code>ObjectGridAuthorization</code> object from an earlier invocation of this method
     * and indicates that this <code>ObjectGrid</code> is not associated with a
     * <code>ObjectGridAuthorization</code> object.
     * <p>
     * This method should only be used when ObjectGrid security is enabled. If
     * the ObjectGrid security is disabled, the provided <code>ObjectGridAuthorization</code> object
     * will not be used.
     * <p>
     * A <code>ObjectGridAuthorization</code> plug-in can be used to authorize
     * access to the ObjectGrid and maps. Please refer to <code>ObjectGridAuthorization</code> for more details.
     *
     * <p>
     * As of XD 6.1, the <code>setMapAuthorization</code> is deprecated and
     * <code>setObjectGridAuthorization</code> is recommended for use. However,
     * if both <code>MapAuthorization</code> plug-in and <code>ObjectGridAuthorization</code> plug-in
     * are used, ObjectGrid will use the provided <code>MapAuthorization</code> to authorize map accesses,
     * even though it is deprecated.
     * <p>
     * Note, to avoid an <code>IllegalStateException</code>, this method must be
     * called prior to the <code>initialize()</code> method.  Also, keep in mind
     * that the <code>getSession</code> methods implicitly call the
     * <code>initialize()</code> method if it has yet to be called by the
     * application.
     *
     * @param ogAuthorization the <code>ObjectGridAuthorization</code> plug-in
     *
     * @throws IllegalStateException if this method is called after the
     *         <code>initialize()</code> method is called.
     *
     * @see #initialize()
     * @see ObjectGridAuthorization
```

```
     * @since WAS XD 6.1
     */
    void setObjectGridAuthorization(ObjectGridAuthorization ogAuthorization);
```

ObjectGridAuthorization の実装

ObjectGridAuthorization インターフェースの Boolean checkPermission(Subject subject, Permission permission) メソッドが WebSphere eXtreme Scale ランタイムによって呼び出されて、渡された Subject オブジェクトに、渡された許可があるかどうかが検査されます。オブジェクトに許可がある場合は、ObjectGridAuthorization インターフェースの実装によって true が返され、許可がない場合は false が返されます。

このプラグインの通常の実装は、Subject オブジェクトからプリンシパルを検索し、指定された許可が特定のポリシーを参照してプリンシパルに与えられているかどうかを確認することです。これらのポリシーは、ユーザーが定義します。例えば、ポリシーはデータベース、プレーン・ファイル、または Tivoli Access Manager で定義できます。

例えば、Tivoli Access Manager ポリシー・サーバーを使用して許可ポリシーを管理し、その API を使用してアクセスを許可できます。 Tivoli Access Manager Authorization API の使用方法について詳しくは、「IBM Tivoli Access Manager Authorization Java Classes デベロッパーズ・リファレンス」を参照してください。

このサンプル実装では、以下を想定します。

- MapPermission に対する許可のみを検査します。他の許可については常に `true` を戻します。
- Subject オブジェクトには、com.tivoli.mts.PDPrincipal プリンシパルが含まれます。
- Tivoli Access Manager ポリシー・サーバーには、ObjectMap または JavaMap 名オブジェクトの以下の許可を定義しました。このポリシー・サーバーに定義されるオブジェクトの名前は、[ObjectGrid_name].[ObjectMap_name] 形式で、ObjectMap または JavaMap 名と同じにする必要があります。許可は、MapPermission 許可で定義される許可ストリングの先頭文字です。例えば、ポリシー・サーバーで定義される許可「r」は、ObjectMap マップに対する read 許可を表します。

以下は、checkPermission メソッドの実装方法を示したコード・スニペットです。

```
/**
* @see com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.
*   MapAuthorization#checkPermission
* (javax.security.auth.Subject, com.ibm.websphere.objectgrid.security.
*   MapPermission)
*/
public boolean checkPermission(final Subject subject,
 Permission p) {

  // For non-MapPermission, we always authorize.
  if (!(p instanceof MapPermission)){
    return true;
  }

  MapPermission permission = (MapPermission) p;

  String[] str = permission.getParsedNames();
```

```
  StringBuffer pdPermissionStr = new StringBuffer(5);
  for (int i=0; i<str.length; i++) {
    pdPermissionStr.append(str[i].substring(0,1));
  }

  PDPermission pdPerm = new PDPermission(permission.getName(),
  pdPermissionStr.toString());

  Set principals = subject.getPrincipals();

  Iterator iter= principals.iterator();
  while(iter.hasNext()) {
    try {
      PDPrincipal principal = (PDPrincipal) iter.next();
      if (principal.implies(pdPerm)) {
        return true;
      }
    }
    catch (ClassCastException cce) {
      // Handle exception
    }
  }
  return false;
}
```

関連情報:

72 ページの『モジュール 4: WebSphere Application Server での Java 認証・承認サービス (JAAS) 許可の使用』
クライアントの認証を構成したので、さまざまな許可を異なるユーザーに与えるために、さらに認証を構成することができます。例えば、オペレーター・ユーザーはデータ表示のみが可能である一方で、アドミニストレーター・ユーザーはすべての操作が実行可能であるなどです。

データ・グリッドの認証

Java

セキュア・トークン・マネージャー・プラグインを使用すると、サーバー間の認証が可能になります。そのためには、SecureTokenManager インターフェースを実装する必要があります。

generateToken(Object) メソッドは保護されるオブジェクトを取得し、外部に識別されないトークンを生成します。verifyTokens(byte[]) メソッドは逆に、トークンを元のオブジェクトに変換して戻します。

単純な SecureTokenManager 実装は XOR アルゴリズムなど単純なエンコード・アルゴリズムを使用して、オブジェクトをシリアライズ済みフォームでエンコードし、対応するデコード・アルゴリズムを使用してトークンをデコードします。この実装は保護されていないため、簡単に中断されます。

WebSphere eXtreme Scale デフォルト実装

WebSphere eXtreme Scale には、このインターフェース用のすぐに使用可能な実装が用意されています。このデフォルト実装は、鍵ペアを使用して署名し、署名を検査します。また、秘密鍵を使用してコンテンツを暗号化します。すべてのサーバーには JCKES タイプの鍵ストアが備えられており、鍵ペア、秘密鍵と公開鍵、および秘密鍵が保管されています。鍵ストアは、秘密鍵を保管する JCKES タイプである

必要があります。これらの鍵は、送信側で秘密ストリングを暗号化し、署名または検証する場合に使用されます。また、トークンは有効期限の時間に関連付けられています。受信側で、データの検証、暗号化解除、および受信側の秘密ストリングとの比較が行われます。サーバーのペアの間での認証には、Secure Sockets Layer (SSL) 通信プロトコルは必要ありません。これは、秘密鍵と公開鍵の目的が同じであるためです。ただし、サーバー通信が暗号化されていない場合は、通信時に侵入者にデータを盗まれる可能性があります。トークンの有効期限が近いため、リプレイ・アタックの危険性は少なくなっています。この可能性は、すべてのサーバーをファイアウォールの後ろにデプロイすると、非常に小さくなります。

この方法の欠点は、WebSphere eXtreme Scale 管理者が鍵を生成し、生成した鍵をすべてのサーバーにトランスポートする必要があるため、トランスポート中にセキュリティー・ブリーチ (抜け穴) が発生する可能性があることです。

関連タスク:

8.6+ 850 ページの『eXtreme Scale カタログおよびコンテナー・サーバーでの LDAP 認証の使用可能化』
WebSphere eXtreme Scale サーバーおよびカタログ・サーバーで、認証に使用される Java Authentication and Authorization Service (JAAS) ポリシー・ファイルを使用して、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用可能にします。

840 ページの『クライアントの認証と許可』
セキュリティーおよび資格情報認証を使用可能にして、クライアントを認証することができます。さらに、管理クライアントにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。

841 ページの『アプリケーション・クライアントの認証』
アプリケーション・クライアントの認証は、クライアント/サーバー・セキュリティーおよびクレデンシャル認証の使用可能化と、オーセンティケーターおよびシステム・クレデンシャル生成プログラムの構成からなります。

844 ページの『アプリケーション・クライアントの許可』
アプリケーション・クライアントの許可は、ObjectGrid 許可クラス、許可メカニズム、許可検査期間、および作成者限定アクセス許可から構成されます。

8.6+ 848 ページの『管理クライアントへの権限の付与』
管理セキュリティーによって、ユーザーにデータ・グリッドへのアクセス権限を付与することができます。ご使用の WebSphere eXtreme Scale インストール環境およびアクセス権限を付与したいユーザーに応じて、一定の条件が必要です。

関連資料:

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

Class ClientSecurityConfigurationFactory

ローカル・セキュリティー・プログラミング

Java

WebSphere eXtreme Scale によりいくつかのセキュリティー・エンドポイントが提供され、カスタム・メカニズムを統合できるようになります。 ローカル・プログラミング・モデルにおける主なセキュリティー機能は許可で、認証サポートはありませ

ん。WebSphere Application Server の外側で認証を行う必要があります。ただし、Subject オブジェクトを取得および検証するプラグインは備えられています。

認証

ローカル・プログラミング・モデルでは、eXtreme Scale は認証メカニズムを提供しておらず、認証に関して、アプリケーション・サーバーまたはアプリケーションのいずれかの環境に依存しています。 eXtreme Scale が WebSphere Application Server または WebSphere Extended Deployment で使用される場合、アプリケーションは WebSphere Application Server セキュリティー認証メカニズムを使用できます。eXtreme Scale が Java 2 Platform, Standard Edition (J2SE) 環境で稼働している場合、アプリケーションが Java 認証および承認サービス (JAAS) 認証またはその他の認証メカニズムを使用して認証を管理する必要があります。 JAAS 認証の使用方法については、「JAAS リファレンス・ガイド」を参照してください。アプリケーションと ObjectGrid インスタンスの契約には、javax.security.auth.Subject オブジェクトを使用します。クライアントがアプリケーション・サーバーまたはアプリケーションによって認証されると、アプリケーションは認証された javax.security.auth.Subject オブジェクトを検索し、この Subject オブジェクトを使用して ObjectGrid.getSession(Subject) メソッドを呼び出すことによって、ObjectGrid インスタンスからセッションを取得できます。この Subject オブジェクトを使用して、マップ・データへのアクセスを許可します。この契約は、サブジェクト引き渡し機構と呼ばれます。以下の例に、ObjectGrid.getSession(Subject) API を示します。

```
/**
 * This API allows the cache to use a specific subject rather than the one
 * configured on the ObjectGrid to get a session.
 * @param subject
 * @return An instance of Session
 * @throws ObjectGridException
 * @throws TransactionCallbackException
 * @throws InvalidSubjectException the subject passed in is not valid based
 * on the SubjectValidation mechanism.
 */
public Session getSession(Subject subject)
throws ObjectGridException, TransactionCallbackException, InvalidSubjectException;
```

ObjectGrid インターフェースの ObjectGrid.getSession() メソッドは、Session オブジェクトを取得するのに使用することもできます。

```
/**
 * This method returns a Session object that can be used by a single thread at a time.
 * You cannot share this Session object between threads without placing a
 * critical section around it. While the core framework allows the object to move
 * between threads, the TransactionCallback and Loader might prevent this usage,
 * especially in J2EE environments. When security is enabled, this method uses the
 * SubjectSource to get a Subject object.
 *
 * If the initialize method has not been invoked prior to the first
 * getSession invocation, then an implicit initialization occurs.  This
 * initialization ensures that all of the configuration is complete before
 * any runtime usage is required.
 *
 * @see #initialize()
 * @return An instance of Session
 * @throws ObjectGridException
 * @throws TransactionCallbackException
 * @throws IllegalStateException if this method is called after the
 *         destroy() method is called.
 */
public Session getSession()
throws ObjectGridException, TransactionCallbackException;
```

API 資料で指定されているように、セキュリティーが有効になると、このメソッドは SubjectSource プラグインを使用して Subject オブジェクトを取得します。SubjectSource プラグインは、Subject オブジェクトの伝搬をサポートするために eXtreme Scale で定義されるセキュリティー・プラグインの 1 つです。詳細情報については、『セキュリティー関連プラグイン』を参照してください。getSession(Subject) メソッドは、ローカル ObjectGrid インスタンスでのみ呼び出すことができます。分散 eXtreme Scale 構成のクライアント・サイドで getSession(Subject) メソッドを呼び出すと、IllegalStateException が発生します。

セキュリティー・プラグイン

WebSphere eXtreme Scale は、サブジェクト引き渡し機構に関連する 2 つのセキュリティー・プラグイン、SubjectSource プラグインと SubjectValidation プラグインを提供します。

SubjectSource プラグイン

SubjectSource プラグインは、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.SubjectSource インターフェースによって表され、 eXtreme Scale を実行している環境から Subject オブジェクトを取得するために使用されます。この環境は、ObjectGrid を使用するアプリケーションや、アプリケーションをホストするアプリケーション・サーバーなどです。サブジェクト引き渡し機構の代わりとなる SubjectSource プラグインについて考えます。サブジェクト引き渡し機構を使用すると、アプリケーションは Subject オブジェクトを検索し、それを使用して ObjectGrid セッション・オブジェクトを取得します。SubjectSource プラグインを使用すると、eXtreme Scale ランタイムは Subject オブジェクトを検索し、それを使用してセッション・オブジェクトを取得します。サブジェクト引き渡し機構は、アプリケーションに Subject オブジェクトの制御を与え、 SubjectSource プラグイン機構は Subject オブジェクトの検索からアプリケーションを解放します。 SubjectSource プラグインを使用すると、許可に使用できる eXtreme Scale クライアントを表す Subject オブジェクトを取得できます。ObjectGrid.getSession メソッドが呼び出されると、Subject getSubject は、セキュリティーが有効な場合に、ObjectGridSecurityException をスローします。 WebSphere eXtreme Scale により、このプラグインのデフォルトの実装である com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSSubjectSourceImpl が提供されます。 この実装を使用すると、アプリケーションが WebSphere Application Server で稼働している場合に、スレッドから呼び出し元サブジェクトまたは RunAs サブジェクトを検索することができます。 WebSphere Application Server で eXtreme Scale を使用している場合は、このクラスを ObjectGrid 記述子 XML ファイル内で SubjectSource 実装クラスとして構成することができます。以下に、WSSubjectSourceImpl.getSubject メソッドの主なフローを示すコード・スニペットを示します。

```
Subject s = null;
try {
  if (finalType == RUN_AS_SUBJECT) {
    // get the RunAs subject
    s = com.ibm.websphere.security.auth.WSSubject.getRunAsSubject();
  }
  else if (finalType == CALLER_SUBJECT) {
    // get the callersubject
    s = com.ibm.websphere.security.auth.WSSubject.getCallerSubject();
  }
```

```
}
catch (WSSecurityException wse) {
  throw new ObjectGridSecurityException(wse);
}

return s;
```

その他の詳細については、SubjectSource プラグインおよび WSSubjectSourceImpl 実装に関する API 資料を参照してください。

SubjectValidation プラグイン

com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.SubjectValidation インターフェースで表される SubjectValidation プラグインは、別のセキュリティー・プラグインです。SubjectValidation プラグインを使用すると、ObjectGrid に渡されるか、または SubjectSource プラグインによって検索される javax.security.auth.Subject が、改ざんされていない有効な Subject であることを検証できます。

SubjectValidation インターフェースの SubjectValidation.validateSubject(Subject) メソッドにより、Subject オブジェクトが取得されて返されます。Subject オブジェクトが有効とみなされるかどうか、および戻される Subject オブジェクトは、すべて実装によって決定されます。 Subject オブジェクトが無効の場合は、InvalidSubjectException になります。

このプラグインは、このメソッドに渡される Subject オブジェクトを信頼できない場合に使用できます。 Subject オブジェクトを検索するコードを作成するアプリケーション開発者は信頼できると考えられるためこれは稀なケースです。

Subject オブジェクトが改ざんされたかどうかは作成者のみが知っているため、このプラグインの実装は、Subject オブジェクト作成者からのサポートが必要です。ただし、サブジェクトの作成者が、Subject が改ざんされたかどうかを関知していない場合もあります。その場合、このプラグインの使用はお勧めできません。

WebSphere eXtreme Scale は、SubjectValidation のデフォルトの実装、com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.WSSubjectValidationImpl を提供します。この実装を使用して、WebSphere Application Server で認証済みのサブジェクトの妥当性検査を行うことができます。WebSphere Application Server で eXtreme Scale を使用している場合は、このクラスを SubjectValidation 実装クラスとして構成することができます。 WSSubjectValidationImpl 実装は、この Subject オブジェクトに関連付けられている資格情報トークンが改ざんされていない場合にのみ、この Subject オブジェクトを有効であるとみなします。 Subject オブジェクトの他のパーツを変更できます。 WSSubjectValidationImpl 実装は、WebSphere Application Server に資格情報トークンに一致するオリジナルの Subject を依頼し、そのオリジナルの Subject オブジェクトを検証済みの Subject オブジェクトとして戻します。このため、資格情報トークン以外の Subject コンテンツに加えられた変更は、無効になります。以下のコード・スニペットは、WSSubjectValidationImpl.validateSubject(Subject) の基本フローを示します。

```
// Create a LoginContext with scheme WSLogin and
// pass a Callback handler.
LoginContext lc = new LoginContext("WSLogin",
new WSCredTokenCallbackHandlerImpl(subject));

// When this method is called, the callback handler methods
```

```
// will be called to log the user in.
lc.login();

// Get the subject from the LoginContext
return lc.getSubject();
```

このコード・スニペットでは、資格情報トークンのコールバック・ハンドラー・オブジェクトである WSCredTokenCallbackHandlerImpl は、検証対象である Subject オブジェクトとともに作成されます。次に、LoginContext オブジェクトがログイン・スキーム WSLogin とともに作成されます。 lc.login メソッドが呼び出されると、WebSphere Application Server セキュリティーは Subject オブジェクトから資格情報トークンを検索し、その後、検証済みの Subject オブジェクトとして対応する Subject を戻します。

その他の詳細については、SubjectValidation および WSSubjectValidationImpl 実装の Java API を参照してください。

プラグイン構成

SubjectValidation プラグインおよび SubjectSource プラグインは、以下の 2 つの方法で構成できます。

- **XML 構成** ObjectGrid XML ファイルを使用して ObjectGrid を定義し、これら 2 つのプラグインを設定します。以下に例を示します。この例では、WSSubjectSourceImpl クラスが SubjectSource プラグインとして構成され、WSSubjectValidation クラスが SubjectValidation プラグインとして構成されます。

```
<objectGrids>
 <objectGrid name="secureClusterObjectGrid" securityEnabled="true"
  authorizationMechanism="AUTHORIZATION_MECHANISM_JAAS">
        <bean id="SubjectSource"
className="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.
 WSSubjectSourceImpl" />
    <bean id="SubjectValidation"
 className="com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins.
 WSSubjectValidationImpl" />
    <bean id="TransactionCallback"
className="com.ibm.websphere.samples.objectgrid.
 HeapTransactionCallback" />
...
</objectGrids>
```

- **プログラミング** API を通して ObjectGrid を作成する場合は、以下のメソッドを呼び出して、SubjectSource または SubjectValidation プラグインを設定できます。

```
**
* Set the SubjectValidation plug-in for this ObjectGrid instance. A
* SubjectValidation plug-in can be used to validate the Subject object
* passed in as a valid Subject. Refer to {@link SubjectValidation}
* for more details.
* @param subjectValidation the SubjectValidation plug-in
*/
void setSubjectValidation(SubjectValidation subjectValidation);


/**
* Set the SubjectSource plug-in. A SubjectSource plug-in can be used
* to get a Subject object from the environment to represent the
* ObjectGrid client.
*
```

```
 * @param source the SubjectSource plug-in
 */
 void setSubjectSource(SubjectSource source);
```

独自の JAAS 認証コードを作成

独自の Java 認証および承認サービス (JAAS) 認証コードを作成して、認証を処理できます。独自のログイン・モジュールを作成し、認証モジュール用のログイン・モジュールを構成する必要があります。

ログイン・モジュールは、ユーザーに関する情報を受け取り、ユーザーを認証します。この情報は、ユーザーの識別に使用可能な何らかのものです。例えば、情報はユーザー ID およびパスワード、クライアント証明書などです。情報を受け取ると、ログイン・モジュールにより情報が有効なサブジェクトを表示していることが検証され、次に Subject オブジェクトが作成されます。現在、ログイン・モジュールのいくつかの使用可能な実装が公開されています。

ログイン・モジュールの作成後、このログイン・モジュールをランタイムが使用できるように構成します。JAAS ログイン・モジュールを構成する必要があります。このログイン・モジュールには、ログイン・モジュールおよびその認証スキームが含まれています。例:

```
FileLogin
{
    com.acme.auth.FileLoginModule required
};
```

認証スキームは FileLogin であり、ログイン・モジュールは com.acme.auth.FileLoginModule です。必須のトークンは、FileLoginModule モジュールがこのログインを検証する必要があることを示すか、またはスキーム全体が失敗したことを示します。

JAAS ログイン・モジュール構成ファイルの設定は、以下のいずれか 1 つの方法で実行できます。

- JAAS ログイン・モジュール構成ファイルを、以下の例のように、java.security ファイルの login.config.url プロパティーに設定します。

  ```
  login.config.url.1=file:${java.home}/lib/security/file.login
  ```

- **-Djava.security.auth.login.config** Java 仮想マシン (JVM) 引数を使用して、以下のように、コマンド行から JAAS ログイン・モジュール構成ファイルを設定します。 `-Djava.security.auth.login.config ==$JAVA_HOME/lib/security/file.login`

詳しくは、 25 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 2』を参照してください。詳しくは、 25 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 2』を参照してください。

コードが WebSphere Application Server 上で実行されている場合、管理コンソールで JAAS ログインを構成し、このログイン構成をアプリケーション・サーバー構成に格納する必要があります。詳細については、『Java 認証および承認サービスのログイン構成』を参照してください。

.NET クライアント認証のプログラミング

.NET

.NET クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するには、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装する必要があります。これらのインターフェースでは、データ・グリッドに渡されてサーバー・サイドで解釈される資格情報オブジェクトが生成されます。サーバー・サイドで、対応するプラグインが資格情報オブジェクトを解釈します。

このタスクについて

認証を実行するには、.NET アプリケーションが以下のインターフェースを実装している必要があります。

- ICredential: Credential は、クライアント資格情報 (ユーザー ID とパスワードのペアなど) を表します。
- ICredentialGenerator: CredentialGenerator は、資格情報を生成するための資格情報ファクトリーを表します。

.NET クライアント・アプリケーションが認証を必要とするサーバーに接続すると、クライアントはクライアント資格情報を提供するように要求されます。クライアント資格情報は、ICredential インターフェースによって表されます。クライアント資格情報には、ユーザー名とパスワードのペア、Kerberos チケット、クライアント証明書、またはクライアントとサーバーが同意する任意の形式でのデータがあります。このインターフェースでは、equals(Object) メソッドおよび hashCode メソッドを定義します。 Credential オブジェクトをサーバー・サイドの鍵として使用することによって認証済み Subject オブジェクトがキャッシュされるため、この 2 つのメソッドは重要です。ICredentialGenerator インターフェースを使用して資格情報を生成することもできます。このインターフェースは、資格情報に有効期限がある場合に役立ちます。 Credential プロパティーを取得するごとに、新規資格情報が生成されます。

また、提供されている CredentialGenerator プラグインを使用して、`Client.Net.Properties` ファイルの **`Client.Net.Properties credentialGeneratorProps=`** 設定に基づいた資格情報を作成することもできます。資格情報プラグインを定義する追加設定は、**`credentialGeneratorAssembly`** および **`credentialGeneratorClass`** です。

手順

.NET クライアント・アプリケーションで、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装します。 以下の例を使用して、アプリケーションを開発できます。

- 766 ページの『例: .NET アプリケーション用のユーザー・パスワード資格情報の実装』
- 768 ページの『例: .NET アプリケーション用のユーザー資格情報生成プログラムの実装』

関連資料:

766 ページの『例: .NET アプリケーション用のユーザー・パスワード資格情報の実装』
この例を使用して、ICredential インターフェースの実装を独自に作成することができます。ユーザー・パスワードの資格情報では、ユーザー ID とパスワードを保管します。

768 ページの『例: .NET アプリケーション用のユーザー資格情報生成プログラムの実装』
この例を使用して、ICredentialGenerator インターフェースの実装を独自に作成することができます。このインターフェースはユーザー ID およびパスワードを受け取ります。 UserPasswordCredential オブジェクトには、読み取り専用の資格情報プロパティーから取得される、ユーザー ID およびパスワードが含まれています。

クライアント・プロパティー・ファイル
WebSphere eXtreme Scale クライアント・プロセスの要件に基づいて、プロパティー・ファイルを作成します。

関連情報:

ICredential インターフェース

ICredentialGenerator インターフェース

例: .NET アプリケーション用のユーザー・パスワード資格情報の実装

.NET

この例を使用して、ICredential インターフェースの実装を独自に作成することができます。ユーザー・パスワードの資格情報では、ユーザー ID とパスワードを保管します。

UserPasswordCredential.cs

```
// Module  :  UserPasswordCrediential.cs

using System;
using IBM.WebSphere.Caching.Security;

namespace com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins
{
    public class UserPasswordCredential : ICredential
    {
        private String ivUserName;

        private String ivPassword;

        /// <summary>
        ///Creates a UserPasswordCredential with the specified user name and
        /// password.
        ///
        /// ArgumentException if userName or password is null
        /// </summary>
        /// <param name="userName">the user name for this credential</param>
        /// <param name="password">the password for this credential</param>
        public UserPasswordCredential(String userName, String password)
        {
            if (userName == null || password == null) {
                throw new ArgumentException("User name and password cannot be null.");
            }
            this.ivUserName = userName;
            this.ivPassword = password;
        }
```

```
        /// <summary>Gets the user name for this credential.</summary>
        /// <returns>the user name argument that was passed to the constructor
        ///or the setUserName(String) method of this class </returns>
        public String GetUserName() {
            return ivUserName;
        }

        /// <summary>Sets the user name for this credential.
        ///ArgumentException if userName is null
        /// </summary>
        /// <param name="userName">userName the user name to set.</param>
        public void SetUserName(String userName) {
            if (userName == null) {
                throw new ArgumentException("User name cannot be null.");
            }
            this.ivUserName = userName;
        }

        /// <summary>Gets the password for this credential.
        /// </summary>
        /// <returns>the password argument that was passed to the constructor or the setPassword(String) method of this class</returns>
        public String GetPassword() {
            return ivPassword;
        }

        /// <summary>Sets the password for this credential.
        ///ArgumentException if password is null
        /// </summary>
        /// <param name="password">the password to set.</param>
        public void SetPassword(String password) {
            if (password == null)
            {
                throw new ArgumentException("Password cannot be null.");
            }
            this.ivPassword = password;
        }

        /// <summary>Checks two UserPasswordCredential objects for equality.
        ///<p>
        /// Two UserPasswordCredential objects are equal if and only if their user names
        /// and passwords are equal.
        /// </summary>
        /// <param name="o">the object we are testing for equality with this object.</param>
        /// <returns>true if both UserPasswordCredential objects are equivalent.</returns>
        public bool Equals(ICredential credential)
        {
            if (this == credential) {
                return true;
            }
            if (credential is UserPasswordCredential) {
                UserPasswordCredential other = (UserPasswordCredential)credential;
                return other.ivPassword.Equals(ivPassword) && other.ivUserName.Equals(ivUserName);
            }
            return false;
        }

        /// <summary>Returns the hashcode of the UserPasswordCredential object.
        /// </summary>
        /// <returns>return the hash code of this object</returns>
        public override int GetHashCode() {
            int ret = ivUserName.GetHashCode() + ivPassword.GetHashCode();
            return ret;
        }

        /// <summary>this.Object as a string
        /// </summary>
        /// <returns>return the string presentation of the UserPasswordCredential object.</returns>
        public override String ToString() {
            return typeof(UserPasswordCredential).FullName + "[" + ivUserName + ",xxxxxx]";
        }

    }
}
```

関連タスク:

765 ページの『.NET クライアント認証のプログラミング』

.NET クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するには、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装する必要があります。これらのインターフェースでは、データ・グリッドに渡されてサーバー・サイドで解釈される資格情報オブジェクトが生成されます。サーバー・サイドで、対応するプラグインが資格情報オブジェクトを解釈します。

関連情報:

ICredential インターフェース

ICredentialGenerator インターフェース

例: .NET アプリケーション用のユーザー資格情報生成プログラムの実装

この例を使用して、ICredentialGenerator インターフェースの実装を独自に作成することができます。このインターフェースはユーザー ID およびパスワードを受け取ります。 UserPasswordCredential オブジェクトには、読み取り専用の資格情報プロパティーから取得される、ユーザー ID およびパスワードが含まれています。

UserPasswordCredentialGenerator.cs

```
// Module  :  UserPasswordCredientialGenerator.cs
//
// Source File Description: Reference Documentation
//
using System;
using System.Security.Authentication;
using IBM.WebSphere.Caching.Security;
using com.ibm.websphere.objectgrid.security.plugins.builtins;

namespace IBM.WebSphere.Caching.Security
{
    public class UserPasswordCredentialGenerator : ICredentialGenerator
    {

        private String ivUser;

        private String ivPwd;

        public ICredential Credential { get { return _getCredential(); } }

        public string Properties { set {_setProperties(value);} }

        public UserPasswordCredentialGenerator()
        {
            ivUser = null;
            ivPwd = null;
        }


        public UserPasswordCredentialGenerator(String user=null, String pwd=null)
        {
            ivUser = user;
            ivPwd = pwd;
        }

        /// <summary>Creates a new UserPasswordCredential object using this object's user name and password.
        /// </summary>
        /// <returns>new UserPasswordCredential instance</returns>
        private ICredential _getCredential()
        {
            try
            {
                ICredential MyCredential = new UserPasswordCredential(ivUser, ivPwd) as ICredential;
                return (ICredential) MyCredential;
            }
            catch (Exception e)
```

```
    {
        AuthenticationException CannotGenerateCredentialException = new AuthenticationException(e.ToString());
        throw CannotGenerateCredentialException;
    }
}

/// <summary>Gets the password for this credential generator.
/// </summary>
/// <returns>the password argument that was passed to the constructor</returns>
public String getPassword()
{
    return ivPwd;
}

/// <summary>Gets the user name for this credential.
/// </summary>
/// <returns>the user argument that was passed to the constructor of this class</returns>
public String getUserName()
{
    return ivUser;
}

/// <summary>Sets additional properties namely a user name and password.
///Throws ArgumentException if the format is not valid
/// </summary>
/// <param name="properties">properties a properties string  with a user name and a password separated by a blank.</param>
private void _setProperties(string properties)
{
    String token = properties;
    char[] Seperator = { ' ' };
    String[] StringProperty = properties.Split(Seperator);
    if (StringProperty.Length != 2)
    {
        throw new ArgumentException(
            "The properties should have a user name and password and separated by a space.");
    }

    ivUser = StringProperty[0];
    ivPwd = StringProperty[1];
}

/// <summary>Checks two UserPasswordCredentialGenerator objects for equality.
///<p>
///Two UserPasswordCredentialGenerator objects are equal if and only if
///their user names and passwords are equal.
/// </summary>
/// <param name="obj">the object we are testing for equality with this object.</param>
/// <returns><code>true</code> if both UserPasswordCredentialGenerator objects are equivalent</returns>
public override bool Equals(Object obj)
{
    if (obj == this)
    {
        return true;
    }

    if (obj != null && obj is UserPasswordCredentialGenerator)
    {
        UserPasswordCredentialGenerator other = (UserPasswordCredentialGenerator)obj;

        Boolean bothUserNull = false;
        Boolean bothPwdNull = false;

        if (ivUser == null)
        {
            if (other.ivUser == null)
            {
                bothUserNull = true;
            }
            else
            {
                return false;
            }
        }

        if (ivPwd == null)
        {
            if (other.ivPwd == null)
            {
                bothPwdNull = true;
```

```
                }
                else
                {
                    return false;
                }
            }
            return (bothUserNull || ivUser.Equals(other.ivUser)) && (bothPwdNull || ivPwd.Equals(other.ivPwd));
        }
        return false;
    }

    /// <summary>Returns the hashcode of the UserPasswordCredentialGenerator object.
    /// </summary>
    /// <returns>the hash code of this object</returns>
    public override int GetHashCode()
    {
       return ivUser.GetHashCode() + ivPwd.GetHashCode();
    }

}
}
```

関連タスク:

765 ページの『.NET クライアント認証のプログラミング』

.NET クライアントからサーバー・サイドに資格情報を送信するには、ICredentialGenerator および ICredential インターフェースを実装する必要があります。これらのインターフェースでは、データ・グリッドに渡されてサーバー・サイドで解釈される資格情報オブジェクトが生成されます。サーバー・サイドで、対応するプラグインが資格情報オブジェクトを解釈します。

関連情報:

ICredential インターフェース

ICredentialGenerator インターフェース

第 8 章 トラブルシューティング

このセクションで説明するログとトレース、メッセージ、およびリリース情報の他に、モニター・ツールを使用して環境内のデータのロケーション、データ・グリッド内のサーバーのアベイラビリティーなどの問題を把握することができます。WebSphere Application Server 環境で実行している場合、 Performance Monitoring Infrastructure (PMI) を使用できます。スタンドアロン環境で実行している場合は、ベンダーのモニター・ツール (CA Wily Introscope あるいは Hyperic HQ など) を使用できます。また、**xscmd** ユーティリティーを使用し、これをカスタマイズすれば、ご使用の環境に関するテキスト情報を表示させることができます。

WebSphere eXtreme Scale のトラブルシューティングおよびサポート

ご使用の IBM 製品の問題を切り分け、解決するために、トラブルシューティング情報とサポート情報を利用できます。この情報には、ご使用の IBM 製品 (WebSphere eXtreme Scale を含む) と共に提供される問題判別リソースを使用するための説明が示されています。

問題のトラブルシューティングのための手法

トラブルシューティング とは、体系的な方法で問題を解決することです。トラブルシューティングの目的は、想定どおりに機能しない理由を明らかにして、問題の解決方法を説明することです。ある種の一般的な手法が、トラブルシューティングのタスクに役立つこともあります。

トラブルシューティング・プロセスの最初のステップは、問題の内容を完全に記述することです。問題の記述によって、問題の原因を突き止めるためにどこから着手すべきかを、お客様自身と IBM 技術サポート担当者がわかるようになります。このステップでは、以下の基本的な項目について明確にする必要があります。

- 問題の症状はどのようなものか。
- 問題の発生場所はどこか。
- 問題はいつ発生したか。
- 問題が発生する条件は何か。
- 問題は再現可能か。

通常は、これらの質問に回答することで問題が適切に記述され、問題解決につながります。

問題の症状はどのようなものか。

問題の記述を始めるときの最も明確な質問は「問題は何か」ということです。この質問は単純なように思われますが、問題をより具体的に説明する、さまざまな観点からの質問に細分化することができます。細分化した質問には以下のようなものがあります。

- だれが、または何が問題を報告するか。
- エラー・コードおよびメッセージの内容は何か。

- システムにどのような障害が発生したか。ループ、ハング、異常終了、パフォーマンス低下、不適切な結果などがあります。

問題の発生場所はどこか。

問題の発生源を特定することは、必ずしも簡単ではありませんが、これは問題を解決する上で最も重要な段階の 1 つです。報告元のコンポーネントと障害が発生しているコンポーネントの間に、いくつものテクノロジー層が存在している場合があります。ネットワーク、データ・グリッド、およびサーバーは、問題を調査するときに考慮すべきコンポーネントの一部にすぎません。

次のような質問は、問題の層の切り分けのため、問題の発生箇所に焦点が集まるようにします。

- 問題は 1 つのプラットフォームまたはオペレーティング・システムに固有か、それとも複数のプラットフォームまたはオペレーティング・システムに共通か。
- 現在の環境と構成はサポートされているか。
- その問題はどのユーザーに対しても起こるのか。
- (マルチサイトのインストール済み環境の場合。) その問題はすべてのサイトで起こるのか。

ある層で問題が報告されても、必ずしもその層が問題の発生源とは限りません。問題の発生源の特定作業には、問題が存在する環境を理解することが含まれます。しばらく時間をかけて、問題のある環境のすべての内容 (オペレーティング・システムとバージョン、対応するすべてのソフトウェアとバージョン、ハードウェア情報など) を記述してください。サポートされる構成の環境で実行していることを確認してください。多くの場合、問題をトレースすると、ソフトウェア・レベルに互換性がないことがわかります (一緒に実行することを意図していないソフトウェア・レベルであったり、完全には一緒にテストされていないソフトウェア・レベルであったりします)。

問題はいつ発生したか。

障害発生に至るイベントについて、特に発生が 1 回限りのケースについて、詳しい時系列対照表を作成してください。最も簡単に時系列対照表を作成する方法は、逆方向に作業することです。エラーが報告された時点 (できればミリ秒単位に至るまで精密に) から開始して、使用可能なログと情報を通じて逆方向に作業します。一般に、診断ログ内で最初に見つかる疑わしいイベントまで調べる必要があります。

イベントの詳細な時系列対照表を作成するには、以下の質問に答えます。

- 問題が昼間または夜間の特定の時刻のみに発生するか。
- どれくらいの頻度で問題が発生するか。
- どのような一連のイベントを経て、問題が報告された時点に至ったのか。
- 環境の変更 (ソフトウェアまたはハードウェアのアップグレードやインストールなど) の後に問題が発生したか。

このようなタイプの質問に回答することで、問題調査のための基準の枠組みが得られます。

問題が発生する条件は何か。

問題の発生時に稼働していたシステムとアプリケーションを知ることは、トラブルシューティングの重要な部分です。ご使用の環境に関する次のような質問は、問題の根本原因の特定に役立ちます。

- 問題は同じタスクの実行時に常に発生するか。
- この問題が発生するときに、必ず発生する一連のイベントがあるか。
- 他のいずれかのアプリケーションでも同時に障害が発生したか。

このようなタイプの質問に回答することによって、問題が発生した環境が明らかになり、依存関係の相関付けができます。同じ時間の頃に複数の問題が発生したからといって、それらの問題が必ずしも関連しているとは限らないことを覚えておいてください。

問題は再現可能か。

トラブルシューティングの観点からすると、理想的な問題とは、再現できる問題であるということです。通常、問題を再現できる場合は、調査に役立てるために自由に使用できるツールまたは手順の数が多くなります。このため、再現できる問題は、多くの場合デバッグや解決が簡単です。

しかし、再現できる問題には欠点があります。すなわち、その問題がビジネスに大きな影響を与える場合、問題が再発生することは好ましくありません。可能であれば、テスト環境または開発環境で問題を再現してください。一般に、このようにすると、調査時の柔軟性と管理能力が向上します。

- 問題をテスト・システムで再現することができるか。
- 複数のユーザーまたはアプリケーションで同じタイプの問題が発生しているか。
- 単一のコマンド、一連のコマンド、特定のアプリケーションのいずれを実行することによって問題を再現できるか。

知識ベースの検索

以下は英語のみの対応となります。多くの場合、IBM 知識ベースを検索することによって、問題の解決策を見つけることができます。使用可能なリソース、サポート・ツール、および検索方式を使用して、最適の結果を得ることができます。

このタスクについて

WebSphere eXtreme Scale のインフォメーション・センターを検索すれば、役立つ情報を見つけることができます。ただし、疑問の回答を得たり問題を解決するために、インフォメーション・センター以外で情報を検索する必要が生じることもあります。

手順

必要な情報を知識ベースで検索するには、以下のいずれか 1 つまたは複数の方法を使用します。

- IBM Support Assistant (ISA) を使用してコンテンツを検索します。

ISA は、IBM ソフトウェア製品に関する質問への回答や問題の解決に役立つ、無料のソフトウェア保守ワークベンチです。ISA のダウンロードとインストールの手順については、ISA Web サイトを参照してください。

- IBM Support Portal を使用して必要なコンテンツを検索します。

  IBM Support Portal は、IBM のすべてのシステム、ソフトウェア、およびサービスの、すべての技術サポート・ツールと情報が 1 つにまとめられた、中心となる場所です。この IBM Support Portal という 1 つの場所から、IBM エレクトロニック支援ポートフォリオにアクセスできます。各ページを調整して、問題の予防と迅速な問題解決に必要な情報やリソースに焦点を当てることができます。 IBM Support Portal をよく理解するためには、このツールに関するデモ・ビデオ (https://www.ibm.com/blogs/SPNA/entry/the_ibm_support_portal_videos) をご覧ください。このビデオは、IBM Support Portal について紹介し、トラブルシューティングやその他のリソースについて説明し、ポートレットの移動、追加、削除によってページを調整する方法のデモを示します。

- WebSphere eXtreme Scale に関するコンテンツを検索するには、以下の追加の技術資料のいずれかを使用します。
  - WebSphere eXtreme Scale リリース情報
  - WebSphere eXtreme Scale サポート Web サイト
  - WebSphere eXtreme Scaleフォーラム (forum)
- IBM マストヘッド検索を使用してコンテンツを検索します。 IBM マストヘッド検索を使用するには、ibm.com® の任意のページの最上部にある「検索」フィールドに検索文字列を入力します。
- 外部の検索エンジン (Google、Yahoo、Bing など) を使用して、コンテンツを検索します。 外部検索エンジンを使用すると、ibm.com ドメイン以外の情報が結果に含まれる可能性が高くなります。ただし、ibm.com 以外の場所にあるニュースグループ、フォーラム、およびブログで、IBM 製品に関する問題解決のための有用な情報が見つかることもあります。

  ヒント: IBM 製品に関する情報を検索する場合は、「IBM」と製品の名称を検索に含めてください。

フィックスの入手

以下は英語のみの対応となります。お客様の問題の解決に、プロダクトのフィックスが有効な場合があります。

手順

フィックスを見つけてインストールするには、以下のようにします。

1. フィックスを入手するために必要なツールを取得します。 IBM Update Installer を使用して、WebSphere eXtreme Scale または WebSphere eXtreme Scale クライアントのさまざまなタイプの保守パッケージをインストールして、適用します。Update Installer は定期的に保守されるため、そのツールの最新バージョンを使用する必要があります。
2. 必要なフィックスを特定します。 WebSphere eXtreme Scale の推奨フィックスを参照して、最新のフィックスを選択してください。 フィックスを選択すると、そのフィックスのダウンロード資料が開きます。

3. フィックスをダウンロードします。ダウンロード資料で、「Download package」セクションの最新フィックスのリンクをクリックします。
4. フィックスを適用します。ダウンロード資料の「Installation Instructions」セクションに記載されている説明に従ってください。
5. フィックスやその他の IBM サポート情報について週次の E メール通知を受信できるよう、登録してください。

Fix Central からのフィックスの入手

以下は英語のみの対応となります。Fix Central を使用して、IBM サポートが推奨する、WebSphere eXtreme Scale を含むさまざまな製品のフィックスを見つけることができます。 Fix Central では、ご使用のシステム用のフィックスを検索、選択、注文、およびダウンロードすることができ、その際に配信オプションを選択できます。以下は英語のみの対応となります。お客様の問題の解決に、WebSphere eXtreme Scale プロダクトのフィックスが有効な場合があります。

手順

フィックスを見つけてインストールするには、以下のようにします。

1. フィックスを入手するために必要なツールを取得します。製品アップデート・インストーラーがインストールされていない場合は、それを取得します。インストーラーは Fix Central からダウンロードできます。 このサイトでは、アップデート・インストーラーのダウンロード、インストール、および構成の手順を提供しています。
2. 製品として選択し、解決したい問題に関連のある 1 つ以上のチェック・ボックスを選択します。
3. 必要なフィックスを特定して選択します。
4. フィックスをダウンロードします。
   a. ダウンロード資料を開き、「Download Package」セクションのリンクをたどります。
   b. ファイルのダウンロード時に、保守ファイルの名前が変更されていないことを確認してください。 このような変更は、意図的に行われる場合もあれば、特定の Web ブラウザーやダウンロード・ユーティリティーによって偶発的に行われる場合もあります。
5. フィックスを適用します。
   a. ダウンロード資料の「Installation Instructions」セクションに記載されている説明に従ってください。
   b. 詳しくは、製品資料の『Update Installer を使用したフィックスのインストール』のトピックを参照してください。
6. オプション: フィックスおよびその他の IBM サポートの更新については、登録して各週の E メール通知を受け取ってください。

IBM サポートへの連絡

IBM サポートでは、FAQ での回答や、製品に関する問題解決でユーザーのお手伝いをすることにより、製品の障害に関する支援を提供します。

始める前に

問題点に関する回答や解決方法について、リリース情報などのセルフ・ヘルプ・オプションを使用しても判明しない場合は、IBM サポートにご連絡ください。IBM サポートに連絡するには、お客様の会社または組織が有効な IBM 保守契約を締結しており、お客様が IBM に問題を送信する許可を受けている必要があります。使用可能なサポートのタイプについては、「*Software Support Handbook*」の『Support portfolio』のトピックを参照してください。

手順

問題について IBM サポートに連絡を取るには、次のようにしてください。

1. 問題を定義し、バックグラウンド情報を収集して、問題の重大度を判別します。詳しくは、「*Software Support Handbook*」の『GettingIBM support』のトピックを参照してください。
2. 診断情報を収集します。
3. IBM サポートに以下のいずれかの方法で問題を送信します。
   - IBM Support Assistant (ISA) を使用する。詳しくは、 977 ページの『IBM Support Assistant for WebSphere eXtreme Scale』または 976 ページの『IBM Support Assistant Data Collector を使用したデータの収集』を参照してください。
   - IBM サポート・ポータルによるオンライン・サポート: 「Service Request」ページの「Service Request」ポートレットから、お客様のすべてのサービス要求をオープン、更新、および表示できます。
   - 電話: 自国での連絡先の電話番号を調べるには、Directory of worldwide contacts の Web ページを参照してください。

タスクの結果

送信した問題がソフトウェア障害に関するものである場合、または文書の不備や不正確さに関するものである場合、IBM サポートはプログラム診断依頼書 (APAR) を作成します。APAR には問題が詳細に記載されます。IBM サポートでは、APAR が解決されてフィックスが配信されるまで、お客様が実施可能な回避策を可能な限り提供します。IBM では、解決された APAR を IBM サポート Web サイトに毎日公開しているため、同じ問題が発生した他のユーザーも同じ解決策を利用できます。

IBM との情報の交換

以下は英語のみの対応となります。問題の診断や特定を行うには、ご使用のシステムからのデータと情報を IBM サポートに提供していただく必要がある場合があります。また、IBM サポートから、問題判別に使用するツールまたはユーティリティーをご提供する場合もあります。

IBM サポートへの情報の送信

問題解決に必要な時間を減らすため、トレースおよび診断情報を IBM サポートに送信していただくことができます。

手順

IBM サポートに診断情報を提出するには、以下のようにします。

1. 問題管理レコード (PMR) を開きます。
2. 必要な診断データを収集します。診断データは、PMR の解決にかかる時間の節約に役立ちます。診断データは、手動で収集することも自動的に収集することもできます。
   - データを手動で収集する。
   - データを自動的に収集する。
3. `.zip` または `.tar` ファイル形式を使用してファイルを圧縮します。
4. ファイルを IBM に転送します。 以下のいずれかの方法を使用して、IBM にファイルを転送することができます。
   - IBM Support Assistant
   - Service Request ツール
   - 標準的なデータのアップロード方法: FTP、HTTP
   - 機密保護機能のあるデータのアップロード方法: FTPS、SFTP、HTTPS
   - E メール

   z/OS 製品を使用していて、PMR の送信に ServiceLink / IBMLink を使用している場合は、E メールまたは FTP を使用して IBM サポートに診断データを送信できます。

   これらのデータ交換方法は、すべて IBM サポートの Web サイトで説明されています。

IBM サポートからの情報の受信

IBM 技術サポートの担当者から、診断ツールやその他のファイルのダウンロードをお願いする場合があります。FTP を使用して、これらのファイルをダウンロードすることができます。

始める前に

IBM 技術サポートの担当者から、ファイルのダウンロードに使用する推奨サーバーと、アクセス先の正確なディレクトリーおよびファイル名が指定されていることを確認してください。

手順

IBM サポートからファイルをダウンロードするには、以下のようにします。

1. FTP を使用して、IBM 技術サポートの担当者が指定したサイトに接続し、`anonymous` としてログインします。パスワードとして E メール・アドレスを使用してください。
2. 以下のように、適切なディレクトリーに移動します。
   a. `/fromibm` ディレクトリーに移動します。

      ```
      cd fromibm
      ```

   b. IBM 技術サポートの担当者が指定したディレクトリーに移動します。

      ```
      cd nameofdirectory
      ```

3. セッションのバイナリー・モードを有効にします。

   バイナリー

4. **get** コマンドを使用して、IBM 技術サポートの担当者が指定したファイルをダウンロードします。

   get *filename.extension*

5. FTP セッションを終了します。

   quit

サポート更新情報のサブスクライブ

ご使用の IBM 製品に関する重要な情報を常に入手するために、更新情報をサブスクライブすることができます。

このタスクについて

製品の更新情報を受け取るようにサブスクライブすることによって、特定の IBM サポート・ツールおよびリソースに関する重要な技術情報と更新情報を受け取ることができます。次の 2 つの方法のうちいずれかを使用して、更新情報をサブスクライブできます。

ソーシャル・メディアのサブスクリプション

製品に関し、次の RSS フィードが使用可能です。

- WebSphere eXtreme Scale フォーラム の RSS フィード

RSS の一般情報 (入門情報、RSS を使用できる IBM Web ページのリストなど) については、IBM ソフトウェア・サポート RSS フィードのサイトをご覧ください。

マイ通知 (My Notifications)

「マイ通知 (My Notifications)」では、任意の IBM 製品のサポート更新情報をサブスクライブできます。「マイ通知 (My Notifications)」は、以前に使用されていた同様のツール「マイ・サポート」に置き換わるものです。「マイ通知 (My Notifications)」を使用すると、E メールによる告知を、毎日、または週 1 回受信するように指定できます。発表、ヒント、製品フラッシュ (アラートとも言う)、ダウンロード、ドライバーなど、受信したい情報のタイプを指定できます。「マイ通知 (My Notifications)」では、通知を受信する製品、およびユーザーのニーズに最も適した配信方法をカスタマイズして分類することができます。

手順

サポート更新情報をサブスクライブするには、次のようにします。

1. WebSphere eXtreme Scale フォーラム の RSS フィードをサブスクライブします。
   a. 「サブスクリプション」ページで、RSS フィード・アイコンをクリックします。
   b. フィードのサブスクライブに使用するオプションを選択してください。
   c. 「**サブスクライブ**」をクリックします。

2. 「マイ通知 (My Notifications)」をサブスクライブするには、IBM サポート・ポータルにアクセスし、「**通知**」ポートレットの「**マイ通知 (My Notifications)**」をクリックします。
3. IBM ID とパスワードを使用してサインインし、「**送信**」をクリックします。
4. 更新を受け取る内容と方法を指定します。
   a. 「**サブスクライブ**」タブをクリックします。
   b. 該当するソフトウェア・ブランドまたはハードウェアのタイプを選択します。
   c. 1 つ以上の製品名を選択して、「**続行**」をクリックします。
   d. 更新を E メールで受け取るか、オンラインで指定のフォルダーに受け取るか、RSS または Atom フィードで受け取るか、更新の受信方法に関する設定を選択します。
   e. 受信する資料更新のタイプ (製品ダウンロードに関する新規情報、ディスカッション・グループのコメントなど) を選択します。
   f. 「**実行依頼**」をクリックします。

タスクの結果

RSS フィードと「マイ通知 (My Notifications)」の設定を変更するまで、要求した更新情報に関する通知を受け取ることになります。必要に応じて、この設定内容は変更することができます (ある製品の使用を中止し、別の製品の使用を開始した場合など)。

関連情報

IBM ソフトウェア・サポート RSS フィード

「マイ通知 (My Notifications)」サポート・コンテンツの更新情報のサブスクライブ

IBM 技術サポートの「マイ通知 (My Notifications)」

IBM 技術サポート概要の「マイ通知 (My Notifications)」

ロギング可能化

ログを使用して、環境のモニターおよびトラブルシューティングを実行できます。

このタスクについて

ログは、構成に応じて異なる場所にさまざまなフォーマットで保存されます。

手順

- **スタンドアロン環境でのロギング可能化**

  スタンドアロン・カタログ・サーバーの場合、ログはサーバー始動コマンドを実行した場所にあります。コンテナー・サーバーの場合、デフォルトの場所を使用するか、カスタムのログの場所を設定できます。

  – **デフォルトのログの場所:** ログは、サーバー始動コマンドが実行されたディレクトリーにあります。*wxs_home*/bin ディレクトリーでサーバーを開始した場

合、ログおよびトレース・ファイルは bin ディレクトリー内の logs/<*server_name*> ディレクトリーにあります。

– **カスタムのログの場所:** コンテナー・サーバー・ログに別の場所を指定するには、次の内容を持つプロパティー・ファイル (server.properties など) を作成します。

```
workingDirectory=<directory>
traceSpec=
systemStreamToFileEnabled=true
```

workingDirectory プロパティーは、ログおよびオプションのトレース・ファイルのルート・ディレクトリーです。WebSphere eXtreme Scale は、コンテナー・サーバーの名前を持つディレクトリーを作成し、SystemOut.log ファイル、SystemErr.log ファイル、およびトレース・ファイルをそこに入れます。コンテナー開始中にプロパティー・ファイルを使用するには、**-serverProps** オプションを使用して、サーバー・プロパティー・ファイルのロケーションを指定します。

- **WebSphere Application Server でのロギング可能化**

  詳しくは、WebSphere Application Server: ロギングの使用可能化および使用不能化を参照してください。

- **FFDC ファイルを取得します。**

  FFDC ファイルは、IBM サポートがデバッグの補助とするファイルです。これらのファイルは、問題が発生したときに IBM サポートによって要求される場合があります。これらのファイルは、ffdc という名前のディレクトリーに存在し、以下のファイルに類似したファイルが含まれています。

```
server2_exception.log
server2_20802080_07.03.05_10.52.18_0.txt
```

- .NET 8.6+ **.NET クライアントでログを使用可能にします。** .NET クライアントでのログは、デフォルトで構成され、クライアントの logs ディレクトリーに書き込まれます。.NET クライアント・ログについて詳しくは、932 ページの『.NET クライアント・ログ』を参照してください。

次のタスク

指定された場所にあるログ・ファイルを表示します。SystemOut.log ファイル内で探す共通のメッセージは、次の例のような開始確認メッセージです。

CWOBJ1001I: ObjectGrid サーバー catalogServer01 は要求を処理する準備ができています。

ログ・ファイル内の特定のメッセージについて詳しくは、メッセージを参照してください。

関連資料:

935 ページの『サーバー・トレース・オプション』
トレースを使用可能にすることで、ご使用の環境に関する情報を IBM サポートに提供することができます。

メッセージ
製品インターフェースのログまたはその他の部分にメッセージが表示された場合は、そのコンポーネントの接頭部でメッセージを検索して、詳細情報を確認してください。

リモート・ロギングの構成

リモート・ロギングを使用可能にすれば、ログ・エントリーをリモート・サーバーに保存することができます。リモート・ロギングは、問題の分離や長期にわたる動作のモニターを容易にするために詳細デバッグ・ログ・レベルを設定する必要があるときに役立つことがあります。

始める前に

- イベントを listen してキャプチャーするためには、syslog サーバーが使用可能でなければなりません。
- カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびアプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server を使用している場合) の名前は、英数字のみからなる名前でなければなりません。 Syslog RFC 1364 では、TAG フィールドに非英数字を使用することは許可されていません。 TAG フィールドには syslog メッセージ内のサーバー名が含まれています。

このタスクについて

ヒストリカル・データの分析のためにリモート・ロギングを使用します。環境内のサーバーがシステム内で保持するログ・ファイルの数には制限があります。さらなる分析に備えてより多くのログ・ファイルを保存する必要がある場合は、リモート・ロギングを構成してください。リモート・ロギング・サーバーは複数のサーバーからのデータを集約します。ファイルが同じリモート・ロギング・サーバーに送られるようにカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーのトポロジー全体を構成することができます。

手順

1. カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーごとにリモート・ロギングを構成します。 サーバー・プロパティー・ファイル内にある以下のプロパティーを編集して、リモート・ロギングを使用可能にしてください。

   8.6+ syslogEnabled
   ヒストリカル・データの分析のためのリモート・ロギングを使用可能にします。イベントを listen してキャプチャーするためには、syslog サーバーが使用可能でなければなりません。

   デフォルト: `false`

   8.6+ syslogHostName
   ヒストリカル・データを記録するリモート・サーバーのホスト名または IP アドレスを指定します。

8.6+ **syslogHostPort**
ヒストリカル・データを記録するリモート・サーバーのポート番号を指定します。

有効な値: `0-65535`

デフォルト: `512`

8.6+ **syslogFacility**
使用しているリモート・ロギング機能のタイプを示します。

有効な値:
`kern、user、mail、daemon、auth、syslog、lpr、news、uucp、cron、authpriv、ftp、sys0、sys1、sys2、sys3、local0、local1、local2、local3、local4、local5、local6、local7`

デフォルト: `user`

8.6+ **syslogThreshold**
リモート・ロギング・サーバーに送るメッセージの重大度のしきい値を指定します。警告メッセージと重大メッセージの両方を送る場合は、`WARNING` という値を入力してください。重大メッセージのみを送る場合は、`SEVERE` を入力してください。

有効な値: `SEVERE、WARNING`

デフォルト: `WARNING`

2. プロパティーを変更したカタログ・サーバーとコンテナー・サーバーを再始動します。 詳しくは、スタンドアロン・サーバーの始動と停止を参照してください。

タスクの結果

保存と分析のために構成したリモート・ロギング・サーバーにメッセージが送られます。

.NET クライアント・ログ

.NET

デフォルトでは .NET クライアントのログが構成されます。これらのログは、`logs` ディレクトリー内のファイルおよび Windows イベント・ログに書き込まれます。

デフォルトのログ・ファイル

デフォルトでは以下のログ・ファイルが生成されます。

- **`SystemOut.log`**: これには、情報、エラー、警告、および障害の各メッセージが含まれます。このファイルはクライアントの `logs/` ディレクトリーにあります。
- **`SystemErr.log`**: これには、エラーおよび障害の各メッセージが含まれます。このファイルはクライアントの `logs/` ディレクトリーにあります。
- **Windows イベント・ログ:** Windows イベント・ログには致命的エラーが入ります。致命的エラーは、クライアントがもはやトランザクションに対処できないときに発生します。 WebSphere eXtreme Scale メッセージは `WXSEventLog` メッセージとして Windows イベント・ログに記録されます。

トレース・ログおよび FFDC ログ

トレース・ログと初期障害データ・キャプチャー機能 (FFDC) ログは、デフォルトでは .NET クライアントで使用不可になっています。 .NET クライアント用のトレース・ログおよび FFDC ログを収集する必要がある場合は、サポート・チームに連絡して支援を求めてください。詳しくは、925 ページの『IBM サポートへの連絡』を参照してください。

トレースの収集

トレースを使用して、環境のモニターおよびトラブルシューティングを実行できます。IBM サポートに協力を依頼する場合、サーバーに関するトレースを提供する必要があります。

このタスクについて

トレースの収集は、WebSphere eXtreme Scale のデプロイメントにおける問題のモニターと解決に役立ちます。トレースの収集方法は、構成によって決まります。収集できるさまざまなトレース仕様のリストについては、935 ページの『サーバー・トレース・オプション』を参照してください。

手順

- **WebSphere Application Server 環境内でトレースを収集します。**

  カタログおよびコンテナー・サーバーが WebSphere Application Server 環境内にある場合、詳しくは、WebSphere Application Server: トレースによる処理を参照してください。
- **スタンドアロン・カタログまたはコンテナー・サーバーの始動コマンドを使用して、トレースを収集します。**

  サーバー始動コマンドに **-traceSpec** パラメーターと **-traceFile** パラメーターを使用して、カタログ・サービスまたはコンテナー・サーバーでトレースを設定できます。以下に例を示します。

  ```
  startOgServer.sh catalogServer -traceSpec ObjectGridPlacement=all=enabled -traceFile  /home/user1/logs/trace.log
  ```

  8.6+

  ```
  startXsServer.sh catalogServer -traceSpec ObjectGridPlacement=all=enabled -traceFile  /home/user1/logs/trace.log
  ```

  -traceFile パラメーターはオプションです。**-traceFile** で場所を指定しなければ、トレース・ファイルは、システム出力ログ・ファイルと同じ場所に作成されます。これらのパラメーターについて詳しくは、**startOgServer** スクリプト (ORB)および**startXsServer** スクリプト (XIO)を参照してください。
- **プロパティー・ファイルを使用して、スタンドアロン・カタログまたはコンテナー・サーバーでトレースを収集します。**

  プロパティー・ファイルからトレースを収集するには、次の内容のファイル (例えば server.properties ファイル) を作成します。

  ```
  workingDirectory=<directory>
  traceSpec=<trace_specification>
  systemStreamToFileEnabled=true
  ```

workingDirectory プロパティーは、ログおよびオプションのトレース・ファイルのルート・ディレクトリーです。**workingDirectory** 値が設定されていなければ、デフォルトの作業ディレクトリーは、サーバーの始動に使用された場所です (例えば *wxs_home*/bin)。サーバーの始動中にプロパティー・ファイルを使用するには、**startOgServer** コマンドに **-serverProps** パラメーターを使用し、サーバー・プロパティー・ファイルの場所を指定します。サーバー・プロパティー・ファイル、およびそのファイルの使用方法について詳しくは、サーバー・プロパティー・ファイルを参照してください。

- Java **スタンドアロン Java クライアントでトレースを収集します。**

  クライアント・アプリケーションの始動スクリプトにシステム・プロパティーを追加することにより、スタンドアロン・クライアントでトレースの収集を開始することができます。次の例では、トレース設定は、com.ibm.samples.MyClientProgram アプリケーションに対して指定されています。

  ```
  java -DtraceSettingsFile=MyTraceSettings.properties
  -Djava.util.logging.manager=com.ibm.ws.bootstrap.WsLogManager
  -Djava.util.logging.configureByServer=true com.ibm.samples.MyClientProgram
  ```

  詳しくは、WebSphere Application Server: 『クライアントおよびスタンドアロン・アプリケーションでのトレースの使用可能化』を参照してください。

- .NET **8.6+ .NET クライアントでトレースを収集します。**

  .NET クライアントのトレースは、デフォルトでは使用可能になっていません。.NET クライアントのトレースを収集する場合は、サポート・チームに詳細についてお問い合わせください。詳しくは、 925 ページの『IBM サポートへの連絡』を参照してください。

- Java **ObjectGridManager インターフェースを使用してトレースを収集します。**

  ObjectGridManager インターフェースで実行時にトレースを設定することもできます。 ObjectGridManager インターフェースでのトレース設定を使用すると、eXtreme Scale に接続してトランザクションをコミットしている間に eXtreme Scale クライアント上でトレースを取得することができます。 ObjectGridManager インターフェースでトレースを設定するには、トレース仕様およびトレース・ログを指定します。

  ```
  ObjectGridManager manager = ObjectGridManagerFactory.getObjectGridManager();
  ...
  manager.setTraceEnabled(true);
  manager.setTraceFileName("logs/myClient.log");
  manager.setTraceSpecification("ObjectGridReplication=all=enabled");
  ```

  ObjectGridManager インターフェースの詳細については、387 ページの『ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid との対話』を参照してください。

- **xscmd ユーティリティーを使用して、コンテナー・サーバーでトレースを収集します。**

  xscmd ユーティリティーを使用してトレースを収集するには、**-c setTraceSpec** コマンドを使用します。**xscmd** ユーティリティーを使用して、開始時ではなく実

行時にスタンドアロン環境でトレースを収集します。すべてのサーバーおよびカタログ・サービスに対してトレースを収集できます。あるいは、ObjectGrid 名およびその他のプロパティーに基づいてサーバーをフィルタリングすることもできます。例えば、カタログ・サービス・サーバーへのアクセスを使用して ObjectGridReplication トレースを収集にするには、以下を実行します。

```
xscmd -c setTraceSpec -spec "ObjectGridReplication=all=enabled"
```

トレース仕様を *=all=disabled に設定することでトレースを使用不可にすることもできます。

タスクの結果

トレース・ファイルは、指定された場所に作成されます。

関連資料:

『サーバー・トレース・オプション』
トレースを使用可能にすることで、ご使用の環境に関する情報を IBM サポートに提供することができます。

メッセージ
製品インターフェースのログまたはその他の部分にメッセージが表示された場合は、そのコンポーネントの接頭部でメッセージを検索して、詳細情報を確認してください。

サーバー・トレース・オプション

トレースを使用可能にすることで、ご使用の環境に関する情報を IBM サポートに提供することができます。

トレースについて

WebSphere eXtreme Scale のトレースは、いくつかの異なるコンポーネントに分けられます。カタログ・サーバーまたはコンテナー・サーバーのために使用するトレース・レベルを指定することができます。一般的なトレースのレベルには、all、debug、entryExit、および event があります。

トレース・ストリングの例は、以下のとおりです。

```
ObjectGridComponent=level=enabled
```

トレース・ストリングは連結することができます。* (アスタリスク) 記号を使用してワイルドカード値を指定します (例: ObjectGrid*=all=enabled)。トレースを IBM サポートに提供する必要がある場合は、特定のトレース・ストリングが要求されます。 例えば、レプリカ生成に関する問題が発生した場合には、ObjectGridReplication=debug=enabled トレース・ストリングが要求される可能性があります。

トレース仕様

ObjectGrid
汎用コア・キャッシュ・エンジン。

ObjectGridCatalogServer
汎用カタログ・サービス。

ObjectGridChannel
静的デプロイメント・トポロジー通信。

ObjectGridClientInfo
DB2 クライアント情報。

ObjectGridClientInfoUser
DB2 ユーザー情報。

ObjectgridCORBA
動的デプロイメント・トポロジー通信。

ObjectGridDataGrid
AgentManager API。

ObjectGridDynaCache
WebSphere eXtreme Scale 動的キャッシュ・プロバイダー

ObjectGridEntityManager
EntityManager API。Projector オプションとともに使用。

ObjectGridEvictors
ObjectGrid 組み込み Evictor。

ObjectGridJPA
Java Persistence API (JPA) ローダー

ObjectGridJPACache
JPA キャッシュ・プラグイン

ObjectGridLocking
ObjectGrid キャッシュ・エントリー・ロック・マネージャー。

8.6+ ObjectGridLogHandler
リモート・ロギング情報。

ObjectGridMBean
管理 Bean

ObjectGridMonitor
ヒストリカル・モニター・インフラストラクチャー。

ObjectGridNative
WebSphere eXtreme Scale ネイティブ・コード・トレース。eXtremeMemory ネイティブ・コードを含む。

ObjectGridOSGi
WebSphere eXtreme Scale OSGi 統合コンポーネント。

ObjectGridPlacement
カタログ・サーバー断片配置サービス。

ObjectGridQuery
ObjectGrid 照会。

ObjectGridReplication
レプリケーション・サービス。

ObjectGridRouting
クライアント/サーバー・ルーティングの詳細。

ObjectGridSecurity
セキュリティー・トレース。

ObjectGridSerializer
DataSerializer プラグイン・インフラストラクチャー。

ObjectGridStats
ObjectGrid 統計。

ObjectGridTransactionManager
WebSphere eXtreme Scale トランザクション・マネージャー。

ObjectGridWriteBehind
ObjectGrid 後書き。

ObjectGridXA
複数区画トランザクション・トレース。

ObjectGridXM
一般 IBM eXtremeMemory トレース。

ObjectGridXMEviction
eXtremeMemory 除去トレース。

ObjectGridXMTransport
eXtremeMemory 一般トランスポート・トレース。

ObjectGridXMTransportInbound
eXtremeMemory インバウンド特定のトランスポート・トレース。

ObjectGridXMTransportOutbound
eXtremeMemory アウトバウンド特定のトランスポート・トレース。

Projector
EntityManager API 内のエンジン。

QueryEngine
オブジェクト照会 API および EntityManager 照会 API のための照会エンジン。

QueryEnginePlan
照会計画トレース。

TCPChannel
IBM eXtremeIO TCP/IP チャネル。

XsByteBuffer
WebSphere eXtreme Scale バイト・バッファー・トレース。

関連タスク:

929 ページの『ロギング可能化』
ログを使用して、環境のモニターおよびトラブルシューティングを実行できます。

933 ページの『トレースの収集』
トレースを使用して、環境のモニターおよびトラブルシューティングを実行できます。IBM サポートに協力を依頼する場合、サーバーに関するトレースを提供する必要があります。

ORB トランスポートを使用するスタンドアロン・サーバーの始動
(非推奨) スタンドアロン構成を実行しているとき、環境はカタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、およびクライアント・プロセスで構成されています。また、組み込みのサーバー API を使用すれば、WebSphere eXtreme Scale サーバーを既存の Java アプリケーション内に組み込むことができます。これらのプロセスは手動で構成して開始する必要があります。

xscmd ユーティリティーによる管理
xscmd ユーティリティーを使用して、マルチマスター・レプリカ生成リンクの確立、クォーラムの上書き、ティアダウン・コマンドを使用したサーバー・グループの停止などの管理タスクを環境内で実行することができます。

High Performance Extensible Logging (HPEL) を使用したトラブルシューティング

HPEL は、スタンドアロン環境および WebSphere Application Server 環境で使用できるログおよびトレース機能です。 HPEL を使用して、アプリケーション・サーバーまたはアプリケーションで生成されるログ、トレース、System.err、および System.out の情報を保管し、アクセスできます。HPEL は基本ログおよびトレース機能の代替機能であり、Java 仮想マシン (JVM) ログ、診断トレース、およびサービス・ログ・ファイルを提供します。通常、これらのファイルの名前は、SystemOut.log/SystemErr.log、trace.log、および activity.log です。 HPEL では、ログ・データ・リポジトリー、トレース・データ・リポジトリー、およびテキスト・ログ・ファイルが提供されます。

このタスクについて

既存のロギング機能の代わりに、デフォルトでは使用不可になっている HPEL を使用することができます。HPEL モードでは、ログとトレースの内容は、独自のバイナリー・フォーマットでログ・データまたはトレース・データ・リポジトリーに書き込まれます。そのため、HPEL を無効にすると、ログおよびトレースの処理機能が高速化するため、サーバーのパフォーマンスを改善することができます。コンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルを使用して、HPEL を使用可能にします。HPEL を使用可能にすると、すべての WebSphere eXtreme Scale ロギングおよびその結果のログ・ファイルは、指定した HPEL リポジトリーの場所に配置されます。

手順

1. HPEL ロギングを使用可能にするプロパティーを設定します。 使用するプロパティーで、それぞれのコンテナー・サーバーおよびカタログ・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルを編集します。

8.6+ hpelEnable

High Performance Extensible Logging (HPEL) が使用可能であるかどうかを指定します。このプロパティーが `true` に設定されると、HPEL ロギングは使用可能になります。

デフォルト: `false`

8.6+ hpelRepositoryLocation

HPEL ロギング・リポジトリー・ロケーションを指定します。

デフォルト: `"."` (ランタイム・ロケーション)

8.6+ hpelEnablePurgeBySize

HPEL がサイズを基準にしてログ・ファイルをパージするかどうかを示します。 hpelMaxRepositorySize プロパティーを使用してファイルのサイズを設定することができます。

デフォルト: `true` (使用可能)

8.6+ hpelEnablePurgeByTime

HPEL が時間を基準にしてログ・ファイルをパージするかどうかを示します。 hpelMaxRetentionTime プロパティーを使用して時間長を設定してください。

デフォルト: `true` (使用可能)

8.6+ hpelEnableFileSwitch

HPEL ファイルが特定の時刻に新しいファイルを作成できるように設定されているかどうかを示します。 hpelFileSwitchHour プロパティーを使用して、新しいファイルを作成する時刻を指定することができます。

デフォルト: `false` (使用不可)

8.6+ hpelEnableBuffering

HPEL バッファリングが使用可能であるかどうかを示します。

デフォルト: `false` (使用不可)

8.6+ hpelIncludeTrace

HPEL テキスト・ファイルがトレースを含むかどうかを示します。

デフォルト: `false` (使用不可)

8.6+ hpelOutOfSpaceAction

ディスク・スペースが限度を超えたときに実行されるアクションを示します。

デフォルト: `PurgeOld`

考えられる値: `PurgeOld`、`StopServer`、`StopLogging`

8.6+ hpelOutputFormat

生成されるログ・ファイルの形式を示します。

デフォルト: `Basic`

考えられる値: `Basic`、`Advanced`、`CBE-1.0.1`

8.6+ hpelMaxRepositorySize

ファイルの最大サイズをメガバイト数で示します。この値は、hpelEnablePurgeBySize プロパティーを有効にしたときに使用されます。

デフォルト:50

8.6+ hpelMaxRetentionTime
ファイルが保持される最大保存期間を時間数で示します。

デフォルト: 48

8.6+ hpelFileSwitchHour
新しいファイルが作成される時刻を示します。この値は、hpelEnableFileSwitch プロパティーが有効になっているときに使用されます。

デフォルト: 0

2. HPEL プロパティーを設定するために、サーバー・プロパティー・ファイルを変更したサーバーを再始動します。HPEL を使用可能にしてサーバーを再始動した後には、以前の WebSphere eXtreme Scale ロギング情報は使用できなくなります。以前のロギング情報は、それに相当する HPEL 情報で置き換えられます。詳しくは、スタンドアロン・サーバーの始動と停止およびWebSphere Application Server 環境でのサーバーの開始と停止を参照してください。
3. HPEL コマンド行ログ・ビューアーを使用して、ログ・ファイルを表示します。コマンド行ログ・ビューアーは、ロギング情報を表示するための、強力であるが簡単なソリューションです。コマンド行ビューアーのオプションの詳細な解説については、WebSphereApplication Server インフォメーション・センターの『LogViewer コマンド行ツール』を参照してください。
   a. コマンド・プロンプトから、bin ディレクトリーに移動します。 Windows

      ```
      C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥eXtremeScale¥ObjectGrid¥bin
      ```

      Linux UNIX

      ```
      /opt/IBM/WebSphere/eXtremeScale/ObjectGrid/bin
      ```

   b. ログ・ビューアーのヘルプを表示するには、以下のコマンドを実行します。

      Windows

      ```
      logViewer -help
      ```

      Linux UNIX

      ```
      ./logViewer.sh -help
      ```

4. ログ・ビューアーで使用できる一部の一般的なコマンドを以下に示します。
   - INFO、WARNING、および SEVERE のログ・レコードのみが含まれたレガシー・フォーマット・ログ・ファイル legacyFormat.log を作成するには、以下のコマンドを実行します。 Windows

     ```
     logViewer -outLog ..\logs\legacyFormat.log -minLevel INFO -maxLevel SEVERE
     ```

     Linux UNIX

     ```
     ./logViewer.sh -outLog ../logs/legacyFormat.log -minLevel INFO -maxLevel SEVERE
     ```

     作成したレガシー・フォーマット・ログ・ファイルを表示するには、テキスト・エディターを使用します。

- スレッド 0 のログ・レコードのみを表示するには、以下のコマンドを実行します。 Windows

```
logViewer -thread 0
```

Linux UNIX

```
./logViewer.sh -thread 0
```

- WARNING メッセージのみを表示するには、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
logViewer -level WARNING
```

Linux UNIX

```
./logViewer.sh -level WARNING
```

- com.ibm で始まるロガー以外のすべてのログ・レコードを取得するには、以下のコマンドを実行します。 Windows

```
logViewer -excludeLoggers com.ibm.*
```

Linux UNIX

```
./logViewer.sh -excludeLoggers com.ibm.*
```

- WARNING および SEVERE メッセージのみのリポジトリーを抽出して、結果のファイルを新規ディレクトリーに保存するには、以下のコマンドを実行します。 Windows

```
logViewer -minLevel WARNING -maxLevel SEVERE -extractToNewRepository ..\logs\newHPELRepository
```

Linux UNIX

```
./logViewer.sh -minLevel WARNING -maxLevel SEVERE -extractToNewRepository ../logs/newHPELRepository
```

- 結果のリポジトリーのコンテンツをテキスト・フォーマット・ログ・ファイルにエクスポートするには、以下のコマンドを実行します。 Windows

```
logViewer -repositoryDir ..\logs\newHPELRepository -outLog ..\logs\newFormat.log
```

Linux UNIX

```
./logViewer.sh -repositoryDir ../logs/newHPELRepository -outLog ../logs/newFormat.log
```

結果のログ・ファイルを表示するには、テキスト・エディターを使用します。

ログおよびトレース・データの分析

ログ分析ツールを使用して、ランタイム環境のパフォーマンスを分析したり、環境内で発生した問題を解決したりできます。

このタスクについて

環境内の既存のログ・ファイルやトレース・ファイルからレポートを生成できます。これらのビジュアル・レポートには次のような用途があります。

- **ランタイム環境の状況およびパフォーマンスの分析**

- デプロイメント環境の整合性
- ロギングの頻度
- 実行中トポロジーと構成されているトポロジーの比較
- 予定外のトポロジー変更
- クォーラム状況
- 区画のレプリカ生成の状況
- メモリー、スループット、プロセッサー使用量などの統計

- **環境内の問題のトラブルシューティング**
  - 特定時点でのトポロジー・ビュー
  - クライアント障害時のメモリー、スループット、プロセッサー使用量などの統計
  - 現在のフィックスパック・レベル、チューニング設定
  - クォーラム状況

ログ分析の概要

環境内の問題のトラブルシューティングに役立つ **xsLogAnalyzer** ツールを使用できます。

すべてのフェイルオーバー・メッセージ

フェイルオーバー・メッセージの総数を一定時間のチャートで表示します。また、影響を受けたサーバーを含む、フェイルオーバー・メッセージのリストも表示します。

すべての eXtreme Scale 重大メッセージ

メッセージ ID を関連する説明およびユーザー処置と一緒に表示します。これにより、メッセージを検索する時間を節約できます。

すべての例外

メッセージ、発生回数、例外の影響を受けたサーバーも含めて、上位 5 つの例外を表示します。

トポロジーの要約

ログ・ファイルに基づいて、どのようにトポロジーが構成されているかをダイアグラムで表示します。この要約を使用して実際の構成と比較することができ、構成エラーを特定できる場合があります。

トポロジーの整合性: オブジェクト・リクエスト・ブローカー (ORB) 比較表

環境での ORB 設定を表示します。環境全体で設定が整合しているか判別するのを助けるために、この表を使用できます。

イベント・タイムライン・ビュー

データ・グリッドで発生したライフサイクル・イベント、例外、重大なメッセージ、初期障害データ・キャプチャー機能 (FFDC) イベントなどのさまざまなアクションのタイムライン図を表示します。

ログ分析の実行

任意のコンピューターのログ・ファイルやトレース・ファイルのセットに対して **xsLogAnalyzer** ツールを実行できます。

始める前に

- ログおよびトレースを使用可能にします。詳しくは、 929 ページの『ロギング可能化』と 933 ページの『トレースの収集』 を参照してください。
- ログ・ファイルを収集します。ログ・ファイルを構成した方法に応じて、ログ・ファイルはさまざまな場所にあります。デフォルトのログ設定を使用している場合は、次の場所からログ・ファイルを入手できます。
  - スタンドアロン・インストールの場合: *wxs_install_root*/bin/logs/*<server_name>*
  - WebSphere Application Server と統合されたインストールの場合: *was_root*/logs/*<server_name>*
- トレース・ファイルを収集します。トレース・ファイルを構成した方法に応じて、トレース・ファイルはさまざまな場所にあります。デフォルトのトレース設定を使用している場合は、次の場所からトレース・ファイルを入手できます。
  - スタンドアロン・インストールの場合: 特定のトレース値を設定していない場合、トレース・ファイルはシステム出力のログ・ファイルと同じ場所に作成されます。
  - WebSphere Application Server と統合されたインストールの場合: *was_root*/profiles/*server_name*/logs

  ログ・アナライザー・ツールを使用する予定のコンピューターにログ・ファイルとトレース・ファイルをコピーします。
- 生成されるレポートのカスタム・スキャナーを作成する場合は、ツールを実行する前にスキャナー仕様プロパティー・ファイルと構成ファイルを作成してください。詳しくは、 944 ページの『ログ分析用カスタム・スキャナーの作成』を参照してください。

手順

1. **xsLogAnalyzer** ツールを実行します。

   スクリプトは次の場所にあります。
   - スタンドアロン・インストールの場合: *wxs_install_root*/ObjectGrid/bin
   - WebSphere Application Server と統合されたインストールの場合: *was_root*/bin

   ヒント: ログ・ファイルが大きい場合、レポートを実行するときに **-startTime**、**-endTime**、および **-maxRecords** パラメーターを使用して、スキャンするログ・エントリーの数を制限することを検討してください。レポートを実

行するときにこれらのパラメーターを使用すると、レポートが見やすくなるうえ、レポートをより効率的に実行できます。同一セットのログ・ファイルを対象に複数のレポートを実行できます。

```
xsLogAnalyzer.sh|bat -logsRoot c:¥myxslogs -outDir c:¥myxslogs¥out
-startTime 11.09.27_15.10.56.089 -endTime 11.09.27_16.10.56.089 -maxRecords 100
```

-logsRoot
評価するログ・ディレクトリーへの絶対パスを指定します (必須)。

-outDir
レポートの出力を書き込む既存のディレクトリーを指定します。値を指定しないと、レポートは **xsLogAnalyzer** ツールのルート・ロケーションに書き込まれます。

-startTime
ログ内の評価する開始時刻を指定します。日付のフォーマットは、*year.month.day_hour.minute.second.millisecond*です。

-endTime
ログ内の評価する終了時刻を指定します。日付のフォーマットは、*year.month.day_hour.minute.second.millisecond*です。

-trace トレース・ストリング (`ObjectGrid*=all=enabled` など) を指定します。

-maxRecords
レポート内に生成するレコードの最大数を指定します。デフォルトは `100` です。値を `50` と指定した場合、指定された期間の最初の `50` レコードが生成されます。

2. 生成されたファイルを開きます。 出力ディレクトリーを定義しなかった場合、レポートは `report_date_time` というフォルダー内に生成されます。レポートのメインページを開くには、`index.html` ファイルを開きます。
3. レポートを使用して、ログ・データを分析します。 次のヒントを使用して、レポート表示のパフォーマンスを最大にしてください。
   - ログ・データの照会のパフォーマンスを最大にするには、できるだけ具体的な情報を使用します。例えば、`server_host_name` の照会より `server` の照会のほうが実行時間が長くなり、返される結果も多くなります。
   - 一部のビューでは、一度に表示されるデータ・ポイントの数が制限されます。ビュー内の現在のデータを変更して (開始時刻や終了時刻を変更するなどして)、表示される時間セグメントを調整できます。

次のタスク

xsLogAnalyzer ツールや生成されるレポートのトラブルシューティングの詳細については、946 ページの『ログ分析のトラブルシューティング』を参照してください。

ログ分析用カスタム・スキャナーの作成

ログ分析用のカスタム・スキャナーを作成できます。スキャナーを構成してから、**xsLogAnalyzer** ツールを実行すると、結果がレポート内に生成されます。カスタム・スキャナーは、指定された正規表現に基づいてイベント・レコードのログをスキャンします。

手順

1. カスタム・スキャナーで実行する正規表現を指定したスキャナー仕様プロパティー・ファイルを作成します。
   a. プロパティー・ファイルを作成し、保存します。 ファイルは *loganalyzer_root*/config/custom ディレクトリー内に存在しなければなりません。ファイルには好きな名前を付けることができます。ファイルは新規スキャナーで使用されるので、スキャナーの名前をプロパティー・ファイルの名前の一部にすると (例えば、*my_new_server_scanner_spec*.properties) 便利です。
   b. 次のプロパティーを *my_new_server_scanner_spec*.properties ファイルに組み込みます。

      ```
      include.regular_expression = REGULAR_EXPRESSION_TO_SCAN
      ```

      REGULAR_EXPRESSION_TO_SCAN 変数は、ログ・ファイルのフィルタリングに使用する正規表現です。

      例: xception と rror 両方のストリングを含んでいる行 (ストリングの出現順序は問いません) のインスタンスをスキャンするには、**include.regular_expression** プロパティーを次の値に設定します。

      ```
      include.regular_expression = (xception.+rror)|(rror.+xception)
      ```

      この正規表現によって、rror ストリングまたは xception ストリングのいずれかが存在する場合、イベントが記録されます。

      例:ログ内の各行をスキャンして、句 xception または句 rror のいずれかのストリングを含んでいる行のインスタンスを探すには、**include.regular_expression** プロパティーを次の値に設定します。

      ```
      include.regular_expression = (xception)|(rror)
      ```

      rror ストリングまたは xception ストリングのいずれかが存在する場合、この正規表現によってイベントが記録されます。
2. **xsLogAnalyer** ツールがスキャナーを作成するために使用する構成ファイルを作成します。
   a. 構成ファイルを作成し、保存します。 ファイルは *loganalyzer_root*/config/custom ディレクトリー内に存在しなければなりません。ファイルの名前は、*scanner_name*Scanner.config のようにします。ここで、*scanner_name* は、新規スキャナーの固有の名前です。 例えば、このファイルは serverScanner.config という名前にできます。
   b. 次のプロパティーを *scanner_name*Scanner.config ファイルに組み込みます。

      ```
      scannerSpecificationFiles = LOCATION_OF_SCANNER_SPECIFICATION_FILE
      ```

      LOCATION_OF_SCANNER_SPECIFICATION_FILE 変数は、前のステップで作成した仕様ファイルの場所 (パス) です。例: *loganalyzer_root*/config/custom/my_new_scanner_spec.properties。セミコロンで区切ったリストを使用して、複数のスキャナー仕様ファイルを指定することもできます。

```
scannerSpecificationFiles = LOCATION_OF_SCANNER_SPECIFICATION_FILE1;LOCATION_OF_SCANNER_SPECIFICATION_FILE2
```

3. **xsLogAnalyzer** ツールを実行します。 詳しくは、 943 ページの『ログ分析の実行』を参照してください。

タスクの結果

xsLogAnalyzer ツールを実行すると、構成したカスタム・スキャナー用の新しいタブがレポートに含まれています。各タブには、次のビューがあります。

チャート
記録されたイベントを示すプロット・グラフ。イベントは検出された順序で表示されます。

テーブル
記録されたイベントのテーブル表示。

要約レポート

ログ分析のトラブルシューティング

xsLogAnalyzer ツールおよびこのツールで生成されるレポートに関する問題を診断し、修正する場合、次のトラブルシューティング情報を使用してください。

手順

- **問題: xsLogAnalyzer** ツールを使用してレポートを生成中、メモリー不足状態が発生する。発生する可能性があるエラーの例は、次のとおりです:
  `java.lang.OutOfMemoryError: GC overhead limit exceeded`。

  解決策: xsLogAnalyzer ツールは Java 仮想マシン (JVM) 内で実行されます。**xsLogAnalyzer** ツールの実行時に、ある設定を指定することで、ヒープ・サイズを大きくするよう JVM を構成してから、ツールを実行することができます。ヒープ・サイズを大きくすることで、より多くのイベント・レコードを JVM メモリー内に保管できるようになります。オペレーティング・システムに十分なメイン・メモリーがあれば、最初は 2048M を設定してはじめてください。**xsLogAnalyzer** ツールを実行するのと同じコマンド行インスタンスで、次のように最大 JVM ヒープ・サイズを設定します。

  ```
  java -Xmx HEAP_SIZE m
  ```

  HEAP_SIZE 値は、任意の整数にでき、JVM ヒープに割り振られるメガバイト数を表します。 例えば、`java -Xmx2048m` を実行できます。 メモリー不足メッセージが続く場合、または 2048m 以上のメモリーを割り振るためのリソースがない場合は、ヒープ内に保持するイベントの数を制限してください。**-maxRecords** パラメーターを **xsLogAnalyzer** コマンドに渡すと、ヒープ内のイベントの数を制限できます。

- **問題: xsLogAnalyzer** ツールで生成されたレポートを開くと、ブラウザーがハングするか、ページが読み込まれない。

  原因: 生成された HTML ファイルが大きすぎるため、ブラウザーが読み込むことができません。これらのファイルが大きい理由は、分析対象のログ・ファイルの範囲が広すぎるためです。

  解決策: xsLogAnalyzer ツールを実行するときに **-startTime**、**-endTime**、および **-maxRecords** パラメーターを使用して、スキャンするログ・エントリーの数を制

限することを検討してください。レポートを実行するときにこれらのパラメーターを使用すると、レポートが見やすくなるうえ、レポートをより効率的に実行できます。同一セットのログ・ファイルを対象に複数のレポートを実行できます。

製品インストールのトラブルシューティング

IBM Installation Manager は多くの IBM ソフトウェア製品のための共通インストーラーです。このバージョンの WebSphere eXtreme Scale をインストールするには、このインストーラーを使用します。

タスクの結果

ロギングおよびトレースに関する注記:

- Installation Manager を開いて「**ファイル**」>「**ログの表示**」をクリックすると、ログを簡単に表示できます。表内のログ・ファイルを個々に選択して、「**ログ・ファイルを開く**」アイコンをクリックすることにより、個々のログ・ファイルを開くことができます。
- ログは、Installation Manager のアプリケーション・データ・ロケーションの `logs` ディレクトリーにあります。次に例を示します。
  - Windows **管理インストール:**

```
C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager
```

  - Windows **非管理インストール:**

```
C:¥Documents and Settings¥user_name¥Application Data¥IBM¥Installation Manager
```

  - UNIX Linux **管理インストール:**

```
/var/IBM/InstallationManager
```

  - UNIX Linux **非管理インストール:**

```
user_home/var/ibm/InstallationManager
```

- メイン・ログ・ファイルは、タイム・スタンプが記されている XML ファイルで、`logs` ディレクトリーにあります。これらのログ・ファイルは、任意の標準 Web ブラウザーを使用して表示できます。
- `logs` ディレクトリー内の `log.properties` ファイルは、 Installation Manager が使用するロギングまたはトレースのレベルを指定します。WebSphere eXtreme Scale プラグインのトレースをオンにするには、例えば、以下のような内容の `log.properties` ファイルを作成します。

```
com.ibm.ws=DEBUG
com.ibm.cic.agent.core.Engine=DEBUG
global=DEBUG
```

必要に応じて Installation Manager を再始動します。 Installation Manager によって、WebSphere eXtreme Scale プラグインのトレースが出力されます。

トラブルシューティングに関する注記:

- UNIX Linux デフォルトで、一部の HP-UX システムは、ホスト名の解決に DNS を使用しないように構成されます。その場合、Installation Manager は外部のリポジトリーに接続できない場合があります。

  リポジトリーを ping することはできますが、nslookup は何も返しません。

システム管理者と相談して、DNS を使用するようにご使用のマシンを構成するか、またはリポジトリーの IP アドレスを使用してください。

- 場合によっては、Installation Manager の既存のチェック・メカニズムを迂回する必要がある場合もあります。
  - 一部のネットワーク・ファイル・システムでは、ディスク・スペースが正しく報告されない場合があります。この場合、ディスク・スペース・チェックを迂回して、インストールを続行する必要があります。

    ディスク・スペース・チェックを使用不可にするには、 *IM_install_root*/eclipse/configuration の config.ini ファイルで以下のシステム・プロパティーを指定して、Installation Manager を再始動します。

```
cic.override.disk.space=sizeunit
```

    ここで *size* は正整数です。*unit* は、バイトの場合は空白、キロの場合は k、メガバイトの場合は m、ギガバイトの場合は g です。例:

```
cic.override.disk.space=120 (120 バイト)
cic.override.disk.space=130k (130 キロバイト)
cic.override.disk.space=140m (140 メガバイト)
cic.override.disk.space=150g (150 ギガバイト)
cic.override.disk.space=true
```

    Installation Manager は Long.MAX_VALUE のディスク・スペース・サイズを報告します。使用可能なディスク・スペースが非常に大容量の場合は、表示されずに N/A が表示されます。
  - オペレーティング・システムの前提条件チェックを迂回するには、disableOSPrereqChecking=true を *IM_install_root*/eclipse/configuration の config.ini ファイルに追加して、Installation Manager を再始動します。

  これらの迂回メソッドのいずれかを使用する必要がある場合は、 Installation Manager チェック・メカニズムを迂回しないソリューションの開発における支援を受けるため、IBM サポートにお問い合わせください。
- Installation Manager の使用について詳しくは、IBM Installation Manager バージョン 1.5 インフォメーション・センターを参照してください。

  Installation Manager の最新バージョンの詳細については、リリース情報を参照してください。リリース情報にアクセスするには、以下のタスクを実行します。
  - Windows 「**スタート**」>「**プログラム**」>「**IBM Installation Manager**」>「**リリース情報**」をクリックします。
  - UNIX Linux Installation Manager がインストールされているディレクトリーにある文書サブディレクトリーに移動し、readme.html ファイルを開きます。
- 製品をインストールしようとしている時に致命的エラーが生じた場合は、以下の手順に従ってください。
  - IBM サポートが後で確認する必要が生じる場合があるので、現在の製品インストール・ディレクトリーのバックアップ・コピーを取ってください。
  - Installation Manager を使用して、製品のインストール・ロケーション (パッケージ・グループ) にインストールしたものをすべてアンインストールします。このときエラーが生じる可能性もありますが、無視しても支障ありません。
  - 製品のインストール・ディレクトリーに残っているものをすべて削除します。

– Installation Manager を使用し、同じロケーションか新しいロケーションに製品を再インストールします。

バージョンおよびヒストリー情報に関する注記: **versionInfo** コマンドおよび **historyInfo** コマンドは、システム上で実行されるインストール、アンインストール、更新、および、ロールバックのすべてのアクティビティーに基づいて、バージョンとヒストリー情報を戻します。

クライアント接続のトラブルシューティング

Java

次のセクションで説明するとおり、ユーザーが解決できるクライアントおよびクライアント接続に固有の共通問題がいくつかあります。

手順

- **問題:** EntityManager API を使用するか、バイト配列マップを COPY_TO_BYTES コピー・モードで使用すると、クライアントのデータ・アクセス・メソッドがさまざまなシリアライゼーション関連の例外または NullPointerException 例外になる。
  – COPY_TO_BYTES コピー・モードを使用すると、次のエラーが発生します。

```
java.lang.NullPointerException
        at com.ibm.ws.objectgrid.map.BaseMap$BaseMapObjectTransformer2.inflateObject(BaseMap.java:5278)
        at com.ibm.ws.objectgrid.map.BaseMap$BaseMapObjectTransformer.inflateValue(BaseMap.java:5155)
```

  – EntityManager API を使用すると、次のエラーが発生します。

```
java.lang.NullPointerException
  at com.ibm.ws.objectgrid.em.GraphTraversalHelper.fluffFetchMD(GraphTraversalHelper.java:323)
  at com.ibm.ws.objectgrid.em.GraphTraversalHelper.fluffFetchMD(GraphTraversalHelper.java:343)
  at com.ibm.ws.objectgrid.em.GraphTraversalHelper.getObjectGraph(GraphTraversalHelper.java:102)
  at com.ibm.ws.objectgrid.ServerCoreEventProcessor.getFromMap(ServerCoreEventProcessor.java:709)
  at com.ibm.ws.objectgrid.ServerCoreEventProcessor.processGetRequest(ServerCoreEventProcessor.java:323)
```

  原因: EntityManager API と COPY_TO_BYTES コピー・モードは、データ・グリッドに組み込まれているメタデータ・リポジトリーを使用します。クライアントが接続すると、データ・グリッドはリポジトリー ID をクライアントに格納し、クライアント接続の期間中、その ID をキャッシュに入れます。データ・グリッドを再始動すると、すべてのメタデータが失われ、再生成される ID はクライアント上にあるキャッシュに入れられた ID と一致しません。

  解決策: EntityManager API または COPY_TO_BYTES コピー・モードを使用する場合、ObjectGrid を停止して再始動するときは、すべてのクライアントを切断してから再接続してください。クライアントを切断して再接続すると、メタデータ ID キャッシュがリフレッシュされます。クライアントを切断するには、ObjectGridManager.disconnect メソッドまたは ObjectGrid.destroy メソッドを使用できます。

- **問題:** getObjectGrid メソッド呼び出しの間にクライアントがハングする。

  ObjectGridManager の getObjectGrid メソッドの呼び出し中にクライアントがハングしているように見えたり、例外 com.ibm.websphere.projector.MetadataException がスローされたりすることがあります。EntityMetadata リポジトリーは使用できず、タイムアウトしきい値に達します。

原因: 理由は、クライアントが ObjectGrid サーバー上のエンティティー・メタデータが使用可能になるのを待っているためです。

解決策: このエラーは、コンテナー・サーバーは開始されていても、配置がまだ開始されていない場合に発生することがあります。次のアクションを実行してください。

- ObjectGrid のデプロイメント・ポリシーを参照し、アクティブ・コンテナーの数が、デプロイメント・ポリシー記述子ファイルの numInitialContainers 属性および minSyncReplicas 属性の両方の値以上であることを確認してください。
- コンテナー・サーバーのサーバー・プロパティー・ファイルにある **placementDeferralInterval** プロパティーの設定を調べて、配置操作が発生するまでに必要な経過時間を確認してください。
- **xscmd -c suspendBalancing** コマンドを使用して、特定のデータ・グリッドおよびマップ・セットの断片のバランシングを停止した場合、**xscmd -c resumeBalancing** を使用して、バランシングを再度開始してください。

関連概念:

Java 387 ページの『ObjectGridManager インターフェースを使用した ObjectGrid インスタンスの作成』
これらのメソッドはそれぞれ、ObjectGrid のローカル・インスタンスを 1 つ作成します。

キャッシュ統合のトラブルシューティング

HTTP セッションや動的キャッシュ構成など、キャッシュ統合構成の問題をトラブルシューティングする場合、この情報を使用してください。

手順

- **問題:** HTTP セッション ID が再使用されない。

  原因: セッション ID は再使用できます。セッション・パーシスタンスのデータ・グリッドをバージョン 7.1.1 以上で作成すると、セッション ID の再使用は自動的に有効になります。しかし、それより前の構成で作成した場合、この設定が既に誤った値で設定されている可能性があります。

  解決策: 次の設定をチェックして、HTTP セッション ID の再使用が有効であるか確認します。

  - `splicer.properties` ファイルの `reuseSessionId` プロパティーは、`true` に設定する必要があります。
  - `HttpSessionIdReuse` カスタム・プロパティー値は、`true` に設定する必要があります。このカスタム・プロパティーは、WebSphere Application Server 管理コンソールの次のいずれかのパスで設定されている可能性があります。
    - **「サーバー」** > ***「server_name」*** > **「セッション管理」** > **「カスタム・プロパティー」**
    - **「動的クラスター」** > ***「dynamic_cluster_name」*** > **「サーバー・テンプレート」** > **「セッション管理」** > **「カスタム・プロパティー」**
    - **「サーバー」** > **「サーバー・タイプ」** > **「WebSphere Application Server」** > ***「server_name」*** を選択してから、「サーバー・インフラストラ

クチャー」セクションの下で次の順にクリックします。「**Java およびプロセス管理**」 > 「**プロセス定義**」 > 「**Java 仮想マシン**」 > 「**カスタム・プロパティー**」

- 「**サーバー**」 > 「**サーバー・タイプ**」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「*server_name*」 > 「**Web コンテナー設定**」 > 「**Web コンテナー**」

カスタム・プロパティー値を更新した場合、eXtreme Scale セッション管理を再構成し、splicer.properties ファイルが変更を認識できるようにしてください。

- **問題:** データ・グリッドを使用して HTTP セッションを保管する際、トランザクションの負荷が高いと SystemOut.log ファイルに CWOBJ0006W メッセージが出力される。

```
CWOBJ0006W: 例外が発生しました:
com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException:
java.util.ConcurrentModificationException
```

このメッセージは、splicer.properties ファイル内の **replicationInterval** パラメーターの値がゼロより大きい値に設定されていて、かつ Web アプリケーションが HTTPSession の属性として設定された List オブジェクトを変更した場合にのみ発生します。

解決策: 変更された List オブジェクトを含んでいる属性を複製し、複製した属性をセッション・オブジェクトに設定します。

- 8.6+ **問題:** Web アプリケーションを Servlet 3.0 仕様で実行しているとき、Web アプリケーションのフィルターとリスナーが WebSphere eXtreme Scale セッション管理によって起動されません。例えば、WebSphere eXtreme Scale でリモート・コンテナー除去を使用してセッションが無効化されると、リスナーがコールバックされません。

原因: WebSphere eXtreme Scale は、アノテーションを使用して定義されたりプログラマチックに定義されたりしたフィルターやリスナーを特定しません。

解決策: フィルターやリスナーは、Web アプリケーションの web.xml ファイルで明示的に宣言する必要があります。

関連資料:

HTTP セッション・マネージャー構成のための XML ファイル
HTTP セッション・データを保管するコンテナー・サーバーを始動するときは、デフォルトの XML ファイルを使用することもできるし、カスタマイズされた XML ファイルを指定することもできます。これらのファイルは、特定の ObjectGrid 名、レプリカ数などを作成します。

サーブレット・コンテキスト初期化パラメーター
以下に示すサーブレット・コンテキスト初期化パラメーターのリストは、選択した接続メソッドで必要なスプライサー・プロパティー・ファイルに指定できるものです。

`splicer.properties` ファイル
`splicer.properties` ファイルには、サーブレット・フィルター・ベースのセッション・マネージャーを構成するための、すべての構成オプションが含まれます。

JPA キャッシュ・プラグインのトラブルシューティング

Java

JPA キャッシュ・プラグイン構成の問題をトラブルシューティングする場合、この情報を使用してください。これらの問題は、Hibernate 構成と OpenJPA 構成のどちらでも発生する可能性があります。

手順

- **問題:** 次の例外が表示される: `CacheException: ObjectGrid サーバーを取得できません。`

  `EMBEDDED` または `EMBEDDED_PARTITION` **`ObjectGridType`** 属性値を指定している場合、eXtreme Scale キャッシュは、ランタイムからサーバー・インスタンスを取得しようとします。Java Platform, Standard Edition 環境では、組み込みカタログ・サービスを持つ eXtreme Scale サーバーが始動されます。組み込みカタログ・サービスは、ポート 2809 を listen しようとします。そのポートを別のプロセスが使用している場合、エラーが発生します。

  解決策: 外部カタログ・サービス・エンドポイントが、例えば、`objectGridServer.properties` ファイルにより指定されている場合、ホスト名またはポートの指定に誤りがあると、このエラーが発生します。ポートの競合を修正してください。
- **問題:** 次の例外が表示される: `CacheException: 構成済みの REMOTE ObjectGrid に対して REMOTE ObjectGrid を取得できません。objectGridName = [ObjectGridName]、PU 名 = [persistenceUnitName]`

  このエラーは、指定されたカタログ・サービス・エンドポイントからキャッシュが ObjectGrid インスタンスを取得できないために発生します。

  解決策: この問題は、一般的にホスト名またはポートに誤りがあるために発生します。

- **問題:** 次の例外が表示される: CacheException: 2 つの PU [persistenceUnitName_1, persistenceUnitName_2] を EMBEDDED ObjectGridType の同一の ObjectGridName [ObjectGridName] では構成できません。

  多数のパーシスタンス・ユニットが構成されている場合に、これらのユニットの eXtreme Scale キャッシュが同じ ObjectGrid 名および EMBEDDED **ObjectGridType** 属性値で構成されていると、この例外が発生します。これらのパーシスタンス・ユニット構成は、同じまたは異なる persistence.xml ファイルに入れることができます。

  解決策: ObjectGridType 属性値が EMBEDDED の場合、各パーシスタンス・ユニットの ObjectGrid 名が固有であることを確認する必要があります。
- **問題:** 次の例外が表示される: CacheException: REMOTE ObjectGrid [ObjectGridName] に必要な BackingMaps [mapName_1, mapName_2,...] が含まれていません。

  REMOTE ObjectGrid タイプの場合、取得されたクライアント・サイド ObjectGrid に、パーシスタンス・ユニットのキャッシュをサポートするエンティティー・パッキング・マップが完全に揃っていないと、この例外が発生します。例えば、パーシスタンス・ユニット構成に 5 つのエンティティー・クラスがリストされているが、取得された ObjectGrid には 2 つの BackingMap しかない場合などです。取得された ObjectGrid に 10 の BackingMap があったとしても、必要な 5 つのエンティティー BackingMap のいずれかがその 10 の BackingMap 内で見つからないと、やはりこの例外が発生します。

  解決策: パッキング・マップ構成が、パーシスタンス・ユニットのキャッシュをサポートすることを確認してください。

IBM eXtremeMemory のトラブルシューティング

以下の情報を使用して、eXtremeMemory のトラブルシューティングを行います。

手順

問題: 共有リソース libstdc++.so.5 がインストールされていない場合、コンテナー・サーバーを始動したときに、IBM eXtremeMemory ネイティブ・ライブラリーがロードされない。

Linux **症状:** Linux 64 ビット・オペレーティング・システムで、enableXM サーバー・プロパティーを true に設定してコンテナー・サーバーを始動しようとすると、libstdc++.so.5 共有リソースがインストールされていなければ、次の例のようなエラーを受け取ります。

```
00000000 Initialization W CWOBJ0006W: An exception occurred: java.lang.reflect.InvocationTargetException
 at sun.reflect.NativeConstructorAccessorImpl.newInstance0(Native Method)
 at sun.reflect.NativeConstructorAccessorImpl.newInstance(NativeConstructorAccessorImpl.java:56)
 at sun.reflect.DelegatingConstructorAccessorImpl.newInstance(DelegatingConstructorAccessorImpl.java:39)
 at java.lang.reflect.Constructor.newInstance(Constructor.java:527)
 at com.ibm.websphere.objectgrid.server.ServerFactory.initialize(ServerFactory.java:350)
 at com.ibm.websphere.objectgrid.server.ServerFactory$2.run(ServerFactory.java:303)
 at java.security.AccessController.doPrivileged(AccessController.java:202)
 at com.ibm.websphere.objectgrid.server.ServerFactory.getInstance(ServerFactory.java:301)
 at com.ibm.ws.objectgrid.InitializationService.main(InitializationService.java:302)

Caused by: com.ibm.websphere.objectgrid.ObjectGridRuntimeException: java.lang.UnsatisfiedLinkError:
 OffheapMapdbg (Not found in java.library.path)
 at com.ibm.ws.objectgrid.ServerImpl.<init&gt;(ServerImpl.java:1033)
... 9 more Caused by: java.lang.UnsatisfiedLinkError: OffheapMapdbg (Not found in java.library.path)
```

```
 at java.lang.ClassLoader.loadLibraryWithPath(ClassLoader.java:1011)
 at java.lang.ClassLoader.loadLibraryWithClassLoader(ClassLoader.java:975)
 at java.lang.System.loadLibrary(System.java:469)
 at com.ibm.ws.objectgrid.io.offheap.ObjectGridHashTableOH.initializeNative(ObjectGridHashTableOH.java:112)
 at com.ibm.ws.objectgrid.io.offheap.ObjectGridHashTableOH.<clinit&gt;(ObjectGridHashTableOH.java:87)
 at java.lang.J9VMInternals.initializeImpl(Native Method)
 at java.lang.J9VMInternals.initialize(J9VMInternals.java:200)
 at com.ibm.ws.objectgrid.ServerImpl.<init&gt;(ServerImpl.java:1028)
... 9 more
```

原因: 共有リソース `libstdc++.so.5` がインストールされていません。
問題の診断: リソース `libstdc++.so.5` がインストールされていることを確認するには、インストール済み環境の ObjectGrid/native ディレクトリーから次のコマンドを発行します。

```
ldd libOffheapMap.so
```

共有ライブラリーをインストールしていない場合、次のエラーを受け取ります。

```
ldd libOffheapMap.so
libstdc++.so.5 => not found
```

問題の解決: 64 ビットの Linux ディストリビューションのパッケージ・インストーラーを使用して、必要なリソース・ファイルをインストールします。パッケージは、`compat-libstdc++-33.x86_64` または `libstdc++5` としてリストされていることもあります。必要なリソースをインストールした後、インストール済み環境の ObjectGrid ディレクトリーから次のコマンドを発行して、`libstdc++5` パッケージがインストールされていることを確認します。

```
ldd libOffheapMap.so
```

管理のトラブルシューティング

サーバーの開始や停止、**xscmd** ユーティリティーの使用など、管理についてのトラブルシューティングを行う場合、この情報を使用してください。

手順

- **問題:** WebSphere Application Server インストール済み環境の *profile_root*/bin ディレクトリーに管理スクリプトがない。

  原因: インストール済み環境を更新しても、新しいスクリプト・ファイルは自動的にはプロファイルにインストールされません。

  解決策: *profile_root*/bin ディレクトリーからスクリプトを実行する必要がある場合、プロファイルを拡張解除し、最新のリリースで拡張し直してください。詳しくは、コマンド・プロンプトを使用したプロファイルの拡張解除と WebSphere eXtreme Scale のプロファイルの作成および拡張を参照してください。

- **問題:** **xscmd** コマンドの実行時に次のメッセージが画面に表示される。

```
java.lang.IllegalStateException: Placement service MBean not available.
[]
        at
com.ibm.websphere.samples.objectgrid.admin.OGAdmin.main(OGAdmin.java:1449)
        at sun.reflect.NativeMethodAccessorImpl.invoke0(Native Method)
        at
sun.reflect.NativeMethodAccessorImpl.invoke(NativeMethodAccessorImpl.java:60)
        at
sun.reflect.DelegatingMethodAccessorImpl.invoke(DelegatingMethodAccessorImpl.java:37)
        at java.lang.reflect.Method.invoke(Method.java:611)
        at com.ibm.ws.bootstrap.WSLauncher.main(WSLauncher.java:267)
Ending at: 2011-11-10 18:13:00.000000484
```

原因: カタログ・サーバーで接続の問題が発生しました。

解決策: カタログ・サーバーが実行中であり、ネットワーク経由で使用可能なことを確認します。このメッセージは、カタログ・サービス・ドメインが定義されている場合に、実行中のカタログ・サーバーが 2 つより少ないとき発生することもあります。そのような環境は、2 つのカタログ・サーバーが開始されるまで使用できません。

- **問題:** **xscmd** コマンドの実行時に次のメッセージが画面に表示される。

  CWXSI0066E: 一致しない引数 *argument_name* が検出されました。

  原因: 入力されたコマンド・フォーマットは **xscmd** ユーティリティーによって認識されませんでした。

  解決策: コマンドのフォーマットを確認してください。 **-c findbyKey** コマンドを使用して正規表現を実行するときに、この問題が発生する可能性があります。詳しくは、データの照会、表示、および無効化を参照してください。

- 8.6+ **問題:** 始動、停止、および **xscmd** コマンドがすべて java.lang.UnsupportedClassVersionError エラーで失敗します。

  例えば、始動、停止、または **xscmd** ユーティリティー・コマンドを使用しているときには、次のいずれかのエラーが表示されることがあります。

  ```
  The java class could not be loaded. java.lang.UnsupportedClassVersionError:
  (com/ibm/ws/xs/admin/wxscli/WXSAdminCLI) bad major version at offset=6
  ```

  ```
  The java class could not be loaded. java.lang.UnsupportedClassVersionError:
  (com/ibm/ws/objectgrid/server/impl/ProcessLauncher) bad major version at offset=6
  ```

  原因: コマンドが WebSphere eXtreme Scale でサポートされていない Java バージョンで実行しています。

  解決策: サポートされている Java Development Kit (JDK) インストール済み環境を指すように *JAVA_HOME* 環境変数を更新してください。サポートされている JDK バージョンおよび JDK の更新方法については、341 ページの『Java SE の考慮事項』を参照してください。

関連概念:

例: カタログ・サービス・ドメインの構成
カタログ・サービスを使用する場合、単一障害点を回避するには少なくとも 2 台のカタログ・サーバーが必要です。少なくとも 2 台のカタログ・サーバーが常に実行されているようにするために、環境内のノード数に応じてさまざまな構成を作成することができます。

管理

データ・モニターのトラブルシューティング

この情報を使用して、アプリケーション環境のパフォーマンスをモニターするために WebSphere eXtreme Scale Web コンソールまたはその他のユーティリティーを使用して実行するモニター・アクティビティーをトラブルシューティングします。

手順

問題: WebSphere eXtreme Scale Web コンソールで、セキュリティー設定が異なるドメイン間でドメインを切り替えることができない。
2 つの非セキュア・ドメイン間でドメインを切り替えることはできます。また、同じセキュリティーが構成された 2 つのセキュア・ドメイン間でドメインを切り替えることもできます。しかし、非セキュア・ドメインとセキュア・ドメインの間、およびセキュリティー設定が異なる 2 つのセキュア・ドメイン間でドメインを切り替えることができません。
診断: **startOgServer** コマンドを使用して、2 つの異なるカタログ・サーバーを別個のドメインで始動します。各カタログ・サーバーは互いを認識していません。ただし、両方のカタログ・サーバーは、同じドメイン名で始動されます。ドメイン名を指定しなかった場合は、両方のカタログ・サーバーは、デフォルト名 DefaultDomain を使用して、異なるドメインで始動されます。また、モニター・コンソールには、カタログ・サーバー・ドメインの一方のデータのみが表示されます。
原因: モニター・コンソールでドメインを切り替えると、2 番目のドメインに接続されます。しかし、そのドメインのグリッド・データが表示されず、最初のドメインのグリッド・データが表示されたままになります。そのため、実行時に、両方のカタログ・サーバーは、名前 DefaultDomain を使用して、別個のドメインで実行されます。
解決策: カタログ・サーバーが 2 つのドメインで始動される際に使用されるドメイン名を判別します。ドメイン名を識別するには、**startOgServer** コマンド構文を分析して、指定されているドメインを調べます。
この問題のシナリオはサポートされないため、以下のアクションを実行して、正しいカタログ・サービス・ドメイン統計を表示します。

1. カタログ・サーバーをシャットダウンし、固有のドメイン名を使用して始動されるように構成されていることを確認します。
2. モニター・コンソールを再始動します。
3. オプション: 停止することができない場合は、別のモニター・コンソールを実行して 2 番目のドメインをモニターすることを検討してください。

複数データ・センター構成のトラブルシューティング

カタログ・サービス・ドメイン間のリンクなど、複数データ・センター構成に関する問題をトラブルシューティングする場合、この情報を使用してください。

始める前に

複数データ・センター構成をトラブルシューティングするには、**xscmd** ユーティリティーを使用する必要があります。詳しくは、**xscmd** ユーティリティーによる管理を参照してください。

手順

- 8.6+ **問題:** コンテナー・サーバーおよびカタログ・サービス・ドメイン間でデータ複製が同期されているかを判別する必要がある。

  解決策: xscmd -c showReplicationState または **xscmd.sh -c showDomainReplicationState** コマンドを実行します。これらのコマンドでは、環

境内の複製の状況に関する情報が表示されます。詳しくは、**xscmd** ユーティリティーによるモニターを参照してください。

- 8.6+ **問題:** ローカル・カタログ・サービス・ドメインにリンクされているカタログ・サービス・ドメインを確認する必要がある。

  解決策: **xscmd -c showLinkedDomains** コマンドを実行します。このコマンドは、ローカル・カタログ・サービス・ドメインにリンクされている外部カタログ・サービス・ドメインをリストします。

- 8.6+ **問題:** **xscmd -c showLinkedPrimaries** コマンドの出力全体を調べることなく、カタログ・サービス・ドメインへのプライマリー断片リンクの構成の問題を検出したい。

  解決策: **xscmd -hc** または **xscmd --linkHealthCheck** オプションを使用します。コマンドでは、プライマリー断片に適切な数のカタログ・サービス・ドメイン・リンクがあるかが検査されます。コマンドでは、リンクの数が正しくないプライマリー断片がリストされます。すべてが正しくリンクされている場合 (たとえば、ドメインが他の 1 つのドメインにリンクされている場合は、すべての個別プライマリー断片は 1 つのリンクを持っている必要があります)、以下のようなリンクされているというメッセージが表示されます。

```
CWXSI0092I: {0} データ・グリッドおよび {1} マップ・セットのすべてのプライマリー断片が、
外部プライマリー断片への正しい数のリンクを保有しています。
```

  問題がディスカバーされた場合は、以下の考えられる解決策を試してください。

  - ネットワークおよびファイアウォールの設定を確認し、ドメイン内のコンテナー・サーバーをホストしているサーバーが相互に通信できることを確認します。
  - リンクが正しくないプライマリー断片の SystemOut ログおよび FFDC ログで、より具体的なエラー・メッセージがないかを確認します。
  - ドメイン間のリンクを解除し、再確立します。

- **問題:** 1 つ以上のカタログ・サービス・ドメインのデータが欠落している。例えば、**xscmd -c establishLink** コマンドを実行したとします。リンクされた各カタログ・サービス・ドメインのデータを見ると、例えば **xscmd -c showMapSizes** コマンドの結果とデータが異なるような場合があります。

  解決策: この問題は、**xscmd -c showLinkedPrimaries** コマンドを使用してトラブルシューティングできます。このコマンドは、リンクされている外部プライマリーを含め、各プライマリー断片を表示します。

  前述のシナリオの場合、**xscmd -c showLinkedPrimaries** コマンドを実行することで、最初のカタログ・サービス・ドメインのプライマリー断片は 2 番目のカタログ・サービス・ドメインのプライマリー断片にリンクされていても、2 番目のカタログ・サービス・ドメインから最初のカタログ・サービス・ドメインへのリンクが存在しないことを発見できることがあります。そのような場合、2 番目のカタログ・サービス・ドメインから最初のカタログ・サービス・ドメインに対し、**xscmd -c establishLink** コマンドを再実行することもできます。

ローダーのトラブルシューティング

Java

データベース・ローダーの問題をトラブルシューティングする場合、この情報を使用してください。

手順

- **問題:** ローダーがデータベースと通信できません。 LoaderNotAvailableException 例外が発生します。

  説明: ローダー・プラグインは、バックエンド・データベースと通信できない場合、失敗することがあります。この障害は、データベース・サーバーまたはネットワーク接続がダウンしている場合に発生することがあります。後書きローダーは、更新をキューに入れ、データ変更を定期的にローダーにプッシュしようと試みます。ローダーは、LoaderNotAvailableException 例外をスローして、データベース接続の問題があることを ObjectGrid ランタイムに通知しなければなりません。

  解決策: ローダー実装で、データ障害または物理的ローダー障害を識別できるようになっている必要があります。データ障害は LoaderException または OptimisticCollisionException としてスローまたは再スローされる必要がありますが、物理的なローダーの障害は LoaderNotAvailableException としてスローまたは再スローされる必要があります。 ObjectGrid は、これら 2 つの例外を異なる方法で処理します。

  – LoaderException が後書きローダーによってキャッチされると、後書きローダーはその例外を、重複キー障害などの障害とみなします。後書きローダーは、更新のバッチ処理を解除し、データ障害を分離するために一度に 1 レコードずつ更新しようとします。 1 レコードの更新時に再度 {{LoaderException}} がキャッチされると、失敗した更新レコードが作成され、失敗した更新マップのログに記録されます。

  – LoaderNotAvailableException が後書きローダーによってキャッチされると、データベース・エンドに接続できない (例えば、データベース・バックエンドがダウンしている、データベース接続が使用可能でない、ネットワークがダウンしているなど) ため、後書きローダーはそれを障害とみなします。後書きローダーは 15 秒待ってから、データベースへのバッチ更新を再試行します。

  一般的な間違いは、LoaderNotAvailableException がスローされるべきなのに、LoaderException がスローされることです。後書きローダーでキューに入れられたすべてのレコードは、失敗更新レコードとなります。このような場合、バックエンド障害分離の目的が果たせなくなります。

- **問題:** WebSphere Application Server 内で OpenJPA ローダーと DB2 を使用すると、カーソルのクローズ例外が発生する。

  DB2 からの次の例外が org.apache.openjpa.persistence.PersistenceException ログ・ファイルに出力されます。

  ```
  [jcc][t4][10120][10898][3.57.82] Invalid operation: result set is closed.
  ```

解決策: デフォルトで、アプリケーション・サーバーは resultSetHoldability カスタム・プロパティーを値 2 (CLOSE_CURSORS_AT_COMMIT) で構成します。このプロパティーにより、DB2 はトランザクション境界でその resultSet/カーソルを閉じます。この例外を除去するには、カスタム・プロパティーの値を 1 (HOLD_CURSORS_OVER_COMMIT) に変更してください。 WebSphere Application Server セルの次のパスで、resultSetHoldability カスタム・プロパティーを設定します。「**リソース**」 > 「**JDBC プロバイダー**」 > 「**DB2 Universal JDBC Driver Provider**」 > 「**データ・ソース**」 > 「***data_source_name***」 > 「**カスタム・プロパティー**」 > 「**新規**」。

- **問題:** DB2 が次の例外を表示する: デッドロックまたはタイムアウトのため、現在のトランザクションがロールバックされました。理由コード "2"..
  SQLCODE=-911, SQLSTATE=40001, DRIVER=3.50.152

  この例外が発生する原因は、WebSphere Application Server 内で OpenJPA と DB2 を実行中に生じるロック競合の問題です。WebSphere Application Server のデフォルトの分離レベルは反復可能読み取り (RR) で、これは DB2 の長期ロックを獲得します。**解決策:**

  分離レベルを読み取りコミット済みに設定して、ロック競合を減らしてください。WebSphere Application Server セルの次のパスで、データ・ソースの webSphereDefaultIsolationLevel カスタム・プロパティーを設定し、分離レベルを 2 (TRANSACTION_READ_COMMITTED) に設定します。「**リソース**」 > 「**JDBC プロバイダー**」 > 「***JDBC_provider***」 > 「**データ・ソース**」 > 「***data_source_name***」 > 「**カスタム・プロパティー**」 > 「**新規**」。 webSphereDefaultIsolationLevel カスタム・プロパティーとトランザクション分離レベルの詳細については、データ・アクセスの分離レベル設定の要件を参照してください。

- **問題:** JPALoader または JPAEntityLoader のプリロード機能を使用している際、コンテナー・サーバー内の区画に対して、次の CWOBJ1511 メッセージが表示されない。CWOBJ1511I: GRID_NAME:MAPSET_NAME:PARTITION_ID (プライマリー) が作動可能になっています。

  代わりに、preloadPartition プロパティーで指定された区画をアクティブにするコンテナー・サーバーで TargetNotAvailableException 例外が発生します。

  解決策: JPALoader または JPAEntityLoader を使用してデータをマップにプリロードする場合、preloadMode 属性を `true` に設定してください。 JPALoader または JPAEntityLoader の preloadPartition プロパティーを `0` から `total_number_of_partitions - 1` の範囲の値に設定すると、JPALoader または JPAEntityLoader は、バックエンド・データベースからデータをマップにプリロードしようとします。以下のコード・スニペットは、非同期プリロードが有効になるよう preloadMode 属性を設定する方法を表しています。

  ```
  BackingMap bm = og.defineMap( "map1" );
  bm.setPreloadMode( true );
  ```

  preloadMode 属性は、次の例に示すように、XML ファイルを使用して設定することもできます。

  ```
  <backingMap name="map1" preloadMode="true" pluginCollectionRef="map1"
   lockStrategy="OPTIMISTIC" />
  ```

関連概念:

718 ページの『JPA 統合のためのプログラミング』
Java Persistence API (JPA) は、 Java オブジェクトをリレーショナル・データベースにマップするための仕様です。JPA には、Java 言語メタデータ・アノテーション、XML 記述子、またはその両方を使用して、Java オブジェクトとリレーショナル・データベースとの間のマッピングを定義するための、完全なオブジェクト・リレーショナル・マッピング (ORM) 仕様が含まれています。オープン・ソースおよび商用の実装がいくつか使用できます。

キャッシュ統合の構成
WebSphere eXtreme Scale を他のキャッシュ関連製品と統合することができます。また、WebSphere eXtreme Scale 動的キャッシュ・プロバイダーを使用して、WebSphere eXtreme Scale を WebSphere Application Server 内の動的キャッシュ・コンポーネントに接続することもできます。 WebSphere Application Server に対する拡張としてもう 1 つ考えられるのは、 HTTP セッションをキャッシュに入れる操作を支援する WebSphere eXtreme Scale HTTP セッション・マネージャーです。

XML 構成のトラブルシューティング

eXtreme Scale の構成時に、XML ファイルで予想外の動作が発生する場合があります。次のセクションでは、起こり得る問題と解決策について説明します。

手順

- **問題:** デプロイメント・ポリシーと ObjectGrid XML ファイルは一致している必要があります。

  デプロイメント・ポリシーと ObjectGrid XML ファイルは一致している必要があります。一致する ObjectGrid 名およびマップ名がない場合には、エラーが発生します。

  ObjectGrid XML ファイル内の backingMap リストがデプロイメント・ポリシー XML ファイル内のマップ参照リストと一致しない場合は、カタログ・サーバーでエラーが発生します。

  例えば、以下の ObjectGrid XML ファイルおよびデプロイメント・ポリシー XML ファイルはコンテナー・プロセスを開始する場合に使用されます。デプロイメント・ポリシー・ファイルには、ObjectGrid XML ファイルでリストされているマップ参照よりも多くのマップ参照があります。

  ObjectGrid.xml - incorrect example

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="accounting">
            <backingMap name="payroll" readOnly="false" />
        </objectGrid>
    </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

  deploymentPolicy.xml - incorrect example

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<deploymentPolicy xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy ../deploymentPolicy.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/deploymentPolicy">
    <objectgridDeployment objectgridName="accounting">
        <mapSet name="mapSet1" numberOfPartitions="4" minSyncReplicas="1"
     maxSyncReplicas="2" maxAsyncReplicas="1">
```

```
            <map ref="payroll"/>
            <map ref="ledger"/>
        </mapSet>
    </objectgridDeployment>
</deploymentPolicy>
```

メッセージ: デプロイメント・ポリシーが ObjectGrid XML ファイルと非互換である場合、SystemOut.log ファイル内にエラー・メッセージが発生します。上記の例では、以下のようなメッセージが発生します。

```
CWOBJ3179E: ObjectGrid アカウンティング・デプロイメント記述子ファイルの mapSet mapSet1
内にあるマップ元帳参照が、ObjectGrid XML の有効なバッキング・マップを参照していません。
```

デプロイメント・ポリシーで、ObjectGrid XML ファイル内にリストされた backingMap へのマップ参照が欠落している場合、SystemOut.log ファイル内にエラー・メッセージが発生します。以下に例を示します。

```
CWOBJ3178E: ObjectGrid XML 内で参照された ObjectGrid アカウンティングのマップ元帳が
デプロイメント記述子ファイル内で見つかりませんでした。
```

解決策: 正しいリストが入ったファイルを判別し、それに合わせて該当するコードを変更します。

- **問題:** XML ファイルの間で ObjectGrid 名が間違っており、これがエラーも引き起こします。

  ObjectGrid の名前は ObjectGrid XML ファイルおよびデプロイメント・ポリシー XML ファイルの両方で参照されます。

  メッセージ: IncompatibleDeploymentPolicyException の例外が原因となって、ObjectGridException が発生します。以下に例を示します。

  原因: com.ibm.websphere.objectgrid.IncompatibleDeploymentPolicyException: objectGridName が "accountin" の objectgridDeployment には、ObjectGrid XML 内に対応する objectGrid がありません。

  ObjectGrid XML ファイルは ObjectGrid 名のマスター・リストです。デプロイメント・ポリシーに ObjectGrid XML ファイルに含まれていない ObjectGrid 名がある場合、エラーが発生します。

  解決策: ObjectGrid 名のスペルなど、詳細を確認します。ObjectGrid XML ファイルまたはデプロイメント・ポリシー XML ファイルに対し、余分な名前を除去するか、または欠落している ObjectGrid 名を追加します。このメッセージ例では、objectGridName が「accounting」のところが、ミススペルのため「accountin」になっています。
- **問題:** XML ファイルの一部の属性は一定の値のみを割り当てることができます。これらの属性には、スキーマによって列挙された許容値が含まれています。以下のリストには、属性の一部が挙げられています。
  - objectGrid エレメントの authorizationMechanism 属性
  - backingMap エレメントの copyMode 属性
  - backingMap エレメントの lockStrategy 属性
  - backingMap エレメントの ttlEvictorType 属性
  - property エレメントの type 属性
  - objectGrid エレメントの initialState
  - backingMap エレメントの evictionTriggers

これら属性の 1 つに無効値が割り当てられていると、XML 妥当性検査は失敗します。以下の XML ファイルの例では、正しくない値 INVALID_COPY_MODE が使用されています。

INVALID_COPY_MODE example

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="accounting">
            <backingMap name="payroll" copyMode="INVALID_COPY_MODE"/>
        <objectGrid/>
   </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

次のメッセージがログに表示されます。

```
CWOBJ2403E: The XML file is invalid. A problem has been detected
with < null > at line 5. The error message is cvc-enumeration-valid:
Value 'INVALID_COPY_MODE' is not facet-valid with respect to enumeration
'[COPY_ON_READ_AND_COMMIT, COPY_ON_READ, COPY_ON_WRITE, NO_COPY, COPY_TO_BYTES]'.
It must be a value from the enumeration.
```

- **問題:** XML ファイル内の属性またはタグが欠落しているか間違っているため、エラーが発生します。例えば、次の例の ObjectGrid XML ファイルでは、閉じの < /objectGrid > タグが欠落しています。

missing attributes - example XML

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config ../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
    <objectGrids>
        <objectGrid name="accounting">
            <backingMap name="payroll" />

   </objectGrids>
</objectGridConfig>
```

メッセージ:

```
CWOBJ2403E: The XML file is invalid. A problem has been detected with
< null > at line 7. The error message is The end-tag for element type "objectGrid"
must end with a '>' delimiter.
```

無効な XML ファイルに関する ObjectGridException が、XML ファイルの名前で発生します。

解決策: XML ファイル内に、必要なタグと属性が正しい形式で指定されていることを確認します。

- **問題:** XML ファイルが、正しくない構文または欠落している構文でフォーマット済みである場合、CWOBJ2403E がログに表示されます。例えば、XML 属性の 1 つで引用符が欠落している場合、次のメッセージが表示されます。

```
CWOBJ2403E: The XML file is invalid. A problem has been detected with
< null > at line 7. The error message is Open quote is expected for attribute
"maxSyncReplicas" associated with an element type "mapSet".
```

また、無効な XML ファイルに関する ObjectGridException も発生します。

解決策: 示された XML 構文エラーには、さまざまな解決策を使用できます。XML スクリプトの作成について関係する資料を調べてください。

- **問題:** 存在しないプラグイン・コレクションを参照すると、XML ファイルが無効になります。例えば、XML を使用して BackingMap プラグインを定義する場合、backingMap エレメントの pluginCollectionRef 属性は

backingMapPluginCollection を参照する必要があります。pluginCollectionRef 属性は backingMapPluginCollection エレメントと一致している必要があります。

メッセージ:

pluginCollectionRef 属性が backingMapPluginConfiguration エレメントのどの ID 属性とも一致しない場合は、以下のメッセージまたは同様のメッセージがログに表示されます。

```
[7/14/05 14:02:01:971 CDT] 686c060e XmlErrorHandl E CWOBJ9002E:
This is an English only Error message: Invalid XML file. Line: 14; URI:
null; Message: Key 'pluginCollectionRef' with
value 'bookPlugins' not found for identity constraint of
element 'objectGridConfig'.
```

以下の XML ファイルを使用すると、エラーが生じます。BackingMap の名前 book の pluginCollectionRef 属性は bookPlugins に設定され、1 つの backingMapPluginCollection が collection1 の ID を持つことに注意してください。

referencing a non-existent attribute XML - example

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<objectGridConfig xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
 xsi:schemaLocation="http://ibm.com/ws/objectgrid/config../objectGrid.xsd"
 xmlns="http://ibm.com/ws/objectgrid/config">
   <objectGrids>
      <objectGrid name="bookstore">
         <backingMap name="book" pluginCollectionRef="bookPlugin" />
      </objectGrid>
   </objectGrids>
   <backingMapPluginCollections>
    <backingMapPluginCollection id="collection1">
     <bean id="Evictor"
       className="com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.builtins.LRUEvictor" />
     </backingMapPluginCollection>
    </backingMapPluginCollections>
</objectGridConfig>
```

解決策:

問題を修正するには、それぞれの pluginCollectionRef の値が backingMapPluginCollection エレメントのいずれか 1 つの ID に一致するようにしてください。このエラーが発生しないように、pluginCollectionRef の名前を collection1 に変更するだけです。あるいは、既存の backingMapPluginCollection の ID を pluginCollectionRef に一致するように変更するか、または pluginCollectionRef に一致する ID を持つ追加の backingMapPluginCollection を追加してエラーを訂正します。

- **問題:** IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 5 は、スキーマに基づく XML 妥当性検査に使用する Java API for XML Processing (JAXP) 機能の実装を含みます。この実装を含まない SDK を使用する場合、妥当性検査の試みが失敗する場合があります。

  必要な実装を持たない SDK で XML の妥当性検査をしようとすると、ログに以下のエラーが表示されます。

```
XmlConfigBuild XML validation is enabled
SystemErr R com.ibm.websphere.objectgrid
SystemErr R at com.ibm.ws.objectgrid.ObjectGridManagerImpl.getObjectGridConfigurations
 (ObjectGridManagerImpl.java:182)
SystemErr R at com.ibm.ws.objectgrid.ObjectGridManagerImpl.createObjectGrid(ObjectGridManagerImpl.java:309)
SystemErr R at com.ibm.ws.objectgrid.test.config.DocTest.main(DocTest.java:128)
SystemErr R Caused by: java.lang.IllegalArgumentException: No attributes are implemented
SystemErr R at org.apache.crimson.jaxp.DocumentBuilderFactoryImpl.setAttribute(DocumentBuilderFactoryImpl.java:93)
SystemErr R at com.ibm.ws.objectgrid.config.XmlConfigBuilder.<init>XmlConfigBuilder.java:133)
SystemErr R at com.ibm.websphere.objectgrid.ProcessConfigXML$2.runProcessConfigXML.java:99)...
```

使用した SDK は、スキーマに対して XML ファイルの妥当性検査をするのに必要な JAXP 機能の実装を含んでいません。

解決策: この実装を含まない SDK を使用して XML の妥当性検査を行う場合は、Apache Xerces をダウンロードして、その Java アーカイブ (JAR) ファイルをクラスパスに組み込みます。この問題を回避するために、Xerces をダウンロードして JAR ファイルをクラスパスに組み込むと、XML ファイルを正常に妥当性検査できます。

デッドロックのトラブルシューティング

以下のセクションでは、いくつかの最も一般的なデッドロック・シナリオを説明し、その回避方法を提示します。

始める前に

アプリケーションに例外処理を実装します。詳しくは、 548 ページの『ロック・シナリオでの例外処理の実装』を参照してください。

結果、次の例外が表示されます。

```
com.ibm.websphere.objectgrid.plugins.LockDeadlockException: Message
```

このメッセージは、例外が作成されてスローされるときに、パラメーターとして渡されるストリングを表します。

手順

- **問題:** LockTimeoutException 例外

  説明: トランザクションまたはクライアントが特定のマップ・エントリーに対するロックの付与を求めると、その要求は、現在のクライアントがロックを解放するまで待機させられ、その後、要求が実行依頼されることがしばしばあります。ロック要求が長い期間アイドル状態のままになり、いつまでもロックが付与されない場合、デッドロックを回避するために LockTimeoutException 例外が作成されます。デッドロックについては、次のセクションで詳しく説明します。ペシミスティック・ロック・ストラテジーを使用すると、ロックはトランザクションがコミットするまで解放されないため、この例外が発生する可能性がより高くなります。

  詳細の取得

  LockTimeoutException 例外は、ストリングを返す getLockRequestQueueDetails メソッドを含んでいます。このメソッドを使用して、例外のトリガーとなった状態についての詳細説明を確認できます。以下に、例外をキャッチして、エラー・メッセージを表示するサンプル・コードを示します。

  ```
  try {
      ...
  }
  catch (LockTimeoutException lte) {
      System.out.println(lte.getLockRequestQueueDetails());
  }
  ```

  出力結果は次のとおりです。

```
lock request queue
->[TX:163C269E-0105-4000-E0D7-5B3B090A571D, state =
    Granted 5348 milli-seconds ago, mode = U]
->[TX:163C2734-0105-4000-E024-5B3B090A571D, state =
    Waiting for 5348 milli-seconds, mode = U]
->[TX:163C328C-0105-4000-E114-5B3B090A571D, state =
    Waiting for 1402 milli-seconds, mode = U]
```

ObjectGridException 例外 catch ブロック内で例外を受け取る場合、次のコードのように例外を判定し、キューの詳細を表示できます。コードでは、findRootCause ユーティリティー・メソッドも使用します。

```
try {
...
}
catch (ObjectGridException oe) {
    Throwable Root = findRootCause( oe );
    if (Root instanceof LockTimeoutException) {
        LockTimeoutException lte = (LockTimeoutException)Root;
        System.out.println(lte.getLockRequestQueueDetails());
    }
}
```

解決策: LockTimeoutException 例外を使用して、アプリケーションでデッドロックが発生する可能性を回避できます。このタイプの例外は、例外が一定時間待機すると発生します。例外が待機する時間は、BackingMap で使用可能な setLockTimeout(int) メソッドを使用して設定できます。アプリケーションで実際にはデッドロックが発生していない場合は、ロック・タイムアウトを調整して、LockTimeoutException を回避してください。

次のコードは、ObjectGrid オブジェクトを作成し、マップを定義し、LockTimeout 値を 30 秒に設定する方法を示しています。

```
ObjectGrid objGrid = new ObjectGrid();
BackingMap bMap = objGrid.defineMap("MapName");
bMap.setLockTimeout(30);
```

前のハードコーディングの例を使用して、ObjectGrid とマップのプロパティーを設定します。XML ファイルから ObjectGrid を作成する場合は、backingMap エレメント内に **LockTimeout** 属性を設定してください。以下は、マップの LockTimeout 値を 30 秒に設定する backingMap エレメントの例です。

```
<backingMap name="MapName" lockStrategy="PESSIMISTIC" lockTimeout="30">
```

- **問題:** 単一キーのデッドロック

  説明: 以下のシナリオでは、S ロックを使用して単一キーにアクセスし、その後、そのキーを更新するときにデッドロックがどのように発生するかを示しています。これが 2 つのトランザクションから同時に発生すると、デッドロックになります。

表 33. 単一キーのデッドロックのシナリオ

	スレッド 1	スレッド 2	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.get(key1)	map.get(key1)	key1 に対して S ロックが両方のトランザクションに認可されます。

表 33. 単一キーのデッドロックのシナリオ (続き)

	スレッド 1	スレッド 2	
3	map.update(Key1,v)		U ロックはありません。更新はトランザクション・キャッシュで実行されます。
4		map.update(key1,v)	U ロックはありません。更新はトランザクション・キャッシュで実行されます。
5	session.commit()		ブロックされます。スレッド 2 が S ロックを保有しているため、key1 に対する S ロックは X ロックにアップグレードできません。
6		session.commit()	デッドロック: T1 が S ロックを保有しているため、key1 に対する S ロックは X ロックにアップグレードできません。

表 34. 単一キーのデッドロック (続き)

	スレッド 1	スレッド 2	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.get(key1)		key1 に対して S ロックが認可されます。
3	map.getForUpdate(key1,v)		key1 に対して S ロックが U ロックにアップグレードされます。
4		map.get(key1)	key1 に対して S ロックが認可されます。
5		map.getForUpdate(key1,v)	ブロックされます。T1 が既に U ロックを保有しています。
6	session.commit()		デッドロック: key1 に対する U ロックはアップグレードできません。
7		session.commit()	デッドロック: key1 に対する S ロックはアップグレードできません。

表 35. 単一キーのデッドロック (続き)

	スレッド 1	スレッド 2	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.get(key1)		key1 に対して S ロックが認可されます。
3	map.getForUpdate(key1,v)		key1 に対して S ロックが U ロックにアップグレードされます。
4		map.get(key1)	key1 に対して S ロックが認可されます。
5		map.getForUpdate(key1,v)	ブロックされます。スレッド 1 が既に U ロックを保有しています。

表 35. 単一キーのデッドロック (続き) (続き)

	スレッド 1	スレッド 2	
6	session.commit()		デッドロック: スレッド 2 が S ロックを保有しているため、key1 に対する U ロックは X ロックにアップグレードできません。

ObjectMap.getForUpdate を使用して S ロックを回避すれば、デッドロックは回避されます。

表 36. 単一キーのデッドロック (続き)

	スレッド 1	スレッド 2	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.getForUpdate(key1)		key1 のスレッド 1 に対して U ロックが認可されます。
3		map.getForUpdate(key1)	U ロック要求がブロックされます。
4	map.update(key1,v)	<blocked>	
5	session.commit()	<blocked>	key1 に対する U ロックは正常に X ロックにアップグレードできます。
6		<released>	スレッド 2 に対して U ロックが最終的に key1 に認可されます。
7		map.update(key2,v)	key2 に対して U ロックがスレッド 2 に認可されます。
8		session.commit()	key1 に対する U ロックは正常に X ロックにアップグレードできます。

解決策:

1. get ではなく getForUpdate メソッドを使用し、S ロックではなく U ロックを取得します。
2. 読み取りコミット済みのトランザクション分離レベルを使用し、S ロックの保有を回避します。トランザクション分離レベルを下げると、非反復可能読み取りの可能性が増します。しかし、いずれかのクライアントからの非反復可能読み取りが可能になるのは、同じクライアントによってトランザクション・キャッシュが明示的に無効化された場合に限られます。
3. オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用します。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用するには、オプティミスティック競合例外を処理する必要があります。

- **問題:** 順序付けされた複数のキーのデッドロック

  説明: このシナリオでは、2 つのトランザクションが同一エントリーを直接更新しようとしたときに、他のエントリーに対して S ロックを保有しているとどうなるかを説明します。

表 37. 順序付けされた複数のキーのデッドロックのシナリオ

	スレッド 1	スレッド 2	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.get(key1)	map.get(key1)	key1 に対して S ロックが両方のトランザクションに認可されます。
3	map.get(key2)	map.get(key2)	key2 に対して S ロックが両方のトランザクションに認可されます。
4	map.update(key1,v)		U ロックはありません。更新はトランザクション・キャッシュで実行されます。
5		map.update(key2,v)	U ロックはありません。更新はトランザクション・キャッシュで実行されます。
6.	session.commit()		ブロックされます。スレッド 2 が S ロックを保有しているため、key1 に対する S ロックは X ロックにアップグレードできません。
7		session.commit()	デッドロック: スレッド 1 が S ロックを保有しているため、key2 に対する S ロックはアップグレードできません。

ObjectMap.getForUpdate メソッドを使用して、S ロックを回避すれば、デッドロックを回避できます。

表 38. 順序付けされた複数のキーのデッドロックのシナリオ (続き)

	スレッド 1	スレッド 2	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.getForUpdate(key1)		key1 に対して U ロックがトランザクション T1 に認可されます。
3		map.getForUpdate(key1)	U ロック要求がブロックされます。
4	map.get(key2)	<blocked>	key2 に対して S ロックが T1 に認可されます。
5	map.update(key1,v)	<blocked>	
6	session.commit()	<blocked>	key1 に対する U ロックは正常に X ロックにアップグレードできます。
7		<released>	T2 に対して U ロックが最終的に key1 に認可されます。
8		map.get(key2)	key2 に対して S ロックが T2 に認可されます。
9		map.update(key2,v)	key2 に対して U ロックが T2 に認可されます。
10		session.commit()	key1 に対する U ロックは正常に X ロックにアップグレードできます。

解決策:

1. get メソッドではなく getForUpdate メソッドを使用して、最初のキーに対する U ロックを直接取得します。このストラテジーが機能するのは、メソッド順序が決定論的な場合に限られます。
2. 読み取りコミット済みのトランザクション分離レベルを使用し、S ロックの保有を回避します。この解決策は、メソッド順序が決定論的でない場合に、最も簡単に実装できます。トランザクション分離レベルを下げると、非反復可能読み取りの可能性が増します。しかし、非反復可能読み取りが起こりうるのは、トランザクション・キャッシュが明示的に無効化された場合に限られます。
3. オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用します。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用するには、オプティミスティック競合例外を処理する必要があります。

- **問題:** U ロックで順序付けがない

  説明: キーが要求される順序が保証できない場合でも、デッドロックは起きる可能性があります。

表 39. U ロックで順序付けがないシナリオ

	スレッド 1	**スレッド 2**	
1	session.begin()	session.begin()	各スレッドが独立したトランザクションを確立します。
2	map.getforUpdate(key1)	map.getForUpdate(key2)	key1 と key2 に対して U ロックが正常に認可されます。
3	map.get(key2)	map.get(key1)	key1 と key2 に対して S ロックが認可されます。
4	map.update(key1,v)	map.update(key2,v)	
5	session.commit()		T2 が S ロックを保有しているため、U ロックは X ロックにアップグレードできません。
6		session.commit()	T1 が S ロックを保有しているため、U ロックは X ロックにアップグレードできません。

解決策:

1. すべての作業を単一のグローバル U ロックでラップします (mutex)。この方法は、並行性を低下させますが、アクセスおよび順序が決定論的でない場合に、すべてのシナリオを処理できます。
2. 読み取りコミット済みのトランザクション分離レベルを使用し、S ロックの保有を回避します。この解決策は、メソッド順序が決定論的でない場合に、最も簡単に実装でき、最大の並行性を提供します。トランザクション分離レベルを下げると、非反復可能読み取りの可能性が増します。しかし、非反復可能読み取りが起こりうるのは、トランザクション・キャッシュが明示的に無効化された場合に限られます。
3. オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用します。オプティミスティック・ロック・ストラテジーを使用するには、オプティミスティック競合例外を処理する必要があります。

関連概念:

542 ページの『ロック』
ロックにはライフサイクルがあり、さまざまな種類のロックはさまざまな方法で他のロックと互換性を持ちます。ロックはデッドロック・シナリオにならないように、正しい順序で処理する必要があります。

マルチ区画トランザクションのロック・タイムアウト例外のトラブルシューティング

Java

説明するシナリオは、ロック・タイムアウト例外を引き起こしているマルチ区画トランザクションの例です。トランザクションの状態に応じて、解決策で、この問題を手動で解決する方法を説明します。

始める前に

アプリケーションに例外処理を実装します。詳しくは、548 ページの『ロック・シナリオでの例外処理の実装』を参照してください。

結果、次の例外が表示されます。

```
Caused by: com.ibm.websphere.objectgrid.LockTimeoutException:
Local-40000139-DEF8-05EA-E000-64A856931719 timed out waiting
for lock mode S to be granted for map name: TS2_MapP, key: key12
granted = X
lock request queue
->[WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719, state = Granted, requested
73423 milli-seconds ago, marked to keep current mode false,
snapshot mode 0, mode = X, thread name = xIOReplicationWorkerThreadPool : 29]
->[Local-40000139-DEF8-05EA-E000-64A856931719, state
= Waiting for 5000 milli-seconds, marked to keep current mode false,
snapshot mode 0, mode = S, thread name = xIOWorkerThreadPool : 28]
dump of all locks for WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719
Key: key12, map: TS2_MapP
strongest currently granted mode for key is X
->[WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719, state = Granted,
requested 73423 milli-seconds ago, marked to keep current mode false,
snapshot mode 0, mode = X, thread name = xIOReplicationWorkerThreadPool : 29]
dump of all locks for Local-40000139-DEF8-05EA-E000-64A856931719
```

このメッセージは、例外が作成されてスローされるときに、パラメーターとして渡されるストリングを表します。

手順

問題: ロック・タイムアウト例外が発生し、ロックの保有者がマルチ区画トランザクションである。または、ログ・フォルダーがログ・メッセージで増大している。
診断:
以下のようなログ・メッセージが繰り返し現れ、ログ・フォルダーが満たされています。

```
00000099 TransactionLog I  CWOBJ8705I:
Automatic resolution of transaction
WXS-40000139-DF01-216D-E002-1CB456931719
at RM:TestGrid:TestSet2:20 is still waiting for a decision.
Another attempt to resolve the transaction will occur in 30 seconds.
```

ロックを引き起こしているトランザクションのタイプを判別します。トランザクション ID のプレフィックスが WXS- の場合は、マルチ区画トランザクションです。トランザクション ID のプレフィックスが Local- の場合は、トランザクションは単一区画トランザクションです。
原因: 恐らく、コミットまたはロールバックが行なわれなかったため、アプリケーションがロックを保持しています。
解決策: トランザクションの状態およびその状態が続いている期間を判別します。オプション `-d` (詳細出力) を指定してコマンド・ユーティリティー **`xscmd -c listindoubts`** を使用するか、トランザクション MBean を使用します。

関連概念:

Java 510 ページの『トランザクション処理の概要』
WebSphere eXtreme Scale は、データとの相互作用のメカニズムとしてトランザクションを使用します。

Java 533 ページの『2 フェーズ・コミットとエラー・リカバリー』
2 フェーズ・コミット・プロトコルは、分散トランザクションに関与するすべての区画を、そのトランザクションをコミットするかロールバックするかに基づいて調整します。

Java 520 ページの『ロック・ストラテジー』
ロック・ストラテジーには、ペシミスティック、オプティミスティック、およびロックなしがあります。 ロック・ストラテジーを選択する場合、各タイプの操作の比率、ローダーを使用するかどうかなどの問題を考慮する必要があります。

ロック・タイムアウト例外の解決

Java

`xscmd -c listindoubt` コマンドを使用して、トランザクションの状態を表示して、アクションの方針を判別できます。

関連概念:

Java 510 ページの『トランザクション処理の概要』
WebSphere eXtreme Scale は、データとの相互作用のメカニズムとしてトランザクションを使用します。

Java 533 ページの『2 フェーズ・コミットとエラー・リカバリー』
2 フェーズ・コミット・プロトコルは、分散トランザクションに関与するすべての区画を、そのトランザクションをコミットするかロールバックするかに基づいて調整します。

Java 520 ページの『ロック・ストラテジー』
ロック・ストラテジーには、ペシミスティック、オプティミスティック、およびロックなしがあります。 ロック・ストラテジーを選択する場合、各タイプの操作の比率、ローダーを使用するかどうかなどの問題を考慮する必要があります。

xscmd -c listindoubts コマンドを使用したロック・タイムアウト例外の解決

手順

- 以下のコマンドで、環境内のトランザクションの詳細リストを表示します。`xscmd -c listindoubt -d` このコマンドは、以下のいずれかの状態を返す可能性があります。
  - すべてのコミット済みトランザクション
  - 準備済み
  - 欠落しているトランザクション・マネージャー (TM)
- 適切なアクションを実行して、トランザクションを解決します。 **問題:** すべてのコミット済みトランザクション

```
[1] WXS-40000139-DEF8-EF60-E002-1CB456931719
Timestamp                 Partition    Role  State     Container   Resync  Attempts
------------------------------------------------ ---------------------------------
2012-09-19 10:40:19.824  TestSet1:11  TM   COMMITT  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:40:19.824  TestSet1:7    RM   PREPARED  MPTBasic0_C-1  Primary  0
2012-09-19 10:40:19.839  TestSet2:20  RM   PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:40:19.824  TestSet2:6    RM   PREPARED  MPTBasic0_C-1  Primary  0
```

解決策: リソース・マネージャー (RM) 区画をコミットしてから、トランザクションを無視します。

1. 以下のコマンドを発行してトランザクション `WXS-40000139-DEF8-EF60-E002-1CB456931719` の RM 区画をコミットします。`xscmd -c listIndoubts -xid WXS-40000139-DEF8-EF60-E002-1CB456931719 -cm -rm`
2. 以下のコマンドを発行して、このトランザクションを無視します。`xscmd -c listIndoubts -xid  WXS-40000139-DEF8-EF60-E002-1CB456931719 -f`

問題: 準備済みトランザクション

```
[1] WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719

Timestamp               Partition    Role   State   Container     Resync Attempts
------------------------------------------------------------ -------------
2012-09-19 10:38:11.603  TestSet1:10  RM  PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:38:11.588  TestSet1:5    TM  PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:38:11.603  TestSet2:11  RM  PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:38:11.619  TestSet2:13  RM  PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
```

解決策: TM 区画をまずロールバックしてから、後続の RM 区画をロールバックします。次に、トランザクションを無視します。

1. 以下のコマンドを発行してトランザクション WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719 の TM 区画をロールバックします。xscmd -c listIndoubts -xid WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719 -r -tm
2. 以下のコマンドを発行してこのトランザクションの RM 区画をロールバックします。xscmd -c listIndoubts -xid WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719 -r -rm
3. 以下のコマンドを発行してこのトランザクションを無視します。xscmd -c listIndoubts -xid WXS-40000139-DEF6-FA84-E000-1CB456931719 -f

問題: 欠落している TM

```
[1] WXS-40000139-DEF8-EF31-E000-1CB456931719

Timestamp               Partition    Role   State   Container     Resync Attempts
------------------------------------------------------------------ --------------
2012-09-19 10:40:19.777  TestSet1:11  RM  PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:40:19.792  TestSet2:5    RM  PREPARED  MPTBasic2_C-0  Primary  0
2012-09-19 10:40:19.777  TestSet2:6    RM  PREPARED  MPTBasic2_C-1  Primary  0
```

解決策: RM 区画をロールバックします。

– 以下のコマンドを発行してトランザクション WXS-40000139-DEF8-EF31-E000-1CB456931719 の RM 区画をロールバックします。xscmd -c listIndoubts -xid WXS-40000139-DEF8-EF31-E000-1CB456931719 -r

セキュリティーのトラブルシューティング

この情報を使用して、セキュリティー構成に関する問題のトラブルシューティングを行います。

手順

- **問題:** 接続のクライアント・エンドは、transportType 設定値が SSL-Required に設定された Secure Sockets Layer (SSL) を必要とします。しかし、接続のサーバー・エンドは、SSL をサポートしておらず、transportType 設定値が TCP/IP に設定されています。この結果として、次の例外が発生し、それにより別の例外が連鎖して発生したことが、ログ・ファイルに記録されます。

```
java.net.ConnectException: connect: Address is invalid on local machine, or
port is not valid on remote machine
    at java.net.PlainSocketImpl.doConnect(PlainSocketImpl.java:389)
    at java.net.PlainSocketImpl.connectToAddress(PlainSocketImpl.java:250)
    at java.net.PlainSocketImpl.connect(PlainSocketImpl.java:237)
    at java.net.SocksSocketImpl.connect(SocksSocketImpl.java:385)
    at java.net.Socket.connect(Socket.java:540)
    at
com.ibm.rmi.transport.TCPTransportConnection.createSocket(TCPTransportConnection.java:155)
    at
com.ibm.rmi.transport.TCPTransportConnection.createSocket(TCPTransportConnection.java:167)
```

この例外にあるアドレスは、カタログ・サーバー、コンテナー・サーバー、またはクライアントのアドレスである可能性があります。

解決策: 854 ページの『セキュア・トランスポート・タイプの構成』にあるクライアントとサーバー間の有効なセキュリティー構成の表を参照してください。

- エージェントが使用されるときに、クライアントは、サーバーにエージェント呼び出しを送信します。そして、サーバーは、応答をクライアントに送り返してエージェント呼び出しを確認します。エージェントが処理を終了すると、サーバーは接続を開始してエージェントの結果を送信します。これは、接続の観点から、コンテナー・サーバーをクライアントにします。したがって、TLS または SSL が構成されている場合、クライアントの公開証明書がサーバーのトラストストアにインポートされることを確認してください。
- **問題:** WebSphere eXtreme Scale データ・グリッドへのアクセスが許可されているユーザーが、**xscmd** コマンドまたは **stopOgServer** コマンドを使用した管理操作の実行も許可されることがあります。ほとんどのデータ・グリッド・デプロイヤーでは、グリッド・データにアクセスできるユーザーのサブセットのみに管理アクセスを制限します。

  以下のコマンドを使用してデータ・グリッドにアクセスした場合は、listAllJMXAddresses などの管理アクションを実行する権限があることもあります。

  ```
  ./xscmd.sh -user <user> -password <password> <other_parameters>
  ```

  この操作がこのユーザーで機能した場合は、同じユーザーで任意の **xscmd** 操作を実行することもできます。

  解決: eXtreme Scale コンポーネントが WebSphere Application Server とともに実行される場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、セキュリティー・マネージャーをアクティブ化します。「**セキュリティー**」 > 「**グローバル・セキュリティー**」をクリックし、チェック・ボックス「**管理セキュリティーを使用可能にする**」および「**Java 2 セキュリティーを使用する (Use Java 2 Security)**」を選択して、アプリケーション・アクセスをローカル・リソースに制限します。

  管理操作へのアクセスは、WebSphere Application Server セキュリティー・マネージャーによって制御され、WebSphere 管理者ロールに属しているユーザーのみに許可されます。**xscmd** コマンドは、WebSphere Application Server ディレクトリーから実行する必要があります。

  eXtreme Scale コンポーネントがスタンドアロン環境で実行される場合は、管理セキュリティーを実装するために、追加の手順が必要になります。Java セキュリティー・マネージャーを使用して、カタログ・サーバーおよびコンテナー・サーバーを実行する必要があります。これには、ポリシー・ファイルが必要になります。

  ポリシー・ファイルは、以下の例のようなものです。

  要確認: 34 ページの『Java SE セキュリティー・チュートリアル - ステップ 5』に説明されているように、通常、MapPermission エントリーもあります。

```
grant codeBase "file:${objectgrid.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

grant principal javax.security.auth.x500.X500Principal "CN=manager,O=acme,OU=OGSample" {
permission javax.management.MBeanPermission "*", "getAttribute,setAttribute,invoke,queryNames";
};
```

この場合、manager プリンシパルのみに、**xscmd** コマンドを使用した管理操作の実行が許可されます。必要に応じて、追加のプリンシパル MBean 許可を付与するために、他の行を追加できます。LDAP 認証を使用する場合は、異なるタイプのプリンシパルが必要になります。

次のコマンドを入力します。 UNIX Linux

```
startOgServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config -Djava.security.manager
-Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

UNIX Linux 8.6+

```
startXsServer.sh <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config -Djava.security.manager
-Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=$OBJECTGRID_HOME
```

Windows

```
startOGServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config -Djava.security.manager
-Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJCTGRID_HOME%
```

Windows 8.6+

```
startXsServer.bat <arguments> -jvmargs -Djava.security.auth.login.config=jaas.config -Djava.security.manager
-Djava.security.policy="auth.policy" -Dobjectgrid.home=%OBJCTGRID_HOME%
```

この場合、-Djava.security.auth.policy ではなく、-Djava.security.policy を指定します。

Liberty プロファイル構成のトラブルシューティング

この情報を使用して、Liberty プロファイルで一般的に発生する問題をトラブルシューティングします。

このタスクについて

問題の特定と解決に役立つように、本製品には統一されたロギング・コンポーネントがあります。 941 ページの『ログおよびトレース・データの分析』を参照してください。

Liberty プロファイルの使用時に適用される既知の制約事項について詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの以下の 2 つのトピックを参照してください。

- Liberty プロファイル: ランタイム環境での既知の制約事項
- Liberty プロファイル: 開発者ツールに関する既知の制約事項

手順

- **問題:** 簡単に説明できない問題が発生する。

  解決策: Java Development Kit が Java バージョン 6 以降で、かつ最新のサービス・レベルになっていることを確認します。詳しくは、トピック『Liberty プロファイル: ランタイム環境での既知の制約事項』の『Java の最小サポート・レベル』を参照してください。

- **問題:** SSL ポートにリダイレクトするアプリケーションにアクセスしようとすると、以下のセキュリティー・エラーが表示され、SSL ポートが使用できない。

  ```
  CWWKS9105E: Could not determine the SSL port for automatic redirection
  ```

  解決策: SSL 構成の欠落、または SSL 構成定義の何らかのエラーが原因で、ポートが使用可能でない可能性があります。server.xml ファイルで SSL 構成を検査し、それが存在し、正しいことを確認してください。

IBM Support Assistant Data Collector を使用したデータの収集

IBM Support Assistant Data Collector を実行して、WebSphere eXtreme Scale 環境から問題判別データを収集します。このツールを使用することで、適切な RAS トレース・レベルを設定して問題を再現するのにかかる時間を短縮し、適切なログ情報を IBM サポートに送信するために必要な作業を軽減することができます。

始める前に

このツールを実行する前に、以下のシステム構成情報をツールに提供できるように準備してください。

- 収集したデータを保存するためのファイル名
- *java_home* ディレクトリー
- *wxs_home* ディレクトリー
- WebSphere eXtreme Scale が使用する作業ディレクトリー
- サーバーの始動に使用される追加スクリプト・ファイルの場所

このタスクについて

WebSphere eXtreme Scale の以前のリリースでは、問題判別のためのログ収集に IBM Support Assistant Lite ツールが使用されていました。IBM Support Assistant Lite ツールは引き続き製品に付属しており、*wxs_home*/isalite_wxs ディレクトリー内にあります。IBM Support Assistant Data Collector は、バージョン 8.6 以降でインストールされる、よりインタラクティブなツールです。IBM Support Assistant Data Collector では、各種入力が記憶され、コンソール入力での反復的な入力が軽減されるため、データ収集の使いやすさが向上しています。詳しくは、『IBM Support Assistant Data Collector』を参照してください。

手順

1. ツールを開始します。このツールは、コマンド行から起動スクリプトを開始することによって、コンソール・モードで実行されます。 ツール用のスクリプトは、*wxs_home*/isalite_dc ディレクトリーにインストールされます。

   - Windows **isadc.bat**
   - Linux UNIX **isadc.sh**

2. システム情報をツールに提供します。 各ステップでは、選択項目が番号付きリストとして表示されるので、選択項目に対応する番号を入力して、Enter キーを押します。入力が必要な場合はプロンプトが表示されるので、そこに応答を入力して Enter キーを押します。問題タイプごとの収集情報の詳細を、対応する

MustGather 資料で検索できます。また、バンドルされた情報を保存する圧縮ファイル名とディレクトリーの場所を指定できます。

3. コンソール・モードで **quit** オプションを入力して、コレクター・ツールを停止します。

タスクの結果

以下の環境関連情報が、データを保存するために指定した圧縮ファイルにバンドルされています。

- ログ・ファイルを収集します。
- eXtreme Scale バージョン情報を収集します。
- Java バージョン情報を収集します。
- 各種ディレクトリーに現在保管されているファイルも含め、*wxs_home* ディレクトリー構造の情報を収集します。実際のファイルは、圧縮ファイルに保存されません。
- `bin` ディレクトリー内に現在あるスクリプトを収集します。

次のタスク

IBM サポートに連絡して、IBM Support Assistant Data Collector で収集した圧縮ファイルを提供します。詳しくは、 925 ページの『IBM サポートへの連絡』を参照してください。

IBM Support Assistant for WebSphere eXtreme Scale

データの収集、症状の分析、製品情報の入手に IBM Support Assistant を使用することができます。

IBM Support Assistant Lite

IBM Support Assistant Lite for WebSphere eXtreme Scale は、問題判別シナリオのための自動データ収集および症状分析支援を提供します。

IBM Support Assistant Lite を使用することで、適切な信頼性、可用性、保守性のトレース・レベルを設定して (トレース・レベルはツールにより自動的に設定されます) 問題を再現するのにかかる時間を短縮し、問題判別を合理化できます。さらに支援が必要であれば、IBM Support Assistant Lite は適切なログ情報を IBM サポートに送信するために必要な労力も削減します。

IBM Support Assistant Lite は、WebSphere eXtreme Scale バージョン 7.1.0 の各インストール済み環境に組み込まれています。

IBM Support Assistant

IBM® Support Assistant (ISA) を使用すると、製品、教育、およびサポートのリソースに素早くアクセスすることができます。これにより、IBM ソフトウェア製品に関し、IBM サポートに問い合わせをする必要なく、自力で質問に回答し、問題を解決することが容易になります。さまざまな製品固有のプラグインにより、インストール済みの特定の製品に合わせて IBM Support Assistant をカスタマイズすることがで

きます。また、IBM Support Assistant は、IBM サポートが特定の問題の原因を判別するのに役立つシステム・データ、ログ・ファイルなどの情報を収集することもできます。

IBM Support Assistant はご使用のワークステーションにインストールするユーティリティーで、WebSphere eXtreme Scale サーバー・システム自体に直接インストールするものではありません。Support Assistant のメモリーおよびリソース要件は、WebSphere eXtreme Scale サーバー・システムのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。組み込まれたポータブル診断コンポーネントは、サーバーの通常の運用に対する影響を最小限に抑えるように設計されています。

IBM Support Assistant を使用すると、次のような点で役立ちます。

- 複数の IBM 製品にわたり、IBM およびそれ以外の知識と情報源の中で検索を行うことで、質問に回答し、問題を解決する。
- 製品固有の Web リソース (製品とサポートのホーム・ページ、カスタマー・ニュースグループおよびフォーラム、スキルとトレーニングのリソース、トラブルシューティングに関する情報、よくあるご質問など) から追加情報を見つける。
- Support Assistant で使用可能なターゲット診断ツールを使用して、製品固有の問題を診断するお客様の能力を高める。
- (汎用の、もしくは製品や症状に固有のデータを収集して) 診断データの収集を単純化し、お客様と IBM が問題を解決する助けとなる。
- カスタマイズされたオンライン・インターフェースを介して、IBM サポートに対する問題発生事象の報告を支援する。(前述の診断データやその他の情報を新規または既存の発生事象に添付する機能を含む。)

そして最後に、組み込まれたアップデーター機能を使用して、追加のソフトウェア製品や機能が使用可能になったときにそれらに対するサポートを取得することができます。IBM Support Assistant を WebSphere eXtreme Scale と併用するようにセットアップするには、まず IBM Support Assistant をインストールします。このときインストールには、IBM サポートの「概要」Web ページ (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/Overview/Software/Other_Software/IBM_Support_Assistant)からダウンロードしたイメージで提供されるファイルを使用します。次に、IBM Support Assistant を使用して、製品のアップデートを探し、あればインストールします。また、ご使用の環境にある他の IBM ソフトウェア用のプラグインが使用可能であれば、インストールすることもできます。IBM Support Assistant のさらに詳しい情報と最新バージョンが、IBM Support Assistant の Web ページで入手できます。(http://www.ibm.com/software/support/isa/)

特記事項

本書に記載の製品、プログラム、またはサービスが日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、プログラム、またはサービスについては、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。IBM 製品、プログラムまたはサービスに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等のプログラムまたは製品を使用することができます。ただし、IBM によって明示的に指定されたものを除き、他社の製品と組み合わせた場合の動作の評価と検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
Mail Station P300
522 South Road
Poughkeepsie, NY 12601-5400
USA
Attention: Information Requests

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml の「Copyright and trademark information」をご覧ください。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

[カ行]

[サ行]

[タ行]

[ナ行]

[ハ行]

[マ行]

[ヤ行]

[ラ行]

[数字]

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

L

M

O

P

Q

R

S

T

X

[特殊文字]

Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21